

居林遺跡・北山城跡(第2～4次)発掘調査報告 —四日市市北山町—

本文編

2022（令和4）年2月

三重県埋蔵文化財センター



第2次調査区及び調査地遠景（上空西から）



第3次調査区遠景（上空南から）



第2～4次調査区（上空から、合成）



第2次調査区全景（上空東から）



第4次調査区全景（上空東から）



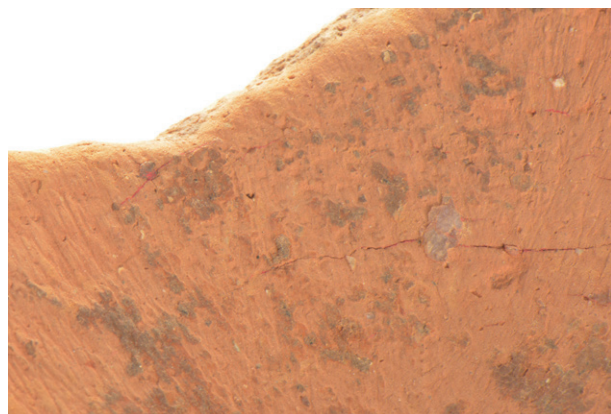
S H209・236 (南から)



ガラス小玉 (52)



大型の台石 (586・592・795)



土器内面水銀朱付着状況 (735)








土器内面水銀朱付着状況 (1099)

例 言

- 1 本書は、三重県四日市市北山町に所在する居林遺跡・北山城跡（第2～4次）の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査にかかる費用は中日本高速道路株式会社が負担した。
- 3 現地における発掘調査の体制については、本書第I章第2節に記載している。
- 4 遺物図版のデジタルトレースについては、半分程度を外部委託によって行った。業務受託者は株式会社イビソクである。
- 5 本書の執筆は、第I章の第1節及び第2節第1・2項を服部芳人、第VII章第2・3節を自然科学分析業務受託者、その他を石井智大が行っている。全体の編集は石井が行った。また、遺物の写真撮影は萩原義彦が中心となって行っている。
- 6 発掘調査及び本書の作成に際しては、地元の方々をはじめ、下記の方々や機関等にご指導やご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。田村朋美、津村善博、三重県総合博物館、四日市市教育委員会（敬称略）。
- 7 本報告に関わる発掘調査の記録類並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

凡 例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「菰野」「桑名」、四日市市発行の1:2,500都市計画図、2011三重県共有デジタル地図（平成24年整理）などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（承認番号：令和3年4月5日付け三総合地第1号）。
- 2 本書で示す方位はすべて座標北で示している。
- 3 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）『新版 標準土色帖』（1967年初版）日本色研事業株式会社に拠る。
- 4 本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。
SH：竪穴建物　SZ：段状遺構　SB：掘立柱建物　SA：柱列　SX：土器埋設土坑
SK：土坑　SD：溝　Pit・P：ピット・柱穴
- 5 遺構図版中において一点鎖線やグレーなどで示したものは、以下の通りである。

遺構平面図			土層断面図	
被熱・焼土	柱痕	床面硬化範囲	被熱・焼土	礫・遺物
				

- 6 個別遺構図版中の土層断面図において、土層番号を記していない土層は、基本的に別遺構など当該遺構と関係しないと考えられるものである。
- 7 遺物実測図の縮尺は、基本的に1/4としている。ただし、小型の土製品・鉄製品・石製品については1/3としており、特に小型のガラス製品については1/1とした。それぞれの縮尺は図中のスケールにて明示している。
- 8 遺物実測図のうち、土器にグレーで示した範囲は、赤彩が遺存する範囲を示す。また、石製品にグレーで示した範囲は、顕著な摩滅が認められる範囲を示す。石製品については、最近のものと思われる新しい欠損面を黒塗りや網点で示している。
- 9 遺物観察表や写真図版の凡例については、一覧表・写真図版編の冒頭に記載している。

目次（本文編）

第Ⅰ章 前言	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 本報告における時期区分	5
第Ⅱ章 位置と周辺環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の方法と基本層序	14
第1節 調査の方法	14
第2節 本報告の方針	17
第3節 北山城跡の既往の調査と本報告における取り扱い	19
第4節 調査区の地形と基本層序	23
第Ⅳ章 弥生・古墳時代の遺構・遺物	35
第1節 遺構	35
第2節 遺物	217
第Ⅴ章 飛鳥～平安時代の遺構・遺物	342
第1節 遺構	342
第2節 遺物	357
第Ⅵ章 鎌倉・室町時代の遺構・遺物	368
第1節 遺構	368
第2節 遺物	378
第Ⅶ章 自然科学分析	380
第1節 分析方法と目的及び試料	380
第2節 樹種同定	381
第3節 土器胎土分析	385
第4節 赤色顔料の蛍光X線分析	413
第Ⅷ章 調査のまとめと考察	422
第1節 遺構の変遷と集落の構造	422
第2節 竪穴建物の特徴と変化	429
第3節 弥生時代後期～古墳時代前期の土器について	434
第4節 水銀朱関連資料の評価	439

第5節 弥生時代後期～古墳時代前期の台石の特徴	442
第6節 北山城跡の調査成果	445
第7節 結語	448

図版目次 (本文編)

第Ⅱ章 位置と周辺の環境		第32図 S H228・241・245②	53
第1図 居林遺跡・北山城跡の位置	7	第33図 S H230・240	55
第2図 周辺遺跡位置図	10	第34図 S H234①	56
第Ⅲ章 調査の方法と基本層序		第35図 S H234②	57
第3図 グリッド割図	14	第36図 S H235	58
第4図 調査区位置図	15	第37図 S H239	60
第5図 既存の北山城跡縄張図	19	第38図 S H242	62
第6図 調査区及び北山城跡地形測量図	21	第39図 S H243	63
第7図 北山城跡と調査区の位置関係	22	第40図 S H244・249①	65
第8図 基本層序模式図①	25	第41図 S H244・249②	66
第9図 基本層序模式図②	26	第42図 S H248・251①	67
第10図 調査区部分図①	27	第43図 S H248・251②	68
第11図 調査区部分図②	28	第44図 S H250	70
第12図 調査区部分図③	29	第45図 S H253	72
第13図 調査区部分図④	30	第46図 S H255・271	73
第14図 調査区部分図⑤	31	第47図 S H256・274	74
第15図 調査区部分図⑥	32	第48図 S H260・291	75
第16図 調査区全体図	33	第49図 S H264	77
第Ⅳ章 弥生・古墳時代の遺構・遺物		第50図 S H272	78
第17図 S H201①	36	第51図 S H273	80
第18図 S H201②	37	第52図 S H298	82
第19図 S H202①	38	第53図 S H303	83
第20図 S H202②	39	第54図 S H305・306、S Z304①	85
第21図 S H203①	40	第55図 S H305・306、S Z304②	86
第22図 S H203②	41	第56図 S H309	86
第23図 S H204①	42	第57図 S H314、S Z313	87
第24図 S H204②	43	第58図 S H315	89
第25図 S H205	44	第59図 S H316	90
第26図 S H209・236①	46	第60図 S H318	91
第27図 S H209・236②	47	第61図 S H320	92
第28図 S H212	48	第62図 S H323・338～340①	93
第29図 S H220	49	第63図 S H323・338～340②	94
第30図 S H226	51	第64図 S H324	94
第31図 S H228・241・245①	52	第65図 S H328・333	96

第66回	S H336・337・346	98	第107回	S H460①	155
第67回	S H348・402・428	101	第108回	S H460②	156
第68回	S H403①	102	第109回	S H461	157
第69回	S H403②	103	第110回	S H462・464①	158
第70回	S H405	105	第111回	S H462・464②	159
第71回	S H408	106	第112回	S H462・464③	160
第72回	S H410	107	第113回	S H463	162
第73回	S H414	109	第114回	S H465①	163
第74回	S H417①	110	第115回	S H465②	164
第75回	S H417②	111	第116回	S H467	166
第76回	S H418	113	第117回	S H469・471・473①	167
第77回	S H419	114	第118回	S H469・471・473②	168
第78回	S H421・427・429①	116	第119回	S H470・472・474①	169
第79回	S H421・427・429②	117	第120回	S H470・472・474②	170
第80回	S H422	118	第121回	S H476	173
第81回	S H423	119	第122回	S H477	175
第82回	S H424①	121	第123回	S H478・481	176
第83回	S H424②	122	第124回	S H479	177
第84回	S H426	123	第125回	S H480	179
第85回	S H430・431①	125	第126回	S H482①	180
第86回	S H430・431②	126	第127回	S H482②	181
第87回	S H433	128	第128回	S H484①	183
第88回	S H434・496	129	第129回	S H484②	184
第89回	S H436	130	第130回	S H485	185
第90回	S H437・438①	132	第131回	S H486	186
第91回	S H437・438②	133	第132回	S H488①	187
第92回	S H442	134	第133回	S H488②	188
第93回	S H443	136	第134回	S H488③	189
第94回	S H444	137	第135回	S H489	191
第95回	S H445	138	第136回	S H490	192
第96回	S H446	140	第137回	S H491・492①	193
第97回	S H447・448	141	第138回	S H491・492②	194
第98回	S H449	143	第139回	S H493	196
第99回	S H450	144	第140回	S Z 282、S K 279・280・283	198
第100回	S H451・456・457①	146	第141回	S Z 254・312	199
第101回	S H451・456・457②	147	第142回	S Z 326	201
第102回	S H451・456・457③	148	第143回	S Z 329・331	202
第103回	S H454・458	149	第144回	S Z 335・345	204
第104回	S H455	151	第145回	S Z 344・360	205
第105回	S H459①	153	第146回	S B 409	207
第106回	S H459②	154	第147回	S B 420、S A 413	208

第148図	S X325・361	209	第178図	S H417・418・421出土遺物	275
第149図	S K225・278・299・341・425・495、 S D435	211	第179図	S H422・423出土遺物、S H424出土遺物 ①	279
第150図	S K317・475	213	第180図	S H424出土遺物②、S H426～428・430 出土遺物	281
第151図	S D232・468	214	第181図	S H431出土遺物	283
第152図	居林1号墳墳丘	216	第182図	S H433・434・436・437・442出土遺物	285
第153図	S H201出土遺物①	219	第183図	S H443・444出土遺物、S H445出土遺物 ①	288
第154図	S H201出土遺物②、S H202出土遺物①	220	第184図	S H445出土遺物②、S H446・447・449 出土遺物	290
第155図	S H202出土遺物②	222	第185図	S H451出土遺物	292
第156図	S H202出土遺物③	225	第186図	S H454～457出土遺物	294
第157図	S H202出土遺物④、S H203出土遺物	226	第187図	S H459出土遺物①	296
第158図	S H204出土遺物①	229	第188図	S H459出土遺物②、S H460・461出土遺 物	299
第159図	S H204出土遺物②	231	第189図	S H462・463出土遺物	302
第160図	S H204出土遺物③、S H205・209・212 出土遺物	233	第190図	S H464出土遺物①	304
第161図	S H220・226出土遺物、S H228出土遺物 ①	236	第191図	S H464出土遺物②、S H465・467出土遺 物	306
第162図	S H228出土遺物②	238	第192図	S H469～472・476出土遺物	308
第163図	S H228出土遺物③、S H230出土遺物	240	第193図	S H477・478出土遺物	311
第164図	S H234・235出土遺物	243	第194図	S H479・480出土遺物、S H482出土遺物 ①	314
第165図	S H236・239出土遺物	245	第195図	S H482出土遺物②、S H485・486出土遺 物	316
第166図	S H242・243出土遺物	246	第196図	S H488出土遺物①	319
第167図	S H244出土遺物①	248	第197図	S H488出土遺物②	321
第168図	S H244出土遺物②	251	第198図	S H490・491、S Z304・312・331出土遺 物	324
第169図	S H248～251・253・255・264出土遺物、 S H271出土遺物①	253	第199図	S B409・420、S A413出土遺物	326
第170図	S H271出土遺物②、S H272・273出土遺 物	255	第200図	S X325・361出土遺物	327
第171図	S H274・291・298・303・305・306・309 出土遺物	258	第201図	S K225・278・280・317・341・425・475・ 495、居林1号墳墳丘下出土遺物	329
第172図	S H314～316・318出土遺物	260	第202図	ピット出土遺物	332
第173図	S H320・323出土遺物	263	第203図	包含層出土遺物①	335
第174図	S H324・328・333・346・348出土遺物	266	第204図	包含層出土遺物②	337
第175図	S H402出土遺物	268			
第176図	S H403出土遺物	269			
第177図	S H405・408・410・414出土遺物	272			

第205図	攪乱・表土等出土遺物	339
第V章 飛鳥～平安時代の遺構・遺物		
第206図	S B 266	343
第207図	S B 269	344
第208図	S B 292	345
第209図	S B 293	346
第210図	S B 296	347
第211図	S A 356～358	348
第212図	S K 257・258・261・263	350
第213図	S K 297・321・327・330・343	351
第214図	S K 350・441・487	352
第215図	S D 262・281・322	354
第216図	S D 302・311	356
第217図	S B 266・269・292・293・296、S A 357・358出土遺物	358
第218図	S K 257・258・261・263・297出土遺物	359
第219図	S K 321・327・330・343・350・441出土遺物	361
第220図	S K 487、S D 262・302・311・322出土遺物	363
第221図	ピット・包含層・攪乱・表土等出土遺物	365
第VI章 鎌倉・室町時代の遺構・遺物		
第222図	S A 359、S K 265・354・412	369
第223図	S D 285～289・294・295①	371
第224図	S D 285～289・294・295②	373
第225図	S D 290・351・352	373
第226図	S D 301	374
第227図	S D 401・494、II郭東側土塁	376
第228図	I郭土塁・盛土	377
第229図	S D 286・301、包含層出土遺物	379
第VII章 自然科学分析		
第230図	土器胎土分析比較試料実測図	380
第231図	居林遺跡・北山城跡（第2次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真①	383
第232図	居林遺跡・北山城跡（第2次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真②	384
第233図	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成①	387
第234図	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成	

②	388	
第235図	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成③	389
第236図	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成④	390
第237図	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成⑤	391
第238図	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成⑥	392
第239図	碎屑物・基質・孔隙の割合	402
第240図	土器①	403
第241図	土器②	404
第242図	土器③	405
第243図	土器④	406
第244図	土器⑤	407
第245図	土器⑥	408
第246図	土器⑦	409
第247図	土器⑧	410
第248図	胎土薄片①	411
第249図	胎土薄片②	412
第250図	蛍光X線分析結果①	414
第251図	蛍光X線分析結果②	415
第252図	蛍光X線分析結果③	416
第253図	蛍光X線分析結果④	417
第254図	蛍光X線分析結果⑤	418
第255図	蛍光X線分析結果⑥	419
第256図	蛍光X線分析結果⑦	420
第VIII章 調査のまとめと考察		
第257図	遺構変遷図①	423
第258図	遺構変遷図②	424
第259図	遺構変遷図③	425
第260図	竪穴建物の平面形態の区分	429
第261図	貯蔵穴位置の分類	431
第262図	S字状口縁甕の占める割合	434
第263図	台付甕脚台部・高坏脚部の基本的な接合技法	436
第264図	内面朱付着土器の割合	439
第265図	朝明川流域出土水銀朱関連遺物	440
第266図	北山城跡関連遺構の位置	446
付図	居林遺跡・北山城跡全体図	

表 目 次 (本文編)

第 I 章 前言		第 4 表 試料一覧	386
第 1 表 本報告における時期区分	5	第 5 表 薄片観察結果	393
第 II 章 位置と周辺の環境		第 6 表 胎土分類結果	401
第 2 表 周辺遺跡	11	第 7 表 赤色顔料蛍光 X 線分析結果	413
第 VII 章 自然科学分析		第 VIII 章 調査のまとめと考察	
第 3 表 居林遺跡・北山城跡 (第 2 次) 出土炭化 材の樹種同定結果	381	第 8 表 竪穴建物の諸属性とその変化	432
		第 9 表 台石の使用状況	443

第 I 章 前言

第 1 節 調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約 175km の高規格幹線道路である。昭和 40 年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成 21 年 2 月 24 日付

で事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市 JCT～亀山西 JCT 間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書¹⁾には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

註

1) 三重県埋蔵文化財センター 2011 『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第 5 次）発掘調査報告』

第 2 節 調査の経過

（1）調査経過の概要

北山城跡は、四日市市北山町字居林に所在する中世の城跡である。朝明川北岸、標高約 50m の丘陵に立地する。西側から北側にかけて入り込んだ谷があり、丘陵の西端に位置する。土塁で囲まれた主郭を中心として、計 4 つの曲輪で構成されている。

新名神高速道路の路線は、当遺跡の概ね中央部分から南側にかけて、東西方向に走る計画である。

なお、当遺跡の範囲内の西側には、2 基の古墳が存在しており、居林古墳群（1 号墳・2 号墳）として登録されている。その内、1 号墳の南側裾部の一部が、道路計画路線内に入る。

今回、平成 23 年度から平成 26 年度にかけて行われた発掘調査の年度ごとの概要を、以下に記述する。

【平成 23 年度】

三重県埋蔵文化財センターとネクスコ中日本は、事業地内における埋蔵文化財の保護と、高速道路工事の調整を図るため、定期的に協議を行っている（定例会）。

平成 22 年度末の定例会では、平成 23 年度に北山城跡について 630m² の調査を 8 月頃に行う計画がなされた。この 630m² の調査坑は、道路の計画内の北側で土塁などが残存している範囲以外の場所に計画

された。具体的には、東側の丘陵平坦面と、南側斜面の部分である。

年度が改まり、4 月、6 月、7 月とネクスコとの定例会を行い、用地買収や伐採状況などの確認がなされた。用地買収は、やや遅れ気味であり、その後の伐採についても、他の遺跡との調整で、現地での調査は 12 月から開始されることとなった。

発掘調査は、丘陵平坦面や南側斜面に加え、斜面中腹にある中段にも 2 m 幅の調査坑を設定して、630m² の調査を実施した。結果、斜面部分の南端部の一部以外のいずれの調査坑からも、遺構・遺物が確認された。

年度末には、次年度の計画調整の定例会が行われた。その際、道路計画の路線内の南側に、仮設の工事用道路の建設をするため、この部分を優先的に調査を行うこととした。協議の結果、6,300m² を対象とした発掘調査を 5 月の連休明けから開始する計画がなされた。

【平成 24 年度】

前年度末から計画準備を始めた結果、予定通り、5 月の連休明けから二次調査 6,300m² を、第 2 次調査として開始することができた。

なお、4 月に行われたネクスコの自然環境保全対策検討委員会の猛禽類分科会において、オオタカの

営巣が、路線近くに見られるとの報告を受けた。しかし、当遺跡の調査区は、保全対象となる営巣地を中心とした200m圏内のコアエリア外のため、調査には支障は無いという判断がなされた。

今回の調査区は東西に細長く、大きく丘陵上の平坦部、南側斜面部と低地部に分けられる。そのため、斜面部の調査による排土を低地部へ排出せざるをえず、調査区内に排土置き場を確保する必要が生じるなど、調査の方法については苦慮する点が多かった。また、低地部では、ノッチタンクを使用して上水だけを排水するなどの工夫をして、概ね順調に調査が進められた。

調査の結果、丘陵上の平坦面では、弥生時代から古墳時代にかけて数多くの堅穴建物が、斜面部でも弥生時代をはじめとして、奈良・平安時代や鎌倉時代の遺構も確認できた。また、出土遺物の中には、ガラス小玉や大型の砥石などもあり、貴重な調査成果が得られた。

なお、普及啓発活動の一環として、第2次調査の現地説明会を中野山遺跡第8次・第9次と合同開催して10月13日（土）に行い、250名の参加があった。

年度末には、次年度の発掘調査計画の協議が持たれた。路線内の残り約半分の北側全体の発掘調査をいつ実施するかが議題となったが、他の遺跡との調査面積や担当職員数などとの調整の結果、西側の斜面部分を中心とした6,300㎡を5月の連休明けから開始する計画がなされた。

【平成25年度】

前年度末から発掘調査の計画準備を始めた結果、今年度も、連休明けから第3次調査として、面積6,300㎡の発掘調査を開始することが出来た。

なお、今回の調査区も、斜面部分が大半を占めたが、上面から掻き落とした排土の処理方法に重機を活用するなどして、概ね順調に調査が進められた。

調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての遺構が、丘陵の平坦面だけでなく斜面部分にも確認されたこと、北山城跡の主郭にかかる平坦部分は、盛土を行うことで地形を拡張した結果であることなどの成果が得られた。なお、居林1号墳については、南端部分が対象となったが、周溝は既にほとんどが削平あるいは流出したためか明確には検出できず、

今回の調査では、古墳の一部と思われる盛土遺構を確認したにとどまった。

なお、普及啓発活動の一環として、第3次調査の現地説明会を中野山遺跡第10次・第11次・第12次と合同開催して、10月5日（土）に行い、272名の参加があった。

年度末には、次年度の計画調整の定例会が行われた。そこでは、北山城跡（約8,000㎡）と中野山遺跡（約6,900㎡）の発掘調査と工事計画について協議を行った。また、調査区内の北側には、大きな谷地形も含まれるため、排水処理の方法などの検討もなされた。

【平成26年度】

今年度も、昨年度末から事前の計画準備を行い、5月の連休明けから、第4次調査として発掘調査が開始されることとなった。

今回の調査区の内、北側に大きく開けた谷地形での調査は、非常に苦勞した。重機による表土掘削作業の際、地盤が緩いため、思うように捗らず、また、重機そのものの搬出に手間取る場面もあった。さらに、排水処理や土砂流出については、谷の低い部分にトンパックを使用するなどの工夫もしながら進められた。

発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての堅穴建物や掘立柱建物を、さらに数多く確認することができた。特に、堅穴建物の棟数は、第2次・第3次と合わせると100棟を優に上回り、北勢地域屈指の集落跡であることが判明した。

このように北山城跡として発掘調査を行った結果、これまで城跡として把握されていた範囲内で、縄張図の範囲以外では、中世の遺構や遺物が希薄であることが判明した。そのため、従来の北山城跡の範囲は、小字名から居林遺跡として新規登録を行うと同時に、北山城跡については、縄張図や土塁等の位置に基づいて範囲変更する手続きを行った。

なお、普及啓発活動の一環として、第4次調査の現地説明会を中野山遺跡第13次と合同開催して10月5日（日）に行い、92名の参加があった。

（2）調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

【平成23年度】

担当：岩脇成人・穂積裕昌（調査研究Ⅱ課）
業者：橋本技術株式会社（土工委託）
期間：平成23年11月7日～平成24年1月10日
面積：630㎡

【平成24年度】

・第2次調査

担当：勝山孝文・矢田陽・宮原佑治（調査研究Ⅲ課）
業者：アーキジオ株式会社（調査補助委託）
期間：平成24年5月24日～平成25年1月21日
面積：6,426㎡

【平成25年度】

・第3次調査

担当：松永公喜・水谷豊（調査研究3課）
業者：株式会社アート（調査補助委託）
期間：平成25年5月9日～平成25年11月20日
面積：6,438㎡

【平成26年度】

・第4次調査

担当：相場さやか・宮原佑治（調査研究3課）
業者：株式会社四門（調査補助委託）
期間：平成26年4月18日～平成26年12月18日
面積：6,948㎡

（3）調査日誌（抄）

第2次調査

6月5・6日 地形測量
6月12日 1区及び2区の一部表土掘削開始、2区で竪穴建物と思われる遺構確認
6月13日 3区表土掘削開始
6月25日 1区表土掘削完了
6月29日 3区表土掘削完了
7月4日 1区東側から包含層掘削・遺構検出開始
7月9日 現場で電気ケーブル等の盗難事件発生
7月10日 SH201掘削開始
7月17日 3区東側から包含層掘削・遺構検出開始、ピット群や土坑等確認、灰釉陶器段皿出土
7月23日 SK261底面から灰釉陶器出土
7月30日 SH201～204掘削、SH201下層埋土の

篩いがけ作業開始

7月31日 3区東側遺構平面実測開始
8月2日 3区西側包含層掘削・遺構検出開始
8月9日 SB266検出、他にも掘立柱建物を構成する可能性があるピット複数検出
8月13日 4区表土掘削開始
8月20日 SH212・220掘削
8月24日 2区全体表土掘削開始
8月31日 SH204・209・212・228掘削、SH212遺物出土状況図作成
9月3日 2区表土掘削完了
9月7日 SH205・226・228・230・234・236掘削
9月20日 4区表土掘削完了
9月21日 SH234貯蔵穴から弥生土器ないし土師器まとまって出土
9月28日 台風接近のため現場養生、サル出没
10月4日 2区全景写真撮影、4区包含層掘削・遺構検出開始
10月5日 4区で掘立柱建物複数検出
10月10日 SH271～274検出、遺存状況悪い
10月13日 現地説明会開催
10月16日 SH235・239・242・243掘削
10月22日 SD246（SH234の排水溝）遺物出土状況図作成及び遺物取り上げ
10月31日 SK280から鉄製品出土
11月1日 SB266・292平面図作成、SB293柱穴位置確認
11月2日 1区空中写真測量
11月5日 SD285～289掘削
11月7・8日 1区竪穴建物完掘状況写真撮影
11月9日 SH271～274・291掘削、1区空中写真撮影
11月19・20日 4区全景写真撮影
11月22日 掘削作業ほぼ完了
11月30日 現地での記録作業終了
12月21日 埋め戻し完了

第3次調査

5月28日 表土掘削開始、竪穴建物と思われる遺構確認
6月12日 包含層掘削・遺構検出開始
6月13日 北山城跡にあたる部分の遺構検出作業

6月25日 北山城跡の土塁調査完了、土塁西側で掘
 状の遺構検出
 7月3日 居林1号墳墳丘調査開始
 7月9日 S Z 304掘削、遺物出土量多い
 7月19日 ローリングタワー設置しSH309、SD
 302等完掘状況写真撮影
 7月31日 調査区東部で竪穴建物等の遺構を複数検
 出
 8月8日 SH315・316及びSK317掘削
 8月20日 調査区北東部の遺構掘削ほぼ完了
 8月21日 SH318掘削、遺物多量に出土
 8月25日 SH315・318・323掘削、SX325遺物出
 土状況写真撮影
 8月29日 ローリングタワー設置しSH315・316等
 完掘状況写真撮影
 9月2～4日 雨天のため作業中止
 9月6日 ローリングタワー設置しSH324等完掘
 状況写真撮影
 9月10日 SX361土器取り上げ
 9月24日 SH323掘削
 9月26日 空中写真撮影に向けた清掃開始
 10月1日 空中写真測量及び空中写真撮影
 10月5日 現地説明会開催
 10月15日 台風26号接近のため作業中止
 10月18日 埋め戻し開始
 10月23～25日 台風27号接近のため作業中止
 10月28日 居林1号墳墳丘断ち割り開始
 10月30日 北山城跡土塁検出作業
 11月7日 現地での記録作業終了

第4次調査

5月12日 現地での作業開始
 5月13～22日 谷部への重機進入に際して問題発生
 し作業中断、当該箇所の調査区再設定
 5月23日 表土掘削開始
 5月29日 東区表土掘削完了
 6月2日 東区包含層掘削・遺構検出開始
 6月9日 SD401完掘、写真撮影
 6月12日 中区表土掘削開始
 6月17日 竪穴建物10棟以上の存在を確認
 6月20日 SH405掘削
 6月24日 SB409検出・一部掘削、柱穴から遺物

出土

6月26日 SH408・410・414掘削、ローリングタ
 ワー設置しSH405完掘状況写真撮影
 6月30日 調査区一部拡張しSB420柱穴精査
 7月8日 SH402・421・424・426掘削
 7月17日 SH422・430・431掘削、SH421・427・
 429平面図作成
 7月28日 西区表土掘削開始、SH437・438平面図
 作成
 7月30日 SH442・444掘削、SK441完掘
 8月7日 SH445ほぼ完掘、支柱穴から土器出土
 8月18日 SH423・430・433・434掘削
 8月25日 SH451・454・455ほぼ完掘
 9月3日 ローリングタワー設置しSH202・436・
 442・444等完掘状況写真撮影
 9月10日 ローリングタワー設置しSH449・459等
 完掘状況写真撮影
 9月17日 西区包含層掘削・遺構検出開始
 9月18日 SH462壁柱穴確認、SH464から土器を
 多数検出
 9月19日 ローリングタワー設置しSH461・463等
 完掘状況写真撮影
 9月26日 SH465・469付近で竪穴建物の複雑な重
 複を確認
 10月5日 現地説明会開催
 10月8日 SH478・480掘削
 10月16日 SH482・488・491・492ほぼ完掘
 10月20日 ローリングタワー設置しSH467・486等
 完掘状況写真撮影
 10月23日 空中写真撮影に向けた清掃開始
 11月7日 空中写真測量及び空中写真撮影
 11月10日 調査区全景写真撮影
 11月13日 ローリングタワー設置しSH253・426完
 掘状況写真撮影
 12月5日 現地での記録作業終了
 12月17日 中日本高速道路株式会社に現場引き渡し

(4) 文化財保護法等にかかる諸通知

◎文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条
 例第48条第1項（周知の埋蔵文化財における土木工
 事等の発掘に関する通知）

- ・平成22年8月6日付け、中高名支四工第760号
(中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工
事事務所長から三重県教育委員会教育長あて)
- ◎文化財保護法第99条第1項(発掘調査の着手報告)
- ・平成24年5月30日付け、教理第760号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教
育委員会教育長あて)【平成24年度・第2次】
- ・平成26年5月14日付け、教理第72号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教
育委員会教育長あて)【平成25年度・第3次】
- ・平成26年4月30日付け、教理第32号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教

育委員会教育長あて)【平成26年度・第4次】
◎文化財保護法第100条第2項(文化財の発見・認
定通知)

- ・平成25年1月18日付け、教委第12-4423号
(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署
長あて)【平成24年度・第2次】
- ・平成25年12月6日付け、教委第12-4410号
(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署
長あて)【平成25年度・第3次】
- ・平成27年1月14日付け、教委第12-4430号
(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署
長あて)【平成26年度・第4次】

第3節 本報告における時期区分

時期区分 本報告においては、記述の便宜上から、居林遺跡の中心的な時期である弥生時代後期から古墳時代について、第1表のように時期区分を行っている。各時期区分に対応する土器様式については、伊勢地域以外でも広く適用されている代表的なものを示した。参考にした編年等は註に掲載した通りである¹⁾。

いくつかの編年をつなぎ合わせており、さらに古墳時代後期については須恵器編年を用いているため、厳密には併行関係等にずれもある²⁾。しかしながら、本報告で用いた時期区分の大枠での時期的位置づけを提示することを優先し、あえて単純化して提示した。

また、一般に用いられる戦国時代という時代区分

については、室町時代を前期・中期・後期の大きく3期に区分したうちの後期に相当するものとし、基本的に室町時代後期として記述した³⁾。一部、「戦国期」という呼称も併用している。

その他の時代については該当する遺構・遺物が少ないため、細かな時期区分と土器編年等の関係は示していない。必要がある場合には、個別に対応している。

遺物の呼称 居林遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の土器が多量に出土しているが、それらについては慣例にしたがって、弥生時代後期(八王子古宮・山中式併行)のものを弥生土器、弥生時代終末期(廻間式併行)以降のものを土師器と、一応区分している。

ただし、遺構内で混在することも多く、器種や遺存状況・部位によっては明確に区別することが困難であるため、本文中の遺物に関する記述等では基本的に弥生土器・土師器と併記し、特定の個体について記述する際に確実に区別できる場合などは呼び分けている。遺物実測図の掲載にあたっては、無理に両者を分別せず、器種単位でまとめて掲載することとした。

なお、遺構一覧表や遺物一覧表(一覧表・写真図版編第1～7表)においては、飛鳥時代以降の土師器との別を分かりやすく記載するため、弥生土器/土師器と表記する対応をとっている。

第1表 本報告における時期区分

時期区分		土器様式	
弥生時代	中期	前葉	朝日式
		中葉	貝田町式
		後葉	高蔵式(凹線文系土器様式)
	後期	前葉	八王子古宮式
		中葉	山中Ⅰ式
		後葉	山中Ⅱ式
終末期		廻間Ⅰ式	
古墳時代	前期	初頭	廻間Ⅱ式
		前葉	廻間Ⅲ-1・2式
		中葉	廻間Ⅲ-3・4式
		後葉	松河戸Ⅰ式
	中期	前葉	松河戸Ⅱ式
		中葉	宇田Ⅰ式
		後葉	宇田Ⅱ式
	後期	前葉	MT15型式
		中葉	TK10型式
		後葉	TK43～209型式

註

1) 参考にした編年は、以下の通りである。

赤塚次郎1990「考察」『廻間遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎1992「山中式土器について」『山中遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎2001「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県

埋蔵文化財センター、赤塚次郎・早野浩二2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、石黒立人・宮腰健司2007「伊勢湾周辺における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』 伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、田辺昭三1981『須恵器大成』 角川書店

2) 例えば、宇田Ⅱ式とMT15型式の併行関係など。

3) 応仁の乱（1467年）以降を指す。

第Ⅱ章 位置と周辺環境

第1節 地理的環境

(1) 位置と周辺の地形

居林遺跡及び北山城跡は、四日市市北山町の朝明川北岸に存在する丘陵上に位置している（第1・2図）¹⁾。

朝明川は、鈴鹿山脈の釈迦ヶ岳から発し、東流して伊勢湾に注ぐ全長28kmほどの比較的規模の大きな河川である。また、朝明川の北側には員弁川、南側には三滝川が並行するように流れている。

朝明川の北側には、最高所の標高が98mほどの朝日丘陵が朝明川と員弁川に挟まれるように東西にのびており、朝日丘陵西端からは中・高位段丘の大安台地が朝明川に沿って西へと続いている。居林遺跡・北山城跡が存在するのは、朝日丘陵の西端部付近から大安台地へと移行していく、比較的起伏のある箇所である。

朝日丘陵の南側には、朝明川を挟んで垂坂丘陵が広がる。そして、この垂坂丘陵から西へは大安台地と朝明川を挟んで対峙するように菰野台地が続いて

いる。そして、朝日丘陵や垂坂丘陵より東側は四日市市海岸低地あるいは北勢海岸低地とも呼ばれる沖積平野となっている。

朝日丘陵や大安台地では小河川による開析が目立つ。居林遺跡・北山城跡付近でも、南西方向から小河川を伴う狭い開析谷が深く入り込んでおり、それによって丘陵の南側に形成された標高50mほどの尾根状に突出する部分の突端付近に、居林遺跡・北山城跡が立地している。

居林遺跡・北山城跡が存在する丘陵の裾部には、朝明川との間に狭いながらも沖積平野が広がる。朝明川沿いにはこうした狭い沖積平野が存在し、朝明川低地と呼ばれている。ただ、朝明川は全体的に自然堤防の発達が発達が貧弱とされており、居林遺跡・北山城跡付近の朝明川沿いにおいても現況では顕著に発達した自然堤防の存在は不明瞭である。

朝明川沿いの沖積平野と北山城跡が位置する尾根上との間の比高差は20mほどと比較的大きく、台地の南側の裾部はかなり急峻な段丘崖となっている部分が多い。

(2) 地質

朝日丘陵をはじめ、垂坂丘陵や大安台地、菰野台地は、いずれも主に新生界の奄芸層群の砂礫層によって形成されている。そして、その上に更新世の段丘堆積物等が堆積している。

朝日丘陵や垂坂丘陵では、奄芸層群の中でも大泉累層として区分される地層が厚く堆積する。この大泉累層では、砂層や泥層が顕著に認められる。その下位には暮明累層や古野累層が堆積する。暮明累層は礫層や砂層からなり、シルト層も挟在する。礫層は、円礫や亜円礫のチャートや砂岩、泥岩が主体となっている。

奄芸層群より上位の段丘堆積物には、朝明川古期扇状地堆積層と呼ばれる堆積層がある。厚さ10mを超えるような砂礫層で、礫層には径5～10cmほどの



第1図 居林遺跡・北山城跡の位置 (1/2,000,000)

円礫や亜円礫が多い。礫はチャート、砂岩、頁岩、ホルンフェルス、花崗岩、溶結凝灰岩などを主体とするが、チャート以外の礫は風化が進んでいる。また、地表面から2m程度については赤色の粘土質の土が堆積している点が特徴的である。これに相当する土層は、居林遺跡・北山城跡の北側に位置する台地上でも確認されている。

段丘堆積物中に含まれる礫や朝明川の河床礫などは、西方の鈴鹿山脈を起源とする。鈴鹿山脈には秩父古生層の砂岩や輝緑凝灰岩、チャートなどのほか、鈴鹿花崗岩と呼ばれる有色鉱物が少なく石英や長石を主体とする粗粒黒雲母花崗岩が分布している。ま

た、員弁川ではいわゆる湖東流紋岩類とされる流紋岩や溶結凝灰岩等の存在が報告されているが²⁾、朝明川流域においても同様の岩石がみられる。

註

1) 本節の記述には、全体的に下記の文献を参照した。

株式会社クボタ1990『URBAN KUBOTA』No.29、地質調査所1991『桑名地域の地質』、四日市市1991『四日市市史』第1巻史料編自然、四日市市土地分類調査会1992『四日市市の土地分類』

2) 津村善博2015「三重県内7河川の河床礫の礫種組成」『三重県総合博物館研究紀要』第1号 三重県総合博物館

第2節 歴史的環境

(1) 旧石器～縄文時代

旧石器時代 朝明川流域では旧石器時代の遺跡は少なく、発掘調査によって遺構が検出された例はない。旧石器時代のものと思われる石器がごくわずかに出土した、あるいは採集された例があるのみである。小牧南遺跡(10)では、チャート製のナイフ形石器と思われるものが2点出土している¹⁾。

縄文時代 縄文時代草創期になっても人間活動の痕跡は希薄であるが、居林遺跡(A)に隣接する中野山遺跡(16)では有舌尖頭器が出土している²⁾。海蔵川流域の東北山A遺跡(13)でも有舌尖頭器が採集されている³⁾。

早期以降には、朝明川沿いの河岸段丘上を中心に、複数の遺跡が確認されるようになる。早期の遺跡については、中野山遺跡で170基を超える非常に多くの煙道付炉穴のほか、集石遺構、そして竪穴建物と思われるものなど、多くの遺構が検出されていることが特筆される⁴⁾。小牧南遺跡でも集石遺構が確認され、押型文土器も出土している。

前期の遺跡は少ないが、中期後葉～末葉になると徐々に遺跡の数が増加する。この時期の集落は、小規模なものが丘陵や中位段丘上を中心として散在するような状況を示す。居林遺跡付近では、中野山遺跡が挙げられよう。小牧南遺跡も少数の竪穴建物で構成される段丘上の集落であるが、複数の大型の掘立柱建物が伴っており、注目される⁵⁾。

後期には再び遺跡数が減少する。晩期の遺構・遺物は複数の遺跡で確認されているが、集落の検出例はほとんどない。朝明川の北側を流れる員弁川上流域の宮山遺跡では、複数の平地式建物等で構成される集落の存在が確認されているが⁶⁾、朝明川流域で検出されている遺構は土器棺墓のような墳墓遺構が中心である。志知南浦遺跡(28)では、多数の土器棺墓が検出されている⁷⁾。中野山遺跡でも同様の土器棺墓が数基検出されている⁸⁾。

(2) 弥生～古墳時代

居林遺跡(A)は弥生時代～古墳時代前期を主体とすることから、当該期については、特に弥生時代後期～古墳時代前期を中心として詳述する。

集落等 居林遺跡周辺の弥生時代前期の遺跡としては、海蔵川・三滝川流域の大谷遺跡や永井遺跡が環濠集落として著名であるが、朝明川流域では当該期の目立った遺跡は確認されていない。

弥生時代中期においては、当該地域では中期後葉を主体とする大規模な遺跡の存在が目立つ。居林遺跡の東方5kmの段丘上に位置する菟上遺跡(48)では、100棟を超える竪穴建物や大型の掘立柱建物、方形周溝墓などが確認され⁹⁾、南側の尾根上に位置する山村遺跡(49)で検出された方形周溝墓群も菟上遺跡の集落の墓域と推定される¹⁰⁾。伊坂遺跡(47)で出土したとされる扁平鈕2式の伊坂銅鐸も¹¹⁾、菟上遺跡の存在と何らかの関連を有する可能性がある

う。また、沖積平野に面した段丘縁辺部に位置する久留倍遺跡(61)でも、中期後葉の複数の竪穴建物や方形周溝墓が検出されている¹²⁾。なお、菟上遺跡や久留倍遺跡では、いずれも段丘に入り込む谷から、当該期の木製品が多量に出土している。

ただし、中期後葉の大規模な遺跡は、後期前葉までは存続しない。菟上遺跡では後期前葉の遺構・遺物はほぼ認められず、久留倍遺跡でも当該期の遺構は不明瞭で、遺物が少量出土した程度である。伊勢湾沿岸地域全体で遺跡が希薄になる時期であるが、朝明川流域では小牧北遺跡(18)、中野山遺跡(16)、辻子遺跡(53)のように、当該期の竪穴建物や方形周溝墓が検出された遺跡が複数存在し、小規模な集落や墓域が点在する状況が明らかになってきている。辻子遺跡では、後期前葉のものと推定される水田遺構も検出されている¹³⁾。

弥生時代後期中葉以降、再び遺跡の数が増加していき、後期後葉～終末期にかけては、久留倍遺跡、山奥遺跡(59)、西ヶ広遺跡(45)、金塚遺跡(50)など、比較的規模の大きな遺跡が多数存在している。

中でも注目されるのは山奥遺跡と金塚遺跡で、多数の竪穴建物が丘陵斜面の比較的急峻な場所に造営されている。こうした急斜面への集落立地は、当該期の集落に認められる特徴の一つとも考えられる。これらの集落からは金属製品の出土も目立つ。山奥遺跡では板状鉄斧や鉄鏃、鉋など、複数の鉄製品が出土している¹⁴⁾。金塚遺跡では扁平鈕式ないし突線鈕1式と思われる銅鐸の鱗片のほか、銅鏃が2点出土した¹⁵⁾。

弥生時代終末期の大規模な集落は、古墳時代前期初頭には次第に縮小していくようである。小牧南遺跡(10)ではその時期に形成される集落が確認されており、古墳時代前期初頭に新たな場所に集落が形成される場合があったことが知られる。

古墳時代前期前葉～中葉にかけては、小規模な集落が散在する状況とみられる。小牧南遺跡のほか、伊坂遺跡(47)や辻子遺跡で数棟の竪穴建物や掘立柱建物からなる集落が検出されている¹⁶⁾。

古墳時代中期の集落は、今のところ朝明川流域ではあまり確認されていない。

古墳時代後期～飛鳥時代には、多数の集落が展開

する。特に飛鳥時代以降には、居林遺跡と一連の丘陵上に位置する中野山遺跡、北山A遺跡(17)、北山C遺跡(26)、そして谷を挟んで北側に位置する筆ヶ崎西遺跡(19)、西山遺跡(23)など、丘陵上に集落が盛んに形成される。

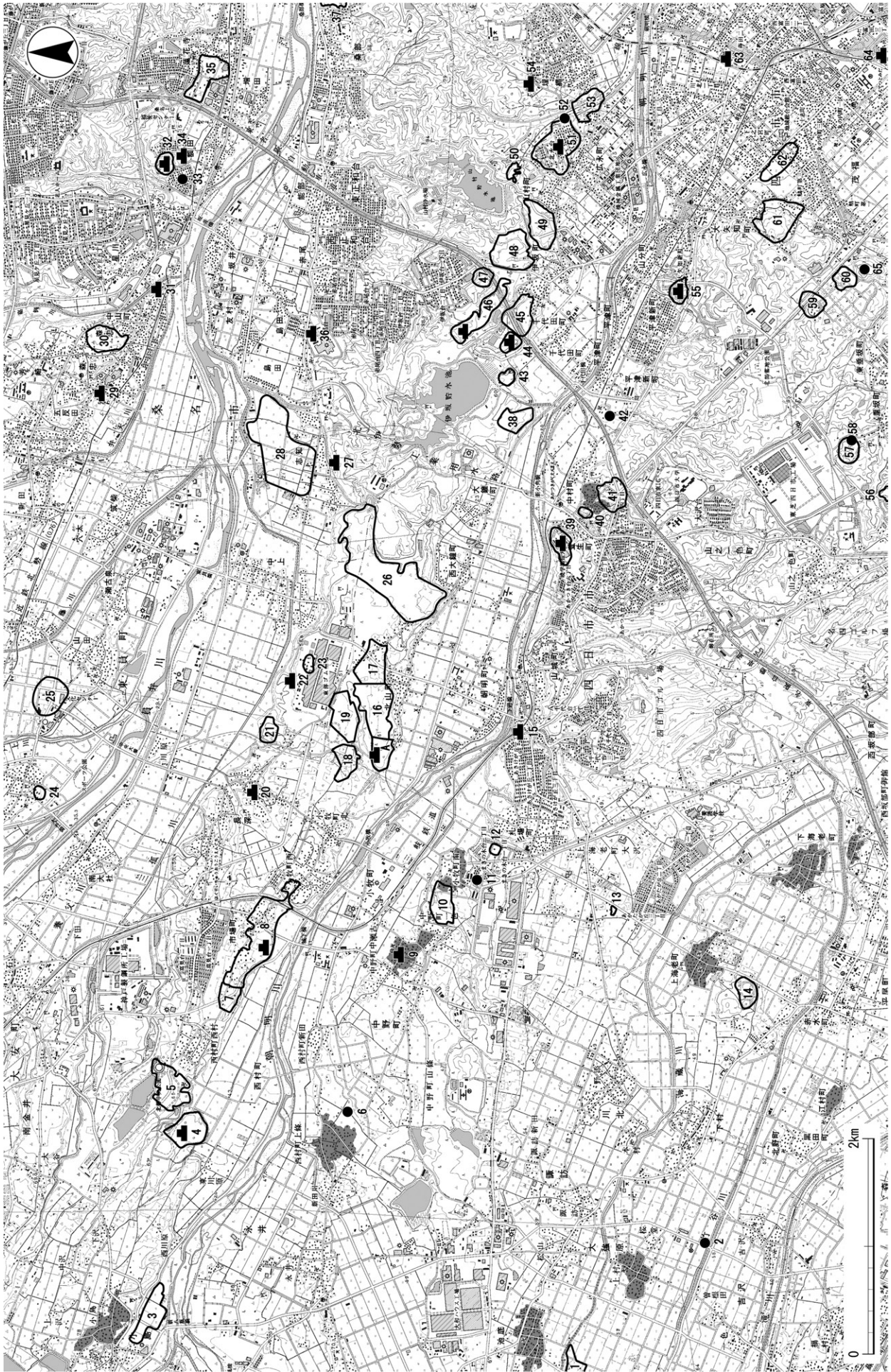
古墳 居林遺跡の近隣で最も古く位置づけられる古墳は、海蔵川下流域に築造された志氏神社古墳と思われる。銅鏡や車輪石などが出土している¹⁷⁾。墳丘はかなり削平を被っているが、前方後円墳の可能性はある。このほかに、員弁川上流域に存在する麻積塚1号墳が古墳時代前期でも早い段階に築造された前方後方墳とする意見もあるが、出土遺物は知られておらず、墳丘もかなり改変されているため、確定的ではない¹⁸⁾。員弁川下流域には、全長56m程度の前方後円墳である高塚1号墳が築造されており、鰭付円筒埴輪の存在が確認されている¹⁹⁾。

竹谷川流域には、飛塚古墳(2)が築造されている。径35mの比較的大型の円墳で、造り出しが付属する可能性もある。出土した埴輪から、前期末～中期前葉の古墳とみられる²⁰⁾。

このように、朝明川流域やその近辺で確認されている前期古墳は僅少であるが、居林遺跡のすぐ西側にあたる保々地区で筒形銅器が出土したとの記録があり²¹⁾、また、桑名市内の古墳から舶載三角縁神獣鏡が3面出土したとされるなど²²⁾、すでに消滅した古墳の存在も窺われる。

中期の古墳としては、浄ヶ坊古墳群(43)や広古墳群(38)が挙げられる。広古墳群B支群1号墳は、一辺31mほどの方墳で、造り出しが付属する。発掘調査は行われていないが、葺石や埴輪が認められることや墳形などから中期の古墳と推定される²³⁾。このほかに、西山古墳群(26)の存在が注意される。木棺直葬の埋葬施設を主体としたと考えられる小規模な古墳が多数群集しており、いわゆる古式群集墳の典型例ともいえるものである²⁴⁾。中期後葉におけるこうした群集墳の出現は、当該地域の古墳築造動向における大きな画期と考えられる。

後期前葉～中葉の古墳としては、道具林古墳(11)などがある。後期後葉～終末期には、古墳の築造数が急激に増加する。そうした古墳の多くは横穴式石室を埋葬施設とする。伊勢地域北部では、八幡古墳



第2図 周辺遺跡位置図 (1/50,000)

第2表 周辺遺跡

A. 居林遺跡・北山城跡・居林古墳群	22. 花扉城跡（中上城跡）	44. 西ノ広城跡
1. 棕ノ木遺跡	23. 西山遺跡	45. 西ヶ広遺跡
2. 飛塚古墳	24. 猪名部神社古墳群	46. 伊坂城跡
3. 六谷遺跡	25. 山田廃寺	47. 伊坂遺跡・伊坂窯跡
4. 保々西城跡	26. 北山C遺跡・西山古墳群	48. 菟上遺跡
5. 丸岡遺跡	27. 志知城跡	49. 山村遺跡
6. 公事出古墳	28. 志知南浦遺跡	50. 金塚遺跡・金塚横穴墓群
7. 野呂田遺跡	29. 羽笠城跡	51. 広永城跡・城ノ谷遺跡
8. 市場城跡	30. 七和廃寺	52. 広永横穴墓群
9. 中野城跡	31. 星川城跡	53. 辻子遺跡
10. 小牧南遺跡	32. 高塚の壘城跡	54. 埋縄城跡
11. 道具林古墳	33. 額田廃寺	55. 大矢知城跡
12. 真造寺遺跡	34. 額田城跡	56. 西ヶ谷遺跡
13. 東北山A遺跡	35. 宇賀遺跡	57. 寺坊谷古墳群
14. 岡山窯跡群	36. 島田城跡	58. 垂坂山観音寺中世墓
15. 源治山城跡	37. 桑部城跡	59. 山奥遺跡
16. 中野山遺跡	38. 広古墳群	60. 死人谷横穴群
17. 北山A遺跡	39. 萱生城跡	61. 久留倍遺跡
18. 小牧北遺跡	40. 桶尻谷中世墓	62. 下之宮南遺跡
19. 筆ヶ崎西遺跡・筆ヶ崎古墳群	41. 中村遺跡	63. 蒔田城跡
20. 善正寺城跡（長深城跡）	42. 八幡古墳	64. 富田城跡
21. 広山B遺跡	43. 浄ヶ坊古墳群	65. 糠塚古墳

※番号は第2図と対応する

(42) や筆ヶ崎古墳群 (19)、員弁川下流域の宇賀新田古墳群など、人頭大程度の小型の丸い川原石を用いて構築した横穴式石室が特徴的に認められる。

筆ヶ崎古墳群は、一つの古墳群のほぼ全体を発掘調査した事例である²⁵⁾。小規模な円墳10基が、3・4基で一つの小単位を構成し、古墳群を形成している。朝明川流域では数十基にも及ぶような規模の大きい群集墳の存在は確認できず、筆ヶ崎古墳群と同程度の規模の古墳群や、居林古墳群 (A) や丸岡古墳群のように、筆ヶ崎古墳群中の一単位に相当するような数基程度からなる古墳群が主体で、単独墳とみられるものも目立つ。

なお、朝明川流域では、古墳時代終末期になると広永横穴墓群 (52) や金塚横穴墓群 (50)、死人谷横穴群 (60) など、横穴墓が多数築造されている点が大きな特徴といえよう。

(3) 奈良～平安時代

居林遺跡 (A) 付近は、律令制下の朝明郡に属していたと考えられる。久留倍遺跡 (61) では整然と並ぶ掘立柱建物群や八脚門などが検出され、朝明郡衙に比定されている²⁶⁾。

奈良時代において、朝明川流域は政治的にも重要な位置を占めており、壬申の乱に際して天武天皇が伊勢神宮を遙拝した「迹太川」を朝明川に充てる説

もある²⁷⁾。

集落の動態 奈良時代には、居林遺跡周辺の丘陵・台地上に中野山遺跡 (16)、北山A遺跡 (17)、筆ヶ崎西遺跡 (19)、北山C遺跡 (26)、新野遺跡など、集落が広く展開する。大鐘町付近は、『倭名類聚抄』にみえる大金郷に比定されており²⁸⁾、輔の羽口や鉄滓が出土した西山遺跡 (23) や、鍛冶炉を有する堅穴建物が検出された筆ヶ崎西遺跡などは、冶金に関係する郷名と関わって注意されよう²⁹⁾。

ただ、平安時代には緑釉陶器が複数出土した広山B遺跡 (21) などもあるものの³⁰⁾、丘陵上に展開していた多くの集落は衰退する。伊勢地域では平安時代には丘陵上における集落の存在が希薄化する傾向があり、当該地域においても同様の状況であったものと考えられる。

寺院 朝明川・員弁川流域には、繩生廃寺や七和廃寺 (30)、額田廃寺 (33) など、複数の古代寺院跡が存在する。朝明丘陵の東端に位置する繩生廃寺では、塔心礎から鉛ガラス製の内容器を滑石製の外容器に入れ、唐三彩の碗で被覆した舍利容器が出土しており、注目される³¹⁾。

また、これらの寺院へ瓦を供給した瓦窯として、伊坂窯跡 (47) や岡山窯跡群 (14)、西方古窯跡などが知られている。伊坂窯跡や岡山窯跡群は、須恵器も焼成した瓦陶兼業窯である³²⁾。

(4) 鎌倉～室町時代

集落等 鎌倉～室町時代においても、平安時代から引き続き丘陵上における生活痕跡は希薄である。朝日丘陵や大安台地上では当該期の遺構・遺物のごくわずかで、特に掘立柱建物など集落の存在を示すような遺構はほとんど確認できない。

この時期には、沖積平野内の微高地上などに集落が展開していた可能性が高い。員弁川沿いの沖積平野では鎌倉～室町時代の遺物を出土する遺跡が多く認められる。発掘調査が行われた志知南浦遺跡(28)では、鎌倉時代から室町時代にかけての溝で区画された屋敷地群が確認されており、付近には寺院の存在も推定されている³³⁾。

『神鳳鈔』や『外宮神領目録』等の記録からは、平安時代末～鎌倉時代には朝明郡においても伊勢神宮領が点在する状況であったことが知られる。北山町を含む下野地区には霜野御厨の存在が想定されており、また、居林遺跡・北山城跡(A)の北西側に位置する長深地区には、長深御厨が存在していたとされる³⁴⁾。こうした御厨・御園の存在は集落の動態とも関連すると考えられ、例えば辻子遺跡(53)では大型掘立柱建物群が検出されており、物流にも関与した有力者層の存在が推定されている³⁵⁾。

城館跡 北山城跡と関連するため、城館跡やそれに関わる歴史的動向については、多少詳しく述べておきたい³⁶⁾。

伊勢国の北部は、武家の台頭以来、幾度も争乱の舞台となってきた。平安時代末から鎌倉時代のはじめにかけて、現在の桑名市付近では伊勢平氏と呼ばれる平氏一族が力を持っていたが、平氏没落後、元久元(1204)年には三日平氏の乱と呼ばれる鎌倉幕府に対する平氏の反乱が発生し、富田城跡(64)ないしはその付近に存在したと推測される富田の館で追討軍と進士三郎基度が戦うなど、朝明郡でも戦闘が行われていたとみられる。

室町時代に入ると、14世紀末から15世紀前半にかけて、室町幕府と深い関係を持ち奉公衆と呼ばれる者を中心に、多くの国人領主が割拠するようになる。近世に成立した軍記物では「北勢四十八家」と総称され、実態は不明ながらも中小の国人領主が多数存

在していた様子を窺うことができる。

こうした国人領主層の中でも有力な者は、15世紀代を中心に、北方一揆や十ヶ所人数と呼ばれる集団を形成し活動していた。北方一揆は員弁郡の国人領主層が中心で、一方、十ヶ所人数は朝明郡の奉公衆を主体としていた。

応仁の乱の勃発後、戦国期となる中で、伊勢国北部は文明5(1473)年に美濃国の斉藤氏による侵攻を被ったり、天文9(1540)年の六角義賢による侵攻を皮切りに六角氏が本格的に進出するなど、動乱が続いた。六角氏の進出に際しては、朝日丘陵の東端付近に築かれていた柿城への攻撃が試みられるなど、北山城跡周辺にも戦乱が及んだことが知られる。こうした動向を受けて、北方一揆や十ヶ所人数の活動や性格も大きく変化していく。

戦国期の末頃の永禄10(1567)年には伊勢国北部は織田信長による侵攻を受けたとされ、その後、織田信長と長島一向一揆の戦いや、小牧・長久手の戦いに連なる戦いなど、大きな争乱が相次いだ。

以上のような不安定な社会情勢を反映して、朝明川流域には主に戦国期に築かれたとみられる城館跡が、多数存在している。

特に大規模なものでは、伊坂城跡(46)がある。土塁で囲い櫓門を構えた主郭を中心に多数の曲輪を備え、切岸や堀切によって厳重に防御を固めるとともに、付随して家臣層の居住地と考えられる複数の方形の区画が丘陵尾根上の平坦面に展開する³⁷⁾。同様の形態は、保々西城跡(4)や市場城跡(8)などでもみられ、朝明川流域の大規模な城館跡の特徴の一つともいえよう³⁸⁾。

すでに大部分が消滅しているものの、古くに残された記録や地形、わずかに残る遺構などから、萱生城跡(39)や広永城跡(51)も比較的規模の大きな城跡と考えられる³⁹⁾。

これらの大規模な城跡の多くには城主に関する記録・伝承が残る。保々西城や市場城は十ヶ所人数に属した朝倉氏の居城であったとされる。また、萱生城や伊坂城跡を拠点としたとされる春日部氏(萱生氏・伊坂氏)は、朝明郡に城を構えながらも北方一揆に属し、軍記物では北勢四十八家の中でも六人衆と呼ばれる有力な存在であったと伝えられている。

このほか、小規模な城館跡がかなりの数点在している。北山城跡と同様の少数の曲輪によって構成されるような城館跡としては、善正寺城跡（長深城跡）(20)、源治山城跡（15）などが挙げられる。こうした小規模城館についても、近世の軍記物や地誌などに記載が見られるものがあり、城主の名が伝わるものも多い。ただし、後世の潤色も多いと思われる、真偽のほどは定かではない。

註

- 1) 三重県埋蔵文化財センター2021『小牧南遺跡（第2・3次）発掘調査報告』
- 2) 三重県埋蔵文化財センター2012『新あさけのいこしへ』No.7
- 3) 四日市市1988『四日市市史』第2巻史料編考古I
- 4) 三重県埋蔵文化財センター2012『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』、三重県埋蔵文化財センター2013『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』、三重県埋蔵文化財センター2014『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』、三重県埋蔵文化財センター2016『中野山遺跡（第2・3・6・7次）発掘調査報告』
- 5) 前掲註1文献
- 6) 三重県埋蔵文化財センター1999『宮山遺跡発掘調査報告』
- 7) 三重県埋蔵文化財センター2008『志知南浦遺跡発掘調査報告』
- 8) 前掲註4文献（三重県埋蔵文化財センター2012、三重県埋蔵文化財センター2014）
- 9) 三重県埋蔵文化財センター2000『菟上遺跡発掘調査報告』
- 10) 三重県埋蔵文化財センター2004『山村遺跡（第2次）発掘調査報告』
- 11) 三重県2005『三重県史』資料編考古1
- 12) 四日市市教育委員会2013『久留倍遺跡5』
- 13) 三重県埋蔵文化財センター2004『辻子遺跡発掘調査報告』
- 14) 四日市市教育委員会2003『山奥遺跡Ⅰ』、四日市市教育委員会2004『山奥遺跡Ⅱ』
- 15) 三重県埋蔵文化財センター2002『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』
- 16) 三重県埋蔵文化財センター2011『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』、前掲註13文献
- 17) 前掲註3文献
- 18) 近藤義郎（編）1992『前方後円墳集成』中部編 山川出版社
- 19) 桑名市教育委員会2006『高塚山古墳基礎調査報告書』
- 20) 三重県埋蔵文化財センター2015『飛塚古墳発掘調査報告』
- 21) 鈴木敏雄1936『三重縣三重郡保々村考古誌考』 私家本
- 22) 竹内英昭2005「古鏡」『三重県史』資料編考古1 三重県
- 23) 前掲註3文献
- 24) 三重県埋蔵文化財センター2020『北山C遺跡（第2～7次）・西山古墳群発掘調査報告』
- 25) 三重県埋蔵文化財センター2019『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第4・5・7次）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2021『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第2・3・6次）発掘調査報告』
- 26) 前掲註12文献。以前は西ヶ広遺跡（45）に比定する説もあった。四日市市1995『四日市市史』第16巻通史編古代・中世
- 27) 前掲註26文献
- 28) 四日市市1993『四日市市史』第3巻史料編考古Ⅱ
- 29) 前掲註25文献、東員町教育委員会1976『西山遺跡・新野遺跡』
- 30) 三重県埋蔵文化財センター2009『広山A遺跡・広山B遺跡発掘調査報告』
- 31) 朝日町教育委員会1988『繩生廃寺跡発掘調査報告』
- 32) 前掲註16文献（三重県埋蔵文化財センター2011）、四日市市教育委員会1971『岡山古窯址群発掘調査報告』
- 33) 前掲註7文献
- 34) 前掲註26文献
- 35) 前掲註13文献
- 36) 当該部分の記述には、全体的に以下の文献を参照した。
朝日町2019『新修 朝日町史』資料編1 考古・文化財・民俗、近藤奎・平岡潤1959「北勢四十八家と桑名の土豪」『桑名市史』本編 桑名市教育委員会、飯田良一1984「員弁郡の国人領主について一所伝と史実一」『山田城跡発掘調査』東員町教育委員会、勝山清次1995「鎌倉幕府と北伊勢」『四日市市史』第16巻通史編古代・中世 四日市市
- 37) 三重県埋蔵文化財センター2003『伊坂城跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2012『伊坂城跡（第3次）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2019『伊坂城跡（第4～7次）発掘調査報告』
- 38) 伊藤徳也2008『再発見・北伊勢国の城』 私家版
- 39) 前掲註38文献、三重県教育委員会1976『三重の中世城館』

第Ⅲ章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

(1) 調査区およびグリッドの設定

グリッドの設定 居林遺跡・北山城跡の調査に際しては、複数年度にわたる調査が予想されたため、調査を行う範囲全体を対象として、あらかじめグリッドの設定を行った。

グリッドは4×4mの正方形とし、主軸方位は国土座標の南北軸と一致させている。このグリッドを調査対象地内における遺構の位置関係や遺物出土位置の把握のための基礎単位としたが、調査対象となった範囲が広く、設定されたグリッドが非常に多数となるため、さらに一辺100mの単位で大地区を設定した(第3図)。

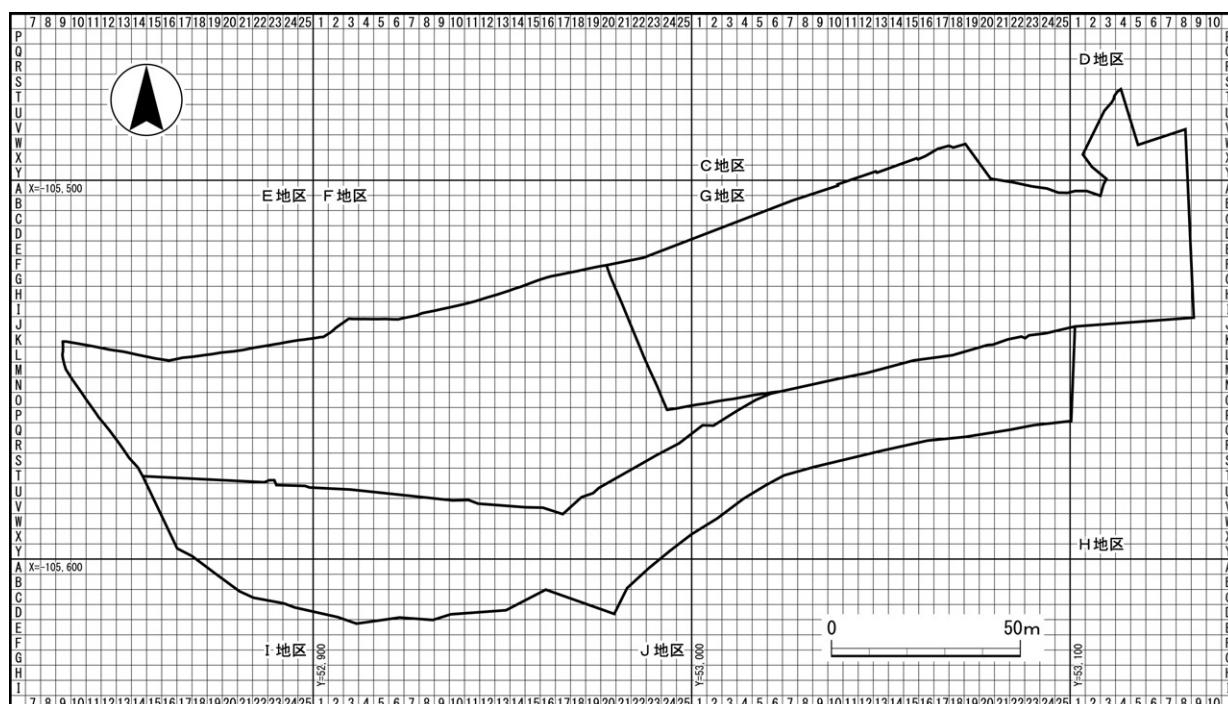
各大地区にはAから順にアルファベットの大文字で名称を付与した。最も北側には西から順にA～D、その南側には同じく西から順にE～H、そして最も南側にはI～Lが付されている。ただし、大地区A・B・K・Lについては結果として調査区外となり、

便宜上設定したのみとなっている。

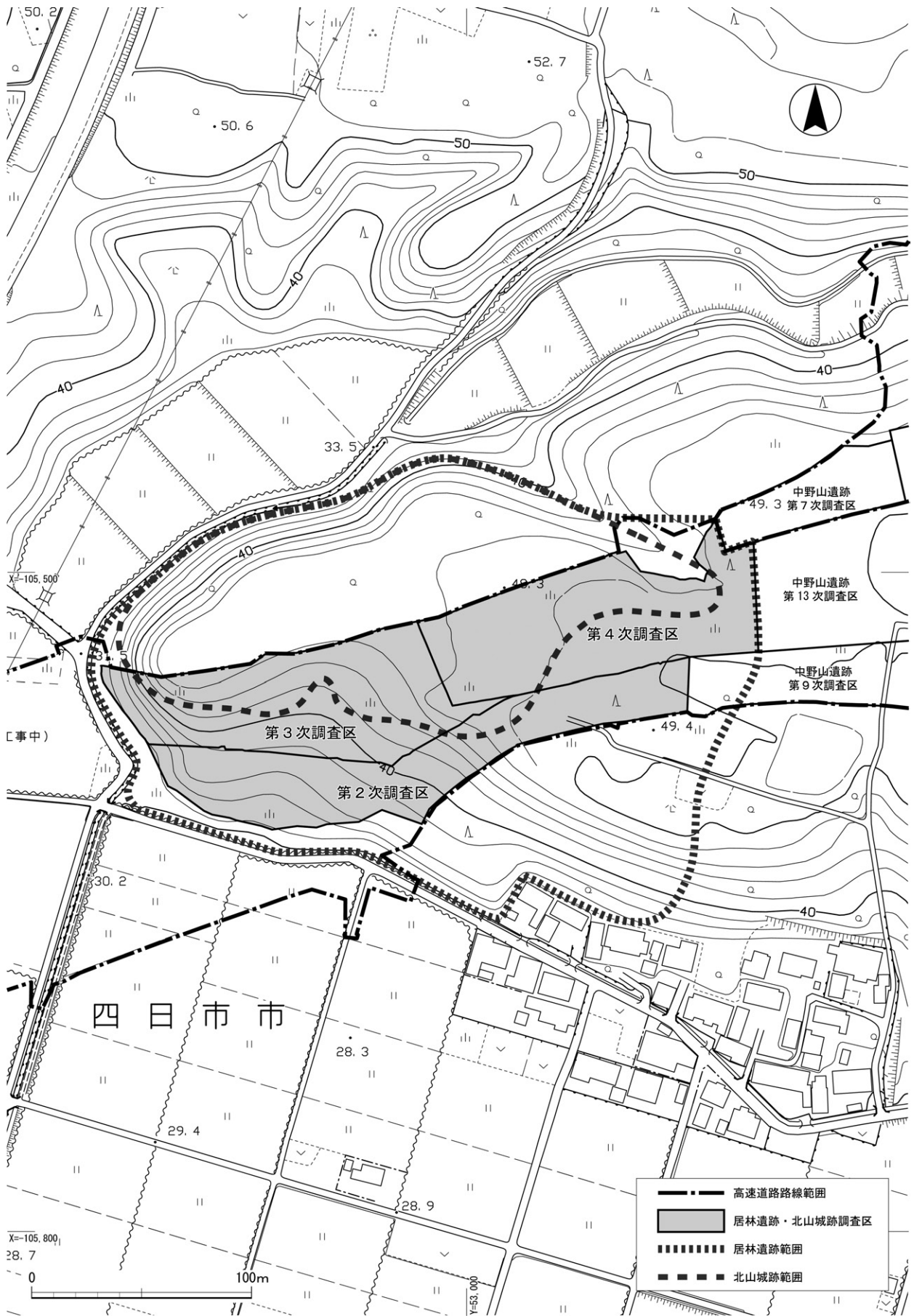
大地区の内部には、南北に25、東西に25、計625のグリッドが配されている。各グリッドには北から南へ向かってAから順にアルファベット大文字を、西から東へ向かって1から順に数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせによって各グリッド名を表した(例:A1)。本報告で特定のグリッドを示す場合は、そのグリッドが存在する大地区名のアルファベットを頭に付している(例:A-A1)。

調査区の設定 調査区は、居林遺跡・北山城跡の周知の埋蔵文化財包蔵地となっている範囲のうち、高速道路の路線内にあたる部分のほぼすべてを対象として設定した(第4図)。

ただし、第2次調査区の南西側や第3次調査区の西側については、遺構が比較的希薄であったことに加えて、丘陵裾部を通る道路に影響が及ぶことを防ぐ必要があったため、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲より若干控えた調査区の設定となっている。



第3図 グリッド割図 (1/2,000)



第4図 調査区位置図 (1/2,500)

また、調査区内には急な斜面や谷も含まれているが、初期の調査において若干の遺構・遺物が検出されたことと、中世城館にかかる調査であることを鑑みれば、付属施設の存在や、周囲への生活用品類の廃棄の可能性を考慮する必要もあることから¹⁾、こうした箇所も調査対象とした。なお、第4次調査区北東部に入り込んでいる比較的深い谷も当初は調査対象としていたが、掘削に際して安全の確保が困難であったことから、重機によって一部掘削を行って遺構や遺物がほとんど認められないことを確認の上、調査区から除外することとした。

(2) 掘削等

掘削 第2～4次調査とも、現地調査開始後に、まず耕作土や腐植土等の表土を重機で除去し、遺構面付近まで掘り下げた。その後、順次人力で遺構の検出作業を行った。

第2・4次調査においては、調査区の面積が広いため、調査区をいくつかに分割し、その区画単位で重機掘削と遺構の検出作業を進め、作業の効率化や排土置き場の確保を図った。

遺構検出後、それぞれの遺構を人力で掘削した。堅穴建物については、基本的に土層観察・記録用のアゼを設け、そのアゼによって分割された区画ごとに掘削を進めた。

掘立柱建物は、検出時に建物として認識できなかったものなど一部除き、基本的に検出面から一段掘り下げて柱痕の有無を確認した後に、柱穴を半裁して土層断面を記録し、完掘している。柱痕が認められた場合、平面的な位置を記録するとともに、可能な限り柱痕と柱穴埋土に分けて遺物を取り上げた。

遺構番号の付与 第2次調査では、ピットを除くすべての種類の遺構に、通し番号で201から順に遺構番号を付与した。200番台の番号を用いたのは、第2次調査で検出された遺構であることを分かりやすく示し、以降に予定されていた第3・4次調査で検出された遺構との判別を容易にするためである。

同様に、第3次調査では301からの番号、第4次調査では401からの番号を遺構番号として用い、第3・4次調査で検出された遺構であることを示すようにした。

各遺構を表記する時には、遺構番号の前に、凡例で示したようにSH、SKなど遺構の種類ごとの略号を付している。また、ピットについてはグリッドごとに1から順に番号を付与し、その番号の前にグリッド名とピットを表す略号のPitを付して表記している(例:A-A1Pit1)。

ただし、第2次調査では、一部の堅穴建物において、支柱穴や貯蔵穴、床面で検出されたピットなどにグリッドごとのピット番号とは別に1から順番に番号を付与し、それにピットを表す略号のPもしくはPitを付して区別している。また、第4次調査では、やはりグリッドごとのピット番号とは別に、堅穴建物の支柱穴に1から順に番号を付与している。

掘立柱建物や柱列を構成する柱穴については、第4次調査ではグリッドごとのピット番号とは別に遺構ごとに1から個別の番号を振り、番号の前にピットを表す略号Pを付して表記している。ただし、第2・3次調査においてはこうした方針をとっておらず、掘立柱建物・柱列を構成する柱穴も、グリッドごとに他のピットと一連で番号が付与されている。

(3) 遺構の図化

遺構平面図 調査区の面積が広く、また急な斜面となっている部分も多いため、遺構平面図の作成は基本的にラジコンヘリコプターを使用した空中測量によって行い、一部電子平板を用いた²⁾。

ただし、遺存状況が良好な堅穴建物や、出土遺物が良好な状態で出土した土坑などは、1/20の縮尺の大きな図面を手作業での実測によって個別に作成し、それを空中測量による図に合成している。

空中測量は基本的に遺構完掘後に行ったが³⁾、第4次調査では、貼床が施された堅穴建物には床面上の機能面において図化を行ったものもあり、それらは貼床除去後の完掘状況は図化していない。

また、居林1号墳の墳丘下の遺構については、盛土除去後に手作業で実測を行い、空中測量による平面図とは別に1/20の平面図を作成した。

土層断面図 遺構の土層断面図については、個別に土層観察用のアゼを残して分層を行い、図化した。堅穴建物では基本的に直交する2方向の土層断面図を作成し、場合によっては柱穴や炉穴、貯蔵穴等の

土層断面図を個別に作成した。また、建物が複数重複する箇所では、それらの建物間の新旧関係を明確にする目的で、別途土層観察用のアゼを設けている場合もある。

掘立柱建物は、できる限り建物主軸に沿った方向で柱穴の土層断面図を作成するよう努めたが、検出時に掘立柱建物として認識できなかったものなどについては、土層断面図を作成することができなかったものもある。

出土状況図 遺構内等から遺物や炭化材などが良好な状態で出土した場合は、出土状況図を1/10などの大縮尺で作成し、遺物に付した取り上げ番号を図面中に記録した。

ただし、大量に遺物が出土した場合などは現地での図面作成が困難であったため、第2次調査の一部の遺構においては、デジタルカメラで撮影した写真と現地における実測を併用して図化を行った⁴⁾。

(4) 写真撮影

調査区全体の写真撮影は、第2～4次調査のいずれにおいても、ラジコンヘリコプターを使用した空中撮影によって行った。使用したカメラは、第2・4次調査では中判の銀塩カメラ（Hasselblad MKW、Hasselblad SWC）及び一眼レフのデジタルカメラ（Canon EOS Kiss）、第3次調査では中判の銀塩カメラ（Hasselblad MKW-E）で行っている。銀塩カメラで撮影した写真は6×6cmサイズで、カラーリバー

サルとモノクロの両方のフィルムを使用している。

個別遺構や土層断面、遺物出土状況等の写真については、第2～4次調査のいずれにおいても主に35mmの一眼レフ銀塩カメラを用いて撮影した。調査区各所の広域的な写真や、良好に検出された堅穴建物等の遺構については、大判の銀塩カメラによる4×5inchサイズや、中判の銀塩カメラによる6×7cmや6×9cmサイズの写真を撮影した。いずれも、同じカットについてカラーリバーサルとモノクロの両方のフィルムを使用して撮影している。

また、銀塩カメラによる撮影のフォローアップや、発掘調査現場でのメモ写真として、コンパクトデジタルカメラによる撮影を随時行った。

註

- 1) いくつかの中世城館において、斜面や区画境に土師器や陶磁器類を廃棄する傾向が指摘されている。三重県埋蔵文化財センター2003『伊坂城跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2008『霧生城跡・中道遺跡』
- 2) 第2次調査区の平面図に座標のずれがあることが調査後に判明したため、他の記録類や隣接する調査区との整合性を基に修正した。
- 3) 調査の進行上、空中測量前に掘削が完了しなかった一部の遺構については、完掘後に個別に図面を作成し、それを空中測量の図面に合成したものもある。
- 4) SH228やSH236の遺物出土状況図などは、この方法によって図化した。

第2節 本報告の方針

本報告では第2～4次調査の成果を併せて報告するが、前節で述べたような調査の方法も踏まえて、いくつか報告時に整理を行い、統一などを図った点もある。また、便宜的に整理を行った部分もある。そうした点について示しておく。

遺構・遺物の報告単位 検出された遺構・遺物については、大きく弥生・古墳時代、飛鳥～平安時代、鎌倉・室町時代に分け、それぞれ別の章で報告を行う。ただし、それぞれの時代の遺構から混入などによって出土した別の時期の遺物は、その遺構が帰属する時期の章の中で、そのほかの遺物とともに掲載している。

遺構の整理 いくつかの遺構については、その性格を鑑みて、報告段階で遺構種類の略号を変更したものがあ。変更については、遺構一覧表（一覧表・写真図版編第1～6表）の備考欄に記載している。

特に、本報告で段状遺構としてSZという略号を付与したものについては、調査段階では堅穴建物や土坑、溝、古墳周溝などとして認識されていたもので、SHやSK、SDといった略号を与えられていた。報告に際して再検討を行い、何らかの建物というよりは、斜面に段状の狭い平坦面を造成するなどの目的で設けられた遺構と考えた方がよいと思われたため、これらを段状遺構として把握し、略号をS

Zに変更した¹⁾。

また、報告に際して竪穴建物の主柱穴や掘立柱建物の柱穴についても再検討を行った。それにより、調査時に主柱穴等と認識していたものとは異なるピットを採用したのものもある。遺物についても、再整理の結果に即して報告を行っている²⁾。

掲載遺構 検出された遺構のほぼすべてについて、個別図及び文章による報告を掲載している。ただし、土坑・溝については、実測可能な遺物が出土しているものや、土層断面図が個別に作成されているものなど、主要なものを選択して報告した。

遺構一覧表（一覧表・写真図版編第1～6表）にはすべての遺構を掲載しており、個別に図を掲載していない土坑・溝については、その旨を遺構一覧表の備考欄に記している。

なお、調査区の全体図（第16図・付図）には、個別図を掲載していない土坑・溝の図も含まれており、それらの遺構の位置は調査区部分図中に示している（第10～15図）。

遺構図版 遺構図版の縮尺については、遺構の種類ごとになるべく統一を図ったが、竪穴建物については規模の差がかなりあったため、1/40を基本としながらも、いくつかの建物については1/50や1/60としている。建物全体の土層断面図や、個別に作成された貯蔵穴や柱穴、炉など細部の土層断面図の縮尺は、平面図の縮尺に関わらず1/40としたが、建物の全体の土層断面図の一部については、平面図と合わせて1/50としたものもある。また、遺物の詳細な出土状況図については、遺構の種類に関わらず1/20を基本としている。

各遺構の図面には、空中測量によるものと、個別に実測して作成されたものの両者が存在する場合があるが、原則として個別に作成された図面を採用した³⁾。

先述のように、第2・4次調査においては、竪穴建物の主柱穴や貯蔵穴、床面等から検出されたピット、そして掘立柱建物・柱列を構成する柱穴に、調査時にグリッドごとのピット番号とは別に番号が付与されていたものがある。こうしたものについては、調査時に個別に付与された番号の数字を踏襲するとともに、グリッドごとのピット番号とは異なる略号

としてPを付して表すこととした（例：P1）。

そして、報告段階では、竪穴建物の主柱穴及び壁柱穴、掘立柱建物・柱列を構成する柱穴のうち、本報告中で個別に触れるものや出土遺物の図を掲載したものに限って、その番号を図版中に図示した。

なお、報告段階での再検討により、調査時とは異なるピットを主柱穴としたものもある。それらについては、元のピットに付与された番号の数字を踏襲した上で、調査時の認識とは異なることが分かるように、図版中では（ ）を付して表示している（例：（P1））。

掲載遺物 多量に出土した遺物のうち、本報告に掲載する遺物の抽出にあたっては、口縁部や底部、脚部などを中心に、径が復元できる程度の遺存率があるものや、文様があるものを基本的に抽出した。

さらに、各遺構ごとに、遺構の時期を示すような遺物を最低1点は抽出するよう心がけた。したがって、遺物図面が全く掲載されていない遺構は、図化可能な遺物や時期を示すような遺物が抽出できなかったものである。

多数の遺物が出土している遺構についても、基本的な抽出に加えて、構成する器種あるいは文様のバリエーションが網羅できるよう、僅少な器種や、希少な文様を施しているものについては、小片や体部片であっても抽出し、図化して掲載している。また、同じ器種の個体が多数存在する場合にも、小片や器壁の風化が著しいものなどを除き、図化可能なものは極力図化し、器種間の数量比や、同じ器種の中における形態や調整等のバリエーション・数量比が反映されるように配慮している。

包含層や表土中など、遺構に伴わない遺物については、遺存率がかなり高い個体か、遺構出土遺物にはあまりみられない器形や文様を有するものを中心に抽出した。

また、石器・石製品については、人為的に加工が加えられていると判断できるものや、摩滅等の使用痕が残るものは、破片も含めてほぼすべて図化している。

註

1) 主に、主柱穴が認められなかったり、壁際溝や方形周溝

墓としては規模や形態に違和感があるもの、斜面に平行して溝や長い土坑が掘り込まれ、斜面をカットしたり斜面上方からの水の流れ込みを防ぐような意図が見受けられるものなどを、段状遺構とした。

2) 報告書に掲載しなかった遺物については再整理結果を反

映できていないが、調査時の記録等に基づいて再整理結果と照合することは可能である。

3) 個別に実測した図面の場合は、周囲の遺構等は遺構図版中に示されていない。

第3節 北山城跡の既往の調査と本報告における取り扱い

(1) 既存の北山城跡の縄張図

居林遺跡と北山城跡、そして居林1号墳では、これまでに発掘調査が行われたことはなく、遺構等に関する知見は得られていない。

ただし、北山城跡については数度にわたって踏査が行われ、以下の4つの文献において縄張図が公表されている(第5図)。

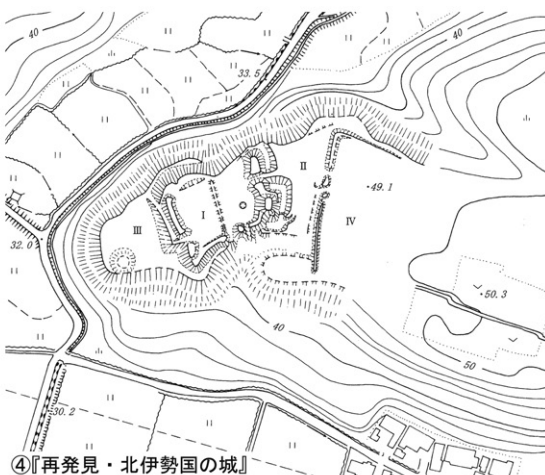
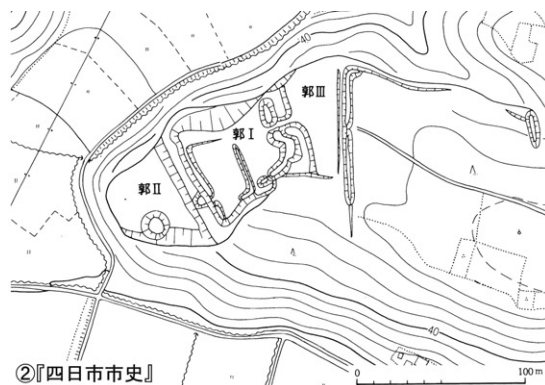
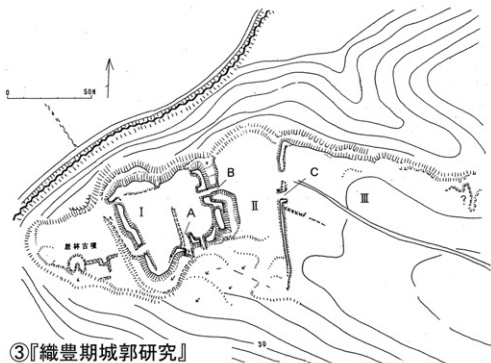
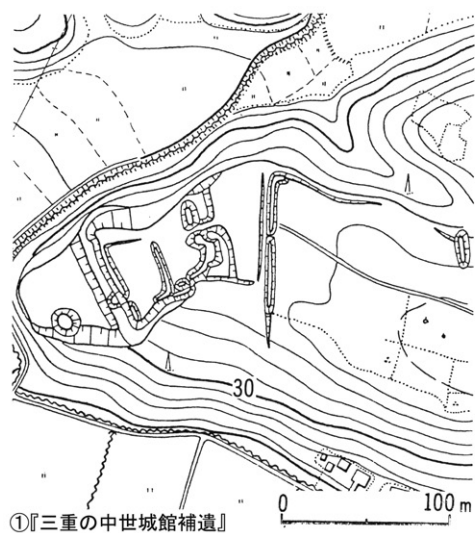
- ①三重県教育委員会1981『三重の中世城館補遺』
- ②四日市市1993『四日市市史』第3巻史料編考古Ⅱ

③高田徹1994「織豊期における北伊勢四郡の城館」『中世城郭研究』第8号 中世城郭研究会

④伊藤徳也2008『再発見・北伊勢の城』 私家版

これらの文献に掲載された縄張図のうち、①と②はほぼ同じである¹⁾。ただし、①・②と③、そして④の間には若干の違いが認められる。

既存の縄張図の差異 一つ目は、城域の認識と、曲輪の名称である。①については曲輪の名称を示していないが、②では3つの曲輪を認識し、郭Ⅰ～Ⅲの名称を与えている。



※原典より一部改変の上転載、すべて上が北

第5図 既存の北山城跡縄張図(1/4, 500)

それに対して、③では各曲輪にやはりローマ数字でⅠ～Ⅲの数字が付与されているものの、②とはⅡ・Ⅲの数字を付与した曲輪が異なっており、②で郭Ⅲとしたものを曲輪Ⅱ、そしてその東側の平坦面を曲輪Ⅲとする。②で郭Ⅱとされたものは積極的に曲輪と認識せず、名称を与えていない。

また、④ではⅠ～Ⅲ郭の名称を用い、同じローマ数字で曲輪名称を表しながらも、②とはⅡ・Ⅲの位置を入れ替えている。そして、③と同じく②の郭Ⅲの東に位置する平坦面も曲輪と認識し、Ⅳ郭という名称を与えている。ただし、①・②についても④のⅣ郭と同じ範囲までを図化し、さらにⅣ郭東側を画するような土塁が一部遺存する様子が示されている。②では、別図や文章中で城域がこの土塁あたりまで広がっていた可能性が示唆されており、積極的に曲輪と認定しないまでも、この東側平坦面が城域に含まれる可能性が高いとみている。

なお、③・④では、Ⅳ郭を積極的に曲輪として捉えているが、①・②で示されているⅣ郭東側の土塁が描かれていない。③では北側から入り込む溝状の落ち込みの西側に「？」と記されており、明確な記述はないものの、土塁状のものが存在することを示しているように見える。当該縄張図が作成された時点では確実な土塁の存在が確認できず、④の段階では土塁とは認定しなかった可能性が考えられる。

二つ目の違いは、③・④のⅡ郭南側には谷の存在が示されているが、①・②にはその表現がみられない点である。ただし、郭Ⅲの南側には切岸あるいは崖状の表現が認められ、やはり曲輪が当該箇所でも何らかの落ち込みによって画されていると判断していることが読み取れる。

これについては、③の文献では曲輪Ⅱの縁辺岸は不明瞭であるとの記載があり、これを自然地形の谷とするか、切岸とするかといった曲輪の構造上を考える上での見解の差異が、縄張図に反映されたものとも考えられる。

そして三つ目の違いは、主郭の虎口に関する見解についてである。主郭西側の虎口について、①・②では郭Ⅰ西側の土塁の切れ目として図化され、郭Ⅱとの間には土塁に沿って延びる犬走り状の段の存在が示されているが、③・④ではその部分がⅢ郭北東

端から坂を上って東へ折れてⅠ郭へ至る虎口となっている。この点は、①・②と③・④の間の大きな違いのように見受けられるが、③が作成された段階で、地形の観察に基づいて新たな解釈を行い、④でもそれを追認した結果と推測される。

また、③のみは、曲輪Ⅰの南側の土塁の切れ目を積極的に虎口として捉え、この虎口から南側の帯曲輪へと至る動線の存在を考えている。

このほかにも、④ではⅠ郭の中に、①・②・③では示されていない井戸のような穴が図化されている点などに差異が認められる。

このように、既存の縄張図には若干の差異が認められるものの、城としての構造の捉え方については、ほぼ一致していると思われる。

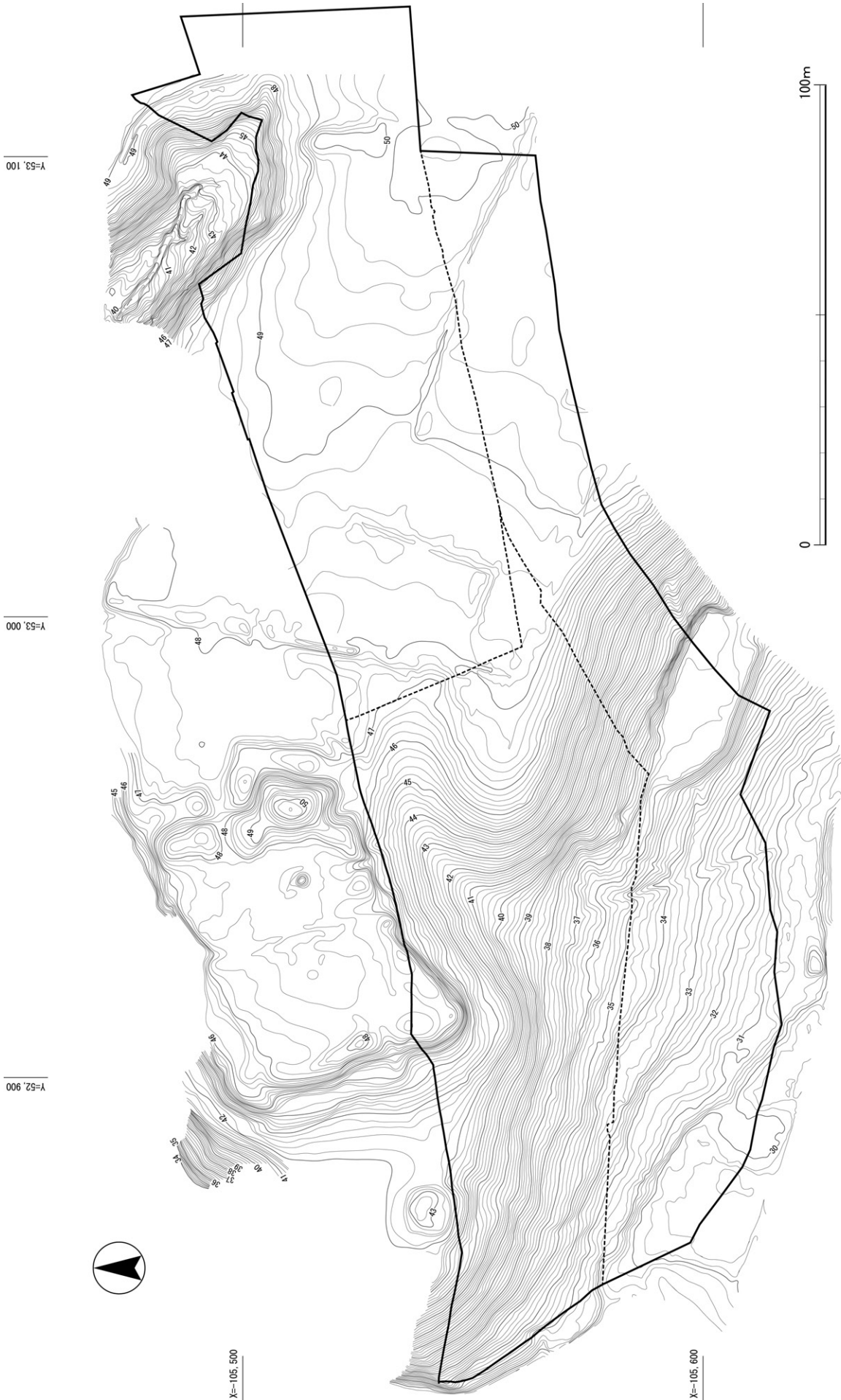
北山城跡の構造 そこで、最も新しく作成され、詳細な縄張図が示されていると思われる④の文献を基に、北山城跡の大枠の構造に関する既存の知見をまとめておく。

主郭であるⅠ郭は方形基調で、中央に南北方向の低い土塁が存在し、それによって東西に区画される。東側の区画には、井戸の可能性も考えられる円形の穴がみられる。

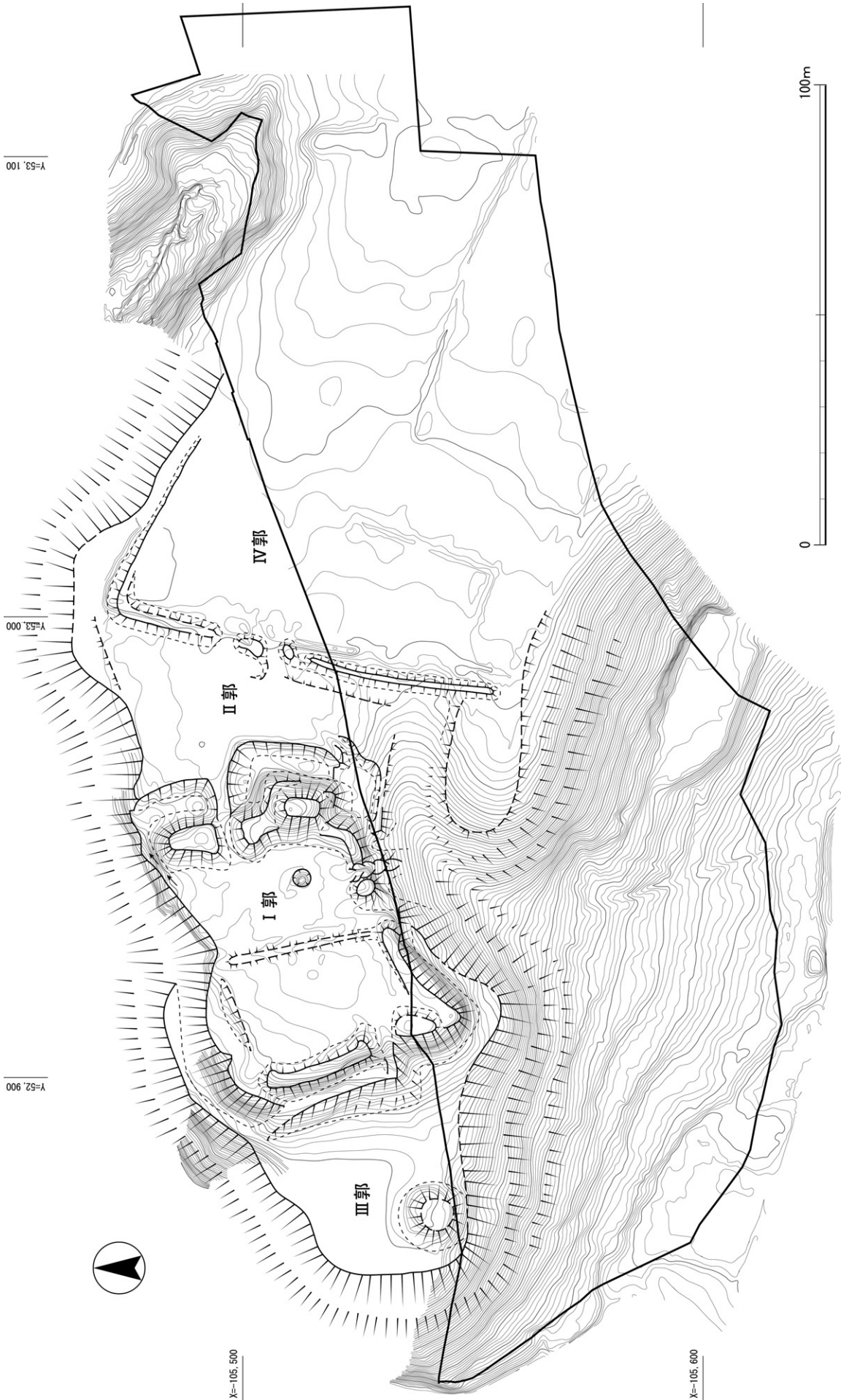
Ⅰ郭の周囲には、北側を除く3方向に土塁が設けられている。Ⅱ郭との間の東側の土塁は、東裾に比較的規模の大きな堀を伴う。この土塁には虎口が1箇所あり、土橋に沿って土塁と堀が屈曲し、土橋に対して横矢がかかる構造となっている。Ⅲ郭との間の西側の土塁にも虎口があり、土塁に沿って北へ降りる坂となり、Ⅲ郭へと至る。堀は認められない。南側の土塁は、2箇所途切れ、東側は堅堀あるいは通路状の施設にも見受けられるが、破壊によるものと考えられている。また、Ⅰ郭西半の裾部では、南北にⅢ郭から続くような帯曲輪が認められる。

Ⅰ郭の東側にはⅡ郭が存在し、その南側は谷によって画されている。そして西側にはⅢ郭が存在する。Ⅲ郭に目立った施設はないが、居林1号墳が存在しており、削平せずに曲輪の施設として取り込んでいる可能性も考えられる。

そして、Ⅰ～Ⅲ郭の東側に広い平坦面となるⅣ郭が存在する。Ⅳ郭の北側には谷が入り込んでおり、それによって尾根の幅が狭くなっている。西側のⅡ



第6図 調査区及び北山城跡地形測量図 (1/1,200)



第7図 北山城跡と調査区の位置関係 (1/1,200)

郭との間には低い土塁が存在し、その北端はIV郭の縁辺部に沿って若干屈曲しているようにも見受けられる。この土塁の西側には堀の痕跡が認められ、土塁・堀ともに中央部付近で2箇所程度途切れている可能性がある。

(2) 詳細地形測量図との対応

今回の調査に際して作成した現況地表面の詳細な地形測量図及び、④の縄張図が地形測量図とどのように対応するかを、第6・7図に示した²⁾。

これを基に判断すれば、土塁の位置や形態など、④の縄張図と地形測量図は、ほぼ問題なく整合すると思われる。

各縄張図の間で差異があった点については、IV郭東側の土塁の遺存と思われるものは、地形測量図ではわずかに痕跡的な高まりが捉えられている。明瞭な土塁として認識できるほどのものではないが、その東側に沿って南北から延びるごく浅い谷状の落ち込みが不自然に認められることから、この付近にIV郭の東を画する土塁や堀等の施設が存在した可能性は認めうるだろう。

II郭の南側の谷については、地形測量図でも確認できる。①・②の縄張図で図示されていないのは、ベースとして利用した地形図に谷が表現されていなかったことと、人為的な堀などとは認識しなかったことが原因とみられる。

I郭西側の土塁の虎口については、地形測量図からは詳細な構造を窺うことはできないが、虎口と考えられる土塁の切れ目から北へ向かって犬走り状の平坦面が延びている様子が確認できる。したがって、I・III郭の間に存在する段というよりは、③・④で示されたような、III郭からI郭へと至る通路状のものと捉えるのが妥当だろう。

また、④で図示された井戸のような穴も、存在が再確認された。ただし、井戸かどうかは判然とせず、

第4節 調査区の地形と基本層序

(1) 調査区の地形

居林遺跡・北山城跡が立地する場所は、第II章でも述べたように、西へ延びる丘陵尾根状の地形を呈

北山城跡に伴う遺構かどうかは明確ではない。

(3) 本報告における取り扱い

曲輪の名称 以上のような点を踏まえて、まず、本報告では、曲輪の名称については④を踏襲し、主郭にあたる曲輪をI郭、その西側の曲輪をIII郭、東側の曲輪をII郭と呼称する。そして、II郭東側の平坦面はIV郭とし、北山城跡を4つの曲輪で構成される城館として捉える。

また、I郭の南北に認められる帯曲輪については、南側帯曲輪と北側帯曲輪と呼称しておきたい。

土塁の名称 今回の調査では、土塁の一部についても発掘調査を行っている。したがって、報告における便宜上、各土塁をどのように呼称するかについても触れておきたい。

まず、主郭たるI郭の3方向に存在する土塁を、I郭西側土塁、I郭南側土塁、I郭東側土塁と呼称する。I郭内部を区画する低い土塁については、I郭中央土塁とする。

そして、II郭とIV郭との間に存在する土塁を、II郭東側土塁と呼称する。また、現状では確認できないものの、①・②において図示された、IV郭の東側を画する土塁の可能性があるものを、IV郭東側土塁としておく。

註

- 1) ①・②を比べると、ベースとなった地形図の等高線に示された標高に違いがある。今回の調査における地形測量図等との対応関係からみると、おそらく①の等高線上に示された標高30mの数値が誤りで、本来は40mの等高線であると考えられる。
- 2) 第7図では、④の縄張図を再トレースした上で地形測量図と重ね合わせている。縄張図の性格上、地形測量図とは土塁等の位置に若干のずれが生じているが、そうしたずれについては、原図を尊重しあえて修正していない。

している。今回調査を行った箇所は、この尾根の上部から南側の斜面にかけての広い範囲に及ぶ。したがって、調査区内における地形の変化は、かなり大きい。

第2・3次調査区は、主に南側斜面が中心となっている。尾根の北側には小規模河川を伴う解析谷が存在し、そのため西側から北側にかけての斜面は急峻であるが、南側は狭い沖積平野に面しており、西側や北側に比べると幾分傾斜が緩やかである。ただし、第3次調査区の東側から第4次調査区の西側にかけて北東方向にごく小規模な谷¹⁾が入り込んでおり、その谷よりも東側では、斜面の傾斜が大きくなっている。

第2次調査区については、西半部は南側斜面の裾部となっているが、この部分ではかなり傾斜が緩くなり、第3次調査区東側の谷の下方に形成された小規模な扇状地状の地形を呈している。

そして、この扇状地状地形の東端部では、急峻な斜面が扇状地状に緩やかな傾斜に変化する傾斜転換点付近に、長さ30～40m、幅20mほどの平坦面が形成されている。斜面から平坦面へと移行する付近では崖のようになっており、人為的な切り土等によって形成された平坦面であることが窺われる。

また、扇状地状地形の南西側にあたる第2次調査区南西端部は平坦な低地となっており、丘陵南側に広がる沖積平野の一部に含まれるものとみられる。

一方、尾根上にあたる部分には、起伏が比較的に少ない平坦面が広がっている。この平坦面は、居林遺跡・北山城跡が存在する尾根を派生させている東側の丘陵上の広い範囲に及んでおり、そこには居林遺跡の東側に位置する中野山遺跡をはじめ多数の遺跡が立地する。

第2次調査区の東側及び第4次調査区は、この丘陵尾根上の平坦面が中心となる。体感的にはかなり平坦ではあるが、東へ向かって緩やかに標高が高くなっており、第4次調査区内では西側と東側との間で2mほどの標高差がある。そのため、1°前後の傾斜がある。

なお、第4次調査区の北東部には、北西方向から小規模ながらもかなり深い谷が丘陵の奥まで入り込んでいる。そして、南側斜面においても、この谷の延長線上に位置する箇所では谷が北へ向かって入り込んでいる。この2つの谷によって、付近では尾根幅が狭くなっており、尾根先端部が画されるような様相を呈している。

(2) 基本層序

上述のように、調査区内の地形は尾根上の平坦面、尾根南側の斜面、尾根南側斜面裾部の扇状地状地形、南西端部の低地、丘陵に入り込む谷というように、場所によって様相がかなり異なる。土層の堆積状況も、そうした地形の違いに応じて異なっているとみられる。

そこで、そうした違いを反映すると思われる、調査区内のいくつかの地点における土層の堆積状況についてみておきたい。

尾根上平坦面 尾根上の平坦面については、他所から土砂が流入するような環境にはなく、遺構の形成後に堆積した土砂の量は少ない(第8図①・②・④・⑤)。現地表面から地山となる段丘堆積物の土層までは、20～30cmほどで、遺構はほぼ地山上面で検出されている。

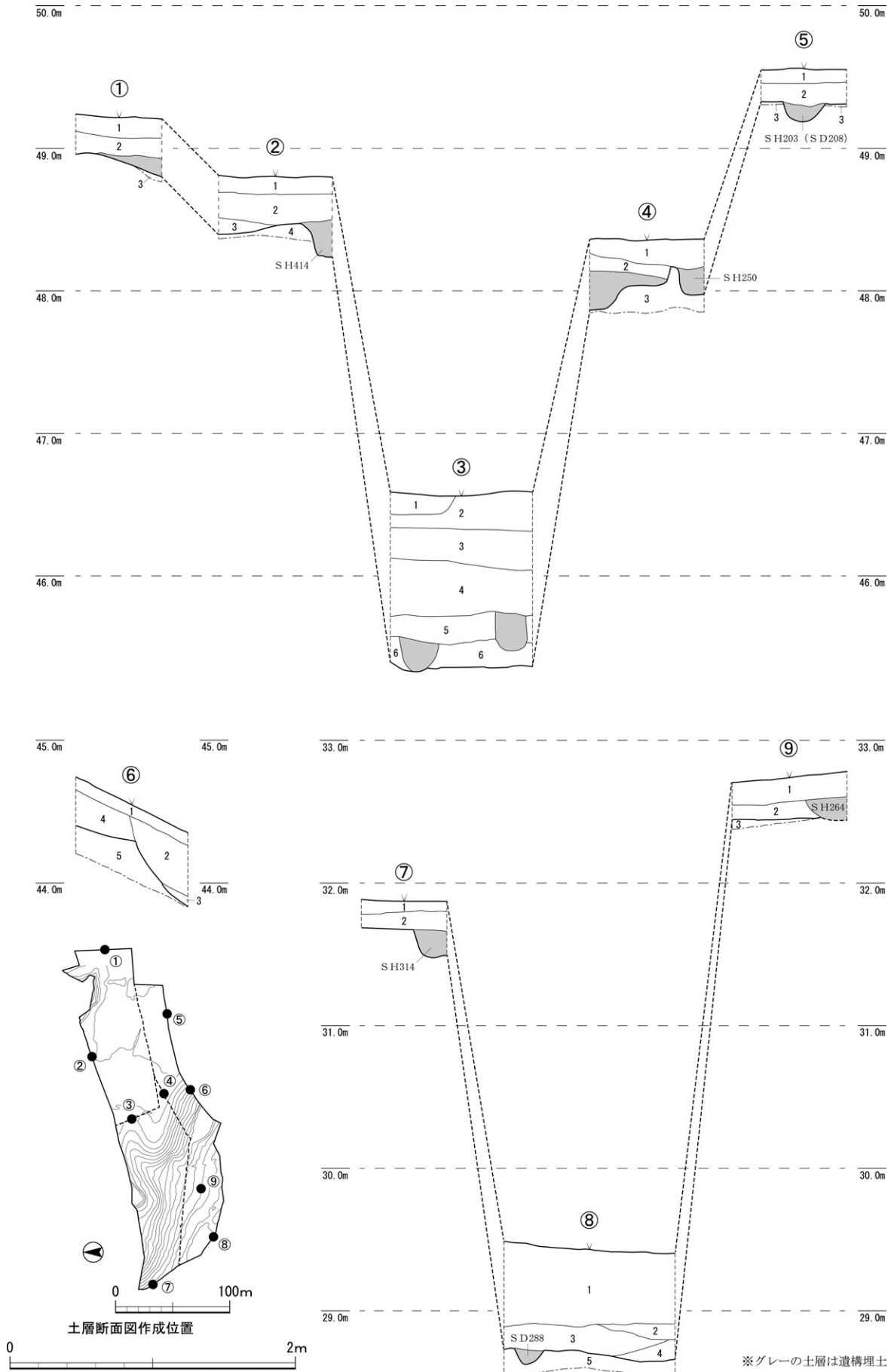
大部分が耕作地として利用されていたため、表土は耕作土となっている箇所が多い。地山と耕作土との間に堆積し、調査時に包含層とされた土層も、耕作による攪乱を被っている可能性が高い。

尾根上平坦面に限らず、今回の調査ではほとんどの遺構が地山上面で検出されており、広い範囲で後世の耕作等によって地山まで攪乱を被っているものと考えられる。

遺構検出面となっている地山については、褐色ないし黄褐色を呈し、シルト質で小礫や粗い砂粒を顕著に含むような土層が主体である。

尾根南側斜面 尾根南側斜面では、表土の厚さが薄いことなどからみて、土砂の流出が一定程度あったことが推定される(第8図⑥)。また、一部には斜面の小規模な崩落に伴うものと思われる土層の堆積状況の乱れが認められる(第8図⑥第2・3層)。こうした崩落については、崩落土中に土器が含まれる点を鑑みると、弥生・古墳時代以降にも発生していたことが窺われる。

斜面裾部の扇状地状の箇所においても、地山といえるような安定した土層の上に堆積した、包含層ともみえる土層上面から、遺構が掘りこまれている様子が確認できる(第8図⑨第2層)。遺構の形成に近い時期に、斜面上方からの土砂の流入と堆積があっ



第8図 基本層序模式図① (1/40)

【①】

1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト（耕作土）
2. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（包含層？）
3. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、～3mmの礫を多く含む（地山）

【②】

1. 表土
2. 10YR4/4褐色細粒砂～極細粒砂、しまりやや強、粘性弱
3. 10YR4/4～4/6褐色細粒砂～極細粒砂、しまりやや強、粘性弱
4. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強（地山）

【③】

1. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト（表土）
2. 2.5Y5/3黄褐色極細粒砂～シルト
3. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、土器を含む
4. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粗粒砂・～10cmの礫を含む
5. 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト
6. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、粗粒砂を含む

【④】

1. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、粘性弱
2. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粘性弱
3. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、粘性極弱、粗粒砂を非常に多く含む（地山）

【⑤】

1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、粘性やや弱（耕作土？）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粘性やや弱
3. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、粘性強（地山）

【⑥】

1. 表土
2. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト（崩落土）
3. 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト、土器を含む（包含層？）
4. 7.5YR4/3褐色極細粒砂～シルト
5. 5YR4/4にぶい赤褐色極細粒砂～シルト（地山）

【⑦】

1. 表土
2. 10YR3/2黒褐色細粒砂～シルト

【⑧】

1. 盛土
2. 10YR3/1黒褐色細粒砂～シルト
3. 10YR3/1黒褐色中粒砂～シルト
4. 10YR1.7/1黒色シルト、細粒砂を含む
5. 7.5GY5/1～6/1緑灰色細粒砂～シルト

【⑨】

1. 表土
2. 10YR3/1黒褐色粗粒砂～シルト、しまり弱（包含層？）
3. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト（地山）

第9図 基本層序模式図②

たことを示しているだろう。

ただし、斜面部に形成された遺構が遺存している点や、堆積土中に段丘堆積物に由来するような礫がそれほど多く含有されていない点などからみると、大規模な斜面の崩落が頻発していたような様子は認めがたい。

西側斜面の裾部に近い地点においても、土砂の大規模な流出は明瞭には確認できない（第8図⑦）。遺構は比較的良好に遺存しており、表土の堆積は薄いものの、遺構上面には包含層にあたるような黒褐色土層が10～15cm程度の厚さで形成されている（第8図⑦第2層）。

低地部 第2次調査区南西端部に存在する低地部は、調査区内で最も標高が低い箇所である。第2次調査区南壁付近では、上部に50cmほどの厚さの近・現代の盛土が施されていた（第8図⑧第1層）。

盛土の下には、やや粒子の大きな砂粒を含むシルト質の土層や（第8図⑧第2・3層）、シルトを主体としラミナ状に細粒砂が挟在する土層などがみられ（第8図⑧第4層）、沖積地といえるような低湿な堆積環境であったと推定される。

鎌倉時代のもと考えられる遺構が掘りこまれている基盤層も、段丘堆積物で構成される地山ではなく、グライ化したシルト質の土層で（第8図⑧第5

層）、層の厚さも30cm以上あることが確認されており、古くから沖積層の形成が進んできた様相を示している。

南側斜面谷部 南側斜面において北東方向へ入り込む谷は、小規模ではあるが、堅穴建物が形成されている肩部と谷底との比高差は1～2mほどある。そのため、土砂の流入もかなり激しい。地表面から遺構検出面までの深さは1m弱もある（第8図③）。特に遺構検出面直上に厚く堆積した土層には径10cm程度の段丘礫がかなり含まれており（第8図③第4層）、段丘礫を含む土層が露出している側面の崩落等によって流れ込んだ土砂とみられる。

谷の内部にも少数ながらピット状の遺構が確認されているが、それらの遺構については、異なる土層の上面から掘りこまれているものが確認できる（第8図③第5・6層）。ただし、出土遺物がないため、それぞれの遺構が形成された時期などは不明である。また、こうした遺構が遺存することからは、弥生時代以降には谷を発達させるような浸食よりも、谷を埋積するような土砂の流入の方が顕著であったと考えられるかもしれない。

註

- 1) 前節における北山城跡Ⅱ郭南側の谷にあたるもの。



X:-105,540

X:-105,560

X:-105,580

X:-105,600

X:-105,620

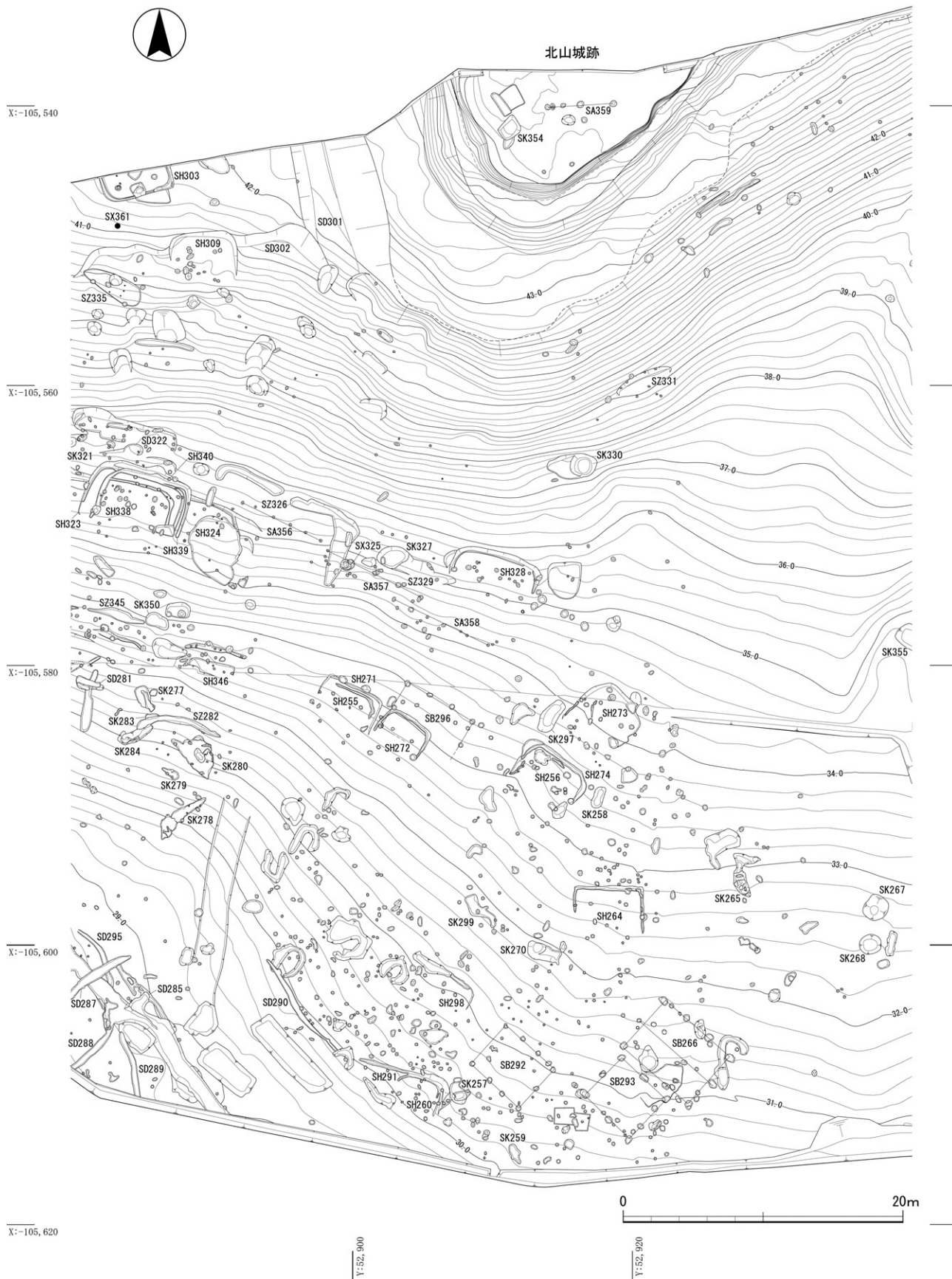


Y:52,840

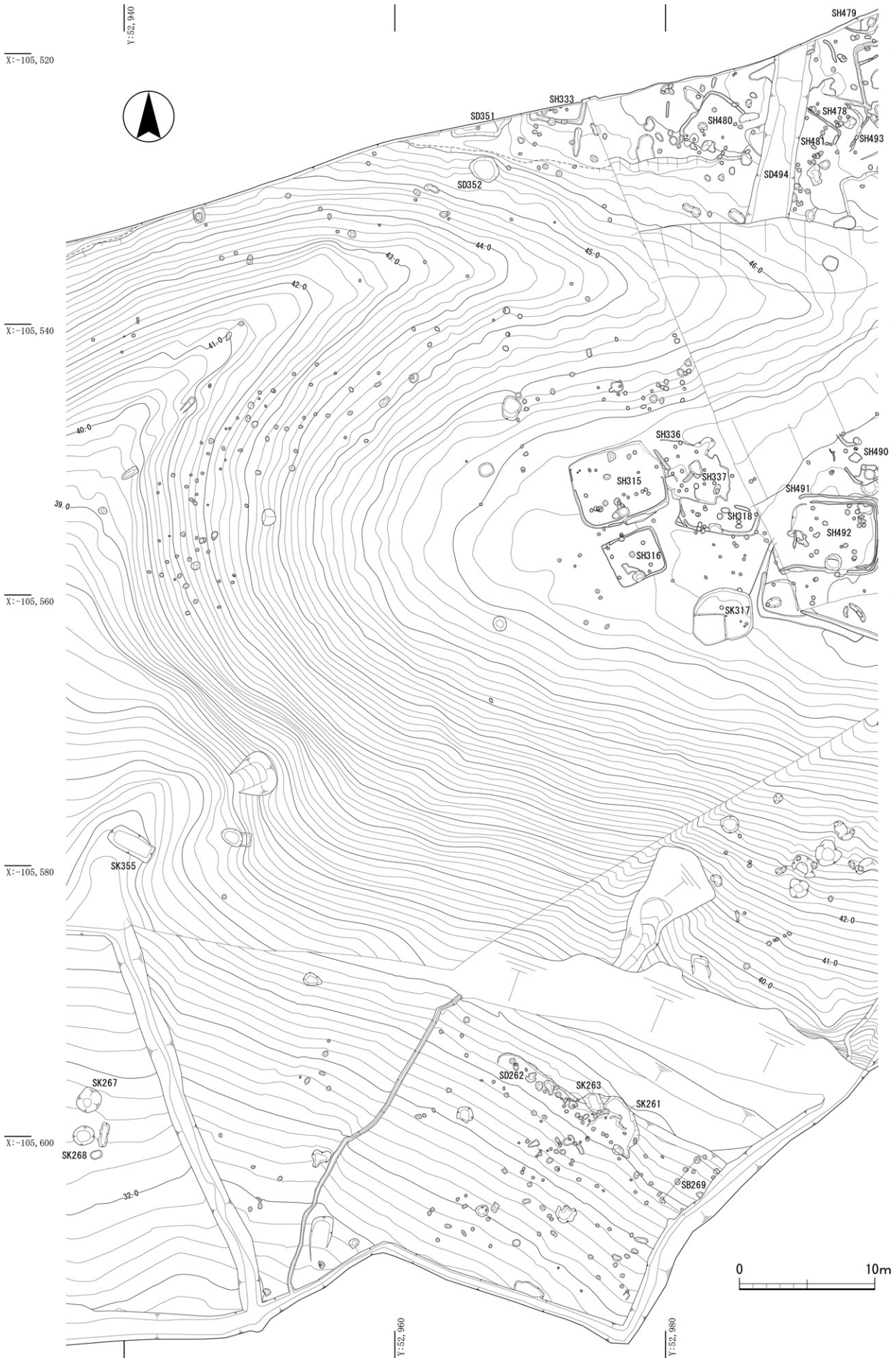
Y:52,860

Y:52,880

第10図 調査区部分図① (1/400)



第11図 調査区部分図② (1/400)



第12図 調査区部分図③ (1/400)

X:-105, 500



X:-105, 520

X:-105, 540

X:-105, 560

X:-105, 580



第13図 調査区部分図④ (1/400)



第14図 調査区部分図⑤ (1/400)

X:-105,480

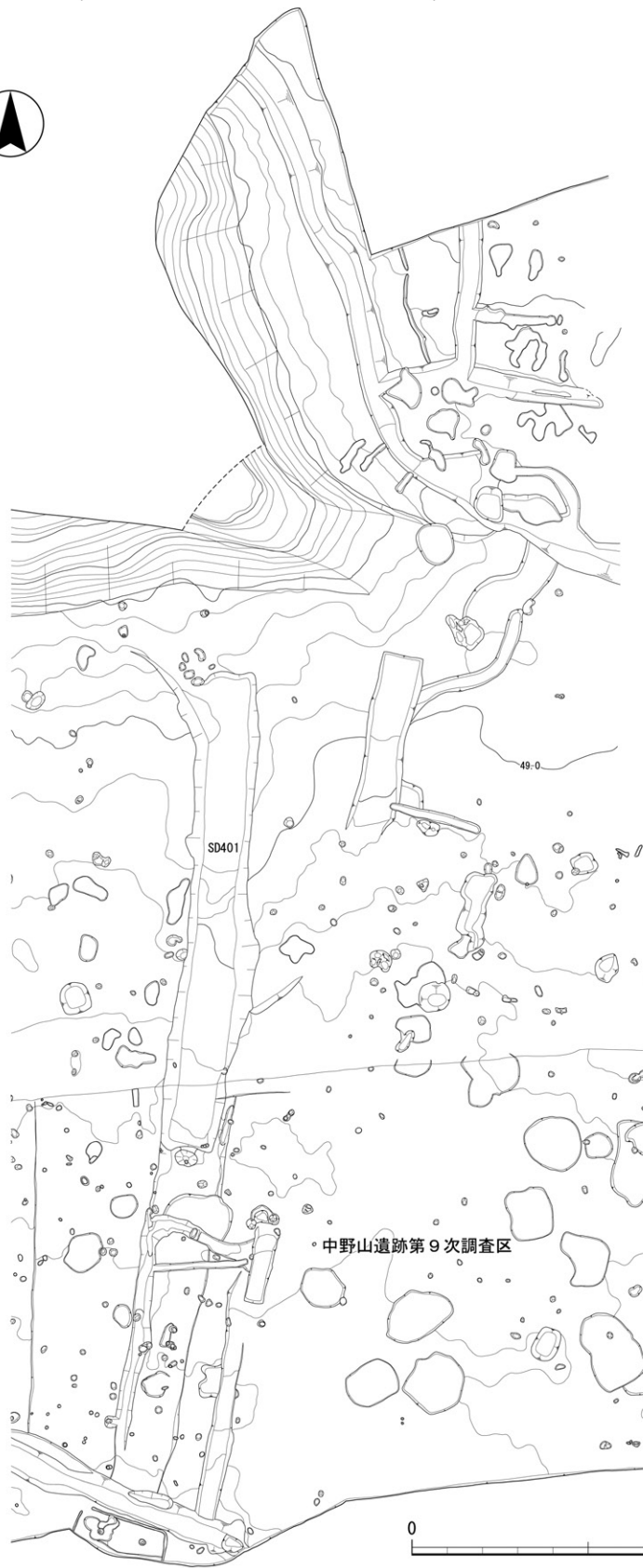


X:-105,500

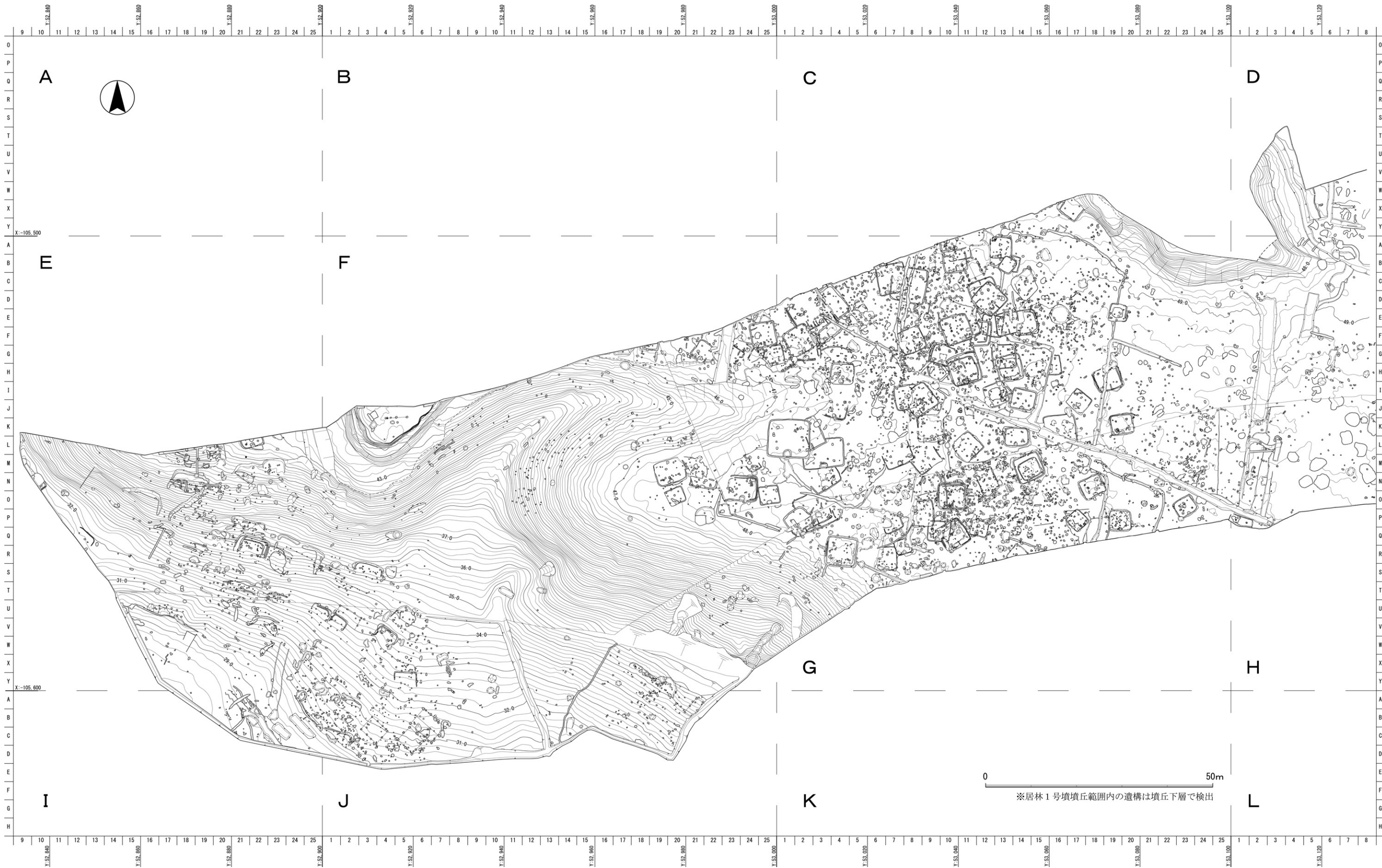
X:-105,520

X:-105,540

X:-105,560



第15図 調査区部分図⑥ (1/400)



第16図 調査区全体図 (1/800)

第IV章 弥生・古墳時代の遺構・遺物

第1節 遺構

(1) 竪穴建物

SH201 (第17・18図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。今回の調査で検出された竪穴建物の中で最も東側に位置しており、集落の東限に近いものと思われる。平面形は長軸4.8m、短軸4.3mのやや長方形を呈するが、南東壁は直線的ではなく、若干弧を描いている。南隅が攪乱によって削平を被っているほかは比較的遺存状況がよく、深さは0.3mほどある。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されている。柱穴の土層断面では柱痕などは確認できないが、P2では柱穴底面に接して弥生土器壺の体部が原形を保ったまま検出されており、柱を抜き取った後に意図的に入れられたものと考えられる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明であるが、建物中央付近や、支柱穴P5とP3を結ぶラインからやや西側の床面で浅い土坑が検出されており、いずれかが炉であると考えられる。なお、南西壁付近では大型の長細い円礫(50)が検出されている。摩滅が認められることから台石としても使用されていたと思われるが、側面に被熱が認められ、本来は炉に伴っていた可能性もある。その場合、炉の形態は添石炉¹⁾となろう。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿い中央付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.6mほどある。北西側は段状に浅くなる²⁾。壁際溝に接するように掘り込まれている。

壁際溝は、全周すると思われる。ただし、北隅では若干途切れる可能性がある。また、西隅や北隅付近では、建物掘形よりもやや内側に掘り込まれている。

貼床や周溝状掘形³⁾は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P2及び貯蔵穴から、弥生土器壺の体部が出土している。南隅付近では、多量の弥生

土器・土師器が集中して出土した。小片が多く、完形近くまで復元できたものはほとんどないが、壺や甕、高坏、器台などが含まれていた。出土層位は明確ではないが、床面に近い位置から出土している。弥生土器・土師器はほかにも建物内から多数出土しており、西隅や東隅付近では器台の脚部の大きな破片が出土している。床面直上に堆積した第4層には、多数の弥生土器・土師器片が含まれていた。

このほかに注目されるものとして、北西壁沿いの壁際溝内で検出された小型のピットから、ガラス小玉が1点(52)出土している。

埋土から出土した遺物には弥生時代終末期のものも少量含まれているが、支柱穴や貯蔵穴の出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH202 (第19・20図) 第2次調査区東部の第4次調査区との境で検出した建物である。大部分は第4次調査の際に調査されている。平面形は長軸5.1m、短軸4.6mのやや長方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されている。柱穴はいずれも深さ0.5mほどあり、比較的深い。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P3ではその上面に別の土層が堆積しており(D-D'断面P3第1層)、建物の廃絶に際して柱は抜き取られたか根元から切断された可能性がある。

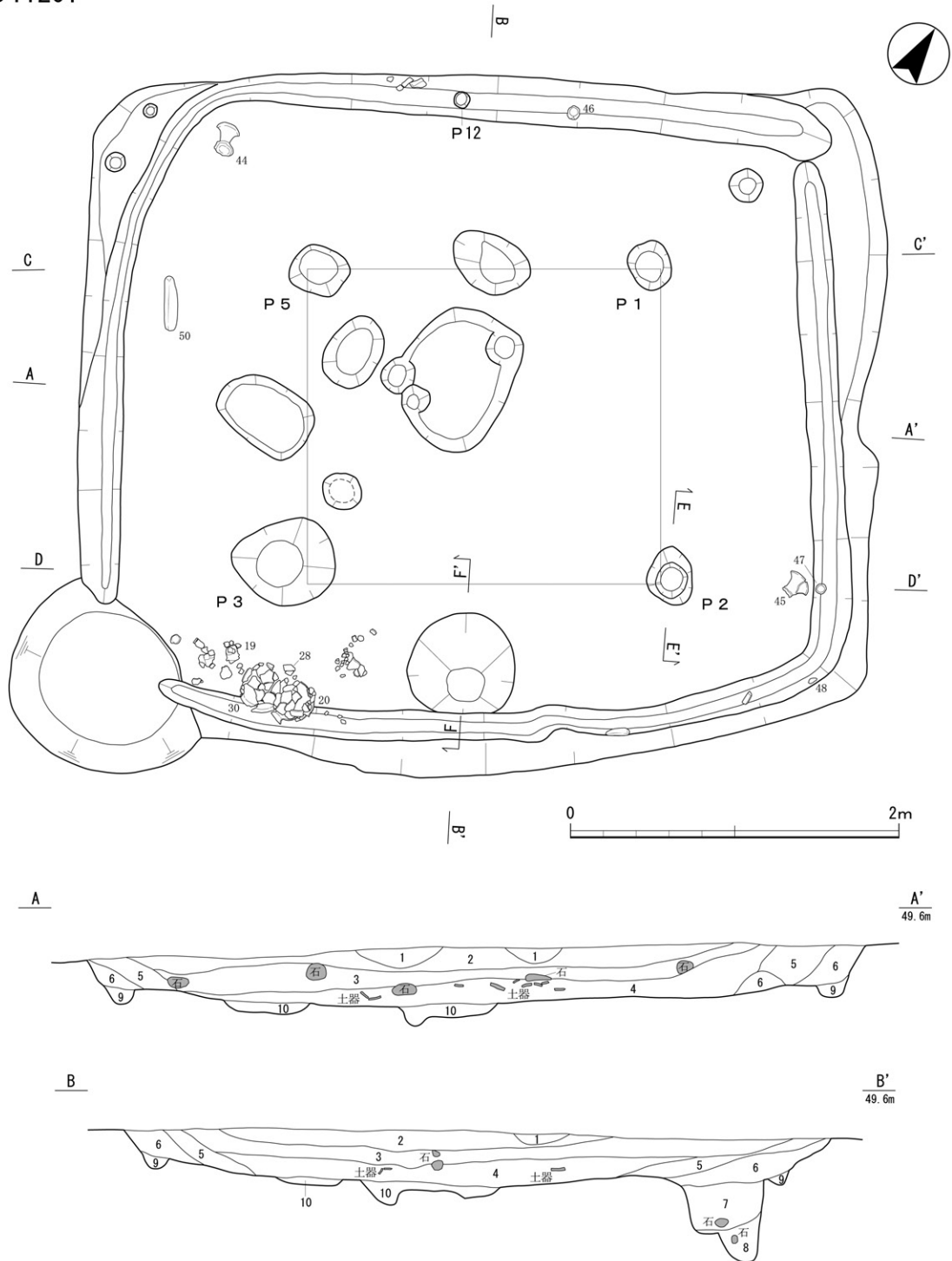
焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径0.6mほどある。深さは0.2mほどと浅く、壁際溝からはやや離れている。

壁際溝は、東壁沿い南半を除いて全周する。南西隅でもやや不明瞭となっている。

貼床は第4次調査において調査された範囲ではほぼ全面にわたって施されているとみられるが(A-A'・B-B'断面第16層)、第2次調査で調査された範囲で

S H201

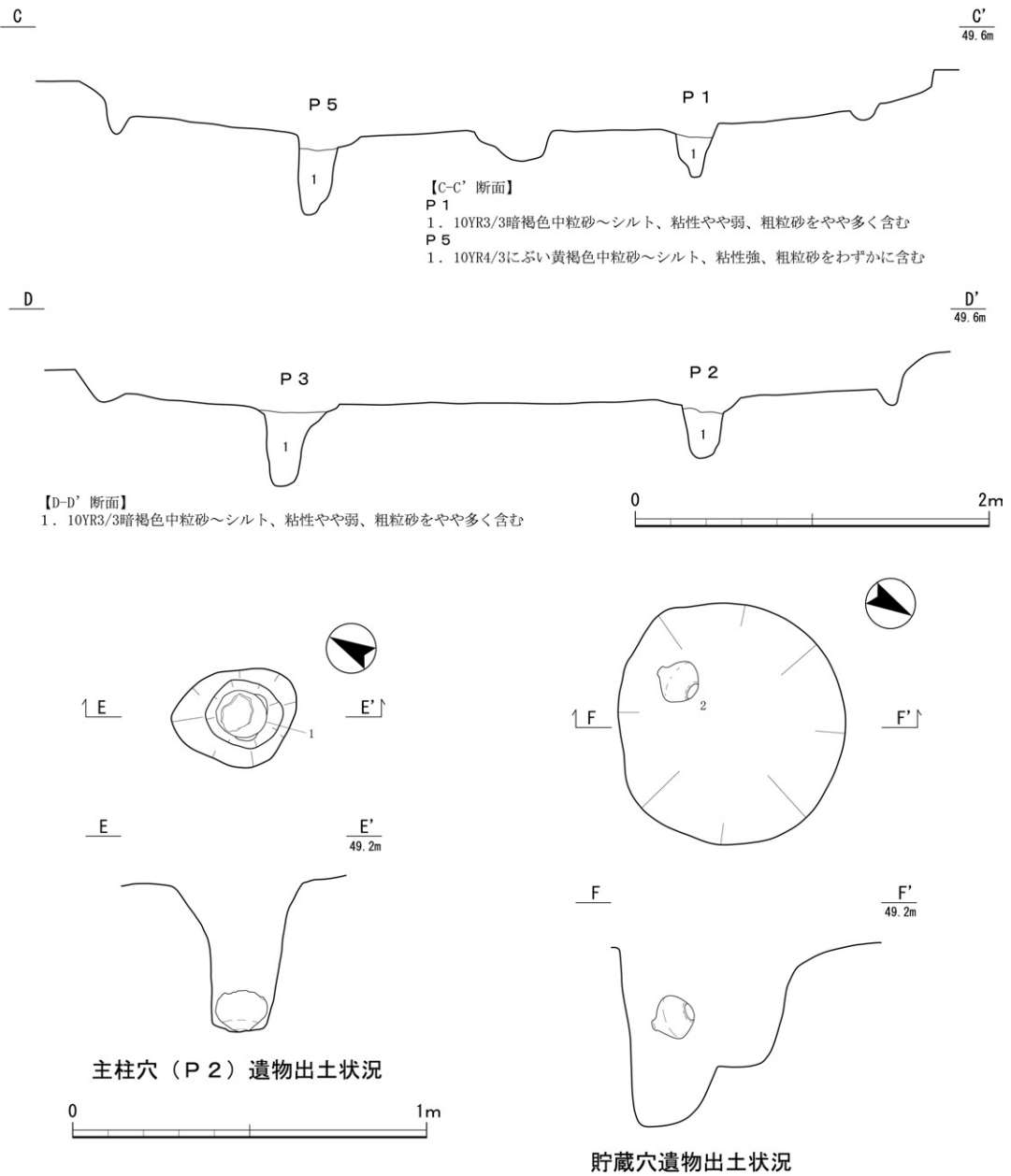


【A-A'・B-B'断面】

1. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト、粘性弱、～3mmの礫を含む（攪乱）
2. 10YR3/2黒褐色中粒砂～シルト、7.5YR5/8明褐色中粒砂～シルトを10%含む、粘性やや弱、～5cmの礫・土器を含む
3. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～3cmの礫を少量含む、土器を含む
4. 10YR3/1黒褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、～3cmの礫をごく少量含む、土器を多量に含む
5. 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～1cmの礫・土器をわずかに含む
6. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～1cmの礫・土器をわずかに含む
7. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～5cmの礫・土器をわずかに含む（貯蔵穴埋土）
8. 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～5cmの礫・土器をわずかに含む（貯蔵穴埋土）
9. 10YR4/6褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、～2mmの礫を含む（壁際溝埋土）
10. 10YR4/4褐色極粗粒砂～シルト、粘性弱、土器をわずかに含む

第17図 SH201① (1/40)

S H201



第18図 S H201② (1/40、1/20)

は確認されていない。周溝状掘形は認められなかった。

北側から西側北半にかけて、浅い落ち込みが建物掘形に沿って外側に広がっている。当該建物との関係があるものかは不明であるが、土層断面からみるとS H202に先行する落ち込みと思われる。

遺物は、建物中央付近の床面直上で多数の弥生土器・土師器が出土した。高坏の大きな破片なども認められる。このほか、埋土からも多数の弥生土器・

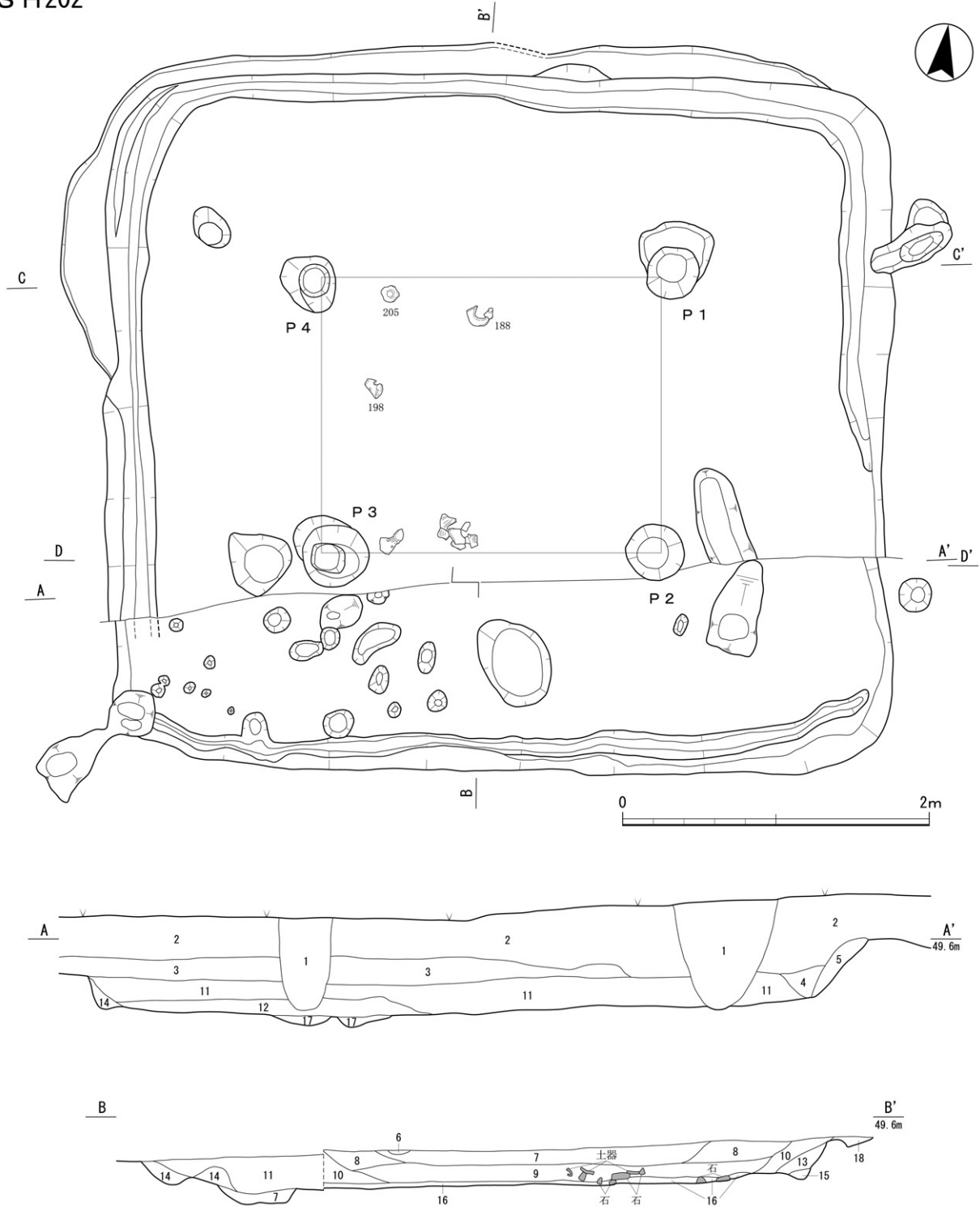
土師器や台石などが出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S H203（第21・22図） 第2次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸5.0m、短軸4.8mの正方形に近い方形を呈する。比較的遺存状況がよく、深さは0.3mほどある。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。調査時には建物床面

S H202



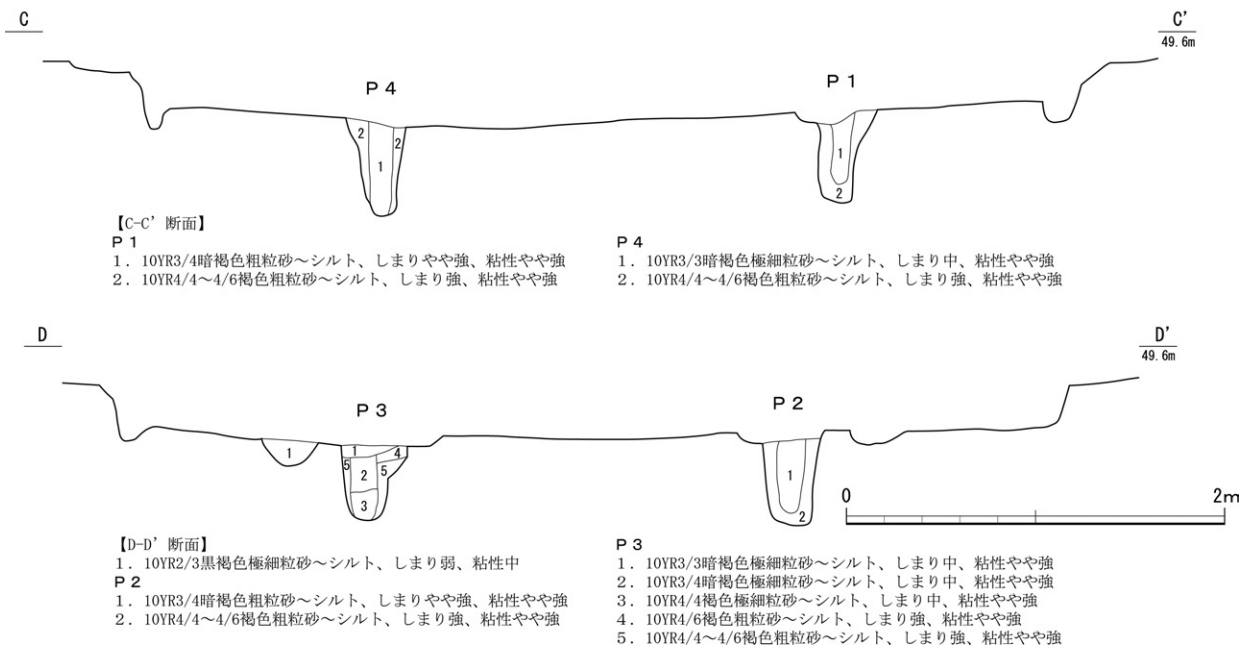
【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂～シルト、10YR4/4褐色中粒砂～シルトをブロック状に多く含む、粘性弱、～1cmの礫をわずかに含む、現代のゴミを含む（攪乱）
2. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～5cmの礫をわずかに含む、近代以降のゴミを含む（耕作土？）
3. 10YR2/3黒褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～3cmの礫をわずかに含む、土器を含む
4. 7.5YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱
5. 10YR3/4にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性強、～5mmの礫をわずかに含む（攪乱？）
6. 10YR4/6褐色極細粒砂、しまり中、粘性中
7. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物・土器を含む

8. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
9. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/4褐色極細粒砂～シルトを含む、しまりやや強、粘性やや強
10. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
11. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～2cmの礫・土器をわずかに含む
12. 10YR2/3黒褐色粗粒砂～シルト、粘性強、～5cmの礫・土器をわずかに含む
13. 10YR4/4～4/6褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
14. 7.5YR4/4褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱
15. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
16. 10YR4/4～4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中
17. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱（ビット埋土？）
18. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

第19図 SH202① (1/40)

S H202



第20図 S H202② (1/40)

で径0.3～0.4mほどのピットを支柱穴として平面的に検出したが、埋土が地山とかなり類似しており掘形が明確ではなかったために、その中央で検出された径0.15mほどの明らかなピットを柱穴と認識して掘削を行った。ただし、規模や埋土の様相からみると掘削したピットは柱痕ないし柱の抜き取り痕の可能性が高く、平面で検出した一回り大きなピットが柱穴の掘形であったものと考えられる。なお、P 5の底面付近からは弥生土器高坏の脚部の大きな破片が出土しており、柱は抜き取られたものと思われる。

建物中央から浅いピットが検出されており、これが炉と考えられる。埋土には焼土塊や炭化物が含まれている。また、細長い礫が伴っており、添石炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径0.8mほどある。壁面は段状になっている。

壁際溝は、南西隅を除いて全周すると思われる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南西隅の壁際溝が途切れている部分から南西方向へ向かって、排水溝とみられる幅0.3m、深さ0.1mほどの細い溝（S D208）が延びている。排

水溝の南端は調査区外へ出ており、長さは不明である。

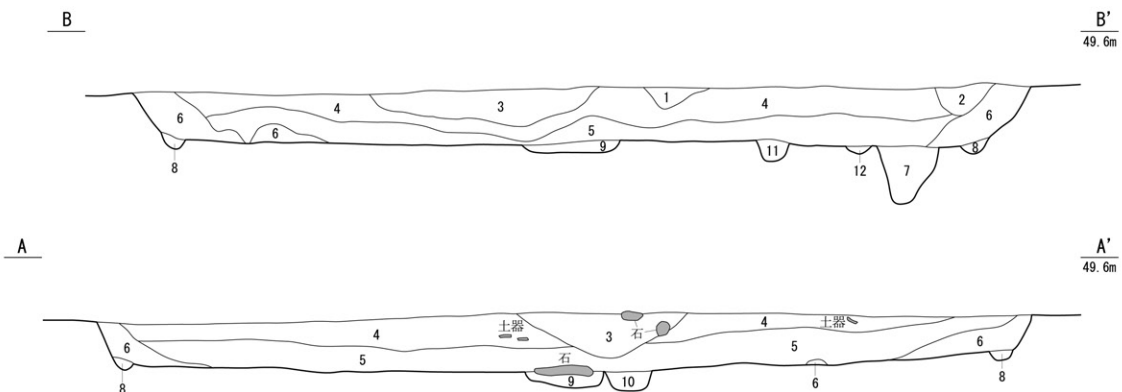
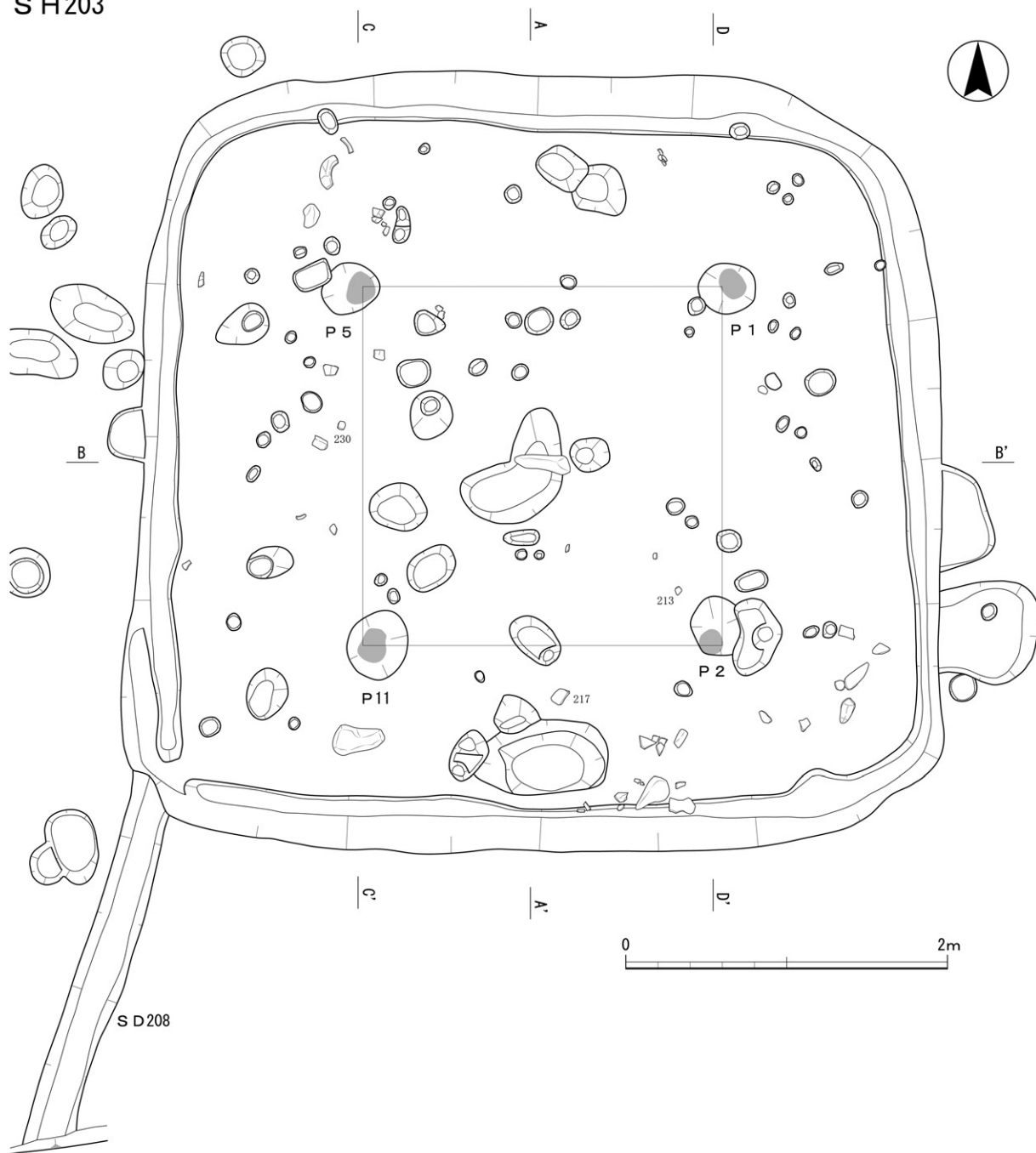
遺物は、埋土から弥生土器・土師器や砥石、台石が出土している。建物内部の広い範囲に散在しており、完形に近いものはほとんどない。埋土上層（A-A'・B-B'断面第4層）に含まれているものが多いと思われる。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H204（第23・24図） 第2次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸5.4m、短軸4.5mの長方形を呈する。

支柱穴は3基検出された。北東隅の支柱穴のみ攪乱によって検出できなかったが、建物の平面形に沿って長方形に配置されているものと思われる。P 6については、調査時には建物床面で径0.3～0.4mほどのピットを支柱穴として平面的に検出したが、埋土が地山とかなり類似しており掘形が明確ではなかったために、その中央で検出された径0.15mほどの明らかなピットを柱穴と認識して掘削を行った。ただし、規模や埋土の様相からみると掘削したピットは柱痕ないし柱の抜き取り痕の可能性が高く、平面で

S H203



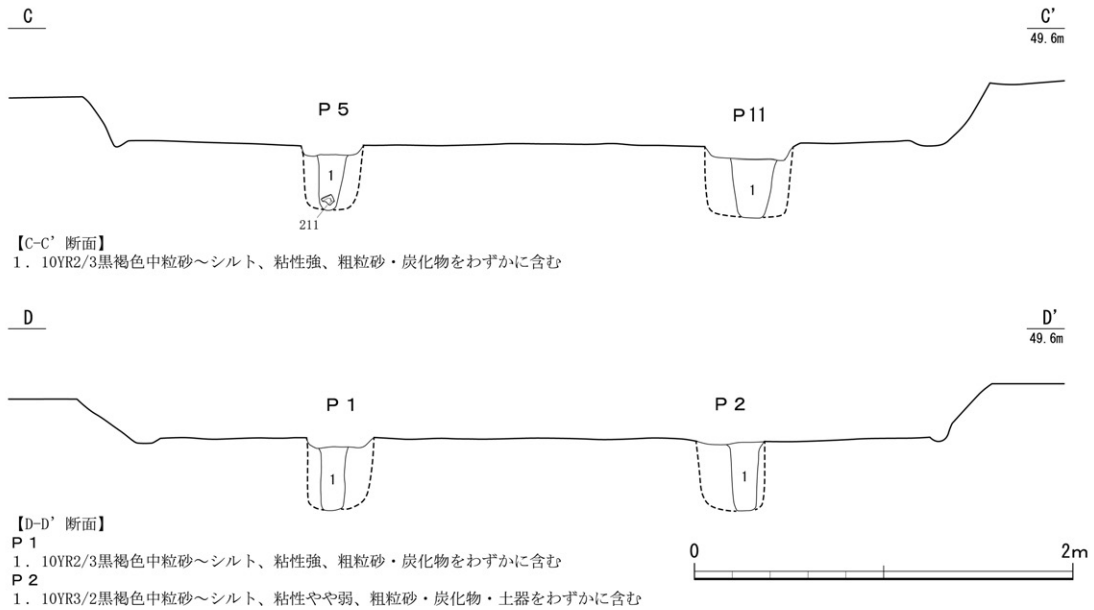
第21図 SH203① (1/40)

S H203

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～2cmの礫をわずかに含む〈攪乱〉
2. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性弱、～2cmの礫をわずかに含む〈攪乱〉
3. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～8cmの礫・土器を含む〈攪乱?〉
4. 10YR2/3黒褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～3cmの礫・土器をわずかに含む、褐色粒を3%含む
5. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、～2cmの礫・土器を多く含む、褐色粒を10%含む
6. 10YR暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、粗粒砂をわずかに含む、褐色粒を15%含む

7. 10YR2/3黒褐色粗粒砂～シルト、粘性強、土器を含む
8. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、7.5YR4/6褐色中粒砂～シルトをブロック状に30%含む、粘性やや強〈壁際溝埋土〉
9. 10YR2/3黒褐色粗粒砂～シルト、粘性やや強、焼土塊を多く含む、炭化物を含む〈炉埋土〉
10. 10YR2/3黒褐色中粒砂～シルト、粘性強、粗粒砂・炭化物を含む〈ピット埋土〉
11. 10YR暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、粗粒砂をわずかに含む〈ピット埋土〉
12. 土層注記記録なし



第22図 S H203② (1/40)

検出した一回り大きなピットが柱穴の掘形であったものと考えられる。P 7についても、径0.2mと小型の柱穴にも関わらずかなりの深さがあり、これが柱痕ないし柱の抜き取り痕で、その外側に実際の柱穴の掘形が存在したものと推測される。

建物中央よりやや西側で浅いピットが検出されており、埋土に炭化物が含まれていることから、これが炉であったと考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が楕円形の土坑で、長径1.0mほどある。壁際溝に接するように掘り込まれている。埋土には炭化物が多く含まれていた。

壁際溝は、南西隅付近を除いてほぼ全周すると思われる。ただし、南東隅付近でもやや断続的になっている。

貼床は部分的に施されているものと思われる (A-A'・B-B' 断面第11層)。周溝状掘形は認められなかつ

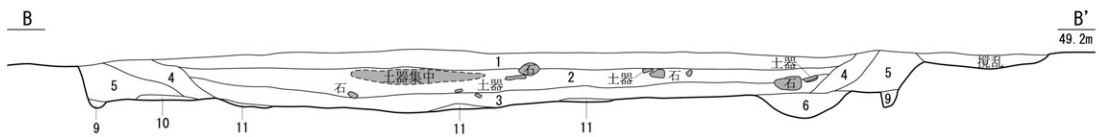
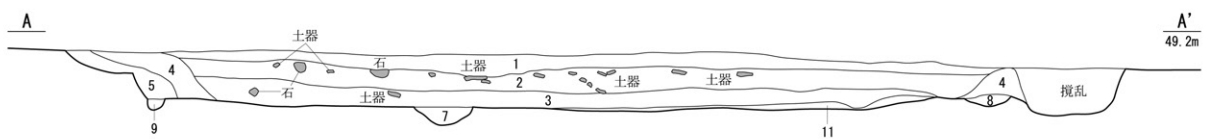
た。

遺物は、建物中央付近で多数の弥生土器・土師器が出土した。壺や甕、高坏の大きな破片も認められる。出土層位からみると、床面よりも若干上に堆積した土層中に含まれているものと思われ (A-A'・B-B' 断面第2層)、建物廃絶と土器の廃棄にはやや時間差があったと考えられる。また、東壁沿い中央付近に浅いピットが存在し、その中から粘土塊が検出された。良質の粘土で、土器の製作等に用いるため貯蔵されていた可能性が高い。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S H205 (第25図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸4.0m、短軸3.9mの正方形に近い方形を呈するが、若干歪みがある。やや小型の建物である。かなり遺存状況がよく、深さは0.4mほどある。

S H204



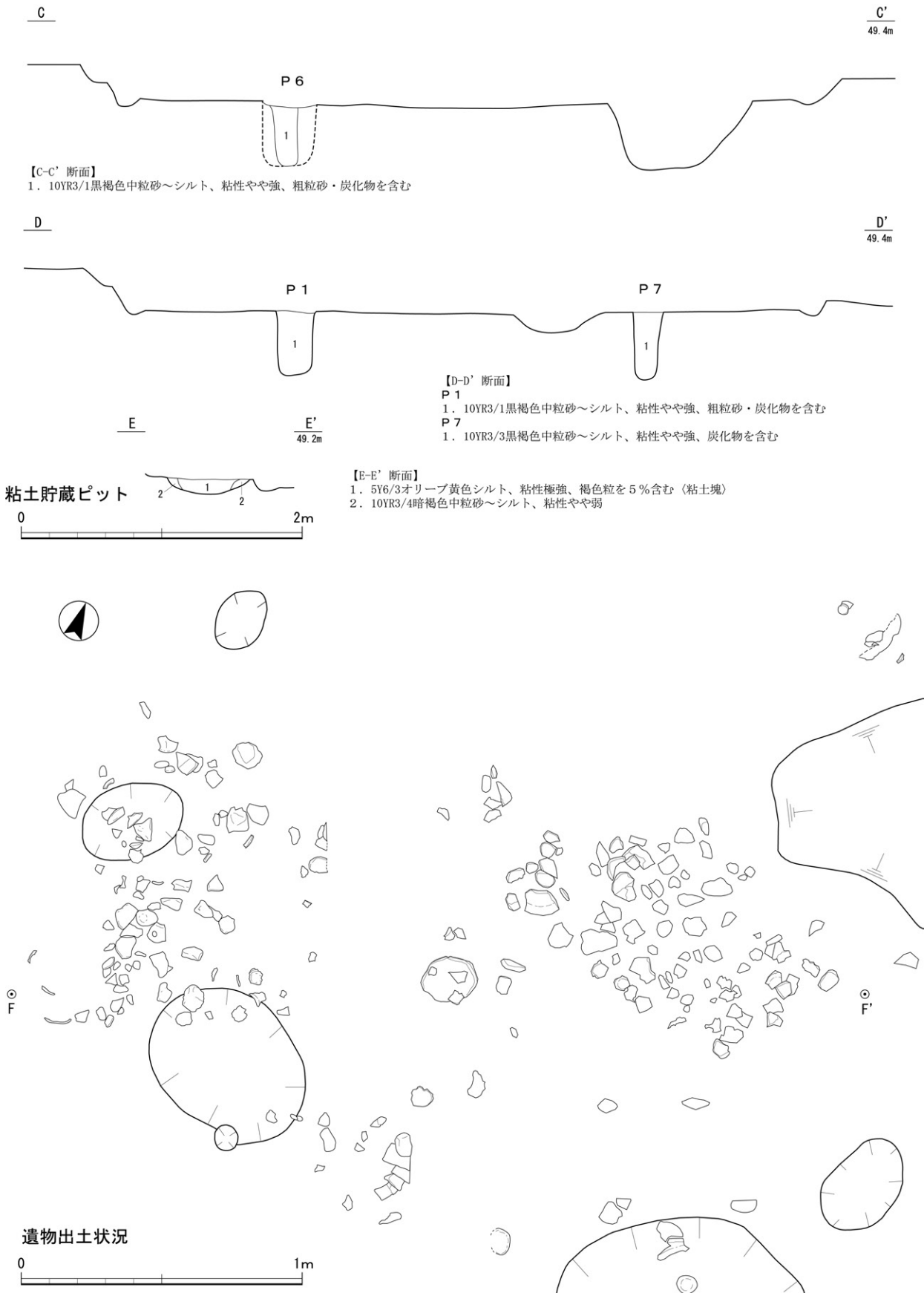
【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性弱、～10cmの礫・土器を含む
2. 10YR2/3黒褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～10cmの礫を多く含む、土器を非常に多く含む
3. 10YR3/3黒褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～10cmの礫・土器をわずかに含む
4. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、粘性弱
5. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、粘性弱
6. 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、炭化物を多く含む（貯蔵穴埋土）
7. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト、粘性やや強、炭化物を含む（炉埋土？）
8. 5Y6/3オリブ黄色シルト、粘性極強、褐色粒を5%含む
9. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱、炭化物を多く含む（壁際溝埋土）
10. 土層注記記録なし
11. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱（貼土）



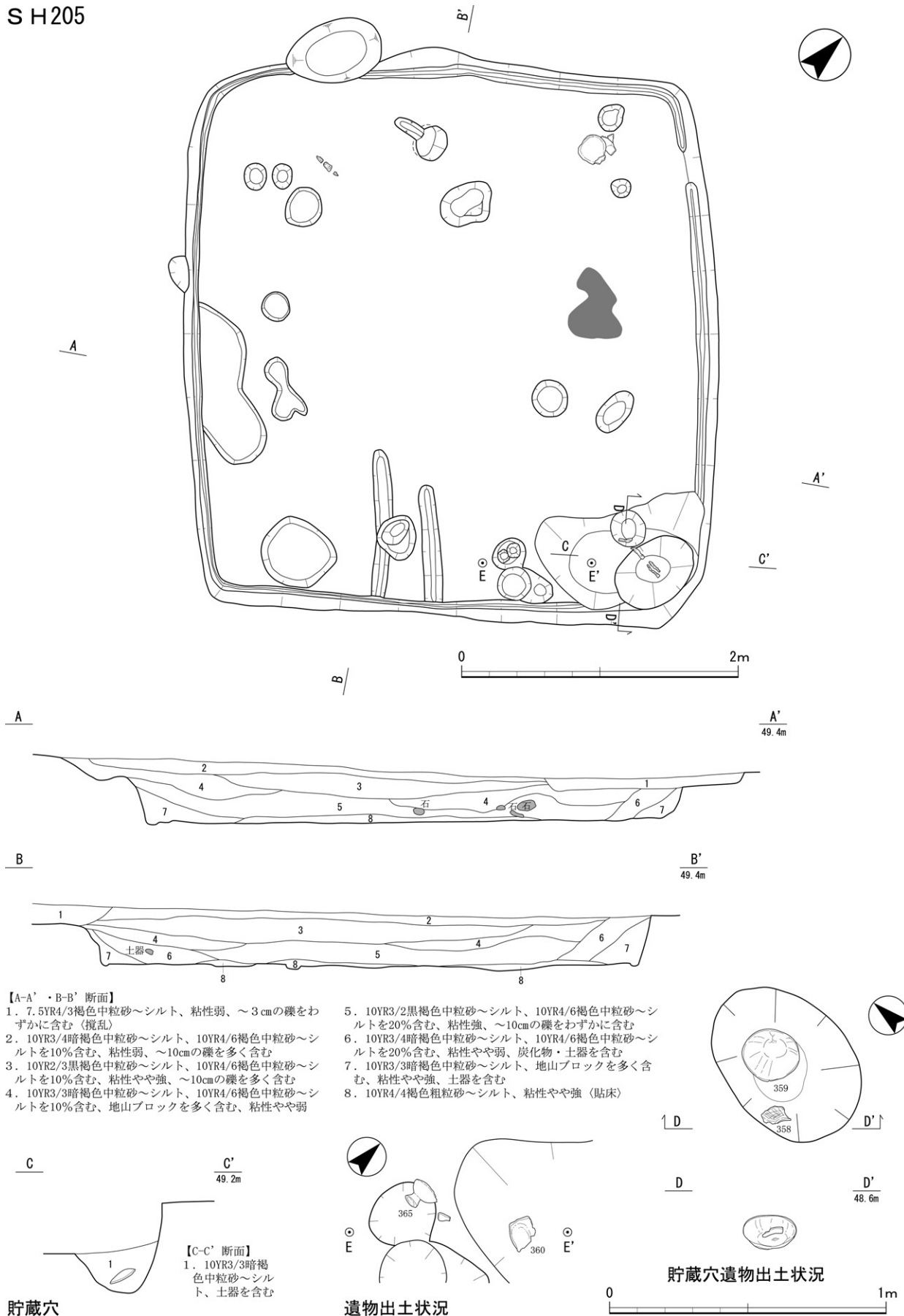
第23図 SH204① (1/40)

S H204



第24図 S H204② (1/40、1/20)

S H205



第25図 S H205 (1/40、1/20)

明確な支柱穴は検出されなかった。

建物中央よりやや北東側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、東隅で検出された。平面形が楕円形の土坑で、長径0.6mほどある。周囲は浅い土坑状に掘り込まれているが、貯蔵穴と関係するものか不明である。埋土中から、土師器高坏の坏部と甕が出土した。

壁際溝は、貯蔵穴の存在する東隅付近を除いて全周すると思われる。ただし、北隅付近でも若干途切れる可能性がある。

貼床は、建物中央付近を中心に施されている。周溝状掘形は確認できなかった。

また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。そして、この溝から0.4mほど南側にも、平行するようにもう一本の溝が認められる。この溝は、中央付近のものよりやや長い。これらは間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、貯蔵穴から土師器高坏・甕が出土したほか、貯蔵穴付近で土師器の小型丸底壺と高坏が出土している。

なお、貯蔵穴上面や西隅付近では炭化材が検出されている。建物中央に向かって並ぶようにも見受けられるが、貯蔵穴の埋没より後のものといった点を考慮すると、焼失住居とは考えにくい。ただし、建物の埋没初期段階に流入した土層（A-A'・B-B'断面第6層）中に含まれていた可能性があり、当該建物と全く無関係のものともいい切れない。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期前葉～中葉と考えられる。

S H209（第26・27図） 第2次調査区の東部で検出した建物である。一回り小型の竪穴建物であるS H236と完全に重複しており、この建物より後とする。平面形は長軸6.1m、短軸5.8mの正方形に近い方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれもS H236の床面で検出されたが、本来はS H236の埋土上面から掘り込まれているため、検出時の深さはかなり浅い。

焼土は床面の随所で検出されたが、焼失住居であるS H236の焼土を含む埋土がそのまま床面となっているため、S H209の炉に伴う焼土は判別できなかった⁴⁾。S H236と重複していない箇所の床面では、焼土は検出されていない。そのため、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの中央からやや西側で検出された。平面形が楕円形の土坑で、長径0.4mほどある。壁際溝に接するように掘り込まれている。北側の外縁には、粘土塊あるいはシルト質の土が土手状に施されていた可能性がある（G-G'断面第4層）。

壁際溝は、全周すると思われる。ただし、北壁沿いでは部分的に途切れる可能性がある。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる。S H236と重複する部分では、貼床にもS H236埋土由来と思われる炭化物や焼土塊が含まれている。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P5・13から弥生土器・土師器甕が出土したほか、埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。重複するS H236は弥生時代後期後葉の竪穴建物とみられるため、この建物が廃絶してからS H209が構築されるまでに、ある程度の時間幅があったと思われる。

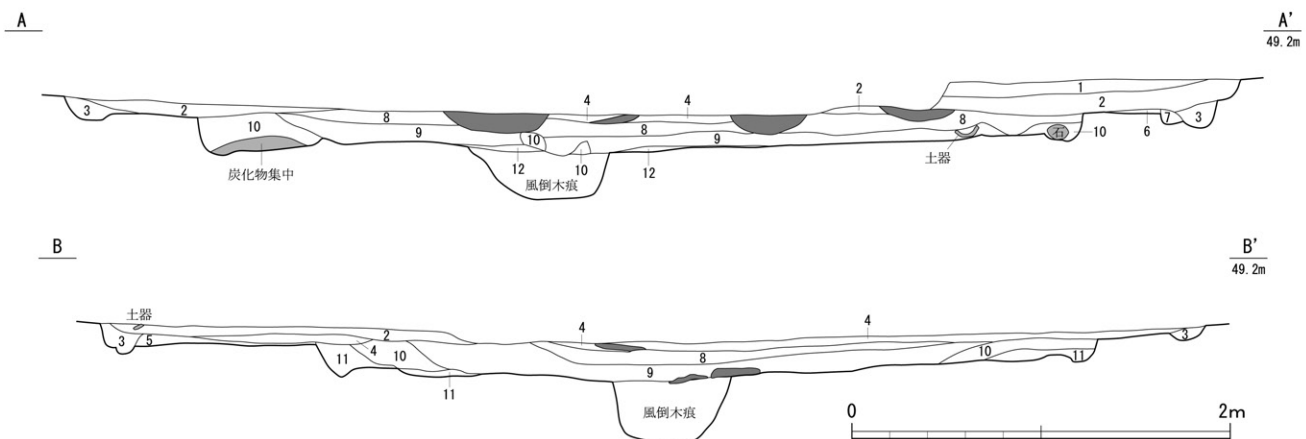
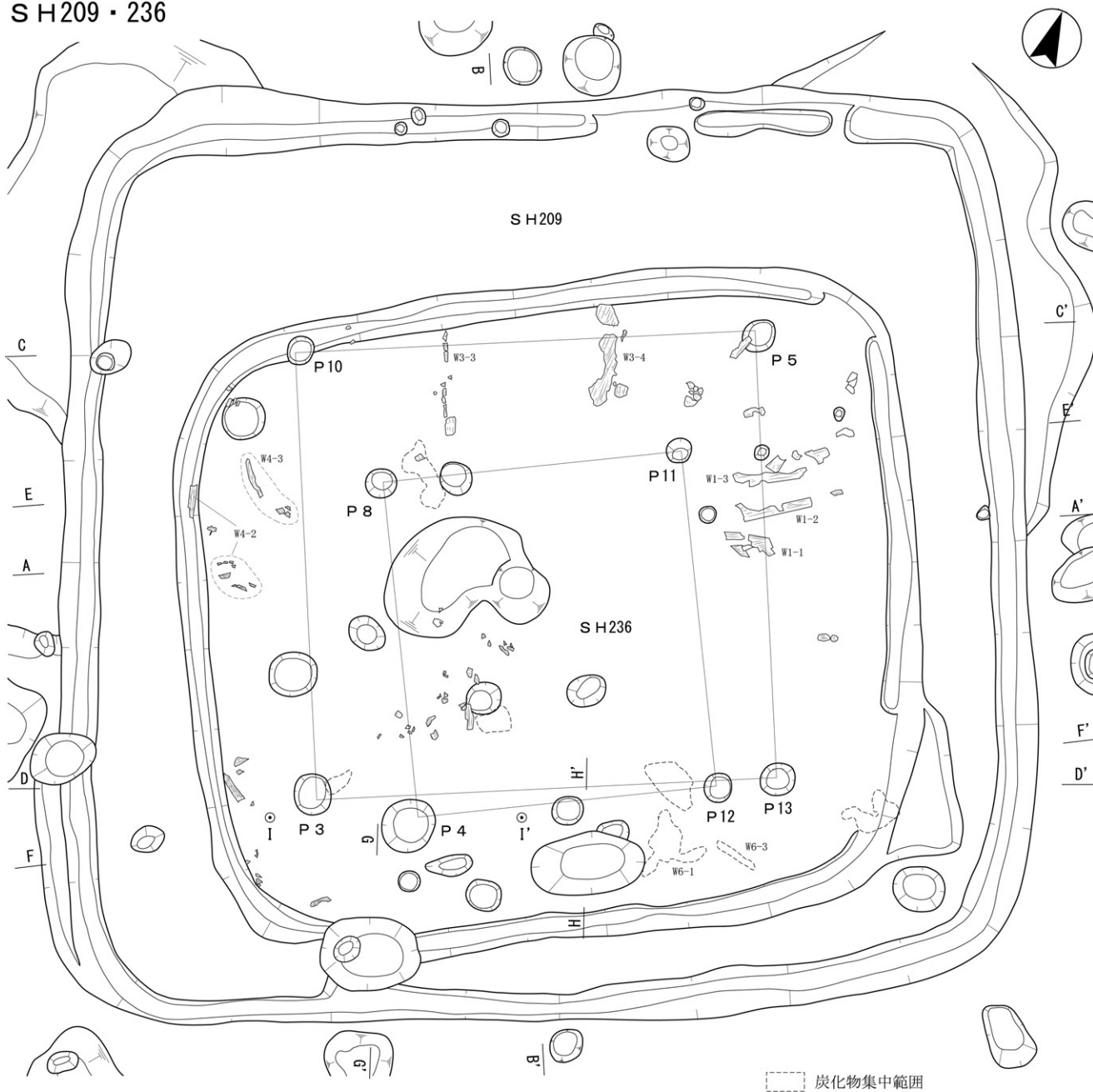
S H212（第28図） 第2次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸4.9m、短軸4.0mの長方形を呈するが、遺存状況が悪く、形状はやや不明瞭である。南側には壁際溝よりも0.8mほど外側に浅い掘り込みが認められ、これが掘形の可能性もあるが、壁際溝とかなり距離があるため、この建物に伴うものか判然としない。

明確な支柱穴は検出されなかった。床面から複数のピットが検出されているが、浅いものが多く、柱穴になると思われるものは見出しがたい。

建物中央より東側の床面から焼土が複数箇所検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は検出されなかったが、北西隅付近でやや大型のピットが検出されており、これが貯蔵穴である可能性も考えられる。ただし、深

S H209 · 236



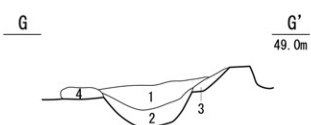
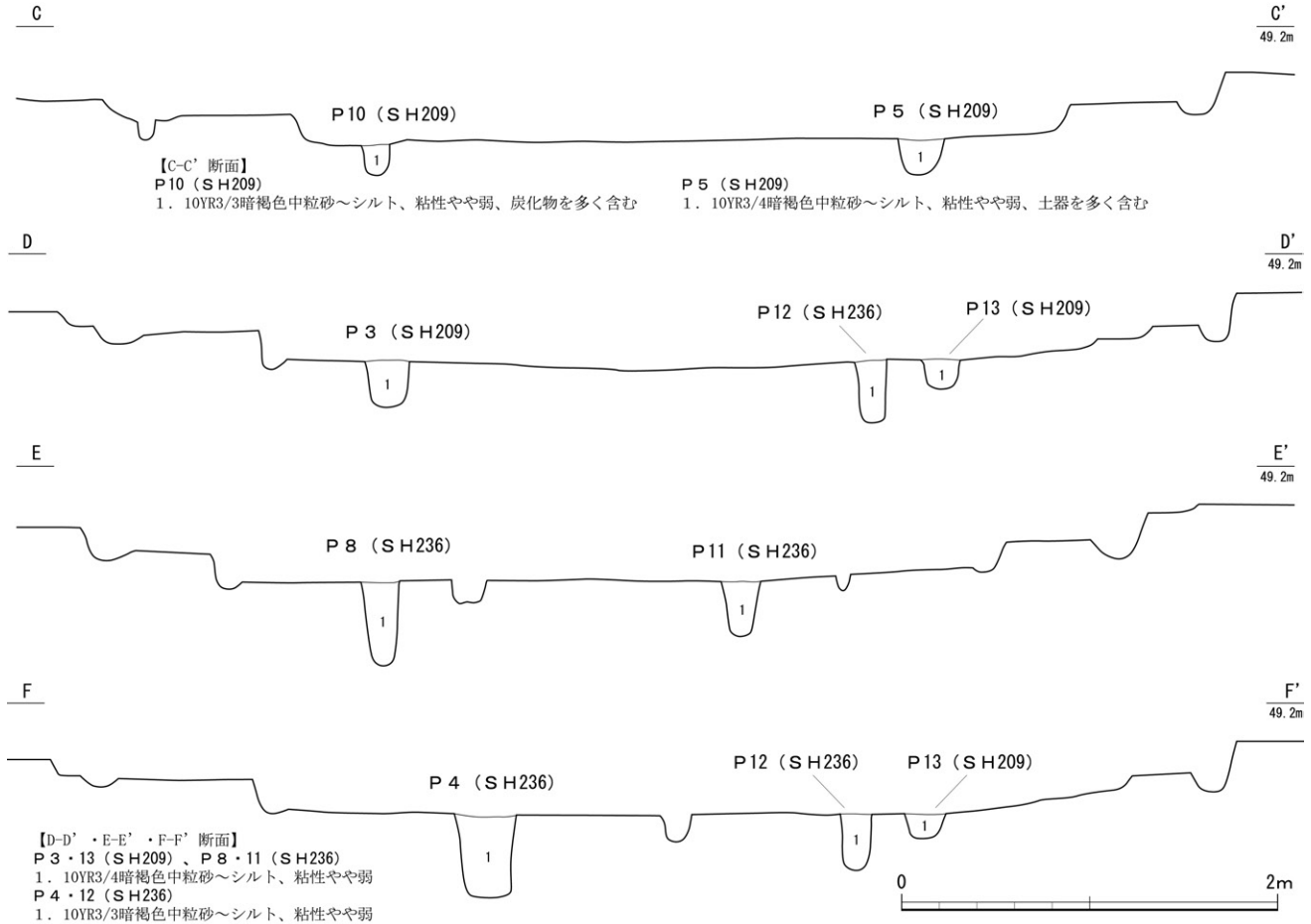
第26図 SH209 · 236① (1/40)

SH209・236

【A-A'・B-B' 断面】

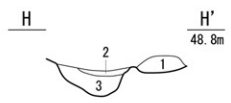
1. 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、褐色粒を10%含む (SH209埋土)
2. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、土器をわずかに含む (SH209埋土)
3. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、炭化物を含む (SH209壁際溝埋土)
4. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、地山ブロックを多く含む、粘性やや弱 (SH209貼床)
5. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、粘性強 (SH209貼床?)
6. 土層注記記録なし
7. 土層注記記録なし

8. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、地山ブロックを非常に多く含む、粘性やや弱 (SH236埋土)
9. 10YR2/2黒褐色中粒砂～シルト、粘性強、炭化物を非常に多く含む、土器を含む (SH236埋土)
10. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、地山ブロックを非常に多く含む、粘性やや強、炭化物を含む (SH236埋土)
11. 10YR4/6褐色中粒砂～シルト、粘性弱、焼土塊・炭化物を多く含む (SH236埋土)
12. 土層注記記録なし



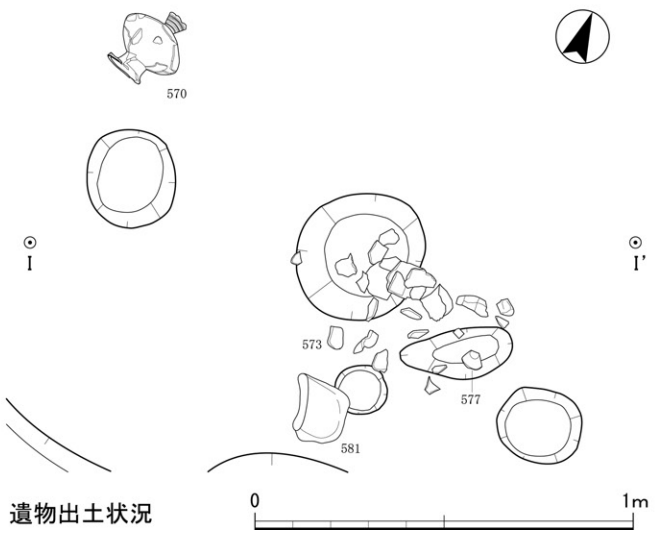
- ## 【G-G' 断面】
1. 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、炭化物を含む、褐色粒を5%含む
 2. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱
 3. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性弱
 4. 5Y6/2灰オリーブ色シルト、粘性強、褐色粒を10%含む

SH209 貯蔵穴



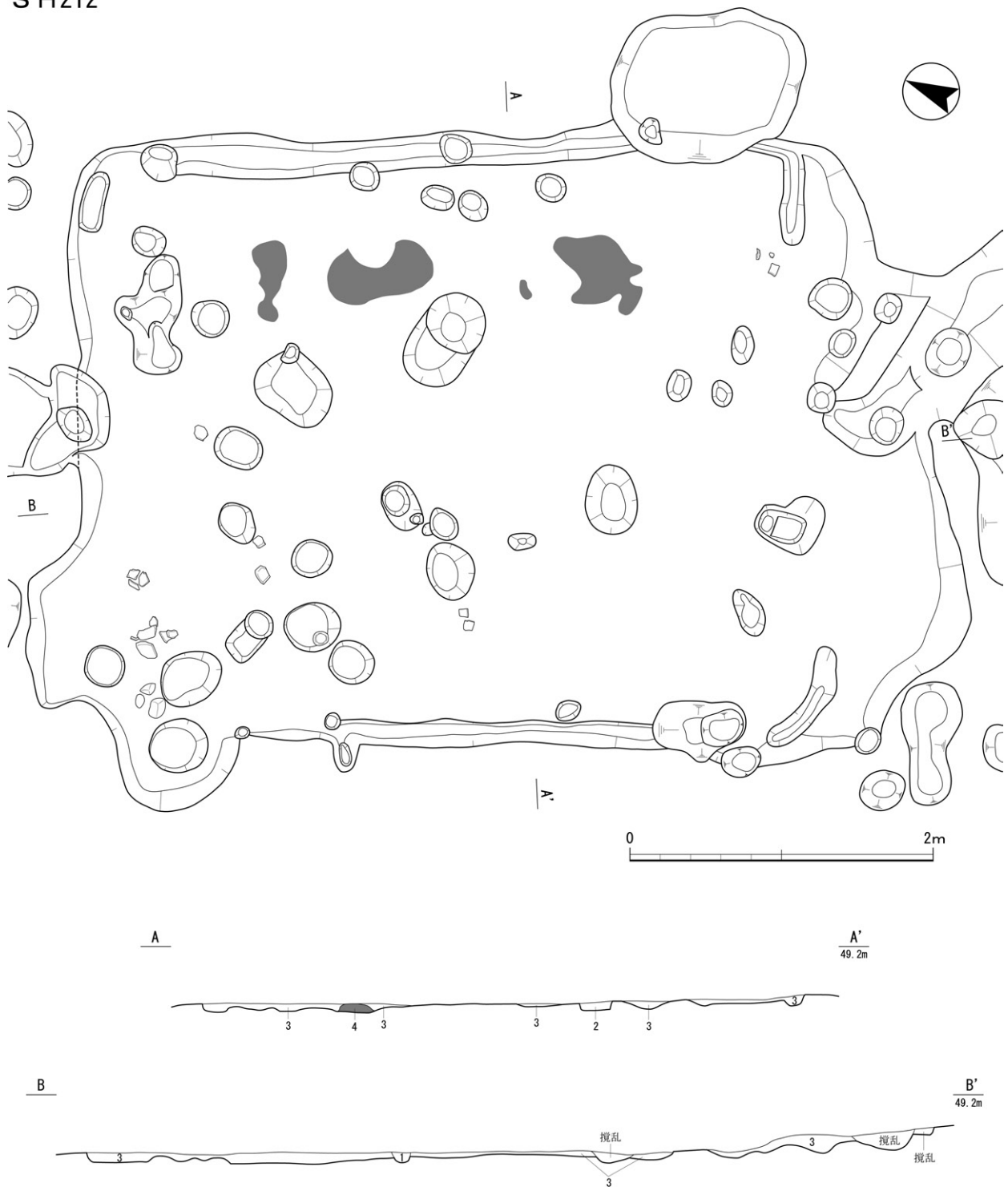
- ## 【H-H' 断面】
1. 5Y6/2灰オリーブ色シルト、粘性強、褐色粒を5%含む (粘土塊)
 2. 5Y4/4にぶい赤褐色中粒砂～シルト、粘性弱 (焼土)
 3. 10YR2/3黒褐色中粒砂～シルト、粘性やや強

SH236 貯蔵穴



第27図 SH209・236② (1/40、1/20)

SH212



- 【A-A'・B-B'断面】
1. 10YR4/3暗褐色中粒砂～シルト、地山ブロックを10%含む、粘性やや弱（ピット埋土）
 2. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱、褐色粒を5%含む（ピット埋土）
 3. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱（貼床？）
 4. 7.5YR5/6明褐色中粒砂～シルト、粘性弱（焼土）

第28図 SH212 (1/40)

さは0.15mほどとかなり浅い。

壁際溝は、西壁沿いと東壁沿いで検出された。東西壁沿いの壁際溝は、南端でL字状に屈曲し、南側の壁際溝となるが、先に述べたように掘形の壁に沿って掘られているかは不明である。南側の壁際溝は遺存状況が悪く、L字状に屈曲した部分のみしか確認できていない。北壁沿いでは壁際溝は認められないが、北東隅付近で、わずかに壁際溝の可能性のある楕円形の浅い掘り込みが検出されている。

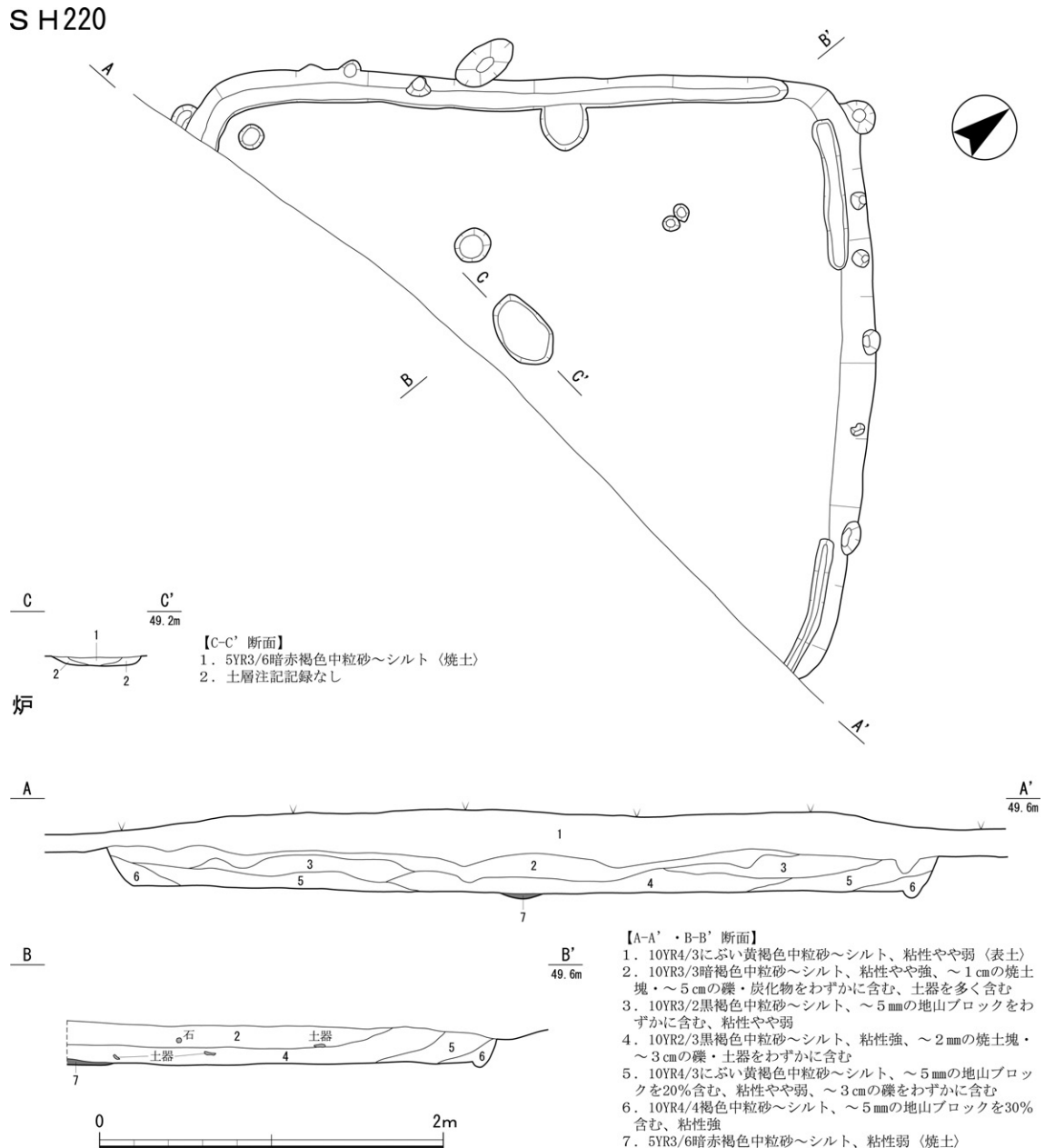
貼床は、建物内のほぼ全面に施されている可能性

があるが、堆積状況や土質などからは明確に貼床と判断できない。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、床面上で弥生土器・土師器が出土している。北西隅付近では、礫などとともに破片がややまとまって検出された。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH220 (第29図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。南側の半分程度は調査区外となっており、未調査である。平面形は長軸4.0m、短軸3.7



第29図 SH220 (1/40)

m程度のやや長方形を呈するものと思われる。比較的小型の建物である。

明確な支柱穴は検出されなかった。

建物中央付近で平面形が不整形な楕円形の浅い土坑が検出され、埋土に焼土を含んでいることから、これが炉と考えられる。土層断面では平面図に記録された土坑よりも広い範囲に落ち込みと焼土が存在したことが確認できるため、炉の規模は本来もう少し大きかったと推測される。

貯蔵穴とみられる土坑は、調査を行った範囲では検出されなかった。

壁際溝は、北西壁沿いでは途切れていないが、北東壁沿いでは断続的となっている。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H226 (第30図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸3.8m、短軸3.4mのやや長方形を呈する。かなり小型の建物である。

支柱穴は4基検出された。南北の柱間に比べて東西の柱間が広く、長方形に配置されている。また、全体的に建物の西側に偏在している。建物の西壁は若干不整形で、遺存状況もあまり良好ではないことから、本来は建物の平面形も長方形で、西壁はもう少し西側に位置していた可能性も考えられる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は明確ではないが、南壁沿い中央付近で検出されている、平面形が不整形な楕円形を呈する土坑が、貯蔵穴の可能性が考えられる。長径1.2mほどで、深さは0.3mほどある。建物中央付近まで及んでいる点など貯蔵穴とするには違和感もあるが、攪乱を被っているとも思われる。

壁際溝は、南壁沿いのみで検出された。ただし、土層断面からみると、北壁沿いにも壁際溝が存在していたと思われる(A-A'断面第2層)。また、東壁沿いにも、壁際溝の残欠ともみられる細長いピット状の遺構が存在しており、部分的に壁際溝が存在した可能性がある。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H228 (第31・32図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H241・245と完全に重複しており、これらの建物より後出する。S H241の建て替えに伴って若干拡張したものと思われる。平面形は長軸6.8m、短軸6.1mのやや長方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されている。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い西側で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、長径0.7mほどある。S H241に伴うものとも考えられるが、S H241の壁際溝より若干外側まで掘り込みが及んでいるように見受けられることと、これ以外に貯蔵穴に該当する土坑が見当たらないことから、S H228に伴う貯蔵穴と判断した。

壁際溝は、ほぼ全周しているが、北壁中央付近では若干途切れている。

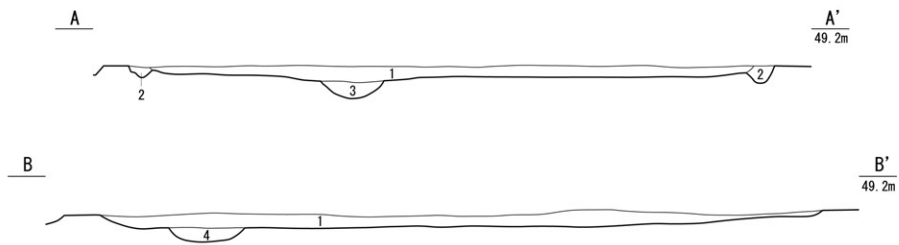
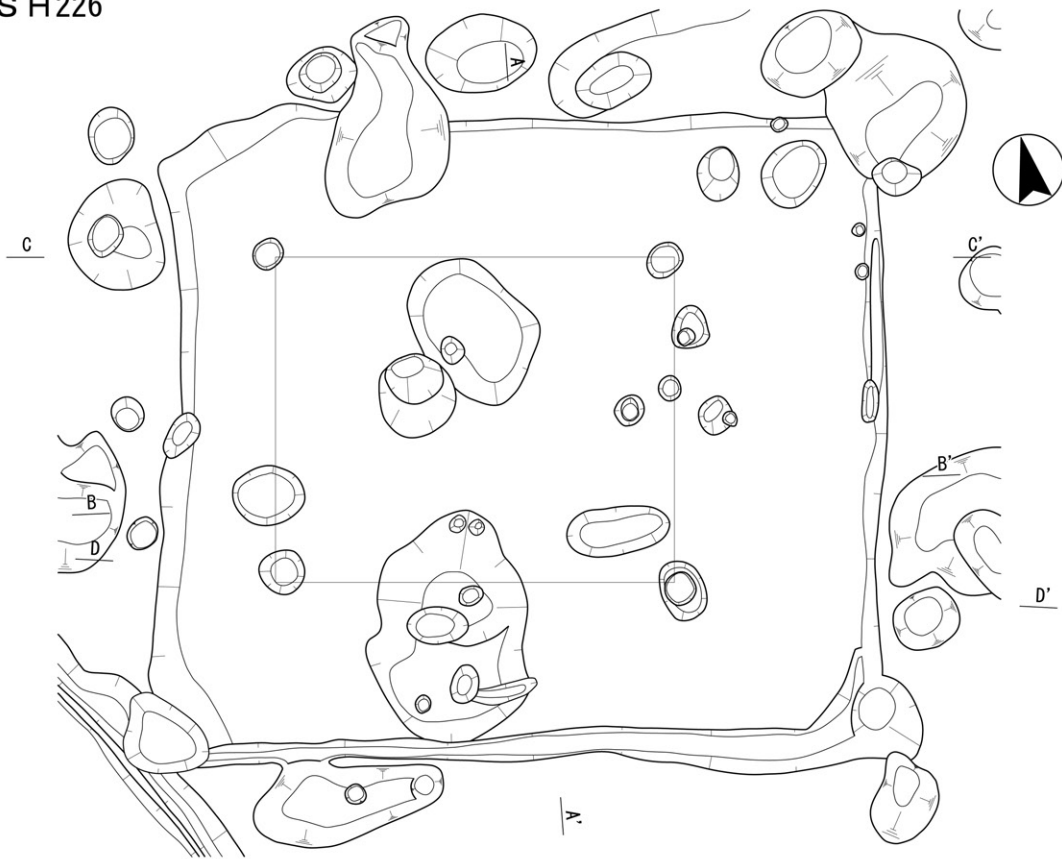
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。この溝の西側には、同様の溝で若干短いものがさらに2本認められるが、これらはS H241・245に伴うものと思われる。

このほかに、北西隅からわずかに東側の壁面から北西方向へ向かって、排水溝とみられる長さ3.0m、幅0.3m、深さ0.15mほどの細い溝が延びている。この溝が延びる方向は北側の谷へ向かって標高が低くなっており、溝の先端部は徐々に浅くなって消滅する。埋土には地山に由来すると思われるブロック土が多量に含まれており、埋め戻されたか、あるいは本来暗渠状になっており天井部が崩落して埋没したものと推測される⁵⁾。

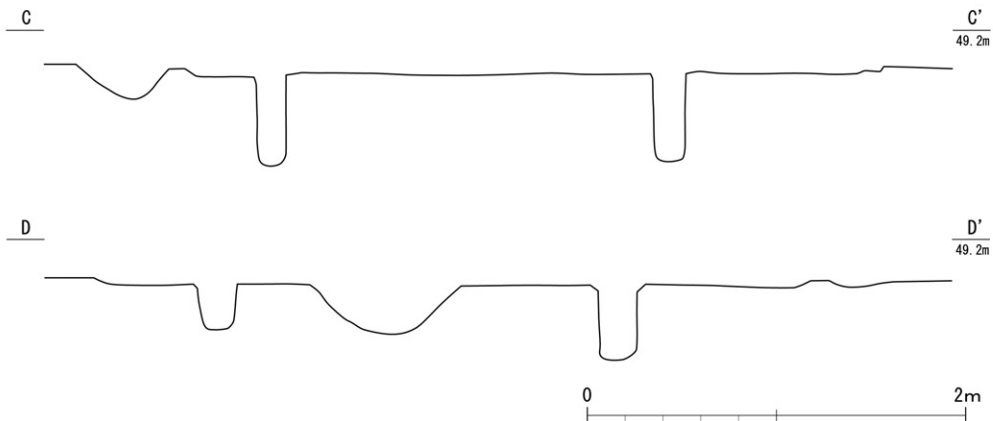
遺物は、排水溝から弥生土器・土師器の高坏が出土した。埋土からは、弥生土器・土師器が多数出土している。建物中央付近で集中して検出されており、壺や甕、高坏の大きな破片がみられる。埋土中・下層(A-A'・B-B'断面第3・4層)に含まれているも

S H226

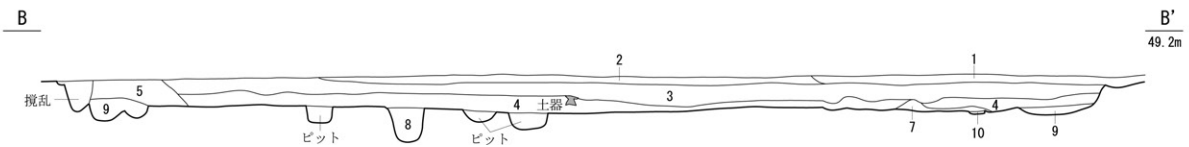
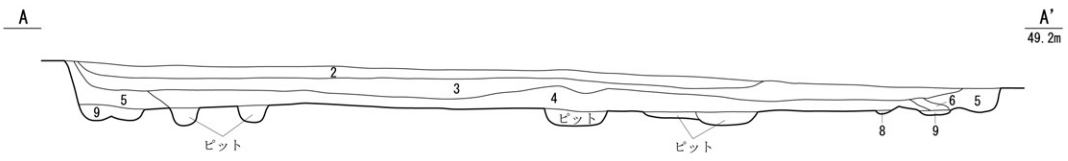
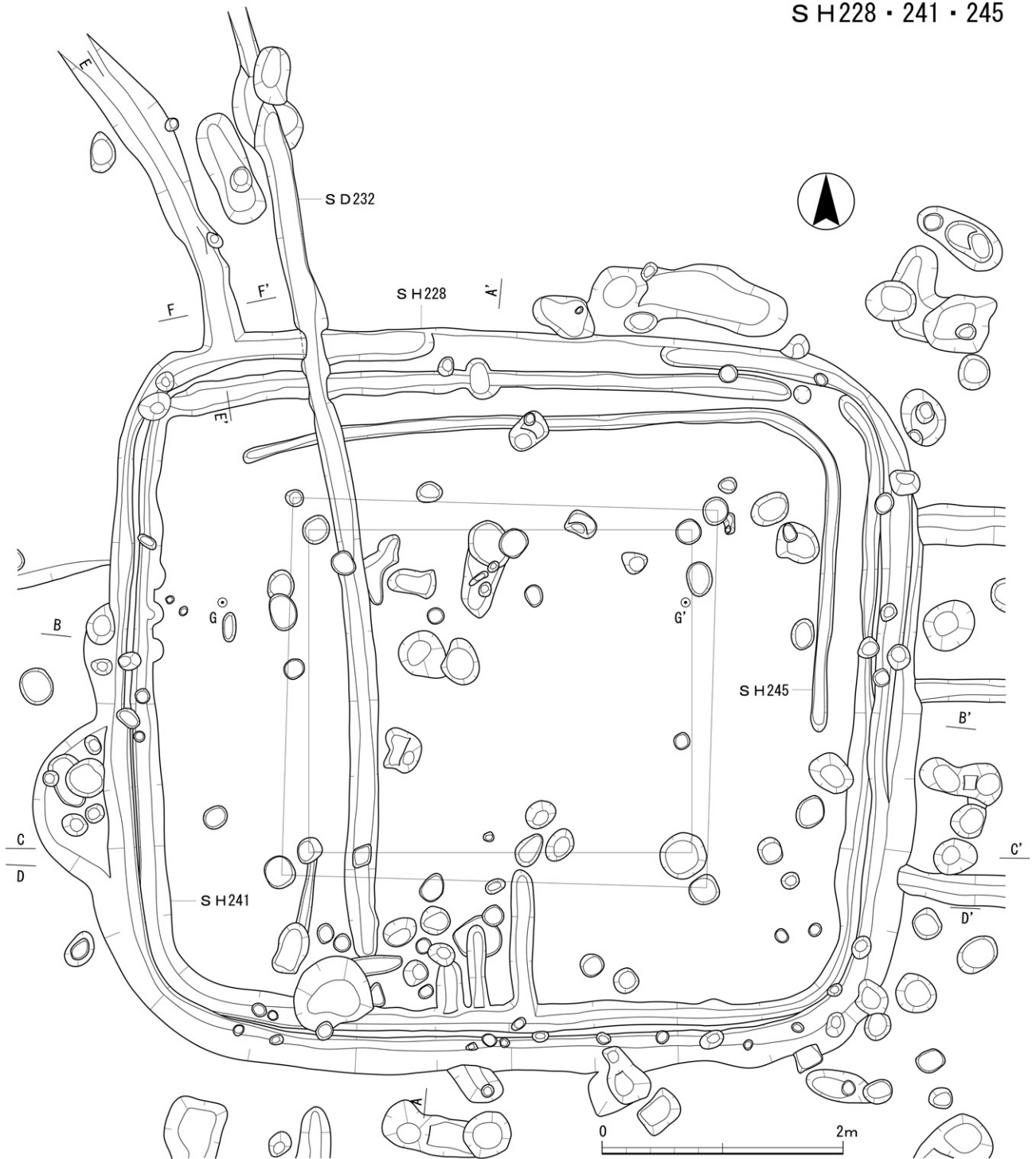


【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、粘性弱、粗粒砂・炭化物をわずかに含む
2. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱
3. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/6褐色極細粒砂～シルトブロックを含む、粘性やや弱、土器を含む（ピット埋土）
4. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/6褐色極細粒砂～シルトブロックを含む、粘性やや弱、土器を含む（ピット埋土）



第30図 S H226 (1/40)



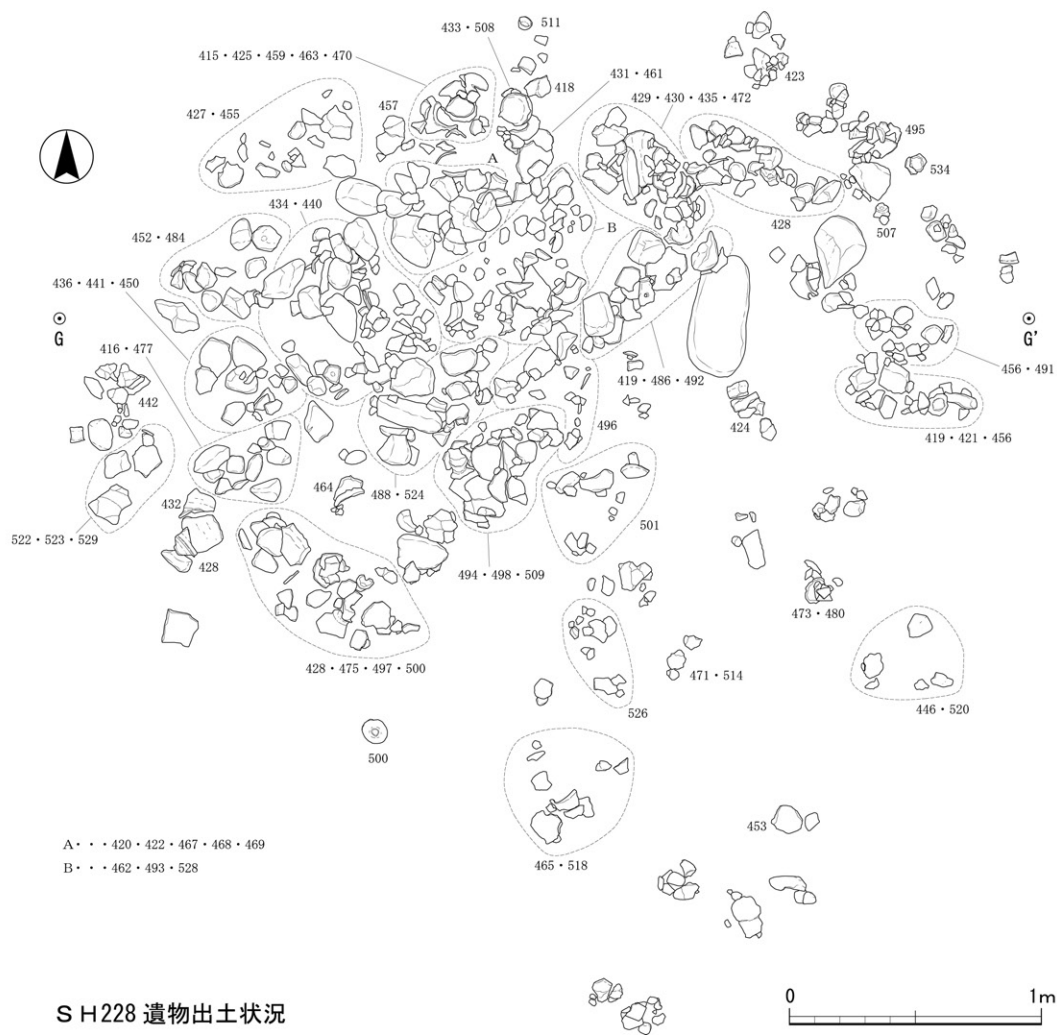
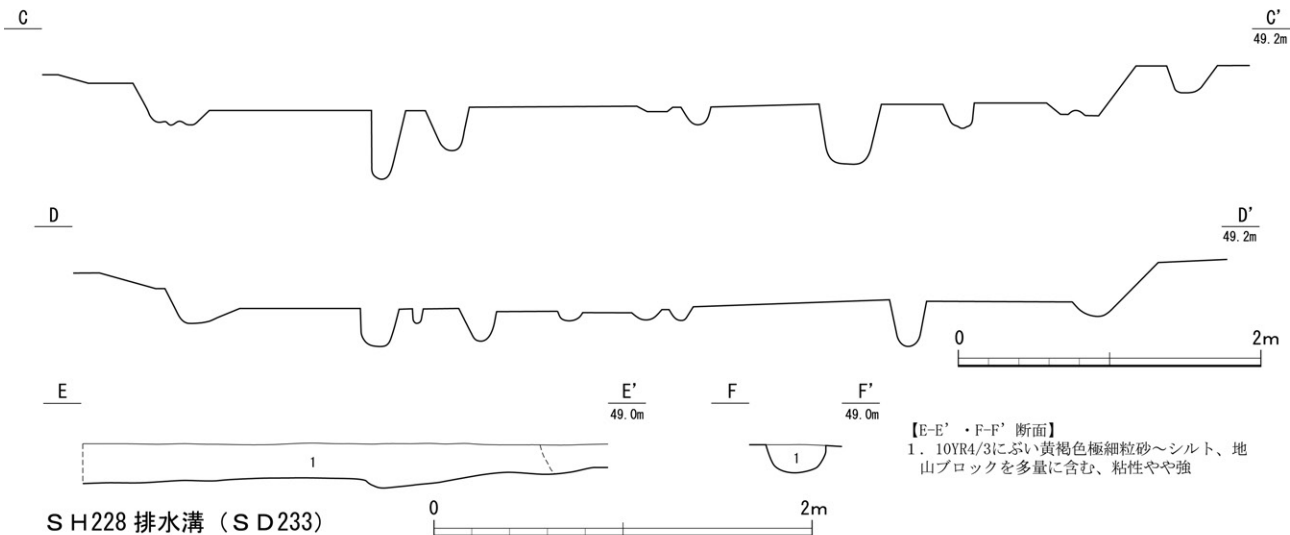
第31図 S H228 · 241 · 245① (1/50)

S H228・241・245

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、粘性極弱、～1cmの礫を含む（攪乱）
2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、粘性弱、～10cmの礫・土器をわずかに含む
3. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、粘性やや弱、～30cmの礫を含む、土器を多量に含む、酸化粒を10%含む
4. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、粘性やや弱、～30cmの礫をわずかに含む、土器を多量に含む、酸化粒を7%含む
5. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、地山ブロックを多量に含む、粘性弱

6. 土層注記記録なし
7. 10YR4/4暗褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱
8. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、地山ブロックを多量に含む、粘性やや強
9. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、粘性弱（S H228・241壁際溝埋土）
10. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粘性やや弱、炭化物・焼土塊を含む（S H245壁際溝埋土）



第32図 S H228・241・245② (1/50、1/40、1/30)

が多いと思われる。また、土器とともに大型の礫も複数出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S H230 (第33図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。先行する建物であるS H240を、建て替えに伴って若干拡張したものである。また、S H235と重複し、この建物より後出する。平面形は長軸6.1m、短軸6.1mの正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。拡張前のS H240とは主柱穴を同一にしているとみられ、柱穴の重複などは認められない。

建物中央より東側や西側、北側の床面から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.8mほどある。

壁際溝は、ほぼ全周すると思われる。西隅付近では途切れているが、遺存状況が悪いため、元々途切れていたか不明である。

貼床は確認できなかった。四周の壁に沿って、ごく浅い周溝状掘形が認められたが、S H240の拡張という性格上、周溝状掘形はS H240に伴うものとも考えられる。ただし、土層断面からは明確に判断できない。

また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びている。S H240の壁際溝と重複することから、S H230に伴うものの可能性が高い。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。また、貯蔵穴の東側でも、壁と主柱穴を繋ぐような形で長さ0.8mほどの浅い溝が検出されている。これについては、貯蔵穴との位置関係からみて、貯蔵穴に関係する区画施設等であった可能性も考えられる。

遺物は、貯蔵穴から台石が2点出土した。埋土からも、弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。

S H234 (第34・35図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H235と一部重複しており、この建物より後出する。西側が攪乱によって削平を

被っており、全体の形状にも判然としない部分があるが、平面形は長軸5.9m、短軸5.8mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央よりやや北側の床面の数箇所から焼土が検出されているが、不整形な浅い土坑状の落ち込みを伴うものがあり、これが炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.5mほどある。埋土最上層から弥生土器・土師器の甕と高坏の破片がまとまって検出された。

壁際溝は、西壁を除く壁沿いで検出された。いずれの壁沿いでも断続的となっている。

貼床は確認できなかった。周溝状掘形も明瞭には認められないが、土層断面では南北の壁沿いでやや掘形が深くなっている様子が確認できる。

また、南西隅付近から南西方向へ向かって、排水溝とみられる長さ9.6m、幅0.4m、深さ0.3mほどの細い溝が伸びている。この溝は、貯蔵穴を始点として標高が低い方向へ向かって伸び、若干カーブを描く。排水溝内からは、土師器広口壺などの大きな破片が複数出土している。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器の甕、高坏が出土したほか、排水溝から土師器壺、甕、高坏、などの大きな破片が出土している。内面に水銀朱が付着した鉢もみられる。また、埋土からも弥生土器・土師器や台石が出土している。

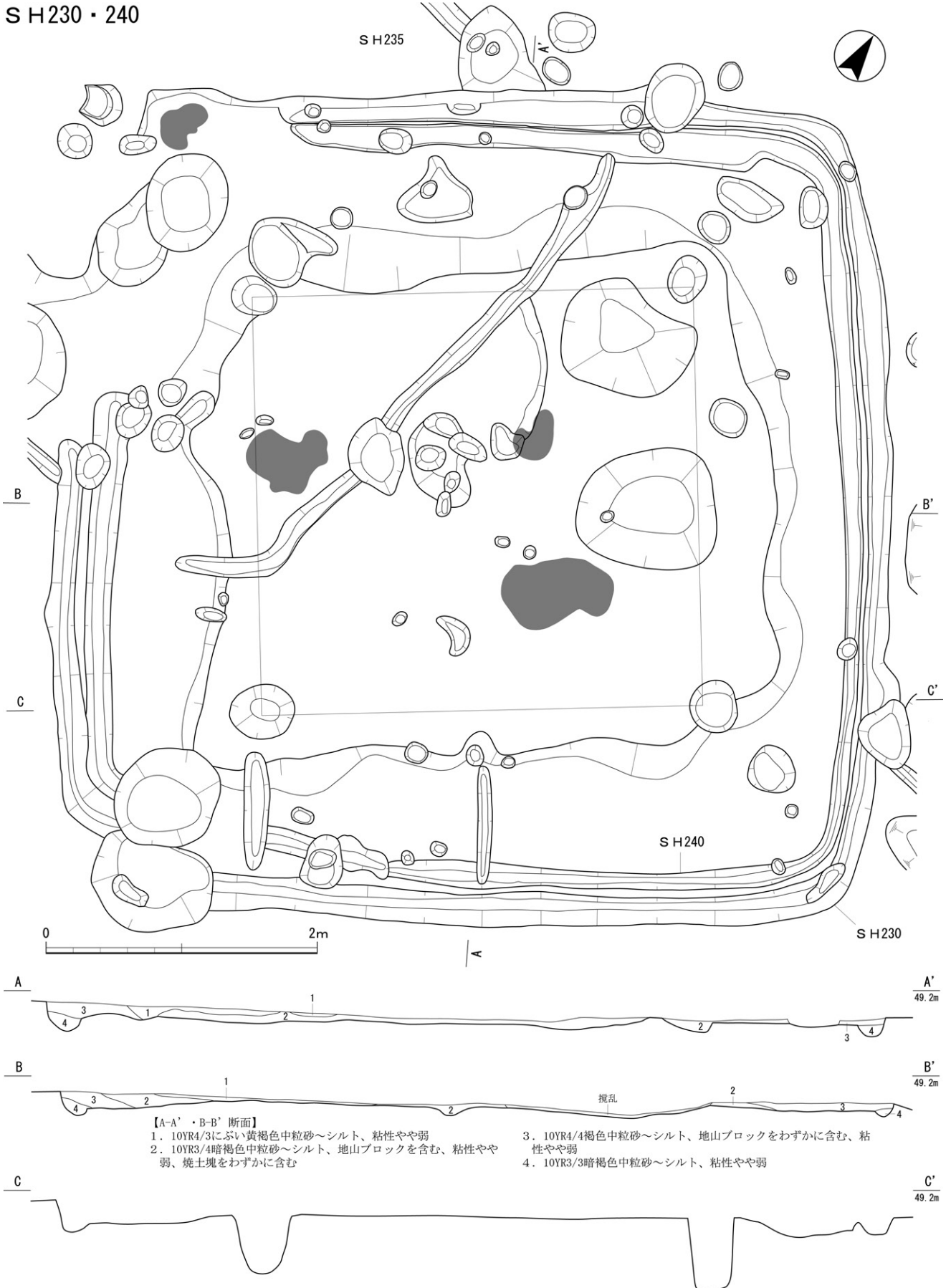
出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S H235 (第36図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H230・234・240と一部重複しており、これらの建物に先行する。全体の形状には判然としない部分もあるが、平面形は長軸5.0m、短軸4.6mのやや長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。やや長方形に配置されているが、建物の平面形とは長軸方向が異なり、一致しない。

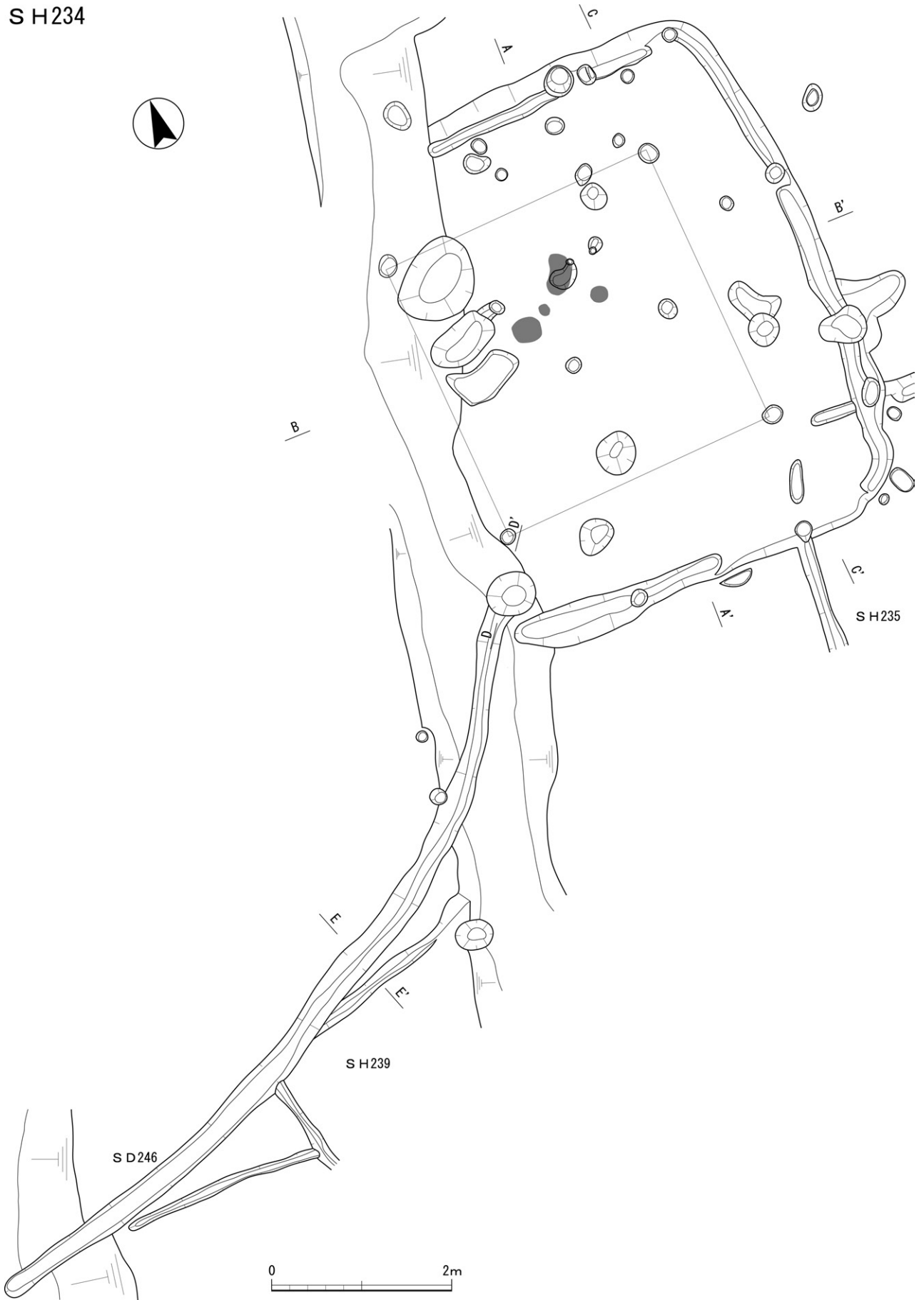
建物中央よりやや北側のS H230・240の西隅において焼土が検出されており、位置的にみてS H235の炉の痕跡である可能性が考えられる。

S H230・240



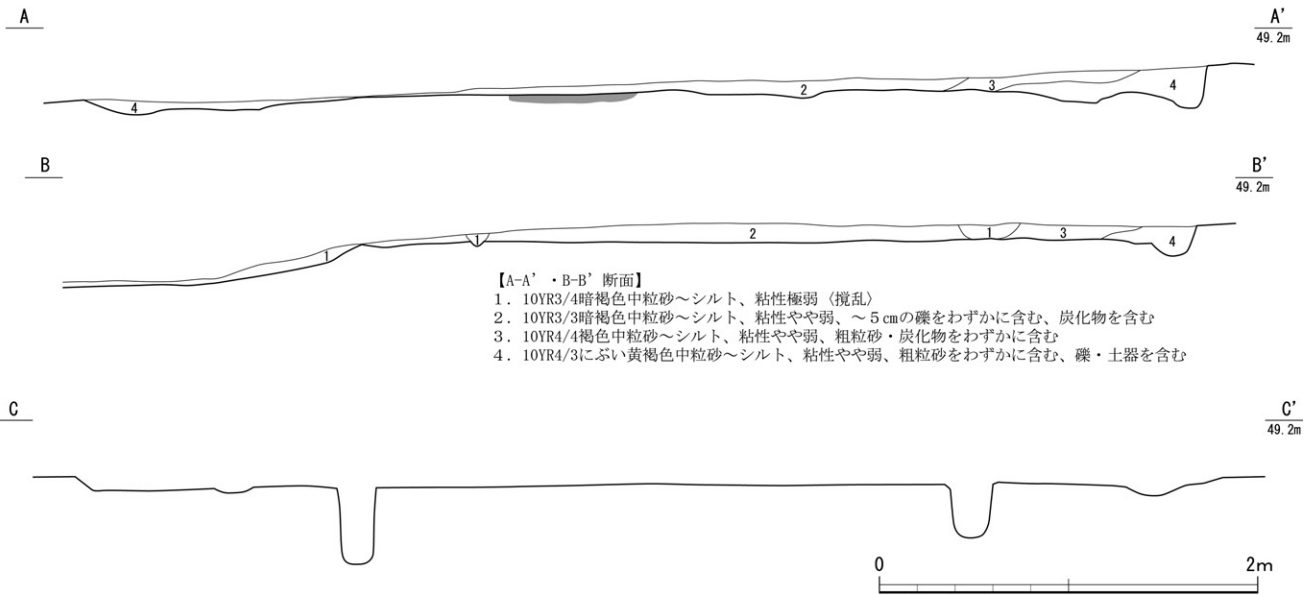
第33図 S H230・240 (1/40)

S H234

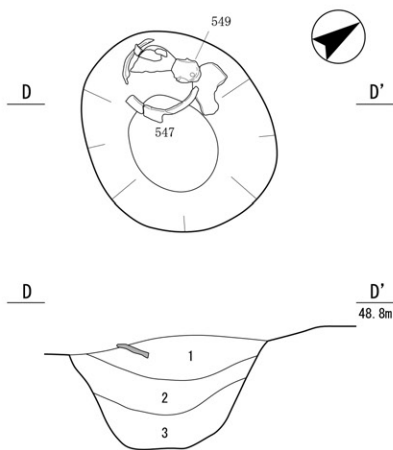


第34図 S H234① (1/60)

S H234



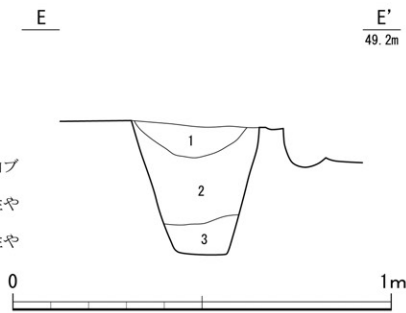
- 【A-A'・B-B'断面】
- 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性極弱（攪乱）
 - 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～5cmの礫をわずかに含む、炭化物を含む
 - 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、粗粒砂・炭化物をわずかに含む
 - 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、粗粒砂をわずかに含む、礫・土器を含む



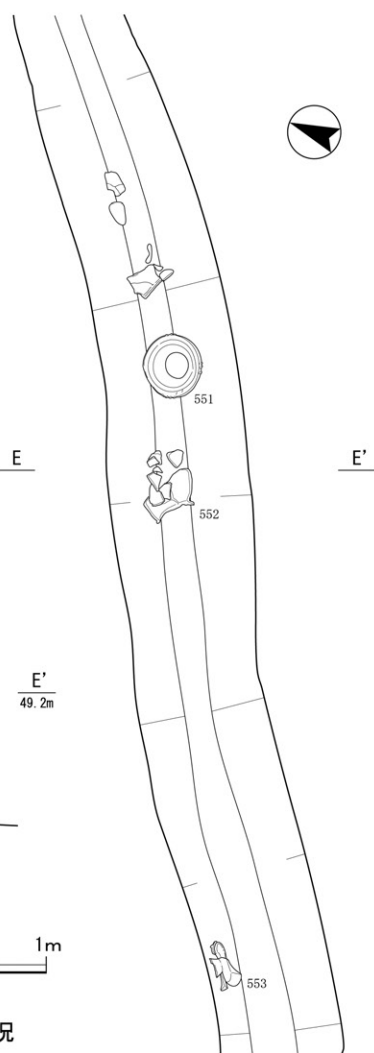
- 【D-D'断面】
- 7.5YR4/6褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、焼土塊・土器を多く含む
 - 10YR4/2灰褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、焼土塊をやや多く含む、炭化物を多く含む
 - 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、粘性やや弱

貯蔵穴遺物出土状況

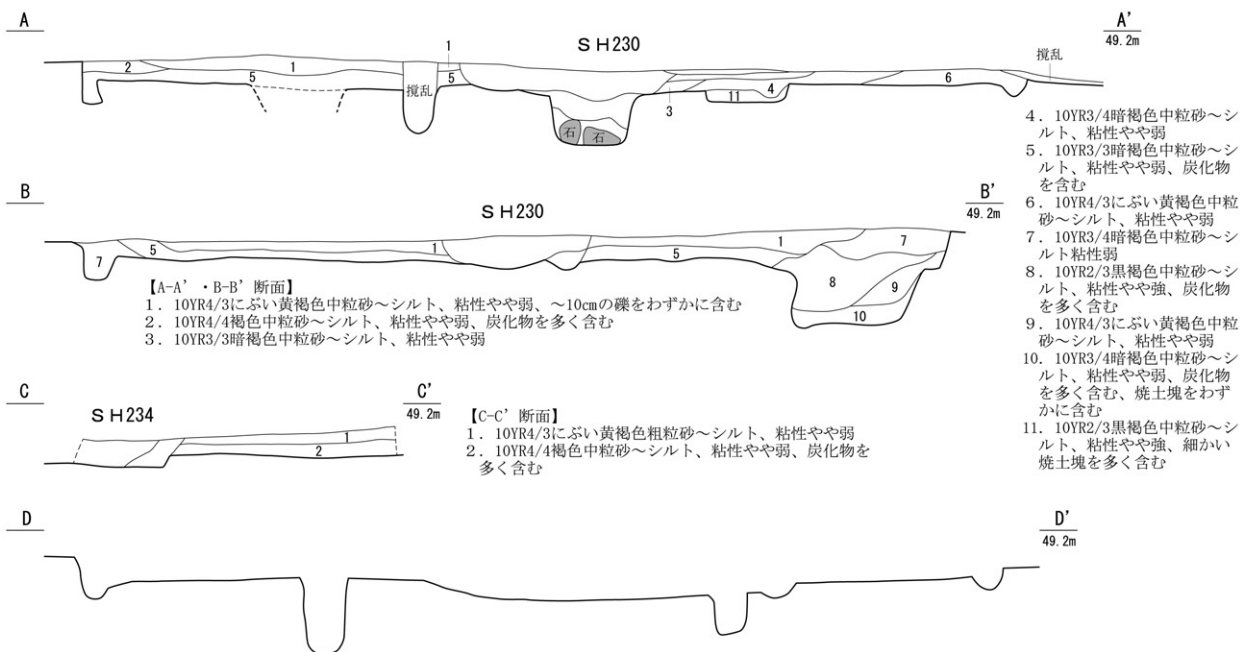
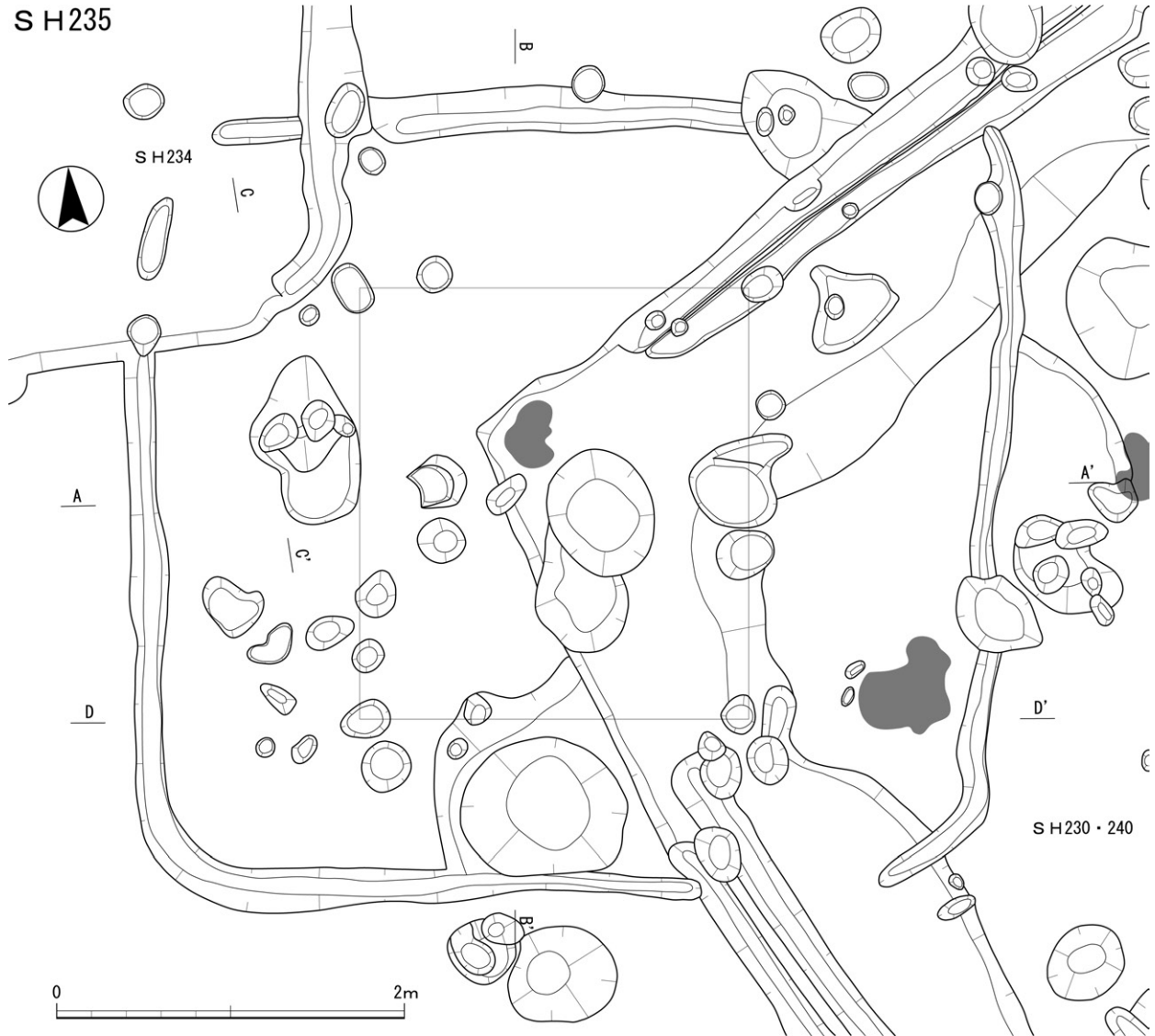
- 【E-E'断面】
- 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、地山ブロックを含む、粘性やや弱
 - 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～5cmの礫・炭化物を含む
 - 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト、粘性やや強



排水溝（SD246）遺物出土状況



S H235



第36図 SH235 (1/40)

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が楕円形の土坑で、長径1.0mほどある。壁際溝に接して掘り込まれており、壁面は一部がオーバーハングしている。

壁際溝は、他の遺構と重複する部分では遺存状況が悪いものの、全周すると思われる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器壺の小片が出土したほか、埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H236 (第26・27図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H209と完全に重複しており、この建物に先行する。平面形は長軸4.7m、短軸4.2mのやや長方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されている。

建物内からは各所から焼土が検出されているが、後述のように建物の焼失に伴うと考えられるものが多く、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿い中央付近で検出された。平面形が楕円形の土坑で、長径0.7mほどある。埋土の上層には焼土が堆積していた。

壁際溝は、北隅付近と東隅付近を除き、ほぼ全周する。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、南隅付近の床面直上で弥生土器や台石がまとまって出土した。完形に近い台付壺などが含まれている。北隅付近でも、弥生土器の大きな破片が複数検出されている。また、埋土からも弥生土器・土師器や錘状の土製品が出土している。

なお、建物内からかなり大きな炭化材がまとまって検出されており、北東壁付近では壁から建物中央に向かって並ぶような状況も認められる。焼土や細かな炭化物なども広い範囲で検出されている。こうした状況から、この建物は焼失したものと考えられる。焼失に伴う炭化材や炭化物は、主に床面直上に堆積した土層から検出されているが、焼土はそれより上層の埋土にも多量に含まれている(A-A'・B-B'断面第8層)。この土層については、炭化物はそれ

ほど顕著に含まれておらず、地山由来と思われるブロック土を非常に多く含んでおり、焼土は部分的にまとまって含まれている。この土層は人為的な埋土と考えられ、当該建物は焼失後に埋め戻されたともみられる。若干の時期差があるが、S H209の構築に関係する可能性も考えられよう。

埋土から出土した遺物には弥生時代終末期～古墳時代前期初頭のものも少量認められるが、ほぼ完形で出土した台付壺などからみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H239 (第37図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H243と一部重複しており、この建物に先行する可能性が高いが、確定的ではない。また、北西隅はS H234の排水溝であるS D246によって削平を被っていることから、S H234より先行する。東側が攪乱溝によって大きく削平を被っているため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸3.6m、短軸3.4mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。かなり小型の建物である。

明確な主柱穴は検出されなかった。

建物中央よりやや西側で不整形な浅い土坑が検出され、底面に被熱痕跡が認められたことから、これが炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.8mほどある。壁際溝に接して掘り込まれている。

壁際溝は、ほぼ全周すると思われる。ただし、西壁沿いや北東隅付近では若干途切れる可能性がある。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

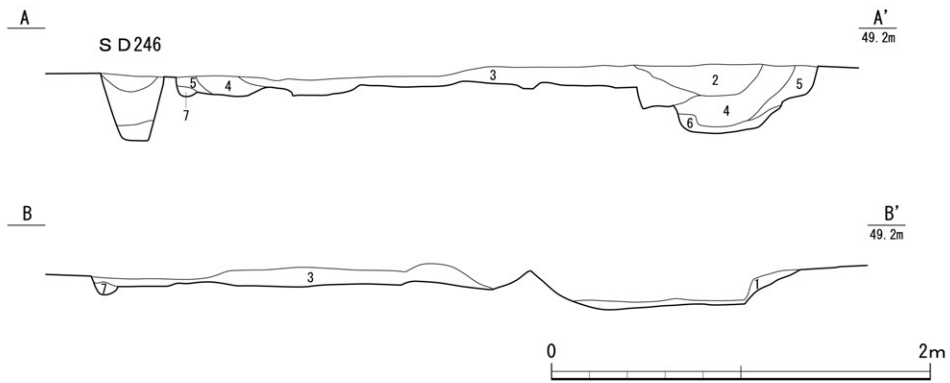
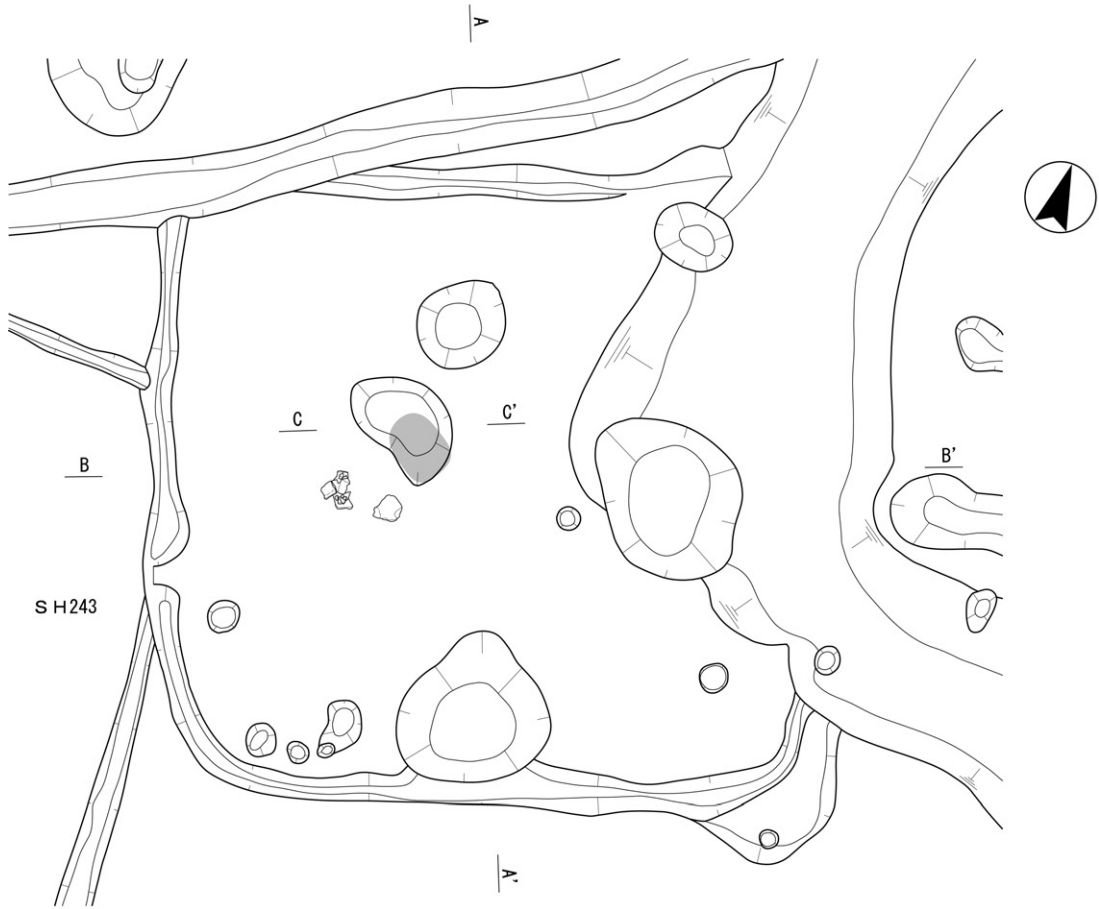
遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。炉の付近で破片がややまとまって出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H240 (第33図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H230と完全に重複しており、この建物に先行する。また、S H235とも重複し、この建物より後出する。平面形は長軸5.6m、短軸5.6mの正方形を呈する。

主柱穴はS H230と同一とみられ、4基が建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

S H239



【C-C' 断面】

1. 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、褐色粒を3%含む
2. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性強、焼土塊を含む

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、～3cmの礫をわずかに含む（攪乱）
2. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、褐色粒を7%含む
3. 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、褐色粒を3%含む
4. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、褐色粒を5%含む
5. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、第4層より色調やや暗い
6. 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性強、褐色粒を10%含む、粗粒砂を含む
7. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、炭化物をわずかに含む

炉

第37図 SH239 (1/40)

建物中央より東側や西側、北側の床面から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられるが、SH230に伴うものとの判別は困難である。

貯蔵穴とみられる土坑は、西隅で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.7m、深さ0.3mほどある。壁面が垂直に立ち上がり、底からは径10～20cmほどの礫が数点検出されている。ただし、SH240埋没後に掘り込まれた土坑の可能性もあり、その場合は、当該建物に伴う貯蔵穴はSH230の貯蔵穴と同一箇所に存在した可能性も考える。

壁際溝は、ほぼ全周すると思われる。西隅付近では途切れているが、遺存状況が悪いため、元々途切れていたか不明である。

貼床は確認できなかった。四周の壁に沿って、ごく浅い周溝状掘形が認められ、SH240に伴う可能性が考えられるが、明確には判断できない。

この竪穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

SH230との関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。

SH241 (第31・32図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。SH228・245と完全に重複しており、SH228に先行し、SH245より後出する。SH245の建て替えに伴って若干拡張したものと思われる。SH228との重複によって全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸6.3m、短軸5.5mのやや長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。SH228の主柱穴よりも若干内側に位置しており、建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されている。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

この建物に伴う貯蔵穴とみられる土坑は検出されていないが、南壁沿い西側にSH228に伴うと考えられる貯蔵穴が存在しており、SH241に伴う貯蔵穴もこの位置に存在していた可能性が考えられる。

壁際溝は、北東隅の一部を除きほぼ全周する。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近から3本の細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられるが、すべてがSH241に伴うものではなく、位置や長さなどからみて、おそらく3本のうち中央の溝が当該建物に伴うものと推

定される。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

SH228との関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH242 (第38図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。攪乱や削平によって北側壁付近は消失しており、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸4.4m、短軸4.0mほどのやや長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は3基検出された。北西隅の主柱穴は攪乱によって失われているが、元は4基の主柱穴が建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されていたと考えられる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.2mほどある。深さは0.2mほどと浅い。壁際溝に接するように掘り込まれている。埋土はほぼ1層で、埋土上面から大型の台石が検出されている。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れておらず、全周すると思われるが、消失している北側では壁際溝が存在したか不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

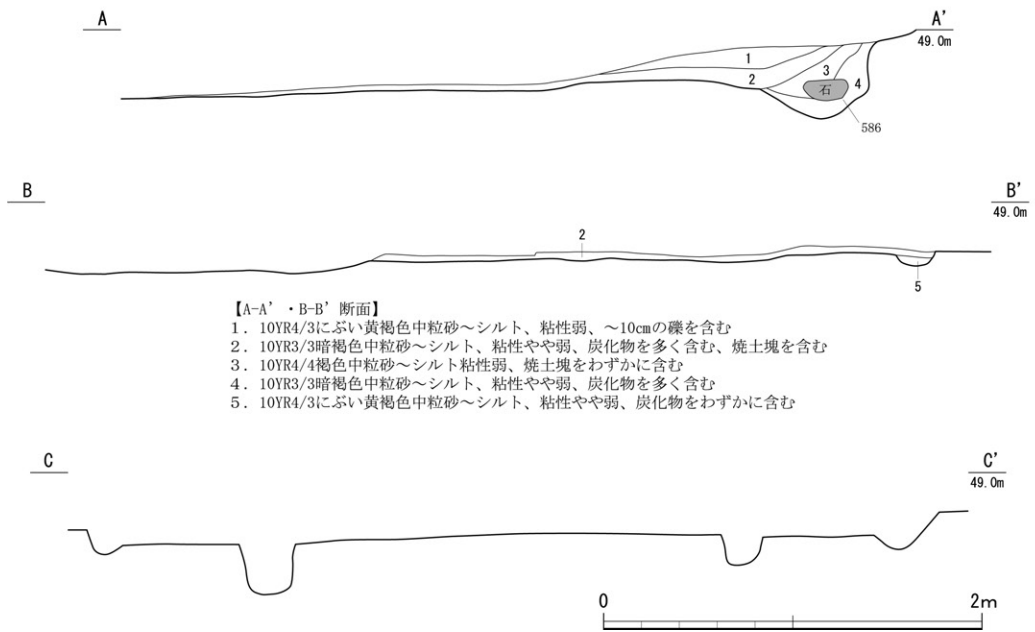
遺物は、貯蔵穴から台石が出土した。南壁沿い東側では弥生土器広口壺の口縁部(587)が出土した。この壺の口縁部は、炉で脚台として使用された可能性がある。また、貯蔵穴の西側では深い凹みをもつ大型の台石(592)が検出された。このほか、埋土からも弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH243 (第39図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。一部がSH239と重複しており、この建物に先行する。西側は攪乱によって大きく削平を被っており、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.2m、短軸5.2mほどの正方形を呈するものと思われる。

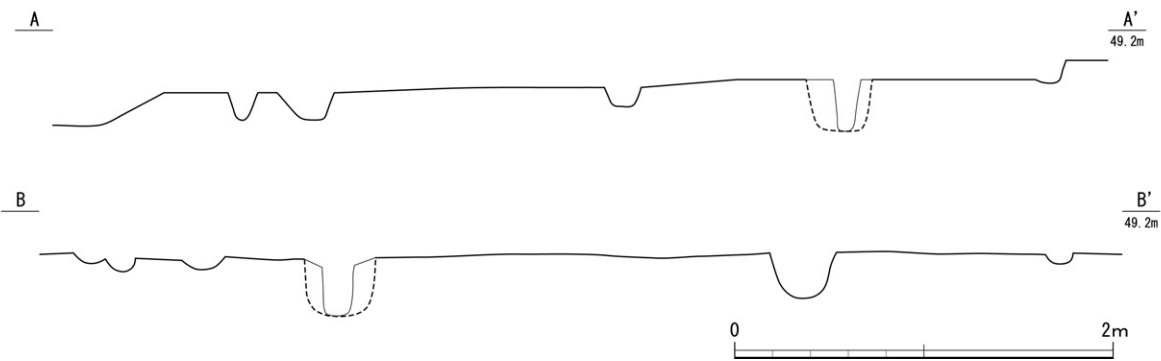
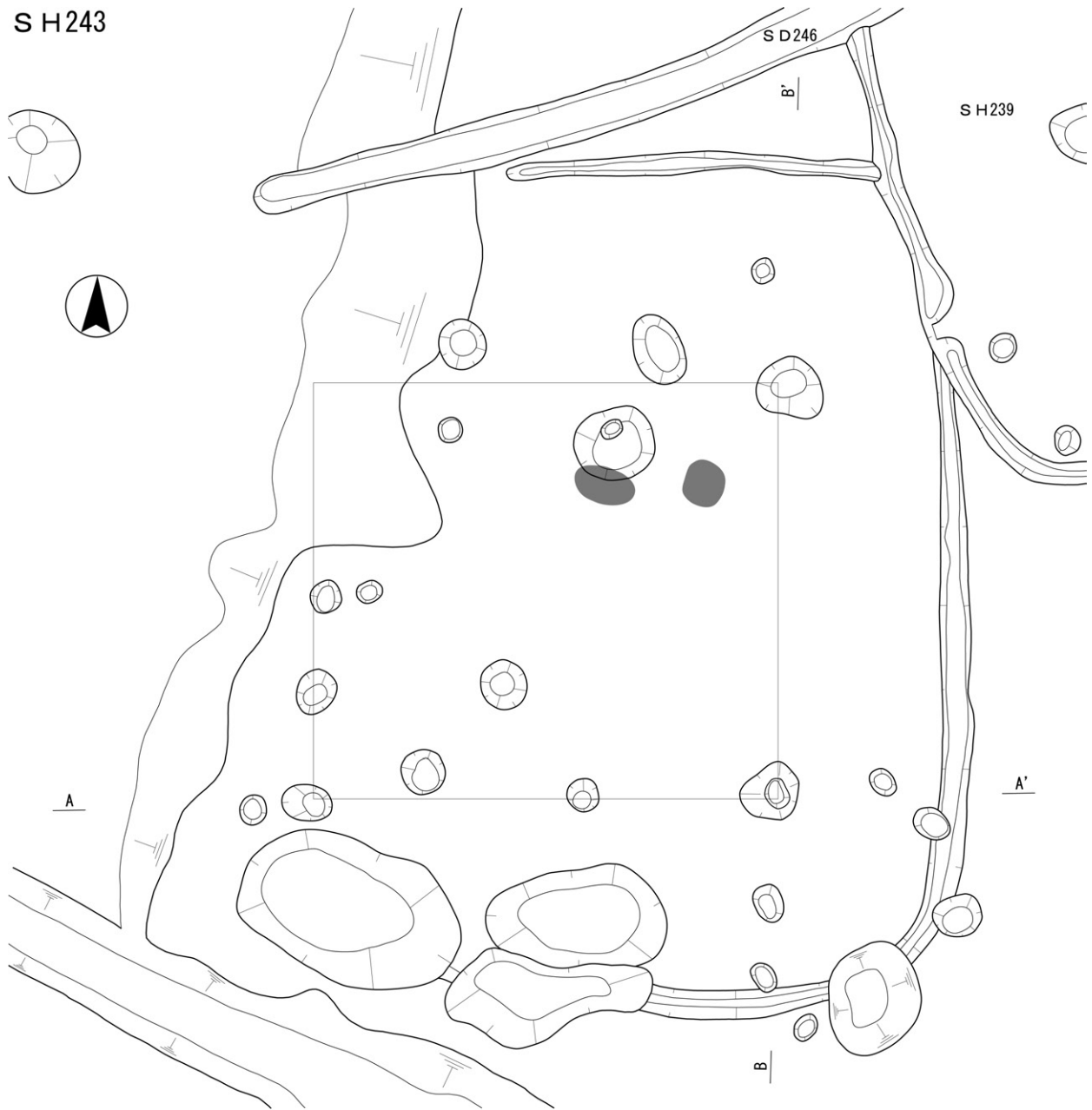
主柱穴は3基検出された。北西隅の主柱穴は攪乱によって失われているが、元は4基の主柱穴が建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されていたと考

S H242



第38図 S H242 (1/40)

S H243



第39图 S H243 (1/40)

えられる。南東隅の支柱穴については、調査時には建物床面で径0.3～0.4mほどのピットを支柱穴として平面的に検出したが、埋土が地山とかなり類似しており掘形が明確ではなかったために、その中央で検出された径0.15mほどの明らかなピットを柱穴と認識して掘削を行った。ただし、規模や埋土の様相からみると掘削したピットは柱痕ないし柱の抜き取り痕の可能性が高く、平面で検出した一回り大きなピットが柱穴の掘形であったと考えられる。

建物中央よりやや北側で浅い土坑が検出され、その付近で焼土も確認されたため、これが炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.1mほどある。この土坑の南側や西側にも土坑が存在するが、壁際溝との関係などを踏まえると、当該建物より後出するものである可能性が高い。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れておらず、全周すると思われるが、消失している西側では壁際溝が存在したか不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期と考えられる。

SH244 (第40・41図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。先行する建物であるSH249を、建て替わりに伴って若干拡張したものである。平面形は長軸7.1m、短軸6.8mの正方形に近い方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれの支柱穴も、拡張前のSH249の支柱穴の若干外側に掘り込まれている。

建物中央付近の床面の複数箇所から焼土が検出されているが、SH244とSH249のどちらに伴うものかは判然としない。ただし、土層断面ではSH249の貼床と思われる土層が被熱している箇所も認められ(A-A'断面第15層)、SH244の炉もこれらの焼土の分布範囲に存在したと考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い西側で検出さ

れた。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.7mほどある。壁際溝と一部重複して掘り込まれている。

壁際溝は、途切れず全周する。

貼床は、部分的に施されていると思われ、SH249の貯蔵穴埋土上面などで確認できる。周溝状掘形は確認できなかった。

なお、南西隅付近から南方向へ向かって、排水溝とみられる長さ3.0m、幅0.5m、深さ0.2mほどの細い溝が延びている。この溝が延びる先は、急斜面へと向かって標高が低くなっていく。

遺物は、北西隅付近で土師器広口壺が出土したほか、北東部でも弥生土器・土師器甕などの大きな破片が複数出土した。また、埋土からも弥生土器・土師器や磨製石斧など多量の遺物が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH245 (第31・32図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。SH228・241と完全に重複しており、これらの建物に先行する。SH228・241によってかなり削平を被っており、壁際溝が部分的に検出できたに過ぎないため全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.5m、短軸5.1mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

明確な支柱穴は検出されなかった。SH241の支柱穴と同一とも考えられるが、柱の並びが壁面と平行にならないことなどから、その可能性は低い。

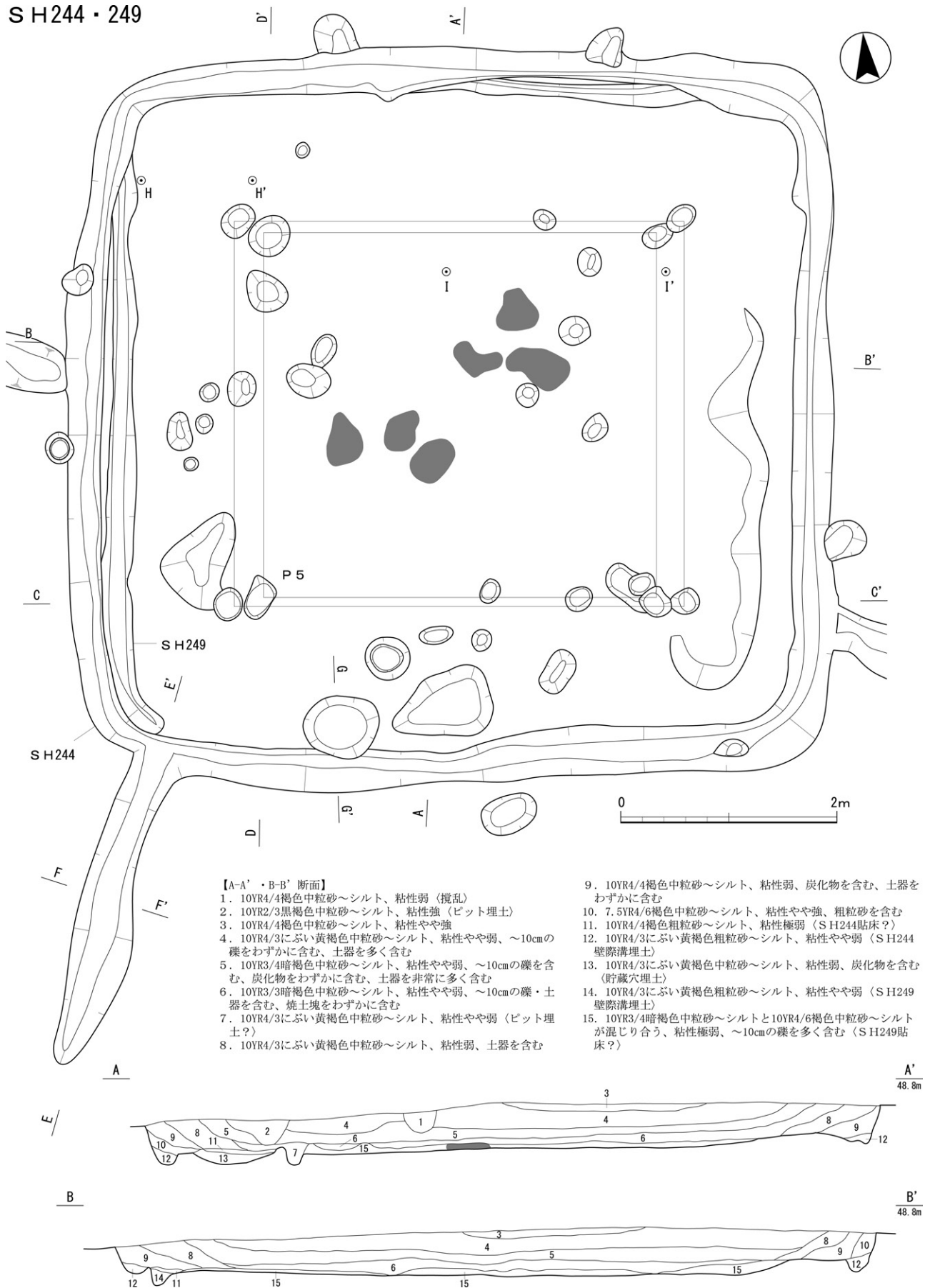
焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

この建物に伴う貯蔵穴とみられる土坑は検出されていないが、南壁沿い西側にSH228に伴うと考えられる貯蔵穴が存在しており、SH245に伴う貯蔵穴もこの位置に存在していた可能性が考えられる。

壁際溝は、北壁沿いと東壁沿いの一部で検出された。南壁や西壁沿いの壁際溝は検出できなかったが、SH241・245の壁際溝と重複している可能性も考えられる。

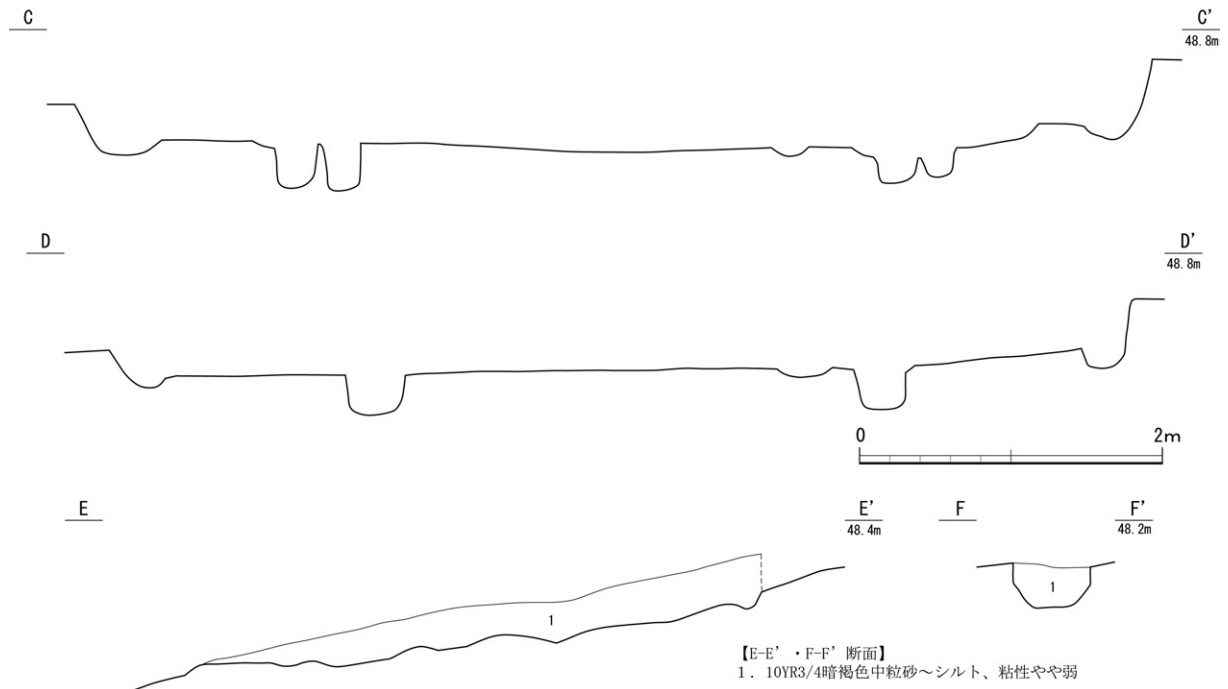
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、SH241・245の南壁の中央付近から建物中央に向かって延びる3本の細い溝は、間仕切りなど建物に伴う構造物の可能性が考えられるが、最も西側の最短のものは長さからみてSH245に伴うものとも思われる。ただし、位置からみると建物西側に

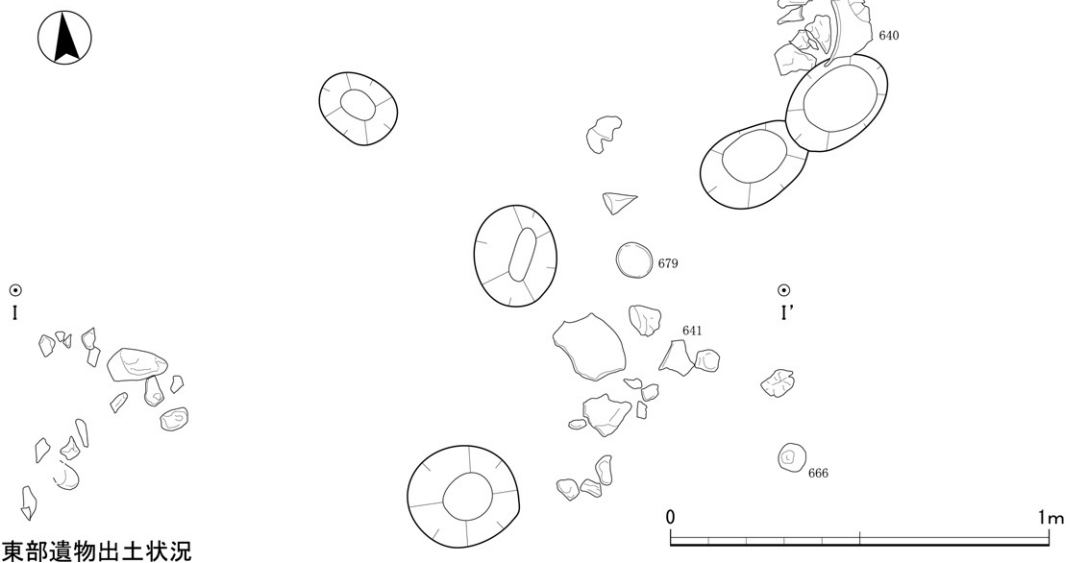
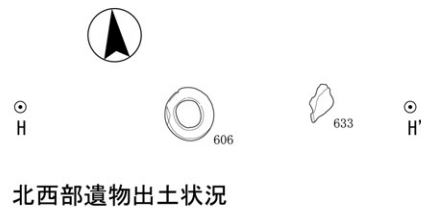
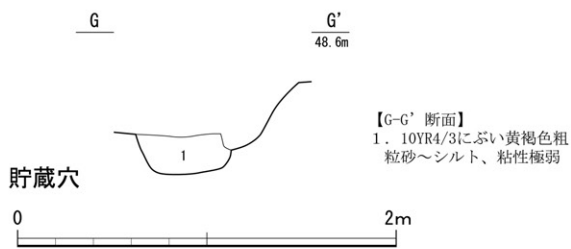


第40図 S H244・249① (1/50)

S H244・249

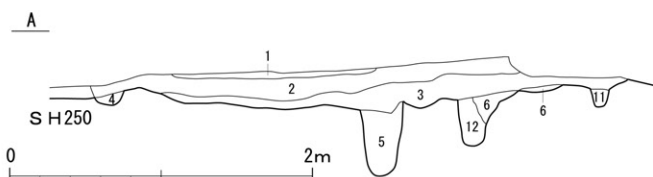


排水溝

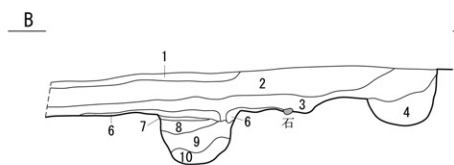


第41図 S H244・249② (1/50、1/40、1/20)

S H248 · 251



A'
48.6m



B'
48.6m

第42图 SH248 · 251① (1/50)

S H248・251

【A-A'・B-B' 断面】

- 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性弱、粗粒砂を含む
- 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、粗粒砂をわずかに含む、～5cmの礫を含む
- 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、粘性弱
- 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱
- 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや強（S H248支柱穴埋土）
- 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、粘性弱（S H248貼床）
- 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱（S H251貯蔵穴埋土）
- 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト（S H251貯蔵穴埋土、地山ブロック？）
- 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト、粘性極弱（S H251貯蔵穴埋土）
- 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、粘性弱（S H251貯蔵穴埋土）
- 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、粗粒砂をわずかに含む（S H251間仕切り溝？）
- 10YR3/4暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、～10cmの礫を含む（ピット埋土）



【C-C' 断面】

- 7.5YR4/6褐色中粒砂～シルト、粘性弱（焼土塊）
- 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱

S H248 炉



【D-D' 断面】

- 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱

S H248 貯蔵穴



【E-E' 断面】

- 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、粘性弱（S H248貼床）
- 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、粗粒砂・炭化物をわずかに含む
- 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや強、炭化物をわずかに含む

S H251 貯蔵穴



【F-F' 断面】

- 5YR4/4にぶい赤褐色極細粒砂～シルト
- 7.5YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト

S K247



第43図 S H248・251② (1/40)

偏在することになり、疑問が残る。

この堅穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

S H228・241との関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S H248 (第42・43図) 第2次調査区東部の第3・4次調査区との境で検出した建物である。大部分は第2次調査において調査がなされた。一部がS H250・485と重複しており、S H250より後出する。北東部が削平により遺存状況が悪く、そのためS H485との新旧関係は明確ではない。また、先行する建物S H251と完全に重複しており、S H251の建て替えに伴って拡張したものとも考えられる。全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸8.0m、短軸7.8mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は3基検出された。北東隅の支柱穴は攪乱によって失われているが、元は4基の支柱穴が建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されていたと考えられる。

建物中央よりやや南東側でピット状の小型の土坑が検出され、その埋土上層で焼土塊が確認されたため、これが炉と考えられる。この炉のすぐ西側には、S H248に伴うものとみられる浅い大型の土坑

(S K247) が存在しており、炉に関わる施設の可能性も考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い西側で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.8mほどある。壁面は中位でやや角度が変化しており、下半部の壁面は直立気味となる。壁際溝に接して掘り込まれている。

壁際溝は、全周すると思われるが、消失している北東部では壁際溝が存在したか不明である。また、S H250との重複箇所では検出されていないが、土層断面ではこの部分にも壁際溝が存在したことが確認できる(A-A'断面第4層)。

貼床は、部分的に施されていると思われ、S H251の貯蔵穴埋土上面などで確認できる。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器の台付甕や高坏が出土した。埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S H249 (第40・41図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H244と完全に重複しており、この建物に先行する。S H244との重複によって全

体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸6.7m、短軸6.5mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央付近の床面の複数箇所から焼土が検出されている。SH244とSH249のどちらに伴うものかは判然としないが、SH249の炉もこの焼土の分布範囲に存在したと推定される。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な三角形を呈する土坑で、長径1.0mほどある。SH244による削平を被っているため、深さ0.15mほどしか遺存していない。埋土には炭化物が含まれている。

壁際溝は、西壁沿いと北壁沿いの一部で検出された。SH244の壁際溝と重複している東壁沿いや南壁沿いに壁際溝が存在したかは不明であるが、南西隅付近では元々途切れていた可能性がある。

貼床は、建物内の広い範囲に施されていたと思われる。建物内の南部から東部にかけて、やや掘形が深くなっており、その部分を中心に貼床と思われる土層が認められる。ただし、明確な周溝状掘形ではない。

遺物は、主柱穴P5から弥生土器・土師器の高坏が出土している。

出土遺物やSH244との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH250 (第44図) 第2次調査区東部の第3次調査区との境で検出した建物である。東側が他の建物などによってかなり削平を被っており、全体の形状にも判然としない部分があるが、平面形は長軸5.8m、短軸5.7mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。SH248・251と重複しており、SH248に先行し、SH251より後出する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑も判然としないが、南隅で不整形な土坑が検出されており、これが貯蔵穴の可能性もある。ただし、深さは0.2mほどと浅い。埋

土には炭化物が含まれていた。

壁際溝は、南東壁を除く壁沿いで検出された。東隅付近や南東壁沿いでは、他の遺構等の影響もあり、壁際溝が存在したか不明であるが、南東壁の推定位置付近では、部分的に壁際溝の可能性のある細い溝が認められる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南隅から南西方向へ向かって、排水溝とみられる長さ2.8m、幅0.4m、深さ0.2mほどの細い溝が延びている。排水溝の端は次第に浅くなって消えていく。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やSH248・251との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH251 (第42・43図) 第2次調査区東部の第3・4次調査区との境で検出した建物である。第2次調査で確認されたが、第4次調査では検出されておらず、北側はほぼ消失しているものと思われる。一回り大きい建物SH248と完全に重複しており、この建物に先行する。全体の形状は不明であるが、平面形は長軸・短軸6.0mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

明確な主柱穴は検出されなかった。SH248の主柱穴と同一とも考えられるが、その場合、主柱穴と壁との間がかなり狭くなるため、その可能性は低い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東隅付近と南西隅付近の2箇所検出された。南東隅付近のものは一部がピットと重複しているため全体の形状は不明確であるが、平面形が不整形な隅丸方形の土坑で、長軸0.5mほどと思われる。壁面は直立気味に立ち上がる。埋土には炭化物を含んでおり、埋没後、上面にはSH248の貼床が施されている。南西隅付近のものは平面形が不整形な長方形の小型の土坑で、やはり上面にSH248の貼床が認められる(B-B'断面第6層)。

壁際溝は、南壁沿いのみ検出された。遺存状況が悪いため、ほかの壁沿いにも壁際溝が存在したかは不明である。

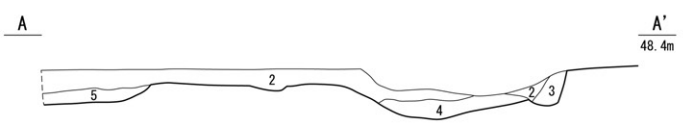
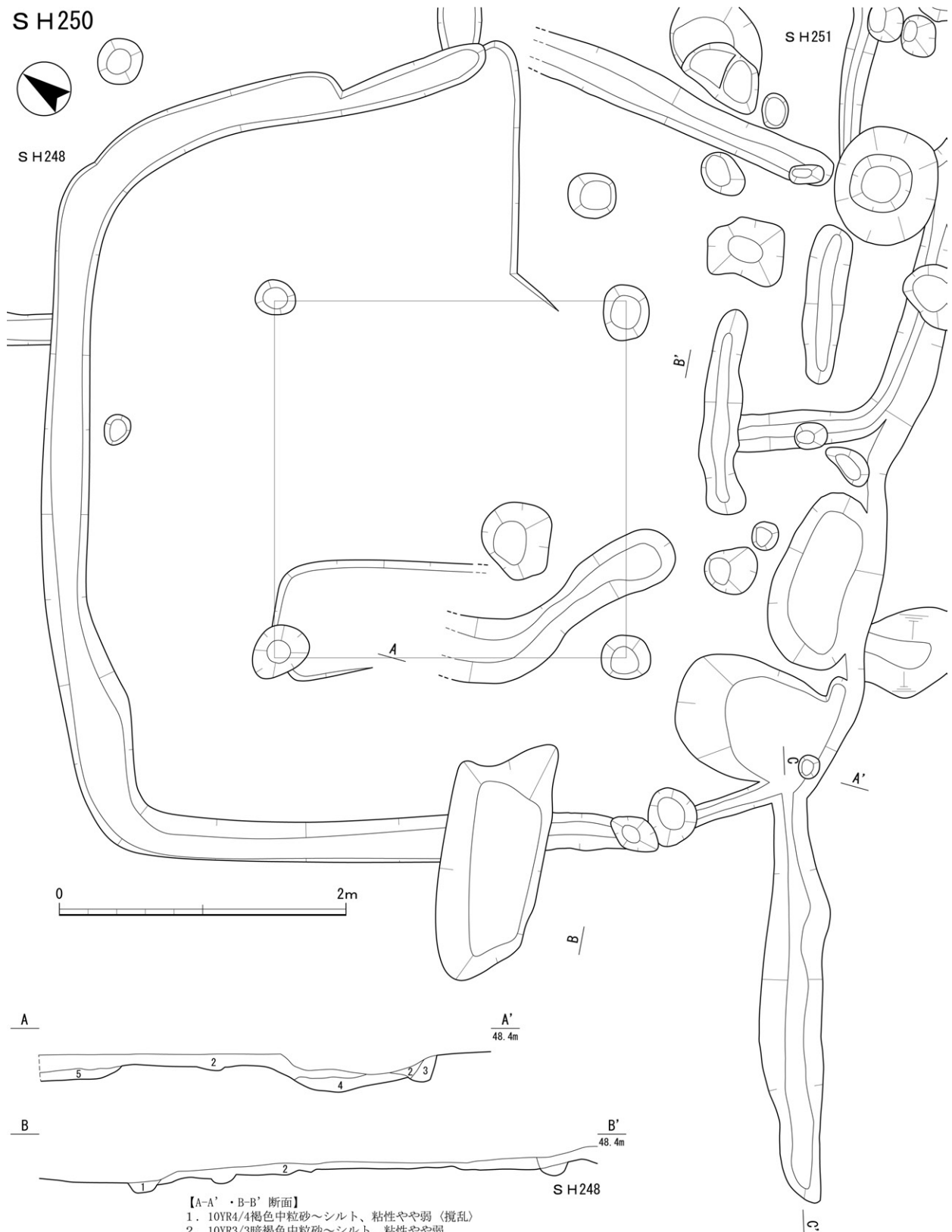
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

S H250



S H248

S H251



- 【A-A'・B-B' 断面】
1. 10YR4/4褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱（攪乱）
 2. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱
 3. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、粘性極弱
 4. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、炭化物をわずかに含む
 5. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト



- 【C-C' 断面】
1. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～シルト、粘性やや弱、粗粒砂をわずかに含む

排水溝

第44図 S H250 (1/40)

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。SH248ではこうした間仕切り溝は確認されておらず、支柱穴の様相なども鑑みると、SH248とSH251にはやや構造に差異があったとも考えられ、単純にSH251の建て替えに伴う拡張によってSH248が構築されたものではないかもしれない。

遺物は、間仕切り溝や埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH253 (第45図) 第2次調査区東部の第4次調査区との境で検出した建物である。全体的に削平を被っており、遺存状況が悪い。そのため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸6.4m、短軸6.1mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿い南側で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.6mほどある。

壁際溝は、北西壁沿いと南東壁沿いの一部で検出された。遺存状況が悪いため、ほかの壁沿いにも壁際溝が存在したかは不明であるが、南西壁沿いと思われる箇所にも短い溝状の遺構が認められ、壁際溝の痕跡の可能性はある。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

確実にこの竪穴建物に伴う遺物は出土しなかったが、建物内にあたる場所に位置するピットから、弥生土器・土師器が少量出土している。

こうしたピットの出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の可能性が高いと思われる。

SH255 (第46図) 第2次調査区の西部で検出した建物である。斜面に位置しており、斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。遺構がかなり流失しているため全体の形状等は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸3.8mほどの正方形に近い方形を呈するものと推定

される。SH271と完全に重複しており、SH271に先行する。ただし、後述のようにSH255とSH271は同一の建物を構成する可能性もある。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。斜面の上方と下方とで、柱穴底面の標高にかなりの差がある。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、北東壁沿いで検出された。北東壁沿いの壁際溝は、東端で緩やかに屈曲し、南東壁沿いへ若干続く。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、壁際溝から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やSH271との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH256 (第47図) 第2次調査区の西部で検出した建物である。SH274と完全に重複しており、この建物に先行する。斜面裾部に位置しており、緩やかな斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。南側は流失しており、またSH274によって削平を被っているため全体の形状は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸5.1m、短軸4.4mほどのやや長方形を呈する可能性がある。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は長軸・短軸4.4mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

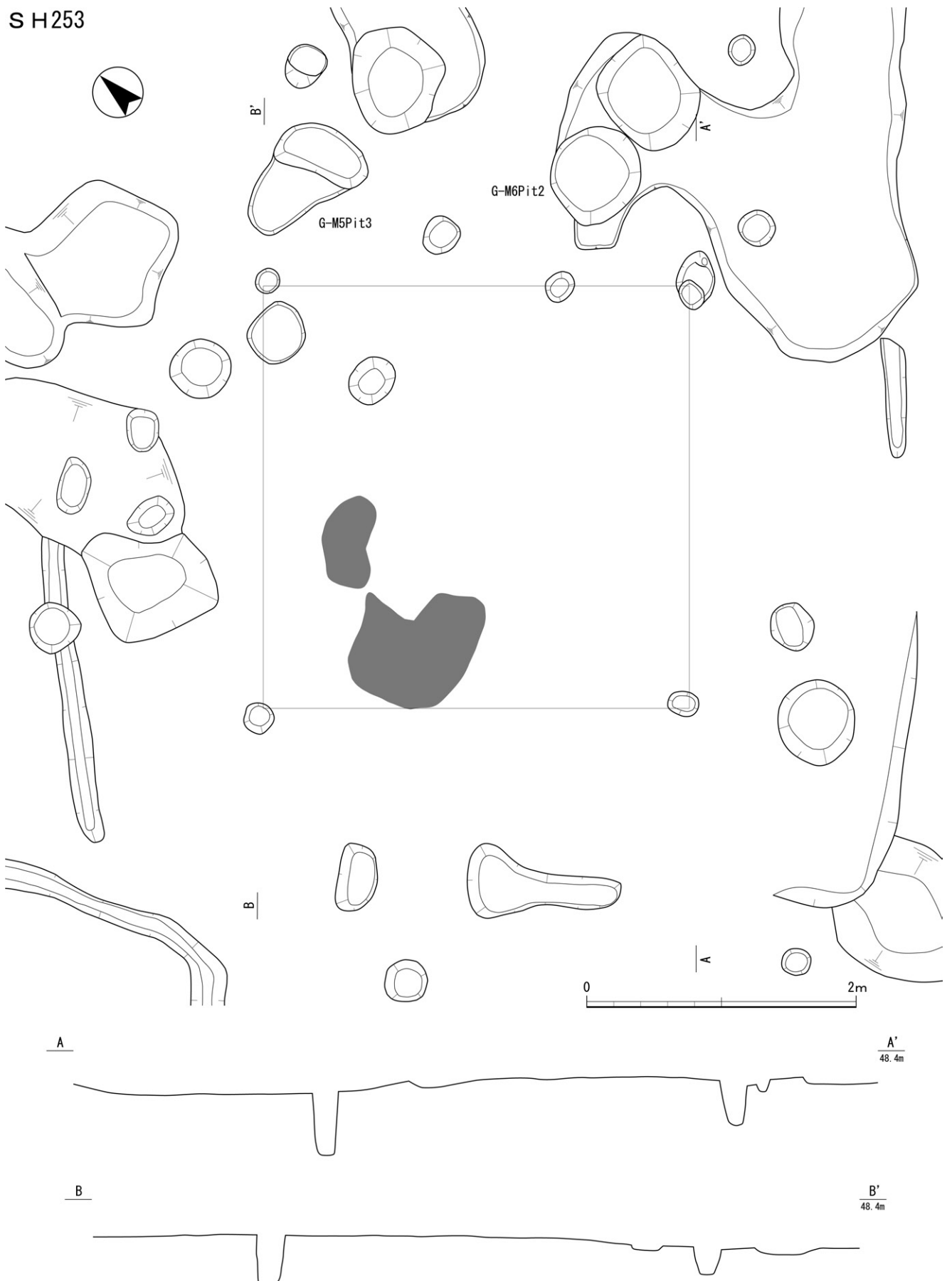
支柱穴は3基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。南隅の柱穴は検出されなかったが、重複するSH274でも同様であり、流失した可能性が高い。斜面の上方と下方とで、柱穴底面の標高にかなりの差がある。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑も検出されていないが、南東壁沿い中央付近にSH274に伴う貯蔵穴とみられる大型の土坑が存在しており、SH256の貯蔵穴もこの位置に存在していた可能性が考えられる。

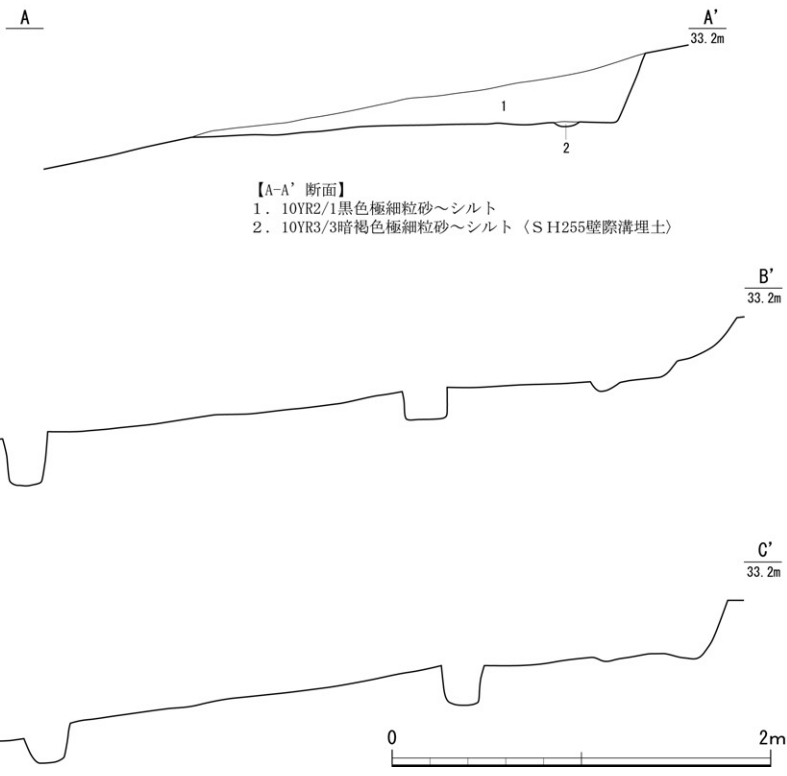
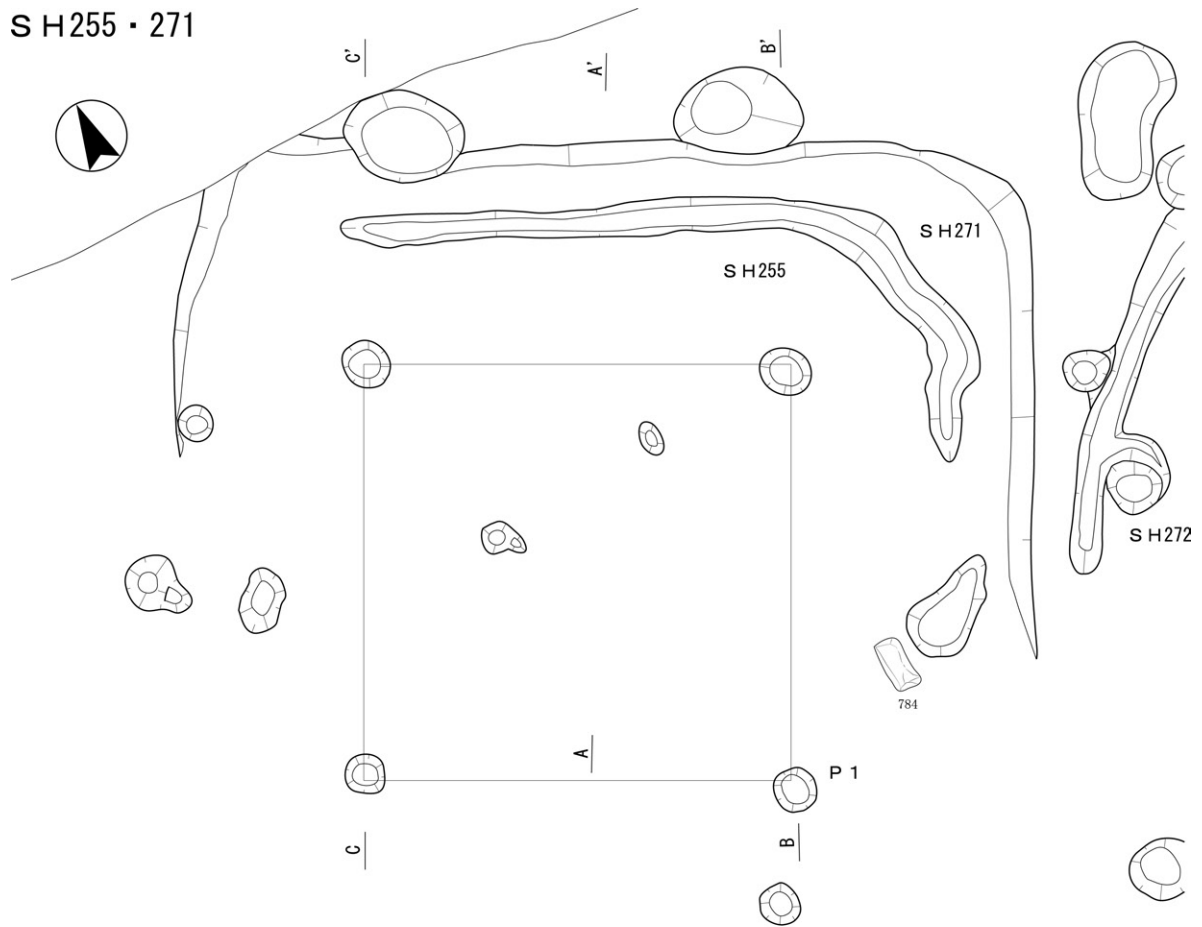
壁際溝は、北東壁沿いと北西壁沿いの一部で検出されている。北西壁沿いの壁際溝は不整形で、やや

S H253



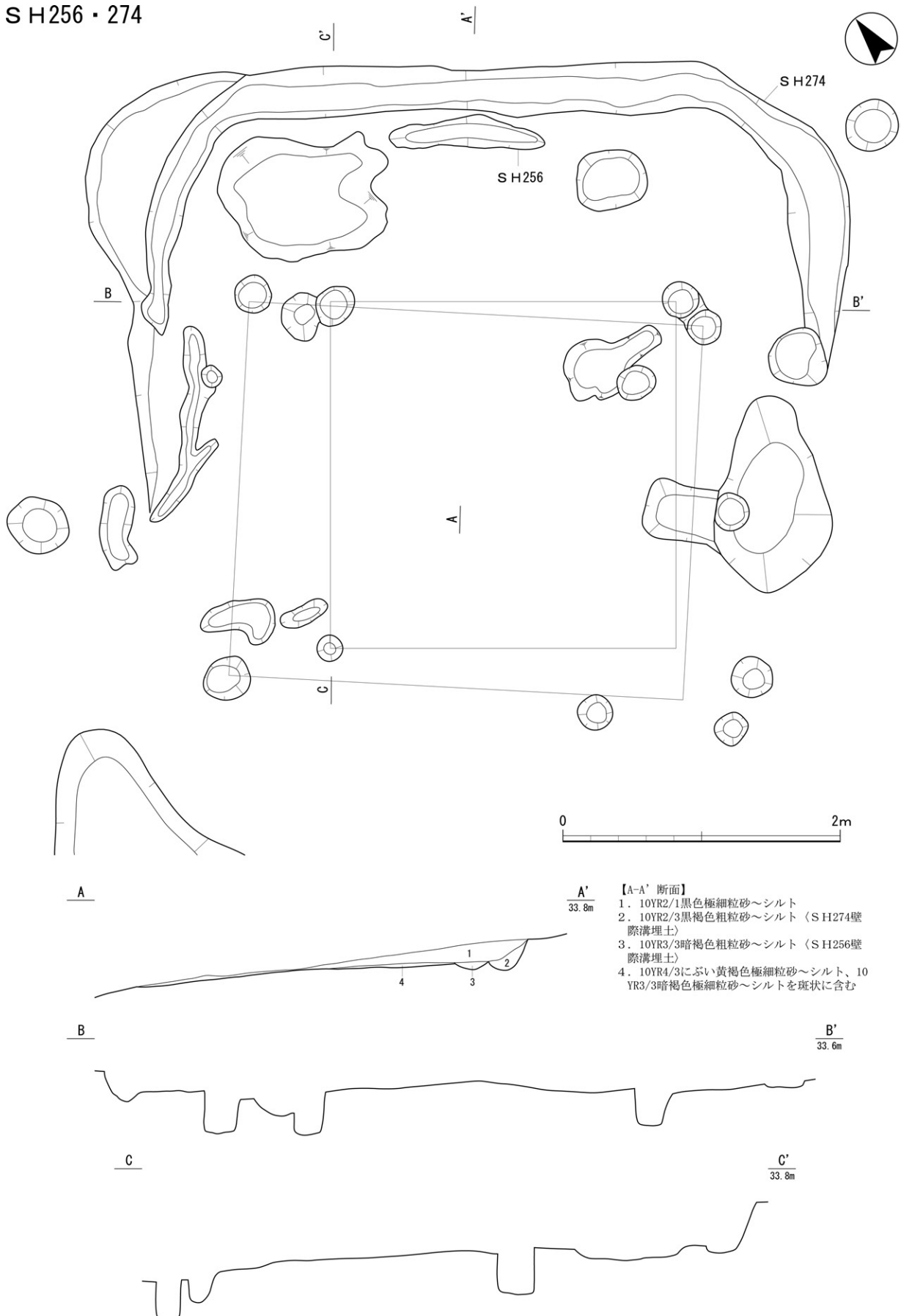
第45図 S H253 (1/40)

S H255・271



第46図 S H255・271 (1/40)

S H256・274



第47図 S H256・274 (1/40)

外湾する。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床は明確には認められなかったが、土層断面では床面にブロック状の極細粒砂～シルトを含む土層が薄く存在しており（A-A'断面第4層）、SH256の壁際溝がその土層を一部掘り込んでいるように見受けられる。これが妥当であれば、この土層が当該建物に伴う貼床とも考えられよう。周溝状掘形は確認できなかった。

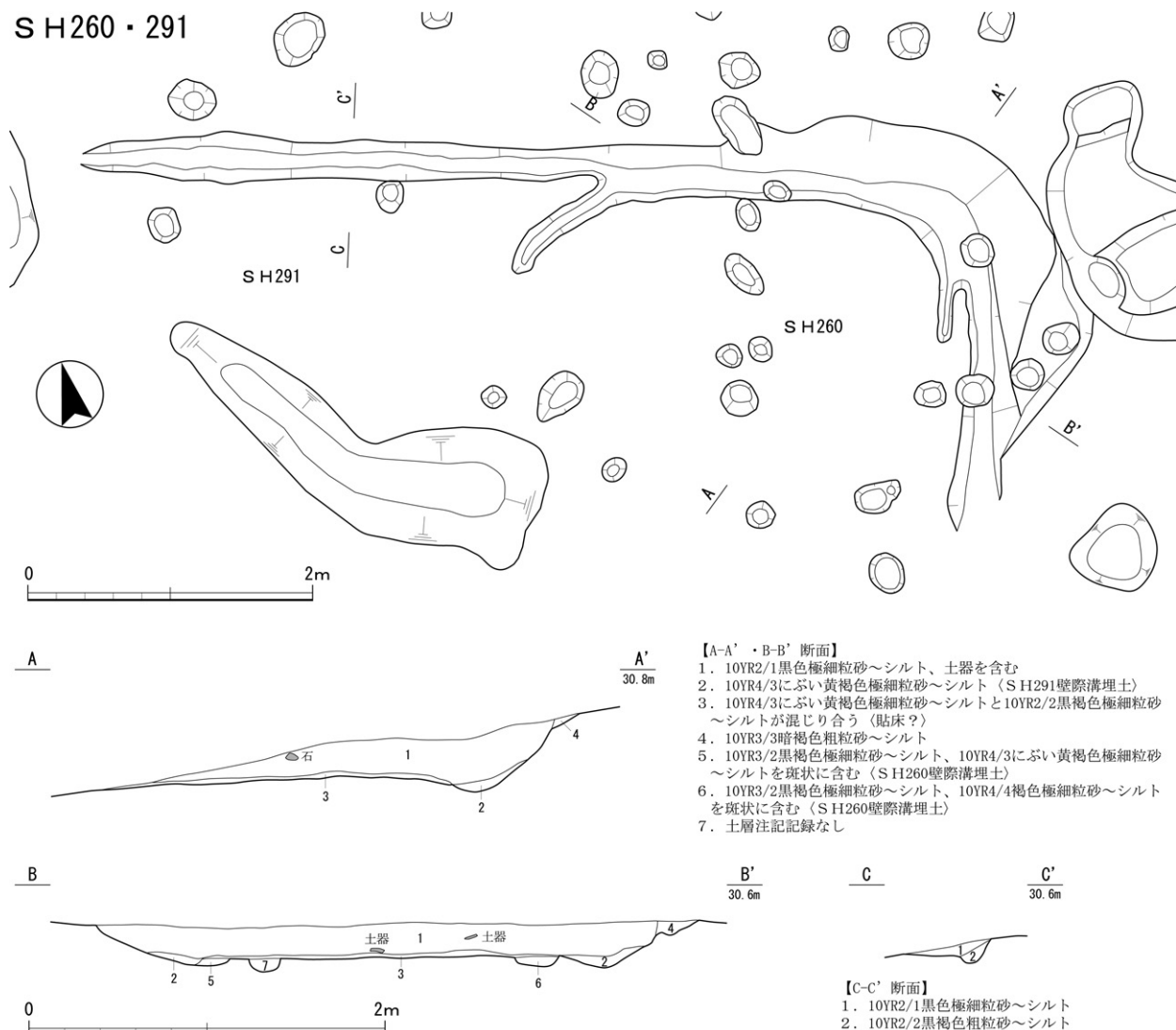
この竪穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

SH274との関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH260（第48図） 第2次調査区の西部で検出した建物である。斜面裾部に位置しており、緩やかな斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。南側は流失しており、全体の形状は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸3.5mほどの正方形に近い方形を呈するものと推定される。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は短軸が2.8mほどになると思われる。SH291と完全に重複しており、この建物に先行する。

明確な支柱穴は検出されなかった。炉や貯蔵穴なども検出されていない。

壁際溝は、北壁沿いと東壁沿いの一部で検出され



第48図 SH260・291 (1/50、1/40)

ている。北壁沿いの壁際溝は、西端で緩やかに屈曲し、わずかに西壁沿いへと続いている。大部分でSH291の壁際溝と重複しているが、SH291の壁際溝よりやや内側に位置している。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

一部が流失していることを踏まえても、全体的に簡素な構造であった可能性が高く、堅穴建物というよりは段状遺構に近いものとも考えられる。

この堅穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

SH291との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期中葉～後葉と考えられる。

SH264 (第49図) 第2次調査区の西部で検出した建物である。斜面裾部に位置しており、緩やかな斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。南側は流失しているため全体の形状は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸・短軸5.0mほどの正方形を呈するものと推定される。建物の隅は比較的鋭く屈曲している。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央よりやや西側で浅い土坑が検出され、その付近で焼土も確認されたため、これが炉と考えられる。貯蔵穴は検出されなかった。

壁際溝は、南壁沿いを除く壁沿いで検出された。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる。付近の地山に礫が多く含まれていることも影響してか、貼床と考えられる土層には拳大の礫が多数含まれていた。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P1・2や埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

SH271 (第46図) 第2次調査区の西部で検出し

た建物である。斜面に位置しており、斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。遺構がかなり流失しているため全体の形状等は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸4.5mほどの正方形に近い方形を呈するものと推定される。SH255と完全に重複しており、この建物より後出する。

SH255が建て替えに伴って拡張された可能性が高いと考えられるが、支柱穴はいずれもSH255のものと同一であるとみられることや、SH255には壁際溝が存在するにも関わらずSH271では確認できないことなどを鑑みると、SH271はSH255の掘形である可能性も考えられる。

SH271に伴う炉の痕跡や貼床なども確認できず、こうした点からもSH255とは別の建物とする根拠は見出しがたい。ただし、南東壁沿いに貯蔵穴とも考えられる平面形が不整形な楕円形の土坑が存在する。SH255の壁際溝との位置関係を考えると、これが貯蔵穴とすればSH271に伴うものである蓋然性が高いと思われ、その場合はSH255とSH271は別の建物と捉えられよう。

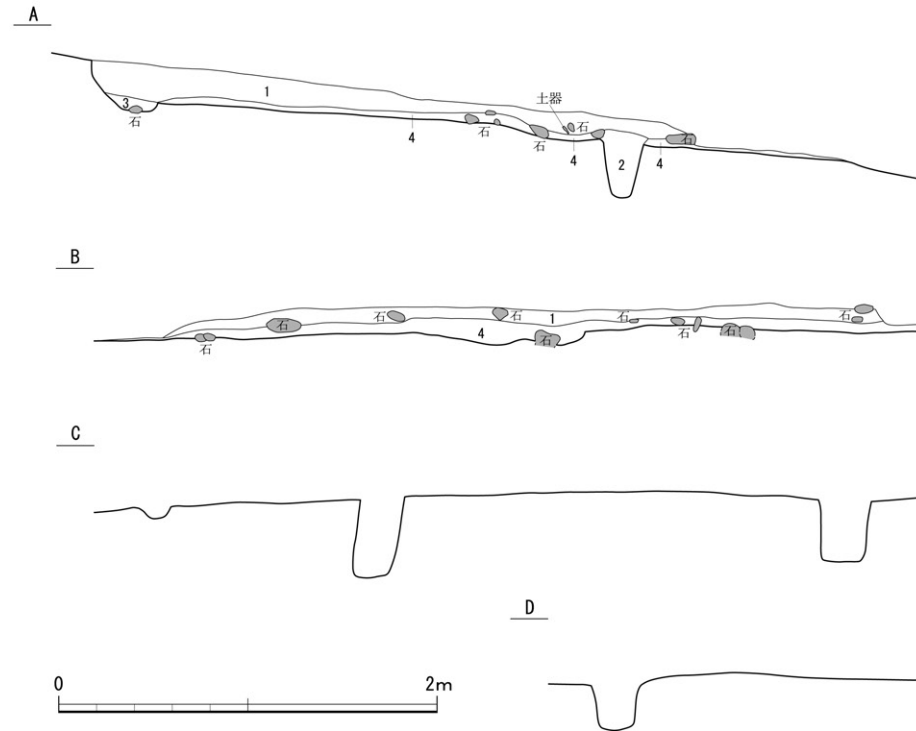
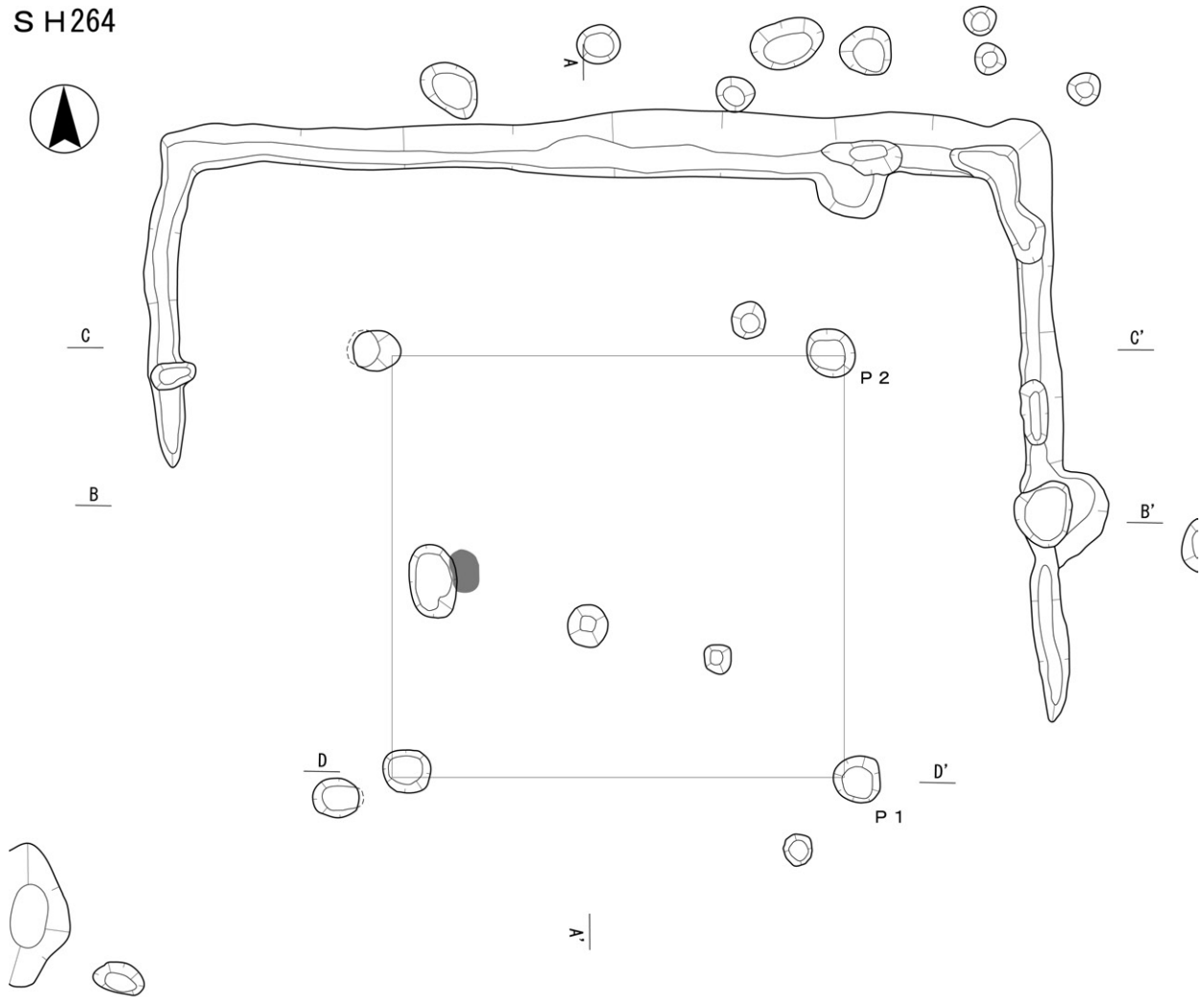
遺物は、南東壁沿いで比較的大型の砥石(784)が1点検出されている。また、貯蔵穴の可能性のある土坑の上面から弥生土器高坏の脚部が出土した(写真図版32)。このほか、支柱穴P1や埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH272 (第50図) 第2次調査区の西部で検出した建物である。斜面裾部に位置しており、緩やかな斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。南西側は流失しており、全体の形状は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸4.2mほど⁶⁾、短軸3.8mのやや長方形を呈するものと推定される。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。ただし、斜面上方にあたる北東側では北東壁から支柱穴までの間が1.3mほどあるのに対して、北西壁及び南東壁から支柱穴までの間は1.0mほどと、若干狭くなっている。支柱穴の深さは、0.2m前後とやや浅い。

S H264

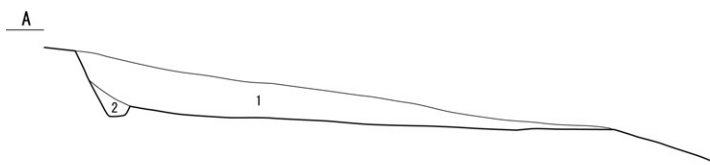
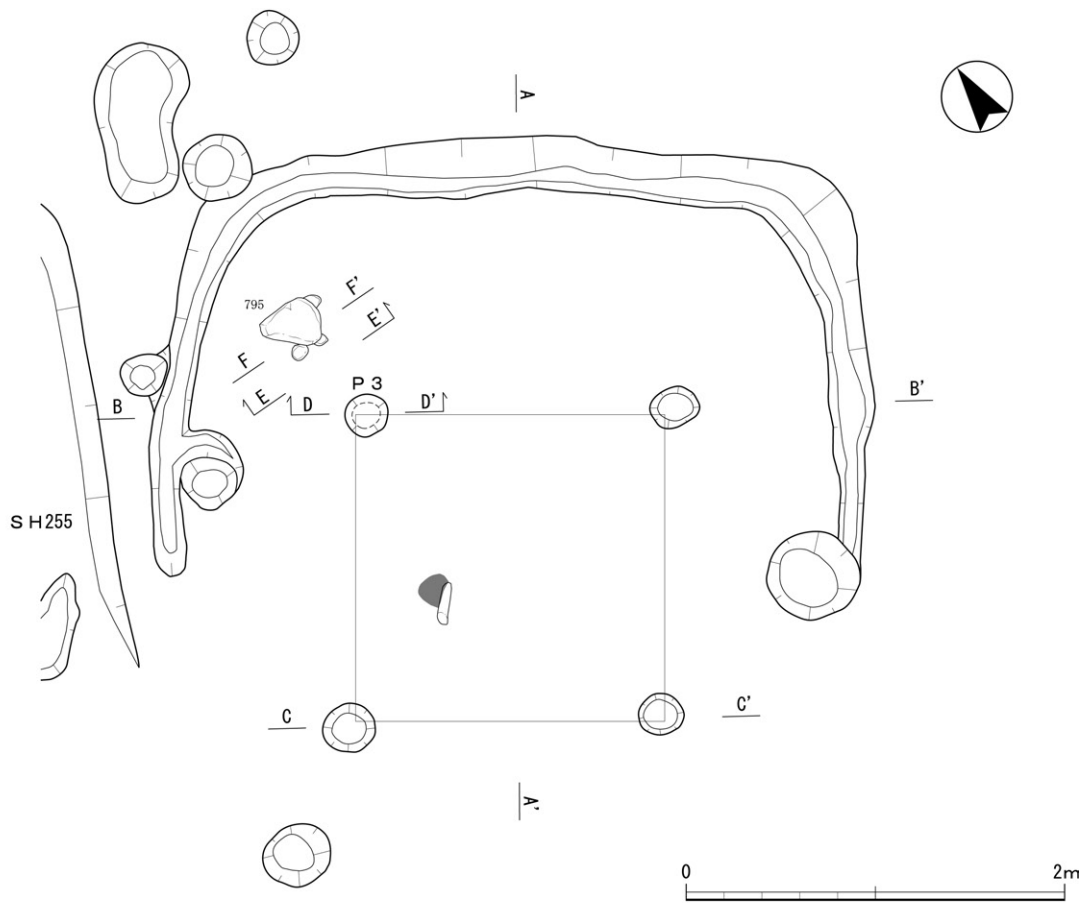


- A'-A' 33.0m** 【A-A'・B-B' 断面】
1. 10YR2/2~2/3黒褐色極細粒砂〜シルト、~10cmの礫を含む
 2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂〜シルト〈ピット埋土〉
 3. 10YR2/2~4/2黒褐〜灰黄褐色極細粒砂〜シルト、粗粒砂を少量含む
 4. 10YR3/3~4/3暗褐〜にぶい黄褐色極細粒砂〜シルト、5~10cmの礫を含む〈貼床?〉

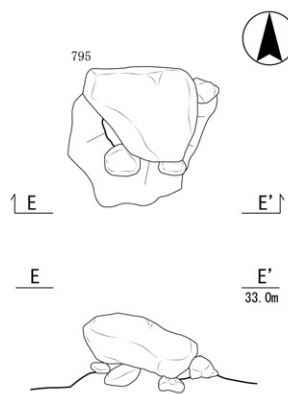
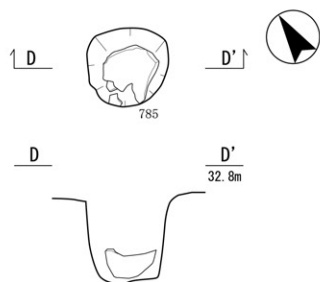


第49図 S H264 (1/40)

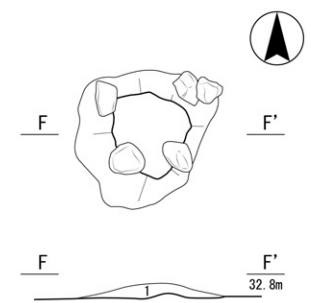
S H272



【A-A' 断面】
 1. 10YR2/1黒色極細粒砂～シルト
 2. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト



台石設置状況
 台石出土状況



【F-F' 断面】
 1. 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトと
 10YR5/4こぶい黄褐色粗粒砂～シルトが
 混じり合う

台石除去後



支柱穴 (P3) 遺物出土状況

第50図 SH272 (1/40、1/20)

建物中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。また、細長い礫が伴っており、添石炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿い中央付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.5mほどある。壁際溝と一部重複して掘り込まれている。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れておらず、全周すると思われるが、流失している南西側に壁際溝が存在したかは不明である。斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P3の底面付近から、弥生土器壺(785)の大きな破片が出土した。意図的に入れられた可能性が高い。北隅付近では大型の台石(795)が検出された。この台石は長径32.6cmとかなり大型のもので、使用面を上にして出土したが、安定させるため床面上に配した複数の拳大の礫の上に置かれていた。また、礫とともに低いマウンド状に土が盛られている状況も確認された。この土は埋土と土質が異なり、意図的に置かれたものと考えられるが、部分的な埋土の差異や、ごく一部に施された貼床が残存した可能性も残るため、台石の安定が目的のものとは断定できない。このほか、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH273 (第51図) 第2次調査区西部の第3次調査区との境で検出した建物である。大部分は第2次調査の際に調査されている。斜面裾部に位置しており、緩やかな斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。南側は流失等によって遺存状況が悪く、全体の形状は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸5.5m、短軸4.6mほどの長方形を呈するものと推定される。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は長軸が4.6mほどになると思われる。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。支柱穴を結ぶラインと壁との間の距離は、

北東側のみかなり広い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径0.9mほどある。

壁際溝は、南西壁沿いの一部で検出された。ただし、他の遺存状況の良好な壁沿いでは検出されず、確実にこの建物に伴う壁際溝か疑問が残る。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH274 (第47図) 第2次調査区の西部で検出した建物である。SH256と完全に重複しており、この建物の建て替えに伴って拡張したのと考えられる。斜面裾部に位置しており、緩やかな斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。南側は流失しているため全体の形状は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸6.2m、短軸5.1mほどの長方形を呈する可能性がある。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は長軸・短軸5.1mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

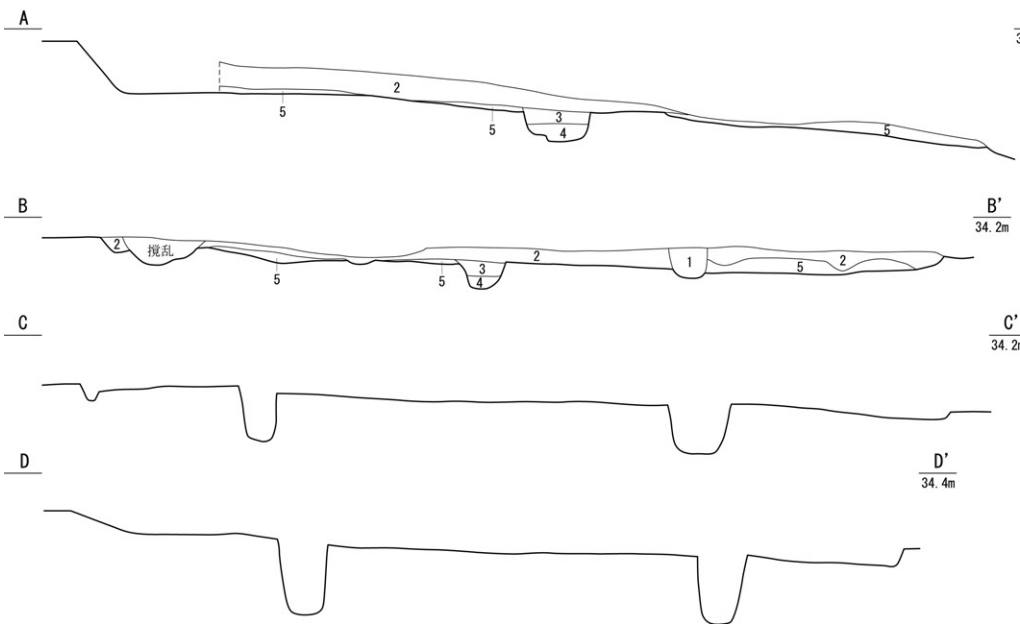
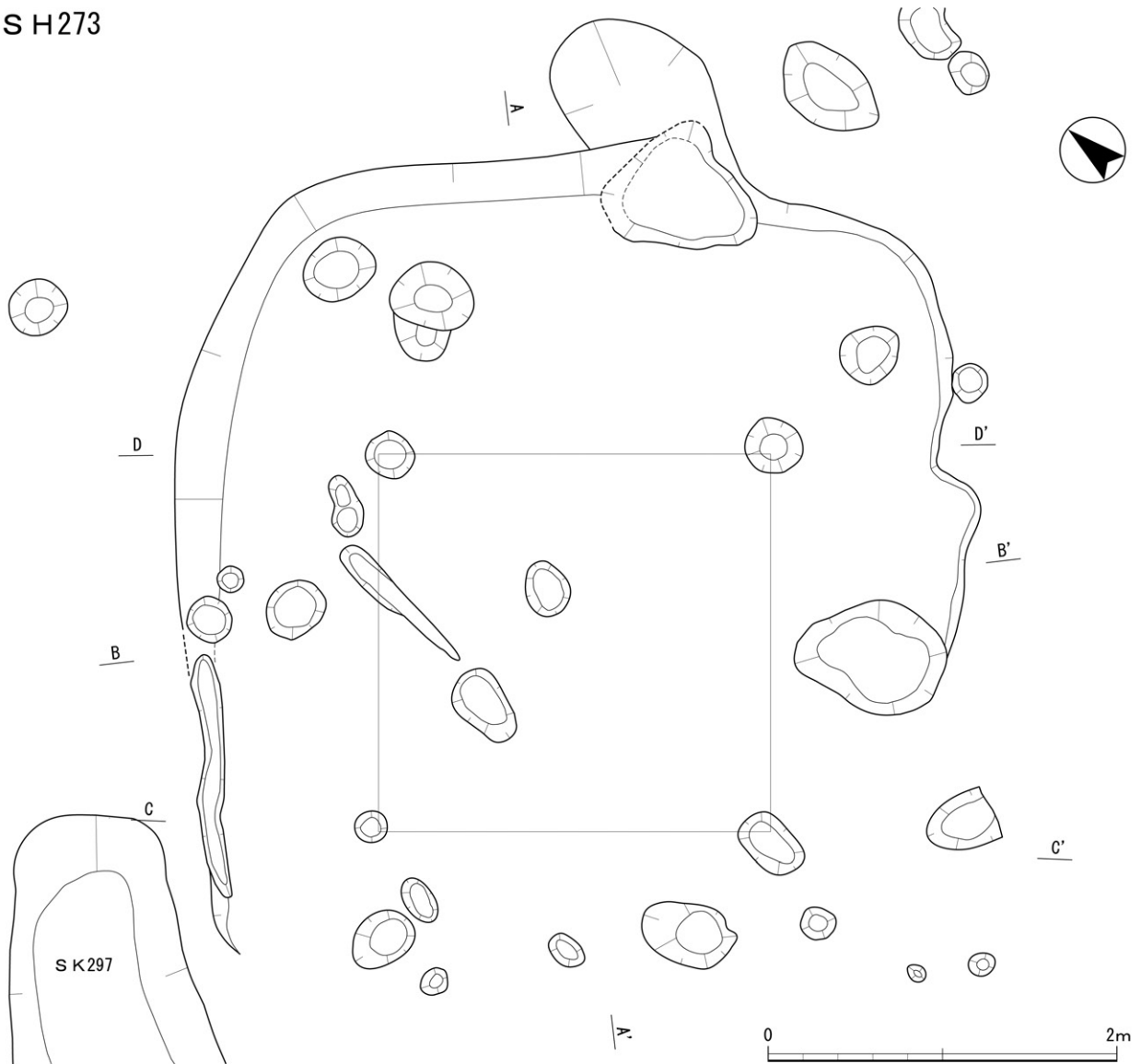
支柱穴は3基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されているが、柱の並びと北東壁のラインがやや斜行するため、別のピットが本来の支柱穴である可能性も残る。南隅の柱穴は検出されなかったが、重複するSH256でも同様であり、流失したものと推定される。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.4mほどある。

壁際溝は、北東壁沿いで検出された。北東壁沿いの壁際溝は、両端で緩やかに屈曲し、南東壁及び北西壁沿いへ若干続く。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするよう

SH273



- A' 34.4m** 【A-A'・B-B'断面】
1. 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト
 2. 10YR1.7/1黒色極細粒砂～シルト、～5cmの礫を含む
 3. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト
 4. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト
 5. 10YR4/2灰黄色極細粒砂～シルトと10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルトが混じり合う（貼床）

第51図 SH273 (1/40)

に構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H 291 (第48図) 第2次調査区の西部で検出した建物である。斜面裾部に位置しており、緩やかな斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。南側及び西側は流失しており、全体の形状は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸7.0m、短軸3.5m以上の長方形を呈するものと推定される。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は短軸が2.8mほどになると思われる。斜面を大きくカットしている北東部では比較的遺存状況がよく、深さは0.4mほどある。S H 260と重複しており、この建物より後出する。

明確な支柱穴は検出されなかった。炉や貯蔵穴なども検出されていない。

壁際溝は、北壁沿いと東壁沿いで検出されている。北壁沿いではS H 260の壁際溝と重複している。流失している南側や西側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されているものと思われる。S H 260の壁際溝埋土の上にもS H 291の貼床と思われる土層が認められる。周溝状掘形は確認できなかった。

一部が流失していることを踏まえても、平面形がかなり長細い長方形を呈する可能性があり、支柱穴や炉、貯蔵穴も検出されなかったことからみて、竪穴建物というよりは段状遺構に近いものとも考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期中葉～後葉と考えられる。

S H 298 (第52図) 第2次調査区の西部で検出した建物である。斜面裾部に位置しており、緩やかな斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。大部分が流失しており、全体の形状は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸5.0m、短軸4.8mほどの正方形に近い方形を呈するものと推定される。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合はもう少し規模が小さくなる。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。

建物中央付近の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は不明確であるが、南西側の支柱穴を結ぶラインの中央付近やや西側に、平面形が不整形な円形を呈する径0.6mほどの土坑が存在しており、これが貯蔵穴の可能性が高い。

壁際溝は、北東壁沿いで検出されている。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴から砥石として使用されたとみられる軽石が出土したほか、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

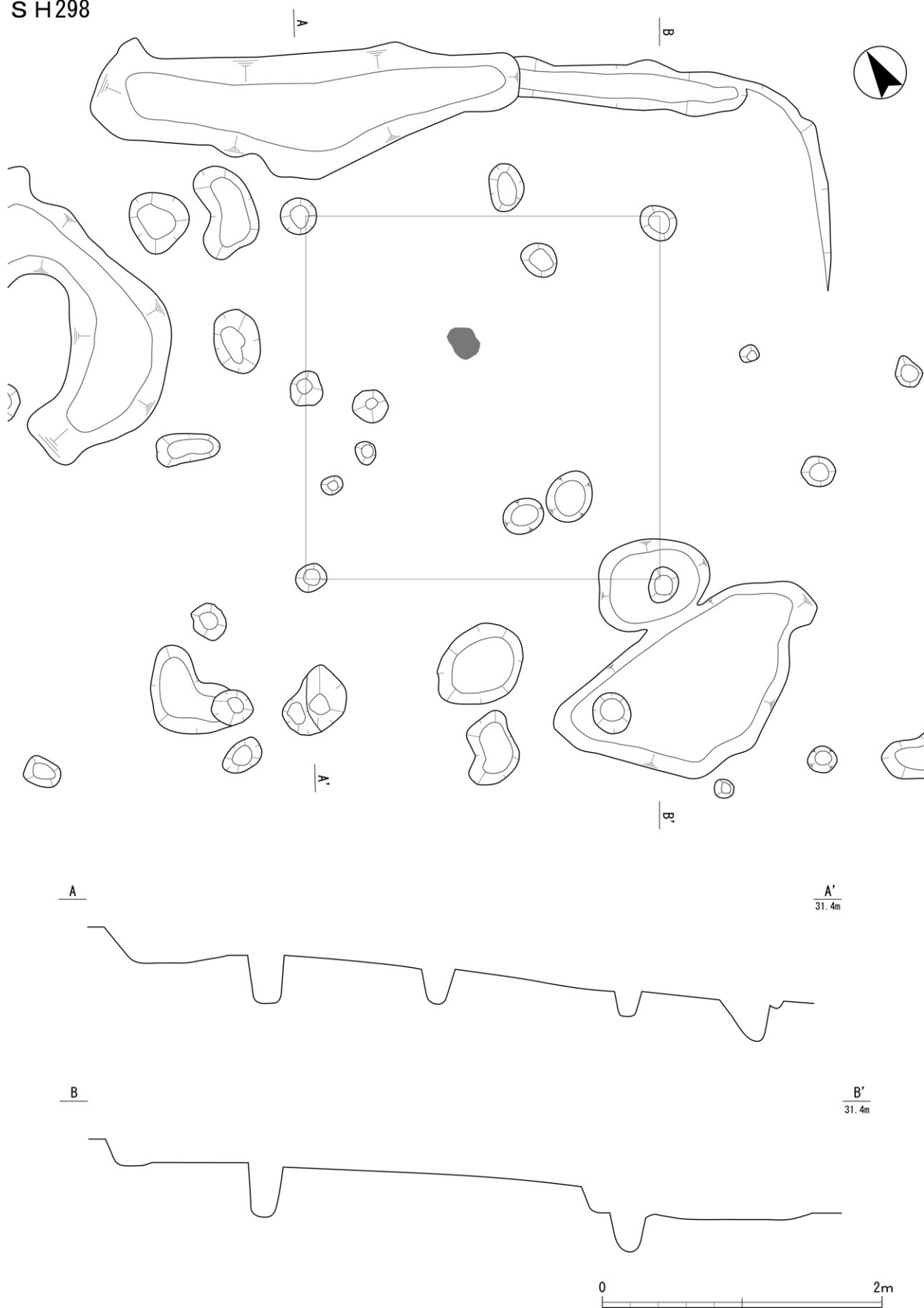
出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H 303 (第53図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。北側の半分以上は調査区外となっており、未調査である。平面形は長軸5.1m、短軸2.2m以上の方形を呈するものと思われる。南西隅に比べると南東隅は鋭く屈曲するように見受けられるが、南東隅の壁際溝の内側は緩やかなカーブを描いており、本来的には隅が丸みを帯びた平面形をなすと推定される。

支柱穴は2基検出された。本来は、建物の平面形に沿って方形に配置されていたものと思われる。

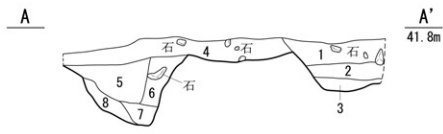
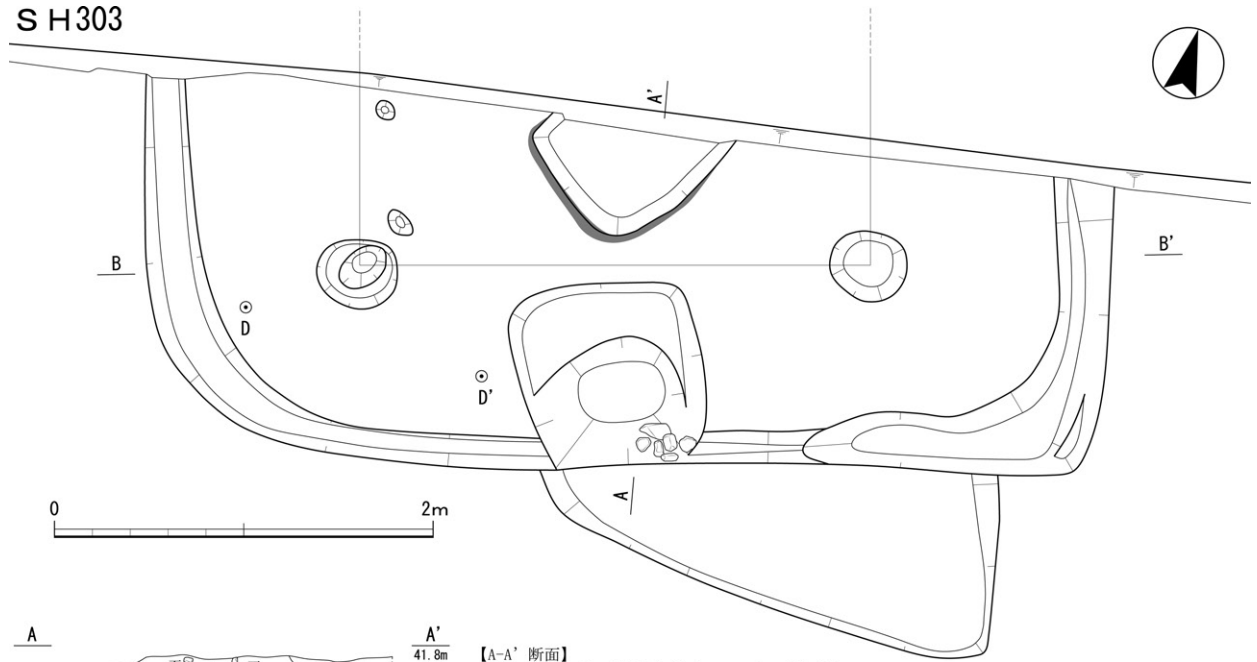
焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。建物中央には方形の土坑が存在し、その肩部には被

S H298



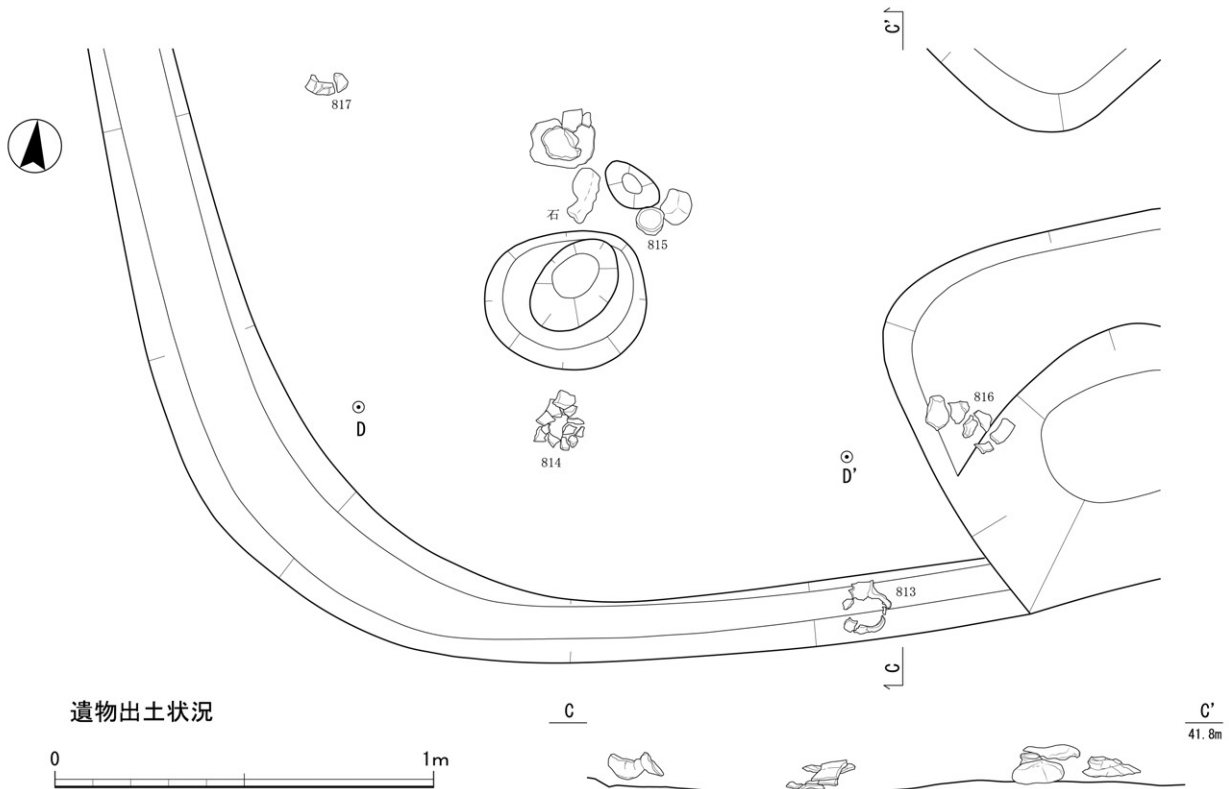
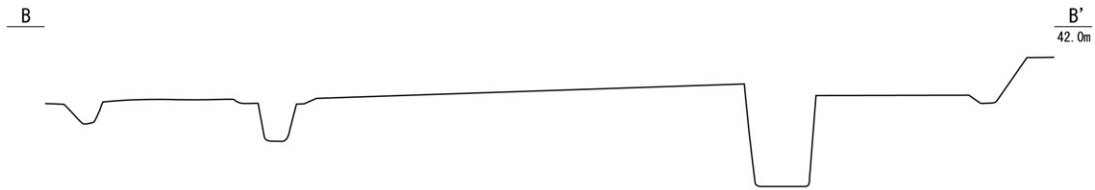
第52図 S H298 (1/40)

S H303



【A-A' 断面】

- 1. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト、礫を含む
- 2. 10YR3/2黒褐色細粒砂～シルト
- 3. 10YR6/4にぶい黄橙色粗粒砂～シルト
- 4. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、礫を含む
- 5. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト
- 6. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、礫を含む
- 7. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト
- 8. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト



遺物出土状況

第53図 S H303 (1/40、1/20)

熱が認められるが、土層断面からS H303の埋没後に掘り込まれていることが明らかで、時期が下る別の遺構と考えられる⁷⁾。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が正方形に近い方形の土坑で、長軸1.0mほどあり、壁に接して掘り込まれている。南東隅付近の埋土上層からは、複数の礫が集中して検出されている。

壁際溝は、貯蔵穴と重複する箇所を除き、遺存している範囲では途切れておらず、全周すると思われる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器の壺の底部と、台石が出土した。また、南西隅付近の床面直上で比較的遺存状況が良好な弥生土器壺や甕、高坏などが出土した。一部は貯蔵穴や壁際溝の上面でも検出されている。このほか、埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H305 (第54・55図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。斜面の高所に位置しており、斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。S H306と重複しているが、新旧関係は不明である。南側の大部分が流失していることやS H306との重複などによって、全体の形状等はほとんど明らかにすることができなかったが、壁際溝と思われる遺構が存在することから堅穴建物とした。

明確な支柱穴は検出されなかった。建物内と考えられる範囲で数基のピットが検出されており、深さが0.3～0.4mほどのものもみられるが、位置等からみて支柱穴は考えにくい。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、北壁沿いで検出された。西端で屈曲し、若干西壁沿いへと延びているようである。また、東側ではS H306の壁際溝と重複しており、S H305の壁際溝の範囲は不明瞭である。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみ掘り込まれていた可能性が高い。

大部分が流失していることを踏まえても、全体的に簡素な構造であった可能性が高く、堅穴建物というよりは段状遺構に近いものとも考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H306 (第54・55図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。斜面の高所に位置しており、斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。S H305と重複しているが、新旧関係は不明である。南側の大部分が流失していることやS H305との重複などによって、全体の形状等はほとんど明らかにすることができなかったが、壁際溝と思われる遺構が存在することから堅穴建物とした。

明確な支柱穴は検出されなかった。建物内と考えられる範囲で多数のピットが検出されており、深さが0.3～0.4mほどのものもみられるが、建物の範囲が不明確なこともあり、支柱穴かは判断できない。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、北壁沿いで検出された。西側ではS H305の壁際溝と重複しており、S H306の壁際溝の範囲は不明瞭である。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみ掘り込まれていた可能性が高い。

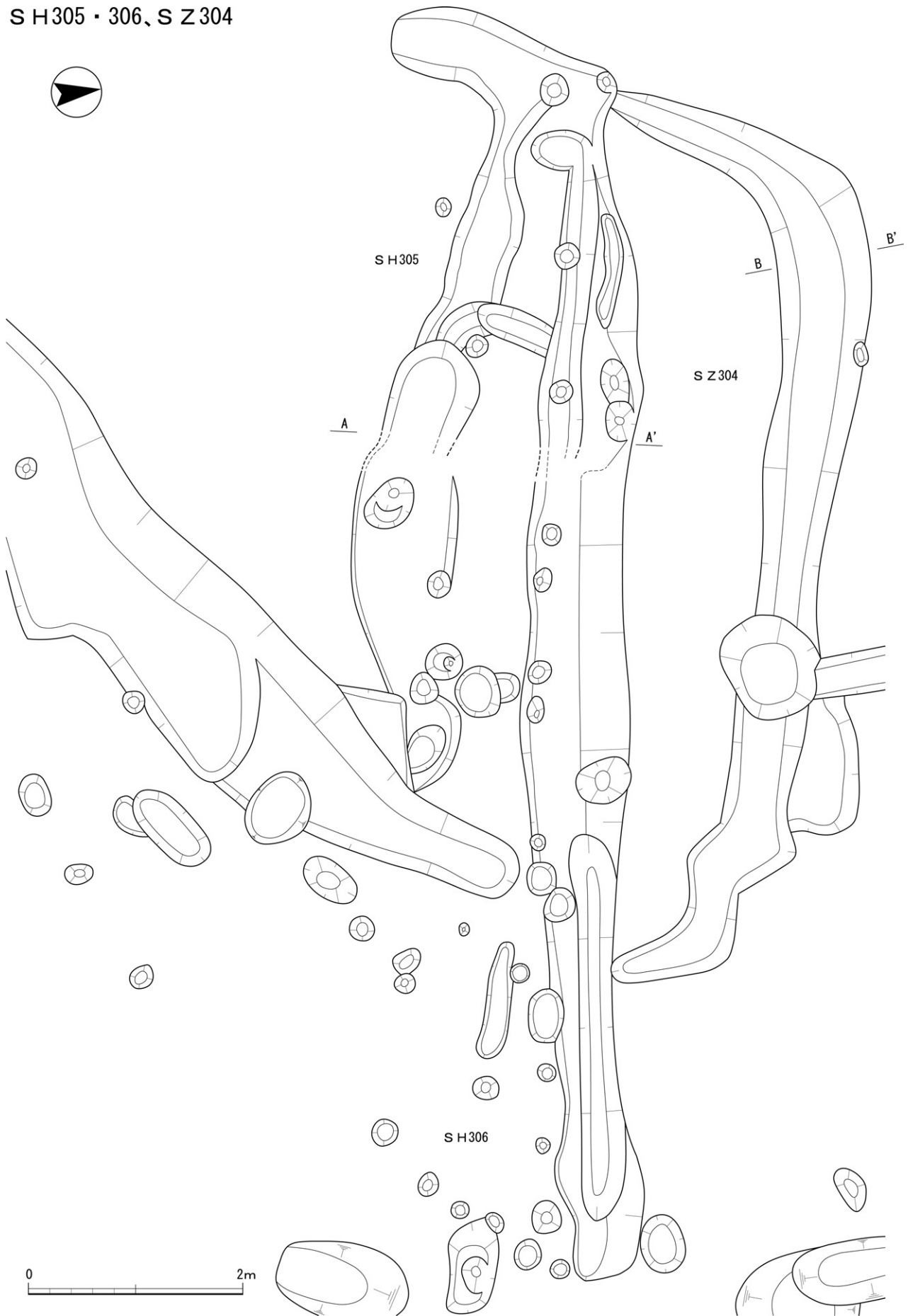
大部分が流失していることを踏まえても、全体的に簡素な構造であった可能性が高く、堅穴建物というよりは段状遺構に近いものとも考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。また、奈良時代の須恵器や土師器も出土しているが、当該期の遺構が重複していたか、埋没過程で埋土に混入したと思われる。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

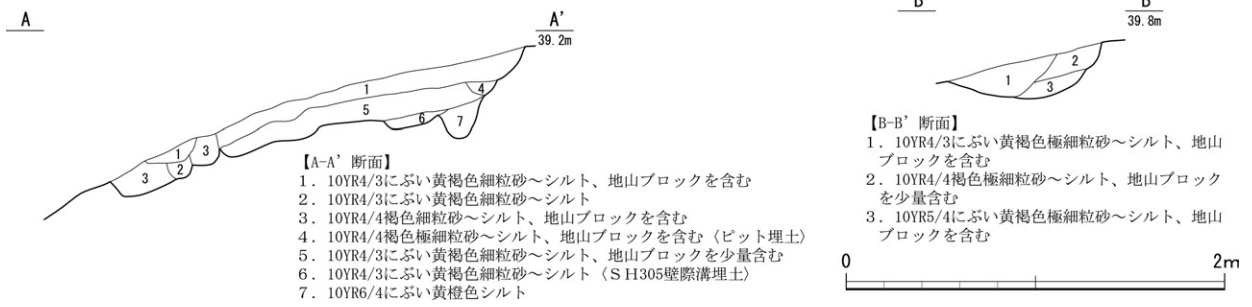
S H309 (第56図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。斜面の高所に位置しており、斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。南側がかなり流失しているため全体の形状等は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形

S H305 · 306, S Z 304



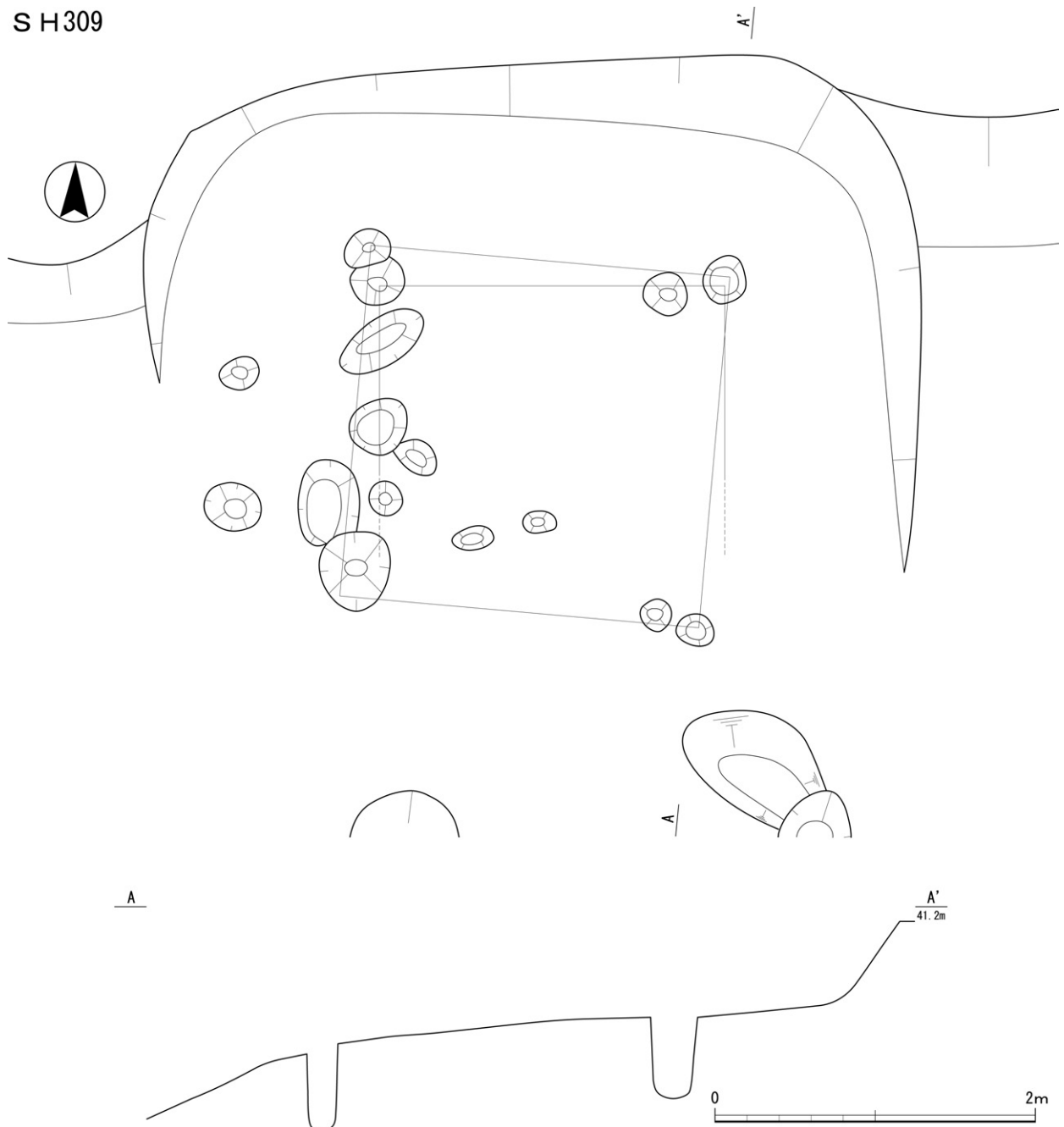
第54图 S H305 · 306, S Z 304① (1/50)

S H 305・306、S Z 304



第55図 S H 305・306、S Z 304② (1/40)

S H 309



第56図 S H 309 (1/40)

は長軸4.8m、短軸4.6mほどの正方形に近い方形を呈するものと推定される。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は短軸が4.2mほどになると思われる。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されているが、建物の平面形とはややずれが認められる。北西隅の支柱穴の南側に接して別の支柱穴の可能性のあるピットが検出されているため、これが本来の支柱穴と考えると建物の平面形と柱の並びは一致するが、南側に対応する支柱穴は検出されていない。建物の建て替えが行われており、建て替え後に建物構造が簡素にされたか、新たな柱穴が流失した可能性も考えられよう。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴や壁際溝、貼床なども検出されなかった。

一部が流失していることを踏まえても、全体的に簡素な構造であった可能性が高く、竪穴建物というよりは段状遺構に近いものとも考えられる。

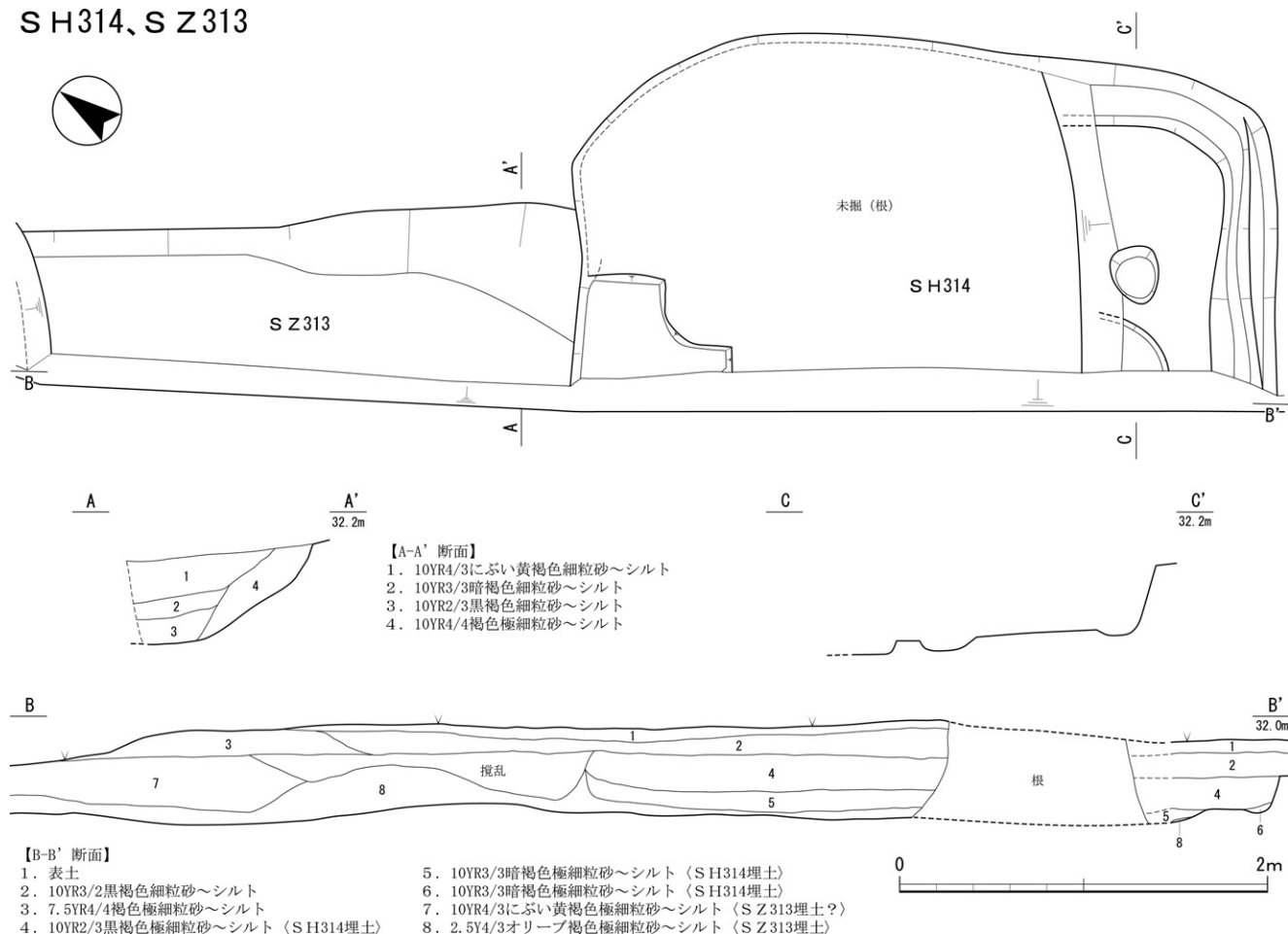
遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H314 (第57図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。西側の半分程度は調査区外となっており、未調査である。また、かなり大きな木の切り株が存在したため、調査区内においても大部分を調査することができなかった。平面形は長軸3.8m、短軸2.0m以上の方形を呈するものと思われる。東壁が直線的とならず若干弧状に張り出しているのは、根による攪乱のためである可能性が高い。段状遺構 S Z313と重複しており、これに後出する。

明確な支柱穴は検出されなかった。調査できた範

S H314、S Z313



第57図 S H314、S Z313 (1/40)

囲でピットを1基検出しており、位置からみると主柱穴とも考えられるが、かなり浅い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、調査できた南東隅付近では途切れていない。ごく一部調査できた北壁沿いでは、攪乱の影響もあり検出できなかった。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H315 (第58図) 第3次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸6.8m、短軸5.5mの長方形を呈する。東壁は直線的ではなく、中央部がやや外側に突出し五角形状になっているようにも見受けられるが、北東隅付近が攪乱によって一部削平を被っているため、その影響があるものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って長方形に配置されている。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.9mほどある。深さは0.2mほどと浅い。また、北壁沿い中央付近でも土坑が検出されており、これも貯蔵穴であった可能性も考えられる。

壁際溝は、北壁を除く壁沿いで検出された。ただし、西壁沿いでは一部途切れており、東壁沿いでも攪乱を被っている箇所では検出できていない。

貼床は明確ではないが、部分的に貼床の可能性がある土層が認められる(第24・25層)。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、主柱穴P1から弥生土器・土師器高坏の脚部が出土した。埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期と考えられる。

S H316 (第59図) 第3次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸3.9m、短軸3.5mの正方形に近い方形を呈する。ただし、かなり遺存状況が悪く、主柱穴の位置などを鑑みると、西側はもう

少し規模が大きくなり、長軸4.8mほどとなる可能性があり、本来の平面形は長方形であったと考えられる。

主柱穴は4基検出された。南北の柱間に比べて東西の柱間は広く、長方形に配置されている。西側の主柱穴は西壁にかなり近い位置にあり、この点からも、本来の建物の壁はもう少し西側に存在した可能性が指摘できる。

建物中央よりやや北側で浅い土坑が検出されており、被熱痕跡が認められることから、炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。わずかに西側へ片寄る。平面形が不整形な円形の土坑で、径1.0mほどある。壁に接して掘り込まれている。埋土には礫が多く含まれていた。

壁際溝は、西壁を除く壁沿いで検出された。ただし、南壁沿いの貯蔵穴より西側では検出されていない。また、本来の西壁は削平により既に失われている可能性が高く、西壁沿いに壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器の壺や高坏の破片が出土した。埋土からも弥生土器・土師器が出土しているが、少量である。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H318 (第60図) 第3次調査区の東部で検出した建物である。S H337と重複しており、この建物に先行する。S H337による削平に加えて、谷の肩部に位置しており斜面に面した北側がかなり流失しているため、全体の形状等は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸6.0m、短軸3.0m以上の方角を呈するものと推定される。

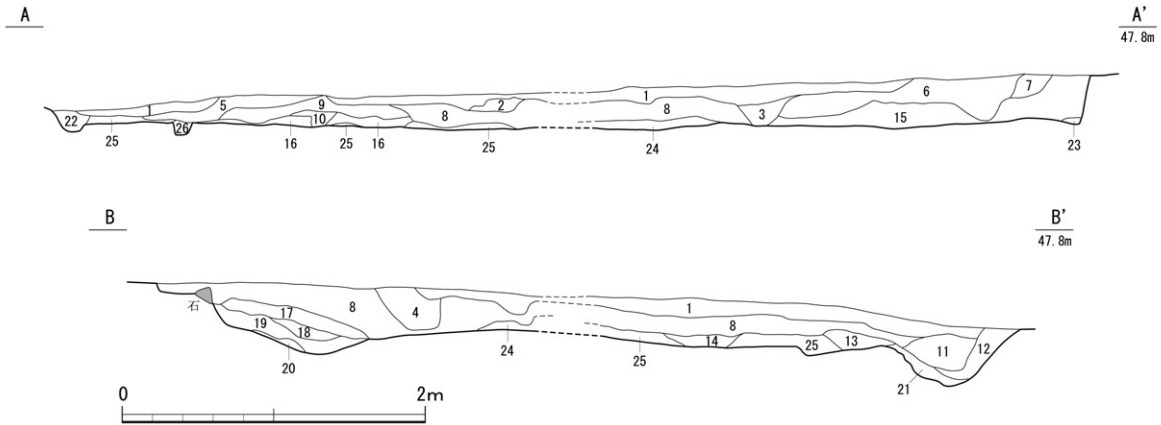
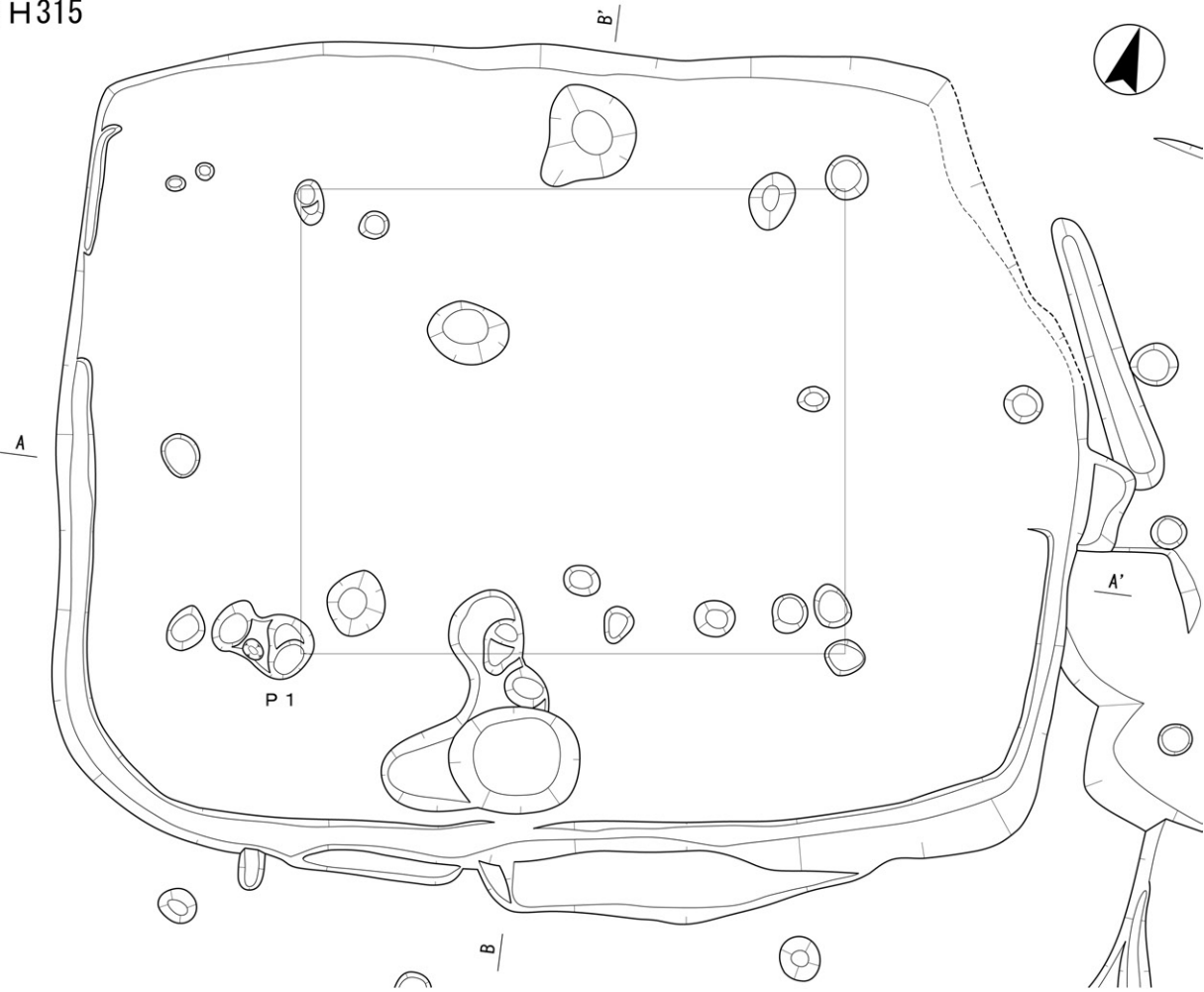
主柱穴は2基検出された。本来は、建物の平面形に沿って方形に配置されていたものと思われる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な長方形の土坑で、長軸1.0mほどある。壁に接して掘り込まれている。

壁際溝は、南壁沿いと東壁沿いの一部で検出された。南壁沿いの壁際溝は南西隅で緩やかに屈曲し、

S H315



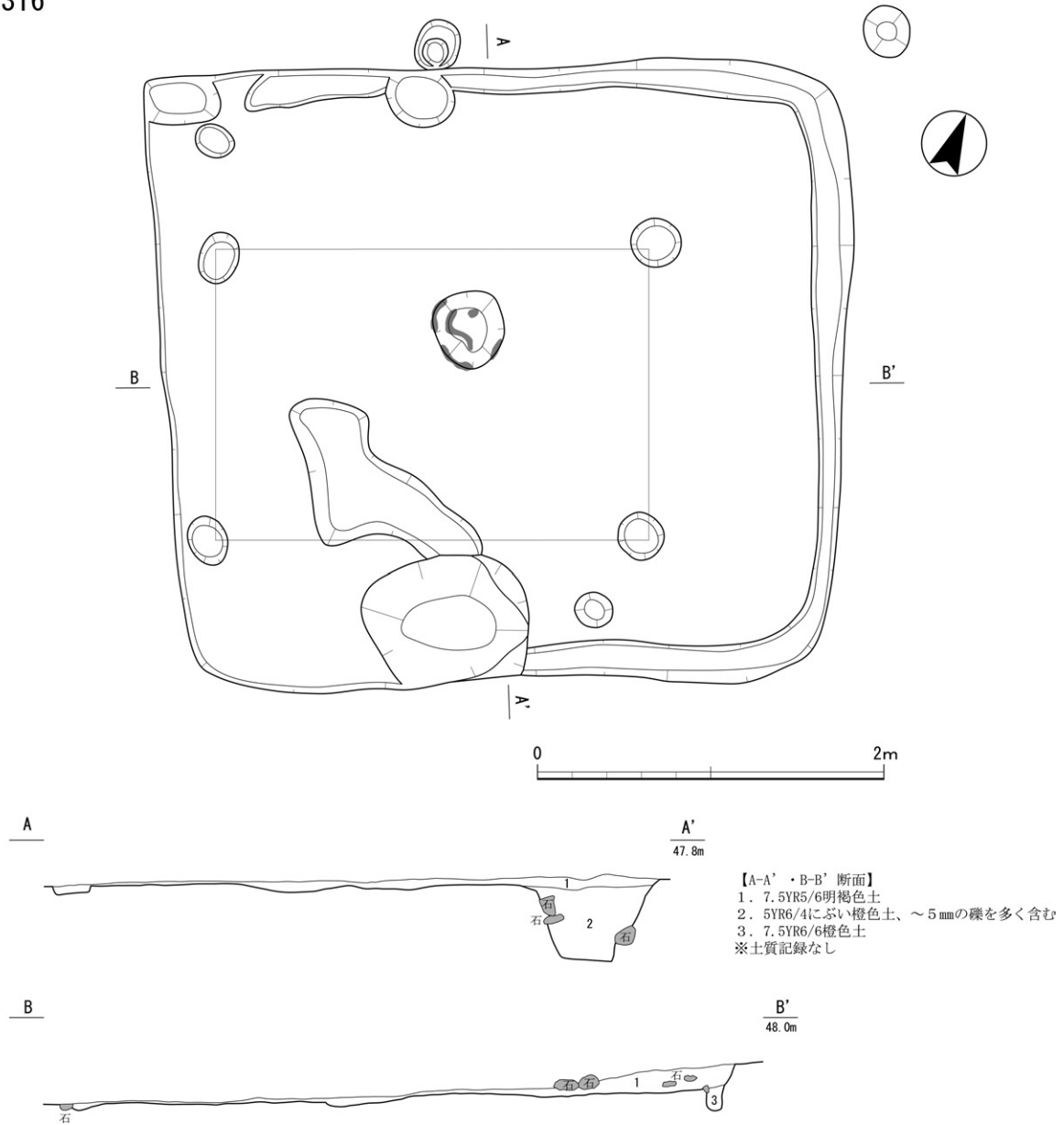
【A-A'・B-B' 断面】

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 5YR6/8橙色土、～5mmの礫を少量含む | 14. 5YR4/1褐色土 |
| 2. 5YR5/1褐色土、～10cmの礫を多く含む | 15. 7. 5YR6/6橙色土 |
| 3. 7. 5YR6/2灰褐色土、粗～細粒砂を多く含む | 16. 7. 5YR3/2黒褐色土 |
| 4. 7. 5YR5/1褐色土、～5mmの礫を少量含む | 17. 7. 5YR7/6褐色土、粗～細粒砂を多く含む |
| 5. 7. 5YR5/1褐色土、～10cmの礫を少量含む | 18. 5YR5/6明赤褐色土、極粗粒砂を多く含む |
| 6. 7. 5YR6/8橙色土、～3cmの礫を少量含む | 19. 7. 5YR6/3にぶい褐色土、～10cmの礫を少量含む |
| 7. 7. 5YR5/2灰褐色土、～5mmの礫を少量含む | 20. 5YR5/8明赤褐色土、極粗粒砂を少量含む |
| 8. 7. 5YR4/2灰褐色土、5～10cmの礫を多く含む | 21. 7. 5YR5/3にぶい褐色土 |
| 9. 7. 5YR4/1褐色土、～5cmの礫を少量含む | 22. 7. 5YR4/4褐色土、極粗粒砂を多く含む（壁際溝埋土） |
| 10. 7. 5YR4/1褐色土 | 23. 7. 5YR4/3褐色土、極粗粒砂を多く含む（壁際溝埋土） |
| 11. 5YR3/2灰褐色土 | 24. 5YR4/4にぶい赤褐色土、～5mmの礫を多く含む |
| 12. 7. 5YR7/8黄橙色土、～5mmの礫を多く含む | 25. 7. 5YR7/8黄橙色土（地山?） |
| 13. 7. 5YR7/6橙色土、～3cmの礫を少量含む | 26. 7. 5YR3/2黒褐色土 |

※土質記録なし

第58図 SH315 (1/50)

S H316



第59図 S H316 (1/40)

断続的に西壁沿いへ一部続いている。南西隅付近では、建物掘形よりもやや内側に掘り込まれている。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、東壁付近に壁と直交方向に延びる細い溝がみられ、間仕切りなどの可能性も考えられる。

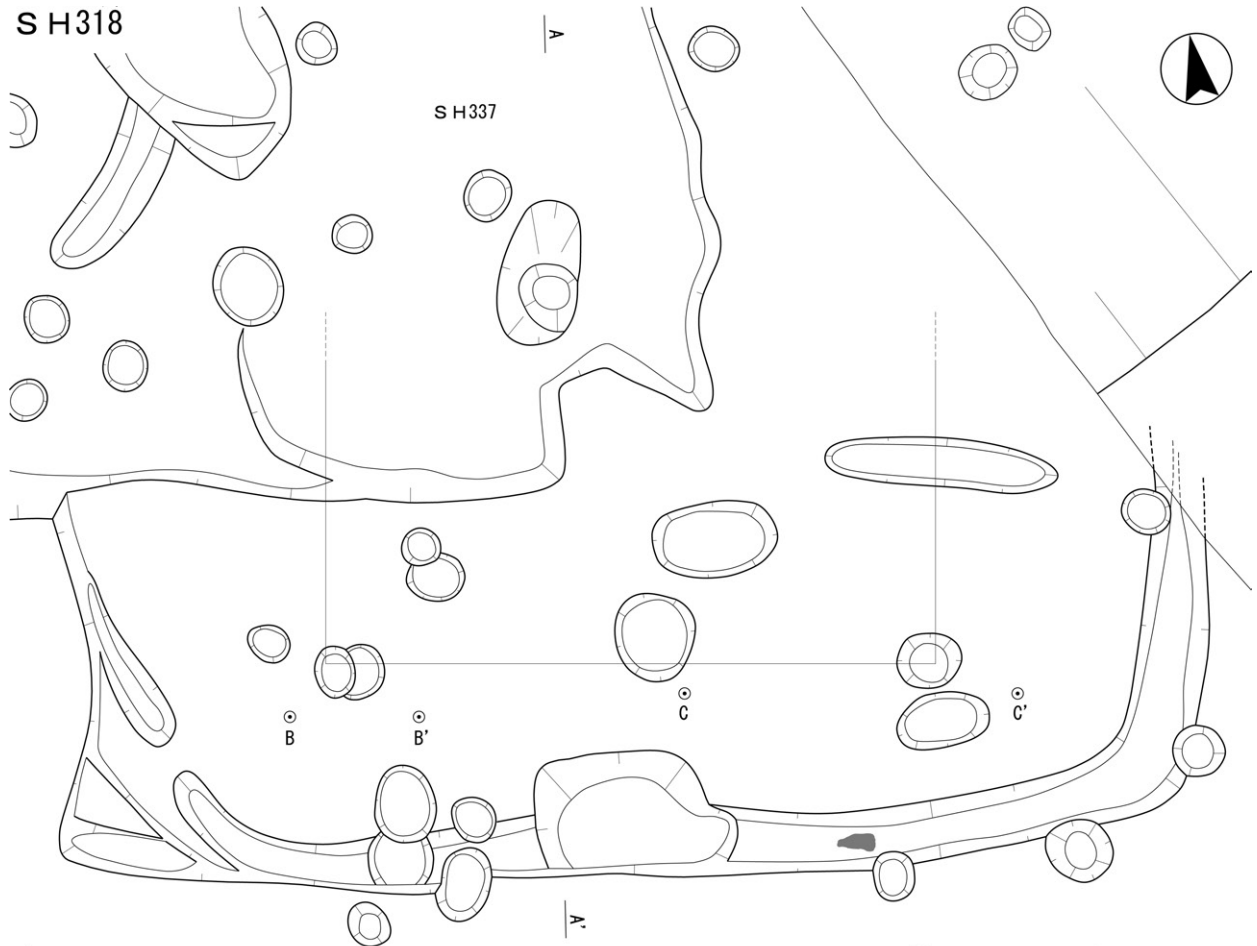
遺物は、南壁付近の広い範囲から弥生土器・土師器が多量に出土した。その中には、完形に近い台付長頸壺や高坏などがみられる。床面よりも若干高い位置で出土しており、一部は貯蔵穴や壁際溝の上面からも検出されている。床面直上に堆積した埋土

(第2層)に含まれていたと思われる。

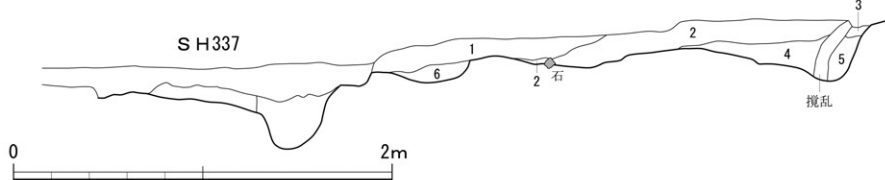
出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H320 (第61図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。斜面裾部に位置しており、ほかの建物からやや離れて単独で存在する。大部分が流失しており、遺存状況は悪い。また、西側の大部分は調査区外となっており、未調査である。全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸4.8mほど、短軸3.0m以上の方形を呈するものと思われる。

S H318



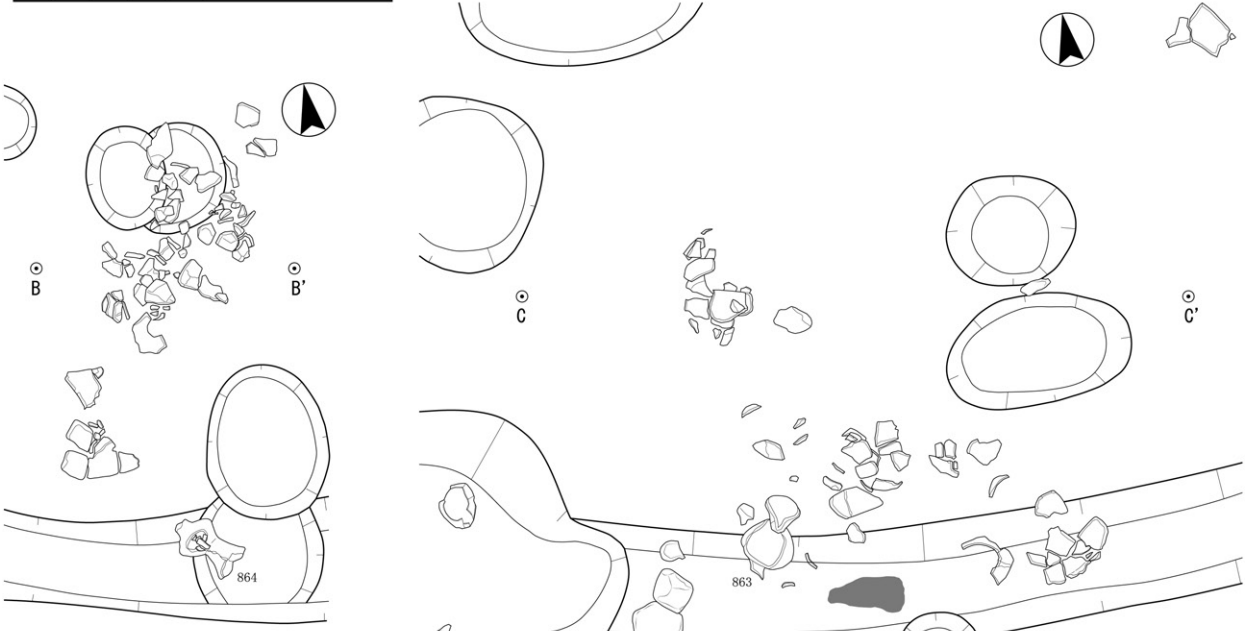
A



A'

48.0m

1. 7.5YR5/6明褐色土
 2. 7.5YR4/3褐色土、極粗粒砂・～3cmの礫を少量含む
 3. 7.5YR4/6褐色土、～3cmの礫を少量含む
 4. 5YR5/8明赤褐色土
 5. 5YR5/4にぶい赤褐色土
 6. 7.5YR4/4褐色土
- ※土質記録なし

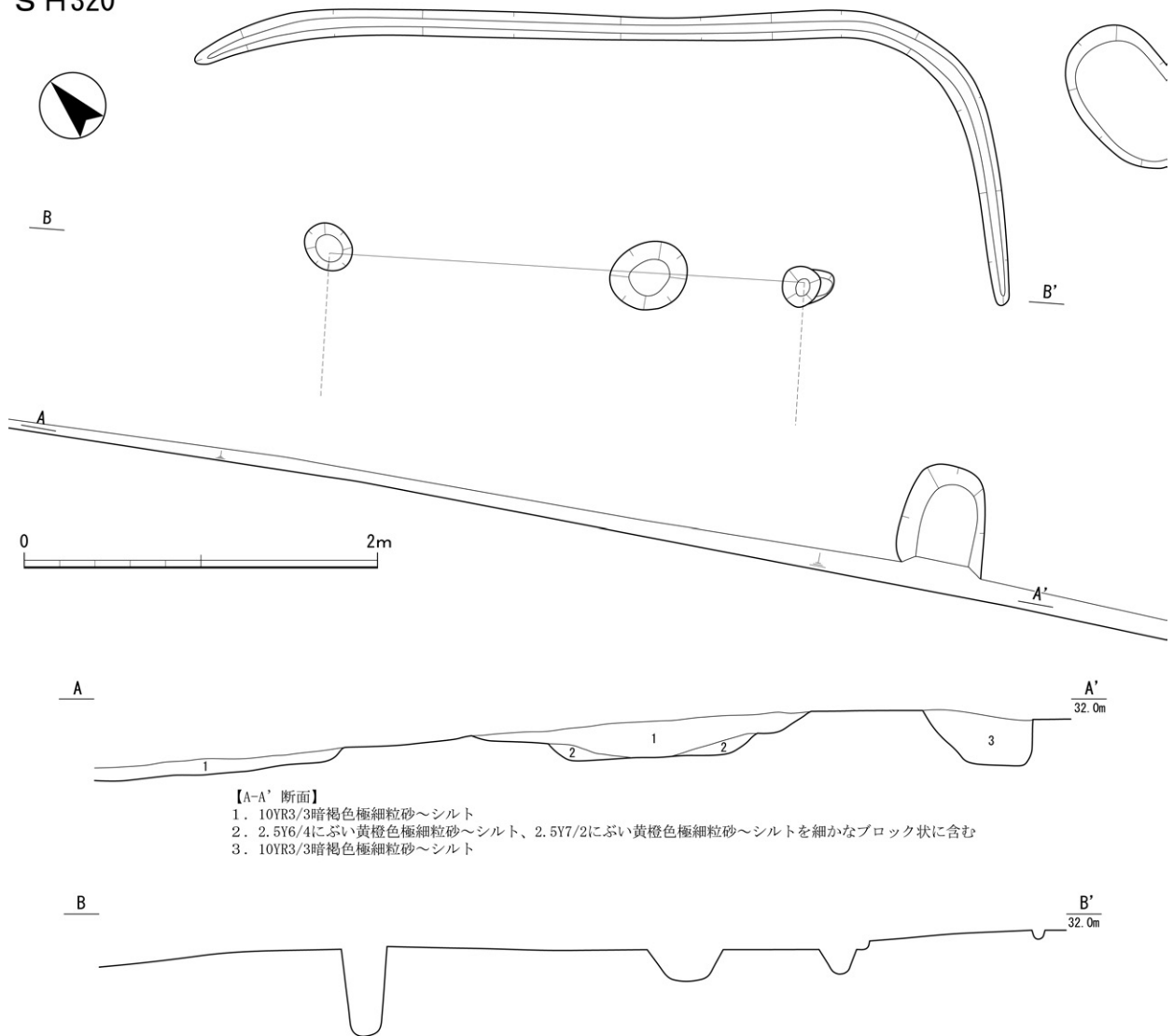


南西部遺物出土状況

南東部遺物出土状況

第60図 S H318 (1/40、1/20)

S H320



第61図 S H320 (1/40)

主柱穴は2基検出された。本来は、建物の平面形に沿って方形に配置されていたと推測される。ただし、東隅の主柱穴と考えられるピットはかなり浅く、疑問が残る。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿い中央付近で検出された。一部が調査区外となっており、形状は不明であるが、平面形が不整形な楕円形ないし隅丸方形の土坑で、短径0.5mほどある。

壁際溝は、北東壁沿いで検出された。東隅で緩やかに屈曲し、南東壁沿いへ一部続いている。

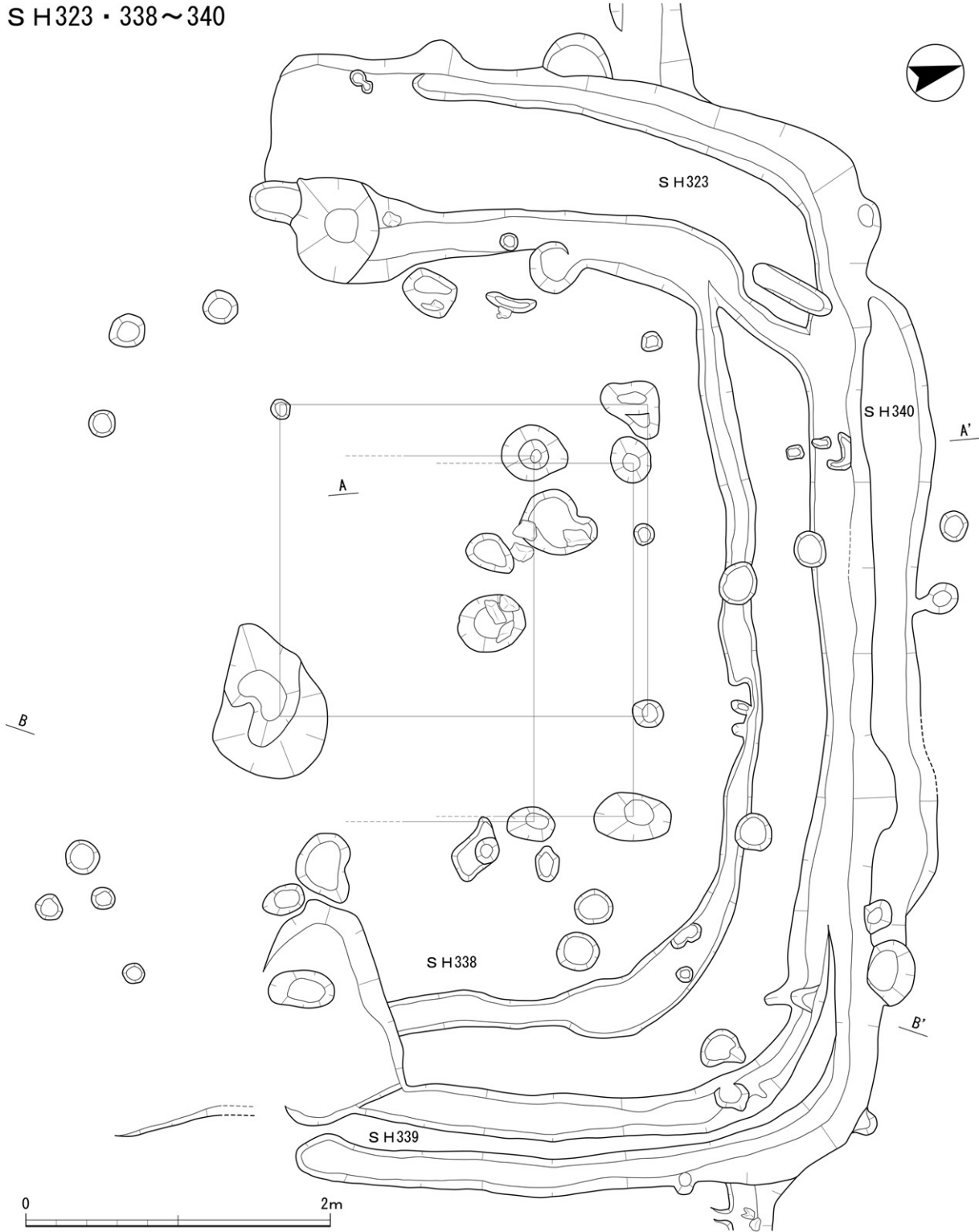
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられるが、遺物の出土量がわずかであるため、確定的ではない。

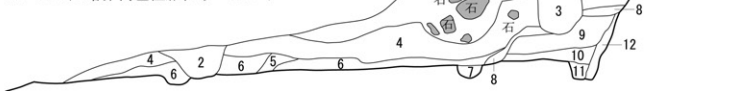
S H323 (第62・63図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。S H324・338・339・340と重なり合っている。S H338・340に先行し、S H324よりは後出するが、S H339との新旧関係は不明である。S H338・339とはほぼ同じ位置に構築されていることから、建て替え等の関係にあるものとも考えられる。斜面に位置するため南側は流失しており、

S H323・338～340



A

- 【A-A' 断面】
1. 7.5YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト、5～20cmの礫を多く含む
 2. 5YR3/2暗赤褐色極細粒砂～シルト、白色砂粒を少量含む
 3. 5YR3/2暗赤褐色極細粒砂～シルト

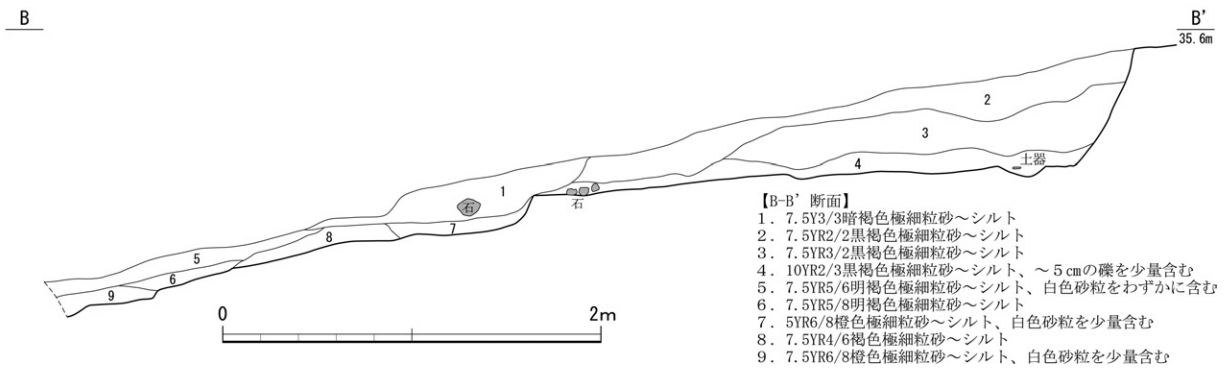


A'

- 35.8m
4. 7.5YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、～5cmの礫を少量含む
 5. 7.5YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、地山ブロックを含む
 6. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト
 7. 10YR6/6明黄褐色極細粒砂～シルト
 8. 10YR7/2にぶい黄橙色シルト（盛土）
 9. 7.5YR5/8明褐色極細粒砂～シルト、白色砂粒を少量含む
 10. 7.5YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト
 11. 10YR6/6明黄褐色極細粒砂～シルト
 12. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト

第62図 S H323・338～340① (1/40)

S H323・338～340



第63図 S H323・338～340② (1/40)

S H324



第64図 S H324 (1/40)

全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸7.0m、短軸5.4mほどの長方形を呈するものと思われる。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は短軸が4.5mほどになるとと思われる。

主柱穴は調査時には認識できなかったが、内部に存在するピットのうち、壁際溝との位置関係から4基を主柱穴として推定した。しかしながら、建物の平面形とは整合せず、南東隅の主柱穴と推定したものは不整形な土坑状を呈するなど、疑問が残る。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。ただし、建物中央付近で複数の礫を伴う浅い土坑が2基検出されており、このいずれかがSH323・338・339の炉とも考えられるが、形態的には添石炉とは異なる。

貯蔵穴は検出されなかった。

壁際溝は、建物が遺存している範囲では途切れず連続して検出されている。北壁沿いではSH339の壁際溝と重複する。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器がかなり多く出土しており、完形近くまで復元できる甕や高坏もある。ただし、SH338～340と一連で遺構埋土の掘削を行い、これらに属する遺物も一括してSH323出土遺物として取り上げているため、この建物に本来伴う遺物を特定することはできない。

SH338～340出土遺物を含むとしても、出土遺物には全体的に大きな時期差は認められず、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH324 (第64図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。SH323・338・339・340と重複しており、これらの建物に先行する。斜面に位置するため南側は流失しており、また全体的に木の根による攪乱を被っているため全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸・短軸4.5mほどの正方形を呈するものと思われる。

主柱穴は3基検出された。建物の平面形に沿って

ほぼ正方形に配置されている。南東隅の柱穴は検出されなかったが、攪乱によって削平を被っている可能性が高い。斜面の上方と下方とで、柱穴底面の標高にかなりの差がある。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は明確ではないが、南壁沿いと推定される位置で、長軸1.3m、深さ0.4mほどの平面形が不整形な方形を呈する土坑が検出されており、これが貯蔵穴の可能性も考えられる。ただし、攪乱の内部で検出されていることや、水が流れ込みやすい斜面下方に位置することなどから、あくまで可能性にとどまる。

壁際溝は、北壁沿いで検出された。北東隅付近で緩やかに屈曲し、東壁沿いへと一部続くようにも見受けられるが、やや不規則に屈曲しており、本来の隅部の形状を反映しているか疑問が残る。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物やSH323・338・339・340との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

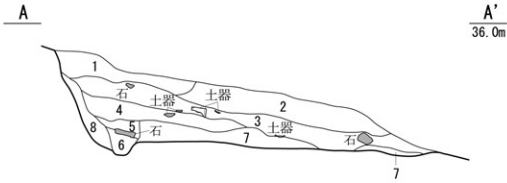
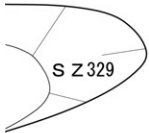
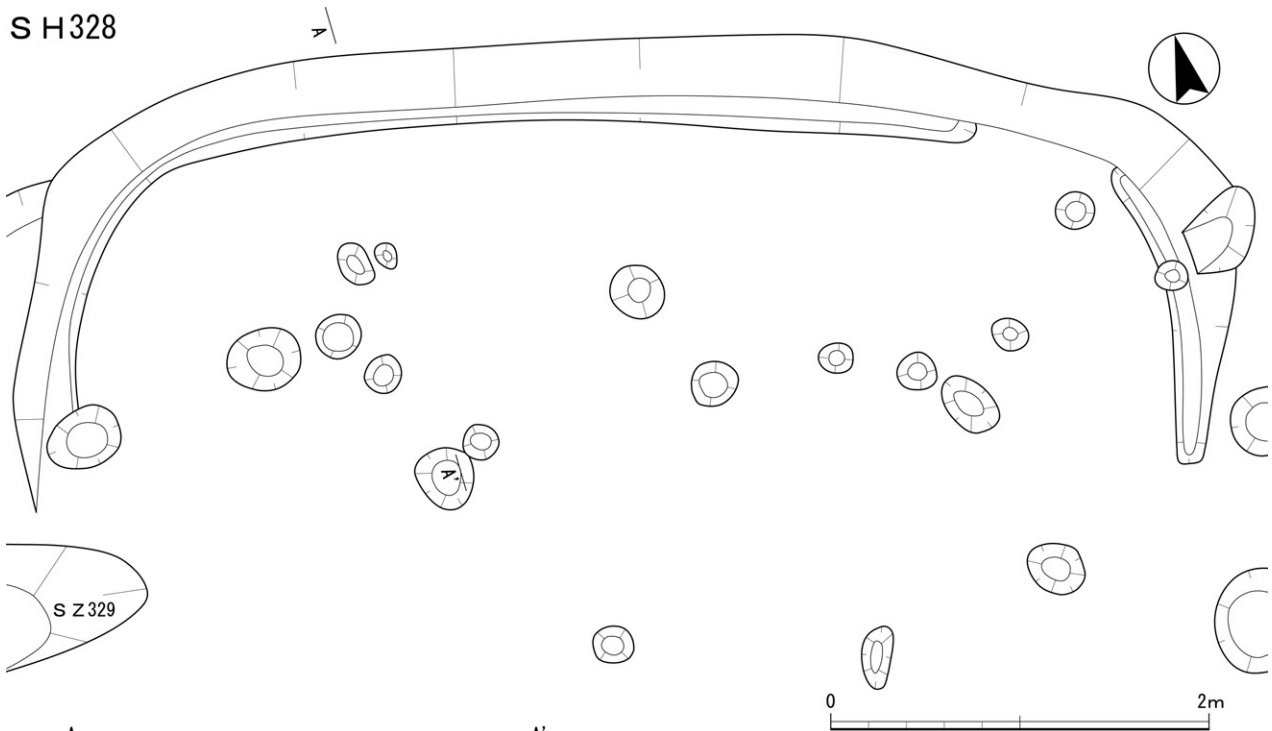
SH328 (第65図) 第3次調査区の中央部で検出した建物である。斜面に位置しており、斜面をカットして平坦部を造成し、建物を構築している。SZ329とごく一部が重複していると思われるが、新旧関係は不明である。南側がかなり流失しているため全体の形状等は不明確であるが、遺存している部分からみると、平面形は長軸6.3m、短軸2.4m以上の方形を呈すると推定される。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は平面形がかなり幅が狭い長方形を呈するものと思われる。

明確な主柱穴は検出されなかった。建物内と考えられる範囲で多数のピットが検出されており、深さが0.3～0.4mほどのものも数基みられるが、位置などからみて主柱穴とは判断できない。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

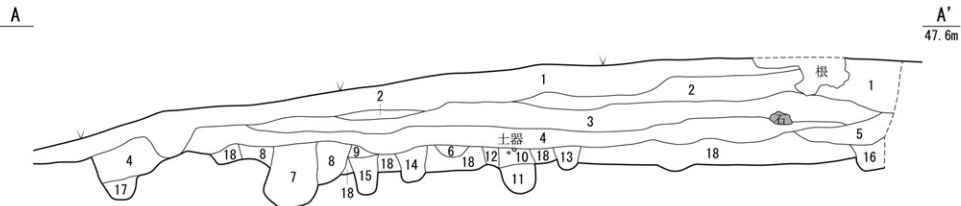
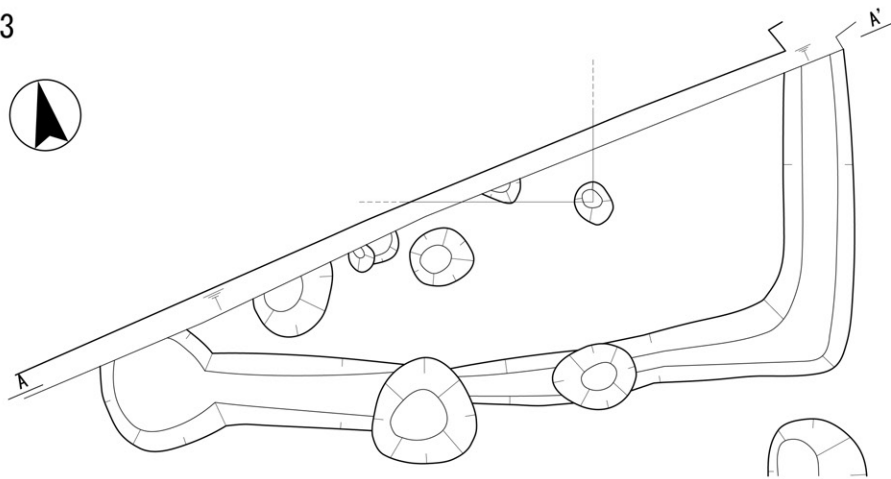
壁際溝は、建物が遺存している範囲ではほぼ連続

S H328



1. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト、礫を含む
2. 2.5YR4/3オリーブ褐色細粒砂～シルト、礫を含む
3. 10YR4/4褐色細粒砂～シルト、礫を多く含む
4. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト
5. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト
6. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、地山ブロックを含む（壁際溝埋土）
7. 10YR3/2黒褐色粗粒砂～シルト
8. 10YR6/6明黄褐色シルト、10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトブロックを含む

S H333



- | | | |
|-------------------------|------------------------------|-------------------------------|
| 1. 表土 | 7. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂～シルト（ピット埋土） | 13. 10YR4/1褐灰色細粒砂～シルト |
| 2. 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂～シルト | 8. 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～シルト | 14. 2.5YR4/1黄灰色細粒砂～シルト |
| 3. 10YR4/4褐色細粒砂～シルト | 9. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～シルト | 15. 2.5YR4/3オリーブ褐色粗粒砂～シルト |
| 4. 10YR4/2暗褐色細粒砂～シルト | 10. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト | 16. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト（壁際溝埋土） |
| 5. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト | 11. 10YR4/2暗黄褐色細粒砂～シルト | 17. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト（壁際溝埋土） |
| 6. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂～シルト | 12. 10YR4/2暗黄褐色細粒砂～シルト | 18. 2.5YR4/2暗黄灰色細粒砂～シルト |

第65図 S H328・333 (1/40)

して検出されているが、北東隅付近のみわずかに途切れている。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

大部分が流失していることを踏まえても、全体的に簡素な構造であった可能性が高く、竪穴建物というよりは段状遺構に近いものとも考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器や、砥石として使用されたとみられる軽石が比較的多く出土している。遺物は主に埋土中層（第3層）に含まれていたようである。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H 333（第65図） 第3次調査区の東部で検出した建物である。北側の大部分は調査区外となっており、未調査である。平面形は長軸4.0m、短軸2.0m以上の方形を呈するものと思われる。比較的小型の建物である。

支柱穴は1基のみ検出された。本来は、建物の平面形に沿って方形に配置されていたと推測される。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、建物が遺存している範囲では途切れず連続して検出されている。

貼床は明確には確認されていないが、床面直上に堆積した土層を壁際溝が掘り込んでおり（第18層）、この土層が貼床の可能性が考えられる。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期と考えられるが、遺物の出土量がわずかであるため、確定的ではない。

S H 336（第66図） 第3次調査区の東部で検出した建物である。S H 315・337と重複しており、S H 315に先行する可能性があるが、確実ではない。根による攪乱等によって明確には検出できず、竪穴建物状の落ち込みの存在のみが確認されたものである。そのため、全体の形状は不明である。

支柱穴や炉、貯蔵穴、壁際溝など、この建物に伴

う構造物は全く検出されていない。こうしたことからみると、竪穴建物ではない可能性もある。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

S H 315に先行するとすれば、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期と考えられるが、確定的ではない。

S H 337（第66図） 第3次調査区の東部で検出した建物である。S H 318・336と重複しており、S H 318より後出する。根による攪乱等によって遺存状況が極めて悪く、全体の形状は不明であるが、長軸4.2m、短軸4.0mほどの正方形に近い方形を呈すると推測される。

支柱穴は2基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ方形に配置されていたものと思われるが、北側の支柱穴は全く検出できなかった。

南西隅の支柱穴付近の床面で焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

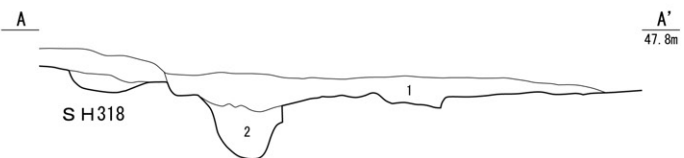
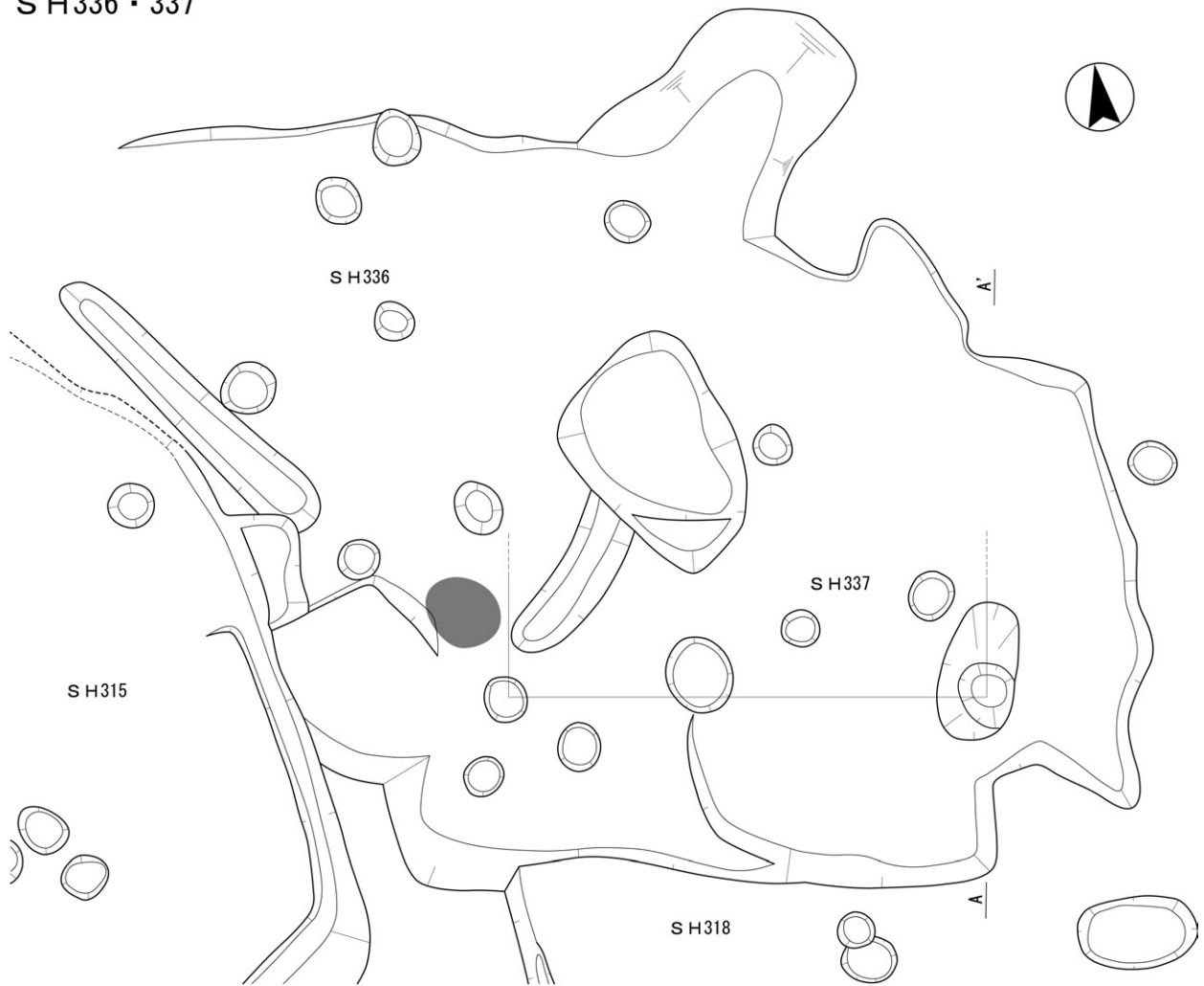
貯蔵穴や壁際溝は検出されなかった。こうした構造物が認められない点や、掘形がかなり不整形である点、北側の支柱穴が検出されなかった点などを鑑みると、竪穴建物ではない可能性もある。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

S H 318との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期の可能性が高いが、確定的ではない。

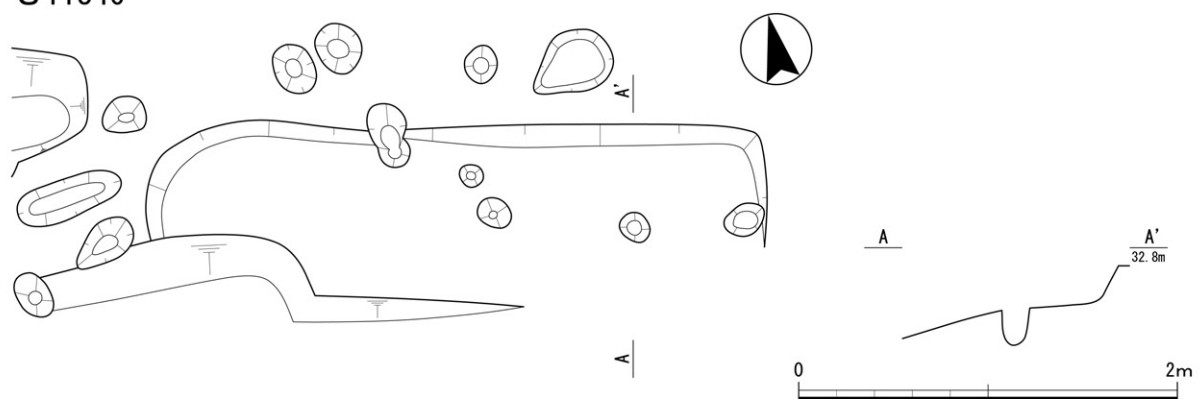
S H 338（第62・63図） 第3次調査区の西部で検出した建物である。S H 323・324・339・340と重なり合っている。S H 340に先行し、S H 323・324・339よりは後出する。S H 323・339とはほぼ同じ位置に構築されていることから、建て替え等の関係にあるものとも考えられる。これに関連して、S H 323・339の北壁沿いで土手状の水平堆積した土層がみられ（A-A'断面第9・10層）、さらにその上面にシルト質の粘質土が施されている状況が確認できた（A-A'断面第8層）。粘質土の面がS H 338の壁面を構成している様子が確認できるため、S H 338の構築にあたってS H 323・339の一部を人為的に埋めたことや、S H 338が構築される段階ではS H 323ないしはS H 339は埋没していなかったことが窺われる。た

S H336・337



- 1. 5YR5/6明赤褐色土、極粗粒砂を少量含む
 - 2. 5YR5/8明赤褐色土
- ※土質記録なし

S H346



第66図 S H336・337・346 (1/40)

だ、こうした状況はSH323・339北壁沿いでも西側でしか確認できなかった。

斜面に位置するため南側は流失しており、全体の形状は不明確である。平面形は長軸5.4m、短軸5.2mほどの正方形に近い方形を呈する可能性もあるが、付近の傾斜がかなり急であることを考えると、それほど南側まで平坦面が造成されていた可能性は考えにくい。短軸4.0～4.5mほどの長方形を想定する方が妥当と思われる。

主柱穴は調査時には認識できなかったが、内部に存在するピットのうち、壁際溝との位置関係から2基を主柱穴として推定した。南側では主柱穴と考えられるピットは確認できなかった。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。ただし、建物中央よりやや北側で複数の礫を伴う浅い土坑が検出されており、SH323・338・339いずれかの炉とも考えられる。形態的には、添石炉とは考えにくい。

貯蔵穴は検出されなかった。

壁際溝は、建物が遺存している範囲では途切れず連続して検出されている。西壁沿いではSH339の壁際溝と重複する。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物はSH323出土遺物として一括して取り上げられており、この建物に伴うものも含まれていると思われる。

出土遺物やSH323との関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH339 (第62・63図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。SH323・324・338・340と重なり合っている。SH338・340に先行し、SH324よりは後出するが、SH323との新旧関係は不明である。SH323・338とはほぼ同じ位置に構築されていることから、建て替え等の関係にあるものとも考えられる。斜面に位置するため南側は流失しており、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸6.4m、短軸5.4mほどの長方形を呈するものと思われる。ただし、斜面下方にあたる南側がどの程度造成され

ていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は短軸が4.5mほどになると思われる。

主柱穴は調査時には認識できなかったが、内部に存在するピットのうち、壁際溝との位置関係から2基を主柱穴として推定した。南側では主柱穴と考えられるピットは確認できなかった。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。ただし、建物中央付近で複数の礫を伴う浅い土坑が2基検出されており、このいずれかがSH323・338・339の炉とも考えられるが、形態的には添石炉とは異なる。

貯蔵穴は検出されなかった。

壁際溝は、建物が遺存している範囲では途切れず連続して検出されている。西壁沿いではSH338の壁際溝と重複する。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物はSH323出土遺物として一括して取り上げられており、この建物に伴うものも含まれていると思われる。

出土遺物やSH323との関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH340 (第62・63図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。SH323・338・339と重なり合っている。土層断面からは、これら3棟の建物に後出する建物と思われるが、調査時には平面的に検出することができず、結果的にSH323・339の北側肩部にわずかに遺存した掘り込みによって建物として認識された。そのため全体の形状は不明であるが、平面形はおそらく長軸ないし短軸が5.0mほどの方形を呈するものと思われる。

主柱穴や炉、貯蔵穴など、この建物に伴う構造物は全く検出されていない。

土層断面からみると、埋土には比較的大型の礫が多量に含まれており(A-A'断面第1層)、また、床面が平坦に造成されたり、貼床が施されたりしている様子も認めがたいため、竪穴建物ではなく段状遺構の可能性もある。

遺物はS H323出土遺物として一括して取り上げられており、この建物に伴うものも含まれていると思われる。

出土遺物やS H323との関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H346 (第66図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。斜面裾部に位置しており、ほかの建物からやや離れて単独で存在する。大部分が流失しており遺存状況が悪く、全体の形状は不明確である。平面形は長軸3.2mほど、短軸0.8m以上の方形を呈するものと思われるが、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は短軸が1.5mほどの長方形を呈するようなものであったと思われる。

明確な支柱穴は検出されなかった。支柱穴の可能性もあるピットが北東隅からやや内側で検出されているが、深さは0.2mほどと浅く、北西隅付近でこれに対応するピットも確認できない。

支柱穴だけでなく、炉、貯蔵穴、壁際溝など、この建物に伴う構造物は全く検出されていない。こうしたことからみると、堅穴建物ではなく、段状遺構のようなものであった可能性もある。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

S H348 (第67図) 第3次調査区の西部で検出した建物である。ほかの建物からやや離れて単独で存在する。斜面に位置するため南側の大部分は流失しており遺存状況が悪く、全体の形状は不明である。平面形は長軸ないし短軸が4.8mほどの方形を呈する可能性もあるが、斜面下方にあたる南側がどの程度造成されていたかは不明であり、斜面のカットのみによって構築されていた可能性も考えられ、その場合は短軸が2.5～3.0mほどの長方形を呈するようなものであったと思われる。

支柱穴は2基検出された。本来は、建物の平面形に沿って方形に配置されていた可能性がある。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、北東壁沿いで検出された。東隅で緩やかに屈曲し、南東壁沿いへ一部続いている。東隅付近ではかなり幅広になり、全体的に不整形である。流失している南側に壁際溝が存在したかは不明であるが、斜面をカットするように構築されていることから、壁際溝は斜面側のみに掘り込まれていた可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

炉や貯蔵穴等の構造物が認められない点や、壁際溝が不整形な点、南側の支柱穴が検出されなかった点などを鑑みると、堅穴建物ではなく、段状遺構のようなものであった可能性もある。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器や砥石として使用されたとみられる軽石が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の可能性が高いが、確定的ではない。

S H402 (第67図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。S H408・428と大きく重複しており、S H428に先行する。S H408にも先行すると思われるが、確実ではない。S H428によってかなり削平を被っているため全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸3.6m、短軸2.3m以上の方形を呈するものと思われる。かなり小型の建物である。

明確な支柱穴は検出されなかった。他の建物による削平を被っているとも考えられるが、同様の規模であるS H428でも支柱穴が認められないことを鑑みると、S H402にも明確な支柱穴は存在しなかった可能性が高い。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、建物が遺存している範囲では途切れず連続して検出されている。全周していたものと推測される。

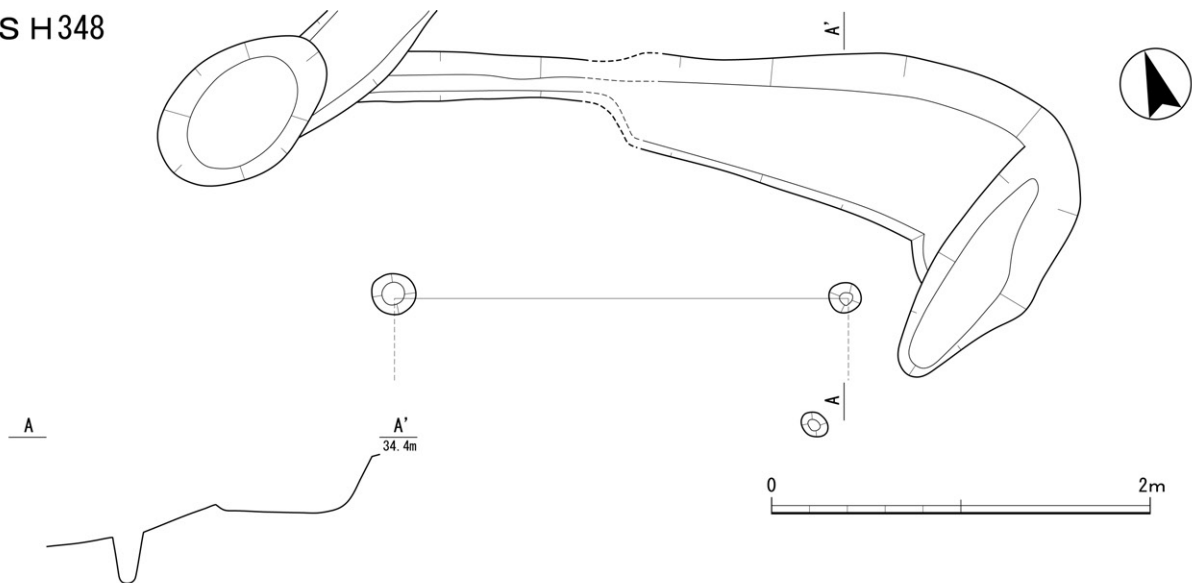
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が比較的多く出土している。また、須恵器も少量出土しているが、埋土に混入したものと思われる。

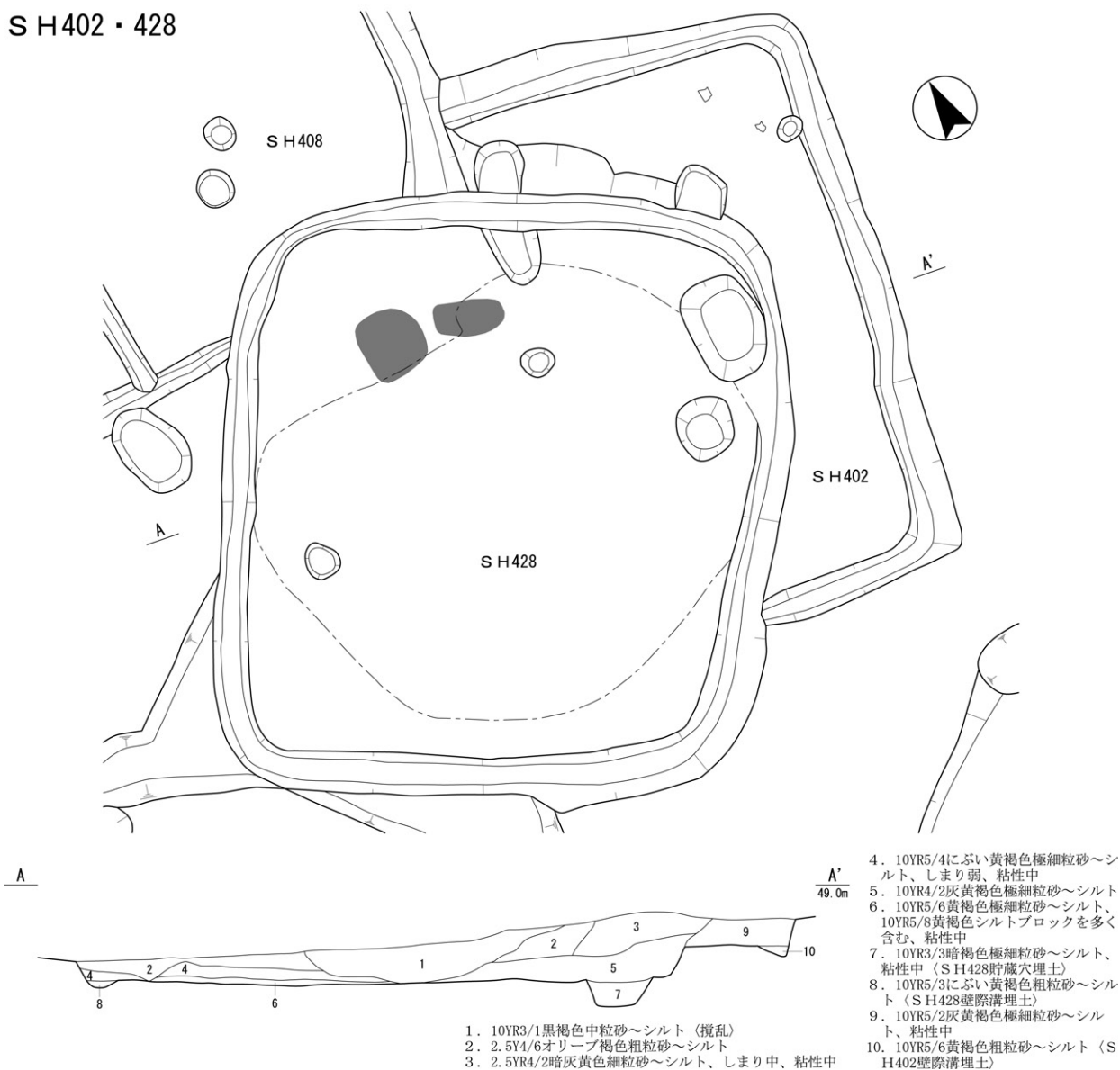
出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S H403 (第68・69図) 第4次調査区の中央部で

S H348

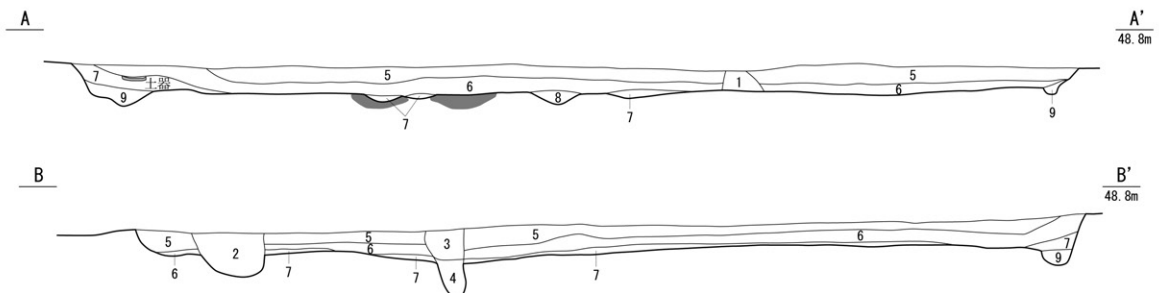
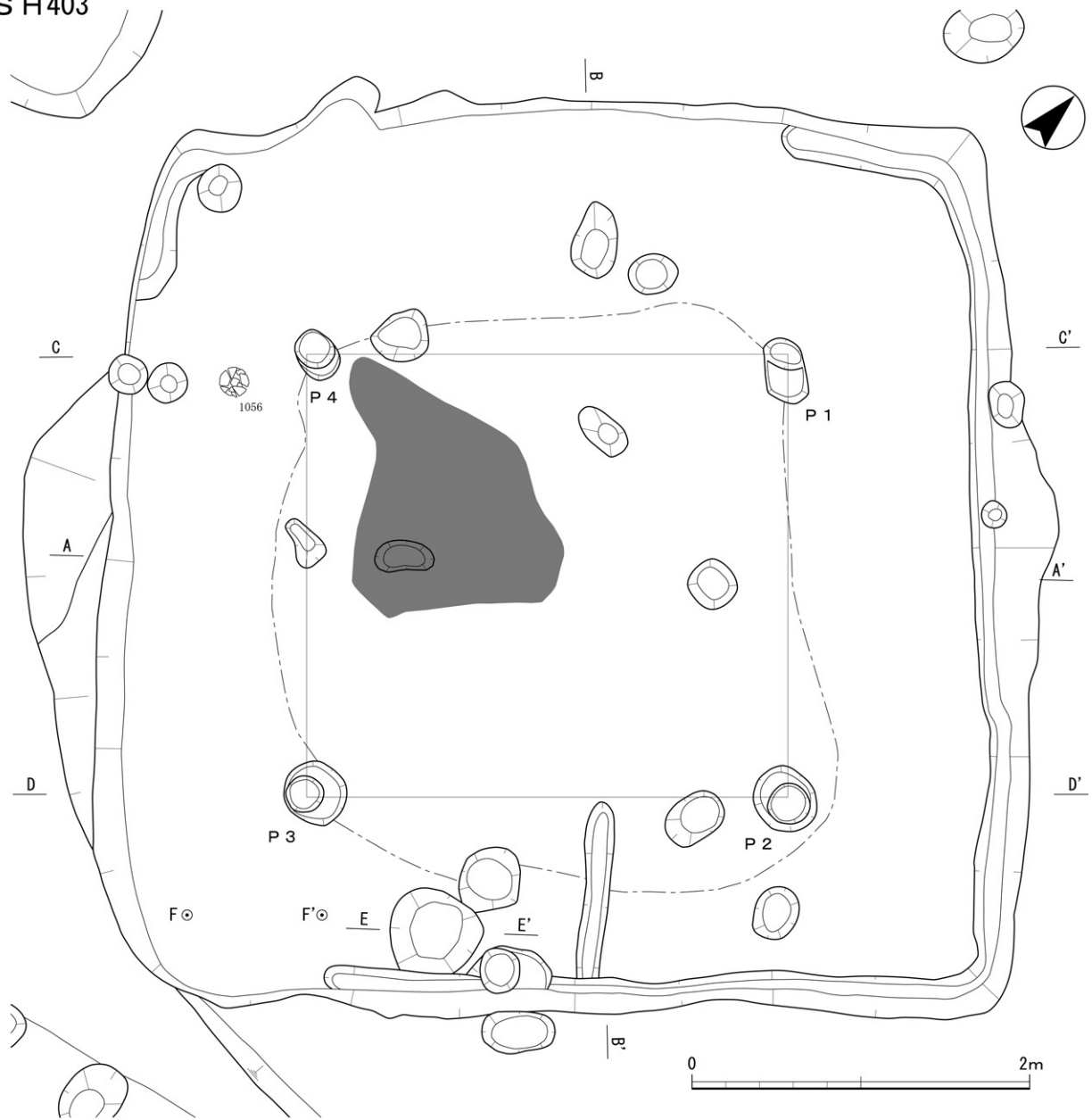


S H402・428



第67図 S H348・402・428 (1/40)

S H403

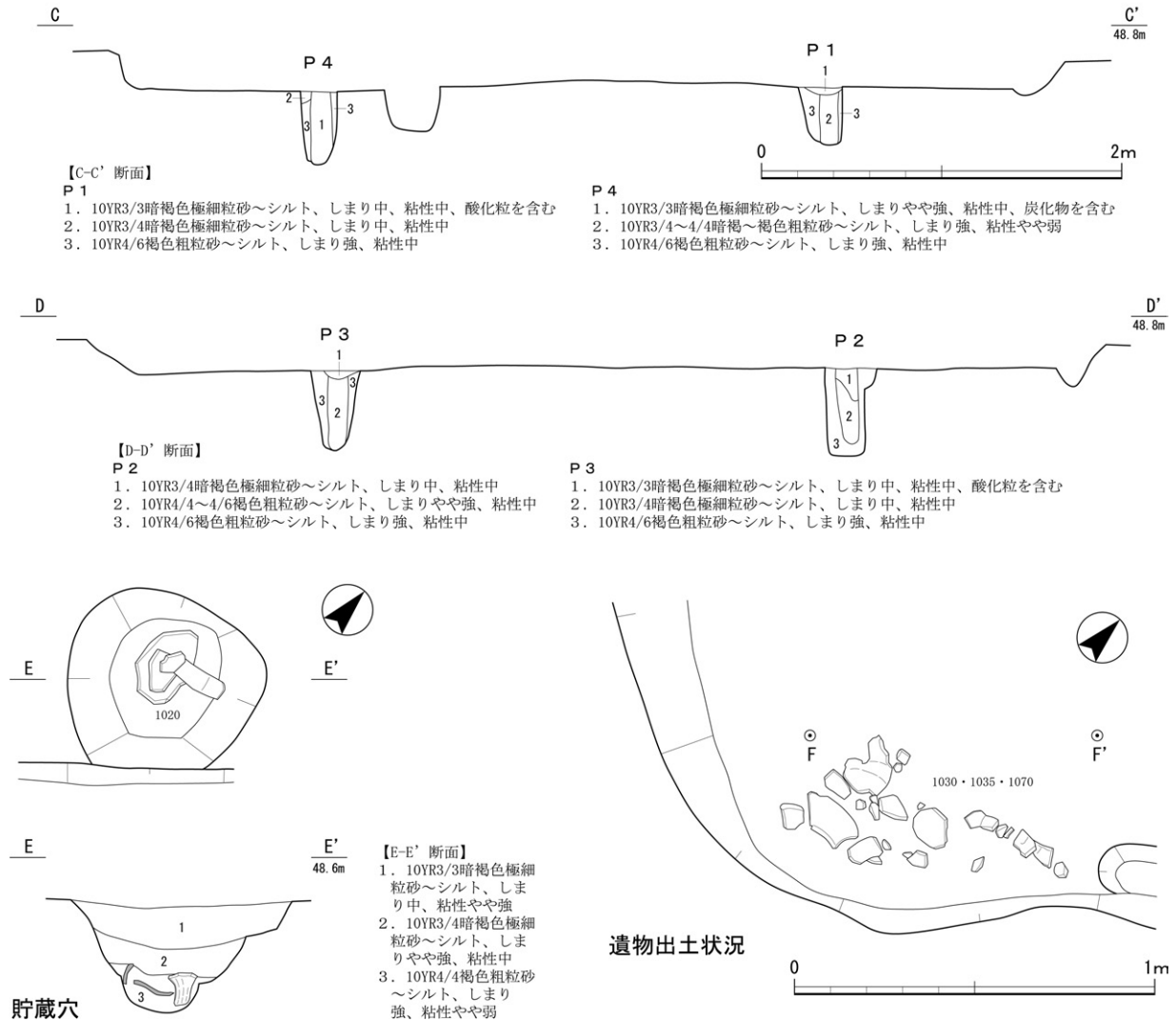


【A-A'・B-B'断面】

1. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性弱
2. 7.5YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化粒を含む
3. 7.5YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性中、酸化粒を含む
4. 7.5YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性やや強、酸化粒を含む
5. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、酸化粒を少量含む
6. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、酸化粒を少量含む
7. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
8. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、焼土塊を含む
9. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

第68図 SH403① (1/40)

S H403



第69図 S H403② (1/40、1/20)

検出した建物である。平面形は長軸5.4m、短軸5.4mの正方形を呈するが、北東壁は掘形がやや不整形である。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P1・3では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

建物中央よりやや西側の床面の広い範囲から焼土が検出されているが、その一部に浅いピット状の遺構も認められるため、これが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿いのやや南側

で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.6mほどある。東側は段状に浅くなる。壁際溝に接するように掘り込まれている。埋土は3層に分かれ、最下層から弥生土器壺(1020)の大きな破片がまとまって出土している。

壁際溝は、北東壁沿いから南東壁沿いにかけて検出され、北西壁沿いでも一部で検出された。また、南西壁沿いでは西隅付近で壁際溝とみられる浅い溝がわずかに検出されているほか、土層断面でも壁際溝と思われるものが確認できる(A-A'断面第9層)。こうしたことから、壁際溝は断続的ながら建物の壁沿いの大部分に掘り込まれていたと推測される。

貼床や周溝状掘形は確認できなかったが、建物の

中央部を中心とする広い範囲で硬化した面が認められた。

また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器壺が出土したほか、南隅付近で弥生土器・土師器の破片が集中して出土した。小片が多いが、壺などが含まれている。また、支柱穴P4の南側でも遺存状況の良好な土師器椀形高杯が検出されている。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH405（第70図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。今回の調査において検出された堅穴建物群の中では東端に近い箇所に存在しており、集落の東縁部に位置する建物の一つと思われる。北隅付近は調査区外となっており、未調査である。また、北東側は大きな谷に面しているため傾斜地となっており、一部が流失している。そのため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.0mほど、短軸4.6mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。そのうち3基では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P2やP4の柱穴埋土の上層には別の土層が堆積しており（C-C'・D-D'断面第1層）、建物の廃絶時に柱は抜き取られたか切断された可能性が高い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されていない。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れておらず全周すると思われるが、流失している北東部では壁際溝が存在したか不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。なお、掘形床面は谷に向かってやや傾斜しているが、これを補正するような盛土や貼床等が認められないため、建物の機能時においても床面は傾斜していた可能性がある。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期

～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH408（第71図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH402・428と重複しており、SH428に先行する。SH402よりは後出すると思われるが、確実ではない。西側が攪乱により一部削平を被っていることなどもあり、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.0m、短軸4.8mの正方形に近い方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P1では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央付近の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの西側で検出された。平面形が不整形な隅丸方形の土坑で、長軸0.6mほどある。壁に接して掘り込まれている。

壁際溝は、貯蔵穴付近を除いて全周すると思われるが、遺存状況が悪い西壁沿いでは一部しか遺存していない。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

なお、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

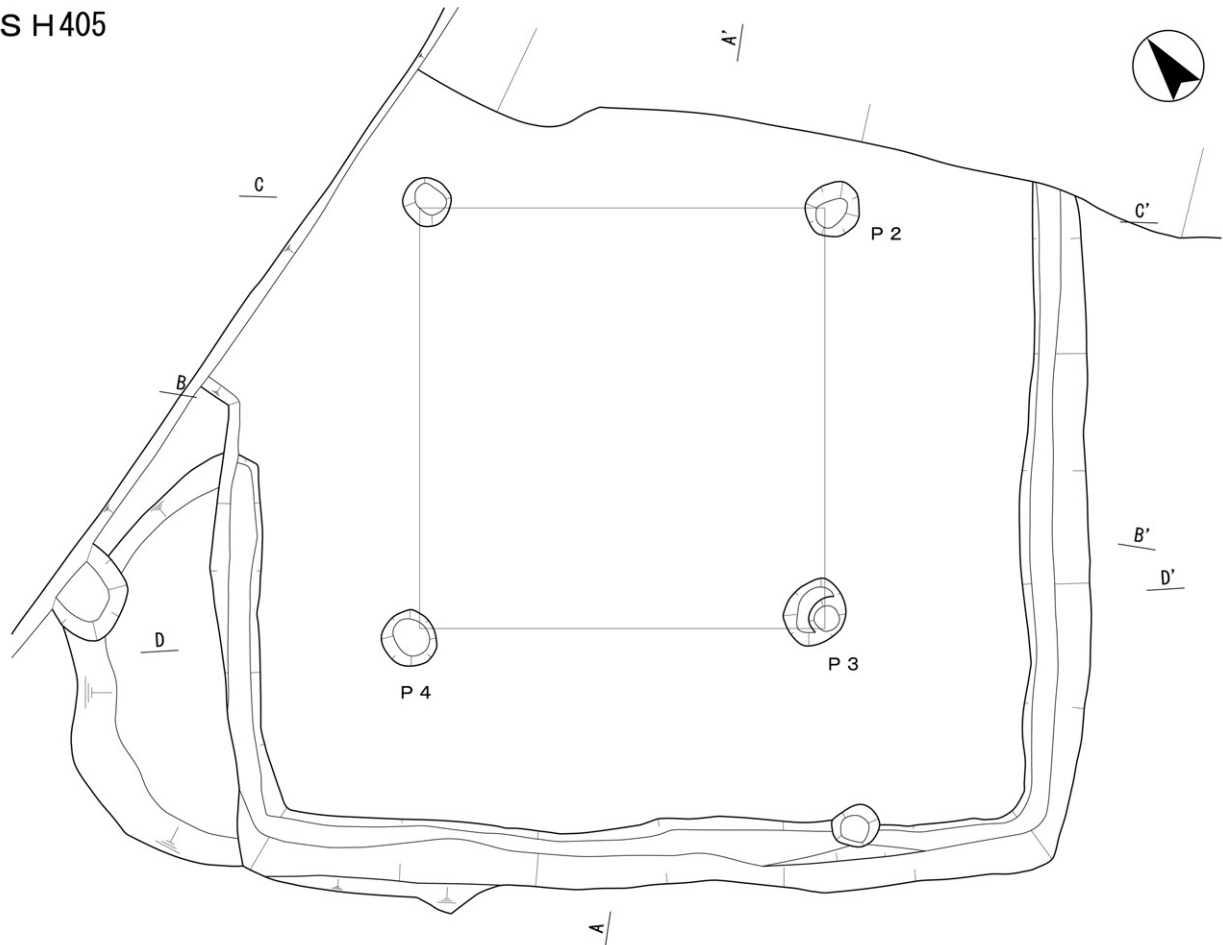
遺物は、支柱穴P2から土師器S字状口縁甕の破片が出土したほか、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物やSH428との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

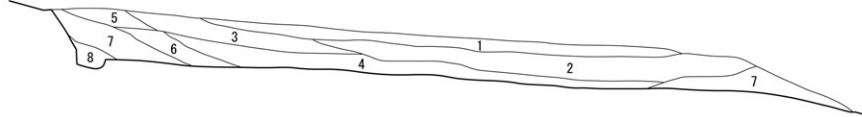
SH410（第72図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH414・419、SB409・420と一部重複している。SH414及びSB409・420に先行し、SH419よりは後出する。SH414による削平などにより、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.2m、短軸5.2mほどの正方形を呈するものと思われる。

支柱穴は3基検出された。南東隅の支柱穴はSB409の柱穴と完全に重複している。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P1・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。また、P4の内部からは大型の礫が検出されたが、柱の設置等に関わるものかは不明である。

S H 405



A A'
48.4m



B B'
48.4m



- 5. 10YR4/4~4/6褐色細~極細粒砂、しまり強、粘性強
- 6. 10YR4/4褐色細~極細粒砂、しまりやや強、粘性強
- 7. 10YR4/6褐色細~極細粒砂、しまりやや強、粘性強
- 8. 10YR3/4暗褐色細~極細粒砂、しまり強、粘性やや強 (壁際溝埋土)

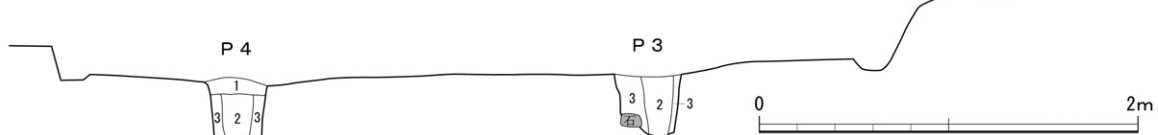
【A-A'・B-B'断面】

- 1. 10YR3/4暗褐色細~極細粒砂、10YR4/6褐色細~極細粒砂をブロック状に含む、しまり弱、粘性中 (包含層)
- 2. 10YR2/2黒褐色砂~極細粒砂、10YR4/6褐色細~極細粒砂をブロック状に多く含む、しまり弱、粘性中
- 3. 10YR3/3暗褐色細~極細粒砂、しまりやや弱、粘性やや強
- 4. 10YR3/4~4/4暗褐色~褐色細粒砂~シルト、しまりやや強、粘性やや強、土器を多く含む

C C'
48.4m



D D'
48.4m

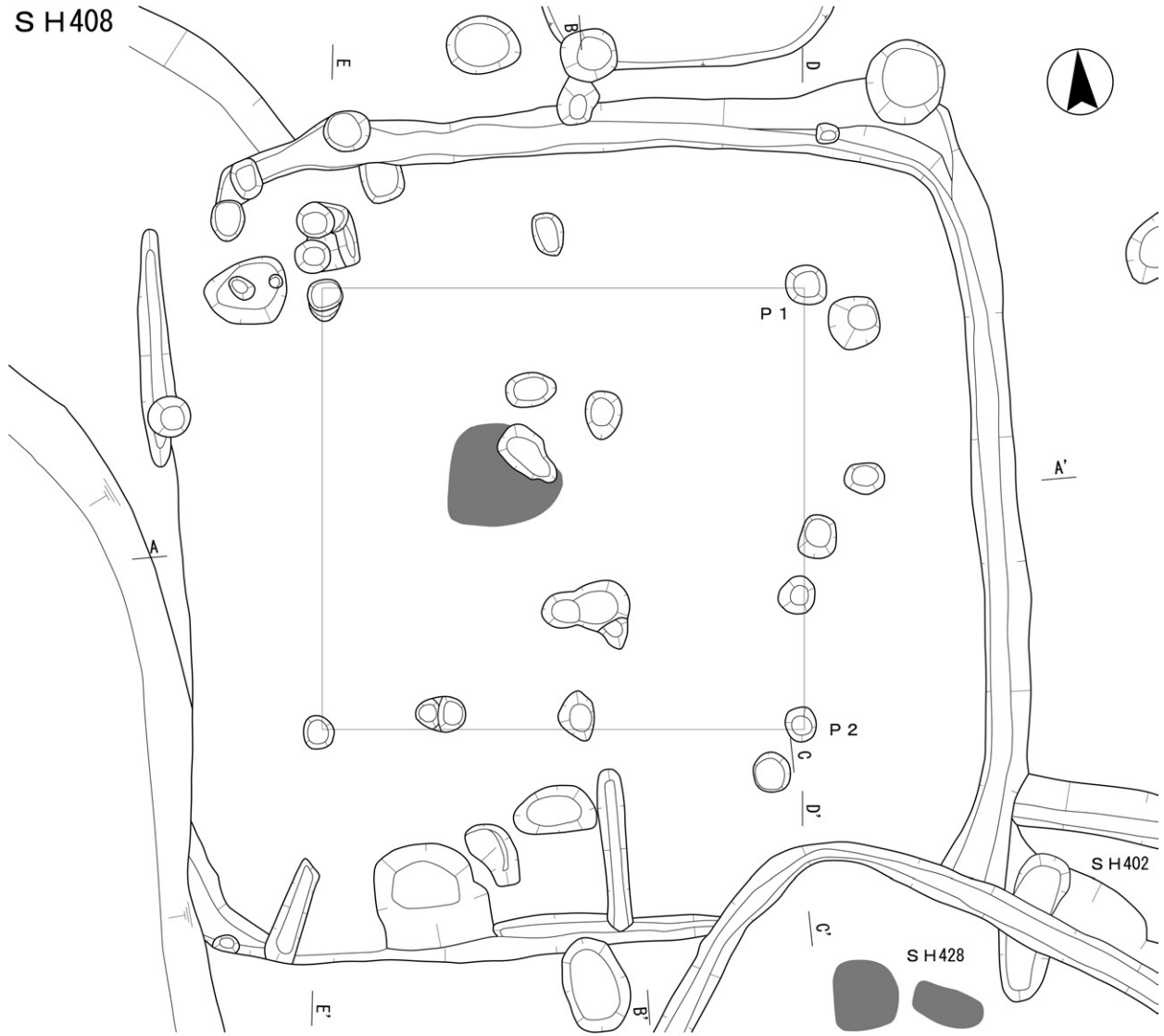


【C-C'・D-D'断面】

- 1. 10YR4/3にぶい黄褐色細~極細粒砂、しまり中、粘性中
- 2. 10YR3/4暗褐色細粒砂~シルト、しまりやや強、粘性中 (柱痕?)
- 3. 10YR4/6~5/6褐~黄褐色中粒砂~シルト、しまり強、粘性やや弱 (柱穴埋土)

第70図 S H 405 (1/40)

S H408

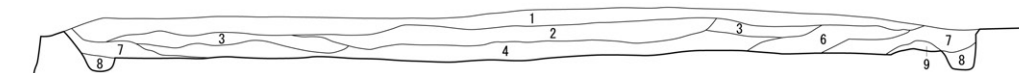


A



【A-A'・B-B'・C-C' 断面】
 A'
 48.8m
 1. 10YR3/4暗褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強（包含層）
 2. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

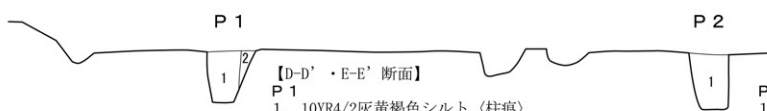
B



B'
 48.8m

- 3. 10YR4/4～4/6褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性強
- 4. 10YR3/3～4/3暗褐～にぶい黄褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
- 5. 10YR4/6褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強（ブロック土）
- 6. 10YR4/3～4/4にぶい黄褐～褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
- 7. 10YR4/6褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
- 8. 10YR4/6～5/6褐～黄褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性強（壁際溝埋土）
- 9. 10YR5/6黄褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強（地山硬化面？）

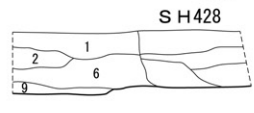
D



D'
 48.8m
 C
 C'
 49.0m

【D-D'・E-E' 断面】
 P 1
 1. 10YR4/2灰黄褐色シルト（柱痕）
 2. 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色極細粒砂～シルトをブロック状に30%含む、粘性弱

P 2
 1. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、粘性中



E



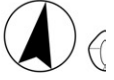
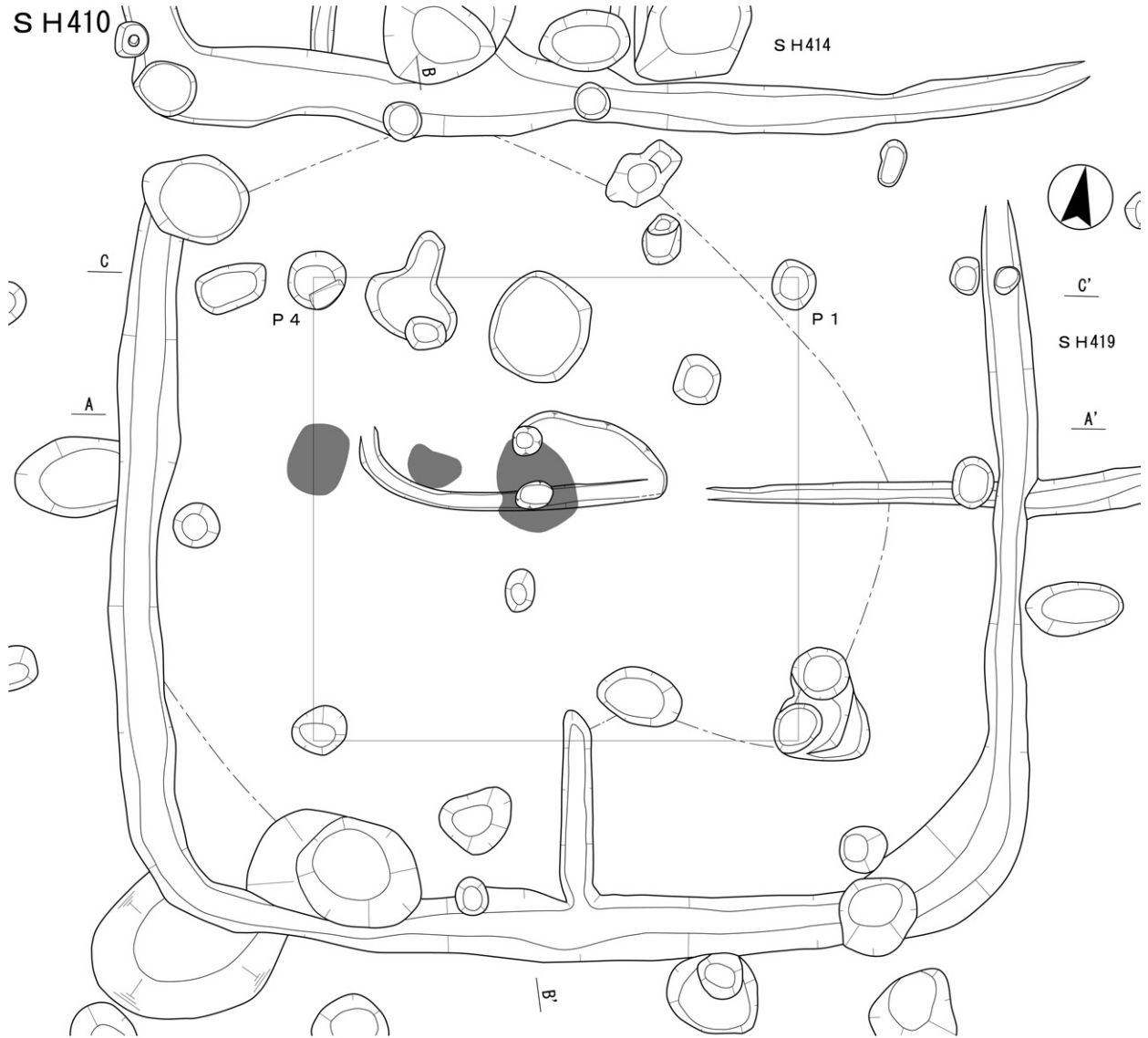
E'
 48.8m



第71図 SH408 (1/40)

SH410

SH414



C'

SH419

A'

A

A'
48.8m



SH419

B

B'
48.8m



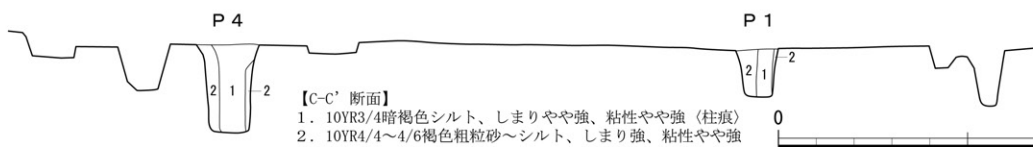
SH414

【A-A'・B-B'断面】

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト（ビット埋土） | 6. 10YR5/6黄褐色極細粒砂～シルト |
| 2. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、粘性中（ビット埋土） | 7. 5YR3/1黒褐色極細粒砂～シルト |
| 3. 10YR5/4こぶい黄褐色極細粒砂～シルト（攪乱） | 8. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト（壁際溝埋土） |
| 4. 10YR4/3こぶい黄褐色極細粒砂～シルト、しまり弱 | 9. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト（壁際溝埋土） |
| 5. 2.5Y5/4黄褐色極細粒砂～シルト、粘性中 | 10. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、粘性中（ビット埋土） |

C

C'
48.8m



【C-C'断面】

1. 10YR3/4暗褐色シルト、しまりやや強、粘性やや強（柱痕）
2. 10YR4/4～4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

第72図 SH410 (1/40)

建物中央付近や、中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの西隅近くで検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長軸1.0mほどある。西側は段状に浅くなる。壁際溝に接して掘り込まれている。

壁際溝は、SH414と重複する北壁沿いを除いて途切れず連続しており、土層断面からは北壁沿いにも壁際溝が存在したことが確認できるため、全周すると思われる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかったが、建物の中央部から西壁沿いにかけての広い範囲で硬化した面が認められた。

なお、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH414 (第73図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。北側の大部分が調査区外となっており、未調査である。SH410・419、SB420と重複しており、SB420に先行し、SH410・419より後出する。一部の調査にとどまっている上に、東側が削平を被っており遺存状況が悪いため、全体の形状は不明であるが、平面形は長軸5.6mほど、短軸3.0m以上の方形を呈するものと思われる。

主柱穴は2基検出された。本来は4基の主柱穴が建物の平面形に沿って方形に配置されていると考えられる。南西隅の主柱穴はSB420の柱穴と重複している。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの西側で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長軸1.0mほどある。北側は段状に浅くなる。壁際溝に接して掘り込まれている。また、貯蔵穴の西側では、南壁から主柱穴に向かって延びる細い溝が認められる。位置からみて間仕切りとは考えにくく、当該建物に伴う遺構であるかも確定できないが、貯蔵穴に伴う

遺構の可能性も考えられよう。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れていないが、削平を被っている東壁沿いや未調査の北側に壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

なお、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器高杯の破片が数点出土した。そのうち杯部の破片1点(1099)には、内面に水銀朱が付着している。建物中央付近や貯蔵穴の東側では、弥生土器・土師器の大きな破片が出土している。また、西側の壁際溝内からは、弥生土器・土師器の甕・高杯の破片がまとめて検出された。壁際溝内からは、ほかにも東海地方東部ないし関東地方南部の影響を受けたとみられる土師器壺(1106・1107)の小片が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

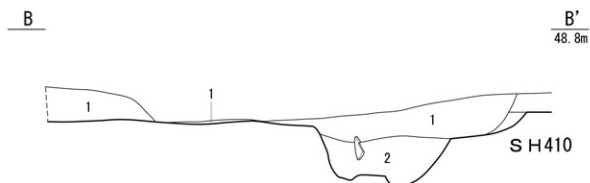
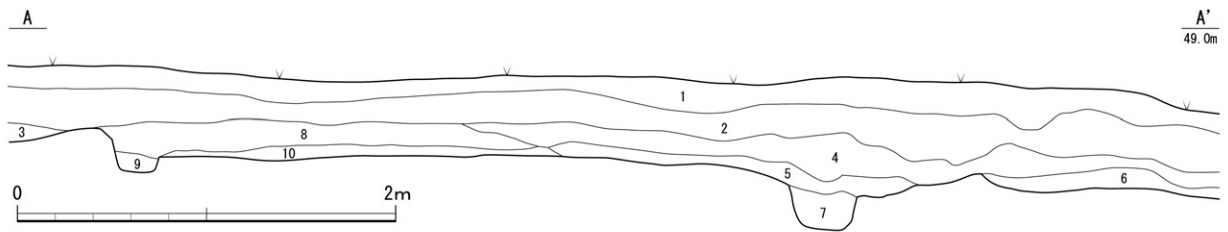
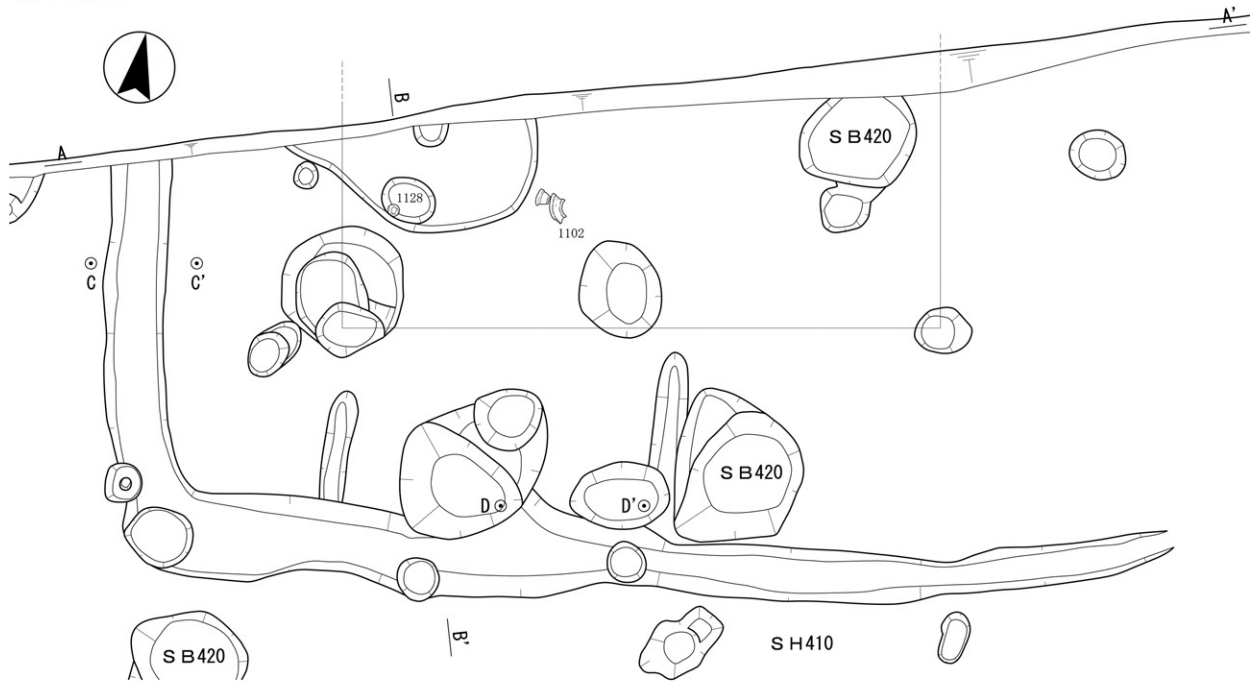
SH417 (第74・75図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH418とかなり重複しており、この建物に先行する。また、SK416にも先行する。平面形は長軸8.0m、短軸7.7mの正方形に近い方形を呈する。かなり大型の建物である。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。そのうち3基の柱穴では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P3では当該土層中から土器や礫が検出されており、また、P1・2では上面に浅い掘り込みを伴うと思われるレンズ状の土層が堆積していることから(C-C'断面P1第1層、D-D'断面P2第1層)、建物の廃絶に際して柱は抜き取られたと推測される。また、P4についても内部から完形に近い土師器の受口状口縁台付甕と礫が出土しており、柱を抜き取ったものと考えられる。

建物中央よりやや北側や西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの西側で検出された。平面形がやや不整形な楕円形の土坑で、長径1.0mほどある。西側は段状に浅くなる。壁際溝からは若干離れた位置に掘り込まれている。貯蔵穴

SH414

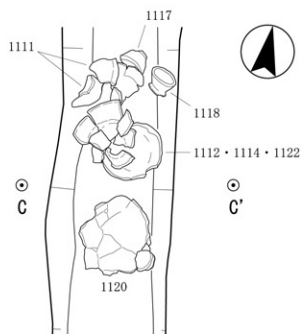


【A-A' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色中粒砂～細粒砂、しまり弱、粘性弱（表土）
2. 10YR4/4褐色細粒砂～極細粒砂、しまりやや強、粘性弱
3. 10YR4/4～4/6褐色細粒砂～極細粒砂、しまりやや強、粘性弱
4. 10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色極細粒砂、しまりやや弱、粘性弱
5. 10YR4/4～4/6褐色極細粒砂、しまり中、粘性やや弱
6. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
7. 10YR2/3黒褐色シルト、10YR4/6褐色シルトを含む、しまりやや強、粘性やや強（SB420柱穴埋土）
8. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂、しまりやや強、粘性中
9. 10YR3/4～4/6暗褐～褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強（壁際溝埋土）
10. 10YR4/4～4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

【B-B' 断面】

1. 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～シルト、炭化物を3%含む
2. 10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粘性中、土器を含む（貯蔵穴埋土）



壁際溝内遺物出土状況



南壁付近遺物出土状況

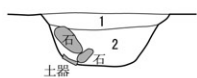
第73図 SH414 (1/40、1/20)

SH417



0 2m

E E' 48.4m



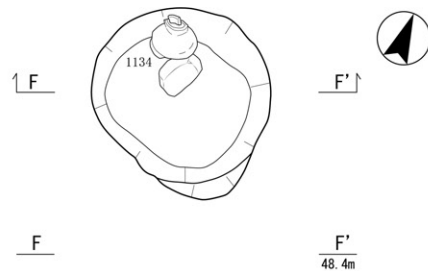
0 2m

【E-E' 断面】

1. 10YR4/4褐色極細砂～シルト、10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトを含む、しまりやや強、粘性中
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、10YR5/6～5/8黄褐色粗粒砂～シルトをブロック状に含む、しまりやや強、粘性やや強

貯蔵穴

主柱穴 (P 4) 遺物出土状況



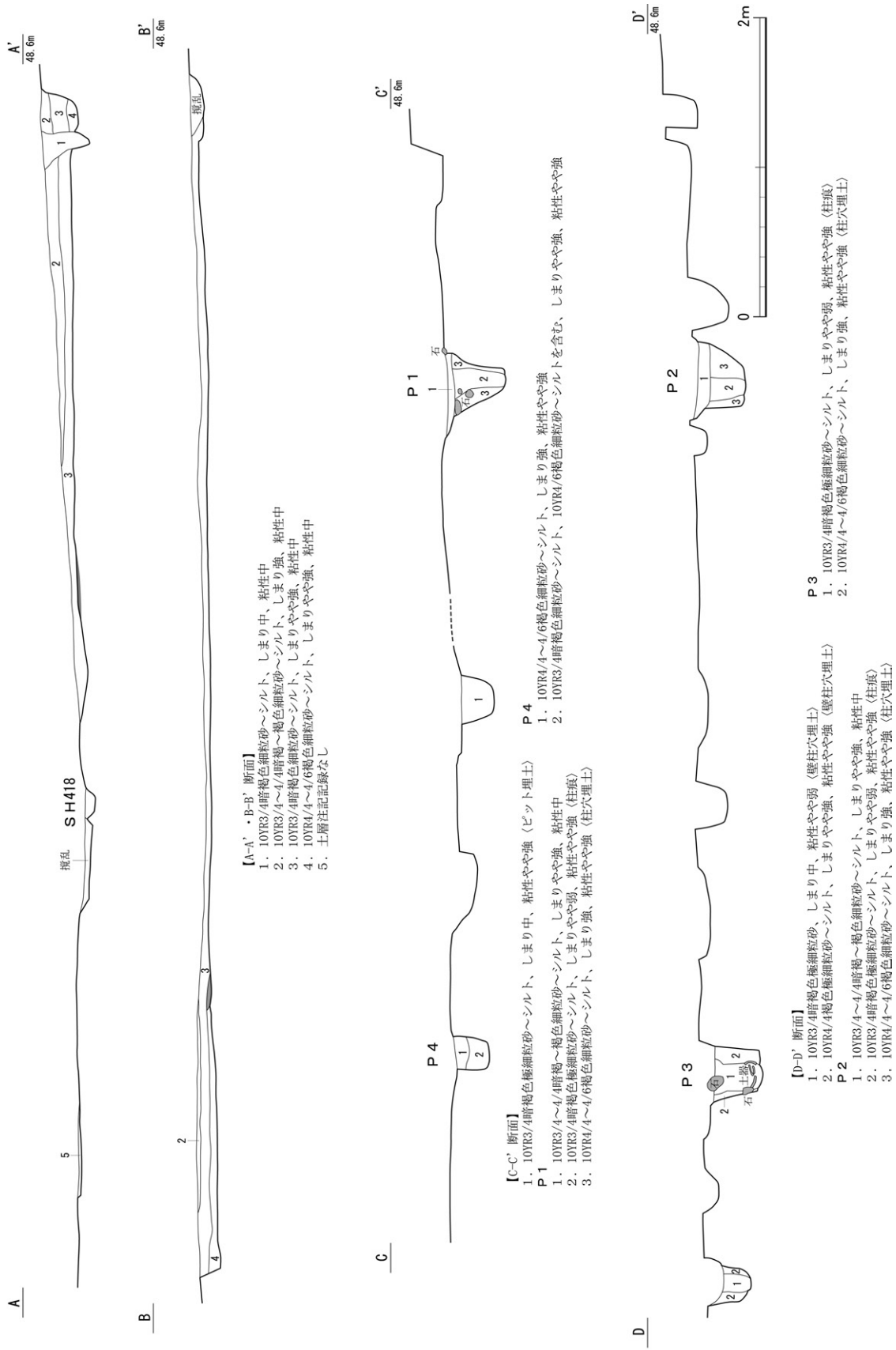
F F' 48.4m



0 1m

第74図 SH417① (1/60、1/40、1/20)

SH417



第75図 SH417② (1/40)

内からは、底面付近で土器片や礫が複数検出されている。

壁際溝は、SH418によって削平を被っている北西隅付近や攪乱を被っている部分では確認できないものの、ほぼ全周すると思われる。北西隅については、北壁から西壁へと壁際溝が屈曲していくような痕跡が認められたが、南東隅から北へ向かって延びる壁際溝とは位置が若干ずれており、実際の北西隅の屈曲はもう少し西側に存在した可能性が高い。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P2～4から弥生土器・土師器が出土したほか、貯蔵穴からは弥生土器・土師器壺が検出されている。埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH418 (第76図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH417より後出する。平面形は長軸6.6m、短軸6.6mの正方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P1～3ではその上面に浅い掘り込みを伴うと思われるレンズ状の土層が堆積しており(A-A'・B-B'断面第1層)、建物の廃絶に際して柱は抜き取られたか、根元から切断されたかと推測される。また、北西隅の柱穴の北側に接して、調査時に支柱穴P4とされていたピットが存在する。このピットの土層断面でも柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる土層が確認できる(C-C'断面第1層)。他の支柱穴との位置関係から支柱穴とはしなかったが、P3の西側に存在するピットなども考慮すると、建物の建て替えが行われたか、あるいは控え柱のようなものであった可能性も考えられる。

建物中央よりやや南西側や東側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。ただし、東側の焼土はSH417に伴うものの可能性もある。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの西隅近くから検出された。平面形がやや不整形な円形の土坑で、長径1.0mほどある。西側は段状に浅くなる。壁際溝に接して掘り込まれている。

壁際溝は、部分的に攪乱等によって確認できないものの、ほぼ全周すると思われる。貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、壁際溝と重複する形でピットが複数検出された。SH418との新旧関係は確認できていないが、西壁では北西隅と南西隅からそれぞれ1.5mほどの位置で確認でき、北壁でも北東隅から1.5mほどの位置にピットが認められるなど、一定の位置に存在するように見受けられる。壁柱穴など、壁の構造に関わる何らかの施設の可能性も考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴や埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やSH417との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

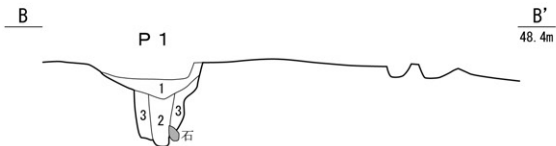
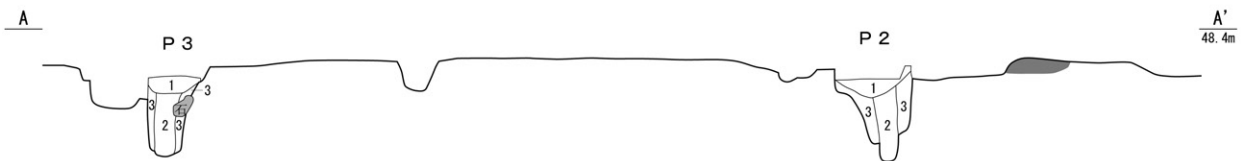
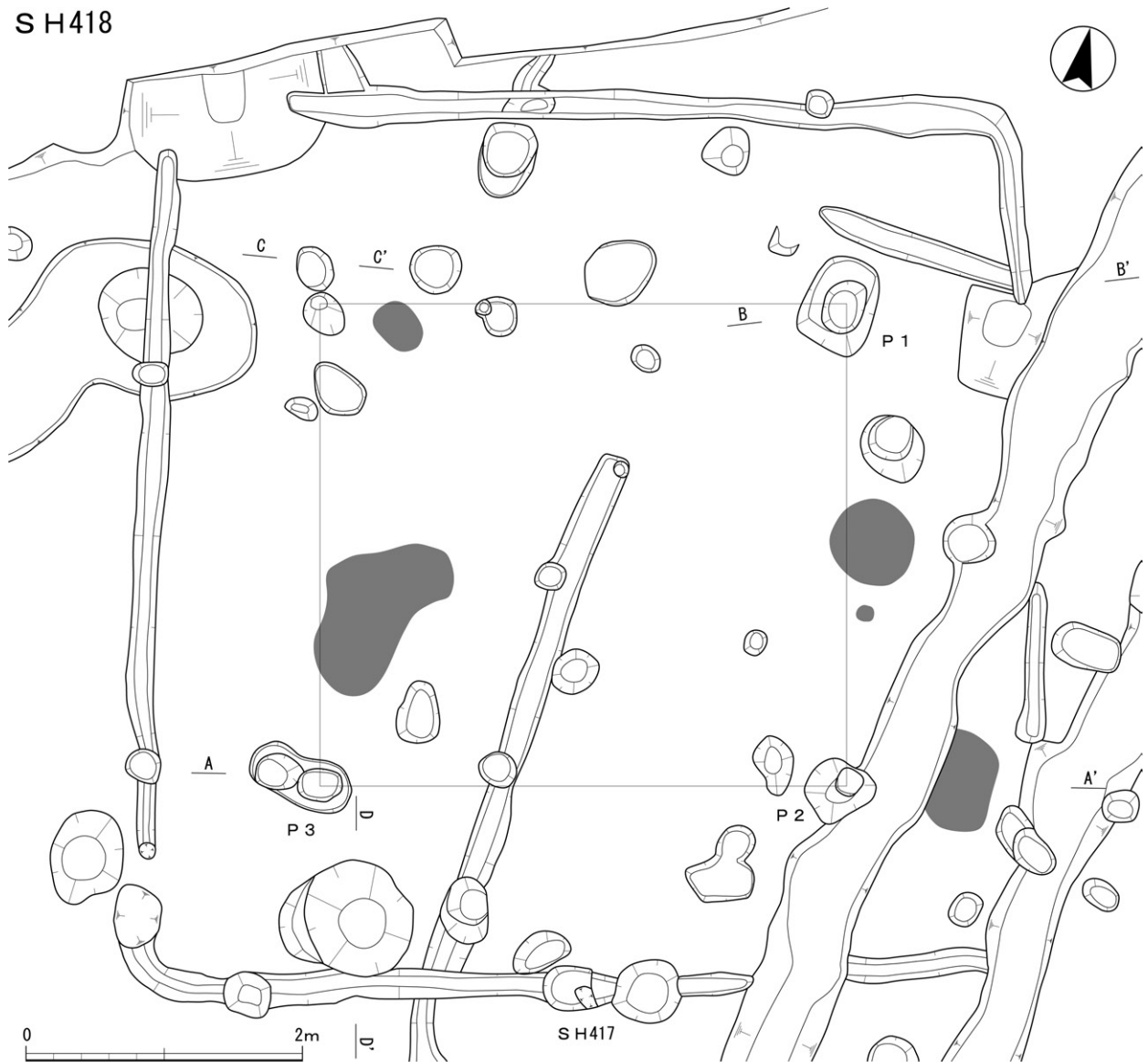
SH419 (第77図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。北側の一部が調査区外となっており、未調査である。SH410・414、SB420と重複しており、これらの建物に先行する。全体的に削平を被っており遺存状況が悪いため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.6mほど、短軸5.3mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。北東隅のP1が若干東へずれており台形の配置となっているが、平面図と土層断面図ではP1の位置が異なっている。調査記録からはどちらが正しいか判断できなかったため、本来はP1がもう少し西側に位置し、長方形に配置されていた可能性がある。そう考えた場合にも、支柱穴の配置と建物の平面形にずれが認められるため、別のピットが支柱穴であったとも考えられる。ただ、P1・P3は何らかの柱穴であることは認められよう。P1では柱穴埋土の上層に別の土層が堆積しているため(A-A'断面第1層)、柱は抜き取られたか切断されたものと思われる。

南西隅付近から焼土が検出されているが、SH410に伴うものである可能性が高く、それ以外に焼土などは検出されなかったため、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されていない。

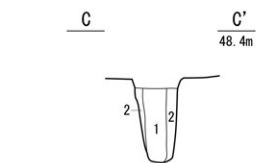
壁際溝は、調査区外となっている北壁を除く壁沿

SH418



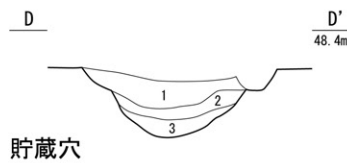
【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、7.5YR5/6明黄色シルトを含む、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強（柱痕）
3. 10YR4/4～4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性強（掘形埋土）



【C-C' 断面】

1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、焼土塊・炭化物を含む
2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中



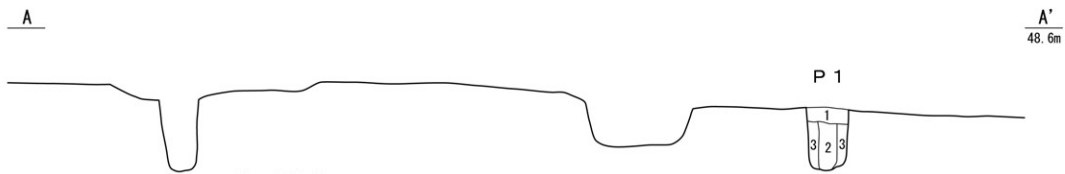
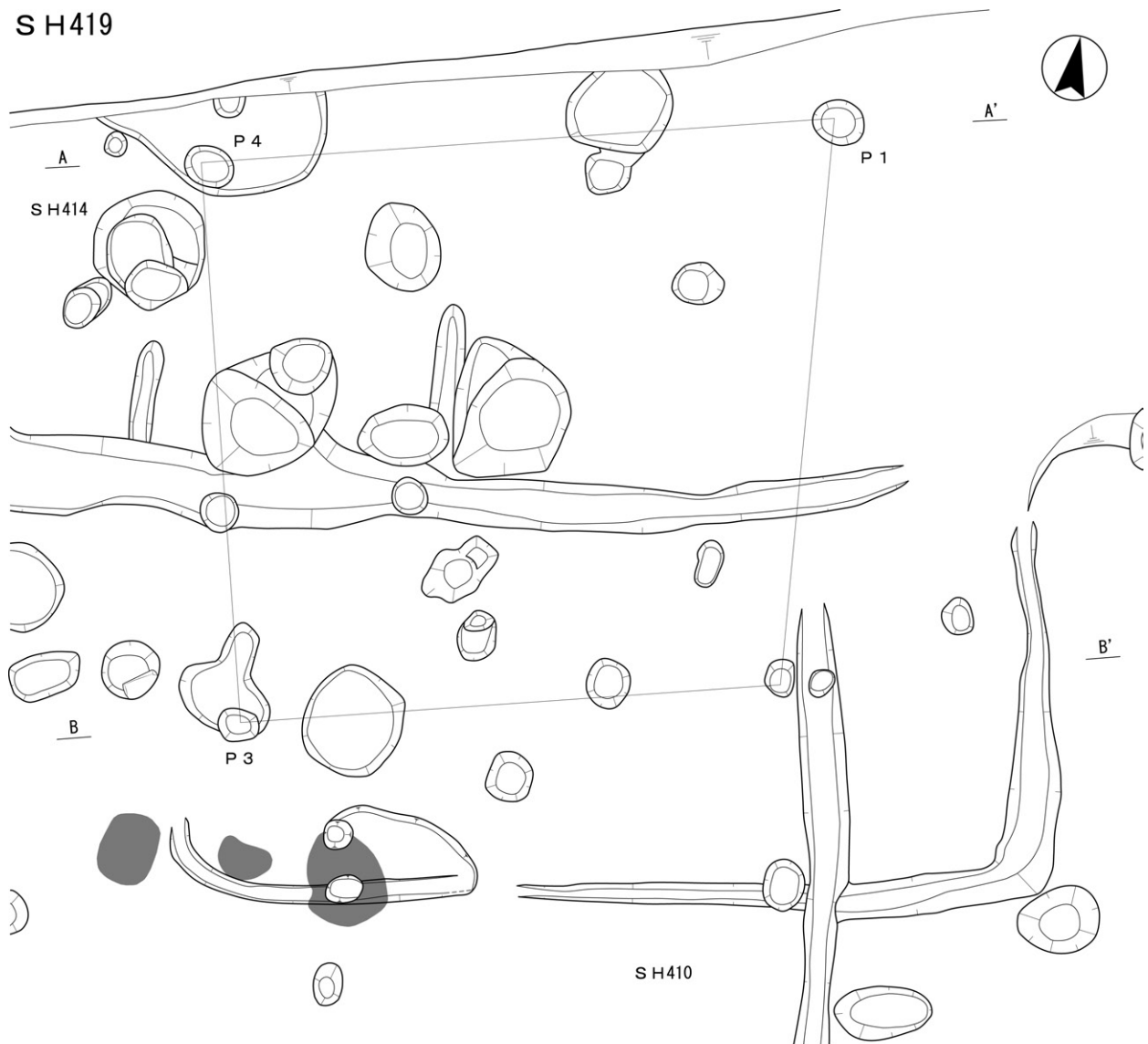
【D-D' 断面】

1. 10YR3/4～4/4暗褐色～褐色極細粒砂、しまり中、粘性中
2. 10YR3/3～5/4暗褐色極細粒砂、しまりやや弱、粘性中、焼土塊・炭化物を含む
3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む



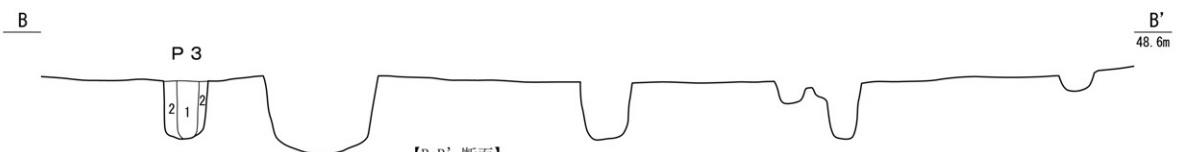
第76図 SH418 (1/50、1/40)

SH419



【A-A' 断面】

1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/6褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり中、粘性中、炭化物を含む
3. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中



【B-B' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/6褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり中、粘性中、炭化物を含む
2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中



第77図 SH419 (1/40)

いで検出された。南壁沿いではほとんど途切れていないが、東壁沿いと西壁沿いでは削平を被っていることもあり、一部しか検出されていない。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P4や埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

SH410・414との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期の可能性が高いが、確定的ではない。

SH421 (第78・79図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH427・429・433と重複しており、特にSH427・429とはかなりの部分が重複する。SH427・429・433より後出し、複数の建物が重複する中で、最も新しい時期に構築されている。また、重複している3棟の建物よりもやや深く掘り込まれている。平面形は長軸6.3m、短軸6.3mの正方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴はP4など深いもので深さ0.5mほどある。P3を除く3基の柱穴では、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。P4では上面にレンズ状に土層が堆積しており(D-D'断面P4第1層)、建物の廃絶時に柱は抜き取られたか切断された可能性が高い。

建物中央付近の床面の複数箇所から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅から検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.1mほどある。壁面付近では一段深く掘り込まれており、北側へ向かって段状に浅くなる。壁際溝に接するように掘り込まれている。

壁際溝は、途切れずに全周する。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、支柱穴P2から弥生土器・土師器甕の破片が出土した。埋土からは、弥生土器・土師器のほか、鉄製の直刃鎌が1点出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初

頭～前葉と考えられる。

SH422 (第80図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH430・431とかなりの部分が重複している。SH431に先行する可能性が高いが、SH430との新旧関係は不明確である。複数の堅穴建物が集中し、重複も著しい状況であったため、掘形を明瞭に検出することができず、辛うじて北壁と東壁の一部を確認したにとどまった。そのため、全体の形状は不明であるが、平面形は長軸5.3m、短軸4.8mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されており、建物の平面形に沿った位置にあるものと思われる。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できるが、P1・2では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴や壁際溝、貼床なども確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が比較的多く出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられるが、終末期でも新しい段階と思われる。

SH423 (第81図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH433・448と重複しており、これらの建物に先行する。北東隅付近及び南東隅付近は攪乱によって削平を被っている。平面形は長軸5.0m、短軸5.0mの正方形を呈する。

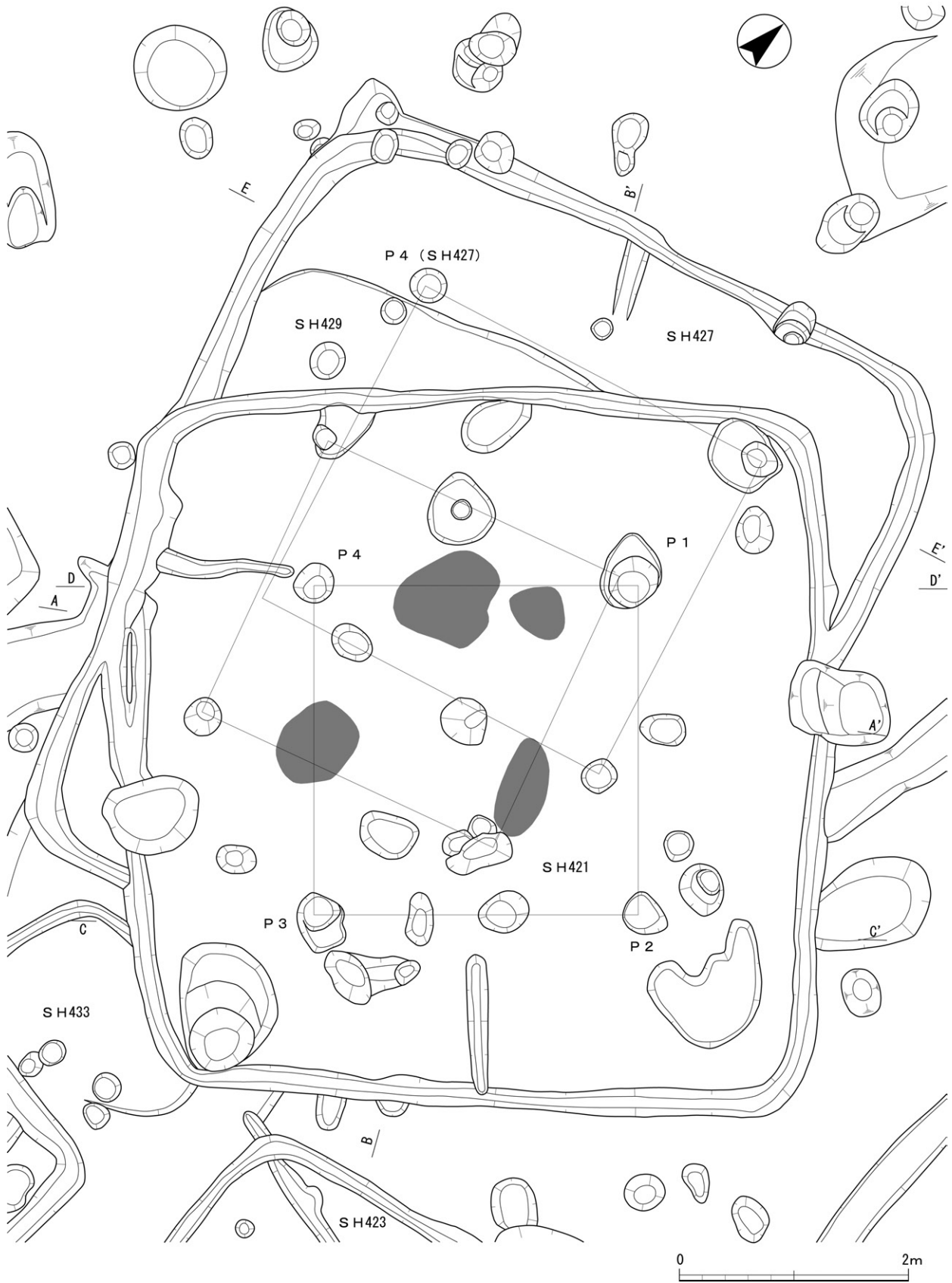
支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P1・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。

建物中央よりやや西側の床面から焼土が複数箇所検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。東壁付近でも焼土が検出されているが、SH448に伴うものである可能性が高い。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの西側で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.8mほどある。壁際溝と接して掘り込まれている。

壁際溝は、貯蔵穴付近や攪乱によって削平を被っている箇所を除いて全周する。

S H 421 · 427 · 429



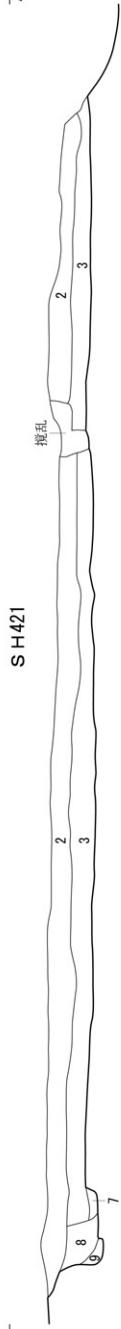
第78図 S H 421 · 427 · 429① (1/50)

SH421・427・429

【A-A'・B-B' 断面】

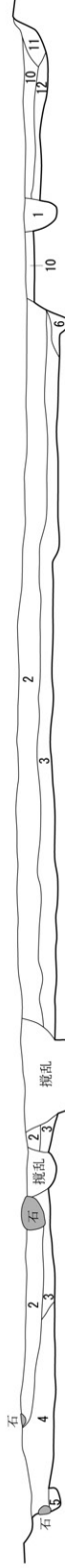
1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト（ピット埋土）
2. 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強（SH421埋土）
3. 2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂、しまりやや強（SH421埋土）
4. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強（SH421埋土）
5. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト（SH421壁際埋土）

A' 49.0m



B' 49.0m

SH427



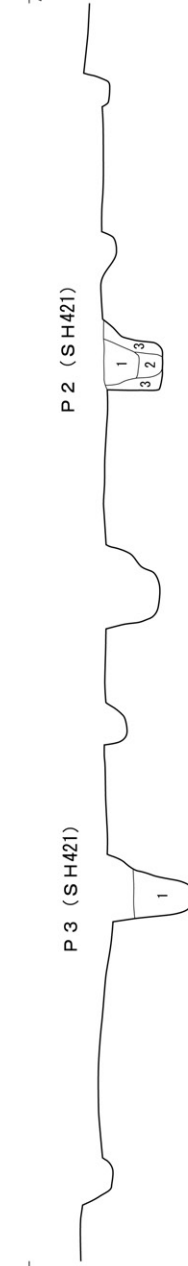
SH421

6. 10YR4/1褐色極細粒砂～シルト（SH421壁際埋土）
7. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、焼土塊を3%含む（SH421壁際埋土）
8. 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルト（SH429壁際埋土）
9. 10YR5/6黄褐色極細粒砂～シルト（SH429壁際埋土）
10. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～シルト（SH427埋土）
11. 2.5YR5/4黄褐色極細粒砂～シルト（SH427壁際埋土）
12. 2.5YR5/3黄褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強（SH427貼床）

【C-C' 断面】

- P2 (SH421)
 1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
 2. 10YR4/4～4/6褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
 3. 10YR4/6～5/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
- P3 (SH421)
 1. 10YR4/3～4/4にぶい黄褐色極細粒砂、しまりやや弱、粘性やや弱

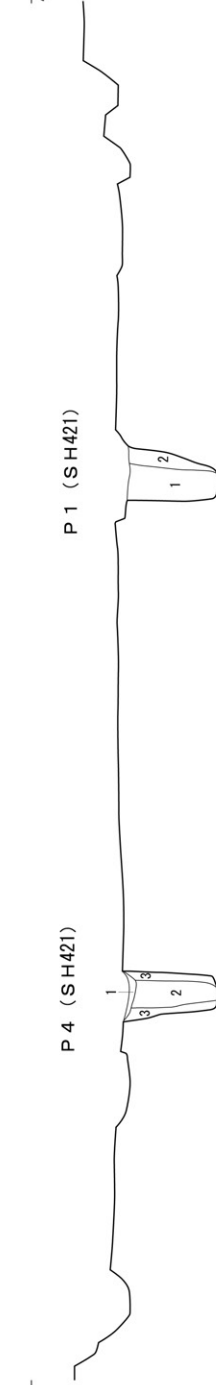
C' 49.0m



P3 (SH421)

P2 (SH421)

D' 49.0m



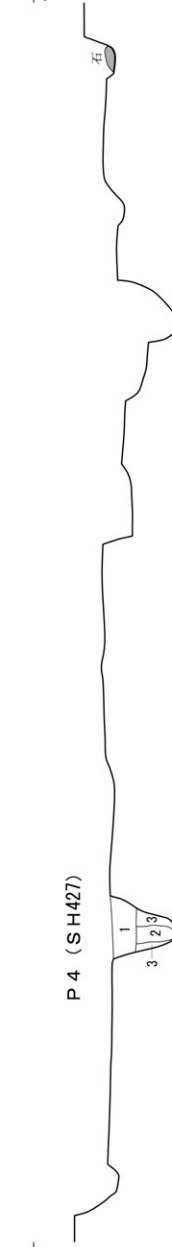
P4 (SH421)

P1 (SH421)

【D-D' 断面】

- P1 (SH421)
 1. 10YR4/3～4/4にぶい黄褐色～褐色極細粒砂、しまりやや弱、粘性やや弱
 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
- P4 (SH421)
 1. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり中、粘性やや強
 3. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

E' 49.0m



P4 (SH427)

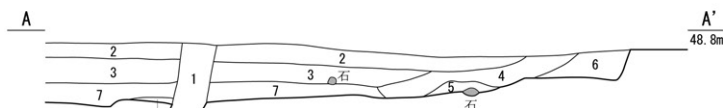
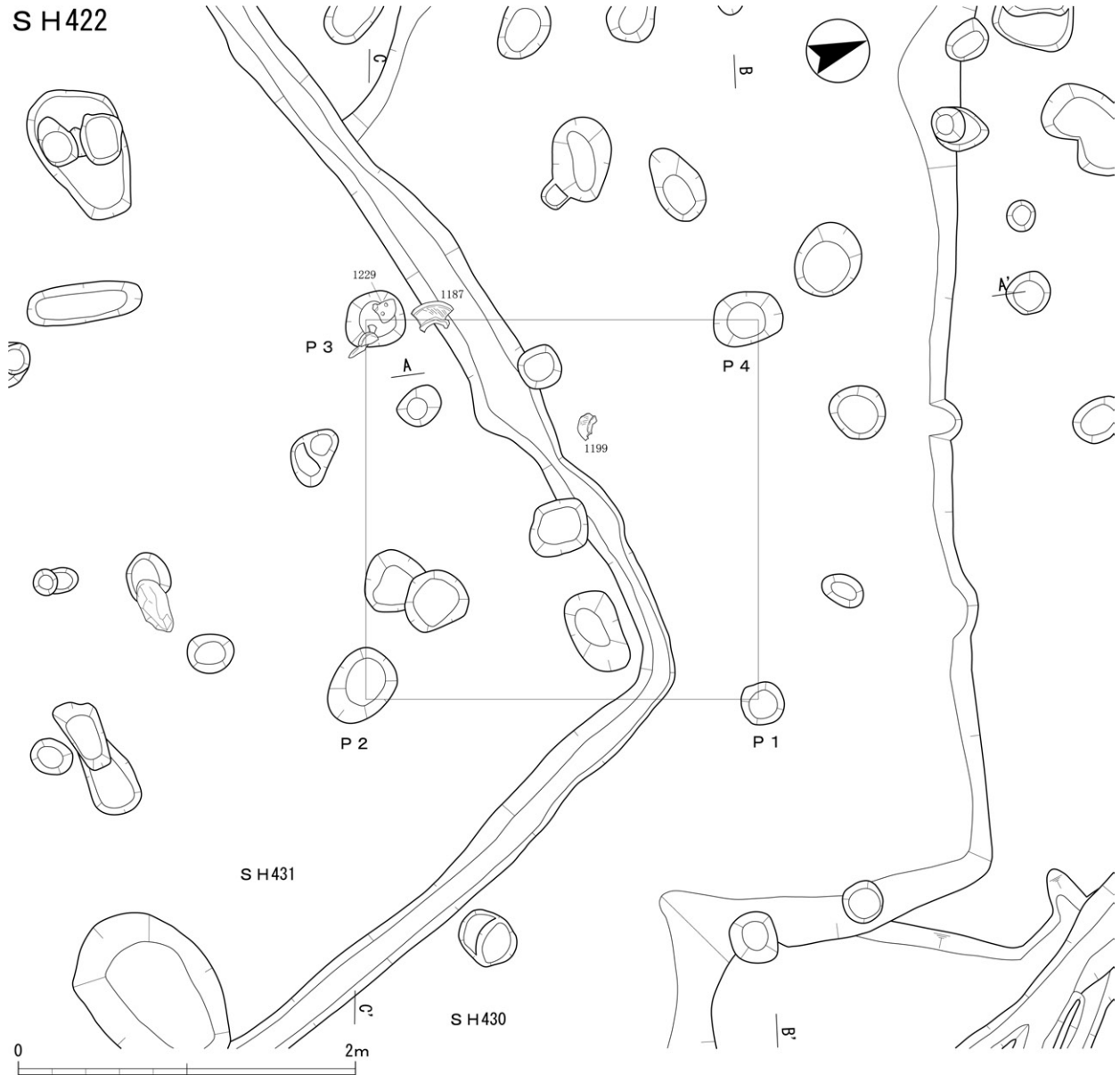
【E-E' 断面】

1. 10YR3/4～4/4暗褐色～褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、炭化物を含む
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
3. 10YR4/4～5/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強



第79図 SH421・427・429② (1/40)

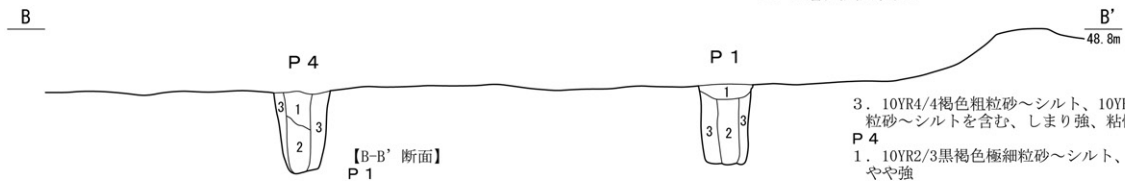
S H422



【A-A' 断面】

1. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂、しまり中、粘性やや弱
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強

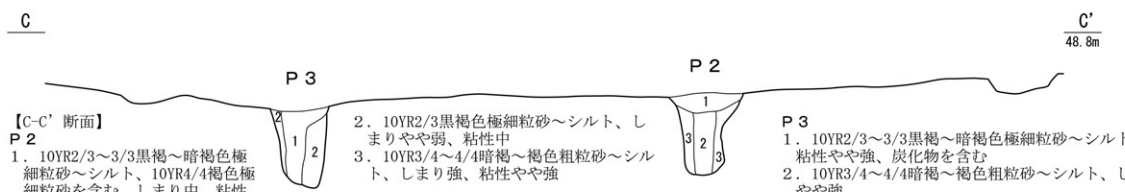
3. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、炭化物を含む
4. 10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性やや強、炭化物を含む
5. 10YR4/4～4/6褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや強、炭化物を含む
6. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
7. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
8. 土層注記記録なし



【B-B' 断面】

- P 1**
1. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
 2. 10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む

- P 4**
1. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
 2. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトを含む、しまりやや強、粘性強
 3. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強、炭化物を含む



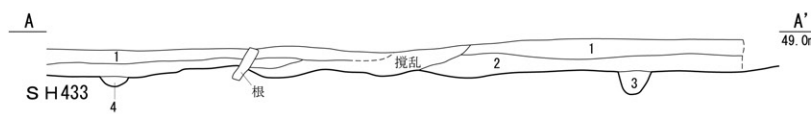
【C-C' 断面】

- P 2**
1. 10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/4褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり中、粘性やや強
 2. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
 3. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

- P 3**
1. 10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
 2. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

第80図 S H422 (1/40)

S H 423



【A-A' 断面】

1. 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルト
2. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強（間仕切り溝）
4. 10YR4/4～4/6褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強（壁際溝）

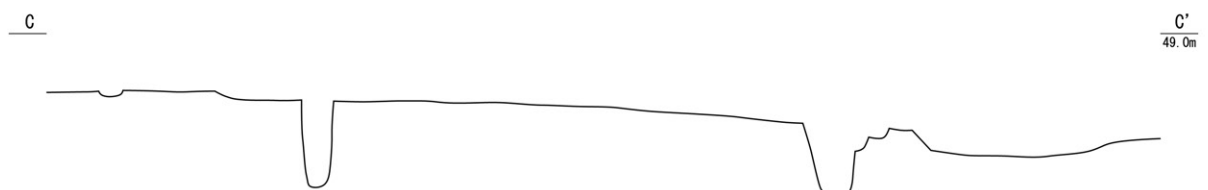


【B-B' 断面】

- P 4
1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
 2. 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中

P 1

1. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR5/6黄褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中



第81図 S H 423 (1/40)

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、支柱穴P2から土師器手焙形土器の破片が出土している。埋土からも弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH424 (第82・83図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。北西隅付近及びは攪乱によって削平を被っているため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.8m、短軸5.4mのやや長方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されており、建物の平面形も本来もう少し正方形に近い可能性もある。P1では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できるが、上面で土器が検出されていることから、建物の廃絶時に柱は抜き取られたか切断された可能性が高い。

建物中央付近や、中央よりやや西側の床面から焼土が複数箇所検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの南西隅付近で検出された。平面形が不整形な長方形の土坑で、長軸0.8mほどある。壁際溝からはやや離れて掘り込まれている。

壁際溝は、攪乱によって削平を被っている箇所を除いてほぼ全周するが、北壁東半では若干途切れている。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、北東部で弥生土器・土師器の破片や礫がまとまって出土した。また、中央部では比較的大きな礫が数点検出されている。このほか、埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH426 (第84図) 第4次調査区の中央部で検出

した建物である。遺存状況が悪いため全体の形状を明瞭に確認することができず、結果的に、長軸5.3m、短軸4.4～5.3mほどの規模の、台形に近い不整形な平面形の建物として検出した。

支柱穴は4基検出された。ただし、北西側に並ぶ2基と南東側に並ぶ2基の間には位置にかなりのずれがあり、整然と対応しない。こうした点からみて、2棟の建物が重複している可能性も考えられる。

建物中央より北側や西側、東側の床面から焼土が複数箇所検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴や壁際溝は検出されず、貼床や周溝状掘形も確認できなかった。

貯蔵穴や壁際溝などが検出できなかったことを踏まえれば、簡易な構造の建物であった可能性も考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。台付甕や高坏など複数の器種があるが、ほとんどが小片で図化できなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭と考えられるが、遺物の出土量がわずかであるため、確定的ではない。

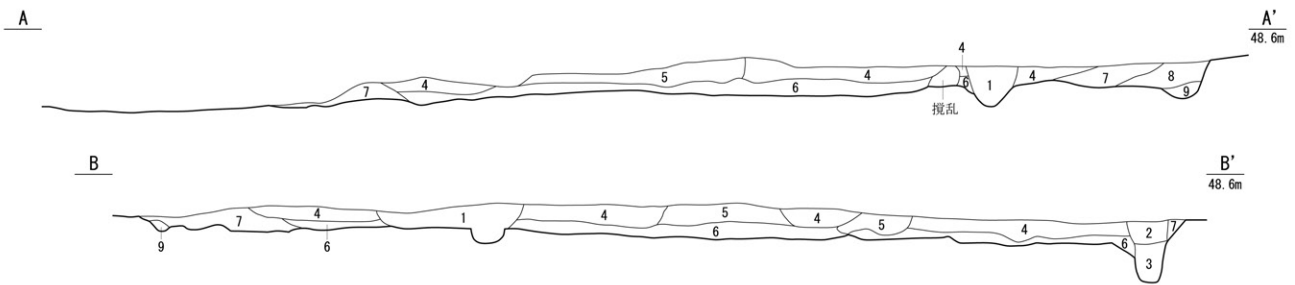
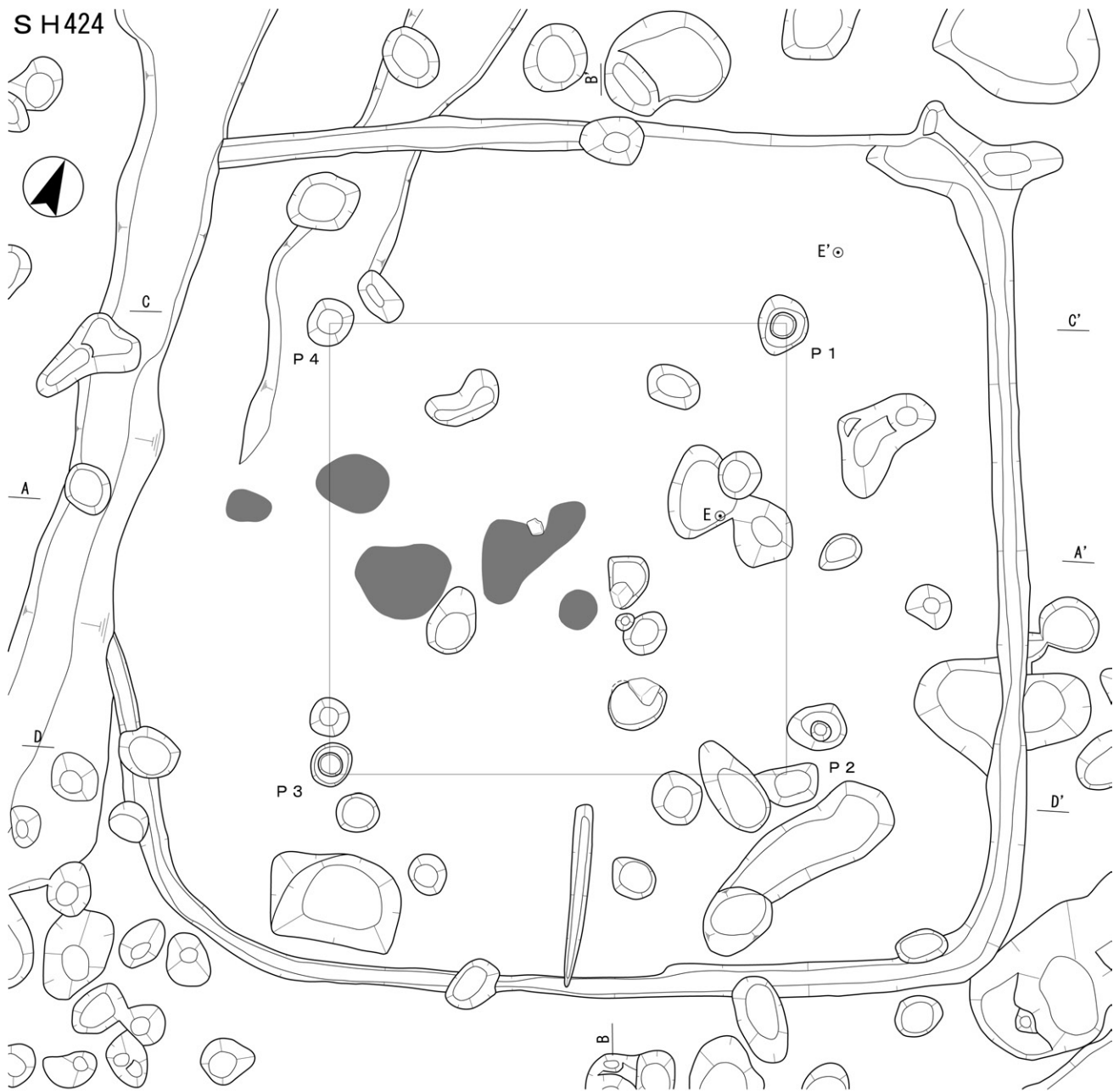
SH427 (第78・79図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH421・429とかなりの部分が重複する。SH421に先行し、この建物によって南側の大部分が削平を被っている。SH429よりは後出する可能性が高い。建物の重複により遺存状況が悪く、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸6.3m、短軸6.0mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は3基検出された。南西隅の支柱穴が検出されていないが、建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されていると考えられる。P4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、柱穴埋土の上層には別の土層が堆積しており(E-E'断面第1層)、建物の廃絶時に柱は抜き取られたか切断された可能性が高い。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されていない。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れておらず、全周していたと思われる。

SH424

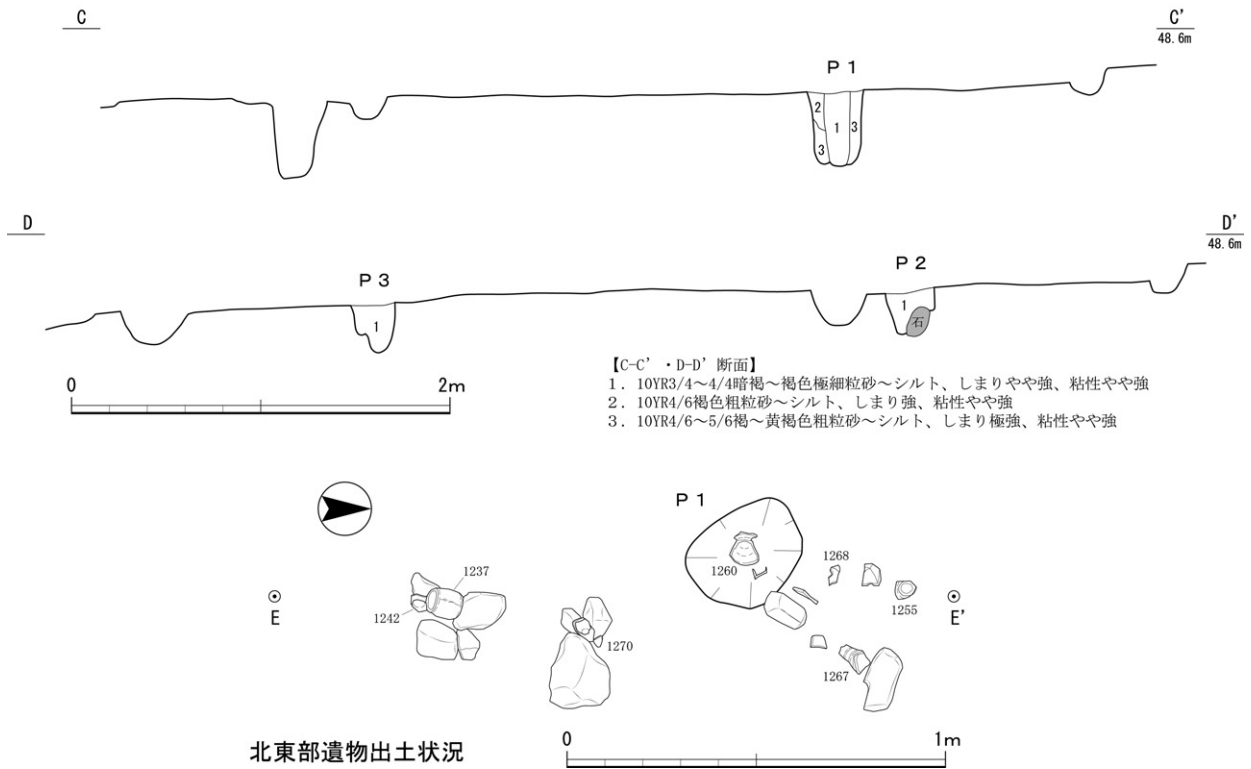


【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
3. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
4. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、土器を多く含む
5. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、地山ブロックを含む、しまりやや強、粘性やや強
6. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
7. 10YR4/4～4/6褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
8. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
9. 10YR4/6～5/6褐～黄褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

第82図 SH424① (1/40)

S H424



第83図 S H424② (1/40、1/20)

貼床は、壁沿いに部分的に施されている。明確な周溝状掘形は確認できなかったが、貼床が施されている部分では掘形が若干深くなっている。

また、北壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りとも考えられるが、ほかの建物の場合は南側の壁面に伴うことが多く、また、壁面に対して直交していないことなどからみて、間仕切りとは考えにくい。当該建物に伴う遺構であるかも確定できない。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

S H428 (第67図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。S H402・408と重複しており、これらの建物より後出する。平面形は長軸3.5m、短軸3.3mの正方形に近い方形を呈する。かなり小型の建物である。

明確な支柱穴は検出されなかった。

建物中央より北側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、東隅付近で検出された。平面形が不整形な隅丸長方形の土坑で、長軸0.6mほどある。

壁際溝は、ほぼ全周しているが、貯蔵穴付近では若干途切れている。

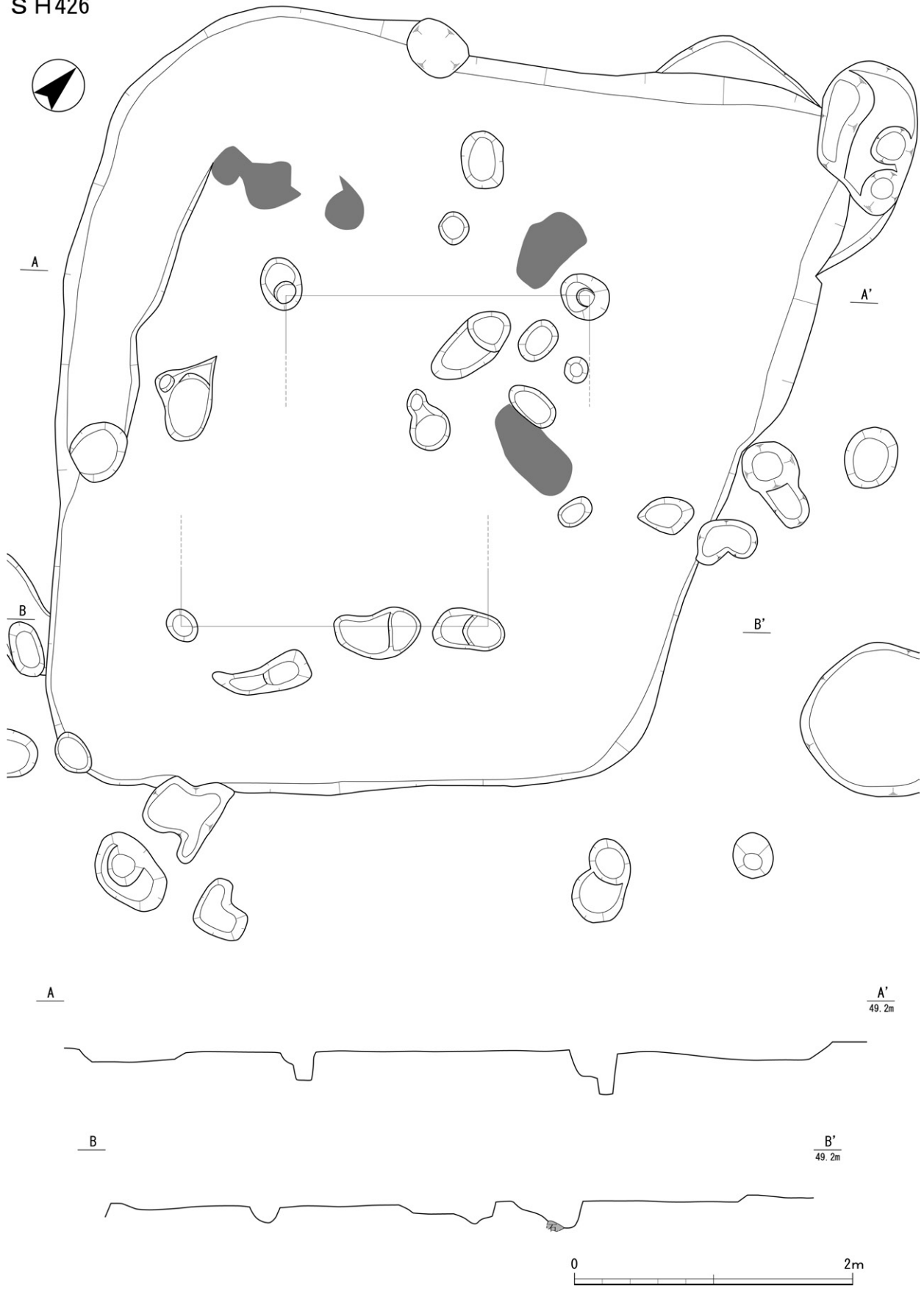
貼床は、建物の中央部を中心に施されていると思われる(第6層)。また、建物の中央部を中心とする広い範囲で硬化した面が認められた。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器甕の小片が出土しているほか、埋土から弥生土器・土師器や砥石が出土している。

出土遺物やS H402・408との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期~古墳時代前期初頭と考えられる。

S H429 (第78・79図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。S H421・427とかなりの部分

S H426



第84图 SH426 (1/40)

が重複する。SH421・427に先行し、これらの建物によって大部分が削平を被っており、床面は北西隅及び南西隅付近が遺存するのみである。建物の重複により遺存状況が悪く、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.8m、短軸5.3mほどのやや長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は3基検出された。北東隅の主柱穴は、SH421の主柱穴と重複しているものと思われ、建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されていると考えられる。また、南東隅の主柱穴は不整形で、柱が抜き取られた可能性もある。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。SH421の壁際溝と重複して検出され、新旧関係は不明確であったものの、位置や規模からSH429に伴う貯蔵穴とみられる。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径0.8mほどある。壁際溝からはやや離れて掘り込まれている。

壁際溝は、南西隅付近で検出されたが、北壁沿いでは検出されていない。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴や埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物やSH421・427との新旧関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭の可能性が高いが、確定的ではない。

SH430 (第85・86図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH422・431・433・434・456など、多数の竪穴建物が集中する中に位置する。SH422・431・433・434・496と重複しており、SH431に先行し、SH433・434・496より後出する。おそらくSH422にも先行すると推定されるが、不確実である。ほかの建物との重複が著しいため、西側は明確に検出できなかった。そのため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸・短軸5.0mほどの正方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P1～3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確

認できる。ただし、P3ではその上面に別の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、SH431内部のSH430の南西隅付近にあたと推定される位置で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.0mほどある。

壁際溝は、東壁沿い及び南壁沿いの一部で検出された。SH431やSH422と重複する箇所や、遺存状況が悪い北東隅付近では、壁際溝の有無を確認できなかった。なお、南壁沿いでは、壁際溝が二重になっているような様子が認められる。内側のものは、貯蔵穴との位置関係などからSH430に伴うものとは考えにくく、別の建物の壁際溝とも考えられるが、これに対応する主柱穴は確認できなかった。SH430の建て替えあるいは部分的な補修等に関わるものの可能性もあるが、推測にとどまる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物やSH431との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH431 (第85・86図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH422・430・433・434・456など、多数の竪穴建物が集中する中に位置する。SH422・430・434・454・456・496と重複しているが、これらの建物より後出するものと思われ、一群の竪穴建物の中で最も新しい時期に構築された可能性が高い。平面形は長軸6.3m、短軸6.3mの正方形を呈する。

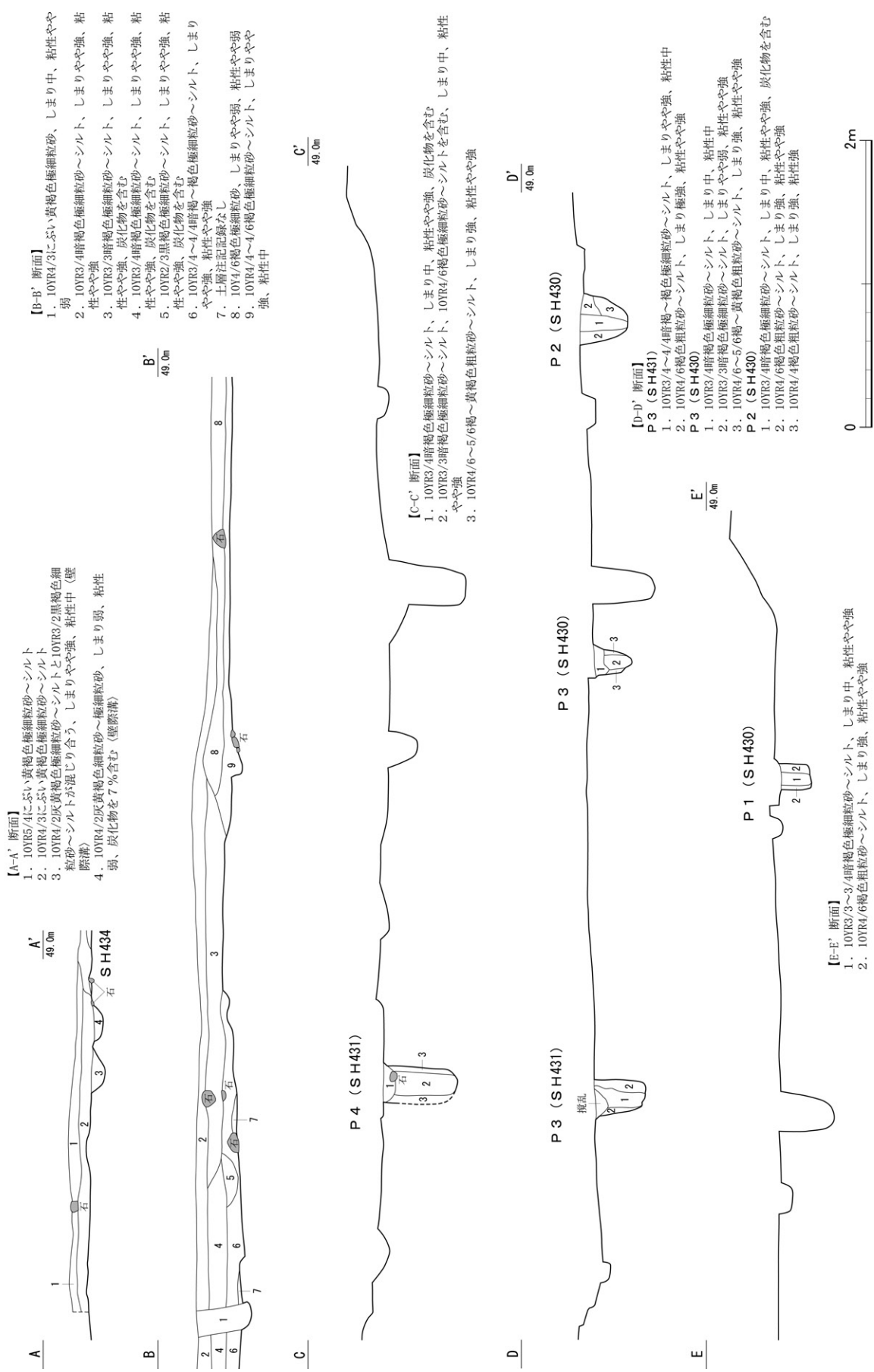
主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P3・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。ただし、P4では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。また、すべての主柱穴で一部重複するようにピットが検出されている。P3・4の土層断面からみて柱の抜き取りに関わるものとは考えにくく、建て替えが行われていた可能性が考えられる。

S H 430 · 431



第85図 S H 430 · 431① (1/40)

S H 430 - 431



第86図 S H 430 - 431② (1/40)

建物中央よりやや西側で浅いピットが検出されており、壁面に被熱が確認されていることから、これが炉と考えられる。南縁部に細長い礫が配されている添石炉である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの西側で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.0mほどある。中央部は平面形が隅丸方形に一段深くなっている。また、壁際溝と一部重複するように掘り込まれている。

壁際溝は、途切れず全周する。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P3付近で土師器広口壺の口縁部が出土している。また、建物中央付近のピット上面からは大型の台石(1330)が検出されている。埋土からも弥生土器・土師器が比較的多く出土した。なお、南壁沿いの壁際溝と重複して検出されたピット内から、弥生土器・土師器高環の脚部が出土しているが、この建物に伴うものかは不明である。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH433(第87図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH421・423・429・430・434など、多数の竪穴建物が集中する中に位置する。SH421・423・430・434・496と重複しており、SH421・434・496より先行し、また、SH423よりも後出する。SH430との新旧関係は不明確である。平面形は長軸4.8m、短軸4.8mの正方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P2・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。P4では柱穴底面付近から拳大の礫が検出されているが、根石等として用いられたのか、柱抜き取り後に落ち込んだものかは判断できない。

東壁付近から焼土が検出されているが、SH423に伴うものである可能性が高く、それ以外に焼土などは検出されなかったため、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が楕円形の土坑で、長径0.8mほどある。壁際溝と重複するように掘り込まれている。

壁際溝は、ほぼ全周する。北壁沿いや東壁沿い、南西隅付近では一部途切れているが、他の建物によ

る削平などの影響が考えられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やSH421・423・434との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH434(第88図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH422・429・431・433・456など、多数の竪穴建物が集中する中に位置する。SH430・431・433・456・496と重複しており、SH430に先行し、SH433より後出する。おそらくSH431にも先行すると推定されるが、SH456との新旧関係は不明確である。また、SH496とはほぼ完全に重複しており、SH434はこの建物の建て替えに伴って拡張されたものである可能性が高い。ほかの建物との重複が著しいため、西側は明確に検出できなかった。そのため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.6m、短軸5.6mほどの正方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P1・2では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が隅丸方形の土坑で、長軸0.5mほどある。東側の肩部に沿って浅い落ち込みが認められる。

壁際溝は、確認された範囲では途切れておらず、全周すると思われる。ただし、削平によって失われた西壁沿いに壁際溝が存在したかは不明である。

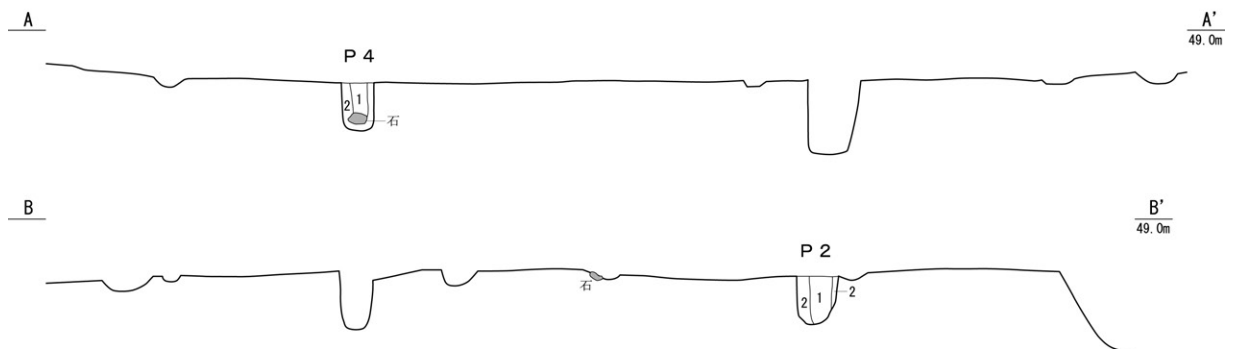
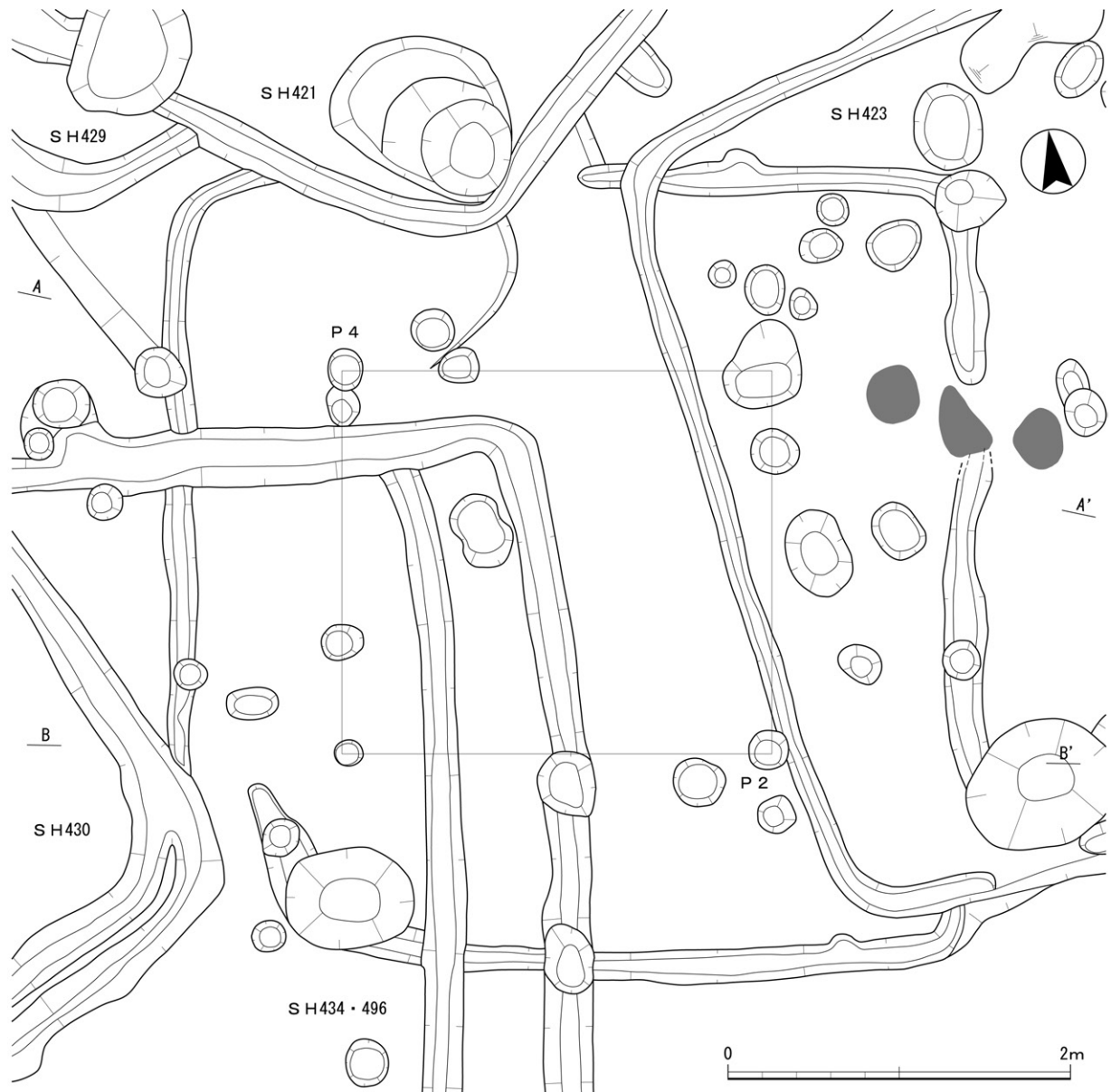
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やSH430・433との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH436(第89図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。今回の調査において検出された竪穴建物群の中では東端に近い箇所に存在しており、集落の東縁部に位置する建物の一つと思われる。平面形は長軸3.9m、短軸3.8mの正方形に近い方形を呈するが、南壁東側がやや外側に張り出すなど、掘

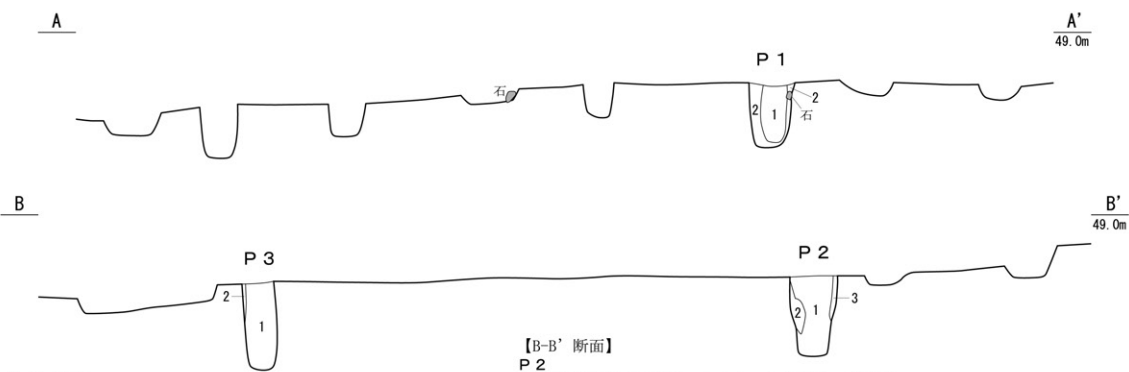
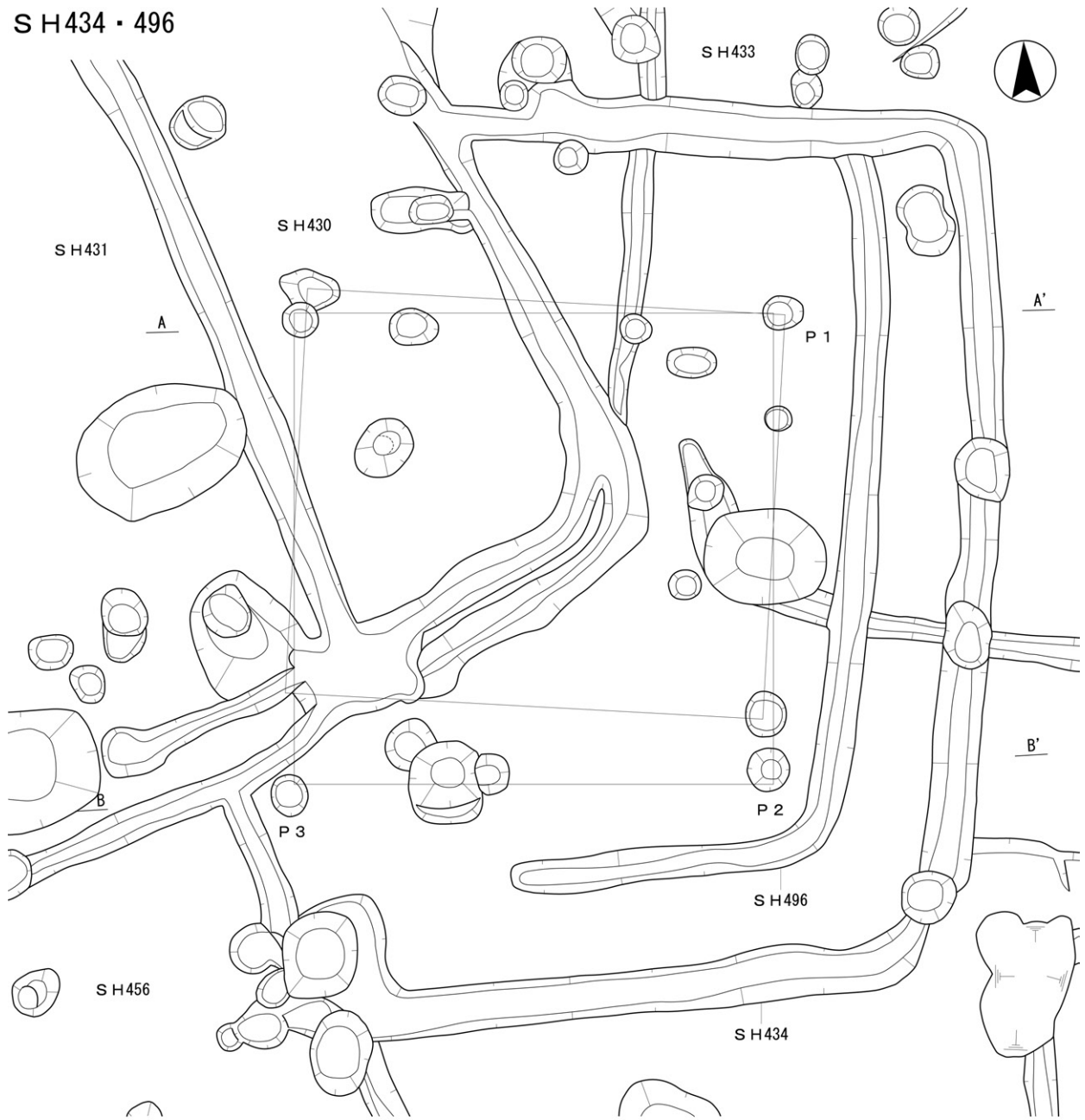
S H433



- 【A-A' 断面】
1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強（柱痕）
 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
- 【B-B' 断面】
1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（柱痕）
 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

第87図 S H433 (1/40)

S H 434 ・ 496



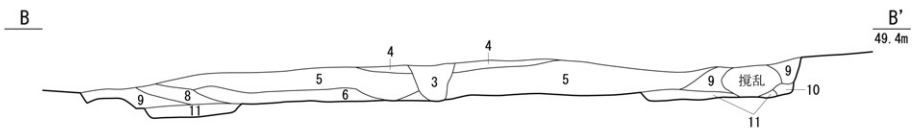
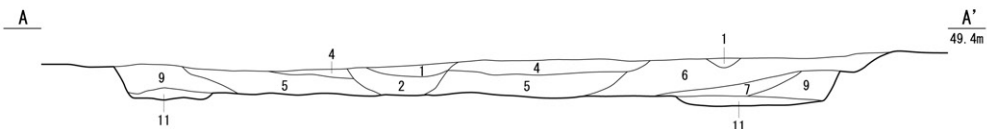
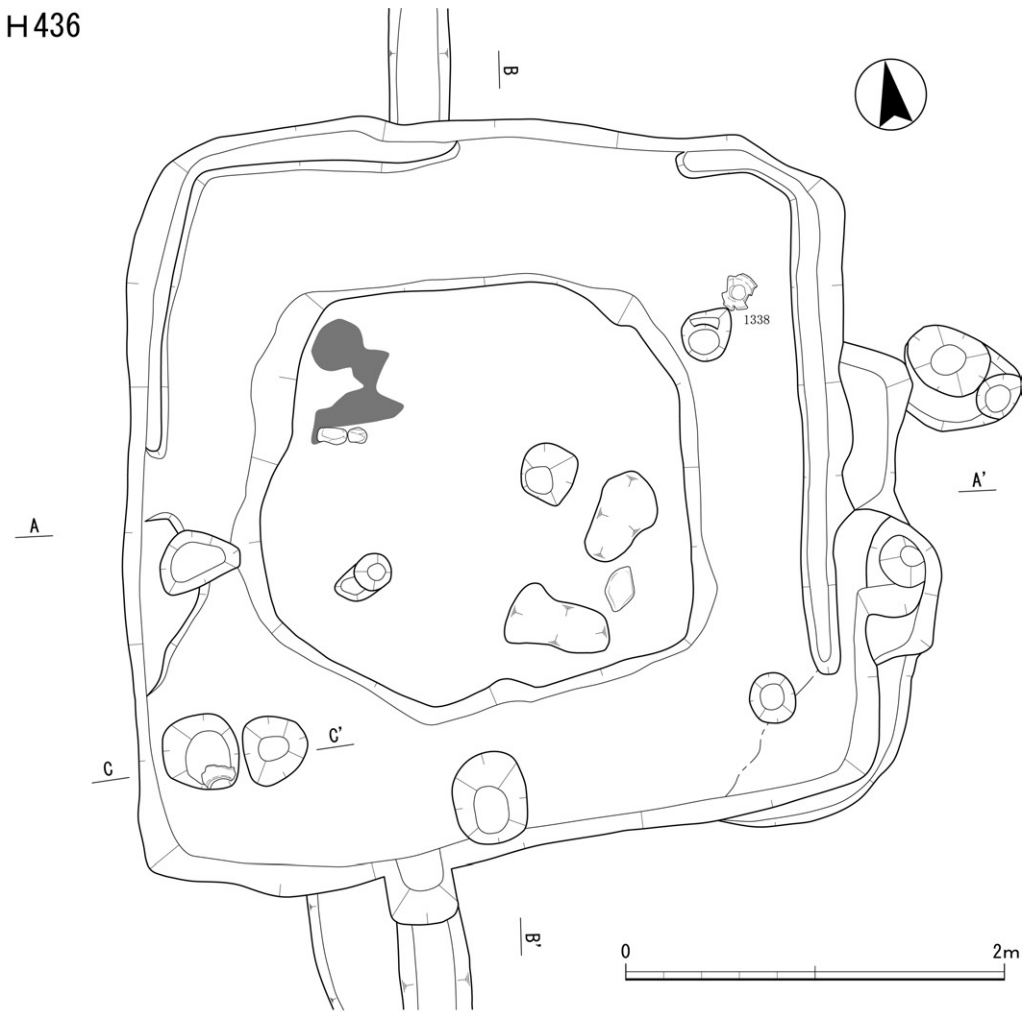
【A-A' 断面】
 1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性やや強
 2. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまり弱

【B-B' 断面】
 P 2
 1. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまり弱、粘性中
 2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、炭化物を7%含む
 3. 土層注記記録なし
 P 3
 1. 10YR4/1褐色細粒砂～シルト
 2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強



第88図 S H 434 ・ 496 (1/40)

S H436



貯蔵穴

【C-C' 断面】

1. 10YR3/4~4/4暗褐~褐色極細粒砂~シルト、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂~シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR4/4褐色極細粒砂、しまり中、粘性やや弱（攪乱埋土？）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂、しまり中、粘性やや弱（攪乱埋土？）
3. 10YR2/3黒褐色極細粒砂~シルト、しまり中、粘性やや強
4. 10YR3/4暗褐色極細粒砂~シルトと10YR4/4褐色極細粒砂~シルトが混じり合う、しまり中、粘性やや強
5. 10YR3/4暗褐色シルト、しまり中、粘性やや強
6. 10YR3/4~4/4暗褐~褐色極細粒砂~シルト、しまりやや強、粘性やや強
7. 10YR4/4~4/6褐色極細粒砂~シルト、しまり強、粘性やや強
8. 10YR4/3~4/4にぶい黄褐~褐色極細粒砂~シルト、しまりやや強、粘性やや強
9. 10YR4/6褐色粗粒砂~シルト、しまり強、粘性やや強
10. 10YR4/6~5/6褐~黄褐色粗粒砂~シルト、しまり中、粘性強
11. 10YR3/4暗褐色極細粒砂~シルトと10YR4/6褐色極細粒砂~シルトが混じり合う、しまり強、粘性やや強、炭化物を含む（貼床）

第89図 SH436 (1/40)

形には若干不整形な部分が認められる。かなり小型の建物である。

明確な支柱穴は検出されなかった。柱穴と思われるようなピット自体がほとんど検出されていない。

建物中央よりやや北西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。また、焼土の横から円礫が2点並んで検出されており、添石炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.4mほどとやや小型であるが、深さは0.3mほどある。

壁際溝は、南壁を除く壁沿いで検出された。北壁沿いや西壁沿いでは、大きく途切れているように見受けられる。ただし、土層断面からみると、南壁沿いにも壁際溝が存在した可能性がある（B-B'断面第10層）。後述のように、この建物には周溝状掘形が認められるため、周溝状掘形内の貼床に掘り込まれた壁際溝が調査時に確認できなかった可能性も考えられる。

床面には、四周の壁に沿ってロ字状に幅広の浅い周溝状掘形が認められ、その内部を埋めるように貼床が施されていた。

遺物は、貯蔵穴上面から土師器甕が出土したほか、北東隅付近の床面から遺存状況が良好な土師器二重口縁壺の口縁部（1338）が出土した。埋土からも弥生土器・土師器やチャートの剥片が出土している。剥片は、隣接する中野山遺跡で縄文時代の遺構が多数検出されていることから、縄文時代のものが混入した可能性が高い。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期前葉～中葉と考えられる。

SH437（第90・91図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。今回の調査において検出された竪穴建物群の中では東端に近い箇所に存在しており、集落の東縁部に位置する建物の一つと思われる。SH438と完全に重複しており、この建物より後出する。SH438を、建て替えに伴って大きく拡張したものであると思われる。北壁付近が攪乱によって削平を被っており、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸6.1m、短軸5.3mほどのやや長方形を呈するものと思われる。ただし、後述のように支柱

穴の配置からみると、長方形とするには違和感がある。北壁付近がかなり削平を被っており、部分的にしか検出されていないことを考えると、わずかに検出されている壁際溝や掘形はSH438に伴うもので、SH437の北壁はもう少し北側に位置しており、建物の平面形は正方形に近い可能性がある。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されており、建物の平面形が長方形とするならば、あまり形状が一致しない。P1・2・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。ただし、P1・4では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.8mほどある。

壁際溝は、北壁を除く壁沿いで検出された。遺存している範囲では、ほぼ途切れず連続する。北壁沿いでも壁際溝の一部と思われる溝がわずかに検出されたが、SH437に伴うものか不明である。

貼床は、建物内の広い範囲に施されているものと思われる（A-A'・B-B'断面第7層）。周溝状掘形は確認できなかった。

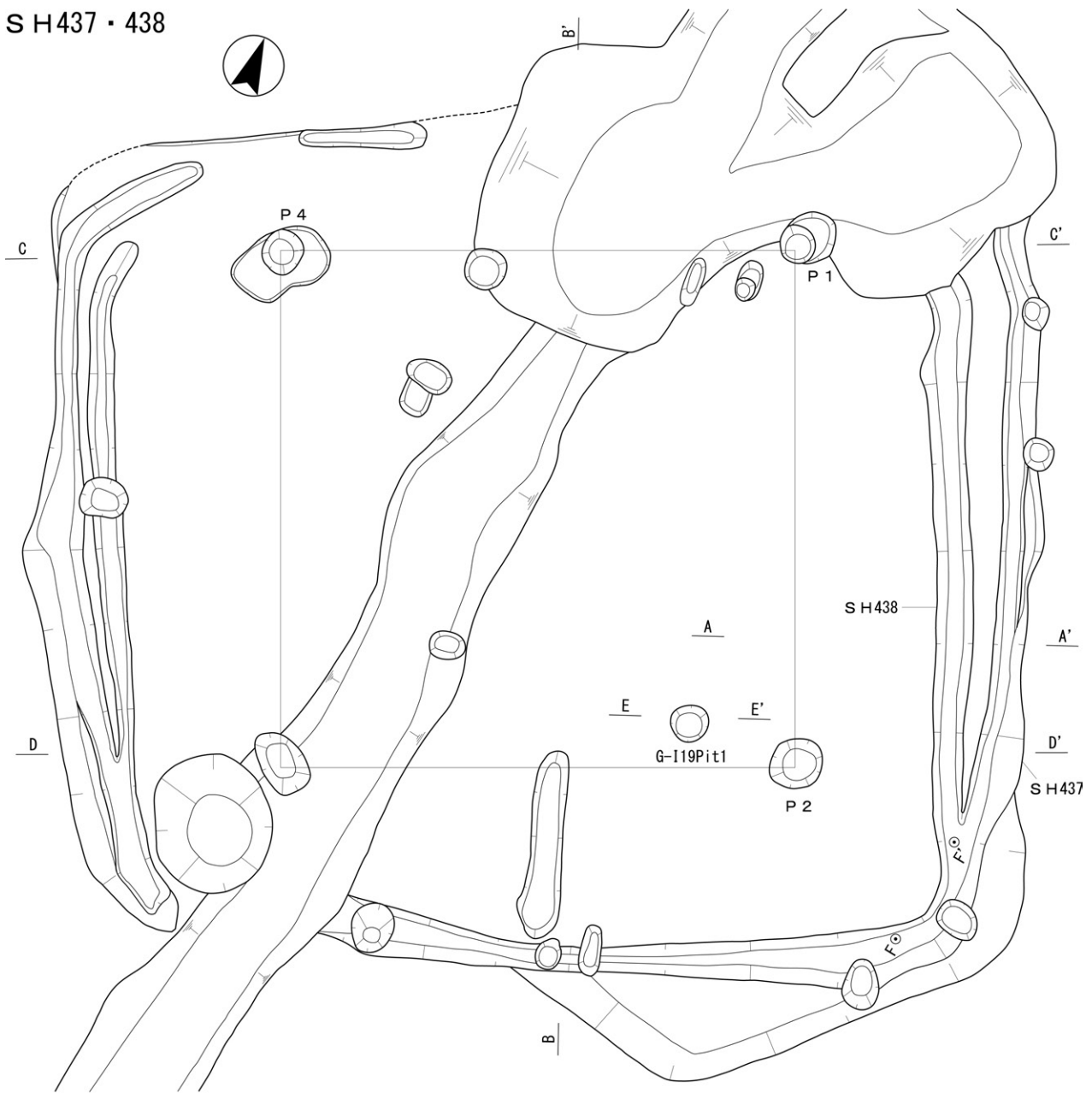
また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。南端は壁際溝と繋がっていないとみられる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、南東隅付近で土師器高坏の坏部が検出されている。埋土からも少量の弥生土器・土師器と敲石が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH438（第90・91図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。今回の調査において検出された竪穴建物群の中では東端に近い箇所に存在しており、集落の東縁部に位置する建物の一つと思われる。SH437と完全に重複しており、この建物に先行する。SH437との重複や、北壁付近が攪乱によって削平を被っていることから全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.4m、短軸5.3mほどの正方形に近い方形を呈するものと推定される。

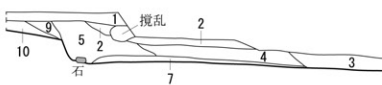
S H437・438



A A'
49.8m



B



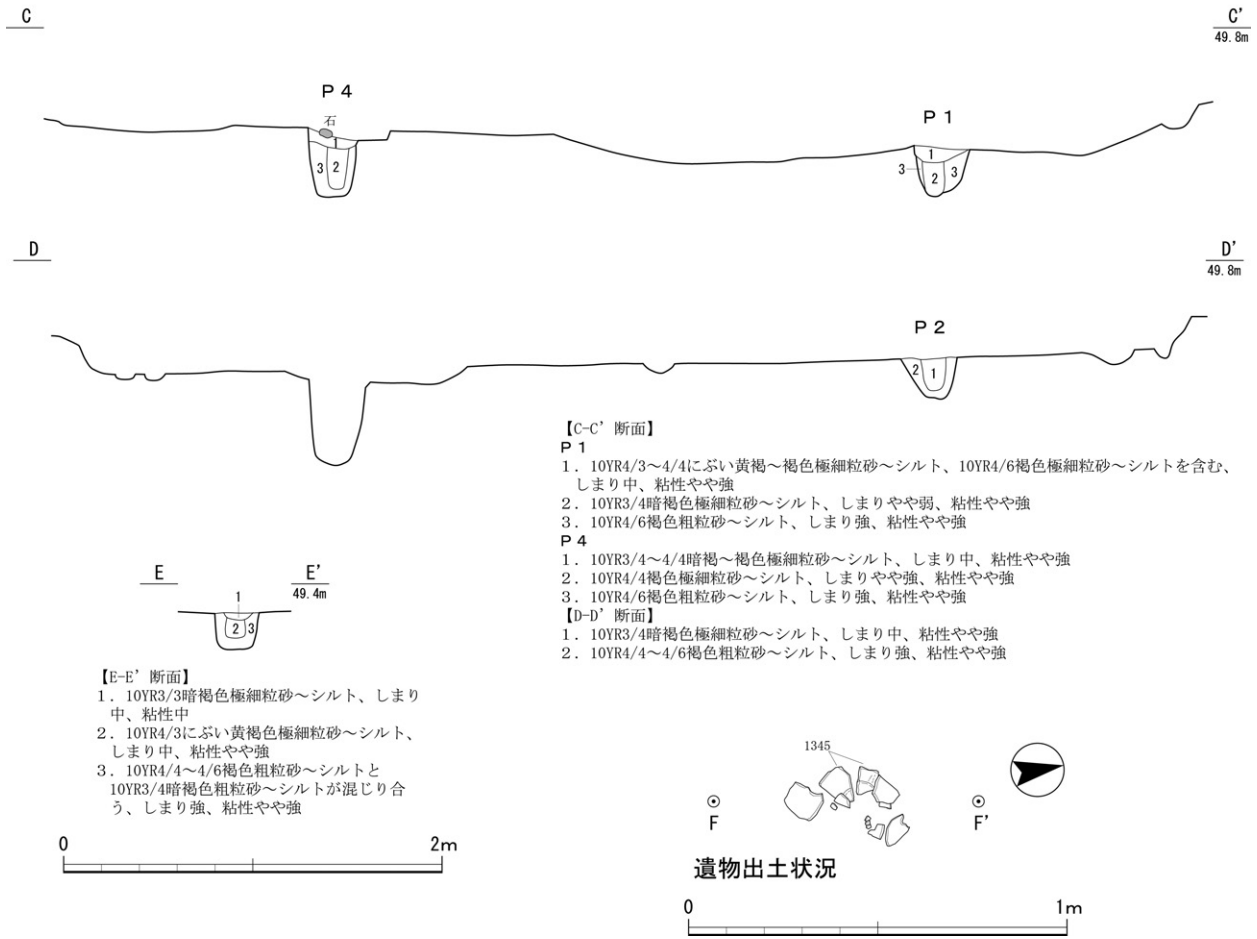
【A-A'・B-B'断面】

1. 10YR5/6黄褐色粗～極細粒砂、しまりやや強、粘性やや弱
2. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
3. 10YR4/6～5/6褐～黄褐色粗～極細粒砂、しまり強、粘性弱、礫を含む
4. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
5. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
6. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強（S H437壁際溝埋土）
7. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
8. 10YR4/4～4/6褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強（S H438壁際溝埋土）
9. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性強
10. 10YR4/6～5/6褐～黄褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性強

B'
49.8m

第90図 S H437・438① (1/40)

S H437・438



第91図 S H437・438② (1/40、1/20)

明確な支柱穴は検出されなかった。S H437の支柱穴と同一とも考えられるが、明確ではない。建物内で検出されたピットG-II9Pit1では柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる土層が認められ（E-E'断面第2層）、こうしたピットがS H438の支柱穴に相当するものかもしれない。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかったが、S H437の貯蔵穴と同一の可能性が考えられる。

壁際溝は、西壁沿い及び東壁沿いで検出された。遺存している範囲では途切れず連続しており、全周すると思われる。ただし、攪乱による削平を被っている北壁沿いや、S H437の壁際溝と完全に重複する南壁沿いでは、壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

この竪穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

S H437との関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S H442（第92図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。平面形は長軸4.6m、短軸4.3mのやや長方形を呈するが、南側は若干不整形になっている。比較的小型の建物である。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。P 1・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

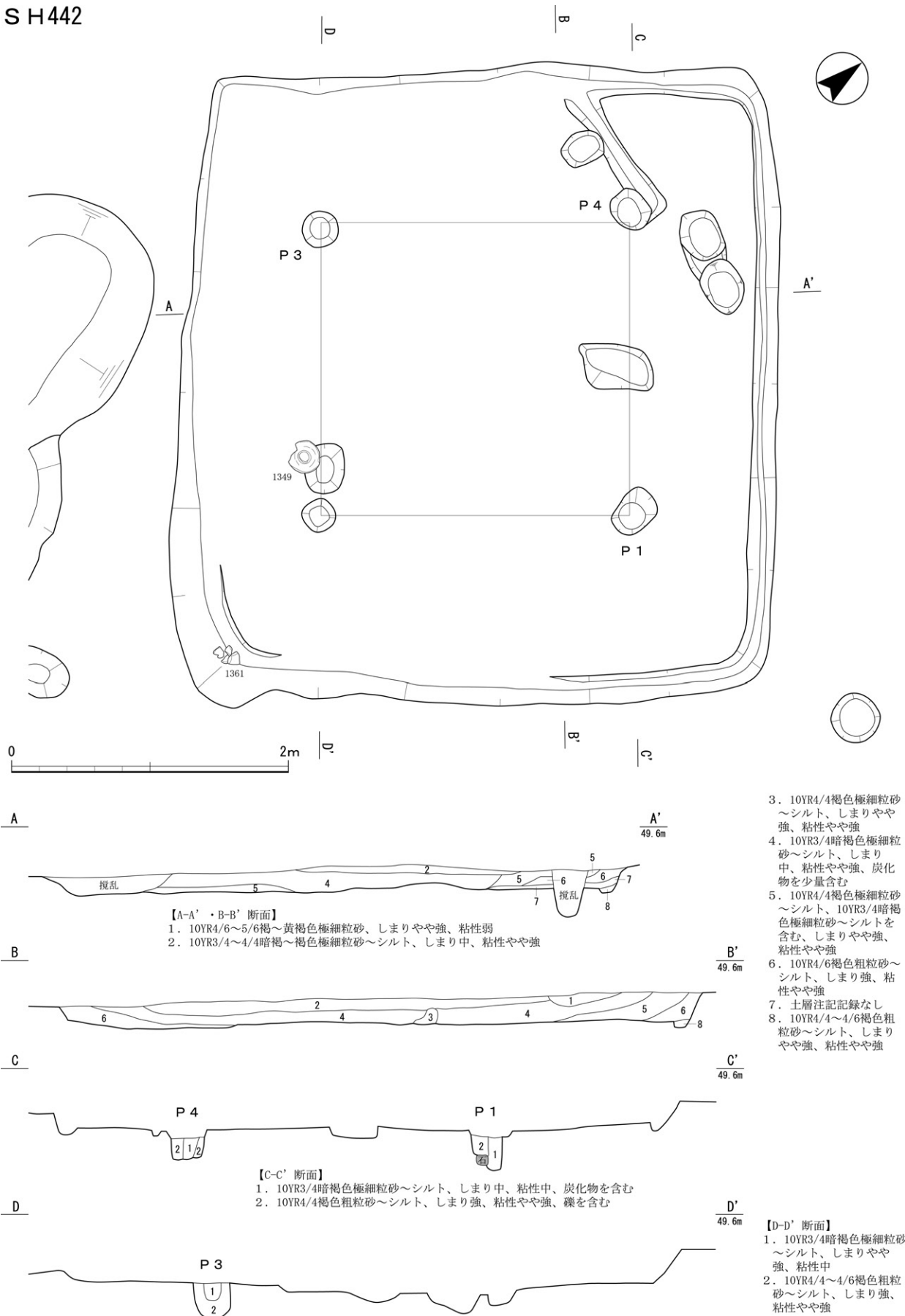
焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、北東壁沿い及び、北西壁沿いと南東壁沿いの一部で検出された。南隅付近では、南西壁沿いへと若干壁際溝が続くようにも見受けられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、南隅の支柱穴付近で土師器広口壺の口縁

S H442



第92図 S H442 (1/40)

部（1349）が出土したほか、南隅付近の壁際溝内から土師器高坏の坏部（1361）が出土した。埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

S H443（第93図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。削平によって西側の遺存状況が悪く、全体の形状には不明確な部分があるが、平面形は長軸5.0mほど、短軸4.4mのやや長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って長方形に配置されている。P3・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。P4では柱痕ないし柱の抜き取り痕とみられる土層からかなり大きな土器片が出土しているため、建物の廃絶に際して柱は抜き取られた可能性が高い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿いの西側で検出された。平面形が不整形な隅丸方形の土坑で、長軸0.8mほどある。

壁際溝は、西壁を除く壁沿いで検出された。ただし、北壁沿いでは北東隅付近のごく一部にとどまる。遺存している範囲では途切れていないが、削平を被っている西側に壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、主柱穴P3・4から弥生土器・土師器の壺や甕、高坏の大きな破片が出土している。また、貯蔵穴からも弥生土器・土師器が出土しており、土師器壺の破片には主柱穴P3出土のものと同一体と考えられるものもある（1365・1366・1373）。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられるが、弥生時代終末期としてもかなり新しい段階と思われる。

S H444（第94図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。南側から西側にかけて攪乱によって大きく削平を被っており、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸7.2m、短軸6.7mのやや長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されている。P3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認で

きる。ただし、P2・4では確認できず、P2では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴も検出されなかったが、攪乱内の南壁沿いや西側にあたる箇所、長軸0.5mほどの平面形が隅丸方形の小型土坑が検出されており、貯蔵穴の残欠とも考えられる。

壁際溝は、遺存している範囲ではほぼ途切れておらず、全周すると思われる。ただし、南壁沿いの南西隅付近では、若干途切れている可能性もある。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S H445（第95図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。平面形は長軸5.7m、短軸4.9mほどの長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って長方形に配置されている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。ただし、すべての柱穴において柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められ、またP2では柱穴内から弥生土器の大きな破片が出土していることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴も明確には検出されなかったが、南壁沿い中央付近には土坑状の攪乱が認められ、当該箇所に貯蔵穴が存在したと推定される。この攪乱の北縁部で検出されたピットは、貯蔵穴の残欠と考えられる。

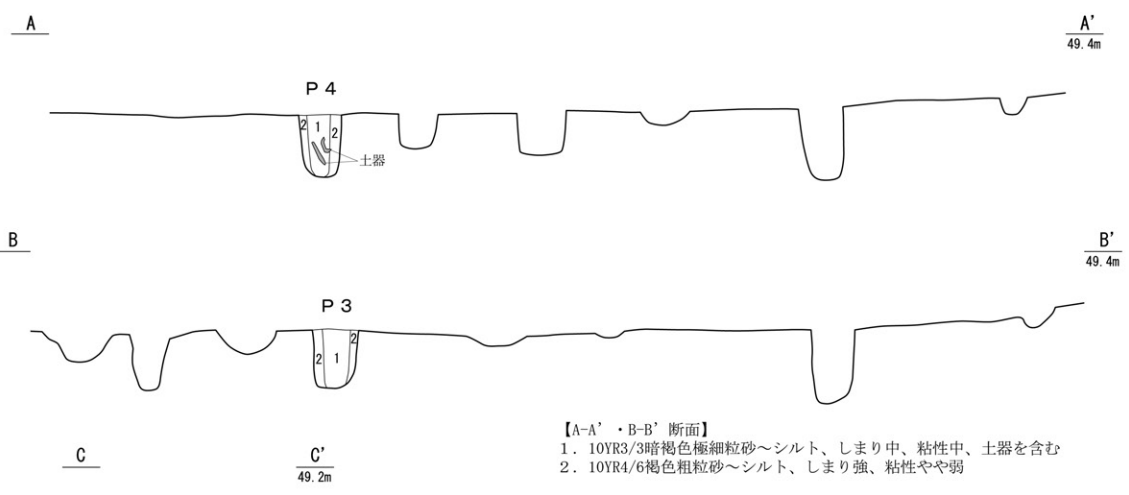
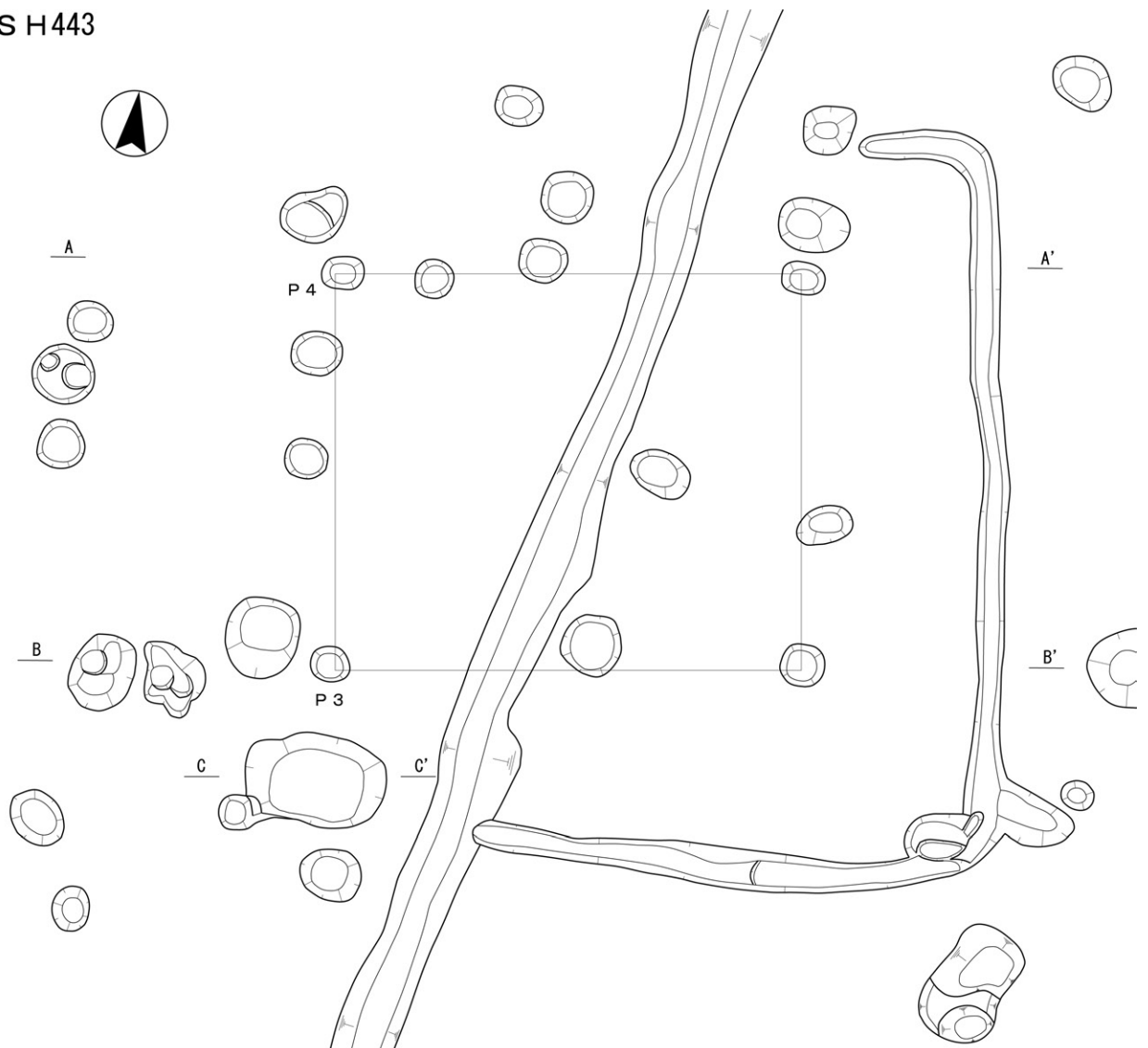
壁際溝は、攪乱やピットなどによってごく一部が削平を被っているが、途切れず全周すると思われる。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる。また、建物の中央部を中心とする広い範囲で硬化した面が認められた。周溝状掘形は確認できなかった。

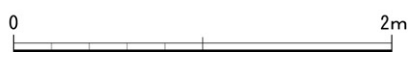
遺物は、主柱穴P2から弥生土器高坏の脚部が出土した。埋土からも弥生土器・土師器や磨石とみられる石製品が出土している。

なお、床面直上に堆積した埋土には、炭化物や焼

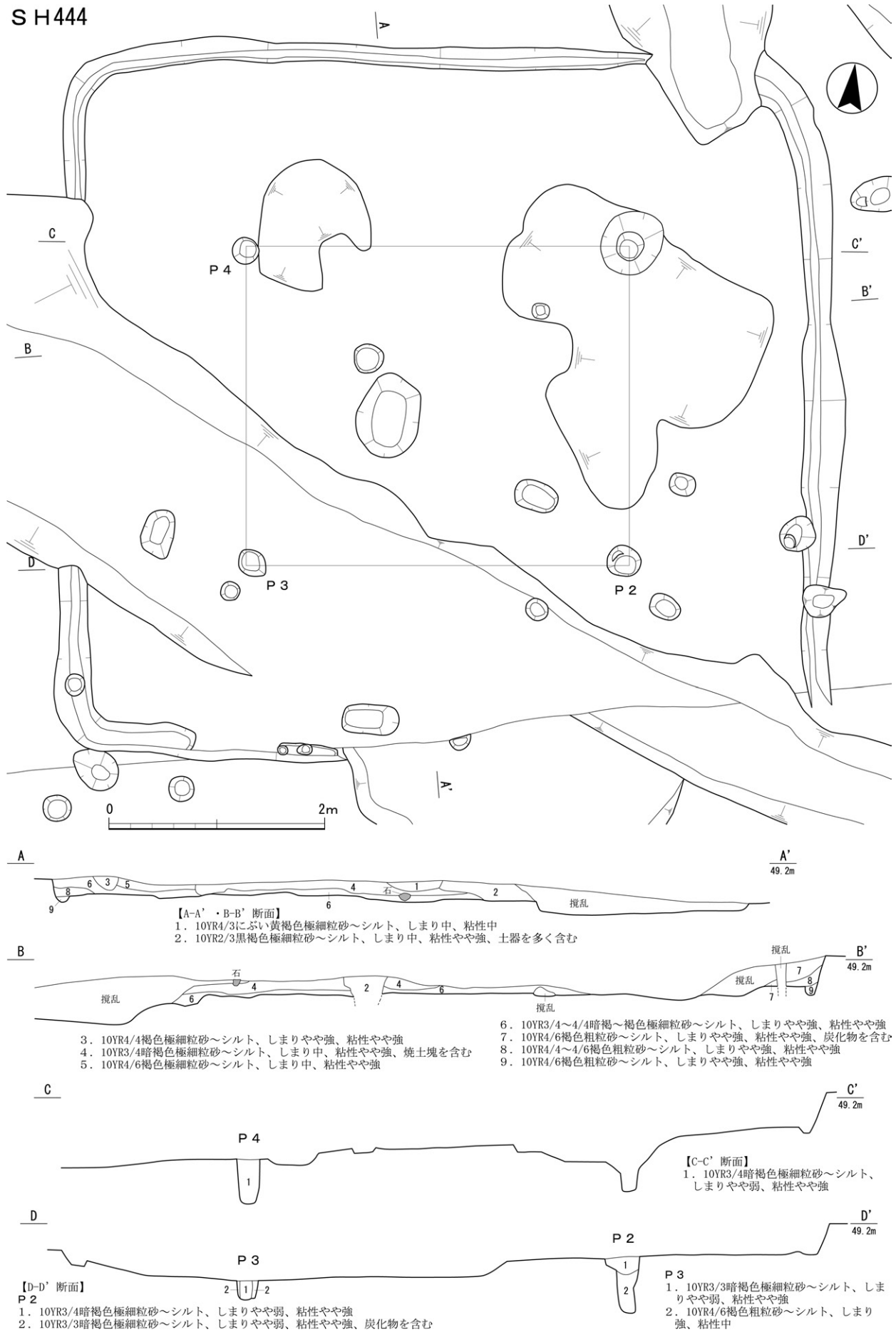
S H443



【A-A'・B-B' 断面】
 1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、土器を含む
 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや弱

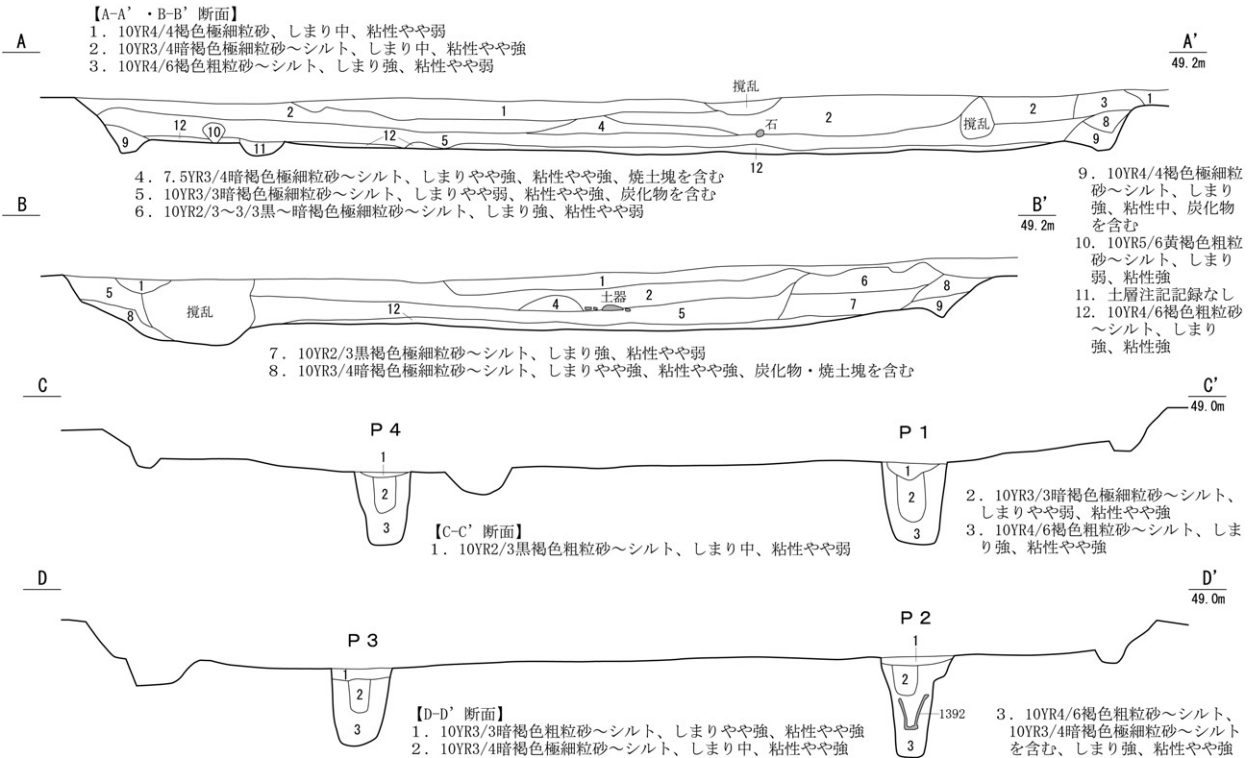
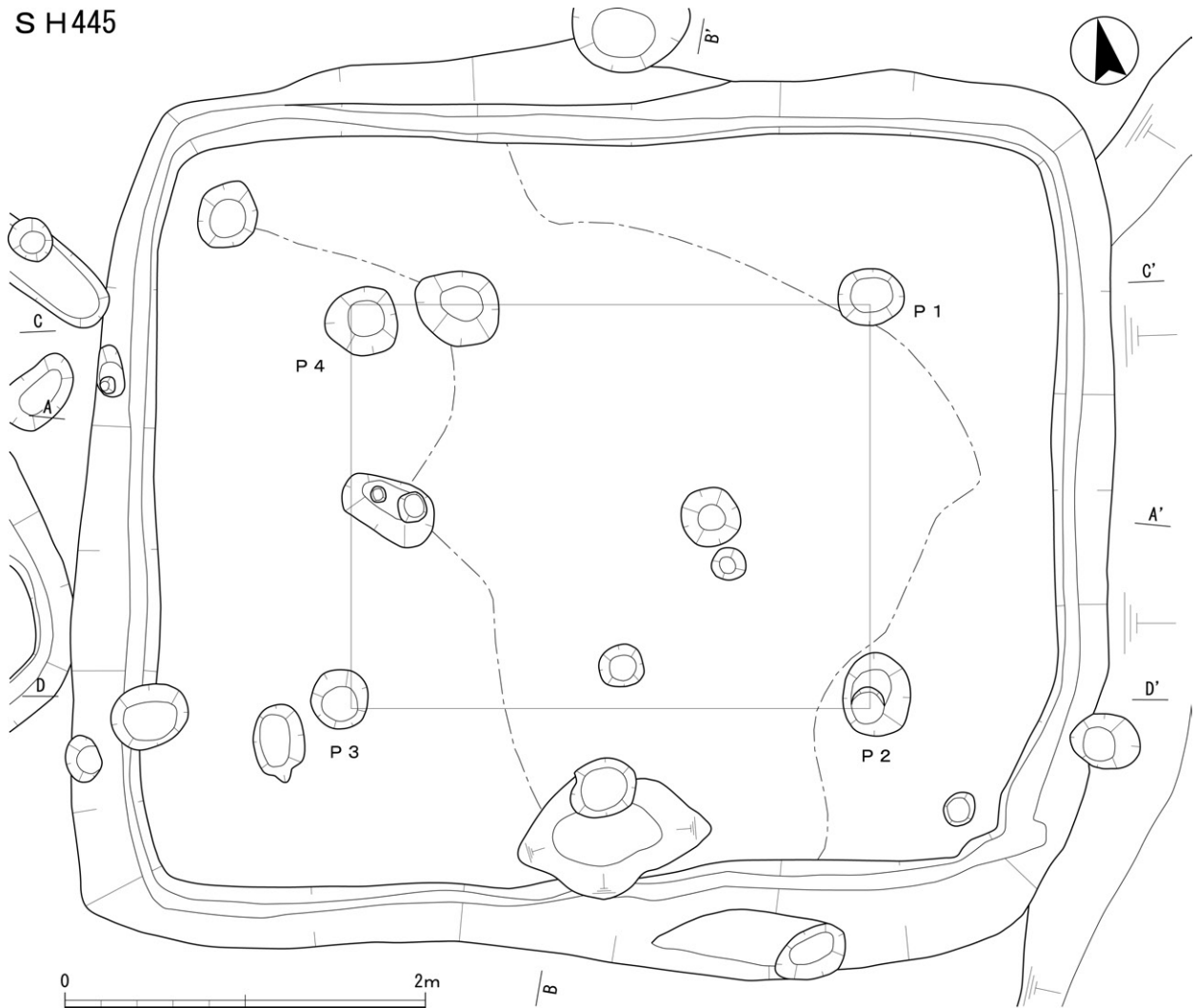


第93図 S H443 (1/40)



第94図 S H444 (1/50)

S H445



第95図 S H445 (1/40)

土塊が含まれている（A-A'・B-B'断面第4・5・8層）。一方で、大きな炭化材は検出されず、床面に焼土の広がりなども認められなかった。第5層は第6・7層を掘り込んで堆積しているようにも見受けられ、こうした炭化物や焼土塊はSH445の火災等に伴うものではない可能性が高い。

埋土から出土した遺物はほとんどが弥生時代終末期のものであるが、支柱穴P2から出土した高坏は弥生時代後期中葉に位置づけられる。遺構の時期は、支柱穴の出土遺物及び建物の平面形や貯蔵穴の位置などの特徴からみて、弥生時代後期中葉と考えておきたい。先述のように、当該建物の埋没後に掘り込みが行われている可能性があることから、時期が下る遺物はそれに伴うものと推測される。

SH446（第96図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH449とごくわずかに重複しており、この建物より後出すると思われるが不確定である。南西隅付近が削平を被っており、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.1m、短軸5.0mの正方形に近い方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。ただし、P1・3ではその土層が上下2層に分かれており、またP4では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められるため、柱は抜き取られた可能性が高い。

東壁沿いの中央よりやや南側の土坑内でわずかに焼土の広がりが確認されているが、位置的に炉とは考えにくい。ほかに焼土などは検出されておらず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径0.8mほどある。一部は攪乱によって削平を被っている。

壁際溝は、西壁を除く壁沿いで検出された。ただし、南壁沿いや東壁沿いでは断続的となっている。

床面には、四周の壁に沿ってロ字状に幅広の浅い周溝状掘形が認められ、その内部を埋めるように貼床が施されていた。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH447（第97図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。先行する建物であるSH448を、建て替えに伴って若干拡張したものと思われる。また、SH423と重複し、この建物より後出する。ただし、SH423との重複部分では平面で明瞭に検出することができなかった。そのため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸・短軸5.6mの正方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P1・2・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。

建物中央付近や、中央よりやや西側の床面の複数箇所から焼土が検出されている。このうちいずれかが炉の痕跡と思われるが、そのうち1箇所は長径20cmほどの楕円形の礫を伴っており、添石炉の可能性もある。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が不整形な隅丸方形の土坑で、長軸0.7mほどある。中央部が一段深くなっており、壁面は緩やかに段をなす。

壁際溝は、西壁を除く壁沿いで検出された。西壁沿いにおいても、土層断面では壁際溝の存在が確認でき（B-B'断面第7層）、おそらくほぼ全周するものと思われる。ただし、南壁沿いでは断続的となっている。

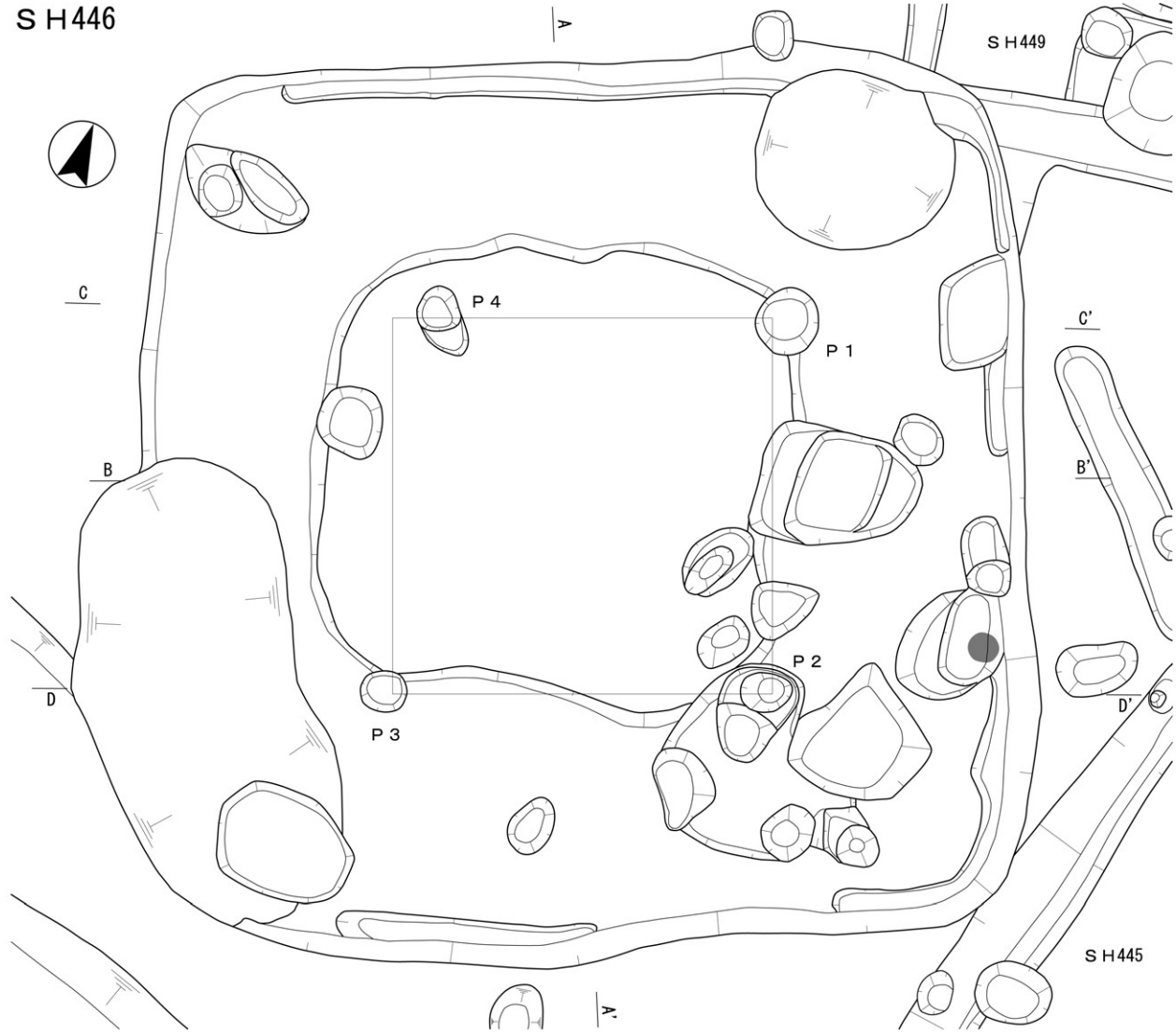
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

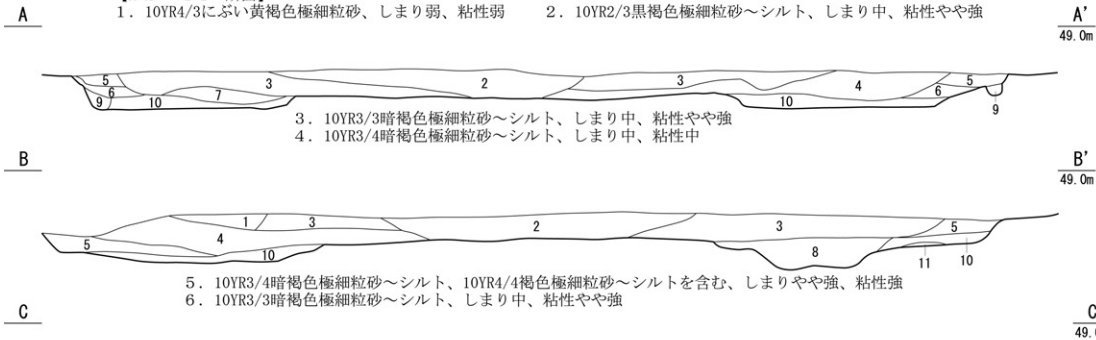
出土遺物やSH423との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH448（第97図） 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH447と完全に重複しており、この建物に先行する。また、SH423とも重複しており、この建物より後出する可能性が高い。SH447と同じくSH423と重複する箇所では明瞭に検出できず、またSH447によってかなり削平を被っているため全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸

S H446



【A-A'・B-B'断面】



1. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂、しまり弱、粘性弱 2. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強

A'
49.0m

7. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
8. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
9. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
10. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルトと10YR4/6褐色粗粒砂～シルトが混じり合う、しまり強、粘性中
11. 土層注記記録なし

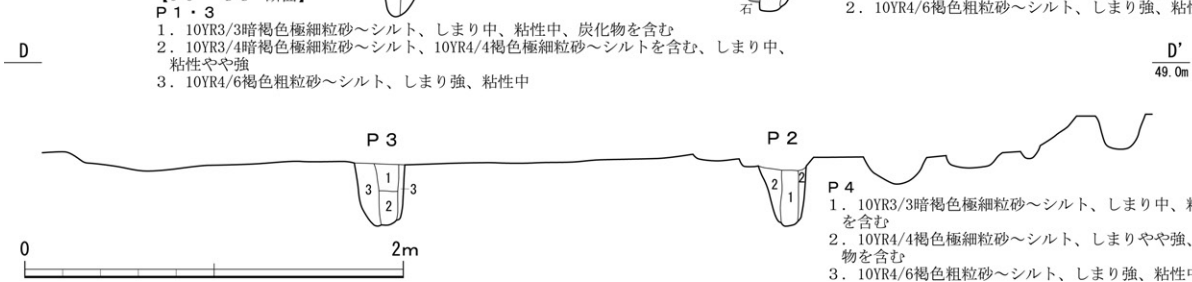
B'
49.0m

3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
4. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

5. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/4褐色極細粒砂～シルトを含む、しまりやや強、粘性強
6. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強

C'
49.0m

【C-C'・D-D'断面】



1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を含む
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/4褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり中、粘性やや強
3. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中

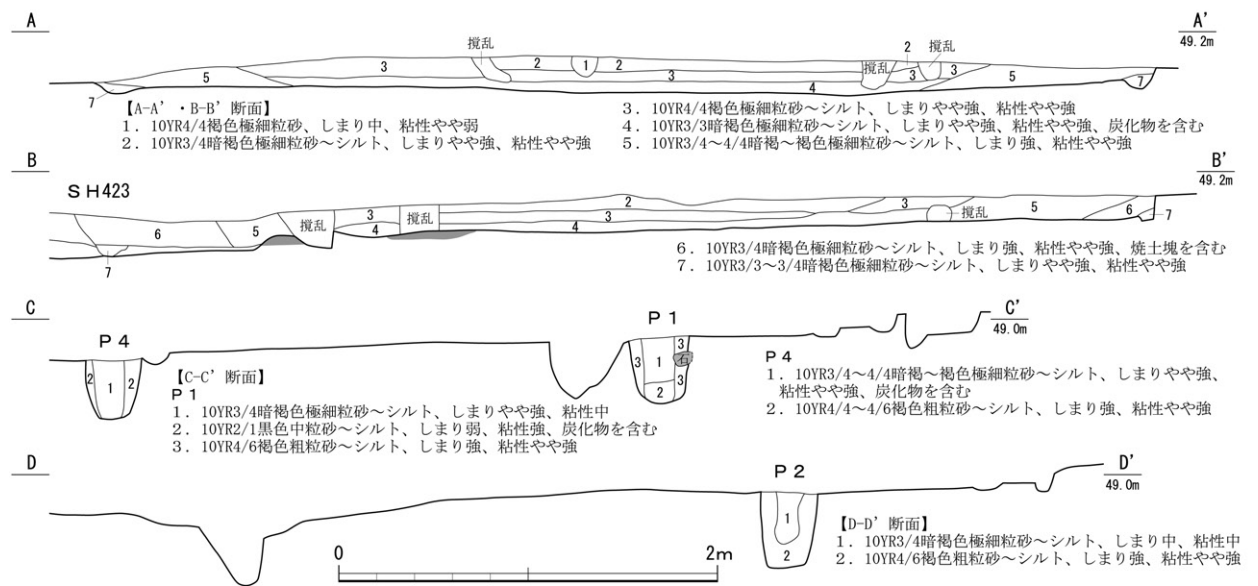
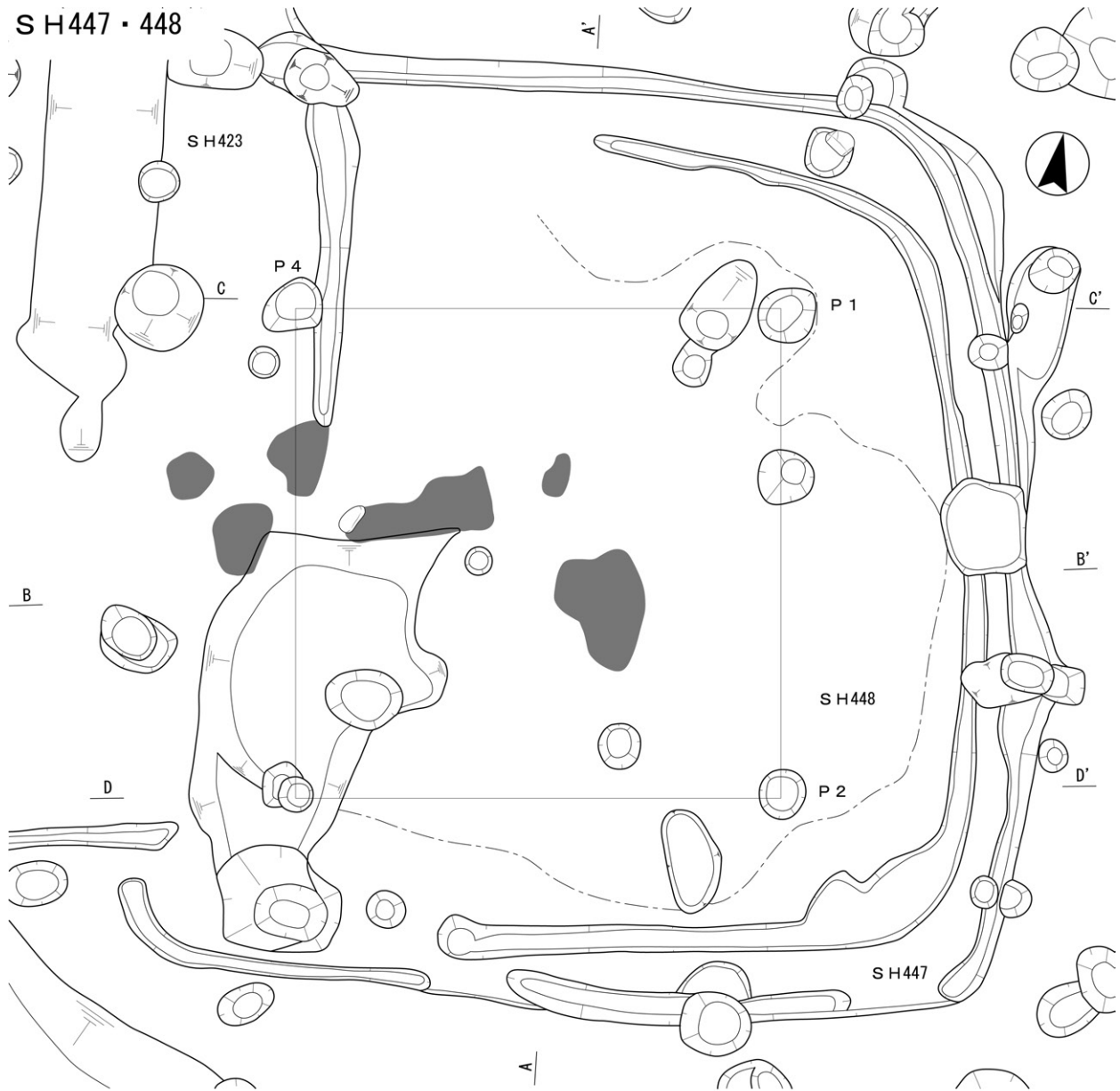
- P 2
1. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性強
2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中

D'
49.0m

- P 4
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を含む
2. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、炭化物を含む
3. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中

第96図 S H446 (1/40)

S H 447・448



第97図 S H 447・448 (1/40)

5.3m、短軸4.9mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

明確な主柱穴は検出されなかった。SH447の南西隅の主柱穴はピットが2基重複しているようにも見受けられるため、SH447の主柱穴とほぼ同一の位置にあったとも考えられるが、確実ではない。

建物中央付近や、中央よりやや西側の床面の複数箇所から焼土が検出されている。SH447とSH448のどちらに伴うものか判然としないが、SH448の炉もこの焼土の分布範囲に存在したと推定される。

貯蔵穴は検出されなかった。貯蔵穴も、SH447のものと同位置に存在した可能性が考えられる。

壁際溝は、西壁を除く壁沿いで検出された。北壁沿いと南壁沿いでは中央付近で途切れ、西側へ延びない。ただ、壁際溝が確認された箇所においても、SH447による削平などの影響で、非常に浅く不明瞭なものであった。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

この竪穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

SH447との関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH449 (第98図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH450と重複しており、この建物に先行する。また、SH446ともごくわずかに重複しており、この建物にも先行すると思われるが不確実である。北西隅付近は、SH450による削平のため、遺存状況が悪い。平面形は長軸5.9m、短軸5.6mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P1～3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。ただし、P1では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

建物中央よりやや東側や西側、北側の床面から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられるが、北側のものについてはSH450に伴うものの可能性もある。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い西側で検出された。かなり不整形な平面形を呈する土坑で、径0.5m程度の土坑が2基連結したような形状にも見受け

られる。壁際溝と一部重複して掘り込まれている。

壁際溝は、ほぼ全周すると思われる。北西隅付近では途切れているが、遺存状況が悪いため、元々途切れていたか不明である。

床面には、四周の壁に沿ってロ字状に幅広の浅い周溝状掘形が認められ、その内部を埋めるように貼床が施されていた。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど建物に伴う構造物と思われるが、若干西側に偏在し、貯蔵穴に近接することから、貯蔵穴と関連するものである可能性も考えられる。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器高坏が出土しているほか、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やSH450との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH450 (第99図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH449と重複しており、この建物より後出する。平面形は長軸5.4m、短軸5.3mの方形を呈するが、西辺が東辺より若干長く、全体的に台形となっている。

主柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。P1・3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。

建物中央よりやや北側や南側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。ただし、南側の焼土はSH449に伴うものの可能性もある。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.6mほどある。

壁際溝は、貯蔵穴付近では不明瞭であるが、ほぼ全周すると思われる。

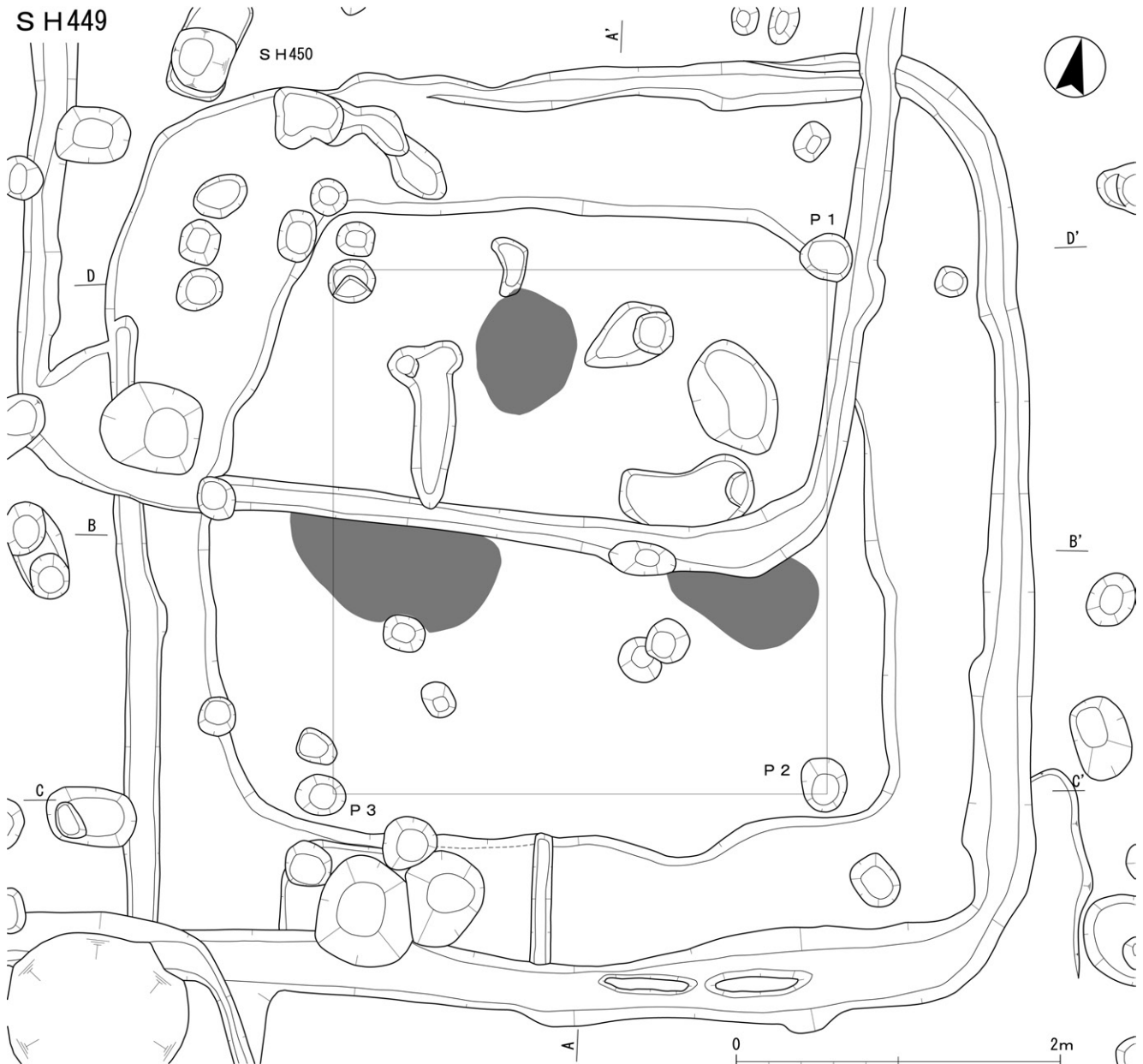
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。北端付近はピットが重複しているが若干不整形であるが、間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、主柱穴P1や貯蔵穴、埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化でき

S H 449

S H 450



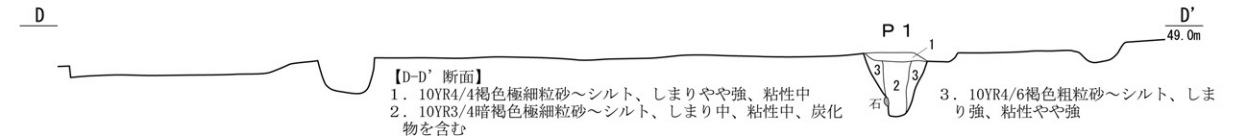
- 【A-A'・B-B'断面】
- 1. 10YR4/4褐色極細粒砂、しまりやや弱、粘性中
 - 2. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
 - 3. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強



- 4. 10YR4/4～4/6褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
- 5. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
- 6. 10YR4/4～4/6褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性強
- 7. 5YR3/6暗赤褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性弱（焼土）
- 8. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、10YR4/6褐色粗粒砂を含む、しまり強、粘性強（貼床）
- 9. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性強（貼床）



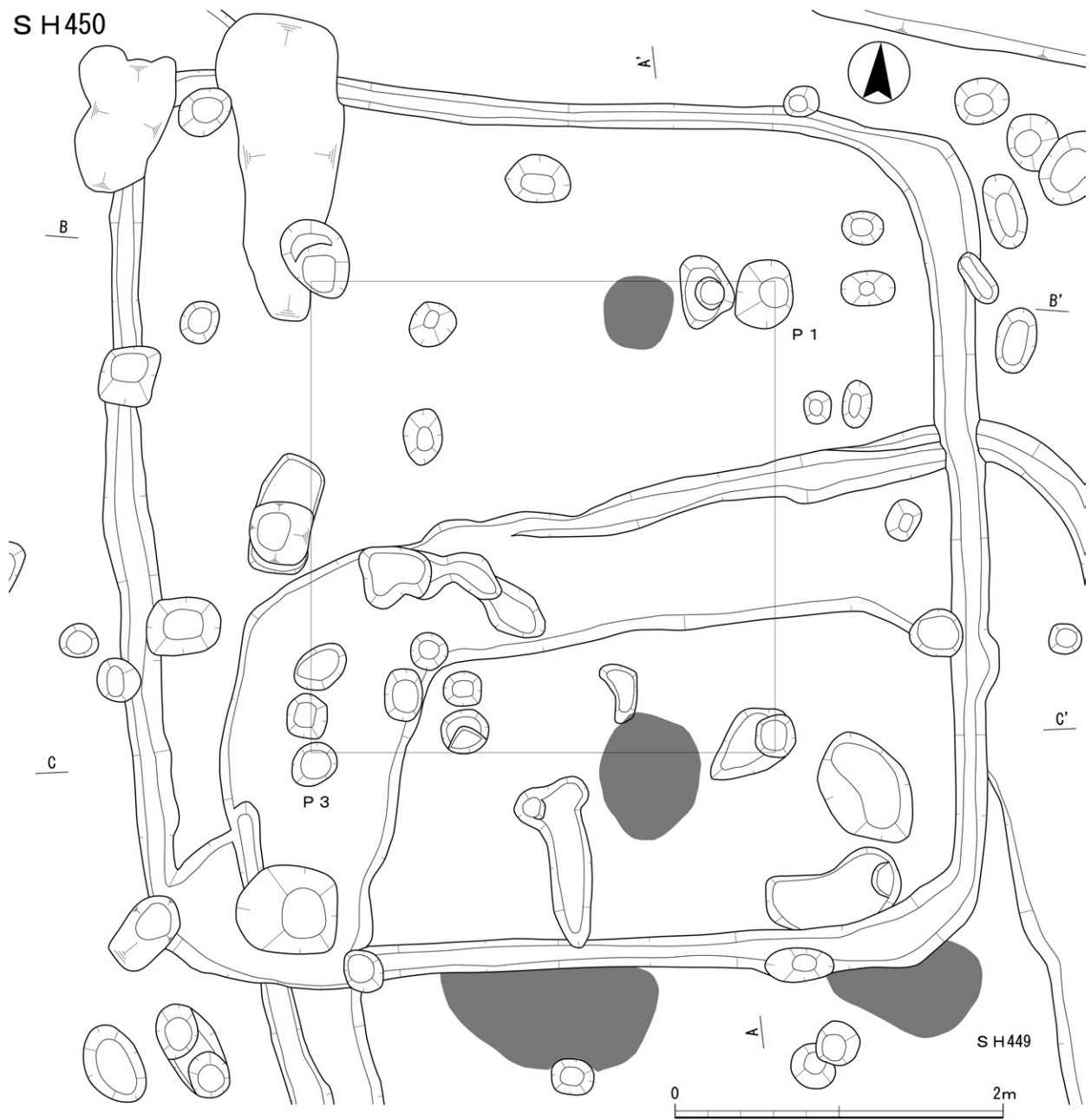
- 【C-C'断面】
- 1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、炭化物を含む
 - 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強



- 【D-D'断面】
- 1. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
 - 2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を含む
 - 3. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

第98図 S H 449 (1/40)

S H450



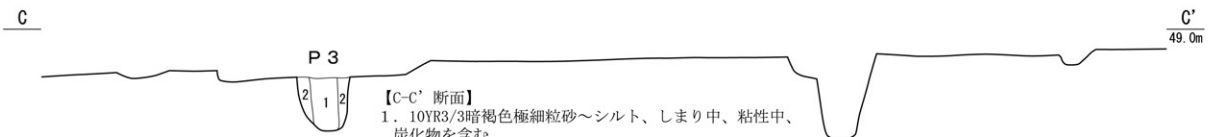
【A-A' 断面】

1. 10YR3/3~3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 土層注記記録なし



【B-B' 断面】

1. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強



【C-C' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を含む
2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

第99図 S H450 (1/40)

るものはなかった。

出土遺物やSH449との新旧関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられるが、確定的ではない。

SH451 (第100~102図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH454・456・457・458と重なり合っており、これらの建物より後出する。SH457とはほぼ同じ位置に構築されていることから、建て替え等の関係にあるものとも考えられるが、断定できない。平面形は長軸6.9m、短軸6.9mの正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P2~4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。P3では2基の柱穴が重複しているような状況が認められる。

建物中央付近や、中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。北壁付近でも焼土が認められるが、SH456に伴うものの可能性がある。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.1mほどある。西側が深くなっており、東側は段状に浅くなっている。深くなっている部分の埋土中層から、大型の土師器有孔鉢(1459)が出土した。

壁際溝は、途切れず全周する。南壁沿い西側や北東隅付近では、一部で壁際溝が二重になっているような様子が認められる。主柱穴P3の状況も鑑みれば、建て替えないし改修が行われていた可能性も考えられる。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる。建物の中央部には広く硬化した面が認められた。周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。位置や壁際溝との関係からみて、SH451に伴うものと判断される。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器が出土した。有孔鉢のほか、高杯の破片が数点ある。埋土からも弥生土器・土師器や台石が多数出土しているが、小片が多い。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH454 (第103図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。先行する建物であるSH458を、建て替えに伴って若干拡張したものと思われる。また、SH451・455・456・457と重複し、SH451・457に先行する。SH455・456よりは後出する可能性が高い。東側についてはかなり削平を被っており、全体の形状には不明確な部分もあるが、長軸5.6mほど、短軸4.9mのやや長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。P1・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。ただし、P4では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。また、P1はSH458の主柱穴P1と一部重複しているが、土層断面ではSH458P1の方が後で掘り込まれているようにもみえる。SH458の壁際溝はSH454の床面で検出されているため、建物自体の新旧関係が逆転することはないと思われるが、主柱穴については数基が重複する状況で検出されており、なおかつ建物と主柱穴との対応関係を確定する根拠に乏しいため、本来は別の柱穴がSH454の主柱穴であった可能性も残されている。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

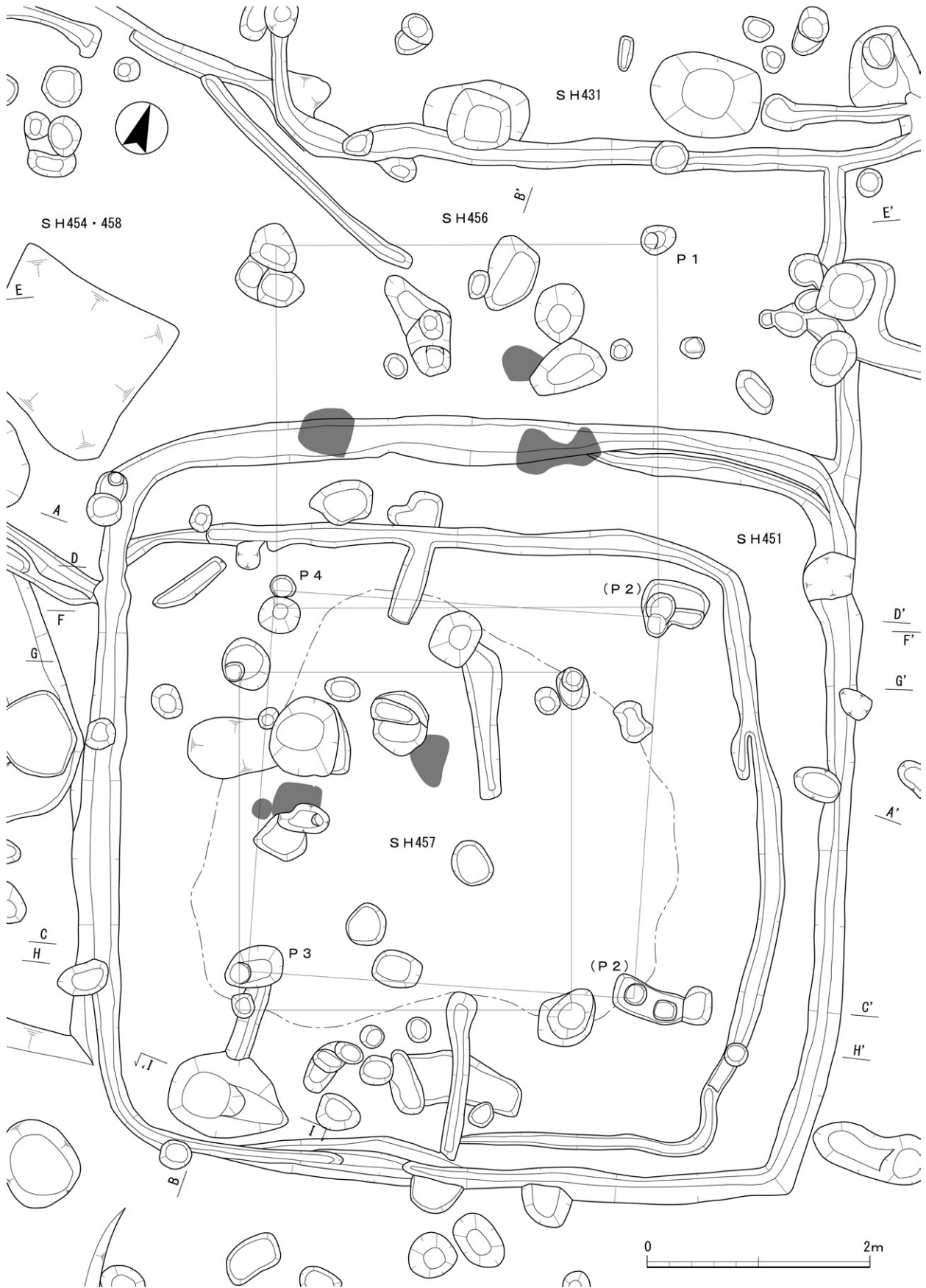
貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.2mほどある。中央部がやや段状に深く掘り込まれている。壁際溝からはやや離れており、壁際溝と貯蔵穴とを繋ぐように短い溝状の落ち込みが認められる。こうした点からみて、先行する建物SH458の貯蔵穴をそのまま利用した可能性も考えられる。

壁際溝は、東壁沿いを除く壁沿いで検出された。遺存状況が悪いこともあり、断続的である。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる(A-A'断面第11層)。ただし、SH458に伴う貼床の可能性も残る。周溝状掘形は確認できなかった。

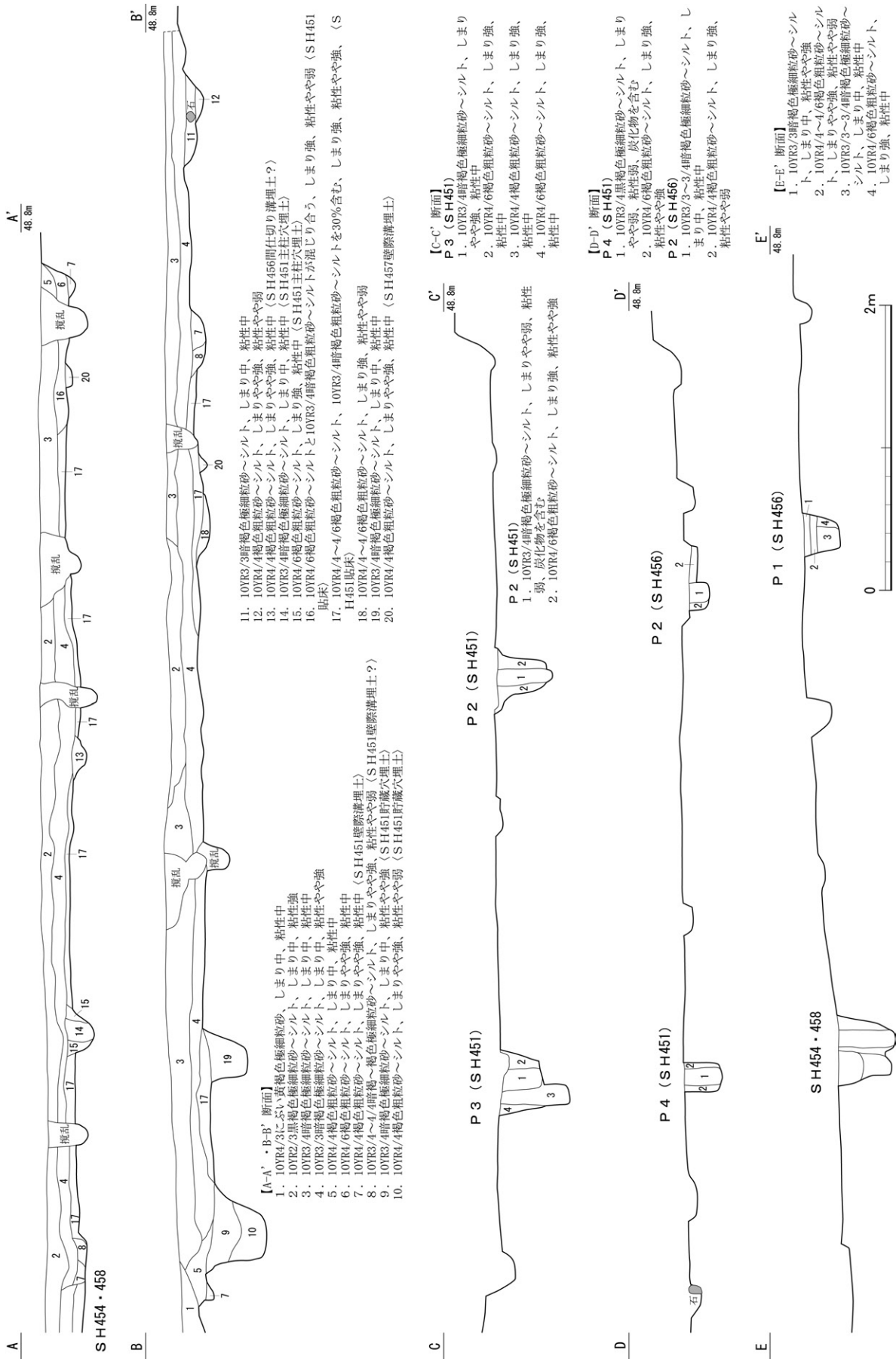
遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

S H451 · 456 · 457



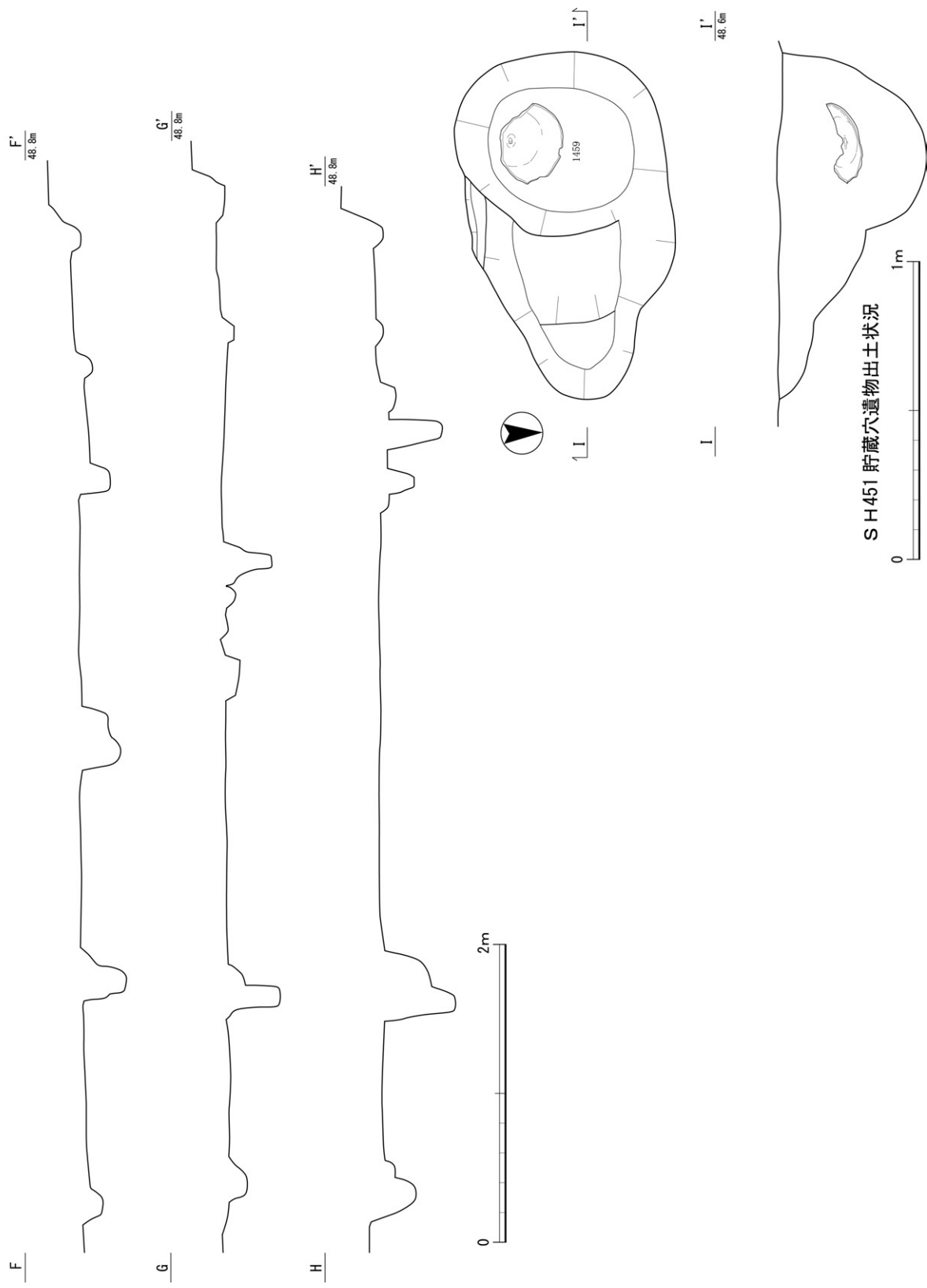
第100图 S H451 · 456 · 457① (1/50)

S H 451 ・ 456 ・ 457



第101図 S H 451 ・ 456 ・ 457② (1/40)

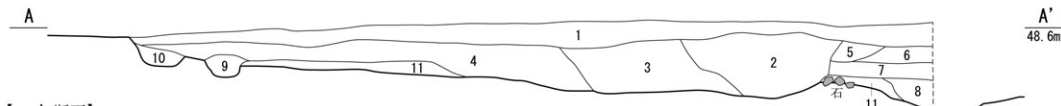
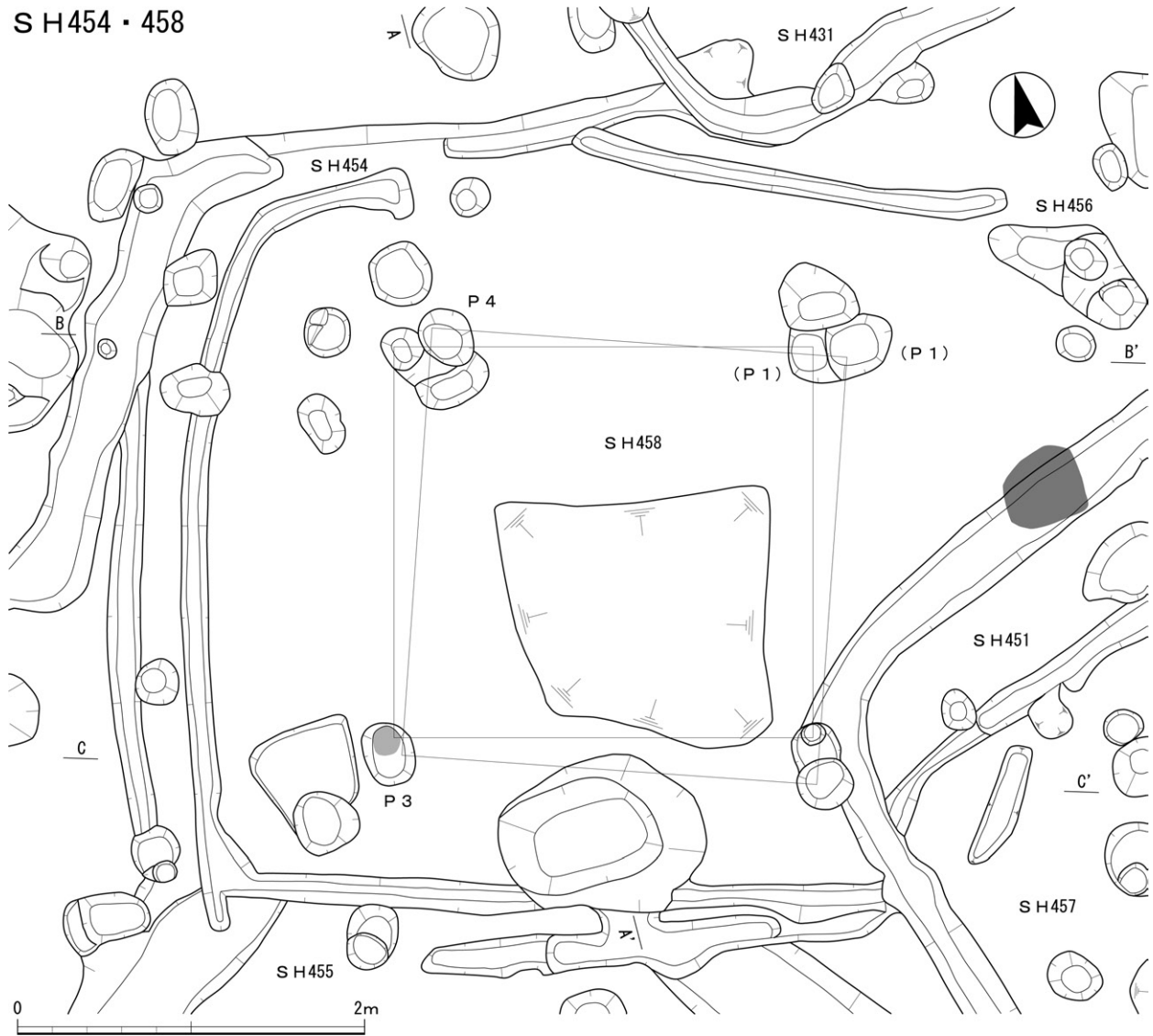
S H451・456・457



S H451 貯蔵穴遺物出土状況

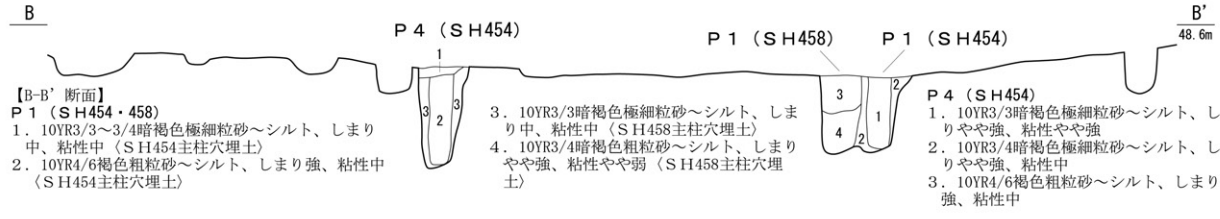
第102図 S H451・456・457③ (1/40、1/20)

S H454・458



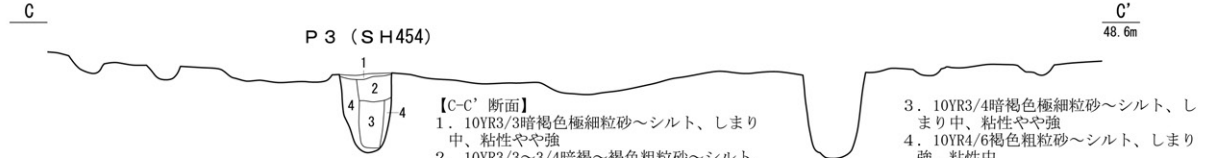
【A-A' 断面】

1. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性強
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
5. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
6. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
7. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中、炭化物を含む（SH454貯蔵穴埋土）
8. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を含む（SH454貯蔵穴埋土）
9. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
10. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
11. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルトを含む、しまり強、粘性中



【B-B' 断面】

- P 1 (SH454・458)**
1. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（SH454主柱穴埋土）
 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中（SH454主柱穴埋土）
- P 4 (SH454)**
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
 2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
 3. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中
- P 1 (SH458)**
3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（SH458主柱穴埋土）
 4. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱（SH458主柱穴埋土）



【C-C' 断面】

- P 3 (SH454)**
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
 2. 10YR3/3～3/4暗褐色～褐色粗粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや強
- P 3 (SH454)**
3. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
 4. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中

第103図 SH454・458 (1/40)

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

S H455 (第104図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。S H454・458と一部重複しており、これらの建物に先行するものと思われる。南側は攪乱によって大きく削平を被っている。全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.4mほど、短軸5.2mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P2・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P4では柱穴埋土の上層に別の土層の堆積が認められることから(A-A'断面第1層)、柱は抜き取られた可能性が高い。すべての主柱穴で浅い落ち込みないしピットが重複している状況が認められるが、これも柱の抜き取りと関係するものかもしれない。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴も確認されていないが、東隅の壁際溝内で不整形な土坑が検出されている。深さが0.3mと比較的深いことから、これが貯蔵穴とも考えられる。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れておらず、全周すると思われる。ただし、削平によって失われた南西壁沿いに壁際溝が存在したかは不明である。なお、この建物の壁際溝は幅が0.6mほどと幅広な点が特徴的である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、主柱穴P1と貯蔵穴と思われる土坑から弥生土器・土師器が出土した。貯蔵穴と思われる土坑内から出土したものには、土師器壺の体部下半の大きな破片(1538)がある。埋土からも弥生土器・土師器や敲石が出土している。

出土遺物やS H454・458との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S H456 (第100~102図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。多数の竪穴建物が集中する中に位置しており、S H431・434・451・454・457・458と重複している。これらの建物の多くに先行すると思われる。そのため削平が著しく、ごく一部が検出されたのみで全体の形状は不明であるが、長軸・短軸7.0mほどの正方形に近い方形を呈するものと推定される⁸⁾。

主柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。P1では柱穴埋土上層に柱穴全体にわたって堆積する土層が認められることから、建物の廃絶に際して柱は抜き取られた可能性がある。

建物中央よりやや西側や東側の床面の数箇所から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い西側と推定される箇所検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.7mほどある。

壁際溝は、東壁沿いの一部で検出された。ほかの建物と重複している箇所では、削平等により壁際溝の有無は不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近と推定される箇所から細い溝が建物中央に向かって伸びる。土層断面では、S H451の貼床がこの溝の埋土の上面に及ぶ様子も認められることから⁹⁾、S H456に伴う遺構の可能性が高い。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、貯蔵穴や埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やS H431・451などとの新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期~古墳時代前期初頭と考えられる。

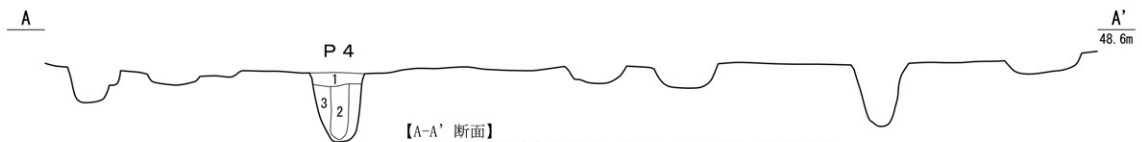
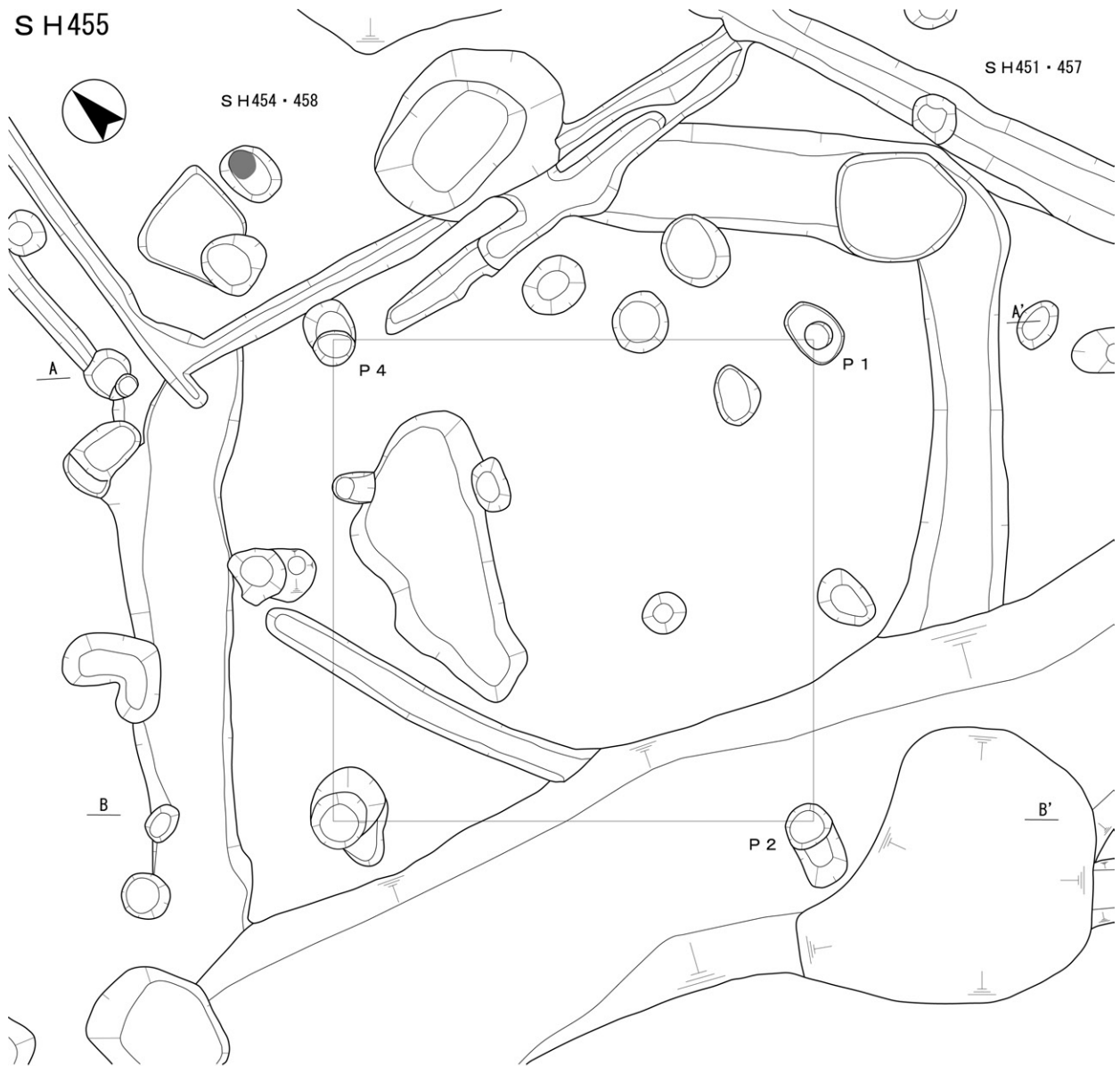
S H457 (第100~102図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。S H451・454・456・458と重なり合っており、S H451に先行する。S H454・456・458よりは後出する可能性が高い。S H451とはほぼ同じ位置に構築されていることから、建て替え等の関係にあるものとも考えられる。S H451によって全体的に削平を被っているため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.9m、短軸5.6mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。ただし、東壁は中央付近がやや外方へ膨らんでおり、その部分では長軸が6.4mほどとなる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。そのうち3基の柱穴では一回り大きなピットが重複している様子が認められる。柱の抜き取りもしくは建て替え等に伴うものとも考えられる。

S H455

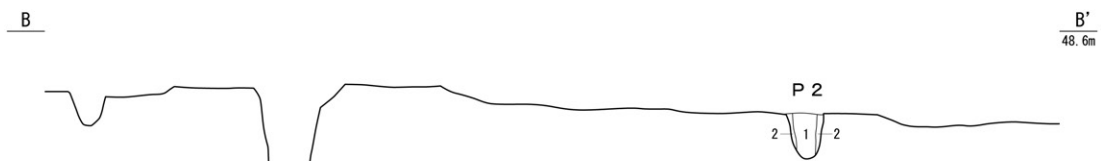
S H451・457

S H454・458



【A-A' 断面】

1. 10VR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10VR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
3. 10VR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強



【B-B' 断面】

1. 10VR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10VR4/6褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性中



第104図 S H455 (1/40)

建物中央よりやや北側や西側の床面から焼土が検出されているが、SH451に伴うものの可能性が高く、炉の位置は不明である。

貯蔵穴も検出されなかったが、SH451の貯蔵穴と同一箇所が存在した可能性が考えられる。

壁際溝は、西壁を除く壁沿いで検出された。遺存している範囲では途切れず連続しており、全周すると思われる。ただし、SH451による削平を被っている西壁沿いや南壁沿い西側では、壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やSH451との関係、SH454・456・458との新旧関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH458 (第103図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH454と完全に重複し、この建物に先行する。また、SH451・455・456・457とも重複し、SH451・457に先行し、SH455・456より後出するものと思われる。東側についてはかなり削平を被っており、全体の形状には不明確な部分もあるが、長軸4.8mほど、短軸4.4mのやや長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。ただし、主柱穴は数基が重複する状態で検出されており、なおかつ建物と主柱穴との対応関係を確定する根拠に乏しいため、本来は別の柱穴がSH458の主柱穴であった可能性もある。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

この建物に伴う貯蔵穴は検出されていないが、南壁沿い中央付近で検出された、SH454に伴うと思われる貯蔵穴と、同一箇所に存在していたとも考えられる。この貯蔵穴の南辺がSH458の南壁のラインと一致する点も、こうした推測を裏付けるかもしれない。

壁際溝は、東壁沿いを除く壁沿いで検出された。検出された範囲ではほぼ途切れず連続するが、北壁沿いでは北西隅付近しか遺存していない。その東側の溝状の遺構は、やや方向がずれているため、SH458に伴うものか判然としない。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。ただし、SH454に伴うと考えられる貼床状の土層が、本来はSH458の貼床であった可能性もある(A-A'断面第11層)。

この堅穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

SH454との関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH459 (第105・106図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。平面形は長軸5.6m、短軸4.4mの明瞭な長方形を呈する。北東隅の近くまで攪乱が及んでいるが、建物自体は比較的遺存状況がよく、深さは0.4mほどある。

主柱穴は4基検出された。壁に平行して柱穴が並ぶが、建物の平面形とは異なってほぼ正方形に配置されている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

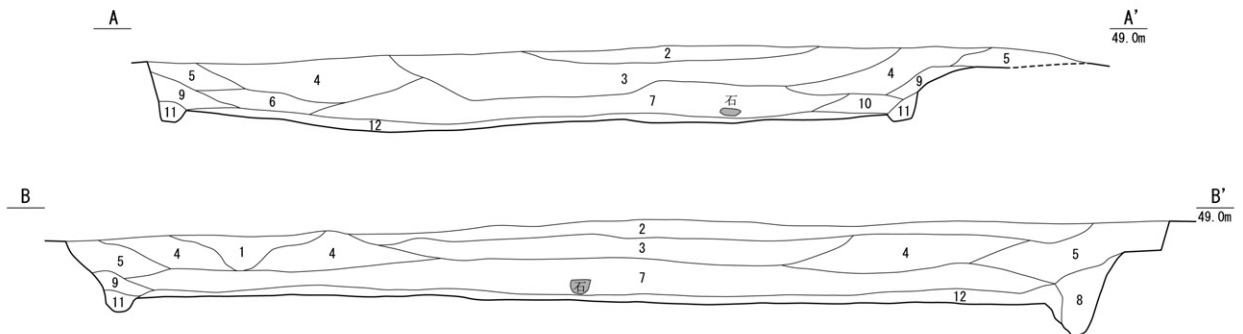
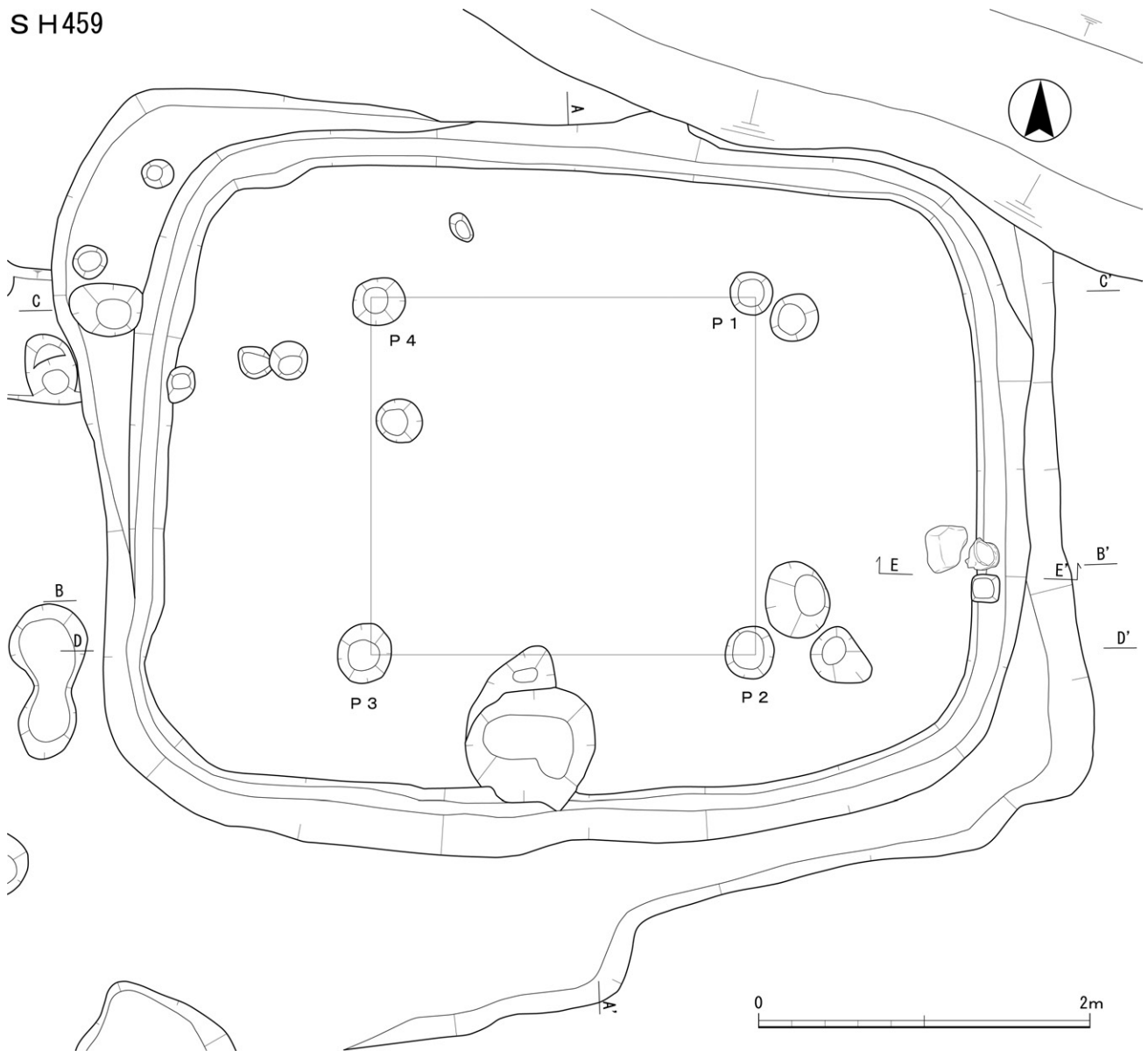
貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.8mほどある。北側に接してごく浅い落ち込みが認められるが、貯蔵穴に伴うものかは不明である。

壁際溝は、途切れず全周する。なお、壁際溝の外側には、建物に沿って浅い落ち込みが認められる。性格については不明であるが、土層断面をみる限り、SH459の埋没過程においてこの落ち込みも埋没している状況が窺われる(A-A'・B-B'断面第5層)。したがって、全く別の遺構ではなく、当該建物に関係するものと考えられる。ただ、不整形で深さも一定しないため、意図的なものとするよりは、建物の壁面崩落に伴って形成された可能性などを想定すべきと思われる。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる。周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、東壁沿いで弥生土器・土師器の受口状口縁甕(1615)が出土した。壁際溝の上面にあたる位置から出土している。その西側からは、長径20cmを超える大型の礫が検出された。このほか、埋土からも多量の弥生土器・土師器や台石が出土している。これらの多くは、埋土上層(A-A'・B-B'断面第3層)に含まれていた。土層断面からみると、建物が埋没した後形成された浅い落ち込みがあるよ

S H459

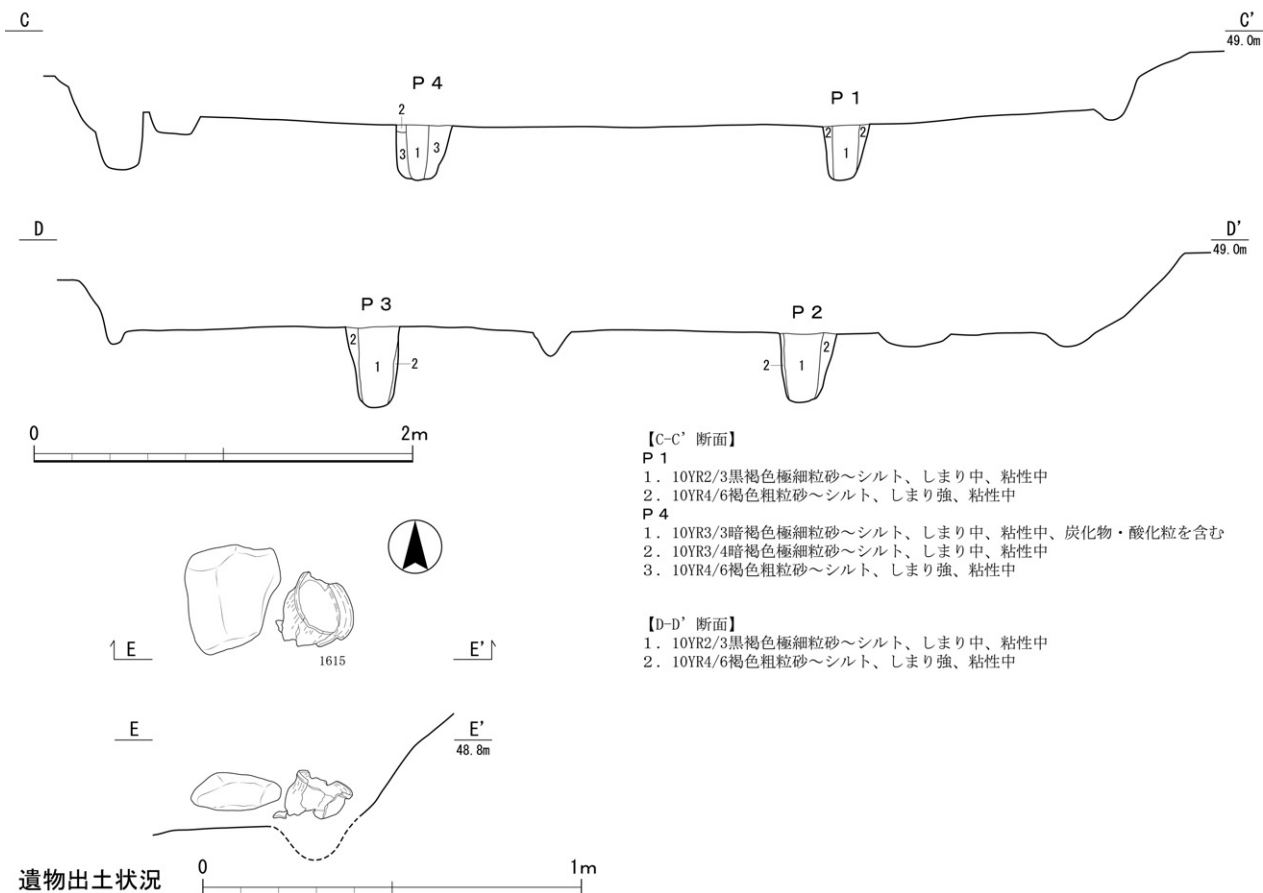


【A-A'・B-B'断面】

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性強〈攪乱?〉 2. 10YR4/4褐色極細粒砂、しまり中、粘性弱 3. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、土器を多量に含む 4. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強 5. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強 6. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強 7. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強 | <ol style="list-style-type: none"> 8. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性強〈攪乱?〉 9. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、10YR4/6褐色細粒砂～シルトを含む、しまりやや強、粘性中 10. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強 11. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む 12. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルトと10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトが混じり合う、しまり強、粘性強〈貼床?〉 |
|--|---|

第105図 S H459① (1/40)

S H459



第106図 S H459② (1/40、1/20)

うにも見受けられるため、多くの遺物は建物の廃絶後、ある程度の期間を経てから堆積したと考えられる。

したがって、出土遺物の多くは当該建物よりも新しい時期を示しているとみられるが、東壁付近出土の弥生土器・土師器甕からみると、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期の可能性が高い。

S H460 (第107・108図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。S H462とごく一部重複しており、この建物に先行すると思われるが、明確には確認できなかった。攪乱によって北東隅付近が削平を被っており、また西壁も遺存状況がやや悪いが、平面形は長軸6.0m、短軸5.8mの正方形に近い方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、

P 2～4ではその土層が上下2層に分かれており、上層には炭化物のほかに焼土塊も含まれているため、柱が抜き取られた後に堆積した土層の可能性が高いと推測される。

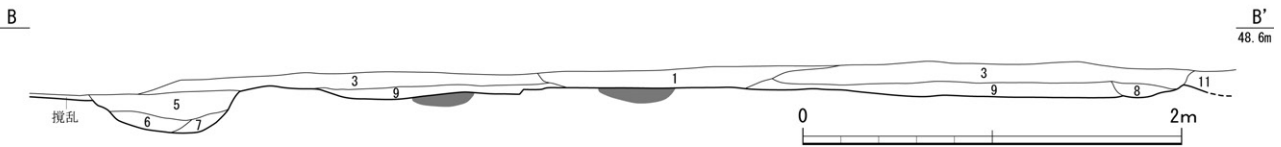
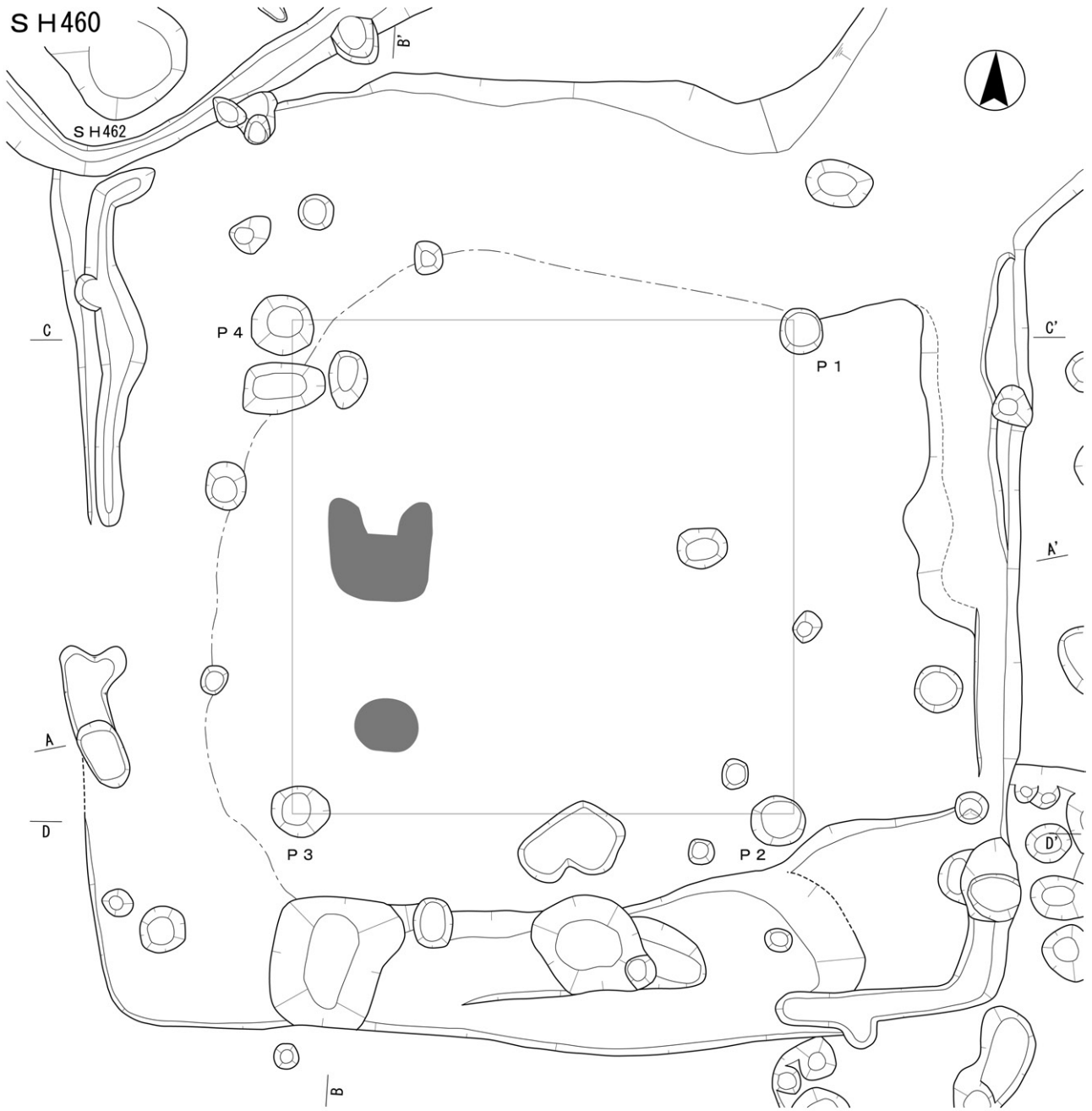
建物中央よりやや西側の床面の2箇所から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い西側で検出された。平面形が不整形な隅丸方形の土坑で、長軸0.8mほどある。また、南壁沿い中央付近でも、やや小型の平面形が円形の土坑が検出されている。

壁際溝は、北壁を除く壁沿いで検出された。土層断面からは、北壁沿いにも壁際溝が存在したものと考えられる。ただし、いずれの壁沿いにおいても部分的にしか検出されておらず、当初から断続的なものであったと思われる。北西隅付近では、建物掘形よりも若干内側に掘り込まれている。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと

S H460



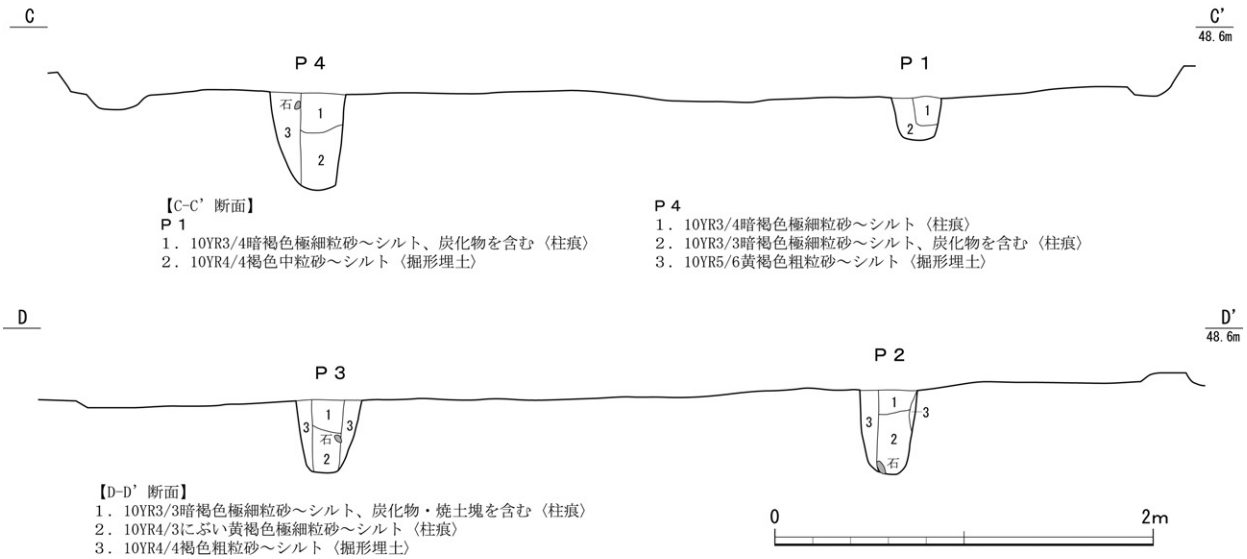
【A-A'・B-B' 断面】

1. 2.5YR6/3にぶい黄色細粒砂～シルト、しまり弱、粘性弱（攪乱）
2. 10YR5/1褐灰色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を7%含む（ピット埋土）
3. 10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、焼土塊を7%含む、炭化物を15%含む
4. 10YR6/6明黄褐色極細粒砂～シルト、炭化物を3%含む
5. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト（貯蔵穴埋土）

6. 2.5YR5/2暗灰黄色粗粒砂～シルト（貯蔵穴埋土）
7. 2.5YR6/2にぶい黄色粗粒砂～シルト（貯蔵穴埋土）
8. 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～シルト（壁際溝埋土）
9. 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、明黄褐色極細粒砂～シルトブロックを20%含む（貼床）
10. 10YR6/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、褐灰色粗粒砂ブロックを7%含む（ピット埋土）
11. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト

第107図 S H460① (1/40)

S H460



第108図 S H460② (1/40)

思われる。ただし、西壁付近などでは確認できていない。また、建物の中央部を中心とする広い範囲で硬化した面が認められた。周溝状掘形は明確には確認できなかったが、南壁付近で壁に沿って幅の広い浅い落ち込みが確認されており、また、北壁沿いでもやや浅く落ち込んでいる状況が土層断面で確認できるため、ごく浅い周溝状掘形が存在した可能性も考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S H461 (第109図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。S H463と一部重複しており、この建物より後出すると思われるが、明確には確認できなかった。削平によって北側の遺存状況がやや悪いが、平面形は長軸6.0m、短軸5.7mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴にはP 4のように0.6mほどと深いものが認められる。P 2・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央よりやや南西側と西側の床面から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径0.9mほどある。また、そのやや東の南東壁沿いでも、これよりやや小型の平面形が円形の土坑が検出されている。

壁際溝は、北西壁を除く壁沿いで検出された。ただし、北東壁沿い及び南東壁沿いでは一部のみに認められる。南西壁沿いについても、S H463と重複している箇所では検出されていない。

貼床や周溝状掘形は確認できなかったが、建物の中央部を中心とする広い範囲で硬化した面が認められた。

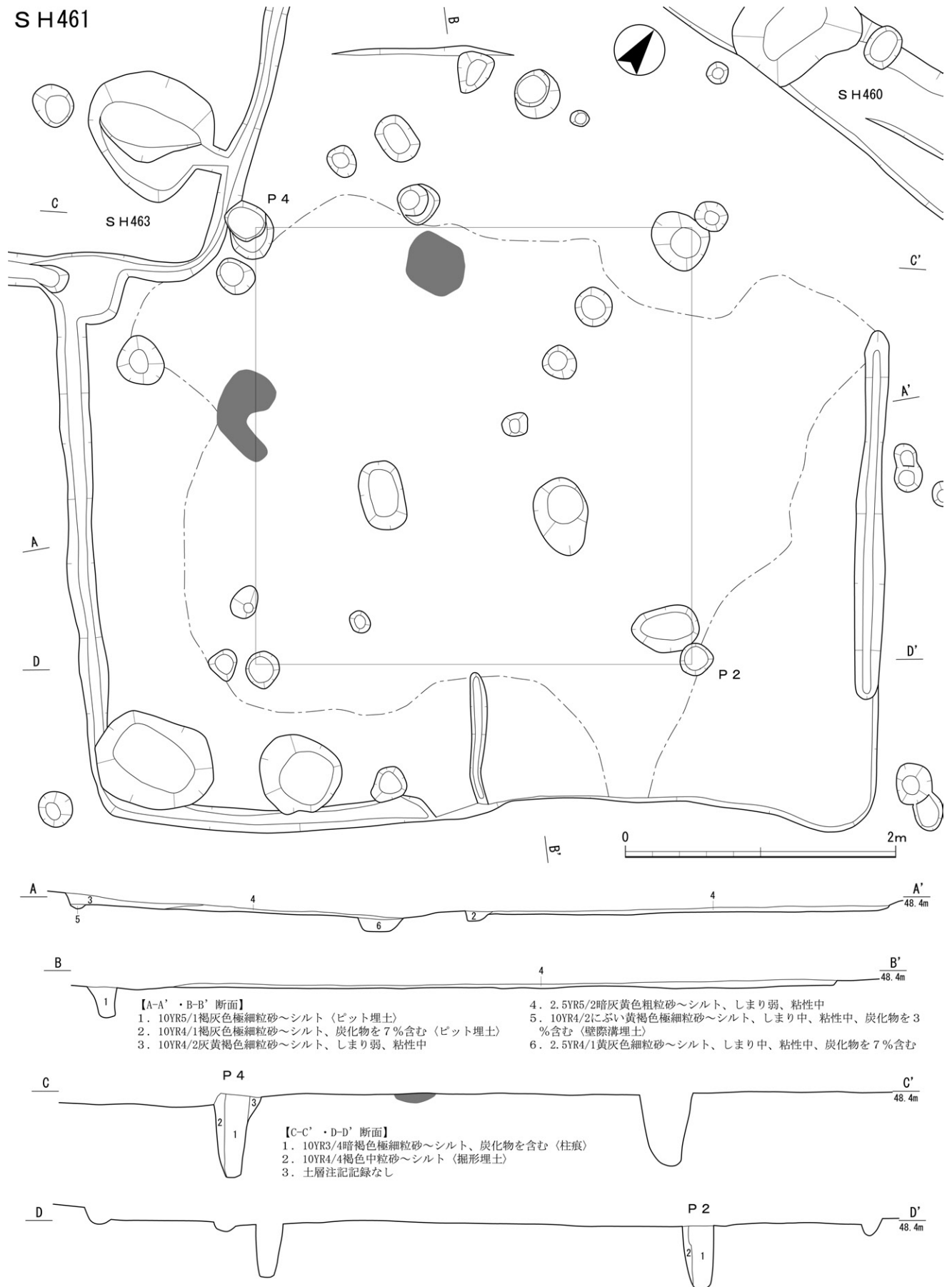
また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、主柱穴P 2から土師器高坏の小片が出土した。また、埋土からは弥生土器・土師器や敲石が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

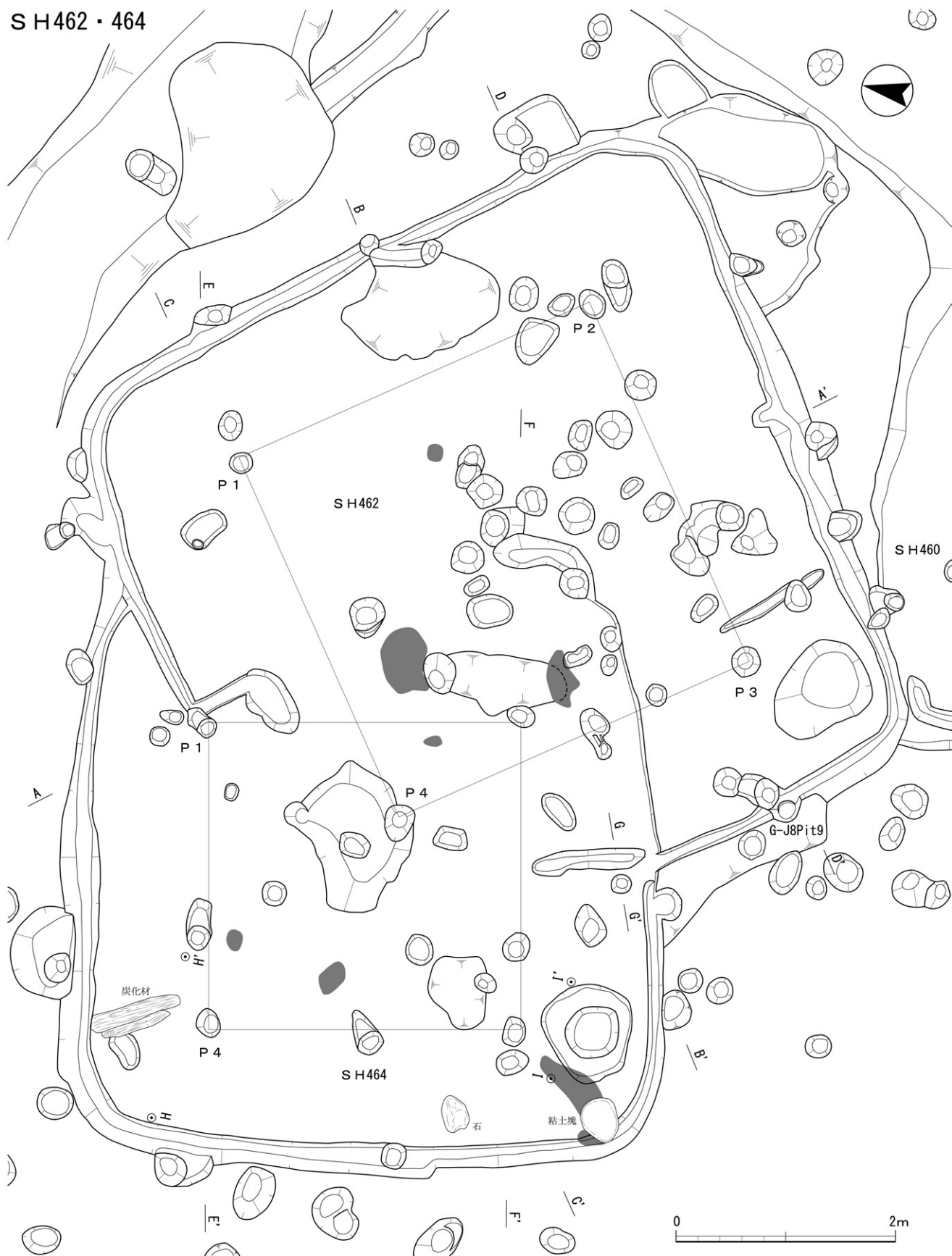
S H462 (第110～112図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。S H464と重複しており、この建物より後出する。また、S H460ともごく一部重複しており、この建物にも後出すると思われるが、明確には確認できなかった。西隅付近がS H464

S H461



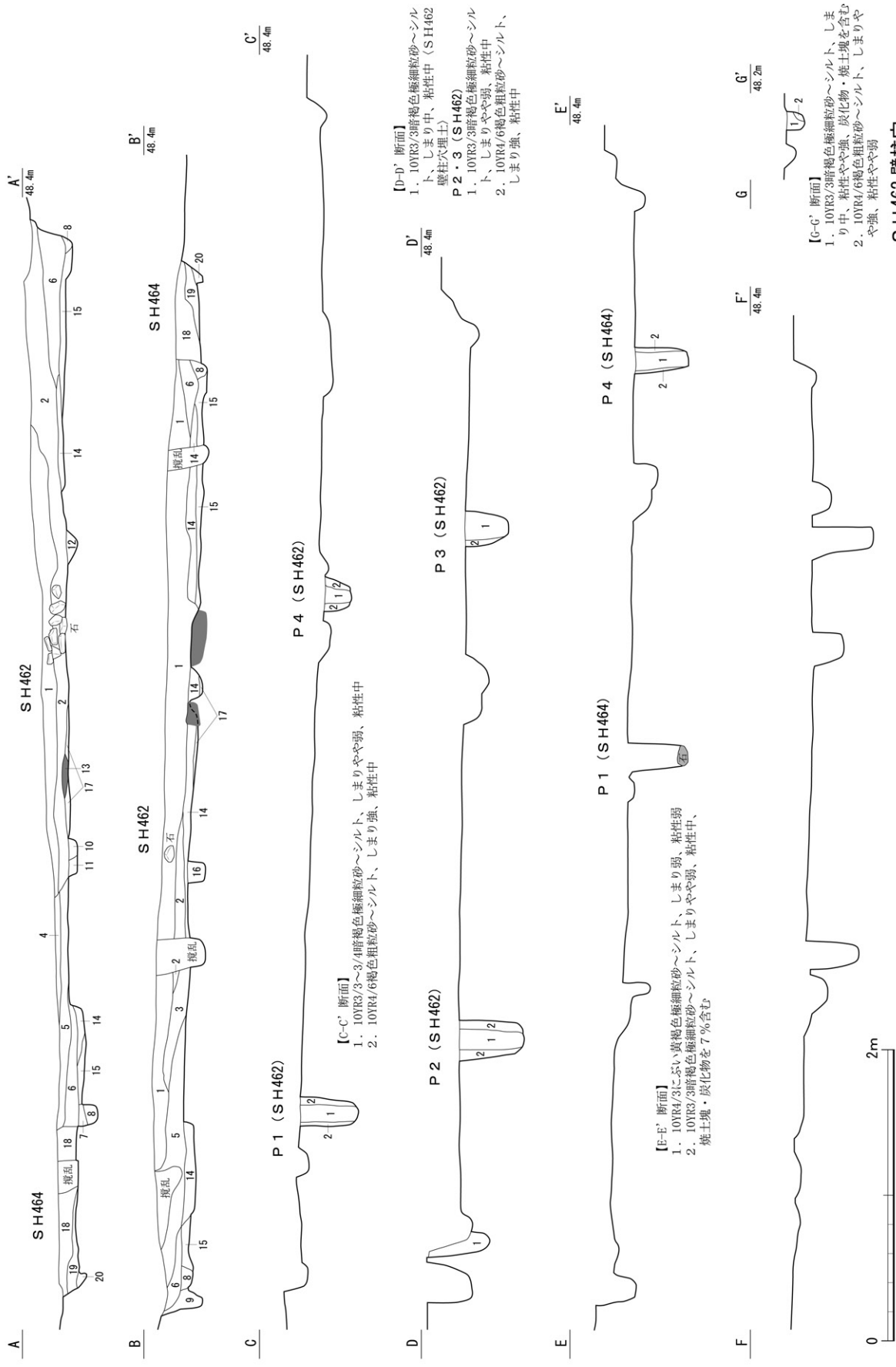
第109図 S H461 (1/40)

S H462 · 464



第110図 S H462 · 464① (1/50)

SH462・464



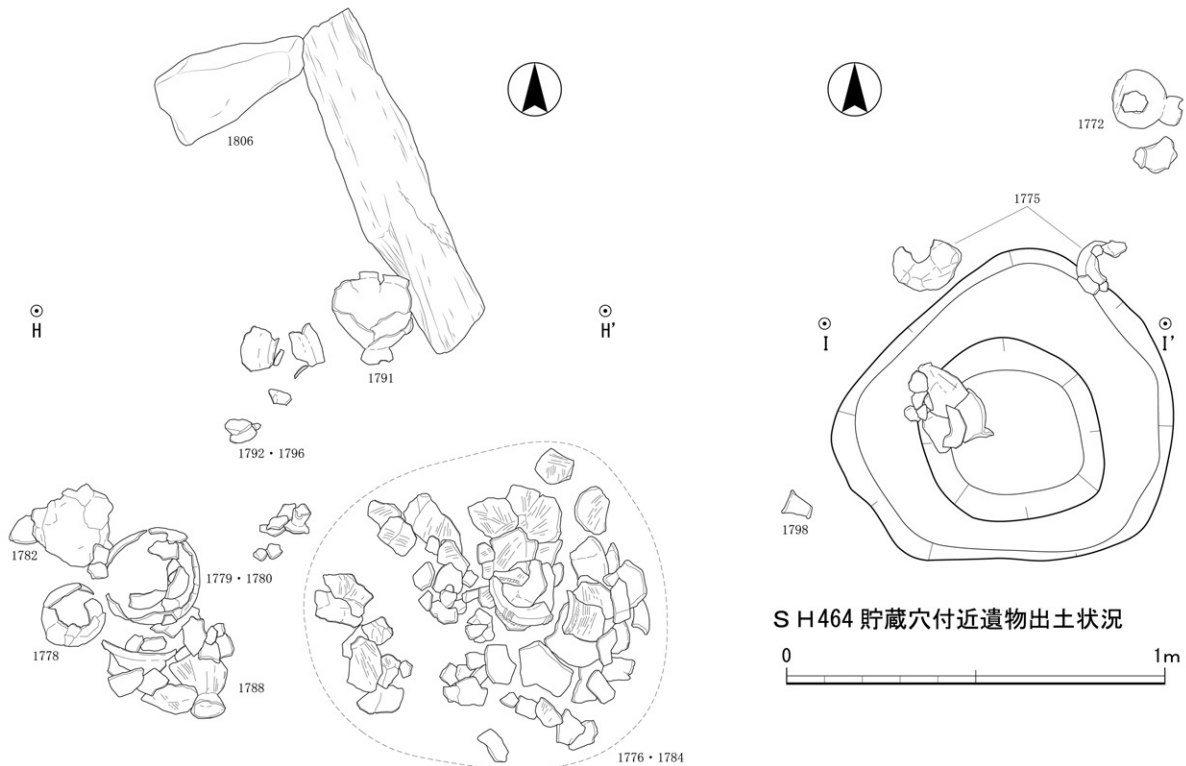
第111図 SH462・464② (1/40)

S H462・464

【A-A'・B-B'断面】

1. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、礫・土器を含む
2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
5. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、炭化物を含む
6. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
7. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
8. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中（S H462壁際溝埋土）
9. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（S H462壁柱穴埋土）
10. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強

11. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
12. 10YR2/3黒褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
13. 7.5YR4/6褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中（焼土）
14. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルトと10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルトが混じり合う、しまりやや強、粘性強
15. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中
16. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
17. 土層注記記録なし
18. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、7.5YR4/6褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり強、粘性強
19. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
20. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中、焼土塊を含む



S H464 貯蔵穴付近遺物出土状況

S H464 北西部遺物出土状況

第112図 S H462・464③ (1/20)

との重複により平面で検出できなかったが、平面形は長軸6.3m、短軸6.3mの正方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央よりやや西側の床面の2箇所から焼土が検出されており、土層断面からみるとS H462に伴う可能性が高いため、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅で検出された。平

面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.0mほどある。また、貯蔵穴の北東側では、南東壁と直交するように細い溝が認められる。他の建物の間仕切り溝とは位置が異なり、当該建物に伴う遺構であるかも確定できないが、貯蔵穴に伴う遺構の可能性も考えられよう。

壁際溝は、西隅付近を除く壁沿いで検出された。土層断面からは、西隅付近においても壁際溝が存在したものと考えられ（B-B'断面第8層）、途切れず全周していたものと思われる。

また、壁際溝と重複する形で小型のピットが複数

検出された。北東壁や南東壁では1.5mほどの間隔で3基のピットが半分程度建物外側に突出する形で検出されており¹⁰⁾、南西壁でも1.5mほど間隔をあけて2基のピットが確認できる。土層断面では、壁際溝に先行して掘り込まれているように見受けられ、この建物に伴う構造物である可能性は高い。柱痕は確認されていないが、壁柱穴など、壁の構造に関わる何らかの施設である可能性も考えられる。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる(A-A'・B-B'断面第14・15層)。周溝状掘形は明確には確認できなかったが、北東壁付近や南西壁付近では、壁際溝と同程度の深さの落ち込みが存在し、その内部に貼床が施されているような状況が確認できるため、ごく浅い周溝状掘形が存在した可能性も考えられる。

遺物は、壁柱穴から台石の小片と思われるものが出土している。貯蔵穴や埋土からは、弥生土器・土師器が出土した。埋土から出土した遺物はかなり多いが、ほとんどが小片であり、主に埋土上層(A-A'・B-B'断面第1層)に含まれていたとみられる。

出土遺物やSH464との新旧関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH463 (第113図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH461と一部重複しており、この建物に先行すると思われるが、明確には確認できなかった。削平によって北側の遺存状況がやや悪いが、平面形は長軸6.5m、短軸4.8mの長方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って長方形に配置されている。柱穴は多くが深さ0.2mほどと浅いが、P2のみ0.4mと深くなっている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P1では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

建物中央よりやや西側で平面形が不整形な浅い土坑が検出されており、その周囲に焼土が認められるため、炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な隅丸三角形の土坑で、長軸1.0mほどある。また、東壁沿い南側でも、平面形が不整形な円形を呈する土坑が検出されている。

ただし、深さは0.15mほどとかなり浅く、貯蔵穴とは考えにくい。埋土下層には、焼土塊や礫が含まれている。この土坑は、SH461に伴う遺構の可能性もあるが、SH461も別に貯蔵穴を有しており、また、溝で壁際溝と連結されているようにも見受けられるため、SH463に伴う遺構と考えておきたい。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れておらず、全周すると思われるが、削平を被っている北壁沿いに壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかったが、建物中央部に硬化した面が認められた。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH464 (第110～112図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。SH462と重複しており、この建物に先行する。東側がSH462によって削平を被っているため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸・短軸5.5mほどの正方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。また、P1では柱穴の底面から礫が検出されており、意図的に入れられたものとみられる。

建物中央よりやや西側や北西側の床面から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.5mほどある。周囲は径0.9mほどの範囲で浅く落ち込んでいる。

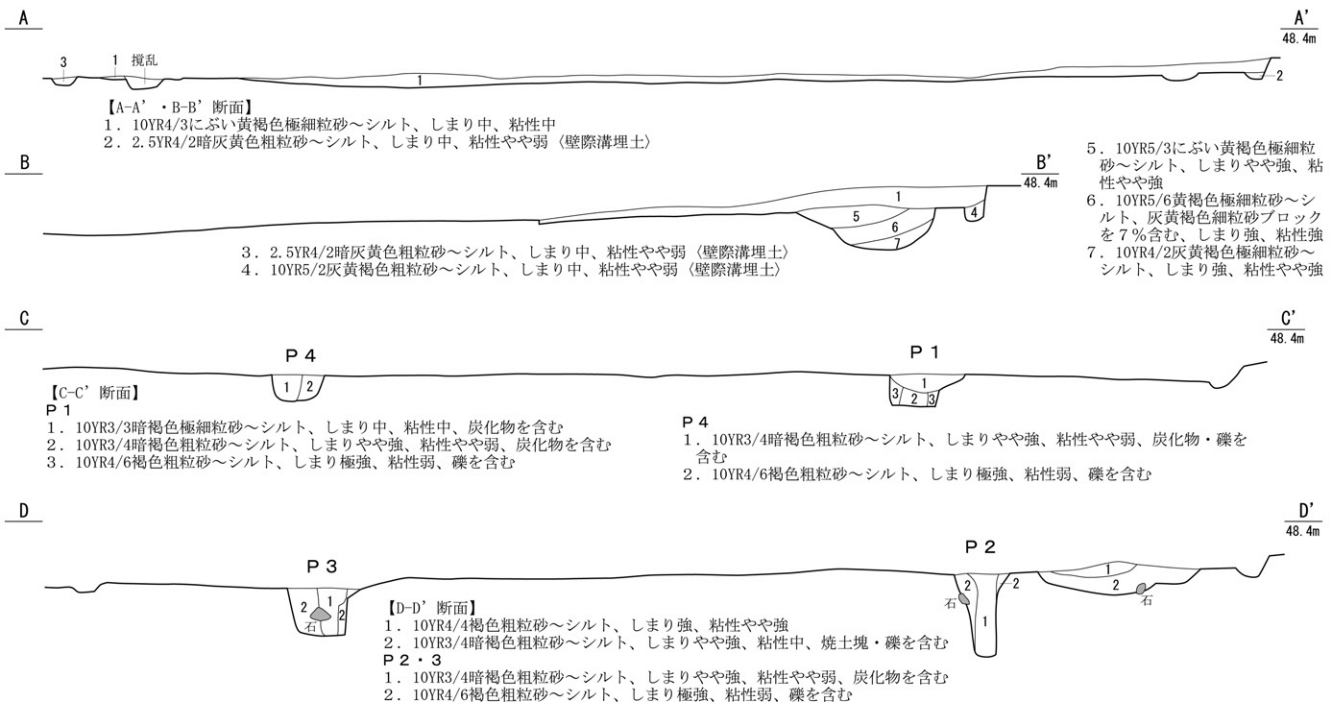
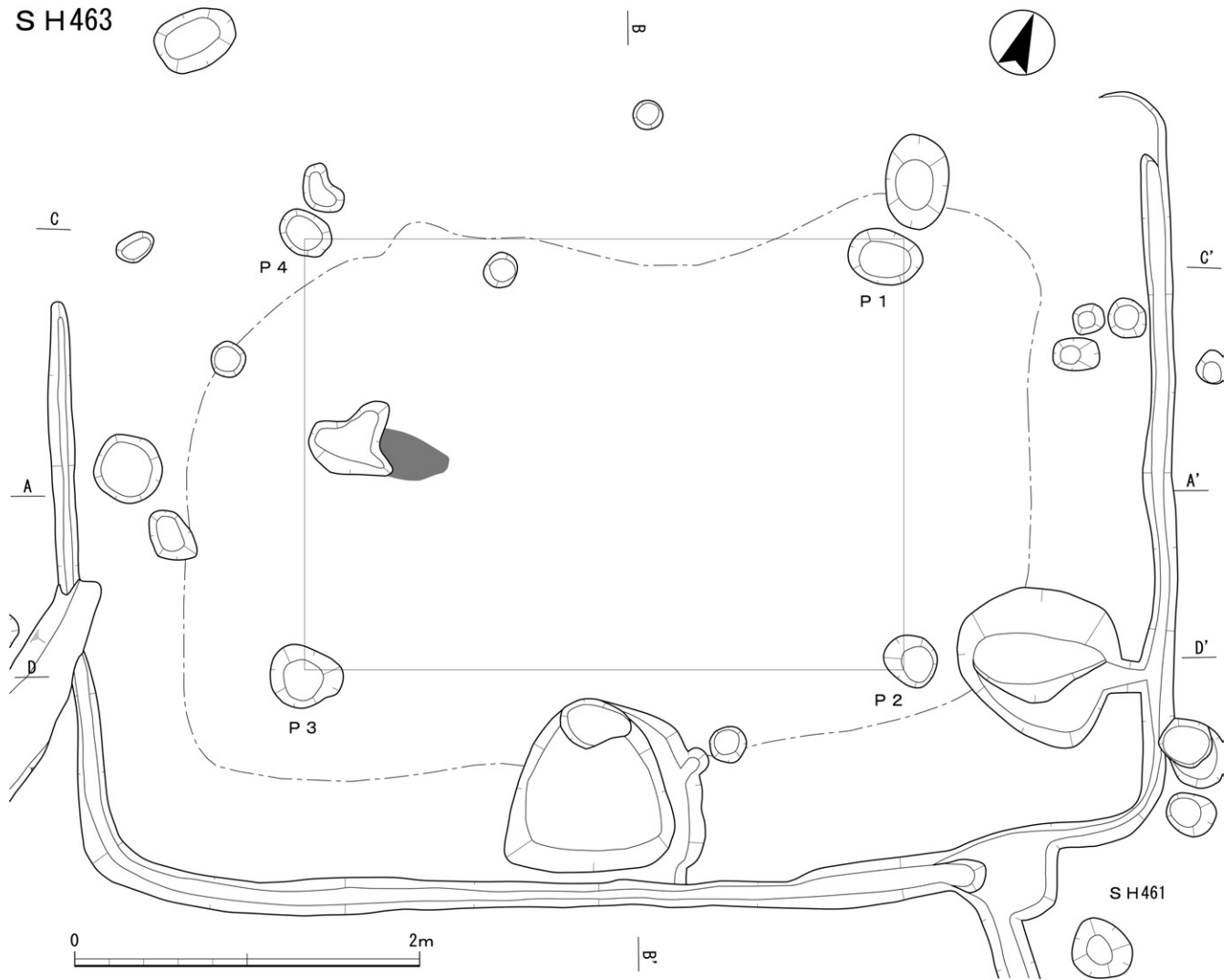
壁際溝は、SH462によって削平を被っている箇所を除いて途切れず検出された。おそらく全周していたものと思われる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

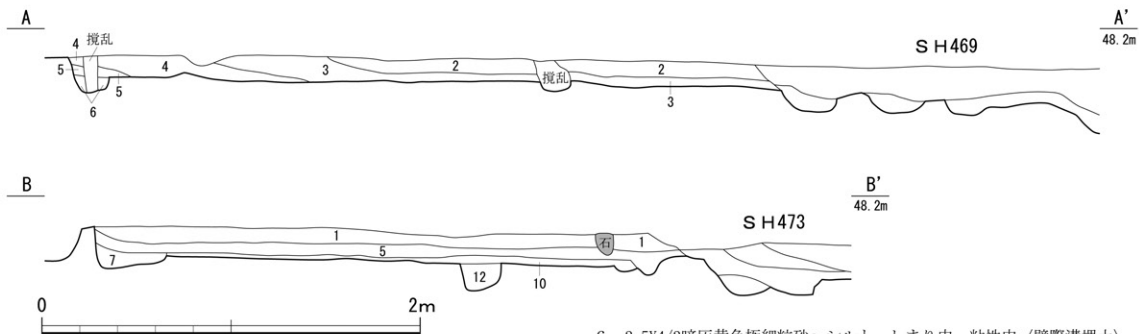
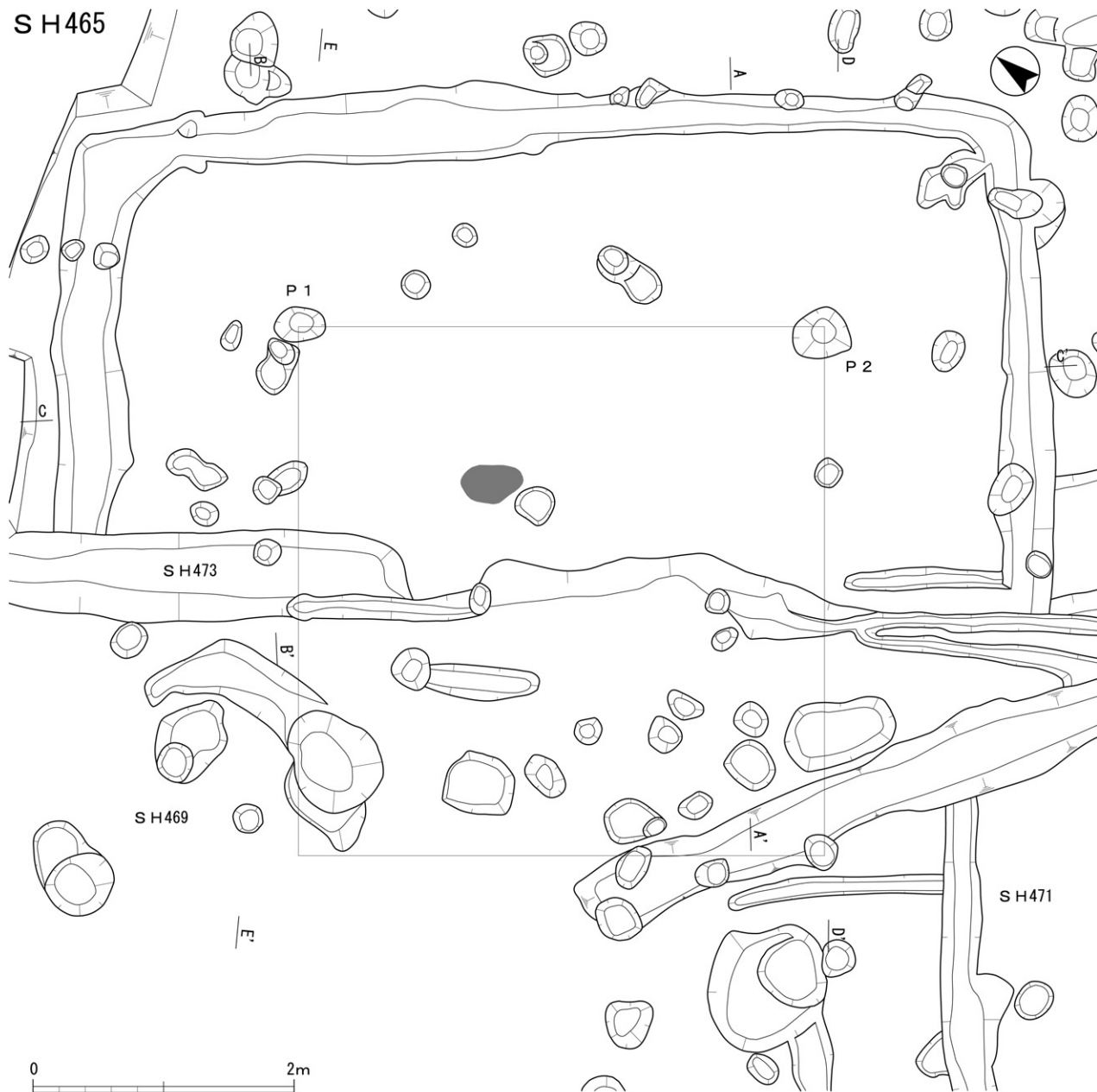
遺物は、北西隅付近の床面上で弥生土器・土師器の壺や甕が複数個体出土している。全形がかなり復元できるものが目立ち、大型の台石(1806)も伴う。

S H463



第113図 SH463 (1/40)

S H465

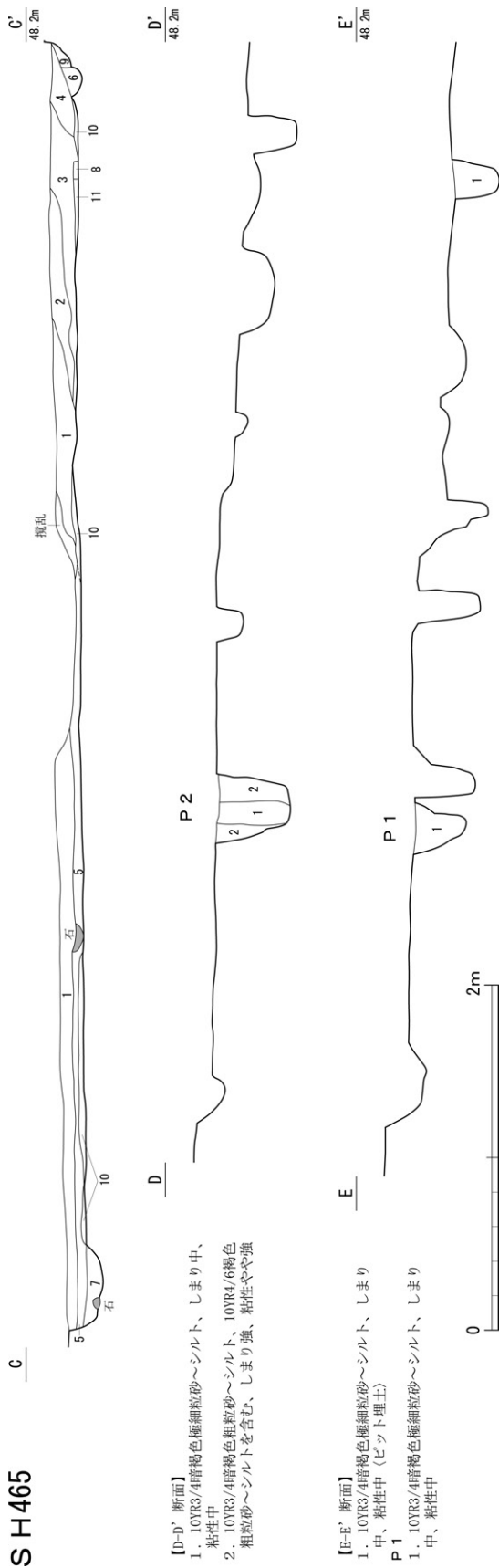


【A-A'・B-B'・C-C'断面】

1. 2.5Y3/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、土器片を3%含む
3. 2.5Y3/1黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性強、土器片を3%含む
4. 2.5Y5/3黄褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
5. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
6. 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（壁際溝埋土）
7. 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性強（壁際溝埋土）
8. 10YR3/1黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（ピット埋土）
9. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト、地山ブロックを7%含む、しまり弱、粘性弱
10. 10YR6/6明黄褐色極細粒砂～シルト、地山ブロックを10%含む（貼床）
11. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（貼床）
12. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（ピット埋土）

第114図 S H465① (1/50、1/40)

SH465



また、貯蔵穴付近でもほぼ完形の土師器瓢形壺や径40cmほどの粘土塊が出土した。粘土塊は南西隅の壁際溝上面に一部かかる形で検出されている。このほか、埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

なお、北西隅付近では、かなり大きな炭化材がまとまって検出されている。南西隅付近に炉に関係するとは考えにくい被熱痕跡が認められることも鑑みると、この建物は焼失建物と考えられる。

出土遺物やSH462との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられ、弥生時代終末期としてもかなり新しい段階と思われる。

SH465 (第114・115図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH469・470・471・473など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。これらの建物より先行し、これらの建物によって西側の半分程度が削平を被っている。そのため全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸・短軸7.7mほどの正方形を呈するものと思われる。比較的大型の建物である。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P2では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央よりやや北側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴は明確には検出されなかったが、南隅付近にあたる箇所、調査時にSH469に伴う貯蔵穴と判断された土坑が存在する。SH469には、もう1箇所別に貯蔵穴とみられる土坑が存在するため、この南隅付近に位置する土坑がSH465に伴う貯蔵穴であった可能性も残る。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れておらず、全周すると思われるが、他の建物によって削平を被っている西側では壁際溝が存在したか不明である。北西壁沿いや北東壁沿いの北側では、壁際溝の幅が広がっている。

貼床は部分的に施されている。周溝状掘形は認められなかった。

また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物やSH469・471などとの新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH467（第116図） 第4次調査区の西部で検出した建物である。平面形は長軸5.4m、短軸4.9mのやや長方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。P4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、他の柱穴では明確ではない。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明であるが、建物中央よりやや南側や西側で浅い土坑が複数検出されており、いずれかが炉の可能性はある。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径1.0mほどある。壁面は緩やかに立ち上がり浅い皿状を呈するが、中央部は若干深くなっており、そこから弥生土器広口壺の口縁部（1829）が出土している。

壁際溝は、南壁を除く壁沿いで検出された。北壁沿いや西壁沿いでは途切れていないが、東壁沿いでは断続的となっている。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、北壁沿いの中央からやや東側で、径30cmほどの粘土塊が検出された。白っぽい良質の粘土で、浅いピットの中に入れていたものと思われる。土器の製作等に使用する目的で、建物内に保管されていた可能性が考えられる。

遺物は、支柱穴P1や貯蔵穴から弥生土器・土師器が出土した。P1から出土したものには、近江地域からの搬入品の可能性がある弥生土器受口状口縁甕の口縁部（1828）がある。このほか、埋土からも弥生土器・土師器や小型の柱状片刃石斧、台石が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

SH469（第117・118図） 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH465・470・471・473など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。SH465・471より後出する。また、SH473より先行し、この建物によって北側の大部分が削平を被っている。S

H470にも先行すると思われるが、確実ではない。全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸7.9m、短軸7.7mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。比較的大型の建物である。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央よりやや西側で不整形な浅い土坑が検出されており、底面で焼土が検出されていることから、これが炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿いの東側で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径1.0mほどある。西側は段状に浅くなっており、壁際溝と重複するように掘り込まれている。SH465の貯蔵穴の可能性もある。また、南東壁沿い西側にも同様の土坑が存在するが、SH470との新旧関係も不明で、SH469に伴う貯蔵穴か判断できない。

壁際溝は、北西壁を除く壁沿いで検出された。ただし、北東壁沿いの壁際溝はごく一部しか遺存していない。また、南東壁沿いでも、東側貯蔵穴より東側では検出されていない。削平によって失われた北西壁沿いに壁際溝が存在したかについても不明である。南西壁沿いでは良好な状態で壁際溝が検出されているが、二重になっている。ただし、土層断面では壁際溝が二重に掘り込まれている様子は認められず、他の壁沿いでもこうした状況は確認できないため、建物の建て替えや改修があった可能性は低いと思われる。

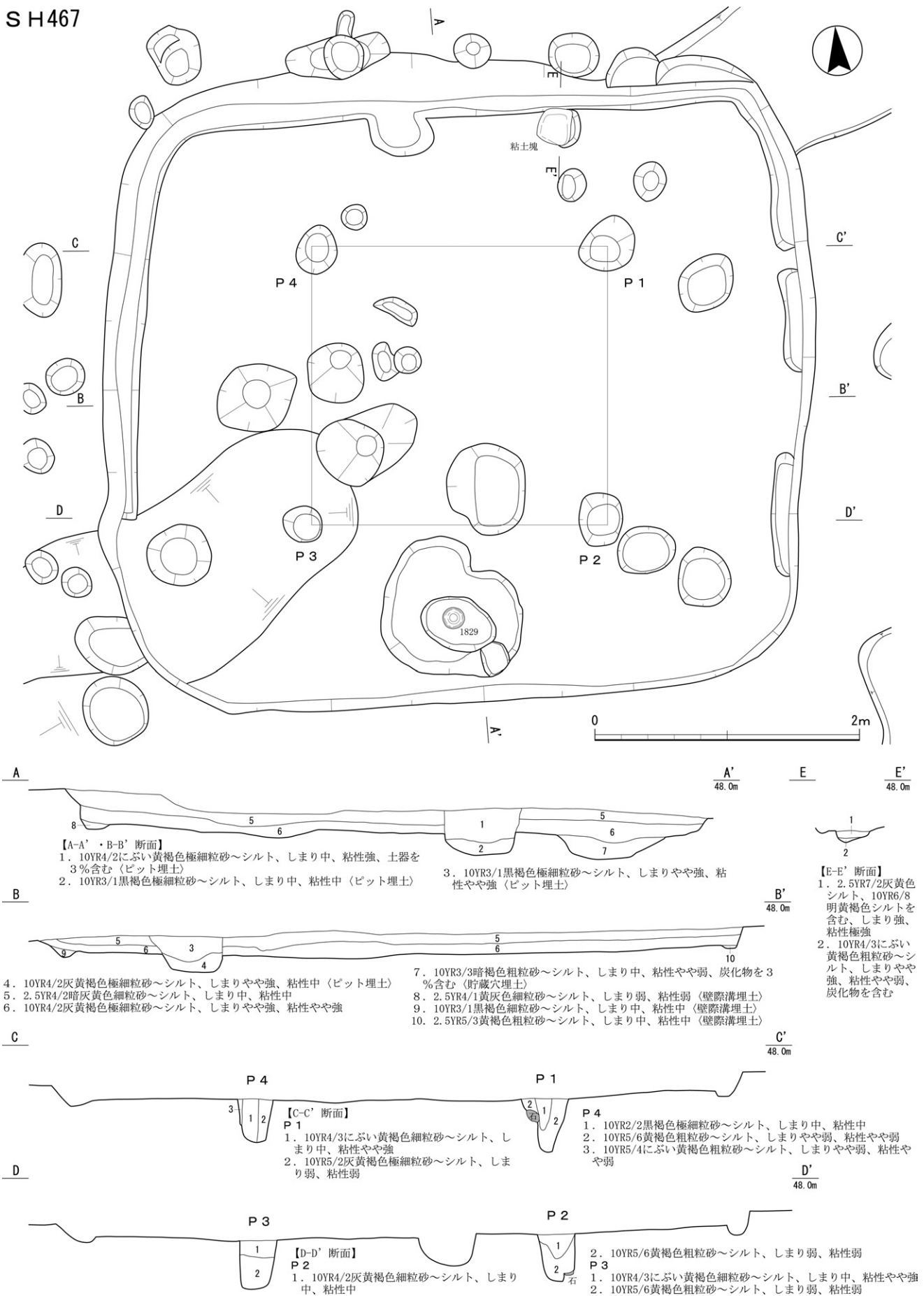
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。そして、その0.6mほど東側にも、平行するようにもう一本の溝が認められる。この溝は、中央付近のものよりやや短く壁際溝から少し離れて掘り込まれている。これらは間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、南東壁沿い東側で検出された貯蔵穴から弥生土器・土師器が出土した。内面に水銀朱が付着した土師器椀形高坏の坏部（1843）などがある。埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

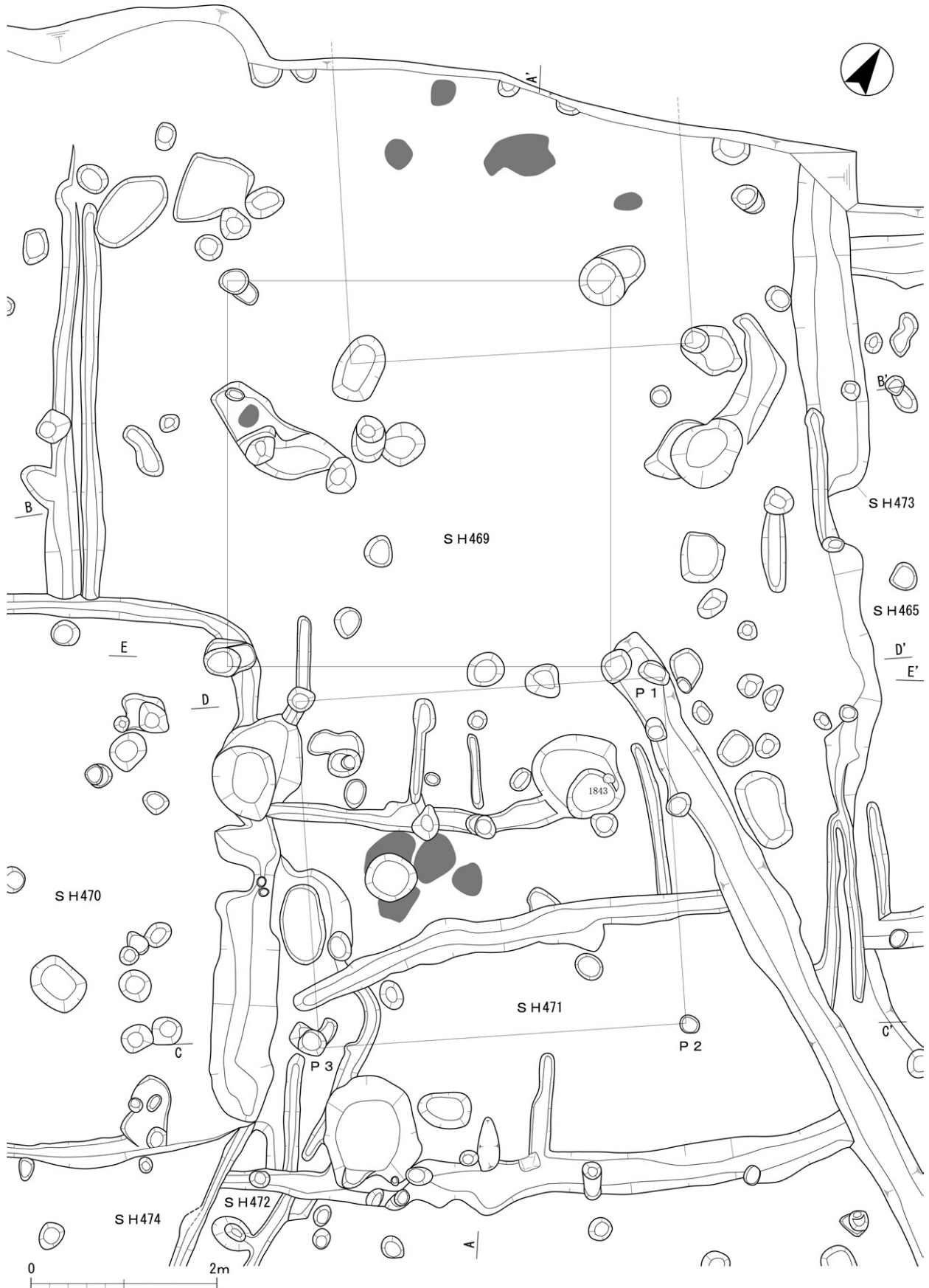
出土遺物やSH465・473などとの新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S H 467



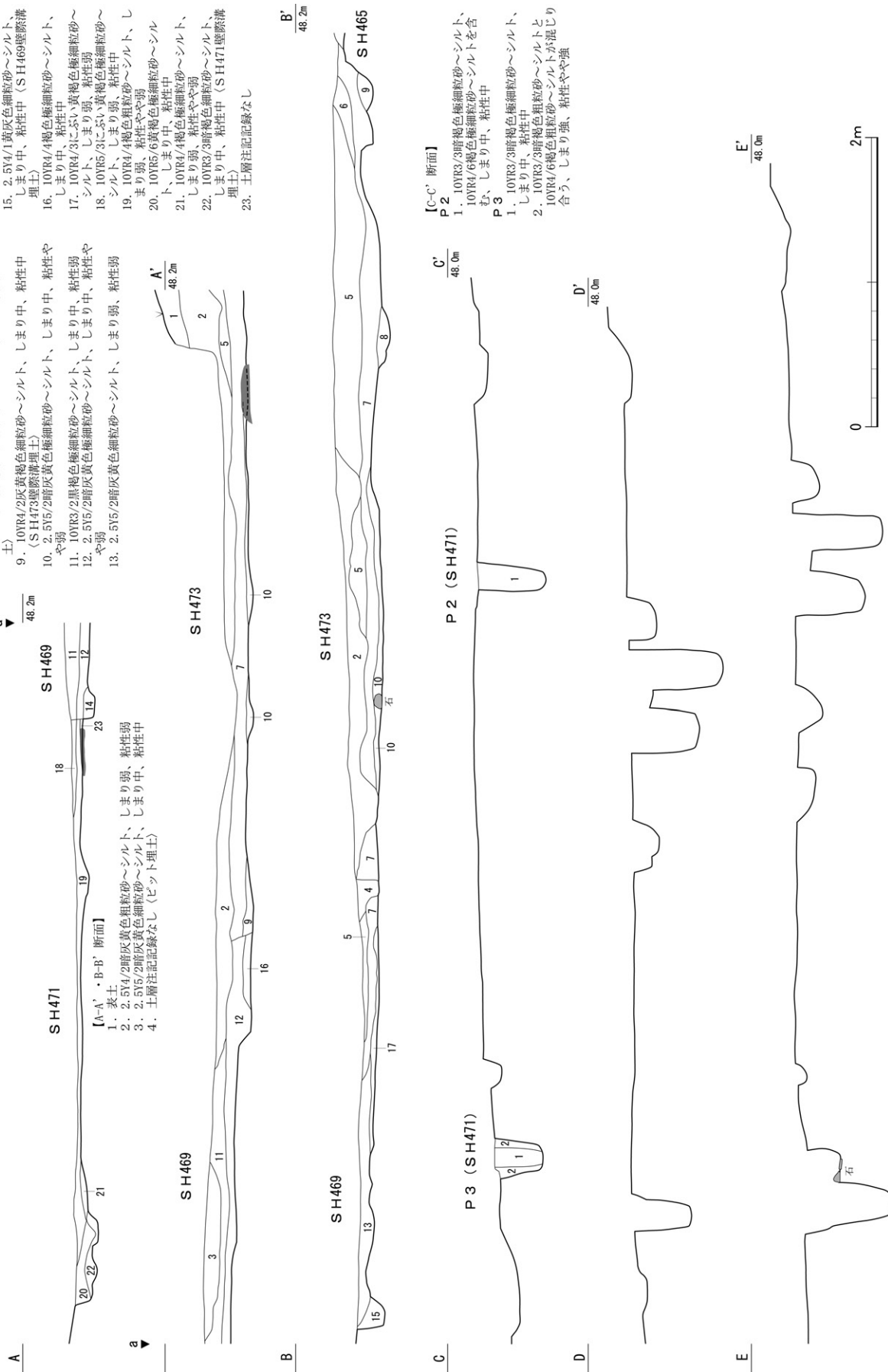
第116図 SH467 (1/40)

S H469 · 471 · 473



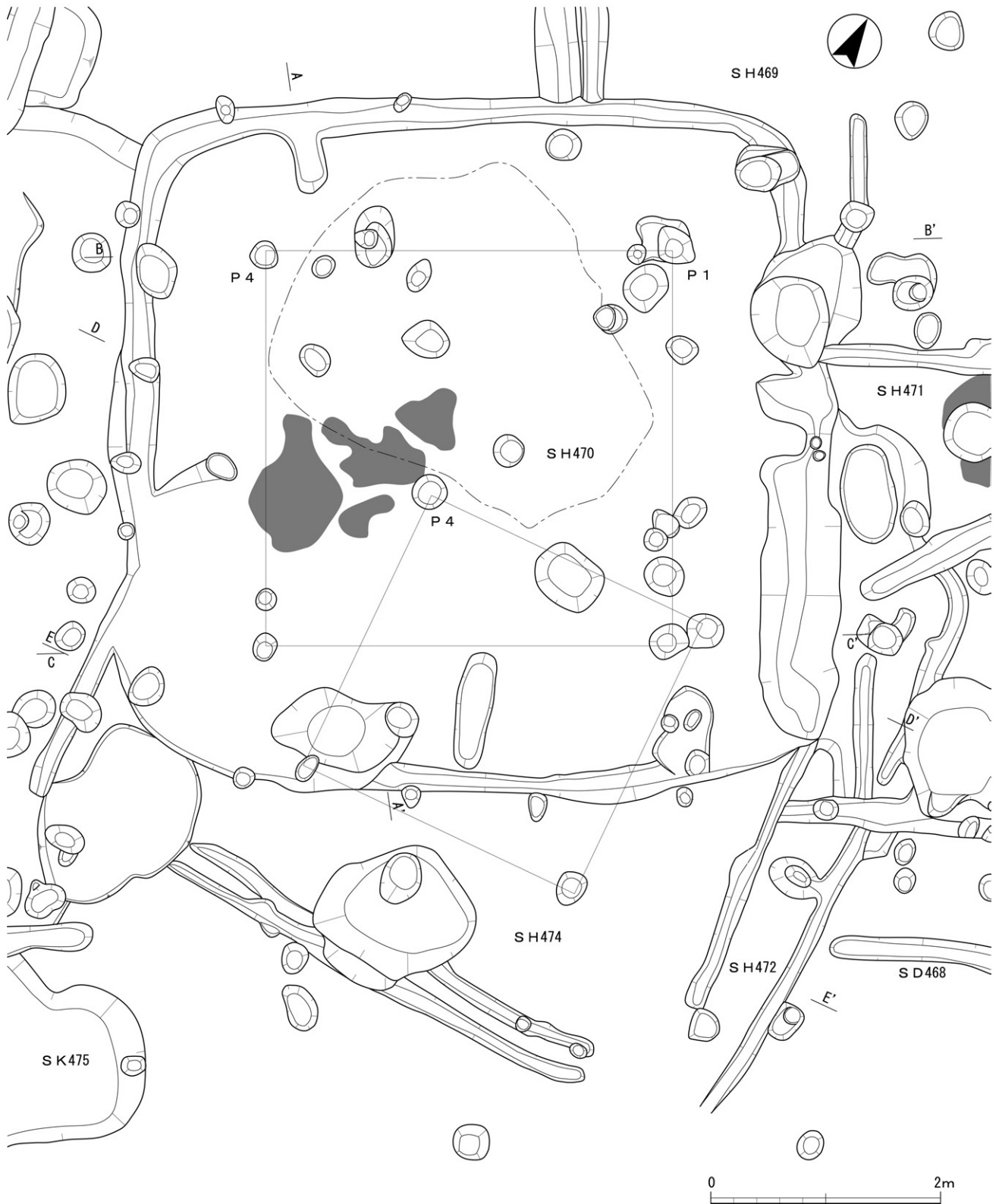
第117图 S H469 · 471 · 473① (1/60)

SH469・471・473②



第118図 SH469・471・473② (1/40)

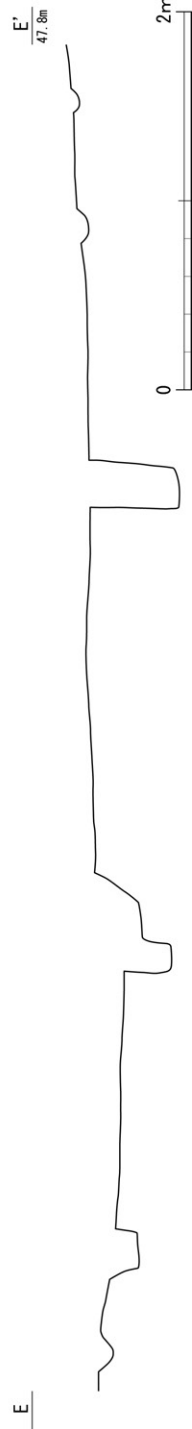
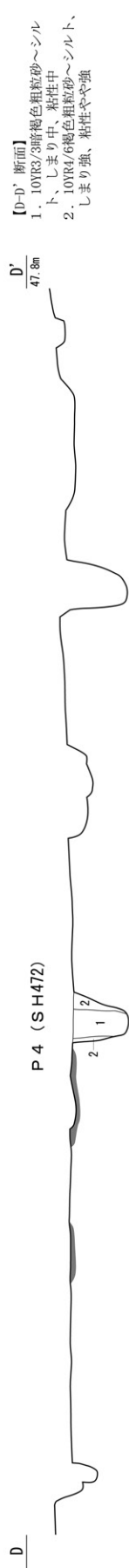
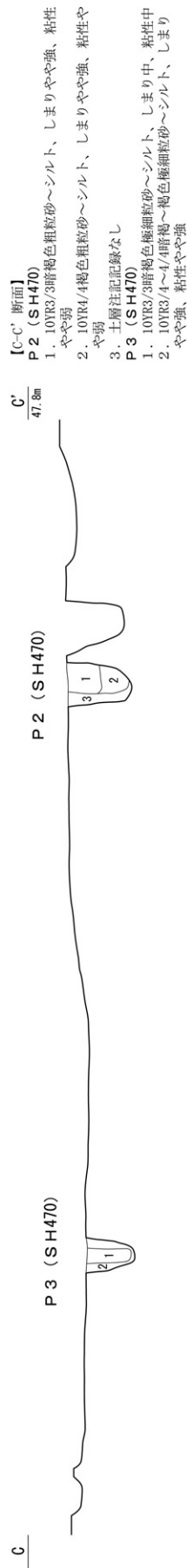
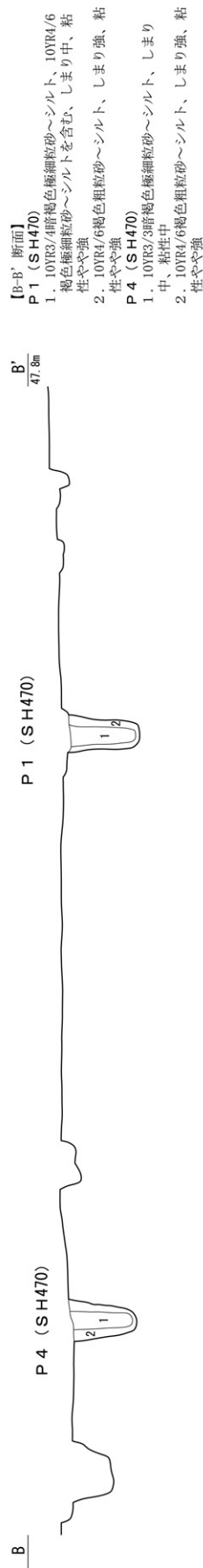
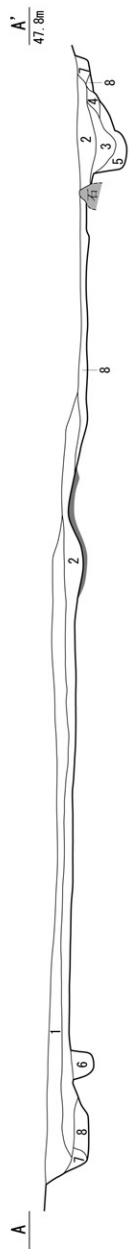
S H470 · 472 · 474



第119図 S H470 · 472 · 474① (1/50)

SH470・472・474

- 【A-A' 断面】**
- 10VR3/4〜4/4暗褐〜褐色極細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
 - 10VR4/2灰黄褐色細粒砂〜シルト、しまり弱、粘性弱
 - 10VR3/3暗褐色極細粒砂〜シルト、10VR4/6褐色極細粒砂〜シルトを含む、しまり中、粘性やや強
 - 10VR3/3暗褐色極細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
 - 10VR2/3黒褐色極細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
 - 10VR3/3暗褐色極細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
 - 10VR3/1褐色極細粒砂〜シルト、しまり弱、粘性やや弱 (SH470 観察簿埋土)
 - 10VR3/3暗褐色極細粒砂〜シルトと10VR4/6褐色極細粒砂〜シルトが混じり合う、しまり強、粘性やや強 (SH470 貼床)



第120図 SH470・472・474② (1/40)

SH470 (第119・120図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH465・469・471・473など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。重複するSH472・474より後出し、SH469・471にも後出するとみられるが、明確には確認できない。平面形は長軸6.2m、短軸6.1mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央よりやや南側の床面から焼土が散在的に検出されており、この範囲に炉が存在したと考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿いの南側で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.3mほどある。

壁際溝は、ほぼ全周しているが、遺存状況が悪い南隅付近や東隅付近では若干途切れている。

貼床や周溝状掘形は確認できなかったが、建物の中央部から北西部にかけての範囲で硬化した面が認められた。

また、南東壁の中央付近からやや太く短い溝が建物中央に向かって伸びる。位置的には、間仕切りなど建物に伴う構造物の可能性が考えられるが、壁と若干直交しないようにも見受けられる点には疑問が残る。

遺物は、貯蔵穴や埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH471 (第117・118図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH465・470・472・473など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。SH472より後出する。また、SH469より先行し、この建物によって北側の大部分が削平を被っている。SH470にも先行すると思われるが、確実ではない。全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸7.8m、短軸7.4mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。比較的大型の建物である。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認で

きる。

建物中央よりやや南西側で平面形が円形の浅い土坑が検出されており、周囲から焼土が検出されていることから、これが炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿いの西側で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径1.2mほどある。壁際溝と一部重複するように掘り込まれている。

壁際溝は、南東壁沿いで検出された。また、北東壁沿いにも一部遺存している。北側では、SH469・470等による削平のため、壁際溝は検出できなかった。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。この溝の南端は壁際溝と連結しているように見受けられ、その接点付近でやや大型の礫が検出されている。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、主柱穴P1や埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物やSH469・472との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH472 (第119・120図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH465・469・470・471など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。SH470・471・474と重複しており、SH470・471に先行する。また、SH474とはほぼ完全に重複しており、新旧関係は明らかでないものの、SH472はSH474の建て替えに伴って拡張されたものである可能性が高い。SH470によって北側から西側にかけての大部分が削平を被っているため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸6.8m、短軸5.8mの長方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。建物の平面形とは一致せず、検出時はSH474の主柱穴とされていたが、SH474とも主軸方向などが一致しないため、SH472の主柱穴とした。P4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉

の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径1.3mほどある。

壁際溝は、北壁を除く壁沿いで検出された。遺存状況の悪い南東隅付近を除き、ほぼ途切れず連続している。北東隅付近では、やや屈曲して北壁沿いへと続くような様子も認められるため、全周していた可能性が高い。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P4から弥生土器・土師器甕の小片と磨製石鏃と思われる石器(1883)が1点出土している。貯蔵穴からも弥生土器の大型の壺の体部と考えられる破片がまとめて検出されたが、風化が著しく図化できなかった。このほか、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物やSH470・471との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉の可能性が高い。

SH473(第117・118図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH465・469・470・471など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。北側の半分程度は調査区外となっており、未調査である。土層断面からみると重複するSH465・469より後出すると思われるが、SH469との重複箇所では平面形を明瞭に検出することができず、全体の形状は不明確である。平面形は長軸7.2mほど、短軸4.2m以上の方形を呈するものと推定される。

支柱穴は2基検出された。本来は、建物の平面形に沿って方形に配置されていたものと思われる。

建物中央付近の床面から焼土が複数箇所検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿いの東側にあたると推定される箇所で検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.8mほどある。

壁際溝は、遺構掘削時には検出することができなかった。しかしながら、土層断面では北東壁沿いに壁際溝が存在することが確認でき、また、南東壁沿いでも壁際溝と思われるものが認められる。

貼床は、建物内の広い範囲に施されている可能性がある(A-A'・B-B'断面第10層)。周溝状掘形は確認できなかった。

この竪穴建物に伴う遺物は出土しなかった。ただし、SH469との重複部分が不明瞭であったことから、当該建物に伴う遺物の一部がSH469出土遺物に含まれている可能性もある。

SH465・469との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられるが、確定的ではない。

SH474(第119・120図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH465・469・470・471など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。SH470・471・472と重複しており、SH470・471に先行する。また、一回り大きな建物であるSH472とはほぼ完全に重複している。新旧関係は明確ではないが、SH472にも先行する可能性が高い。SH470によって北側から西側にかけての大部分が削平を被っているため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.3m、短軸5.0mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

明確な支柱穴は検出されなかった。SH472の支柱穴とほぼ同一の位置にあったとも考えられるが、明確ではない。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑も明確ではないが、南壁沿い中央付近にSH472に伴う貯蔵穴が存在しており、これと同一箇所に存在した可能性も考えられる。

壁際溝は、南壁沿いと東壁沿いで検出された。遺存状況の悪い南東隅付近では途切れている。他の建物によって削平を被っている北壁沿いや西壁沿いに壁際溝が存在したかは不明である。

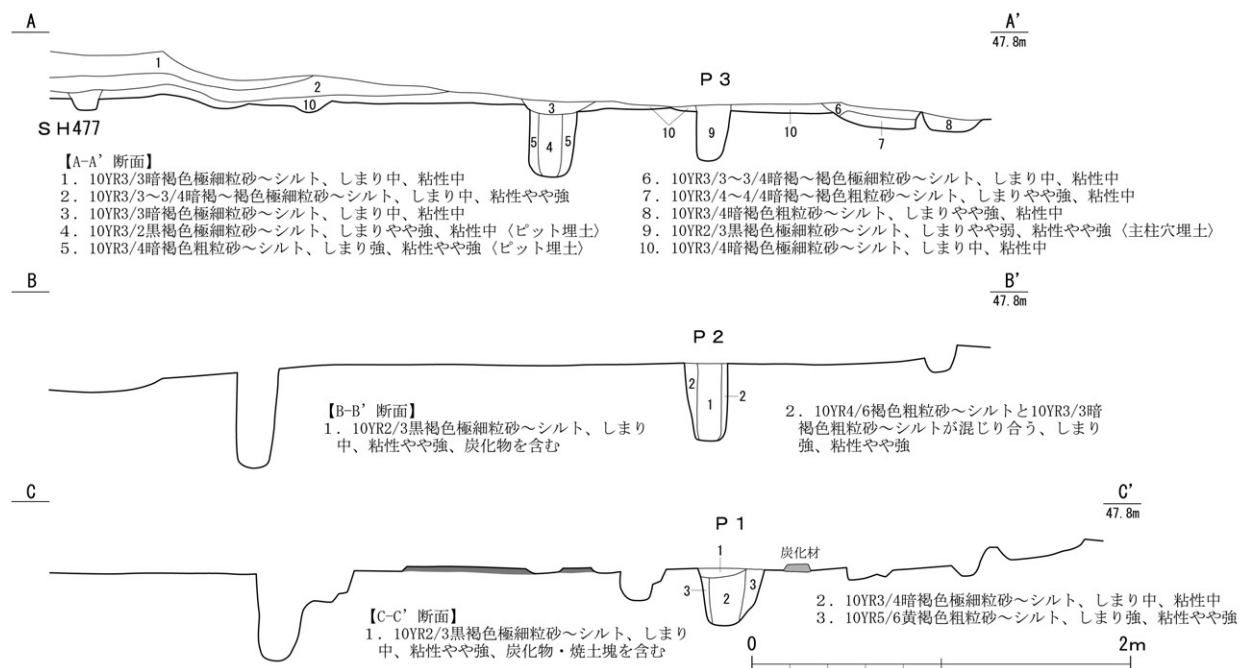
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

この竪穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

SH472との関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉の可能性が高い。

SH476(第121図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH477・493と一部重複しており、これらの建物に先行する。全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸5.1mほど、短軸4.5mのやや長方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。P2では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取



第121図 SH476 (1/40)

り痕が確認できる。また、西側の2基の支柱穴を結ぶライン上に位置するピットでも、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。このピットは土層の堆積状況などからSH476に伴うものか不明であり、削平等により検出できなかった別の建物の支柱穴の可能性も考えられる。

建物の北半部では広く焼土が検出された。いずれも明確な掘り込みなどは伴っておらず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い西側で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.6mほどある。周囲には不整形な浅い落ち込みが認められるが、建物外まで及んでいるものとみられ、貯蔵穴に伴うものとは考えにくい。

壁際溝は、北壁及び東壁沿いで検出された。南東隅付近で途切れ、南壁沿いでは検出されていない。また、遺存状況が悪い西壁沿いでも確認できなかった。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されている可能性がある(A-A'断面第10層)。周溝状掘形は確認できなかった。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、支柱穴P1や埋土から弥生土器・土師器が出土している。

なお、東半部や北西隅付近では、炭化材がかなりまとまって検出されている。東半部では建物中央に向かって並ぶようにも見受けられ、特に建物中央よりやや東側では、数本の細い材が並んで検出されているようである。広い範囲に被熱痕跡が認められることも鑑みると、この建物は焼失建物と考えられる。

出土遺物やSH477・493との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH477 (第122図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH476・493と一部重複しており、これらの建物より後出する。平面形は長軸5.7m、短軸5.7mの正方形を呈する。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央よりやや北側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が楕円形の土坑で、長径0.7mほどある。周囲には不整形な浅い落ち込みが認められるが、貯蔵穴に伴うものかは不明である。

壁際溝は、途切れず全周する。

貼床は、建物内の広い範囲に施されているとみられる(A-A'断面第9層)。壁際溝の底のレベルからみると、建物内部は南北で高低差があるようにも見受けられ、その場合、さらに上層に堆積したしまりが強い土層についても(A-A'断面第6層)、貼床の可能性が考えられる。周溝状掘形は確認できなかったが、土層断面からみると建物内の南半部の掘形がやや深くなっており、その部分では貼床と思われる土層が厚く施されている。建物の中央部から西壁にかけての広い範囲では、硬化した面が認められた。

また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって2本伸びる。2本とも同様の幅・深さであるが、西側の溝の方が若干長い。これらは間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

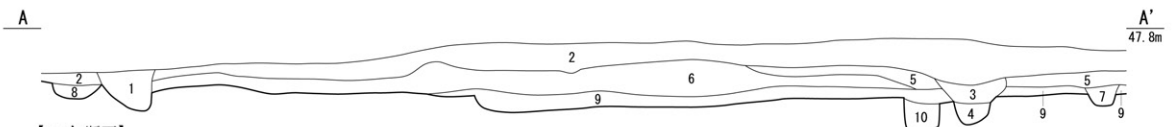
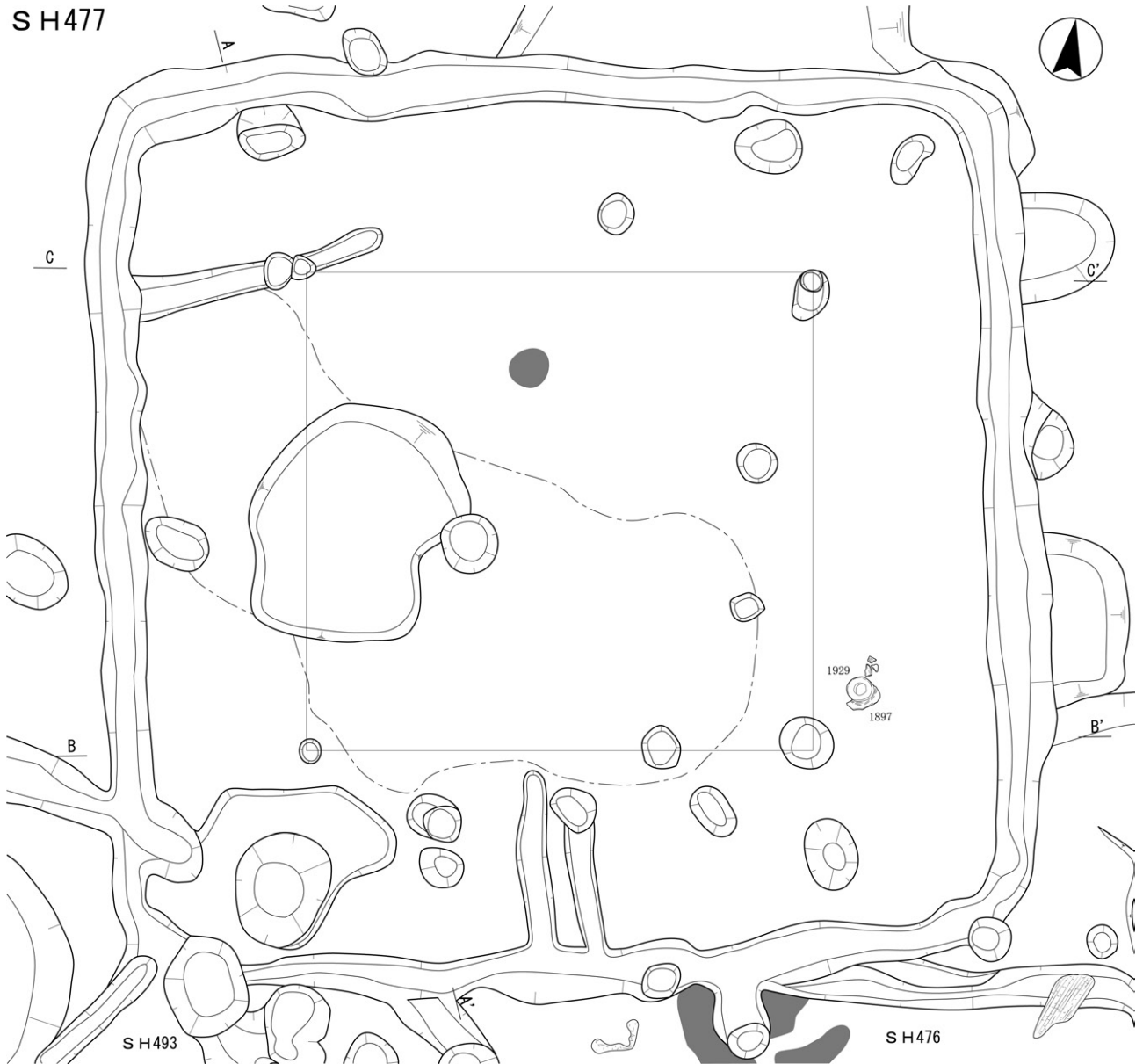
遺物は、南東隅の支柱穴付近から土師器広口壺の上半部(1897)と鉢(1929)が出土した。埋土からも弥生土器・土師器が比較的多く出土している。

出土遺物やSH476・493との新旧関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH478 (第123図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH481・493と重複しており、SH493より後出する。SH481にも後出する可能性が高い。西側はSD494によって削平を被っている。遺存状況が悪いため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.6m、短軸5.4mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

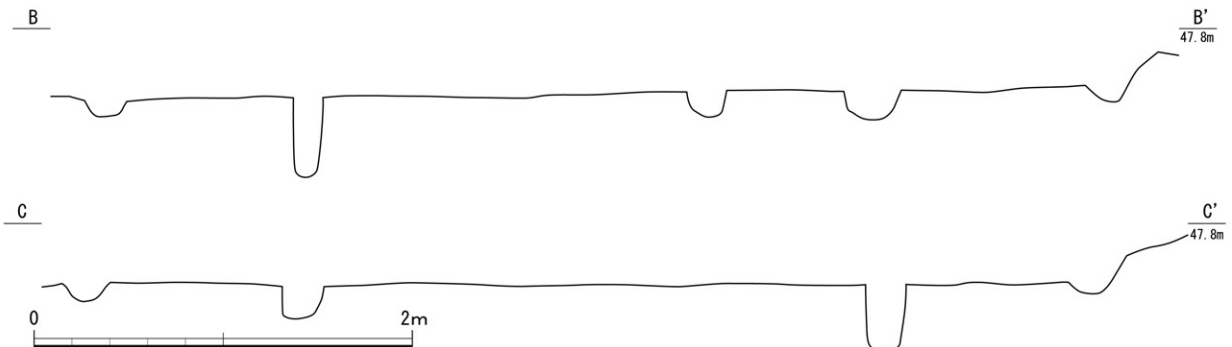
支柱穴は3基検出された。本来は、建物の平面形に沿って方形に配置されていたものと思われる。P4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、その上面に別の土層が堆積しており(B-B'断面第1層)、建物の廃絶に際して柱は抜き取られたか根元から切断された可能性がある。なお、いずれの柱穴でも隣接あるいは重複して別のピットが検出されており、建て替えが行われていたとも考え

S H477



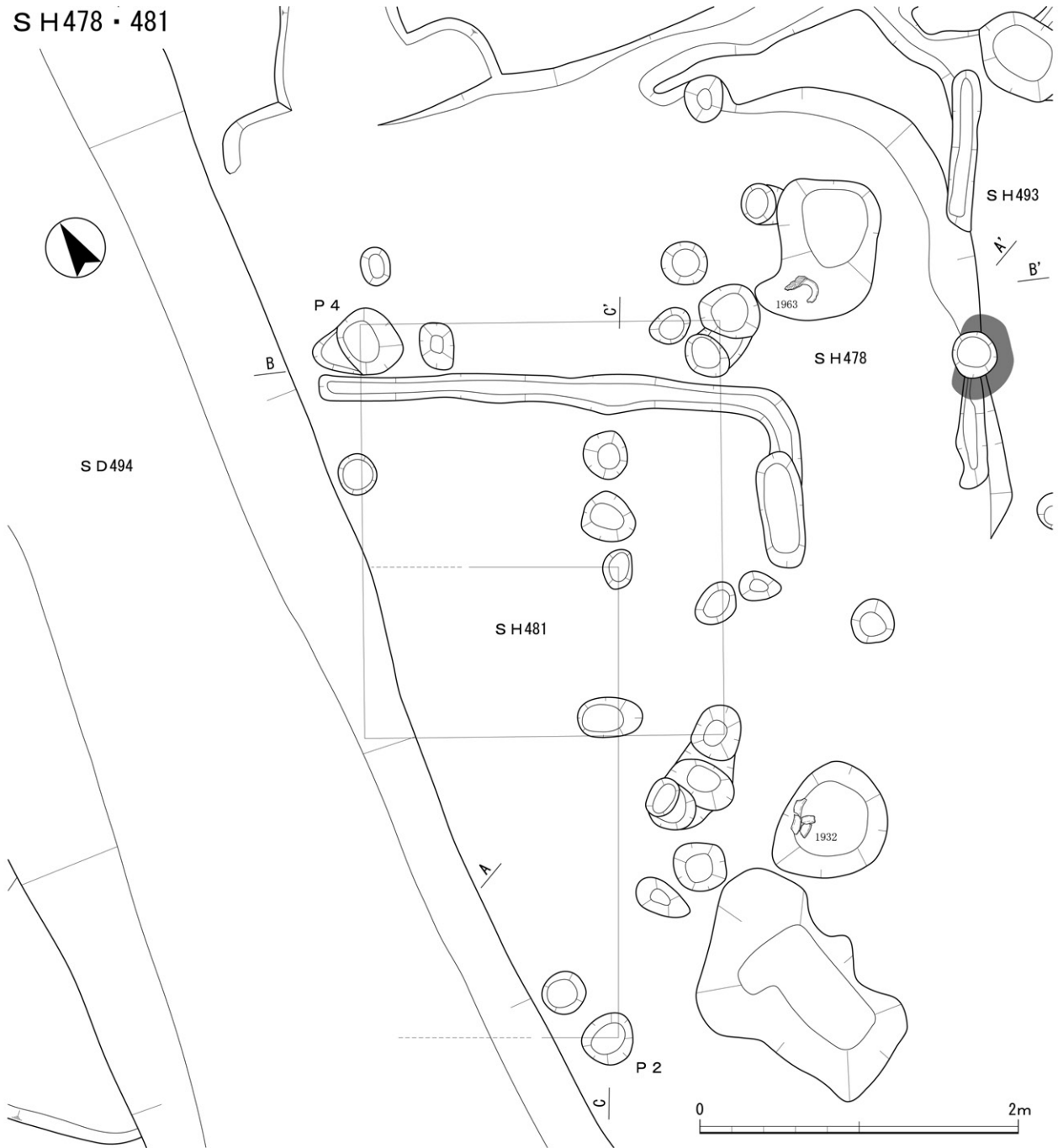
【A-A' 断面】

- | | |
|--|--|
| <p>1. 10YR4/3にふい黄褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性やや弱</p> <p>2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中</p> <p>3. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中</p> <p>4. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトを含む、しまりやや弱、粘性中</p> | <p>5. 10YR3/3～3/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強</p> <p>6. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中</p> <p>7. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強（壁際溝埋土）</p> <p>8. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中（壁際溝埋土）</p> <p>9. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中</p> <p>10. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強</p> |
|--|--|

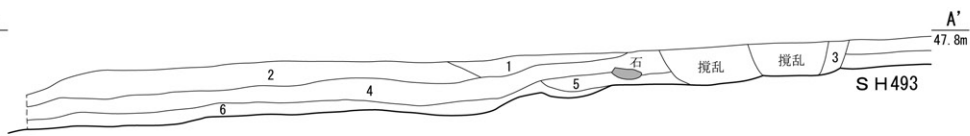


第122図 SH477 (1/40)

S H 478 · 481



A



【B-B' 断面】
 1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 2. 10YR2/2黒色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強

【A-A' 断面】

1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり中、粘性中
3. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトを含む、しまりやや強、粘性中
4. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
5. 10YR2/2黒色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
6. 10YR2/3黒褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

B

P 4 (SH478)



3. 10YR3/3～3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱

C

P 2 (SH481)



【C-C' 断面】

1. 10YR2/3黒褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性弱、礫を含む

られる。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近にあたと推定される箇所検出された。平面形が不整形な円形の土坑で、径0.7mほどある。内部からは弥生土器・土師器甕の破片がまとまって出土した。ただし、この土坑はSH493の南西隅に位置するともみられ、SH493に伴う貯蔵穴とも考えられる。その場合、東隅付近にも平面形が不整形な隅丸方形を呈する土坑が存在しており、これが貯蔵穴の可能性もあろう。ただし、支柱穴に近いなど位置に違和感があり、さらに内部から飛鳥時代の土師器甕の大きな破片(1963)が出土しており、時期的に下る土坑の可能性が高い。このほかに、SD494によって貯蔵穴が完全に削平を被っている場合も想定される。

壁際溝は、明確には検出されなかった。南東壁沿いでわずかに溝状の落ち込みが検出されており、壁際溝の残欠とも考えられる。

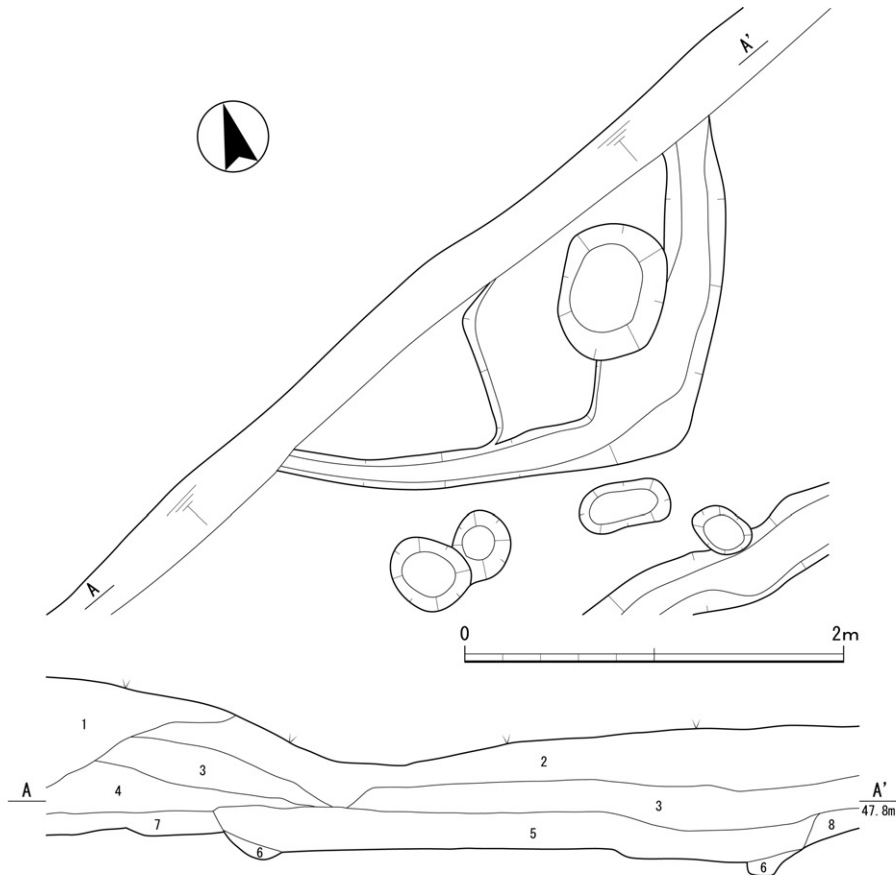
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、貯蔵穴の可能性のある土坑から弥生土器・土師器甕が出土している。また、須恵器壺の口縁部小片も出土した。このほか、埋土からも弥生土器・土師器が出土しているが、やはり古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器や土師器を複数含む。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH479 (第124図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。北側の大部分は調査区外となっており、未調査である。ごく一部しか調査を行っていないため、全体の形状は不明確であるが、平面形は短軸2.5m以上の方角を呈するものと思われる。

SH479



1. 10YR5/6黄褐色極細粒砂、しまり中、粘性やや弱、礫を含む
2. 10YR4/4褐色細～極細粒砂、しまりやや弱、粘性弱
3. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
4. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、礫・土器を含む
5. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

6. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を含む(壁際溝埋土)
7. 10YR3/34～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
8. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中

第124図 SH479 (1/40)

調査範囲が狭いこともあり、明確な支柱穴や炉の痕跡は検出されなかった。

貯蔵穴も明確ではないが、南東隅付近で平面形が楕円形を呈する長径0.7mほどの土坑が検出されている。深さは0.2mほどで、これが貯蔵穴の可能性もある。

壁際溝は、調査を行った範囲では途切れず検出された。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられるが、遺物の出土量がわずかであるため、確定的ではない。

S H480 (第125図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。南側は大きな谷に面しているため傾斜地となっており、かなり流失している。そのため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.1m、短軸4.8mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。やや長方形に配置されており、建物の平面形も本来は長方形に近い可能性もある。

建物中央付近の床面の複数箇所から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴は検出されなかった。

壁際溝は、北西壁沿い及び北東壁沿いで検出された。検出された範囲では途切れていない。流失している南側では壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。建物中央よりやや西側の床面で浅い土坑が検出され、その位置で弥生土器・土師器台付甕の脚台部が出土したが、土層断面からみると、土坑内ではなく、その上層の埋土中からの出土と思われる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

S H481 (第123図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。S H478と重複しており、この建物に先行する可能性が高い。西側はS D494によって大きく削平を被っている。遺存状況が悪いため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.3mほど、短軸3.2m以上の方形を呈するものと思われる。

支柱穴は2基検出された。本来は、建物の平面形に沿って方形に配置されていたものと思われる。P 2では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と思われる土層が確認できる。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は、北東壁沿いで検出された。東隅で屈曲し、若干南東壁沿いへと続いている。削平を被っている西側に壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P 2から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

S H478との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の可能性が高い。

S H482 (第126・127図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。S H484・488と重複しており、これらの建物より後出する。S H488との重複箇所では平面形を明瞭に検出することができず、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸6.9m、短軸6.8mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P 1・3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い西側で検出された。平面形が隅丸方形の土坑で、長軸0.6mほどある。埋土上層には焼土塊が多く含まれていた。

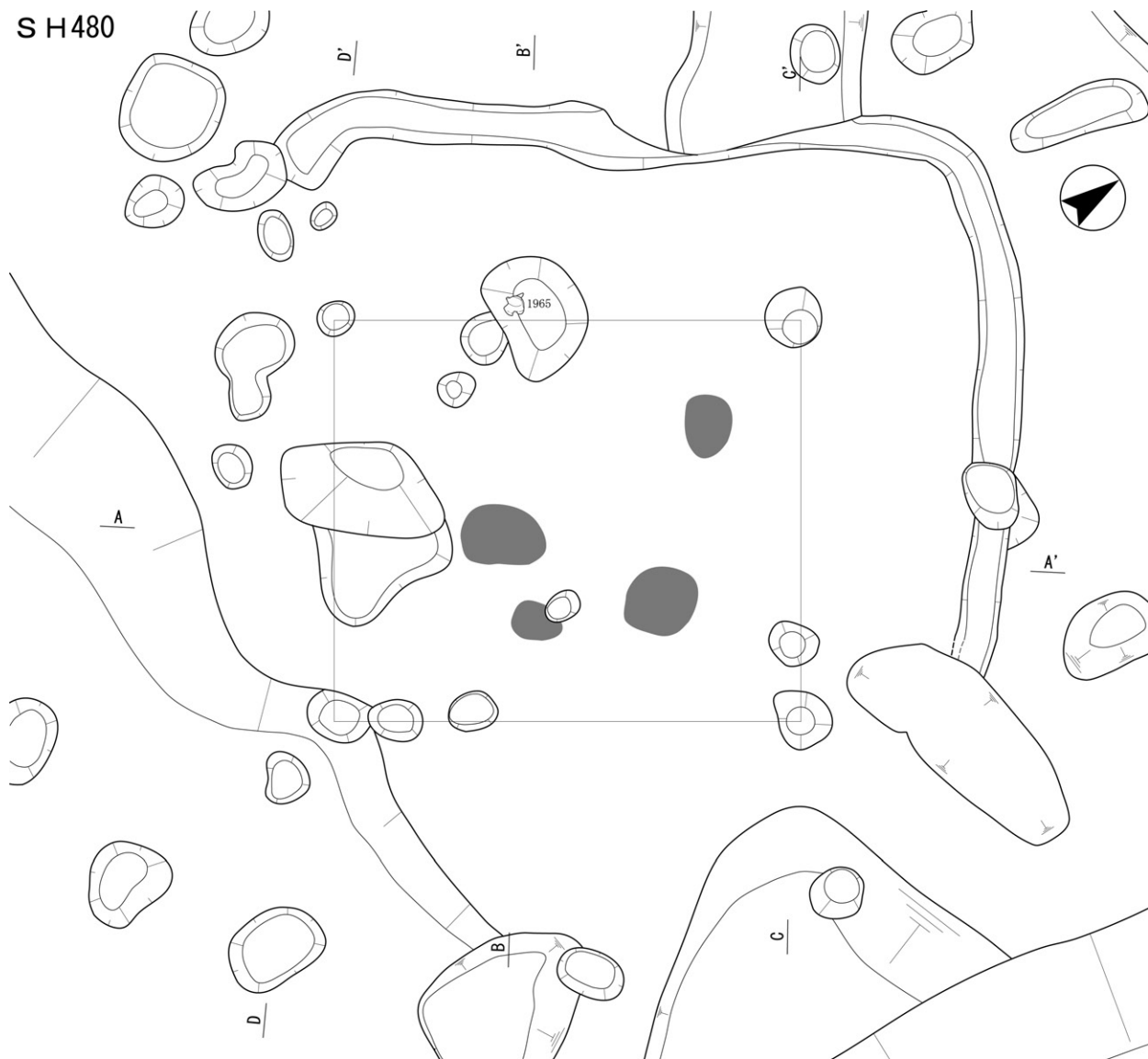
壁際溝は、全周すると思われる。S H488との重複によって明瞭に検出できなかった部分においても、土層断面で壁際溝の存在が確認できる。ただし、北東隅付近では若干途切れる可能性がある。

貼床は、建物内のほぼ全面に施されていたものと思われる(C-C'・D-D'断面第13層)。周溝状掘形は確認できなかった。

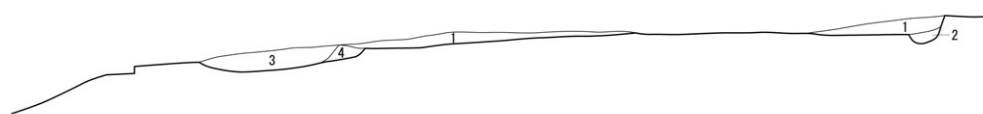
また、南壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、北東隅付近や南西隅付近で弥生土器・土師器の壺が複数個体検出された。瓢形壺や広口壺な

S H480



A A'
47.4m



B B'
47.2m



C C'
47.2m



D D'
47.2m

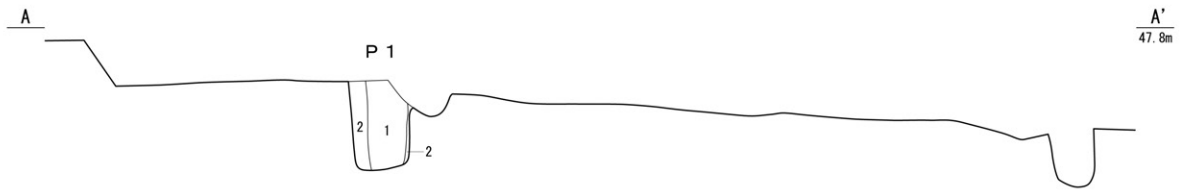
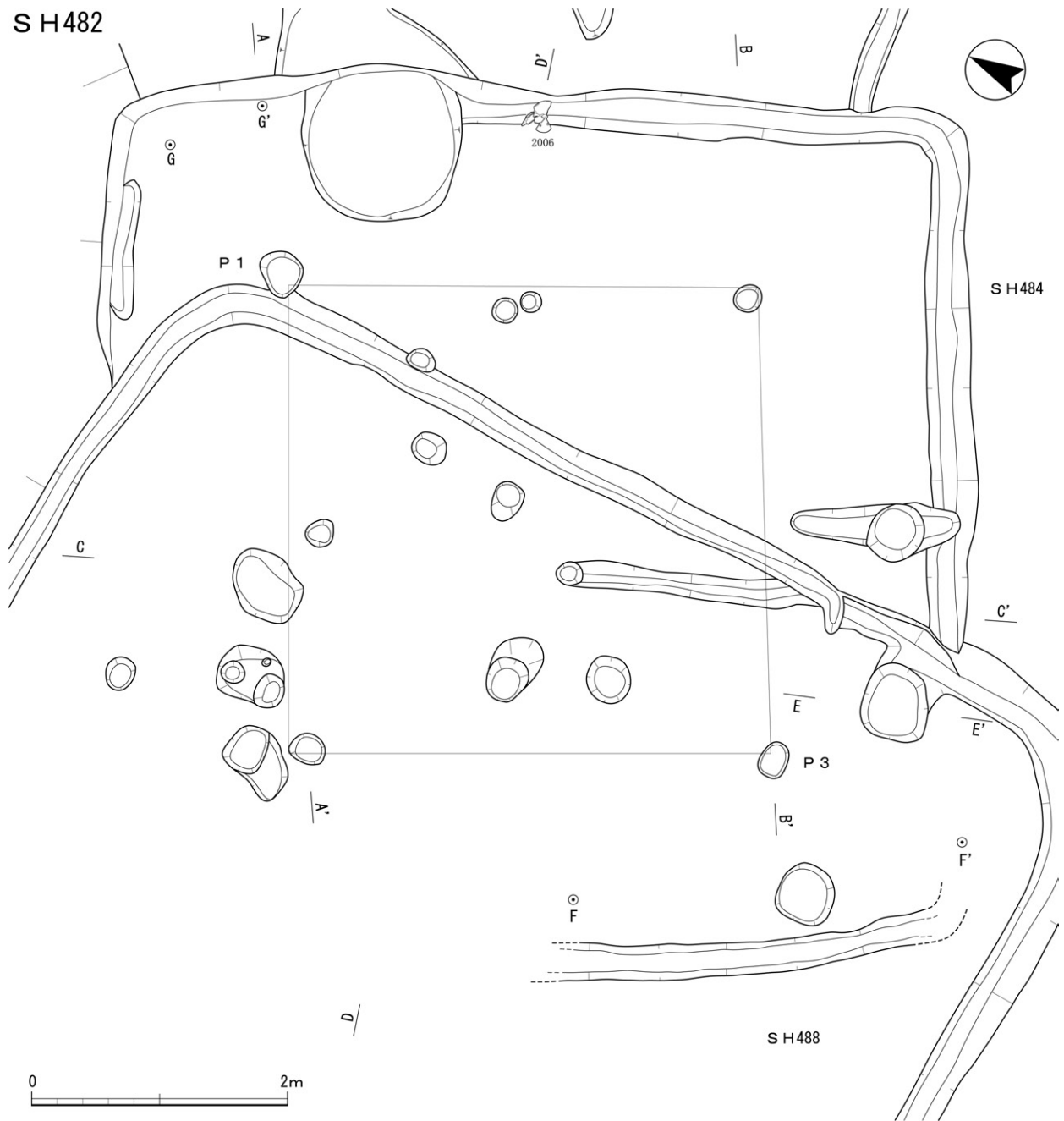


- 【A-A'・B-B'断面】
1. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
 2. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 3. 10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱
 4. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中
 5. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中



第125図 SH480 (1/40)

S H482

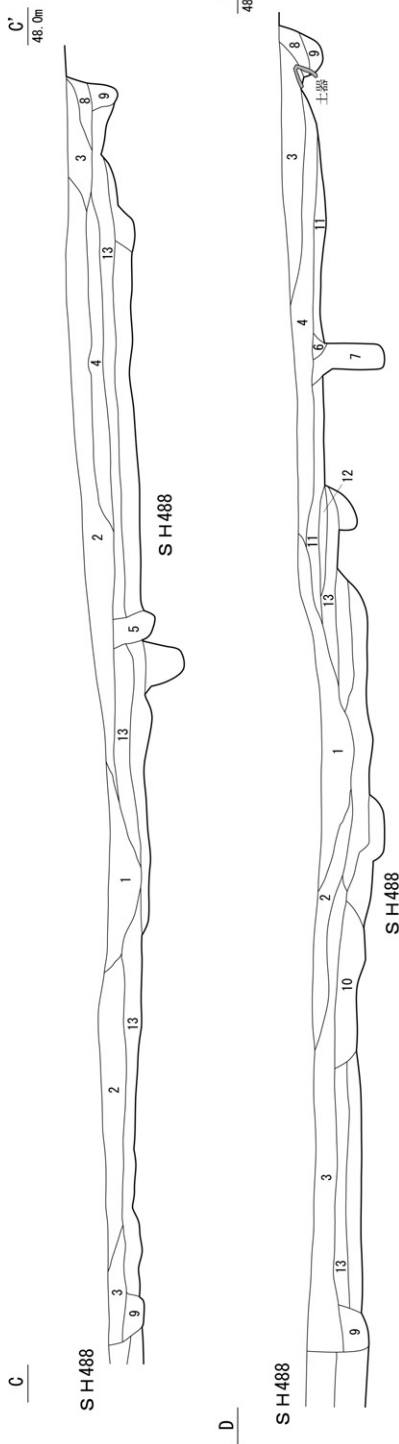


- 【A-A'・B-B'断面】
1. 10YR3/1黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を3%含む
 2. 10YR5/6黄褐色粗粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中



第126図 SH482① (1/50、1/40)

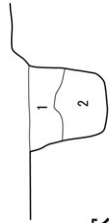
S H 482



【C-C'・D-D' 断面】

1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性中、酸化粒を含む
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
3. 5YR4/6赤褐色極細粒砂～シルト、10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり強、粘性中
4. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルトを含む、しまりやや弱、粘性やや強
5. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
6. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性弱
7. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
8. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
9. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
10. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
11. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
12. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや弱
13. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、10YR4/6褐色粗粒砂～シルトを含む、しまり中、粘性中

貯蔵穴



- 【E-E' 断面】
1. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、焼土塊を7%含む
 2. 10YR5/2暗灰黄色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱



◎ F

1976・1995



1973



1972



1983



1986

石



1984

◎ G



1992

◎ G'

北東隅遺物出土状況



南西隅付近遺物出土状況

第127図 S H 482② (1/40、1/20)

どがあり、遺存状況が良好なものが多い。また、南西隅付近の土器群に伴って径20～30cm程度の粘土塊が2点検出されている。この粘土塊は灰白色ないし黄灰色を呈する良質なもので、土器の製作等と関わるものの可能性が考えられる。東壁沿いでも、壁際溝の上面から完形に近い土師器有稜高坏（2006）が出土した。このほか、埋土から多量の弥生土器・土師器や土製品が出土している。

出土遺物やSH484・488との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

SH484（第128・129図） 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH482・485・488と重複しており、これらの建物に先行する。平面形は長軸9.1m、短軸6.5mの明確な長方形を呈する。かなり大型の建物である。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って長方形に配置されている。柱穴は径0.3～0.4mほどと比較的大きく、深さも0.6mほどある。P1～3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P2・3では柱穴埋土の上層に別の土層の堆積が認められることから（B-B'断面P2第1層、P3第1～4層）、柱は抜き取られた可能性が高い。

建物中央よりやや東側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が方形の土坑で、長軸1.5mほどある。周囲は浅く段状に落ち込んでいる。また、埋土の一部には焼土塊が含まれている。

壁際溝は、SH482・488によって一部削平を被っているものの、全周すると思われる。貯蔵穴と重複する箇所についても、土層断面をみると壁際溝が存在しているようにも見受けられる。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、主柱穴P1・2や貯蔵穴、埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物やSH482・485・488との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉の可能性が高い。

SH485（第130図） 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH484と重複しており、この建物

より後出する。SH484との重複部分については平面形を明瞭に検出することができず、また西側も削平が著しいため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸7.3mほど、短軸7.0mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。ただし、南西壁沿い及び北東壁沿いの壁際溝はやや外側へ向かって延びており、壁のラインは直線的にならない可能性がある。

主柱穴は4基検出された。北隅のP1のみ少し西側へずれた位置にあり、そのため主柱穴の配置はやや不整形な台形となっている。ただし、本来の北隅の主柱穴は別のピットで、SH484の貯蔵穴による削平によって消失したとも考えられる。また、SH484の貯蔵穴の北側肩部に楕円形を呈するピットが存在する。不整形なことなどから調査時にはSH485の主柱穴と考えていなかったが、土層断面をみると柱穴にも似た土層が認められ（第129図C-C'断面第3・4層）、これが本来のSH485の北隅の主柱穴であった可能性もある。その場合、4基の柱穴は、比較的長方形に近い形に配置されていることになる。P2～4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P2では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

遺存している範囲では焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東壁沿い南側で検出された。平面形が不整形な楕円形の土坑で、長径1.0mほどある。中央部は一段深く掘り込まれている。

壁際溝は、建物が遺存している範囲では途切れず連続して検出されている。削平を被っている北側に壁際溝が存在したかは不明である。

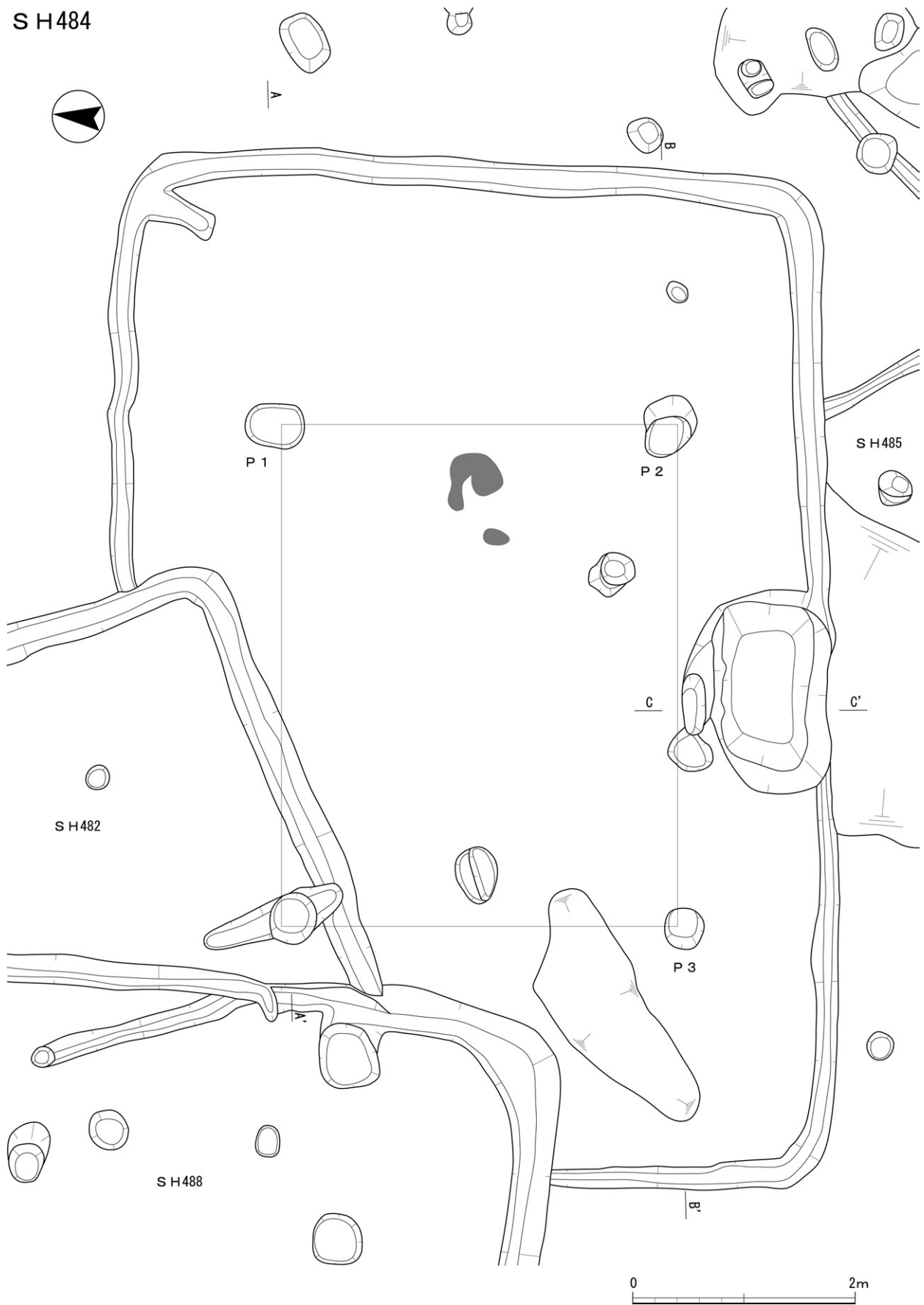
貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、主柱穴P3や埋土から弥生土器・土師器が出土している。

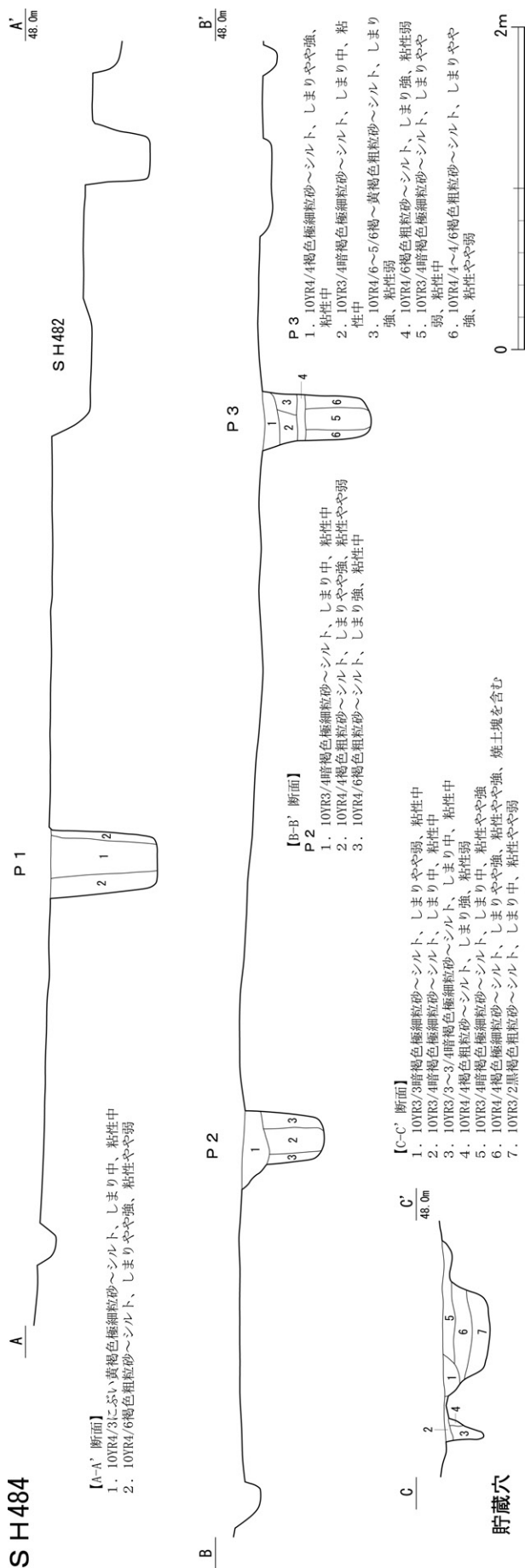
出土遺物やSH484との新旧関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

SH486（第131図） 第4次調査区の西部で検出した建物である。谷の肩部に位置しており斜面に面した北側がかなり流失しているため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸5.1m、短軸4.5mほどのやや長方形を呈するものと思われる。

S H484



第128图 SH484① (1/50)



第129図 SH484② (1/40)

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されている。P2・3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P2ではその上層に別の土層の堆積が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。一部が攪乱を被っているが、平面形が隅丸方形の土坑で、長軸0.8mほどある。

壁際溝は、東壁沿い及び南壁沿いで検出された。流失している西壁沿いや北壁沿いに壁際溝が存在したかは不明である。なお、南壁沿いでは、壁際溝が二重になっているような様子が認められる。建て替えあるいは部分的な補修等が行われている可能性もある。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられるが、遺物の出土量がわずかであるため、確定的ではない。

SH488 (第132～134図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH482・484と重複しており、SH482に先行し、SH484より後出する。平面形は長軸9.4m、短軸8.5mのやや長方形を呈する。かなり大型の建物である。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って長方形に配置されている。柱穴はいずれも径0.4mほどと比較的大きく、深さも0.6mほどある。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P2ではその土層から土器が出土しており、柱は抜き取られた可能性が高い。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

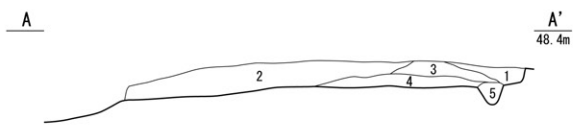
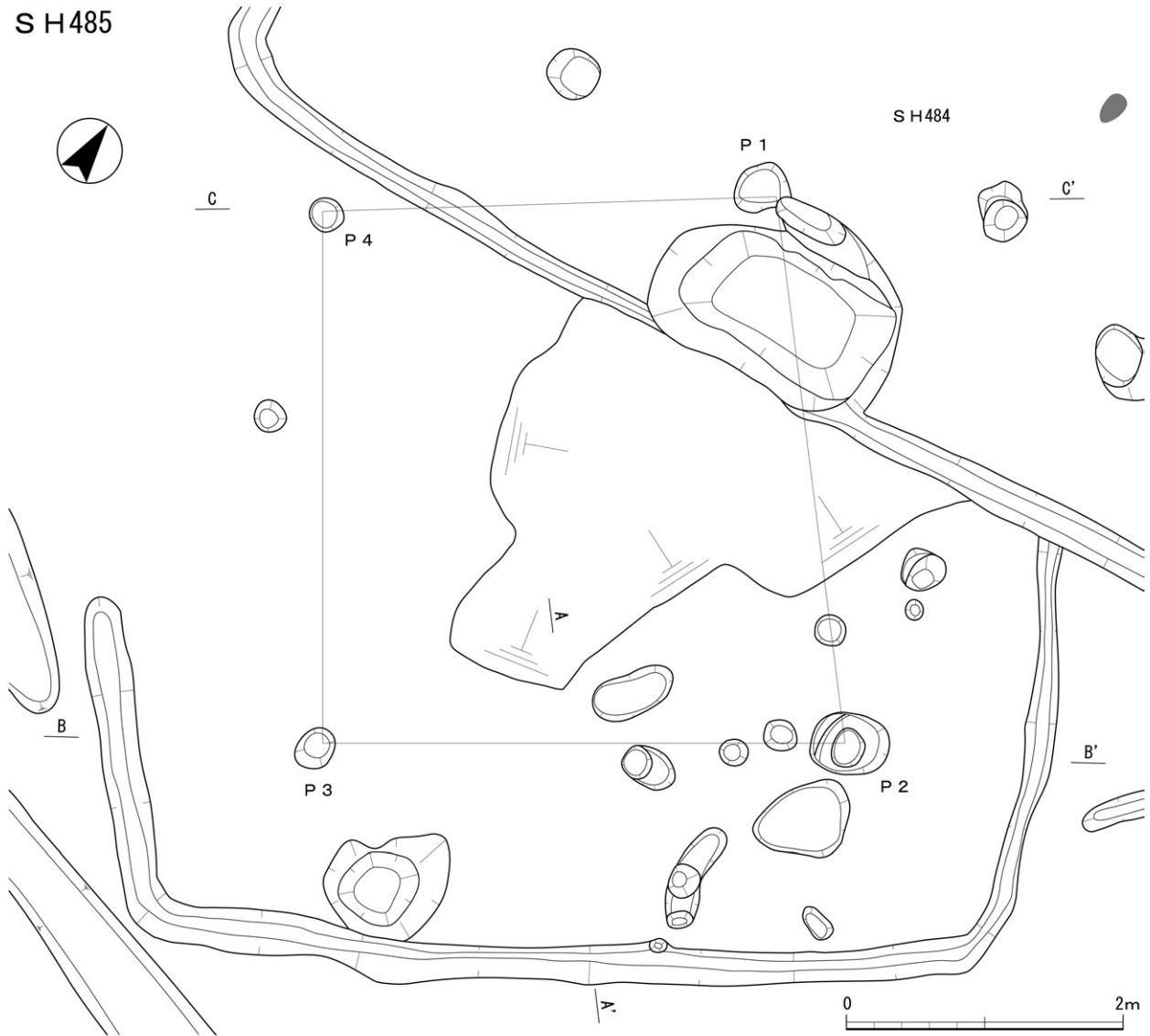
貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が不整形な半円形の土坑で、長軸1.9mほどと、かなり規模が大きい。壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位で外方へ広がり、断面形は漏斗状となる。壁際溝に接して掘り込まれている。

壁際溝は、途切れず全周する。

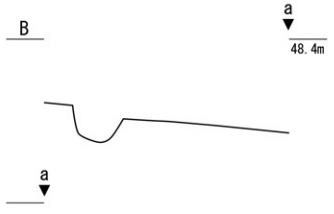
貼床は明確ではないが、部分的に貼床の可能性が

S H485

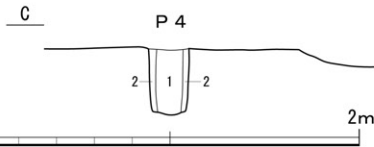
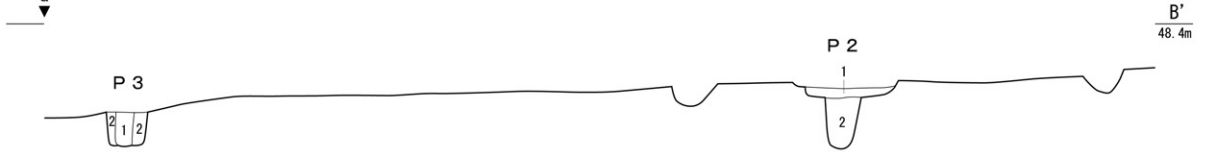
S H484



- 【A-A' 断面】
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
 2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
 3. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 4. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
 5. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強



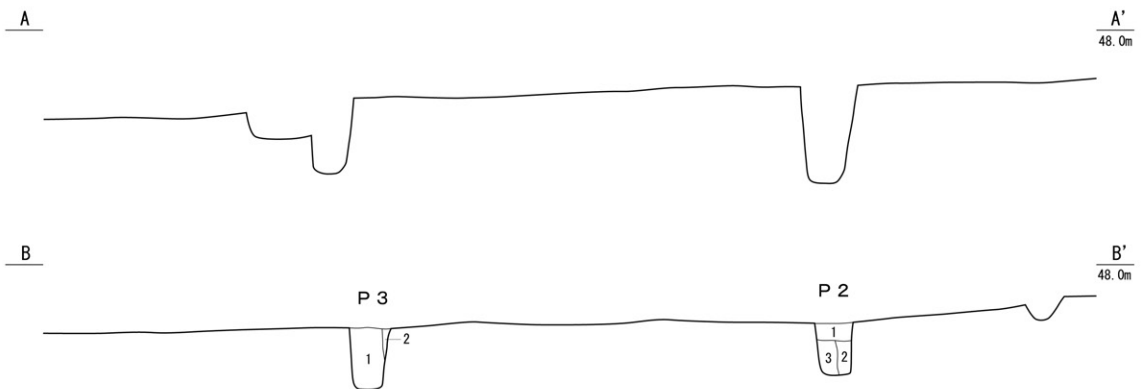
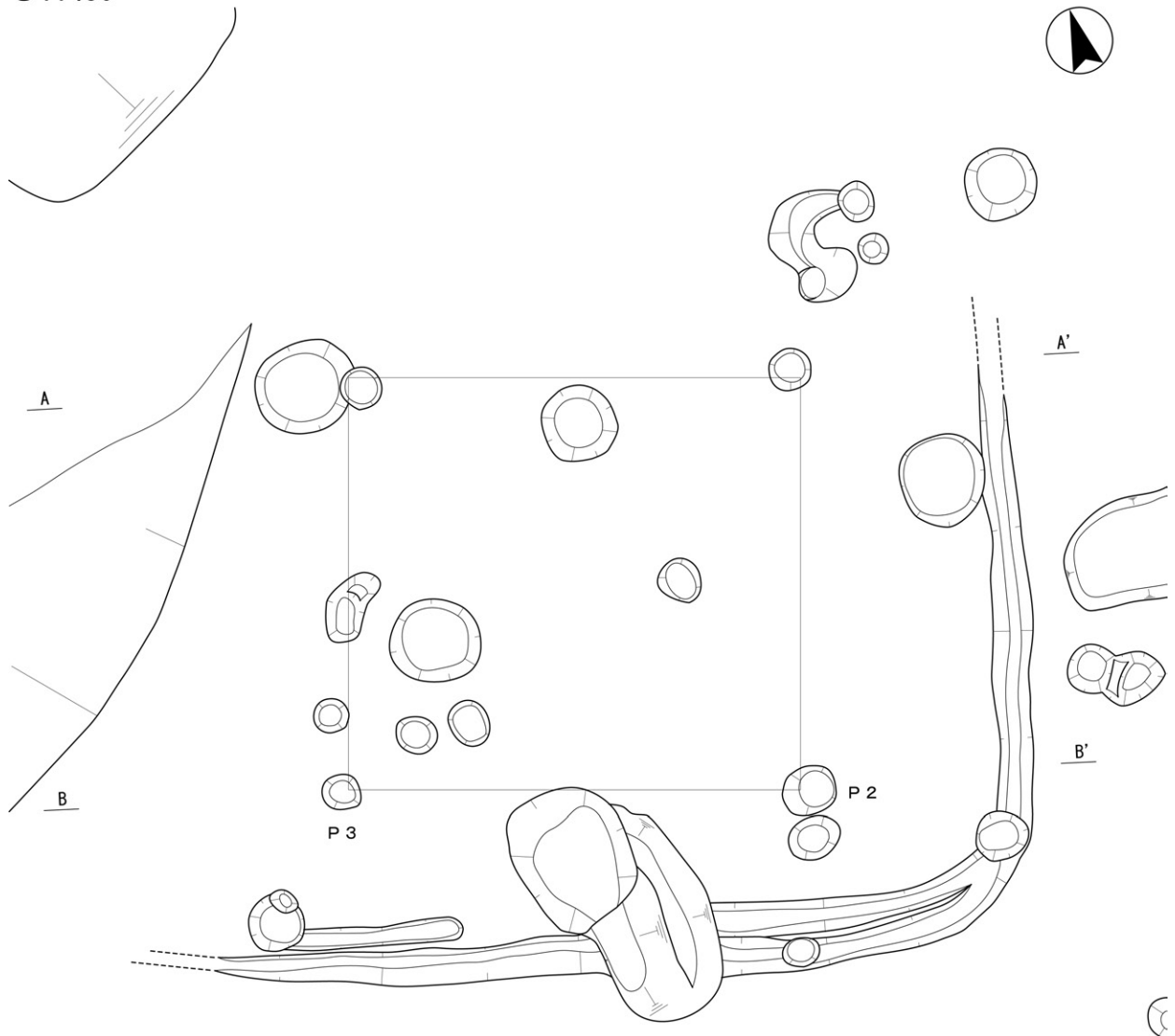
- 【B-B' 断面】
- P 2
1. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト、10YR4/6褐色粗粒砂～シルトを含む、しまりやや強、粘性中
 2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
- P 3
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや弱



- 【C-C' 断面】
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや弱

第130図 S H485 (1/50、1/40)

S H486



【B-B' 断面】

- P 2
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 3. 10YR4/4～4/6褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
- P 3
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
 2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中

第131図 S H486 (1/40)

S H488



第132图 SH488① (1/60)

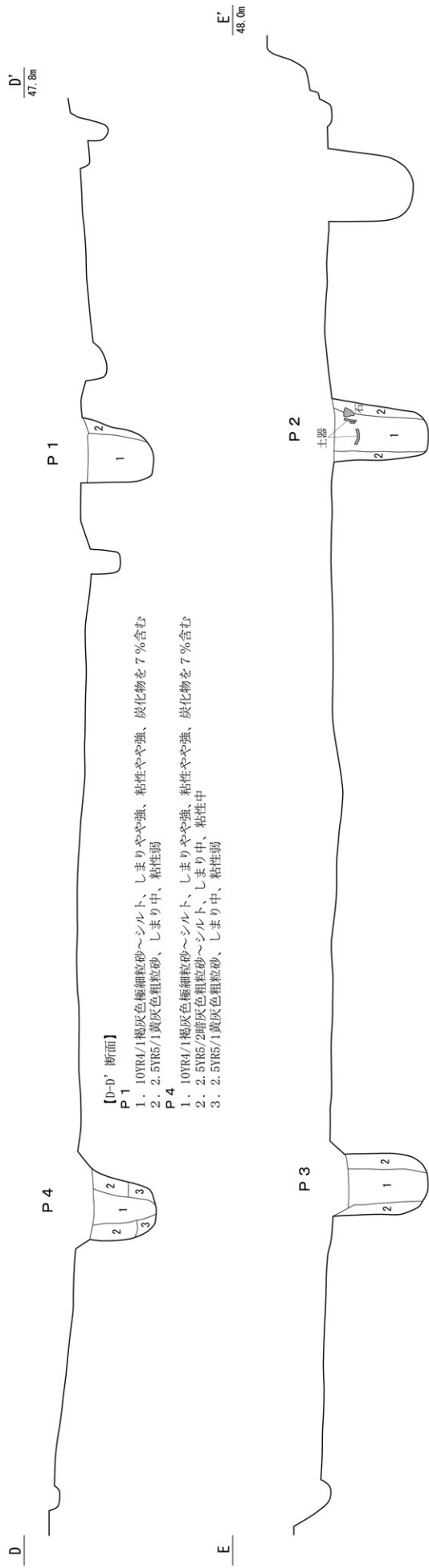
SH488



- 【A-A'・B-B'・C-C' 断面】
1. 10YR4/4褐色極細粒砂、しまりやや弱、粘性やや弱
 2. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂、しまりやや弱、粘性やや弱
 3. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 4. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 5. 10YR4/3にふい黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、酸化粒を含む
 6. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 7. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、焼土塊を含む
 8. 10YR3/3～3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱
 9. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 10. 10YR5/6黄褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性弱
 11. 10YR3/2黒褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱
 12. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 13. 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（實際薄理土）
 15. 土層注記記録なし

第133図 SH488② (1/40)

SH488



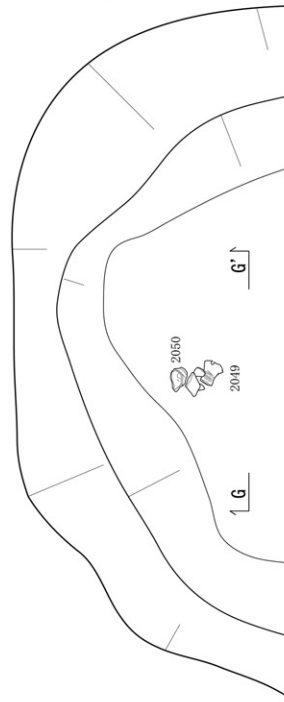
【D-D' 断面】

- P 1**
 1. 10YR4/1褐灰色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、炭化物を7%含む
 2. 2.5YR5/1黄灰色粗粒砂、しまり中、粘性弱
- P 4**
 1. 10YR4/1褐灰色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、炭化物を7%含む
 2. 2.5YR5/2暗灰色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中
 3. 2.5YR5/1黄灰色粗粒砂、しまり中、粘性弱



【E-E' 断面】

1. 10YR4/1褐灰色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、炭化物を7%含む
 2. 2.5YR5/1黄灰色粗粒砂、しまり中、粘性弱



南西部遺物出土状況



貯蔵穴遺物出土状況

第134図 SH488③ (1/40、1/20)

ある土層が認められる（C-C'断面第15層）。周溝状掘形も明確には確認できなかったが、東壁沿いでは掘形がやや深くなっているものとみられる。

遺物は、支柱穴P2や貯蔵穴から弥生土器・土師器が出土した。貯蔵穴からは台石も出土している。南西隅と貯蔵穴の間の床面直上では、弥生土器広口壺（2058）の破片がまとまって検出された。このほか、埋土からも弥生土器・土師器が多量に出土している。

出土遺物やSH482・484との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH489（第135図） 第4次調査区の西部で検出した建物である。SK495と重複しており、SH491ともごくわずかに重複するようにも見受けられるが、新旧関係は不明である。平面形は長軸4.5m、短軸4.0mのやや長方形を呈する。小型の建物である。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って長方形に配置されている。P2～4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央よりやや西側で平面形が隅丸方形を呈する浅い土坑が検出され、周囲に被熱痕跡が認められたことから、これが炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が楕円形の土坑で、長径1.1mほどある。壁際溝と一部重複するように掘り込まれている。

壁際溝は、途切れず全周する。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P4や貯蔵穴から弥生土器・土師器が出土している。また、埋土からも弥生土器・土師器が出土しており、その中には同一個体と考えられる壺の体部片が複数含まれているが、図化はできなかった。

出土遺物やSK495との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SH490（第136図） 第4次調査区の西部で検出した建物である。谷の肩部に位置しており、斜面に面した北側がかなり流失しているなど遺存状況が悪いため、全体の形状は不明であるが、平面形は長軸5.6m、短軸5.4mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P2・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央よりやや西側で平面形が円形を呈する浅い土坑が検出され、周囲に被熱痕跡が認められたことから、これが炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径0.8mほどある。周囲には不整形な浅い落ち込みが認められるが、貯蔵穴に伴うものかは不明である。

壁際溝は、南東壁沿いと南西壁沿いの一部で検出された。流失している北側に壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

また、南東壁の中央付近から細い溝が建物中央に向かって伸びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器が少量出土している。図化したもの以外に、壺や碗形高坏の口縁部片と思われるものなどがある。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH491（第137・138図） 第4次調査区の西部で検出した建物である。一回り小型の堅穴建物であるSH492と完全に重複しており、この建物より後出する。SH492を、建て替えに伴って拡張したものと思われる。谷の肩部に位置しており斜面に面した西壁付近が流失しているため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸6.6mほど、短軸5.7mの長方形を呈するものと思われる。

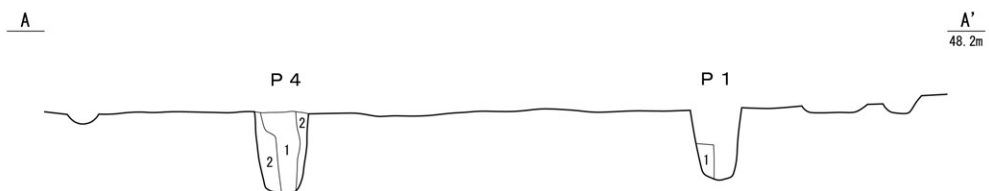
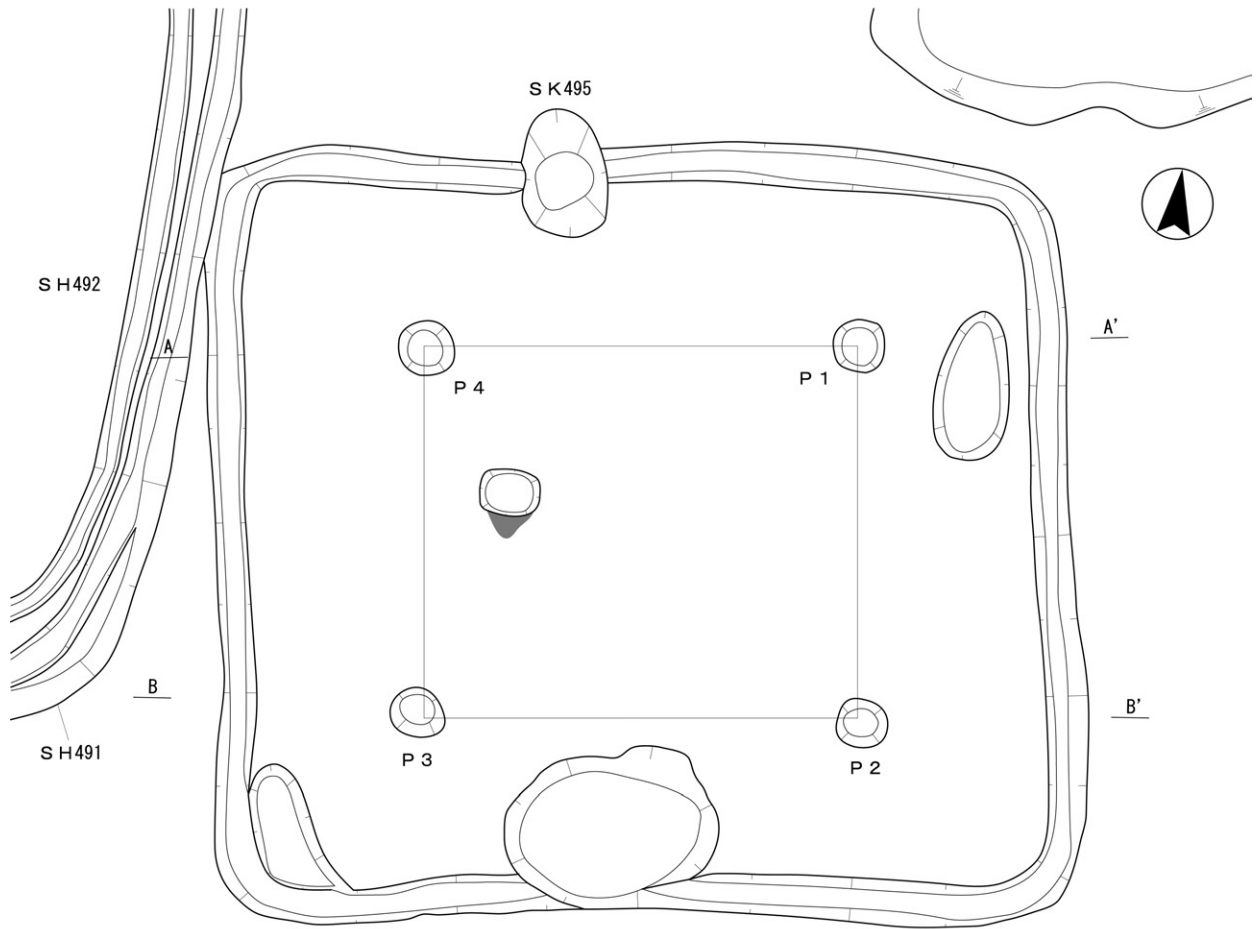
支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されている。P2・4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南壁沿い中央付近で検出された。平面形が円形の土坑で、径1.2mほどある。

壁際溝は、流失している西壁付近では検出されなかったが、ほぼ全周すると思われる。ただし、貯蔵穴付近では一部途切れているようである。また、南東隅付近では、建物掘形よりもやや内側に掘り込ま

S H489



【A-A' 断面】

P 1

1. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中

P 4

1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中



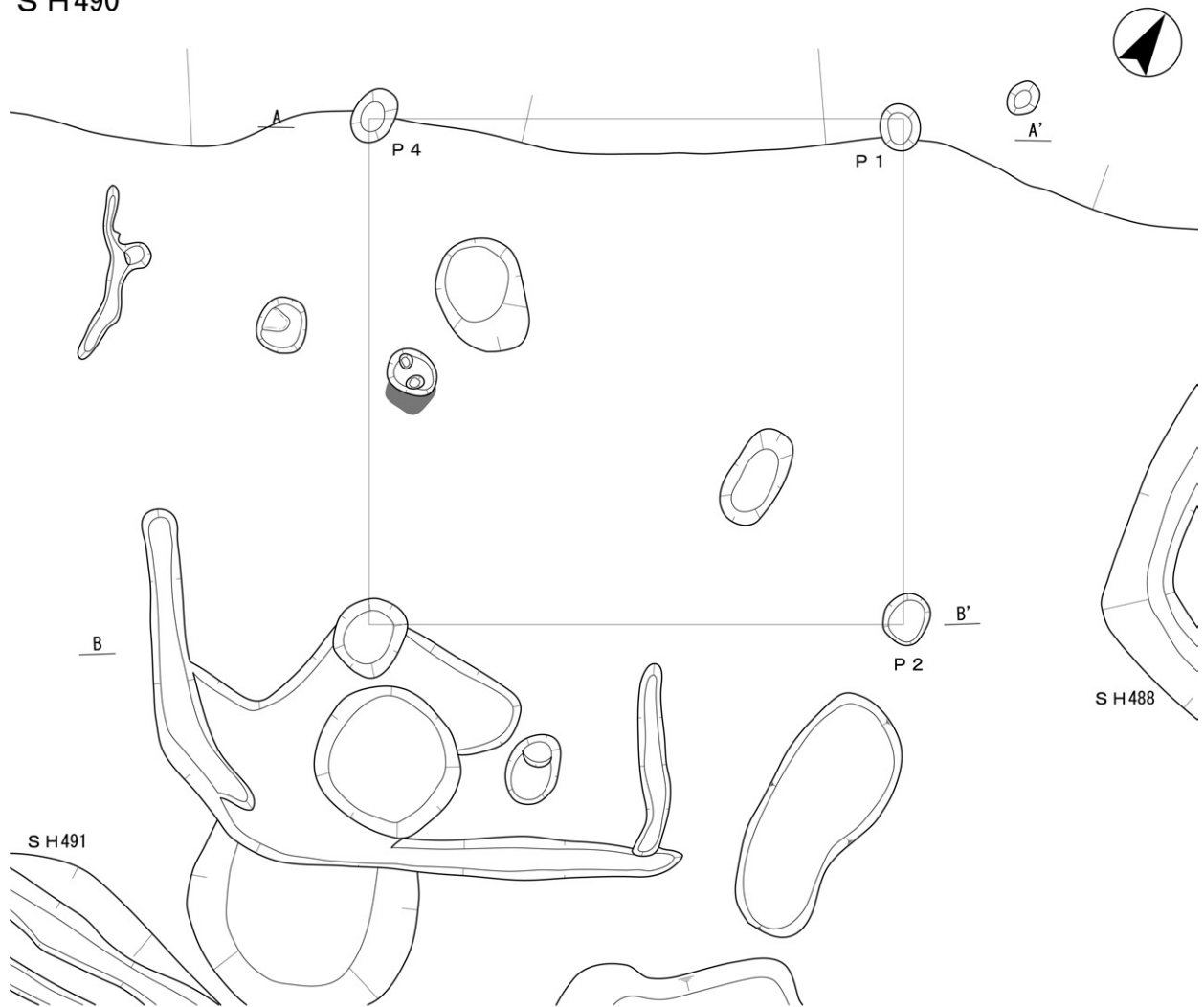
【B-B' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中



第135図 S H489 (1/40)

S H490



【A-A' 断面】

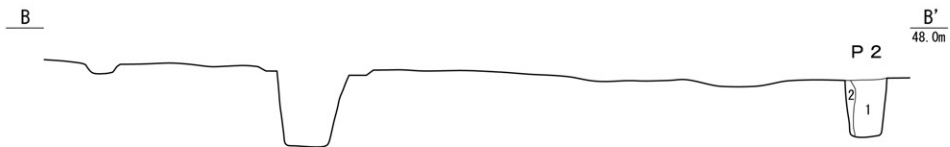
P 1

1. 10YR3/1黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

P 4

1. 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強

2. 10YR5/1褐灰色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中



【B-B' 断面】

1. 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強

2. 10YR5/1褐灰色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中



第136図 S H490 (1/40)

S H491 · 492



第137图 S H491 · 492① (1/40)

SH491・492

A

A' / 48.2m



【A-A'・B-B' 断面】

1. 10VR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10VR5/4にぶい黄褐色細粒砂～シルト、しまり弱、粘性弱
3. 10VR4/1褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10VR5/8黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
5. 7.5VR4/2灰褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、焼土塊を少量含む (SH491貯蔵穴埋土)
6. 10VR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中 (SH491貯蔵穴埋土)
7. 10VR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱 (SH491壁際埋土)

B' / 48.0m



8. 10VR5/1褐灰色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を7%含む (ピット埋土)
9. 10VR5/6黄褐色粗粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱 (SH491貼床)
10. 10VR5/2灰黄褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱 (SH492壁際埋土)
11. 10VR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性やや弱 (ピット埋土)

【C-C' 断面】

- P1 1. 10VR4/2灰黄褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中
- P4 1. 10VR4/1褐灰色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を3%含む
2. 10VR5/6黄褐色粗粒砂～シルト、しまり弱、粘性弱

C' / 48.0m



【D-D' 断面】

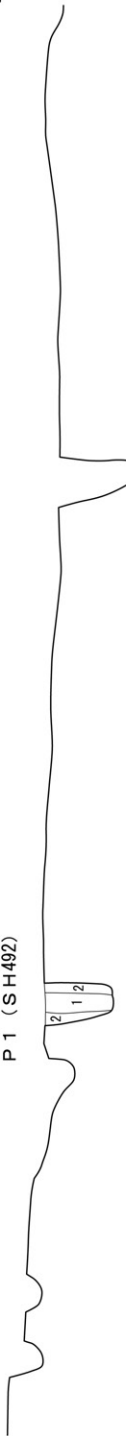
- P2 1. 10VR4/2灰黄褐色粗粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10VR5/6黄褐色粗粒砂～シルト、しまり弱、粘性弱
3. 2.5VR4/3オリーブ褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性弱

D' / 48.2m



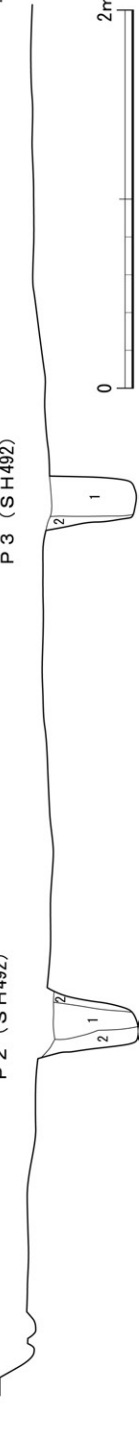
E

E' / 48.0m



F

F' / 48.0m



【E-E'・F-F' 断面】

1. 10VR4/2灰黄褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性弱
2. 10VR5/6黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性弱

第138図 SH491・492② (1/40)

れている。

貼床は部分的に施されている。周溝状掘形は認められなかった。

また、南壁沿いの壁際溝が、南西隅と思われる箇所よりさらに西側へ延びているような様子が窺われる。南西隅より外側にあたる部分では若干南側へ屈曲しており、おそらく排水溝と推定される。谷沿いのやや標高が低くなる方向へ向かって延びるが、その先の第3次調査区では明確に検出されておらず、それほど長くないと思われる。

遺物は、貯蔵穴から弥生土器・土師器が出土している。近江地域からの搬入品の可能性がある弥生土器受口状口縁甕(2159)がみられる。また、埋土からも弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後葉と考えられる。

SH492(第137・138図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH491と完全に重複しており、この建物に先行する。谷の肩部に位置しており斜面に面した西側が一部流失しているため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長軸6.2m、短軸4.9mの長方形を呈するものと思われる。

支柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されている。P1～3では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴も検出されなかったが、SH491の貯蔵穴と同一箇所が存在した可能性が考えられる。

壁際溝は、一部が流失している西壁付近では遺存状況が悪いものの、ほぼ全周すると思われる。ただし、貯蔵穴付近では途切れている可能性があり、また、南壁西側ではSH491の壁際溝と完全に重複しているようである。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

遺物は、支柱穴P1から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物やSH491との関係からみて、遺構の時期は弥生時代後葉と考えられる。

SH493(第139図) 第4次調査区の西部で検出した建物である。SH476・477・478・481と重複して

おり、SH477・478・481に先行する。SH476よりは後出すると思われる。全体的に削平を被っており遺存状況が悪いため、全体の形状は不明であるが、平面形は長軸5.6m、短軸5.4mほどの正方形に近い方形を呈するものと推定される。

支柱穴は4基検出された。ほぼ正方形に配置されているが、南東隅のP2はやや南側にずれており、整然と並ばない。P2では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央付近で平面形が円形を呈する浅いピットが検出され、周囲に被熱が認められることから炉とも考えられるが、この建物に伴うものか不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は明確には検出されていないが、東壁沿いの南側にあたる位置で検出された平面形が不整形な隅丸方形を呈する土坑などが、貯蔵穴とも考えられる。また、SH478に伴う貯蔵穴とした土坑も、位置的にはSH493の南西隅付近にあり、これがSH493の貯蔵穴である可能性も残る。

壁際溝は、北壁沿い及び東壁沿いの一部で検出された。遺存状況が悪いため断続的に確認されたのみである。削平を被っている西壁沿いや南壁沿いに壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

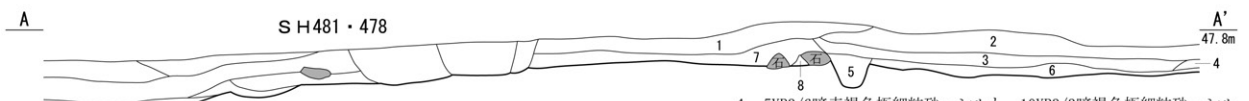
遺物は、支柱穴P2から弥生土器・土師器が少量出土している。有稜高坏の坏部片とみられるものがあるが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物やSH476・477・478などとの新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH496(第88図) 第4次調査区の中央部で検出した建物である。調査段階では認識されていなかったが、整理段階で重複するSH434とは別に壁際溝とそれに対応する支柱穴が存在することが判明し、堅穴建物として把握した。SH434とほぼ完全に重複しており、この建物に先行するため、SH434はSH496の建て替えに伴って拡張されたものである可能性が高い。一部のみしか検出されていないため、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸4.9m、短軸4.3mほどのやや長方形を呈するものと思われる。

支柱穴は2基検出された。北東隅の支柱穴はSH

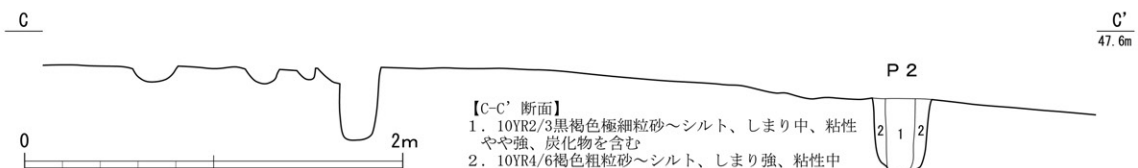
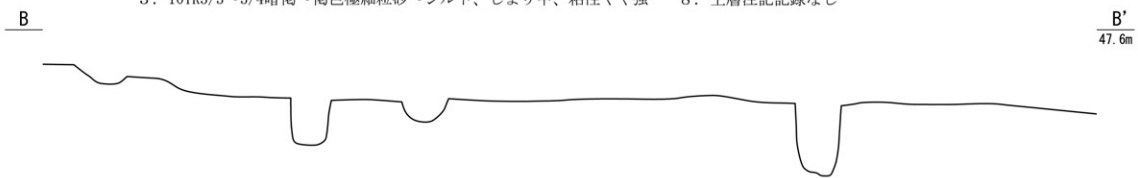
S H493



【A-A' 断面】

1. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂、10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり中、粘性やや弱
2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR3/3～3/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強

4. 5YR3/6暗赤褐色極細粒砂～シルト、10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトを含む、しまり強、粘性やや強
5. 10YR3/4暗褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
6. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
7. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
8. 土層注記記録なし



【C-C' 断面】

1. 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を含む
2. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性中

第139図 SH493 (1/40)

434の支柱穴と重複している。南西隅の支柱穴は検出されていないが、他の支柱穴の位置から推測するとSH430・431の壁際溝が交錯する箇所に位置するため、検出が困難であった可能性がある。したがって、支柱穴は建物の平面形に沿ってやや長方形に配置されていたと考えられる。

焼土などは検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は明確には確認されていないが、南壁沿いのやや西側で平面形が円形の土坑が検出されている。径0.4m、深さは0.3mほどあり、これが貯蔵穴の可能性はある。

壁際溝は、東壁沿いと南壁沿いの一部で検出された。ほぼ全周していたとも思われるが、削平によって失われた西壁沿いや、SH434の壁際溝と重複する北壁沿いに壁際溝が存在したかは不明である。

貼床や周溝状掘形は確認できなかった。

この竪穴建物に伴う遺物は出土しなかった。

SH434との関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

(2) 段状遺構

S Z 254 (第141図) 第2次調査区の東部で検出した段状遺構と思われるものである。大部分が調査区外となっており未調査のため、全体の形状などは不明である。方形の土坑とも思われるが、斜面の肩部に位置しており、また土坑としては床面がかなり平坦に整形されているため、段状遺構とした。長さ2.8m、幅0.7m以上である。

床面には薄く整地土と思われる土層が認められる(第5層)。竪穴建物の貼床にも似るが、規模がかなり小さいため、竪穴建物とは考えにくい。内部からはピットが数基検出されているが、明確に柱穴と認識できるものはない。

また、整地土を除くと埋土はほぼ1層で、地山に由来すると思われるブロック土を多く含むため、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は、埋土や埋土上層に堆積した包含層とされる土層(第3層)から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期の可能性が高いが、出土遺物がわずかで

あるため、確定的ではない。

S Z 282 (第140図) 第2次調査区の西部で検出した段状遺構である。斜面に位置しており、斜面と並行して緩やかな弧を描く幅0.5mほどの溝を掘り込み、斜面下方にあたる南側に長さ6.0m、幅2.5mほどのやや平坦な面を確保する。溝の西端は攪乱によって削平を被っている。溝内からは、多量の礫が検出されているが、組み合わせたり意図的に配置した痕跡は認められない。

平坦面は完全に平坦ではなく、緩やかに傾斜する。内部からはピットが数基検出されているが、明確に柱穴と認識できるものはない。ただ、この段状遺構との関連は不明確であるものの、鉄製の鉈などを出土したSK280が存在している。また、時期不明の土坑SK279も検出されている。

この段状遺構に伴う遺物は出土しなかった。

そのため、遺構の時期は不明であるが、SK280との位置関係を考慮すれば、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構の可能性も考えられる。

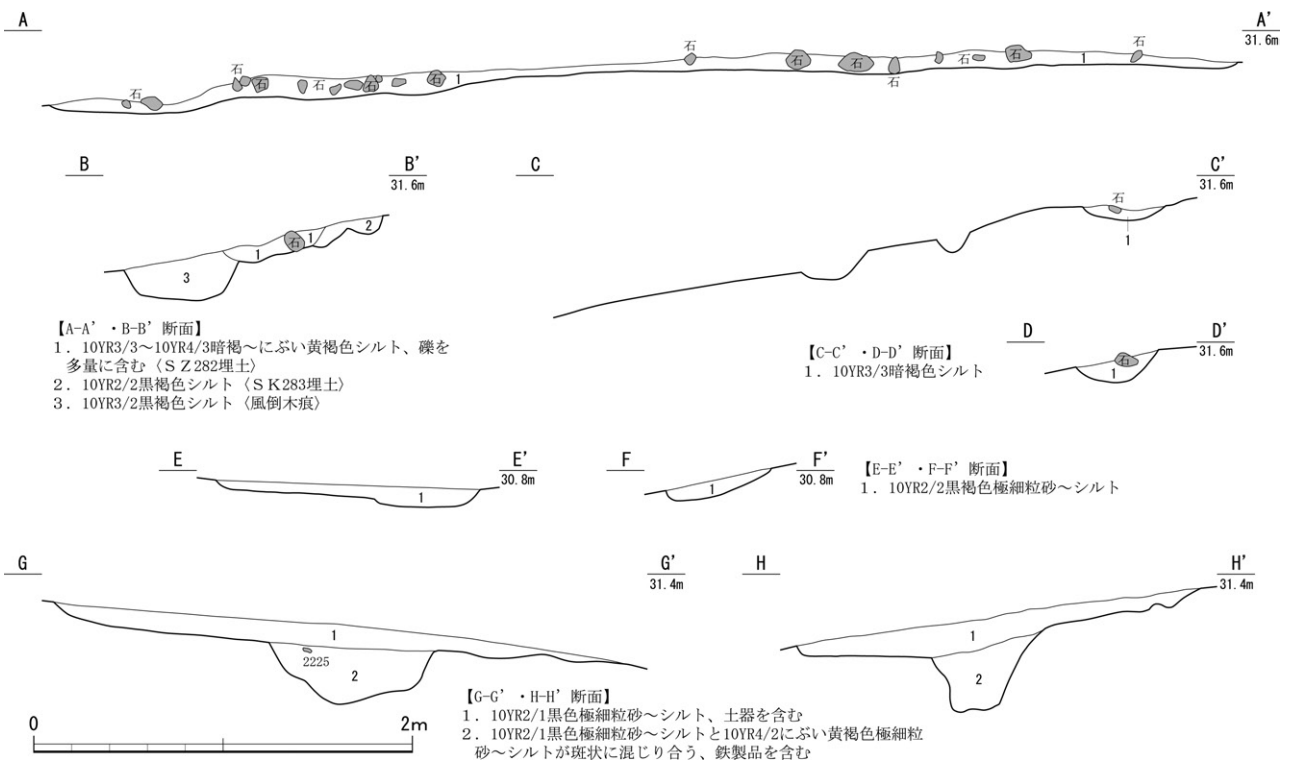
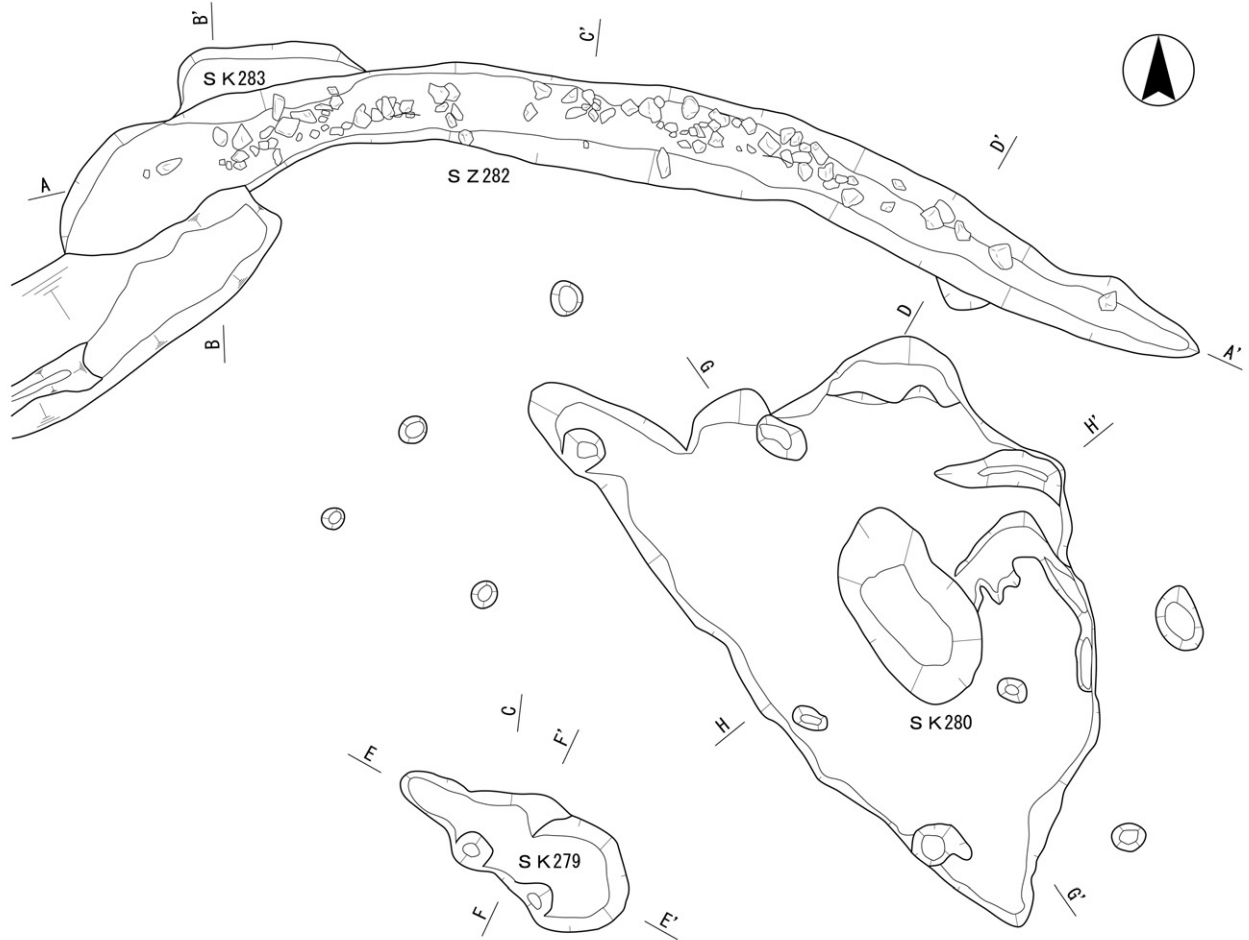
S Z 304 (第54・55図) 第3次調査区の西部で検出した段状遺構である。SH305・306と一部重複しているが、新旧関係は不明である。斜面に位置しており、斜面と並行するように幅0.6～0.8mほどの溝を掘り込み、溝の両端は斜面下方に向かってL字状に屈曲させており、全体の形状はコ字状を呈する。溝で画された中に、南側に長さ8.0m、幅2.0m以上の細長い平坦面を確保しようとしたものと思われる。溝は断面が明瞭に皿状を呈しており、斜面をカットするというよりは、明らかに溝として掘り込まれている。また、土層断面からみると、埋没後に再掘削が行われた可能性がある(B-B'断面第1層)。

平坦面と推定される部分は、わずかに斜面が緩やかになっているのみである。SH305・306との重複もあり、元々明瞭な平坦面を造り出していたかは不明である。

内部からピットなどは検出されていないが、SH305・306の肩部で検出されているピットについては、SZ304に伴うものと考えられるかもしれない。

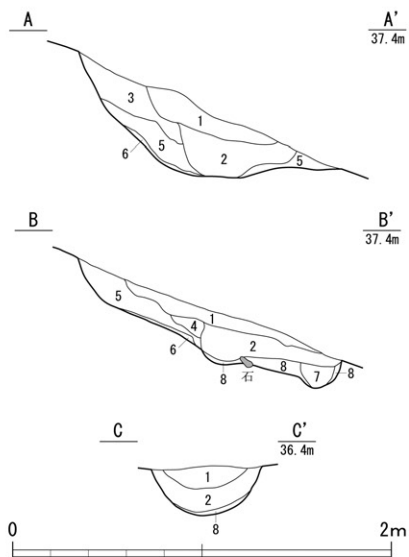
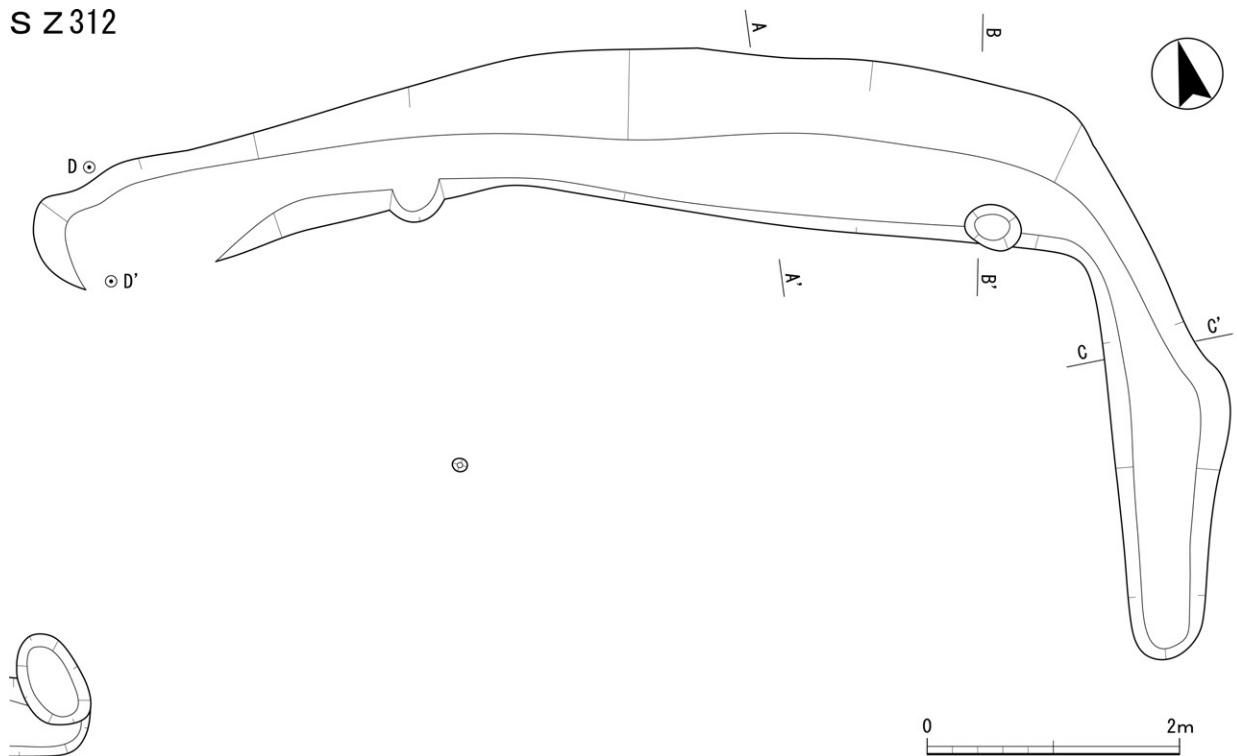
なお、遺構の形態からみて方形周溝墓ないしは方墳とも考えられるが、斜面に立地する点や、溝に再掘削が推定される点などから、その可能性は低いと

S Z 282、S K 279・280・283



第140図 S Z 282、S K 279・280・283 (1/40)

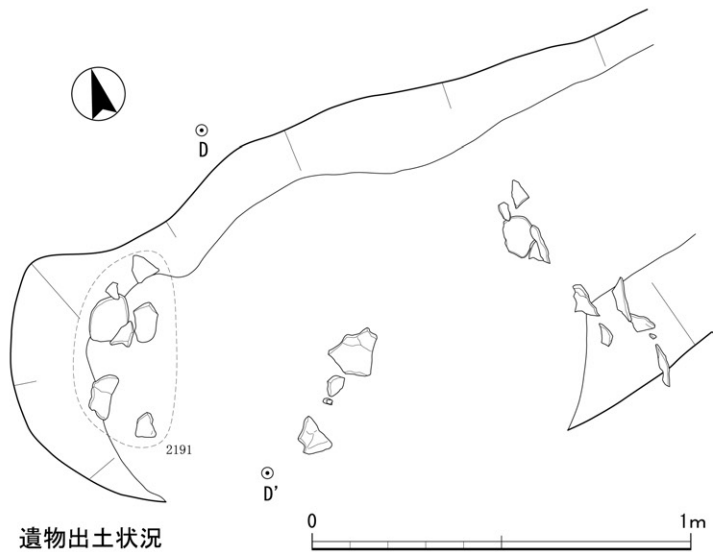
S Z 312



【A-A'・B-B'・C-C' 断面】

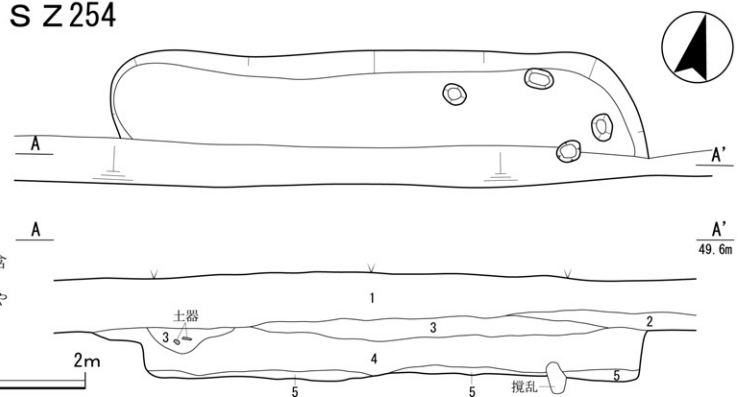
1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト
2. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、地山ブロックを多量に含む
3. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～シルト
4. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～シルト
5. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト、地山ブロックを含む
6. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト
7. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト
8. 10YR5/6黄褐色極細粒砂～シルト

1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、粘性弱（表土）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粘性やや弱（表土）
3. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト、粘性やや強、土器を含む（包含層）
4. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、地山ブロックを多く含む、粘性やや強
5. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粘性やや強



遺物出土状況

S Z 254



第141図 S Z 254・312 (1/40、1/60、1/20)

思われる。

遺物は、溝の埋土から弥生土器・土師器が出土している。全形が復元できる土師器広口壺（2186）もあるが、これは溝と重複する円形の土坑付近から出土しており、土器埋設土坑の可能性もある。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S Z 312（第141図） 第3次調査区の西部で検出した段状遺構である。かなり急な斜面に位置しており、斜面と並行して幅1.2mほどの幅広の溝を掘り込み、溝の東端は斜面下方に向かってL字状に屈曲させている。溝で画された中に、長さ7.2m、幅3.6mほどの細長い平坦面を確保しようとしたものと思われる。土層断面からみると、この溝は一度埋没した後に、再掘削が行われている可能性が高い（A-A'・B-B'断面第1・2層）。また、溝の西端部では、土師器壺（2191）の破片がまとまって出土している。

現状では、土砂の流出などのためか平坦面がほとんど認められないが、わずかに斜面が緩やかになっている。内部からは小型のピットが1基検出されたのみで、こうした点も、土砂の流出等によって平坦面が失われた可能性を示している。

なお、遺構の形態からみて方形周溝墓ないしは方墳とも考えられるが、深く掘り込まれるはずの墓壙が全く遺存していない点や、急斜面に立地する点、溝に再掘削の痕跡が認められる点から、その可能性は低いと思われる。

遺物は、溝の埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S Z 313（第57図） 第3次調査区の西部で検出した段状遺構と思われるものである。SH314と一部重複しており、この建物に先行する。大部分が調査区外となっており未調査であるのに加えて、SH314や攪乱によって南北両側が削平を被っているため、全体の形状などは不明である。竪穴建物あるいは方形の土坑とも思われるが、壁際溝が確認できず掘形が不整形な点からは竪穴建物とは考えにくく、また斜面に位置しており、床面がやや平坦に整形されている点などを考慮して、段状遺構とした。長さ2.9

m以上、幅1.0m以上である。

壁面には、急な角度で立ち上がる部分と、緩やかに傾斜する部分が認められる。床面は比較的平坦となる。内部からピットなどは検出されなかった。

この段状遺構に伴う遺物は出土しなかった。

SH314との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉の可能性が高いが、それ以前に遡る可能性も考えられる。

S Z 326（第142図） 第3次調査区の西部で検出した段状遺構である。SH324やSX325と一部重複しているが、新旧関係は不明である。斜面に位置しており、斜面と並行するように幅0.5～0.7mほどの溝を掘り込み、溝の両端は斜面下方に向かってL字状に屈曲させており、全体の形状はコ字状を呈する。斜面と並行する部分の溝は、中央付近で途切れている。溝で画された中に、南側に長さ9.0m、幅4.8mほどの細長い平坦面を確保しようとしたものと思われる。ただし、この溝は深さ0.2mほどと浅く、大きく斜面をカットしている状況は認めがたい。

平坦面と推定される部分も、わずかに斜面が緩やかになっているのみである。大規模な土砂の流出も想定しがたいため¹¹⁾、元々明瞭な平坦面は造成されていなかったものとみられる。

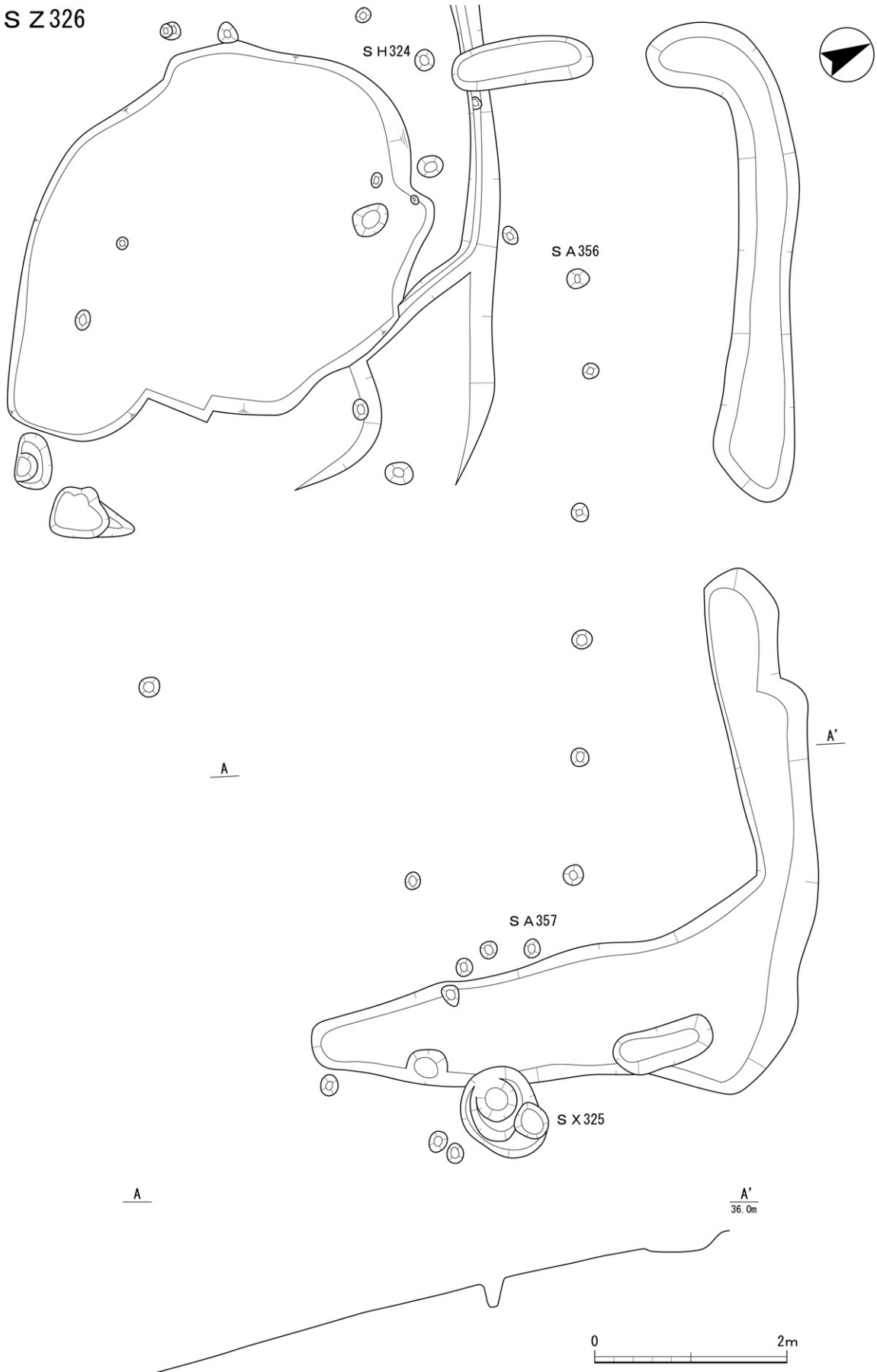
内部には柱列SA356が存在しており、主軸方向がSZ326の主軸方向と一致することから何らかの関連性も窺われる。ただし、同様の柱列SA357はSZ326の内外にまたがって構築されており、时期的にも下ると考えられる点を踏まえれば、SA356もSZ326より時期が下り、直接的な関係はない可能性の方が高いと思われる。SA356・357のほかにもわずかにピットが検出されているが、明確に柱穴と認識できるものはない。

なお、遺構の形態からみて方形周溝墓ないしは方墳とも考えられるが、SZ312と同様に、深く掘り込まれるはずの墓壙が全く遺存していない点や、急斜面に立地する点、そして溝が浅い点などから、その可能性は低いと思われる。

遺物は、溝の埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

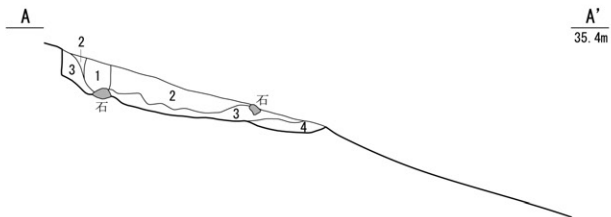
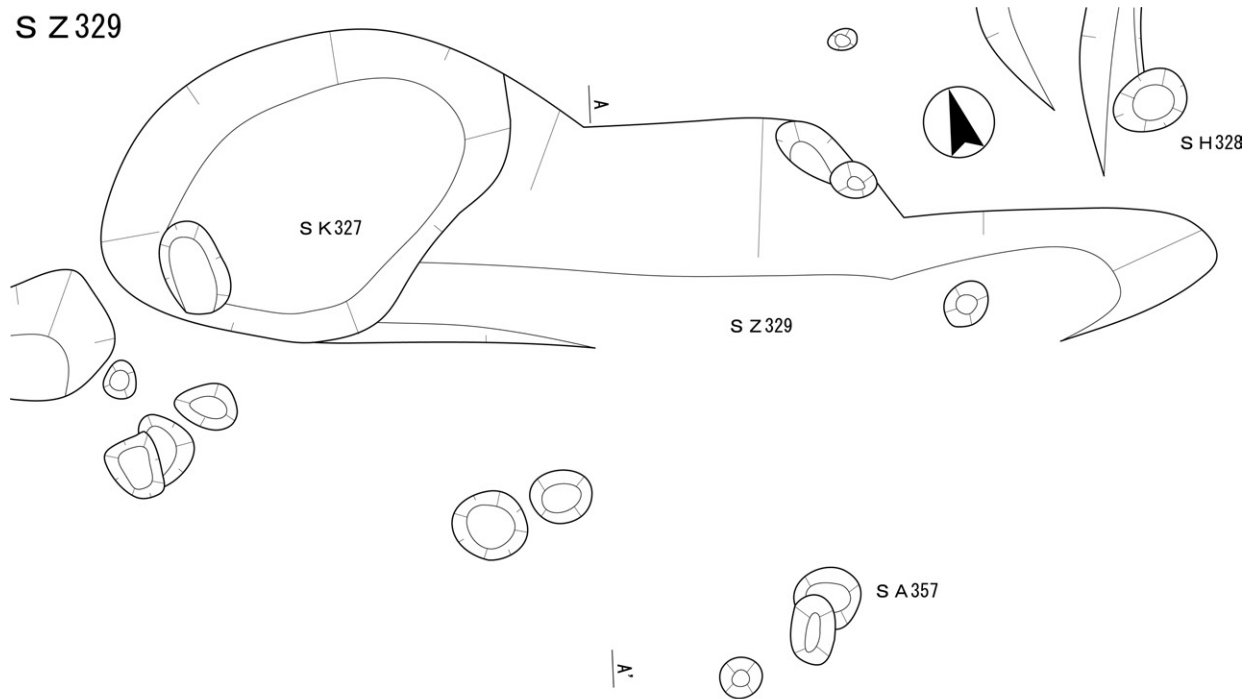
出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期

S Z 326



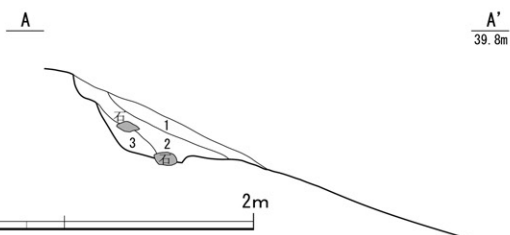
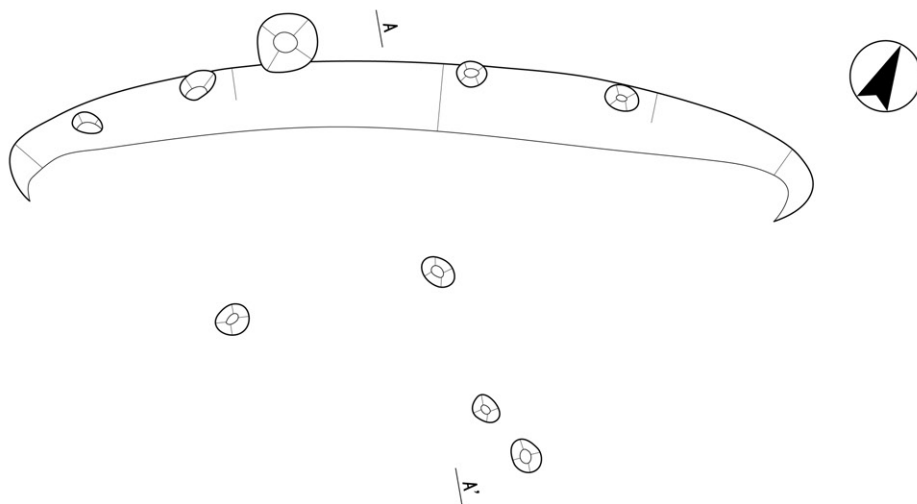
第142図 S Z 326 (1/60)

S Z 329



1. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂〜シルト (ビット埋土?)
2. 10YR4/4褐色細粒砂〜シルト、礫を少量含む
3. 2.5YR4/3オリーブ褐色細粒砂〜シルト、礫を多量に含む
4. 2.5Y5/3黄褐色粗粒砂〜シルト、しまり弱

S Z 331



1. 10YR3/3暗褐色粗粒砂〜シルト
2. 10YR3/1黒褐色極細粒砂〜シルト
3. 10YR3/3暗褐色細粒砂〜シルト

第143図 S Z 329・331 (1/40)

～古墳時代前期初頭と考えられる。

S Z 329 (第143図) 第3次調査区の中央部で検出した段状遺構である。斜面に位置しており、長さ5.8 mほどにわたって、斜面と並行するように幅広の溝状の掘り込みが認められる。溝状部分の底面は、1.2 mほどの幅でやや平坦になっている。どちらかといえば、狭い平坦面を造成することに主眼があったものと思われる。西端は、奈良時代の土坑 S K 327によって削平を被っている。

斜面下方にあたる溝状部分より南側には、明瞭な平坦面は認められず、緩やかな斜面となっている。その部分には時期が下ると考えられる S A 357の一部の柱穴が存在しており、その遺存状況などからみて、元々明確な平坦面は造成されていなかった可能性が高い。

遺物は、溝状部分の埋土から弥生土器・土師器が出土している。また、同一個体とみられる飛鳥～奈良時代と考えられる土師器甕の破片も複数出土した。重複する S K 327に伴うものとも思われるが、出土位置等は不明である。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期と考えられるが、飛鳥時代以降に下る可能性もあり、確定的ではない。

S Z 331 (第143図) 第3次調査区の中央部で検出した段状遺構である。斜面に位置しており、長さ4.2 mほどにわたって、斜面をカットするように幅広の溝状の掘り込みが認められる。ただし、南側の肩部は不明瞭で、溝というよりも単なる斜面のカットに近い。また、肩部には数基のピットが存在するが、いずれも小型の浅いもので、S Z 331に伴うものか不明である。

斜面下方にあたる溝状部分より南側には、明瞭な平坦面は認められず、緩やかな斜面となっている。その部分からは数基のピットが検出されているが、明確に柱穴と認識できるものはない。

遺物は、溝状部分の埋土から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられるが、遺物の出土量がわずかであるため、確定的ではない。

S Z 335 (第144図) 第3次調査区の西部で検出し

た段状遺構である。斜面に位置しており、長さ4.5 m、幅1.6mほどの、平面形が不整形な楕円形を呈する浅い土坑状の掘り込みが認められる。段状遺構ではなく土坑とした方が良いかもしれないが、底面は緩やかに傾斜するものの平らに整形されており、狭い平坦面を造成することが意識されていたとも考えられるため、段状遺構とした。

内部には径1.0mほどの土坑と数基のピットが認められるが、S Z 335との関連は不明である。また、南側の肩部に重複して2基のピットが認められ、S Z 335と関係するものの可能性も考えられるが、確実ではない。

この段状遺構に伴う遺物は出土しなかった。

そのため、遺構の時期は不明であるが、ほかの段状遺構と同じく、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構の可能性も考えられる。

S Z 344 (第145図) 第3次調査区の西部で検出した段状遺構である。斜面に位置しており、長さ3.0 mほどの斜面をカットするような掘り込みによって、幅1.0mほどの平坦面が造り出されている。掘り込みの東端部はやや屈曲しており、全体的にL字状を呈する。西側は次第に掘り込みが不明瞭になり、流失しているものと思われる。

平坦面からはピット等の明瞭な遺構は検出されなかった。東端の屈曲部の延長上には2基のピットが存在するが、S Z 344と関係するものかは不明である。掘り込み自体が小規模なうえに、このように関連するピット等の遺構が確認できなかった点からは、人為的な遺構ではない可能性も考えられる¹²⁾。

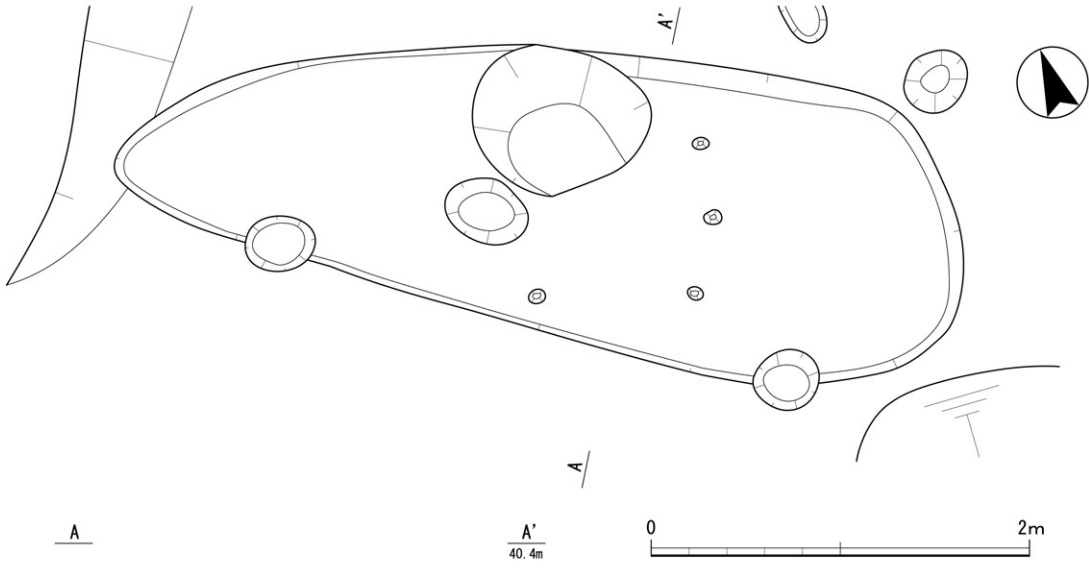
遺物は、埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

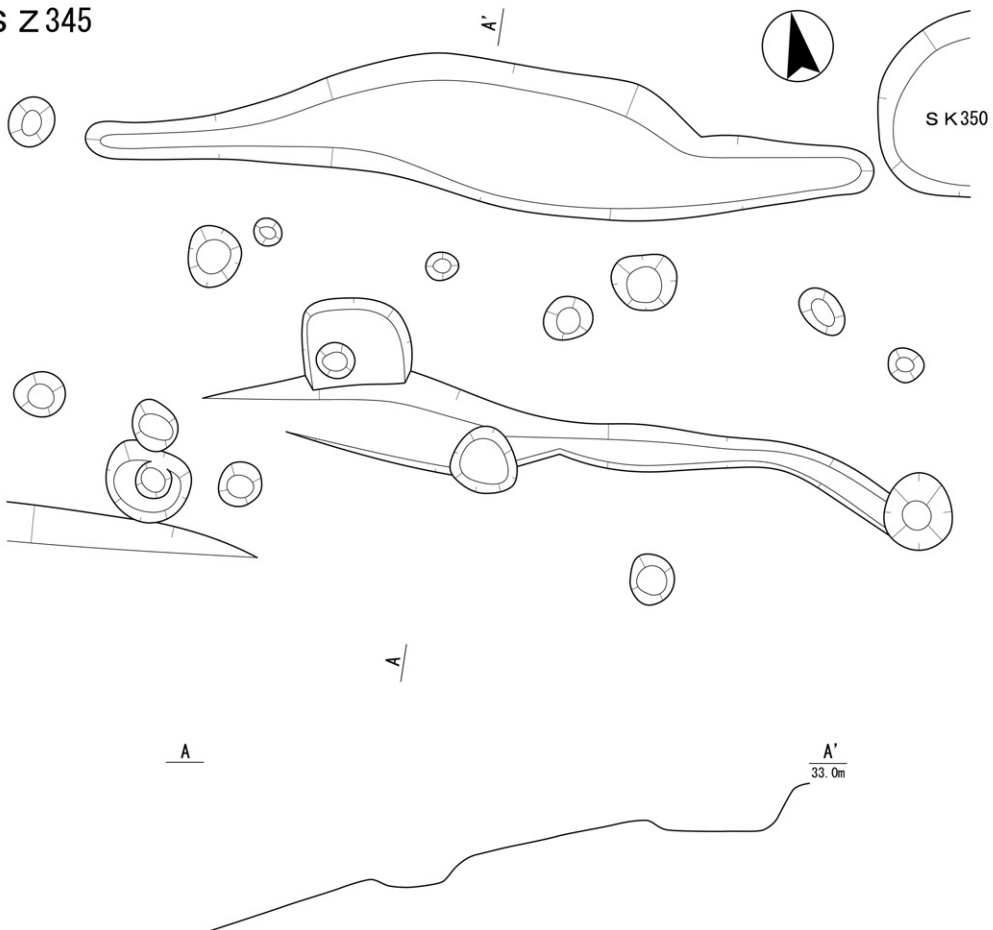
S Z 345 (第144図) 第3次調査区の西部で検出した段状遺構である。斜面裾部に位置する。長さ4.2 mほどにわたって、斜面と並行するように幅0.8 mほどの不整形な溝状の掘り込みが認められる。

斜面下方にあたる溝状部分より南側には、明瞭な平坦面は認められず、緩やかな斜面となっている。その部分からは、やはり斜面と並行する細い溝や、ピットが多数検出されている。ピットの中には柱穴

S Z 335

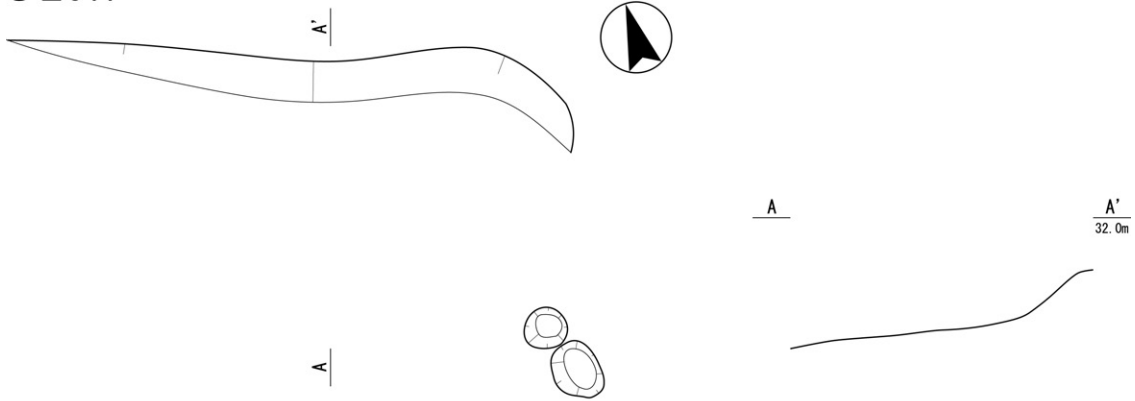


S Z 345

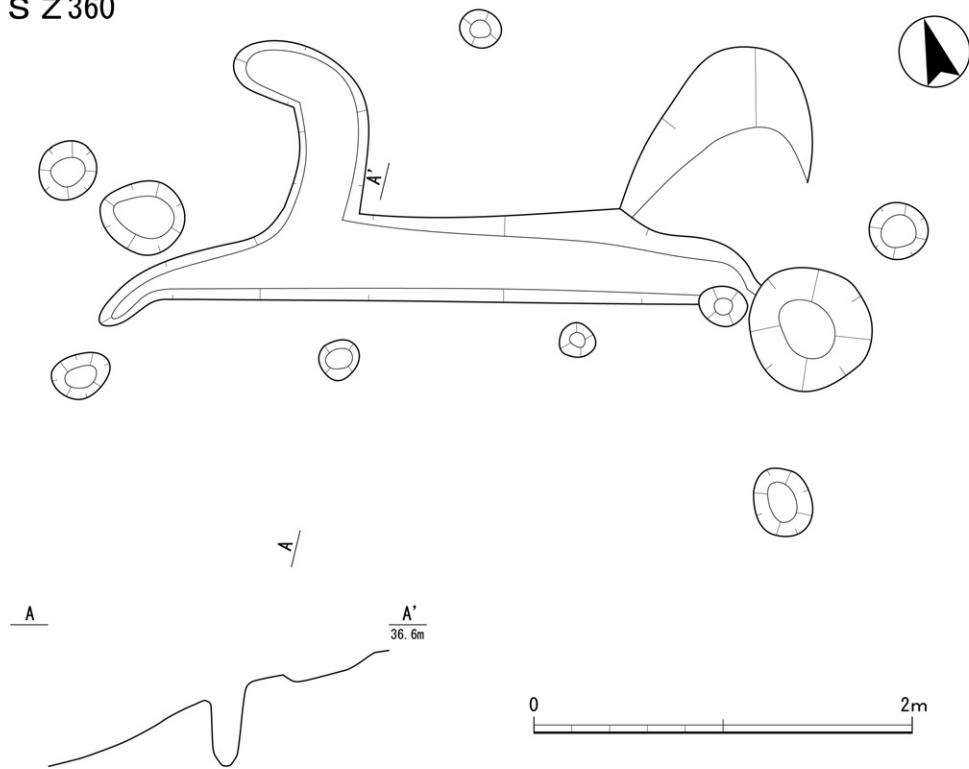


第144图 S Z 335 · 345 (1/40)

S Z 344



S Z 360



第145図 S Z 344・360 (1/40)

とも考えられるような規模のものも認められる。

こうしたピット等の遺構は溝状の掘り込みより斜面上方にあたる範囲では希薄である。そのため、溝状遺構とその南側の遺構群が何らかの関係性を有する可能性があるとして、単なる溝ではなく段状遺構とした。なお、堅穴建物の支柱穴と同様の間隔で並ぶようなものは抽出できないため、堅穴建物の残欠とは考えにくい。

遺物は、溝状部分の埋土から弥生土器・土師器が少量出土しているが、小片のみで図化できるものは

なかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S Z 360 (第145図) 3次調査区の西部で検出した段状遺構である。斜面に位置しており、斜面と並行して長さ3.5m、幅0.4mほどの溝を掘り込み、溝の西端は斜面下方に向かってわずかに屈曲させている。また、北側には短いL字状の溝が接続しているが、一連の遺構かは不明である。

斜面下方にあたる溝状部分より南側には、明瞭な

平坦面は認められず、緩やかな斜面となっている。その部分からは、ピットが数基検出されている。そのうちの3基のピットは1.2m程度の間隔で直線的に並び、その東側の径0.6mほどの土坑もこれに含まれれば、計4基のピットからなる柱列とも考えられる。ただし、溝とは主軸方向がやや斜交しており、S Z360を構成する遺構としては疑問が残る。

この段状遺構に伴う遺物は出土しなかった。

そのため、遺構の時期は不明であるが、ほかの段状遺構と同じく、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構の可能性も考えられる。

(3) 掘立柱建物・柱列

S B409 (第146図) 第4次調査区の中央部で検出した側柱建物である。S H410と重複しており、この建物より後出する。桁行が4間で3.6m、梁行は1間で3.5mであり、平面形は正方形に近い方形を呈する。また、梁行ラインの中央よりやや外側にも柱穴があり、近接棟持柱と思われる。

桁側の柱間は、柱穴の並びがやや悪く、柱穴の形状も不整形であるため判然としないが、0.8～1.0m前後である。柱穴は平面形が不整形な円形を呈し、複数のピットが重複したような状況を示すものもみられる。P 7・10では、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。P10ではこの土層に礫が含まれ、柱穴埋土の上層には別の土層が堆積していることから、柱は抜き取られたと考えられる。さらに、P 2では柱穴埋土上層から弥生土器・土師器の大きな破片や礫が複数出土しており、P11でも柱が立っていたと考えられる位置でほぼ完形の土師器鉢が出土している。こうしたことから、多くの柱穴では柱が抜き取られたものと推測される。

遺物は、P 2・7・10・11から弥生土器・土師器が出土した。P 2・11からは、遺存状況が良好な土師器鉢(2196・2202)が出土している。

出土遺物やS H410との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S B420 (第147図) 第4次調査区の中央部で検出した総柱建物である。北側は調査区外となっており、未調査である。S H410・414と重複しており、これ

らの建物より後出する。桁行は2間ないしそれ以上で、2間の場合は長さ4.0mである。梁行は2間で4.0mであり、平面形は正方形ないし、長方形を呈するものと思われる。

柱間は、桁側も梁側も2.0m前後で、かなり整然と並ぶ。柱穴は平面形が円形を呈し、径0.6mほどとかなり大型である。P 1～4では、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。P 3では柱穴上面にレンズ状の堆積土層が認められることから、柱は抜き取られた可能性が高い。なお、建物内部に位置するP 4の柱穴も他の柱穴と同様の規模であり、柱痕ないし柱の抜き取り痕とみられる土層の様相も共通する。したがって、柱の太さなどは側柱とほぼ同等であったとみられ、床を支えるような束柱とは考えにくい。

遺物は、P 1・4から弥生土器・土師器が出土している。図化できたものは少ないが、遺物の出土量自体は、掘立柱建物の柱穴にしてはかなり多い。

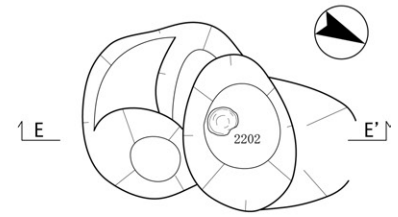
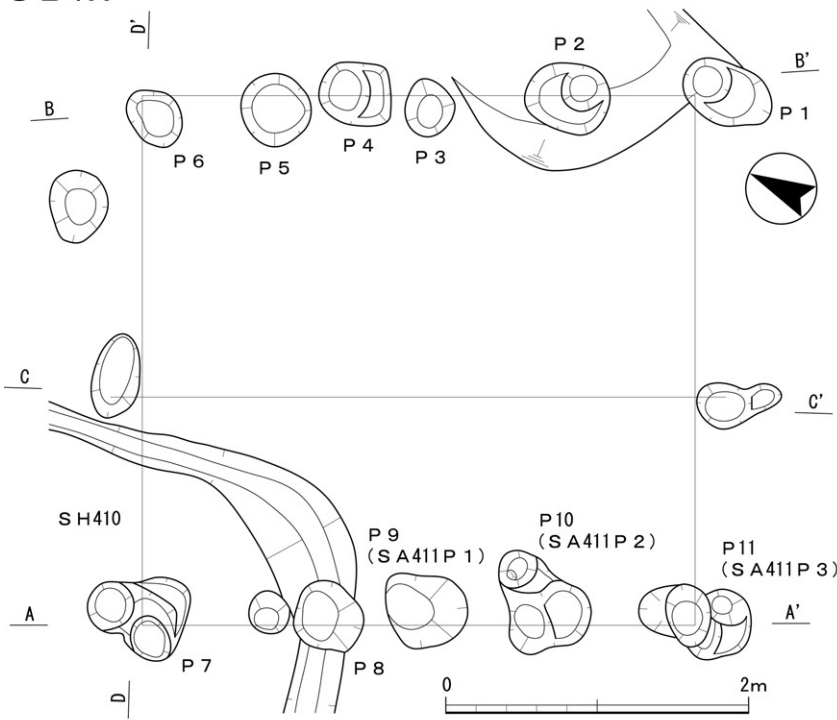
出土遺物には古墳時代前期よりも新しい時期のものも含まれていないため、出土遺物やS H410・414との新旧関係からみると、遺構の時期は古墳時代前期初頭～中葉と考えられる。

ただし、建物の形態からは飛鳥時代以降に下るものとも考えられる。出土遺物についても、いずれも小片であることや、量が多いこと、そして、先行するS H414の埋土には弥生土器・土師器の破片が多量に含まれていることを鑑みれば、柱穴掘削時にS H414に伴う遺物が混入したとも考えられ、やはりS B420の構築時期は飛鳥時代以降である可能性を考慮に入れておくべきであろう。

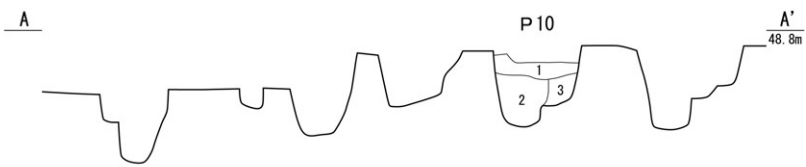
S A413 (第147図) 第4次調査区の中央部で検出した柱列である。長さは3.5mで、一列に並ぶ4基の柱穴で構成される。

柱間は1.1m前後で比較的均等であるが、P 4とP 5の間がわずかに広い。いずれの柱穴においても、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。西側にも東側にも対応する柱列が検出されなかったため、単独の柱列で柵などと考えられるが、3.5mほど西側に位置するピットC-B8Pit2やC-B8Pit3などと一連で掘立柱建物を構成していた可能性も排除できない。

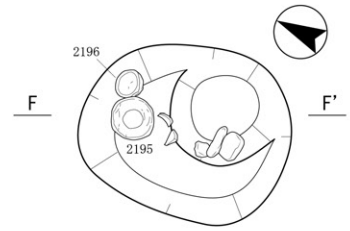
S B 409



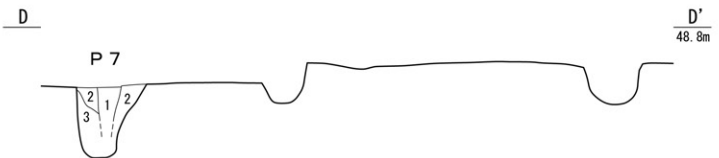
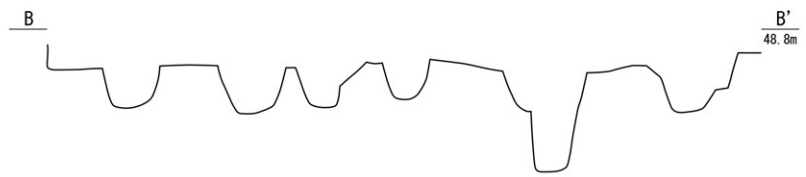
P11 遺物出土状況



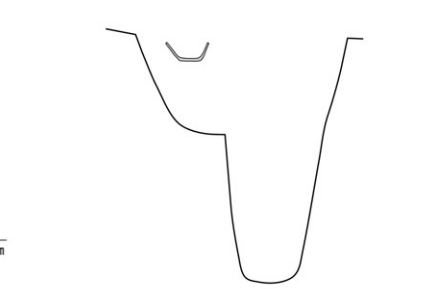
- 【A-A' 断面】
1. 2.5YR4/2暗灰黄色極細粒砂～シルト、しまりやや強、炭化物を含む
 2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、～0.5cmの礫を含む
 3. 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルト



P2 遺物出土状況



- 【D-D' 断面】
1. 10YR3/4暗褐色細粒砂、しまりやや強、粘性中
 2. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
 3. 10YR4/4～4/6褐色極細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

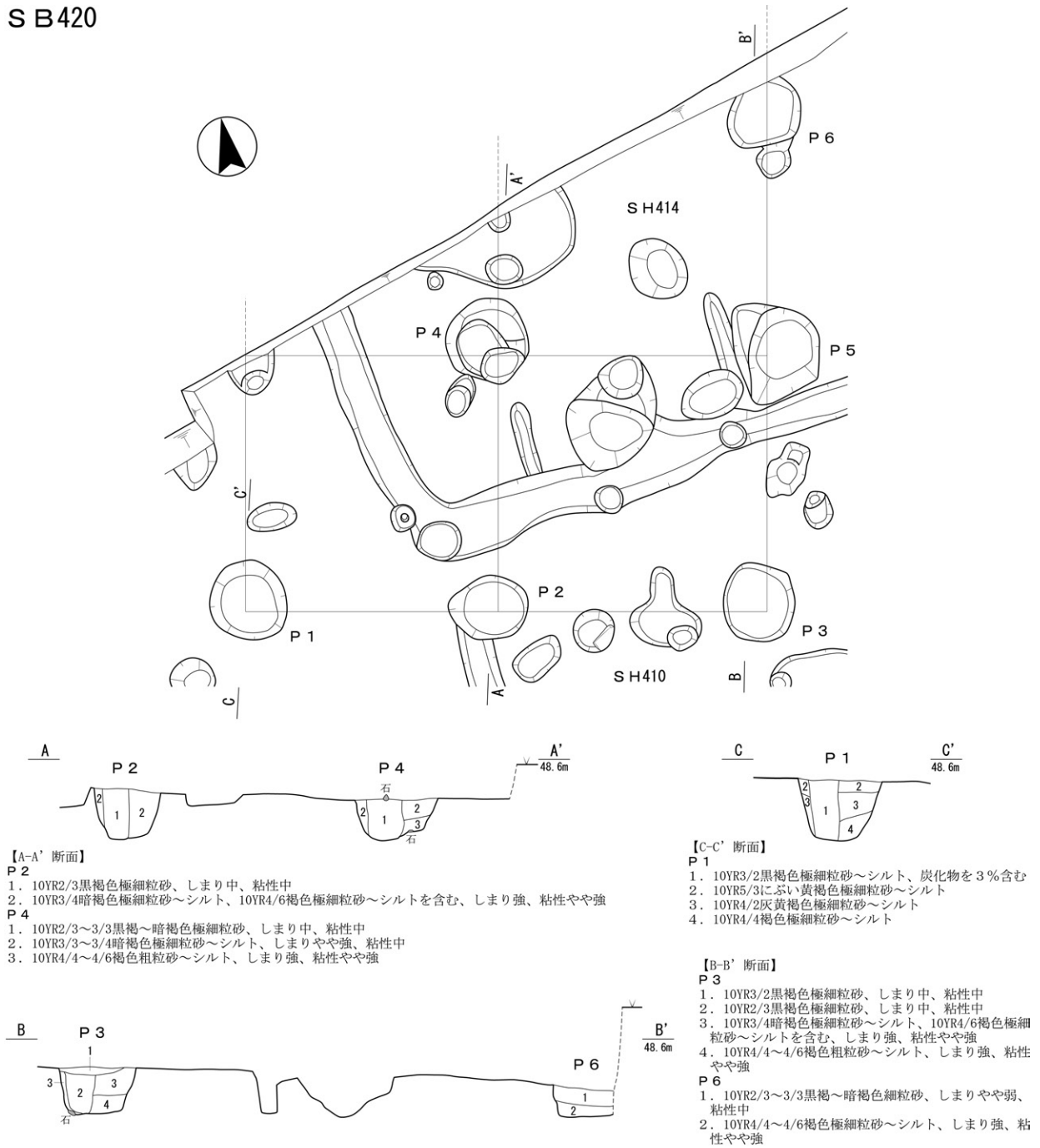


P2 遺物出土状況

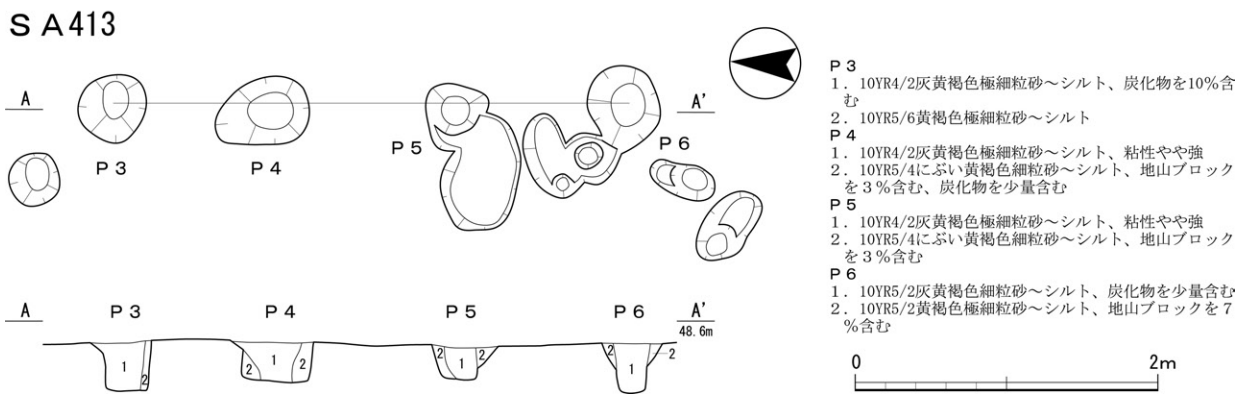


第146図 SB409 (1/50、1/20)

SB420



SA413



第147図 SB420、SA413 (1/50)

遺物は、P 6 から弥生土器・土師器が少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

(4) 土器埋設土坑

S X 325 (第148図) 第3次調査区の西部で検出した土器埋設土坑である。S Z 326と一部重複しているが、新旧関係は明確ではない。また、S A 357の柱穴によって北側肩部が一部削平を被っている。平面形は長径1.0m、短径0.8mの楕円形を呈する。深

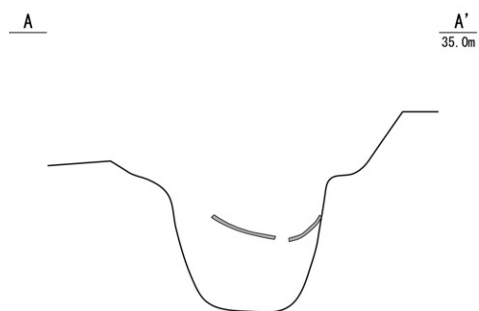
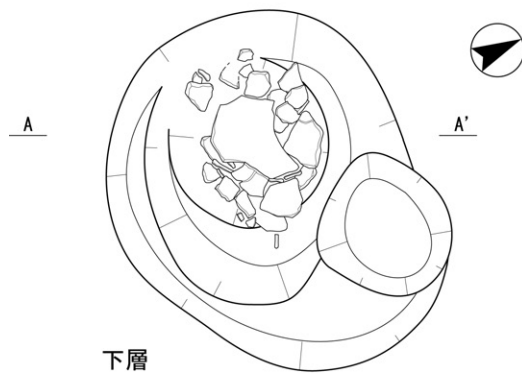
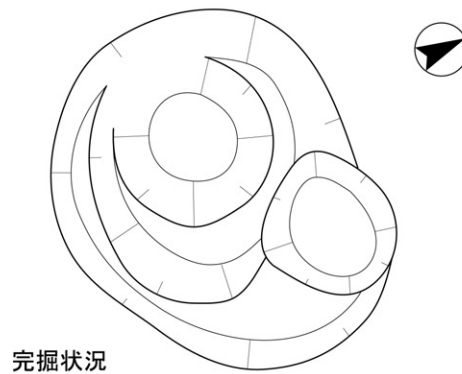
さは0.5mほどとかなり深い。

壁面は比較的急に立ち上がり、上位で段をなして外方へ開く。内部からは大型の土師器広口壺(2207)が1点出土した。ほぼ完形である。出土状況は明確ではないが、口縁部を上にして、正位に近い形で埋納されていたものと推測される。

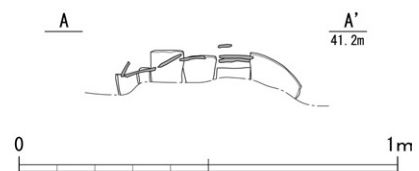
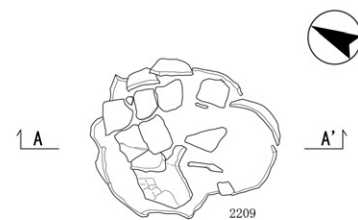
出土した土器の大きさや、その出土状況からは土器棺墓の可能性が高いと思われるが、土坑底面よりもかなり上層で土器が検出されている点などには、疑問が残る。

遺物は、埋納されていた土師器広口壺以外に、土

S X 325



S X 361



第148図 S X 325・361 (1/20)

師器高坏の坏部片(2208)が出土している。出土位置は不明で、蓋等として使用されていたかは判断できない。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

S X 361 (第148図) 第3次調査区の西部で検出した土器埋設土坑と思われるものである。大型の土師器直口壺(2209)が1点、単独で検出された。これに伴う掘形などは確認できなかったが、土器がほぼ完形に復元できたことや、かなりの大型品であることなどから、S X 325と同様の土器棺墓の可能性を有する土器埋設土坑と判断した。

出土状況は明確ではないが、土器は口縁部を上にして、正位に近い形で埋納されていたものと推測される。

遺物は、埋納されていた土師器直口壺以外は出土しなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

(5) 土坑

S K 225 (第149図) 第2次調査区の東部で検出した土坑である。南側の肩部は攪乱によって部分的に削平を被っており形状が不明確であるが、平面形は長軸2.6m、短軸1.8mの不整形な長方形を呈するものと思われる。比較的大型の土坑で、深さは0.2mほどある。

壁面は緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。埋土には礫が多数含まれていた。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

S K 247 (第42・43図) 第2次調査区の東部に位置するS H 248内部で検出した土坑である。平面形は長径1.4m、短径1.1mの楕円形を呈する。深さは0.15mほどと、やや浅い。

底面は比較的平坦で、埋土に焼土塊などは明確には含まれていなかった。S H 248の炉とみられる浅いピットに近接するため、これに関わる施設とも考えられるが、検出時にS H 248との新旧関係が確認

できなかったため、断定できない。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

S K 278 (第149図) 第2次調査区の西部で検出した土坑である。西端は攪乱によって若干削平を被っており形状が不明確であるが、平面形は長軸2.8mほど、短軸0.8mの細長い涙滴形を呈するものと思われる。深さは0.1mほどと浅く、土坑というよりは落ち込みに近い。

底面にはかなり凹凸が認められ、ピット状になっている部分も認められる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられるが、遺物の出土量がわずかであるため、確定的ではない。

S K 280 (第140図) 第2次調査区の西部で検出した土坑である。S Z 282のすぐ南側に位置する。平面形は長径1.1m、短径0.6mの隅丸方形に近い楕円形を呈し、深さは0.4mほどある。

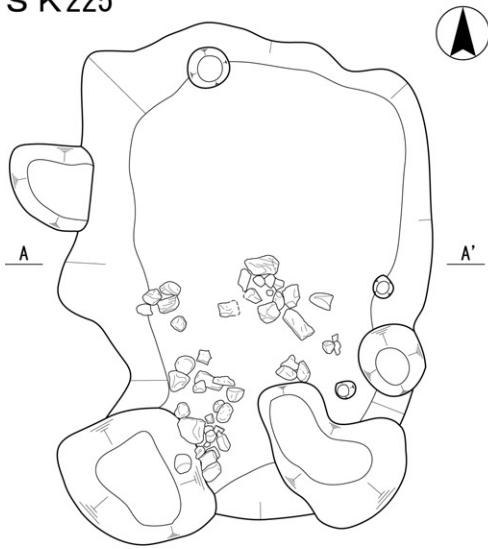
小口にあたる部分の壁面はやや緩やかに立ち上がるが、側面の壁面はかなり急な角度で立ち上がる。底面は短軸方向においては比較的平坦で、断面形は台形を呈する。埋土は黒色土と黄褐色土が斑状に混じり合うような様相を示しており、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。埋土上層からは鉄製の鉈(2225)が1点出土している。

形態や鉄製品の出土、埋め戻された可能性などを鑑みると、埋葬施設の可能性もあるが、土層断面では木棺痕跡は確認されていない。土壙墓とも考えうるが、その場合、鉈の出土位置は底面からかなり離れており、副葬品とは考えにくい。規模が小さいことなども踏まえれば、現状では、埋葬施設とする蓋然性は低いと思われる。

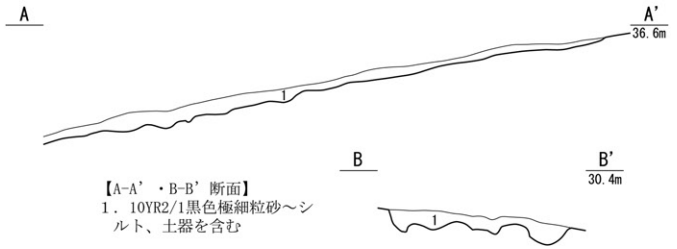
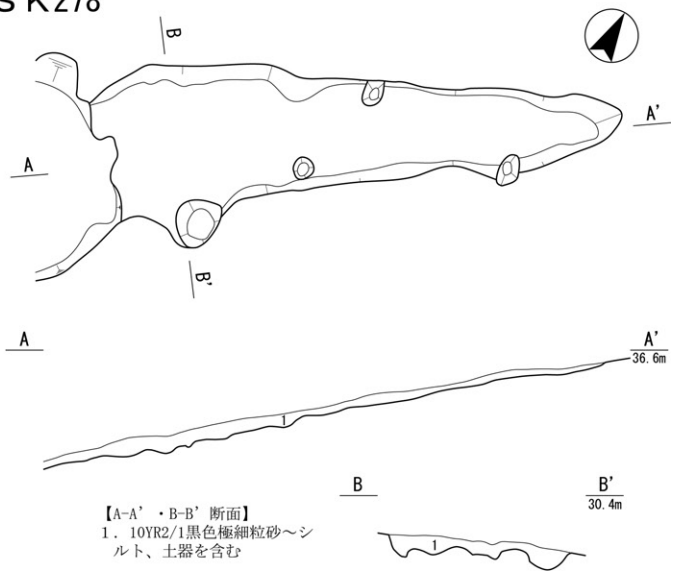
なお、この土坑を中心として、長さ3.8m、幅2.0mほどの不整形な浅い落ち込みが認められる。埋土には土器が含まれるが、人為的な遺構か不明であり、S K 280との関係も定かではない。

遺物は、埋土から鉈のほか弥生土器・土師器が

S K225

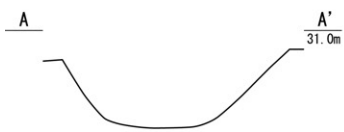
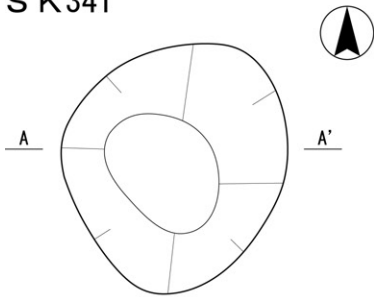


S K278

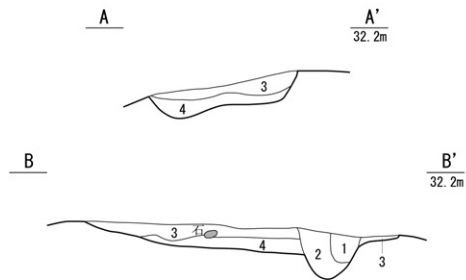
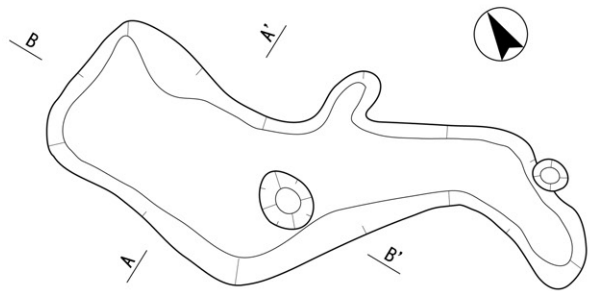


【A-A'・B-B'断面】
1. 10YR2/1黒色極細粒砂～シルト、土器を含む

S K341

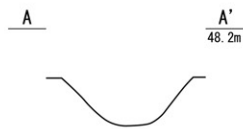
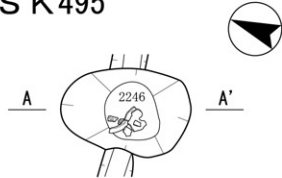


S K299

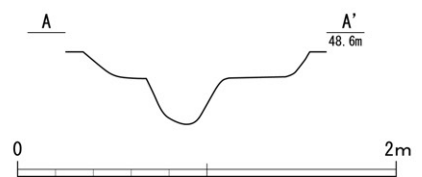
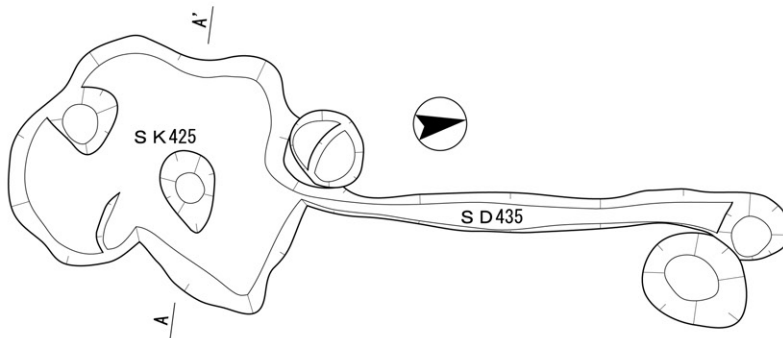


【A-A'・B-B'断面】
1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト
2. 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト
3. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト
4. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト

S K495



S K425・S D435



第149図 S K225・278・299・341・425・495、S D435 (1/40)

出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期と考えられる。

SK299 (第149図) 第2次調査区の西部で検出した土坑である。長さ2.9mほどの2箇所屈曲する溝状の不整形な平面形を呈し、最も幅が広い部分では幅0.8mほどある。ただし、南端の屈曲部付近は別遺構が重複している可能性もある。

壁面は緩やかに立ち上がるが、北小口部などでは底面から徐々に浅くなっており、底面と壁面の境は明瞭ではない。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

SK317 (第150図) 第3次調査区の東部で検出した土坑である。南西部に大きな切り株が存在したため、1/4程度は掘削することができなかった。そのため、全体の形状には不明確な部分もあるが、平面形は長径4.4m、短径3.9mの不整形な五角形に近い楕円形を呈する。かなり大型の土坑で、深さは0.2mほどある。

壁面は緩やかに立ち上がり、底面は部分的には若干凹凸が目立つものの、比較的平坦である。埋土には、礫が多数含まれていた。

底面からはピットが複数検出されたが、小型のものが多く、根による攪乱と思われるものもあり、明確に柱穴と認識できるものはない。

規模や形態からは小型の堅穴建物とも思われるが、掘形が不整形で、壁際溝や炉などの構造物も検出されなかったことなどから、その可能性は低い。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SK341 (第149図) 第3次調査区西部の第2次調査区との境で検出した土坑である。南側の一部は、第2次調査の際に調査されている。平面形は径1.2mほどの不整形な円形を呈する。深さは0.4mほどある。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は椀形を呈す

る。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器の大型の壺の体部が出土している。かなりの破片が遺存しているが、この個体以外の遺物はごくわずかである。土器埋設土坑の可能性も考えられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期と考えられる。

SK425 (第149図) 第4次調査区の中央部で検出した土坑である。SD435と一部重複しており、この溝より後出すると思われるが、明確ではない。平面形は長軸1.4m、短軸1.2mの不整形な方形を呈する。深さは0.1mほどと浅い。

底面は比較的平坦である。中央部と南壁付近にピット状の落ち込みが認められるが、時期が異なるピットが重複している可能性が高い。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SK475 (第150図) 第4次調査区の西部で検出した土坑である。南側は攪乱によって一部削平を被っている。また、西側は谷の肩部にあたっており、掘削時に土砂が流失した等の影響によって十分に調査を行うことができなかった。そのため、全体の形状は不明であるが、平面形は長径4.0m、短径2.0mほどの不整形な楕円形を呈するものと思われる。深さは0.1mほどと浅く、土坑というよりは落ち込みに近い。

壁面は緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。底面からはピットが検出されているが、この土坑に伴うものかは不明である。

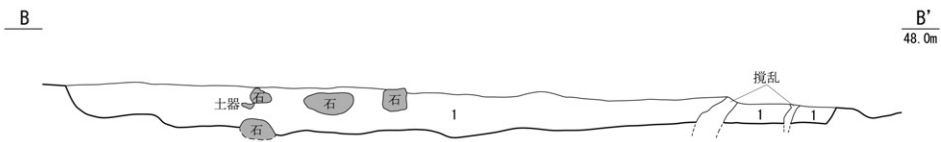
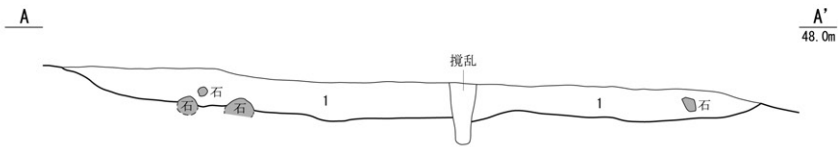
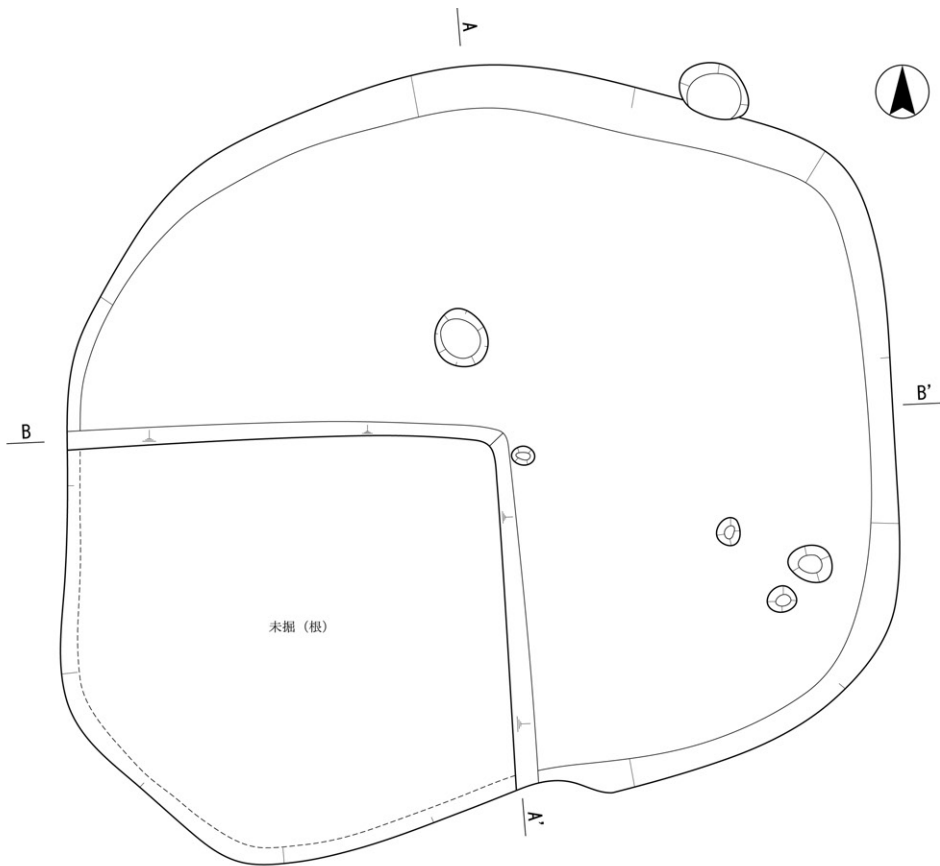
遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SK495 (第149図) 第4次調査区の西部で検出した土坑である¹³⁾。SH489と重複しており、この建物より後出する。平面形は長径0.7m、短径0.4mの楕円形を呈する。深さは0.2mほどある。

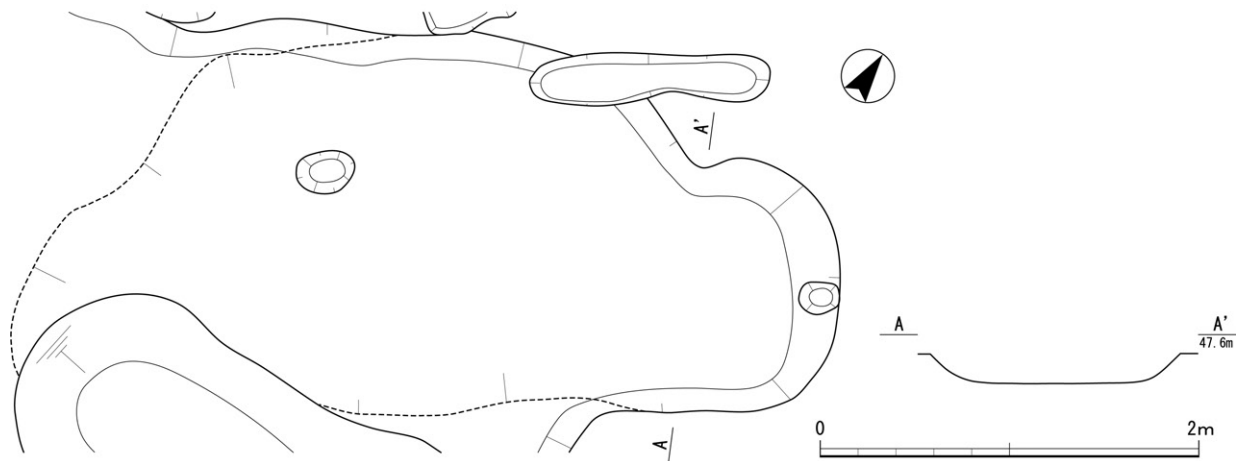
壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は椀形を呈する。

S K317



【A-A'・B-B' 断面】
1. 5YR4/4にぶい赤褐色細粒砂〜シルト

S K475



第150図 SK317・475 (1/40)

遺物は、底面よりやや上位で弥生土器・土師器の破片がまとまって出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

(6) 溝

S D232 (第151図) 第2次調査区の東部で検出した溝である。S H228・241・245と重複しており、これらの建物に先行すると思われるが、明確ではない。長さ8.0m、幅0.2mほどの、直線的に延びる細く長い溝である。深さは0.3mほどと、幅の割にかなり深い。

壁面は急に立ち上がっており、垂直に近い。断面形はU字形を呈する。埋土は1層であるが、地山に由来すると思われるブロック土が多量に含まれており、埋め戻されたか、あるいは本来暗渠状になっており天井部が崩落して埋没したものと推測される。S H228の壁際溝と重複する箇所付近では、壁面がオーバーハングしている様子が窺われるため、後者の可能性も十分に考える。

形態からは、堅穴建物の排水溝の可能性が高いと思われる。北端部はS H228の排水溝の北端部と近い位置にあり、標高が低い方向へ向かって延びていると考えられる点も、これを支持しよう。ただし、南端部はS H228の貯蔵穴付近にあり、堅穴建物の壁際溝と接続する様子は認められない。また、S H228・241・245のいずれかの床下の排水溝の可能性もあろうが、そうした排水溝を有する堅穴建物は他に認められず、こうした排水溝を設けなくてはならない立地的な要因等も見当たらない。したがって、S D232が堅穴建物の排水溝であるとしても本来付属していた建物は全く不明であり、排水溝以外の溝の可能性も残されている。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

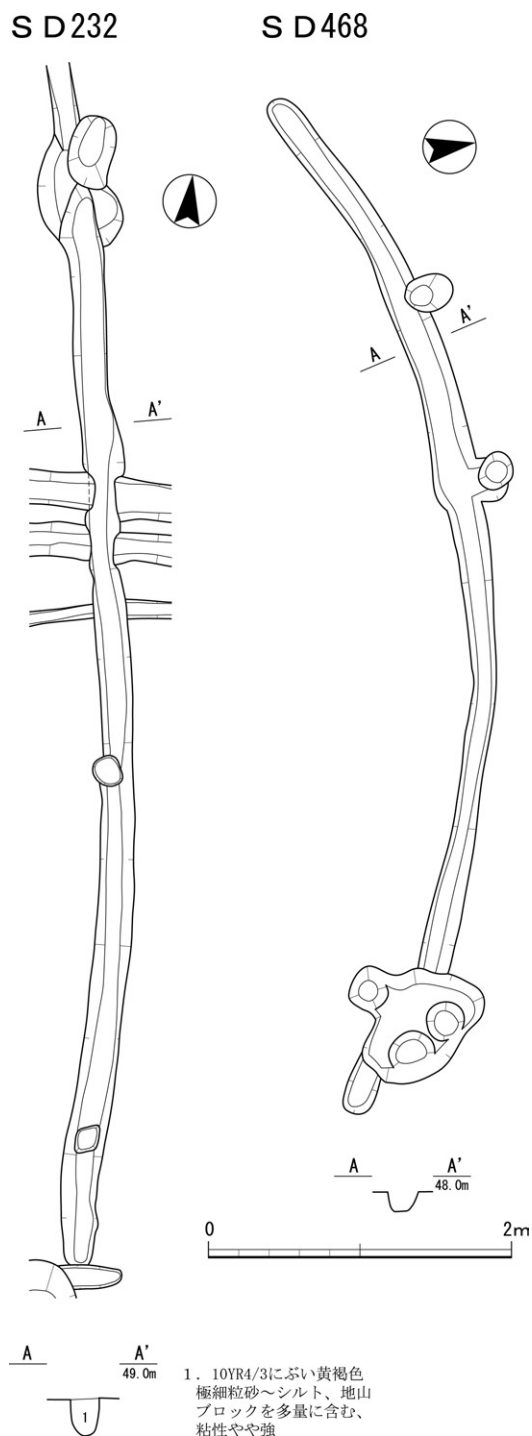
出土遺物やS H228・241・251との関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。

S D435 (第149図) 第4次調査区の中央部で検出した溝である。S K425と重複しており、この土坑に先行すると思われるが、明確ではない。長さ2.5m、幅0.2mほどの、直線的に延びる細い溝である。

削平等によって遺存状況は悪く、深さは0.05mほどとかなり浅い。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物及びS K425との新旧関係からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考



第151図 S D232・468 (1/50)

えられるが、確定的ではない。

S D468 (第151図) 第4次調査区の西部で検出した溝である。長さ7.2m、幅0.2mほどの、緩やかに弧を描いて延びる細く長い溝である。深さは0.1～0.2mほどある。

壁面はやや急に立ち上がり、断面形は台形を呈する。底面からピットなどは検出されていない。

形態からは、堅穴建物の排水溝とも思われるが、付近の堅穴建物の壁際溝とは接続せず、また、明確に標高が高い方から低い方へと延びている様子も認めがたい。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土しているが、小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

(7) その他

居林1号墳 (第152図) 居林1号墳については、墳丘裾部のみを調査した。表土掘削を行った段階で、盛土によって構築された墳丘と思われる高まりを確認したため、調査区壁面に沿って東西方向に断ち割り状のトレンチを設けて埋葬施設等の有無を確認するとともに、墳丘盛土について調査を行った。また、この断ち割りと直交する形で南北方向にも断ち割り状のトレンチを設定している。

トレンチによる調査において、埋葬施設やそれに関わる遺構の痕跡は認められなかった。トレンチ調査終了後、墳丘盛土を全て除去したが、その際にも埋葬施設は確認されていない。埋葬施設が横穴式石室の場合、墳丘南側や斜面下方に開口する場合が多いことから、埋葬施設は横穴式石室ではない可能性が考えられる。

南側の墳裾では、ごく浅い周溝と思われる溝状の落ち込みが認められた。ただし、非常に不明瞭で、平面では明確に検出することができなかった。南北方向のトレンチでは、幅1.8m、深さ0.1mほどの幅広の落ち込みが土層断面で確認でき、斜面上方から流れ込んでいる墳丘流土と思われる堆積土層も認められる(第7層)¹⁴⁾。

また、東側の裾部では比較的明瞭な周溝状の溝が検出されているが、土層断面からみると、墳丘盛土

と推定される土層よりも溝の埋土の方が先行して堆積しているようにも見受けられる(第11・12層)。ただし、墳丘盛土と溝埋土との境界付近では木の根による攪乱等も認められるため、土層の上下関係については確実性を欠く。現状では、この溝も居林1号墳に伴う周溝の可能性があると考えておきたい。

墳丘は、ほぼ盛土によって構築されている。墳丘下には弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が遺存しており、そうした遺構に関わるとみられる土層が地山直上に認められる(第17～19層)。これらを覆うように厚さ20cm程度の盛土が施され(第15層)、その上に、さらに10～20cmの厚さの単位で何層かの盛土と思われる土層が認められる(第3～5・10層)。ただし、第3～5・10層は土色・土質がかなり類似しており、異なる質の土を互層に積んだような様相は認められない。

盛土下には、明らかに旧表土と思われる土層は確認できない。そのため、墳丘構築前に整地が行われた可能性もあるが、墳丘下の地山には起伏が認められる。地山直上に堆積した第15層は、盛土と考えられるものの、他の盛土と比べてやや色調が暗く、上面から掘り込まれたピット等とみられるものも存在する(第13・14層)。こうした点からみると、第15層が旧表土で、特に整地を行うことなく旧表土上に盛土を施した可能性も残されている。

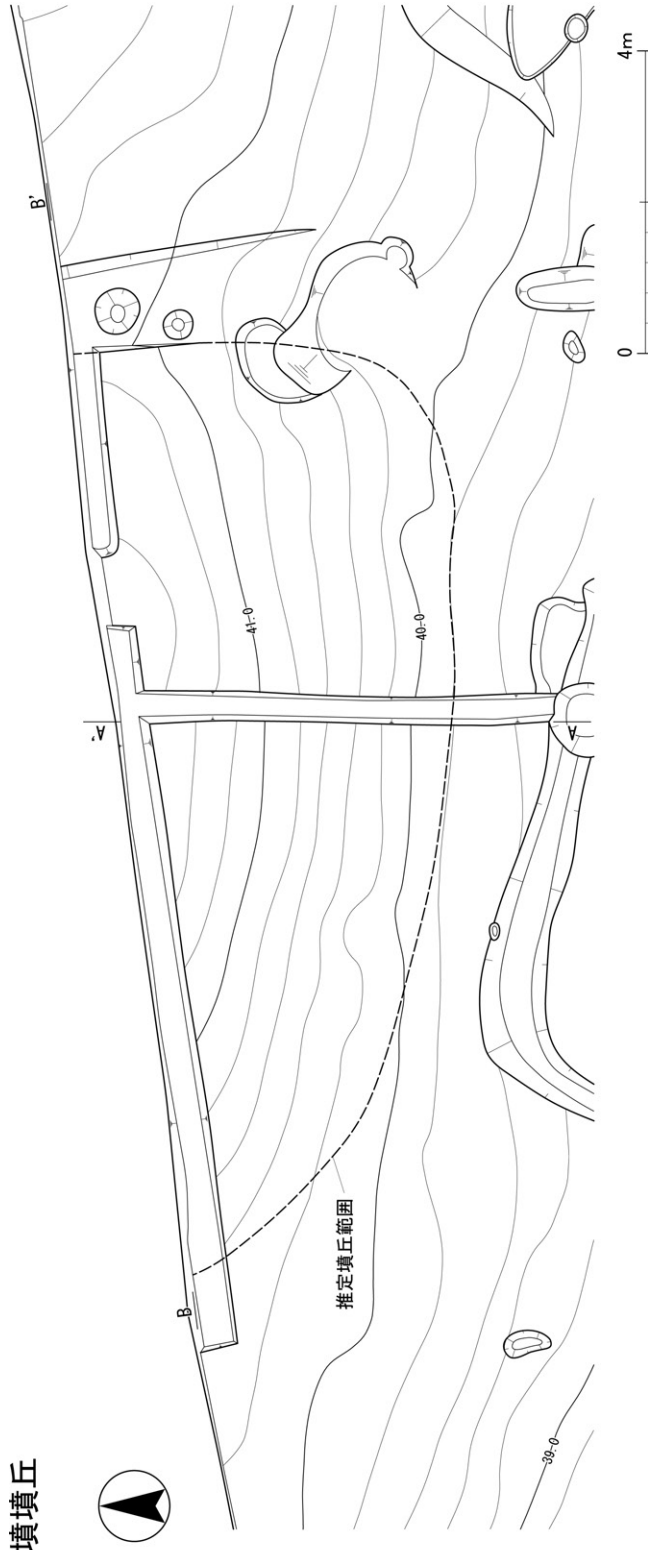
ただ、調査がごく一部にとどまっているため、墳形は明らかにできず、径12～13m程度の円墳と推定されるにとどまる。

周溝内や盛土内、墳丘上などからは、居林1号墳に関わると考えられる遺物は全く出土しなかった。そのため、築造時期は不明である。ただし、墳丘盛土内や盛土下から、弥生土器・土師器が出土している。須恵器も出土しているが、出土状況は明確ではない。

註

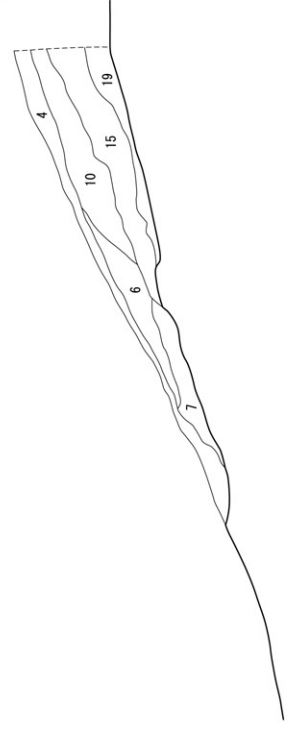
- 1) 地床炉の一端に長細い礫を配するものを指して、添石炉と呼称する。三重県埋蔵文化財センター2021『小牧南遺跡(第2・3次)発掘調査報告』
- 2) 平面図では段状に表現されていないが、土層断面図や写真等の記録から、段状になっていた可能性が高いと判断した。

居林 1 号墳墳丘

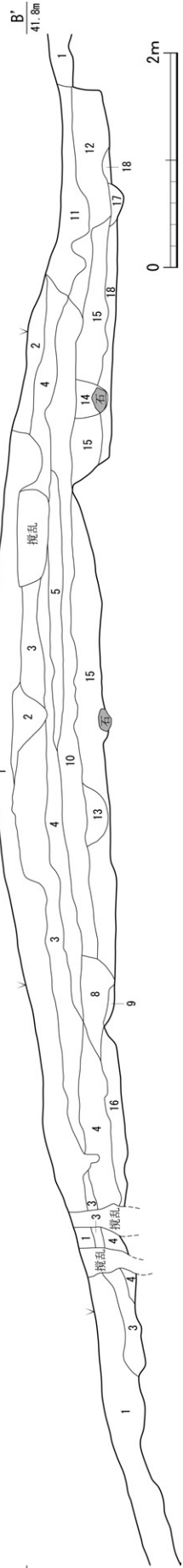


A' 41.8m

- 【A'-A'・B-B' 断面】
1. 表土
 2. 10VR6/31にぶい黄褐色粗粒砂
 3. 10VR5/31にぶい黄褐色細粒砂～シルト
 4. 10VR5/31にぶい黄褐色細粒砂～シルト
 5. 10VR4/31にぶい黄褐色粗粒砂～シルト
 6. 10VR3/2黒褐色極細粒砂～シルト
 7. 10VR4/31にぶい黄褐色粗粒砂～極細粒砂
 8. 10VR4/31にぶい黄褐色粗粒砂～極細粒砂 炭化物を含む
 9. 10VR3/3褐色粗粒砂～極細粒砂
 10. 10VR4/31にぶい黄褐色細粒砂～シルト
11. 10VR4/31にぶい黄褐色粗粒砂～極細粒砂
 12. 10VR3/3暗褐色粗粒砂～シルト
 13. 10VR4/2灰黄褐色細粒砂～シルト
 14. 土層注記記録なし
 15. 10VR4/4褐色極細粒砂～シルト
 16. 10VR4/4褐色極細粒砂～シルト、10VR6/6明黄褐色粗粒砂～シルトプロックを多く含む
 17. 10VR3/3暗褐色粗粒砂～シルト
 18. 10VR4/2灰黄褐色粗粒砂～極細粒砂
 19. 10VR3/2黒褐色極細粒砂～シルト



B



第152図 居林 1 号墳墳丘 (1/100、1/60)

- 3) 竪穴建物の掘形底面に、壁に沿って周溝状の浅い掘り込みがなされているものを指す。前掲註1文献。
- 4) 土層断面図では、貼床上面からの掘り込み内に堆積したような焼土層もみられるが、確実に貼床後の堆積と判断できたものはないようである。
- 5) 地山を掘り抜いてトンネル状にしていた場合や、木蓋等を架構し地山掘削土を被せた場合が考えられよう。
- 6) 後述するように、建物の壁から支柱穴までの幅には差が認められるが、流失している南壁の推定位置は、南西側の2基の支柱穴を結ぶラインから、北西・南東壁と同じ1.0m外側と推定した。
- 7) 遺物が出土しておらず時期が不明確で、攪乱の可能性もあるため個別の遺構として番号を付与していないが、SK412のように中世の火葬土坑である可能性も考えられる。
- 8) SH456の南北方向の規模については、南北両壁沿いの壁際溝が完全に失われているものの、間仕切りと考えられる溝が遺存するため、この溝の南端付近を南壁推定位置として復元した。
- 9) 土層断面をみると、この溝の東側ではSH451の貼床を掘り込んでいるようになっているが、貼床の土層が薄く、調査時に土層の上下関係を明瞭に把握できなかったものと思われる。
- 10) 南東壁には4基のピットが認められるが、南隅から2mほどの位置にあるピットは、形態や他の壁面におけるピットの間隔からみて、壁柱穴と考えられる他のピットと同じ性格のものか不明である。
- 11) SZ326の内部に位置するSA356の柱穴がかなりの深さ遺存していることを鑑みると、SA356が構築されるまでにあつた程度の斜面になっていたこと、SA356の廃絶後、現在に至るまで、それほど大規模な土砂の流出がなかったことが推定される。
- 12) 調査時には、埋土の状況等及び遺物の出土から遺構と判断された。ただし、土層断面等の記録は残されていない。
- 13) 調査時はピットとしてF-N25Pit1の遺構名称を付与していたが、ピットとしては規模がやや大きいことや、遺物がまとまって出土したことなどから、報告段階で土坑に変更した。
- 14) 第7層は、土層断面図をみる限り後述する盛土と考えられる第4層より下層に位置する。ただし、調査時における東西方向と南北方向のトレンチにおける土層の対応関係に若干齟齬が認められる点や、木の根等によって分層が困難な箇所がかなり存在した点などから、第6・7層を填丘流土と考えることは可能であろう。

第2節 遺物

(1) 竪穴建物出土遺物

SH201 (第153・154図 1～52) 1は支柱穴P2から出土した弥生土器壺である。口縁部を欠損するが、体部は比較的良好に遺存する。体部外面は風化によって調整が不明瞭となっているが、底部付近ではミガキが施されている。体部内面上半には粘土接合痕が明瞭に残り、それより上方では縦方向のナデが施されている。

2は貯蔵穴から出土した弥生土器壺である。口縁部を欠損するが、体部は比較的良好に遺存する。体部中位がやや張る器形を呈し、外面はハケを施した後タテミガキによって調整している。底部は輪台状を呈する。

3～48は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

3～17は壺である。

3は小型の内湾口縁壺で、口縁部上半を欠損する

が、かなりの部分が遺存する。口縁部は外方へやや強く開き、内湾する。外面にはタテミガキが施されている。口縁部内面にもハケの後にタテミガキを粗く施す。底部は輪台状を呈する。

4～9は小・中型の壺の口縁部である。4は外反しながら開き、口縁端部を垂下させている。外面にはハケが施されている。5は直口壺と思われる。内外面とも粗いハケが施されている。6・7は緩やかに外反する。6の内面にはハケ状工具による列点文が施されている。8は頸部から大きく直線的に外方へ開く。頸部外面には突帯が貼り付けられていると思われる。9は体部上半まで遺存する。口縁部は直線的にのび、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収められる。頸部外面には、断面形が三角形を呈する比較的高く細い突帯が貼り付けられている。内外面とも風化が著しく調整は不明瞭であるが、ハケが施されている。

10～17は底部である¹⁾。10・11は小型のもので、

鉢の可能性もある。14は底部が突出気味で、外面には連続的なオサエによる整形の痕跡が残る。15は底の器壁がかなり厚い。17は体部下半まで破片が遺存しており、内外面ともハケで調整されている。

18～27は甕である。

18～20はく字状口縁甕である。19は体部上半が遺存する。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。外面はタテハケで調整されている。20はほぼ全形が復元できた。19と同じく頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。体部は最大径が比較的上位に位置するが、あまり肩は張らず、倒卵形を呈する。内外面ともハケで調整される。底部はほとんど欠損するが、平底と判断される。

21～24は受口状口縁甕の口縁部である。21～23は小片で、口縁部外面に列点文が施されている。24は口縁部上半²⁾がやや外方へ開く。屈曲部内面にはオサエが明瞭に残る。

25は台付甕の脚台部である。小型で、やや低い。内面はナデで調整されている。

26・27は口縁端部が若干外方へ引き出されており、形態的にはS字状口縁甕の口縁部と思われるものである。ただし、いずれも通常のS字状口縁甕と比べると違和感があり、胎土も異なるため、受口状口縁甕に含めるべきものかもしれない。26は口縁部外面に押引列点文は認められない。頸部内面はナデによって調整される。27は口縁部外面に列点文の痕跡が認められるが、遺存状況が悪く、押引列点文かどうか確認できない。頸部外面には直線文あるいはヨコハケと思われるものが一部遺存している。器壁は全体に薄い。

28～42は高坏である。

28～32は有稜高坏である。28～30は坏部で、いずれも口縁部は外反しながら開く。29は坏部外面の稜がシャープである。30は大型のもので、口縁端部は面をなす。坏部の稜は明瞭である。外面はハケを施した後にタテミガキを施すが、口縁部内面にはヨコミガキが施されている。底部外面には脚部が剥離した痕跡が認められる。筒状の脚部の上端縁部から坏部を成形し、その後に坏部内面から脚部上面の孔を塞ぐように粘土を充填しており、いわゆる円板充填

に近い。31・32は坏部下半から脚部上半が遺存する。脚部はいずれもハ字状に開く。また、粘土接合痕からみると、脚部成形後に坏部をその上面に付加し、頸部に粘土を貼り付けて補強している可能性が高い。31の脚部外面上半には直線文が施されている。

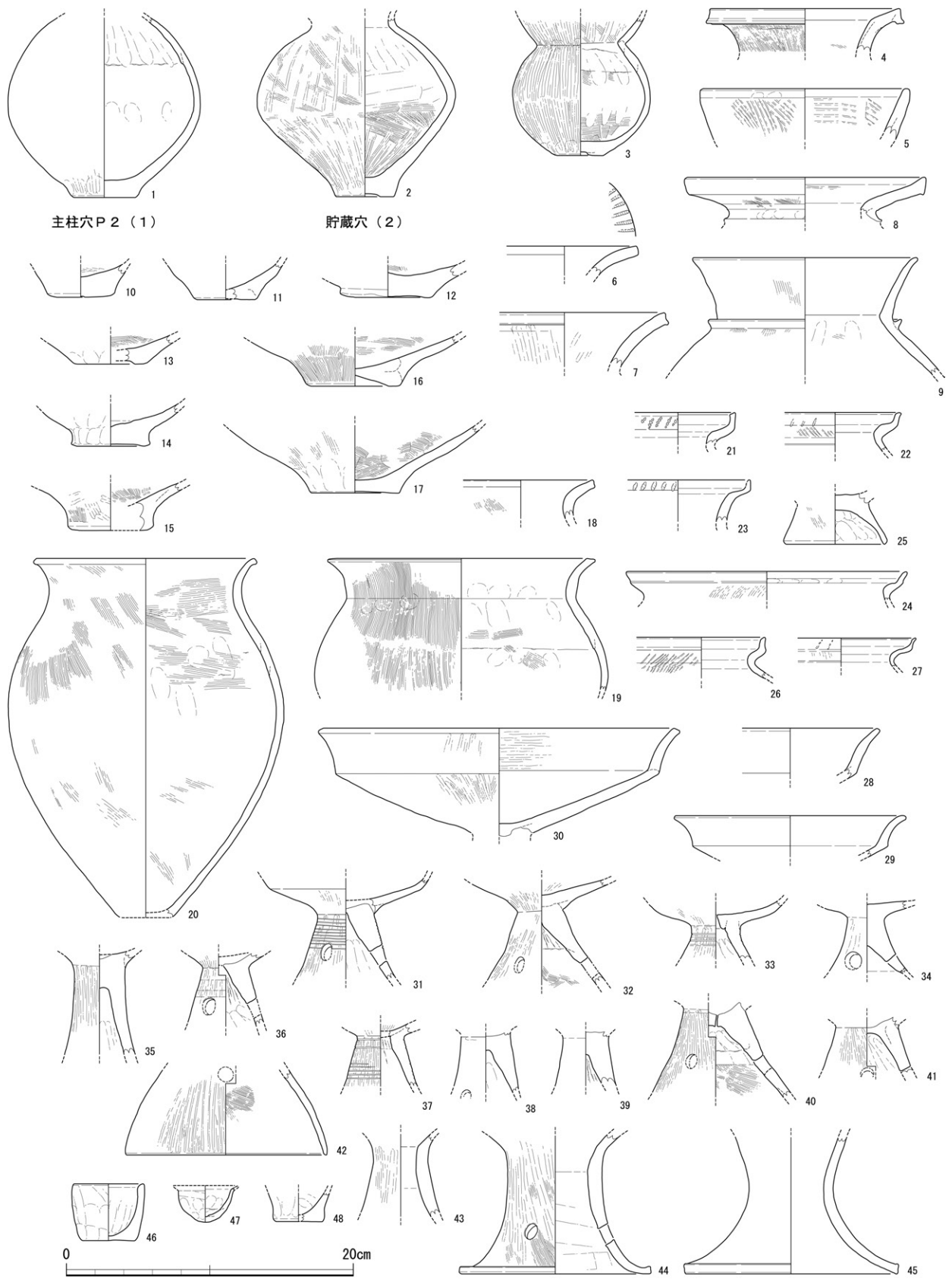
33は椀形高坏もしくは坏部の屈曲が甘い有稜高坏で、坏部から脚部上半にかけての破片である。脚部内面頂部から坏部内面に向かって孔が貫通している。筒状の脚部の上端縁部から坏部を成形後、脚部上面の孔を塞ぐように粘土を充填し、その後、脚部内面側から刺突を加えているように見受けられる。器台とも思われるが、明瞭に貫通孔を穿とうとするような意図は見出しがたい。軸芯痕に近いものかもしれない。

34～42は脚部である³⁾。34は小型のもので、外反しながら開く。35はやや細身で、柱状に近い。脚部上端縁部から坏部を成形している。36・37は坏部の底部内面に粘土を貼り付け、脚部上面の孔を塞いでいる。40は直線的にハ字状に開く。脚部内面頂部には軸芯痕が認められる。細い棒状工具によって施されたもので、脚部上面の剥離面まで貫通している。坏部内面まで貫通していたかは不明である。42は脚部下半の破片である。緩やかに内湾する。外面はハケを施した後にタテミガキで調整している。

43～45は器台である。43は頸部から脚部上半にかけての破片で、透孔は遺存しない。44は太い筒状を呈し、頸部の屈曲は緩やかである。脚部は裾部付近で比較的強く外反する。脚端部は面をなす。外面はハケの後に幅広のタテミガキを施すが、脚裾部ではハケが顕著に遺存する。45も44に近い形態であるが、受部・脚部ともに全体的に外反し、鼓形を呈する。脚端部は面をなす。器面の遺存状況は悪く、調整は不明である。透孔も遺存しない。

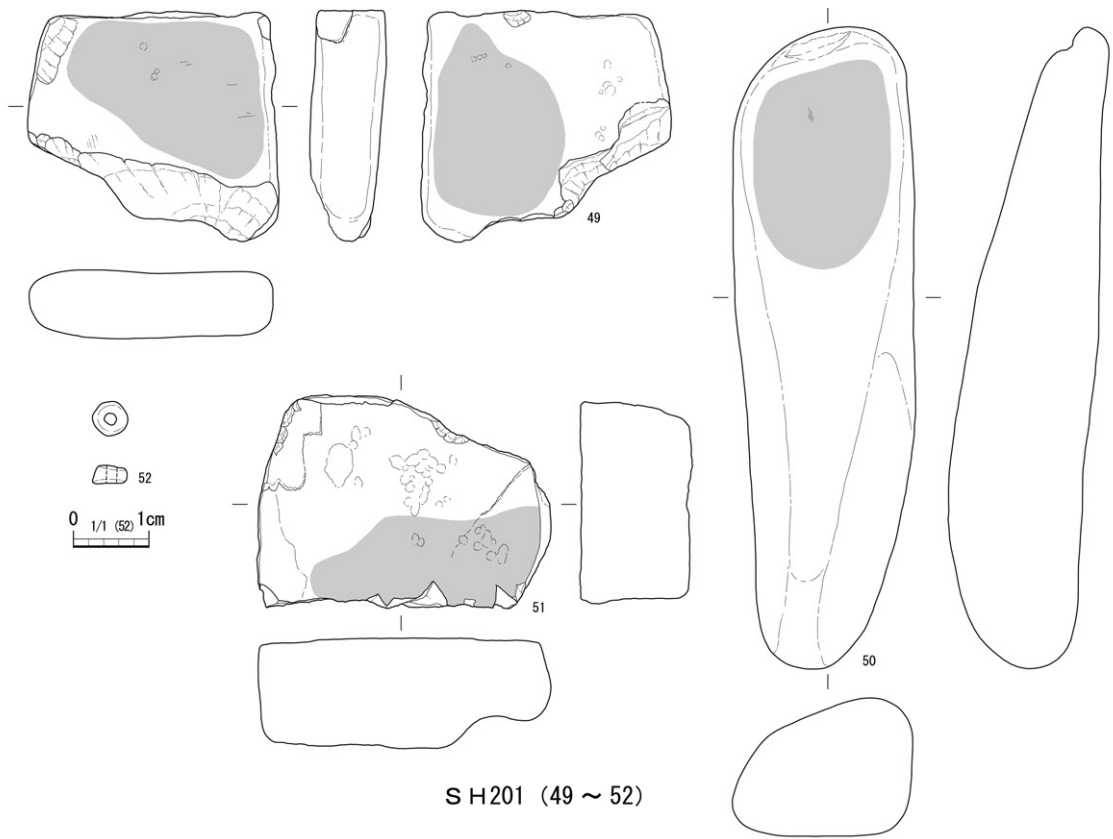
46～48は鉢である。46はかなり小型のものである。平底で体部が直立気味に立ち上がり、コップ形を呈する。内外面ともオサエやナデで調整される。47は非常に小型で、ミニチュアとされるようなものである。底部は丸底で、体部は半球形を呈し、口縁部は強く屈曲して外方へ開く。口縁端部は欠損する。48も小型の鉢で、底部のみが遺存する。

49～51は埋土中などから出土した石製品で、台石

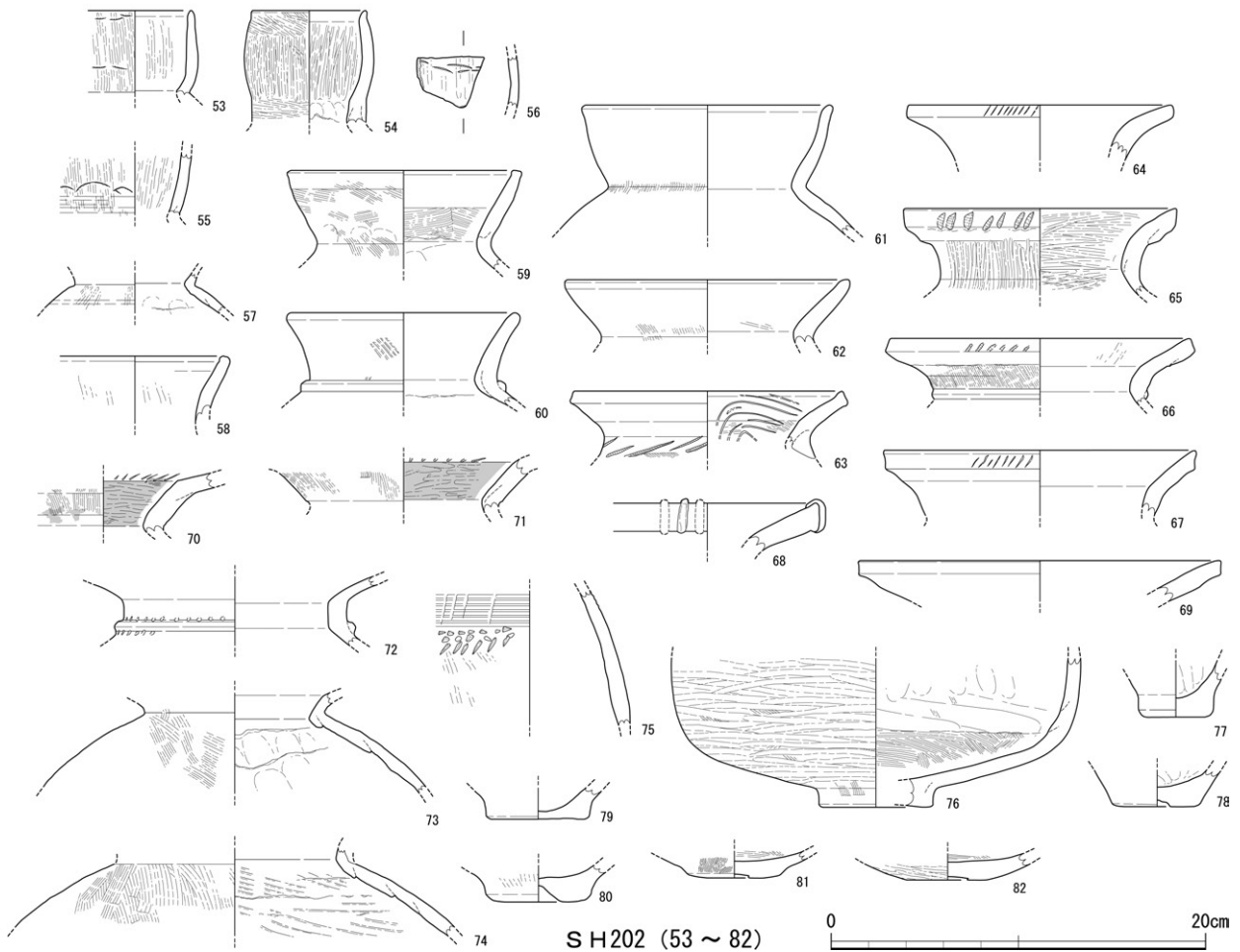


SH201 (1~48)

第153図 SH201出土遺物① (1/4)



SH201 (49 ~ 52)



SH202 (53 ~ 82)

第154図 SH201出土遺物②、SH202出土遺物① (1/4、1/1)

である。49は砂岩の扁平な亜角礫をそのまま利用している。両面に顕著な摩滅が認められ、ごくわずかに不明瞭な擦痕や敲打痕も認められる。50は大型品で、砂岩の長細い円礫を利用したものである。特に加工は認められないが、面をなす部分に摩滅が認められ、台石として使用されたものと思われる。形態と、一部に被熱が認められることから、添石炉に用いられていた可能性もある。51はホルンフェルスの扁平な礫を利用している。上面はかなり平坦となっており、敲打痕と思われる不明瞭な凹凸がみられ、部分的に摩滅も認められる。

52は壁際溝内のピットから出土したガラス製品である。径0.4cmほどの小玉で、ライトブルーのカリガラス製である。両端はやや面をなす。孔の内側にはわずかに凹凸がみられるが、ガラスに含まれている不純物が影響したものと推定される。気泡の状況からみて、いわゆる引き伸ばし技法を用いて製作されたものと考えられる⁴⁾。

S H 202 (第154~157図53~210) 53~208は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

53~100は壺である。

53~57は小型の壺の口縁部や体部である。53・54は短頸の瓢形壺である。53は外面に二枚貝の貝殻腹縁による逆位の連弧文が、2箇所施されている。54は無文で、口縁端部は内傾する面をなす。内外面ともハケの後に細いタテミガキを施すが、頸部外面にはヨコミガキが施されている。55も瓢形壺の頸部付近の破片と思われる。外面に二枚貝の貝殻腹縁による連弧文と、浅く不明瞭な直線文が施されている。56は二枚貝の貝殻腹縁による連弧文が施された体部片である。連弧文はやや粗雑である。瓢形壺の可能性が高い。57は肩部付近の破片で、不明瞭ながら直線文と思われる痕跡が認められる。

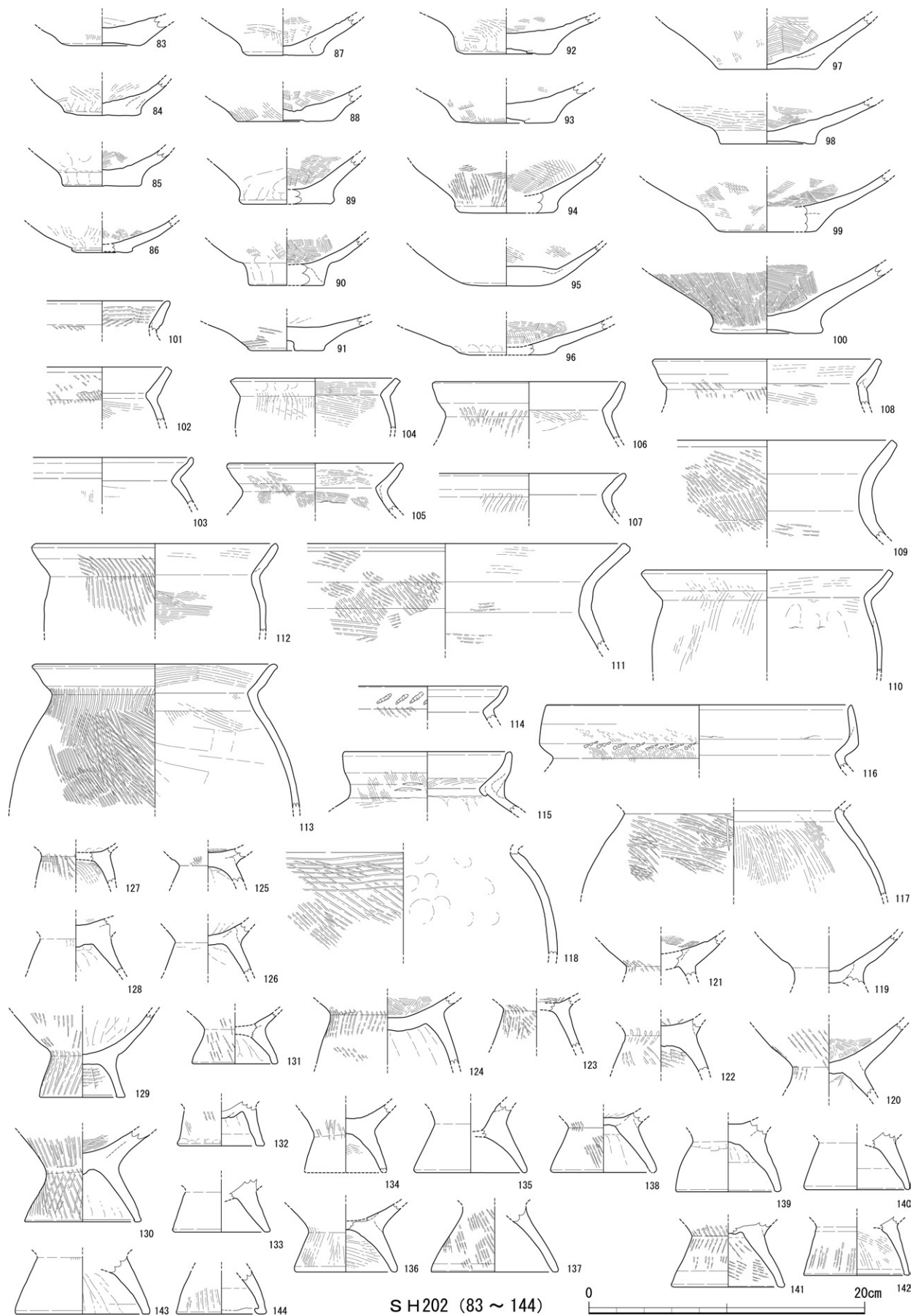
58~69は中・大型の壺の口縁部である。58~60は頸部から上方へ向かって直線的にのびており、直口壺に近い。59は内外面をハケによって調整している。60は頸部外面に突帯を貼り付けている。61も直口壺に近いが、緩やかに内湾する。口縁端部は不明瞭ながら内傾する面をなす。風化により調整は不明瞭であるが、頸部外面にわずかにタテハケが遺存している。62・63は短く外方へ開く。63の内面には先の尖つ

た工具によって平行する弧線6本程度からなる線刻が施されている。64~67は頸部から緩やかに外反する。65は口縁端部を外側に折り返して肥厚させており、口縁端部には列点文を施す。外面にはタテミガキ、内面にはハケの後にヨコミガキが施されている。66も口縁端部を外面への折返しもしくは粘土の付加によって肥厚させる。口縁端部は面をなし、列点文が施されている。頸部外面には細い突帯が貼り付けられている。68は口縁端部付近の破片で、口縁端部には棒状浮文を貼り付ける。ほとんど剥離しているが、3本一組であった可能性が高い。

70~74は頸部から体部にかけての破片である。70は広口壺と思われ、口縁部が途中で外方に明瞭に屈曲する。内面の屈曲部より上方には列点文が遺存しているが、矢羽根状文の一部の可能性もある。内外面とも赤彩が施されている。71も70と類似する形態の口縁部である。外面には風化等の影響もあって赤彩が確認できないが、70と同一個体の可能性もある。72は口縁部が頸部から直立気味に短く立ち上がった後に強く屈曲して外方へ大きく開く。頸部外面には突帯が貼り付けられており、その上下に列点文と思われるものが認められるが、列点文か判然としない。突帯が剥離した部分にはハケが認められる。73・74は頸部から体部上半にかけての破片である。73の体部内面には粘土接合痕とナデが明瞭に残る。74の体部内面にはハケが施されているが、かなり粗く、粘土接合痕が明瞭に残されている。

75・76は体部から底部にかけての破片である。75は体部片で、外面には直線文と列点文が施されている。直線文には途中で施文工具を止めた痕跡が認められるが、間隔は一定していないようであり、簾状文ではなく粗雑な直線文と思われる。列点文は棒状の工具によって施されている。76は体部下半の破片で、底部も一部遺存する。底部はボタン状に突出している。体部外面はハケを施した後に、幅広のヨコミガキによって調整されている。

77~100は底部である。77は小型のもので、体部がやや急に立ち上がっており、鉢の可能性もある。78も鉢の可能性もある。内面には3~4本一組の細かい引っ搔き傷状の痕跡が多数認められ、小動物の爪痕とも思われる。81・82は体部が球形を呈する壺



第155図 SH202出土遺物② (1/4)

の底部と思われる。底部外面中央は浅く凹んでおり、瓢形壺や内湾口縁壺の底部の可能性が高い。90は底部がボタン状に大きく突出している。91は底部外面中央に孔状の深い凹みを有する。また、底部外面には種子圧痕とも思われる痕跡が認められる。92・93は輪台状を呈する。94の外面には粗いハケが施されている。96は底の器壁が薄い。97～100は比較的大型の壺の底部と思われる。98は外面をヨコミガキで丁寧に調整している。100は底部が突出気味で、底部外面には線刻状の工具痕が認められる。

101～160は甕である。

101～113はく字状口縁甕である。101は口縁部内面に粗いハケを施している。102は口縁端部が明瞭な面をなす。103は口縁端部をやや上方へはね上げているように見受けられる。外面にはハケが施されている。104は小型でススの付着も認められず、鉢の可能性もある。106・108は口縁部が若干内湾し、口縁部上半の外面には強いヨコナデが施されているなど、受口状口縁甕に近い。107は体部外面に非常に粗いハケが施されている。109・111は大型のもので、頸部の屈曲はかなり緩い。口縁端部は面をなす。外面には粗いハケが施されている。大型の鉢とも考えられる。また、形態や調整が比較的類似しており、同一個体の可能性もある。110は口縁部から体部上半にかけて遺存する。口縁部はやや内湾し、口縁部上半外面には強いヨコナデを施す。106・108などと同様に受口状口縁甕に近いものと思われる。112・113も口縁部から体部上半にかけての破片である。112は頸部の締まりが弱く、体部は砲弾形に近い器形を呈するものと思われる。113は体部中位に最大径があると思われる。体部外面には全体に粗いハケが施されているが、頸部付近には特に粗いタテハケが認められる。112・113も口縁部上半外面には強いヨコナデが施されており、やはり受口状口縁甕の影響を受けたものと思われるが、口縁部はあまり内湾しない。

114～116は受口状口縁甕の口縁部である。114は内湾し、外面にはハケ状工具による粗雑な列点文が施されている。115は頸部の締まりが強い。体部外面に一部にミガキとみられる調整が認められることから、壺とした方が適当かもしれない。頸部には

外側に粘土を厚く貼り付け、補強している。頸部付近の外面には短い線刻状の工具痕が認められる。116は大型のもので、口縁部は強く屈曲し、上半は内傾しながら長くのびる。同様の形態の受口状口縁甕は、居林遺跡ではほかに出土していない。形態からは北陸地方や山陰地方の複合口縁甕との関係も考えうるが、外面に施された列点文などからみて、在地の受口状口縁甕の範疇で理解するのが適当であろう。

117・118は体部の破片である。117は外面に粗いハケをやや乱雑に施す。内面にもハケが施されるが、外面のハケより細かい。118は外面に斜め方向の粗いハケを施し、肩部にはヨコハケを施している。S字状口縁甕にも似るが、器壁が厚く、胎土も異なる。

119～144は台付甕の脚台部である⁵⁾。119～121は体部下半も一部遺存する。119は筒状の脚台部の上面を円板充填状に粘土を貼り付けて閉塞しているが、脚部と体部とが一体的に成形されているかは不明である。120は脚台部の上端縁部から体部を成形している。122・125・126・128なども、脚台部を成形してから、その上端縁部から体部を成形し、その後、底部内面⁶⁾に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。129は体部下半から脚端部にかけて遺存している。脚台部は直立気味で、脚端部は面をなす。脚部内面は断続的なヨコハケによって調整されている。130は底部付近の器壁が厚く、外面は全体的に粗いハケで調整されている。131～135は小型のものである。132は脚頂部中央に上面に充填された粘土が臍状にはみ出している状況が確認できる。ただし、充填された粘土の上面にも剥離痕が認められることから、脚台部及び体部下半の成形に際しては、植木鉢をひっくり返したような形態の脚台部を製作し、その後、脚台部上端縁部から体部を成形、そして内面から脚頂部の孔を塞ぐように粘土を充填し、さらに底部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行ったものと推測される。133は器壁がかなり厚い。135は底部の器壁が薄い。本来は、他の個体で認められるように底部内面に粘土が貼り付けられていた可能性もあるが、剥離した痕跡は明瞭ではない。136は底部内面に薄く貼り付けられた粘土が一部遺存している。外面のハケはやや細かい。137はハ字状に開く。138は底部に円板充填状に粘土を貼り付けて脚台部上面

を閉塞している。体部は脚台部の上端縁部から成形されている。139はやや内湾する。脚頸部付近にハケもしくは工具ナデに用いた工具のアタリとも思われる痕跡が連続的に残されている。140～142はいずれも脚台部上面に剥離痕跡が認められる。底部内面から貼り付けた粘土が剥離したものと思われる。144は小型のもので、やや内湾する。脚端部は内側に向かってL字状に屈曲するが、意図的な折り曲げではなく、成形時の荷重による潰れである可能性が高い。

145～160はS字状口縁甕である。145～158は口縁部である。いずれも外面に押引列点文が施されている。145・148・153・154・158などは口縁端部が外方へ強く引き出され、明瞭な内傾する面を有する。頸部内面には粗いヨコハケが施されている。147・157などではかなり長く引きずった押引列点文が施されている。150は頸部が強く屈曲し、押引列点文の間隔が狭く、体部内面を比較的細かいハケで調整するなど、S字状口縁甕としては違和感がある。胎土からみても、在地産の可能性が高い。151も口縁端部の外方への引き出しが弱く、押引列点文の間隔が狭いなどの特徴があり、在地産と思われる。156はさらに形態的に違和感がある個体で、全体的に器壁が薄く、口縁部上半は内傾する。口縁部外面の列点文はほとんど引きずっておらず、押引とはいいがたい。また、頸部内面のハケはタテハケに近い。一方で肩部にはS字状口縁甕と似た羽状のタテハケとヨコハケを施す。これについては、S字状口縁甕の模倣品として捉えられよう。

159は体部上半の破片である。外面には羽状のタテハケとヨコハケが施されている。器壁が厚く、胎土も黒雲母が肉眼で確認できないなど一般的なS字状口縁甕とは異なっており、在地産と思われる。

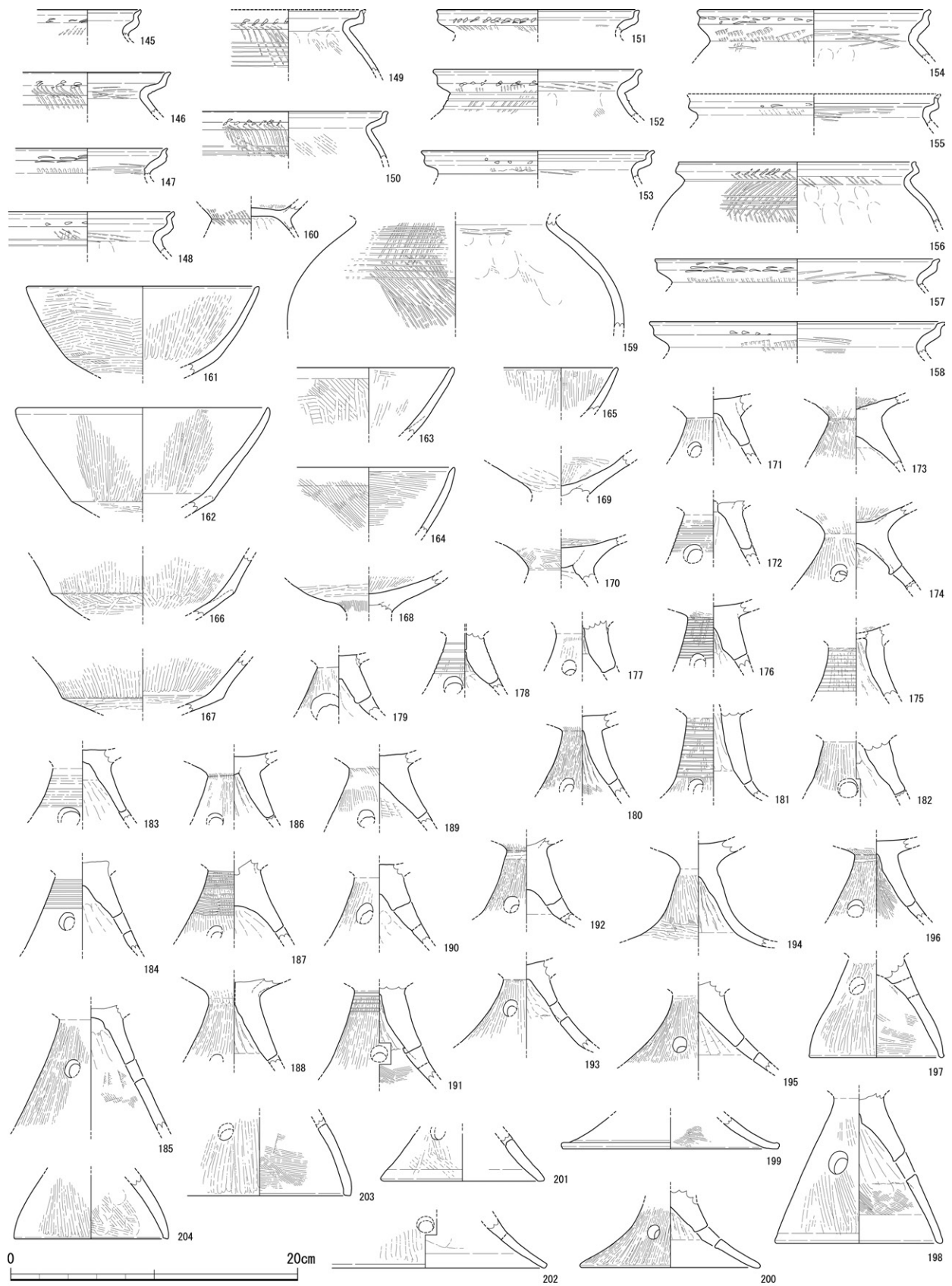
160は脚台部の破片である。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

161～204は高坏である。

161～170は坏部である。161は有稜高坏である。坏部外面の稜は不明瞭であるが、稜より上方は単位ごとに少し方向を変えて全体的に波状になるようにミガキを施すなど、調整が稜の上下で変化している。また、内面についてはタテミガキが施されている。

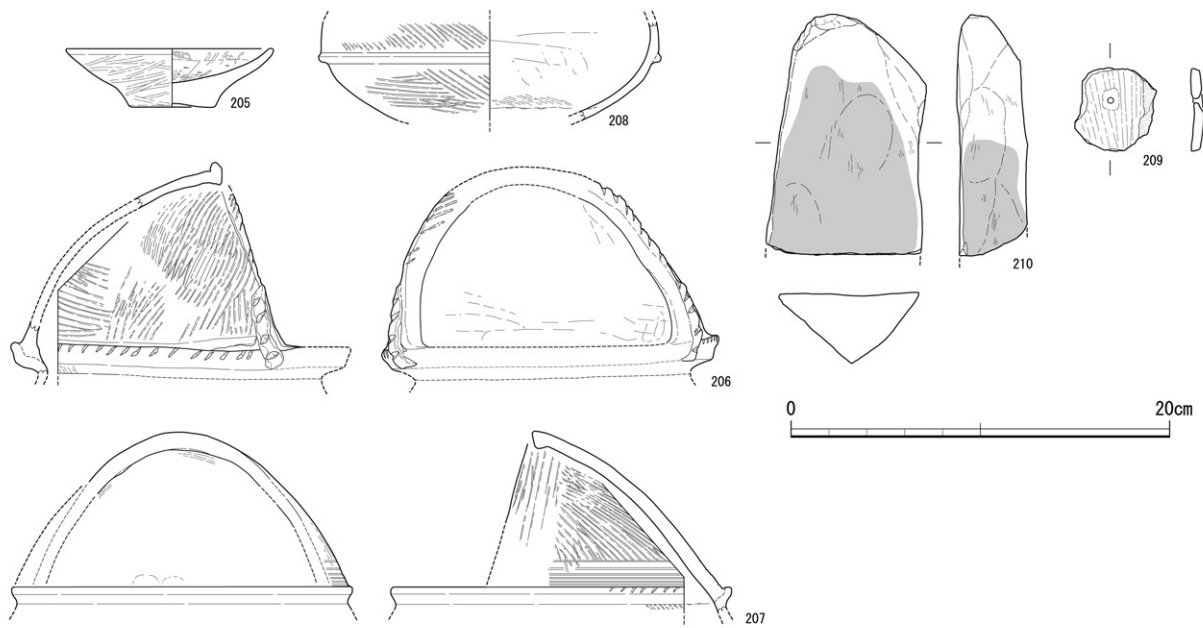
162・166・167も有稜高坏である。いずれも坏部外面の稜は明瞭で、外面は稜より上方をタテミガキ、稜より下方をヨコミガキによって調整している。163は外面にハケの後にタテミガキが施されているが、ミガキが粗くハケが顕著に遺存している。164は内外面ともハケで調整している。口縁端部に不明瞭ながら内傾する面が認められるため坏部としたが、脚部の可能性もあろう。168～170は坏部の底部付近の破片である。168・169はいずれも外面に脚部が剥離した痕跡が認められる。剥離部分は凸レンズ状に突出していることから、おそらく脚部上面に凹レンズ状の凹みがあり、その部分で剥離したものと思われる。170は筒状の脚部の上面を円板充填状に閉塞している。脚部と坏部とが一体的に成形されているかは不明である。

171～204は脚部である。171・172・184・185・187のようにハ字状に直線的に開くものや、175・180・191・192・193・196のように緩やかに外反しながら開くもの、197・203のように緩やかに内湾するものなどがみられる。172は内面頂部に軸芯痕が認められる。比較的太い棒状の工具による刺突と思われる。脚部上面は剥離しているが、軸芯痕はおそらく坏部内面までは貫通していなかったと推測される。178は軸芯痕と思われる孔が認められるが、この孔は途中で途切れている。詳細に観察すると、穿孔後に小さな粘土塊が内部に入り込み途中で詰まって、そのまま焼成されているようである。179はかなり大きい透孔が開けられている。187は上面が剥離しており、その中央部が孔状に凹んでいる。また、脚部外面上半には直線文が施されているが、線は幅広で浅く、ミガキに近い。188は上面の剥離面に孔が確認できる。かなり小さい孔のため確認が困難であるが、脚部内面まで貫通している可能性がある。その場合、軸芯痕とも考えられる。192の頸部外面にはヨコミガキと思われるものが施されている。196にも同様の調整が認められる。タテミガキの後に施されており、タテミガキの端部の粘土のはみ出しを処理するような目的で施された可能性も考えられよう。194は脚部中位で屈曲気味に大きく外反する、やや特異な形態のものである。屈曲部より下方はヨコミガキで調整されている。遺存している範囲では透孔は確

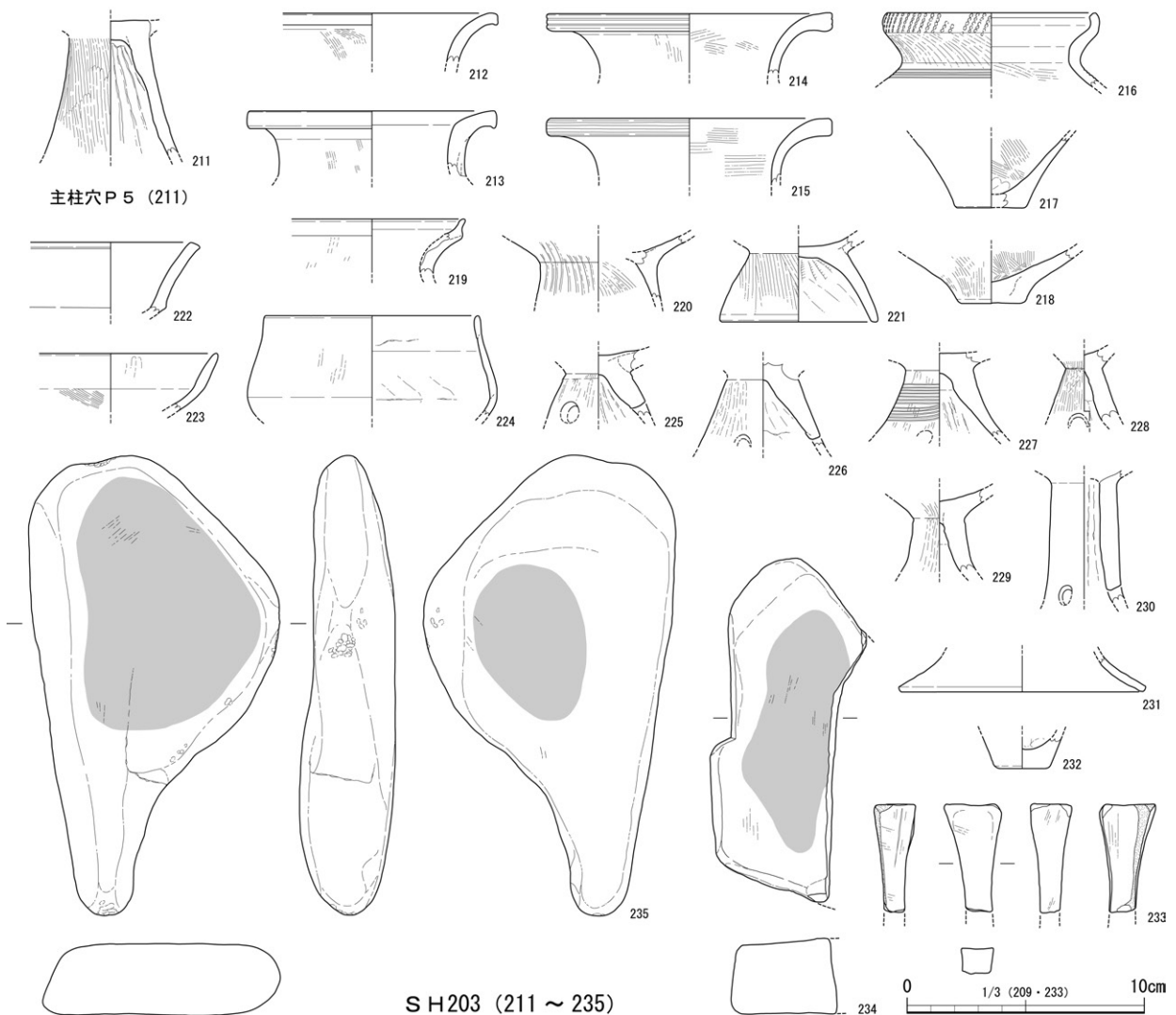


S H202 (145 ~ 204)

第156図 S H202出土遺物③ (1/4)



SH202 (205 ~ 210)



第157図 SH202出土遺物④、SH203出土遺物 (1/4、1/3)

認できず、透孔が開けられていなかった可能性がある。195は外反しながら外方へ大きく開く。196は3方向に透孔が開けられていると思われるが、位置には偏りがある。197は頸部から脚端部までが遺存する。緩やかに内湾し、透孔は高い位置に開けられている。198も比較的遺存状況が良好なものである。直線的にハ字状に開くが、わずかに内湾する。脚部上面には剥離した痕跡が認められ、凹レンズ状に浅く凹む。内面頂部には、棒状の工具を突き刺して軸を傾けて回転させたような、円錐形を呈する軸芯痕が認められる。頸部はやや細いように見受けられるが、本来はその側面から坏部が成形されていた可能性もある。200は外反しながら大きく開く、低い脚部である。小型の椀形高坏の脚部と思われる。203は明瞭に内湾している。脚端部は面をなす。204もやや内湾する。器壁は厚く、脚端部は面をなす。遺存している範囲では透孔は確認できない。高坏としては若干違和感があり、台付壺の脚台部とも考えられる。

205は鉢と思われる。浅い盃形を呈するが、口縁端部の遺存状況が悪く、壺の底部片の可能性も排除できない。ただし、外面には細いヨコミガキ、内面にはケズリの後に粗いタテミガキが施されている可能性が高く、こうした調整からみると鉢である蓋然性が高い。

206～208は手焙形土器である。206は覆部の破片である。全体的に器形に歪みが認められる。外面は粗いハケで調整されている。開口部の両側には棒状の装飾が貼り付けられ、刻目が施されている。鉢部の口縁部も一部遺存しており、受口状口縁の鉢で、口縁端部には列点文が施されている。207も覆部の破片である。外面は粗いハケで調整されるが、開口部付近はハケの方向を変えている。また、鉢部との接合部付近には直線文が施されている。鉢部の口縁部も一部遺存しており、受口状の鉢で、口縁端部には列点文が施されている。208は鉢部の体部片である。外面中位に細い突帯を1条貼り付けている。外面は全体的に粗いハケで調整されている。

209は埋土中から出土した土製品で、土器片を転用した円板である。内外面ともハケが残る壺または甕と思われる土器の体部片を加工したもので、径3.3

cmほどの円形に整形し、小孔を穿っている。軽量で孔が中心からずれる点などに問題は残るものの、紡錘車として使用された可能性も考えられる。

210は埋土中から出土した石製品で、台石である。砂岩の亜角礫をそのまま利用している。断面形は三角形を呈しており、3面のうち2面に顕著な摩滅が認められる。特に広い上面はかなり平滑となっている。また、明瞭な擦痕も認められ、砥石としても使用されたと思われる。

SH203 (第157図211～235) 211は支柱穴P5から出土した弥生土器高坏である。脚部の破片で、外面はハケとミガキによって調整されている。内面にはシボリ痕が顕著に残る。また、内面頂部には、粘土を貼り付けた痕跡が残る。

212～232は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

212～218は壺である。

212～216は口縁部である。213は頸部からやや直立気味に立ち上がり、上位で比較的強く外方へ屈曲する。口縁端部は面をなす。214・215は似た形態を呈するもので、比較的強く外反し、口縁端部は面をなし、擬凹線文が施されている。216は受口状口縁を呈する。口縁部の屈曲は強く、口縁部上半はやや内傾する。口縁端部は明瞭な面をなす。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施されている。また、肩部外面には直線文が施されている。頸部が強く締まることから壺としたが、外面にはススが付着しており、甕とした方が適当かもしれない。

217・218は底部である。217は体部が比較的急に立ち上がり、鉢または甕の底部の可能性もある。218は内外面ともハケで調整されている。

219～221は甕である。

219は受口状口縁甕の口縁部と思われる。緩やかに外反し、屈曲は明瞭である。口縁部上半は短く立ち上がり、やや矮小である。220・221は台付甕の脚台部である。220は外面に粗いハケを施している。221はやや内湾し、外面はハケで調整されている。

222～231は高坏である。

222～224は坏部である。222は有稜高坏で、坏部外面の稜は明瞭である。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は面をなす。223は椀形高坏と思われるが、

内外面に不明瞭ながら屈曲部も認められることから、有稜高坏の可能性も残る。ただし、外面がハケによって調整されている点には、高坏とするには若干違和感が残る。224はワイングラス形高坏である。風化が著しいが、外面にはごくわずかにミガキと思われる調整が遺存する。

225～231は脚部である。225は脚部上端縁部から坏部を成形し、その後、坏部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。227は脚部外面上半に直線文を施している。228・229はやや小型のものである。230は柱状脚に近い。下位には透孔が遺存しており、その付近で緩やかに屈曲してハ字状に開いていくものと思われる。内面にはシボリ痕が残る。231は脚裾部の破片である。

232は鉢である。小型の底部片で、内面にはオサエが残る。

233～235は床面上や埋土中から出土した石製品である。233は砥石で、小型で整った形状を呈する。肌理の細かい、硬質の凝灰岩製である。小口面以外の4面が使用されており、全面に細かい擦痕が残る。一部には鋭い傷状の線状痕も認められる。234・235は台石である。234は半分程度を欠損する。砂岩の扁平な垂円礫を特に加工せず利用しているが、上面はかなり平坦となっており、広範囲が顕著に摩滅している。また、不明瞭な擦痕も部分的に認められる。235はやや大型のもので、やはり砂岩の不整形な垂円礫を特に加工せず利用している。上面・下面ともに平坦となっており、両面に摩滅と擦痕が認められる。また、側縁や両端部には敲打痕も残り、敲石として使用された可能性もある。

S H 204 (第158～160図236～357) 236～356は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

236～266は壺である。

236～241は中型の壺の口縁部等である。236は短頸の瓢形壺で、口径はかなり大きく、太頸に近い形態である。口縁端部は丸く収められる。237は短頸壺で、底部を欠損するものの、ほぼ全形が復元できた。外面はハケで調整されている。内面には粘土接合痕とナデが顕著に残る。こうした形態の壺には口縁部付近に孔が穿たれていることが多いが、口縁部が部分的にしか遺存していなかったため、孔の有無

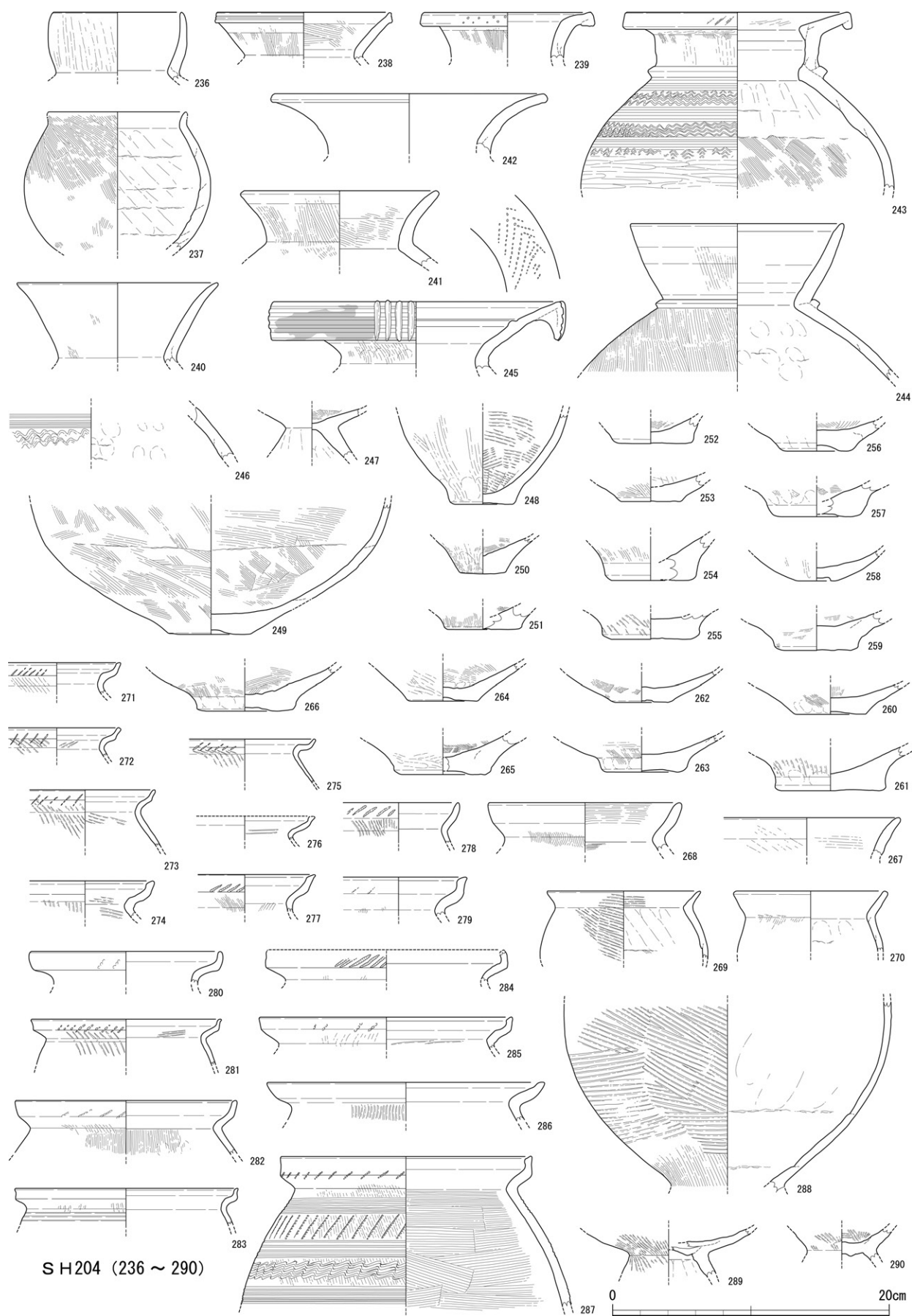
は不明である。238は頸部から直線的に開き、口縁端部は面をなす。口縁端部には擬凹線文が施されているように見受けられるが、ヨコナデの痕跡の可能性もある。239は上位で強く外方へ屈曲する。口縁端部には櫛状工具による列点文が施されている。240・241はやや外反しながらハ字状に開く。口縁端部は丸く収められる。

242～245は大型の壺の口縁部である。242は外反しながら大きく外方へ開く。243は体部上半まで遺存する。口縁部は頸部から直立して立ち上がり、中位で強く外方へ屈曲し、直線的に開く。口縁端部は粘土を貼り付けて垂下させ、列点文を施している。頸部外面には突帯が貼り付けられており、また、口縁部の屈曲部内面にも粘土を貼り付け、突帯状に突出させている。体部外面は幅広のヨコミガキによって調整されており、上半部には直線文と波状文を数段にわたって施している。244も体部上半が一部遺存している。口縁部はやや直立気味に上方へ立ち上がり、わずかに内湾する。口縁端部は不明瞭ながら内傾する面をなす。頸部外面には突帯が貼り付けられている。体部外面はハケで調整されている。245はいわゆるパレススタイル壺である。口縁部は直線的に外方へ開き、口縁端部は大きく垂下させ、擬凹線文を施し、棒状浮文を貼り付ける。棒状浮文は4本一組で4箇所配されている。口縁部内面の中位には細い突帯状のものが認められ、それより上方には矢羽根状文が施されている。口縁端部には赤彩が認められるが、棒状浮文が貼り付けられた範囲にはみられない。棒状浮文の貼り付け後に赤彩が施されたと考えられる。

246は体部片である。大型の壺で、外面には直線文と波状文が施されている。

247は台付壺の底部から脚台部にかけての破片と思われる。外面はナデによって調整されており、底部内面にはハケが施されている。

248～266は底部である。248は体部下半まで遺存する。内外面ともハケで調整されており、器形などからみても、鉢の可能性もある。249も体部下半まで遺存するものである。大型の壺で、内外面ともハケで調整されている。体部中位よりやや下方の内外面に明瞭な粘土接合痕が残っており、製作時の成形



第158図 SH204出土遺物① (1/4)

単位を示すものと思われる。250は小型のもので、鉢の可能性もある。外面にはハケとミガキが施されている。256は輪台状を呈する。258は体部が球形を呈するものと思われ、底部外面が円形に凹む。瓢形壺の底部の可能性が高い。263・266は底部がボタン状に若干突出する。264・265は外面に斜め方向の幅広のミガキが施されている。

267～309は甕である。

267～270はく字状口縁甕の口縁部等である。267は小片で、口縁端部は丸く収める。268はやや内湾し、口縁部上半外面には強いヨコナデが施されているなど、受口状口縁甕に近い。269・270は小型のもので、体部上半まで一部遺存している。269は外面全体を粗いハケで調整しており、口縁部内面にも一部ハケが認められる。

271～287は受口状口縁甕の口縁部等である。271～273・275・281は比較的類似する。器壁は薄く、口縁部は明瞭に屈曲し、口縁部上半は若干外方へ開く。口縁部外面には列点文が施されている。272・273・281は頸部内面に粗いハケが施されている。274は口縁部外面に列点文が確認できない。器壁は比較的厚い。277は外面では屈曲が明瞭で稜をなすが、内面は不明瞭で全体的に内湾する。口縁端部は明瞭な内傾する面をなす。278は口縁部の屈曲が弱い。口縁部外面には列点文を施す。283は口縁端部がわずかに外方に引き出されているようにも見受けられるが、調整などからみてS字状口縁甕ではなく受口状口縁甕の範疇で捉えられよう。肩部外面には直線文状のヨコハケが施されている。284は口縁部の屈曲が明瞭で、口縁部上半は内傾する。286は口縁部の屈曲が弱く、全体に内湾する。287は体部上半まで遺存し、同一個体と考えられる体部下半の破片も出土している。頸部及び口縁部の屈曲は明瞭で、口縁端部はわずかに凹む面をなす。口縁部外面の屈曲部には櫛状工具による列点文が施されている。体部は内外面ともハケで調整されており、外面には直線文と列点文、波状文を施している。器壁は比較的厚い。外面にはスス、内面にはコゲが付着している。

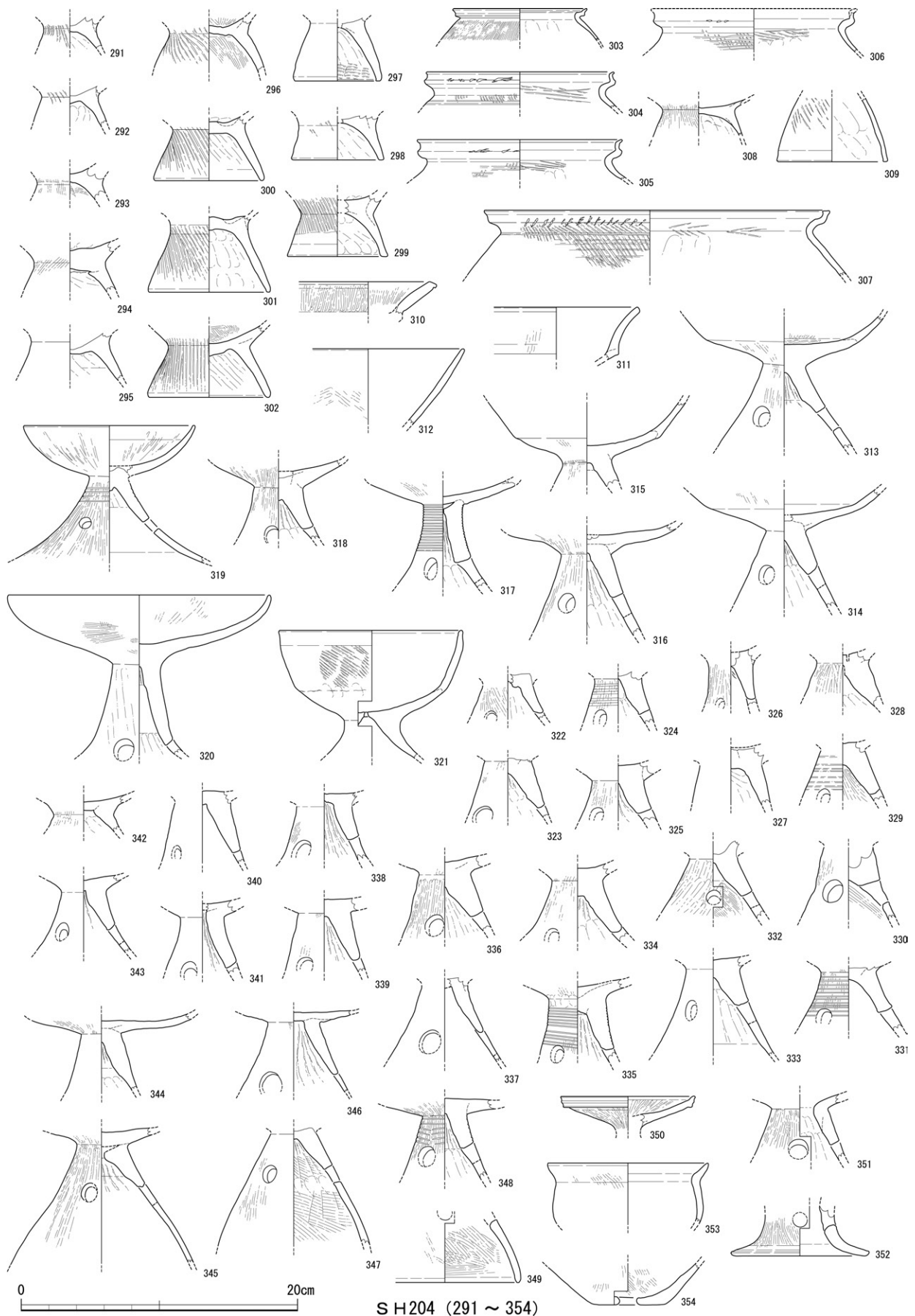
288～302は台付甕の脚台部等である。288は体部下半の破片で、一部に脚台部が剥離した痕跡が認められる。外面は粗いハケで調整されているが、脚台

部付近のみやや細かいハケが施されている。内面には粘土接合痕が明瞭に残る。289は脚台部の上面を粘土で閉塞し、さらに底部内面に粘土を貼り付けている。後者の粘土の貼り付けは体部内面に及んでおり、脚台部と体部との接合部を補強する目的があったと推測される。291～293は小型のものである。291・292は上面に剥離痕跡が認められる。294は脚頂部に粘土接合痕が認められるが、脚台部と体部をどのように接合したのかは不明である。ただし、底部がかなり厚く、単純に筒状の脚台部の上に体部を載せたものとは思えない。296は全体に内湾する。297はやや小型で器壁が厚い。内面下半には粗いヨコハケを断続的に施している。298は低く、直立気味である。脚端部は面をなす。300・301はかなり類似している。いずれも底部内面の脚台部上面にあたる部分に連続的な押圧を施し、それを埋めるように粘土を貼り付けている。外面には斜め方向の粗いハケを施し、脚端部は丸く収めている。

303～309はS字状口縁甕である。

303～307は口縁部である。303はやや小型で、頸部は強く屈曲する。外面に押引列点文は施されていない。頸部内面はナデで調整されている。肩部外面のハケは細かく、ヨコハケは認められない。304～306はいずれも外面に押引列点文が施されており、頸部内面には粗いハケを施す。304・305は口縁端部が強く外方へ引き出されている。305と306は接合しないが同一個体の可能性がある。307は肩部まで一部遺存している。口縁部上半はわずかに外側に開く。口縁端部は幅広の面をなすが、外方への引き出しは弱い。ただし、部位によって若干形状に差異がある。口縁部外面には押引列点文が施されているが、あまり長く引きずっておらず、間隔も狭い。頸部外面には沈線状の痕跡が認められるが、明確な沈線ではなく、ヨコハケを施した際の工具のアタリなどと思われる。全体的にS字状口縁甕としては違和感がある個体で、胎土からみても、模倣品と考えられる。

308・309は脚台部である。308は底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土を貼り付けていると思われるが、不明瞭である。309は緩やかに内湾し、脚端部は面をなす。器壁は薄い。脚端部に明確な折り返しは認められない。



第159図 SH204出土遺物② (1/4)

310～349は高坏である。

310～318は有稜高坏の坏部から脚部にかけての破片である。310は口縁部の小片で、口縁端部は面をなす。内外面ともタテミガキによって調整されている。311は坏部外面の稜がシャープである。口縁部は外反する。312は外面にヨコミガキがわずかに遺存するが、おそらく単位ごとに少し方向を変えて全体的に波状になるように施されている。313・314は脚部がかなり遺存する。坏部の屈曲は緩く、外面の稜も不明瞭である。313の脚部はわずかに内湾する。315は坏部が深いものと思われる。316は脚部を成形し、その上面に坏部を載せ、頸部に粘土を貼り付けて接合しているように見受けられる。317も同様の成形がなされており、脚部上面が凹レンズ状に凹んでいるため、その上に接合された坏部との間に隙間が生じている。318は脚部上端縁部から坏部を成形しているものと思われる。脚部上面の凹みに粘土を充填し、さらに坏部内面に粘土を薄く貼り付けて補強・整形を行っている。

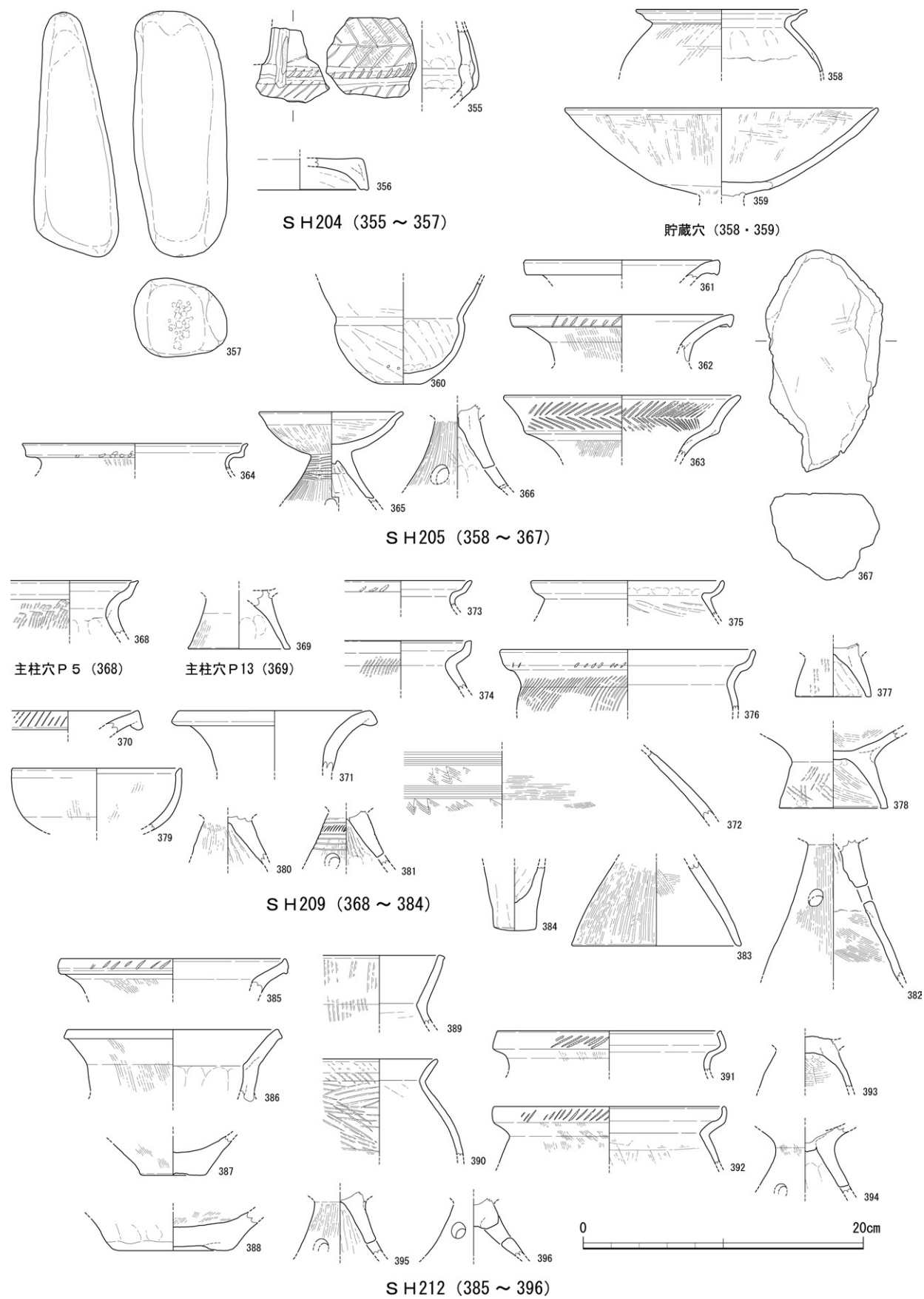
319～321は椀形高坏である。319は坏部が小型である。坏部は内外面ともタテミガキで調整され、口縁端部は丸く収められる。脚部は外反しながら大きくハ字状に開く。脚部外面上半には直線文が認められる。透孔はやや小さい。320は坏部が浅く、口縁部付近で強く内湾する。口縁端部は丸く収められる。坏部外面はハケで調整されているが、一部にミガキも施されているとみられる。脚部は下半部で緩やかに屈曲し、外方へ開く。脚部外面はナデもしくは幅広のミガキによって調整されている。321は坏部が深い。坏部下半には粘土接合痕が残り、その付近で若干屈曲している。坏部外面は粗いハケで調整されており、オサエも残るなど、全体的に粗雑な印象を受ける。台付鉢とする方が適当かもしれない。坏部内面中央部には、脚部内面まで貫通する小孔が認められる。焼成前穿孔の可能性もある。

322～349は脚部である。322・325・338のように透孔付近から緩やかに外反しながら外方へ開くと思われるものや、333・334・337・343のように全体的に外反しながらハ字状に開くもの、327・332・348のように直線的にハ字状に開くと思われるもの、345・347・349のように内湾するものなどがみられる。324・

329・331・335・348は脚部外面上半に直線文を施しているが、こうしたものは、どちらかといえば少数派である。326は少し細身の脚部である。328は脚部内面頂部に軸芯痕が認められる。また、坏部内面にも細い棒状工具による刺突が2箇所認められるが、脚部内面まで貫通していない。331は頸部が太い。332は脚部上面が大きく凹み、剥離した痕跡が残る。坏部成形時に、この凹みに粘土を充填して埋めたものと思われる。335は坏部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行った痕跡が、破断面で確認できる。また、脚部内面頂部にも、粘土を充填するように貼り付けている様子が認められる。342は頸部が太く、全体的に器壁が薄い。台付甕にも近い形態であるが、外面にはミガキが施されている。台付壺の可能性もあろう。筒状の脚部の上面に、坏部内面から粘土を円板充填状に貼り付けて閉塞している。344は坏部がかなり遺存しており、有稜高坏の可能性が高い。脚部上端縁部から坏部を成形している。345・346は脚部上面に坏部を載せ、接合しているものと考えられる。345は脚部上面が凹レンズ状に凹んでいるため、その上に接合された坏部との間に隙間が生じている。347も脚部上面に坏部を接合したものとみられるが、風化により不確実である。透孔は脚部のかなり高い位置に開けられている。内面は全体的にハケで調整されている。348は脚部上端縁部から坏部を成形している。脚部外面上半に施された直線文には、始点と終点のずれが認められる。349は脚裾部の破片で、脚端部は丸く収められる。内面はハケで調整されている。

350～352は器台である。350は小型器台の受部で、わずかに内湾する。口縁端部は面をなし、擬凹線文が施されている。内外面ともタテミガキで丁寧に調整されている。351は頸部付近の破片である。頸部は明瞭に屈曲し、受部は直線的に大きく外方へ開く。外面はハケを施した後にタテミガキによって調整されている。352は脚裾部の破片である。脚部下半で強く外反する。透孔は4方向に開けられていると推測される。外面はハケで調整されている。大きさや形態などからみると、台付壺の脚台部の可能性も考えられる。

353は鉢である。く字状口縁の鉢で、口縁部は頸



第160図 S H204出土遺物③、S H205・209・212出土遺物 (1/4)

部で明瞭に屈曲し、短く外方へ開く。口縁端部は丸く収められる。頸部の縮まりは弱く、体部は半球形を呈するものと思われる。

354は有孔鉢である。底部片で、器壁は比較的薄い。内外面ともハケが施されている。

355は手焙形土器である。同一個体と考えられる2片がある。鉢部の口縁部付近から覆部にかけての破片で、開口部が一部遺存している。開口部の側面には棒状の装飾が貼り付けられている。鉢部の口縁部は受口状を呈していると思われ、口縁端部から覆部を成形し、接合部には細い突帯状に粘土を貼り付け、列点文を施している。覆部外面にはヘラ状工具によって矢羽根状文が描かれており、鉢部にも斜行沈線が認められる。

356は器種が不明なものである。小片のため、全体の形状は不明で、一見すると、平面が円形の浅い皿状のもののように思われる。ただし、内面の工具ナデ等の調整が比較的粗雑であることから、内面側を下に向けた蓋状のものとして図化した。あるいは、装飾高坏の脚端部かもしれない。

357は埋土中から出土した石製品で、敲石である。砂岩の細長い円礫を利用しており、一端に明瞭な敲打痕が認められる。もう一端にも、わずかに敲打痕が残る。

S H 205 (第160図358~367) 358・359は貯蔵穴から出土した土師器である。

358はS字状口縁甕の口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部の屈曲は緩いが、外面には明瞭な稜が認められる。口縁部上半は緩やかに大きく外反し、口縁端部は丸く収められる。頸部外面には沈線状の痕跡が認められる。体部外面には、頸部から少し下方にヨコハケがわずかに残る。頸部内面はヨコナデによって調整される。359は有稜高坏の坏部である。坏部全体がほぼ遺存している。かなり浅い坏部で、口縁端部は丸く収められる。内外面ともハケを施した後にヨコミガキを施し、さらにタテミガキによって調整されている。底部の脚部との接合部付近には、打撃による穿孔と思われるものが認められる。

360~366は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

360~363は壺である。360は小型丸底壺である。頸部はあまり縮まらず、屈曲も緩い。体部は半球形を呈するが、底部は平底である。外面は工具ナデで調整されており、一部にケズリとみられる痕跡も認められる。内面はナデで調整され、底部付近にはオサエが残る。全体的に、調整は粗雑な印象を受ける。また、体部下半の外面に、細い棒状工具が当たったような小さな刺突が2箇所認められる。361・362は緩やかに外反しながら開く口縁部である。362は口縁端部が面をなしており、若干下方へ垂下させている。363は二重口縁壺の口縁部で、いわゆる柳ヶ坪型壺である。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁端部は不明瞭ながら内傾する面をなす。外面にはハケが施されている。二次口縁の内外面にはハケ状工具による大ぶりの矢羽根状文が施されている。

364はS字状口縁甕の口縁部である。全体的に器壁が薄い。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁端部はわずかに外方へ引き出されている。外面には押引列点文と思われるものが施されているが、不明瞭である。受口状口縁甕とも考えられる。

365・366は高坏である。365は小型の椀形高坏であるが、小型器台とする方が適当かもしれない。坏部は浅く、口縁部付近には強いヨコナデが施され、わずかに外反する。坏部外面にはタテミガキが施されているが、内面はヨコミガキによって調整されている。脚部外面上半には粗雑な直線文が施されている。366は脚部である。上面が凹レンズ状に凹み、剥離痕跡が残る。この部分には渦巻状の粘土の接合痕がわずかに観察され、本来は筒状であった脚部の孔を、ロール状に丸めた粘土を詰めて閉塞した可能性がある。また、脚部内面頂部には細い軸芯痕が認められる。

367は埋土上層から多数検出された礫の中に含まれていた石製品である。ホルンフェルスの垂円礫を利用した台石と思われる。平坦な面を有し、そこに不明瞭な摩滅及び擦痕が認められる。

S H 209 (第160図368~384) 368は支柱穴P5から出土した弥生土器・土師器である。受口状口縁甕の口縁部の小片で、頸部は緩やかに屈曲し、口縁端部は明瞭な面をなす。外面には粗いハケが施されている。

369は支柱穴P13から出土した弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、直線的にハ字状に開き、脚端部は面をなす。

370～384は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

370～372は壺である。370・371は口縁部で、口縁端部は下方へ垂下する。372は大型の壺の体部片で、外面には直線文と波状文が施されている。

373～378は甕である。

373～376は受口状口縁甕の口縁部である。373は器壁が薄く、外面に列点文を施している。374は頸部が明瞭に屈曲し、口縁部の屈曲も明瞭である。口縁端部は面をなす。375も頸部の屈曲が明瞭で、頸部内面は内側に突出気味である。口縁部は全体的に強く内湾し、内面には連続的なオサエが残る。体部内面には太い筋状の工具痕が連続して残されており、粗雑な工具ナデによる調整と思われる。376は頸部の屈曲が緩い。口縁部の屈曲部の外面に刻目状の列点文が施されている。

377・378は台付甕の脚台部である。377は小型のものである。脚台部の上端縁部から体部を成形しており、その剥離痕跡が残る。上面にも、底部内面に貼り付けた粘土の剥離痕跡が認められる。378はやや低い脚台部で、直線的にハ字状に開く。内外面ともハケで調整されるが、内面のハケは若干細かい。

379～383は高坏である。

379は椀形高坏の坏部である。口縁端部は明瞭な内傾する面をなす。

380～383は脚部である。381は外面に直線文と爪状工具による列点文が施されている。382は比較的高い脚部で、直線的に外方へ開くが、下半部ではわずかに内湾している。383は脚部下半で、やや内湾する。

384は鉢と思われるものである。全体に細身の器形を呈しており、底の器壁はかなり厚い。形態からみると坏部が剥離した高坏脚部とも思われるが、坏部の剥離痕跡が明瞭ではないことと、内外面ともナデによって調整されており、一般的な高坏とは異なることから、鉢とした。

S H212 (第160図385～396) 385～396は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

385～388は壺である。385・386は口縁部で、頸部から直立気味に立ち上がった後に、外方へ明瞭に屈曲する。いずれも外面はハケで調整されており、385の口縁端部には列点文が施されている。387・388は底部である。387は底部外面の、中央から少しずれた位置に凹みが認められる。

389～393は甕である。389・390はく字状口縁甕である。389は口縁部が直線的に長くのび、口縁端部は面をなす。大型鉢の可能性も考えられる。390は口縁端部を丸く収める。体部外面には粗いハケがやや乱雑に施されている。391・392は受口状口縁甕である。391は口縁部が強く屈曲し、口縁部上半は内傾する。口縁端部は明瞭な面をなす。392は口縁端部に明瞭な面は認められない。体部内面はハケに近い工具ナデによって調整されている。393は台付甕の脚台部である。脚台部の上端縁部から体部を成形している。

394～396は高坏の脚部である。394は筒状の脚部の上面に粘土を充填して円板充填状に閉塞しているが、その上面に剥離痕跡が認められ、その上からさらに補強・整形のために粘土を貼り付けていたことが窺われる。脚部と坏部が一体的に成形されていたかは不明である。395は上面に凹レンズ状の凹みと剥離痕跡が認められるが、その中央部に小孔と思われるものが遺存している。坏部成形後、坏部内面から刺突によって孔を穿っていた可能性がある。396はかなり高い位置に透孔が開けられている。

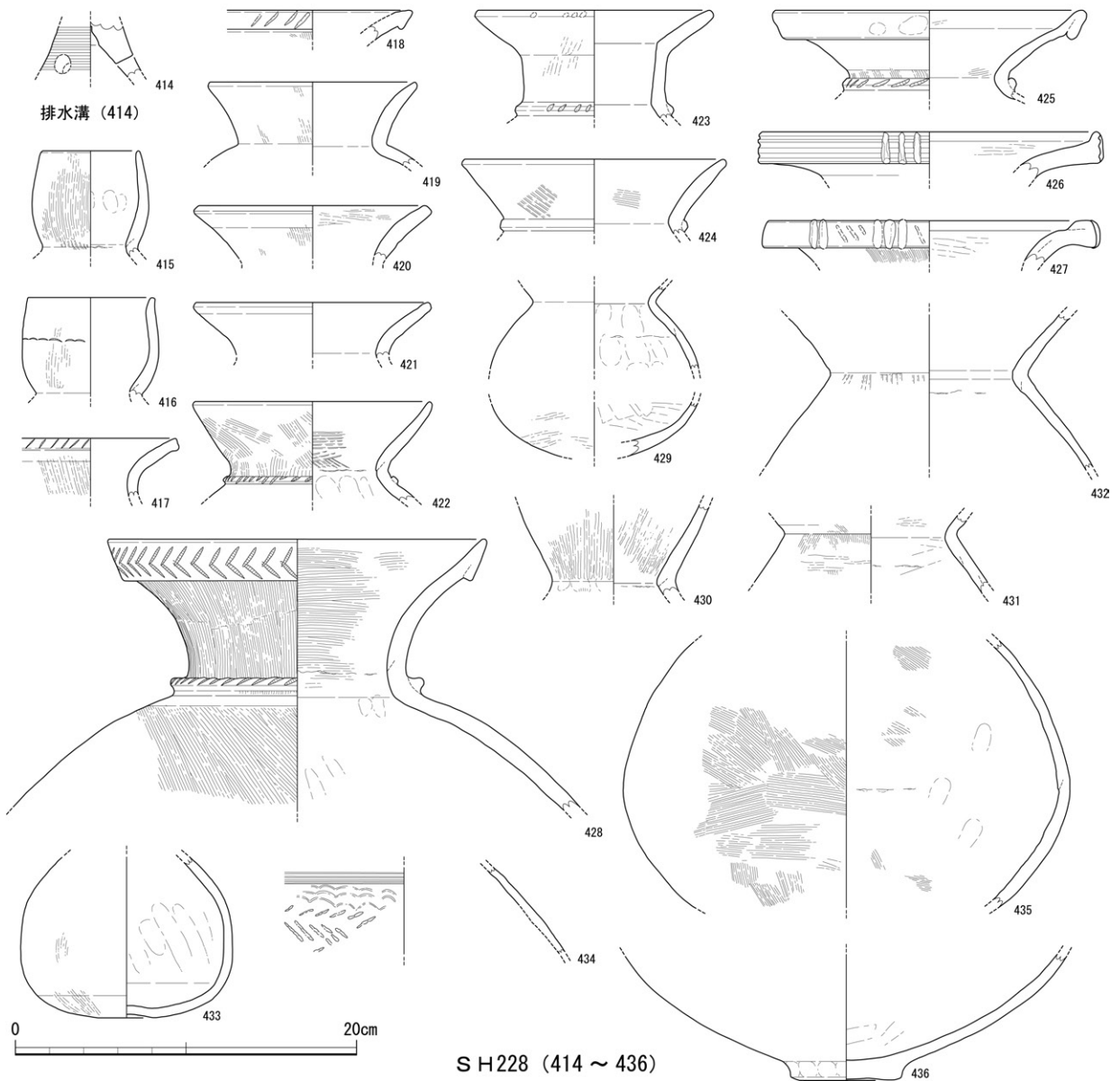
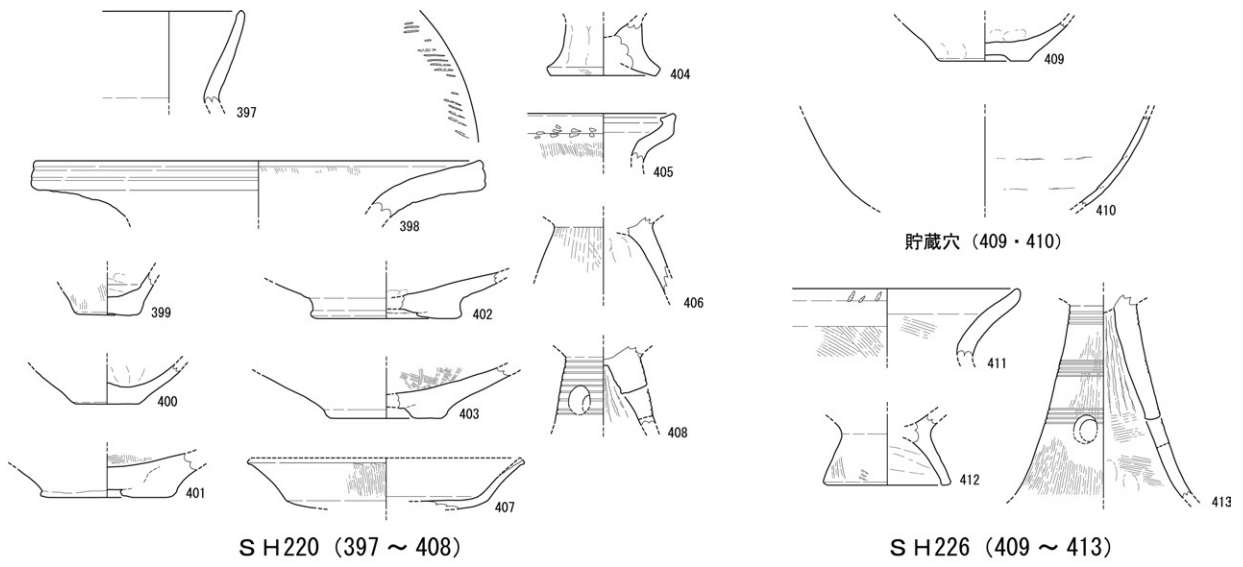
S H220 (第161図397～408) 397～408は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

397～404は壺である。

397・398は口縁部である。397は直口壺と思われるもので、頸部から直立気味に、わずかに内湾しながら上方へのびる。口縁端部は丸く収められる。398は大型の壺で、口縁端部は面をなし、擬凹線文が施されている。棒状浮文が貼り付けられていた可能性もある。口縁端部付近の内面には、ハケ状工具による列点文が施されている。

399～403は底部である。399は小型で、器形などからみて鉢の可能性もある。401～403は輪台状の底部で、402は底部がボタン状に突出する。

404は台付壺あるいは台付鉢の脚台部と思われる。



第161図 SH220・226出土遺物、SH228出土遺物① (1/4)

小型で低いもので、外面はナデによって調整されている。脚端部は面をなす。被熱は認められない。

405・406は甕である。405は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部上半は短く立ち上がり、口縁端部には強いナデが施されており、明瞭な面をなす。外面には列点文が施されている。406は台付甕の脚台部である。上面には剥離痕跡が認められ、連続的なオサエが残る。

407・408は高坏である。407は有稜高坏と思われる。小型で器壁が薄い。口縁端部は面をなす。外面には細かなタテミガキが施されている。408は脚部で、上面は凹レンズ状に凹み、剥離痕跡が認められる。外面上半には直線文が施されている。

S H226 (第161図409~413) 409・410は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。409は壺の底部である。410は甕の体部である。器壁の遺存状況が悪く調整は不明瞭であるが、内面には粘土接合痕が明瞭に残る。

411~413は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

411は壺の口縁部である。内外面ともハケで調整され、口縁端部には列点文がわずかに遺存する。412は台付甕の脚台部である。やや小型で、脚端部は面をなす。413は高坏の脚部である。比較的高い脚部で、頸部から八字状に直線状に開き、下半部で緩やかに外反する。脚部外面上半には直線文が3段に施されている。また、上面には剥離痕跡が認められる。筒状の脚部の上面に、円板充填状に粘土を貼り付けて閉塞したものと思われる。

S H228 (第161~163図414~535) 414は排水溝から出土した弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、外面上半に直線文を施している。

415~535は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

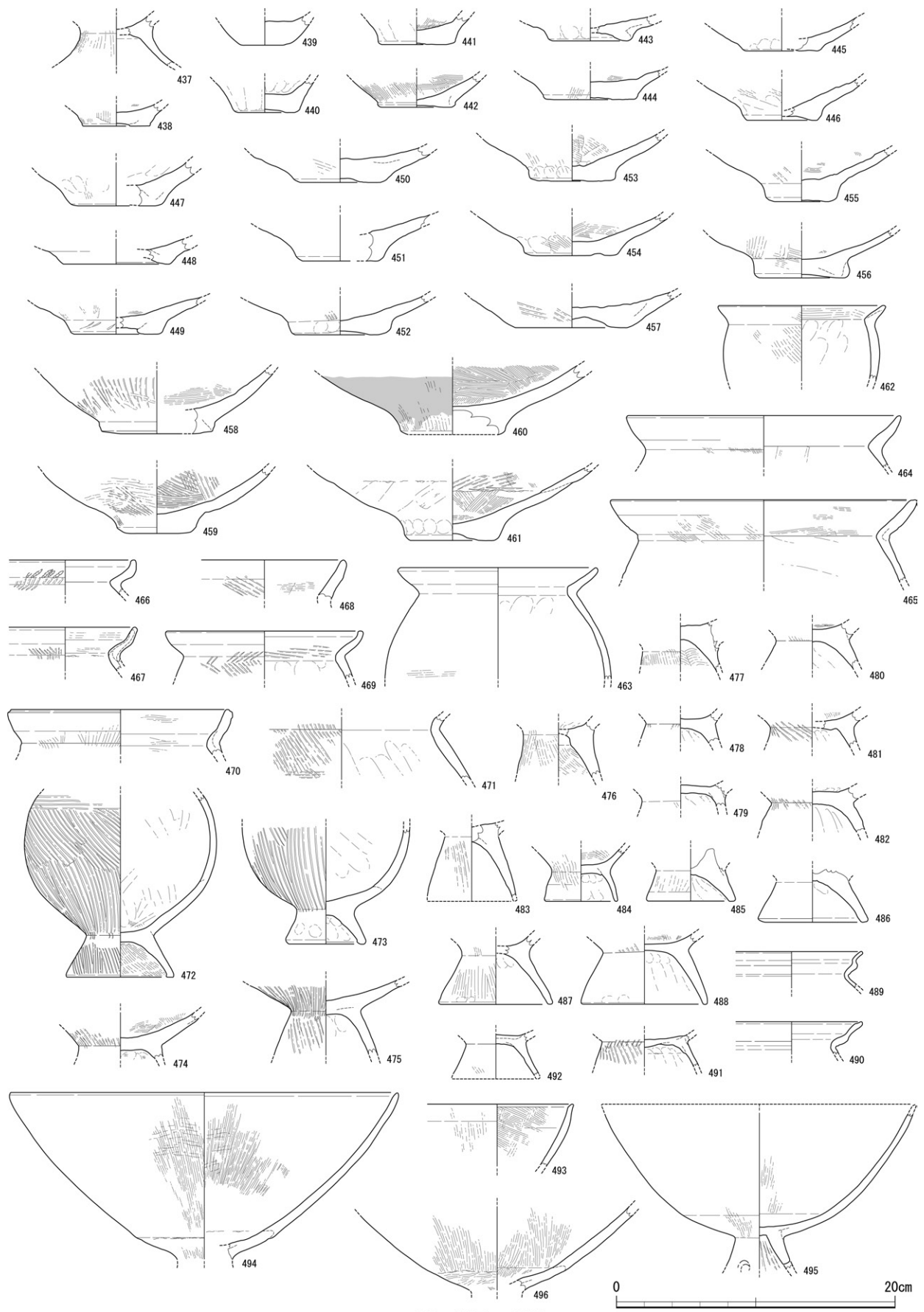
415~461は壺である。

415~424は小・中型の壺の口縁部である。415・416は短頸の瓢形壺である。415は無文で、口縁端部は丸く収める。416は口縁端部が不明瞭ながら内傾する面をなす。外面中位には、二枚貝の貝殻腹縁による連弧文が施されている。417・418は口縁端部が面をなし、列点文が施されている。419~421・424

はわずかに外反しながら外方へ開く。口縁端部は不明瞭な面をなす。422は若干内湾する。頸部外面には細い突帯を貼り付け、刻目を施す。423は頸部から直立気味に立ち上がり、中位で強く外方へ屈曲し、直線的に開く。口縁端部には列点文が施されていると思われるが、遺存状況が悪く不明瞭である。頸部外面には突帯が貼り付けられている。425~428は大型の壺の口縁部である。425は口縁端部を外方へ大きく折り返して肥厚させるとともに面を作る。この面には浅い不整形な円形の凹みが認められ、円形浮文が剥離した痕跡と思われる。頸部外面には突帯が貼り付けられており、その付近にハケが遺存している。426は口縁端部を上方に拡張し、広い面を作り、擬凹線文を施すとともに、棒状浮文を貼り付けている。427は口縁部内面に粘土を貼り付けて肥厚させ、口縁端部に面を作り出し、列点文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は3本が一組となっていたと思われる。428は体部上半まで遺存する。口縁端部を外方へ折り返して幅広の面を作り出し、ハケ状工具による矢羽根状文を施している。頸部外面には比較的高い突帯を貼り付けている。口縁部内外面及び体部外面はハケで調整されている。

429~432は頸部付近の破片である。429は小型の壺で、同一個体と考えられる体部下半の破片も一部遺存している。体部は球形を呈し、外面にはヨコミガキが施されていると思われる。430は口縁部が若干内湾している。内外面ともミガキで調整されており、内湾口縁壺の可能性が考えられる。431は甕の可能性もあるが、体部外面及び口縁部内面にミガキが施されていることから壺と考えられる。432は口縁部が直線的に外方へ開く。頸部外面に粗いハケがわずかに認められる。

433~436は体部の破片である。433は小型の壺の体部で、やや下ぶくれの球形を呈する。底部外面は凹んでおり、瓢形壺と考えられる。434は大型の壺の肩部で、外面に直線文と波状文、矢羽根状文が施されている。全体的に遺存状況が悪く、内面は風化による器壁の剥離が著しい。435は球形を呈する体部で、内外面ともハケで調整される。内面の中位には粘土接合痕が残る。436は体部下半から底部にかけての破片である。底部は若干ボタン状に突出し、



第162図 SH228出土遺物② (1/4)

外面には連続的なオサエが認められる。同一個体と考えられる広口壺の口縁部片も出土している。

437は台付壺の底部から脚台部にかけての破片である。脚台部は外反しながら大きくハ字状に開く。外面はハケで調整されている。

438～461は底部である。438は輪台状を呈する。439は小型のもので、底の器壁が厚い。440・441は外面をナデで調整している。443は上げ底状を呈する。449は輪台状の底部で、ややボタン状に突出する。外面には連続的な工具痕が認められる。455・456の底部はボタン状に突出する。456は破断面で粘土接合痕が比較的明瞭に観察できる。457は明瞭な上げ底状を呈しており、外面には粗いハケが施されている。458・459は外面に粗いハケを施しているが、その後にミガキで調整している。また、458では一部にケズリと思われる痕跡も認められる。460は外面に赤彩が施されている。461は外面が工具ナデで調整されている。また、内外面に粘土接合痕が明瞭に残るなど、全体的に粗雑な印象を受ける。内面ではこの粘土接合痕を境としてハケの粗さに変化が認められ、製作時の成形単位やそれに応じた工具の使い分けを示していると思われる。

462～492は甕である。

462～465はく字状口縁甕である。462は小型のもので、口縁部から体部上半が遺存する。口縁部は短く外方へ屈曲する。体部外面及び口縁部内面はハケで調整されている。463も口縁部から体部上半にかけて遺存している。口縁部は直線的に開くが、ごくわずかに内湾している。外面にはススが付着している。464・465は口縁部片で、いずれも口縁部上半外面にヨコナデが施されており、わずかに内湾する。受口状口縁甕に近い形態である。465は口縁端部が不明瞭ながら面をなす。

466～470は受口状口縁甕の口縁部である。466は口縁部が緩やかに屈曲し、口縁端部は面をなす。467は破断面で粘土接合痕が比較的明瞭に観察でき、頸部に口縁部を接合した後に、その内外面に粘土を付加して成形していることが窺われる。468は口縁部の屈曲が不明瞭であるが、屈曲部外面は若干稜をなす。口縁端部は丸く収められる。469・470も口縁部の屈曲は緩く、全体的に内湾する。469の頸部内面

には粗いハケが施されている。

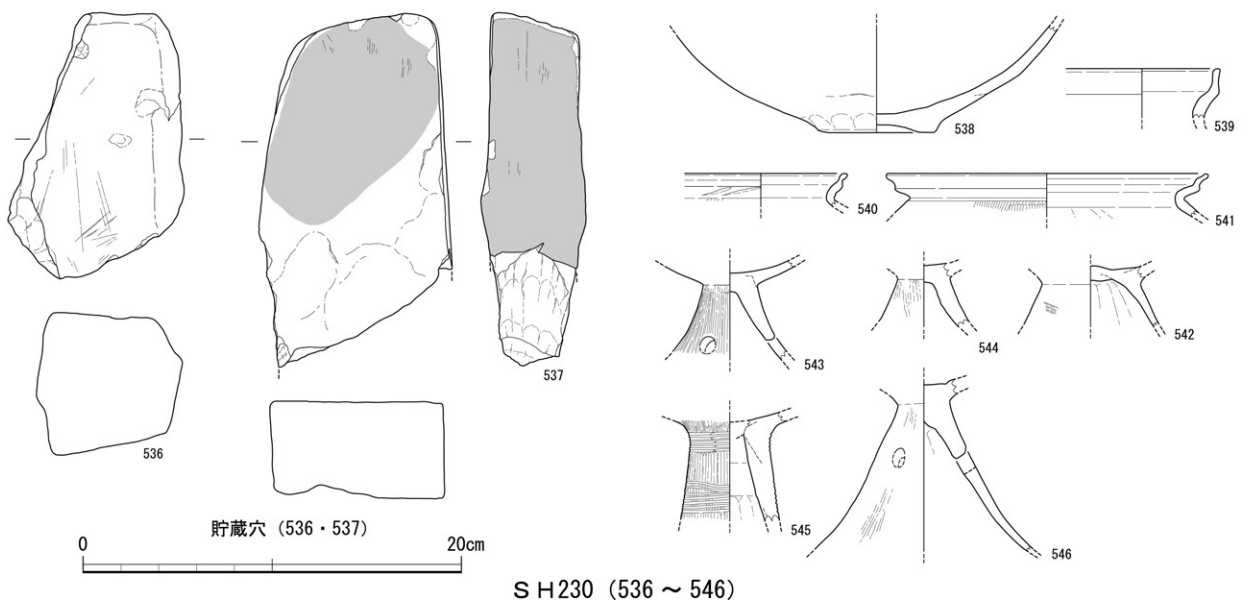
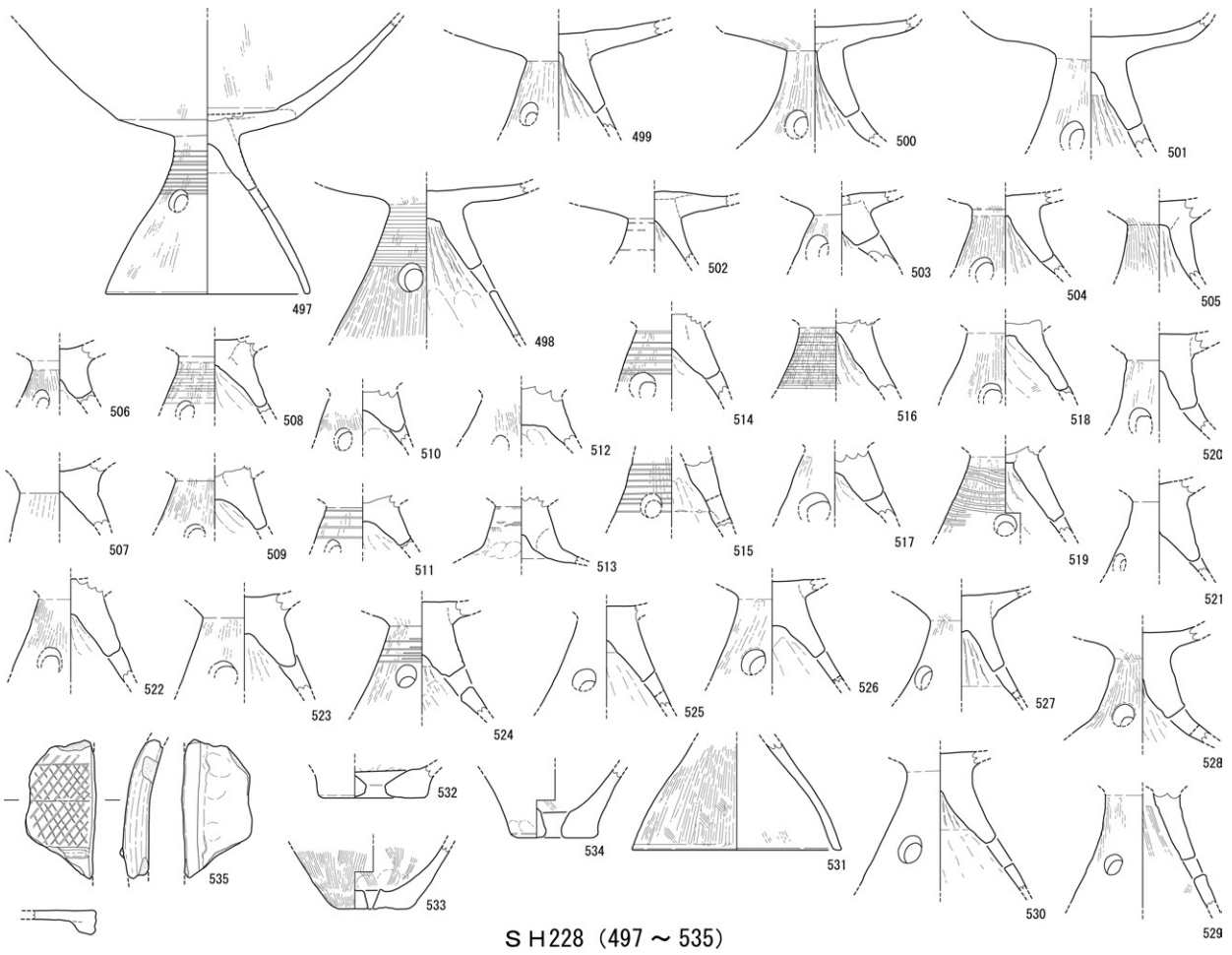
471は頸部付近の破片である。外面には粗いハケが施されており、一部にはヨコハケとみられるものも遺存している。

472～488は台付甕の脚台部等である。472は体部がほぼ復元できた。小型のもので、外面は全体的に粗いタテハケで調整され、肩部にはヨコハケが施されている。脚台部は直線的にハ字状に開き、脚端部は面をなす。473は体部下半から脚台部にかけて遺存している。小型のもので、体部外面には粗いタテハケが施されている。脚台部には内外面ともナデやオサエが認められる。脚台部の器壁は厚い。475は体部外面には粗いハケが施されており、脚台部外面にも粗いハケが認められるが、ナデが施されているのか、不鮮明である。476・477は内外面ともハケで調整されている。476は器壁が厚く、やや直立気味である。479は脚台部の上端縁部から体部を成形している。脚頂部にも粘土を貼り付けた痕跡が認められるが、粗い砂粒を含むものではない。481・482は外面に粗いハケを施している。483は小型であるが、直立気味に高く立ち上がる。484は小型で低いもので、脚頂部に粘土を詰めたような痕跡が認められる。485も小型で低い脚台部であるが、器壁が厚い。上面が大きく凹んでおり、剥離痕跡が認められる。体部成形時にこの凹みを埋めるように粘土を充填していたと考えられる。上端縁部には体部が剥離した痕跡も認められる。487・488は脚裾部外面に不明瞭なオサエが残る。

489～492はS字状口縁甕である。

489・480は口縁部で、いずれも器壁は薄い。489は口縁部の屈曲が明瞭で、口縁部上半は内傾し、口縁端部は大きく外方へ引き出されている。外面に押引列点文は認められない。また、頸部外面には沈線状のものが認められる。490は口縁部の屈曲がやや不明瞭で、口縁部上半は外反しながら大きく開く。口縁端部上面には、浅い凹線状を呈する不明瞭な面が認められる。頸部外面には沈線が認められる。

491・492は脚台部である。491は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。492は小型のもので、外面にはハケがわずかに遺存している。底部内面の全体に粗い砂粒を含む粘土を貼り



第163図 SH228出土遺物③、SH230出土遺物 (1/4)

付けている。脚頂部にも同様の粘土が貼り付けられていたと思われるが、明確ではない。

493～531は高坏である。

493～501は有稜高坏である。493は口縁部の破片で、口縁端部は内傾する面をなす。内面はハケで調整され、その後に粗くタテミガキが施されている。494は坏部の全形が復元できた。ただし、複数の破片から器形を復元したため、下半部の形状はやや不確実である。坏部は比較的深く、口縁端部は不明瞭ながら内傾する面をなす。坏部の屈曲は不明瞭であるが、その部分で底部と口縁部を接合した粘土接合痕が明瞭に残る。内外面ともヨコミガキを施した後に、タテミガキによって調整している。495も口縁端部を欠損するが、坏部の全形がほぼ復元できた。深い坏部で、坏部の屈曲はかなり緩く、外面にはほとんど稜が認められない。脚部の上端縁部から坏部を成形している。496も坏部の屈曲は不明瞭であるが、外面では屈曲部付近でミガキの方向が変化している。また、外面には底部と口縁部の接合箇所の粘土接合痕が明瞭に残されている。497は口縁端部付近以外のほぼ全形が復元できた。坏部は比較的深く、坏部の屈曲は明瞭で、外面には稜が認められる。脚部は緩やかに内湾し、外面上半に直線文が施されている。脚部の上端縁部から坏部を成形しており、その後、坏部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。498・499は坏部の底部付近と脚部上半が遺存する。脚部は直線的にハ字状に開く。498は脚裾部付近で内湾する可能性が高い。500は脚部が外反しながら開く。

502～531は脚部である。503・508・522・523・526などのように直線的にハ字状に開くものが多い。502・503は脚部上端縁部から坏部を成形し、さらに坏部内面に粘土を貼り付けている。505は外面をハケで調整している。筒状の脚部の孔に粘土を詰めて閉塞しているものとみられる。506は小型のものである。509は上面に剥離痕跡が認められるが、その中央部に孔を粘土で埋めたような痕跡が認められる。筒状の脚部の孔に粘土を詰めて閉塞した痕跡と思われる。510～512も上面に剥離痕跡が認められる。513は小型のもので、上半部は短い柱状を呈し、下半部は外方へ強く屈曲して大きく開く。屈曲部の外面には連

続的なオサエが施されており、部分的にハケも認められる。また、一部には爪痕と思われる痕跡が残る。透孔はないものと思われる。全体的にやや粗雑なものである。516は上面に剥離痕跡が認められ、そこに螺旋状の強い工具ナデが施されている。接合を強化するために施された可能性がある。518も上面に剥離痕跡が認められ、連続的なオサエが残る。519は外面上半に粗雑な直線文が施されている。また、筒状の脚部の孔に粘土を詰めて閉塞している。520は緩やかに外反しながら開く。524～527は脚部上端縁部から坏部を成形している。524には外面上半に直線文が施されており、始点と終点のずれが認められる。528は透孔付近で強く外反する。529・530はハ字状に開くが、下半部でわずかに内湾するように見受けられる。531は脚端部まで遺存しており、全体的に緩やかに内湾する。脚端部は不明瞭な面をなす。

532～534は有孔鉢である。いずれも底部片である。532は二次的に被熱している。533は孔が小さく、内面側から穿孔された可能性が高い。内外面ともハケで調整されている。534は内外面とも調整が不明瞭であるが、内面にはハケと思われる痕跡が一部遺存している。

535は手焙形土器の覆部の開口部付近の破片である。端部には内面に粘土を貼り付けて肥厚させて面を作り出し、浅い凹線文を施す。外面にはヘラ状の工具によって格子状文を施しており、一部には細い突帯も遺存している。

SH230 (第163図536～546) 536・537は貯蔵穴から出土した石製品である。536は砥石と思われる。ホルンフェルスの亜円礫をそのまま利用しており、一つの面に擦痕及び線状痕が複数認められる。わずかに摩滅している部分もみられるため、台石としても使用された可能性がある。537は台石である。砂岩の亜円礫を打割するなどして使用しているものと思われる。上面は平坦で、半分程度が顕著に摩滅し平滑となっている。不明瞭な擦痕も認められる。また、片方の側面も全体が摩滅し、非常に平滑となっている。この面は若干内湾し、部分的に擦痕が認められることから、砥石としても使用されていたと思われる。

538～546は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

538は壺の体部下半から底部にかけての破片である。底部は上げ底状となっている。風化のため、調整はほとんど遺存していない。

539～542は甕である。539は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部上半は直立気味に立ち上がり、口縁端部は面をなす。540・541はS字状口縁甕である。540は口縁部上半が短く立ち上がり、口縁端部が肥厚する。頸部外面には斜行する工具痕が認められる。541は口縁部の屈曲が明瞭で、口縁端部は大きく外方へ引き出される。口縁端部内面には凹線状に凹む幅広の面が作り出されている。頸部外面には沈線が認められ、頸部内面はヨコナデによって調整されている。542はS字状口縁甕の脚台部と思われる。底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。

543～546は高坏の脚部である。543は坏部が一部遺存しており、椀形高坏の可能性がある。脚部は外反しながらハ字状に開く。544は小型のものである。透孔の有無は不明である。545は柱状を呈する。外面上半に直線文を施している。筒状の脚部の孔を円板充填状に閉塞しているが、さらにその上から粘土を貼り付けている。内面にはケズリ状のヨコナデが施されている。546は緩やかに外反しながら大きくハ字状に開く。脚部内面頂部に、何らかの工具を回転させて整形したような痕跡が残る。

S H234 (第164図547～561) 547～549は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

547はく字状口縁甕で、口縁部から体部上半にかけて遺存している。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は外反しながら短く外方に開く。体部は若干なで肩の器形を呈し、外面はハケで調整されている。548は受口状口縁甕の口縁部で、口縁端部は丸く収められる。外面は粗いハケで調整されている。549は椀形高坏の坏部から脚部にかけての破片である。やや小型のもので、坏部は内外面ともタテミガキが施されている。脚部は低く、下半部はわずかに内湾し、脚端部は面をなす。透孔は開けられていない。脚部内面には、爪痕と思われる痕跡が多数認められる。

550～554は排水溝から出土した弥生土器・土師器

である。

550・551は壺の口縁部である。550は小型のもので、頸部外面にはオサエが明瞭に残るなど、やや粗雑である。551はいわゆるパレススタイル壺で、口縁部が完全に遺存している。緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張して幅広の面を作り出し、擬凹線文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は4本一組で、4箇所配されている。口縁部内面には中位に稜が作り出されており、それより上方には櫛状工具による矢羽根状文が施されている。稜より下方には赤彩が施されている。赤彩は口縁端部の面にも認められる。

552は受口状口縁甕である。口縁部から体部上半までが遺存している。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁部上半は短く直立気味に立ち上がる。外面は全体的に粗いハケで調整されている。

553は有稜高坏である。坏部から脚部にかけてが遺存している。坏部の屈曲は明瞭で、外面の稜は比較的シャープである。坏部の器壁は厚い。脚部はハ字状に直線的に開くが、下半部はわずかに内湾する。

554は鉢の底部である。底部は上げ底状を呈する。外面にはミガキが施されている。内面には器壁の凹みやヒビに入り込むような形で水銀朱が遺存しており、外面にはススが明瞭に付着する。ススは底部外面にも付着している。こうした特徴から、いわゆる内面朱付着土器と思われる⁷⁾。

555～560は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

555～559は甕である。

555・556はく字状口縁甕である。555は口縁部の小片で、口縁部上半外面には強いヨコナデが施されており、わずかに内湾する。556は小型のく字状口縁台付甕である。口縁部から体部上半にかけての破片と、同一個体と考えられる脚台部の破片からなる。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は外反しながら短く外方へ開く。口縁端部は丸く収められる。外面の頸部付近にはタテハケが施されているが、部位によってはヨコハケも認められる。脚台部は器壁が厚く、やや粗いハケが認められる。また、体部上半の内面には粘土接合痕が明瞭に残るが、この接合部から上方は他の部位よりも赤く発色しており、接合部を境に

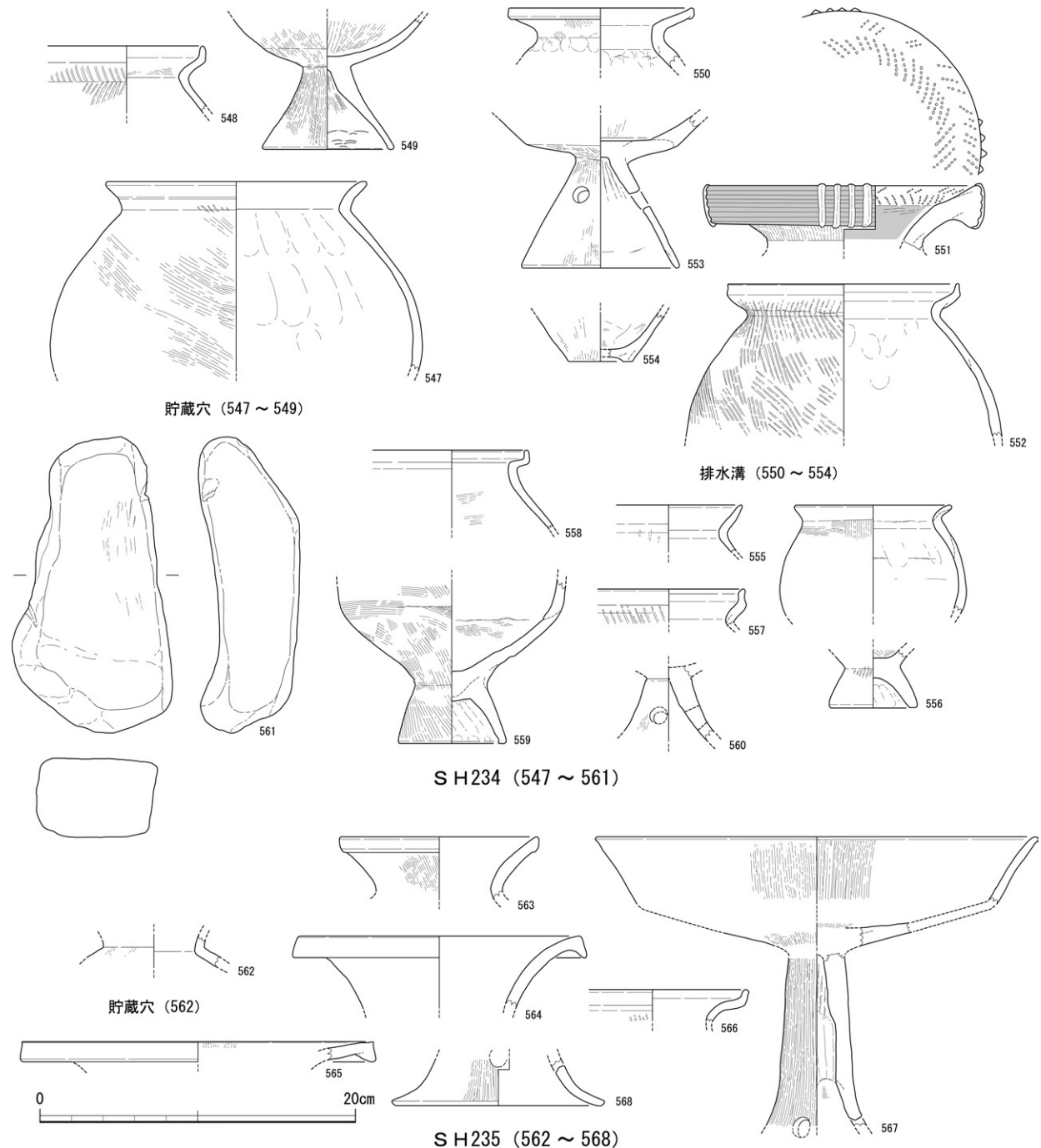
色調の差異が明瞭である。製作に際して、異なる粘土が用いられたものと推測される。

557・558は受口状口縁甕の口縁部である。557は口縁端部が内傾する面をなす。558は体部上半まで一部遺存しており、体部はなで肩の器形を呈すると思われる。頸部及び口縁部は強く屈曲している。

559は台付甕である。体部下半から脚台部が遺存している。体部下半には内外面に粘土接合痕が明瞭

に残る。脚台部はハ字状に開き、脚端部は面をなす。接合部の剥離状況から、上面が大きく凹んだ脚台部を成形後、凹みを埋めるように粘土を充填し、その上に別途成形した体部下半を載せたと考えられる。また、脚頸部外面に粘土を貼り付けて接合部の補強を図っている。

560は高坏の脚部である。緩やかに外反しながらハ字状に開く。



第164図 SH234・235出土遺物 (1/4)

561は埋土中から出土した石製品で、台石である。ホルンフェルスの垂角礫をそのまま利用したもので、上面が緩やかに湾曲した面をなし、その面に擦痕や線状痕が確認できる。

S H 235 (第164図562~568) 562は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。小型の壺の、頸部付近の破片である。

563~568は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

563~565は壺の口縁部である。563は中型の壺で、口縁部は直線的に外方へ開き、口縁端部は面をなす。外面はハケで調整される。564は緩やかに外反しながら大きく開く。口縁端部は大きく垂下し、幅広の面を作り出す。全体的に風化しており、調整は不明である。565も口縁端部に粘土を貼り付けて垂下させている。内面にはわずかにミガキが残る。

566は受口状口縁甕の口縁部である。大きく外方へ開き、明瞭に屈曲する。

567・568は高坏である。567は有稜高坏で、同一個体と考えられる坏部と脚部の破片からなる。口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く収められる。坏部の内外面はタテミガキによって調整される。脚部は柱状に近く、下半部で緩やかに外反する。透孔は脚部の低い位置に開けられている。全体的に二次的な被熱が認められる。568は脚裾部付近の破片である。外反しながら開き、脚端部は不明瞭な面をなす。外面にはタテミガキが施されている。

S H 236 (第165図569~581) 569~579は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

569~573は壺である。

569は小型の壺で、全形が復元できた。体部は扁平で、平底である。口縁部は外反しながら長くのびる。口縁端部は丸く収められる。

570は台付壺である。脚裾部を欠損するが、かなりの部分が遺存している。体部は扁平な球形を呈し、かなり胴が張る。体部上半外面には直線文と波状文が交互に施されている。口縁部は直立気味に立ち上がった後に、大きく外反しながら開く。口縁端部はわずかに上下に拡張して面を作り出しており、二枚貝の貝殻腹縁による矢羽根状文を施すとともに、竹管文を施した円形浮文を貼り付けている。円形浮文

は3個一組で、おそらく4箇所配されていると思われる。口縁部内面には波状文が施されている。脚台部は若干外反しながらハ字状に開き、外面には直線文と二枚貝の貝殻腹縁による列点文が施されている。透孔は遺存していない。

571は体部で、ほぼ全形が復元できた。最大径は中位よりやや下方に位置する。外面には全面にタテミガキが施されている。

572・573は底部である。いずれも大型の壺の底部と思われるが、底の器壁は比較的薄い。572は同一個体と考えられる、直線文と列点文を施した体部片がS H 209の床面上から出土している。

574~578は甕である。

574~576は受口状口縁甕の口縁部である。575は口縁部の屈曲が緩いが、屈曲部外面には刻目状に櫛状工具による列点文が施されている。また、肩部外面には直線文と列点文が施されている。576も屈曲部外面に列点文が施されている。

577は台付甕の脚台部である。小型のもので、脚端部は面をなす。上端縁部から体部が成形されており、剥離痕跡が残る。

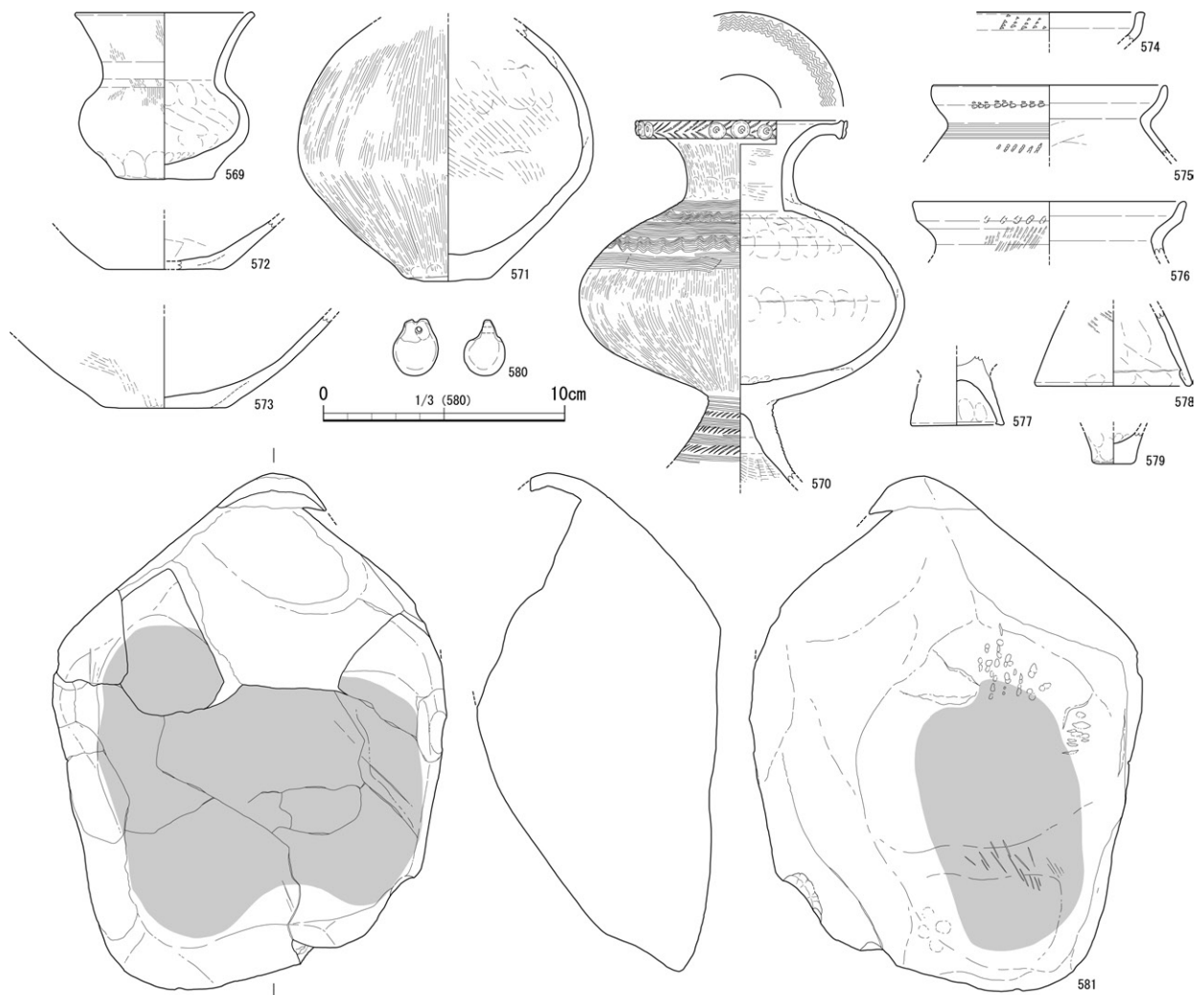
578はS字状口縁甕の脚台部である。ハ字状に開き、脚端部は内側に大きく折り返されている。

579は鉢である。小型のもので、外面にはオサエが残るなど、粗雑な印象を受ける。

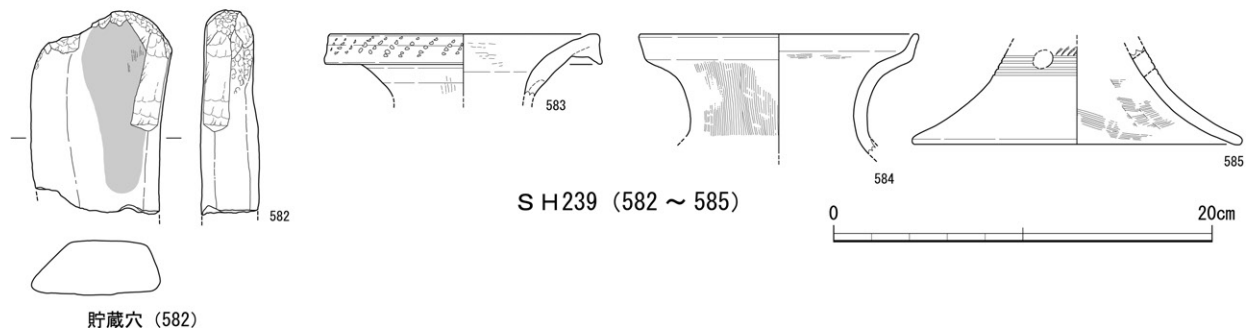
580は埋土中から出土した土製品である。球形の粘土塊の一端を指で摘まんで薄くし小孔を穿った、小型の錘状のものである。用途は不明であるが、天秤権などの可能性も考える。ただし、わずかながら欠損があり、正確な重量は不明である。

581は埋土中から出土した台石である。砂岩の大型の垂円礫をそのまま利用している。上下の比較的平坦な2面を使用しており、使用された部分は摩滅して平滑となっている。また、部分的に明瞭な線状痕や、先の尖った工具で連続的な打撃を加えたような敲打痕といった使用痕も認められる。砥石などとしても使用された可能性もある。なお、出土時には剥離するように破片化しており、それらを接合して復元した。全体的に強く被熱しているため、それが原因で割れたと推測される。

S H 239 (第165図582~585) 582は貯蔵穴から出



S H236 (569 ~ 581)



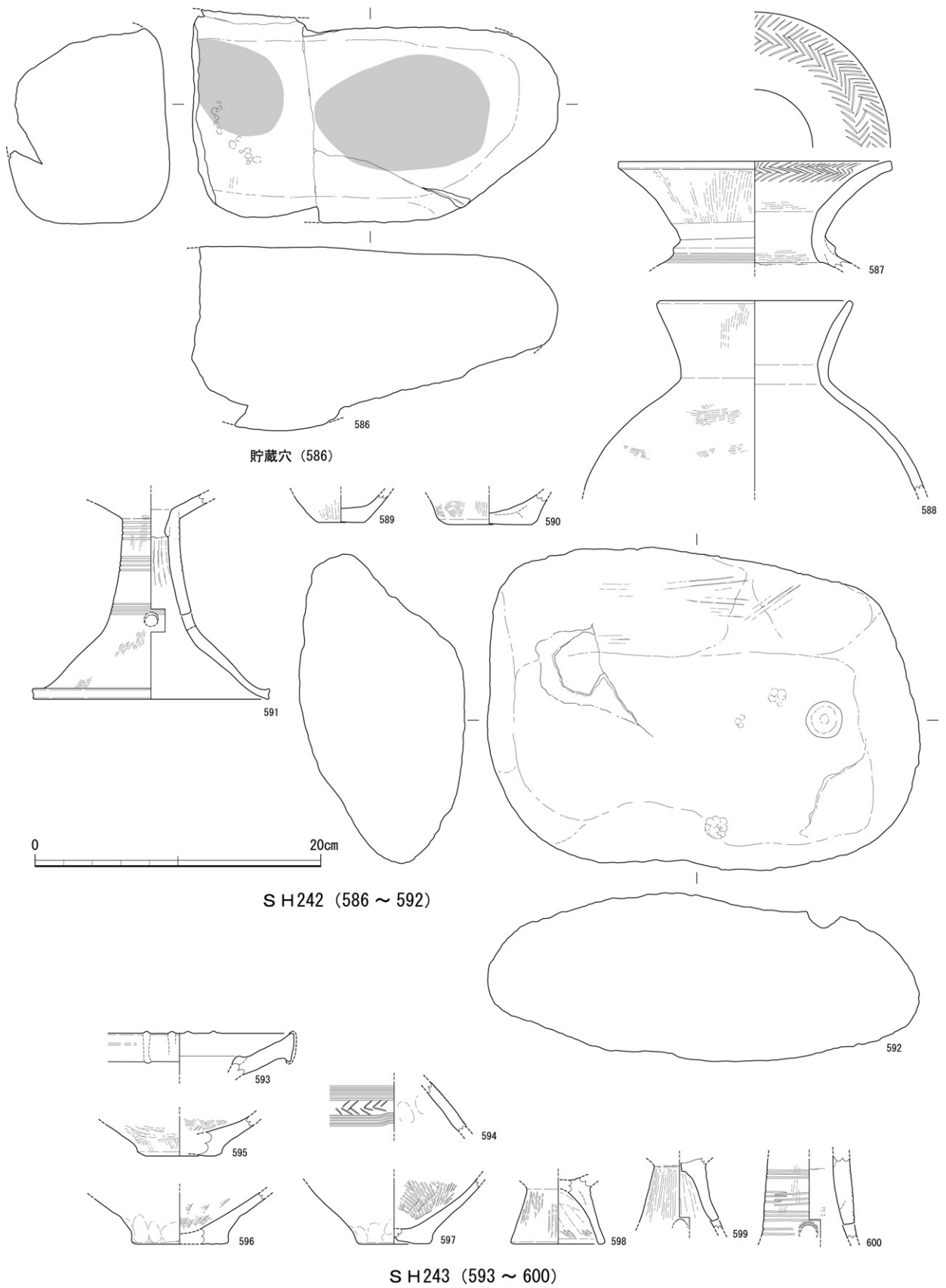
S H239 (582 ~ 585)

第165図 S H236・239出土遺物 (1/4、1/3)

土した石製品で、磨石もしくは台石である。扁平な砂岩の円礫を利用したもので、片面の一部に顕著な摩滅と不明瞭な擦痕が認められる。また、端部や側縁の一部には敲打痕や剥離が認められ、敲石としても使用されたものと考えられる。

583~585は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

583・584は壺の口縁部である。583は外反しながら外方へ開く。口縁端部は垂下させて広い面を作り出し、櫛状工具による列点文が施されている。584は受口状を呈する。外面はハケで調整されている。585は高杯の脚部である。脚裾部の破片で、透孔が遺存しており、その付近に直線文と二枚貝の貝殻腹縁によると思われる列点文が施されている。脚端部



第166図 S H242・243出土遺物 (1/4)

は丸く収められる。

S H 242 (第166図586~592) 586は貯蔵穴から出土した石製品で、台石である。大型の砂岩の円礫をそのまま利用しており、上面の平坦面に摩滅と不明瞭な敲打痕が認められる。擦痕と思われるものもみられるが、非常に不明瞭なものである。出土時にはかなり破片化しており、それらを接合して復元した。接合しなかった破片も複数ある。底面付近が強く被熱しており、それが原因で割れたと推測される。

587~591は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

587~590は壺である。

587は口縁部で、外反しながら開き、口縁端部は面をなす。口縁部内面には矢羽根状文が施されている。頸部外面には突帯が貼り付けられており、肩部外面には直線文がわずかに残る。全体に二次的に被熱しており、特に口縁端部付近の赤化が目立つ。また、内面には頸部付近を中心に顕著にススが付着するが、一部が残る体部内面には付着していない。こうしたことから、意図的に体部を除去した口縁部を倒立させて、炉で脚台として使用していた可能性が高い。588は口縁部から体部上半にかけて遺存している。口縁部はやや上方へ直線的にのびる。頸部の屈曲は緩い。外面は全体的にハケによって調整されている。589・590は底部である。589は外面にミガキが施されている。

591は器台である。頸部から脚部にかけてが遺存している。頸部は明瞭に屈曲し、脚部は下半部で強く外反する。透孔は4方向に開けられていると推定され、脚端部は明瞭な面をなす。ただし、脚部は透孔より上方と下方の破片が接合せず、図上で復元したため、形状の復元には不安を残す。特に、透孔より下方については、内面にミガキの可能性ある痕跡がごくわずかに認められ、受部の破片の可能性も考えられる。

592は貯蔵穴の横から出土した台石である。大型の不整形な円礫を利用しており、石材は流紋岩と思われる。顕著な摩滅などは認められないが、上面の不明瞭な面に径2.5cm、深さ1cmほどの円形の凹みが作り出されている。凹みの内面には、何らかの工具の回転によるとみられる擦痕がわずかに残る。何

らかの軸受けなどとして使用された凹みの可能性が考えうる。また、側面には、明瞭な擦痕や線状痕が認められ、砥石としても使用されたと思われる。

S H 243 (第166図593~600) 593~600は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

593~597は壺である。

593は口縁部で、中位で外方へ明瞭に屈曲し、屈曲部の内面には粘土を貼り付け、突帯状に突出させている。口縁端部は面をなし、棒状浮文が貼り付けられているが、ほぼ完全に剥落している。また、擬凹線文と思われる痕跡がごくわずかに認められる。594は体部片で、外面に直線文と矢羽根状文が施されている。595~597は底部である。いずれも内面はハケで調整されている。

598は台付甕の脚台部である。直線的にハ字状に開き、脚端部は不明瞭な面をなす。外面には粗いハケが施されており、内面にも一部にハケが認められる。

599は高坏の脚部である。脚部内面頂部には軸芯痕が認められる。軸芯痕は脚部上面の剥離痕跡まで貫通している。

600は器台の脚部である。筒状を呈し、外面には直線文が施されている。

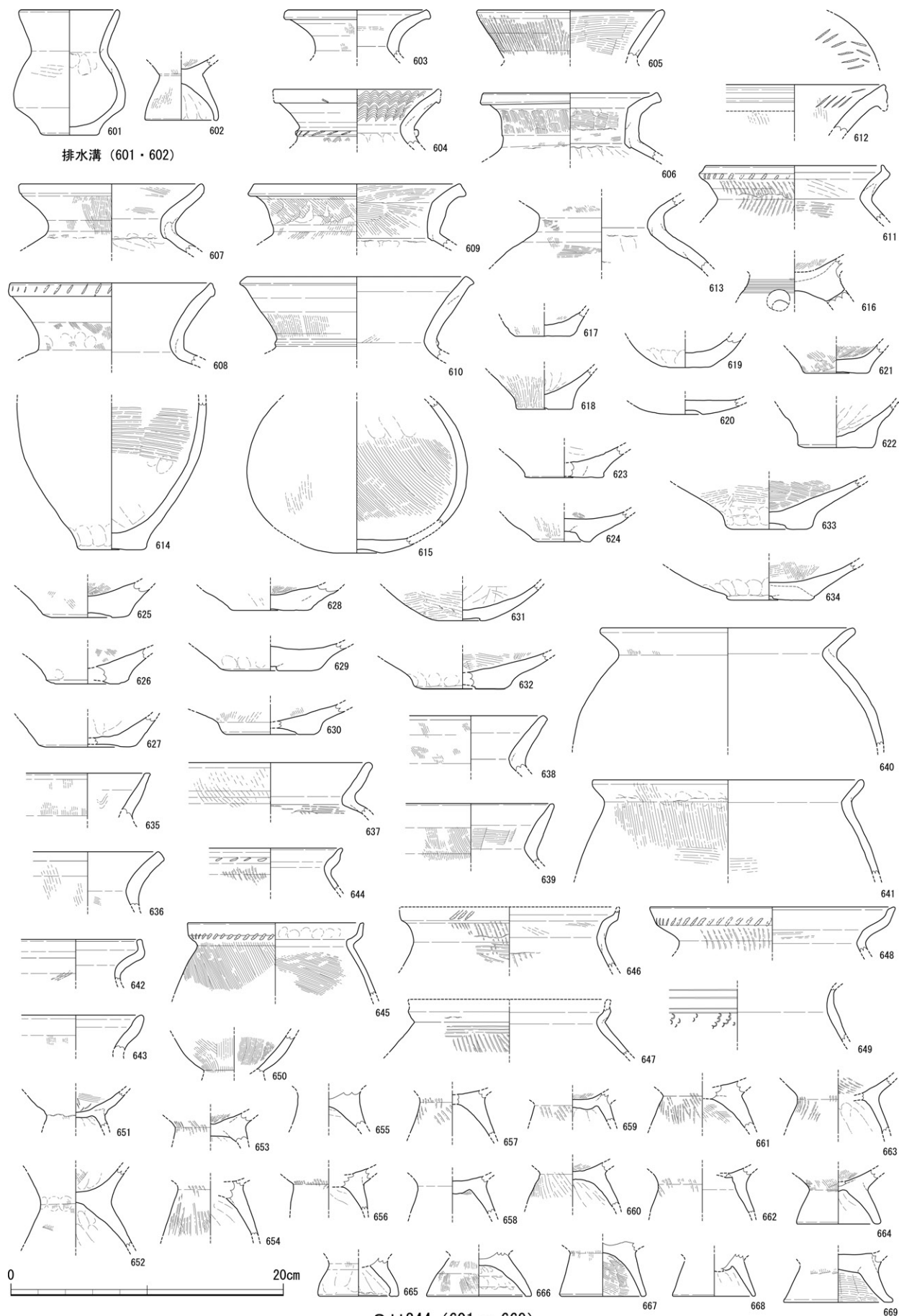
S H 244 (第167・168図601~737) 601・602は排水溝から出土した弥生土器・土師器である。

601は小型の壺で、全形が復元できた。体部は下ぶくれの器形を呈し、頸部の締まりは弱い。口縁部は直線的にやや上方へのびる。体部外面には不明瞭ながらミガキと思われる調整が認められる。602は台付甕の脚台部である。小型のもので、脚裾部付近で内湾する。脚台部外面や体部外面にはミガキと思われる調整が認められ、台付鉢などの可能性も考えられる。

603~736は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

603~634は壺である。

603~612は中・大型の壺の口縁部である。603は外反しながら大きく開き、口縁端部は面をなす。604はわずかに外反しながら開き、口縁端部は若干拡張されて面をなす。口縁端部の遺存状況は悪いが、列点文と思われる痕跡がかすかに残っている。頸部外



第167図 SH244出土遺物① (1/4)

面には突帯が貼り付けられており、わずかに遺存する肩部の外面には波状文が認められる。また、口縁部内面の広い範囲に波状文が施されている。605は直線的にのび、内外面ともハケで調整されている。606・609は頸部から直立気味に立ち上がり、中位で強く屈曲し、外方へ開く。内外面ともハケで調整されており、文様等は認められず、粗雑な印象を受ける。608・610はわずかに外反し、口縁端部は明瞭な面をなす。610は頸部外面に細く低い突帯を貼り付けている。611は口縁端部が内側にはね上げられるように突出し、受口状を呈する。屈曲部外面には刻目状の列点文が施されている。外面にはススが付着しており、甕の可能性もある。612は口縁端部を下方へ垂下させて広い面を作り出し、擬凹線文を施している。口縁部内面にはやや粗雑な矢羽根状文が認められる。

613～615は頸部や体部の破片である。614は体部下半から底部にかけて遺存する。やや細身の器形で甕の可能性もあるが、外面の風化が著しく、ススの付着などは不明である。内面には粗いハケが施されている。615は球形を呈する体部で、底部外面は円形に凹む。内面はハケで調整されている。瓢形壺の体部と考えられる。

616は台付壺の底部から脚台部にかけての破片と思われる。外面には直線文が施されており、透孔が3方向に開けられている。外面の体部が剥離した部分には、連続的なオサエが認められる。

617～634は底部である。620は底部外面が円形に凹んでおり、瓢形壺と思われる。621の内面にはクモの巣状のハケが施されている。624・629は輪台状を呈する。631は底部外面が円形に凹む。外面はヨコミガキで調整されているが、単位ごとに少し方向を変えて全体的に波状になるように施されているとみられる。また、一部にはミガキの前にケズリを施した痕跡が認められる。体部内面は工具ナデによって調整されているが、比較的シャープでケズリに近い。633は外面にヨコミガキが施されている。634は破断面で粘土接合痕が観察できる。円板状の底部を成形後、それをベースに体部を成形していった様子が窺える。

635～684は甕である。

635～641はく字状口縁甕である。635は口縁端部が明瞭な面をなす。内面には波状文の痕跡が認められるが、文様ではなくハケのアタリである。636は頸部が緩やかに屈曲し、口縁端部は面をなす。器壁は厚い。637は頸部が強く屈曲する。口縁部上半外面にはヨコナデが施されており、受口状口縁甕に近い。体部内面には粗いハケが施されている。639は口縁部内面にハケが施されている。壺の可能性も残る。640は口縁部から体部上半にかけて遺存している。頸部は強く屈曲し、口縁部は直線的に開く。器壁の遺存状況が悪く、調整は頸部外面にわずかにハケが残るのみである。641も口縁部から体部上半にかけて遺存している。口縁部は直線的に短く開く。外面は全体的にハケで調整されており、頸部外面にはオサエが明瞭に残る。

642～648は受口状口縁甕である。642は口縁部が強く屈曲し、口縁部上半は内傾する。644は口縁端部がわずかに外方へ引き出され、S字状口縁甕に近い形態を呈する。ただし、口縁部の屈曲部外面に施された列点文は、風化によって不明瞭ながらも押引列点文とは認めがたい。S字状口縁甕の模倣品とも考えられる。645は口縁部から体部上半にかけての破片である。頸部は強く屈曲し、頸部内面は内側に突出気味である。口縁部も明瞭に屈曲し、内面には連続的なオサエが認められる。646の頸部の屈曲はかなり緩い。647は肩部外面にヨコハケが施されている。648は口縁部が大きく開く。口縁部の屈曲は緩く、口縁端部は内傾する面をなす。

649は甕の頸部付近の破片である。頸部の屈曲はかなり緩く、外面には直線文と列点文が施されている。列点文は、細い半裁竹管状のものを束ねたような工具によって施文されている。

650～681は台付甕の脚台部等である。650は底部付近の破片で、小型のものである。内外面ともハケで調整されている。651の底部内面には爪痕状の工具痕が認められる。652は体部の立ち上がりが急である。全体的に粗雑な印象を受けるもので、形状に若干の歪みがある可能性もある。653は底部内面及び脚頂部に、粗い砂粒を含まない他の部位と同様の粘土を、厚く貼り付けている。656は直立気味のもので、脚台部上端縁部から体部を成形している。659

は筒状の脚台部の上面を円板充填状に閉塞している可能性があるが、粘土接合痕は明瞭ではなく、確定的ではない。662は筒状の脚台部を成形後、脚頂部側から粘土を貼り付けて閉塞している可能性がある。664は脚台部上端縁部から体部を成形後、底部内面から脚台部上面の凹みを埋めるように粘土を貼り付けて、補強・整形を行っている。665は小型のもので、脚端部は面をなす。666は大きくハ字状に開く。668は小型のもので、直線的にハ字状に開く。脚台部の上面は大きく凹んでおり、剥離面となっている。底部内面から凹みを埋めるように粘土を貼り付けていたものと思われる。669は筒状の脚台部の上面を閉塞するように粘土を詰めている。670は小型であるが、やや細身で高さのある脚台部である。脚端部は面をなす。671も小型の脚台部で、接合部の剥離状況から、筒状の脚台部を成形後、脚頂部側から粘土を詰めて閉塞し、上面の凹みを埋めるように底部内面から厚く粘土を貼り付けていることが窺われる。672は内面に粗いハケが施される。673も内面に粗いハケが施され、外面の体部が剥離した部分には連続的なオサエが認められる。675は内湾している。676は筒状の脚台部の上面を円板充填状に閉塞している。閉塞後、脚台部内面に粘土を貼り付けて接合部を整形する。ただし、体部は脚台部の上端縁部から成形されている可能性が高い。678はハ字状に開く。筒状の脚台部の上面を底部内面側から粘土を貼り付けて閉塞している。679は上面に剥離痕跡が認められ、連続的なオサエが残る。内外面ともやや細かいハケで調整されており、脚裾部付近にはヨコナゲが施されている。680は器壁が薄く、脚頂部付近に連続的なオサエが残る。

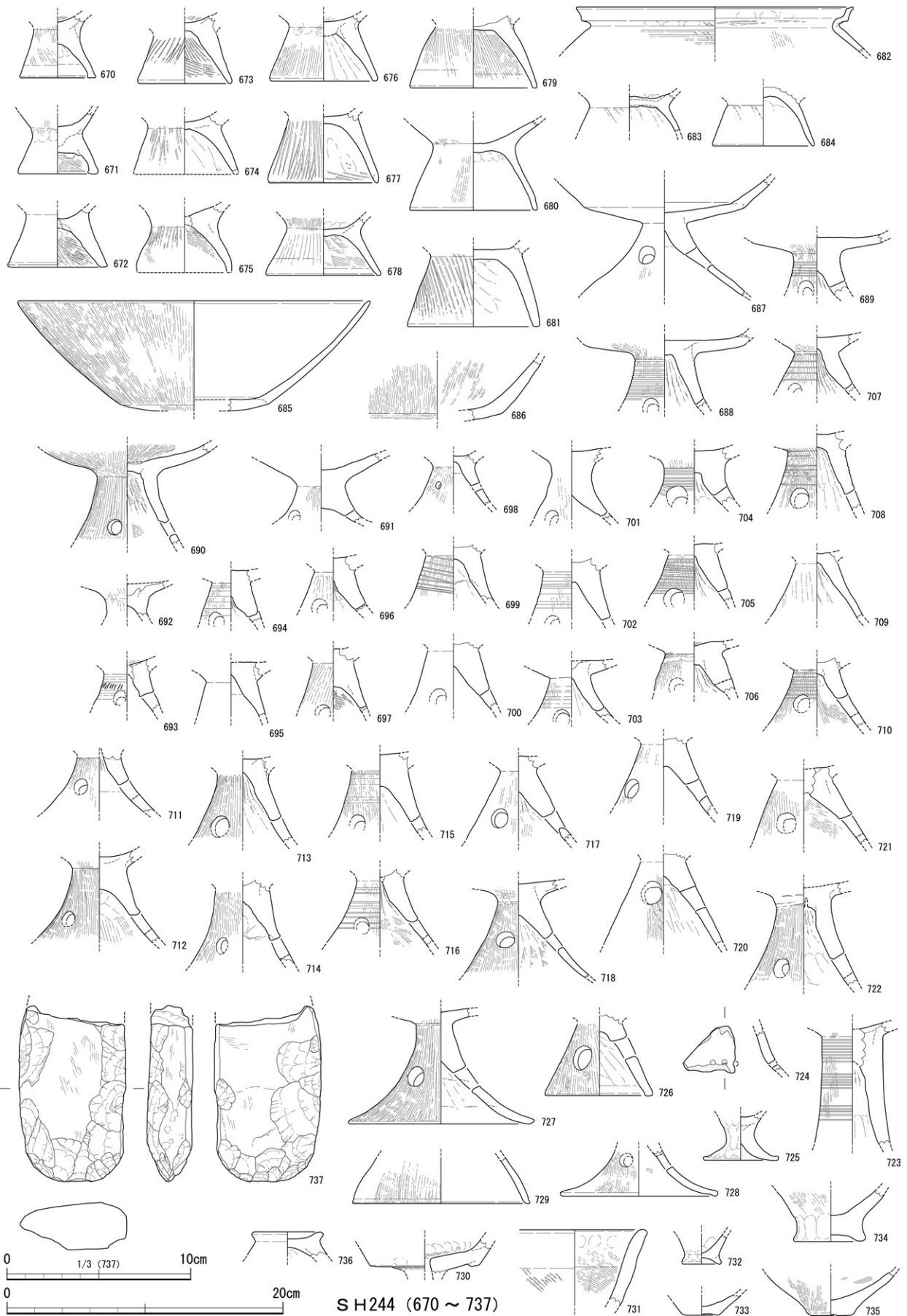
682～684はS字状口縁甕である。682は口縁部から肩部にかけての破片である。頸部及び口縁部は強く屈曲し、口縁部の屈曲部外面の稜はシャープである。口縁端部は若干外方へ引き出され、口縁端部は内傾する面をなす。口縁部外面に押引列点文は確認できないが、遺存状況が悪く、有無は明確には判断できない。肩部外面にはヨコハケが施されている。S字状口縁甕としては形態に多少の違和感がある個体で、口縁部内面に連続的なオサエが残る点などは受口状口縁甕に近く、模倣品とも考えられる。ただ

し、胎土については、黒雲母が明瞭に含まれるなど、ほかのS字状口縁甕と類似している。683は脚台部で、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。684も脚台部である。器壁は薄い。上面には剥離痕跡が認められるが、周縁部に連続的なオサエが施されており、それを埋めるように底部内面から粘土が貼り付けられていたと推測される。脚端部は風化により遺存状況が悪いが、内側に折り返されていないと思われる。

685～729は高坏である。

685～689は有稜高坏である。685は坏部で、やや浅い。坏部外面の稜は明瞭で、口縁端部は内傾する面をなす。686は坏部外面の稜がかなりシャープで、稜より上方はタテミガキ、下方はヨコミガキで調整されている。687は坏部から脚部にかけて遺存する。坏部外面の稜は明瞭で、屈曲部で底部と口縁部とを接合した痕跡が明瞭である。脚部は大きく開き、若干内湾する。688・689も坏部から脚部にかけての破片で、脚部外面上半に直線文が施されている。

690～729は脚部である。690・702・708・713・715・722のように全体的に緩やかに外反しながらハ字状に開くものや、717・720・726のように直線的にハ字状に開くもの、691・711・727・728のように大きく外反しながら開くもの、729のように内湾するものなどがみられる。690は坏部も一部遺存しており、筒状の脚部の上面を円板充填状に閉塞し、さらに底部内面に粘土を薄く貼り付けている。691はかなり大きく外反するものである。692は坏部内面が剥離しているが、剥離面に筒状の脚部の上面に粘土を詰めて閉塞した痕跡が明瞭に残る。693は脚部外面上半に直線文と爪状の工具による列点文が施されている。698は透孔が小さい。699は脚部外面上半に直線文が施されているが、全体的に斜めになっている。703は脚部上端縁部から坏部を成形後、脚部上面の凹みを埋めるように坏部内面に粘土を貼り付けている。704は頸部が若干太く、器壁も厚い。706は頸部より少し下に幅広のヨコミガキが1条施されている。708は外面がハケを施した後ミガキで調整されているが、ミガキが粗くハケが顕著に遺存している。710は脚部内面頂部に粘土を充填した痕跡が認められる。712・713は脚部上端縁部から坏部を成形後、



第168图 SH244出土遺物② (1/4、1/3)

坏部内面に脚部上面の凹みを埋めるように粘土を貼り付けている。714・716も同様で、坏部内面に貼り付けた粘土が剥離している。720は外面がミガキによって調整されているが、その前に施された粗いハケがわずかに残る。722の脚部内面頂部には軸芯痕が認められる。脚部は、おそらく筒状に成形した後、上面の孔に粘土を詰めて閉塞しているが、軸芯痕は詰められた粘土の部分に残されているため、脚部自体の成形に関わる痕跡ではないと推測される。723はやや柱状を呈する。外面上半に直線文が施されている。坏部はおそらく脚部上端縁部から成形されていると思われる。724は高坏脚部の破片とも考えられる、外反する小片である。焼成前に開けられた3つの小孔が並ぶが、最も左側の1孔は内面まで貫通していない。透孔とは考えにくく、高坏以外の器種の可能性もある。725はかなり小型のものである。外面はナデやオサエによって調整されており、粗雑である。台付鉢なども考えられる。726は脚部の全形が復元できた。直線的にハ字状に開く、低い脚部である。脚端部は面をなす。727も脚部の全形が復元できたものである。大きく外反しながら開く。内面には粘土接合痕が2箇所認められる。728も大きく外反しながら開くもので、器壁が若干薄い。729は脚裾部付近の破片で、緩やかに内湾する。脚端部は内傾する面をなす。

730は器台の受部である。内面中央部に脚部への貫通孔が認められる。受部は有稜高坏のように明瞭な屈曲部を有し、屈曲部外面は粘土の貼り付けによってわずかに垂下させている。屈曲部内面には連続的なオサエやハケが残り、調整は比較的粗雑である。

731～735は鉢である。731は大型の鉢の口縁部と思われるが、飛鳥～奈良時代の甑の可能性も残る。口縁端部付近の内外面には幅広のヨコナデが施されており、外面には粗いハケが残る。732は小型のもので、底部の周縁部が高台状に突出する。734は底部が若干上げ底となり、底部周辺の外面にはオサエが顕著に残る。壺の底部ないし、蓋の可能性も考えられる。735は内面に器壁のヒビに染み込むような形で水銀朱が遺存している。外面には薄くススが付着している。こうした特徴から、いわゆる内面朱付着土器と思われる。

736は蓋と考えられる。内外面ともナデで調整されている。壺や鉢の底部の可能性も残る。

737は埋土中から出土した石製品で、磨製石斧である。比較的硬質の溶結凝灰岩と思われる石材が用いられており、全体に研磨が認められる。基部を欠損するが、扁平な直方体を呈し、側面には明瞭な面が作り出されていることから、弥生時代の扁平片刃石斧と思われる。ただし、刃部には全面に剥離が加えられており、元の形状は不明である。また、側面にも大部分に大きな剥離が加えられている。敲石として転用された痕跡は認められず、破損後に剥離整形によって再加工する途中のものといった可能性が考えられる。

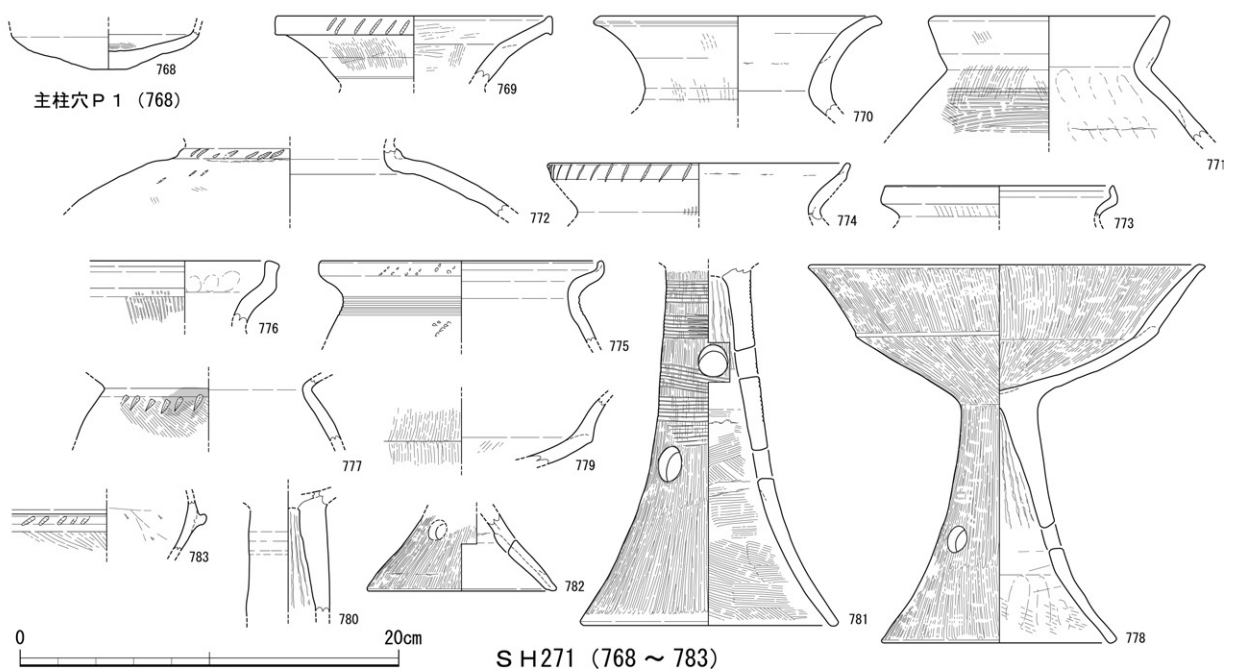
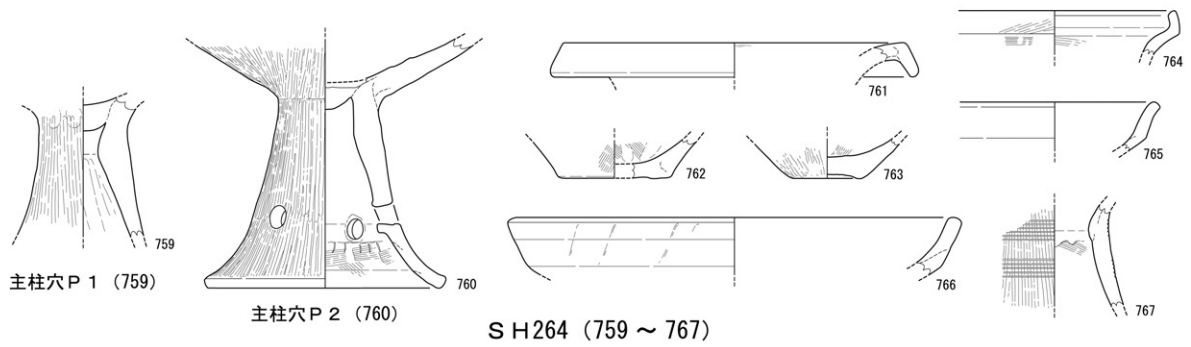
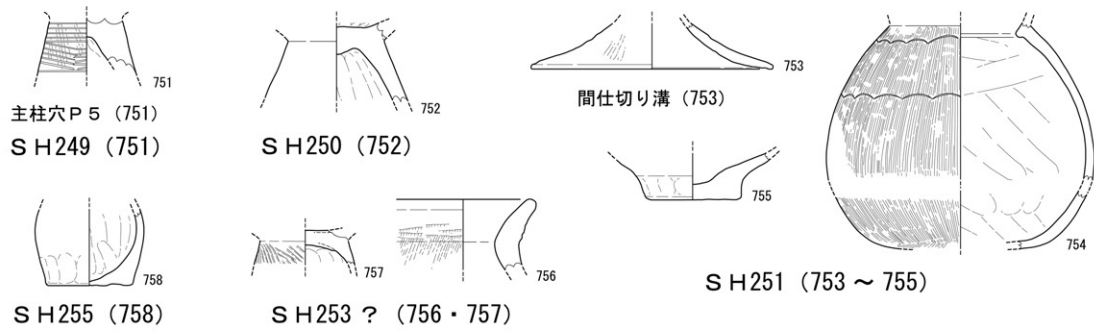
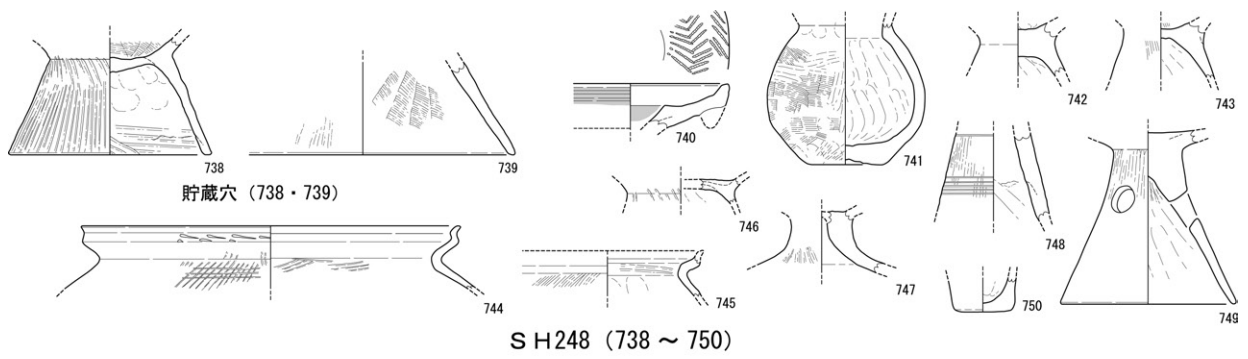
SH248 (第169図738～750) 738・739は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

738は台付甕の脚台部である。直線的にハ字状に開き、外面は全体的に粗いハケで調整されている。脚裾部内面には粘土接合痕が認められるが、脚端部の折り返しによるものではないとみられる。また、脚頂部には筒状の脚台部の上面を脚頂部側から粘土を貼り付けて閉塞した痕跡が明瞭に残る。739は高坏の脚部と思われる。内面にはハケを施している。

740～750は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

740・741は壺である。740は口縁部の小片で、内面には明瞭な屈曲部が認められる。口縁端部は上下に拡張し、広い面を作り出しているが、下方に垂下させるために貼り付けた粘土は剥離しており、剥離面にはハケが残されている。口縁端部の面には擬凹線文が施されており、赤彩も認められる。内面の屈曲部より下方にも赤彩が認められ、上方には矢羽根状文が施されている。741は小型の壺の体部である。外面はハケで調整されており、部分的にミガキも施されている。

742～746は甕である。742・743は台付甕の脚台部である。743は脚台部の上端縁部から体部を成形している。744～746はS字状口縁甕である。744は口縁部で、口縁端部は強く外方へ引き出され、内傾する面をなす。外面には押し列点文が施されている。745も口縁部で、口縁端部を欠損する。受口状口縁甕とも考えられる。746は脚台部で、底部内面及び



第169図 SH248~251・253・255・264出土遺物、SH271出土遺物① (1/4)

脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

747～749は高坏の脚部である。747は小型のもので、短い柱状部から強く外反して大きく開く。透孔は遺存していない。748は外面に直線文が施されている。749は脚部の全形が復元できた。直線的に八字状に開き、透孔は高い位置に開けられている。

750は鉢である。かなり小型のもので、ミニチュアとされるようなものに近い。

S H249 (第169図751) 751は支柱穴P5から出土した弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、外面には直線文が施されている。一部には始点と終点のずれが認められる。

S H250 (第169図752) 752は埋土中から出土した弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、直線的に八字状に開く。器壁は厚い。脚台部の上端縁部から体部を成形しているものと思われる。

S H251 (第169図753～755) 753は間仕切り溝から出土した弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、小型のものである。緩やかに外反しながら大きく開く。透孔は遺存していない。

754・755は埋土中やピットから出土した、弥生土器・土師器である。

754は壺の体部である。ほぼ体部の全形が復元できたが、上半と下半が接合せず、底部も欠損するため、形状の復元には不安を残す。やや下ぶくれの球形を呈する体部で、外面にはタテミガキが施され、外面上半には二枚貝の貝殻腹縁による連弧文が2段に施されている。器形や文様などから瓢形壺と思われる。755は壺の底部である。外面にはオサエが認められる。

S H253? (第169図756・757) 756・757はS H253の内部に位置すると推定されるピットから出土した、弥生土器・土師器である。

756はく字状口縁甕の口縁部で、頸部の屈曲は緩く、器壁はかなり厚い。口縁端部は丸く収められる。757はS字状口縁甕の脚台部で、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。脚台部上面の周縁部には剥離痕跡が認められ、その部分には連続的なオサエが残されている。

S H255 (第169図758) 758は埋土中から出土した弥生土器・土師器である。小型の鉢と思われるもの

であるが、上部が窄まっており、壺となる可能性も残る。内外面ともオサエやナデで調整されている。

S H264 (第169図759～767) 759は支柱穴P1から出土した弥生土器である。高坏の脚部で、脚部上面を円板充填状に閉塞している。

760は支柱穴P2から出土した弥生土器である。破片の一部は床面上からも出土している。高坏で、坏部から脚部にかけてが遺存している。坏部はやや深いと思われ、脚部は筒状を呈し脚裾部付近で緩やかに外反する。脚端部は面をなし、透孔は5方向に開けられている。脚部上面は円板充填状に閉塞されているが、坏部は脚部上端縁部から成形されており、坏部内面と頸部外面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。

761～767は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

761～763は壺である。761は口縁部片で、口縁端部は大きく垂下させている。内面にわずかに赤彩が残る。762・763は底部である。763はやや上げ底となっている。

764は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は明瞭で、屈曲部外面の稜はシャープである。口縁部上半は内傾し、口縁端部は面をなす。

765・766は有稜高坏の坏部である。765は坏部の屈曲部から口縁部が緩やかに外反しながら短く立ち上がる。口縁端部は面をなす。766は器壁が厚い。口縁部外面にはヨコナデが施されているが、わずかにミガキと思われる痕跡も認められる。

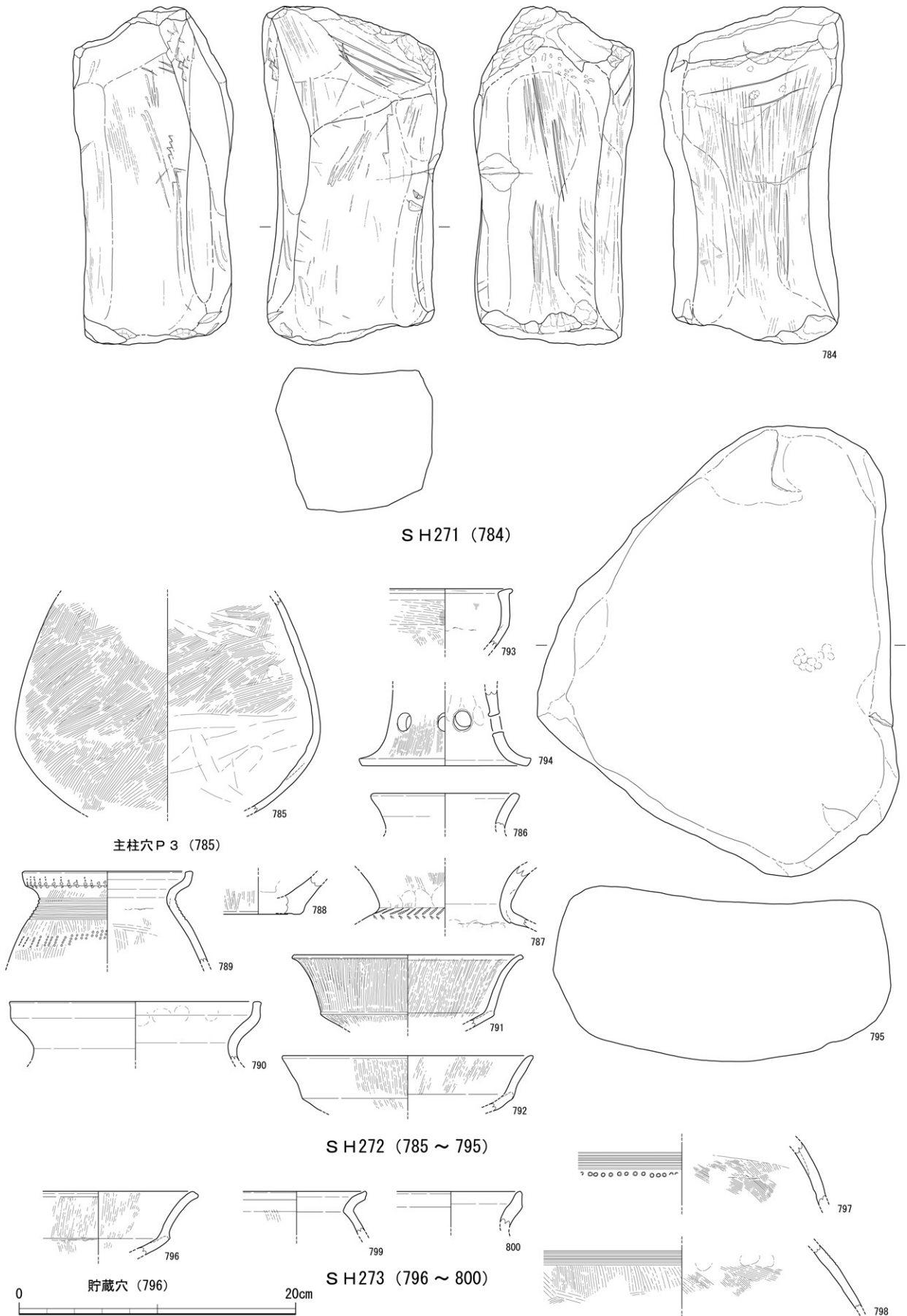
767は器台の頸部から脚部にかけての破片である。外面はハケで調整されており、直線文が施されている。小片で、高坏の可能性も残る。

S H271 (第169・170図768～784) 768は支柱穴P1から出土した弥生土器・土師器である。小型の壺の底部で、体部は最大径が下半にあり、下ぶくれの器形を呈するものと思われる。

769～783は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

769～772は壺である。

769は口縁部で、直線的に外方へ開き、中位でわずかに屈曲する。口縁端部は面をなし、列点文が施されている。また、頸部付近の外面には1条の沈線



第170図 SH271出土遺物②、SH272・273出土遺物 (1/4)

が認められ、直線文が施されていた可能性がある。770も口縁部で、外反しながら外方へ大きく開く。771は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は直立気味に短く立ち上がる。体部外面には粗いヨコハケが施されている。772は体部上半の破片で、頸部には突帯が貼り付けられ、刻目が施されている。肩部外面にも一部にハケ状工具による列点文状の痕跡が残るが、位置的にみて突帯に刻目を施した際に工具の端部が当たったものと推測される。

773～777は甕である。

773～776は受口状口縁甕の口縁部である。773はやや小型で、口縁部の屈曲は強く、口縁部上半は内傾する。口縁端部は面をなす。774は口縁端部付近で短く屈曲する。外面には列点文を施している。775は体部上半が一部遺存する。肩部外面に直線文と列点文が施されている。776は器壁が厚い。口縁端部は面をなす。内面には連続的なオサエが認められる。

777は頸部から体部上半にかけての破片である。肩部外面には列点文が施されている。また、一部に赤彩とも思われる痕跡が認められる。

778～782は高坏である。

778は有稜高坏で、全形が復元できた。坏部はやや深く、坏部外面の稜は明瞭である。口縁端部は面をなす。脚部は緩やかに外反しながら開く。脚部内面にはシボリ痕が明瞭に残る。779は有稜高坏の坏部で、坏部外面の稜はかなりシャープである。780は脚部で、柱状を呈する。脚部上面は円板充填状に閉塞されていたと思われる。また、外面にはごくわずかに直線文の痕跡が残る。781は脚部のほぼ全形が復元できた。比較的高い脚部で、下半は緩やかに外反しながら開く。透孔は2段に開けられているが、上段の透孔は1方向のみしか開けられていない。下段の透孔は3方向に開けられている。脚部外面上半には粗雑な直線文が4段ほど施されている。782も脚部で、ハ字状に開き、わずかに内湾する。内面には粘土接合痕が明瞭に残る。

783は手焙形土器の鉢部の破片である。外面には細く比較的高い突帯が貼り付けられており、刻目が施されている。突帯下の体部外面には沈線が1条認められ、突帯貼り付け位置を示すため、あるいは突帯の接合を強化するために施された可能性がある。

内面にはケズリが施されている。

784は床面から検出された石製品で、大型の砥石である。やや軟質で肌理の細かい凝灰岩製である。断面形は四角形に近いが、複数の面を有し、いずれの面にも深い線状痕や擦痕が顕著に残されている。中には、鑿状の幅が広い刃部を有する鉄製工具の先端を研磨したと思われる痕跡も認められる。

S H 272 (第170図785～795) 785は支柱穴P3から出土した弥生土器・土師器である。壺の体部で、最大径が下半にあり、下ぶくれの器形を呈するものと思われる。ただし、器形の復元には不安を残しており、もう少し球形に近い体部となる可能性もある。外面及び内面上半は全体的にハケで調整されており、内面下半はナデで調整されている。外面にはススが付着している。

786～794は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

786～788は壺である。786は口縁部で、わずかに外反しながら短く立ち上がる。787は頸部付近の破片である。肩部外面には矢羽根状文が施されている。788は底部の小片である。

789・790は受口状口縁甕である。789は口縁部から体部上半が遺存する。体部はあまり肩が張らず、頸部の屈曲は比較的緩やかである。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁部上半は直立気味に立ち上がり、口縁端部は面をなす。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施されており、体部上半外面には直線文と櫛状工具による列点文が施されている。外面には顕著にススが付着する。790は口縁部で、口縁端部は面をなす。内面には連続的なオサエが認められる。

791～793は高坏である。791・792は有稜高坏の坏部である。791はやや深く、口縁部が外反しながら長くのび、口縁端部は面をなす。793は椀形高坏の坏部と思われるが、鉢の可能性も考えられる。若干内湾し、口縁端部は強いナデによって面をなす。外面はハケとヨコミガキによって調整されており、下半部ではハケが明瞭に認められる。また、内外面にベンガラによる赤彩と思われるものがわずかに認められる。遺存状況から全面を赤彩していたとは考えにくく、特に内面や口縁端部のものは意図的な塗布ではない可能性もある。外面のみに文様状に赤彩が

施されていた可能性もある。

794は器台である。筒状を呈し、脚裾部で強く外反する。透孔は5方向に開けられている。外面はハケによって調整されている。

795は床面上に設置されていた石製品で、台石である。大型の溶結凝灰岩の亜角礫を利用したもので、明確な加工痕などは認められないが、上面が緩やかに凹んでいる。表面は風化が進んでおり、使用痕は明瞭には確認できないが、わずかに敲打痕と思われる痕跡が残る。

S H 273 (第170図796~800) 796は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。有稜高坏の坏部で、坏部外面の稜は明瞭である。口縁部は緩やかに外反しながら外方へ開き、口縁端部は面をなす。内外面ともタテミガキによって調整される。

797~800は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

797・798は壺の体部である。797は外面に直線文と竹管文が施されている。

799・800は甕である。799はく字状口縁甕の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は短く外反する。口縁端部は面をなす。800は受口状口縁甕の口縁部の小片である。口縁部の屈曲は不明瞭であるが、屈曲部外面には明瞭な稜が認められる。

S H 274 (第171図801~804) 801~804は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

801・802は壺である。801は口縁部で、緩やかに外反しながら開く。口縁端部は面をなす。肩部外面には直線文が認められる。802は口縁部から頸部にかけての破片で、頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は緩やかに外反しながら外方へ開く。

803はく字状口縁甕の口縁部である。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をなす。

804は高坏の脚部である。脚裾部の小片で、外面にはタテミガキが施されている。

S H 291 (第171図805~808) 805~808は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

805~807は壺である。

805は口縁部で、緩やかに外反し、口縁端部はわ

ずかに垂下している。806は頸部から体部上半にかけての破片である。頸部外面には不明瞭ながら直線文が施されており、そこから体部上半にかけてハケ状工具による列点文、直線文、波状文が施されている。807は体部片で、ハケ状工具による列点文が施されているが、非常に粗く、若干工具を引きずっているため、簾状文のようになっている。また、直線文も施されている。

808は受口状口縁甕である。頸部は強く屈曲し、頸部内面は内側に突出気味である。口縁部も強く屈曲しており、口縁部上半は内傾し、口縁端部は浅く凹線状に凹む面をなす。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施されている。形態や施文、胎土などからみて、近江地域からの搬入品の可能性がある。

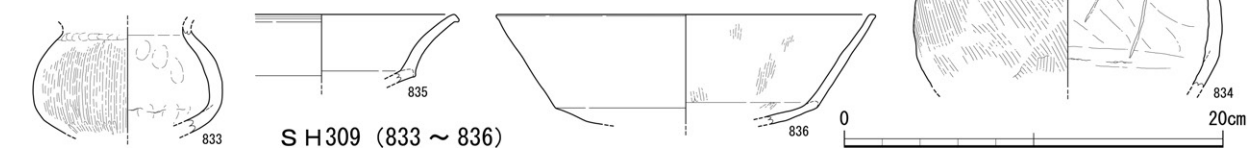
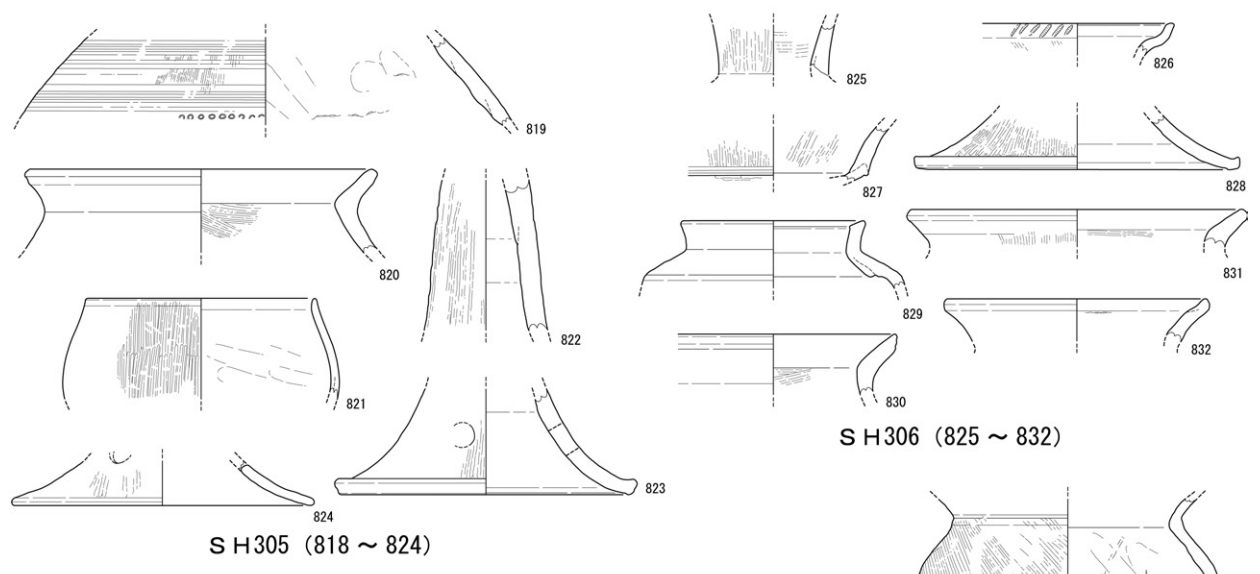
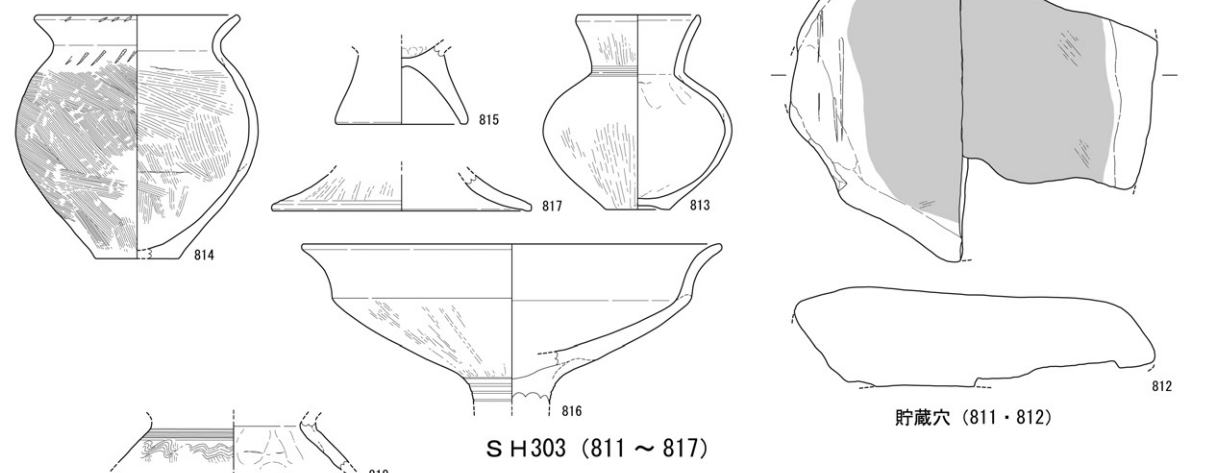
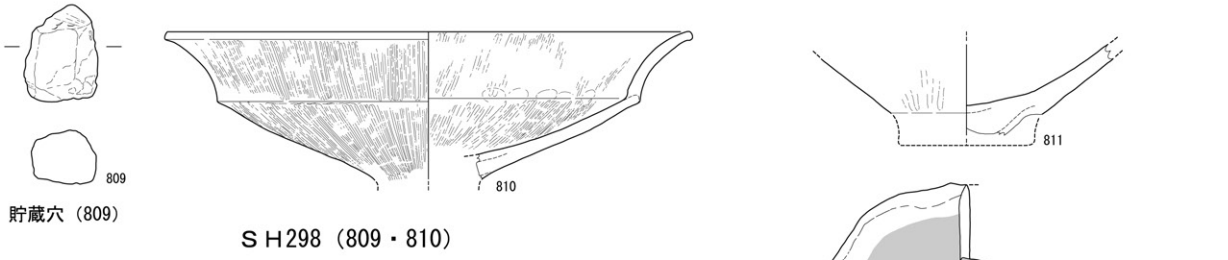
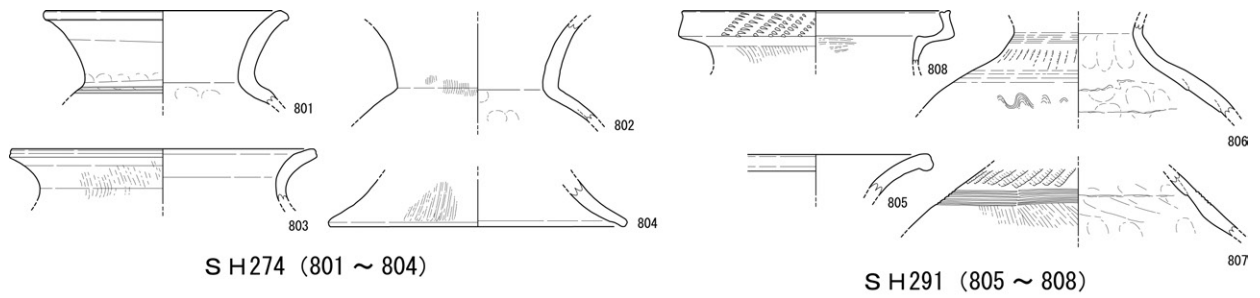
S H 298 (第171図809・810) 809は貯蔵穴から出土した石製品である。小型の軽石で、一部が面をなしており、その部分に不明瞭な擦痕が認められる。砥石として使用されたと思われる。

810は埋土中から出土した弥生土器・土師器である。有稜高坏の坏部で、坏部の全形が復元できた。口縁部は外反しながら大きく開き、口縁端部は面をなす。坏部外面の稜はかなりシャープである。内面の屈曲も明瞭で、屈曲部付近に連続的なオサエが認められる。坏部の底部中央には脚部が剥離した痕跡が認められ、脚部の上端縁部から体部を成形していたものと思われる。

S H 303 (第171図811~817) 811は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。壺の底部で、底部外面が円盤状に剥離している。二次的な被熱が認められる。

812は貯蔵穴から出土した石製品で、台石である。扁平な砂岩の円礫をそのまま利用しており、上面に広く明瞭な摩滅が認められる。摩滅していない周縁部にも、幅広で浅い線状痕や擦痕がみられ、砥石としても使用されていた可能性がある。また、下面は大部分が欠損しているが、遺存している部分には摩滅が認められ、この面も使用されていたと思われる。全体的に破損・欠損が著しいが、被熱が認められるため、それが原因で破片化したものと思われる。

813~817は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。



第171図 S H274 · 291 · 298 · 303 · 305 · 306 · 309出土遺物 (1/4)

813は小型の壺である。全形が復元できた。体部は肩が張り、底部は上げ底となっている。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部はわずかに外反しながら上方へ長くのびる。頸部外面には直線文が施されているようにも思われるが、強いヨコナデの可能性もある。

814・815は甕である。814はく字状口縁甕で、ほぼ全形が復元できた。体部はあまり肩が張らず、底部は平底である。頸部の屈曲は緩く、口縁部はわずかに外反しながら外方へ開く。口縁端部は面をなし、刻目状の列点文を施している。また、肩部外面にも列点文が施されている。外面には下半を中心にススが付着しており、内面には薄くコゲの付着が認められる。815は台付甕の脚台部である。底部内面にはオサエが残る。

816・817は高坏である。816は有稜高坏の坏部で、わずかに脚部も遺存する。坏部はやや深く、口縁部は強く外反し大きく開く。坏部外面の稜は明瞭である。脚部外面上半には直線文が施されている。脚部と坏部とは剥離しているが、脚部の上面に坏部を接合し、頸部外面に粘土を貼り付けて補強しているように見受けられる。817は脚部で、脚裾部の破片である。脚端部は丸く収められる。

SH305 (第171図818~824) 818~824は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

818・819は壺の体部である。818は外面に直線文と波状文が施されている。一部に赤彩と思われる痕跡も認められる。また、SH323出土の894と形態や文様が類似しており、同一個体の可能性もある。819は外面に直線文と竹管文が施されている。

820はく字状口縁甕の口縁部である。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は短く直線的にのびる。口縁端部は不明瞭な面をなす。

821~824は高坏である。821はワイングラス形高坏の坏部と思われる。口径は大きく、口縁端部は丸く収められ、わずかに外反する。坏部外面はミガキによって調整されているが、内面にはナデが施されている。822は脚部で、あまり外方へ開かず柱状に近い。823・824も脚部である。823は外反しながら大きく開き、脚端部は明瞭な面をなす。824は器壁が薄く、脚端部は丸く収められる。

SH306 (第171図825~832) 825~828は埋土中な

どから出土した、弥生土器・土師器である。

825は壺で、頸部付近の破片である。小型の壺と思われ、口縁部は直立気味に立ち上がる。

826は受口状口縁甕の口縁部の小片である。口縁部の屈曲は緩い。外面には列点文が施されている。

827・828は高坏である。827は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜はシャープで、わずかに垂下する。底部と口縁部との接合部では、胎土の色調の差もあって粘土接合痕が破断面で明瞭に観察でき、底部の縁が擬口縁状に整形されている様子が窺われる。屈曲部外面には直線文が施されている。828は脚部で、脚端部は明瞭な面をなす。

829は埋土中から出土した須恵器である。短頸壺の口縁部から体部上半にかけての破片で、肩部は緩やかに屈曲しており、口縁端部は内傾する面をなす。

830~832は埋土中から出土した土師器である。いずれも甕の口縁部である。830は口縁端部が面をなす。832は器壁が薄い。外面にはススが付着する。これらは飛鳥~奈良時代のものと思われ、829の須恵器とともに埋土中に混入したと思われる。

SH309 (第171図833~836) 833~836は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

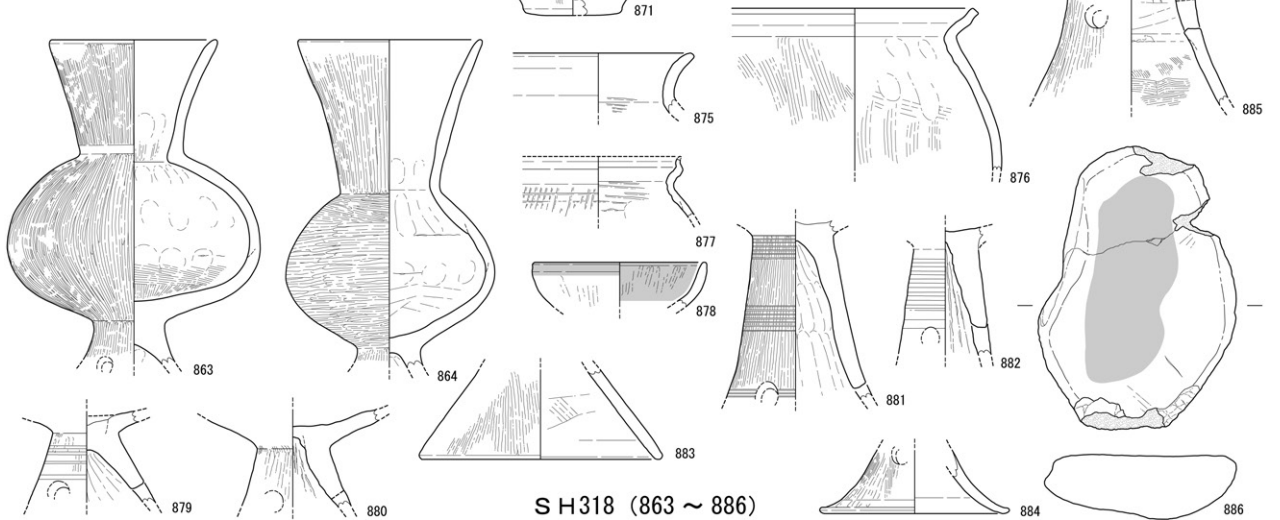
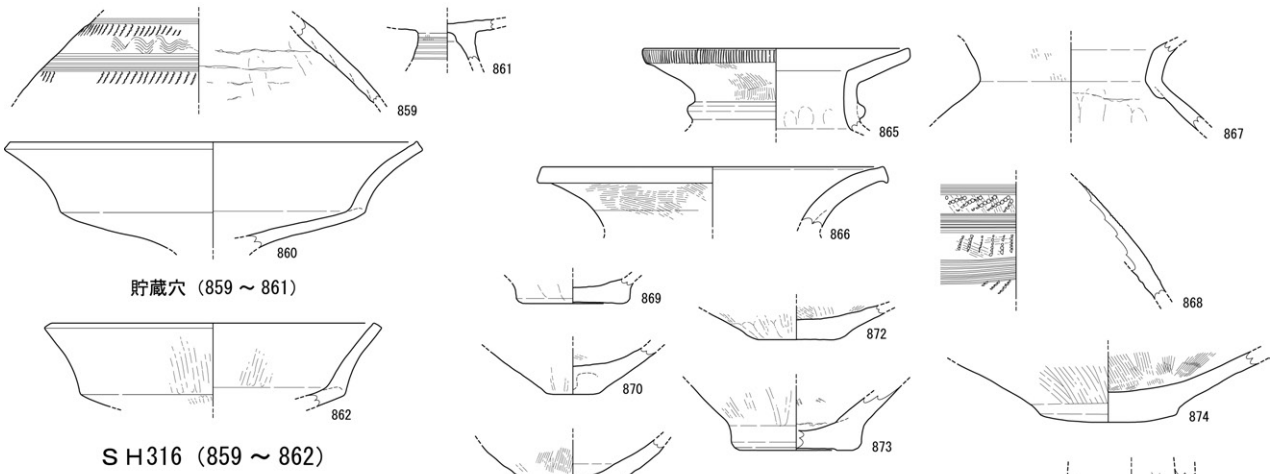
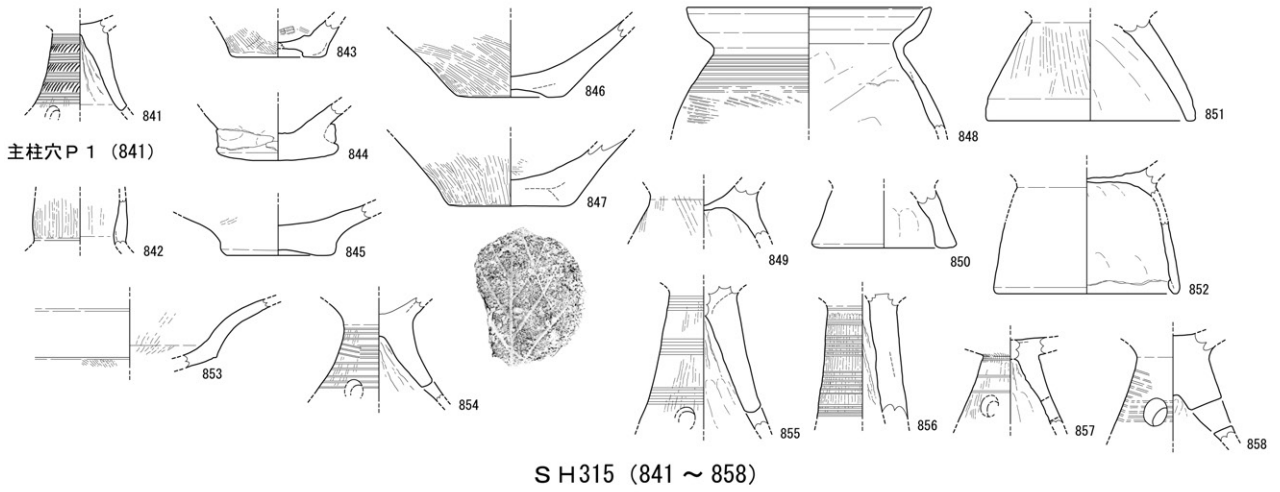
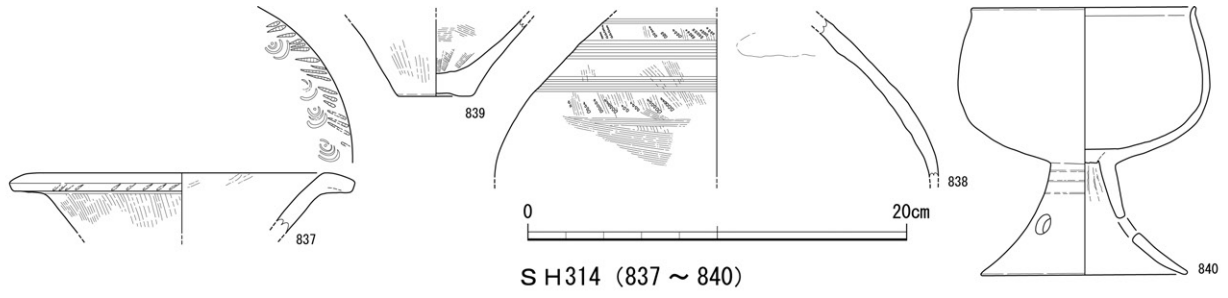
833は小型の壺で、体部は扁平な球形を呈する。頸部外面には連続的なオサエが認められる。

834は甕の頸部から体部にかけての破片である。体部外面はハケで調整されており、内面にはナデが施されている。また、内面には線刻状の工具痕が認められる。口縁部は頸部から緩やかに外反しながら大きく開いており、く字状口縁甕の可能性が高い。

835・836は有稜高坏の坏部である。835は坏部の屈曲部外面の稜がかなりシャープである。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は面をなす。口縁端部には浅い擬凹線文が施されているものと思われる。836は口縁部が長く直線的にのびている。

SH314 (第172図837~840) 837~840は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

837~839は壺である。837は口縁部で、直線的に大きく外方へ開いた後に、口縁端部付近で強く外方へ屈曲し、水平口縁状を呈する。口縁端部には列点文を施し、口縁部上面には粗雑な扇状文と列点文を施している。同一個体の破片が、SH315の埋土中



第172図 S H314~316・318出土遺物 (1/4)

からも出土している。838は体部片で、外面には直線文と櫛状工具による列点文が施されている。接合しないものの、同一個体の破片が多数出土している。839は底部である。内外面ともハケで調整されている。平底の甕の可能性もあるかもしれない。

840はワイングラス形高坏である。全形が復元できた。口径は大きく、坏部は全体に丸みを帯びる。口縁端部は丸く収められ、わずかに外反する。脚部は低く、緩やかに外反しながらハ字状に開く。脚部上端は円板充填状に閉塞されている。脚部外面上半にはわずかに直線文が残る。

S H 315 (第172図841~858) 841は支柱穴P 1から出土した弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、外面には直線文と二枚貝の貝殻腹縁による列点文が施されている。

842~858は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

842~847は壺である。

842は頸部付近の破片である。口縁部は直立し、わずかに内湾する。小型の瓢形壺と思われる。

843~847は底部である。843・846は輪台状を呈する。外面はハケで調整されている。844は粗雑なものである。ボタン状に突出する底部の側面に粘土紐を貼り付けて整形を図ったものと思われるが、粘土紐を貼り付けた後に表面の調整が十分行われておらず、接合痕が明瞭に残る。また、底部外面のみ二次的に被熱している。847は底の器壁が厚く、底部外面には広葉樹の葉の圧痕が残る。

848~852は甕である。

848は受口状口縁甕である。口縁部から体部上半にかけて遺存している。口縁部の屈曲は緩く、口縁部上半は外方へ開く。口縁端部は浅く凹む凹線状の面をなす。肩部外面には直線文が施されている。また、口縁部の外面にはスガが付着している。

849~851は台付甕の脚台部である。849は底部が薄い、底部内面に貼り付けられた粘土が剥離している可能性もある。850は低い脚台部である。器壁は厚く、脚端部は面をなす。851はわずかに内湾しながらハ字状に開く。脚裾部外面にはヨコナデが施されている。

852はS字状口縁甕の脚台部である。接合しない

が、同一個体と考えられる底部付近の破片と脚台部下半の破片が遺存する。脚端部は内側に折り返されている。風化が著しく、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられていたかは不明である。

853~858は高坏である。

853は有稜高坏の坏部である。坏部の屈曲は緩いが、外面の稜は明瞭である。口縁部は外反しながら大きく開く。

854~858は脚部である。854は緩やかに外反しながらハ字状に開く。脚部上面には剥離痕跡が認められる。856はあまり開かず、柱状に近い。外面には直線文が施されている。857・858はハ字状に直線的に開く。いずれも外面に直線文を施している。

S H 316 (第172図859~862) 859~861は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

859は壺の体部で、外面には直線文と波状文、列点文が施されている。列点文は細い半裁竹管状のものを束ねたような工具によって施文されている。内面には粘土接合痕が顕著に残る。

860・861は高坏である。860は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜は比較的明瞭で、口縁部は外反しながら大きく開く。口縁端部は面をなす。風化のため、調整は不明である。861は脚部である。外面には直線文が施されている。

862は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。有稜高坏の坏部で、坏部外面の稜は明瞭である。口縁部はわずかに外反しながら直線的に開き、口縁端部は面をなす。内外面ともタテミガキが施されている。

S H 318 (第172図863~886) 863~885は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

863~874は壺である。

863・864は台付長頸壺である。いずれも脚台部以外は全形が復元できた。863は体部がやや下ぶくれの扁平な球形を呈する。口縁部はわずかに外反しながら上方へのびる。口縁端部は丸く収められる。脚台部は一部しか遺存していないが、緩やかに外反しながらハ字状に開くと思われ、透孔が一部遺存している。外面は全体的にタテミガキによって調整されている。また、体部内面上半にはコゲと思われるも

のが薄く付着している。864は体部がやや小型で球形を呈する。口縁部は863よりもかなり長くのびる。口縁端部は丸く収める。口縁部及び脚台部外面はタテミガキによって調整されているが、体部外面にはヨコミガキが施されている。外面に二次的な被熱が認められる。

865・866は中・大型の壺の口縁部である。865は頸部から直立気味に立ち上がり、中位で強く外方に屈曲し、直線的に開く。口縁端部は面をなし、列点文が密に施されている。頸部外面には突帯が貼り付けられている。866は外反しながら大きく開く。

867・868は頸部付近や体部の破片である。867は頸部が明瞭に屈曲し、口縁部も中位で外方へ屈曲している。868は体部片で、外面には直線文と櫛状工具による列点文が施されている。

869～874は底部である。870は比較的小さな底部である。873は外面にハケが施されているが、一部にケズリやミガキと思われる調整も認められる。また、内面に粘土接合痕が明瞭に残る。破断面が二次的に被熱しており、破片化してから熱を受けたものと思われる。874は底部がわずかにボタン状に突出する。

875～877は甕である。

875はく字状口縁甕の口縁部の小片で、頸部の屈曲は緩く、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸く収める。飛鳥～奈良時代の甕の可能性もある。876は受口状口縁甕で、口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部の屈曲は緩く、不明瞭である。口縁端部は面をなす。体部は内外面ともハケで調整されている。877はS字状口縁甕の口縁部から肩部にかけての破片である。頸部の屈曲は緩いが、口縁部は強く屈曲している。口縁端部付近の遺存状況は悪く、押引列点文の有無は不明である。頸部内面には粗いハケが施されている。

878～884は高坏である。

878は小型の椀形高坏の坏部と思われる。小型器台の可能性もある。口縁端部は丸く収められている。内外面ともタテミガキが施されており、内面全体と外面の口縁部付近には赤彩が認められる。

879～884は脚部である。879はハ字状に直線的に開く。筒状の脚部を成形後、上面の孔に粘土を詰

て閉塞し、さらにその上面の凹みを埋めるように坏部内面に粘土を貼り付けている。880は脚部内面頂部に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。881は外面に直線文が施されている。882は細身の脚部である。脚部外面上半に直線文が施されている。また、内面にはシボリ痕が顕著に残る。883はハ字状に直線的に開く。脚端部は丸く収められる。透孔がわずかに遺存している可能性もある。884は小型のものである。緩やかに外反しながらハ字状に開き、脚端部は面をなす。外面の一部には赤彩が施されている可能性がある。

885は器台の脚部である。緩やかに外反しながらハ字状に開く。透孔の位置と復元される径、内面のナデの状況などから器台としたが、小片のため、高坏の可能性も残る。

886は埋土中から出土した石製品で、台石である。やや小型のもので、ホルンフェルスの扁平な円礫を利用している。上面の平坦面の中央部を中心に顕著な摩滅が認められる。また、わずかに擦痕も残る。一部欠損しているが、ほとんどは調査時の新しい欠損である可能性が高い。

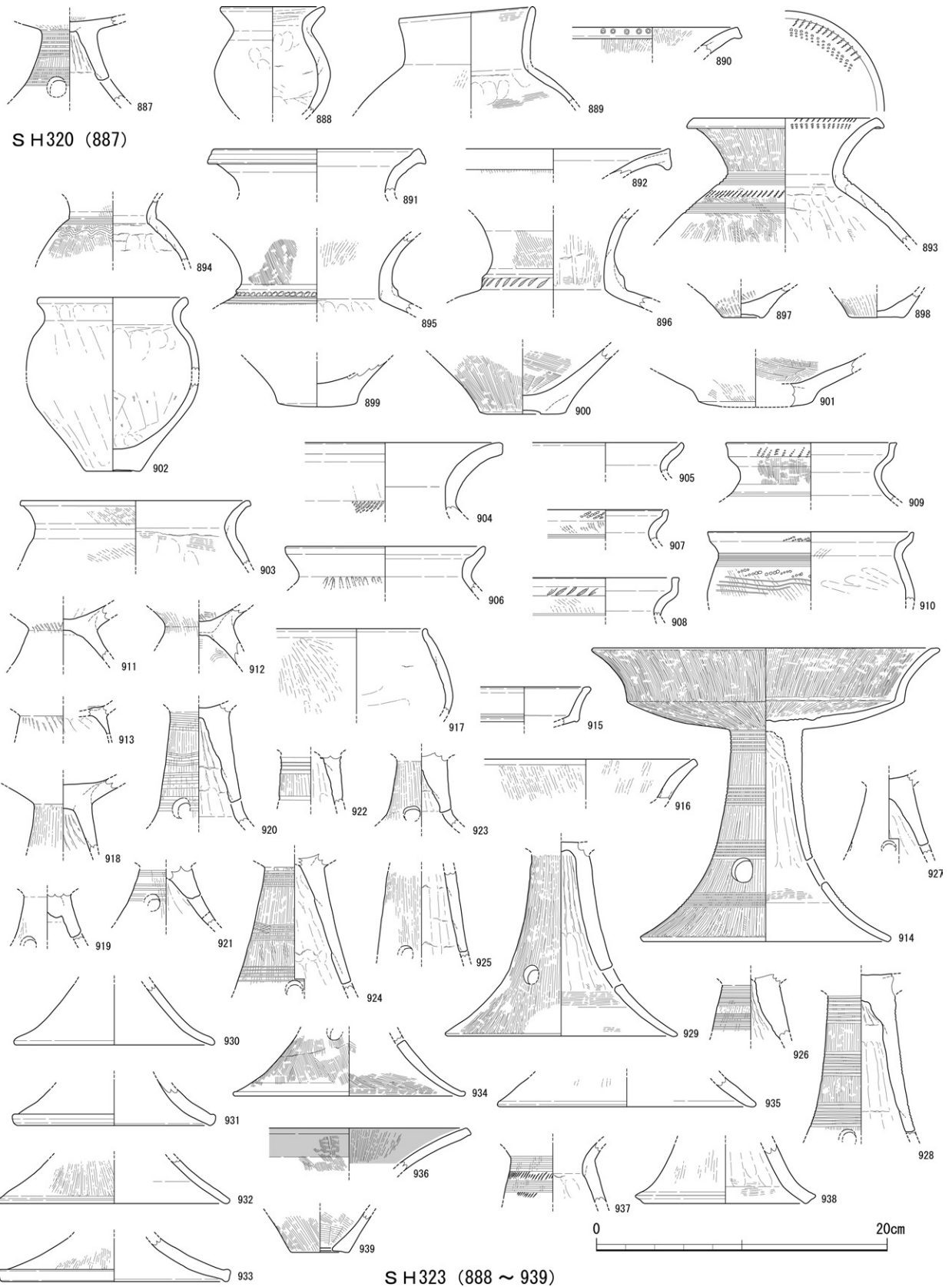
S H 320 (第173図887) 887は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、緩やかに外反しながらハ字状に開く。脚部上面には円板充填状に閉塞した痕跡が認められる。脚部外面上半には直線文が施されている。

S H 323 (第173図888～939) 888～939は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

888～901は壺である。

888は小型の壺で、口縁部から体部下半までが遺存する。体部はなで肩で、中位が若干張っている。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は短く外方へ開く。口縁端部は丸く収める。内外面ともオサエやナデ、工具ナデなど、やや粗雑な調整が施されているが、口縁部内面のみはミガキが施されている。口縁部外面にはススが付着している。

889～893は中・大型の壺の口縁部等である。889は直口壺で、口縁部はわずかに外反しながら直立する。口縁端部は丸く収められる。器形の歪みが大きく、復元には不安を残す。890は口縁端部に竹管文を施している。891は外反しながら開き、口縁端部



第173图 SH320·323出土遺物 (1/4)

は若干拡張して面を作り出し、擬凹線文を施している。893は体部上半まで遺存する。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は緩やかに外反しながら開く。口縁端部はわずかに垂下させている。口縁部内面には矢羽根状文が施されている。この矢羽根状文については2種類の工具が用いられているようにも見受けられるが、おそらく細い竹管状のものを列状に束ね、それを角度を変えて押し当てているために、別の形状になっているものと思われる。体部外面にも、同様の工具で施文された列点文が認められる。

894～896は頸部付近の破片である。894は小型の壺で、S H305出土の818と同一個体の可能性がある。895は頸部が明瞭に屈曲し、口縁部は外反しながら大きく開く。頸部外面には突帯が貼り付けられており、太い棒状工具の先端を押し当てたような刻目が施されている。肩部外面には直線文が施されている。896も895と類似する形態であるが、肩部外面に直線文は認められない。

897～901は底部である。897は比較的小さな底部で、上げ底状を呈する。898は胎土にチャートとみられる黒・灰色の砂粒を多く含んでおり、在地のものとしては違和感がある。他地域からの搬入品の可能性も考えられる。900は輪台状を呈するもので、器壁は厚い。

902～913は甕である。

902～905はく字状口縁甕である。902はほぼ全形が復元できた。小型のものである。底部は平底で、体部は若干肩が張る。頸部の屈曲は比較的緩く、口縁部は短く外反する。体部外面は工具ナデによって調整しており、体部内面下半にはケズリが施されている。体部中位の外面に薄くススが付着しており、また底部付近の外面は二次的に被熱している。903は口縁部が外反し、口縁端部は面をなす。904は口縁部がやや長く、大きく外反する。口縁端部は面をなす。肩部外面には列点文が施されている。壺の可能性も考えられる。

906～910は受口状口縁甕である。906は口縁部の屈曲が緩いが、口縁部上半の内面に強いヨコナデが施されており、全体的に内湾する。肩部外面には列点文もしくは非常に粗いハケがわずかに遺存している。907・908は口縁部外面に櫛状工具による列点文

が施され、肩部外面には直線文が認められる。909は頸部が比較的強く締まる。頸部の屈曲は緩いが、口縁部の屈曲は明瞭で、口縁端部は面をなす。910は体部上半まで遺存する。頸部の締まりは弱い。口縁部上半は短く立ち上がる。口縁部外面と肩部外面に列点文が施されている。

911・912は台付甕の脚台部である。911は大きくハ字状に開く。脚台部の上端縁部から体部を成形しており、体部成形後に底部内面に粘土を貼り付けている。912は筒状の脚台部を成形後、上面を円板充填状に閉塞し、その後脚頂部にも粘土を貼り付けて整形している。体部は脚台部の上端縁部から成形されており、円板充填状の閉塞は、体部成形後に行われたとみられる。

913はS字状口縁甕の脚台部である。底部内面に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

914～935は高坏である。

914～916は有稜高坏である。914は遺存状況が良好で、全形が復元できた。脚部は上半がやや柱状を呈し、下半で大きく外反しながら開く。坏部は比較的浅く、外面の稜は明瞭である。口縁部は大きく外反しながら開く。口縁端部は面をなす。脚部外面には直線文が4段に施されている。また、脚部上半の内面は丁寧にナデで調整されている。915は坏部の屈曲部外面に直線文を施している。916は口縁部の小片である。口縁端部は面をなす。

917はワイングラス形高坏の坏部と思われる。比較的大型の坏部で、口縁端部はわずかに外反する。外面はミガキで調整されており、内面にはナデが施されている。

918～935は脚部である。920・923・928・929・934などのように、914と似た下半部で大きく開く脚部が目立つ。918は脚部上端縁部から坏部を成形している。脚部内面にはシボリ痕が明瞭に残る。919は筒状に成形した脚部の上面の孔に粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。920は内面に粘土接合痕とシボリ痕が明瞭に残る。筒状の脚部を成形後、頸部を絞って細くしたと思われる。921はハ字状に開く。923はやや小型のもので、脚部上面には剥離痕跡が認められる。924は比較的高い脚部と思われ、ハ字状に開く。透孔は4方向に開けられている。925の

内面はナデによって調整されているが、粘土接合痕が部分的に残る。927の透孔は4方向に開けられている可能性があるが、確実ではない。928は比較的高い脚部である。脚部内面の頂部付近には粘土接合痕が認められ、それより上方にはシボリ痕が残る。また、坏部内面に粘土を貼り付けた痕跡も認められる。929は脚部の全形が復元できた。外面に文様は施されていない。内面にはシボリ痕が顕著に残る。また、脚部内面の脚裾部付近にススが附着している。蓋などに転用された可能性が考えられる。931・933は器壁が厚く、脚端部は面をなす。934は外反しながら開く。脚裾部付近の器壁は薄く、脚端部は不明瞭な面をなす。外面の透孔付近には、横方向に脚部成形時のものとみられる粘土の盛り上がりが見られ、それを均すようにハケが施されている。935は脚裾部の小片と思われるが、壺の口縁部などとも考えられる。

936～938は器台である。936は受部の破片と思われる。緩やかに外反しながら大きく開き、口縁端部は面をなす。内面全体と、外面の口縁部付近に赤彩が施されている。937は頸部付近の破片である。外面には直線文と、二枚貝の貝殻腹縁による列点文が施されている。938はハ字状に開き、脚裾部で若干強く外反するものである。器壁は厚い。高坏の脚部としては違和感があるため器台としたが、台付壺の脚台部などの可能性も考えられる。

939は有孔鉢である。底の器壁は薄い。内面にはクモの巣状のハケが施されている。

S H 324 (第174図940～951) 940～951は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

940～942は壺である。940・941は口縁部で、外反しながら大きく開き、口縁端部は面をなす。942は体部である。外面には直線文と櫛状工具による列点文が施されている。直線文は始点と終点のずれが認められる。

943はく字状口縁甕の口縁部である。短く直線的に開き、口縁端部は面をなす。内外面ともハケやヨコナデによって調整されている。

944～950は高坏である。

944～946は有稜高坏の坏部である。944は口縁部の破片で、口縁端部は面をなす。内外面ともタテミ

ガキが施されている。945は坏部外面の稜が細い突帯状に若干突出する。内外面ともタテミガキが施されているが、口縁部外面はヨコミガキで調整されている可能性がある。946は底部の破片で、脚部と口縁部が剥離した痕跡が認められる。

947～950は脚部である。947は小型のものである。948は脚部内面に粘土接合痕が明瞭に残り、それより上方にはシボリ痕が認められる。透孔は4方向に開けられている。950は脚部の全形が復元できた。ハ字状に開き、脚裾部付近で外反するが、器形には若干の歪みが認められる。外面に文様は施されていない。

951は器台と思われる。受部の小片で、口縁端部は面をなし、擬凹線文が施されている。外面はわずかに赤化している。明確な赤彩ではないが、スリッブが施されているか、あるいは二次的に被熱しているものと思われる。

S H 328 (第174図952～973) 952～970は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

952～960は壺である。

952～954は口縁部である。952は口縁端部を垂下させて面を作り出し、竹管文を施している。953は受口状口縁を呈する。口縁部外面の屈曲部には、刻目状の列点文を施している。954は長頸壺ないし細頸壺の口縁部と思われる。口縁端部や頸部を欠損しており、器壁も厚いことなどから、壺ではなく高坏の脚部の可能性もあるが、外面全体がタテハケで調整されていることや、透孔が認められない点などから、壺の口縁部として図化した。

955・956は体部である。955は比較的大型の壺で、体部はやや扁平な球形を呈するものと思われる。肩部外面には直線文と波状文、C字状の竹管文が施されている。頸部外面には突帯が貼り付けられていた痕跡が残る。956は外面に直線文と波状文が施されている。

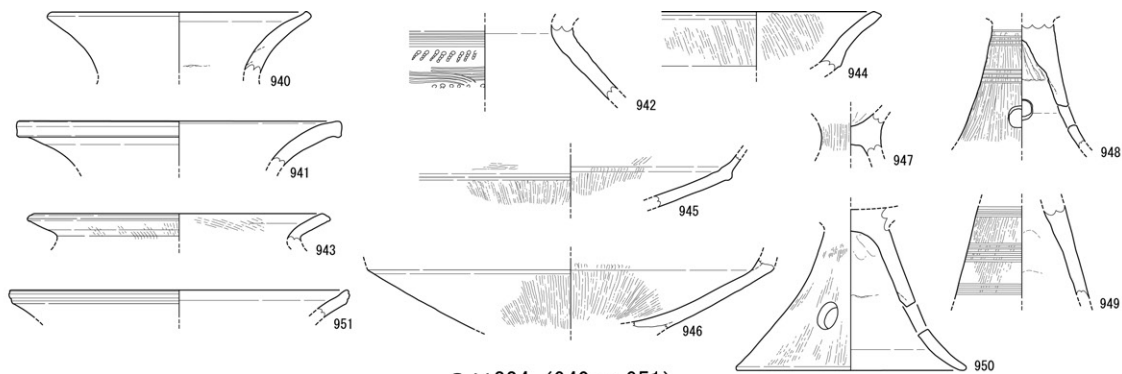
957～960は底部である。957・960は輪台状を呈する。959は内外面ともハケで調整されている。

961・962は台付甕の脚台部である。961は小型で、低い脚台部である。962はハ字状に直線的に開く。器壁は厚い。脚台部上面を円板充填状に閉塞した痕跡が認められる。

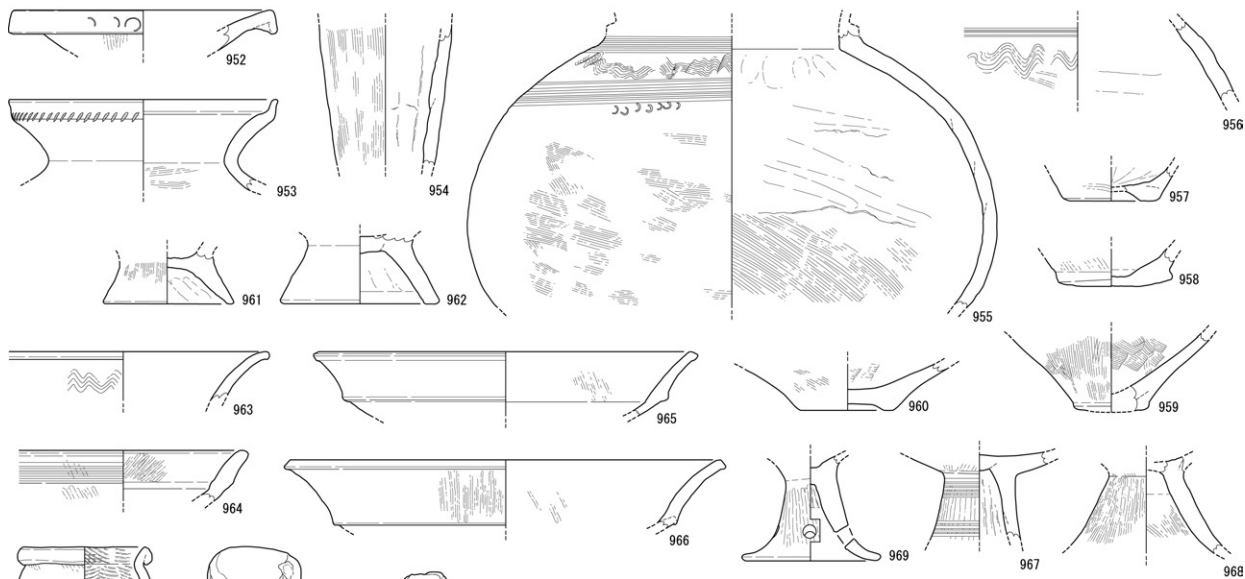
963~969は高坏である。

963~966は有稜高坏の坏部である。963は器壁が薄く、外反する口縁部である。口縁端部は面をなす。また、口縁部外面には波状文が施されている。964は器壁が厚く、坏部の屈曲が緩い。内外面ともミガ

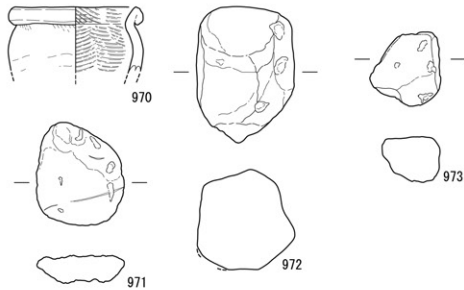
キで調整されており、口縁部外面には擬凹線文が施されているように見受けられるが、強いヨコナデの可能性もある。高坏以外の器種の可能性も残る。965は坏部外面の稜が突帯状にわずかに突出する。一方で、坏部内面の屈曲は不明瞭である。口縁端部は面



S H324 (940 ~ 951)

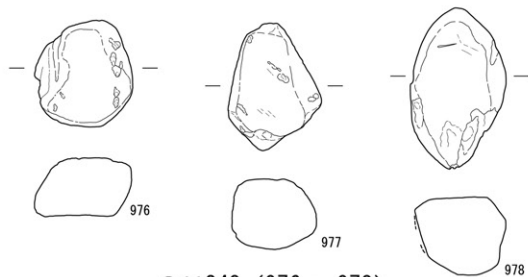


S H328 (952 ~ 973)



S H333 (974)

S H346 (975)



S H348 (976 ~ 978)



第174図 S H324・328・333・346・348出土遺物 (1/4)

をなす。966は口縁部が緩やかに外反しながら開く。坏部外面の稜は明瞭である。また、底部と口縁部との接合部では、粘土接合痕が破断面で明瞭に観察でき、底部の縁が擬口縁状に整形されている様子が認められる。

967～969は脚部である。967は脚部上面が円板充填状に閉塞されているが、脚部と坏部が一体的に成形されているかは不明である。968は外反しながらハ字状に開く。坏部内面にススが付着しているようにも見受けられる。969は小型のもので、脚部下半で強く外反しながら開く。透孔は4方向に開けられている。

970は鉢である。口縁部はく字状を呈するが、口縁端部は外方へ折り返されており、口縁部全体を肥厚させたようになっている。内面は全体的に粗いハケで調整されている。

971～973は埋土中から出土した石製品で、軽石である。971は遺存状況が悪いが、わずかに面をなす部分に線状痕と思われるものが認められる。ただし、新しい傷の可能性も否定できない。972は部分的に平坦な面が認められるが、明瞭な使用痕は確認できない。973も擦痕の可能性のある痕跡がかすかにみられるのみである。

S H333 (第174図974) 974は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、ハ字状に開き、脚端部は不明瞭な面をなす。底部の器壁は厚い。内外面ともハケで調整されている。

S H346 (第174図975) 975は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。器台の頸部付近の破片で、外面には直線文が施されている。内面には受部が剥離した痕跡が認められる。

S H348 (第174図976～978) 976～978は埋土中から出土した石製品で、軽石である。976は平坦な面を有するが、擦痕などの使用痕は認められない。977・978は一部に平坦な面を有しており、その部分に不明瞭な擦痕や線状痕がわずかに残る。砥石として使用された可能性がある。

S H402 (第175図979～1019) 979～1017は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

979～988は壺である。

979は口縁部で、直線的にやや上方へ立ち上がる。

口縁端部は丸く収められる。

980～988は底部である。980はわずかに上げ底状を呈する。981は底部外面が凹レンズ状に円形に凹む。凹みの中央部には棒状工具の先端が当たったような痕跡が認められ、棒状の軸を中心に何らかの工具を回転させることによって凹みを作り出している可能性がある。外面にはタテミガキとヨコミガキが施されており、ヨコミガキの方が若干幅が広い。982・983・985は輪台状を呈する。984は外面に粗いハケを施した後にヨコミガキを施している。988は上げ底状を呈する。内外面をハケで調整している。

989～1004は甕である。

989はく字状口縁甕の口縁部の小片である。遺存状況が悪く、調整などは不明である。

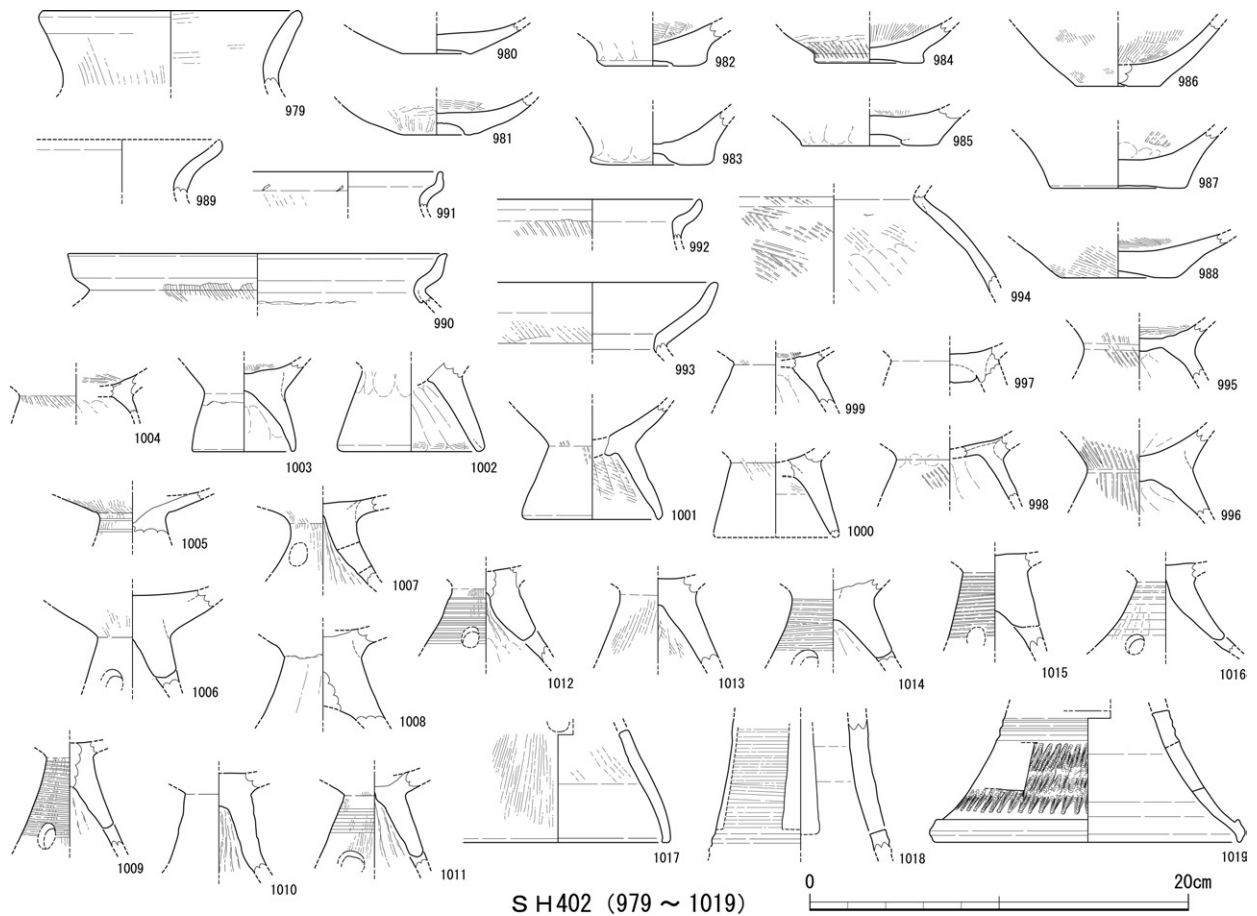
990～993は受口状口縁甕の口縁部である。990は頸部が強く屈曲し、口縁部の屈曲も明瞭である。口縁端部は面をなす。991は口縁部外面に列点文とみられる痕跡が、ごくわずかに遺存する。993は直線的に長くのび、口縁端部に近い位置で緩やかに屈曲する。

994は体部である。肩部付近の破片で、外面には粗いハケが施されている。

995～1003は台付甕の脚台部である。995・996はハ字状に開く。996は脚台部の上端縁部から体部を成形している。997は脚頂部に厚く粘土を貼り付けた痕跡が明瞭に残る。998は脚台部の上端縁部から体部を成形後に、底部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。1000は直立気味で、直線状に開く。器壁は厚く、脚端部を欠損する。脚頂部に厚く粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1001は底部中央に孔が認められる。脚部上面を円板充填状に閉塞していた粘土が剥離したものである。1002はハ字状に直線的に開く。器壁が厚い。1003は小型のもので、脚台部の上端縁部から体部を成形している。外面には粘土接合痕が明瞭に残る。

1004はS字状口縁甕の脚台部である。底部内面に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

1005～1017は高坏の脚部である。1006・1013・1015などのように直線的にハ字状に開くものや、1007・1016などのように外反しながら大きく開くものなどがみられる。1005は坏部中央に深い剥離痕跡

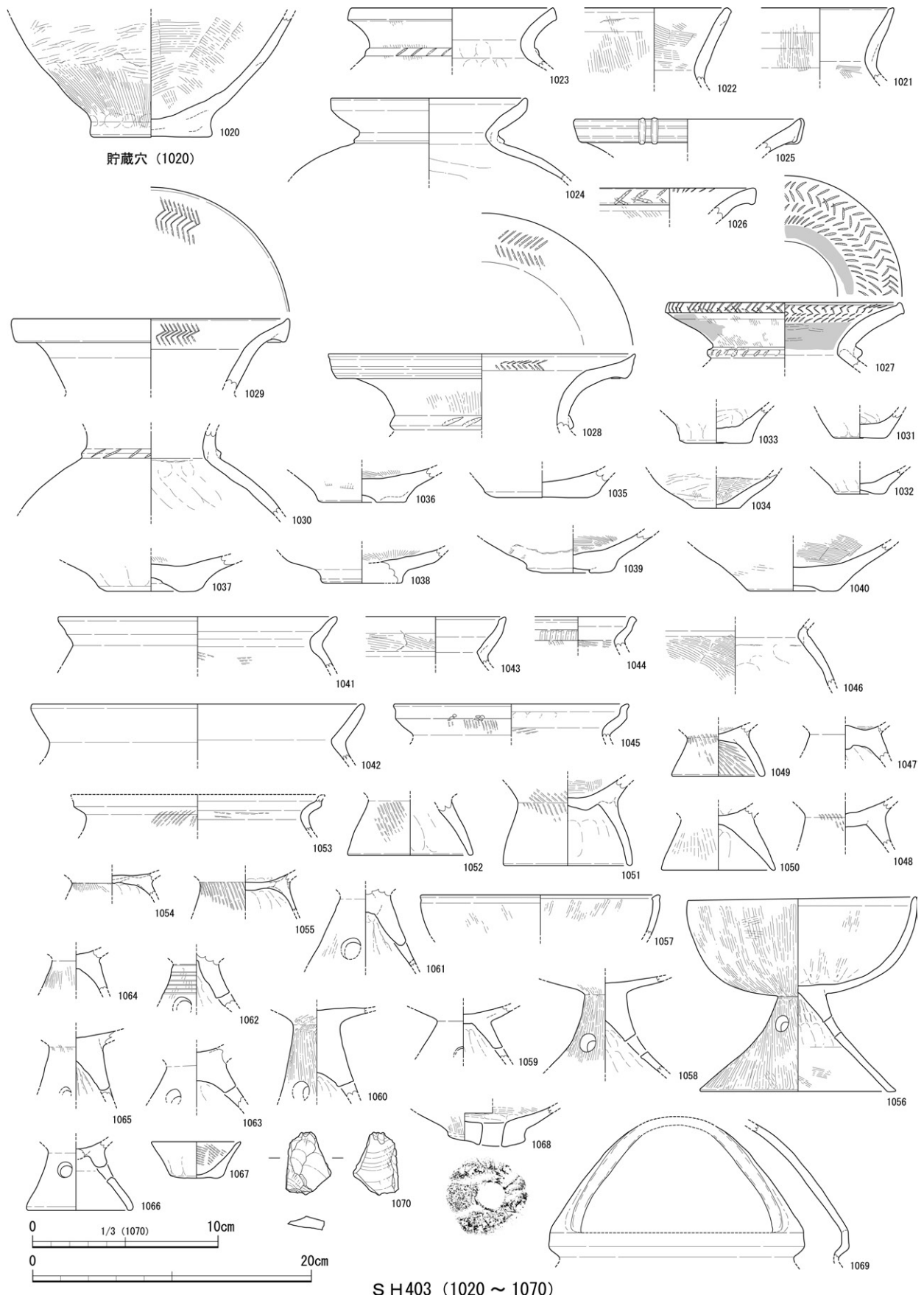


第175図 SH402出土遺物 (1/4)

が認められる。脚部上面の凹みを埋めるように貼り付けた粘土が剥離したものである。1006は脚部上端縁部から坏部を成形している。坏部は非常に器壁が厚いが、坏部内面にかなり厚く粘土が貼り付けられているようである。1007・1008も脚部上端縁部から坏部を成形し、その後に脚部上面の凹みを埋めるように坏部内面に粘土を貼り付けている。1008は脚部上半が中空にならない。また、外面には粘土接合痕が認められ、調整もナデと思われるなど、全体的に粗雑な印象を受ける。1009はやや細身のものである。外面には直線文が密に施されている。1011の上面には剥離した痕跡が認められ、凹レンズ状に浅く凹む。1012は下半が緩やかに内湾する可能性がある。1013は内外面ともハケで調整されている。透孔は遺存していない。1016は外面に直線文が施されているが、風化によって不明瞭となっている。1017は脚裾部が緩やかに内湾し、脚端部は面をなす。内面にはヨコナデが施され、ヨコナデが不明瞭な部分ではわずかにハケと思われる痕跡が認められる。

1018・1019は埋土中から出土した須恵器である。1018は脚付壺あるいは器台の脚部と思われる。破片の一部はSH408から出土した。透孔は細長い長方形で、おそらく4方向に開けられているものと思われる。外面には全体的にカキメが施されている。透孔の下方には凹線が認められる。1019は器台としては小型で器壁が薄いため、脚付壺の脚部の可能性が高い。外反しながらハ字状に開き、脚端部は爪先立ちとなり、外面に面を作り出している。透孔は長方形を呈し、2段分が遺存しており、おそらく4方向に千鳥状に開けられていると推定される。外面には波状文が施されている。1018と同一個体の可能性もある。

SH403 (第176図1020~1070) 1020は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。壺の体部下半から底部にかけての破片である。このほかに、接合せず図化できなかったものの、体部上半と思われる破片も出土している。底の器壁はかなり厚い。体部外面はハケで調整した後に、中位をヨコミガキによ



第176图 SH403出土遺物 (1/4、1/3)

て調整している。内面は全体的にハケが施されている。体部上半の破片も外面はハケとヨコミガキによって調整されており、ススが付着している。

1021～1069は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1021～1040は壺である。

1021～1029は中・大型の壺の口縁部である。1021・1022は直立気味に上方へのび、口縁端部は面をなす。内外面ともハケで調整されている。1023はわずかに外反しながら開く。頸部には突帯が貼り付けられている。1024は体部上半が一部遺存する。体部は球形を呈する可能性が高い。口縁部はわずかに内湾しながら直線的に開き、口縁端部は面をなす。頸部外面には突帯が貼り付けられている。1025は口縁端部に広い面を作り出し、擬凹線文を施すとともに、棒状浮文を貼り付けている。1027は若干外反しながら大きく開く。口縁端部は面をなし、矢羽根状文が施されている。口縁部内面にも矢羽根状文と列点文が施されている。また、内外面には赤彩が施されている。内面の赤彩は、文様より下方のみに認められる。1028は大きく外反しながら開く。口縁端部は上方へ拡張して面を作り出し、擬凹線文を施す。口縁部内面には矢羽根状文が施されている。1029も口縁端部を拡張し、口縁部内面に矢羽根状文を施している。

1030は頸部から体部上半にかけての破片である。頸部外面には突帯が貼り付けられており、突帯には刻目が施されている。

1031～1040は底部である。1031・1032は小型のものである。1034は体部に接合部で剥離した痕跡が認められる。内面には粘土接合痕が残り、それより下方にはハケが施されている。1036・1037・1039は輪台状を呈する。1038は底部がボタン状に突出する。

1041～1055は甕である。

1041・1042はく字状口縁甕の口縁部である。1041は口縁部上半外面に強いヨコナデが施されており、口縁部がわずかに屈曲するようにも見受けられる。受口状口縁甕に近いものと思われる。1042は頸部の屈曲が明瞭で、口縁部はわずかに内湾しながら直線的に開く。口縁端部は丸く収められる。

1043～1045は受口状口縁甕の口縁部である。1043

は口縁部の屈曲が緩く、不明瞭である。口縁部上半外面には強いヨコナデが施されており、口縁端部は内傾する面をなす。1045は口縁部の屈曲が明瞭で、屈曲部外面には櫛状工具による列点文がわずかに遺存している。

1046は体部である。頸部も一部遺存している。外面はハケで調整されている。

1047～1052は台付甕の脚台部である。1047は底部が厚い。1048は脚頂部に粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。1049は小型のもので、内面に粗いハケが施されている。1051は破断面で観察される粘土接合痕をみると、筒状の脚台部を成形後、その上に体部を載せ、脚頸部外面に粘土を貼り付けて接合・補強を行っているように見受けられる。ただし、破断面の粘土接合痕は不明瞭で、脚台部上面が円板充填状に閉塞されている可能性もある。

1053～1055はS字状口縁甕である。1053は口縁部である。口縁端部を欠損するなど、遺存状況は悪い。口縁部外面の押引列点文の有無も不明である。1054は脚台部で、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1055も脚台部である。破断面で粘土接合痕を観察すると、筒状の脚台部を成形後、脚台部の上端縁部から体部を成形するとともに円板充填状に脚台部上面を閉塞し、その後、底部内面の脚台部周縁にあたる部分と脚頂部の屈曲部を中心に、粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。粗い砂粒が貼り付けられた部分は、円板充填状に閉塞した粘土と脚台部との接合部付近であり、補強・整形といった目的があったと推測される。

1056～1066は高坏である。

1056・1057は椀形高坏である。1056は遺存状況が良好で、全形が復元できた。脚部はわずかに外反しながらハ字状に大きく開く。脚端部は面をなす。透孔は比較的高い位置に開けられている。坏部は半球形を呈し、口縁端部は不明瞭ながら内傾する面をなす。外面は全体的にハケを施した後にタテミガキで調整している。坏部内面もタテミガキによって調整されているが、一部にはケズリが認められる。1057は口縁端部が内傾する面をなす。

1058～1066は脚部である。1058は緩やかに外反しながらハ字状に開く。1059は頸部がやや太い。1060

は脚部上半が中空とならない。1061は脚部の上面と内面頂部に粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。おそらく、坏部内面側と脚部内面側の両方から粘土が詰められていると思われる。1063は直線的にハ字状に開く。脚部上端縁部から坏部を成形しており、坏部が剥離した痕跡が認められる。1064は小型のもので、外面はハケで調整されている。1066は低い脚部である。ハ字状に直線的に開き、下半がわずかに内湾する。脚部上面は円板充填状に閉塞されている。高坏ではなく、台付壺などの可能性も残る。

1067は鉢と思われる。小型のものである。平底で、底の器壁は薄い。内面はハケで調整されている。口縁部の遺存状況が悪いため、鉢ではなく、壺の底部などの可能性も考えられる。

1068は有孔鉢である。器形にはやや歪みがあり、不整形である。底部は若干ボタン状に突出する。底部外面には棒状の圧痕が2箇所残る。

1069は手焙形土器である。覆部の破片で、一部に鉢部の口縁部も遺存する。文様や調整などは不明瞭であるが、外面にはわずかにハケが認められる。鉢部の口縁部は受口状を呈し、覆部はその口縁端部から成形されているように見受けられる。

1070は埋土中から出土した石製品で、剥片である。小型のもので、石材は緑色のチャートである。縄文時代のもものが混入した可能性が高い。

S H405 (第177図1071~1074) 1071~1074は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1071・1072は壺の口縁部である。1071は直線的に外方へ開く。頸部は鋭く屈曲し、口縁端部は丸く収める。外面は粗いハケで調整した後に、部分的にミガキが施されている。1072はやや大型のもので、直線的に長くのびる。口縁端部は面をなす。外面はハケで調整されており、頸部外面には強いヨコナデが施されている。

1073は台付甕の脚台部である。外面には粗いハケが施されている。

1074は高坏の脚部である。筒状に成形した脚部の上面に粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。内面にはヨコナデが施されているが、内面の頂部付近には及んでおらず、その範囲にはシボリ痕が明瞭に残る。

S H408 (第177図1075~1083) 1075は支柱穴P2から出土した弥生土器・土師器である。S字状口縁甕の口縁部で、口縁端部は外方へ引き出されているが、明瞭な面は認められない。口縁部外面には押引列点文が施されている。頸部外面には沈線状の痕跡が認められるが、ヨコハケの一部とも思われる。

1076~1083は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1076・1077は壺の底部である。1076は底部が突出気味である。1077はわずかに上げ底状を呈する。

1078~1080は台付甕の脚台部である。1078は上面に剥離痕跡が認められる。1079はわずかに内湾しながらハ字状に開く。1080は大きくハ字状に開くと思われる。外面は粗いハケで調整されている。底部内面には粘土を貼り付けた痕跡が認められる。

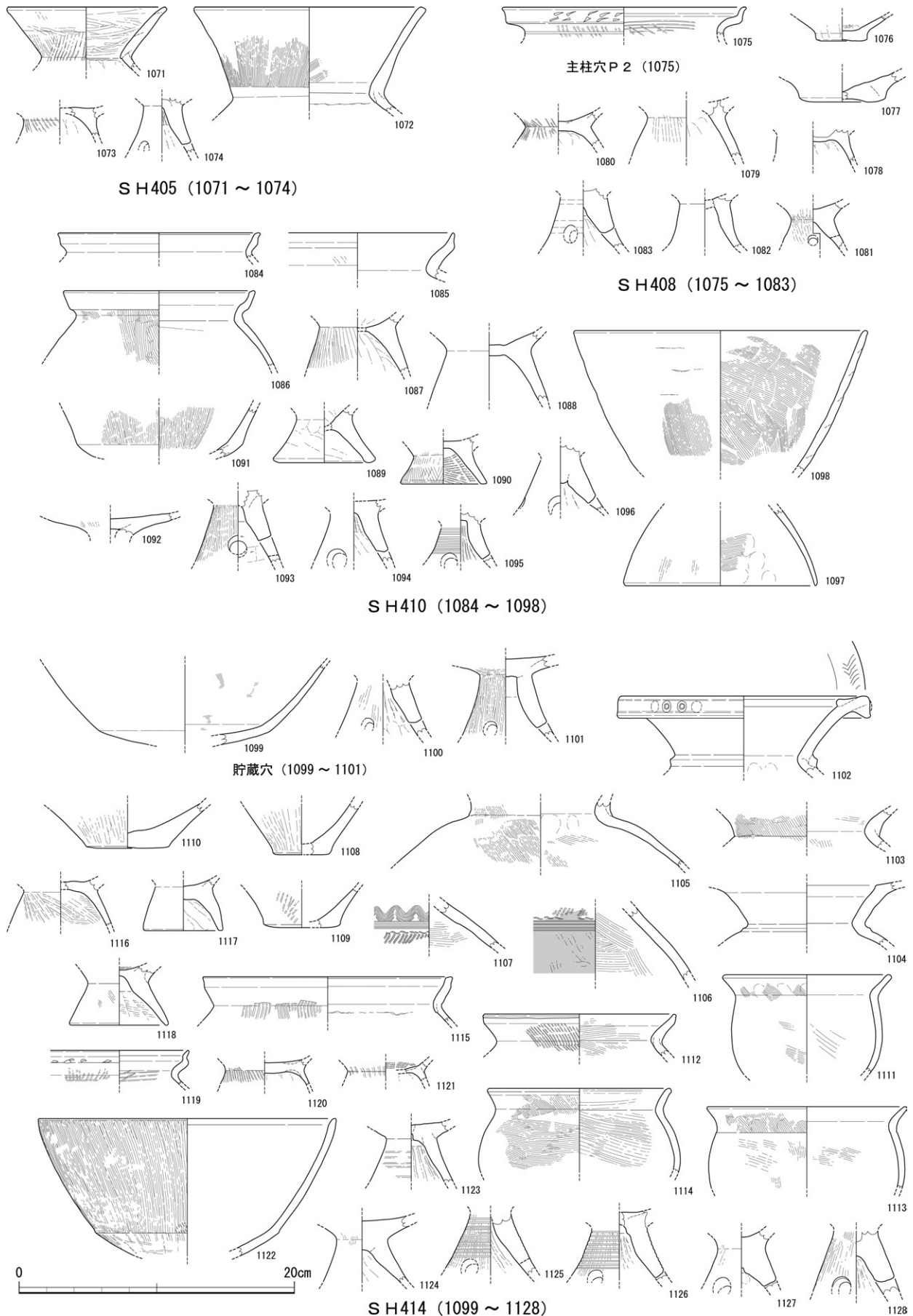
1081~1083は高坏の脚部である。1081はやや小型のもので、透孔も小さい。1082は下半で強く外反するものと思われる。風化により調整は不明瞭であるが、坏部内面にはミガキがわずかに遺存する。1083は緩やかに外反しながらハ字状に開く。外面上半には不明瞭ながら直線文が認められる。

S H410 (第177図1084~1098) 1084~1098は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1084~1090は甕である。

1084~1086は受口状口縁甕である。1084は口縁部で、屈曲部の外面には明瞭な稜が認められるが、内面の屈曲はかなり不明瞭である。口縁端部は面をなし、わずかに外方に引き出されているようにも見受けられる。S字状口縁甕の可能性も考えられるが、器壁の遺存状況が悪く、押引列点文の有無などは不明である。1085も口縁部で、緩やかに外反しながら開き、口縁端部付近をはね上げるように短く上方へ屈曲させる。受口状口縁甕というより、口縁端部を強くはね上げたく字状口縁甕とする方が適当かもしれない。1086は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部の屈曲はやや弱い、外面には明瞭な稜が認められる。口縁端部は内傾する面をなす。体部外面はハケで調整されている。

1087~1090は台付甕の脚台部である。1087は底部の器壁が薄い。1089は小型のもので、ハ字状に大きく開き、脚端部は面をなす。外面はオサエヤナデに



第177図 SH405・408・410・414出土遺物 (1/4)

よって調整されており、台付甕の脚台部としては若干の違和感があるため、台付壺の脚台部などの可能性も考えられる。1090も小型のもので、脚台部の上端縁部から体部を成形している。内面は粗いハケで調整されている。

1091～1097は高坏である。

1091・1092は坏部である。1091は有稜高坏で、坏部外面の稜はかなり明瞭であるが、内面の屈曲は不明瞭である。内外面ともタテミガキで調整されている。1092は脚部の上面を円板充填状に閉塞している。脚部と坏部とが一体的に成形されているかは不明である。

1093～1097は脚部である。1093はハ字状に直線的に開く。透孔は4方向に開けられており、内面にはケズリが施されている。1095は外反しながらハ字状に開く。外面には直線文が施されており、内面にはシボリ痕が顕著に残る。1096は、内面頂部に筒状に成形された脚部の上面を粘土を詰めて閉塞した痕跡が残る。透孔は4方向に開けられている可能性がある。1097は脚部下半の破片で、明瞭に内湾する。器壁は薄い。破片の上端に透孔がごくわずかに遺存しているようにも思われる。

1098は鉢である。比較的大型のもので、体部はわずかに内湾しながら直線的に開き、口縁端部は丸く収める。内外面ともハケで調整されているが、外面には粘土接合痕が明瞭に残る。有孔鉢の可能性も考えられる。

S H414 (第177図1099～1128) 1099～1101は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

1099は有稜高坏の坏部で、比較的深い。内面には、器壁の小さな凹みに入り込むような形で水銀朱が付着している。内面朱付着土器の可能性はあるが、器壁の遺存状況が悪いため、外面にススが付着していたかは不明である。

1100・1101は高坏の脚部である。1100は内面にシボリ痕が残る。1101はやや外反しながらハ字状に開く。筒状に成形した脚部の上面を円板充填状に閉塞したと思われるが、脚部上面を閉塞した後に、さらに坏部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている可能性もある。

1102～1128は埋土中から出土した、弥生土器・土

師器である。

1102～1110は壺である。

1102は口縁部で、直線的に大きく外方へ開き、口縁端部付近で外反する。口縁端部は粘土を貼り付けて垂下させ、広い面を作り出し、擬凹線文を施すとともに円形浮文を貼り付けている。円形浮文は4個一組で3方向に配されていると思われる。口縁部内面にも突帯状に粘土を貼り付けて面を作り、そこに二枚貝の貝殻腹縁による矢羽根状文を施している。全体的に風化しており、調整などは不明であるが、口縁端部の剥離面ではハケが施されていることが確認できる。また、外面には一部に赤彩と思われる痕跡も認められる。

1103・1104は頸部付近の破片である。1104は明瞭に屈曲する頸部から口縁部が直線的に外方へ開き、上位で強く外反する。その部分の内面には明瞭な稜が認められる。頸部外面には低い突帯が貼り付けられている。

1105～1107は体部である。1105は内外面ともハケで調整されている。1106と1107はほぼ確実に同一個体と思われるが、接合せず、図上復元も困難であったため、別々に図化した。肩部の破片であるが、外面には直線文と波状文、そして端末結節縄文が施されている⁸⁾。また、最下段の直線文より下方には赤彩が認められる。外面はミガキで調整されており、内面にはハケが施されている。端末結節縄文を施す点から東海地方東部や関東地方南部との関係が窺われるが、波状文や直線文などの櫛描文と併用されている点には違和感があり、また、胎土分析からも他地域からの搬入品と認定できるような結果は得られなかった(第七章第3節)。こうしたことから、東海地方東部ないし関東地方南部の影響を受けて、居林遺跡あるいはその周辺で製作された土器と考えるのが穏当と思われる⁹⁾。

1108～1110は底部である。1109は外面に粗いハケが施されている。1110は外面がミガキで調整されており、ススが付着している。

1111～1121は甕である。

1111～1114はく字状口縁甕である。1111は口縁部から体部下半にかけてが遺存する。小型のもので、頸部の締めりも弱く、鉢に近い。口縁部は短く直線

的に開く。口縁部外面にはオサエが残る。1112は口縁部で、わずかに外反しながら開く。口縁端部は上方にはね上げられ、面をなす。口縁端部には1条の沈線が認められるが、文様ではなく工具痕の可能性が高い。1113は1111と同一個体の可能性もあるが、復元される口径は大きくなる。頸部の屈曲は比較的緩く、口縁部は短く外方へ開く。口縁端部は丸く収められる。1114は口縁部から体部上半にかけてが遺存しており、また、接合しないものの同一個体と考えられる破片が複数出土している。1113と似た器形を呈するが、頸部の締まりは若干強い。内外面とも全体的にハケで調整されている。

1115は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は不明瞭であるが、口縁部上半外面には強いヨコナデが施されている。口縁端部は面をなす。体部外面には粗いハケが施されている。

1116～1118は台付甕の脚台部である。1116は内外面ともハケで調整している。1117は小型で、器壁が厚い。1118はハ字状に開く。脚頂部が大きく凹み、底部の器壁は薄い。脚台部の上端縁部から体部を成形していると思われる。

1119～1121はS字状口縁甕である。1119は口縁部で、口縁端部は大きく外方へ引き出され、内傾する面をなす。外面には押引列点文が施されている。1120・1121は脚台部である。1120は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。ただし、底部内面や脚頂部の全体に貼り付けられているのではなく、その周縁部に輪状に貼り付けられている。1121は底部内面のみ粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

1122～1128は高坏である。

1122は有稜高坏の坏部である。口縁部が内湾しながら長くのび、かなり深い坏部となっている。口縁端部は内傾する面をなす。坏部外面の稜はわずかに突出しており、明瞭である。外面は全体的にタテミガキで調整されているが、わずかにミガキの前に施されたハケが遺存する。また、稜より下方では部分的にヨコミガキも認められる。

1123～1128は脚部である。1123は脚部内面頂部に軸芯痕が認められる。脚部は、おそらく筒状に成形した後に、上面の孔に粘土を詰めて閉塞しているが、

軸芯痕は詰められた粘土の部分に残されている。また、軸芯痕の上方にあたる位置には、坏部内面の孔状の凹みを粘土で埋めたような痕跡も確認できる。

1125・1126は緩やかに外反しながらハ字状に開く。外面には直線文が施されている。1127は内面頂部が小さな孔状に凹むが、軸芯痕ではない。1128は脚部上面が大きく孔状に凹んでおり、それを埋めるように充填された粘土が剥離した痕跡が認められる。

S H417 (第178図1129～1149) 1129・1130は主柱穴P2から出土した弥生土器・土師器である。いずれも受口状口縁甕の口縁部で、外面には列点文がわずかに遺存している。

1131・1132は主柱穴P3から出土した弥生土器・土師器である。1131は台付甕の脚台部で、わずかに内湾しながらハ字状に開く。内面はハケで調整する。1132は高坏の脚部で、頸部付近は中空となっていない。脚部外面上半には直線文が施されている。

1133～1135は主柱穴P4から出土した弥生土器・土師器である。1133は壺の口縁部の小片で、口縁端部はわずかに垂下する。1134は小型の受口状口縁台付甕である。脚台部は低く、若干外反する。体部は肩が張る倒卵形を呈し、頸部はかなり強く屈曲する。口縁部も明瞭に屈曲しており、口縁部上半は外方へ開く。口縁部外面には列点文が施されている。また、体部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。1135は甕の体部と思われる。外面はハケで調整されており、上半にはススが付着し、下半は二次的に被熱している。比較的小型で、鉢の可能性も残る。

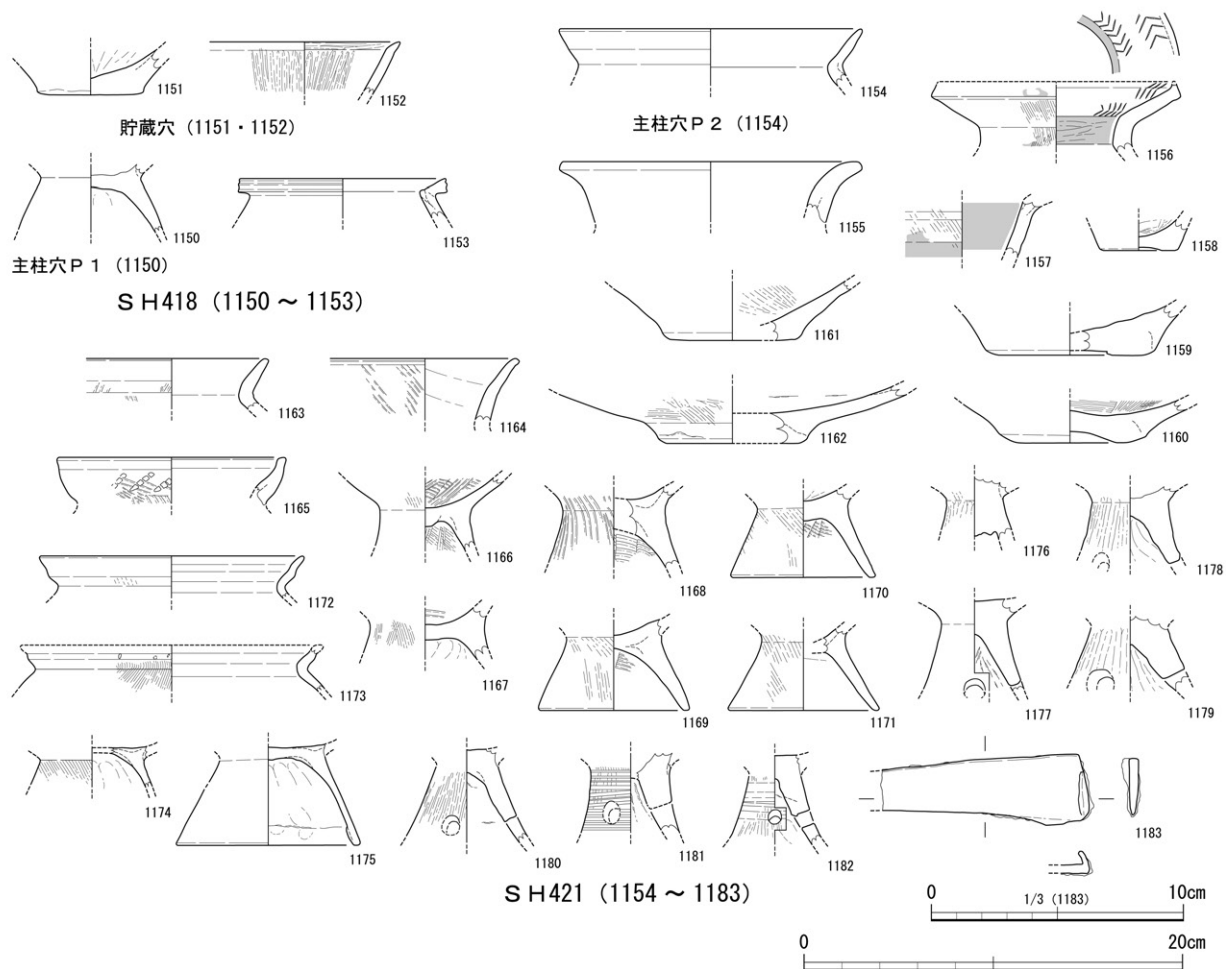
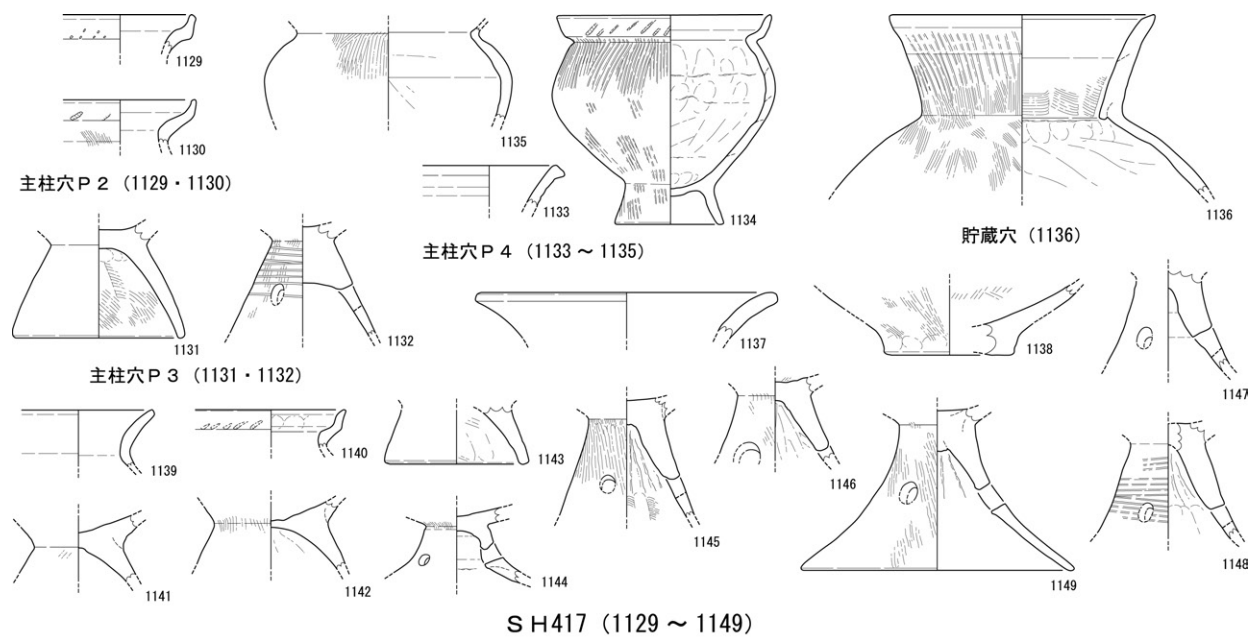
1136は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。壺の口縁部から体部上半にかけての破片で、口縁部はわずかに外反しながら上方へのびる。口縁端部は不明瞭ながら面をなす。外面は全体的にハケで調整されているが、口縁部外面に施されたハケはやや粗い。

1137～1149は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1137・1138は壺である。1137は口縁部で、外反しながら大きく外方へ開く。口縁端部は丸く収める。1138は底部で、内外面ともハケが施されている。

1139～1143は甕である。

1139はく字状口縁甕の口縁部である。緩やかに外



第178図 S H 417・418・421出土遺物 (1/4、1/3)

反しながら開き、口縁端部は面をなす。

1140は受口状口縁甕の口縁部である。明瞭に屈曲し、口縁部上半はやや外方へ開く。口縁端部は不明瞭ながら内傾する面をなす。屈曲部内面には連続的なオサエが残る。また、外面には列点文が施されている。

1141～1143は台付甕の脚台部である。1141・1142は大きくハ字状に開く。脚台部の上端縁部から体部を成形している。1143は低い脚台部である。脚端部は不明瞭な面をなす。

1144～1149は高坏の脚部である。1144は低い脚部と思われ、中位で強く外方へ屈曲し大きく開く。透孔はやや小さい。台付壺の脚台部の可能性もある。1145はハ字状に直線的に開く。脚部上端縁部から坏部を成形している。1148は外面に直線文を施している。1149は脚部の全形が復元できた。全体的に緩やかに外反しながらハ字状に開く。筒状の脚部を成形後、脚部内面側から粘土を詰めて上面を閉塞し、脚部上端縁部から坏部を成形している。そして、その後、その後に坏部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っているものと思われる。

S H418 (第178図1150～1153) 1150は支柱穴P1から出土した弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、上面には剥離痕跡が認められる。脚台部の上端縁部から体部を成形している。

1151・1152は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。1151は壺の底部である。底部外面には植物の種子と思われる圧痕が残り、器壁内にも種子や茎に由来すると思われる炭化物片が含まれている。1152は高坏の口縁部の小片である。口縁端部は明瞭な内傾する面をなし、ヨコミガキが施されている。

1153は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。く字状口縁甕の口縁部で、頸部は鋭く屈曲し、頸部内面は稜をなす。口縁部は短く外方へ開く。口縁端部にはやや幅が広い面が作り出され、擬凹線文が施されている。頸部内面の一部のみ胎土の色調が異なる。

S H421 (第178図1154～1183) 1154は支柱穴P2から出土した弥生土器・土師器である。く字状口縁甕の口縁部で、口縁部外面の上半には強いヨコナデが施されている。

1155～1182は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1155～1162は壺である。

1155・1156は口縁部である。1155は短く外反し、口縁端部は丸く収められる。二次的な被熱が認められ、く字状口縁甕の口縁部の可能性もある。1156は頸部から直立気味に立ち上がり、中位で外方へ強く屈曲し、直線的に開く。口縁端部は若干欠損するが、わずかに上方へはね上げられていると思われる。口縁部内面には矢羽根状文が2段施されている。内外面に赤彩が認められるが、外面では遺存状況が悪い。

1157は頸部付近の破片である。口縁部は1156と同様に中位で強く屈曲し、外方へ開くと思われる。内外面に赤彩が認められる。

1158～1162は底部である。1158は小型のもので、器形などからみて鉢の可能性も考えられる。1159は輪台状を呈する。1160は上げ底状を呈する。1162は大型の壺と思われる。外面にはハケが施されている。

1163～1175は甕である。

1163・1164はく字状口縁甕の口縁部である。1163は短く直線的にのび、口縁端部は丸く収める。1164は緩やかに外反しながら直立気味に開く。外面には粗いハケが施されている。

1165は受口状口縁甕の口縁部である。屈曲は緩く、全体的に内湾する。口縁端部は面をなす。外面には櫛状工具による列点文が施されている。

1166～1171は台付甕の脚台部である。1166は脚台部の上面を円板充填状に閉塞し、その後、脚頂部の周縁部に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。1168は底部内面及び脚頂部に厚く粘土を貼り付けている。内外面とも粗いハケが施されている。1169はハ字状に開き、口縁端部はわずかに面をなす。内面の脚頂部付近には粗いハケが認められる。1170は1169とは別個体と考えられるが、法量や器形、調整などが類似している。1171は直線的にハ字状に開く。底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。

1172～1175はS字状口縁甕である。1172は口縁部で、口縁部上半が緩やかに外反する。口縁端部に明瞭な面は認められないが、全体的に風化しているため、確実ではない。1173は口縁部で、口縁端部を欠損する。外面には列点文とみられる痕跡がわずかに

遺存する。器壁は若干厚く、胎土もほかのS字状口縁甕とは異なるため、受口状口縁甕か、在地産のS字状口縁甕の可能性もある。1174は脚台部で、脚台部の上端縁部から体部を成形している。また、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1175も脚台部で、ハ字状に直線的に開くが、器形には若干の歪みがある。脚端部は明瞭に内面に折り返している。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けているが、底部内面や脚頂部の全体に貼り付けられているのではなく、その周縁部に輪状に貼り付けられている。特に底部内面側では、脚台部と体部との接合部付近に連続的な深いオサエを施し、それを埋めるように粘土が貼り付けられていることが窺われる。

1176～1182は高坏の脚部である。1176は小型のもので、頸部付近は中空となっていない。脚部内面頂部付近の粘土を、工具で掻き取っているように見受けられる。1177は直線的にハ字状に開く。内面には爪痕状の工具痕が認められる。1178は内面に螺旋状のナデが認められる。1180はわずかに外反しながらハ字状に開く。内面頂部に粘土を貼り付けた痕跡が残る。坏部は脚部上端縁部から成形されている。1181は外面に直線文が施されている。1182は内面頂部が浅く孔状に凹む。外面には直線文が施されており、下半にはスガが付着している。

1183は埋土中から出土した鉄製品で、鎌である。先端部を欠損するが、遺存する範囲では刃部は直線的で、直刃鎌と思われる。基部は着柄するために短く折り返されている。木質の付着は確認できない。

S H422 (第179図1184～1229) 1184～1229は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1184～1196は壺である。

1184～1187は口縁部である。1184は頸部から直立気味に立ち上がり、中位で強く屈曲して外方へ開くものと思われる。屈曲部内面には明瞭な稜が認められる。口縁端部はわずかに垂下させ、広い面を作り出しており、擬凹線文と思われるものが遺存している。1185は大型の壺で、口縁部は直線的に開く。口縁端部は面をなす。内面にはミガキが施されているが、外面は粗いハケで調整されている。1186は外反しながら大きく開く。口縁端部は上下にわずかに拡

張して面を作り出し、矢羽根状文を施している。内外面とも粗いハケで調整されている。1187も外反しながら大きく開く。口縁端部は面をなし、列点文が施されている。頸部外面には突帯が貼り付けられている。

1188・1189は頸部や体部等である。1188は頸部付近の破片で、外面に突帯を貼り付けている。1189は体部の小片で、外面に直線文と列点文が施されている。

1190～1196は底部である。1190は底部外面中央がわずかに凹む。1192・1193も底部外面が浅く凹んでいる。1196は外面にヨコミガキが施されている。

1197～1212は甕である。

1197～1199はく字状口縁甕である。1197は口縁部で、直線的に開く。内外面に粗いハケが施されている。1199は口縁部から体部上半にかけてが遺存する。体部は肩や胴が張らず、砲弾形に近い器形を呈するものと思われる。口縁部は短く外方へ屈曲する。外面は全体的に粗いハケで調整されている。

1200～1203は受口状口縁甕の口縁部である。1200は小片で、口縁部の屈曲は不明瞭である。く字状口縁甕に近い。1201は外反しながらやや上方へ立ち上がり、口縁端部ではね上げられるように屈曲する。く字状口縁甕とする方が適当かもしれない。1203は口縁部が強く屈曲している。肩部外面には非常に粗いハケが認められる。

1204は体部である。比較的大型のもので、外面には粗いハケ、もしくはタタキと思われる調整が認められる。

1205～1208は台付甕の脚台部である。1205・1206はハ字状に開く。底部の器壁は薄い。外面には粗いハケが施されている。1207は底部が厚い。底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1208は下半がわずかに内湾する。

1209～1212はS字状口縁甕である。1209は口縁部で、口縁端部は強く外方へ引き出されている。小片のため、外面の押し列点文の有無は不明である。1210は口縁部で、口縁端部は不明瞭な面をなし、外方へ引き出されている。外面には押し列点文が施されている。頸部内面にはわずかにハケが認められる。1211・1212は脚台部で、いずれも底部内面及び脚頂

部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

1213～1229は高坏の脚部である。1214・1215・1217・1223のように緩やかに外反しながらハ字状に開くもの、1218・1221・1222・1224・1227のように直線的にハ字状に開くもの、1216・1225のように外反しながら大きく開くものなどがみられる。1213・1214は脚部上端縁部から坏部を成形している。1216は筒状の脚部を成形後、上面の孔に粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。外面には粗雑な直線文が施されている。1218は内面に工具ナデによる調整が認められる。外面には直線文が施されている。1220は頸部がやや細く締まる。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。1221は上面に剥離痕跡が認められる。1222は脚部上面が凹レンズ状に凹んでおり、剥離痕跡が認められる。この凹みを埋めるように、坏部内面に粘土を貼り付けていたものと思われる。1223は頸部付近が中空となっていない。外面には直線文が施されている。1224は脚部上面の孔を閉塞するために詰めた粘土が剥離した痕跡が認められる。1227は脚部外面上半に直線文が施されている。1228はやや細身の脚部である。頸部付近には直線文が施され、中位には小さな円形の透孔が2段3方向に開けられている。外面はタテミガキによって調整されているが、ミガキの前に施された粗いハケが明瞭に残る。また、直線文より下方には幅が広い縦線状の文様を描くように赤彩が施されている。形態や文様などから、後期前葉のものともみられ、埋土中に混入したと思われる。1229は脚部の全形が復元できた。全体的に緩やかに内湾する。脚部内面頂部はわずかに凹むが、軸芯痕ではない。

S H 423 (第179図1230～1234) 1230は支柱穴P 2から出土した弥生土器・土師器である。手焙形土器の鉢部で、受口状口縁を呈する。口縁部は頸部外面や口縁端部に粘土を貼り付けて全体的に肥厚させている。全体的に風化していることもあり、覆部が剥離した痕跡は認められないが、開口部の側面に貼り付けた棒状の装飾が剥離したと思われる痕跡が、わずかに残る。

1231～1234は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1231・1232は壺である。1231は口縁部で、外反し

ながら大きく開く。口縁端部は丸く収められる。1232は底部である。

1233は高坏の脚部である。緩やかに内湾しながらハ字状に開く。頸部付近の外面には直線文がわずかに残り、始点と終点のずれが認められる。

1234は手焙形土器の鉢部である。口縁部から体部上半にかけての破片で、口縁部は受口状を呈する。口縁部内面には覆部を接合した痕跡が認められる。体部外面には粗いタテハケを施した後に、直線文状にヨコハケが施されている。

S H 424 (第179・180図1235～1271) 1235・1236は支柱穴P 4から出土した弥生土器・土師器である。

1235は台付甕の脚部で、やや低い。わずかに内湾しながらハ字状に開き、脚端部は面をなし、若干内側に突出する。1236は高坏の脚部である。ごくわずかに内湾しながらハ字状に開く。脚端部は面をなす。透孔は高い位置に開けられている。

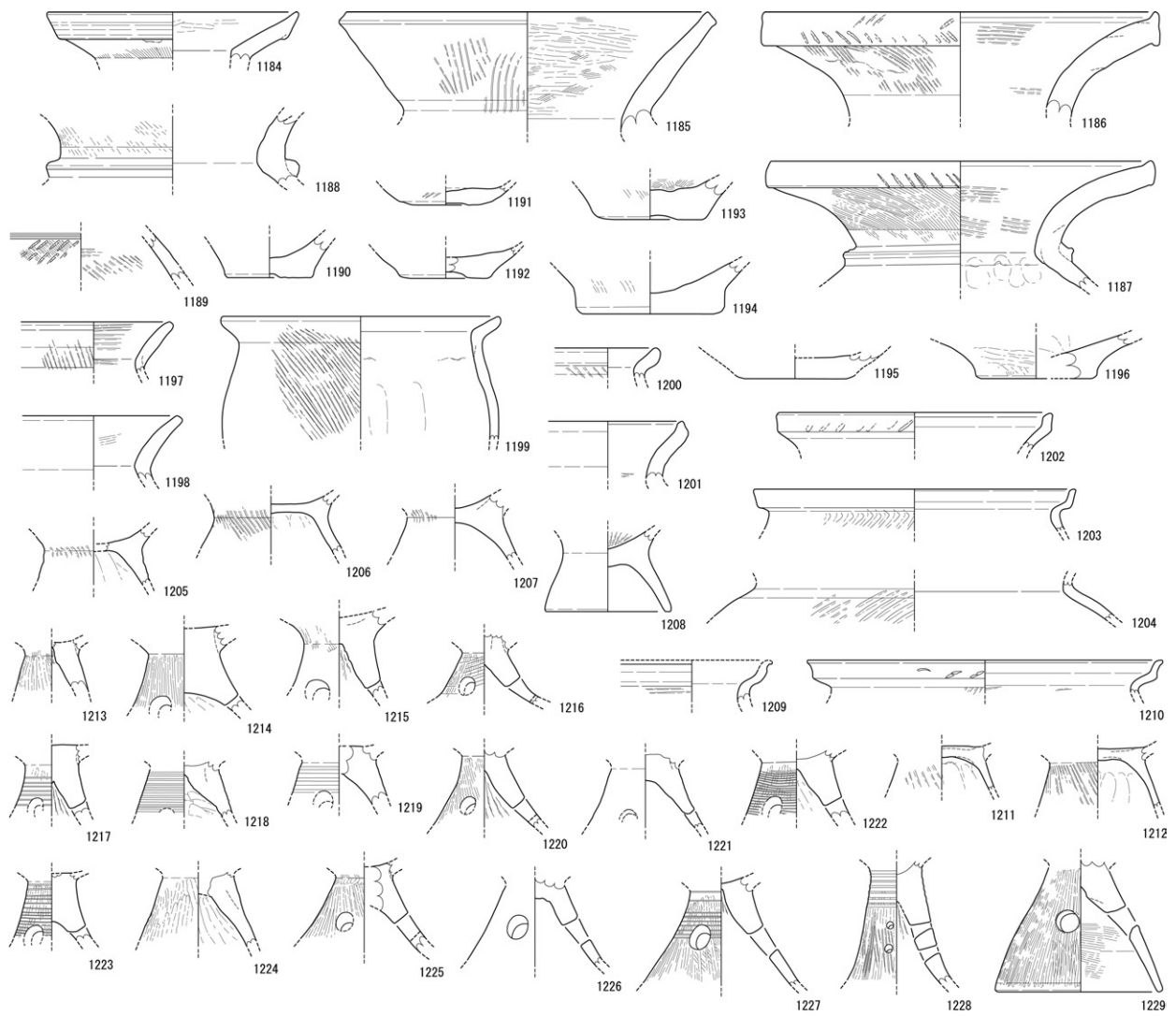
1237～1271は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である¹⁰⁾。

1237～1246は壺である。

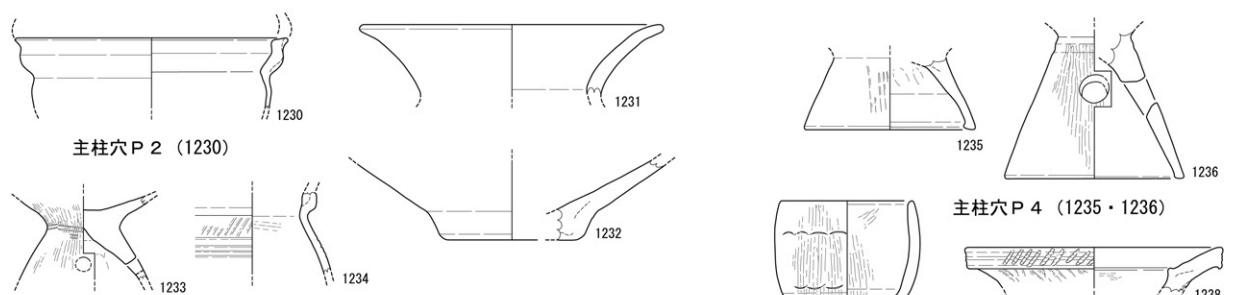
1237～1239は口縁部である。1237は短頸の瓢形壺で、緩やかに内湾しながら直立気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに内傾する面をなす。外面には二枚貝の貝殻腹縁による連弧文と逆位連弧文が施されている。また、頸部付近には不明瞭な直線文と思われるものが認められる。1238は中位で屈曲し、外方へ開く。屈曲部の内面は細い突帯状に突出する。口縁端部はわずかに拡張して広い面を作り出し、擬凹線文と列点文が施されている。1239は外反しながら大きく開く。外面はハケで調整されており、頸部付近には強いヨコナデが施されている。

1240は体部である。外面に直線文と列点文が施されている。列点文は、中空の細い竹管状のものを束ねた工具によって施文されている。

1241～1246は底部である。1241は外面が比較的幅が広いヨコミガキで調整されている。鉢の可能性も残る。1243は底部の周縁部が高台状に突出し、わずかに上げ底状を呈する。外面はナデで調整されている。1245は輪台状を呈する。内外面ともハケで調整されている。1246は底部がボタン状に突出している。



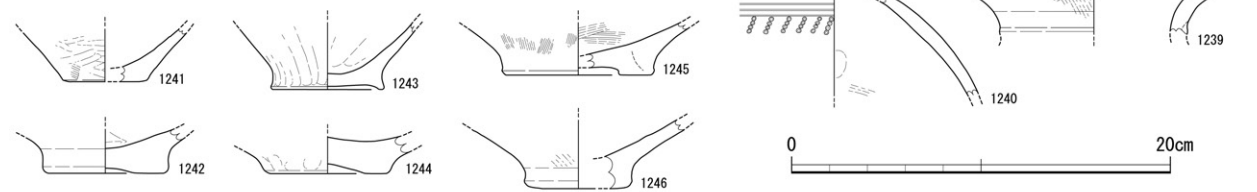
S H422 (1184 ~ 1229)



主柱穴 P 2 (1230)

主柱穴 P 4 (1235 · 1236)

S H423 (1230 ~ 1234)



S H424 (1235 ~ 1246)

第179図 S H422 · 423出土遺物、S H424出土遺物① (1/4)

1247～1262は甕である。

1247はく字状口縁甕の口縁部と思われる。小片で、口縁端部は面をなす。

1248・1249は受口状口縁甕である。1248は小片で、器壁は薄い。口縁端部は欠損するが、わずかに外方へ引き出されている可能性がある。1249は口縁部から体部上半にかけて遺存している。体部は肩が張らない器形を呈する。頸部は明瞭に屈曲する。口縁部の屈曲も明瞭で、屈曲部の外面は稜をなす。口縁部外面には列点文が施されている。

1250～1260は台付甕の脚台部である。1250はやや直立気味である。1251は器壁が厚い。筒状の脚台部の上面を粘土を詰めて閉塞し、脚台部の上端縁部から体部を成形した後に、底部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。1252はハ字状に開く。底部の器壁は薄い。底部内面には薄くコゲが付着している。1255は小型のものである。ほぼ直立し、脚端部は面をなす。1256・1257は底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1258は直立気味であるが、わずかに外反する。上面には剥離痕跡が認められ、底部内面に貼り付けられた粘土が剥離したものであると思われる。1259は筒状に成形した脚台部の上面を、円板充填状に閉塞した痕跡が認められる。1260は直線的にハ字状に開く。筒状の脚台部を成形後、脚頂部に内面側から円板状の粘土塊を貼り付けて閉塞するとともに脚台部の上端縁部から体部を成形し、その後、底部内面にも粘土を貼り付けている。脚頂部に貼り付けられた粘土塊には粗い砂粒は含まれていない。

1261・1262はS字状口縁甕である。1261は口縁部で、口縁部の屈曲は弱く、口縁部上半は外方へ開く。口縁端部は大きく外方へ引き出され、不明瞭な内傾する面をなす。1262は脚台部である。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

1263～1271は高坏の脚部である。1263・1264は直線的にハ字状に開く。1265は大きくハ字状に開く。上面は大きく凹レンズ状に凹んでおり、剥離痕跡が残る。脚部内面頂部には小孔が認められるが、軸芯痕ではなく、筒状の脚部の上面の孔に粘土を詰めて閉塞した際に、孔状に空隙が残されたものと推定される。1266は小型のもので、外反しながら大きく開

く。1267はやや柱状を呈し、外面には直線文が施されている。1268はわずかに内湾しながらハ字状に開く。一部に二次的な被熱が認められる。1269は上半が中空とならない。脚部内面頂部付近には爪痕状の痕跡が多数残されている。1270・1271は内面にシボリ痕が明瞭に認められる。

S H 426 (第180図1272) 1272は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。壺の底部で、底の器壁は厚い。若干ボタン状に突出する。

S H 427 (第180図1273～1275) 1273～1275は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1273は壺の口縁部である。S H 427の周辺から出土したとされ、本来は別の遺構に伴う可能性もある。口縁端部は粘土を貼り付けて垂下させていたと思われるが、垂下部分は剥離しており遺存しない。内面には比較的高い突帯が貼り付けられており、その突帯より下方には赤彩が施されている。突帯より上方にはヘラ状工具による矢羽根状文と、櫛状工具による列点文が施されている。1274は台付甕の脚台部である。大きくハ字状に開く。脚台部の上端縁部から体部を成形しており、体部が剥離した痕跡が認められる。剥離面には連続的なオサエが残る。上面にも剥離痕跡が認められ、やはり連続的なオサエが残る。1275は鉢であるが、器形からみて手焙形土器の鉢部の可能性が高い。口縁部は受口状を呈するが、屈曲は弱く、不明瞭である。体部外面には羽状のタテハケと直線文状のヨコハケが施されている。外面には二次的な被熱が認められる。

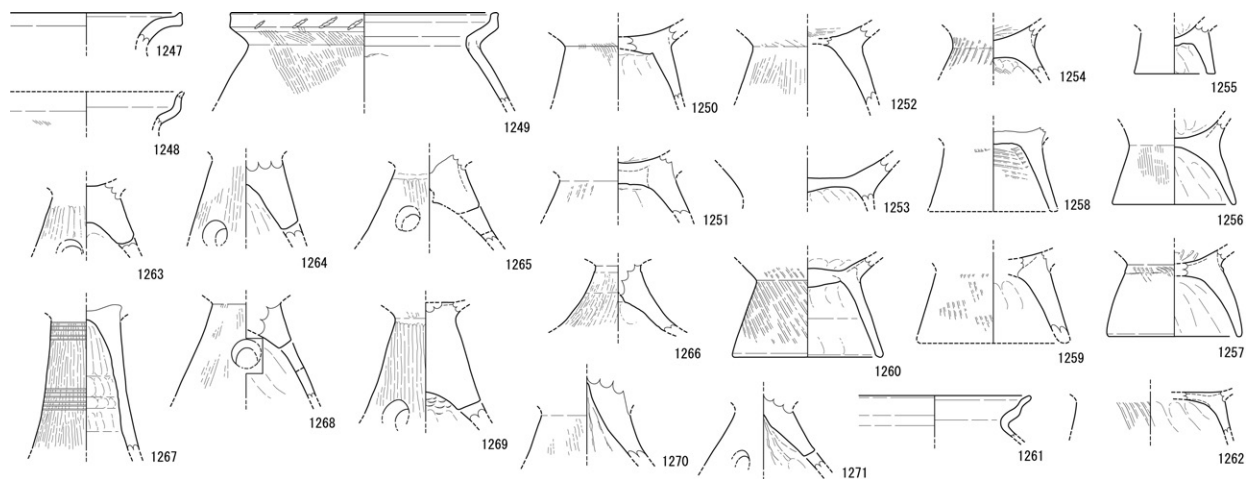
S H 428 (第180図1276～1287) 1276は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。受口状口縁甕の口縁部と思われる。口縁部の屈曲は明瞭で、屈曲部外面は比較的シャープな稜をなす。口縁端部は浅い凹線状に凹む面をなし、わずかに外方へ引き出されている。外面には列点文が施されている。S字状口縁甕の可能性も考えられる。

1277～1286は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

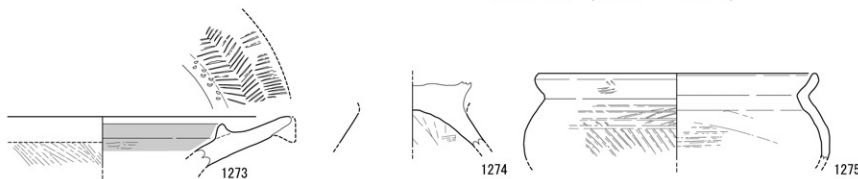
1277～1281は壺である。

1277は口縁部で、中位でわずかに屈曲し、受口状を呈する。受口状口縁甕の可能性もある。

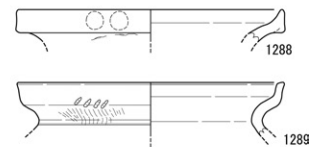
1278～1281は底部である。1278は小型で、体部の



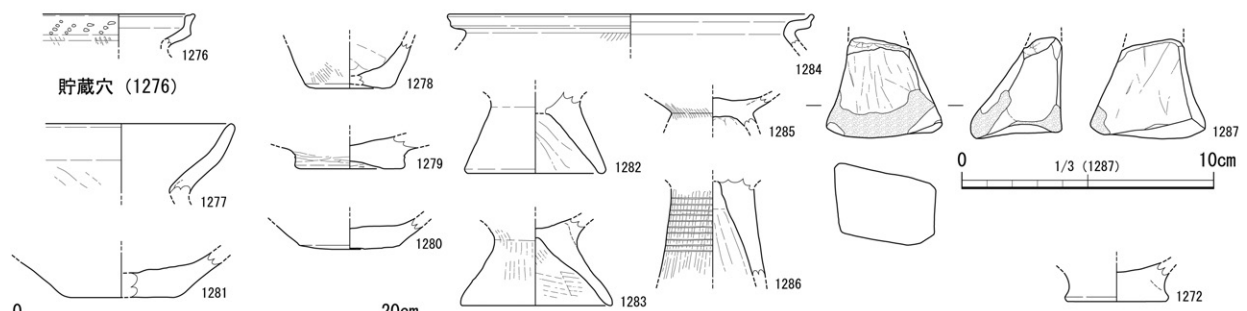
S H424 (1247 ~ 1271)



S H427 (1273 ~ 1275)



貯蔵穴 (1288・1289)
S H430 (1288・1289)



S H428 (1276 ~ 1287)

S H426 (1272)

第180図 S H424出土遺物②、S H426~428・430出土遺物 (1/4、1/3)

立ち上がりが急であり、鉢とも思われる。1279は底部外面が浅く凹んでおり、ケズリが施されている。

1282~1285は甕である。

1282・1283は台付甕の脚台部である。1282は直線的にハ字状に開く。器壁は厚い。上面には剥離痕跡が認められ、筒状の脚台部の上面を円板充填状に閉塞したと思われる。1283はわずかに内湾しながら大きくハ字状に開く。脚端部は丸く収められる。脚台部の上端縁部から体部を成形している。

1284・1285はS字状口縁甕である。1284は口縁部片で、頸部は強く屈曲する。口縁部上半はわずかに外反しながら外方へ開くが、矮小である。S字状口縁甕ではなく、受口状口縁甕とする方が適当かもし

れない。1285は脚台部である。底部内面にやや粗い砂粒を含む粘土を貼り付けていると思われるが、不明瞭である。台付甕の脚台部とも思われる。

1286は高坏の脚部である。やや柱状を呈し、外面には直線文が施されている。

1287は埋土中から出土した石製品で、砥石である。肌理の細かい凝灰岩製で、半分程度を欠損する。断面形は方形を呈し、小口面以外の4面を砥面として使用しており、線状痕や擦痕が明瞭に残る。

S H430 (第180図1288・1289) 1288・1289は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

1288は壺の口縁部で、口縁端部は上下に拡張されて広い面を作り出し、円形浮文を貼り付けている。

ただし、円形浮文は完全に剥落しており、痕跡のみが残る。1289は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁端部は面をなす。外面には列点文が施されている。また、頸部付近には直線文がわずかに遺存している。

S H431 (第181図1290~1330) 1290は支柱穴P2から出土した弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、わずかに外反しながらハ字状に開く。

1291は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。受口状口縁甕で、口縁部から体部下半にかけて遺存している。体部は球形を呈するが、下半でわずかに屈曲し、外面に不明瞭な稜が認められる。この稜を境に、上方は粗いハケ、下方はヨコナデによって調整されており、製作時の成形単位を示しているものと思われる。口縁部の屈曲は外面では緩やかであるが、内面には明瞭な屈曲が認められ、連続的なオサエが施されている。外面の体部下半の稜より上方にはススが顕著に付着しているが、稜より下方は二次的に被熱し、ススの付着は明瞭ではない。

1292~1329は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1292~1304は壺である。

1292~1300は中・大型の壺の口縁部である。1292はわずかに内湾しながら直立気味に立ち上がる。瓢形壺と思われるが、口縁部の内湾は弱い。口縁端部付近の内面には凹線状のヨコナデが認められる。内面には粗いハケが一部に残る。1293は内面に線刻状のものが認められる。7本の細い直線が口縁部と直交するように施されている。1295も内面に線刻が認められる。口縁部と平行する直線と直交する直線、そして斜行する直線からなるが、一部しか遺存していないために何を描いたかは不明である。1296は中位で外方へ屈曲し、屈曲部の内面は稜をなす。破断面では、屈曲部で粘土を接合して口縁部を成形していることが明確に観察できる。稜より上方には矢羽根状文が施されている。1297は直線的に短く開く。頸部外面には突帯が貼り付けられている。突帯より下方には、直線文と思われるものがわずかに遺存する。1299は中位で屈曲し、大きく外方へ開く。口縁端部は面をなし、円形浮文が貼り付けられている。3個一組で、4方向に配されていたと推測される。

口縁部内面には矢羽根状文と思われるものが一部遺存する。また、口縁部内面の屈曲部より下方には、赤彩もごくわずかに認められる。1300は中位で強く屈曲し、外方へ大きく開く。屈曲部内面は突帯状に突出しているが、突帯を貼り付けたのではなく、屈曲部より上方を成形する際に、突帯状に突出するように粘土を接合したものと思われる。口縁端部は垂下させている。内外面ともハケを施した後に粗いミガキによって調整している。

1301~1304は底部である。1301は小型のもので、若干ボタン状に突出する。1302は底部外面が凹レンズ状に凹み、その部分には細いミガキと思われる調整が認められる。瓢形壺の底部と思われる。1304は輪台状を呈する。

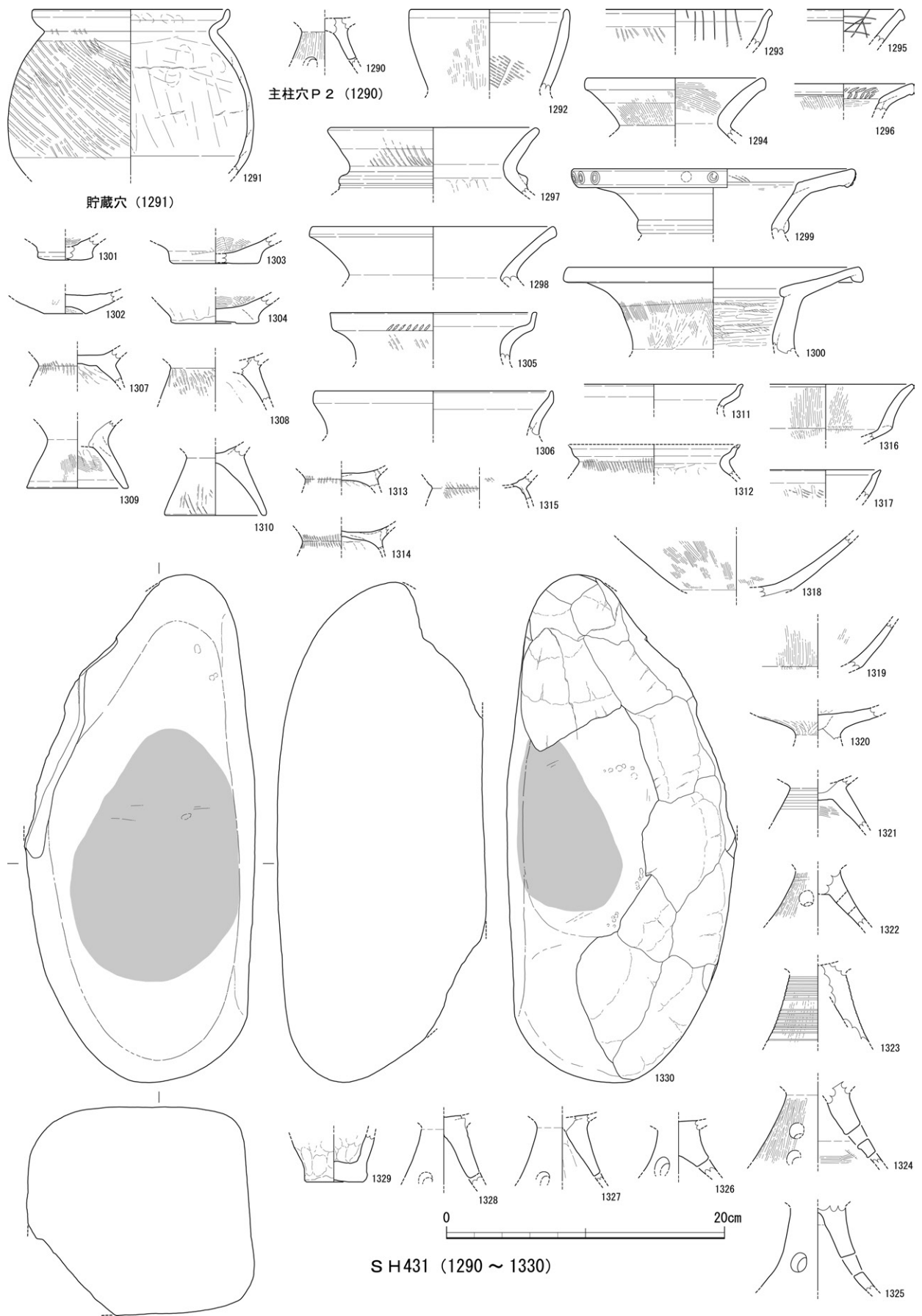
1305~1315は甕である。

1305・1306は受口状口縁甕の口縁部である。1305は大きく外反しながら開き、強く屈曲して上方に立ち上がる。外面には列点文が施されている。1306は緩やかに外反しながら、直立気味に立ち上がる。口縁端部付近で短く屈曲して受口状を呈するが、ナゲによるはね上げに近く、く字状口縁甕とも思われる。

1307~1310は台付甕の脚台部である。1307は内面にシボリ痕とも思われるような痕跡が認められる。1309はハ字状に開き、脚端部は面をなす。上面は大きく凹んでおり、剥離面となっている。1310は直線的にハ字状に開く。底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。

1311~1315はS字状口縁甕である。1311は口縁部の小片で、口縁端部は外方へ引き出されている。1312も口縁部で、口縁端部を欠損する。頸部内面はナゲやヨコナデによって調整されている。遺存状況が悪く、口縁部外面の押引列点文の有無は不明である。1313~1315は脚台部である。1313は底部内面に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。支柱穴P4に隣接する、建て替えに伴う支柱穴の可能性があるピットから出土している。1314は脚台部の上端縁部から体部を成形している。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1315は脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられており、底部内面にはコゲが付着している。

1316~1328は高坏である。



第181図 S H 431出土遺物 (1/4)

1316～1319は有稜高坏の坏部である。1316は坏部外面の稜が明瞭で、口縁部は緩やかに外反する。1317は口縁部の小片で、口縁端部は内傾する面をなす。1318は底部と口縁部との接合部で剥離した痕跡が認められる。胎土には黒雲母が多く含まれており、在地の胎土としては違和感があるため、他地域からの搬入品とも考えられる。

1320～1328は脚部である。1320は脚部上面を円板充填状に閉塞しているが、脚部内面側が剥離面となっており、脚部内面からも粘土を充填していたことが窺われる。1321は頸部が太い。ハ字状に直線的に開く。上面は凹レンズ状に大きく凹んでおり、坏部内面に貼り付けた粘土が剥離したものである。1322は外面の頸部付近に1条のヨコミガキが施されている。1324はわずかに外反しながらハ字状に開く。透孔は2段3方向に開けられていると推測される。1325・1326は緩やかに外反しながらハ字状に開く。1327は筒状に成形した脚部上面の孔を粘土を詰めて閉塞し、さらに坏部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。1328は脚部上端縁部から坏部を成形している。

1329は鉢である。内外面ともオサエが明瞭に残り、粗雑な印象を受ける。

1330は床面上から出土した台石である。大型の砂岩の円礫を利用したもので、断面形は隅丸方形を呈する。上面や下面には顕著な摩滅が認められ、一部には不明瞭な擦痕や敲打痕と思われる痕跡が残る。大きく剥離するように破損しているが、強い被熱が認められるため、それが原因で割れたと考えられる。

S H 433 (第182図1331・1332) 1331・1332は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

1331は壺の底部である。1332は高坏の脚部で、緩やかに外反しながらハ字状に開く。筒状に成形した脚部上面を円板充填状に閉塞した痕跡が認められる。内面にはシボリ痕が残る。

S H 434 (第182図1333・1334) 1333・1334は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

いずれも高坏の脚部で、1333はやや柱状を呈し、外面には直線文が施されている。破断面では、脚部成形時の粘土接合痕が観察できる。1334はハ字状に開く。筒状に成形した脚部上面を円板充填状に閉塞

し、さらに坏部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。

S H 436 (第182図1335～1344) 1335～1343は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1335～1338は壺の口縁部である。1335は小型丸底壺の口縁部と思われる。直線的に上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。1336は口縁端部を垂下させて広い面を作り出し、擬凹線文と列点文を施している。1338は二重口縁壺で、いわゆる伊勢型二重口縁壺である。口縁部から体部上半までが遺存するが、口縁部と体部は直接接合せず、頸部から体部にかけての器形の復元には不安を残す。一次口縁は直線的に外方へ開き、その後外方へ屈曲させ、口縁端部をはね上げて擬口縁を作っている。二次口縁は一次口縁の口縁端部から成形され、口縁端部は強いナデによって面をなし、わずかに上方へはね上げられている。口縁部は内外面とも細いタテミガキで丁寧に調整されており、体部外面にも同様の調整が施されている。色調は明赤褐色を呈し、特徴的である。

1339～1343は甕である。

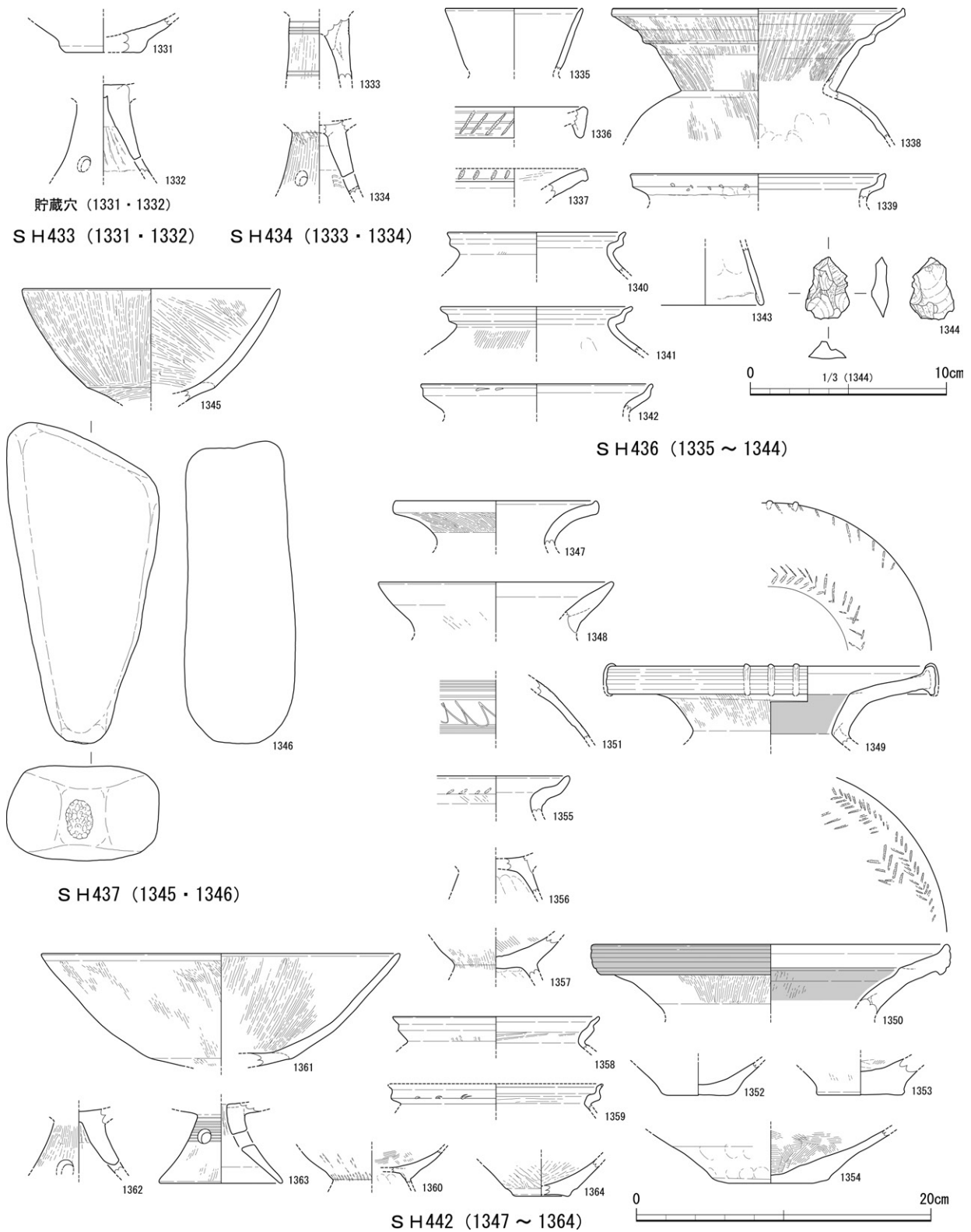
1339は受口状口縁甕の口縁部である。頸部内面は稜をなしている。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁端部は内傾する面をなす。外面には櫛状工具による列点文がわずかに遺存する。

1340～1343はS字状口縁甕である。1340は頸部の屈曲が比較的緩く、口縁部は明瞭に屈曲し、口縁部上半は直立する。口縁端部は内傾する面をなす。

1341は口縁部から体部上半にかけての破片で、頸部は強く屈曲する。口縁部の屈曲は、外面では明瞭な稜をなすが、内面では緩やかである。口縁端部は強く外方へ引き出され、幅広の内傾する面をなす。貯蔵穴から出土した可能性があるが、確定できなかった。1342は口縁部で、外面には押し列点文がわずかに遺存する。1343は脚台部の小片で、脚端部は内側へ折り返されている。

1344は埋土中から出土した石製品で、剥片である。赤色チャートで、一部に表皮が残る。縄文時代のものが埋土中に混入したと思われる。

S H 437 (第182図1345・1346) 1345は埋土中から出土した、土師器である。有稜高坏の坏部で、比較的深い。坏部外面の稜は不明瞭である。口縁部は緩



第182図 S H433・434・436・437・442出土遺物 (1/4、1/3)

やかに内湾しながら長くのび、口縁端部は丸く収められる。外面の屈曲部より上方はタテミガキによって調整されているが、下方にはヨコミガキが施されている。また、内面はケズリとハケを施した後に、斜め方向のミガキによって調整されている。

1346は埋土中から出土した石製品で、敲石である。砂岩の垂円礫をそのまま利用しており、一端に敲打痕が残る。また、一部に被熱が認められる。

S H442 (第182図1347~1364) 1347~1364は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1347~1354は壺である。

1347~1350は口縁部である。1347は外反しながら大きく開く。口縁端部は面をなす。1348は短く直線的に開く。器壁は厚く、口縁端部は丸く収められる。1349は遺存状況が良好である。中位で屈曲して外方へ直線的に大きく開く。口縁端部には粘土を付加して上下に拡張し、広い面を作り出して擬凹線文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は3本一組で、4方向に配されていると思われる。口縁部内面には矢羽根状文が施されており、また、屈曲部より下方には赤彩が認められる。1350は緩やかに外反しながら大きく開くが、中位でわずかに屈曲しており、屈曲部内面は低い突帯状に突出する。口縁端部は上下に拡張して広い面を作り出しており、擬凹線文が施されている。口縁部内面には矢羽根状文が施されており、屈曲部より下方には赤彩が認められる。また、口縁端部にも赤彩が残る。

1351は体部である。外面には直線文と波状文が施されている。波状文は櫛描ではなく、1本の沈線によって施されている。

1352~1354は底部である。1354は底の器壁が薄く、外面にはオサエが顕著に遺存している。

1355~1360は甕である。

1355は受口状口縁甕の口縁部である。頸部及び口縁部の屈曲は緩く、口縁部上半は外方へ開く。外面には列点文がわずかに遺存する。

1356・1357は台付甕の脚台部である。1356は脚台部の上端縁部から体部を成形しており、体部が剥離した痕跡が認められる。1357は脚頂部に連続的なオサエが残る。底部内面にはハケが施されている。

1358~1360はS字状口縁甕である。1358は口縁部

で、やや上方へ立ち上がり、口縁端部は大きく外方へ引き出されている。頸部内面には粗いハケが施されている。遺存状況が悪く、外面の押引列点文の有無は不明である。1359も口縁部で、口縁部の屈曲は明瞭である。口縁端部は内傾する面をなすが、わずかに欠損しており、正確な形状は不明である。外面には押引列点文が施されている。1360は脚台部で、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けていると思われるが、小片のため不明瞭である。

1361・1362は高坏である。1361は有稜高坏の坏部で、やや浅い。坏部外面の稜は不明瞭である。口縁端部は内傾する面をなすが、ごく不明瞭である。外面はハケを施した後にタテミガキによって調整されている。また、外面の下半にはススが附着している。1362は脚部である。緩やかに外反しながらハ字状に開く。

1363は器台の脚部と思われる。比較的低い脚部で、外反しながらハ字状に開くが、下半ではごくわずかに内湾する。外面上半には直線文が施されている。坏部内面中央から脚部内面に至る貫通孔が認められるが、受部内面にあたる部分の遺存状態が悪く、この部分に粘土を貼り付けて孔を閉塞していた可能性もあり、その場合は高坏となろう。

1364は鉢である。内外面とも斜め方向のミガキで調整されているが、底部周辺のみには強いヨコナデが施されており、凹んでいる。

S H443 (第183図1365~1373) 1365~1368は支柱穴P3から出土した弥生土器・土師器である。

1365・1366は壺の体部から底部にかけての破片で、同一個体の可能性が高い。体部は器形の復元に不安を残すが、球形に近い器形を呈すると推測される。外面はハケの後にタテミガキで調整されている。

1367・1368は甕である。1367はく字状口縁甕の口縁部から体部上半にかけての破片で、体部は肩が張らず、頸部の屈曲は明瞭で、頸部内面は稜をなす。口縁部はわずかに外反しながら開く。体部外面にはタタキとみられる調整が認められ、接合しなかった破片の中にはタタキの後にハケを施したのも認められる。また、体部内面にはケズリが施されている。こうした調整のほか、胎土も角が取れたチャートと思われる砂粒を多く含むなど特徴的で、他地域から

の搬入品の可能性が高い。1368は受口状口縁甕の口縁部と思われる。頸部の屈曲が緩く、口縁部は外反しながら開く。口縁端部は粘土を貼り付けて肥厚させ、不明瞭な受口状としている。く字状口縁甕とした方が適当かもしれない。内外面ともハケで調整されている。なお、破片の一部は貯蔵穴内からも出土している。

1369・1370は支柱穴P 4から出土した弥生土器・土師器である。

1369は台付甕で、口縁部以外のほぼ全形が復元できた。体部は最大径が上半にあり、倒卵形を呈する。脚台部は直線的にハ字状に開く。内外面ともハケで調整されている。体部下半から脚台部にかけての外面には二次的な被熱やススの付着が認められる。1370は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜は不明瞭で、内面の屈曲もほとんど認められない。内外面ともミガキが施されている。

1371～1373は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

1371・1372は壺の口縁部で、いずれも口縁部が頸部から直立し、中位で外方へ屈曲し、直線的にのびる。口縁端部は面をなす。1373も壺で、口縁部から体部上半にかけてが遺存する。頸部の屈曲は比較的緩く、口縁部は直線的に開き、口縁端部はわずかに垂下する。体部外面と口縁部内面にはミガキが施されている。接合しないものの、調整や色調、胎土などから、支柱穴P 3から出土した1365・1366と同一個体の可能性が高い。図化したもの以外にも口縁部や体部の破片が貯蔵穴内から多数出土しており、ほぼ1個体分の破片が遺存すると思われる。

S H 444 (第183図1374～1391) 1374～1391は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1374～1381は壺である。

1374は口縁部で、緩やかに外反しながら開く。口縁端部は面をなし、列点文がごくわずかに遺存する。外面はハケで調整されている。

1375～1381は底部である。1375は輪台状を呈する。破断面では粘土接合痕が比較的明瞭に観察できる。1377も輪台状を呈するものと思われる。1379は底部外面が大きく凹み、上げ底状を呈する。内面には粗いハケが施されている。1381は大型のものである。

器壁は厚い。外面にはわずかにヨコミガキが認められる。

1382～1386は甕である。

1382はく字状口縁甕の口縁部である。口縁部上半外面には強いヨコナデが施されており、口縁部はわずかに屈曲するようにも見受けられる。口縁端部は面をなす。受口状口縁甕に近いものと思われる。

1383～1386は台付甕の脚台部である。1384は脚台部の上端縁部から体部を成形し、その後、底部内面に粘土を貼り付けている。脚台部内面には、脚台部成形時のものと思われる粘土接合痕も認められる。1385は小型の低い脚台部である。直線的にハ字状に開く。1386は外面を粗いハケで調整しており、脚裾部付近には比較的強いヨコナデが施されている。

1387～1391は高坏の脚部である。1387は上面が剥離面となっているが、軸芯痕が脚部内面頂部からこの剥離面まで貫通している。坏部内面まで貫通していたかは不明である。1388はわずかに外反しながらハ字状に開く。内面にはシボリ痕が残る。1389は外面の頸部直下に1条のヨコミガキが施されている。内面には螺旋状のシボリ痕が顕著に残る。1390は直線的にハ字状に開く。外面の頸部付近には直線文がわずかに遺存する。

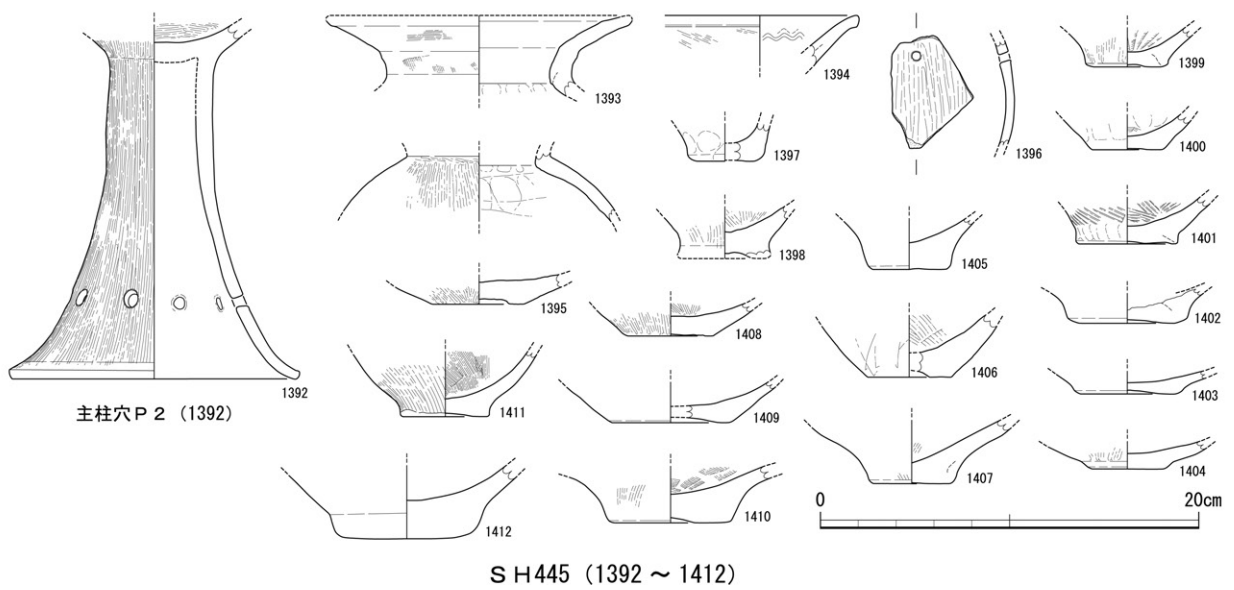
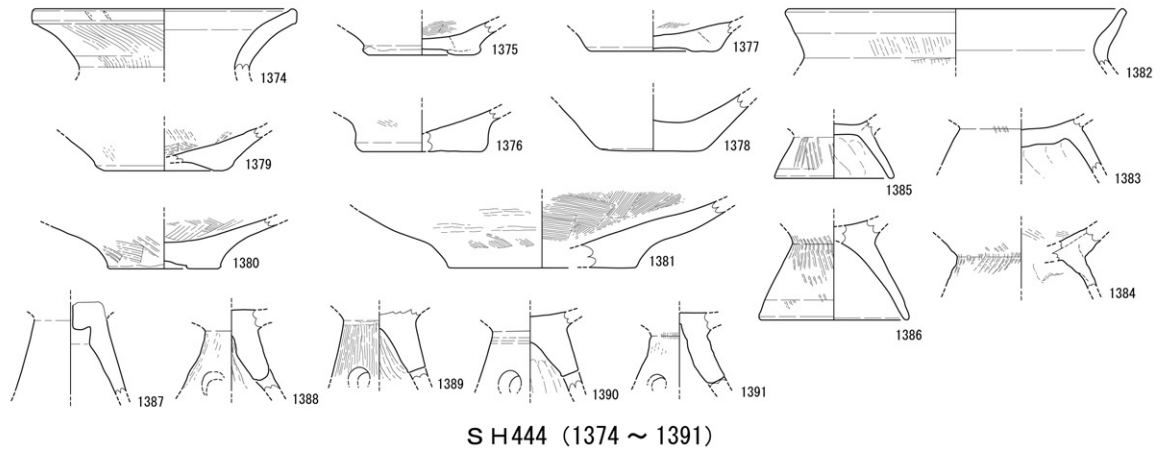
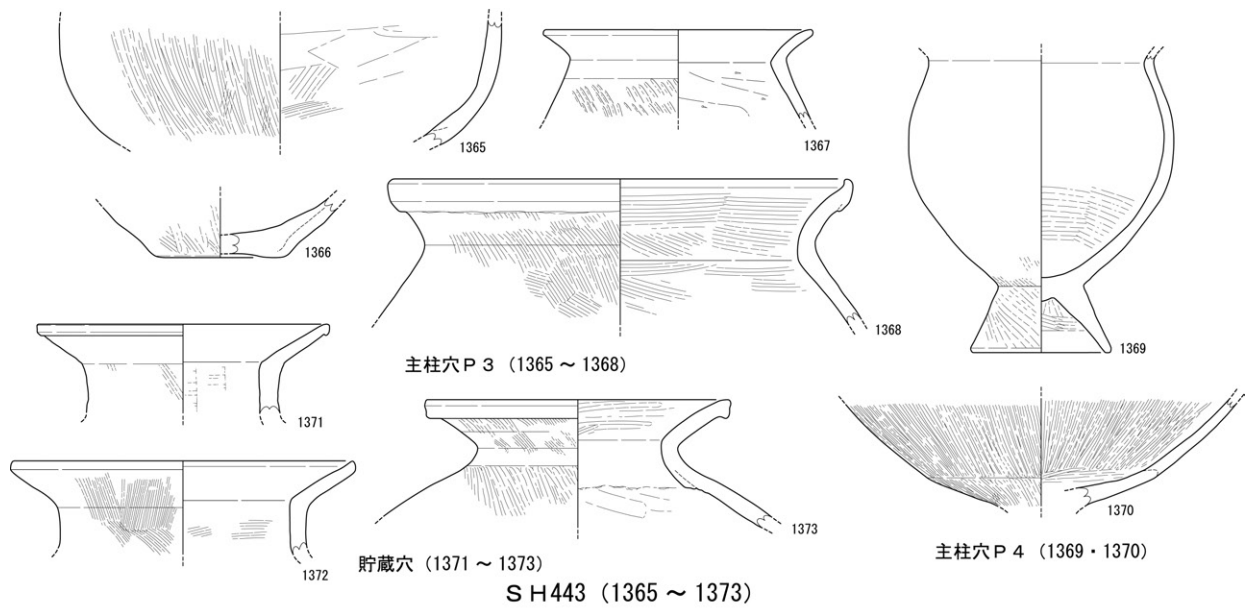
S H 445 (第183・184図1392～1440) 1392は支柱穴P 2から出土した弥生土器である。高坏の脚部で、遺存状況が良い。上半はやや柱状を呈し、下半は緩やかに外反しながら開く。脚端部は面をなす。透孔は8方向に開けられている。外面は全体的にタテミガキによって調整されているが、坏部内面にはヨコミガキが施されている。

1393～1439は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1393～1412は壺である。

1393・1394は口縁部である。1393は中位で緩やかに屈曲し、外方へ大きく開く。口縁端部は遺存状況が悪い。接合しないものの、同一個体と思われる体部片が多数出土している。1394は内面に波状文が施されている。

1395・1396は体部等である。1395は接合しないものの、同一個体と考えられる体部上半と底部の破片からなる。底部は上げ底状を呈する。外面はミガキ



第183図 SH443・444出土遺物、SH445出土遺物① (1/4)

によって調整されている。1396は中型の壺の体部片と思われる。外面にはミガキが施されており、小孔が1箇所認められる。焼成前に穿孔されているとみられ、壺以外の器種の可能性もある。

1397～1412は底部である。1397は小型のもので、外面にはオサエが残る。粗雑な印象を受けるもので、小型の鉢の可能性もある。1398は底部外面中央が凹む。欠損により正確な形状は不明であるが、高台状を呈していたものと思われる。1399は内面にクモの巣状のハケが施されている。1401は内外面とも粗いハケで調整されているが、底部付近には連続的なオサエが明瞭に残る。1403は全体的に器壁が薄い。1405は二次的な被熱が認められる。鉢や甕の底部とも考えられる。1406は器壁が厚い。底部外面中央が凹レンズ状に凹む。外面は工具ナデによって調整されていると思われる。1409はわずかに上げ底状を呈する。1410・1411は内外面ともハケで調整されている。

1413～1428は甕である。

1413～1416は受口状口縁甕である。1413は口縁部上半を欠損するが、体部上半が一部遺存する。口縁部外面には列点文がわずかに残る。体部外面には直線文が施されている。外面にはススが付着している。1414は口縁部が直線的に開き、口縁端部付近で短く屈曲する。1415は口縁端部が面をなし、わずかに外方へ引き出されている。頸部内面には粗いハケが施されている。1416は頸部の屈曲が緩い。口縁部は明瞭に屈曲し、外面には列点文が不明瞭ながら遺存している。

1417～1425は台付甕の脚台部である。1417は体部下半も遺存する。筒状の脚台部の上面を、脚頂部側から粘土を貼り付けて閉塞したと思われる。1418はやや小型のものである。脚台部の上端縁部から体部を成形している。1419は直線的にハ字状に開く。脚頂部には脚台部の上面を閉塞した粘土の接合痕が残る。1420は外面をやや細かいハケで調整している。1421・1422は直線的にハ字状に開く。1422は内外面とも粗いハケが施されている。1423は小型で低い脚台部である。脚端部は丸く収められる。内面には脚部の成形に伴うものとみられる粘土接合痕が残る。1425はわずかに内湾しながら大きくハ字状に開く。脚端部は面をなし、明瞭に内側に突出する。

1426～1428はS字状口縁甕である。1426は接合しないものの、同一個体と考えられる口縁部と体部上半の破片からなる。頸部の屈曲は緩いと思われ、口縁部は明瞭に屈曲する。口縁端部は面をなし、外方へ引き出されている。口縁部外面には押引列点文が施されている。黒雲母が目立たないなど胎土に違和感があり、在地産のS字状口縁甕とも思われるが、破断面が黒色を呈するなど、焼成については一般的なS字状口縁甕と類似している。1427は口縁部から体部にかけての破片である。頸部の屈曲は緩い。口縁部の屈曲は明瞭で、屈曲部外面は明瞭な稜をなす。口縁端部は内傾する面をなし、わずかに外方へ引き出されている。口縁部外面には押引列点文が施されている。頸部内面付近には広範に粗いハケが施されている。胎土や焼成の特徴は1426と類似しており、同一個体の可能性も考えられる。1428は脚台部である。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けているが、脚頂部については中央に貼り付けられており、この粘土で上面を閉塞しているようにも見受けられる。

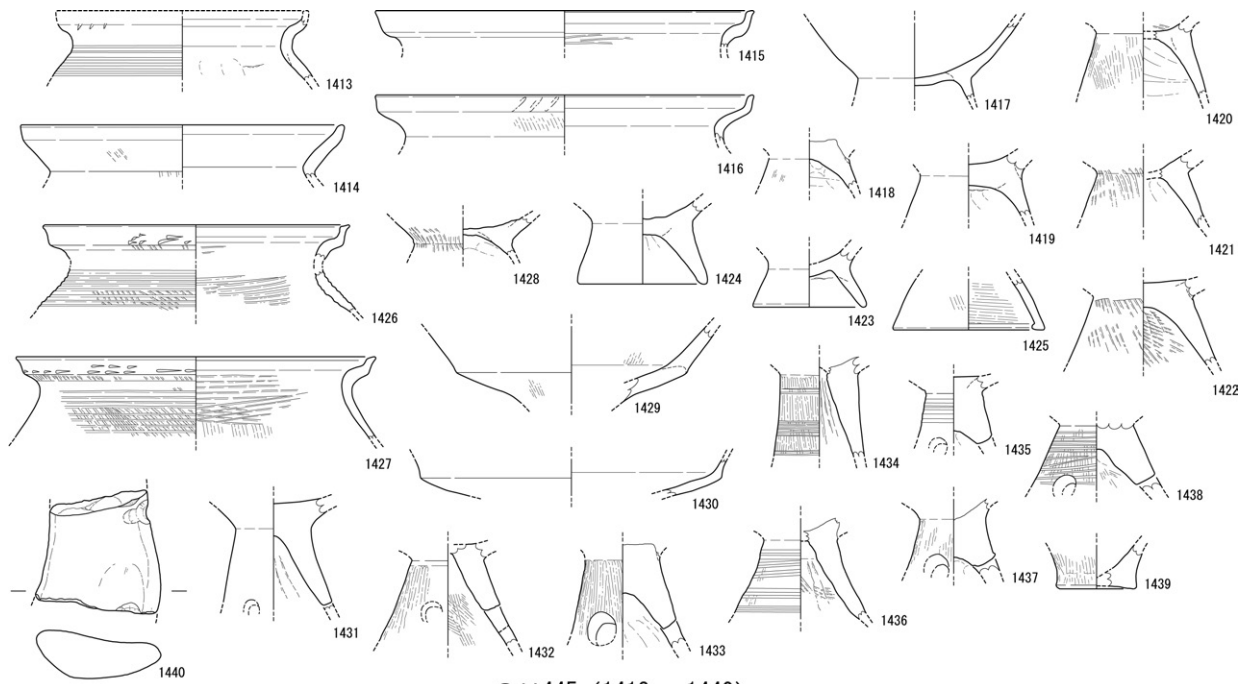
1429～1438は高坏である。

1429・1430は有稜高坏の坏部である。1429は坏部外面の稜が明瞭である。内面にはコゲと思われるものが付着している。1430は坏部外面の稜がかなりシャープである。器壁は薄い。内面に二次的な被熱が認められる。

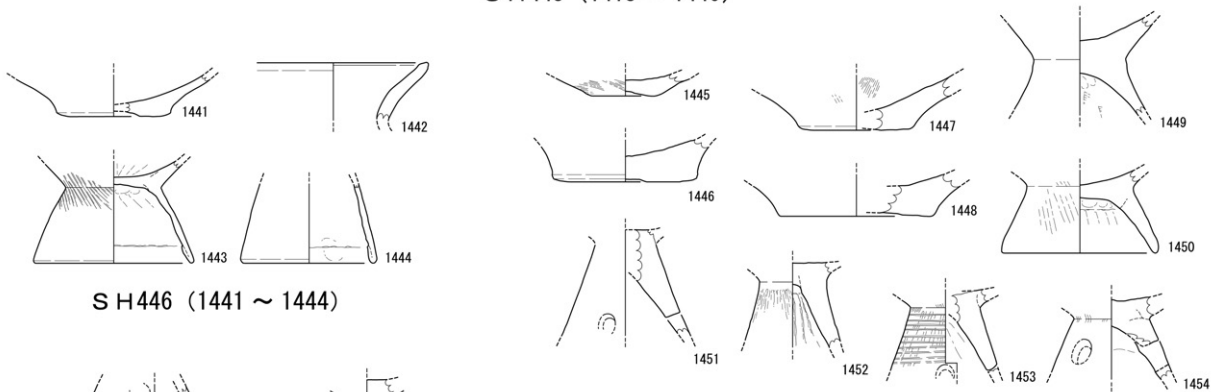
1431～1438は脚部である。1431は器形に若干の歪みがみられる。1432はわずかに外反しながらハ字状に開く。1433は上面に剥離痕跡が認められる。1434はやや柱状を呈する。外面には直線文が施されている。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。1435・1436は外面に直線文が施されている。1437は上面が凹レンズ状に凹み、剥離面となっている。この凹みを埋めるように坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離したものであると思われる。1438は直線的にハ字状に開く。外面には直線文が施されている。

1439は鉢と思われる。底部の破片で、外面にはハケが施されている。

1440は埋土中から出土した石製品で、磨石と思われるものである。砂岩の扁平な円礫の破片で、わずかに摩滅と思われる痕跡が認められる。元の大きさ



S H445 (1413 ~ 1440)



S H446 (1441 ~ 1444)

S H447 (1445 ~ 1454)

貯蔵穴 (1455)

S H449 (1455・1456)



第184図 S H445出土遺物②、S H446・447・449出土遺物 (1/4)

は不明で、形状からみて台石の可能性も考えられる。

S H446 (第184図1441~1444) 1441~1444は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1441は壺の底部である。底部外面中央が浅く凹む。器壁は比較的薄い。

1442~1444は甕である。1442はく字状口縁甕の口縁部と思われる。外反しながら開き、口縁端部付近でわずかに内湾する。口縁端部は面をなす。1443・1444はS字状口縁甕の脚台部である。1443はわずかに内湾しながらハ字状に開き、脚端部は内側に大きく折り返す。底部内面及び脚頂部にやや粗い砂粒を

含む粘土を貼り付けている。1444は小片で器形の復元に不安を残すが、直立気味になると思われる。脚端部は内側に大きく折り返している。

S H447 (第184図1445~1454) 1445~1454は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1445~1448は壺の底部である。1445・1446は底部外面中央がわずかに凹んでいる。

1449・1450は台付甕の脚台部である。1449はハ字状に開く。1450はやや低い脚台部である。脚端部は丸く収める。脚頂部付近には粘土接合痕とオサエが明瞭に残る。

1451～1454は高坏の脚部である。1451は直線的にハ字状に開く。1452は脚部内面頂部に粘土を充填した痕跡が認められる。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。1453は直線的にハ字状に開き、外面には直線文が施されている。1454は脚部上端縁部から坏部を成形しているようであるが、破断面で観察される粘土接合痕が不明瞭で、検討の余地がある。

S H 449 (第184図1455・1456) 1455は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、直線的にハ字状に開く。脚端部は丸く収める。

1456は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、やや小型のものである。わずかに外反しながらハ字状に開く。

S H 451 (第185図1457～1511) 1457～1459は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

1457・1458は高坏の脚部である。1457は上半がやや柱状を呈し、下半で外反する。外面はハケによって調整されている。1458はわずかに内湾しながらハ字状に開く。外面には直線文が施されている。1459は有孔鉢である。大型のもので、体部は若干内湾する。口縁端部は丸く収められる。底部の孔もかなり大きく開けられている。内面には粘土接合痕が各所に残り、粗雑な印象を受ける。

1460～1510は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1460～1475は壺である。

1460～1464は中型の壺の口縁部である。1460は内湾しながら直立気味にのび、口縁端部は不明瞭ながら内傾する面をなす。短頸の瓢形壺である。1462は直立気味に立ち上がった後に、中位で強く屈曲し、直線的に外方へ開く。口縁端部は拡張して広い面を作り出し、擬凹線文を施している。1463は外面に粗いハケが施されている。1464は外反しながら開く。口縁端部は上方に拡張して広い面を作り出しており、列点文と思われる痕跡がごくわずかに遺存する。

1465～1475は底部である。1465は明瞭にボタン状に突出する。1466はわずかに上げ底状を呈する。1467は体部が比較的急に立ち上がり、外面はハケで調整されている。外面にはススの付着も認められ、平底の甕の可能性もある。1470は若干ボタン状に突出し、外面にはナデもしくはミガキが施されている。

1472は底部外面が大きく凹み、連続的なオサエが認められる。1473・1474は輪台状を呈する。1473の内面にはクモの巣状のハケが施されている。1475は底部外面に広葉樹の葉の圧痕が残る。

1476～1491は甕である。

1476～1478は受口状口縁甕の口縁部である。1476は口縁部の屈曲が弱い、口縁部外面の上半には強いヨコナデが施され、屈曲部外面は比較的明瞭な稜をなす。口縁端部は若干外方へ引き出されている。1478は器壁が厚い。口縁部の屈曲は明瞭ではないが、内面は全体的に内湾し、口縁端部は面をなす。口縁部外面の屈曲が明瞭でないのは口縁部上半の外面に施したヨコナデが強かったためと思われ、全体的な特徴からは明確に受口状口縁甕として製作されたものと思われる。頸部付近の外面には深い直線文が施されている。

1479～1486は台付甕の脚台部である。1479は脚台部の上端縁部から体部を成形している。1480は筒状の脚台部の上面に円板状の粘土を貼り付けて閉塞した後に、底部内面に残された凹みに粘土を貼り付けて補強・成形を行っている様子が明確に看取される。1481・1482はわずかに内湾しながらハ字状に開く。1483は内湾しながら大きくハ字状に開く。脚端部は面をなす。1485は比較的高い脚台部で、わずかに内湾する。脚台部の上端縁部から体部を成形している。1486は器壁が薄い。脚端部は面をなす。

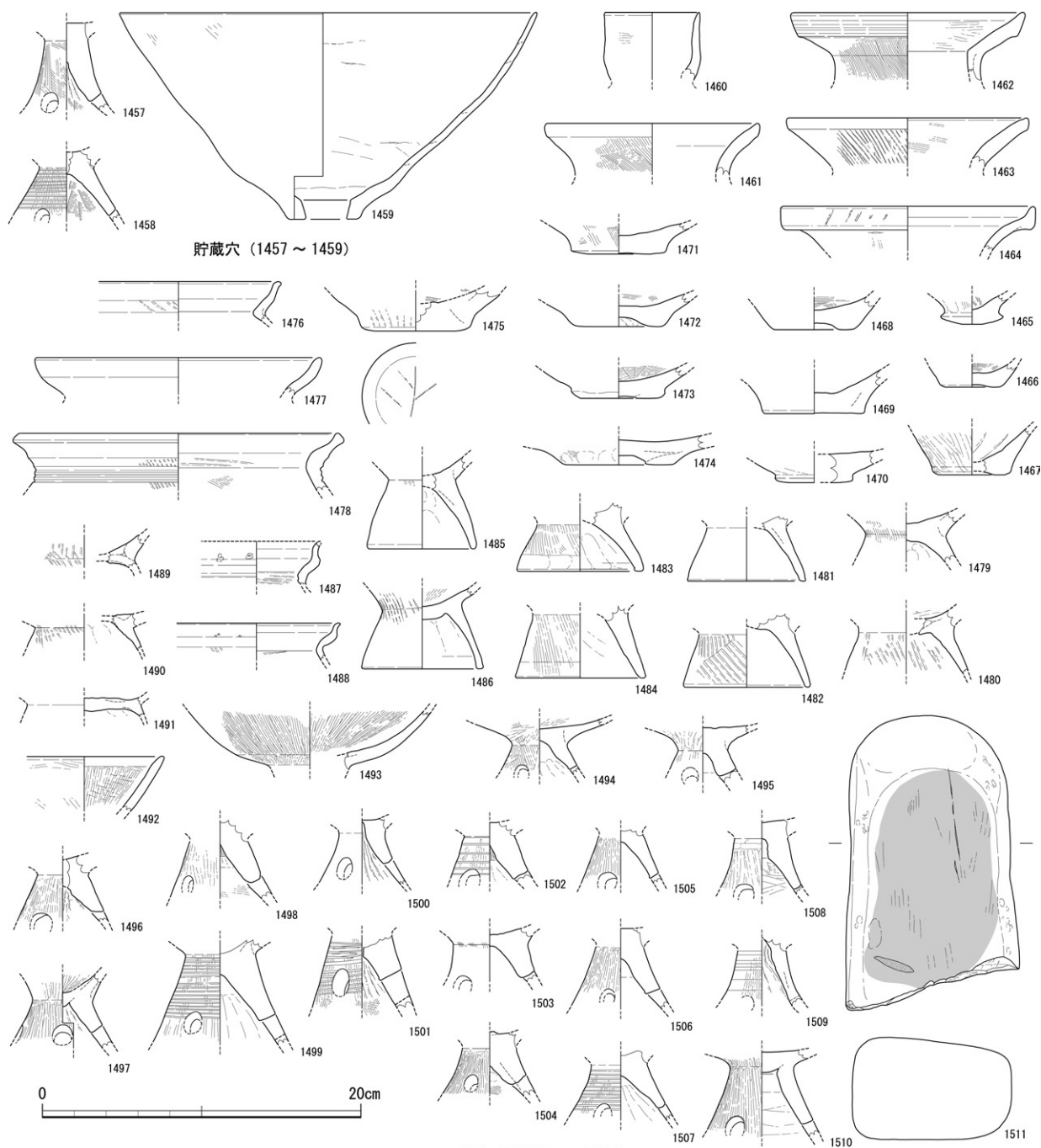
1487～1491はS字状口縁甕である。1487・1488は口縁部である。いずれも小片で、外面には押引列点文がごくわずかに遺存している。頸部内面には粗いハケが施されている。1489～1491は脚台部である。1489は小片であるが、破断面で粘土接合痕が明瞭に観察できる。脚台部の上端縁部から体部を成形し、その後に底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けているものの、底部内面側については粘土のナデつけが甘く、体部や脚台部との接点に空隙が残っている。1490・1491も底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

1492～1510は高坏である。

1492・1493は坏部である。1492は口縁部の小片で、口縁端部は内傾する面をなす。1493は椀形高坏で、内外面ともタテミガキで調整されている。

1494～1510は脚部である。1496・1499・1501・1507・1510のように直線的にハ字状に開くものや、1500・1504・1508・1509のようにわずかに外反しながらハ字状に開くものなどがある。1494は脚部上端縁部から坏部を成形している。脚部外面はハケで調整されており、部分的にミガキが施されている。1495も脚部上端縁部から坏部を成形している。1497

は坏部が頸部からかなり急に立ち上がる。脚部上面は円板充填状に閉塞されている。透孔は4方向に開けられている。器形などから、台付鉢や台付壺の可能性も考えられる。1499は上面が凹レンズ状に凹み、剥離面となっている。この凹みを埋めるように坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離したと思われる。外面上半には直線文が施されている。1500は内面に



貯蔵穴 (1457 ~ 1459)

S H451 (1457 ~ 1511)

第185図 S H451出土遺物 (1/4)

シボリ痕が明瞭に残る。1501は内面頂部に軸芯痕が残る。細い棒状の工具による刺突で、上面の剥離面まで貫通している。坏部内面まで貫通していたかは不明である。1503は頸部が太い。台付壺の脚台部の可能性もある。1504は坏部内面中央に粘土塊が貼り付けられ、盛り上がっている。意図的なものかは不明である。また、脚部内面にも粘土が貼り付けられ、器壁を肥厚させているようである。1506・1507は脚部上端縁部から坏部を成形している。1508は脚部内面頂部が大きな孔状に凹んでいる。また、外面の頸部直下のみに幅広のヨコミガキが2条施されている。1509は内面に螺旋状のシボリ痕が明瞭に残る。1510は脚部上面を円板充填状に閉塞している可能性が高い。

1511は埋土中から出土した石製品で、台石である。砂岩の円礫をそのまま利用したもので、上面の平坦面を中心に顕著な摩滅が認められる。また、擦痕や線状痕が明瞭に残り、縁辺部には敲打痕も認められる。砥石としても使用されている可能性がある。また、下面も使用されており、若干の摩滅や擦痕・線状痕が認められる。

S H 454 (第186図1512~1536) 1512~1536は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1512~1517は壺である。

1512・1513は口縁部である。1512は口縁端部に列点文がかすかに残る。1513はわずかに内湾しながら直線的に開く。口縁端部は面をなし、列点文を施している。外面はハケで調整されているが、内面にはヨコミガキが施されている。

1514は体部である。外面には直線文と列点文が施されている。

1515~1517は底部である。1515は底部外面がわずかに凹む。外面にはミガキが施されている。1516はボタン状に突出する。

1518~1530は甕である。

1518~1525は台付甕の脚台部である。1518は大きくハ字状に開く。1519は筒状の脚台部の上面に円板状の粘土を詰めて閉塞し、さらに脚頂部の接合部に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。1520は底部内面及び脚頂部から粘土を詰めて脚台部上面を閉塞する。1521は外面や底部内面にオサエが顕著に

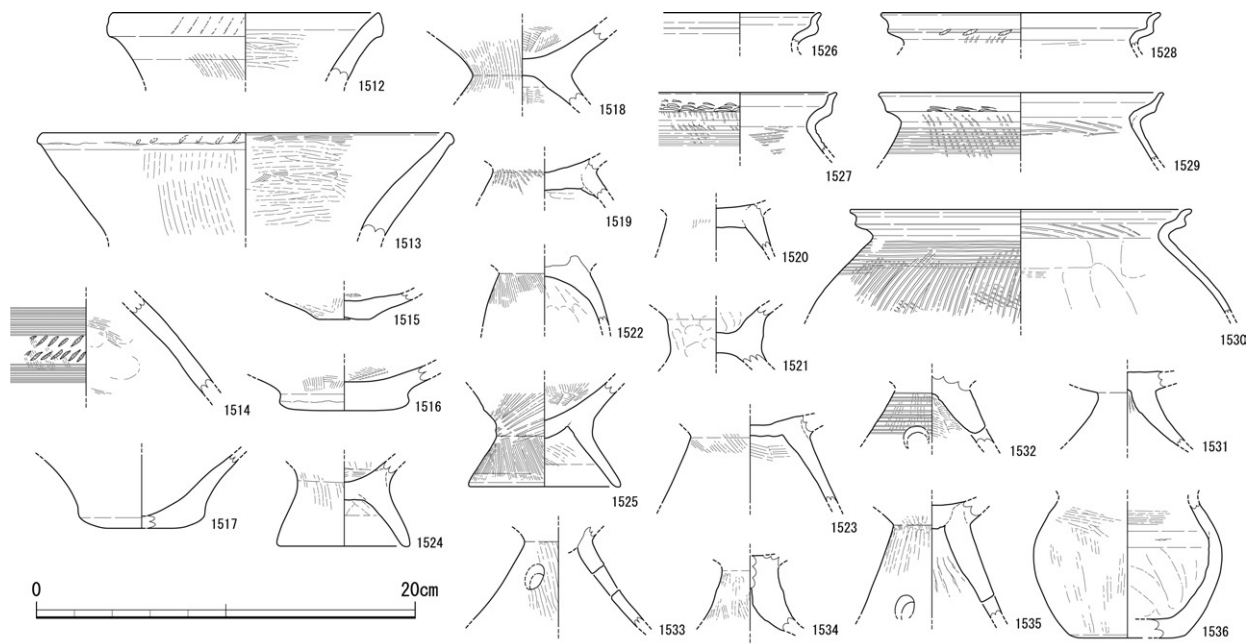
残り、やや粗雑である。底部内面にはコゲが付着している。1522は若干内湾する。上面は凹んでおり、剥離面となっている。この凹みを埋めるように底部内面に貼り付けた粘土が剥離したと思われる。1524は脚頂部に精良な粘土が貼り付けられている。底部内面には体部成形に関わると考えられる粘土接合痕が残る。1525はハ字状に開く、やや低い脚台部である。脚台部上面は円板充填状に閉塞されている可能性がある。脚台部外面は比較的細かいハケで調整されているが、わずかに残る体部の外面には、螺旋状のタタキにも似た非常に粗いハケが施されている。胎土には黒雲母や角が取れたチャートと思われる微細な砂粒が多く含まれており、特徴的である。他地域からの搬入品の可能性もあろう。

1526~1530はS字状口縁甕である。1527は口縁部で、明瞭に屈曲する。口縁端部は面をなし、わずかに外方へ引き出されている。外面には押引列点文が施されている。1528は口縁部で、口縁端部が大きく外方へ引き出されているが、全体的に強く外反するような形になっており、明瞭な面をなさない。外面には列点文が施されているが、押引列点文とはなっていない。胎土はほかのS字状口縁甕と共通するように見えるが、含まれている砂粒などに若干の違和感がある。1529は口縁部で、体部上半も一部遺存する。口縁部の屈曲は明瞭で、外面はシャープな稜をなす。口縁部外面には押引列点文が施されている。1530は口縁部から体部上半にかけて遺存している。口縁部は強く屈曲し、屈曲部外面はやや突出気味となる。口縁端部は強く外方へ引き出され、不明瞭な面をなす。口縁部外面に押引列点文は施されていない。頸部内面は粗いハケで調整されている。

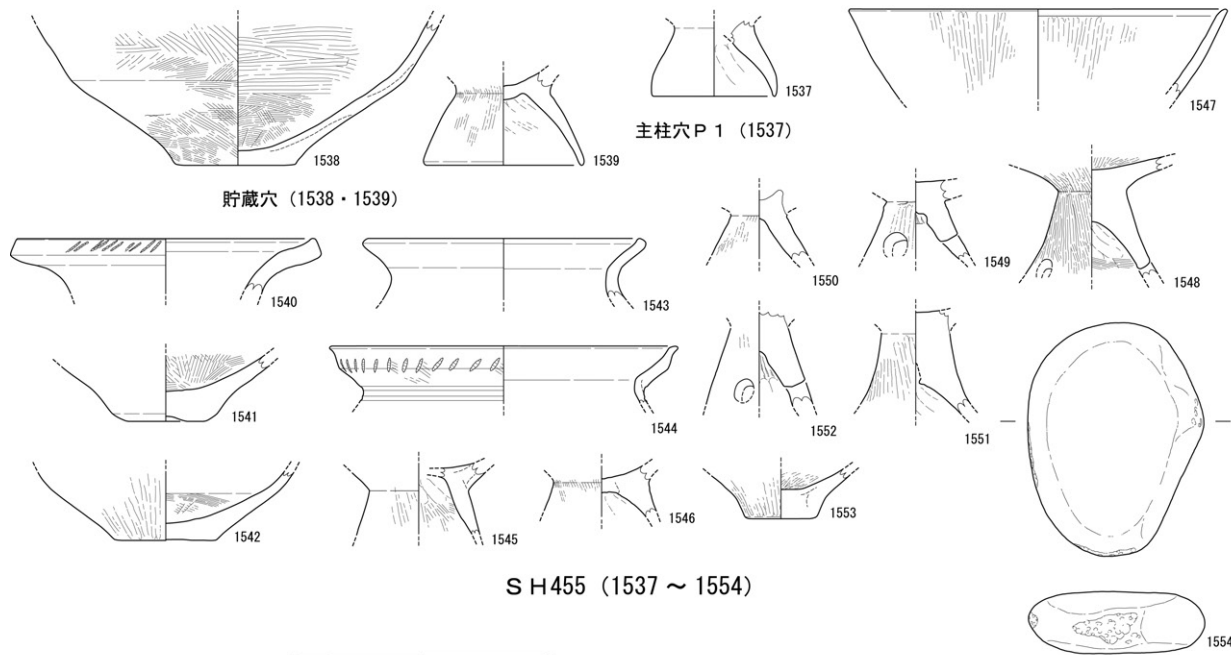
1531~1535は高坏の脚部である。1532は直線的にハ字状に開く。外面には直線文が施されている。1534は小型のものである。下半で強く外反すると思われる。1535は直線的にハ字状に開く。脚部上面は円板充填状に閉塞されているが、坏部は脚部上端縁部から成形されている。

1536は鉢または小型の壺の体部と思われる。平底で、若干肩が張る。外面はミガキで調整されている。

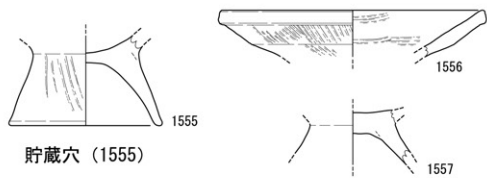
S H 455 (第186図1537~1554) 1537は主柱穴P1から出土した弥生土器・土師器である。台付甕の脚



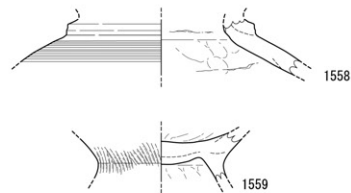
S H454 (1512 ~ 1536)



S H455 (1537 ~ 1554)



S H456 (1555 ~ 1557)



S H457 (1558・1559)

第186図 S H454~457出土遺物 (1/4)

台部で、下半で内湾している。脚端部は丸く収める。

1538・1539は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。1538は壺の体部下半から底部にかけての破片である。底部よりやや上方でわずかに屈曲しており、屈曲部の外面には不明瞭な稜が認められる。この屈曲部を境に、内外面とも上方は粗いハケ、下方は細かいハケで調整されており、製作時の成形単位を示すものと思われる。1539は台付甕の脚台部である。わずかに内湾し、脚端部は丸く収める。

1540～1553は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1540～1542は壺である。

1540は口縁部で、外反しながら開く。口縁端部は面をなし、列点文が施されている。1541・1542は底部である。1541は底部外面が浅く凹レンズ状に凹む。

1543～1546は甕である。

1543はく字状口縁甕の口縁部である。頸部の屈曲は緩く、口縁端部は面をなし、わずかに上方にはね上げられている。

1544は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は緩いが、屈曲部の外面は明瞭な稜をなす。口縁端部は面をなし、わずかに外方へ引き出されている。外面には列点文が施されている。頸部付近の外面には直線文が認められる。

1545・1546は台付甕の脚台部である。1545は脚台部の上端縁部から体部を成形し、その後、底部内面に粘土を貼り付けている。また、頸部外面にも粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。1546は筒状の脚頂部の上面に粘土を詰めて閉塞した痕跡が残る。

1547～1552は高坏である。

1547は坏部である。わずかに内湾しながら外方へ直線的に開き、口縁端部は内傾する面をなす。

1548～1552は脚部である。1548は緩やかに外反しながらハ字状に開く。脚部内面頂部に螺旋状のナデが認められる。1549は脚部内面頂部が孔状に凹み、その内面のみにシボリ痕が認められる。1550は上面が凹レンズ状に凹んでおり、剥離面となっている。この凹みを埋めるように坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離したものと思われる。1551は緩やかに外反しながら開く。脚部内面頂部に軸芯痕状のものが

認められるが、内面に施されたナデによって粘土が盛り上がり、孔状となった可能性が高い。

1553は鉢の底部と思われる。内外面ともミガキで調整されている。また、破断面が二次的に被熱している。

1554は埋土中から出土した石製品で、敲石である。石英斑岩の扁平な円礫を利用したもので、一端に敲打痕が顕著に残る。また、両側縁にもわずかに敲打痕が認められる。

S H 456 (第186図1555～1557) 1555は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、わずかに内湾しながら直線的にハ字状に開く。脚端部は面をなす。脚台部の上端縁部から体部を成形していると思われる。外面には粗いハケが施されている。

1556・1557は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1556は小型の壺の口縁部と思われる。直線的に開き、口縁端部は面をなす。内外面とも粗いハケとヨコナデによって調整されている。器台の受部ないし脚部の可能性も考えられる。1557は台付甕の脚台部である。脚頂部に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。

S H 457 (第186図1558・1559) 1558・1559は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

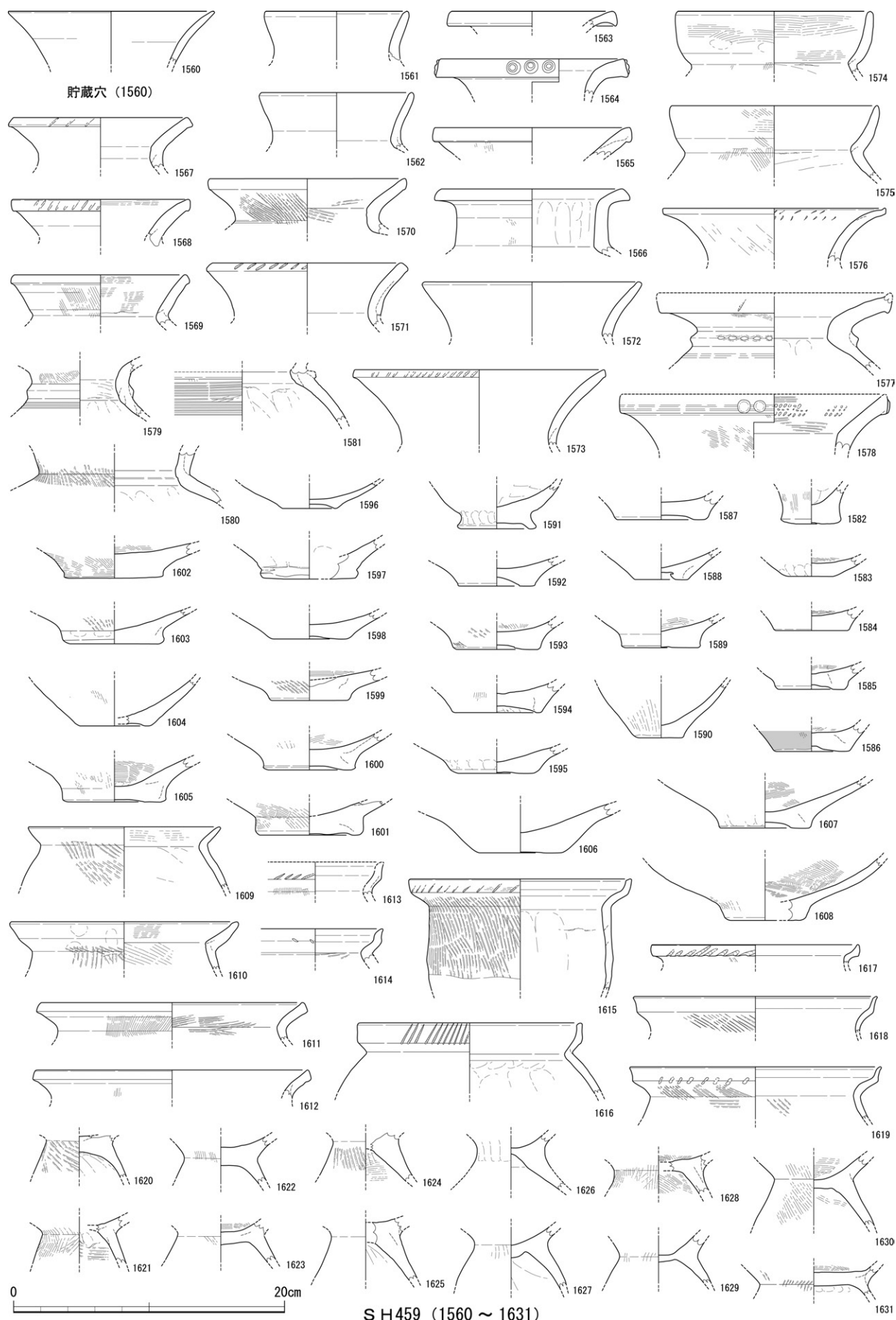
1558は壺の頸部付近の破片である。頸部外面には突帯が貼り付けられている。体部外面には直線文が施されている。1559は台付甕の脚台部である。筒状の脚台部の上面を円板充填状に閉塞し、さらに底部内面に厚く粘土を貼り付けて補強・整形を行っていると思われる。

S H 459 (第187・188図1560～1680) 1560は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。壺の口縁部と思われる。器壁は薄く、緩やかに外反しながら開く。口縁端部は丸く収められる。高坏の脚部の可能性も考えられる。

1561～1679は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1561～1608は壺である。

1561～1578は中・大型の壺の口縁部である。1561・1562は直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収め



第187図 S H459出土遺物① (1/4)

る。1564は中位で強く外反し、口縁端部は面をなす。口縁端部には円形浮文が貼り付けられている。円形浮文は3個一組と推定される。1566は頸部から直立し、上位で強く屈曲して開く。1567・1568は若干外反しながら外方へ開く。口縁端部は面をなし、列点文が認められる。1569は直線的に開く。内外面ともハケで調整されている。1570は外面を粗いハケで調整する。頸部内面にも粗いハケが施されている。頸部付近の外面には、直線文と思われるものがわずかに遺存する。1571は外面に粘土を貼り付けて口縁部を成形している。口縁端部には列点文が施されている。1572・1573は緩やかに外反しながら大きく開く。1574・1575は同一個体の可能性がある。内湾しながら直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。1576は外反しながら大きく開き、口縁端部は面をなす。器壁は比較的薄い。口縁部内面には列点文が施されている。1577は体部上半が一部遺存する。頸部は強く屈曲し、口縁部は大きく開く。口縁端部は若干拡張して広い面を作り出しており、列点文の痕跡がごくわずかに残る。頸部外面には突帯を貼り付けており、小さなオサエに近い刻目が施されている。1578は中位で屈曲して直線的に開くが、外面では屈曲は不明瞭である。口縁端部には擬凹線文を施すとともに、円形浮文を貼り付けている。口縁部内面には櫛状工具による列点文が施されている。

1579～1581は頸部付近の破片である。1579は頸部外面に突帯を貼り付けている。1580は頸部内面に沈線状の工具痕が残る。1581は頸部外面に突帯がわずかに遺存している。体部外面には直線文が施されている。

1582～1608は底部である。1582は底の器壁が厚く、体部の立ち上がりは急である。外面にはハケが施されている。平底の甕あるいは鉢の可能性もある。1585は底部中央に粘土を詰めて閉塞したような粘土接合痕が観察される。1586は外面に赤彩が認められる。1588は輪台状を呈する。底の器壁は薄い。1590は比較的小さな底部である。外面にはハケが施されており、鉢とも考えられる。1591は底部が高台状を呈する。底部付近には連続的なオサエが顕著に残り、つまみ出すように底部が成形されていることが窺われる。鉢の可能性も残る。1592・1593は底部外面中

央が凹レンズ状に凹み、上げ底状を呈する。1594は底部外面全体が浅く凹み、ケズリが施されている。1596も底部外面全体が浅く凹む。器壁は薄い。瓢形壺の底部と思われる。1597は外面に工具ナデが施されており、工具のアタリが明瞭に残る。1599は底部内面に貼り付けられた粘土が剥離している。1600は円板状の底部を成形後、その上端縁部から体部を成形し、底部内面に厚く粘土を貼り付けて補強・整形を行ったものと思われる。1601は底部と体部との接合部が剥離している。1603はわずかにボタン状に突出する。1607は上げ底状を呈する。1608は体部下半が一部遺存する。内面はハケで調整されている。

1609～1644は甕である。

1609～1612はく字状口縁甕である。1609は口縁部から体部上半にかけて遺存している。口縁部は短く開き、口縁端部は丸く収められる。外面は粗いハケで調整されている。1610は口縁部上半の外面に強いヨコナデが施されており、若干内湾する。受口状口縁甕とする方が適当かもしれない。1611・1612は直線的に短く開き、口縁端部は明瞭な面をなす。

1613～1619は受口状口縁甕である。1613・1614は口縁部の小片で、外面に列点文が認められる。1615は口縁部から体部下半にかけて遺存する。体部は砲弾形を呈するものと思われ、頸部の屈曲は比較的緩い。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁端部は面をなす。口縁部外面には列点文が施されている。体部外面は粗いハケで調整されているが、下位では工具ナデが施されているようで、ハケは認められない。また、外面には全体的にススが付着する。1616は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部上半が比較的長くのび、外面には長い列点文が施されている。1617は短い口縁部である。外面には大ぶりの列点文が施されている。1619は口縁部である。口縁部の屈曲は明瞭で、屈曲部の外面はシャープな稜をなす。口縁部上半はやや外反する。外面には櫛状工具による列点文が施されている。胎土に含まれている砂粒がほかの土器とは異なるように見受けられ、他地域からの搬入品と思われる。

1620～1640は台付甕の脚台部である。1620は底部内面に貼り付けた粘土が一部剥離している。外面には粗いハケが施されている。1622・1623は八字状に

大きく直線的に開くものと思われる。1624・1625はわずかに外反しながらハ字状に開く。1626は緩やかに外反しながら大きく開く。1627は内湾している。1628は破断面でやや複雑な粘土接合痕が観察される。脚台部の成形に関わるものと思われる。1630は直線的にハ字状に開き、下半でわずかに内湾する。内外面ともハケで調整されている。1631は大型のもので、脚台部の上端縁部から体部を成形し、その後、底部内面に粘土を貼り付けている。脚頂部の屈曲部には連続的なオサエが残る。1632は小型の低い脚台部で、筒状の脚台部の上面に粘土を詰めて閉塞し、さらに底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1633はわずかに内湾しながらハ字状に開く。外面には粗いハケが施されている。1636は器壁が厚い。底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が残る。1637は直立気味である。脚端部は面をなす。1638は大きくハ字状に開く。1639は若干内湾する。内外面とも粗いハケで調整されている。1640は器壁が薄い。外面には粗いハケが施されるが、内面に施されたハケはやや細かい。

1641～1644はS字状口縁甕である。1641は口縁部で、口縁部上半は矮小である。口縁端部は外方へ引き出され、不明瞭な面をなす。外面には押引列点文が施されている。1642～1644は脚台部である。いずれも底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1642はこの粗い砂粒を含む粘土を貼り付けることによって、筒状の脚台部の上面を閉塞して見受けられる。1643は脚台部の上端縁部から体部を成形している。

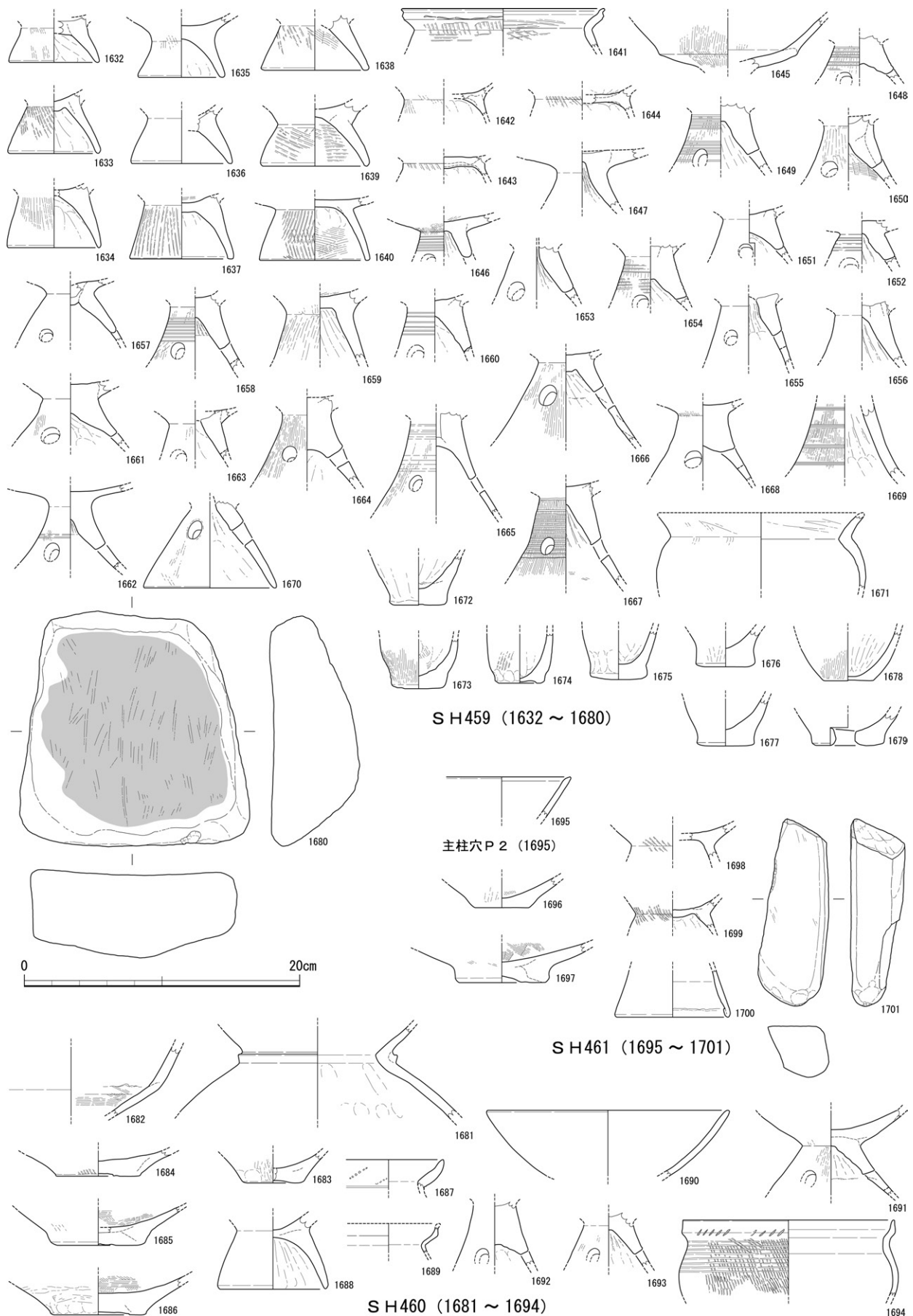
1645～1670は高坏である。

1645は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜は明瞭で、わずかに突出気味となる。外面はハケを施した後タテミガキによって調整している。

1646～1670は脚部である。1649・1650・1656・1658・1665・1667のように緩やかに外反しながらハ字状に開くものや、1657・1661・1668・1670のようにわずかに内湾するもの、1655・1659・1663のように直線的にハ字状に開くもの、1647・1662のように外反しながら大きく開くものなどがある。1646は脚部上端縁部から坏部を成形している。外面には直線文が施されている。1647は坏部内面中央に小さく浅

い剥離痕跡が認められる。坏部内面の遺存状況が悪いため、本来はもう少し広い範囲に粘土が貼り付けられていた可能性もある。1648は上面が凹レンズ状に凹む。外面には直線文が施されている。1650も上面が凹レンズ状に凹む。また、脚部成形に関わると思われる粘土接合痕が、破断面で観察される。1654・1656は上面が剥離面となっており、脚部上面の孔を粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。1657は脚部上面の孔に、坏部内面側から2回にわたって粘土を詰めている。最初に詰められた粘土の上面が明瞭な剥離面となることから、2回目の粘土を充填した時点で1回目に施した粘土の乾燥が進んでいたものと思われ、若干の時間差があったことが推測される。1659はやや頸部が太い。脚部内面はナデで丁寧に調整されている。1660は坏部内面に粘土を貼り付けているが、その粘土が剥離した面に、接合を良くするために施された沈線とも思われるものが認められる。1661は脚部上端縁部から坏部を成形している。1662の外面にはわずかに直線文が遺存している。1663・1664は坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離した痕跡が残る。坏部は脚部上端縁部から成形されている。1665は上面に深い孔が認められる。筒状の脚部を成形後、脚部内面頂部に粘土を貼り付けて閉塞したため、孔状の空隙が形成されたと考えられる。内部に粘土が詰められた痕跡は認められず、坏部内面側の孔の周囲には剥離痕跡が認められることから、脚部内面側も薄く粘土を貼り付けて閉塞し、孔は空隙のまま残された可能性が高い。1666は内面に脚部の成形に関わる粘土接合痕が残る。1668は頸部付近が中空となっていない。1669は比較的高い脚部と思われる。外面には直線文が4段施されている。1670は脚部の全形が復元できた。脚端部は丸く収められる。透孔は高い位置に開けられている。

1671～1678は鉢である。1671はく字状口縁を呈し、外面にはススが付着する。甕の可能性もある。1672は内外面ともナデや工具ナデで調整されている。1673は内面に赤色顔料が付着する可能性があるが、うっすらと赤化している程度で、確実ではない¹⁾。1674は鉢として図化したのが、天地が逆で、台付甕の脚台部となる可能性がある。1675は外面に連続的なオサエが認められる。1676・1677は小型の壺の可能



第188图 SH459出土遺物②、SH460・461出土遺物(1/4)

性も残る。1678は体部下半が一部遺存する。体部はやや内湾する。

1679は有孔鉢の底部である。遺存状況が悪く、調整はほとんど遺存していないが、外面にはナデが施されていると思われる。

1680は埋土中から出土した石製品で、台石である。花崗岩と思われる垂角礫を利用している。上面には著しい摩滅が認められ、わずかに凹んでいる。摩滅範囲には擦痕も多数認められるが、やや幅広で不明瞭なものが主体である。元は砥石として使用されていたものが台石として転用された可能性も考えられる。なお、側面にもわずかに平滑になっている部分が認められるが、擦痕などは認められず、側面も使用しているかは不明である。

S H 460 (第188図1681~1694) 1681~1694は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1681~1686は壺である。

1681・1682は体部である。1681は頸部から体部上半にかけて遺存している。口縁部はわずかに内湾しながら外方へ開くものと思われる。頸部外面には突帯が貼り付けられている。1682は体部下半の破片である。屈曲部が認められ、内面では屈曲部より下方にはハケが施されている。製作時の成形単位を示すものと思われる。

1683~1686は底部である。1684・1686は底部外面が若干凹む。1685は円板状の底部の上端縁部から体部を成形し、その後底部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。底部内面に貼り付けた粘土は一部剥離している。

1687~1689は甕である。

1687は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は緩く、全体的に内湾する。外面には櫛状工具による列点文が施されている。頸部付近の外面にはわずかに直線文が遺存する。1688は台付甕の脚台部である。やや内湾しながらハ字状に開く。1689はS字状口縁甕の口縁部の小片である。押し列点文の有無は不明である。

1690~1693は高坏である。

1690は坏部で、椀形高坏の可能性がある。口縁端部は丸く収める。1691は坏部から脚部にかけてが遺存する。坏部中位の破断面は剥離面となっており、

有稜高坏の底部と口縁部の接合部が剥離したとも思われるが、接合方法は一般的な有稜高坏とは異なり、器形からみても椀形高坏の可能性の方が高い。脚部は大きくハ字状に開く。また、脚部の上に坏部を載せたような接合痕が観察されるが、脚部上端縁部から坏部を成形している可能性も否定できない。1692・1693は脚部で、上面が凹レンズ状に浅く凹む。

1694は鉢である。口縁部から体部下半にかけてが遺存する。体部は扁平で、肩は張らない。頸部の縮まりは弱く、口縁部は受口状を呈する。口縁端部は丸く収める。口縁部の屈曲部外面には刻目状の列点文が施されている。器形からみて、手焙形土器の鉢部とも考えられるが、口縁部及び体部中位の外面にススが付着していることからみて、鉢の可能性が高いと判断した。

S H 461 (第188図1695~1701) 1695は主柱穴P2から出土した弥生土器・土師器である。高坏の口縁部の小片で、口縁端部は内傾する面をなす。

1696~1700は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1696・1697は壺の底部である。1697は円板状の底部の上端縁部から体部を成形し、その後、底部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。

1698~1700は甕である。

1698は台付甕の脚台部である。1699・1700はS字状口縁甕の脚台部である。1699は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1700は脚端部を内側へ折り返している。

1701は埋土中から出土した石製品で、敲石である。砂岩の円礫の破片を利用したもので、一端に敲打痕が認められる。側面のやや広い面には不明瞭な摩滅や擦痕も認められるため、台石としても使用していたか、あるいは台石の破片を敲石として転用したと推測される。

S H 462 (第189図1702~1768) 1702は壁柱穴から出土した石製品で、台石と思われるものである。砂岩の小片で、上面が面をなし、摩滅が認められる。

1703・1704は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。1703は壺の口縁部で、若干内湾しながら開く。口縁部内面には矢羽根状文が施されている。施文には二枚貝の貝殻腹縁が使用されている可能性

がある。1704は高坏の脚部で、脚部上端縁部から坏部を成形している。

1705～1767は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。

1705～1726は壺である。

1705～1713は中・大型の壺の口縁部である。1705は緩やかに外反しながらやや上方へのび、口縁端部は外側に折り返してわずかに垂下させ、広い面を作り出す。口縁端部の垂下部分は不整形である。胎土からみて、搬入品の可能性もある。1707は内面の中位を細い突帯状に突出させる。口縁端部は粘土を貼り付けて大きく拡張し、擬凹線文を施している。1708は中位で外方へ屈曲し、屈曲部の内面は明瞭な稜をなす。1710・1711はわずかに外反しながら大きく開く。外面はハケで調整されている。1712は口縁部の器壁がやや厚い。頸部外面に強いヨコナデが施されている。1713は緩やかに外反しながら大きく開き、口縁端部は面をなす。

1714～1716は頸部付近の破片である。1714は口縁部が外反しながら大きく開き、内面には矢羽根状文が施されている。頸部外面には突帯が剥離した痕跡が残る。1715は頸部外面に突帯が貼り付けられており、突帯の下方に波状文と思われるものがごくわずかに遺存する。1716は頸部外面に突帯が貼り付けられており、口縁部や体部に施されたと思われるハケが突帯上にも及んでいる。

1717～1726は底部である。1717・1718は内外面ともハケが施されている。1720は外面に連続的なオサエが残る。1722は底部外面中央が凹む。外面には工具ナデが施されている。1723は輪台状を呈する。内外面ともハケが施されている。1725・1726は内面にハケが施されている。

1727～1743は甕である。

1727はく字状口縁甕の口縁部である。小片で、外反しながら上方へのびている。口縁端部は丸く収められる。

1728・1729は受口状口縁甕の口縁部である。いずれも口縁部の屈曲は比較的弱いものの、屈曲部外面は稜をなす。

1730～1736は台付甕の脚部である。1730はやや小型のものである。1732・1733はわずかに内湾しな

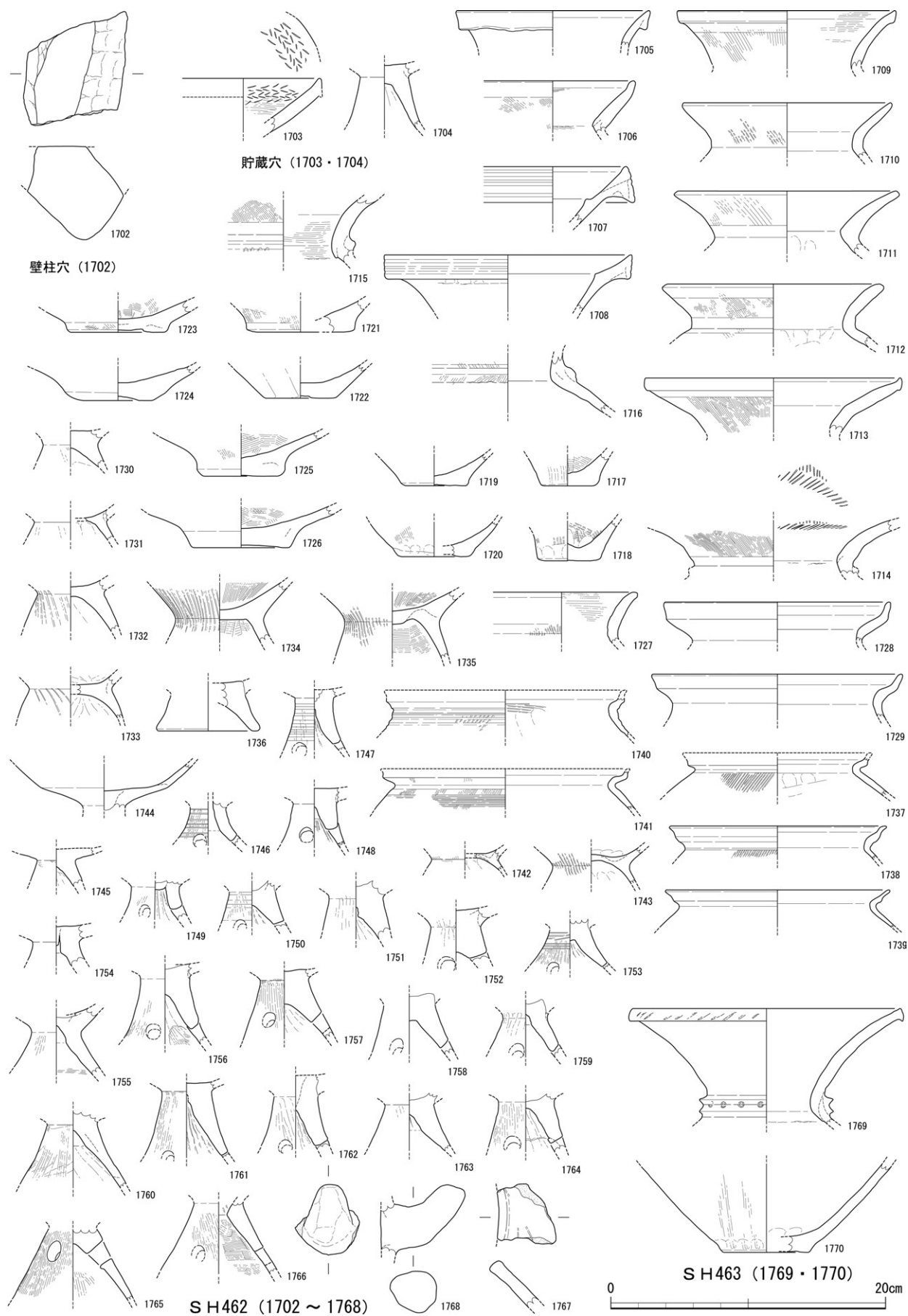
がらハ字状に開く。外面には粗いハケが施されている。1734は若干器壁が厚い。内外面ともハケで調整されている。1735は筒状に成形した脚台部の上面を円板充填状に閉塞している。また、脚台部の上端縁部から体部を成形している。体部内面にはコゲが付着している。1736は低い脚台部で、器壁は厚い。

1737～1743はS字状口縁甕である。1737～1741は口縁部である。1737は口縁端部を欠損する。肩部外面の遺存範囲にヨコハケは認められない。1738は口縁部上半が外反しながら開き、口縁端部は外方に引き出され、面をなす。頸部外面には沈線が認められる。1739は口縁部の屈曲がかなり緩く、内面ではわずかに凹むのみとなる。ただし、屈曲部外面は若干突出気味となる。口縁端部は丸く収められる。1740は頸部の屈曲が緩い。頸部内面には粗いハケが施されている。1742～1743は脚台部である。1742は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。底部内面については、脚台部上面の周縁部に施された深い連続的なオサエを埋めるように貼り付けられている様子が観察できる。1743は底部内面にのみ粗い砂粒を含む粘土を貼り付けているとみられるが、脚頂部にも同様の粘土が貼り付けられていた可能性もある。1742と同様に、脚台部上面の周縁部に当たる位置を中心に、輪状に貼り付けられている。

1744～1765は高坏である。

1744は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜は不明瞭である。脚部上面は円板充填状に閉塞されているように見えるが、円板充填状の粘土の下面は剥離面となっているため、実際には脚部上面の凹みを埋めるように貼り付けられたものと推測される。

1745～1765は脚部である。1756・1761・1762のように緩やかに外反しながらハ字状に開くもの、1755・1757・1758のように直線的にハ字状に開くもの、1760・1765のようにわずかに内湾しながらハ字状に開くものなどがある。1746は小型のもので、器台の可能性もある。外面には直線文が施されている。1749は筒状の脚部の上面の孔を閉塞した粘土が一部遺存している。閉塞した粘土の上面は剥離面となっているため、さらにその上にも粘土が貼り付けられていたものと考えられる。1750・1751は上面が凹レンズ状に凹む。この凹みを埋めるように坏部内面に貼り



第189図 SH462・463出土遺物 (1/4)

付けられた粘土が剥離したものと思われる。1753は若干外反しながら大きく開く。外面には直線文が施されている。1754は筒状に成形した脚部上面の孔に、坏部内面から粘土を詰めて閉塞している。1755・1756は坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離した痕跡が認められる。1758・1759は脚部上端縁部から体部を成形している。上面は浅く凹み、剥離痕跡が認められる。1760は外面をハケで調整しているが、ハケを施す前に横方向に工具ナデを施したような痕跡が、わずかに残されている。1761は脚部内面頂部に軸芯痕が認められる。また、内面にはシボリ痕が顕著に残る。1762は破断面で粘土を筒状に成形した際の粘土接合痕が観察できる。坏部は脚部上端縁部から成形されている。1763・1764は上面が浅く凹み、剥離痕跡が認められる。1764の内面には脚部成形時の粘土接合痕が顕著に残る。1765は透孔が高い位置に開けられている。

1766は器台の脚部と思われるが、高坏の脚部上面を閉塞した粘土が剥離したものの可能性も残る。受部内面には工具痕と思われるものがわずかに認められる。脚部内面はハケで調整されている。

1767は手焙形土器の覆部の小片である。外面にはヘラ状工具による細い沈線が一部遺存しており、斜線文などが施されていた可能性がある。

1768は埋土中から出土した土師器である。飛鳥～奈良時代の甕もしくは甌の把手である。

SH463 (第189図1769・1770) 1769・1770は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1769は壺の口縁部で、緩やかに外反しながら長くのびる。口縁端部は面をなし、列点文が施されている。頸部外面には突帯が2条貼り付けられているが、1本の粘土帯を整形して2条の突帯としたものとみられる。突帯間には竹管文が施されている。この竹管文の内部にわずかに赤彩が遺存している。1770は壺の体部下半から底部にかけての破片である。遺存状況が悪く、調整は不明瞭であるが、外面には一部にミガキが認められる。

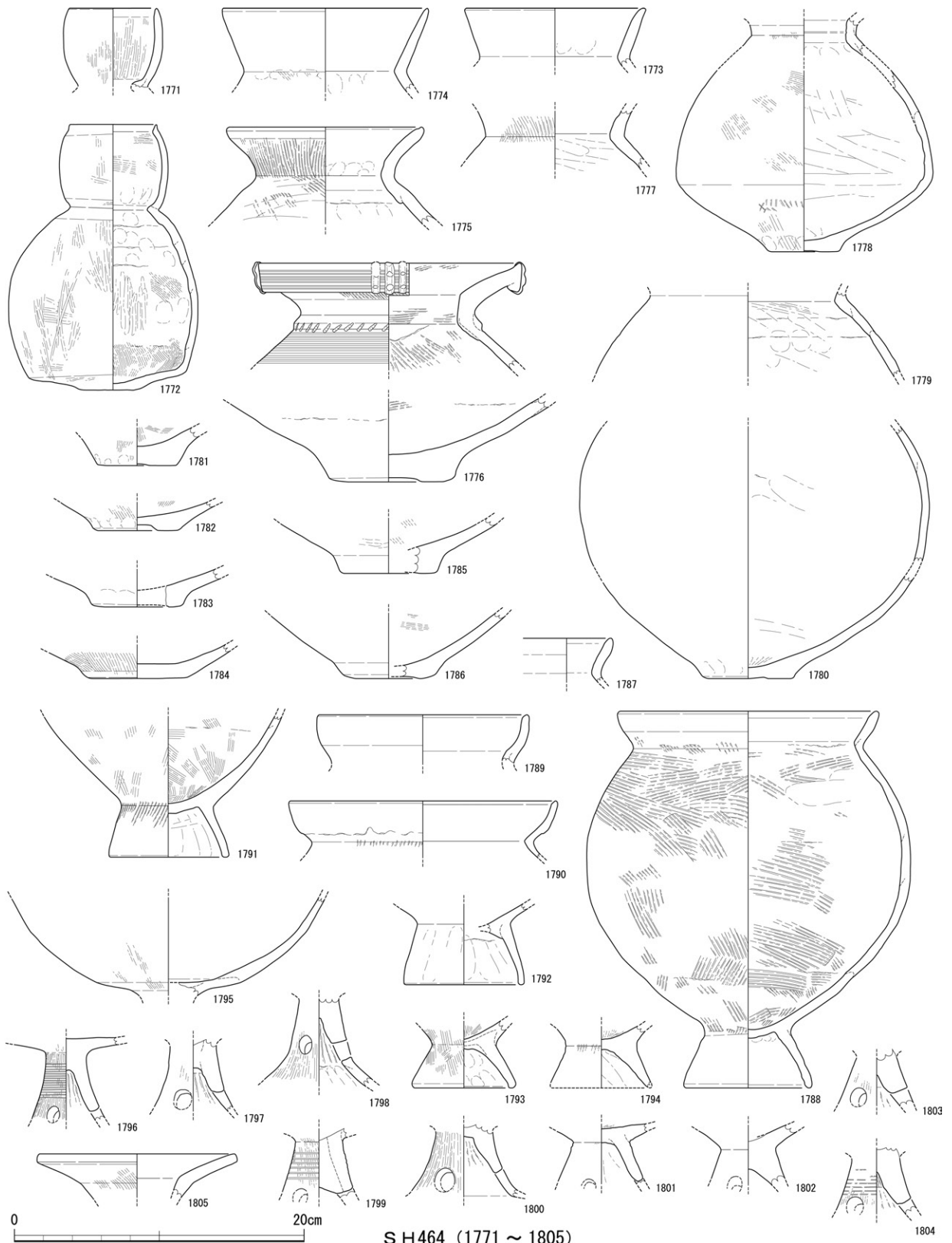
SH464 (第190・191図1771～1806) 1771～1805は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1771～1786は壺である。

1771～1776は口縁部等である。1771は瓢形壺の口縁部で、内湾しながら直立気味に立ち上がる。口縁端部は浅い凹線状に凹む面をなす。内外面ともミガキが施されている。1772は瓢形壺で、ほぼ完形に復元できた。体部はなで肩で、胴は張らない。底部付近で強く屈曲しており、下ぶくれの器形を呈する。ただし、全体的に歪みが大きい。頸部は強く締まり、口縁部は強く内湾しながら直立する。口縁端部は明瞭な面をなす。口縁部内面はハケで調整されている。体部内面は、下半はハケで調整されているが、中位には細い工具によるナデが施され、上半に至るとオサエのみが施されており、粘土接合痕が顕著に残る。1773・1774は口縁部で、直線的にやや上方へのびる。1775は口縁部から体部上半にかけて遺存している。体部外面は粗いハケを施した後に工具ナデが施されている。1776は口縁部から体部上半にかけてと、体部下半から底部にかけての破片からなる。接合しないが、同一個体と考えられる。底部外面は中央部がわずかに凹む。口縁部は頸部から直立し、中位で強く屈曲し、外方へ開く。屈曲部は外面では不明瞭であるが、内面では明瞭な稜をなす。口縁端部は上下に拡張して広い面を作り出し、擬凹線文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は3本一組で4方向に配されており、刻目が施されている。体部上半の外面には直線文が施されている。また、底部内面には一部にコゲが付着している。

1777～1780は体部である。1778は頸部付近から底部にかけての破片である。ほぼ1個体分の破片が出土しているが、風化等によって接合しないものも多く、複数の破片を用いて図化したため、器形の復元には不安を残す。体部は下ぶくれの器形を呈し、口縁部は頸部から短く直立する。頸部内面には沈線状の工具痕が認められる。外面にはハケが施されているが、一部には粗いハケも認められる。1779は大型のものである。図化したもの以外にも、同一個体と思われる破片が多数出土している。内外面に二次的な被熱が認められる。1780は球形の器形を呈する体部である。

1781～1786は底部である。1782は輪台状を呈する。1783は底部中央が円板状に剥離していると思われる。1785は外面にミガキがわずかに遺存する。



第190図 SH464出土遺物① (1/4)

1787～1794は甕である。

1787・1788はく字状口縁甕である。1787は口縁部の小片で、口縁部上半の外面には強いヨコナデが施されており、受口状口縁甕にも近い。口縁端部は丸く収められる。1788は全形が復元できた。く字状口縁甕台付甕で、わずかに内湾しながらハ字状に開く脚台部を有する。体部は脚台部の上端縁部から成形される。体部は球形に近い器形を呈する。口縁部は1787と似た形状を呈し、受口状口縁甕に近い。体部内外面は粗いハケで調整されている。

1789・1790は受口状口縁甕の口縁部である。1789は口縁部の屈曲が緩く、全体的に内湾する。口縁端部は不明瞭な内傾する面をなす。1790も口縁部の屈曲が緩く、全体的に内湾する。器壁は薄い。胎土からみると、搬入品の可能性もある。

1791～1794は台付甕の脚台部である。1791は体部下半まで遺存している。脚台部はわずかに内湾しながらハ字状に開く。脚端部は面をなす。体部は内外面ともハケで調整されており、脚台部外面には粗いハケが施されている。1792は筒状に成形した脚台部の上面を粘土を貼り付けて閉塞した痕跡が残る。1793はハ字状に直線的に大きく開く。底部内面及び脚頂部に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。

1795～1804は高坏である。

1795は有稜高坏の坏部である。比較的深い坏部で、坏部外面の稜は不明瞭である。坏部内面の屈曲もほとんど認められない。一部に二次的な被熱が認められる。

1796～1804は脚部である。1796・1797・1804のように外反しながらハ字状に開くものや、1802・1803のように直線的にハ字状に開くもの、1798・1800のように下半で屈曲して大きく開くものなどがある。1796はやや細身のものである。1797は上面に剥離痕跡が認められ、その部分で平面的に、粘土を筒状に成形した際の渦巻状の粘土接合痕が観察できる。1799は脚部内面頂部付近に粘土を詰めて中実としている。上面は凹レンズ状に凹み、剥離面となっている。1801は脚部上端縁部から坏部を成形している。また、脚部内面頂部に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1802は坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離している。1804は粘土を筒状に成形した際の粘土

接合痕が観察できる。

1805は器台の受部と思われる。口縁端部は面をなす。外面にはハケが施されている。

1806は床面から検出された台石である。大型で扁平なホルンフェルスの亜角礫を利用したもので、上面は全体的に平滑で、わずかに凹んでいる。中央部には敲打痕が集中的に残されている。また、周縁部を中心に擦痕や鋭い線状痕が多数残されており、砥石としても使用されたものと思われる。側面にも一部に摩滅や擦痕、線状痕が認められる。

S H 465 (第191図1807～1825) 1807～1825は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1807～1812は壺である。

1807・1808は口縁部である。1807は外反しながら開き、口縁端部は不明瞭な面をなす。内外面ともハケで調整されている。1808は小片で、口縁端部は面をなし、矢羽根状文が施されている。内外面にススが付着している。

1809は頸部付近の破片である。口縁部は直立気味に立ち上がり、中位で大きく外反すると思われる。頸部外面には突帯が貼り付けられている。

1810～1812は底部である。1811は底部外面中央がわずかに凹む。

1813～1817は甕である。

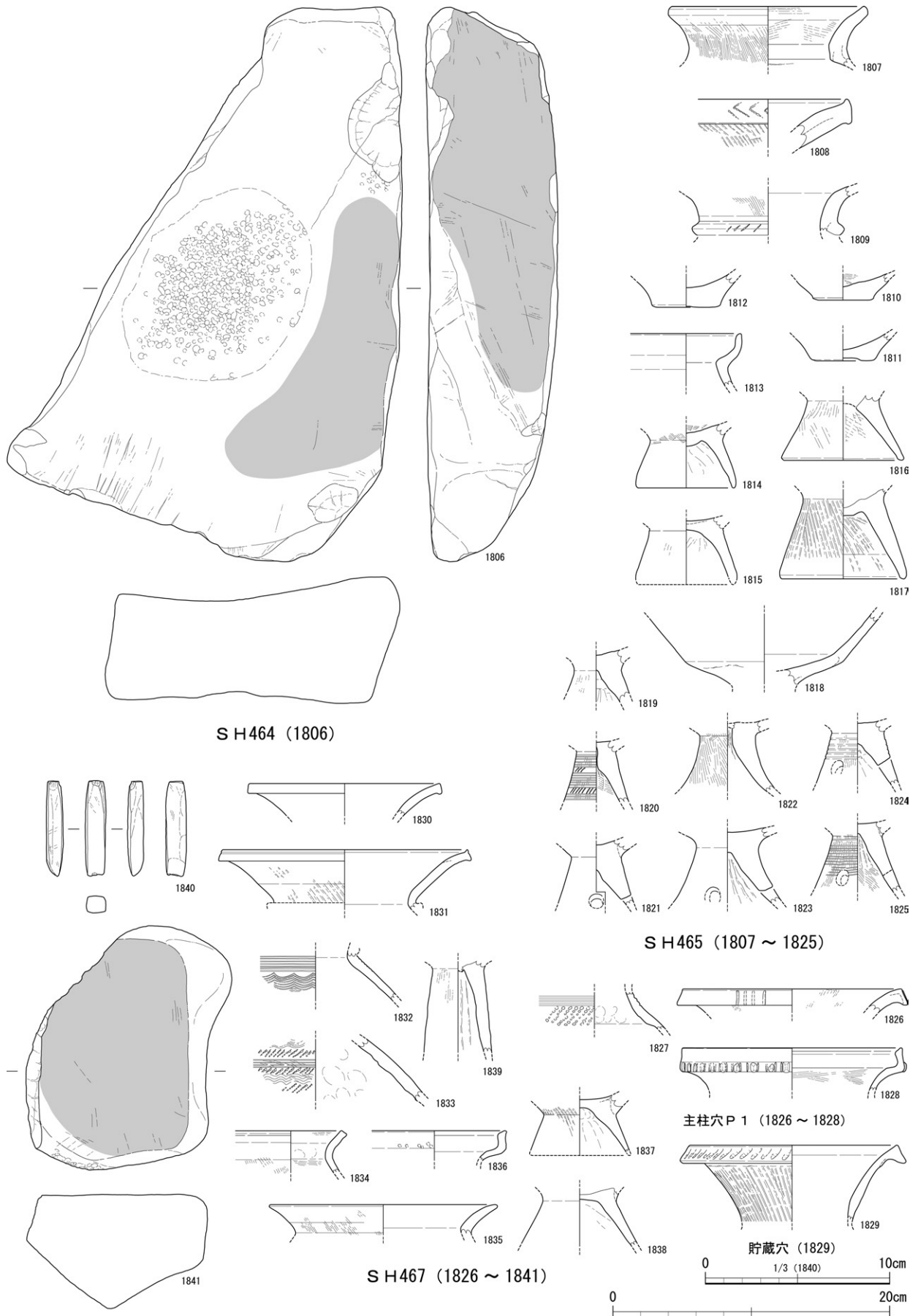
1813は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は緩いが、強く内湾し、口縁端部は不明瞭な面をなす。頸部内面は突出気味となる。

1814～1817は台付甕の脚台部である。1814はやや直立気味で、下半でわずかに内湾する。1815は底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1816はハ字状に大きく直線的に開く。脚端部は面をなす。1817は上面が剥離面となっている。底部内面に貼り付けた粘土が剥離したと思われる。内外面とも粗いハケで調整されている。

1818～1825は高坏である。

1818は有稜高坏の坏部である。外面の稜は不明瞭であるが、外面には底部と口縁部を接合した粘土接合痕が明瞭に残る。

1819～1825は脚部である。1820は脚部内面頂部に孔状のものが認められるが、軸芯痕ではない。外面には直線文と二枚貝の貝殻腹縁による列点文が施さ



第191図 SH464出土遺物②、SH465・467出土遺物 (1/4、1/3)

れている。また、下端部には透孔が一部遺存している可能性がある。1821は直線的にハ字状に開く。脚部上端縁部から坏部を成形している。1822は外反しながらハ字状に開く。外面はハケで調整されている。1824は直線的にハ字状に開く。脚部内面頂部付近には工具痕と思われる刺突状のものが数箇所認められる。1825は脚部上端縁部から坏部を成形している。外面には直線文が施されている。

S H467 (第191図1826~1841) 1826~1828は支柱穴P1から出土した弥生土器・土師器である。

1826・1827は壺である。1826は口縁端部を垂下させて広い面を作り出し、棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文はほとんど剥離しており、おそらく4本一組となると思われるが、確定的ではない。1827は体部片である。外面には直線文と櫛状工具による列点文が施されている。器壁は薄く、甕の体部とも思われる。

1828は受口状口縁甕もしくは壺の口縁部である。口縁部は強く屈曲し、口縁部上半は若干内傾する。口縁端部は内傾する面をなす。屈曲部の外面には小さな浮文状の突起と沈線が交互に施されている。これは、小さな塊状の粘土を貼り付けた後にその両側をヘラ状工具で整形し、その痕跡が沈線として残ったか、あるいは突帯状のものを貼り付けた後に、ヘラ状工具で等間隔に切れ目を入れ、一つおきに粘土を除去したかの、どちらかの方法によって施された文様と思われるが、風化のため判断は困難である。こうした文様は伊勢地域では類例がなく、胎土も黒雲母が多く含まれるなど特徴的で、他地域からの搬入品と考えられる。施文位置や刻目に近い文様という点では近江地域の受口状口縁に類するもので、近江地域から搬入された可能性が高い。なお、壺の体部片とした1827は、この甕の体部とも思われる。

1829は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。壺の口縁部で、緩やかに外反しながら開き、口縁端部は大きく垂下させ、列点文を施している。外面は粗いハケで調整されている。

1830~1839は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1830~1833は壺である。1830・1831は口縁部で、緩やかに外反しながら大きく開く。口縁端部は面を

なす。1831は口縁端部に擬凹線文が施されている可能性がある。また、頸部外面には突帯が貼り付けられていたと思われる。1832・1833は体部片である。1832は外面に直線文と波状文を施している。接合しないものの、1831と同一個体の可能性が高い。1833は外面に直線文と波状文、櫛状工具による列点文を施している。

1834~1838は甕である。

1834・1835はく字状口縁甕の口縁部である。1834は頸部の屈曲が緩く、口縁部は短く開く。口縁端部は面をなす。1835は口縁端部を丸く収める。外面にはハケを施している。

1836は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部は強く屈曲し、口縁端部は面をなす。外面には櫛状工具による列点文と思われる痕跡が、ごくわずかに遺存する。

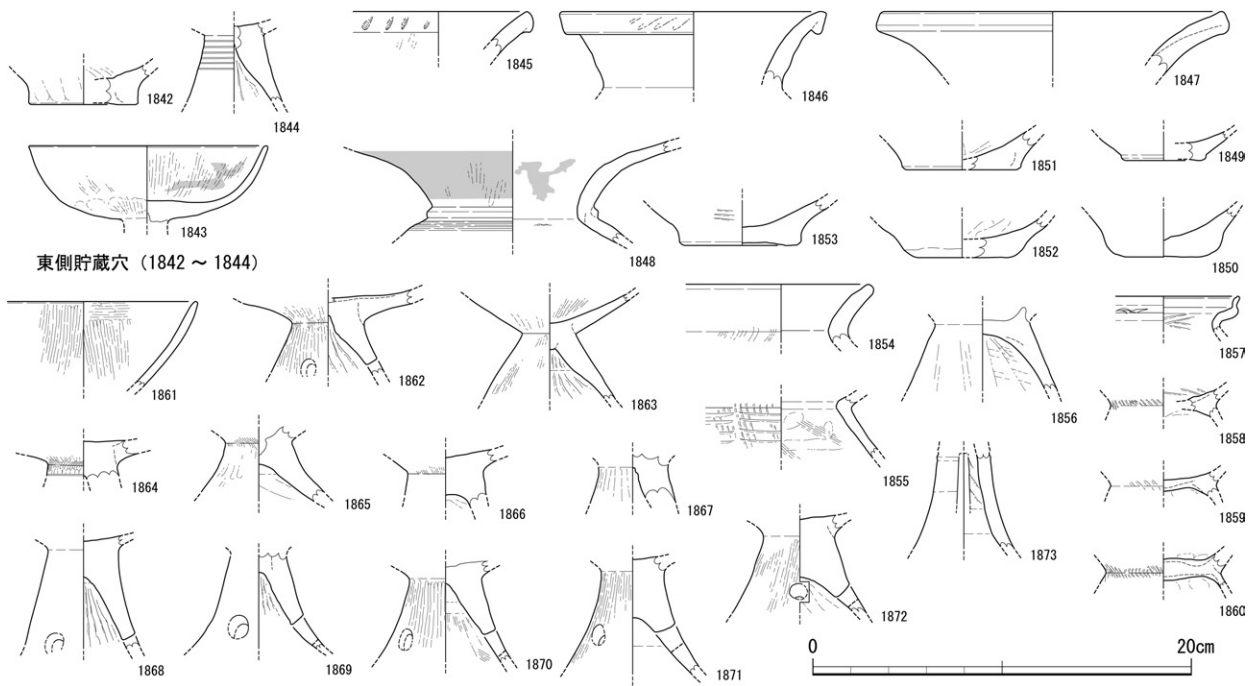
1837・1838は台付甕の脚台部である。1837は脚台部の上端縁部から体部を成形する。また、底部内面に粘土を貼り付けている。1838はハ字状に直線的に開く。脚台部の上端縁部から体部を成形しており、体部が剥離した部分に連続的なオサエが認められる。上面にも剥離痕跡が認められる。

1839は高坏の脚部である。やや柱状を呈する。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。

1840・1841は埋土中から出土した石製品である。1840は鑿状の小型柱状片刃石斧である。ホルンフェルスと思われる石材が用いられている。ほぼ完形で、細長い直方体を呈し、刃部は片刃となっている。全面を研磨によって丁寧に整形している。1841は台石である。ホルンフェルスの垂角礫をそのまま利用したもので、上面が平坦となっている。平坦面には明瞭な摩滅が認められ、一部に不明瞭な擦痕も残る。また、側面には部分的に敲打痕が認められる。

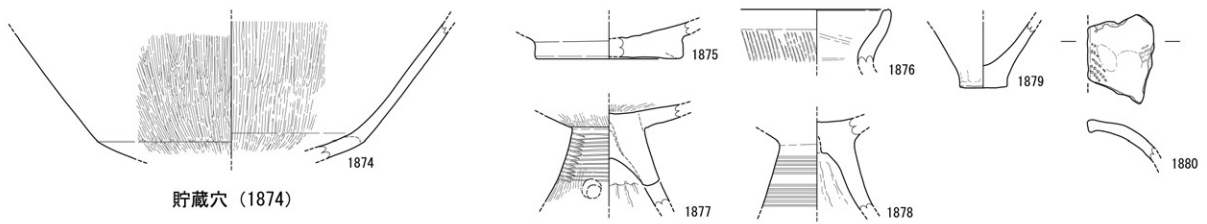
S H469 (第192図1842~1873) 1842~1844は東側貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

1842は壺の底部で、外面にはナデが施されている。1843は椀形高坏の坏部である。小型のもので、半分近くが遺存する。口縁端部は丸く収める。内面には中位に帯状に水銀朱が付着している。外面にはススや二次的な被熱は認められない。1844は高坏の脚部である。外面上半には直線文が施されている。



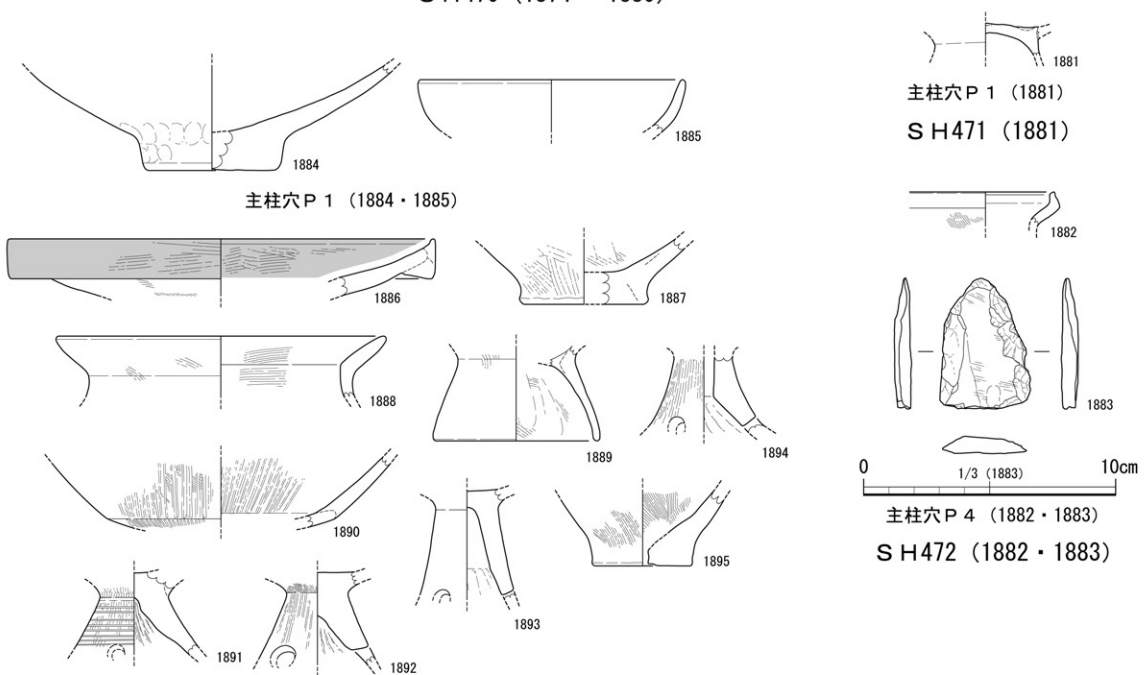
東側貯蔵穴 (1842 ~ 1844)

S H469 (1842 ~ 1873)



貯蔵穴 (1874)

S H470 (1874 ~ 1880)



主柱穴 P 1 (1881)

S H471 (1881)

主柱穴 P 4 (1882・1883)
S H472 (1882・1883)

S H476 (1884 ~ 1895)

第192図 S H469~472・476出土遺物 (1/4、1/3)

1845～1872は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1845～1853は壺である。

1845～1847は口縁部である。1845・1846は口縁端部に列点文が施されている。

1848は頸部付近の破片である。口縁部は中位でやや強く外反し、大きく開く。頸部外面には突帯が貼り付けられている。口縁部外面は赤彩されており、内面にもわずかに赤彩が認められる。

1849～1853は底部である。1849は胎土に黒雲母が目立ち、また細かく均一な大きさの砂粒が含まれているなど特徴的で、他地域からの搬入品の可能性がある。1853は底部外面がわずかに凹む。外面には粗いハケと思われるものがわずかに遺存する。

1854～1860は甕である。

1854はく字状口縁甕の口縁部である。わずかに外反しながら開き、口縁端部は不明瞭な面をなす。

1855は体部の小片である。外面には粗いタテハケとヨコハケが施されている。内面には細かいハケやオサエ、ナデが施されている。

1856は台付甕の脚台部である。ハ字状に直線的に開く。脚台部上面の周縁部は突帯状につまみ出されており、内側の凹みには連続するオサエが明瞭に残る。上面は全体的に剥離面となっており、体部や底部内面に貼り付けた粘土が剥離した痕跡と思われるが、脚台部の上面周縁部にこうした突帯状の隆起を作り出すことで、脚台部と体部との接合を強固にしようとする意図があったものと推測される。

1857～1860はS字状口縁甕である。1857は口縁部で、口縁部の屈曲は明瞭である。口縁部上半はやや矮小であるが、口縁端部には沈線状に凹む面がわずかに認められる。外面には押引列点文が施されている。1858～1860は脚台部である。1858は底部内面に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1859・1860は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けているが、1859では破断面でそれらの粘土接合痕が比較的明瞭に観察できる。

1861～1872は高坏である。

1861・1862は有稜高坏と思われる。1861は口縁部で、緩やかに内湾しながら大きく開く。口縁端部は丸く収められる。内外面ともタテミガキで調整され

ているが、内面の口縁端部付近のみヨコミガキが施されている。1862は坏部から脚部上半にかけてが遺存する。脚部上端縁部から坏部を成形しており、坏部内面には薄く粘土を貼り付けている。

1863は椀形高坏と思われる。坏部から脚部上半にかけてが遺存する。脚部はわずかに内湾しながらハ字状に開く。脚部内面頂部には、脚部上面の孔に粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。

1864～1872は脚部である。1864は脚部上端縁部から坏部を成形している。外面には直線文がわずかに残る。1865は大きく外反しながら開く。上面は孔状に大きく凹む。1868はやや外反しながらハ字状に開く。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。1869は全体的に外反しながらハ字状に開く。脚部上面の孔に粘土を詰めて閉塞した痕跡が残る。1870は上面が剥離面となっている。坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離したと思われる。1872はわずかに外反しながらハ字状に開く。頸部付近が中空とならない。坏部は脚部上端縁部から整形されている。

1873は埋土中から出土した須恵器で、高坏の脚部である。透孔は2方向に開けられている。内面にはシボリ痕が残る。飛鳥時代のもので、埋土中に混入したと思われる。

SH470 (第192図1874～1880) 1874は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。有稜高坏の坏部で、比較的深い。坏部外面の稜は不明瞭である。内外面ともタテミガキで調整される。

1875～1880は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1875は壺の底部である。ボタン状に突出する。

1876は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は緩く、全体的に内湾する。口縁端部はわずかに凹線状に凹む面をなす。

1877・1878は高坏の脚部である。1877は脚部上端縁部から坏部を成形している。また、脚部内面頂部に粘土を充填しているが、頂点付近には粘土が入りきっておらず、空隙が残されている。1878は緩やかに外反しながらハ字状に開く。脚部内面頂部に軸芯痕が認められる。

1879は鉢の体部下半から底部にかけての破片である。やや小型のものである。

1880は手焙形土器の覆部の小片と思われる。内湾し、端部は面をなす。外面には櫛状工具による列点文が施されている。

S H 471 (第192図1881) 1881は支柱穴P 1から出土した弥生土器・土師器である。S字状口縁甕の脚台部で、底部内面に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

S H 472 (第192図1882・1883) 1882は支柱穴P 4から出土した弥生土器・土師器である。受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は明瞭で、屈曲部外面はシャープな稜をなす。口縁部上半は内傾し、口縁端部は面をなす。

1883は支柱穴P 4から出土した石製品で、磨製石鏃と思われるものである。泥岩もしくは粘板岩製で、平面形は五角形に近い三角形を呈する。表裏両面とも研磨が施されているが、両側縁には研磨に先立って行われたとみられる成形剥離が明瞭に残り、刃部が研ぎ出されている様子は認められない。先端部付近の側縁部には、表皮と思われる部分も残る。また、基部は折損面状を呈しており、剥離や研磨などの加工は施されていない。全体的に粗雑で、未製品あるいは磨製石鏃以外の石製品の破片である可能性も考えられる。

S H 476 (第192図1884~1895) 1884・1885は支柱穴P 1から出土した弥生土器・土師器である。1884は壺の底部である。ややボタン状に突出し、外面には整形に伴うオサエが明瞭に残る。1885は受口状口縁甕の口縁部と思われる。ただし、かなり遺存状況が悪いため、口縁端部が破断面の可能性もあり、その場合は壺の体部などと考えられる。

1886~1895は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1886・1887は壺である。1886は口縁部で、わずかに内湾しながら大きく開き、口縁端部は粘土を貼り付けて垂下させている。口縁端部及び内面には赤彩が施されている。1887は底部である。

1888・1889は甕である。1888はく字状口縁甕の口縁部である。頸部内面は比較的明瞭な稜をなす。口縁部は直線的に外方へ開き、口縁端部は面をなす。1889は台付甕の脚台部である。若干内湾しながら八字状に開く。器壁はやや薄い。

1890~1893は高坏である。

1890は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜は不明瞭である。外面はハケを施した後にタテミガキで調整している。

1891~1893は脚部である。1891は八字状に大きく開く。脚部上端縁部から坏部を成形している。外面には直線文が施されている。1892は直線的に八字状に開く。1893は下半で緩やかに外反する。

1894は器台の脚部と思われる。緩やかに外反しながら八字状に開く。脚部内面頂部から坏部内面に向かって太い貫通孔が認められる。筒状に成形された高坏の脚部の可能性もあるが、孔を粘土で充填するなどして閉塞した痕跡は確認できない。

1895は有孔鉢の底部である。孔は底部中央から若干偏った位置に開けられている。

S H 477 (第193図1896~1931) 1896~1931は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1896~1903は壺である。

1896・1897は口縁部である。1896は直線的に外方へ開く。1897は口縁部から体部上半にかけてが遺存する。頸部は強く屈曲し、頸部内面には強いヨコナデが施されており明瞭な稜をなす。口縁部は直線的に開き、口縁端部は上方へはね上げられる。体部外面はハケで調整された後に、粗くヨコミガキが施されている。

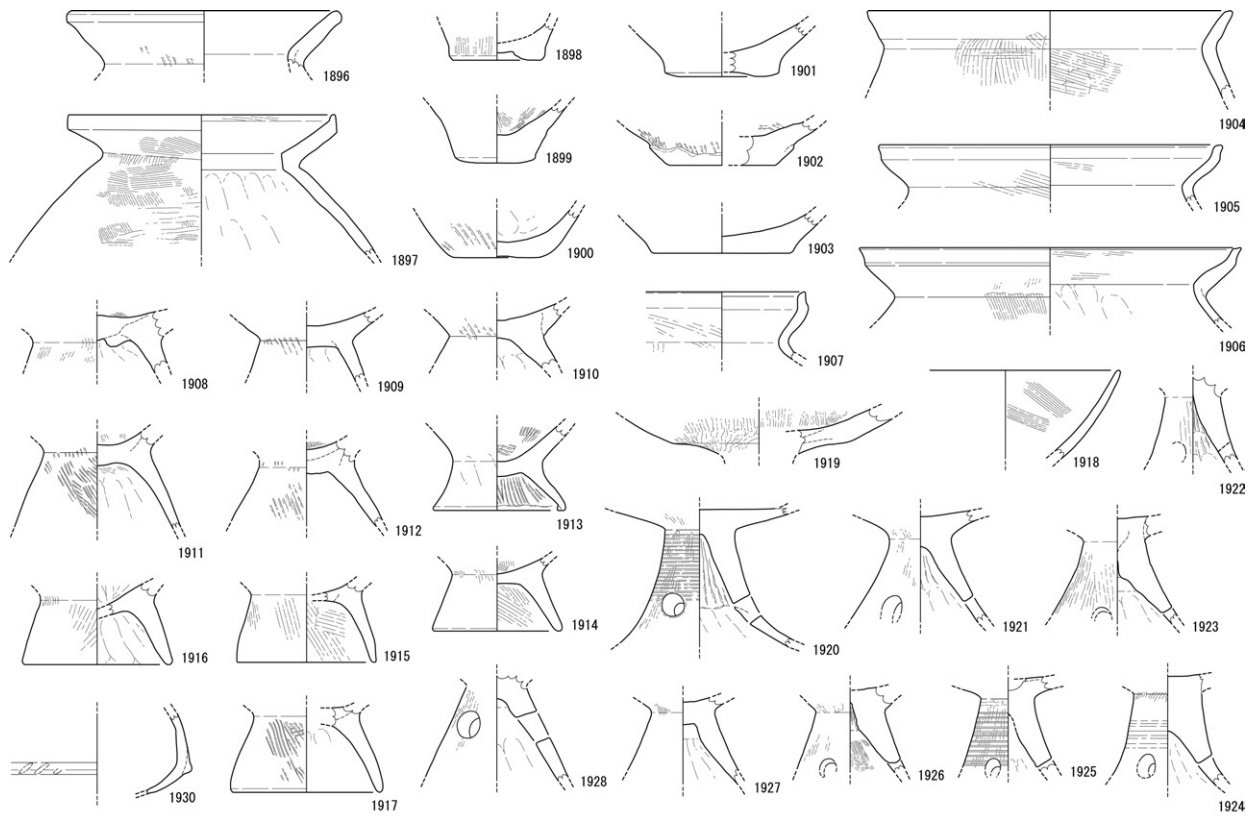
1898~1903は底部である。1898は輪台状を呈する。1900は外面に粗いハケが施されている。1901は底部外面中央が浅く凹む。1902は外面に粘土をナデつけた痕跡が認められるが、ハケを施した後に行われているとみられ、体部整形後に底部の補強などとして貼り付けられたものとも思われる。また、底部外面にはケズリが施されている。

1904~1917は甕である。

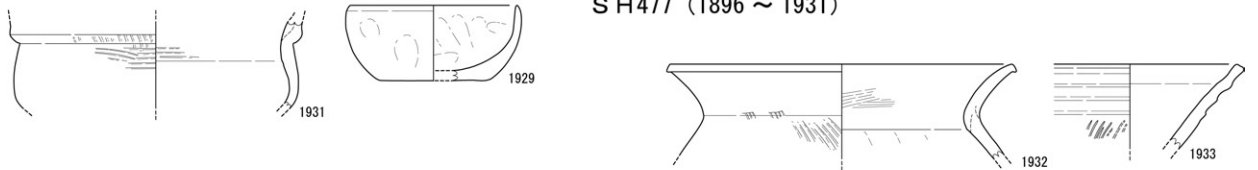
1904はく字状口縁甕である。口縁部の破片で、体部上半まで一部遺存する。口縁部は直線的に開き、外面にはヨコナデが施されている。

1905~1907は受口状口縁甕の口縁部である。1905・1906は口縁部が直線的にのび、口縁端部付近で短く屈曲し、上方へ立ち上がる。口縁端部は面をなし、わずかに外方へ引き出されている。

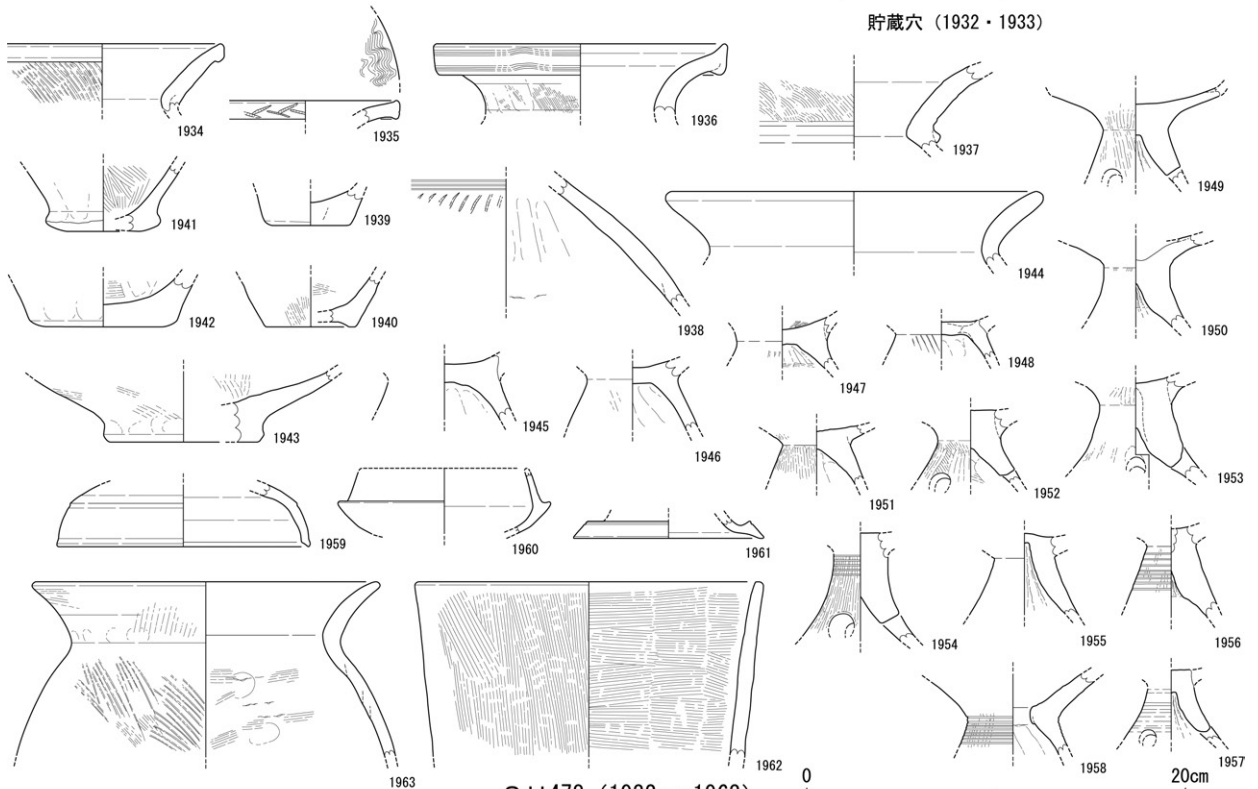
1908~1917は台付甕の脚台部である。1908は筒状



S H477 (1896 ~ 1931)



貯蔵穴 (1932・1933)



S H478 (1932 ~ 1963)

第193図 S H477・478出土遺物 (1/4)

に成形された脚台部の上面を円板充填状に閉塞し、それによって脚台部内面にはみ出した粘土を折り返すようにしてナデつけている。1909は直線的にハ字状に開き、脚頂部には粘土を貼り付けている。1911はわずかに内湾しながらハ字状に開く。脚台部の上面を円板充填状に閉塞している可能性がある。1912は大きくハ字状に開く。底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1913は小型で低い脚台部である。大きくハ字状に開き、脚端部は面をなし、わずかに内側に折り返されたように突出する。内面には粗いハケが施されている。1914・1916は直線的にハ字状に開き、やや器壁が厚い。

1918～1928は高坏である。

1918は口縁部と思われる。器壁は薄く、若干内湾し、口縁端部は丸く収められる。内面はハケで調整されており、高坏の脚部あるいは鉢の口縁部などの可能性も残る。胎土は黒色の砂粒が目立つなどやや特徴的で、搬入品とも思われる。

1919・1920は有稜高坏である。1919は坏部で、坏部外面の稜は比較的明瞭である。器壁は厚い。脚部が剥離した痕跡が認められる。1920は坏部から脚部にかけてが遺存する。坏部の底部から口縁部が剥離した痕跡が認められる。脚部は下半で大きく外反しながら開き、脚部外面上半には直線文が施されている。脚部内面中位には粘土接合痕が明瞭に残る。

1921～1928は脚部である。1921・1926・1928のように直線的にハ字状に開くものや、1922・1923・1925のようにわずかに外反しながらハ字状に開くものなどがある。1923は破断面で粘土を筒状に成形した際の粘土接合痕が観察できる。脚部内面頂部には孔状のものが認められるが、軸芯痕ではない。1924は脚部上端縁部から坏部を成形している。頸部付近は中空となっていない。1925は脚部上面の凹レンズ状の凹みを埋めるように貼り付けた粘土が剥離した痕跡が認められる。1926は脚部内面をハケなどによって丁寧に調整しており、そのため調整が及ばなかった頂部付近の窄まった部分が孔状に残されている。1927・1928は内面をナデなどで丁寧に調整しており、シボリ痕は認められない。

1929は鉢である。平底で、比較的浅い。体部は内湾し、口縁端部は丸く収められる。内外面ともオサ

エやナデで調整されており、やや粗雑である。

1930・1931は手焙形土器である。1930は鉢部片で、外面には細い突帯が貼り付けられている。1931は鉢部の上半の破片である。口縁部は受口状を呈し、内面には覆部を接合した痕跡が認められる。体部外面には粗いヨコハケが施されている。

SH478 (第193図1932～1963) 1932は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。く字状口縁甕の口縁部である。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は外反しながら開く。口縁端部は面をなす。

1933は貯蔵穴から出土した須恵器である。壺の口縁部で、直線的に開く。外面には斜線文と思われるものがわずかに遺存する。焼成はやや甘い。貯蔵穴の埋土中に混入したと思われる。

1934～1958は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1934～1943は壺である。

1934～1936は口縁部である。1934は直線的に開き、口縁端部は面をなし、わずかに垂下する。外面には粗いハケが施されている。1935は口縁端部付近の小片で、内面には粗雑な波状文が施されている。1936は外反しながら外方へ大きく開く。口縁端部は上下に拡張して広い面を作り出し、擬凹線文を施している。擬凹線文には一部に歪みがみられる。

1937・1938は頸部から体部にかけての破片である。1937は頸部付近の破片で、頸部外面に突帯を貼り付けている。1938は体部で、外面に直線文と列点文が施されている。

1939～1943は底部である。1939は器形に歪みがある。1940は上げ底状を呈する。二次的な被熱が認められる。1943は大型のもので、底部はボタン状に突出している。

1944～1948は甕である。

1944はく字状口縁甕の口縁部である。緩やかに外反し、口縁端部は丸く収める。器壁は厚い。飛鳥～奈良時代の甕の可能性も考えられる。

1945～1947は台付甕の脚台部である。1945・1947は脚台部の上端縁部から体部を成形している。1946はわずかに内湾しながらハ字状に開く。

1948はS字状口縁甕の脚台部である。筒状に成形した脚台部の上面を円板充填状に閉塞し、その後、

その接合部を補強するように、底部内面及び脚頂部にやや粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。体部は脚台部の上端縁部から成形されており、剥離痕跡が残る。

1949～1957は高坏である。

1949は有稜高坏で坏部から脚部にかけてが遺存する。脚部内面にはシボリ痕が残る。

1950～1957は脚部である。1950・1953・1957などのように緩やかに外反しながらハ字状に開くものが多い。1950は上面の凹みを埋めるように坏部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1951はわずかに内湾するように見受けられる。1952は外面をタテミガキで調整しているが、その前に施されたハケが顕著に残る。1953は透孔が4方向に開けられている可能性が高い。破断面では粘土を筒状に成形した際の粘土接合痕が観察できる。1954は頸部付近がやや柱状を呈し、中空となっていない。外面上半の頸部付近に直線文が施されている。1957は脚台部の上端縁部から坏部を成形している。外面には不明瞭ながら直線文が遺存する。

1958は器台である。頸部付近の破片で、頸部は明瞭に屈曲する。受部は直線的に外方へ開く。脚部外面には直線文が施されている。

1959～1961は埋土中から出土した須恵器である。

1959は坏蓋で、外面の体部と天井部の境はやや稜をなす。口縁端部は浅く凹線状に凹む面をなす。1960は坏身である。立ち上がりは高い。口縁端部を欠損する。1961は高坏ないし脚付壺の脚端部の破片と思われる。内湾し、爪先立ち状を呈する。

1962・1963は建物内で検出された土坑や埋土中から出土した土師器である。いずれも古墳時代後期～飛鳥時代のものと思われる。1962は甑の体部上半の破片である。直線的にのび、口縁端部は不明瞭な面をなす。内外面ともハケで調整されている。1963は甑で、SH478の東隅付近で検出された土坑から出土している。口縁部から体部上半にかけてが遺存する。頸部の屈曲は緩く、口縁部は外反しながら開く。口縁端部は丸く収められる。体部外面には粗いハケが施されている。

SH479 (第194図1964) 1964は埋土中から出土した、弥生土器・土師器である。台付甑の脚台部で、

直線的にハ字状に開く。外面には粗いハケが施されている。

SH480 (第194図1965～1968) 1965～1968は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1965～1967は台付甑の脚台部である。1965は体部下半も一部遺存する。やや小型のもので、脚台部は低い。1966はわずかに内湾しながらハ字状に開く。底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。1967は直線的にハ字状に開く。脚端部は丸く収められている。

1968は器台の口縁部の小片と思われる。口縁端部はわずかに垂下させている。口縁端部には擬凹線文のような痕跡が認められる。内外面ともハケの後にヨコミガキによって調整されているが、内面の口縁端部付近のみはミガキが及んでおらず、粗いハケが顕著に残る。本来は二重口縁壺の一次口縁ないしは有稜高坏の底部で、口縁端部付近は剥離面である可能性も考えられる。

SH482 (第194・195図1969～2027) 1969・1970は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

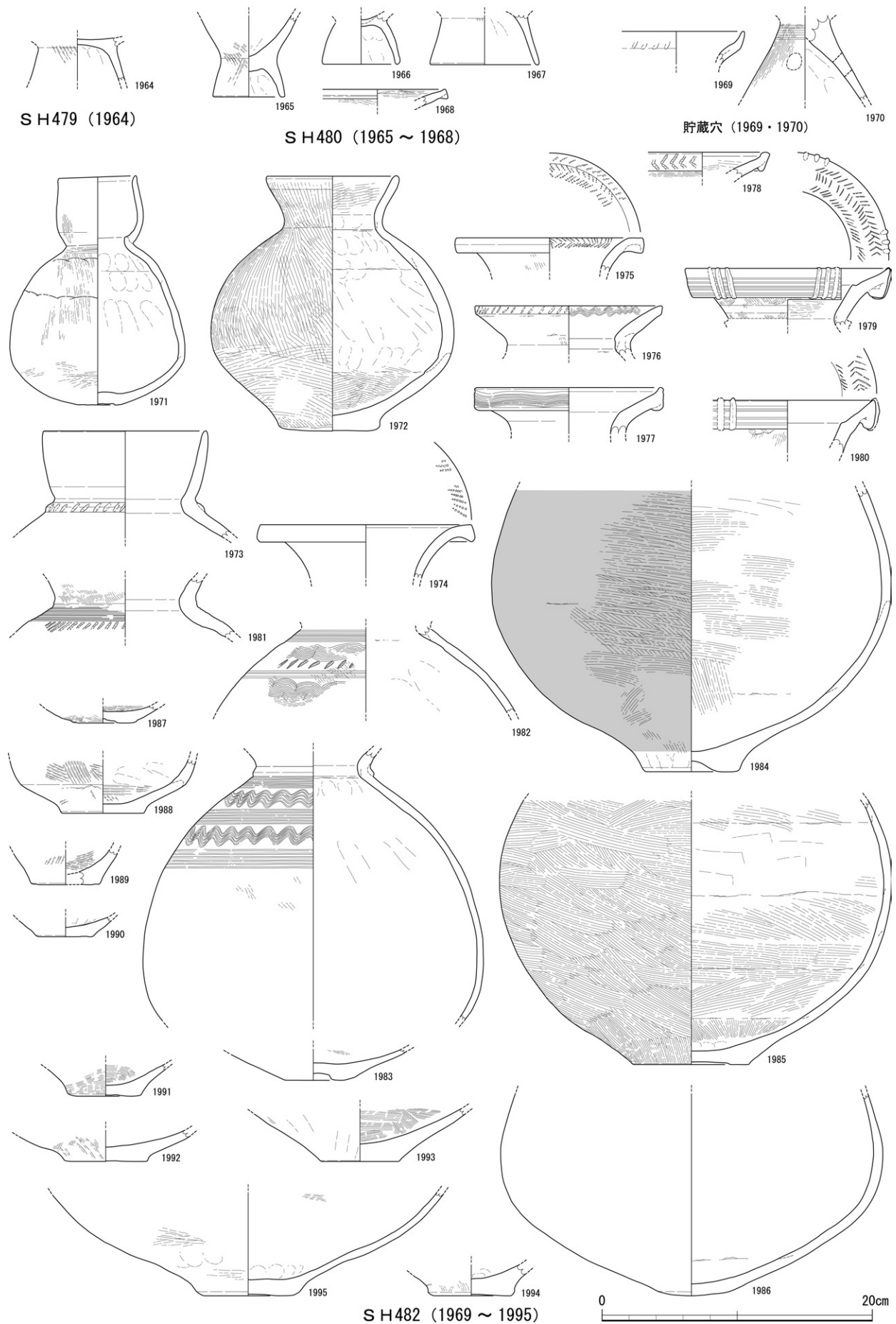
1969は受口状口縁甑の口縁部である。口縁部外面には列点文がわずかに遺存する。1970は高坏の脚部である。若干内湾しながらハ字状に開く。脚部外面上半の頸部付近には直線文が施されている。

1971～2026は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

1971～1995は壺である。

1971・1972は小・中型の壺である。いずれも全形が復元できた。1971は瓢形壺である。体部は下ぶくれの球形に近い器形で、底部外面は浅く凹む。頸部は強く締め、口縁部は内湾しながら直立する。口縁端部は内傾する面をなす。体部上半の外面には、へら状工具もしくは放射肋や刻みが発達しないハマグリ等の二枚貝の貝殻腹縁によると思われる連弧文が2段施されている。1972は体部がやや下ぶくれの器形を呈し、底部は平底である。口縁部は直線的に開き、口縁端部は丸く収める。外面は全体的にハケで調整されている。内面の下半には粘土接合痕が残り、それより下方はハケで調整されている。製作時の成形単位を示すものと思われる。

1973～1980は中・大型の壺の口縁部である。1973



第194図 SH479・480出土遺物、SH482出土遺物① (1/4)

は口縁部がわずかに内湾しながら直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。頸部外面には突帯が貼り付けられている。1974は外反しながら外方へ開く。口縁端部は垂下させ、内面には列点文が認められる。1975は口縁端部外面に粘土を貼り付けて肥厚させ、内面には櫛状工具による矢羽根状文が施されている。1976は直線的に開き、内面には波状文が施されている。1977は口縁端部を上下に拡張して広い面を作り出し、擬凹線文を施す。擬凹線文には歪みがみられ、やや粗雑である。1979はいわゆるパレススタイル壺と思われるが、赤彩は遺存していない。口縁部は中位で外方へ屈曲し、屈曲部の内面は低い突帯状に突出させている。口縁端部は粘土を貼り付けて拡張し、広い面を作り出し、擬凹線文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は3本一組で、6方向に配されていたと推測される。内面には矢羽根状文が施されている。1980は1979に似た個体で、同一個体の可能性がある。

1981～1986は頸部や体部である。1981は頸部付近の破片で、体部外面に直線文と列点文が施されている。1982は体部で、外面には直線文と波状文、列点文が施されている。1983は頸部から底部にかけてが遺存する。体部は若干下ぶくれの球形に近い器形を呈すると思われ、底部は輪台状を呈する。肩部外面には直線文と波状文が施されている。1984は体部上半から底部にかけてが遺存する。体部は球形に近い器形を呈すると思われ、体部外面は広く赤彩されている。1985も体部上半から底部にかけてが遺存している。底部外面は広く浅く凹む。体部は球形に近い器形を呈する。内外面ともハケで調整されており、内面には粘土接合痕が顕著に残る。1986は体部上半から底部にかけて遺存するが、器壁の遺存状況は悪く、調整などは不明である。体部は下ぶくれの球形に近い器形を呈すると思われる。

1987～1995は底部である。1989は内面を粗いハケで調整している。1991は内外面ともハケを施す。1993は外面に工具ナデが施されており、内面はハケで調整している。1995は体部下半まで一部遺存している。接合しないものの同一個体と思われる体部片が多数出土している。

1996～2005は甕である。

1996はく字状口縁甕の口縁部と思われる。口縁端部は面をなす。外面の調整は不明瞭であるが、タテミガキと思われる痕跡がわずかに認められ、もう少し口径の小さい壺の可能性も残る。

1997～1999は受口状口縁甕である。1997は口縁部で、頸部の屈曲が緩い。口縁部の屈曲は強く、口縁部上半はわずかに内傾する。外面には列点文が施されている。1998は口縁部で、体部上半も一部遺存する。口縁部は明瞭に屈曲し、口縁端部は面をなす。体部外面には粗いハケを施した後に、直線文と斜線文が施されている。1999は口縁部の小片で、強く屈曲し、口縁部上半は内傾する。口縁端部は面をなす。胎土は均一な細かい砂粒が目立つなどやや特徴的で、他地域からの搬入品の可能性もある。

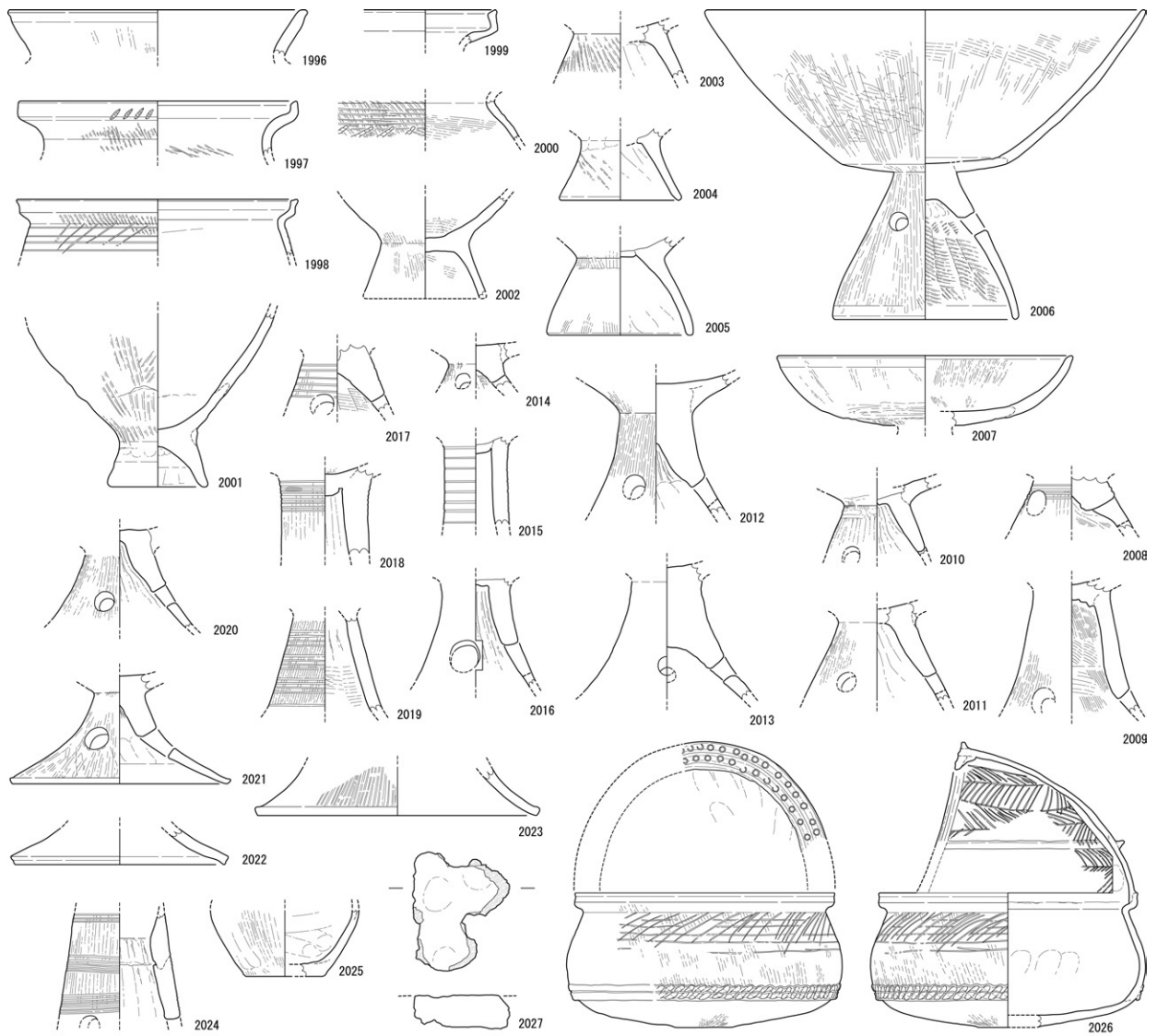
2000は甕の体部片である。外面には粗いタテハケとヨコハケ、そして列点文が施されている。

2001～2005は台付甕である。2001は体部下半から脚台部にかけてが遺存する。脚台部と体部の接合部外面には補強・整形のために粘土が貼り付けられている。体部外面は粗いハケで調整されている。また、体部内外面には粘土接合痕が明瞭に残り、製作時の成形単位を示す可能性が高い。2002も体部下半から脚台部にかけてが遺存するが、脚端部をわずかに欠損する。脚台部はハ字状に直線的に開く。2004は若干外反しながらハ字状に開く。脚台部と体部との接合部外面には連続的なオサエが認められる。2005は緩やかに内湾しながらハ字状に開く。筒状に成形された脚台部の上面を、脚頂部側から粘土を詰めて閉塞しているものと思われる。上面は剥離面となっており、底部内面に貼り付けた粘土が剥離した痕跡と考えられる。

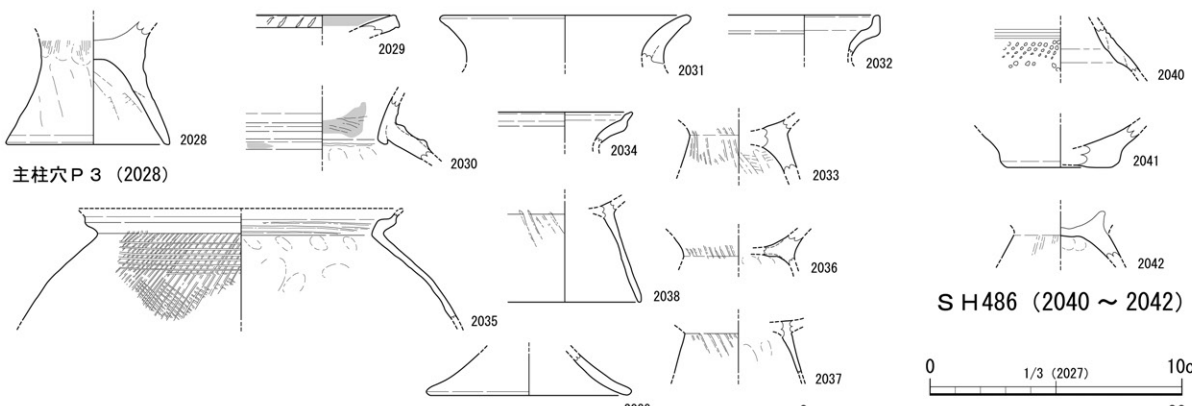
2006～2023は高坏である。

2006は有稜高坏である。全形が復元できた。脚部は緩やかに内湾しながらハ字状に開く。透孔は比較的高い位置に開けられている。坏部外面の稜はかなり明瞭で、口縁部は若干内湾しながら長くのびる。口縁端部は丸く収められる。坏部は内外面ともタテミガキが施されているが、やや粗雑で、それより前に施されたハケやオサエが顕著に残る。また、坏部は脚部上端縁部から成形されている。

2007は椀形高坏の坏部である。比較的浅く、皿状



SH482 (1996 ~ 2027)



主柱穴P3 (2028)

SH486 (2040 ~ 2042)

SH485 (2028 ~ 2039)

第195図 SH482出土遺物②、SH485・486出土遺物 (1/4、1/3)

に近い。口縁端部は不明瞭な内傾する面をなす。内外面ともタテミガキが施されているが、外面下半にはヨコミガキも施されている。また、外面の中位にはススが付着している。

2008～2023は脚部である。2012・2013のように外反しながらハ字状に開くものや、2016・2018のように柱状を呈するもの、2010・2017のように直線的にハ字状に開くもの、2009・2019のように下半で比較的強く外反するものなどがある。2008は頸部が太く、ハ字状に大きく開く。台付壺の脚台部の可能性も考えられる。2009は筒状の脚部の上面を円板充填状に閉塞し、その後内面全体をハケで調整している。2010・2012は脚部上端縁部から坏部を成形した後に、坏部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。2011も脚部上端縁部から坏部を成形している。2013は透孔が4方向に開けられていると思われる。2014は小型のもので、透孔はかなり高い位置に開けられている。2015は筒状の脚部の上面を円板充填状に閉塞している。ただし、図化した箇所以外では充填した粘土がさらに大きく脚部内面へ突出している。上面を閉塞後、脚部内面に横方向にヘラ状工具で工具ナデもしくはケズリ状の調整を施しており、その際に臍状に突出した粘土の半分程度を削り取っているようである。外面には間隔が広い直線文が施されている。2016は上面に剥離痕跡が認められる。坏部内面に貼り付けた粘土が剥離したものと思われる。2017は上面に孔状の凹みが認められる。棒状工具による刺突ではなく、脚部上面の深い凹みが一部遺存したものとみられる。2018は筒状の脚部の上面を円板充填状に閉塞している。2015と同様に、脚部内面にヘラ状工具による工具ナデを横方向に施している。脚部外面及び坏部内面に赤彩と思われる痕跡がわずかに認められる。2021は脚部の全形が復元できた。外反しながら大きく開く、低い脚部である。外面にはタテミガキが施されており、一部にミガキより前に施された工具ナデの痕跡が残る。2022・2023は脚端部が面をなす。

2024は器台の脚部と思われる。直線的に開くもので、内面には粘土接合痕が顕著に認められる。外面には直線文が施されている。高坏の脚部の可能性もある。

2025は鉢もしくは小型の壺である。平底で、外面はハケとナデで調整されている。

2026は手焙形土器である。ほぼ全形が復元できた。鉢部は扁平で下ぶくれの器形を呈する。口縁部は受口状を呈する。覆部は開口部の縁に粘土を貼り付けて広い面を作り出し、竹管文を2列施す。覆部外面には沈線による矢羽根状文が全面に描かれているほか、比較的高い突帯が1条横方向に貼り付けられている。鉢部外面にも直線文と斜線文が施され、中位には突帯が貼り付けられている。この突帯は1条の粘土紐を貼り付けたのちにその中央に沈線を入れて2条とし、その後、幅広の刻目を施している。

2027は埋土中から出土した土製品である。板状の破片で、1面のみが遺存しており、ナデによって比較的平滑に整えられている。また、わずかに凹むオサエとみられる痕跡が残る。胎土には土器と同様に砂粒が含まれているが、スサなどは認められない。ススの付着や、二次的な被熱も確認できない。用途や性格は不明であるが、図化した以外にも同様の土製品の小片が数点出土している。

S H 485 (第195図2028～2039) 2028は主柱穴P3から出土した弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、ハ字状に直線的に開く。外面はナデによって調整されており、脚台部と体部の接合部外面にはオサエが明瞭に残る。底部内面に貼り付けた粘土が剥離した痕跡が残り、剥離面には螺旋状のナデが認められる。

2029～2039は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

2029・2030は壺である。2029は口縁端部の小片で、内面には赤彩が認められる。2030は頸部付近の破片で、頸部外面には2条の突帯が貼り付けられている。口縁部内面には赤彩が施されており、外面の突帯付近にも赤彩と思われる痕跡が残る。

2031～2038は甕である。

2031はく字状口縁甕の口縁部である。強く外反しながら外方へ開く。口縁端部は丸く収められる。

2032は受口状口縁甕の口縁部である。小片で、口縁部の屈曲は強く、口縁端部は不明瞭な面をなす。

2033は台付甕の脚台部である。外面は粗いハケで調整されている。

2034～2038はS字状口縁甕である。2034は口縁部の小片で、口縁部上半はやや矮小で、口縁端部は強く外方へ引き出される。遺存状況が悪く、押し列点文の有無は判然としない。2035は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部の屈曲は強いと思われるが、口縁部上半は欠損する。体部外面には羽状のタテハケとヨコハケが施されている。頸部内面には粗いハケが施されている。2036～2038は脚台部である。2036は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。2038は直線的にハ字状に開く。脚端部に内側への折り返しは認められない。

2039は高坏の脚部と思われる。小型のもので、わずかに外反しながらハ字状に開く。

S H 486 (第195図2040～2042) 2040～2042は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

2040は壺の体部である。外面に直線文と櫛状工具による列点文が施されている。列点文の下端には、角度の異なる別の列点文がわずかに遺存しているようにも見受けられ、本来は矢羽根状文であった可能性がある。S H 467出土の1827と類似する。2041は壺の底部である。2042は台付甕の脚台部である。脚台部上面の周縁部は突帯状につまみ出されている。上面は全体的に剥離面となっており、体部や底部内面に貼り付けた粘土が剥離した痕跡と思われるが、脚台部の上面周縁部にこうした突帯状の隆起を作り出すことで、脚台部と体部との接合を強固にしようとする意図があったものと推測される。

S H 488 (第196・197図2043～2156) 2043～2045は支柱穴P 2から出土した弥生土器・土師器である。

2043は大型の壺で、体部下半から底部にかけてが遺存している。体部は胴が張る扁平な球形を呈すると思われる。外面はケズリによって調整した後に、幅広のヨコミガキが施されている。内面はハケによって調整されているが、体部中位の粘土接合痕より上方にはナデやオサエが顕著に残る。2044は高坏の脚部である。やや小型のもので、外反しながら開く。2045は器台の脚部である。脚部下半で強く外反し、脚端部は面をなす。透孔と直線文がわずかに遺存している。

2046～2050は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師

器である。

2046は壺の口縁部と思われる。外反しながら大きく開き、口縁端部付近で強く屈曲して受口状を呈する。口縁端部は面をなす。受口状口縁甕の可能性もある。胎土は細かく均一な大きさの砂粒が含まれているなど特徴的で、搬入品の可能性もある。2047は壺の口縁部で、外反しながら開き、口縁端部付近で強く屈曲して受口状を呈する。外面には列点文が施されており、内面には扇状文とも思われるものが一部遺存している。

2048・2049は高坏の脚部である。2048は小型の高坏の脚部と思われるが、小型の台付甕や台付壺の底部の可能性もある。2049は筒状の脚部の上面に粘土を貼り付けて閉塞し、さらに坏部内面に粘土を貼り付けていると思われる。ただし、上面を閉塞した粘土は薄く脚部内面まで及んでおらず、そのため脚部内面頂部に孔状の空隙が生じている。外面には間隔の広い直線文が施されており、その間の1箇所列点文が施されている。列点文は爪状のものによって施されているが、細くシャープに刻まれており、放射肋や刻みが発達しない小型の二枚貝の貝殻腹縁が用いられた可能性がある。透孔は5方向に開けられている。

2050は器台の脚部と思われる。外面はミガキで調整され、直線文が施されている。

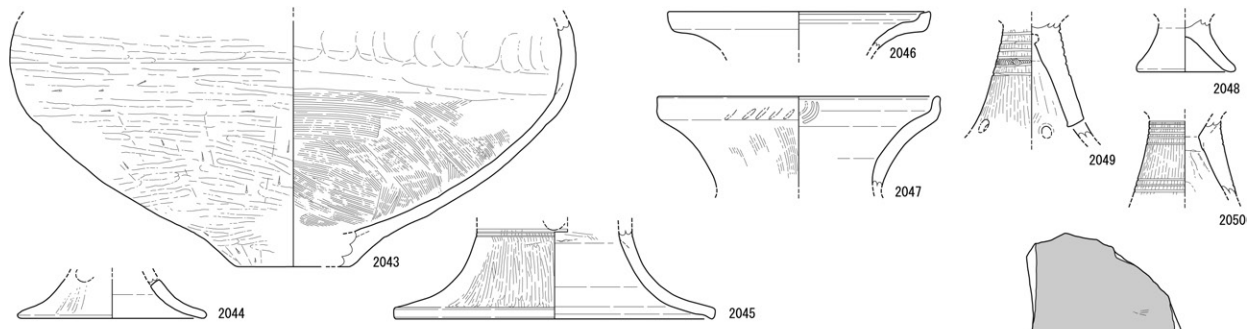
2051は貯蔵穴から出土した石製品で、台石である。砂岩の小片で、全体の形状は不明である。上面と下面に摩滅が認められ、擦痕や敲打痕と思われる痕跡もごくわずかに遺存する。

2052～2156は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

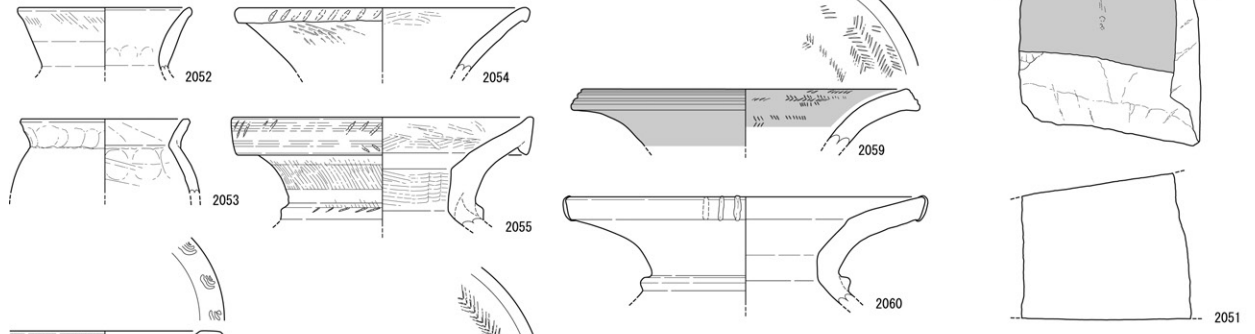
2052～2085は壺である。

2052・2053は小型の壺である。2052は口縁部で、若干外反しながら開く。頸部付近の内面にはオサエが認められる。2053は口縁部から体部上半にかけての破片である。体部は球形に近い器形を呈すると思われる。頸部は強く屈曲し、口縁部は短く直線的に開く。口縁部外面には連続的な強いオサエが施されており、粗雑な印象を受ける。器形などからみて鉢とする方が妥当かもしれない。

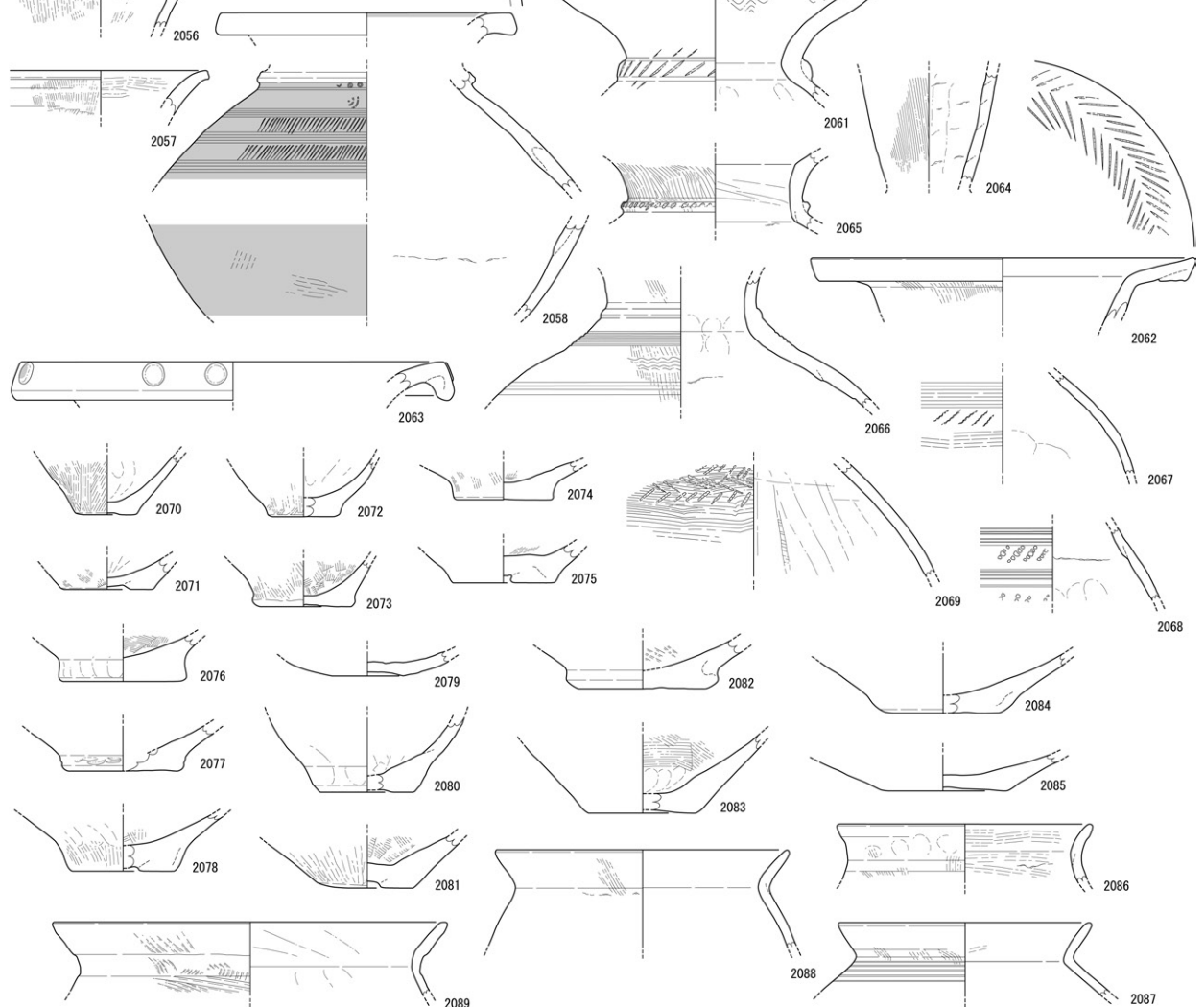
2054～2063は中・大型の壺の口縁部等である。



主柱穴 P 2 (2043 ~ 2045)



貯蔵穴 (2046 ~ 2051)



SH488 (2043 ~ 2089)



第196図 SH488出土遺物① (1/4)

2055は頸部から直立し、中位で屈曲して直線的に外方へ開く。屈曲部は外面では不明瞭であるが、内面は明瞭な稜をなす。口縁端部は垂下させて広い面を作り出し、擬凹線文と矢羽根状文を施している。頸部外面には突帯が貼り付けられている。2056は口縁端部付近で屈曲して水平に開き、上面に粗雑な扇状文を施す。SH314出土の837に似る。2058は口縁部と体部の破片である。ほかにも接合しない口縁部や体部の破片が多数出土している。体部は中位が張る紡錘形に近い器形を呈するものと推測されるが、体部下半の復元には不安を残すため、球形に近い器形を呈する可能性もある。口縁部内面にはヘラ状工具による矢羽根状文が施されており、体部上半外面にも直線文とヘラ状工具による列点文が施されている。頸部外面には突帯が貼り付けられており、そのすぐ下方には小さな竹管文が施されている。扇状文とみられるものも、ごくわずかに遺存する。体部外面と口縁部内面には赤彩が認められる。胎土は精良で白っぽい色調を呈し、灰色のチャートと思われる砂粒が目立つなど特徴的で、尾張地域などからの搬入品の可能性が高い。2059は外反しながら大きく開き、口縁端部は面をなす。口縁端部には擬凹線文が施され、口縁部内面には矢羽根状文が施されている。内外面とも赤彩されている。2060は大きく外反しながら開く。中位で若干屈曲しており、屈曲部内面はごくわずかに突出する稜をなす。口縁端部には棒状浮文が貼り付けられている。棒状浮文は3本一組と思われる、おそらく4方向に配されていたと推測される。2061は頸部が強く屈曲し、口縁部はわずかに外反しながら直線的に開く。内面には波状文が施されている。頸部外面には突帯が貼り付けられており、刻目が施されているが、工具のアタリが口縁部や体部の外面に残されている。2062は中位で大きく屈曲し、水平気味に大きく開く。口縁端部は外面に粘土を貼り付けて肥厚させている。内面には矢羽根状文が施されている。2063は口縁端部の破片で、下方へ大きく垂下させ、円形浮文を貼り付けている。円形浮文には赤彩がわずかに残る。

2064～2066は頸部付近の破片である。2064は長頸壺と思われる。若干内湾しながら直線的にのび、外面はハケによって調整されている。内面は縦方向の

ストロークの長いナデによって調整されているが、粘土接合痕が顕著に残る。高坏の脚部とも考えられるが、内外面の調整や、透孔が全く遺存していない点などから、長頸壺として図化した。2066は頸部から体部上半にかけてが遺存する。頸部外面には低い突帯が貼り付けられている。体部外面には直線文と波状文が施されている。

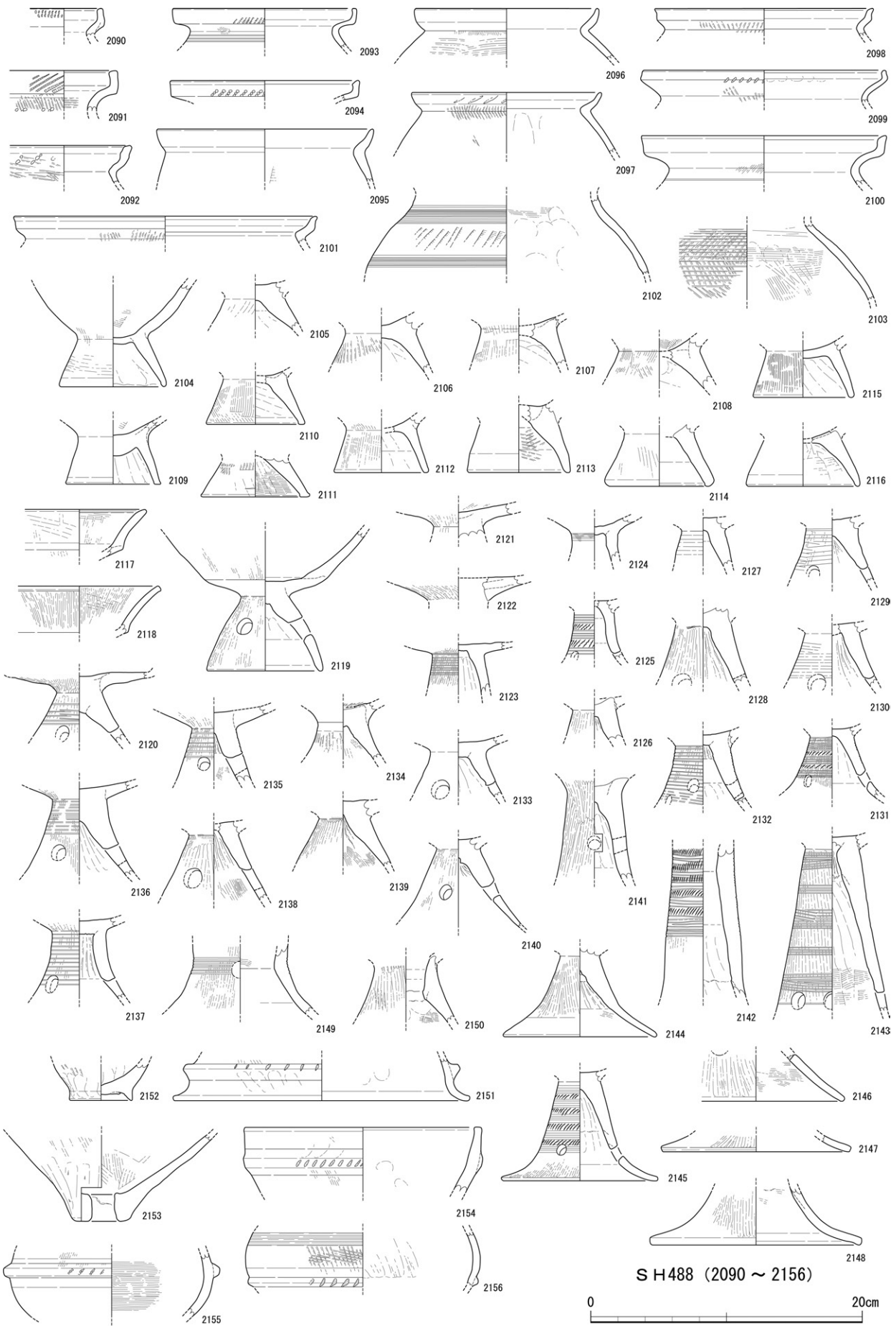
2067～2069は体部である。2067は外面に直線文と列点文が施されている。列点文は細い半裁竹管状のものを列状に束ねた工具で施文されたと思われる。2068も外面に直線文と列点文が施されている。2069は外面に直線文と矢羽根状文が施されているが、やや粗雑である。

2070～2085は底部である。2070は底部外面中央がわずかに凹む。2071は輪台状を呈する。2072は体部が内湾する。外面にはススが付着している。鉢の可能性も考えられる。2075は輪台状を呈しており、粘土接合痕が比較的明瞭に観察できる。2076はややボタン状に突出し、外面には連続的なオサエが認められる。2077は外面に爪痕と思われるものが複数残されている。2079は体部が球形に近い器形を呈すると思われる。底部外面は浅く凹レンズ状に凹む。瓢形壺の底部の可能性もある。2080は外面をオサエやナデで調整し内面には工具ナデが施されている。2081は輪台状を呈し、外面をミガキで丁寧に調整している。2082は若干ボタン状に突出する。2084・2085は遺存状況が悪く、調整などは不明である。

2086～2116は甕である。

2086～2089はく字状口縁甕である。2086は口縁部である。頸部の屈曲はかなり緩やかで、口縁部は外反する。口縁端部はわずかに肥厚し、丸く収められる。外面にはオサエが明瞭に残る。2087は口縁部から体部上半にかけての破片である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開き、口縁端部は丸く収められる。肩部外面には直線文ないしヨコハケが施されている。2089は口縁部で、口縁部上半がやや肥厚し、外面にヨコナデが施される。口縁端部は不明瞭な面をなす。受口状口縁甕に近い。外面には粗いハケが施されている。

2090～2101は受口状口縁甕の口縁部である。2090は小片で、外面に列点文が施されている。列点文は、



第197図 SH488出土遺物② (1/4)

細い半裁竹管状のものを2本重ねた工具で施されたと思われる。2091は口縁部の屈曲が明瞭で、屈曲部の外面はシャープな稜をなす。外面には列点文が施されている。肩部外面にも列点文が施されていたと思われ、頸部付近にわずかに遺存している。2093は器壁が薄い。外面には櫛状工具による列点文が施されている。胎土に含まれている砂粒がやや特徴的で、近江地域などからの搬入品の可能性がある。2094も胎土に黒色や灰色のチャートと思われる細かく均一な大きさの砂粒を含むなどの特徴があり、やはり近江地域などからの搬入品の可能性が考えられる。2095・2096は体部上半も一部遺存する。口縁部の屈曲が弱く、全体的に内湾する。口縁端部は丸く収められる。2096の体部外面には非常に粗いヨコハケが施されており、タタキのようにも見受けられる。2097は頸部が強く屈曲するが、口縁部の屈曲は比較的緩い。外面には列点文が施されている。2099は器壁が薄い。口縁部が比較的長くのび、口縁端部付近で強く屈曲し、内湾しながら短く立ち上がる。屈曲部内面には連続的なオサエが認められる。2100は口縁部の器壁が厚い。口縁端部は内傾する面をなす。わずかに遺存する体部外面には、直線文と思われるものが一部に認められる。2101は口縁端部が若干外方へ引き出されている。器形からはS字状口縁甕とも考えられる。

2102・2103は体部である。2102は外面に直線文と列点文が施されている。受口状口縁甕の体部と思われる。2103は外面に羽状のタテハケとヨコハケが施されている。S字状口縁甕の体部とみられるが、やや器壁が厚く、胎土の特徴などからみても、在地産のS字状口縁甕の可能性が高い。

2104～2116は台付甕の脚台部である。2104は体部下半も遺存する。脚台部はハ字状に直線的に開き、外面にはハケが施されている。筒状の脚台部の上面を脚頂部側から粘土を貼り付けて閉塞した痕跡が認められる。2107は直立気味である。底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。2109はやや直立気味で、脚端部は面をなす。底部の器壁は厚い。脚台部の上端縁部から体部を成形し、その後底部内面に粘土を貼り付けている。2110は底部内面に粗い砂粒を含まない粘土を貼り付けている。2111は低い脚

台部で、直線的に大きくハ字状に開く。内面にはハケが施されている。2113は器壁が厚い。脚台部の上面を円板充填状に閉塞した後に、脚頂部をナデやハケで調整している。2114は直線的にハ字状に開く。器壁は厚い。2115は外面を粗いタテハケで調整している。2116はわずかに内湾しながらハ字状に開く。脚台部の上端縁部から体部を成形し、その後底部内面に粘土を貼り付けている。

2117～2148は高坏である。

2117～2120は有稜高坏である。2117は坏部の小片である。坏部外面の稜は明瞭で、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部付近の内面には、擬凹線文と思われるものも認められる。2118も坏部で、坏部外面の稜はシャープである。口縁部は緩やかに外反しながら開き、口縁端部は面をなす。2119は坏部から脚部にかけてが遺存する。坏部はやや深く、外面の稜は比較的明瞭である。脚部は低く、緩やかに内湾する。全体的に器壁が厚い。坏部に二次的な被熱が認められる。2120も坏部から脚部にかけての破片である。脚部はハ字状に直線的に開く。脚部上端縁部から坏部を成形している。また、筒状に成形した脚部の上面の孔を粘土を詰めて閉塞している。

2121・2122は坏部である。2121は坏部内面中央に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。2122は脚部が剥離した痕跡が認められる。脚部上端縁部から坏部を成形したものであると思われる。

2123～2148は脚部である。2133・2138のように直線的にハ字状に開くもの、2131・2132・2136・2137のように緩やかに外反しながらハ字状に開くもの、2125・2145のように下半で強く外反して大きく開くもの、2141・2142のように長く柱状を呈するものなど、多様な形態がある。2124は筒状の脚部の上面を円板充填状に閉塞する。外面には直線文と赤彩が認められる。2125は外面に直線文と二枚貝の貝殻腹縁による列点文が施されている。2126は脚部上端縁部から坏部を成形している。上面には凹レンズ状の凹みがあり、それを埋めるように貼り付けられた粘土が剥離した痕跡が認められる。2129・2130は外面に直線文が施されている。2131は外面に直線文と二枚貝の貝殻腹縁による列点文が施されている。2132は2段に透孔が開けられている。ただし、遺存してい

る部分からみる限り、上段の透孔は1箇所のみを開けられている可能性が高い。下段の透孔は3方向に開けられていたと推測される。2133は筒状に成形した脚部の上面の孔に粘土を詰めて閉塞した痕跡が残る。2135・2136は脚部上端縁部から坏部を成形している。外面には直線文が施されている。2138は外面に幅広のタテミガキを施しているが、頸部付近ではその前に施されたハケが顕著に残る。2140は脚部内面頂部に軸芯痕が認められる。2141は透孔が2方向に開けられていた可能性がある。透孔は比較的高い位置に開けられている。2142は外面に直線文と二枚貝の貝殻腹縁による列点文が施されている。2143は高い脚部である。脚部上面を円板充填状に閉塞した痕跡が認められる。透孔の配置は変則的で、2孔一組で3方向に開けられていた可能性もあるが、確実ではない。2144は脚部のほぼ全形が復元できた。やや低いもので、中位で若干屈曲して開く。外面はハケで調整されている。2145も脚部のほぼ全形が復元できた。外面には直線文と二枚貝の貝殻腹縁による列点文が施されている。透孔は若干小さい。2148は下半で大きく外反する。脚端部は面をなす。

2149～2151は器台である。

2149は脚部で、外反しながら開く。外面には直線文が施されている。2150は上面の閉塞が剥離した高坏の脚部の可能性もある。2151は特異なもので、脚裾部が大きく外反し、外面にはしっかりした突帯を貼り付けている。突帯には刻目が施されている。外面には連続的なナデが施されており、突帯の上方にはハケも認められる。装飾器台の脚部とも思われるが、天地逆で鉢あるいは手焙形土器の鉢部や覆部となる可能性もある。

2152は鉢である。底部の周縁部は高台状に突出している。外面には連続的なオサエが施されている。

2153は有孔鉢である。外面の底部付近はケズリによって調整されている。

2154～2156は手焙形土器である。2154は手焙形土器の鉢部と思われるもので、無頸の鉢状を呈する。口縁端部は面をなし、外面の口縁部付近には低い突帯が貼り付けられている。2155は鉢部である。扁平な球形の器形を呈するものと思われ、外面には突帯が貼り付けられている。突帯には櫛状工具によって

刻目が施されている。2156も鉢部である。扁平な球形を呈すると思われる。外面には突帯が貼り付けられており、肩部外面には直線文状のヨコハケが施されている。胎土は黒雲母が多く含まれているなどやや特徴的で、他地域からの搬入品の可能性もある。

S H 490 (第198図2157) 2157は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。有稜高坏の坏部で、外面の稜は比較的明瞭である。口縁部は短く、直線的にのびる。口縁端部は面をなす。

S H 491 (第198図2158～2185) 2158～2160は貯蔵穴から出土した弥生土器・土師器である。

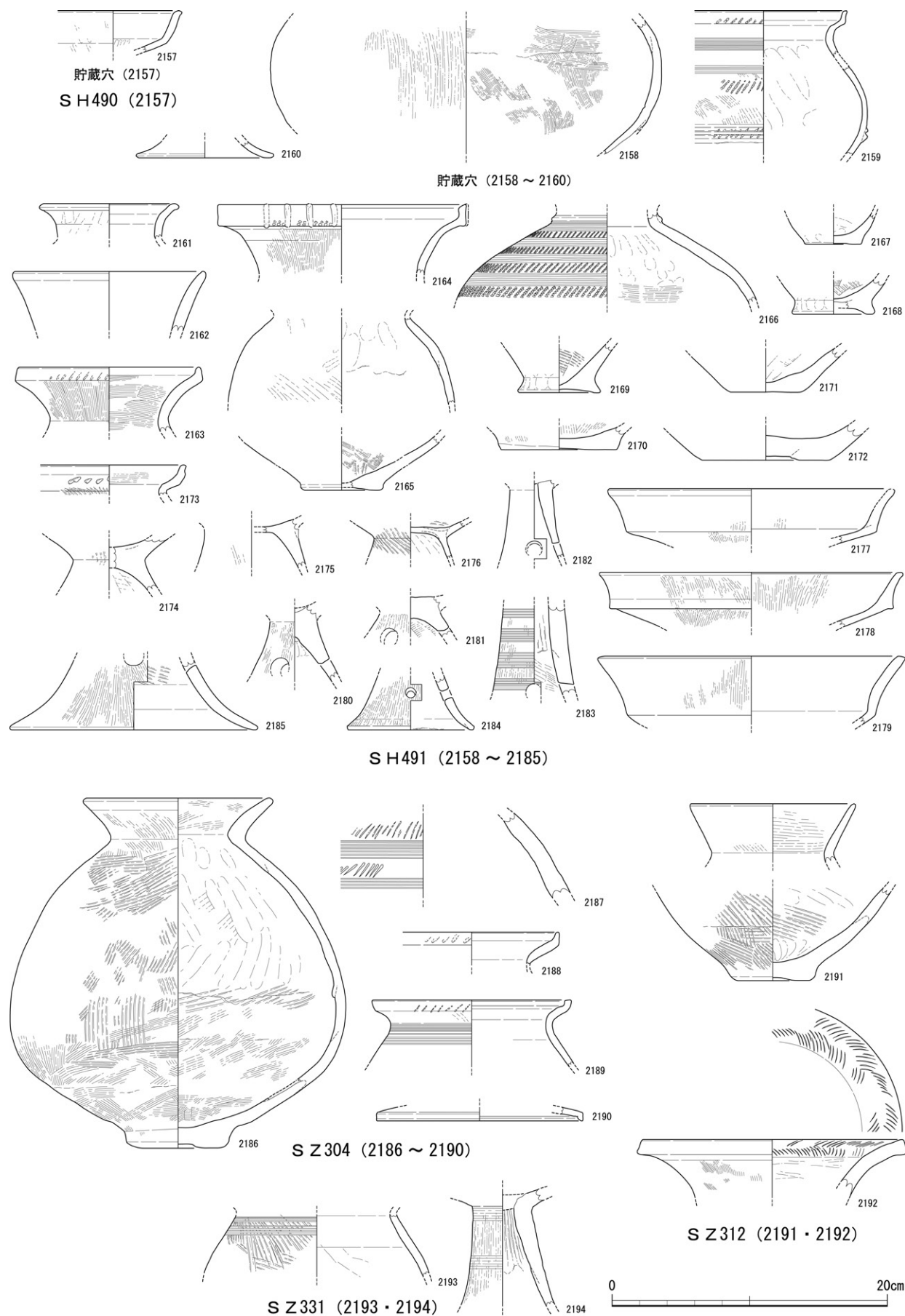
2158は壺の体部である。扁平な球形の器形を呈すると思われるが、器形の復元には不安を残す。2159は受口状口縁甕である。同一個体と思われる口縁部や体部の数片からなる。体部はやや胴が張り、頸部の屈曲は緩い。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁端部は面をなす。全体的に器壁は薄い。体部外面には突帯が貼り付けられているが、この突帯は1条の粘土紐を貼り付けた後にその中央に沈線を入れて2条とし、その後、両方の突帯にまたがるように刻目を施している。また、体部外面には直線文と櫛状工具による列点文が施されている。こうした器形や文様に加えて、胎土は細かく均一な大きさのチャート等とみられる砂粒が含まれているなど特徴的で、近江地域からの搬入品の可能性が高い。2160は小型の高坏の脚部と思われる。

2161～2185は埋土中などから出土した、弥生土器・土師器である。

2161～2172は壺である。

2161～2164は口縁部である。2161は小型のもので、全体的に外反し、口縁端部は面をなす。外面にはナデの痕跡が残り、粗雑な印象を受ける。2163は外反しながら開き、口縁端部付近で屈曲し、受口状を呈する。口縁端部には列点文が施されている。2164は緩やかに外反しながら開き、口縁端部付近で強く屈曲して受口状を呈する。屈曲部外面はやや突出し、口縁端部は内傾する面をなす。口縁部外面には櫛状工具による列点文を施すとともに、棒状浮文が貼り付けられている。こうした特徴や胎土からみて、他地域からの搬入品の可能性が考えられる。

2165・2166は体部等である。2165は同一個体の可



第198図 SH490・491、S Z304・312・331出土遺物 (1/4)

能性がある体部上半と底部付近の破片からなる。ただし、若干色調に差異がみられ、別個体とも考えられる。2166は頸部から体部上半にかけてが遺存する。頸部外面には突帯が貼り付けられている。体部外面には多段の直線文と列点文が施されている。

2167～2172は底部である。2167は小型のもので、鉢の可能性もある。2168・2169は底部の周縁部が高台状に突出する。外面には連続的なオサエが残る。2172は大型のもので、輪台状を呈する。

2173～2176は甕である。

2173は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は緩く、全体的に内湾する。口縁端部は面をなす。外面には棒状工具で刺突したような粗い列点文が施されている。2174・2175は台付甕の脚台部である。2174は八字状に大きく開く。底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。2176はS字状口縁甕の脚台部である。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。また、体部は脚台部の上端縁部から成形されている。

2177～2185は高坏である。

2177～2179は有稜高坏の坏部である。2177は坏部外面の稜がシャープで、内面の屈曲も明瞭である。口縁部は緩やかに外反する。2178は浅い坏部である。坏部外面の稜が垂下するようにわずかに突出する。口縁部は短く開き、口縁端部は面をなす。2179は口縁部がやや長くのび、外反しながら開く。

2180～2185は脚部である。2180は上面が凹レンズ状に凹み、それを埋めるように貼り付けられた粘土が剥離した痕跡が認められる。2181は頸部が若干太く、八字状に大きく開くと思われる。2182はやや細身である。2183は外面に直線文が施されている。2184は小型のもので、脚裾部で緩やかに外反する。透孔は若干小さく、4方向に開けられていると思われる。台付壺の脚台部とも考えられる。2185は外反しながら開き、口縁端部は丸く収められる。内面には一部に粗いハケが認められる。

(2) 段状遺構出土遺物

S Z 304 (第198図2186～2190) 2186～2189は弥生土器・土師器である。

2186・2187は壺である。2186は全形が復元できた。

底部は外面中央が凹む。体部は下ぶくれの球形に近い器形を呈し、頸部は明瞭に屈曲する。口縁部はわずかに外反しながら外方へ開き、口縁端部は丸く収められる。外面には粗いハケと、やや細かいハケが施されている。内面には粘土接合痕が明瞭に残り、その箇所では調整にも変化が認められ、製作時の成形単位を示すものと思われる。2187は大型の壺の体部片である。器壁は厚く、外面には直線文とヘラ状工具による列点文が施されている。

2188・2189は受口状口縁甕である。2188は口縁部の小片で、外面には列点文が認められる。2189は口縁部から体部上半にかけての破片である。頸部の屈曲は緩く、口縁部は口縁端部付近で比較的強く屈曲し、上方へ立ち上がる。口縁端部は面をなす。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施されており、体部外面には直線文が施されている。胎土には黒雲母が多く含まれているなどの特徴があり、他地域からの搬入品の可能性もある。

2190は須恵器の坏蓋である。口縁部の小片で、口縁端部は短く屈曲する。

S Z 312 (第198図2191・2192) 2191・2192は弥生土器・土師器である。

2191は壺で、同一個体と思われる口縁部と体部下半の破片からなる。底部外面中央は浅く凹む。体部外面は粗いハケで調整されているが、粘土接合痕が明瞭に残る。粘土接合痕を境に調整の方向などに変化が認められ、製作時の成形単位を示していると思われる。口縁部は直立気味に直線的にのび、口縁端部は丸く収められる。2192は壺の口縁部である。緩やかに外反しながら開き、口縁端部は面をなす。内面には矢羽根状文が施されている。矢羽根状文は二枚貝の貝殻腹縁によって施文されている可能性が高い。なお、破片の一部は、居林1号墳墳丘の断ち割り内から出土している。

S Z 331 (第198図2193・2194) 2193・2194は弥生土器・土師器である。

2193は甕の体部である。外面には粗いタテハケと直線文状のヨコハケが施されている。2194は高坏の脚部である。上半はやや柱状を呈し、下半は緩やかに外反すると思われる。筒状に成形した脚部の上面を閉塞した粘土が剥離した痕跡が残る。外面には直

線文が施されている。

(3) 掘立柱建物・柱列出土遺物

S B 409 (第199図2195~2202) 2195~2197はP 2から出土した弥生土器・土師器である。

2195は台付甕の脚台部である。わずかに内湾しながらハ字状に開く。脚端部は不明瞭な面をなす。脚台部の上面は円板充填状に閉塞されているものと思われる。底部内面には輪状にコゲが付着している。2196・2197は鉢である。2196は小型のもので、平底の底部から体部が直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収められているとみられるが、風化により不明確である。内外面ともオサエやナデで調整されており、一部に二次的な被熱が認められる。2197は底部が輪台状を呈する。小型の壺の可能性もある。

2198はP 7から出土した弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、緩やかに外反する。

2199・2200はP 9から出土した弥生土器・土師器である。

2199はく字状口縁甕の口縁部である。頸部の屈曲は緩く、口縁部は直線的に短く開く。外面には粗いハケが施されている。2200は高坏の脚部である。若干内湾し、脚端部は面をなす。内面はハケで調整されている。

2201はP 10から出土した弥生土器・土師器である。小型の壺ないし鉢の底部と思われる。

2202はP 11から出土した弥生土器・土師器である。

鉢で、完形に近い。底部外面は浅く凹んでおり、線刻状の鋭い工具痕が数条残されている。体部は上半が内湾し、口縁端部は丸く収められる。内面は螺旋状のナデで調整されている。

S B 420 (第199図2203~2205) 2203はP 1から出土した弥生土器・土師器である。く字状口縁甕の口縁部で、わずかに外反しながら直線的に開く。口縁端部は面をなす。器壁は厚い。

2204・2205はP 4から出土した弥生土器・土師器である。

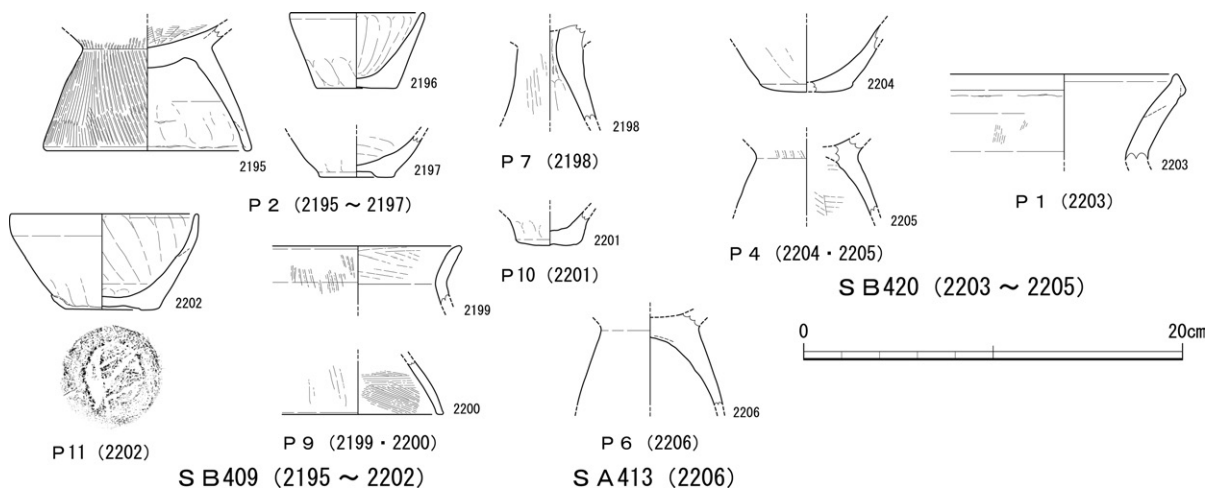
2204は壺の底部である。底部外面は若干丸みを帯びる。2205は台付甕の脚台部である。やや内湾しながらハ字状に開く。内面にはハケが認められる。

S A 413 (第199図2206) 2206はP 6から出土した弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、わずかに内湾しながらハ字状に開く。脚頂部には粘土を貼り付けた痕跡が認められる。

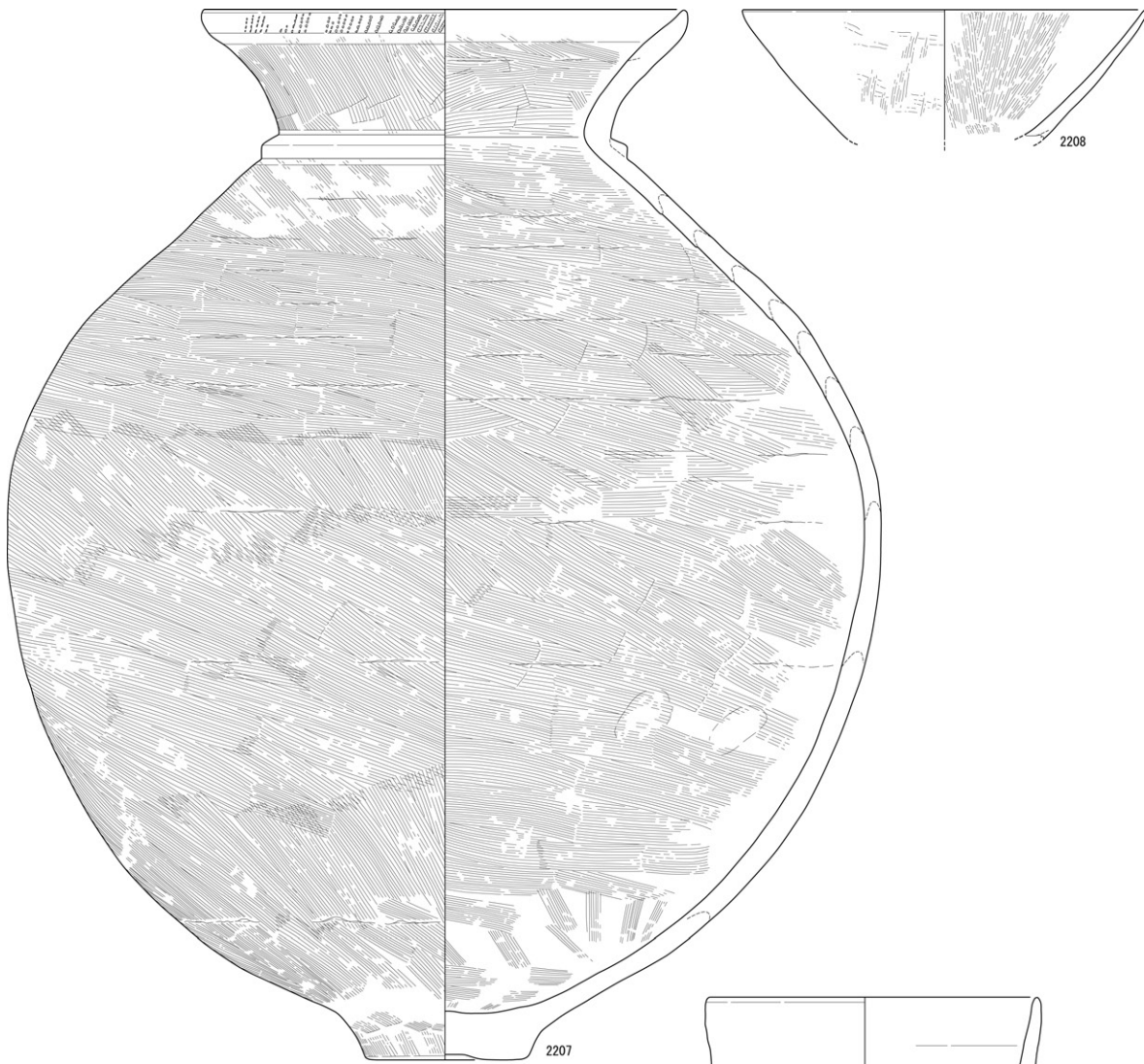
(4) 土器埋設土坑出土遺物

S X 325 (第200図2207・2208) 2207・2208は弥生土器・土師器である。

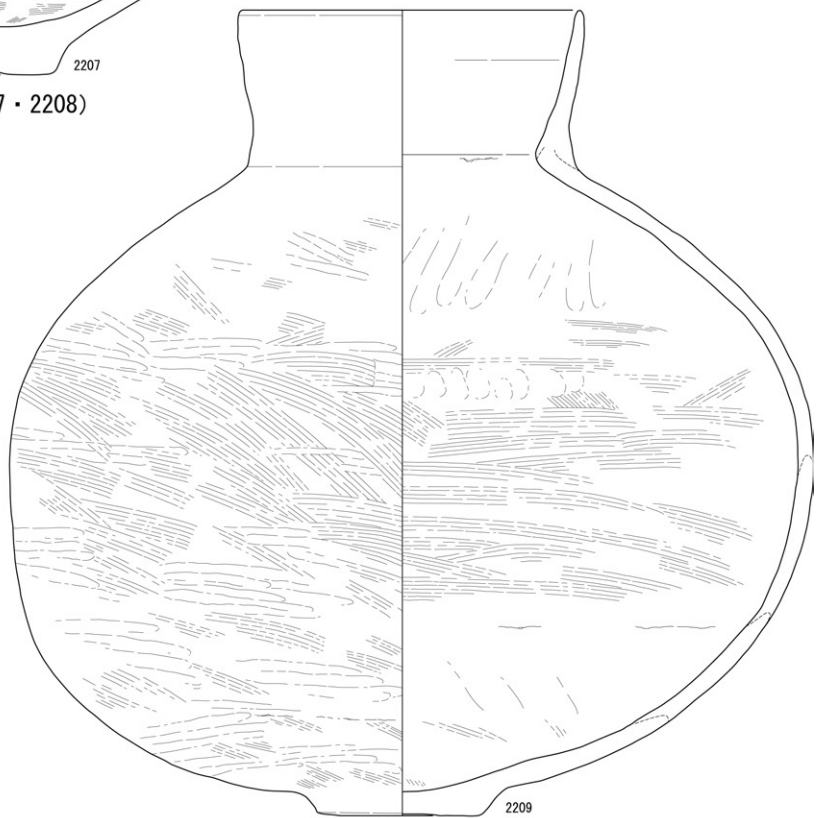
2207は非常に大型の壺である。ほぼ完形に復元できた。底部は平底で、外面中央が凹んでいる。体部はやや縦長の球形を呈する。頸部は縮まり、明瞭に屈曲する。口縁部は緩やかに外反しながら外方へ開く。口縁端部は不明瞭な面をなし、列点文が施されている。口縁部内面は若干赤色を呈しており、スリッ



第199図 S B 409・420、S A 413出土遺物 (1/4)



S X 325 (2207 · 2208)



S X 361 (2209)

0 20cm

第200図 S X 325 · 361出土遺物 (1/4)

ブが施されている可能性もある。頸部外面には突帯が貼り付けられている。体部は無文で、内外面ともハケで調整されている。調整は比較的粗雑で、内外面とも粘土接合痕が各所に明瞭に残る。2208は有稜高坏の坏部である。口縁部はわずかに内湾しながら長くのび、口縁端部は丸く収められる。坏部の屈曲部で底部と口縁部が剥離した痕跡が認められる。外面にはヨコミガキを施した後にタテミガキを施している。現状では2207の口を塞ぐほどの大きさの破片ではないが、埋土の流出等によって一部しか遺存しなかった可能性もある。胎土には角の取れた灰色の砂粒が含まれており、やや特徴的である。他地域からの搬入品とも思われる。

S X361 (第200図2209) 2209は弥生土器・土師器である。非常に大型の壺で、ほぼ完形に復元できた。底部は平底である。体部は扁平な球形で、若干器形に歪みが認められる。頸部は縮まり、口縁部は全体的に内湾しながら直立する。口縁端部は丸く収められる。体部内外面はハケによって調整されており、外面にはハケの後にかなり幅広のヨコミガキが施されている。ただし、ヨコミガキは疎らでハケが顕著に残り、粗雑な印象を受ける。

(5) 土坑出土遺物

S K225 (第201図2210~2221) 2210~2221は弥生土器・土師器である。

2210~2212は壺である。

2210は口縁部である。口縁端部を上下に大きく拡張して広い面を作り出し、擬凹線文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は4本一組で貼り付けられている。また、口縁端部には赤彩が認められるが、棒状浮文を貼り付けた後に施されており、4本の浮文のうち両端のもの側面まで赤彩が及んでいる一方で、浮文間には赤彩が及んでいない。

2211・2212は壺の底部である。2211は輪台状を呈する。2212は外面にオサエが残る。

2213~2216は甕である。

2213~2215は台付甕の脚台部である。2213は直線的にハ字状に開く。器壁は厚い。脚台部上面を粘土を詰めて閉塞した痕跡が残る。2214はハ字状に大きく開く。2215はやや小型のものである。直線的にハ

字状に開き、外面には粗いハケが施されている。

2216はS字状口縁甕の口縁部である。頸部は強く屈曲し、口縁部も比較的強く屈曲する。口縁端部は強く外方へ引き出され、内傾する面をなす。

2217~2221は高坏である。

2217は有稜高坏の坏部である。若干浅く、坏部外面の稜は不明瞭である。口縁部は緩やかに内湾しながら長くのび、口縁端部は丸く収められる。底部中央には脚部上面を円板充填状に閉塞したような痕跡が認められるが、下面は剥離面となっており、脚部上面の凹レンズ状の凹みを埋めるように坏部内面に貼り付けられた粘土が遺存しているものと思われる。

2218は椀形高坏と思われる。坏部から脚部にかけてが遺存している。脚部はハ字状に大きく開く。外面はハケで調整されている。器形や調整からみて、台付壺の可能性もある。また、脚部内面が二次的に被熱している。

2219~2221は脚部である。2219は小型のもので、明瞭に内湾する。透孔は開けられていなかったと推測される。内面には脚部成形に伴う粘土接合痕が残る。2221は下半部が緩やかに内湾する。透孔は3方向に開けられているが、それ以外に小さな孔が脚部に1箇所開けられている。細い棒状のもので焼成前に穿孔されている。

S K278 (第201図2222) 2222は弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、外面には直線文が施されている。

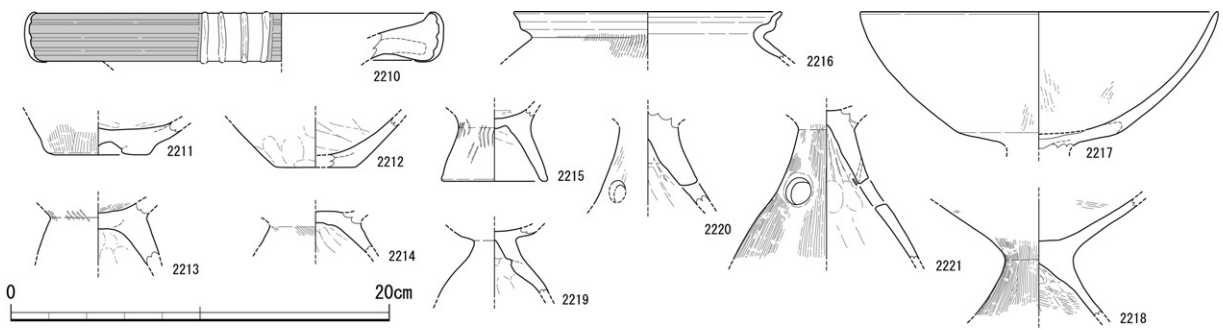
S K280 (第201図2223~2225) 2223・2224は弥生土器・土師器である。

2223は高坏の脚部である。外面に直線文が一部遺存している。2224は鉢の底部と思われる。底部は平底で、体部は直線的に立ち上がる。

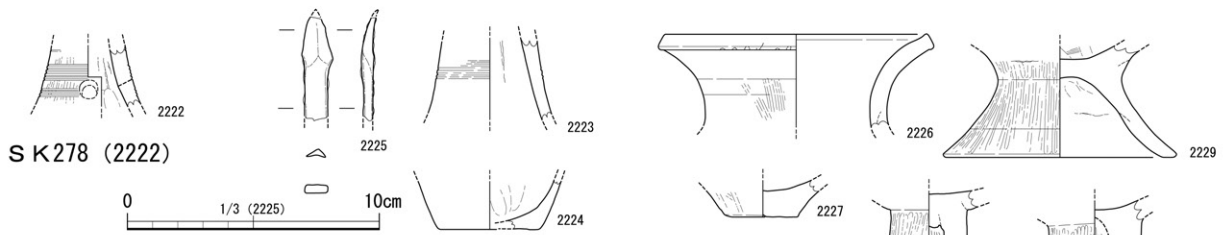
2225は鉄製品で、鉈である。比較的小型のもので、刃部は鋸状を呈し、裏すきがある。刃部先端と茎は欠損しており、本来の長さは不明である。木質の付着などは確認できない。

S K317 (第201図2226~2232) 2226~2232は弥生土器・土師器である。

2226~2229は壺である。2226は口縁部で、大きく外反しながら開く。口縁端部は面をなす。2227・

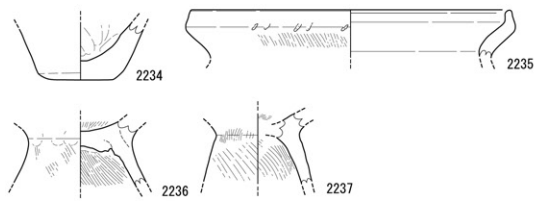


S K 225 (2210 ~ 2221)

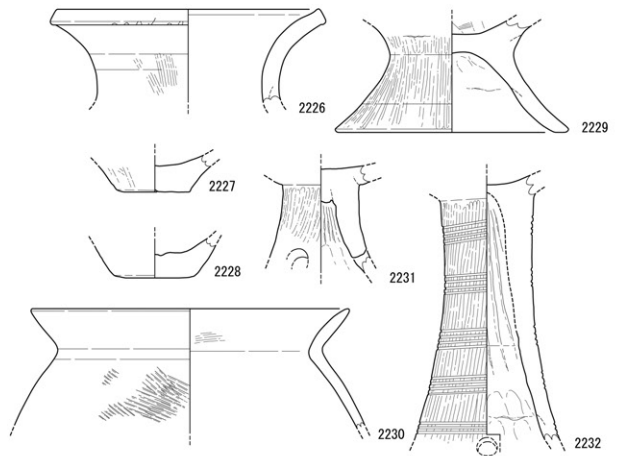


S K 278 (2222)

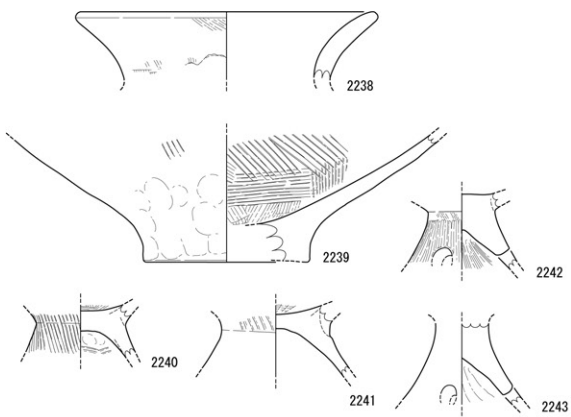
S K 280 (2223 ~ 2225)



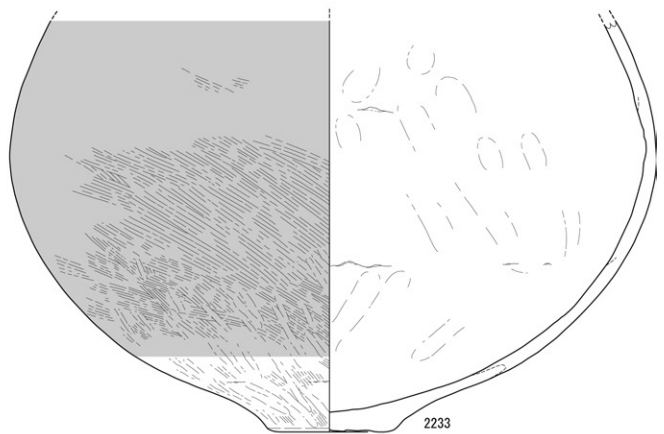
S K 425 (2234 ~ 2237)



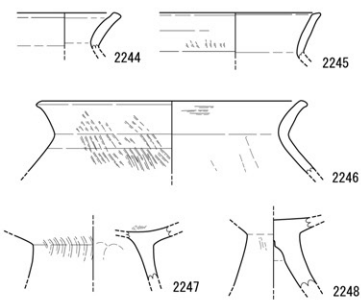
S K 317 (2226 ~ 2232)



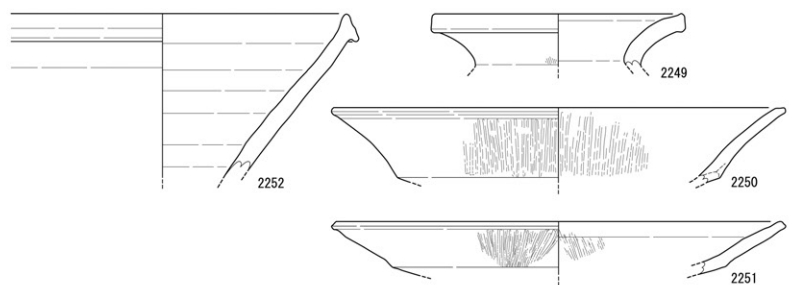
S K 475 (2238 ~ 2243)



S K 341 (2233)



S K 495 (2244 ~ 2248)



居林 1号墳墳丘下 (2249 ~ 2252)

第201図 S K 225 · 278 · 280 · 317 · 341 · 425 · 475 · 495、居林 1号墳墳丘下出土遺物 (1/4、1/3)

2228は底部である。2229は台付壺の脚台部と思われる。外反しながらハ字状に大きく開く。外面にはミガキが施されている。

2230はく字状口縁甕の口縁部から体部上半にかけての破片である。体部はなで肩で、頸部は明瞭に屈曲し、口縁部はわずかに外反しながら開く。口縁端部は丸く収める。体部外面は粗いハケで調整されている。

2231・2232は高坏の脚部である。2231は筒状に成形した脚部の上面の孔を粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。坏部は脚部上端縁部から成形されている。2232は細身で高い。上半はやや柱状を呈する。外面には直線文が5段施されている。内面上半にはシボリ痕が顕著に残る。

S K 341 (第201図2233) 2233は弥生土器・土師器である。壺の体部で、かなりの破片が遺存している。底部は平底で、体部は球形に近い器形を呈するとと思われる。外面はハケを施した後に幅広のミガキで調整されているが、ミガキは疎らで、ハケが顕著に残る。外面には広く赤彩が施されているが、底部付近には認められない。また、赤彩が認められる範囲にはススが付着しており、底部付近には二次的な被熱も認められる。

S K 425 (第201図2234~2237) 2234~2237は弥生土器・土師器である。

2234は壺もしくは鉢の底部と思われる。2235は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁部上半は内傾する。屈曲部外面には刻目状の列点文が施されている。2236・2237は台付甕の脚台部である。2236はわずかに外反しながらハ字状に開く。筒状に成形した脚台部の上面を、脚頂部側から粘土を詰めて閉塞している。2237は内外面ともハケで調整している。

S K 475 (第201図2238~2243) 2238~2243は弥生土器・土師器である。

2238・2239は壺である。2238は口縁部で、緩やかに外反し、口縁端部は丸く収められる。2239は体部下半から底部にかけてが遺存している。外面にはオサエが顕著に認められる。内面は粗いハケで調整されている。

2240・2241は台付甕の脚台部である。2240はハ字

状に直線的に開く。底部内面及び脚頂部に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。2241は脚台部の上端縁部から体部を成形している。

2242・2243は高坏の脚部である。いずれも緩やかに外反しながらハ字状に開くもので、2242は脚部上端縁部から坏部を成形している。

S K 495 (第201図2244~2248) 2244~2248は弥生土器・土師器である。

2244~2247は甕である。

2244~2246はく字状口縁甕の口縁部である。2244は小片で、短く外方へ開き、口縁端部は面をなす。2245はやや直立気味に立ち上がり、直線的にのびる。外面にはハケが認められる。2246は体部上半も一部遺存している。図化したもの以外にも、同一個体と思われる体部片が出土している。頸部の屈曲は比較的緩く、口縁部はわずかに外反しながら開く。外面は粗いハケで調整されている。

2247は台付甕の脚台部である。直立気味で、外面には粗いハケが施されている。

2248は高坏の脚部である。脚部内面頂部には軸芯痕が認められる。

(6) その他遺構出土遺物

居林1号墳墳丘下 (第201図2249~2252) 2249~2251は弥生土器・土師器である。

2249は壺の口縁部である。緩やかに外反しながら大きく外方へ開く。頸部付近の外面にはハケが残る。2250は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜はシャープで、口縁部は外反しながら大きく開く。口縁端部は面をなす。2251も有稜高坏の坏部と思われるが、かなり浅い。坏部外面の稜は比較的明瞭で、若干突出気味である。口縁部は直線的に大きく外方へ開き、口縁端部は面をなす。内外面ともタテミガキで調整されている。

2252は須恵器である。甕の口縁部で、わずかに内湾しながら直線的に開く。口縁端部は垂下させている。色調の異なる2種類の胎土がマーブル状に用いられている。

(7) ピット出土遺物

G-Y13Pit1 (第202図2253) 2253は弥生土器・土師

器である。高坏の脚部で、わずかに外反しながら八字状に開き、脚裾部で若干内湾する。脚端部は面をなす。上面には凹レンズ状の凹みが認められ、剥離面となっている。この凹みを埋めるように坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離した痕跡と思われる。外面には直線文が認められる。

C-Y14Pit4 (第202図2254) 2254は弥生土器・土師器である。壺の底部で、底部外面が凹レンズ状に凹んでいる。

E-T16Pit1 (第202図2255) 2255は弥生土器・土師器である。受口状口縁甕で、口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部の屈曲はやや弱く、屈曲部外面は明瞭な稜をなさない。

F-J9Pit1 (第202図2256) 2256は弥生土器・土師器である。壺の口縁部で、緩やかに外反しながら大きく外方へ開き、口縁端部ははね上げるように上方へ拡張している。口縁端部には棒状浮文が剥離した痕跡が残る。

F-01Pit1 (第202図2257) 2257は弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、筒状に成形した脚部の上面を円板充填状に閉塞している。脚部と坏部が一体的に成形されているかは不明である。

F-024Pit1 (第202図2258～2262) 2258～2262は弥生土器・土師器である。いずれもS字状口縁甕である。

2258～2261は口縁部から体部上半にかけての破片である。2258は口縁部の小片で、外面に押引列点文が認められる。2259は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部の屈曲はやや弱く、内面の屈曲は明瞭ではない。口縁端部は大きく外方へ引き出され、面をなす。口縁部外面には押引列点文がわずかに残る。2260も口縁部から体部上半にかけてが遺存する。口縁部は明瞭に屈曲し、口縁端部は大きく外方へ引き出され、内傾する面をなす。体部外面には羽状のタテハケとヨコハケが施されている。体部内面はナデで調整されているが、その前に施された粗いハケが一部に遺存している。2261は頸部付近の破片である。外面には粗いタテハケとヨコハケが認められる。

2262は脚台部である。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。また、底部内面

には一部にコゲが付着している。

F-T23Pit1 (第202図2263) 2263は弥生土器・土師器である。高坏の坏部から脚部にかけての破片で、脚部上端縁部から坏部を成形している。脚部外面には直線文がかすかに遺存している。

F-V5Pit2 (第202図2264) 2264は弥生土器・土師器である。有稜高坏の坏部で、坏部外面の稜は明瞭である。口縁部は緩やかに外反しながら大きく開き、口縁端部は不明瞭な面をなす。坏部外面の稜付近には、底部と口縁部を接合した粘土接合痕が顕著に認められる。

F-Y19Pit6 (第202図2265) 2265は弥生土器・土師器である。受口状口縁甕の口縁部の小片で、口縁端部付近で短く屈曲する。

G-B8Pit1 (第202図2266) 2266は弥生土器・土師器である。S字状口縁甕の脚台部で、脚端部は内側へ折り返されている。

G-C4Pit1 (第202図2267・2268) 2267・2268は弥生土器・土師器である。

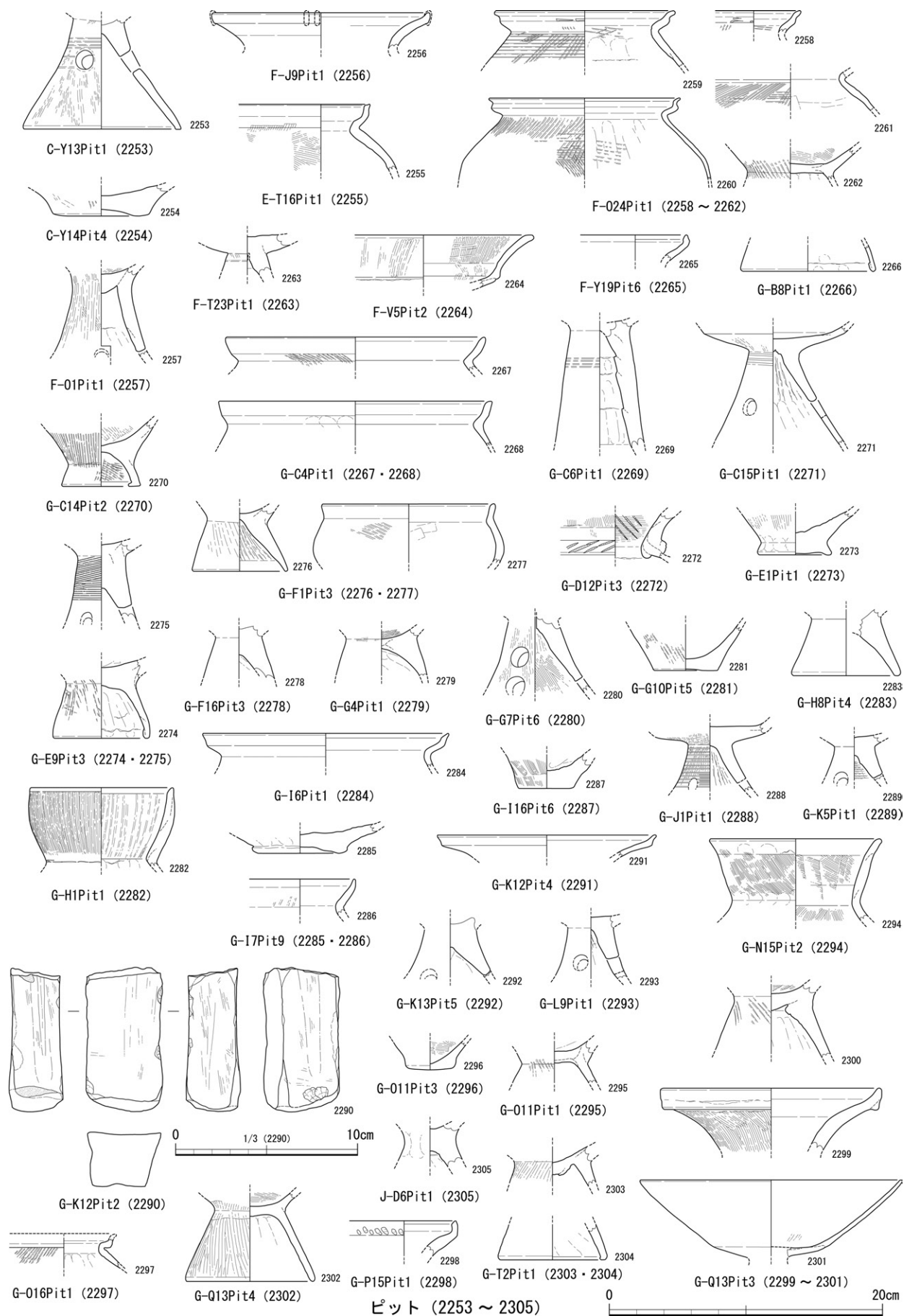
2267はく字状口縁甕の口縁部である。口縁部上半の外面には強いヨコナデが施されており、全体的に内湾している。受口状口縁甕に近い。2268は受口状口縁甕の口縁部で、口縁部の屈曲は弱い。口縁端部は面をなす。

G-C6Pit1 (第202図2269) 2269は弥生土器・土師器である。高坏の脚部であり開かず柱状に近い。内面には脚部成形時の粘土接合痕が顕著に残る。外面にはごくわずかに直線文が遺存する。胎土は角が取れたチャートとみられる砂粒が多く含まれており特徴的で、他地域からの搬入品の可能性がある。

G-C14Pit2 (第202図2270) 2270は弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、体部下半も一部遺存する。小型で低く、口縁端部は面をなし、内側へ突出する。体部外面には粗いハケが施されている。

G-C15Pit1 (第202図2271) 2271は弥生土器・土師器である。有稜高坏の坏部から脚部にかけての破片で、脚部は直線的に八字状に開き、下半で若干内湾するように見受けられる。脚部外面の頸部付近には直線文がわずかに遺存する。

G-D12Pit3 (第202図2272) 2272は弥生土器・土師器である。壺の頸部付近の破片で、頸部外面には突



第202図 ピット出土遺物 (1/4、1/3)

帯が貼り付けられている。また、内面には4本の直線からなる線刻と思われるものが認められる。

G-E1Pit1 (第202図2273) 2273は弥生土器・土師器である。壺の底部で、底部の周縁部が高台状に突出する。外面には連続的なオサエが認められる。

G-E9Pit3 (第202図2274・2275) 2274・2275は弥生土器・土師器である。

2274はS字状口縁甕の脚台部と思われる。下半が若干内湾し、脚端部は内側に折り返されている。底部の器壁が厚く、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられていないなど、S字状口縁甕ではなく台付甕とする方が適当かもしれない。2275は高坏の脚部である。頸部付近は中空となっていない。外面には直線文が施されている。

G-F1Pit3 (第202図2276・2277) 2276・2277は弥生土器・土師器である。

2276は台付甕の脚台部である。ハ字状に開くが、器形にやや歪みがある。内面にはシボリ痕と思われるものが顕著に認められ、台付甕の脚台部としては違和感がある。2277は鉢である。口縁部から体部上半にかけての破片で、頸部の縮まりは弱く、口縁部は直立気味に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収める。体部外面には粗いハケが施されている。

G-F16Pit3 (第202図2278) 2278は弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、上面は浅い凹レンズ状に凹み、剥離面となっている。

G-G4Pit1 (第202図2279) 2279は弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、わずかに内湾する。筒状に成形した脚部の上面を、底部内面と脚頂部に粘土を貼り付けて閉塞した痕跡が認められる。

G-G7Pit6 (第202図2280) 2280は弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、緩やかに外反しながらハ字状に開く。透孔は2段に開けられているが、残存部分からみると、上段の透孔は1方向のみしか開けられていない可能性が高い。下段の透孔は3方向に開けられていると思われる。脚部内面頂部には軸芯痕が認められる。細い棒状のものによる刺突で、上面の破断面まで貫通している。

G-G10Pit5 (第202図2281) 2281は弥生土器・土師器である。壺の底部で、外面には粗いハケが施されている。

G-H1Pit1 (第202図2282) 2282は弥生土器・土師器である。短頸の瓢形壺の口縁部で、わずかに内湾しながら直立気味に上方へのびる。口縁端部は内傾する面をなす。頸部外面には断続的な浅い沈線状の工具痕が認められる。

G-H8Pit4 (第202図2283) 2283は弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、器壁は厚い。

G-I6Pit1 (第202図2284) 2284は弥生土器・土師器である。受口状口縁甕の口縁部で、口縁部の屈曲はやや弱く、口縁端部は内傾する面をなす。

G-I7Pit9 (第202図2285・2286) 2285・2286は弥生土器・土師器である。

2285は壺の底部で、底部外面は全体的に凹レンズ状に凹む。2286は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は不明瞭で、口縁端部付近で内湾気味に短く屈曲する。

G-I16Pit6 (第202図2287) 2287は弥生土器・土師器である。壺の底部で、外面にはハケが施されており、ススが付着している。

G-J1Pit1 (第202図2288) 2288は弥生土器・土師器である。有稜高坏の坏部から脚部にかけての破片で、脚部は緩やかに外反しながらハ字状に開く。脚部外面には直線文が施されている。

G-K5Pit1 (第202図2289) 2289は弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、内面には粗いハケが施されている。

G-K12Pit2 (第202図2290) 2290は石製品である。砥石で、硬質の砂岩製である。直方体を呈し、側面の4面を砥面として使用している。いずれの面にも明瞭な擦痕や線状痕が残されている。また、うち2面には中央部に長軸方向に沿って幅広で浅い溝状の凹みが認められる。

G-K12Pit4 (第202図2291) 2291は弥生土器・土師器である。壺の口縁部と思われるが、高坏の脚部の可能性もある。わずかに外反しながら大きく開き、口縁端部は上方へはね上げられる。器壁は薄い。小片のため調整は不明瞭であるが、ヨコナデによって調整されていると思われる。

G-K13Pit5 (第202図2292) 2292は弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、坏部は脚部上端縁部から成形されていたと思われる。

G-L9Pit1 (第202図2293) 2293は弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、緩やかに外反しながらハ字状に開く。

G-N15Pit2 (第202図2294) 2294は弥生土器・土師器である。壺の口縁部で、直立気味に立ち上がり、上方へのびる。口縁端部は丸く収める。内外面ともハケで調整しているが、外面の口縁端部付近や頸部付近にはオサエが明瞭に残る。

G-011Pit1 (第202図2295) 2295は弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、筒状の脚台部の上面を円板充填状に閉塞した後に、脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。体部は脚台部上端縁部から成形されている。

G-011Pit3 (第202図2296) 2296は弥生土器・土師器である。壺ないし鉢の底部と思われる。

G-016Pit1 (第202図2297) 2297は弥生土器・土師器である。S字状口縁甕の口縁部で、口縁端部を欠損する。頸部内面はナデで調整されている。

G-P15Pit1 (第202図2298) 2298は弥生土器・土師器である。受口状口縁甕の口縁部で、口縁端部付近で短く屈曲し、やや内傾する。口縁端部は内傾する面をなす。外面には列点文が施されている。

G-Q13Pit3 (第202図2299～2301) 2299～2301は弥生土器・土師器である。

2299は壺の口縁部である。緩やかに外反しながら大きく外方へ開き、口縁端部は上下に拡張して広い面を作り出している。ただし、若干調整が粗く、拡張のために貼り付けた粘土の接合痕が明瞭に残されている。2300は台付甕の脚台部である。筒状の脚台部の上面を円板充填状に閉塞した痕跡が認められる。2301は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜は不明瞭で、口縁部は直線的に大きく開く。口縁端部は丸く収められる。器壁は薄い。

G-Q13Pit4 (第202図2302) 2302は弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、ハ字状に直線的に開く。脚端部は丸く収める。脚台部上端縁部から体部を成形している。

G-T2Pit1 (第202図2303・2304) 2303・2304は弥生土器・土師器である。いずれも台付甕の脚台部である。

2303は筒状に成形された脚台部の上端が内側に底

状に突出しており、その中央部に、底部内面側から円板充填状に貼り付けた粘土が臍状にせり出している。2304は脚端部がわずかに内側に突出する。

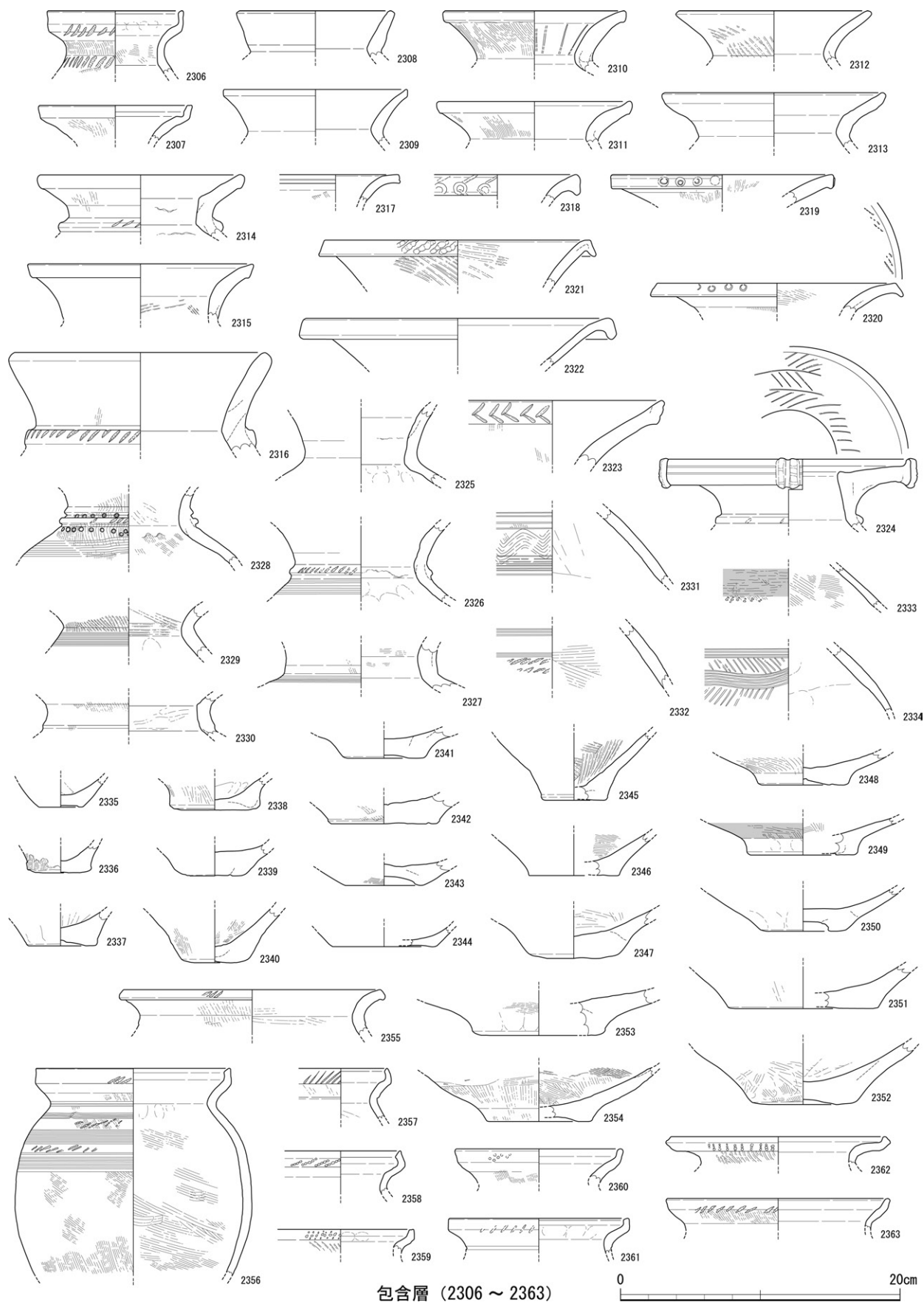
J-D6Pit1 (第202図2305) 2305は弥生土器・土師器である。小型の高坏の脚部と思われる。外面にはオサエが明瞭に残り、粗雑な印象を受ける。

(8) 遺構外出土遺物

包含層(第203・204図2306～2438) 2306～2434は弥生土器・土師器である。

2306～2354は壺である。

2306～2324は口縁部である。2306は受口状口縁のものである。口縁部の屈曲は明瞭で、屈曲部外面には刻目状に列点文が施されている。肩部外面にも列点文が認められる。2307は外反しながら開き、口縁端部付近で短く屈曲して受口状を呈する。弥生時代中期の壺の可能性もある。2308は直立気味に短く立ち上がる。2310は緩やかに外反しながら外方へ開く。口縁端部は面をなす。口縁部内面には4本の直線からなる線刻が施されている。2311は口縁端部が面をなし、外面はハケで調整されている。2312は外面に粗いハケが施されている。2314は頸部から直立し、中位で強く屈曲して外方へ直線的に開く。頸部外面には突帯が貼り付けられ、刻目が施されている。2316は直立気味に上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収められる。器壁は厚く、頸部外面には突帯が貼り付けられている。2317は口縁端部が面をなし、擬凹線文が施されている可能性がある。2318は口縁端部を垂下させて広い面を作り出し、矢羽根状文を施した後に、それと重なるように竹管文を施している。2319は口縁端部に円形浮文が貼り付けられている。複数の破片がまとまって出土した。2320は緩やかに外反して大きく開き、口縁端部を垂下させて広い面を作り出し、竹管文を施している。口縁部内面には列点文がわずかに遺存する。2321は口縁端部を垂下させて広い面を作り出し、粗い列点文を施している。内外面にはかなり粗いハケが施されており、全体的に粗雑な印象を受ける。2324は頸部からやや内傾しながら直立気味に立ち上がり、中位で強く屈曲し、水平に外方へ開く。屈曲部内面は細い突帯状に突出している。口縁端部は上下に拡張して広い面を作り



第203図 包含層出土遺物① (1/4)

出し、擬凹線文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。口縁部内面にはヘラ状工具によって矢羽根状文が施されている。

2325～2330は頸部付近の破片である。2326は頸部が緩やかに屈曲し、頸部外面には突帯が貼り付けられている。肩部外面には直線文が施されている。2328は頸部外面に2条の突帯が認められる。突帯の間及び突帯の下方に竹管文が施されており、竹管文の内部にわずかに赤彩が遺存している。2329は頸部内面に粗いハケが施されている。2330は頸部から口縁部が直立し、中位で屈曲して外方へ開く。外面には赤彩が施されていた可能性があり、また、頸部外面には突帯が剥離したような痕跡も認められる。

2331～2334は体部である。2331は外面に直線文と波状文が施されている。2332は直線文と列点文が認められる。2333は外面をミガキで丁寧に調整し、赤彩を施している。胎土は精良で、他地域からの搬入品の可能性もある。2334は直線文とそれを軸とする矢羽根状文がヘラ状工具によって施されている。

2335～2354は底部である。2335は底部中央が浅く凹む。鉢の可能性もある。2337は底部が輪台状を呈する。2338・2341は破断面で粘土接合痕が観察できる。2343は底部外面全体が凹レンズ状に大きく凹み、上げ底状を呈する。2344は全体的に器壁が薄い。胎土は細かく均一な大きさの砂粒が含まれているなど特徴的で、他地域からの搬入品の可能性がある。2345は内面に粗いハケが施されている。2349は輪台状を呈し、外面に赤彩が施されている。2350も輪台状を呈し、底部外面は大きく凹む。2352はわずかに上げ底状を呈する。外面にはミガキが施されている。2354は外面の一部にケズリが施されている。内面には粘土接合痕が認められ、それを境に調整が異なっており、製作時の成形単位を示すと思われる。

2355～2395は甕である。

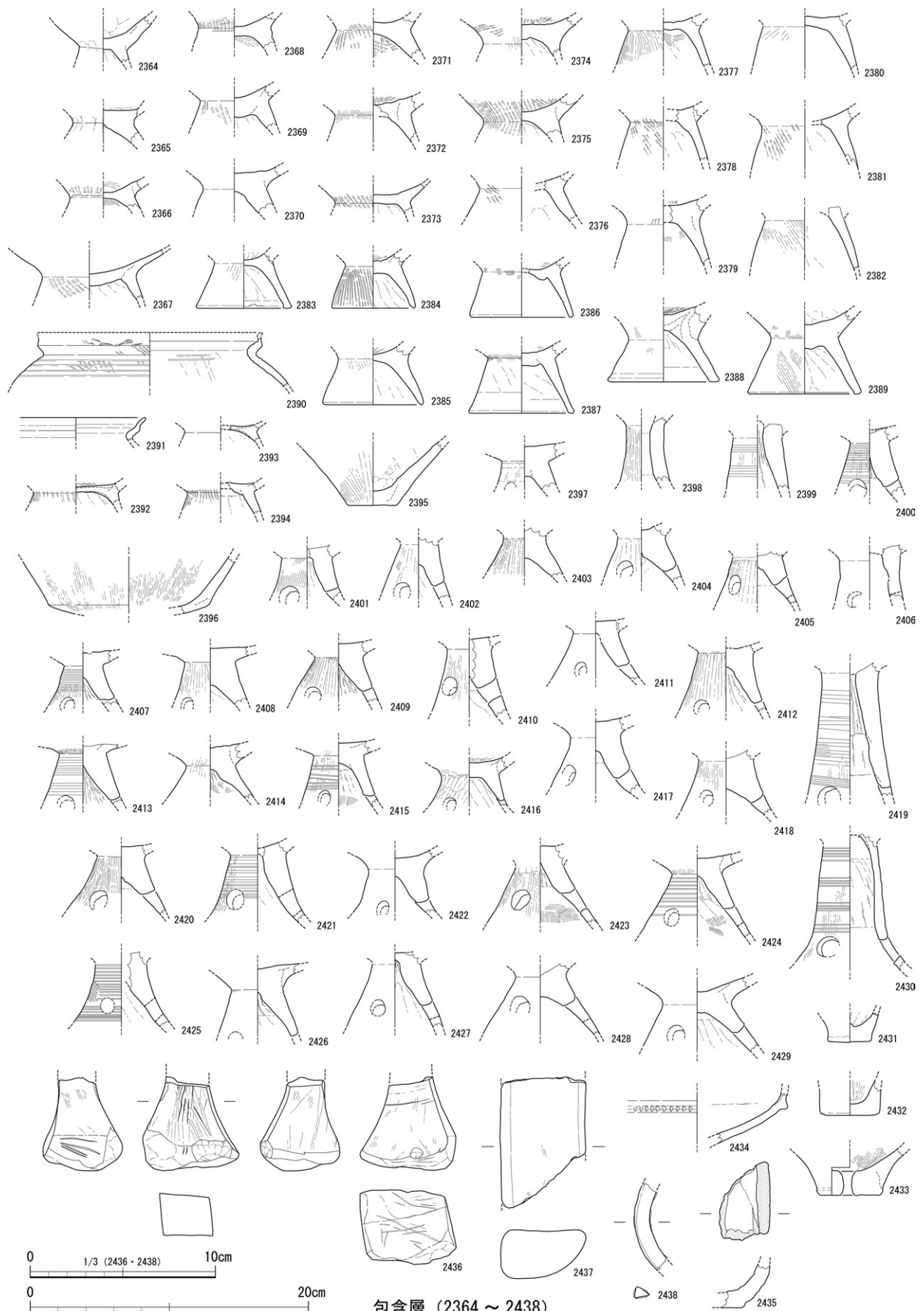
2355はく字状口縁甕の口縁部である。頸部の屈曲は緩く、口縁部は外反しながら外方へ開く。口縁端部は面をなし、列点文が施されている。

2356～2363は受口状口縁甕の口縁部等である。2356は口縁部から体部下半にかけてが遺存している。体部は体部最大径がやや上位にあり、倒卵形に近い器形を呈する。口縁部は明瞭に屈曲し、口縁部上半

は直立し、口縁端部は面をなす。口縁部外面には列点文が施されており、体部外面の上半には直線文と列点文が施されている。また、体部外面の中位及び口縁部付近にはススが厚く付着し、体部内面の下半には薄いコゲが斑状に付着している。2357・2358は口縁部の屈曲が明瞭で、屈曲部外面は明瞭な稜をなし、口縁部上半は内傾する。外面には列点文が施されている。2359・2360は外面に櫛状工具による列点文が施されている。2361は口縁部の屈曲部内面に連続するオサエが認められる。2362は頸部付近で大きく外反し、口縁部がほぼ水平に開く。ただし、器形の復元には不安を残す。

2364～2389は台付甕の脚台部である。2364は小型のものである。2367は大型のもので、筒状の脚台部の上面を円板充填状に閉塞していると思われる。2369も脚台部上面を円板充填状に閉塞しているが、一度閉塞した後に、さらに底部内面から粘土を貼り付けて補強・整形を行っている可能性が高い。2370は器壁が厚い。2371は大きくハ字状に開き、内面には粗いハケを施している。2372は底部内面にクモの巣状のハケが施されている。2374は底部内面にコゲが付着する。2375は脚台部の上端縁部から体部を成形している。外面には粗いハケが施されている。2376はわずかに外反しながらハ字状に開く。2377・2378は直線的にハ字状に開く。2378は脚台部の上端縁部から体部を成形している。2381・2382は緩やかに内湾する。外面にはハケが施されている。2383は直線的にハ字状に開く。脚端部は面をなし、若干内側に突出する。2384は小型のものである。2386は脚頂部が凹レンズ状に凹み、上げ底状を呈する。2387は直線的にハ字状に開く。内外面をナデで調整しており、脚端部付近には内外面ともヨコナデが施されている。2388は器壁が厚く、破断面で複雑な粘土接合痕が観察される。2389は直線的にハ字状に開き、脚端部は面をなす。

2390～2394はS字状口縁甕である。2390は口縁部から体部上半にかけての破片で、口縁端部は欠損する。口縁部外面には押引列点文が認められる。2391は口縁端部が大きく外方へ引き出され、内傾する面をなす。2392・2393は脚台部で、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。2392は



第204図 包含層出土遺物② (1/4、1/3)

粗い砂粒を含む粘土を貼り付ける前に、脚台部の上面を円板充填状に閉塞している可能性がある。2394も脚台部で、底部内面には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。また、底部中央は焼成後に穿孔されたような状況が看取される。ただし、脚台部上面を閉塞するために脚頂部側から貼り付けた粘土が剥離したために開いた孔の可能性も考えられる。

2395は平底の甕の体部下半から底部にかけての破片である。外面にはハケが施されている。この個体に関しては、器形や調整、胎土、焼成などから弥生時代中期の甕と考えられるため、壺の底部とは分けて掲載した。

2396～2430は高坏である。

2396は有稜高坏の坏部である。坏部外面の稜は明瞭で、口縁部は直線的に開く。

2397～2430は脚部である。2407・2413・2417のようにわずかに外反しながらハ字状に開くものや、2414・2423・2424のように直線的にハ字状に開くもの、2398・2419・2340のように上半がやや柱状を呈し下半で外反するもの、2427・2428のように若干内湾しながらハ字状に開くものなど、多様なものがある。2398は細身のもので、器台の可能性も考えられる。2400は上面が浅く凹レンズ状に凹み、その凹みを埋めるように坏部内面に貼り付けられた粘土が一部遺存している。2402は器形に若干の歪みがある。2404は脚部内面頂部が孔状に凹むが、軸芯痕ではないと思われる。2405は外面の頸部付近にヨコミガキが1条施されている。2407は脚部外面上半に直線文が施されている。2410は頸部付近が中空となっている。2411は脚部上端縁部から坏部を成形している。2413は上面が剥離面となっており、脚部上面の凹みを埋めたか、あるいは筒状の脚部の上面の孔に粘土を詰めて閉塞したと思われる痕跡が認められる。2415は脚部内面頂部に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。外面には直線文が施されている。2416は脚部外面が幅広のミガキで調整されている。体部は脚部上端縁部から成形している。2418は上面の剥離面に平行する弧状の太い沈線が数本認められる。工具痕と思われるが、接合を強化するために施された可能性もある。2419は高い脚部である。透孔は比較的低い位置に開けられている。内面にはシボリ痕と粘

土接合痕が明瞭に残る。2420は脚部内面頂部が浅い孔状に凹むが、軸芯痕ではない。2423は外面の頸部付近に連続するオサエが認められる。脚部上端を成形する際のものと思われる。2424は脚部上端縁部から坏部を成形している。外面には直線文が施されている。2425は外面に直線文が施されているが、始点と終点にずれが認められる。2428は上面が凹レンズ状に凹む。2429は頸部がやや太い。脚部上端縁部から坏部を成形した後に、坏部内面に粘土を貼り付けて補強・整形を行っている。台付壺の脚台部の可能性も考えられる。2430は内面を丁寧にナデによって調整するが、シボリ痕が一部に遺存している。

2431・2432は鉢である。2431は底部で、小型の壺の可能性も残る。2432は底部から体部が直立気味に立ち上がる。内面にはミガキが施されている。

2433は有孔鉢の底部である。内面にはハケが施されている。底部の孔は底部中央から若干偏った位置に開けられている。内面と外面の両側から穿孔されたと思われる。

2434は手焙形土器の鉢部である。器壁は薄く、外面には細い突帯が貼り付けられている。胎土は角閃石と長石と思われる白色砂粒が目立つなど特徴的で、他地域からの搬入品と考えられる。

2435は土製品である。小片で全体の形状は不明であるが、筒状あるいは槌状を呈するものと推測される。内面は表面が滑らかな太い棒状のものに押し当てられたように見受けられる。外面には特に調整は施されていないが、一部が面をなしている。弥生・古墳時代のものとは限らないが、胎土には砂粒が多く含まれており、弥生土器・土師器にも似る。

2436・2437は石製品である。2436は砥石で、肌理の細かい凝灰岩である。断面形は方形を呈し、側面はいずれも内湾する。側面の4面と小口面を砥面として使用しており、擦痕や線状痕が顕著に認められる。2437は台石と思われる。砂岩の円礫を利用したもので、上面がわずかに凹む面をなし、不明瞭ながら摩滅や擦痕が認められる。大きさからは磨石とする方が適当かもしれない。

2438は鉄製品である。弧状に湾曲する棒状のもので、断面形は三角形を呈する。S H204付近で出土したことから、弥生時代後期～古墳時代前期のもの

とも考えられるが、器種などは不明で、飛鳥時代以降に下る可能性も高い。

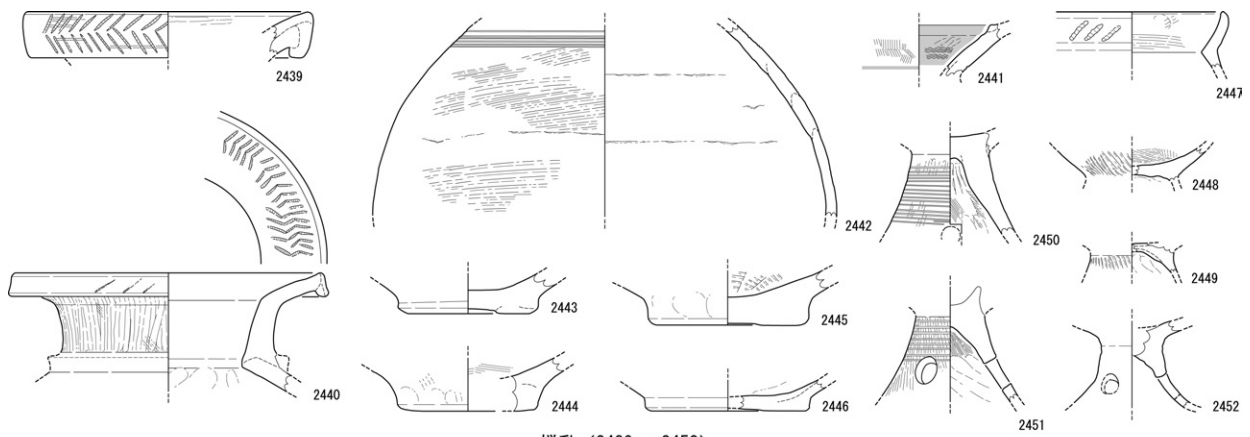
攪乱・表土等（第205図2439～2479） 2439～2452は攪乱から出土した弥生土器・土師器である。

2439～2446は壺である。

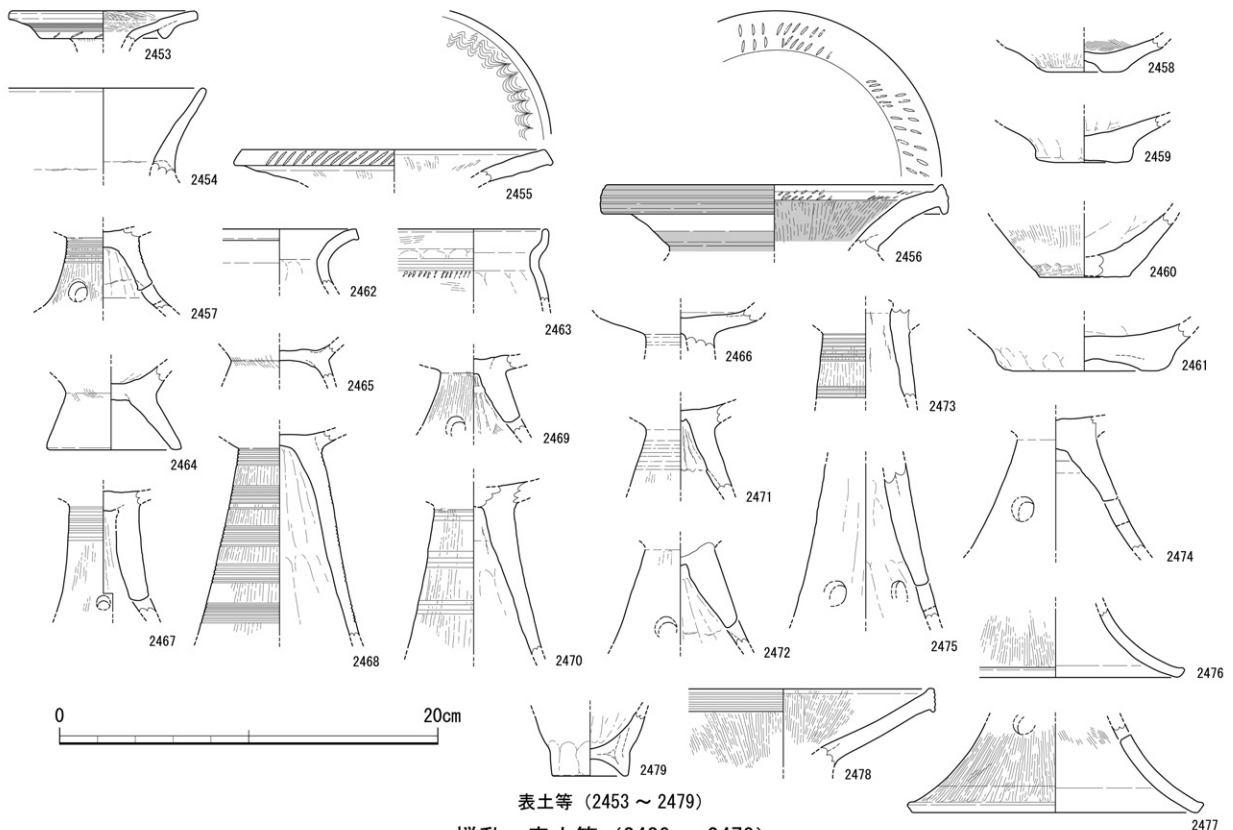
2439・2440は口縁部である。2439は口縁端部に厚く粘土を貼り付けて垂下させ、ハケで調整した後に矢羽根状文を施す。ハケは粗雑な擬凹線文とも考えられるが、判然としない。2440は頸部から直立気味

に立ち上がり、中位で強く屈曲し、直線的に外方へ開く。口縁端部は垂下させている。口縁部内面には矢羽根状文が施されている。また、頸部外面には突帯が貼り付けられていたと思われるが、剥離しており遺存しない。

2441・2442は頸部から体部にかけての破片である。2441は頸部付近で、口縁部内面には波状文と赤彩が認められる。2442は体部で、外面には粗いハケと直線文が施されている。



攪乱 (2439 ~ 2452)



表土等 (2453 ~ 2479)

攪乱・表土等 (2439 ~ 2479)

2443～2446は底部である。2443は輪台状を呈する。底部外面には種子圧痕と思われるものが認められる。胎土は黒色の細かい砂粒が目立つなど特徴的で、他地域からの搬入品の可能性がある。2445は内面にクモの巣状に近いハケが施されている。2446は全体的に器壁が薄い。接合しないものの、同一個体と思われる体部片もあり、外面には工具ナデ状の調整が施されている。胎土には砂粒がかなり多く含まれるなど、弥生土器・土師器としては違和感もあり、縄文土器とも考えられる。

2447～2449は甕である。

2447は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は緩く、全体的に内湾する。外面には列点文が施されている。2448はS字状口縁甕の脚台部と思われる。台付甕の可能性もある。2449もS字状口縁甕の脚台部である。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

2450～2452は高坏の脚部である。2450は緩やかに外反しながらハ字状に開く。脚部内面頂部に筒状の脚部の上面に粘土を詰めて閉塞した痕跡が認められる。2451は脚部上面の周縁部が突帯状につまみ出されている。上面は全体的に剥離面となっており、坏部を接合した痕跡と思われるが、脚部成形時にこうした突帯状の隆起を作り出すことで、脚部と坏部との接合を強固にしようとする意図があったものと推測される。

2453～2479は表土等から出土した弥生土器・土師器である。

2453～2461は壺である。

2453～2456は口縁部である。2453は小型のもので、大きく外方へ開き、口縁端部は幅広の粘土帯を貼り付けて垂下させている。垂下部分の外面にはヨコナデにも思われるような不鮮明な擬凹線文と、列点文が施されている。内面はハケを施した後にミガキで調整している。2455は口縁部内面に波状文を施している。2456は大きく開き、中位でわずかに外方へ屈曲する。口縁端部は上下に拡張して広い面を作り出し、擬凹線文を施している。口縁部内面には列点文が施されている。また、内外面には赤彩が認められる。内面の赤彩は屈曲部より下方のみに施される。

2457は台付壺の脚台部と思われる。中位で強く外

反して開く。頸部は太い。体部内面にあたる部分にはミガキが施されており、高坏や台付鉢の可能性も残る。

2458～2461は底部である。2458は底部外面中央が深い凹レンズ状に凹む。2460は外面にハケを施し、底部付近の狭い範囲を工具ナデで調整している。また、外面にはススが付着している。鉢とも考えられる。2461は底部外面が大きく凹む。

2462～2465は甕である。2462はく字状口縁甕の口縁部の小片で、外反しながら開く。2463は受口状口縁甕で、口縁部から体部上半にかけての破片である。肩部外面に直線文と列点文が施されている。胎土は赤色粒が目立つなどやや特徴的で、他地域からの搬入品の可能性がある。2464は台付甕の脚台部である。直線的にハ字状に開く。2465はS字状口縁甕の脚台部である。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

2466～2477は高坏である。

2466は有稜高坏の坏部から脚部にかけての破片である。脚部外面にはわずかに直線文が遺存する。

2467～2477は脚部である。2468・2470・2475のようにハ字状に開く高さがあるものや、2472・2474のように直線的にハ字状に開き、下半で若干外反するものなどがある。2467は筒状の脚部の上面を円板充填状に閉塞していると思われる。透孔は4方向に開けられている可能性が高い。2468は外面に直線文を5段施している。破片の下端にわずかに透孔が遺存しているように見受けられる。2469・2471は内面にシボリ痕が顕著に残る。2472は上面が凹レンズ状に凹む。この凹みを埋めるように坏部内面に貼り付けられた粘土が剥離した痕跡と思われる。2475は調整が不明瞭であるが、内外面ともナデで調整されるとみられる。透孔は5方向に開けられている可能性がある。2476・2477は外反し、脚端部は面をなす。2476の脚端部付近にはススが付着する。

2478は器台と思われる。わずかに内湾しながら直線的に開き、口縁端部は拡張して広い面を作り出し、擬凹線文を施している。内外面ともタテミガキで丁寧に調整されている。壺の口縁部とも考えられるが、形態や調整から器台とした。

2479は鉢である。体部下半から底部にかけての破

片で、底部の周縁部が高台状に突出する。外面にはオサエが明瞭に残る。破断面では複雑な粘土接合痕が観察される。

註

- 1) 居林遺跡で出土した弥生時代後期～古墳時代前期の甕は脚台が付くものが主体を占めることや、壺と平底の甕や鉢の底部は個別に正確に分別することが困難であることなどから、平底の底部は基本的に壺の底部として報告した。したがって、壺の底部として報告したものの中には、一定程度、平底の甕や鉢の底部が含まれていると思われる。そうした可能性が高いものについては、本文中で触れるほか、一覧表・写真図版編第7表の備考欄などに記載した。
- 2) 一般的ではないが、記述の便宜上、受口状口縁甕やS字状口縁甕については、口縁部の屈曲を境として、頸部から屈曲部までを口縁部下半、屈曲部から口縁端部までを口縁部上半と表現する。
- 3) 脚部下半のみが遺存している場合、高坏か器台かの判別は困難である。ただし、器台は全体的に数が少ないとみられるため、そうした個体は高坏脚部として報告した。
- 4) 管状のものを熱し、引き伸ばした後に分割して小玉を製作する技法。田村朋美氏のご教示による。
- 5) 口縁部形態が不明なものは、台付甕として一括した。
- 6) 脚台部上面の、内容物を入れる部分（体部）の底にあたる部位を底部として、その内面を底部内面と呼称する。ただし、底部の外面にあたる部分については脚台部の内面とした方が直感的に分かりやすいと思われることから、脚頂部と表現しておきたい。また、脚台部と体部との接合部については脚頸部と呼称しておく。なお、一覧表・写真図版編第7表の備考欄においては、底部内面と脚頂部の両面を指して「底部上下」と表現している。
- 7) 本田光子1994「内面朱付着土器」『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会
- 8) 端末結節縄文の用語・定義は以下の文献に拠った。
鮫島和大1994「南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第12号 東京大学文学部考古学研究室
- 9) 近隣に所在する久留倍遺跡では、体部外面に縄文を施す壺が複数出土しており、当該地域ではこうした土器が製作されるような地域間交流が存在したと推測できる。四日市市教育委員会2013『久留倍遺跡5』
- 10) ただし、1239・1243など一部の遺物については出土時の記録に混乱があり、SH421から出土した可能性がある。そうしたものについては、一覧表・写真図版編第7表の備考欄に示している。
- 11) 20倍のルーペによる観察でも赤色顔料が付着している様子は確認できなかった。赤色顔料以外の要因で赤化している可能性が高い。

第V章 飛鳥～平安時代の遺構・遺物

第1節 遺構

(1) 掘立柱建物・柱列

S B 266 (第206図) 第2次調査区の西部で検出した側柱建物である。斜面裾部に位置しており、S B 293に隣接する。桁行が3間で6.1m、梁行は1間で4.5mであり、平面形は長方形を呈する。また、梁行ラインの中央よりやや外側にも柱穴があり、独立棟持柱と思われる。

桁側の柱間は、2.0m前後である。柱穴は平面形が不整形な円形ないし隅丸方形を呈する。J-B6Pit2及びJ-C7Pit4では、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。J-C7Pit4については当該土層が斜めに入り込んでいるため、柱の抜き取り痕の可能性が高い。また、独立棟持柱と思われるJ-C7Pit3でも平面で検出した段階では柱痕とみられる土色の変化が認められた¹⁾。また、斜面の上方と下方とで、柱穴底面の標高に差が認められる。

遺物は、J-B6Pit1から須恵器や土師器が出土している。須恵器には坏蓋や壺がみられる。土師器には皿がある。また、小片のため図化できなかったものの、ほかのすべての柱穴からも土師器片が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。建物の形態からは、奈良時代の掘立柱建物とするにはやや違和感があるが、柱間の間隔やS B 293との関係を鑑みれば、やはり奈良時代の建物である蓋然性が高い。

S B 269 (第207図) 第2次調査区の中央部で検出した側柱建物と思われるものである。東側の半分程度は調査区外となっており、未調査である。桁行は3間で4.1mある。梁行は2間ないしそれ以上で、2間の場合4.0mほどであるとみられ、平面形は正方形に近い方形を呈すると推測される。

桁側の柱間は、1.2～1.8m前後とかなり不統一である。梁側の柱間は、1.8m前後である。全体的に柱穴が整然と並ばない点からみると、掘立柱建物で

はない可能性もある。柱穴は平面形が不整形な円形を呈する。斜面の上方と下方とで、柱穴底面の標高にかなりの差がある。

遺物は、J-A21Pit1から須恵器や土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

S B 292 (第208図) 第2次調査区の西部で検出した側柱建物である。S B 266・293に近接する。桁行が3間で4.7m、梁行は2間で3.8mであり、平面形は長方形を呈する。北西側の梁行では間柱の柱穴が検出されていないが、削平等によって消失したのか、元から存在しなかったのかは不明である。

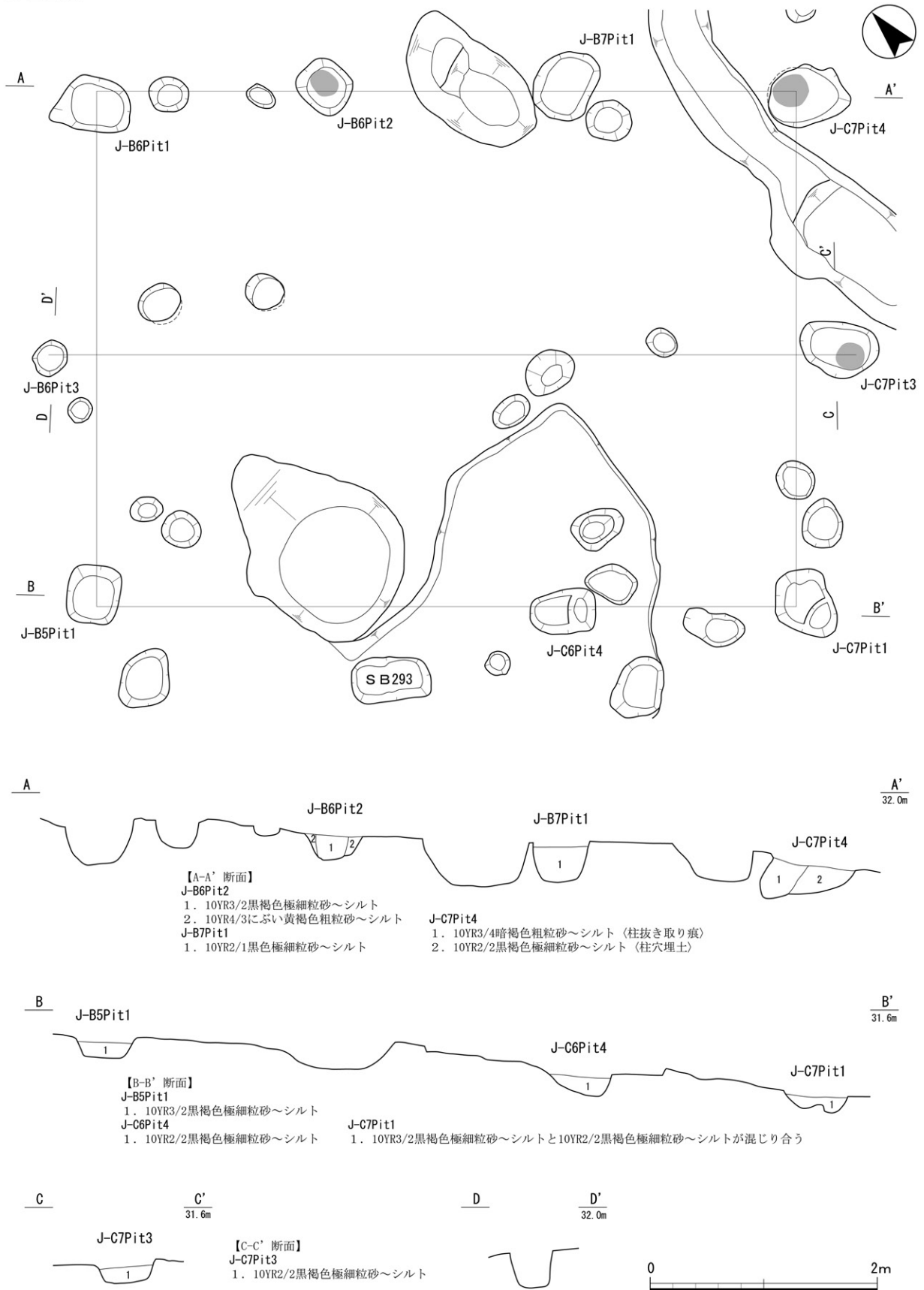
桁側の柱間は、1.5m前後であるが、南西側のJ-C3Pit1とJ-C3Pit2の間は若干広いなど、不統一な部分もみられる。梁側の柱間は1.9m前後あり、桁側に比べて広い。柱穴は平面形が円形ないし隅丸方形を呈する。いずれの柱穴においても、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕は確認できなかった。ただ、J-B4Pit1などでは柱穴内に多数の礫が入れられたような状況が認められることから、建物廃絶時に柱は抜き取られた可能性が高い。

遺物は、図化できたものはJ-C3Pit2から出土した弥生土器・土師器台付甕のみであった。埋土に混入したと思われる。このほかに、J-B4Pit1から奈良時代のものと思われる土師器甕が出土しているが、体部の小片のため図化できなかった。また、J-C3Pit1やJ-C4Pit1などからも土師器の小片が出土しているが、器種などが明確に分かるものはない。

出土遺物や、S B 266・293との位置関係からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

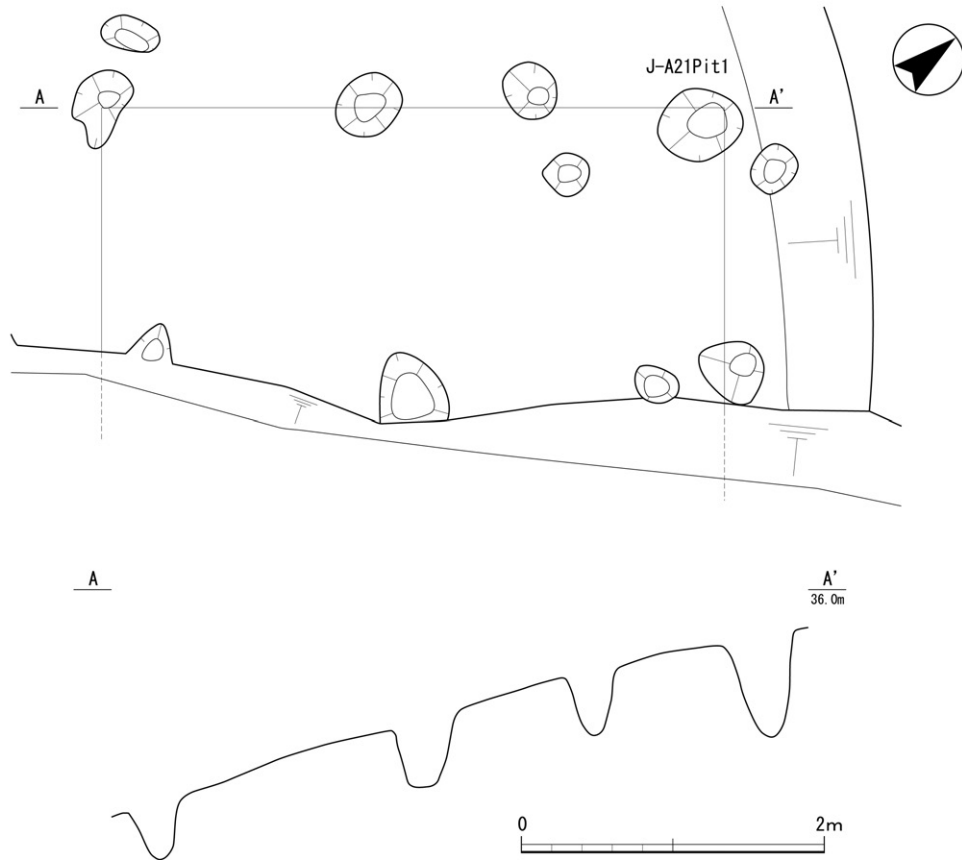
S B 293 (第209図) 第2次調査区の西部で検出した側柱建物である。斜面裾部に位置しており、S B 266に隣接する。桁行は2間で4.4mある。梁行は北西側は2間、南東側は3間でいずれも3.9mであり、平面形はやや長方形を呈する。

S B 266



第206図 S B 266 (1/50)

S B 269



第207図 S B 269 (1/50)

桁側の柱間は2.3m前後であるが、南西側のJ-C5 Pit1とJ-D5Pit1の間が若干広い可能性もある。梁側の柱間は、北西側が1.9m前後、南東側が1.1mまたは1.6m前後と、桁側に比べて狭い。柱穴は平面形が不整形な円形ないし隅丸方形を呈する。J-D5Pit1では、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。ただし、そのほかの柱穴ではそうした土層の存在は確認できなかった。また、斜面の上方と下方とで、柱穴底面の標高に差が認められる。

遺物は、J-C5Pit3とJ-C6Pit3から土師器や須恵器が出土している。また、建物の内部にあたる箇所を精査中に、土師器甕（2493）の大きな破片が検出された。当該建物と何らかの関係がある遺物とも思われる。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

S B 296（第210図） 第2次調査区の西部で検出し

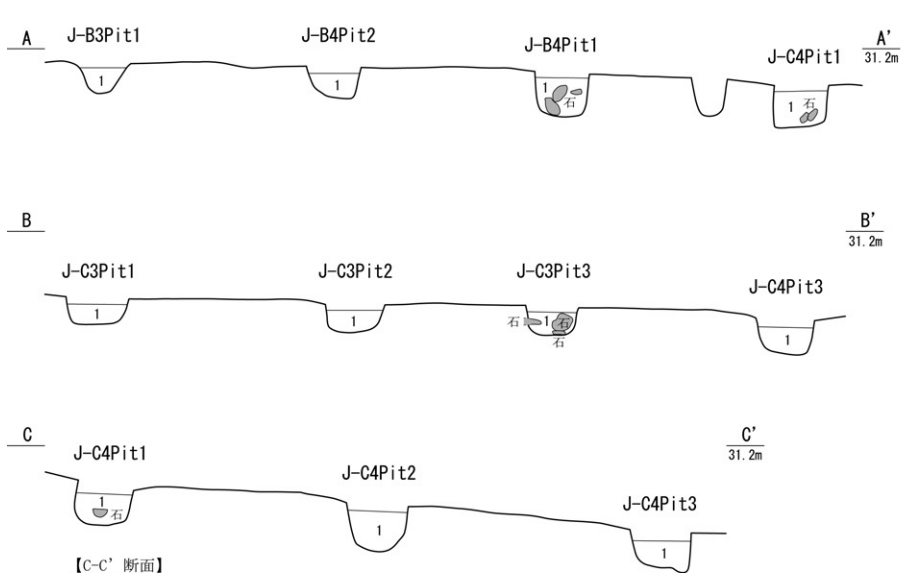
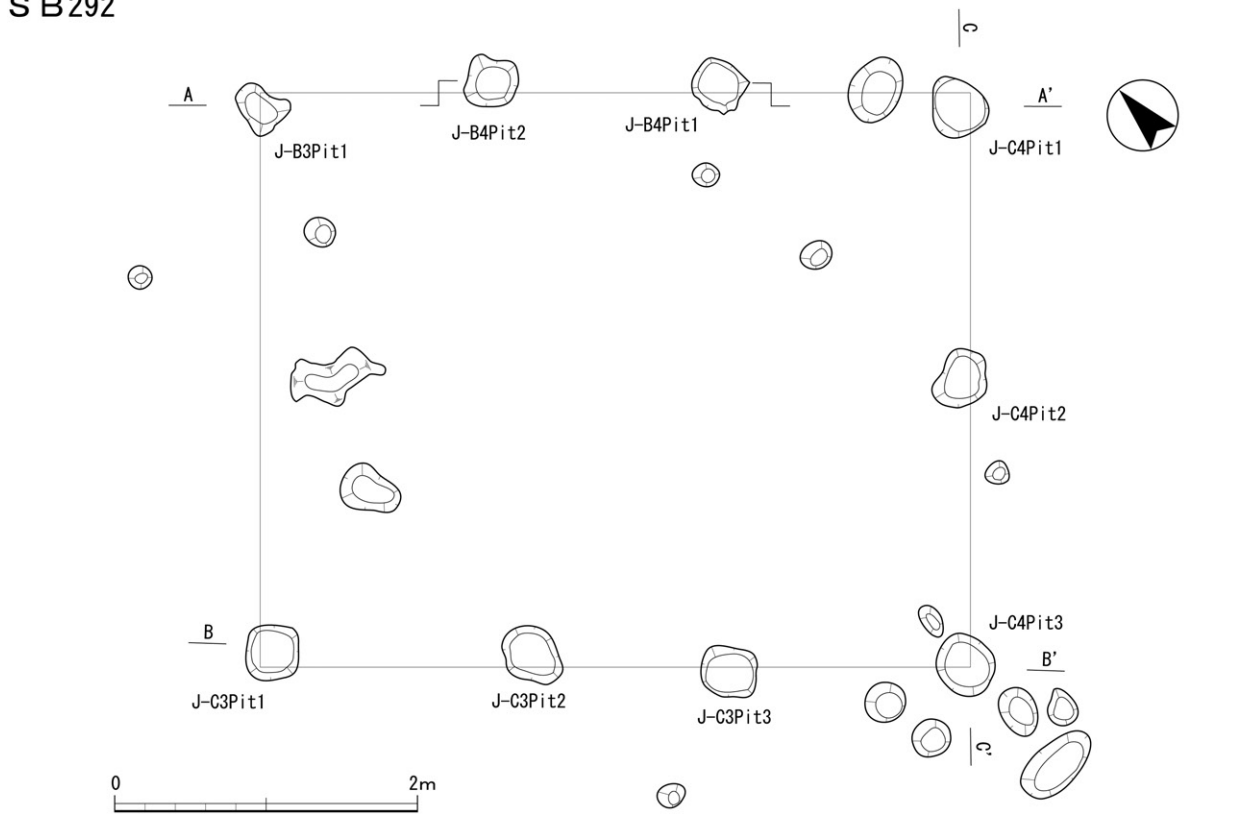
た側柱建物である。S H 272と一部重複しており、この建物より後出する。調査段階では、北東側の桁行ラインのみが柱列として認識されていたが、整理段階で梁行に相当する柱穴の並びが確認されたため、掘立柱建物とした。斜面に位置しており、南側は流失している。桁行が3間で5.5m、梁行は2間で3.8mであり、平面形は長方形を呈する。

柱間は、桁側・梁側ともに1.8m前後である。柱穴は比較的小型で、平面形が円形ないし楕円形を呈する。斜面の上方と下方とで、柱穴底面の標高にかなりの差がある。

遺物は、F-V2Pit1から弥生土器・土師器壺が出土している。

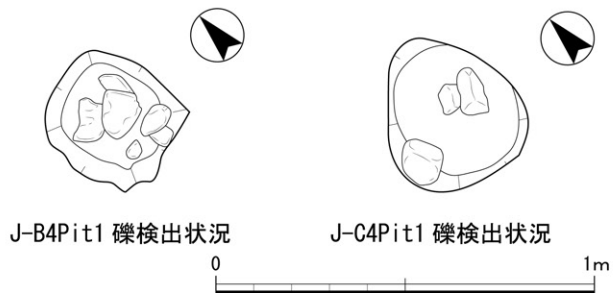
出土遺物は弥生時代後期～古墳時代前期のもののみであるが、柱間寸法などはS B 266・269などと近く、主軸方位はS A 356～358と揃うことから、遺構の時期は奈良時代の可能性が高い。

S B 292



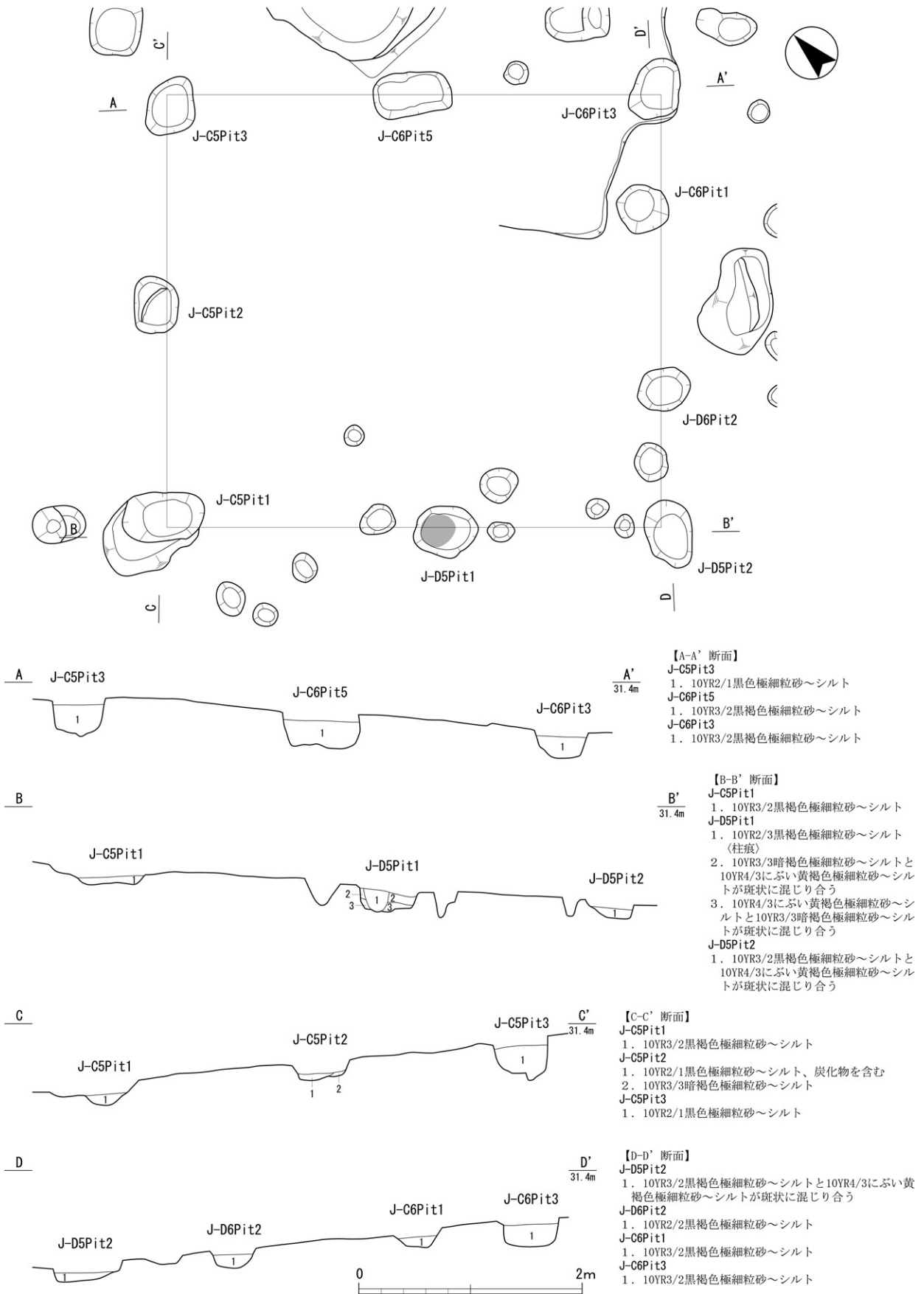
- 【A-A' 断面】
 J-B3Pit1
 1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、炭化物を含む
 J-B4Pit2
 1. 10YR3/3～4/4暗褐色極細粒砂～シルト
 J-B4Pit1
 1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、炭化物を含む
 J-C4Pit1
 1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、炭化物を含む
- 【B-B' 断面】
 J-C3Pit1
 1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、炭化物を含む
 J-C3Pit2
 1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、炭化物を含む
 J-C3Pit3
 1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、炭化物を多く含む
 J-C4Pit3
 1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、炭化物を含む

- 【C-C' 断面】
 J-C4Pit1
 1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、炭化物を含む
 J-C4Pit2
 1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、炭化物・土器を含む
 J-C4Pit3
 1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、炭化物を含む

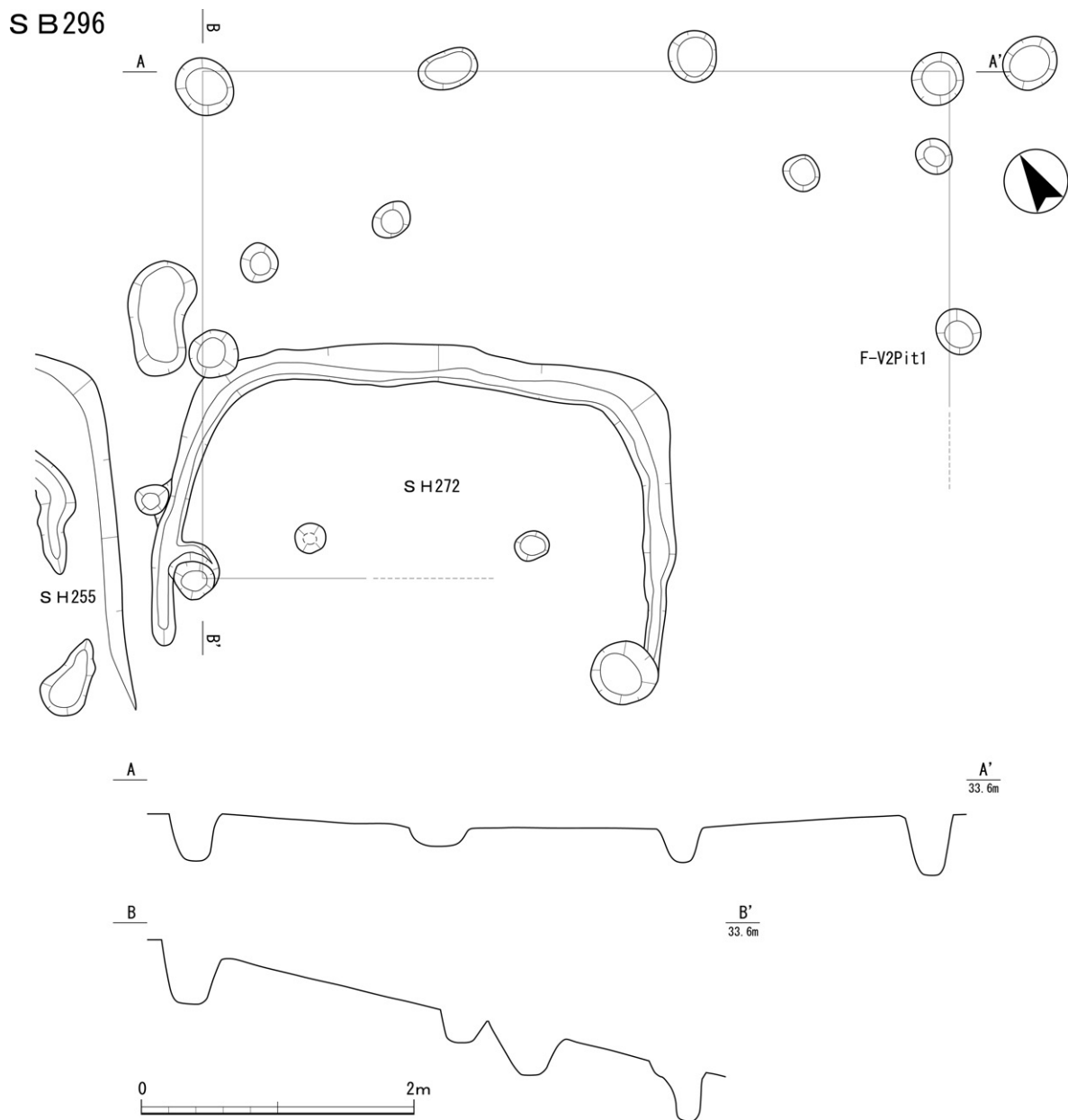


第208図 S B 292 (1/50、1/20)

S B 293



第209図 S B 293 (1/50)



第210図 SB296 (1/50)

S A356 (第211図) 第3次調査区の西部で検出した柱列である。斜面中位に位置しており、S Z326の内部に存在するが、新旧関係は明確ではない。S A357と隣接する。6基の柱穴で構成され、長さ6.2mほどある。

柱間は東側の3間では1.3m前後で比較的均等であるが、西側の2間は0.9mないし1.5mとばらつきがみられる。西側の2基の柱穴は東側の4基に比べて深さがやや浅いことを鑑みると、本来は東側の4基の柱穴で構成される3.8mほどの長さの柱列の可

能性も考えられる。柱穴はいずれも径0.2mほどと小型である。

この柱列に伴う遺物は全く出土しなかった。

S A357・358との関係からみて、遺構の時期は奈良時代の可能性が高いと考えられる。

S A357 (第211図) 第3次調査区の西部で検出した柱列である。斜面中位に位置しており、S Z326及びS X325と一部重複し、これらより後出する。また、S A356・358、S K327と隣接する。ほぼ一直線に並ぶ5基の柱穴で構成され、長さ7.4mほど

ある。

柱間は1.9m前後で比較的均等である。ただし、西端の柱穴はほかの柱穴に比べて小型でかなり浅く、本来は4基の柱穴で構成される5.7mほどの長さの柱列の可能性も考えられる。また、東側の3基の柱穴については、別のピットが至近距離に位置していたり、あるいは重複したりしている状況が認められ、改修などが行われた可能性がある。

遺物は、図化できたものはF-S1Pit1から出土した弥生土器・土師器壺のみであった。同じくF-S1Pit1とF-S2Pit1から奈良時代のもと思われる土師器の小片が出土しているが、図化できるものはなかった。

出土遺物や、S A 358との関係からみて、遺構の

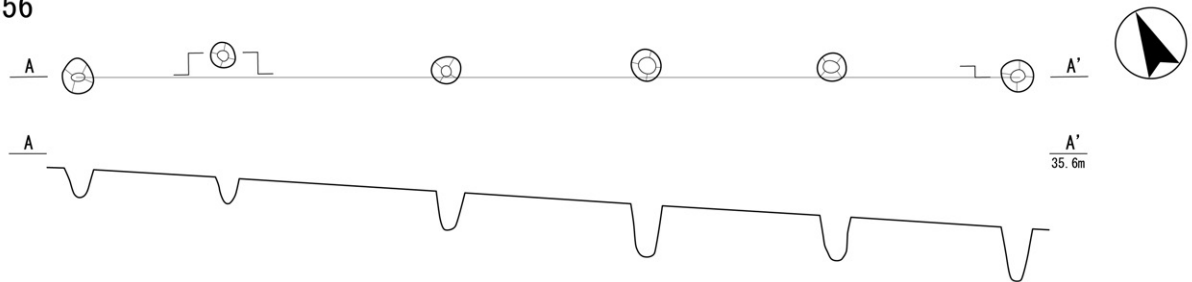
時期は奈良時代と考えられる。

S A 358 (第211図) 第3次調査区の中央部で検出した柱列である。斜面中位に位置しており、S A 357と一部並列する。6基の柱穴で構成され、長さ7.5mほどある。

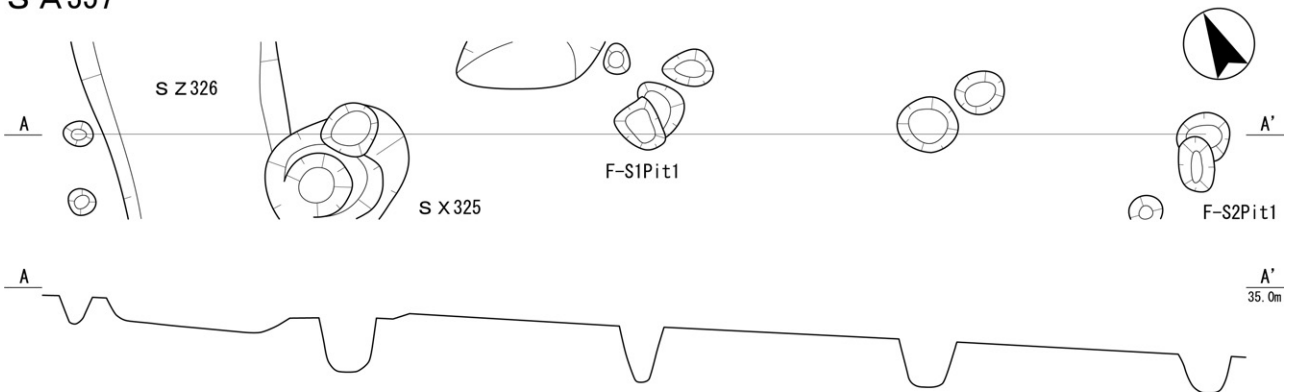
柱間は西側の3間では1.4m前後で比較的均等であるが、東側の2間は1.7m前後とやや広い。東側の2基の柱穴は、若干北側にずれて並ぶことや、深さがかなり浅いことを鑑みると、本来は西側の4基の柱穴で構成される4.1mほどの長さの柱列の可能性も考えられる。

遺物は、F-S1Pit2とF-S1Pit3から土師器甕が出土している。

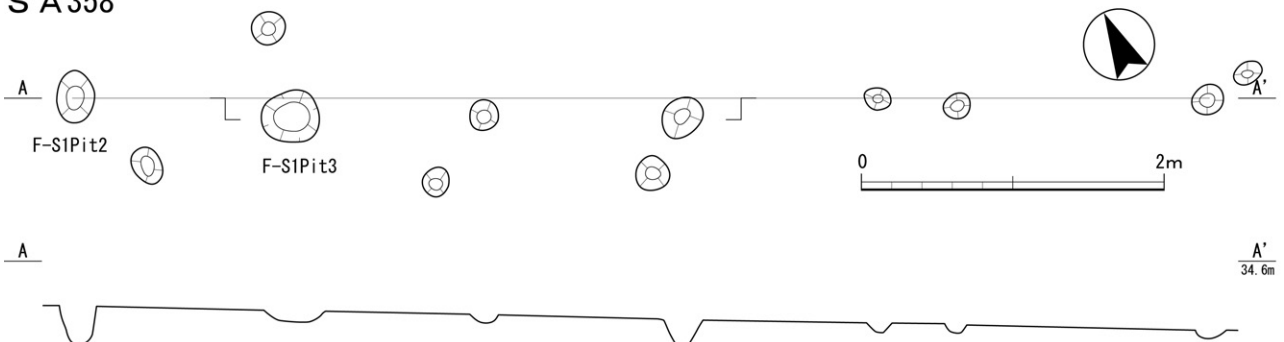
S A 356



S A 357



S A 358



第211図 S A 356~358 (1/50)

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

(2) 土坑

SK257 (第212図) 第2次調査区の西部で検出した土坑である。SB292のすぐ西側に位置する。平面形は長軸1.9m、短軸1.0mほどの不整形な杓文字形に近い形を呈するが、後述のように2基の土坑が重複しているため、平面形が不整形になっている可能性もある。深さは0.3mほどある。

壁面は緩やかに立ち上がる。底面は、南側がやや深くなっているが、土層断面からみると、南側の深い部分と(B-B'断面第3～5層)、北側の浅い部分は(B-B'断面第1・2層)、別の土坑と考えられる。

遺物は、埋土から須恵器や土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

SK258 (第212図) 第2次調査区の西部で検出した土坑である。平面形は長径1.6m、短径0.7mの隅丸方形に近い楕円形を呈する。深さは0.4mほどある。

壁面はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈する。形態や規模などを鑑みると、埋葬施設の可能性もあるが、木棺痕跡などは確認できなかった。

遺物は、埋土から須恵器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

SK261 (第212図) 第2次調査区の中央部で検出した土坑である。斜面の裾部に位置しており、SK263及びSD262と一部重複する。SK263よりは後出する可能性が高いが、SD262との新旧関係は明確ではなく、本来は一体的な遺構であった可能性も考えられる。平面形は長軸・短軸ともに3.4mほどの不整形な方形ないし半円形を呈すると思われるが、西側については明瞭な掘形が検出できず、当該遺構の範囲が判然としない。そのため、全体の形状には不明瞭な部分がある。土坑というよりは斜面裾部をカットして平坦面を確保した段状遺構に近いものとも思われ、その場合は南西部などには元々明確な掘り込みがなされていなかったとも考えられる。深さ

は0.4mほどある。

斜面上方にあたる北東側の壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は不整形ながら階段状を呈しており、南西部の最下段では比較的広い平坦面が造り出されている。また、南西部にはSD262から続くようにピットが並ぶ。柱列などが存在した可能性もあるが、SK261との関係は不明である。

遺物は、埋土から須恵器や灰釉陶器、土師器がかなり多く出土している。灰釉陶器の碗や段皿には遺存状況が良好なものもみられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は平安時代前期と考えられる。

SK263 (第212図) 第2次調査区の中央部で検出した土坑である。SK261及びSD262と重複しており、SK261に先行する可能性が高い。平面形は長径1.7m、短径1.1mの不整形な楕円形を呈する。深さは0.4mほどある。

斜面上方にあたる北東側の壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。他の壁面は緩やかに立ち上がっており、全体的に浅い皿状を呈する。北側の底面付近からは、長径10～20cmほどの礫が集中的に検出された。人為的に入れられたものと思われる。

遺物は、埋土から灰釉陶器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は平安時代前期と考えられる。

SK297 (第213図) 第2次調査区の西部で検出した土坑である。平面形は長径1.6m、短径0.7mの隅丸方形に近い楕円形を呈する。深さは0.4mほどある。

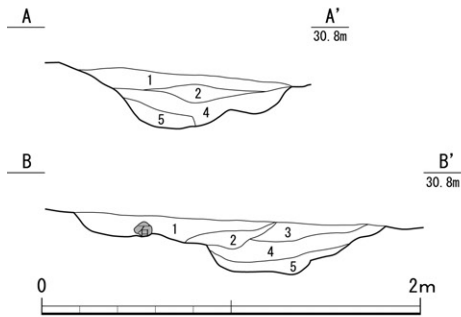
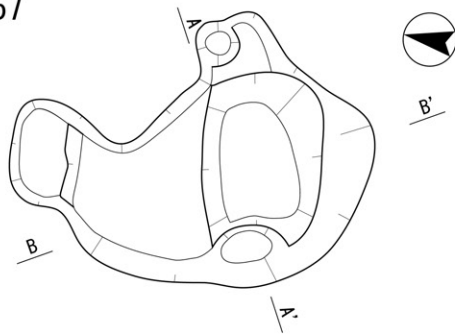
壁面はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈する。形態や規模などを鑑みると、埋葬施設の可能性もあるが、木棺痕跡などは確認できなかった。

遺物は、埋土から須恵器や土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

SK321 (第213図) 第3次調査区の西部で検出した土坑である。斜面に位置している。溝状の遺構ないし落ち込みと重複しており、掘形を明確に検出することができなかった。そのため、溝状遺構の底面で検出された、長軸1.4m、短軸0.9mほどの平面形

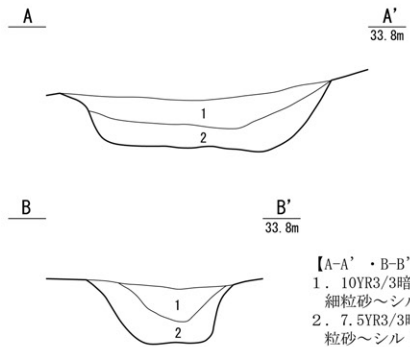
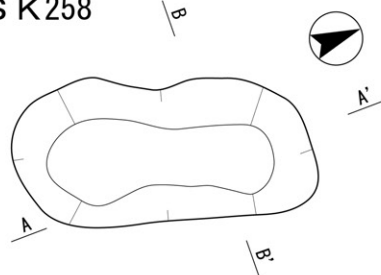
S K 257



【A-A'・B-B'断面】

1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト
2. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトと10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルトが斑状に混じり合う
3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトと10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルトが斑状に混じり合う
4. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルトを斑状に含む
5. 10YR4/2灰黄色粗粒砂～シルト

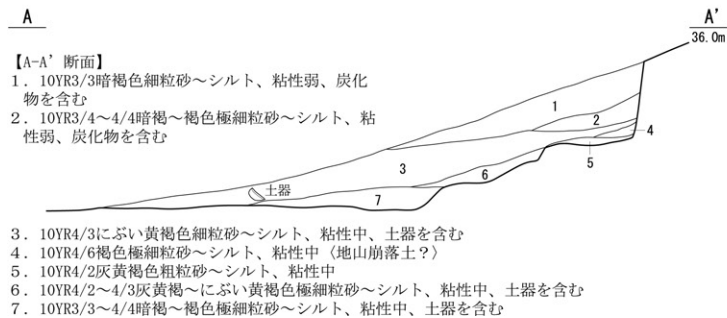
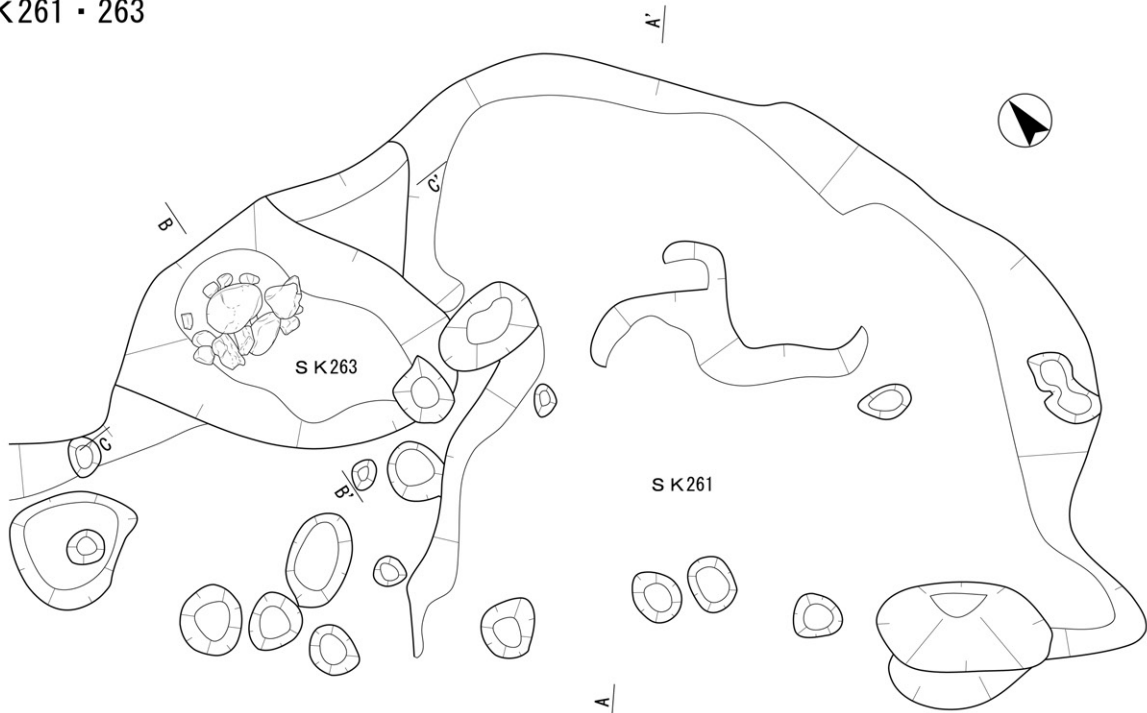
S K 258



【A-A'・B-B'断面】

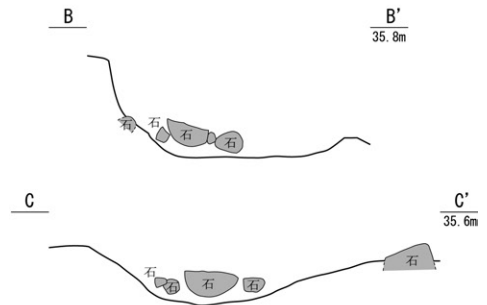
1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト
2. 7.5YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト

S K 261・263



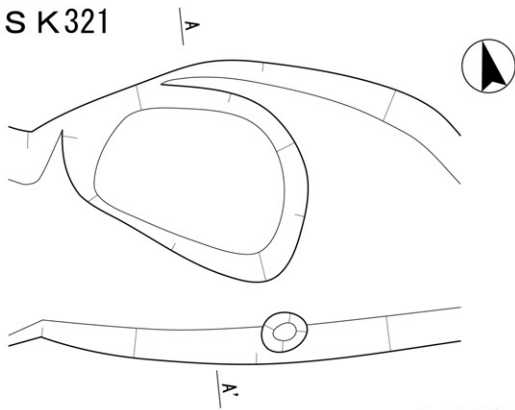
【A-A'断面】

1. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、粘性弱、炭化物を含む
2. 10YR3/4～4/4暗褐色～褐色極細粒砂～シルト、粘性弱、炭化物を含む
3. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粘性中、土器を含む
4. 10YR4/6褐色極細粒砂～シルト、粘性中（地山崩落土？）
5. 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～シルト、粘性中
6. 10YR4/2～4/3灰黄褐色～にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粘性中、土器を含む
7. 10YR3/3～4/4暗褐色～褐色極細粒砂～シルト、粘性中、土器を含む

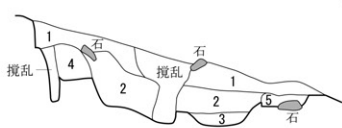


第212図 S K 257・258・261・263 (1/40)

S K 321



A

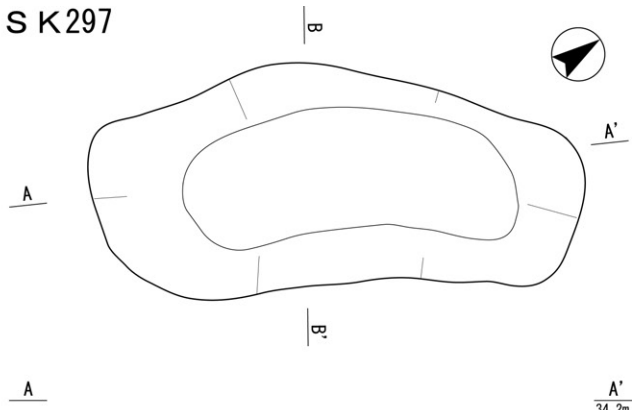


1. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト
2. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト
3. 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～シルト
4. 10YR3/1黒褐色極細粒砂～シルト
5. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト

A'

35.6m

S K 297



A

A'

34.2m



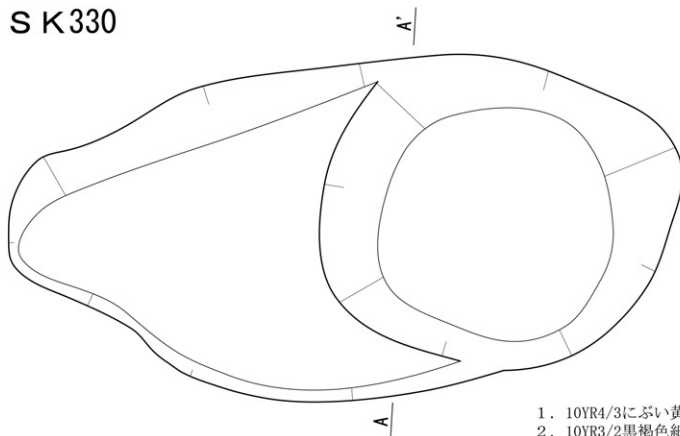
1. 10YR2/1黒色極細粒砂～シルト、粘性弱
2. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルト、粘性やや弱、～20cmの礫を多く含む

B

B'

34.2m

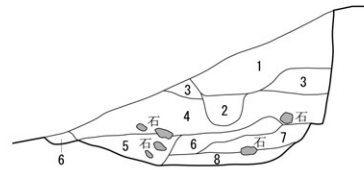
S K 330



A

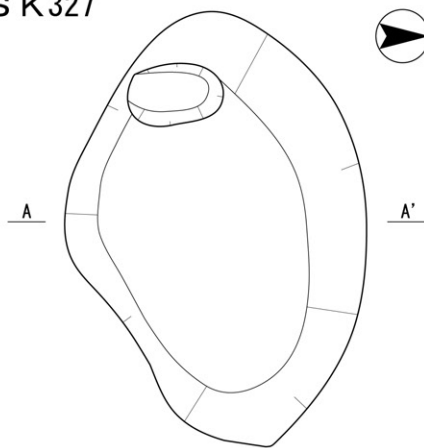
A'

38.0m



1. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、10YR6/8明黄褐色シルトブロックを多く含む
2. 10YR3/2黒褐色細粒砂～シルト
3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、10YR6/8明黄褐色シルトブロックを多く含む
4. 10YR3/1黒褐色極細粒砂～シルト、10YR6/8明黄褐色シルトブロックを多く含む、礫を含む
5. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト、10YR6/8明黄褐色シルトブロックを含む
6. 10YR4/4褐色シルト
7. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂～シルト
8. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂～シルト、10YR6/8明黄褐色シルトを多く含む

S K 327

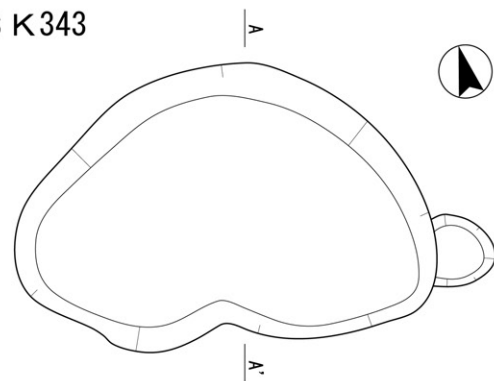


A

A'

35.6m

S K 343



A

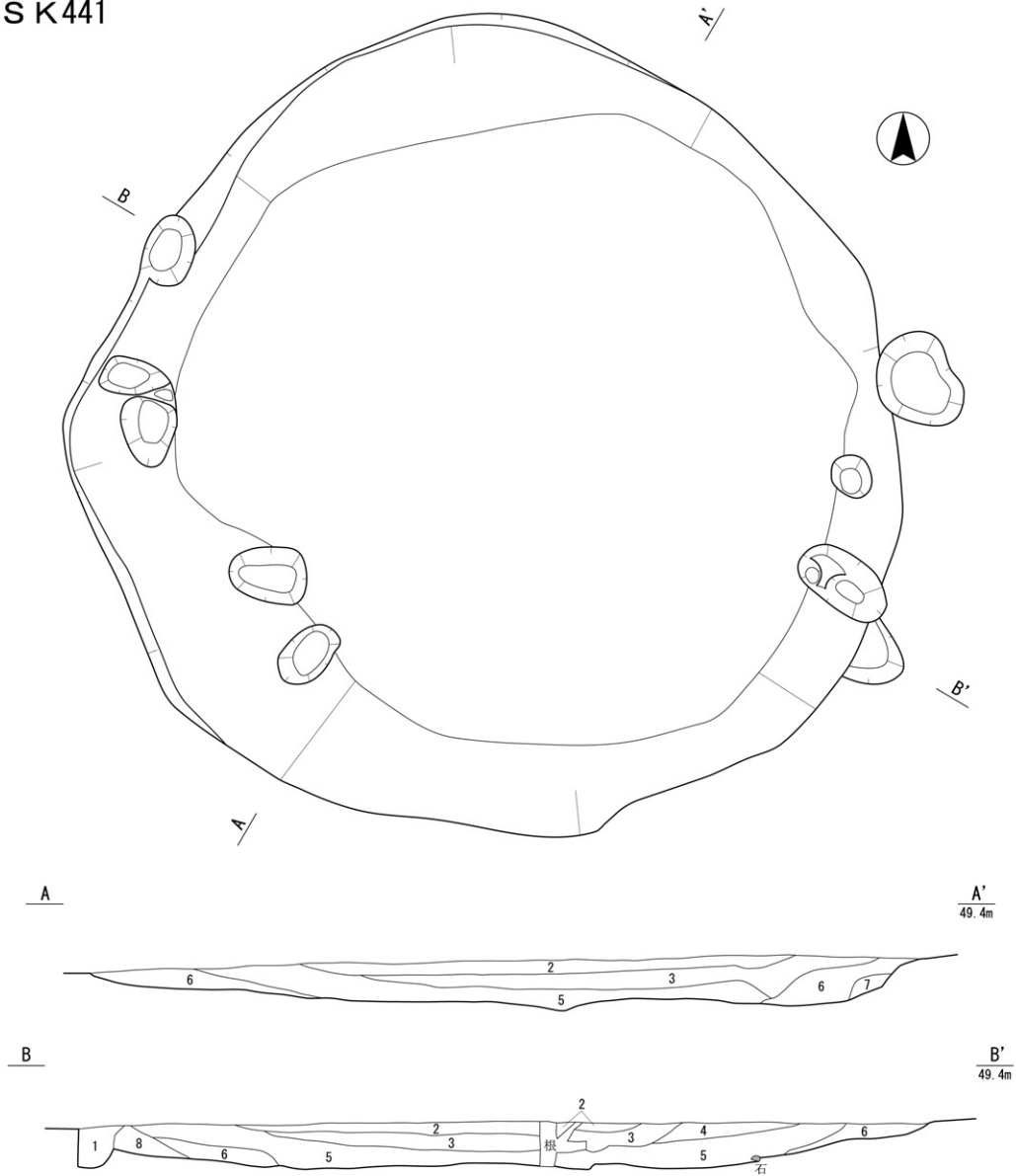
A'

33.6m

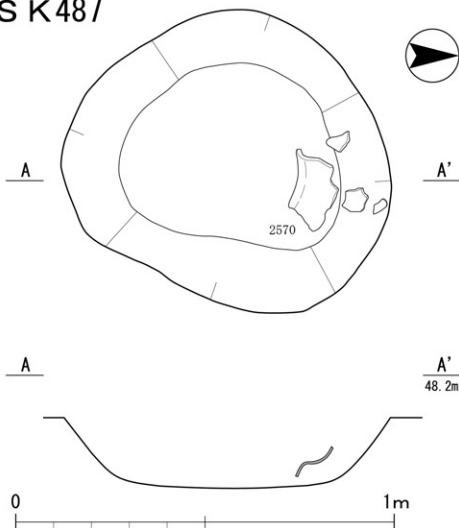


第213図 S K 297・321・327・330・343 (1/40)

S K441



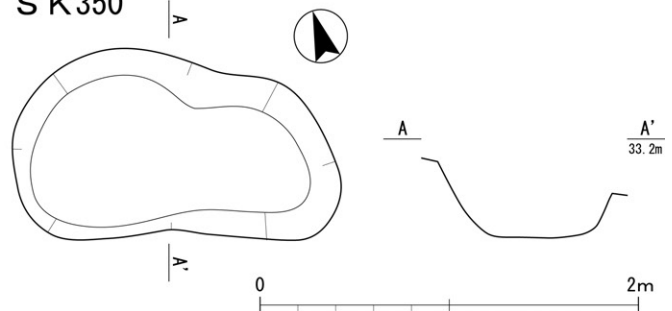
S K487



【A-A'・B-B'断面】

1. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR4/3～4/4にぶい黄褐～褐色極細粒砂、しまり中、粘性やや弱
3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
4. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルトと10YR4/3～4/4にぶい黄褐～褐色極細粒砂が混じり合う、しまり中、粘性中
5. 10YR3/4～4/4暗褐～褐色極細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
6. 10YR4/4～4/6褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性強
7. 10YR4/6褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
8. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強

S K350



第214図 S K350・441・487 (1/40、1/20)

が隅丸方形を呈する落ち込みを中心として土坑が存在したと推測するにとどまる²⁾。土層断面からみると、溝状遺構より新しい掘り込みが存在するように見受けられる（第2・3層）。深さは0.2mほどと思われる。

壁面はやや急に立ち上がっていた可能性が高い。

遺物は、埋土から須恵器や土師器が比較的多く出土している。須恵器には複数の器種がみられる。また、土師器には赤彩が施されたものがある。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

S K 327 (第213図) 第3次調査区の中央部で検出した土坑である。斜面に位置しており、S Z 329と重複し、この段状遺構より後出する。平面形は長径2.3m、短径1.6mのやや不整形な楕円形を呈する。深さは斜面上方にあたる部分で0.6mほどある。

壁面はかなり急に立ち上がり、底面は比較的平坦である。底面西側ではピットが検出されているが、この土坑と関係するものかは不明である。

遺物は、埋土から須恵器が出土している。大型の横瓶(2559)などがある。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

S K 330 (第213図) 第3次調査区の中央部で検出した土坑である。斜面に位置する。平面形は長径3.6m、短径1.8mのやや不整形な楕円形を呈する。かなり大型の土坑で、深さは斜面上方にあたる部分で0.8mほどと深い。

斜面上方にあたる北東側の壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は比較的平坦で、東側は一段深くなっている。ただし、土層断面からみると、この深くなっている部分では下層に別の土坑が重複している可能性がある（第6～8層）。埋土からみても、第1～5層にはシルトブロックがかなり含まれているが、下層の土坑の埋土と思われる第6～8層にはこうしたシルトブロックの包含が明瞭ではなく、差異が認められる。

遺物は、埋土から須恵器や弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は飛鳥～奈良時代と考えられる。

S K 343 (第213図) 第3次調査区の西部で検出した土坑である。斜面に位置する。平面形は長径2.2m、短径1.4mのやや不整形な楕円形を呈する。深さは0.2mほどある。

壁面は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

採集されたものではあるが、採集位置などからみてこの土坑に伴うと考えられる遺物として、須恵器壺蓋がある。この遺物からみて、遺構の時期は奈良時代の可能性が高い。

S K 350 (第214図) 第3次調査区の西部で検出した土坑である。斜面に位置する。平面形は長径1.8m、短径0.9mの不整形な隅丸方形に近い楕円形を呈する。深さは0.4mほどある。

壁面はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。

遺物は、埋土から須恵器や土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

S K 441 (第214図) 第4次調査区の中央部で検出した土坑である。平面形は径4.4mの円形を呈する。大型の土坑で、深さは0.2mほどある。

壁面はかなり緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。内部からは数基のピットが検出されているが、この土坑と関係するものかは不明である。

遺物は、埋土から須恵器が出土している。甕の口縁部が複数みられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

S K 487 (第214図) 第4次調査区の西部で検出した土坑である。平面形は長径0.9m、短径0.7mの楕円形を呈する。深さは0.2mほどある。

壁面は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

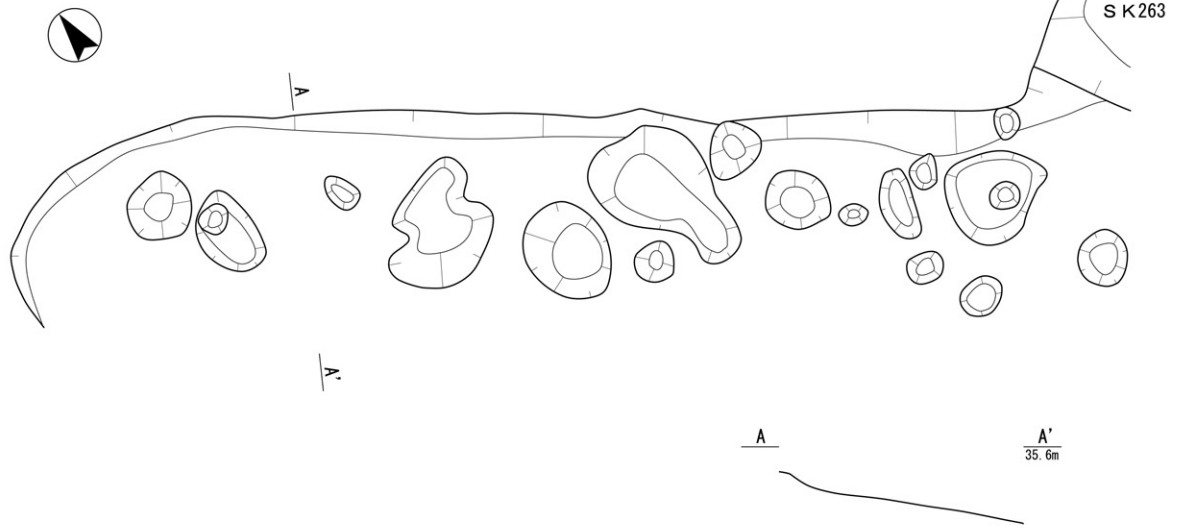
遺物は、北側の底面付近から土師器甕(2570)の大きな破片が出土した。埋土からも土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

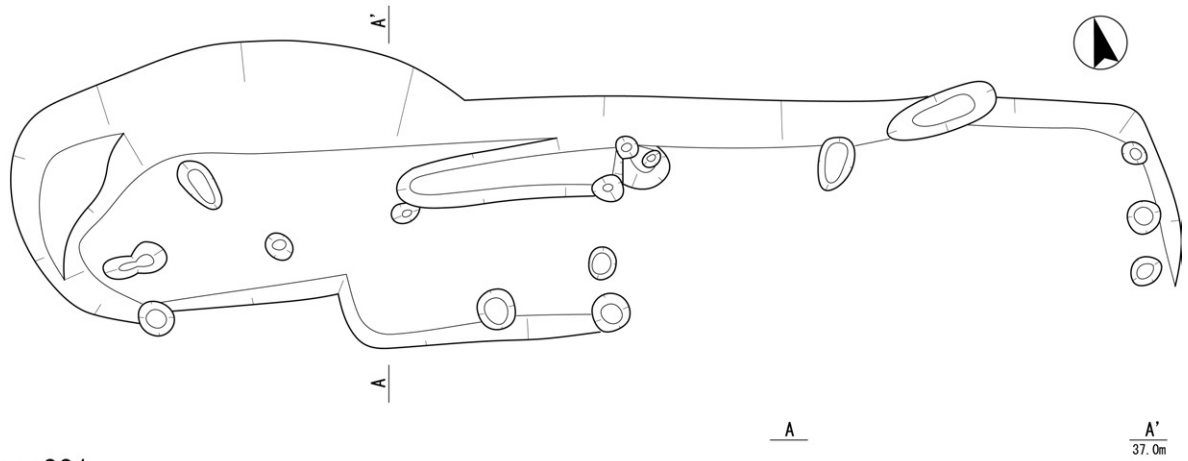
(3) 溝

S D 262 (第215図) 第2次調査区の中央部で検出

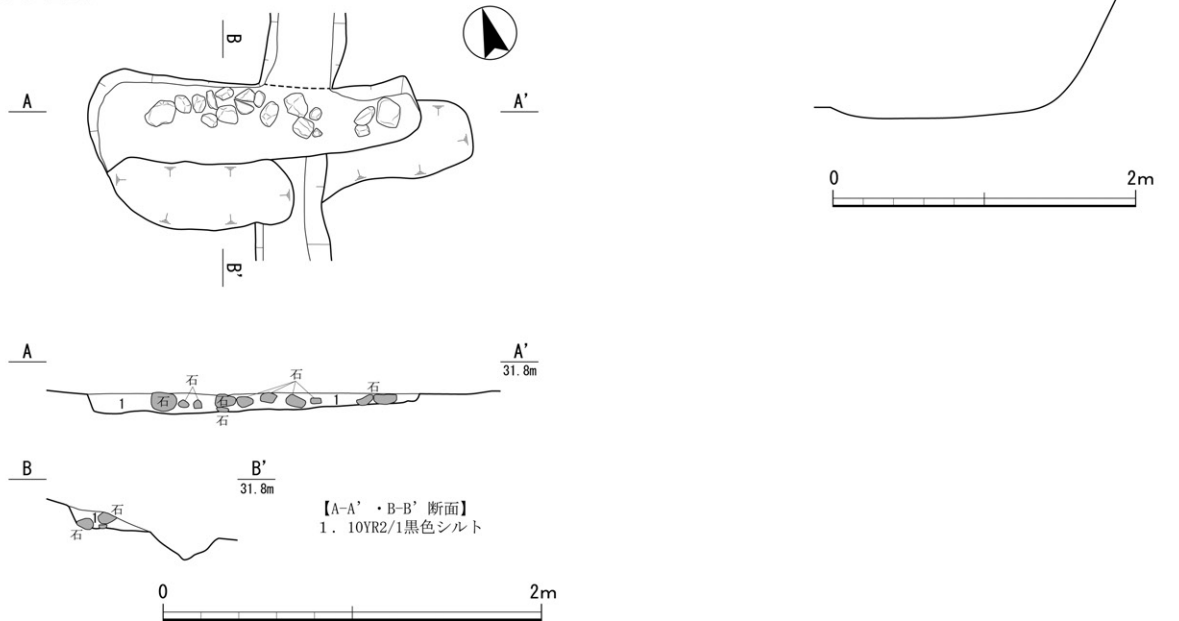
S D262



S D322



S D281



第215図 S D262・281・322 (1/50、1/40)

した溝である。斜面に位置する。S K 261と一部重複すると思われるが、重複状況や新旧関係は明瞭ではなく、あるいは一連の遺構の可能性もある。長さ6.8m、幅1.3mほどの直線的な溝であるが、斜面下方にあたる南側の掘形は明瞭ではなく、斜面をカットするように掘り込まれた段状遺構のようなものとも考えられる。深さは0.1mほどと浅い。

壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。底面からは、多数のピットが検出されている。不整形なものが多く、明確な列状には並んでいないため、柱列とは考えにくい。S D 262の内部を中心にピットが検出されているため、この溝と何らかの関係があるものと思われる。

遺物は、埋土から須恵器が出土している。大型の甕(2574)がみられ、体部片がまとまって検出されている。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代後期～平安時代前期と考えられる。

S D 281 (第215図) 第2次調査区の西部で検出した溝である。南側は攪乱によって削平を被っている。長さ1.8m、幅0.4mほどの短く直線的な溝で、土坑とした方がよいかもしれない。深さは0.1mほどと浅い。

壁面はやや急に立ち上がり、両端部の壁面も同様である。底面は平坦である。埋土中には礫が多数含まれていた。底面付近からまとまって検出されたため、人為的に入れられた可能性が高いが、意図的に並べたような状況は認められない。付近に存在するS Z 282とは礫の検出状況などの点で類似するようと思われる。

遺物は全く出土していないが、調査時に埋土の状況や斜面に位置する点などから遺構の時期は奈良～平安時代の可能性が高いと考えられた。ただし、S Z 282が弥生時代後期～古墳時代前期の遺構とすれば、その時期の遺構の可能性も考えられる。

S D 302 (第216図) 第3次調査区の西部で検出した溝である。斜面上方に位置する。S H 309及びS Z 335と一部重複する。これらの遺構より後出すると思われるが、明確ではない。調査時には、S H 309より西側にあたる部分は別遺構(S K 334)と考えていたが、S H 309の東側のS D 302と同様の形態で、

時期も近いと考えられるため、一連の溝状遺構とした。長さ18.4m、幅2.5mほどの直線的な溝であるが、斜面下方にあたる南側の掘形は明瞭ではなく、斜面をカットするように掘り込まれた段状遺構のようなものとも考えられる。深さは0.2mほどある。

壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。内部からはわずかにピットが検出されているが、この溝と関係するものかは不明である。

遺物は、埋土から須恵器や土師器、弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代後期と考えられる。ただし、北山城跡のⅢ郭の裾部に位置しており、Ⅰ郭裾部の堀とも考えられるS D 301と接すること、かなり規模が大きいことなども鑑みれば、北山城跡と関係する室町時代後期の遺構の可能性も考えられる。

S D 311 (第216図) 第3次調査区の西部で検出した溝である。斜面に位置する。S H 305・306と一部重複し、これらの建物より後出する可能性が高い。長さ10.8m、幅0.8～1.3mほどの直線的な溝であるが、南端部付近はやや屈曲する。立地や形態的には段状遺構にも似るが、他の段状遺構とは異なって斜面と斜行するように掘り込まれており、溝とするのが妥当と思われる。深さは0.2mほどある。

壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。底面からは、ピットなどはほとんど検出されていない。中央部は若干深くなっており、東側の掘形のラインにも歪みが認められるため、攪乱もしくは別の遺構などが重複している可能性もある。

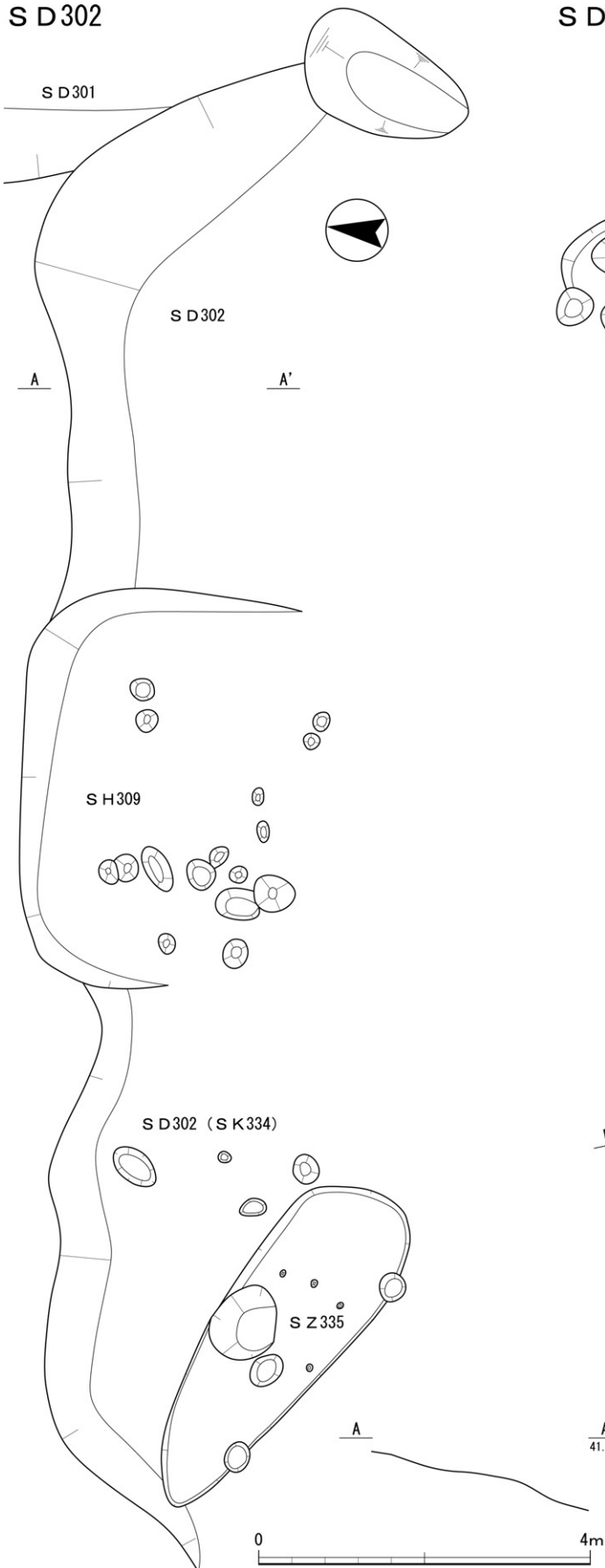
遺物は、埋土から須恵器や灰釉陶器、弥生土器・土師器が出土している。ただし、灰釉陶器は小片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は平安時代前期と考えられる。

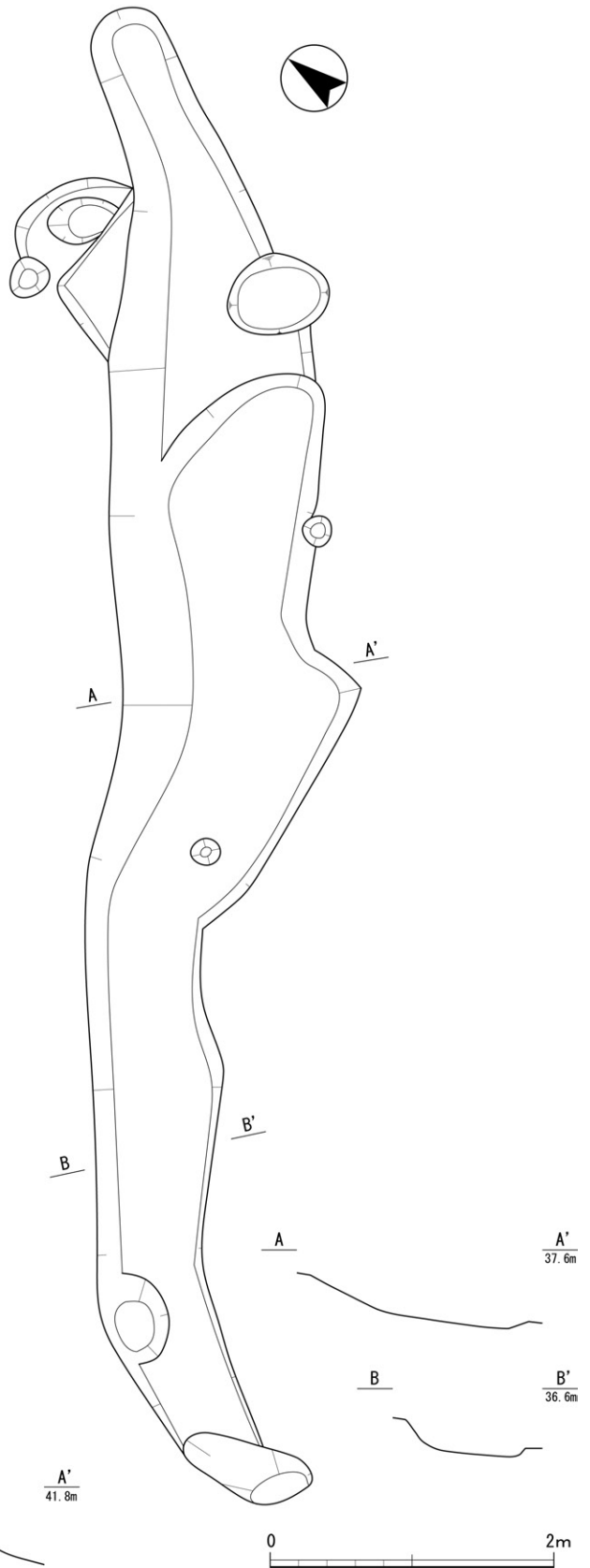
S D 322 (第215図) 第3次調査区の西部で検出した溝である。斜面に位置する。長さ7.7m、幅1.6mほどの、やや幅が広い直線的な溝である。立地や形態は段状遺構にも似る。深さは斜面上方側では0.8mほどとかなり深い。斜面の下方側ではごく浅くなっている。

壁面は比較的急に立ち上がり、底面は平坦である。

S D 302



S D 311



第216图 SD302・311 (1/80、1/50)

内部からはピットが複数検出されているが、この溝と関係するものかは不明である。

遺物は、埋土から須恵器や土師器が出土している。土師器には内面に螺旋状の暗文や赤彩を施した皿がある。

出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代後期～平安時代前期と考えられる。

註

1) 土層断面では確認されていないが、土層断面図を作成した位置が、柱痕ないし柱の抜き取り痕から少し外れていたためと思われる。

2) 調査時には、溝状遺構の西端付近にも重複する土坑状の遺構が存在すると認識されており、一時はこれをS K321としていた可能性がある。その後、これは土坑ではなかったと判断されたようだが、調査記録には若干の混乱が認められる。

第2節 遺物

(1) 掘立柱建物・柱列出土遺物

S B 266 (第217図2480～2485) 2480～2483はJ-B6 Pit1から出土した須恵器である。

2480・2481は坏蓋である。2480は口縁部付近でわずかに外湾し、口縁端部は短く屈曲する。2481は2480より器高が低い。

2482・2483は壺の体部である。2482は肩が張る器形を呈する。頸部の締めりは弱く、短頸壺などの可能性が考えられる。

2484・2485はJ-B6Pit1から出土した土師器である。

2484は皿の口縁部から底部付近にかけての破片で、口縁端部は丸く収められ、内面が浅く沈線状に凹む。外面には粘土接合痕とオサエが残る。2485は壺の口縁部の小片と思われる。直立気味に上方へのび、口縁端部付近でわずかに外反する。内面には沈線状の凹みが認められるが、ヨコナデに伴うものと思われる。弥生土器・土師器のく字状口縁甕の可能性もある。

S B 269 (第217図2486～2488) 2486はJ-A21Pit1から出土した須恵器である。やや大型の壺の体部で、肩部は明瞭に屈曲する。外面には平行タタキが施されており、内面には同心円状の当て具痕が認められる。

2487・2488はJ-A21Pit1から出土した土師器である。2487は甕の口縁部で、口縁端部は面をなす。2488は鍋と思われる。頸部から体部上半にかけてが遺存している。体部は肩が張らない器形を呈し、頸部の締めりは弱い。外面には粗いハケが施されている。

S B 292 (第217図2489) 2489はJ-C3Pit2から出土した弥生土器・土師器である。台付甕の脚台部で、

外面には粗いハケが施されている。弥生時代後期～古墳時代前期のもので、埋土中に混入したと思われる。

S B 293 (第217図2490～2493) 2490・2491はJ-C5 Pit3から出土した土師器である。

2490は甕の口縁部の小片で、口縁端部は面をなす。2491も甕の口縁部と思われるが、碗などの可能性もある。内湾し、口縁端部は外方へ短く屈曲し、丸く収められる。

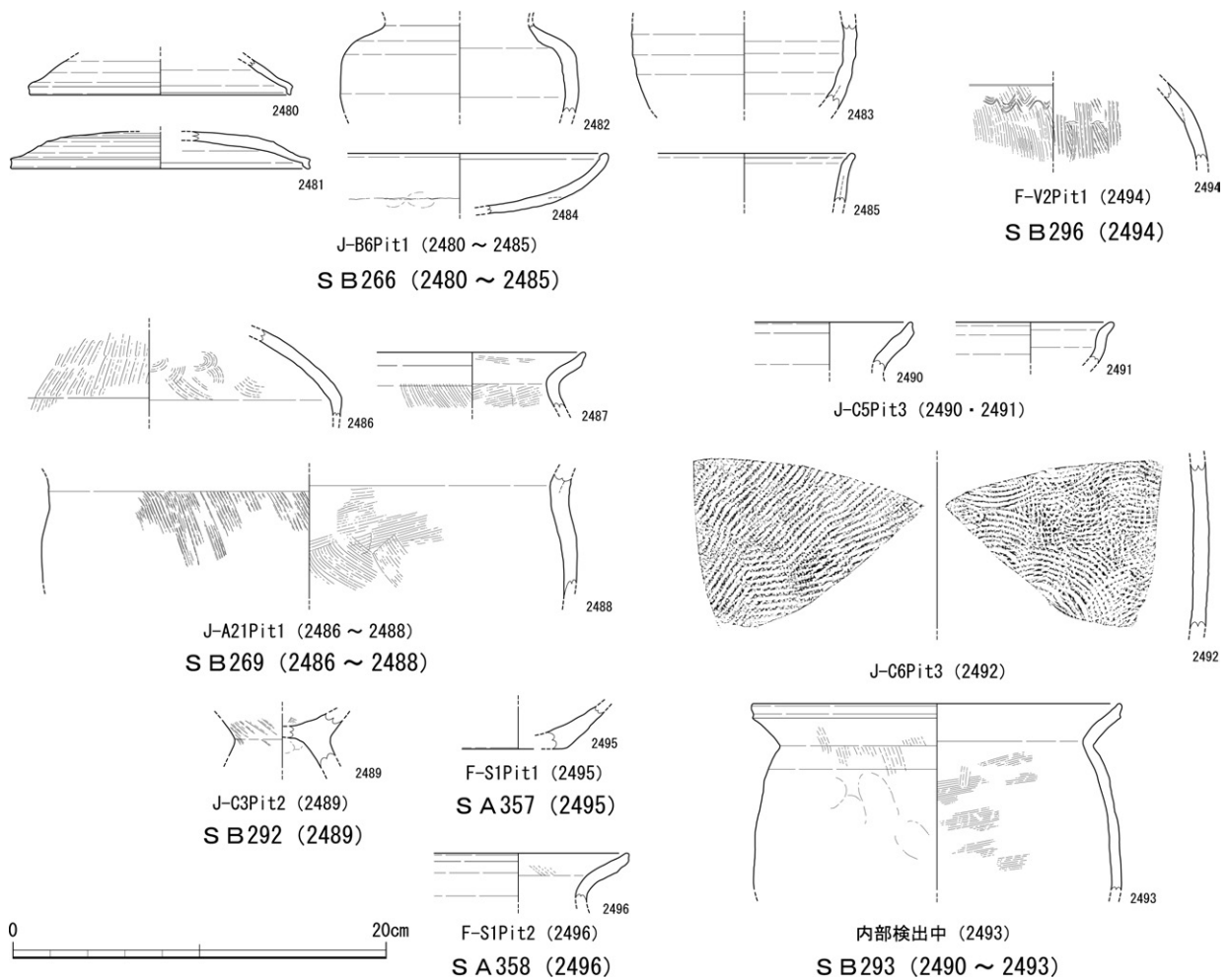
2492はJ-C6Pit3から出土した須恵器である。甕の体部の小片で、外面には擬格子状タタキが施されており、内面には同心円状の当て具痕が顕著に残る。

2493はS B 293の内部の検出中に出土した土師器で、S B 293と関連する遺物の可能性がある。甕で、口縁部から体部上半にかけて遺存している。体部は肩が張らない器形を呈し、頸部の締めりはやや弱い。口縁部はわずかに外反しながら開き、口縁端部は面をなす。体部外面にはオサエやナデが施されている。

S B 296 (第217図2494) 2494はF-V2Pit1から出土した弥生土器・土師器である。壺の体部の小片で、外面には波状文と直線文が一部遺存している。弥生時代後期～古墳時代前期のもので、埋土中に混入したと思われる。

S A 357 (第217図2495) 2495はF-S1Pit1から出土した弥生土器・土師器である。壺の底部の小片である。弥生時代後期～古墳時代前期のもので、埋土中に混入したと思われる。

S A 358 (第217図2496) 2496はF-S1Pit2から出土した土師器である。甕の口縁部で、口縁端部は面をなす。外面にはわずかにススが付着しているように見受けられる。



第217図 S B 266・269・292・293・296、S A 357・358出土遺物 (1/4)

(2) 土坑出土遺物

S K 257 (第218図2497・2498) 2497は須恵器である。坏の体部の小片と思われる。器壁は比較的薄い。

2498は土師器である。小型の甕の把手と思われ、平面形が三角形を呈する扁平なものである。

S K 258 (第218図2499) 2499は須恵器である。坏蓋で、口縁部付近で若干外反し、口縁端部は短く屈曲する。外面にはロクロケズリがわずかに遺存している。

S K 261 (第218図2500~2540) 2500~2520は須恵器である。

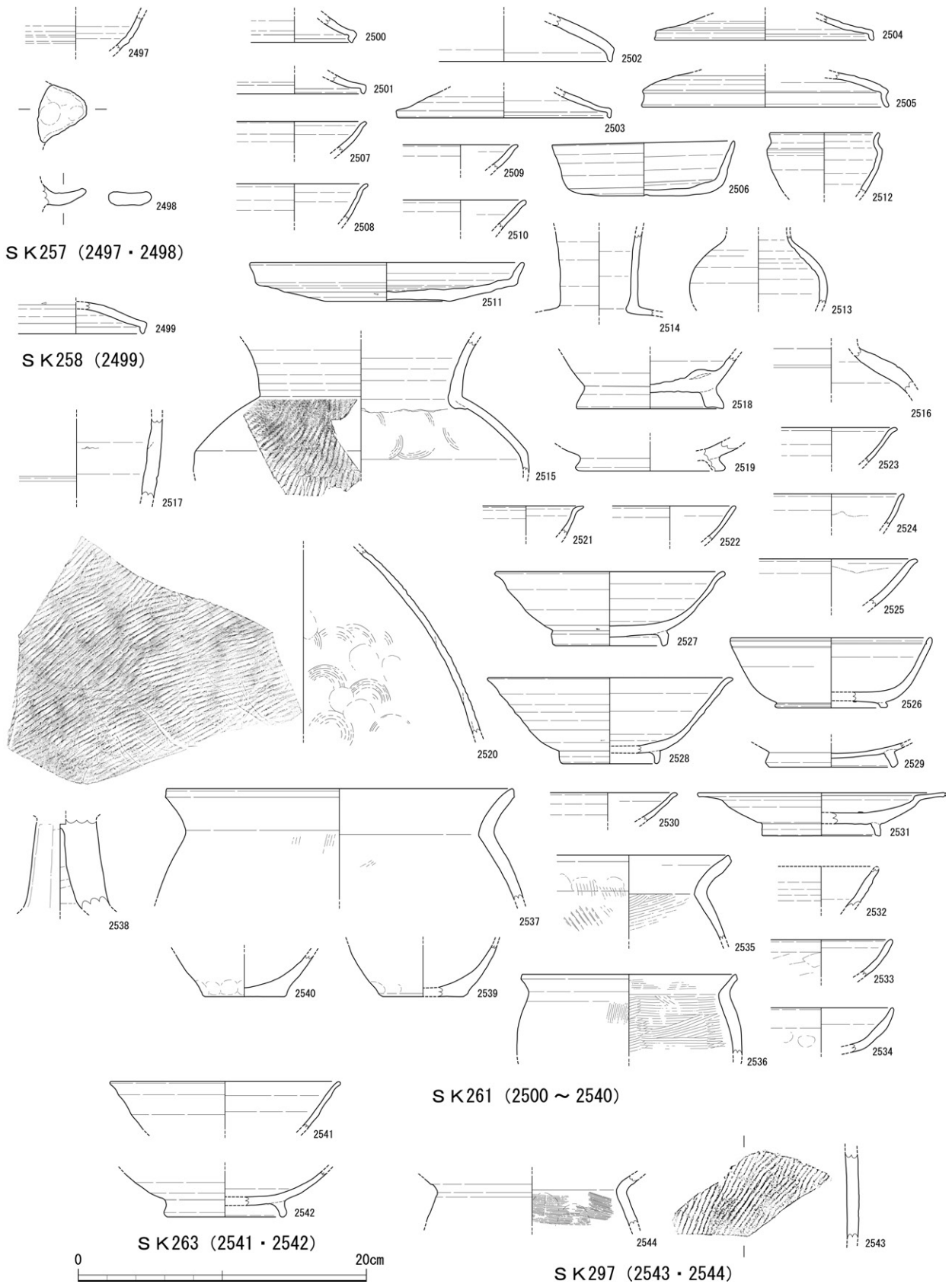
2500~2505は坏蓋である。2500は口縁端部が強く屈曲して内傾し、面をなす。2502は器壁が厚い。風化のため、調整は不明瞭である。土師質に焼成されており、器壁も厚い。土師器の可能性もある。2503

は器壁が薄い。2505は口縁部付近で強く屈曲し、口縁部は外反する。坏蓋として図化した。皿とする方が妥当かもしれない。ただし、遺存部分では高台が貼り付けられていた痕跡は認められない。

2506~2510は坏である。2506は底部から体部・口縁部が強く屈曲して直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収められる。底部外面にはロクロケズリが施されている。2507~2510は口縁部の小片で、椀形に近い器形を呈すると思われる。2508は器壁が薄く、口縁端部が外反する。2509・2510は内面が使用等によって摩耗しているように見受けられる。

2511は皿である。口縁部は強く屈曲してわずかに外反しながら直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収められる。底部外面にはロクロケズリが施されており、浅く凹む。

2512~2519は壺である。2512は小型の短頸壺で、



第218図 S K 257 · 258 · 261 · 263 · 297出土遺物 (1/4)

鉢とする方が適当かもしれない。体部は肩が張る器形を呈し、口縁部は短く外反する。2513は小型の壺の体部である。2514は長頸壺の頸部付近の破片である。2515は広口壺の頸部から体部上半にかけての破片である。体部の肩部には明瞭な屈曲が認められる。外面には平行タタキが施されている。内面には同心円状の当て具痕が認められるが、擦り消されて不明瞭となっている。2516・2517は体部の破片である。外面には沈線が認められる。2518・2519は底部で、高台が貼り付けられている。

2520は甕である。外面には平行タタキが施されている。内面には同心円状の当て具痕が認められるが、オサエ状の痕跡によってかなり消されている。

2521～2531は灰釉陶器である。

2521～2529は碗である。2521は口縁端部が外方へ屈曲する。2522は内面が使用等によって摩耗してするように見受けられる。2523は器壁が薄く口縁端部が外反する。2525は器壁が厚い。内面の施釉は口縁部付近にとどまる。2526はほぼ全形が復元できた。体部から口縁部にかけて直線的にのびており、口縁端部は丸く収める。口縁部内面には沈線が施されており、外面にも沈線状のものが認められる。高台は低く、やや矮小である。また、底部外面にはトチン痕と思われる痕跡が残る。2527・2528もほぼ全形が復元できた。体部から口縁部にかけて大きく外方へ開き、口縁部が緩やかに外反する。外面の底部付近にはロクロケズリが施されている。底部外面には三日月高台¹⁾が貼り付けられている。2529は底部である。器壁は薄い。

2530は皿と思われる。口縁部の小片である。

2531は段皿である。ほぼ全形が復元できた。底部の器壁は厚い。底部外面には角高台が貼り付けられている。内面には灰釉が施されており、見込みにはトチン痕が残る。

2532はいわゆるロクロ土師器と思われる。碗の小片で、内外面ともロクロナデが施されている。

2533～2538は土師器である。

2533・2534は坏である。2533は浅く皿に近い。口縁端部は丸く収められる。外面にはケズリが施されているものと思われる。2534は外面にオサエが残るが、口縁部付近はヨコナデで調整されている。

2535～2537は甕の口縁部から体部上半にかけての破片である。2535は口縁部はわずかに外反し、口縁端部は面をなす。2536は口縁部が短い。2537は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は面をなす。外面にはハケがわずかに遺存している。

2538は高坏の脚部である。器壁は厚く、外面はナデによって面取り状に調整されている。内面は棒状工具を回転させたような印象を受けるヨコナデが施されている。また、器壁の厚さには部位によってかなり違いが認められる。

2539・2540は弥生土器・土師器である。いずれも壺の底部で、外面には連続的なオサエが残る。同一個体の可能性もある。

S K 263 (第218図2541・2542) 2541・2542は灰釉陶器である。いずれも碗である。

2541は口縁部で、口縁端部はわずかに外反し、丸く収めている。内面には使用等による摩耗が認められる。2542は底部である。外面にはロクロケズリが施されている。内面は使用等によって摩耗してするように見受けられる。

S K 297 (第218図2543・2544) 2543は須恵器である。甕の体部の小片で、外面には平行タタキが施されている。内面はナデで調整されている。

2544は土師器である。甕の頸部付近の破片である。内面にはハケが施されている。

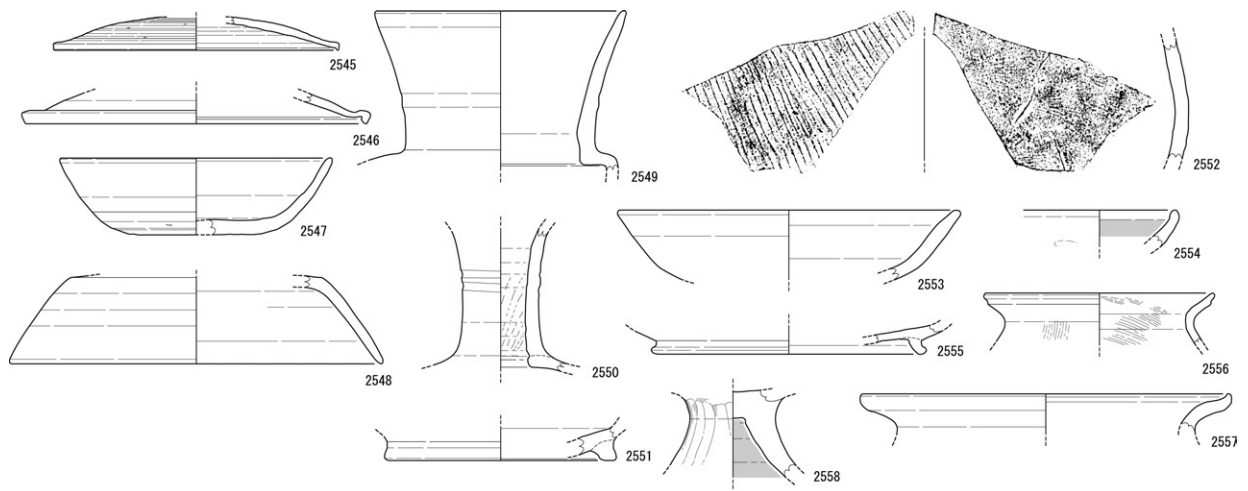
S K 321 (第219図2545～2558) 2545～2552は須恵器である。

2545・2546は坏蓋である。2545は器高が低い。口縁端部はわずかに屈曲する。2546は口縁部付近で比較的強く外反し、口縁端部は短く屈曲して面をなす。

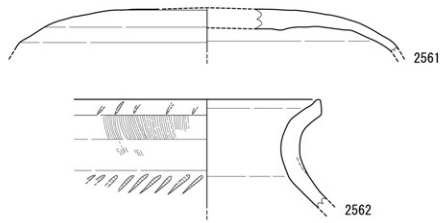
2547は坏である。底部から体部が緩やかに屈曲して直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収められる。底部外面にはロクロケズリが施されている。

2548は壺蓋と思われる。天井部は水平に近く、体部・口縁部は明瞭に屈曲して直線的に開く。口縁端部は丸く収められる。口縁部外面には帯状に降灰が認められる。坏の可能性もある。

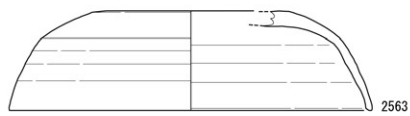
2549～2551は壺である。2549は平瓶の口縁部である。かなり大型のものである。2550は長頸壺の頸部付近の破片である。外面には凹線が認められる。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。2551は底部で高台が



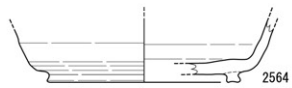
S K 321 (2545 ~ 2558)



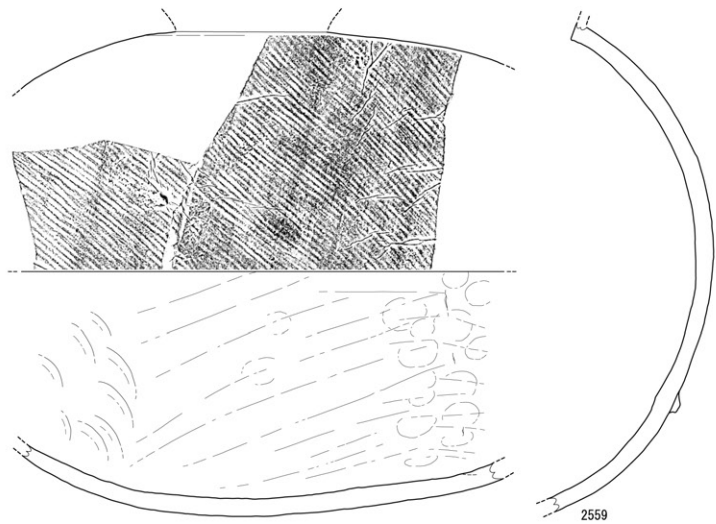
S K 330 (2561 · 2562)



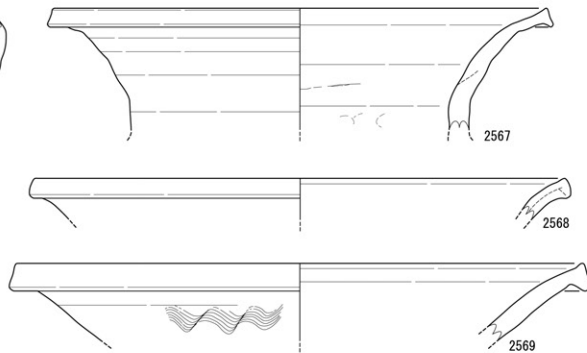
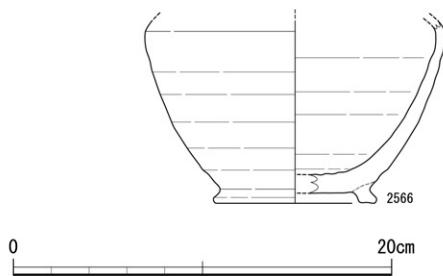
S K 343 ? (2563)



S K 350 (2564 · 2565)



S K 327 (2559 · 2560)



S K 441 (2566 ~ 2569)

第219図 S K 321 · 327 · 330 · 343 · 350 · 441出土遺物 (1/4)

貼り付けられている。

2552は甕である。体部の小片で、外面には平行タタキが施されている。内面には細い筋が放射状にのびるような特徴的な当て具痕が認められる。

2553～2558は土師器である。

2553は坏である。比較的浅く、器壁は厚い。

2554・2555は皿である。2554は口縁部の小片で、緩やかに内湾し、口縁端部は内側へ肥厚させている。内面には赤彩が施されている。2555は底部で、高台を貼り付けている。坏とも思われるが、底部径はかなり大きい。

2556・2557は甕である。2556は口縁部で、頸部の屈曲は緩く、口縁端部は面をなす。2557も口縁部の小片である。

2558は高坏の脚部である。外反しながらハ字状に大きく開く。外面はケズリによって面取り状に調整されている。脚部内外面及び坏部内面にはベンガラによる赤彩が施されている²⁾。

S K 327 (第219図2559・2560) 2559・2560は須恵器である。

2559は横瓶の体部である。頸部も一部遺存している。外面には平行タタキが施されており、内面には当て具痕とナデ、オサエが明瞭に残る。内面には粘土接合痕が認められ、その付近にオサエが集中的に施されており、製作時の成形単位を示すものと思われる。また、外面には別個体の須恵器の破片が融着している。2560は甕の体部片である。外面には平行タタキが施されており、内面には無文の当て具痕と思われる円形の浅い凹みが多数認められる。

S K 330 (第219図2561・2562) 2561は須恵器である。坏蓋で、やや大型のものと思われるが、器形の復元には不安を残す。

2562は弥生土器・土師器である。く字状口縁甕の口縁部から体部上半にかけての破片で、頸部の屈曲は緩く、口縁部は外反する。体部外面には列点文が施されている。破片の一部は、S K 321からも出土している。

S K 343? (第219図2563) 2563は須恵器である。壺蓋と思われる。天井部は水平に近く、体部・口縁部は比較的緩やかに屈曲して直線的に開く。口縁端部は不明瞭な面をなす。坏の可能性もある。

S K 350 (第219図2564・2565) 2564は須恵器である。坏で、底部から体部・口縁部が強く屈曲して直線的に立ち上がる。底部外面には低い高台を貼り付けている。

2565は土師器である。坏で、底部から体部・口縁部が比較的明瞭に屈曲して立ち上がり、外反しながら開く。口縁端部は丸く収める。遺存状況が悪く、調整などは不明である。

S K 441 (第219図2566～2569) 2566～2569は須恵器である。

2566は壺である。体部から底部にかけてが遺存している。体部は肩が明瞭に屈曲する。底部外面には高台が貼り付けられている。高台はハ字状に開き、畳付は浅く凹む。

2567～2569は甕の口縁部である。2567は全体的に外反しながら大きく開く。口縁端部は垂下させている。2569は直線的に外方へ開き、口縁端部は垂下させている。外面には波状文が施されている。また、内外面に黄土が塗布されている。

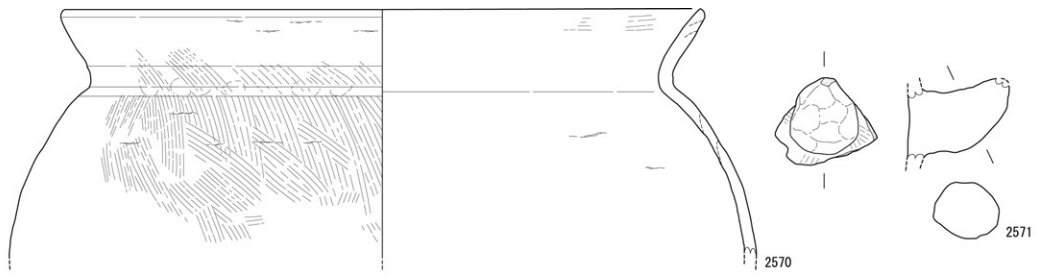
S K 487 (第220図2570・2571) 2570・2571は土師器である。

2570は甕で、大型のものである。口縁部から体部上半にかけて遺存している。体部は若干丸みを帯びる。口縁部は直線的に開き、口縁端部は面をなす。内外面とも粘土接合痕が目立つ。外面にはススが付着している。2571は甕の把手と思われる。甕の把手の可能性もある。

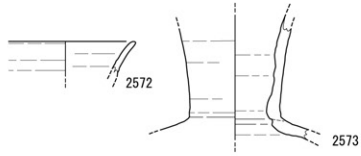
(3) 溝出土遺物

S D 262 (第220図2572～2574) 2572～2574は須恵器である。

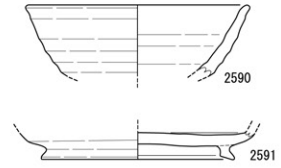
2572は碗ないし坏と思われる。口縁部の小片で、緩やかに外反し、口縁端部は丸く収められる。器壁は薄い。2573は長頸壺の頸部付近の破片である。頸部内面には体部と口縁部の接合痕が明瞭に残る。2574は甕である。体部下半の破片がかなり遺存している。体部はやや肩が張る縦長の球形の器形を呈すると思われる。底部は丸底である。外面には平行タタキが施されている。内面はケズリによって調整されているが、体部上半に近い部分には同心円状の当て具痕が残る。



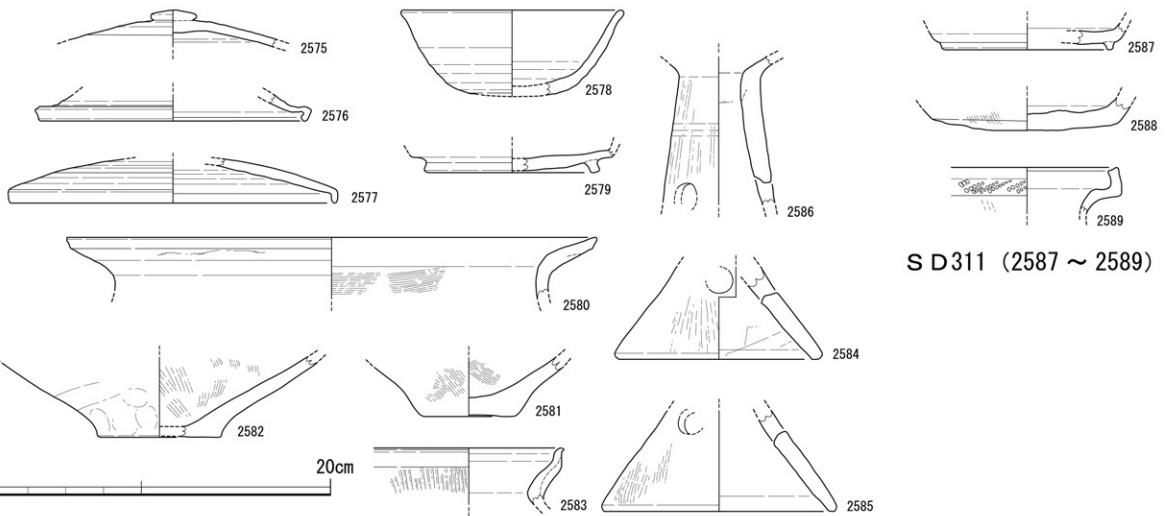
SK487 (2570・2571)



SD262 (2572 ~ 2574)



SD322 (2590 ~ 2594)



SD302 (2575 ~ 2586)

SD311 (2587 ~ 2589)

第220図 SK487、SD262・302・311・322出土遺物 (1/4)

S D302 (第220図2575~2586) 2575~2579は須恵器である。

2575~2577は坏蓋である。2575はボタン状の摘まみが貼り付けられている。2576は口縁部が明瞭に外反し、口縁端部は内側へ強く屈曲する。2577は全体的にわずかに内湾しながら開き、口縁端部は短く屈曲する。

2578・2579は坏である。2578は無高台のもので、ほぼ全形が復元できた。体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながらのび、口縁端部はやや外反する。底部外面にはヘラ切りの痕跡と思われるものが認められる。2579は底部で、底部から体部が強く屈曲して立ち上がると思われる。外面には高台が貼り付けられている。

2580は土師器である。甕の口縁部片で頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は直線的に大きく開く。口縁端部は面をなす。

2581~2586は弥生土器・土師器である。

2581・2582は壺の底部である。2581は内外面ともハケで調整されている。2582は外面の一部にケズリが施されている。

2583は受口状口縁甕の口縁部である。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁部上半は短く屈曲する。口縁端部は面をなし、わずかに外方へ引き出されている。

2584・2585は高坏の脚部である。2585は直線的に八字状に開く。内面にはススが付着しており、一部は二次的に被熱している。

2586は器台の脚部である。やや柱状を呈し、外面にはわずかに直線文が遺存する。

S D311 (第220図2587~2589) 2587・2588は須恵器である。

2587は坏の底部で、体部・口縁部は底部から強く屈曲して立ち上がると思われる。外面にはやや矮小な高台が貼り付けられている。2588は壺の底部と思われる。底部外面はわずかに丸みを帯び、ケズリが施されている。体部は底部から明瞭に屈曲して立ち上がり、屈曲部外面は稜をなす。屈曲部付近の外面にはハケ状の工具があたったような痕跡が残る。また、内面には降灰が認められる。

2589は弥生土器・土師器である。受口状口縁甕の口縁部で、口縁部は強く屈曲し、口縁部上半は内傾

する。外面には櫛状工具による列点文が施されている。胎土は細かく均一な大きさの砂粒が含まれているなど特徴的で、近江地域などからの搬入品の可能性がある。

S D322 (第220図2590~2594) 2590~2593は須恵器である。

2590・2591は坏である。2590は無高台の坏と思われる。体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながらのび、口縁端部はやや外反する。2591は底部で、底部から体部・口縁部が強く屈曲して立ち上がると思われる。外面には高台が貼り付けられている。高台は若干爪先立ちとなる。

2592・2593は壺である。2592は短頸壺の口縁部から体部上半にかけての破片である。肩部は丸みを帯び、頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は短く外反し、口縁端部は丸く収められる。2593は体部下半から底部にかけてが遺存する。底部外面には高台が貼り付けられている。2592と同一個体の可能性が高い。

2594は土師器である。皿で、かなり浅い。口縁部は緩やかに内湾し、口縁端部は内側へ肥厚させている。内外面ともミガキで調整されており、見込みには螺旋状の暗文が施されている。また、内面にはベンガラによる赤彩が認められる。

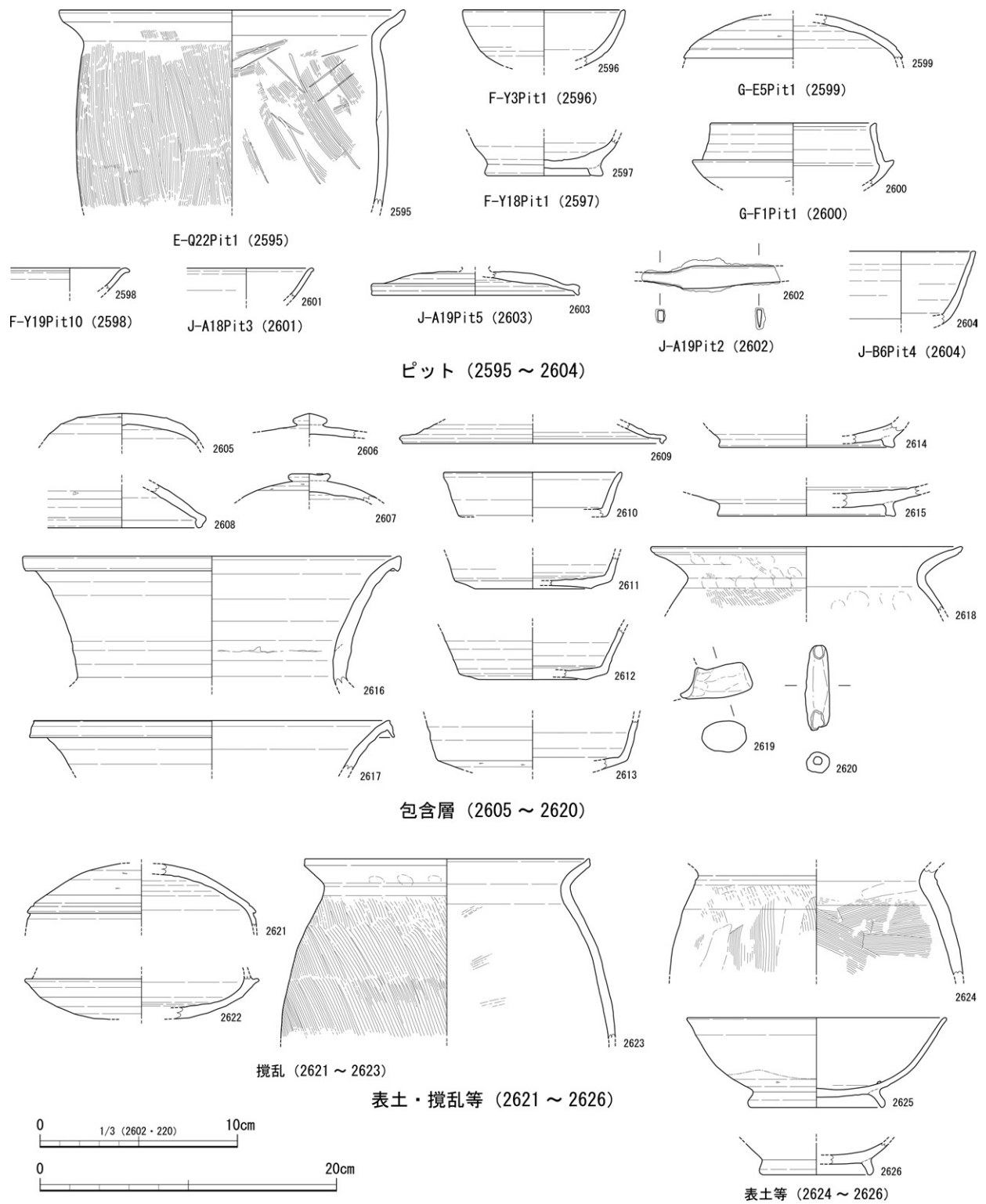
(4) ピット出土遺物

E-Q22Pit1 (第221図2595) 2595は土師器である。甕の口縁部から体部上半にかけてが遺存する。体部は肩や胴が張らず、砲弾形に近い器形を呈すると思われる。頸部の締めりは弱く、口縁部はわずかに内湾しながら直線的に開く。口縁端部は面をなす。内外面とも比較的ストロークが長いハケで調整されているが、内面には沈線状の工具痕が多数認められる。

F-Y3Pit1 (第221図2596) 2596は須恵器である。坏で、無高台のものと思われる。体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながらのび、半球形の器形を呈する。

F-Y18Pit1 (第221図2597) 2597は須恵器である。壺の底部である。外面には高台が貼り付けられている。内面には自然釉が付着し、窯壁の小片と思われるものが融着している。

F-Y19Pit10 (第221図2598) 2598は灰釉陶器であ



第221図 ピット・包含層・攪乱・表土等出土遺物 (1/4、1/3)

る。皿の口縁部と思われるが、小片のため判然としない。口縁端部は強く外反する。S K261と重複するピットからの出土で、本来はS K261に伴う遺物の可能性がある。

G-E5Pit1 (第221図2599) 2599は須恵器である。坏蓋で、天井部付近の破片である。外面には比較的広い範囲にロクロケズリが施されている。

G-F1Pit1 (第221図2600) 2600は須恵器である。坏身で、立ち上がりはかなり高い。口縁端部は面をなす。底部外面には比較的広い範囲にロクロケズリが施されている。古墳時代中期後葉～後期前葉のものと思われる。

J-A18Pit3 (第221図2601) 2601は灰釉陶器である。碗の口縁部で、わずかに内湾し、口縁端部は丸く収められる。器壁は薄い。

J-A19Pit2 (第221図2602) 2602は鉄製品である。小型の刀子で、茎と切先を欠損する。錆化により形状には不明瞭な部分もあるが、関はおそらく両関と思われる。目釘穴や木質の付着などは認められない。詳細な帰属時期については土器が相伴しておらず不明であるが、形態及びS K261付近のピットから出土したことから、平安時代のものである可能性が高いと思われる。

J-A19Pit5 (第221図2603) 2603は須恵器である。坏蓋で、口縁端部はわずかに屈曲する。摘まみが付くと思われる。

J-B6Pit4 (第221図2604) 2604は須恵器である。坏で、底部から比較的明瞭に屈曲して体部・口縁部が直線的に立ち上がると思われる。口縁端部は不明瞭な面をなす。

(5) 遺構外出土遺物

包含層 (第221図2605～2620) 2605～2617は須恵器である。

2605～2609は坏蓋である。2605～2607は天井部である。2605は摘まみを持たない。無高台の坏の底部の可能性もある。2606は扁平な宝珠形を呈する摘まみを貼り付けている。2607はボタン状の摘まみを貼り付けている。外面にはロクロケズリが施されている。2608・2609は口縁部の破片である。2608はやや器壁が厚い。口縁端部は短く内側へ屈曲する。

2610～2614は坏である。2610は口縁部の破片で、底部から体部が強く屈曲し、わずかに外反しながら直線的に立ち上がる。2611・2612は底部外面にロクロケズリが施され、浅く凹む。体部は底部から強く屈曲して直線的に立ち上がるが、外面の屈曲部付近には匙面状の面が認められる。2614は底部である。底部外面の体部が立ち上がる屈曲部付近に高台が貼り付けられている。焼成は土師質で、土師器の可能性もある。

2615は皿である。底部外面にやや細い角高台を貼り付けている。見込みには重ね焼き痕が残る。

2616・2617は甕の口縁部である。2616は緩やかに外反しながら直立気味に立ち上がり、口縁端部は垂下させる。2617は口縁端部を大きく垂下させている。

2618・2619は土師器である。

2618は甕の口縁部である。頸部の屈曲は比較的緩く、口縁部はわずかに外反し、口縁端部は不明瞭な面をなす。外面にはオサエが明瞭に残る。2619は甕ないし鍋の把手と思われる。小型の棒状のもので、体部から剥離した痕跡が残るが、剥離面は明瞭に屈曲しており、甕や鍋の体部から剥離したとするには疑問が残る。古墳時代、あるいは室町時代以降のもの可能性もあろう。

2620は土製品で、管状土錘である。細身のもので、遺存状況は悪い。

攪乱・表土等 (第221図2621～2626) 2621・2622は攪乱から出土した須恵器である。

2621は坏蓋である。天井部と口縁部との境は明瞭に屈曲し、屈曲部の外面は若干突出する。天井部外面には比較的広い範囲にロクロケズリが施されている。2622は坏身である。立ち上がりは欠損している。

2623は攪乱から出土した土師器である。甕で、口縁部から体部上半にかけて遺存している。体部は長胴になると思われる。頸部の屈曲は緩く、口縁端部は面をなす。外面は全体的にハケで調整されている。

2624は表土から出土した須恵器もしくは無釉の陶器である。甕と思われるもので、器壁は厚く、堅緻に焼成されている。外面には縦方向に、櫛状の工具による粗いカキメ状の調整や、工具ナデ状の調整が断続的に施されている。内面にはハケが施されている。

2625・2626は表土等から出土した灰釉陶器である。いずれも碗である。

2625はほぼ全形が復元できた。底部から口縁部にかけて内湾しながら開き、口縁部付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収められる。底部外面にはケズリが施されており、三日月高台が貼り付けられている。見込みには不定ナデが施されており、重ね焼き痕が残る。また、高台畳付には焼成時に他の個体と融着し、焼成後に剥がしたと思われる痕跡が認

められる。2626は底部で、外面には三日月形高台が貼り付けられている。見込みには重ね焼き痕が残るが、重ね焼き痕も含めて見込み全体が摩耗している。

註

- 1) 高台が爪先立ち状となり、断面形が三日月形に近い形を呈するものを指す。
- 2) 奈良・平安時代の土師器に塗布された赤色顔料についても蛍光X線分析を行っている（第VII章第4節）。

第VI章 鎌倉・室町時代の遺構・遺物

第1節 遺構

(1) 柱列

S A359 (第222図) 第3次調査区の中央部で検出した柱列である。北山城跡のI郭内に位置する。一直線に並ぶ3基の柱穴で構成され、長さ4.7mほどある。

柱間は2.4m前後で比較的均等である。西端と中央の柱穴の間には、S A359の並びと一致するように2基のピットが存在するが、この柱列に関するものかは不明である。付近ではこの柱列と関係するような柱穴は検出されなかったため、掘立柱建物の一部ではなく単独の柱列とみられ、柵などと考えられる。

遺物は全く出土しなかったが、I郭の構築に伴うと考えられる盛土上で検出された点からみて、遺構の時期は室町時代後期以降と推定され、北山城跡に伴う遺構の可能性が高いと考えられる。

(2) 土坑

S K265 (第222図) 第2次調査区の西部で検出した土坑である。攪乱と重複して検出されたため、形状には不明確な部分もあるが、平面形は長径1.6m、短径0.9mの不整形な楕円形を呈するものと思われる。深さは0.4mほどある。

壁面はかなり急に立ち上がり、垂直に近い。底面には凹凸が目立つが、S K265に先行する風倒木痕とみられる攪乱と重複しているためと思われ、土層断面からみると比較的平坦であった可能性がある。上層からは長径40cmほどの直方体を呈する、比較的大型の礫が検出された。意図的に置かれたものと考えられるが、礫自体に明確な加工痕は認められなかった。

遺物は全く出土しなかったが、遺構の形態や礫の出土状況などからみて、中世の土壙墓の可能性も考えうる。

S K354 (第222図) 第3次調査区の中央部で検出

した土坑である。北山城跡のI郭内に位置する。平面形は長軸1.5m、短軸1.2mの不整形な方形を呈する。深さは0.7mほどとかなり深い。

壁面はかなり急に立ち上がり、垂直に近い。底面は比較的平坦である。

遺物は、埋土から土師器と思われる土器の細片が出土しているが、図化できるものはなかった。

I郭の構築に伴うと考えられる盛土上で検出された点からみて、遺構の時期は室町時代後期以降と推定され、北山城跡に伴う遺構の可能性が高いと考えられる。

S K412 (第222図) 第4次調査区の中央部で検出した土坑である。平面形は径1.4mほどの不整形な円形を呈する。深さは0.4mほどある。

壁面は比較的急に立ち上がる。壁面の上位には部分的に強い被熱が認められる。底面は平坦である。埋土中にはやや大きな炭化材の破片のほか、炭化物、焼土塊が顕著に含まれている。また、土層断面からみると、埋没後に掘り返されている可能性もある(第1～4層)。

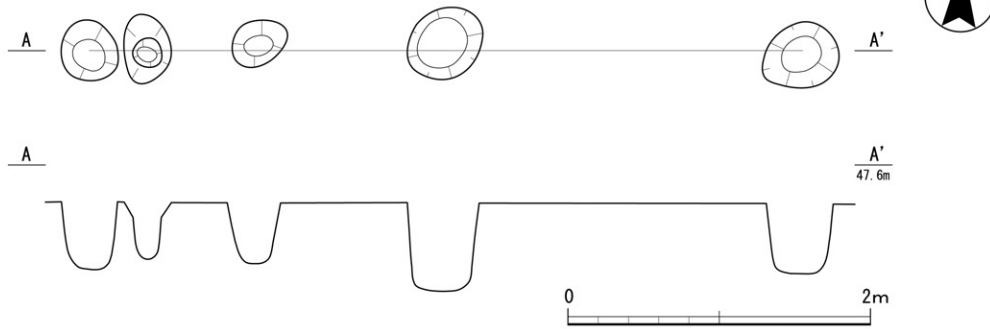
遺物は、埋土から土師器と思われる土器の小片が出土しているが、図化できるものはなかった。ただし、鎌倉～室町時代のものとも思われる器壁の薄い土師器片も認められる。

骨などは検出されていないものの、遺構の形態や被熱痕跡などからみて、中世の火葬土坑の可能性が高い¹⁾。

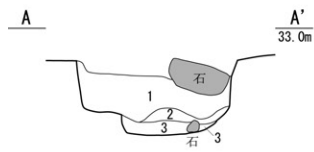
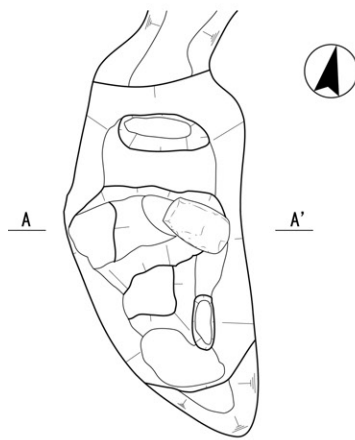
(3) 溝

S D285 (第223・224図) 第2次調査区の西部で検出した溝である。S D286・289・295など複数の溝が存在する中に位置する。S D286より後出し、かなりの範囲が重複している。調査区南壁付近では存在が不明瞭であるが、土層断面からみるとS D286の中・上層とも思われる部分がS D285として把握できるものと思われる(E-E'断面第1～3層)。南

S A 359

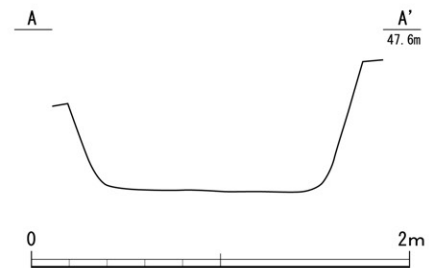
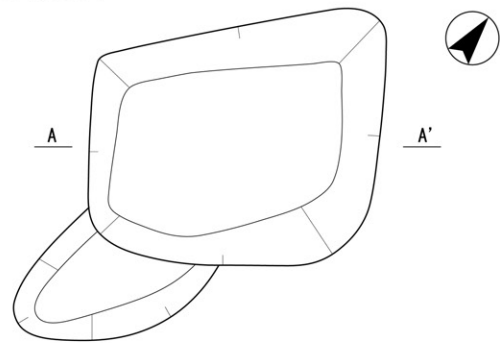


S K 265

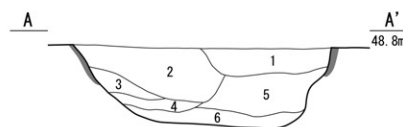
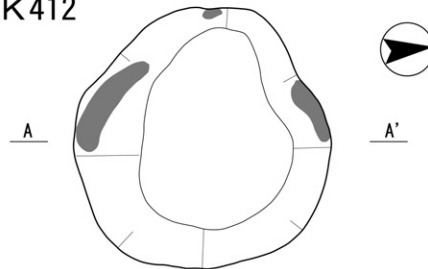


1. 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト、しまり弱、粘性中
2. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～シルト、粘性中
3. 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～シルト、粘性中〈風倒木痕?〉

S K 354



S K 412



1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト、しまり弱
2. 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～シルト、炭化物を30%含む
3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり中、焼土塊を3%含む
4. 10YR3/1黒褐色極細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を40%含む
5. 10YR4/2にぶい黄褐色極細粒砂、炭化物・焼土塊を5%含む
6. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR5/6～5/8黄褐色粗粒砂～シルトを多く含む

第222図 S A 359、S K 265・354・412 (1/50、1/40)

側は調査区外となっているが、長さ10.0m以上、幅1.1mほどである。深さは0.4mほどある。

壁面はかなり急に立ち上がり、垂直に近い。断面形は逆台形を呈する。底面はかなり平坦である。埋土はほぼシルトで占められており、強い流水があったような形跡は認めがたい。その一方で、下層を中心にかなり大型の礫が多数含まれており、一部には集中的に礫が検出される箇所も認められた。これらの点からみると、人工的に掘削された溝の可能性が高いと思われる。

遺物は、埋土から弥生土器・土師器が出土しており、鎌倉・室町時代の土師器と思われるものも少量認められる。ただし、いずれも小片で図化できなかった。

出土遺物やS D286との関係からみて、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

S D286 (第223・224図) 第2次調査区の西部で検出した溝である。S D285・289・295など複数の溝が存在する中で、最も規模の大きいものである。S D285・287に先行する。斜面裾部に端を発し、南東へ向かって延びており、南側は調査区外となっている。長さ17m以上、幅1.6mほどで、やや蛇行する。深さは、南東側の深いところでは0.5mほどあるが、北西部に向かうにつれて徐々に浅くなっていく。

壁面はかなり急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈するが、東側の壁面は全域にわたって下部がオーバーハングしている。下層には礫を顕著に含む粗い砂層が堆積しており、この溝が形成された直後に、こうした粗粒堆積物を運ぶような激しい流水があったため、壁面が抉られたと考えられる。ただし、激しい流水は長く続かず、中層から上層にかけてはシルトによって埋積しているため、緩やかな流水もしくは帯水があるような環境下で埋没が進んだことが窺われる。このような土層の堆積状況や、遺構の形態を鑑みると、人工的に掘削された溝ではなく、急激な降雨等によって形成された自然流路とも考えられる。

遺物は、埋土から山茶碗や須恵器、弥生土器・土師器が出土している。山茶碗は下層から複数出土しており、底部外面に墨書が認められるものもある。

出土遺物からみて、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

S D287 (第223・224図) 第2次調査区の西部で検出した溝である。S D286・295と重複しており、これらの溝より後出する。付近に存在する複数の溝ないし流路中で最も新しく位置づけられる。S D286・295とは方向が異なっており、これらの溝と直交している。長さ5.7m、幅0.7mほどの、ほぼ直線的に延びる溝である。深さは0.2mほどある。

壁面はやや急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。埋土には礫が多く含まれている。

この溝に伴う遺物は出土しなかった。

S D286との新旧関係から、遺構の時期は鎌倉～室町時代と思われるが、確定的ではない。

S D288 (第223・224図) 第2次調査区の西部で検出した溝である。S D285・286・289など複数の溝が存在する中に位置する。北東から南西に向かって延びており、南側は調査区外となっている。北東端はS D286と接続しているように見受けられるが、S D295と一連の溝である可能性もあり、その場合はS D286より後出するものと考えられる。S D286との接続部を始点とすれば、長さ4.4m以上、幅0.5mほどの、ほぼ直線的に延びる溝である。深さは0.1mほどと浅い。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形を呈する。埋土はシルトを主体とし、若干の礫を含む。活発な流水があったとは考えにくい。S D286と一連のものであれば、自然流路と思われる。

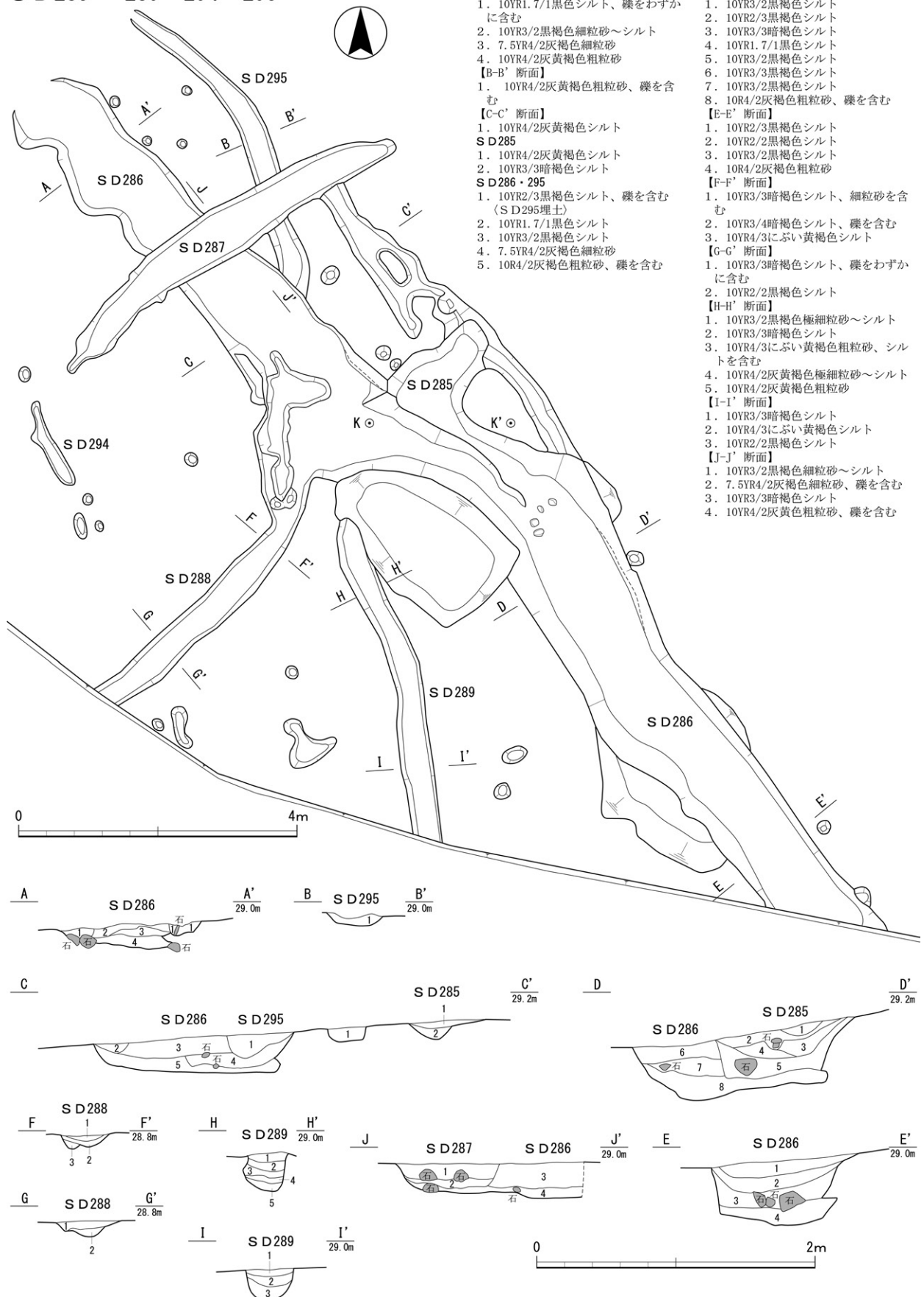
この溝に伴う遺物は出土しなかった。

S D286との関係からみて、遺構の時期は鎌倉時代の可能性が高い。

S D289 (第223・224図) 第2次調査区の西部で検出した溝である。S D285・286・288など複数の溝が存在する中に位置する。北から南へ向かって延びており、南側は調査区外となっている。北端は攪乱によって途切れており、S D286との関係は不明である。長さ4.8m以上、幅0.4mほどの、やや蛇行しながら延びる溝である。深さは0.3mほどある。

壁面はかなり急に立ち上がり、断面形はU字形を呈する。埋土は北部と南部でやや差異が認められる。北部では最下層と中層に粗粒砂を主体とする土層の

S D 285 ~ 289 · 294 · 295



【A-A' 断面】

1. 10YR1.7/1黒色シルト、礫をわずかに含む
2. 10YR3/2黒褐色細粒砂〜シルト
3. 7.5YR4/2灰褐色細粒砂
4. 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂

【B-B' 断面】

1. 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂、礫を含む

【C-C' 断面】

1. 10YR4/2灰黄褐色シルト
- S D 285
1. 10YR4/2灰黄褐色シルト
 2. 10YR3/3暗褐色シルト

S D 286 · 295

1. 10YR2/3黒褐色シルト、礫を含む (S D 295埋土)
2. 10YR1.7/1黒色シルト
3. 10YR3/2黒褐色シルト
4. 7.5YR4/2灰褐色細粒砂
5. 10R4/2灰褐色粗粒砂、礫を含む

【D-D' 断面】

1. 10YR3/2黒褐色シルト
2. 10YR2/3黒褐色シルト
3. 10YR3/3暗褐色シルト
4. 10YR1.7/1黒色シルト
5. 10YR3/2黒褐色シルト
6. 10YR3/3黒褐色シルト
7. 10YR3/2黒褐色シルト
8. 10R4/2灰褐色粗粒砂、礫を含む

【E-E' 断面】

1. 10YR2/3黒褐色シルト
2. 10YR2/2黒褐色シルト
3. 10YR3/2黒褐色シルト
4. 10R4/2灰褐色粗粒砂

【F-F' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色シルト、細粒砂を含む
2. 10YR3/4暗褐色シルト、礫を含む
3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト

【G-G' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色シルト、礫をわずかに含む
2. 10YR2/2黒褐色シルト

【H-H' 断面】

1. 10YR3/2黒褐色極細粒砂〜シルト
2. 10YR3/3暗褐色シルト
3. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂、シルトを含む
4. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂〜シルト
5. 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂

【I-I' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色シルト
2. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
3. 10YR2/2黒褐色シルト

【J-J' 断面】

1. 10YR3/2黒褐色細粒砂〜シルト
2. 7.5YR4/2灰褐色細粒砂、礫を含む
3. 10YR3/3暗褐色シルト
4. 10YR4/2灰黄色粗粒砂、礫を含む

第223図 S D 285~289 · 294 · 295① (1/80、1/40)

堆積が認められ（H-H' 断面第3・5層）、激しい流水が2回程度にわたって発生したものと推定される。これは、壁面がオーバーハングしており、水流によって抉られたとみられることから首肯できよう。一方、南部の埋土はシルトを主体としており、活発な流水があったとは考えにくい。こうした埋土の差異が生じた原因は不明である。

この溝に伴う遺物は出土しなかった。

S D286との関係からみて、遺構の時期は鎌倉時代の可能性が高い。

S D290（第225図） 第2次調査区の西部で検出した溝である。斜面裾部の、S D285・286などの溝が集中する箇所より10mほど東に位置し、これらの溝とほぼ平行する。南端部は攪乱によって一部削平を被っている。長さ8.2m、幅0.3～0.5mほどの、わずかに蛇行しながら延びる直線的な溝である。深さは0.2mほどある。

壁面はかなり急に立ち上がり、垂直に近い。底面は比較的平坦である。埋土からは、活発な流水があった様子は窺えない。

この溝に伴う遺物は出土しなかった。

位置や延びる方向などからは、S D286を中心とする溝の一群との関係も窺われることから、遺構の時期は鎌倉時代と思われるが、確定的ではない。

S D295（第223・224図） 第2次調査区の西部で検出した溝である。S D285・286・288など複数の溝が存在する中に位置する。斜面裾部に端を發し、南へ向かって延びている。南側はS D286と重複しており、この溝より後出する。南端は明らかではないが、延びる方向からみると、S D288と一連の溝の可能性もある。長さ4.8m以上、幅0.4mほどの、湾曲しながら延びる溝である。深さはS D286と重複する部分では0.2mほどあるが、北側に向かうにつれて浅くなっていく。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形ないし腕形を呈する。埋土は北部と南部でやや差異が認められる。北部では粗粒砂や礫によって埋積しているが、南部のS D286との重複部分では、礫を含むもののシルトを主体とする土層の堆積が認められる。（C-C' 断面S D286・295第1層）。上流にあたる北部が活発な流水によって早い段階で埋没した結果とも

思われるが、詳細な原因は不明である。

この溝に伴う遺物は出土しなかった。

S D286との関係からみて、遺構の時期は鎌倉時代の可能性が高い。

（4）堀・土塁

S D301（第226図） 第3次調査区の西部で検出した、横堀とも考えられる溝である。北山城跡のI郭の西裾に沿って掘り込まれていると推定される。長さ9.6m以上、幅5.8mほどの溝であるが、幅に対して深さは0.4mほどと浅く、掘形も明瞭ではないため、人為的な堀ではない可能性もある。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。土層断面からみると、西側に掘形とも思われるラインが認められ（第3・4層の境界ライン）、これがS D301に伴うものとするならば、幅6.8m、深さ0.6mほどの規模であったとも考えられる。

遺物は、図化できたものは弥生土器・土師器壺の小片のみであった。そのほかに遺物は出土していない。ただし、北山城跡I郭と関係するとみられることから、遺構の時期は室町時代後期と考えられる。

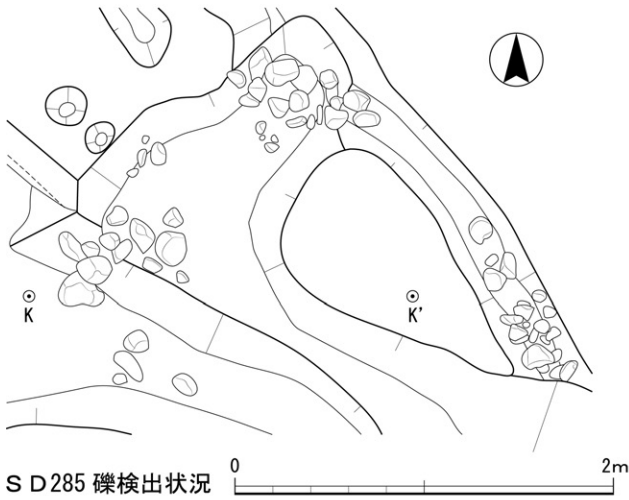
S D351（第225図） 第3次調査区の東部で検出した、堀と考えられる溝である。南端の一部が調査区内で検出されているのみで、大部分が調査区外となっているため、全体の形状などは不明である。北山城跡のI郭東側に存在する堀の南端部と思われる。堀底からII郭へ上がる通路状部分の末端部の可能性もある。ごく一部しか検出されていないため、規模などは不明である。深さは0.4mほどと浅く、掘形も明瞭ではない。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。床面にはやや凹凸があるようにも見受けられる。

この溝に伴う遺物は出土しなかった。ただし、北山城跡と関係するとみられることから、遺構の時期は室町時代後期と考えられる。

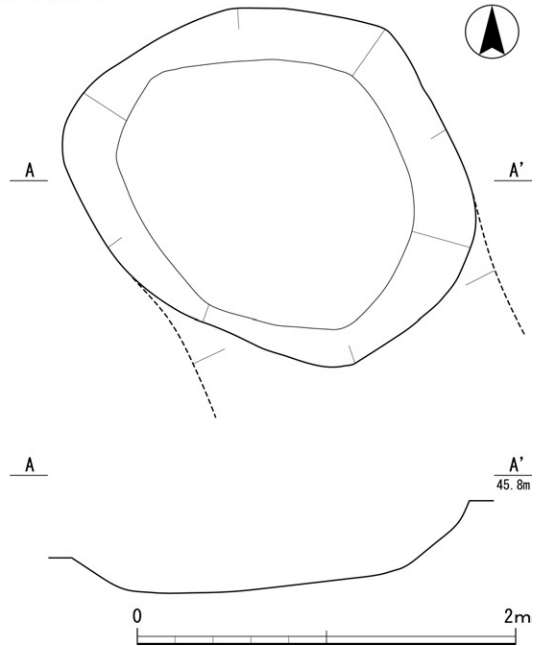
S D352（第225図） 第3次調査区の東部で検出した、北山城跡のI郭東側に存在する堀の南端部にあたると思われるものである。現状では大部分が流失しており、径2.0mほどの平面形が不整形な円形を呈する土坑状のものが遺存しているのみであるが、

S D 285 ~ 289 · 294 · 295

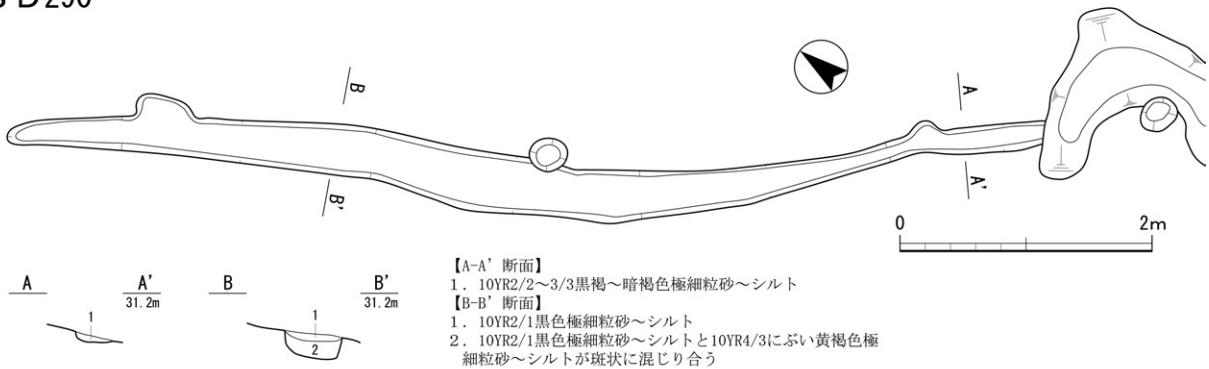


第224図 S D 285~289 · 294 · 295② (1/40)

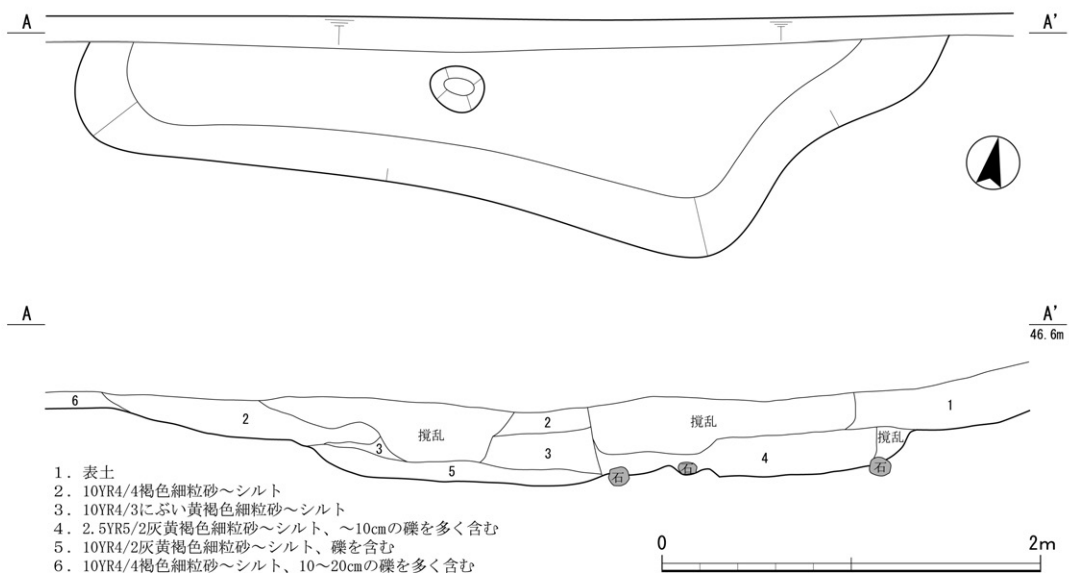
S D 352



S D 290

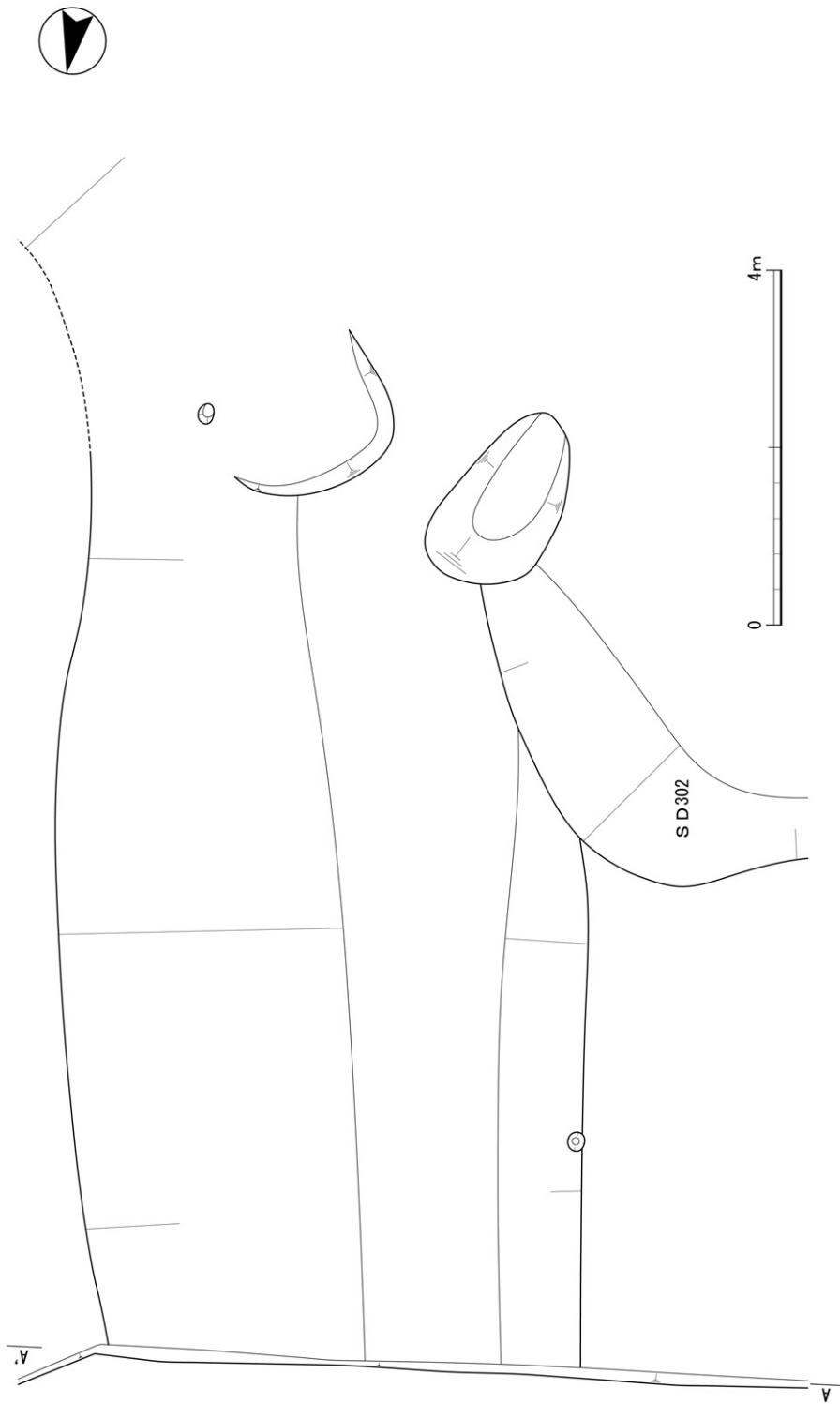


S D 351



第225図 S D 290 · 351 · 352 (1/60、1/40)

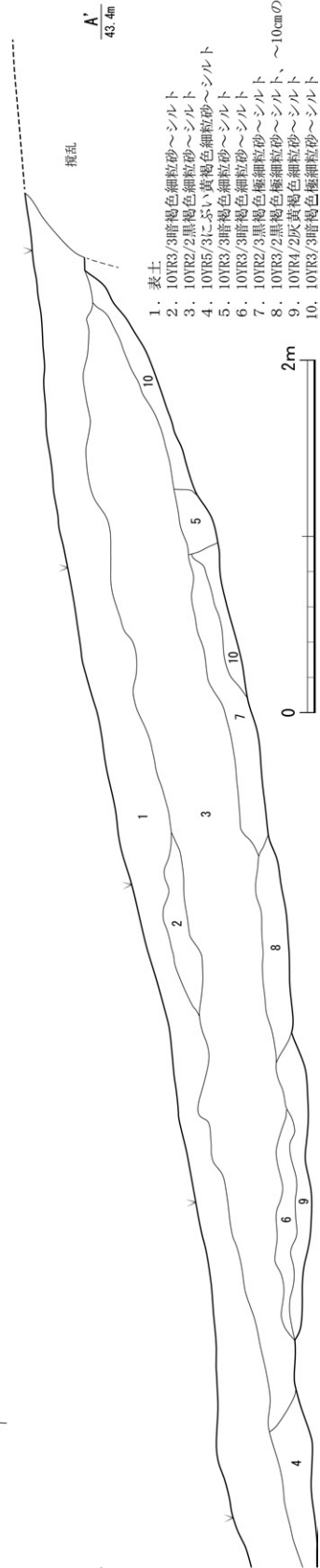
S D 301



S D 302



A



- 1. 春土
- 2. 10TR3/3暗褐色細粒砂〜シルト
- 3. 10TR2/2黒褐色細粒砂〜シルト
- 4. 10VR5/3にぶい、黄褐色細粒砂〜シルト
- 5. 10VR3/3暗褐色細粒砂〜シルト
- 6. 10VR3/3暗褐色細粒砂〜シルト
- 7. 10VR2/3黒褐色極細粒砂〜シルト
- 8. 10TR2/2黒褐色極細粒砂〜シルト、〜10cmの礫を含む
- 9. 10VR4/2灰黄褐色細粒砂〜シルト
- 10. 10VR3/3暗褐色極細粒砂〜シルト

第226図 S D 301 (1/80、1/40)

調査時にはもう少し南側へ延びるように見受けられた。深さは0.4mほどと浅く、流失していることを鑑みても、それほど深いものではなかったと考えられる。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。床面は比較的平坦である。

この溝に伴う遺物は出土しなかった。ただし、北山城跡と関係するとみられることから、遺構の時期は室町時代後期と考えられる。

SD401 (第227図) 第4次調査区の東部で検出した、IV郭の東側を画する横堀と考えられる溝である。ほぼ南北に延びており、南側半分程度は中野山遺跡第9次調査区においてSD1301として検出されている。北端は北側に入り込んでいる谷まで延びており、南端は中野山遺跡第9次調査区よりさらに南側へ延びる可能性がある。長さ47.0m以上、幅4.0mほどの非常に大規模な溝で、深さも0.6mほどある。

壁面はやや急に立ち上がり、壁面の中位で外方へ開く。底面はかなり平坦に整えられており、断面形は逆台形を呈する。

位置や規模からみると、IV郭を画するだけでなく、東から延びる丘陵を幅が狭まった部分で切断し、東方向の防御性を高める堀切としての機能も有していたと考えられ、北山城全体の東を画する施設であったものと推定される。

なお、この溝の西側ではわずかに土塁状の盛り上がり確認されており、以前に作成された縄張図でも図化されている(第III章第3節)。ただし、調査において明確に土塁の盛土と思われる土層が確認できなかったことと、中野山遺跡SD1301に相当する部分では土塁状の盛土が溝の東側に確認されたことなどから、土塁の可能性は低いと判断した²⁾。

この溝に伴う遺物は出土しなかった。中野山遺跡SD1301でも遺物は出土していない。ただし、北山城跡と関係するとみられることから、遺構の時期は室町時代後期と考えられる。

SD494 (第227図) 第4次調査区の西部で検出した、II郭とIV郭の間を画する横堀と考えられる溝である。東側には後述のように土塁を伴う。ほぼ南北に延びており、北側の大部分は調査区外となっており未調査である。南端は北山城跡の南側へ入り込ん

でいる谷へと接続する。長さ14.0m以上、幅3.3mほどの大規模な溝で、深さは0.4mほどある。

壁面は比較的緩やかに立ち上がる。底面はかなり平坦に整えられており、断面形は逆台形を呈する。

それほど深い溝ではないものの、東側に土塁を伴うことを考えると高低差は1.0m以上はあったものと思われ、防御性も考慮されていたと推測される。

この溝に伴う遺物は全く出土していないが、SD401とほぼ平行する点や、土塁を伴う点などからみて、北山城跡に伴う遺構の可能性が高いことから、遺構の時期は室町時代後期と考えられる。

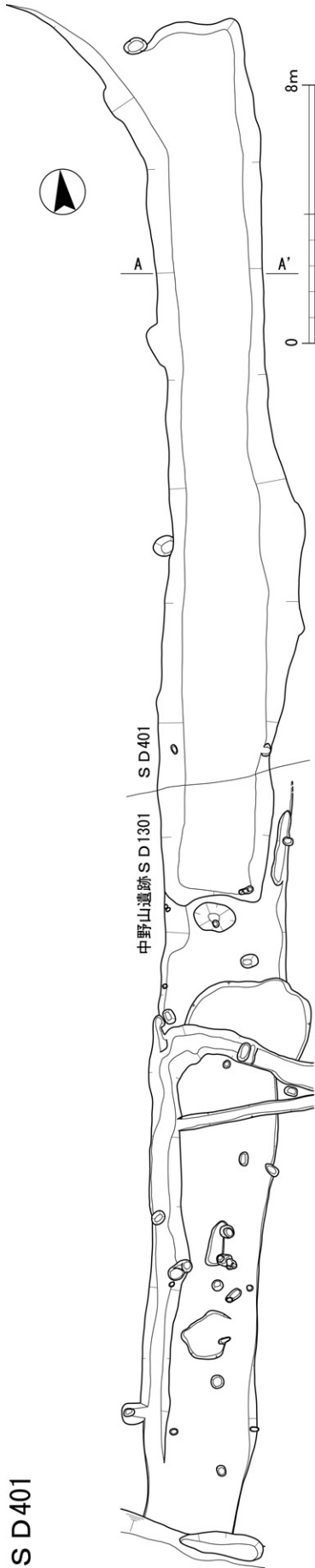
I郭土塁・盛土 (第228図) 第3次調査において確認された、北山城跡の主郭であるI郭西側及び南側の土塁と、I郭造成にかかる盛土である。平面的に調査を行った後に、調査区壁沿いに東西方向(A-A'断面)、調査区壁に直交するように南北方向(B-B'断面)の断ち割りを入れて土層の記録を行った。

現況地表面において、I郭西側・南側の土塁はそれほど高くなく、I郭内部と比べて1m弱ほどの高さとなっている。また、I郭内部はかなり平坦な面となっている。

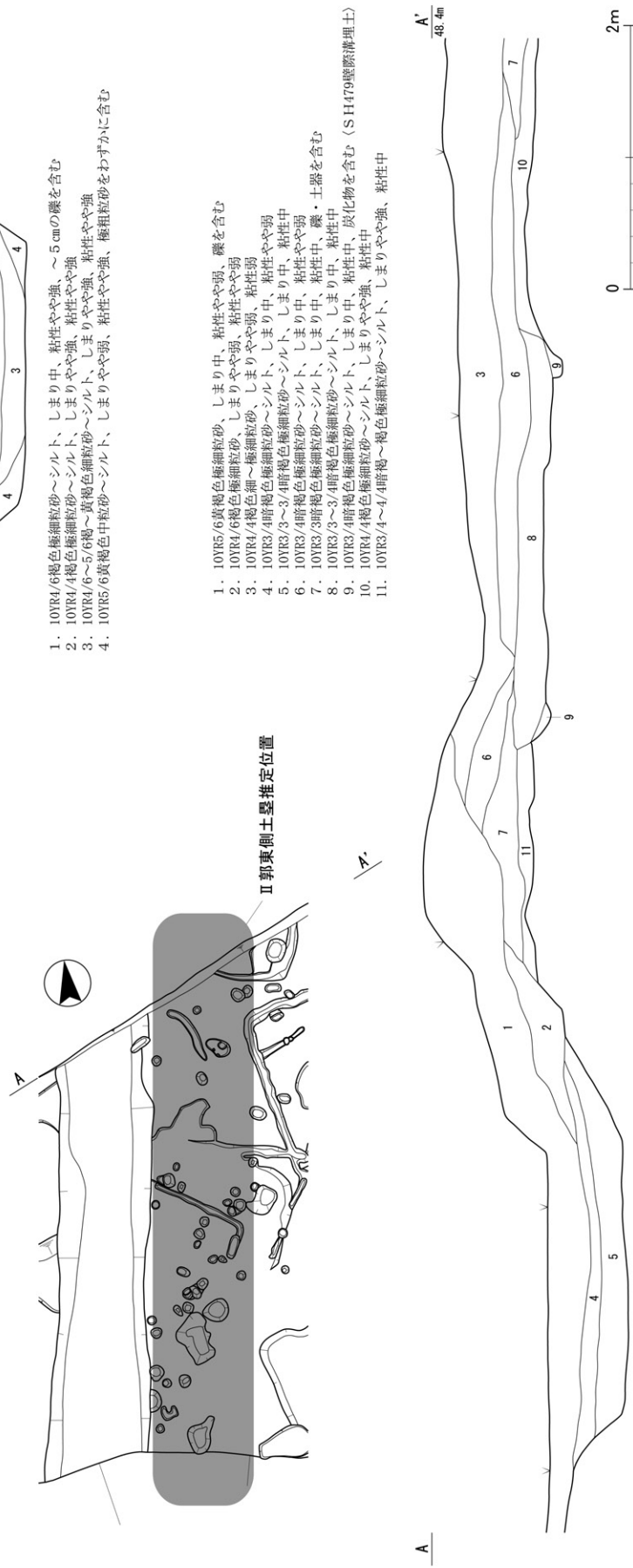
土層断面をみると、まず南北方向の断ち割りにおいて、旧表土と思われる黒褐色土層(B-B'断面第15層)が確認できる。ただし、この土層は地山が傾斜している部分を中心に堆積しており、I郭内の地山が比較的平坦となった部分には認められない。したがって、I郭内は旧表土を除去するなどの整地が施されていたと考えられる。東西方向の断ち割りにおいて、地山直上に比較的水平に堆積した土層(A-A'断面第20・21層)は、南北方向の断ち割りにおいて旧表土の下に堆積した土層(B-B'断面第18・19層)と対応するため、旧表土と地山との間に自然堆積したものと想定される。

東西方向の断ち割りの東端付近と西端付近の土塁直下に当たる箇所では、この自然堆積層に対する掘り込みが行われている(A-A'断面第14~18層)。0.5mほどとそれほど深いものではなく、地山を大きく掘り込むこともない。土塁を築くための基礎地業の可能性が考えられる。この掘り込みの埋土の上に、若干低くなっている部分を水平に整えるような盛土がなされている(A-A'断面第11~13層)。そして、

S D 401



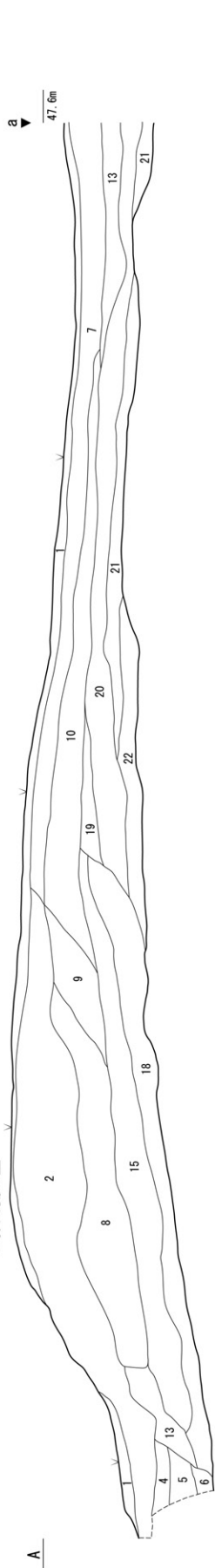
S D 494、II 郭東側土塁



第227図 S D 401・494、II 郭東側土塁 (1/200、1/50)

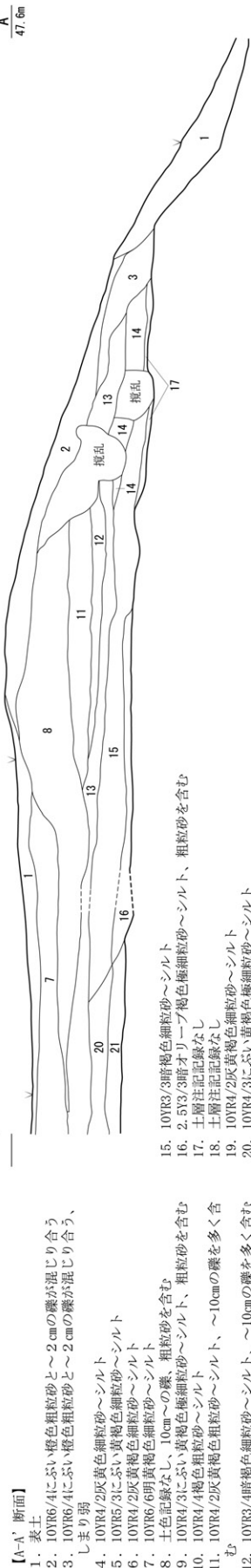
I 郭土壘・盛土

I 郭西側土壘



A' 47.6m

I 郭南側土壘

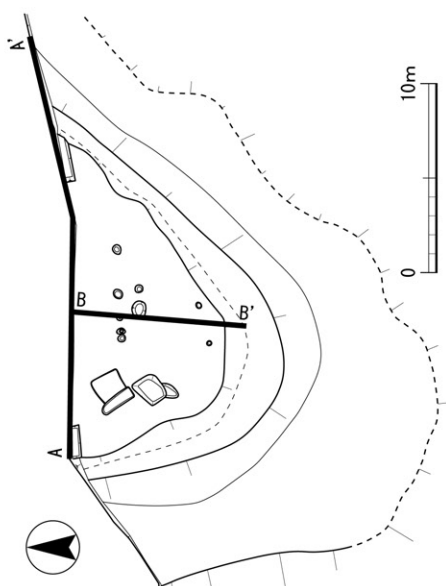


A' 47.6m

【A-A' 断面】

1. 表土
2. 10YR6/4にぶい橙色粗粒砂と～2cmの礫が混じり合う
3. 10YR6/4にぶい橙色粗粒砂と～2cmの礫が混じり合う、しまり弱
4. 10YR4/2灰黄色細粒砂～シルト
5. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト
6. 10YR4/2灰黄色細粒砂～シルト
7. 10YR6/6明黄褐色細粒砂～シルト
8. 土色記録なし、10cmの礫、粗粒砂を含む
9. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粗粒砂を含む
10. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト
11. 10YR4/2灰黄色粗粒砂～シルト、～10cmの礫を多く含む
12. 10YR3/4暗褐色細粒砂～シルト、～10cmの礫を含む
13. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト
14. 10YR4/2灰黄色細粒砂～シルト

15. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト
16. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂～シルト、粗粒砂を含む
17. 土層注記記載なし
18. 10YR4/2灰黄色細粒砂～シルト
19. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト
20. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト
21. 10YR4/4褐色粗粒砂～シルト
22. 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルト、粗粒砂を含む



B' 47.6m

【B-B' 断面】

1. 10YR5/6暗褐色極細粒砂～シルト
2. 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～シルト
3. 10YR4/6褐色細粒砂～シルト、礫を含む
4. 2.5Y5/3黄褐色極細粒砂～シルト、粗粒砂を含む
5. 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂
6. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、～10cmの礫を多く含む
7. 10YR4/6褐色粗粒砂
8. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト
9. 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂、～5cmの礫を含む
10. 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、粗粒砂を含む
11. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、粗粒砂を多く含む
12. 10YR6/6明黄褐色極細粒砂～シルト
13. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂～シルト
14. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト
15. 2.5Y3/2黒褐色極細粒砂～シルト、～10cmの礫を含む (旧表土?)
16. 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂～シルト、粗粒砂を含む
17. 10YR3/3暗褐色粗粒砂～シルト
18. 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト
19. 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト

0 2m

土層断面図作成位置
第228図 I 郭土壘・盛土 (1/60)

土塁の基礎となるような盛土が比較的大きな単位で施される（A-A'断面第8～10層）。これによってやや凹地となったI郭内に整地土を敷き均し（A-A'断面第7層）、最終段階として土塁本体の盛土がI郭の端に盛り上げられている（A-A'断面第2層）。土塁本体の盛土はほぼ1層で、礫を多く含む砂質土であり、強固に構築された様子は認めがたい。

なお、西端部では土塁盛土の下に何らかの掘り込みのようなものが認められるが（A-A'断面第4～6層）、性格は明らかにできなかった。東端でみられた土層（A-A'断面第3層）とともに、土塁の基底部をより外側まで広げるため、当初の整地・基礎地業の後に追加して行われた整地・基礎地業の一部とも思われる。

一方、南北方向の断ち割りでは、斜面となっている旧表土の上部に、土質が異なる薄い土層を多数積み上げた、強固な盛土による造成が確認された（B-B'断面第4～12層）。東西方向の断ち割りでは認められないが、これは南北方向では元々の地形の傾斜が急であったためと考えられる。この盛土は、これに先行して北側に施された盛土（B-B'断面第13・14層）が、南北方向の断ち割りでみられた低い部分を水平に整えるために施した盛土（A-A'断面第11～13層）と対応すると考えられることから、やはりI郭全体を平坦にするような工程の中で施されたことが窺われる。その後、その上部にやや単位が大きな盛土が施されている（B-B'断面第1～3層）。これは、土層の類似性からも³⁾、I郭内に整地土を敷き均す工程（A-A'断面第7層）に対応すると考えられる。

盛土内からは、遺物は弥生土器・土師器が少量出土したのみで、北山城跡に伴うものは確認できなかった。

II郭東側土塁（第227図） 第4次調査の西部で検

出した、II郭とIV郭の間を画する土塁と考えられる盛土遺構である。西側には堀とみられるSD494を伴う。ほぼ南北に延びており、北側の大部分は調査区外となっており未調査である。南端は北山城跡の南側へ入り込んでいる谷へと接続する。長さ15.0m以上、幅2.5mほどとみられる。

調査前から低い土塁状の盛り上がりを確認されており、縄張図などにも土塁の存在が示唆されていたが、調査時に盛土の大部分が表土で形成されていることが判明したため、北山城跡に伴う遺構の可能性は低いとみて平面的な調査は行わず、除去して下層の弥生・古墳時代の遺構の調査を優先的に行った。しかしながら、土層断面の検討の結果、表土の下に部分的に0.5mほどの高さに盛土の可能性のある土層が確認でき（第6・7層）、隣接するSD494がSD401と平行することなども鑑みて、やはり北山城跡に伴う土塁が存在したと判断した。

ただし、土塁を構成するとみられる土層からは弥生土器・土師器の破片が少量出土したのみで、正確な時期は不明である。SD494の埋土との新旧関係も明確ではなく、さらに、土塁より東側にも同じ土質の土層の堆積が認められるため、これが土塁本来の盛土であったかは、さらに検討が必要と思われる。

註

- 1) SH303の内部で検出された土坑も、このSK412と同様に中世の火葬土坑の可能性が考えられる。
- 2) ただし、後述のII郭東側土塁も明確な盛土が確認できなかったことや、I郭土塁の盛土も砂礫土であったことを踏まえれば、SD401に伴う盛り上がりも土塁の可能性は残る。
- 3) 調査時には、両断ち割りの土層の対応関係が精査されていなかったが、A-A'断面第7層とB-B'断面第1層は比較的に類似しており、同一の土層の可能性はある。

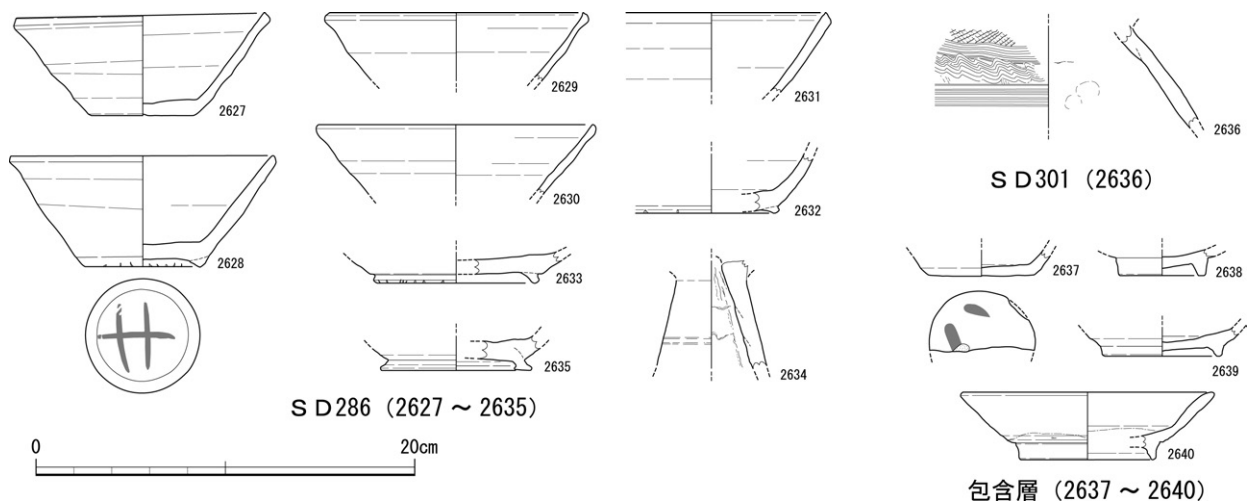
第2節 遺物

（1）溝出土遺物

SD286（第229図2627～2635） 2627～2633は陶器である。いずれも山茶碗である。

2627は底部から体部が明瞭に屈曲して立ち上がり、直線的に開く。口縁端部は面をなす。高台はない。

2628は底部外面の体部との境界付近に粗雑な高台を貼り付けている。高台端部には靱殻痕が認められる。また、底部外面には「卍」字状の墨書が認められる。2629・2630は口縁部の破片で、やや器壁が薄い。口縁端部は玉縁状にわずかに肥厚する。2632は底部の破片で、底部外面に粗雑で矮小な高台が貼り付けら



第229図 SD 286・301、包含層出土遺物 (1/4)

れている。2633も底部の破片で、底部内面は使用等によって摩耗しているように見受けられる。また、底部外面には糸切り痕が認められる。

2634は弥生土器・土師器である。高坏の脚部で、外面には直線文がわずかに遺存する。内面にはシボリ痕と粘土接合痕が明瞭に残る。

2635は須恵器である。壺の底部の破片で、外面にはハ字状に開く高台が貼り付けられている。底部内面は使用等によって摩滅している可能性がある。

(2) 堀・土塁出土遺物

SD 301 (第229図2636) 2636は弥生土器・土師器である。壺の体部で、外面には直線文と波状文、列点文が施されている。列点文はハケ状工具を用いて密に施されている。

(3) 遺構外出土遺物

包含層 (第229図2637~2640) 2637~2640は陶器である。

2637は山茶碗の底部で、高台はない。底部から体

部が明瞭に屈曲して立ち上がる。底部外面には糸切り痕が残り、墨書が認められる。

2638は丸碗もしくは天目茶碗の底部と思われる。高台は削り出しによって成形されており、底部内面には鉄釉が施されている。高台の形状から17世紀後半~18世紀前半に位置づけられる可能性が高い¹⁾。

2639・2640は皿である。2639は見込みがわずかに凹み、灰釉が施されている。凹みの周囲は露胎となっており、瀬戸・美濃産の輪禿皿の可能性はある。2640も内外面に灰釉が施されているが、見込みに露胎の部分が認められ、瀬戸・美濃産の丸皿ないし輪禿皿と考えられる。釉には貫入が目立つ。これらの皿は、17世紀後半~18世紀前半のものと思われる。

註

1) 近世の遺物の編年及び暦年代観については、以下の文献を参照した。

藤澤良祐2006「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの—生産と流通—』記念講演会・シンポジウム資料集 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

第Ⅶ章 自然科学分析

第1節 分析方法と目的及び試料

(1) 分析の方法と目的

居林遺跡・北山城跡の第2～4次調査において実施した自然科学分析は、樹種同定と土器胎土分析、蛍光X線分析である。

樹種同定 焼失建物と考えられる弥生時代後期後葉の竪穴建物S H236から検出された炭化材を対象に、樹種同定を行った。

建物から検出された炭化材の樹種を同定することによって、建物部材としてどのような樹種が選択されていたのかについての検討が可能となる。また、周辺の植生についての手掛かりを得ることもできるものと考えられる。

土器胎土分析 土器の生産や流通、人の移動等に関する情報を得るために、弥生時代後期～古墳時代前期の土器の胎土分析を行った。方法としては、胎土に含まれる砂粒に関する情報が多角的に得られる、薄片観察による分析を選択した。

主な対象としたのは、S字状口縁甕である。四日市市小牧南遺跡では伊勢地域北部で製作されたと思われるS字状口縁甕が認められ、その中に、従来は生産地が限られると考えられていた古い段階のものも含まれることが判明したが¹⁾、同様の資料が居林遺跡においても確認された。そこで、こうした在地産と考えられるS字状口縁甕のほか、他地域から搬

入されたと考えられるS字状口縁甕、そして比較試料として雲出川流域の松阪市西肥留遺跡と、鈴鹿川流域の鈴鹿市宮ノ前遺跡から出土したS字状口縁甕についても胎土分析を行い(第230図)²⁾、伊勢地域北部における古い段階のS字状口縁甕生産の可能性について明らかにすることを試みた。

なお、S字状口縁甕については、脚頂部及び底部内面に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられており、それらに混和された砂と、他の部位の胎土に混和された砂では、採取地が異なる可能性も示唆されている³⁾。この点について確認するため、分析試料のうち2点は、特に脚頂部に貼り付けられた粗い砂粒を含む粘土を分析対象とした。

そのほか、他地域からもたらされた可能性がある土器と、比較試料として形態や調整、胎土等から在地産と考えられる土器の分析も行った。これにより、他地域からの土器の搬入の有無や、S字状口縁甕の胎土の特性を明確にできるものと思われる。

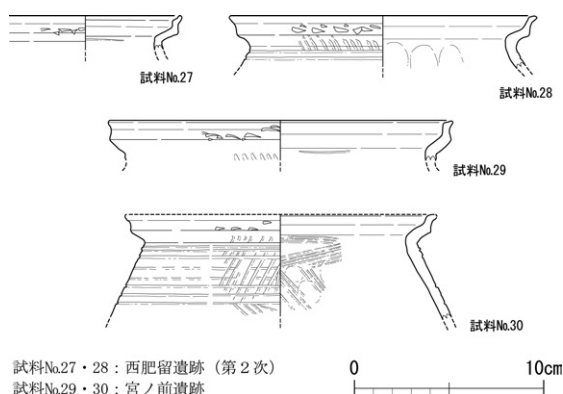
蛍光X線分析 出土した土器の中に、内面に赤色顔料が付着しており、容器等として使用されたと考えられるものや、装飾として器面に赤色顔料が塗布されたものが複数認められた。

赤色顔料には水銀朱やベンガラなど複数の種類があるため、蛍光X線分析を行い、付着ないし塗布された赤色顔料の種類を同定した。これによって、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての赤色顔料の利用状況や、土器の装飾技法等に関する情報の蓄積を図る。

(2) 試料の採取と取り扱い

樹種同定に供する炭化物は、基本的に現場において調査担当者が採取した。

現場での試料採取に際しては、発掘調査で使用していたスコップ等を用いた。現場で採取した試料は、アルミホイルに包んだ上でビニール袋に入れて密封して持ち帰り、カビの発生を防止するため、一部は冷蔵庫に入れて低温で保管した。保管の間、確認等



試料No.27・28：西肥留遺跡（第2次）
試料No.29・30：宮ノ前遺跡

第230図 土器胎土分析比較試料実測図 (1/4)

のため数回開封したが、洗浄などは行っていない。

また、蛍光X線分析に供した土器片は、他の遺物とともに水洗して保管していたものの中から実測・報告のためにピックアップしたものである。水洗時に赤色顔料が剥落しないよう留意したため、土壌が完全に除去できていない部分もある。

註

- 1) 三重県埋蔵文化財センター2021『小牧南遺跡（第2・3次）発掘調査報告』

- 2) 比較試料とした土器は、西肥留遺跡と宮ノ前遺跡の発掘調査において出土したもので、遺構内から複数の土器とともに出土し、時期的な位置づけが他の土器からも可能なものを選定している。これらの土器は、各遺跡の報告段階において報告対象資料としてピックアップされていなかったため、本報告に際して新たに図化を行った。三重県埋蔵文化財センター2008『西肥留遺跡発掘調査報告（第1・2・3・5次）』、三重県埋蔵文化財センター2004『河曲の遺跡』
- 3) S字甕胎土研究会1998「S字甕の混和材を考える」『考古学フォーラム』9 考古学フォーラム

第2節 樹種同定

居林遺跡・北山城跡（第2次）出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

四日市市北山町の丘陵上に立地する居林遺跡・北山城跡の第2次調査で検出された焼失住居跡と考えられている堅穴住居跡の出土炭化材について、樹種同定を行った。

（2）試料と方法

試料は、焼失住居跡と考えられているSH236から出土した炭化材9点である。発掘調査所見によれば、弥生時代後期後葉の堅穴住居跡であると考えられている。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（3）結果

同定の結果、シイ属とコナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属と呼ぶ）、クスノキ、サカキ、モチノキ属、コシアブラの6分類群が産出した。シイ属が最も多く4点で、アカガシ亜属とクスノキ、サカキ、モチノキ属、コシアブラが各1点であった。同

定結果を第3表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

①シイ属 *Castanopsis* ブナ科 第231図 1a-1c (No.10)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列断続的に並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が炎症状に配列する半環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列であるが、微細な試料しか採取できなかったため、集合放射組織の有無が確認できず、ツブラジイカスダジイかの判断はできなかった。

シイ属にはツブラジイとスダジイがあり、共に亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材質も類似し、重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、

第3表 居林遺跡・北山城跡（第2次）出土炭化材の樹種同定結果

試料 No.	遺構名	遺物No.	樹種	備考
10	SH236	W1-2	シイ属	垂木？
11		W1-3	モチノキ属	垂木？
12		W3-3	シイ属	垂木？
13		W3-4	シイ属	垂木？
14		W4-2	コシアブラ	
15		W4-3	コナラ属アカガシ亜属	垂木？
16		W6-1	クスノキ	
17		W1-1	シイ属	垂木？
18		W6-3	サカキ	

切削加工は困難でない。

②コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 第231図 2a-2c (No.15)

大型の道管が単列で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靱で耐水性があり、切削加工は困難である。

③クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J. Presl
クスノキ科 第231図 3a-3c (No.16)

中型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや疎らに散在する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～2列となる。放射組織の上下端や木部組織内には油細胞が顕著にみられる。

クスノキは暖帯から亜熱帯へかけての本州中南部、四国、九州に分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや軽軟なものから中庸なものまであり、切削加工は容易である。また、耐朽性および耐虫性がきわめて高い。

④サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ属
第232図 4a-4c (No.18)

小型の道管が単独で密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、単列となる。

サカキは日本海側で新潟県以西、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

⑤モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 第232図 5a-5c (No.11)

小型の道管が単独ないし2～4個が接線ないし斜線方向に複合してやや密に散在する散孔材である。

道管は20～40段程度の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、1～5列となる。

モチノキ属にはモチノキやクロガネモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

⑥コシアブラ *Chengiopanax sciadophylloides* (Franch. et Sav.) C. B. Shang et J. Y. Huang
ウコギ科 第232図 6a-6c (No.14)

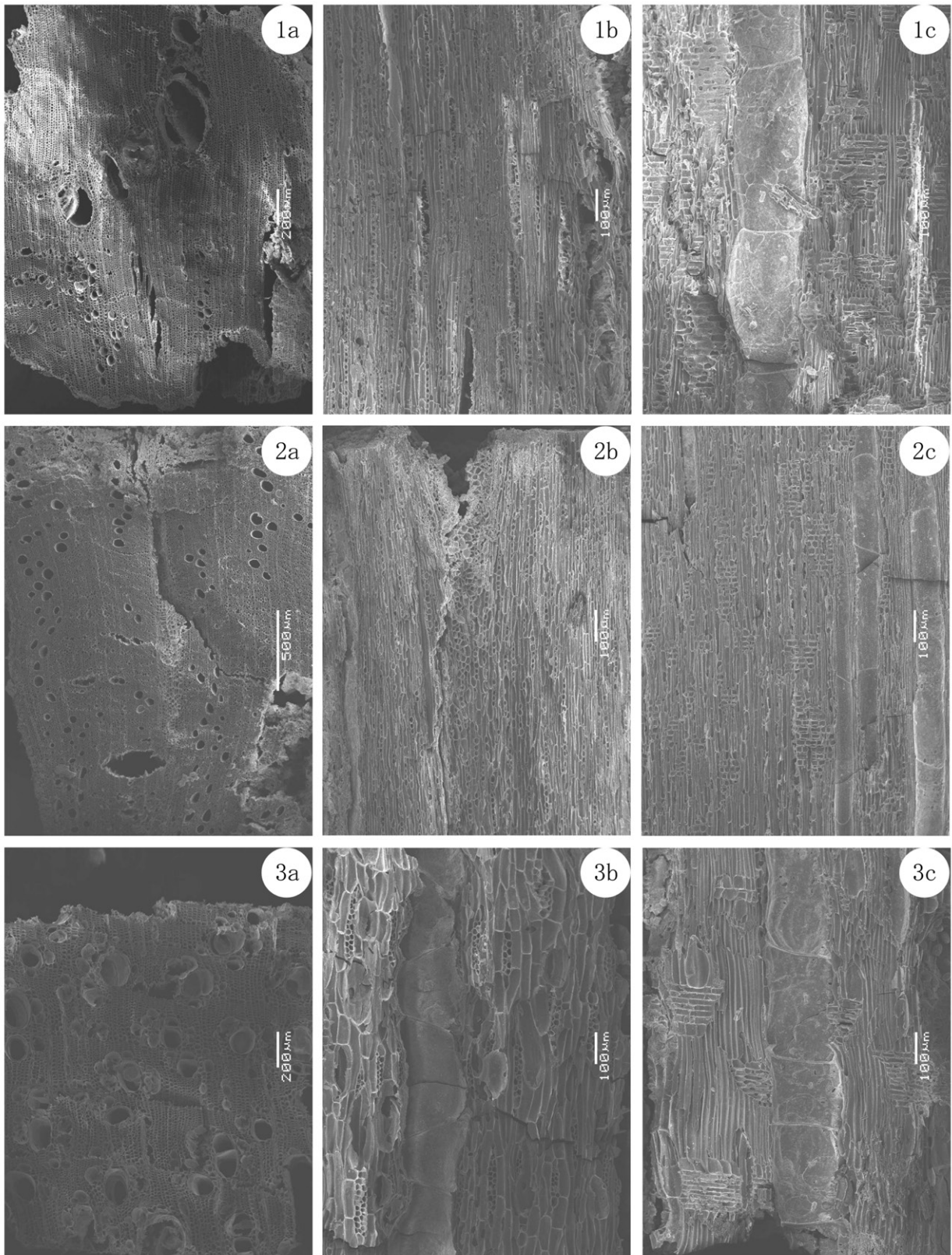
年輪のはじめに中型の道管が単独で断続的に並び、晩材部では小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する半環孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、ほぼ単列となる。

コシアブラは北海道、本州、四国、九州などの温帯から暖帯上部の肥沃な湿潤地に多く分布する、落葉高木の広葉樹である。材は軽軟で弱く、切削加工は容易である。

(4) 考察

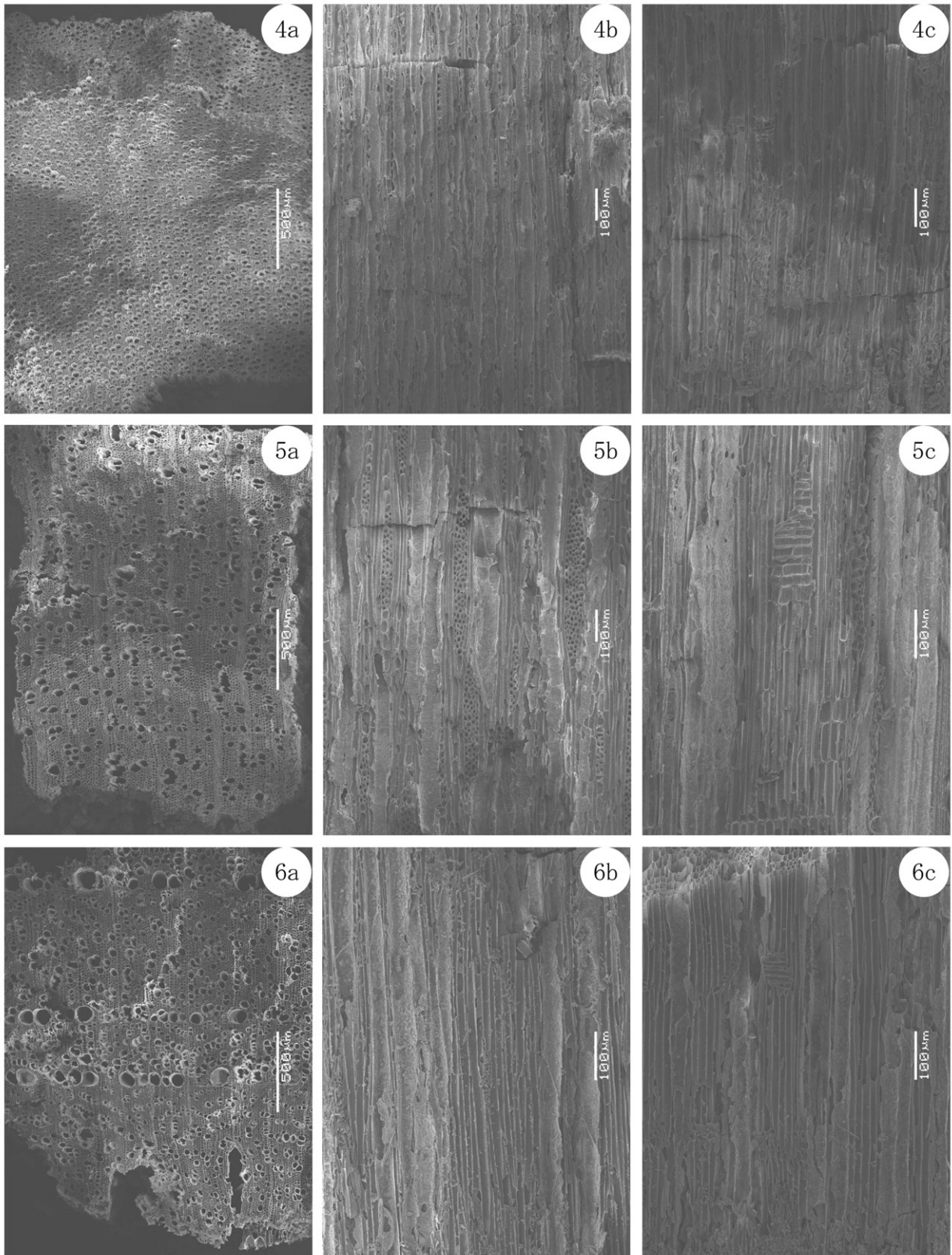
焼失住居跡と考えられているSH236では、シイ属が4点と最も多くみられ、アカガシ亜属とクスノキ、サカキ、モチノキ属、コシアブラが各1点みられた。試料は焼けた建築材であると考えられており、なかでもW1-1 (試料No.17:シイ属)、W1-2 (試料No.10:シイ属)、W1-3 (試料No.11:モチノキ属)、W3-3 (試料No.12:シイ属)、W3-4 (試料No.13:シイ属)、W4-3 (試料No.15:アカガシ亜属)の6点は、住居跡内で放射状に出土したため、垂木であった可能性がある。

産出したシイ属とアカガシ亜属、サカキには重硬で加工性が比較的悪いという材質、クスノキとモチノキ属の硬さは中庸で比較的加工しやすいという材質、コシアブラは軽軟で加工性が良いという材質がある(伊東ほか, 2011)。垂木と考えられる試料に利用されていたのはシイ属とアカガシ亜属、モチノキ属で、強度を重視した用材選択であった可能性がある。軽軟なコシアブラ(試料No.14:W4-2)は、壁面付近から出土している。試料は原型を留めておら



1a-1c. 杉属 (No.10)、2a-2c. コナラ属アカガシ亜属 (No.15)、3a-3c. クスノキ (No.16)
 a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第231図 居林遺跡・北山城跡 (第2次) 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真①



4a-4c. サカキ (No.18)、5a-5c. モチノキ属 (No.11)、6a-6c. コシアブラ (No.14)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第232図 居林遺跡・北山城跡（第2次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真②

ず木取りの確認はできなかったが、加工性の良さを利用して、板状に加工し、壁材などとして利用されていた可能性もある。

周辺植生については、落葉広葉樹であるコシアブラ、常緑広葉樹であるシイ属とアカガシ亜属、クスノキ、サカキ、落葉広葉樹と常緑広葉樹両種が含まれるモチノキ属がみられ、居林遺跡・北山城跡の周辺には、弥生時代後期後葉において常緑・落葉広葉樹混交林が広がっていた可能性がある。居林遺跡・北山城跡のSH236では、常緑・落葉広葉樹混交林より、垂木などの負荷がかかる部材には重厚な材が、

加工を要する部材には軽軟な材が選択的に伐採利用されていた可能性がある。ただし、今回同定された樹種は当時の植生の一部を構成していたに過ぎないと考えられるため、当時の植生と樹種選択傾向について調べるには、花粉分析の結果と合わせて再検討する必要がある。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011)
日本有用樹木誌, 238p, 青海社.

第3節 土器胎土分析

居林遺跡・北山城跡出土土器の胎土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

四日市市に所在する居林遺跡および北山城跡は、鈴鹿山脈に発し、伊勢平野北部を流れ、伊勢湾に注ぐ朝明川中流域の左岸に位置する。これまでの発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期を示す遺構・遺物が多数確認されている。

本報告では、主にこの時期を示す土器の特徴の一つであるS字状口縁台付甕の胎土の特性を岩石学的手法を用いて捉えることにより、その生産や移動に関わる資料を作成する。

(2) 試料

試料は、居林遺跡・北山城跡から出土した土器片20点と居林遺跡・北山城跡の南西方の朝明川右岸に位置する小牧南遺跡から出土した土器片6点、さらに比較試料として雲出川流域に位置する西肥留遺跡から出土した土器片2点と鈴鹿川流域に位置する宮ノ前遺跡から出土した土器片2点の合計30点の土器片である。試料には、試料No.1～30の番号が付されており、試料No.1～20は居林遺跡・北山城跡出土土器、試料No.21～26は小牧南遺跡出土土器、試料No.27、28は西肥留遺跡出土土器、試料No.29、30は宮ノ前遺跡出土土器である。

各試料の出土遺構や器種および発掘調査者所見などは、一覧にして第4表に示す。

(3) 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は切片による薄片作製が主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、胎土中における砂粒の量や、その粒径組成、砂を構成する鉱物片、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。ただし、胎土中に含まれる砂粒の量自体が少なければ、その情報量も少なくなる。一方、蛍光X線分析は、砂粒の量や高温による鉱物の変化にあまり影響されることがなく、胎土の材質を客観的な数値で示すことができる。ただし、比較できる数値データ（例えば窯跡出土試料など）が多くの場合必要である。今回の分析では窯跡の存在しない土器が試料であることから、薄片作製観察を用いる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

ここでは薄片観察結果を松田ほか(1999)の方法に従って表記する。これは、胎土中の碎屑物について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ご

第4表 試料一覧

試料 No.	遺跡名	出土遺構	報告 No.	実測 No.	器種	調査者観察所見	試料
1	北山城跡・居林遺跡 (第2次)	SH204	307	218-01	S字状口縁台付甕 (A類)	在地産か	実測破片から遊離
2	北山城跡・居林遺跡 (第2次)	SH248	744	271-01	S字状口縁台付甕 (A類)	搬入品か	実測破片と接合 (分離済)
3	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH202	156	418-02	S字状口縁台付甕 (A類)	在地産か	分析に際して一部切断し試料採取
4	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH445	1427	533-04	S字状口縁台付甕 (A類)	0類?、在地産か	分析に際して一部切断し試料採取
5	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH454	1529	468-02	S字状口縁台付甕 (A類)	在地産か	実測破片と接合 (分離済)
6	北山城跡・居林遺跡 (第2次)	SK225	2216	285-05	S字状口縁台付甕 (B類)	搬入品か	実測破片から遊離
7	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	G-G9Pit4	1530	406-06	S字状口縁台付甕 (B類)	搬入品か	実測破片と接合 (分離済)
8	北山城跡・居林遺跡 (第2次)	G-P9検出中	—	—	S字状口縁台付甕	搬入品か	底部片、粗い砂粒を含む部分中心に分析
9	北山城跡・居林遺跡 (第2次)	SH230	—	—	S字状口縁台付甕	搬入品か	底部片、粗い砂粒を含む部分中心に分析
10	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH443	1367	457-01	く字状口縁甕	タタキ成形?、搬入品か	実測破片と接合 (分離済)
11	北山城跡・居林遺跡 (第2次)	SH291	808	281-03	受口状口縁甕	弥生時代後期前葉、搬入品か	実測破片から遊離
12	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH459	1619	476-01	受口状口縁甕	搬入品か	分析に際して一部切断し試料採取
13	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH431	1291	452-05	受口状口縁甕	在地産か、比較試料	実測破片と接合 (分離済)
14	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH459	1615	483-02	受口状口縁甕	在地産か、比較試料	実測破片と接合 (分離済)
15	北山城跡・居林遺跡 (第2次)	SH228	416	243-04	瓢形壺	連弧文あり、在地産か	実測破片と接合 (分離済)、試料少量
16	北山城跡・居林遺跡 (第2次)	SH251	754	271-06	瓢形壺	連弧文あり、在地産か	実測破片と接合 (分離済)
17	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH464	1772	401-01	瓢形壺	無文、在地産か	実測破片から遊離
18	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH414	1107・1106	442-01・442-02	広口壺	結節縄文あり、赤彩あり、東海東部系、在地産か	実測破片と接合 (分離済)
19	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH488	2058	554-01	広口壺	赤彩あり、パレス壺、搬入品か	実測破片から遊離
20	北山城跡・居林遺跡 (第4次)	SH436	1338	401-03	伊勢型二重口縁壺	無文、搬入品か	実測破片から遊離
21	小牧南遺跡 (第2次)	SH221	1341	036-01	S字状口縁台付甕 (A類)	搬入品か	実測破片と接合 (分離済)
22	小牧南遺跡 (第2次)	SH221	1343	036-03	S字状口縁台付甕 (A類)	在地産か	分析に際して一部切断し試料採取
23	小牧南遺跡 (第3次)	SH337	1879	333-01	S字状口縁台付甕 (A類)	在地産か	実測破片と接合 (分離済)
24	小牧南遺跡 (第3次)	SH338	1908	328-01	S字状口縁台付甕 (A類)	搬入品か	実測破片と接合 (分離済)
25	小牧南遺跡 (第3次)	SK334	2247	316-01	S字状口縁台付甕 (A類)	搬入品か	実測破片と接合 (分離済)
26	小牧南遺跡 (第3次)	SH169/324	769	304-01	S字状口縁台付甕 (B類)	在地産か	実測破片から遊離
27	西肥留遺跡 (第2次)	SH108	—	—	S字状口縁台付甕 (A類)	雲出川流域、比較試料	口縁部片
28	西肥留遺跡 (第2次)	SH108	—	—	S字状口縁台付甕 (A類)	雲出川流域、比較試料	口縁部片
29	宮ノ前遺跡	SH12	—	—	S字状口縁台付甕 (A類)	鈴鹿川流域、比較試料	口縁部片
30	宮ノ前遺跡	SH12	—	—	S字状口縁台付甕 (A類)	鈴鹿川流域、比較試料	口縁部片

とに碎屑物を構成する鈳物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における碎屑物の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下にその手順を述べる。

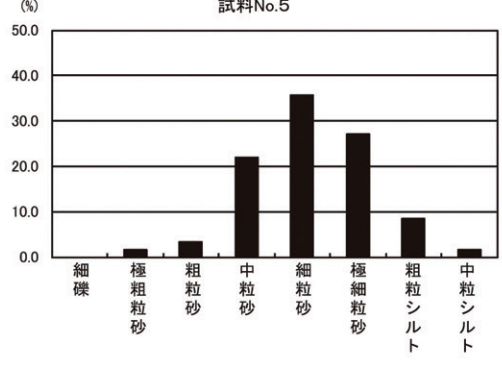
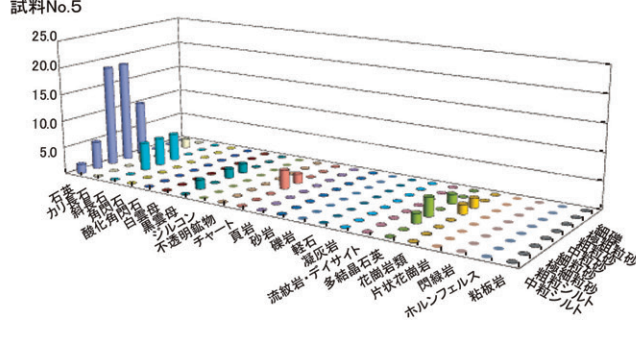
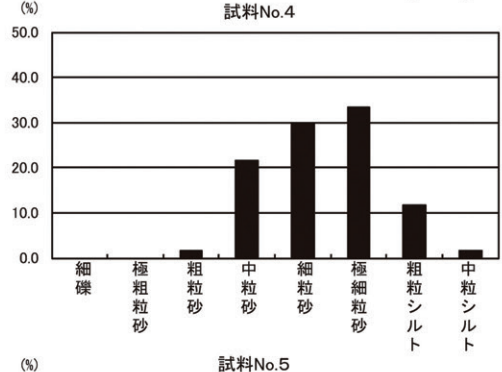
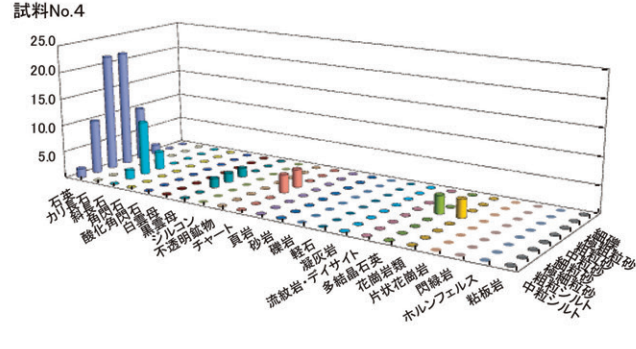
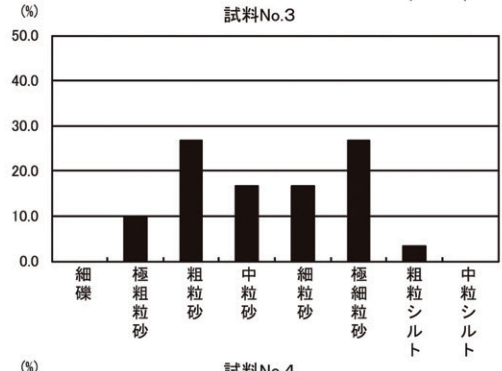
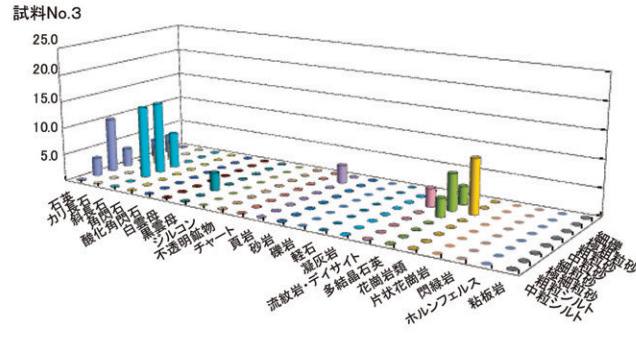
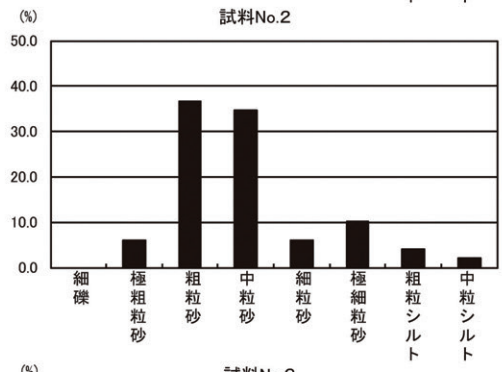
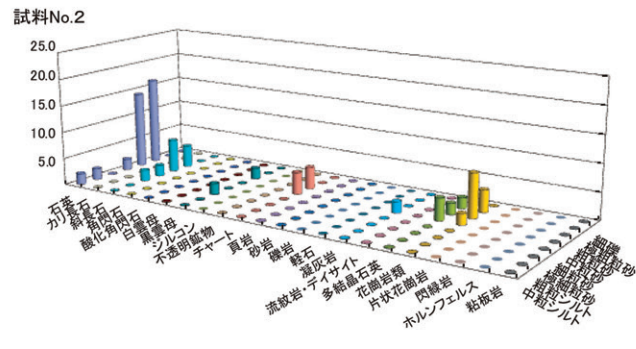
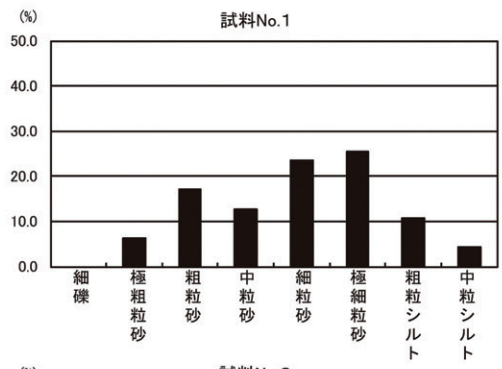
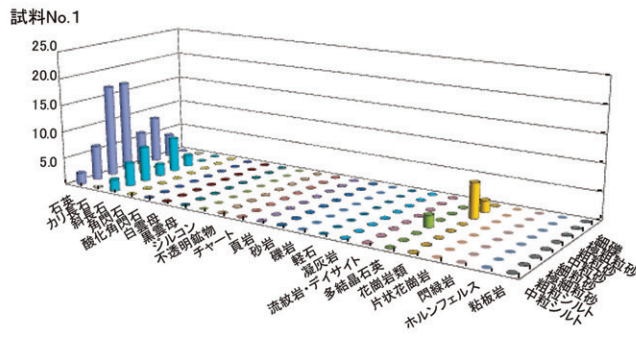
碎屑物の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鈳物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、碎屑物の粒径組成ヒストグラム、碎屑物・基質・孔隙の割合を示す棒グラフを呈示する。

(4) 結果

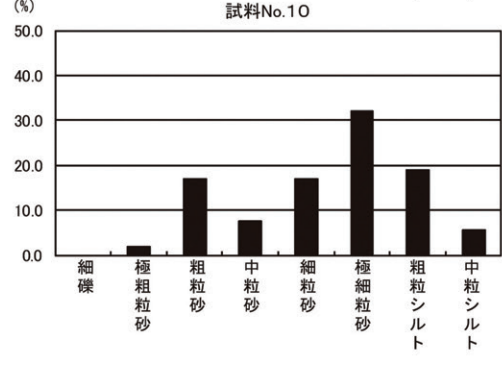
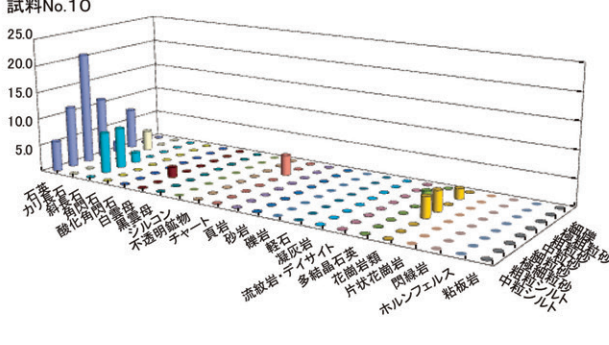
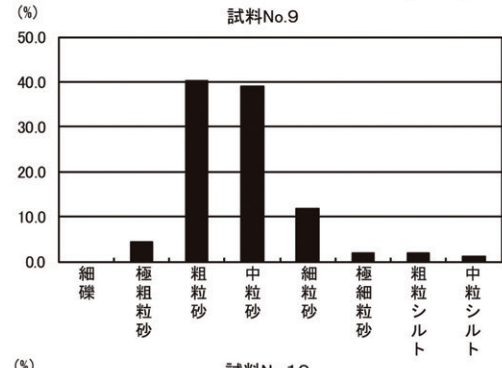
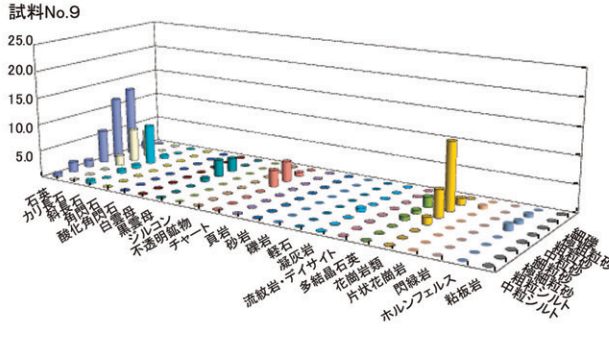
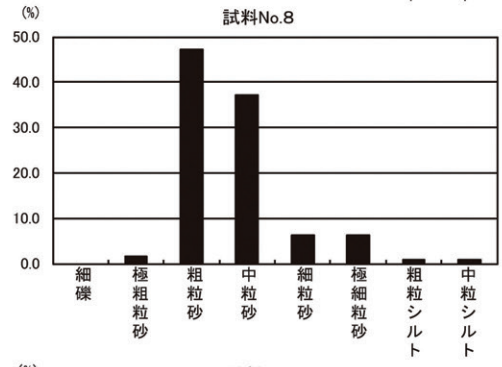
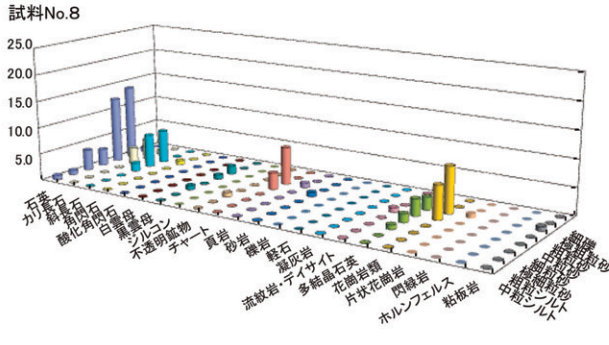
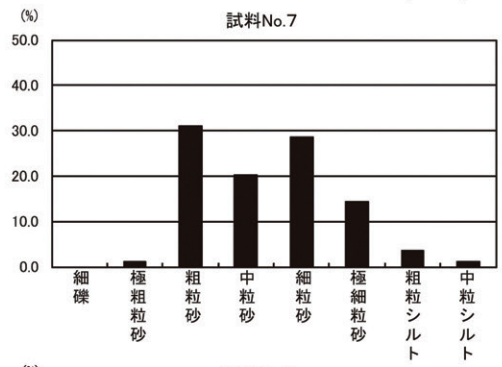
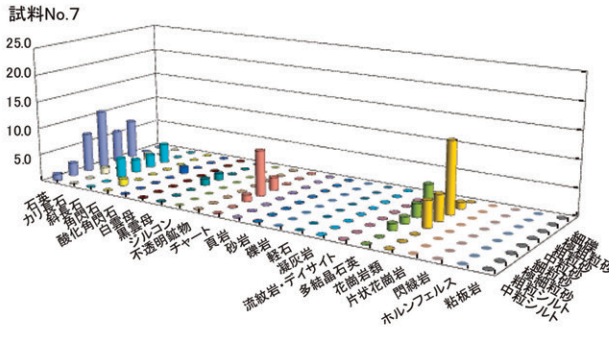
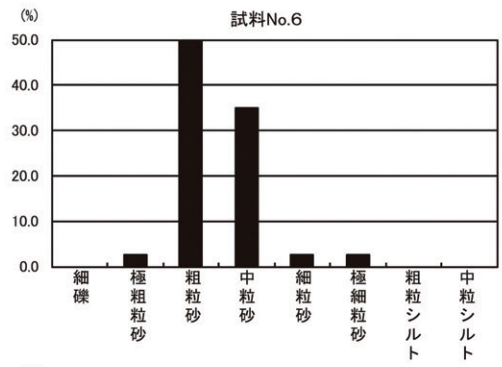
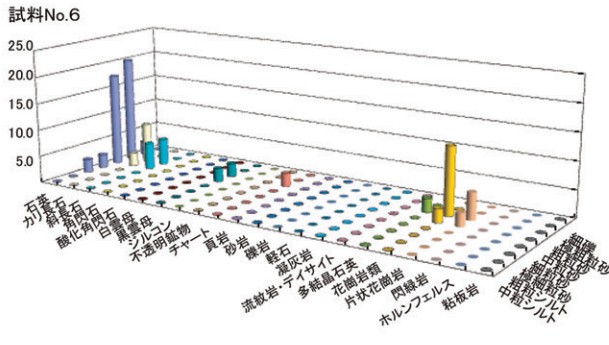
結果を第5表、第233～238図に示す。今回の試料は、器壁の薄いものが多く、また切断可能な部位も限定的であったために、観察した断面の面積が比較的狭いという事情があった。そのために全体的に計数できた碎屑物の粒数が小さく、組成としての評価が難しい試料もあった。以下に、碎屑物の鈳物・岩石組成、粒径組成、碎屑物の割合の順に述べる。

①鈳物・岩石組成

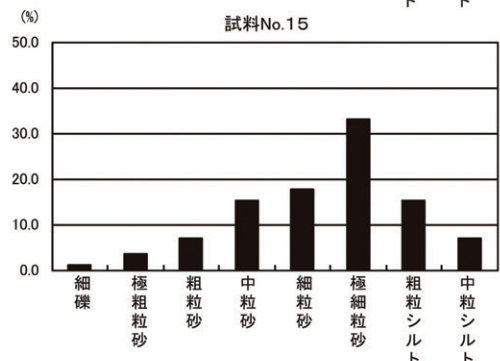
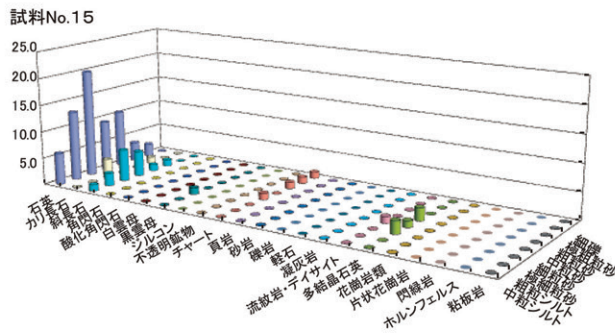
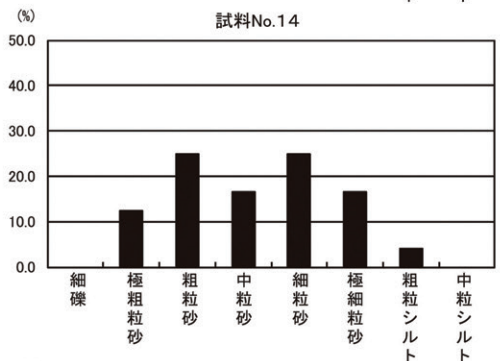
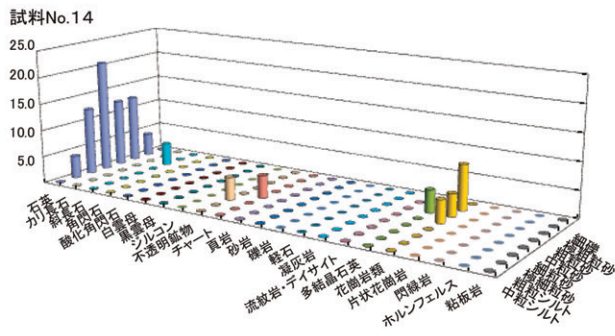
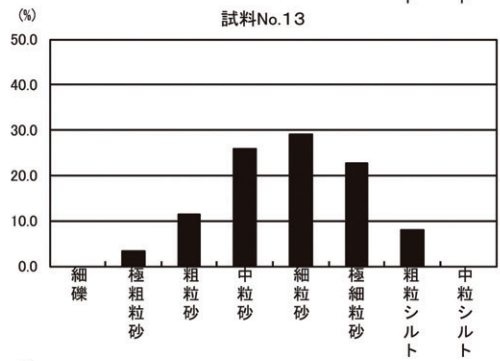
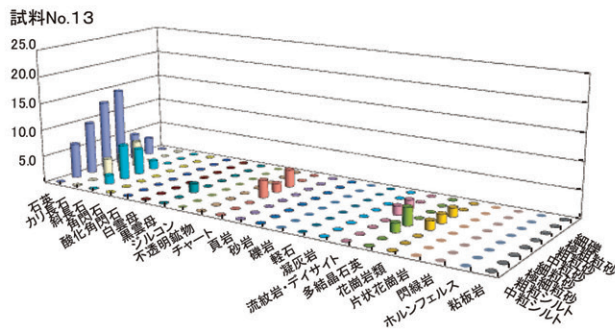
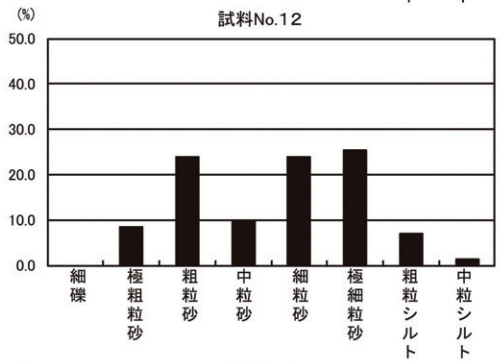
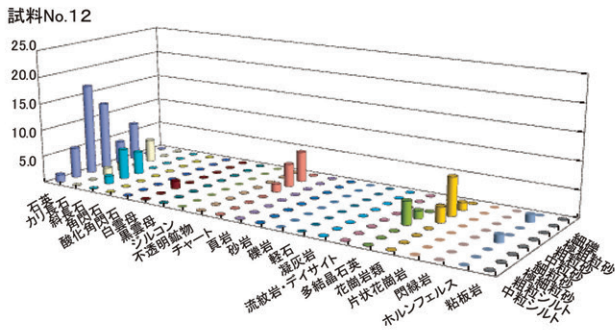
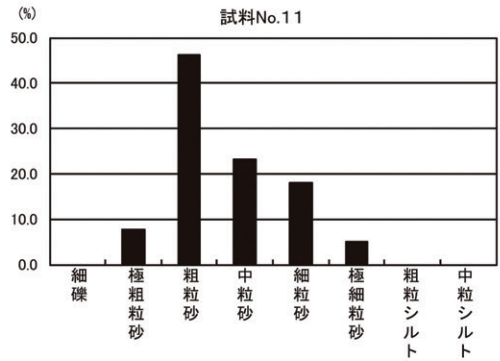
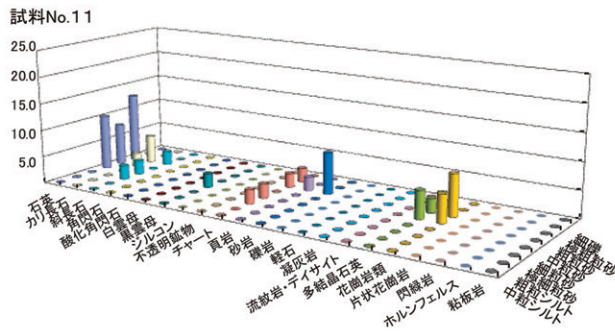
上述したように碎屑物の全体数は少ないが、出現傾向としては、今回の試料は比較試料も含めてほぼ同様の状況が窺える。すなわち、鈳物片では石英が比較的多く、少量の斜長石を伴い、少量または微量のカリ長石も含まれる。試料によっては、微量の黒雲母も含まれる。岩石片では、ほとんどの試料に少量の多結晶石英と花崗岩類が含まれ、微量のチャー



第233図 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成①

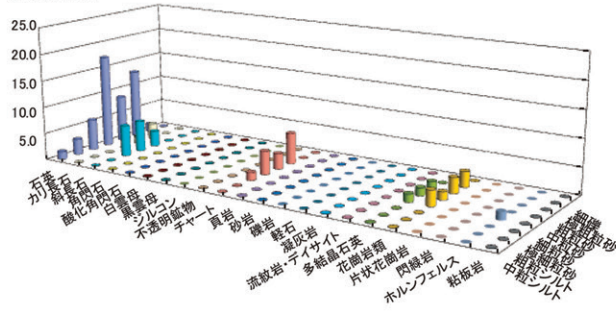


第234図 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成②

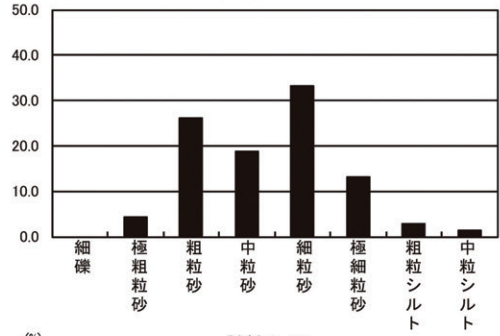


第235図 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成③

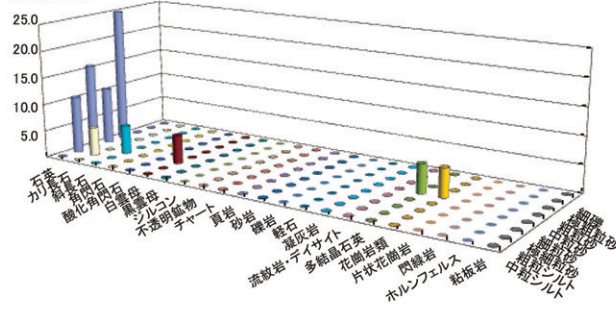
試料No.16



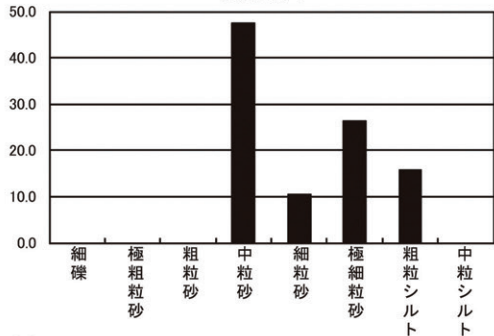
試料No.16



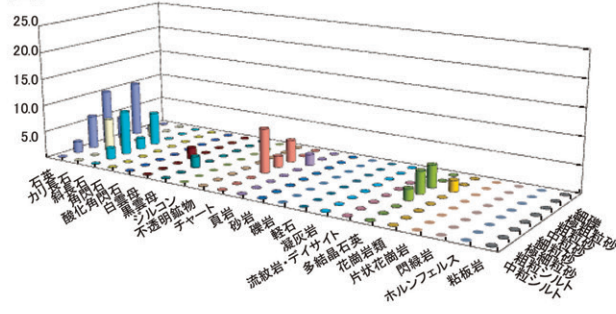
試料No.17



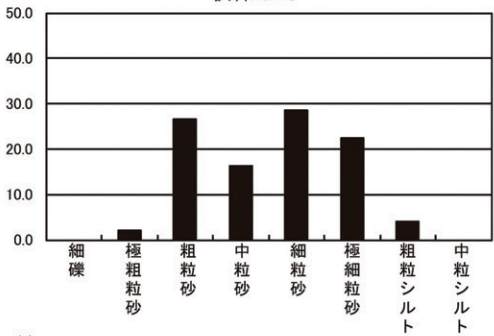
試料No.17



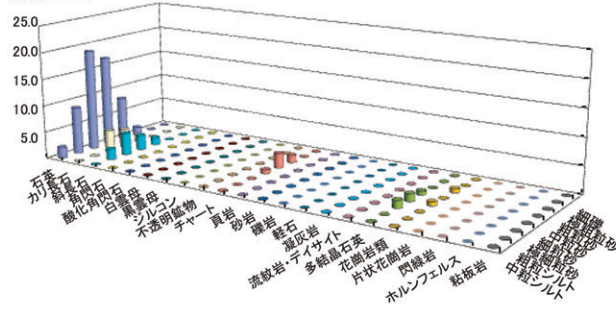
試料No.18



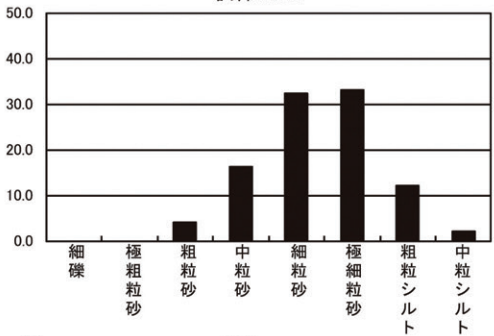
試料No.18



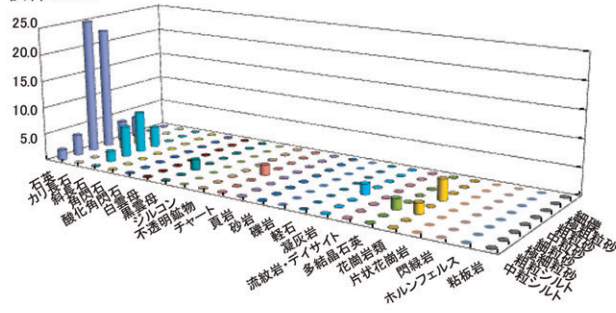
試料No.19



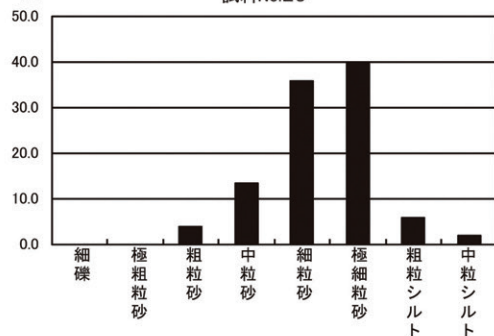
試料No.19



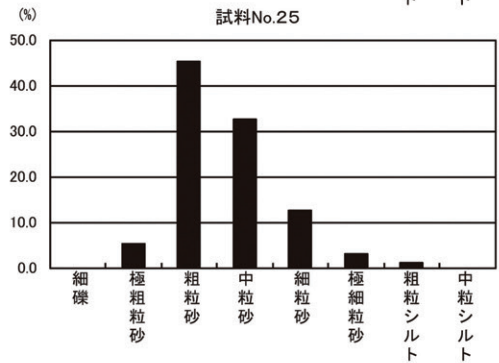
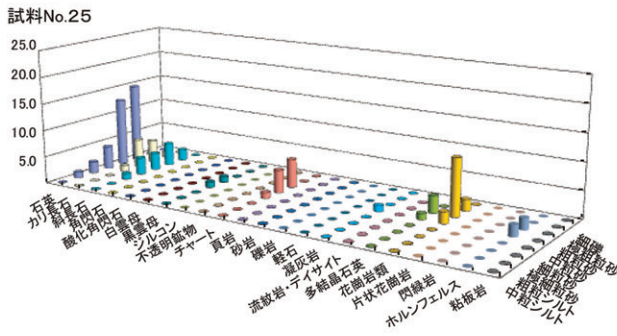
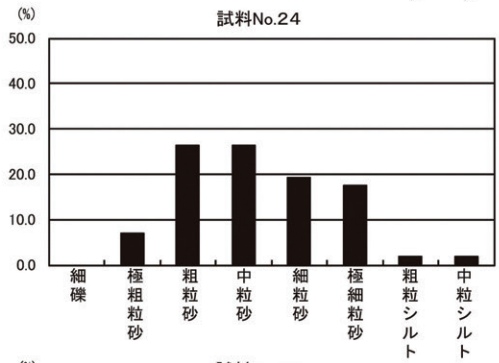
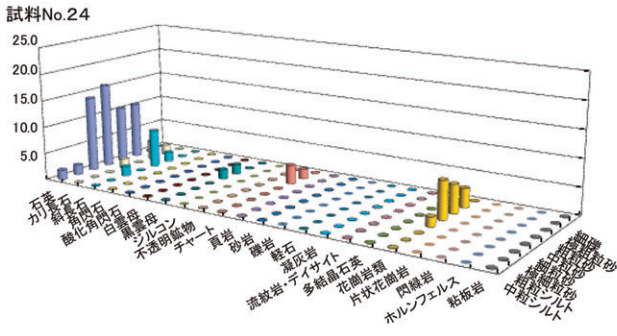
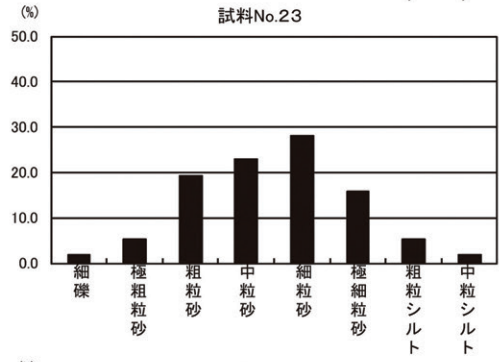
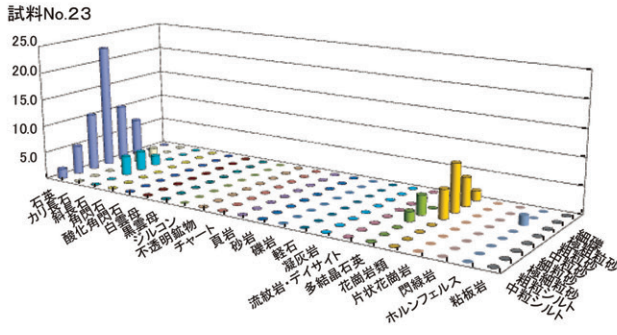
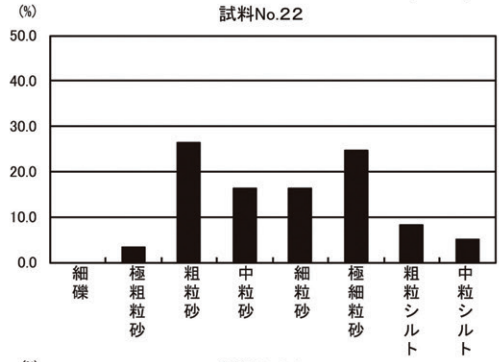
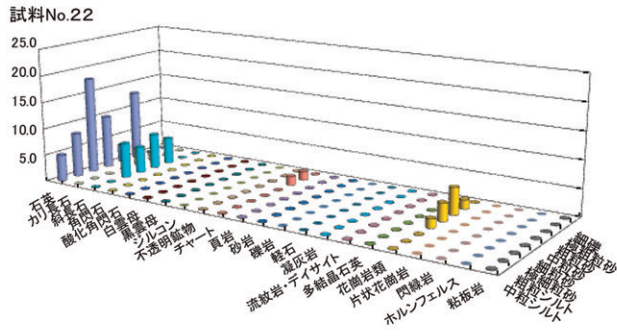
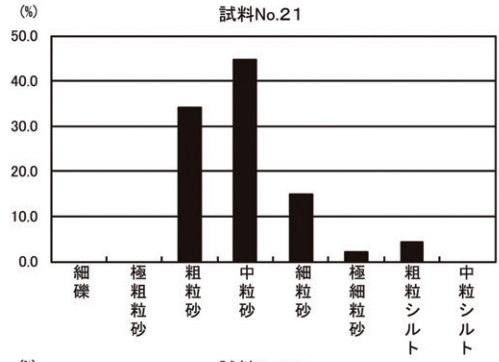
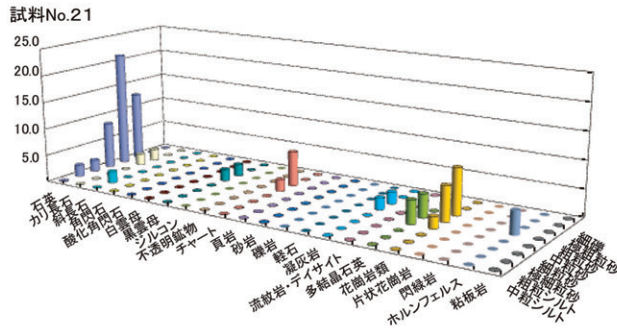
試料No.20



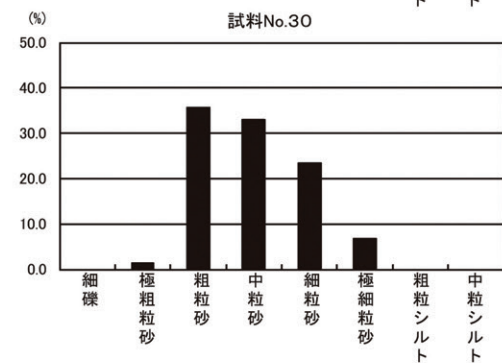
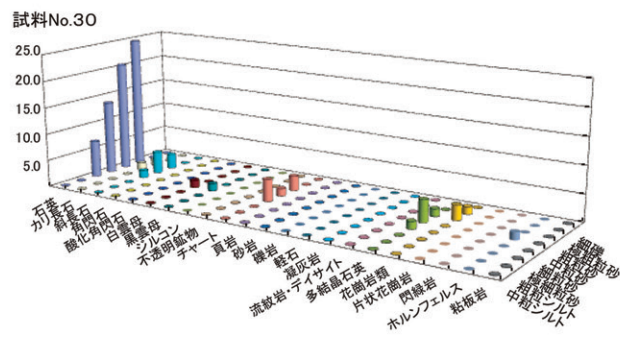
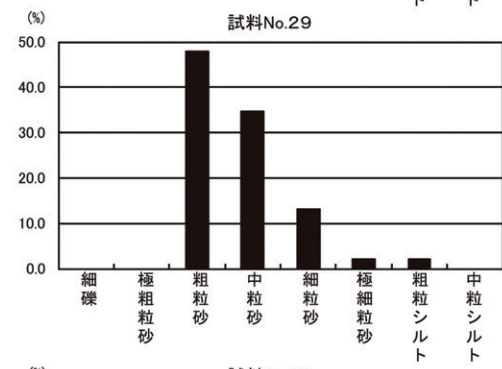
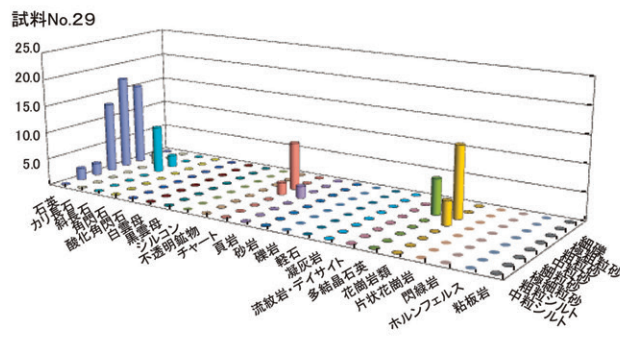
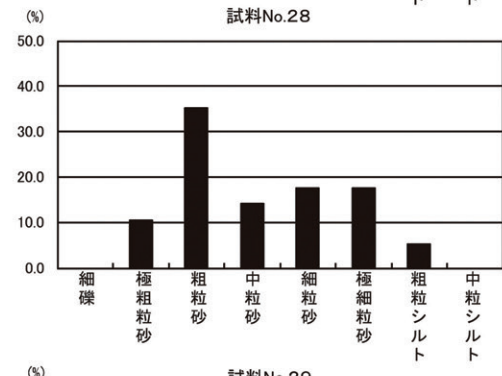
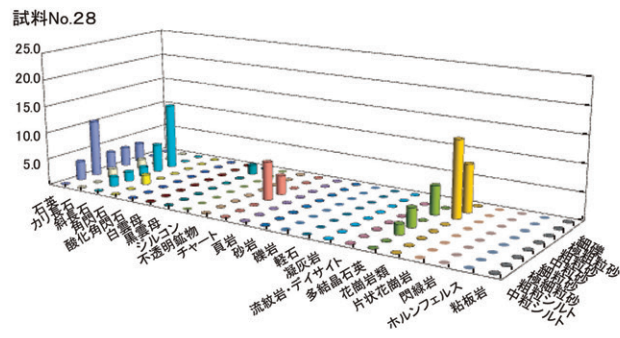
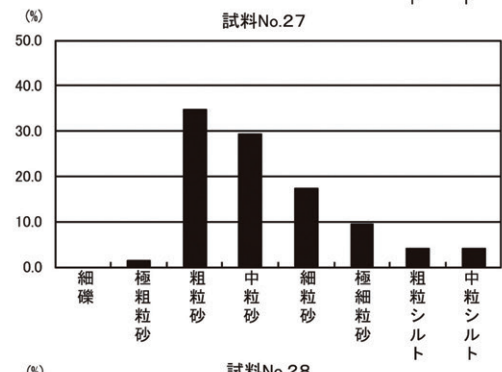
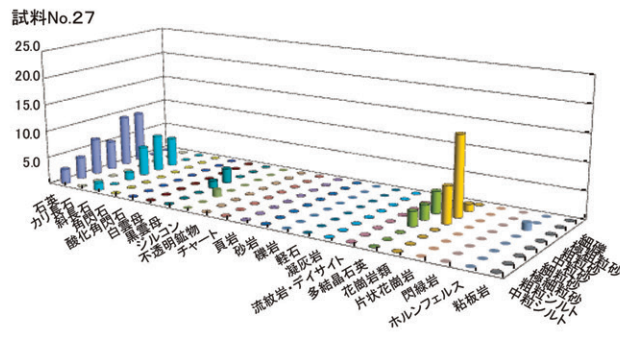
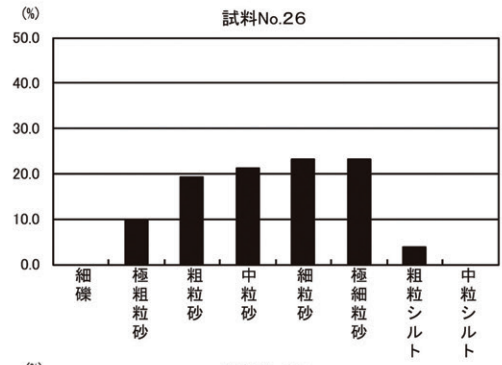
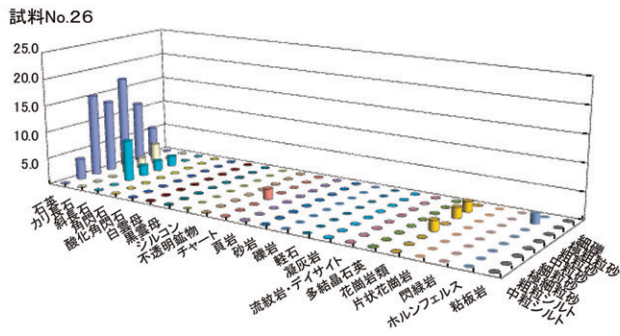
試料No.20



第236図 砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成④



第237図 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成⑤



第238図 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成⑥

第5表 薄片観察結果①

試料 No.	砂粒 区分	砂粒の種類構成																	合計																	
		鉱物片							岩石片							その他																				
		石英	カリ 長石	斜 長石	斜 方輝石	単 斜輝石	角 閃石	酸 化角閃石	白 雲母	黒 雲母	ジ ル コ ン	不 透 明 鉱 物	チ ャ ー ト	頁 岩	砂 岩	凝 灰 岩	流 紋 岩・ デイ サイ ト	多 結 晶 石 英		花 崗 岩 類	片 状 花 崗 岩	ホ ル ン フ ェ ル ス	粘 板 岩	脈 石 英	変 質 岩	珪 化 岩	火 山 ガ ラ ス	炭 質 物	粘 土 塊	海 綿 骨 針	植 物 珪 酸 体					
1	細礫																																0			
	極粗粒砂	2																1															3			
	粗粒砂	4	1															3															8			
	中粒砂	3	3																														6			
	細粒砂	8	1	1													1																11			
	極細粒砂	8	3																							1							12			
	粗粒シルト	3	2																														5			
	中粒シルト	1	1																															2		
	基質																												307							
	孔隙																												4							
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類などで埋められる。火山ガラスあり。火山ガラスはバブルウォール型を示す。																																			
2	細礫																																0			
	極粗粒砂																1	2																3		
	粗粒砂	8	2					1			2						1	4																18		
	中粒砂	7	3								2		1			2	1									1								17		
	細粒砂	1	1																						1									3		
	極細粒砂		1	1				1																	2									5		
	粗粒シルト	1																							1									2		
	中粒シルト	1																																	1	
	基質																												264							
	孔隙																												4							
備考	基質はややシルト質で、粘土鉱物、雲母鉱物、石英で埋められる。角閃石あり。火山ガラスはバブルウォール型を示す。																																			
3	細礫																																0			
	極粗粒砂	1										1					1																		3	
	粗粒砂	1	1													1	2	3																	8	
	中粒砂		1	2													1								1										5	
	細粒砂	1	4																																5	
	極細粒砂	3	4					1																											8	
	粗粒シルト	1																																	1	
	中粒シルト																																		0	
	基質																												314							
	孔隙																												5							
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類などで埋められる。ジルコンあり。バブルウォール型の火山ガラスあり。																																			
4	細礫																																	0		
	極粗粒砂																																			0
	粗粒砂	1																																		1
	中粒砂	6						1			2						2	2																	13	
	細粒砂	13	2					1			2																									18
	極細粒砂	13	6					1																												20
	粗粒シルト	6	1																																	7
	中粒シルト	1																																		1
	基質																												386							
	孔隙																												8							
備考	基質はややシルト質で、粘土鉱物、雲母鉱物、石英で埋められる。																																			

第5表 薄片観察結果②

試料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計												
		鉱物片							岩石片							その他															
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英		花崗岩類	片状花崗岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体
5	細礫																														0
	極粗粒砂		1																												1
	粗粒砂																1	1													2
	中粒砂	6		3							1		1										1							13	
	細粒砂	11	1	3							1		2				2								1					21	
	極細粒砂	11		3													1									1				16	
	粗粒シルト	3			1						1																			5	
	中粒シルト	1																												1	
	基質																												290		
	孔隙																												1		
備考	基質はややシルト質で、粘土鉱物、雲母鉱物、石英で埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す																														
6	細礫																													0	
	極粗粒砂	1																												1	
	粗粒砂	8	3	2						1		1					1	5	2											23	
	中粒砂	7	1	2						1								1	1							1				14	
	細粒砂	1																												1	
	極細粒砂	1																												1	
	粗粒シルト																													0	
	中粒シルト																													0	
	基質																												224		
	孔隙																												18		
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。斜長石は自形性が強い。角閃石あり。火山ガラスはバブルウォール型を示す。																														
7	細礫																													0	
	極粗粒砂																	1												1	
	粗粒砂	6	1	3														4	11								1			26	
	中粒砂	5		2						1	1	2					2	4												17	
	細粒砂	9		2							1	7					1	4												24	
	極細粒砂	6	1	3								1					1													12	
	粗粒シルト	2									1																			3	
	中粒シルト	1																												1	
	基質																												332		
	孔隙																												6		
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。斜長石は自形性が強い。チャートは弱い変成作用を被っている																														
8	細礫																													0	
	極粗粒砂	1	1																											2	
	粗粒砂	18	5	8							1		2		9	1			3	11	1		1	1						61	
	中粒砂	16	4	8							1			4	1		1	4	8								1			48	
	細粒砂	4		2														2												8	
	極細粒砂	5									1	1						1												8	
	粗粒シルト	1																												1	
	中粒シルト	1																												1	
	基質																												641		
	孔隙																												14		
備考	基質は粘土鉱物、雲母鉱物、石英で埋められる。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。チャートは角礫状～亜角礫状。																														

第5表 薄片観察結果③

試料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計													
		鉱物片								岩石片						その他															
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト		多結晶石英	花崗岩類	片状花崗岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体
9	細礫																														0
	極粗粒砂	2									1							2	1	1											7
	粗粒砂	21	8	1					4		6						3	20		1				1							65
	中粒砂	19	10	12					5		5						1	8		2				1							63
	細粒砂	10	3	1					1						1	1	2														19
	極細粒砂	2		1																											3
	粗粒シルト	3																													3
	中粒シルト	1		1																											2
	基質																											827			
孔隙																											37				
備考	基質はややシルト質で、粘土鉱物、雲母鉱物、石英で埋められる。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。チャートは角礫状～亜角礫状。																														
10	細礫																														0
	極粗粒砂																	1													1
	粗粒砂	4	2								2						1														9
	中粒砂	1																2						1							4
	細粒砂	6		1														2													9
	極細粒砂	11		4					1															1							17
	粗粒シルト	6		4																											10
	中粒シルト	3																													3
	基質																											475			
孔隙																											4				
備考	基質はややシルト質で、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類、酸化鉄で埋められる。角閃石および弱酸化している角閃石あり。火山ガラスは、バブルウォール型を示す。極粗粒砂サイズの花崗岩は変質を被っている																														
11	細礫																														0
	極粗粒砂										1						1										1				3
	粗粒砂	5	2	1							1	1	3				1	3									1				18
	中粒砂	3	1														2	2								1					9
	細粒砂	4		1							1																				7
	極細粒砂			1							1																				2
	粗粒シルト																														0
	中粒シルト																														0
	基質																											235			
孔隙																											6				
備考	基質は粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類、酸化鉄で埋められる。																														
12	細礫																														0
	極粗粒砂										4							1		1											6
	粗粒砂	5	3								3							5						1							17
	中粒砂	3									1						1	2													7
	細粒砂	9	1	3													3			1											17
	極細粒砂	12	1	4							1																				18
	粗粒シルト	4		1																											5
	中粒シルト	1																													1
	基質																											429			
孔隙																											6				
備考	基質は粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類、酸化鉄で埋められる。																														

第5表 薄片観察結果④

試料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計												
		鉱物片							岩石片							その他															
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英		花崗岩類	片状花崗岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体
13	細礫																														0
	極粗粒砂	2																													2
	粗粒砂	3										2			1		1														7
	中粒砂	9	3	1								1			1		1														16
	細粒砂	8	2	3								2					2	1													18
	極細粒砂	6	2	4					1								1														14
	粗粒シルト	4		1																											5
	中粒シルト																														0
	基質																											563			
孔隙																											8				
備考	基質は粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類、酸化鉄で埋められる。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。角閃石あり。																														
14	細礫																														0
	極粗粒砂	1																2													3
	粗粒砂	3		1													1	1													6
	中粒砂	3																1													4
	細粒砂	5										1																			6
	極細粒砂	3									1																				4
	粗粒シルト	1																													1
	中粒シルト																														0
	基質																											218			
孔隙																											2				
備考	基質は粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類、酸化鉄で埋められる。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。																														
15	細礫											1																			1
	極粗粒砂	2										1																			3
	粗粒砂	3	1	1								1																			6
	中粒砂	9		1													2										1				13
	細粒砂	8		4								1				1	1														15
	極細粒砂	17	3	5					1								2														28
	粗粒シルト	11		2																											13
	中粒シルト	5		1																											6
	基質																											338			
孔隙																											17				
備考	基質は粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類、酸化鉄で埋められる。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。																														
16	細礫																														0
	極粗粒砂	1																2													3
	粗粒砂	9	2									4					1	2													18
	中粒砂	6	1	2								2					1	1													13
	細粒砂	12		4								3					1	2		1											23
	極細粒砂	4		4								1																			9
	粗粒シルト	2																													2
	中粒シルト	1																													1
	基質																											339			
孔隙																											8				
備考	基質は粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類、酸化鉄で埋められる。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。																														

第5表 薄片観察結果⑤

試料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計												
		鉱物片							岩石片							その他															
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英		花崗岩類	片状花崗岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体
17	細礫																														0
	極粗粒砂																														0
	粗粒砂																														0
	中粒砂	7															1	1												9	
	細粒砂	2																												2	
	極細粒砂	3	1					1																						5	
	粗粒シルト	2	1																											3	
	中粒シルト																													0	
	基質																											235			
孔隙																											5				
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類などで埋められる。ジルコンあり。																														
18	細礫																													0	
	極粗粒砂																										1			1	
	粗粒砂	5	1									2	1			2	1										1			13	
	中粒砂	2		3								1				2														8	
	細粒砂	5	1	1				1				4				1											1			14	
	極細粒砂	3	3	4				1																						11	
	粗粒シルト	1		1																										2	
	中粒シルト																													0	
	基質																											355			
孔隙																											3				
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類などで埋められる。ジルコンあり。																														
19	細礫																													0	
	極粗粒砂																													0	
	粗粒砂	2										2					1									1				6	
	中粒砂	12	2	2								4				1										3				24	
	細粒砂	25	5	4								1				2	1									10				48	
	極細粒砂	28	6	6												2									7				49		
	粗粒シルト	13		3																									2	18	
	中粒シルト	3																												3	
	基質																											617			
孔隙																											16				
備考	基質はややシルト質で、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、長石類、火山ガラスなどで埋められる。珪藻あり。角閃石あり。																														
20	細礫																													0	
	極粗粒砂																													0	
	粗粒砂	2																												2	
	中粒砂	2	1	2													2													7	
	細粒砂	12	1	4								1		1																19	
	極細粒砂	15		3				1								1	1												21		
	粗粒シルト	2		1																									3		
	中粒シルト	1																											1		
	基質																											358			
孔隙																											8				
備考	基質は赤色粘土鉱物、雲母鉱物、石英によって埋められる。角閃石あり。																														

第5表 薄片観察結果⑥

試料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計												
		鉱物片							岩石片							その他															
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英		花崗岩類	片状花崗岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体
21	細礫																														0
	極粗粒砂																														0
	粗粒砂	6	1						1			3			1				4											16	
	中粒砂	10	1						1			1			1			2	3		2									21	
	細粒砂	4															2	1												7	
	極細粒砂	1																												1	
	粗粒シルト	1		1																										2	
	中粒シルト																														0
	基質																											213			
	孔隙																											3			
備考	基質は粘土鉱物、雲母鉱物、石英で埋められる。黒雲母は黒色化している。																														
22	細礫																													0	
	極粗粒砂											1							1											2	
	粗粒砂	8	1	3								1							3											16	
	中粒砂	2	2	4															2											10	
	細粒砂	6		3															1											10	
	極細粒砂	11		4																										15	
	粗粒シルト	5																												5	
	中粒シルト	3																													3
	基質																											357			
	孔隙																											6			
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。																														
23	細礫																		1											1	
	極粗粒砂																		3												3
	粗粒砂	4	1																5		1									11	
	中粒砂	6	1	1															2	3										13	
	細粒砂	13		2															1											16	
	極細粒砂	6		2																						1				9	
	粗粒シルト	3																												3	
	中粒シルト	1																													1
	基質																											323			
	孔隙																														
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。																														
24	細礫																													0	
	極粗粒砂		1									1							2												4
	粗粒砂	6	2	1					1			2							3												15
	中粒砂	6		4					1										4												15
	細粒砂	9	1																	1											11
	極細粒砂	8		1																							1				10
	粗粒シルト	1																													1
	中粒シルト	1																													1
	基質																											370			
	孔隙																											14			
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。黒雲母は黒色化している。																														

第5表 薄片観察結果⑦

試料No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計												
		鉱物片							岩石片							その他															
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英		花崗岩類	片状花崗岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体
25	細礫																														0
	極粗粒砂		1	2														2													5
	粗粒砂	14	4	4								5					3	10	2			1								43	
	中粒砂	12	5	3					1		4		1			1	2		2											31	
	細粒砂	4	1	3					1		1												1		1					12	
	極細粒砂	2		1																										3	
	粗粒シルト	1																												1	
	中粒シルト																													0	
	基質																												386		
	孔隙																												13		
備考	基質は、褐色粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。																														
26	細礫																													0	
	極粗粒砂	3																1		1										5	
	粗粒砂	6	2	1														1												10	
	中粒砂	9	1	1																										11	
	細粒砂	7	2	1							1						1													12	
	極細粒砂	8		4																										12	
	粗粒シルト	2																												2	
	中粒シルト																													0	
	基質																												412		
	孔隙																												8		
備考	基質は、淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。ジルコンあり。バブルウォール型を示す火山ガラスあり。																														
27	細礫																													0	
	極粗粒砂																	1													1
	粗粒砂	7		4													3	11		1										26	
	中粒砂	7		5					2							2	5										1			22	
	細粒砂	4		4					1							2									1	1				13	
	極細粒砂	5		1						1																				7	
	粗粒シルト	3																												3	
	中粒シルト	2		1																										3	
	基質																												300		
	孔隙																												2		
備考	基質は、淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。白雲母あり。角閃石あり。粗粒な黒雲母は屈曲している。火山ガラスはバブルウォール型を示す。																														
28	細礫																													0	
	極粗粒砂								1									5													6
	粗粒砂	2		7													3	8												20	
	中粒砂	2	1	3							2																			8	
	細粒砂	2		1							4						2									1				10	
	極細粒砂	6	1	1													1													10	
	粗粒シルト	2		1																										3	
	中粒シルト																													0	
	基質																												341		
	孔隙																												5		
備考	基質は、淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。ジルコンあり。火山ガラスはバブルウォール型を示す。																														

第5表 薄片観察結果⑧

試料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計												
		鉱物片							岩石片							その他															
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英		花崗岩類	片状花崗岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	粘土塊	海綿骨針	植物珪酸体
29	細礫																														0
	極粗粒砂																														0
	粗粒砂	7	1	1								4					3	6													22
	中粒砂	8		4								1	1						2											16	
	細粒砂	6																												6	
	極細粒砂	1																												1	
	粗粒シルト	1																												1	
	中粒シルト																													0	
	基質																											228			
	孔隙																											16			
備考	基質は、淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。チャートは垂角礫状。孔隙は脈状～レンズ状で定向配列を示す。																														
30	細礫																													0	
	極粗粒砂																	1												1	
	粗粒砂	18	1	2								2					1	2												26	
	中粒砂	15	1	3								1					3			1										24	
	細粒砂	10		1								3					1													17	
	極細粒砂	5																												5	
	粗粒シルト																													0	
	中粒シルト																													0	
	基質																											230			
	孔隙																											11			
備考	基質は、淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。チャートは垂角礫状。																														

トが伴われる。

②粒徑組成

最も割合の高い粒徑と次いで割合の高い粒徑とに着目し、粗粒傾向から細粒傾向に向かって以下の分類を行った。

- a 類:粗粒砂が最も多く、次いで中粒砂が多い。
- b 類:粗粒砂が最も多く、次いで細粒砂が多い。
- c 類:粗粒砂が最も多く、次いで極細粒砂が多い。
- d 類:中粒砂が最も多い。
- e 類:細粒砂が最も多い。
- f 類:極細粒砂が最も多い。

各試料の分類結果を第6表に示す。各遺跡各種類における粒徑組成の傾向は以下の通りである。

a) 居林遺跡・北山城跡

S字状口縁台付甕9点のうち、a類が4点を占め、次いでf類が2点、他にb、c、eの各類が1点ずつ

つある。く字状口縁甕はf類であり、受口状口縁甕4点は、a、b、c、eの各類が1点ずつある。瓢形壺3点はd、e、fの各類が1点ずつ、広口壺2点はb類とf類である。伊勢型二重口縁壺はf類である。

b) 小牧南遺跡

S字状口縁台付甕6点のうち、a類が2点あり、他はc、d、e、fの各類が1点ずつである。

c) 西肥留遺跡・宮ノ前遺跡

西肥留遺跡の2点のS字状口縁台付甕は、a類とb類であるが、宮ノ前遺跡の2点のS字状口縁台付甕は、2点ともにa類である。

③碎屑物の割合

碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合をみると、多くの試料は15%前後の値を示すが、10%前後の試料や20%前後の値を示す試料も少数認められる。

第6表 胎土分類結果

試料 No.	遺跡名	出土遺構	器種	調査者観察所見	胎土	
					粒径	碎屑物
1	北山城跡・居林遺跡（第2次）	SH204	S字状口縁台付甕（A類）	在地産か	f	II
2	北山城跡・居林遺跡（第2次）	SH248	S字状口縁台付甕（A類）	搬入品か	a	II
3	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH202	S字状口縁台付甕（A類）	在地産か	c	I
4	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH445	S字状口縁台付甕（A類）	0類？、在地産か	f	II
5	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH454	S字状口縁台付甕（A類）	在地産か	e	II
6	北山城跡・居林遺跡（第2次）	SK225	S字状口縁台付甕（B類）	搬入品か	a	II
7	北山城跡・居林遺跡（第4次）	G-G9Pit4	S字状口縁台付甕（B類）	搬入品か	b	III
8	北山城跡・居林遺跡（第2次）	G-P9検出中	S字状口縁台付甕	搬入品か	a	II
9	北山城跡・居林遺跡（第2次）	SH230	S字状口縁台付甕	搬入品か	a	II
10	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH443	く字状口縁甕	タタキ成形？、搬入品か	f	I
11	北山城跡・居林遺跡（第2次）	SH291	受口状口縁甕	弥生時代後期前葉、搬入品か	a	II
12	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH459	受口状口縁甕	搬入品か	c	II
13	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH431	受口状口縁甕	在地産か、比較試料	e	I
14	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH459	受口状口縁甕	在地産か、比較試料	b	I
15	北山城跡・居林遺跡（第2次）	SH228	瓢形壺	連弧文あり、在地産か	f	III
16	北山城跡・居林遺跡（第2次）	SH251	瓢形壺	連弧文あり、在地産か	e	II
17	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH464	瓢形壺	無文、在地産か	d	I
18	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH414	広口壺	結節縄文あり、赤彩あり、東海東部系、在地産か	b	II
19	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH488	広口壺	赤彩あり、パレス壺、搬入品か	f	III
20	北山城跡・居林遺跡（第4次）	SH436	伊勢型二重口縁壺	無文、搬入品か	f	II
21	小牧南遺跡（第2次）	SH221	S字状口縁台付甕（A類）	搬入品か	d	II
22	小牧南遺跡（第2次）	SH221	S字状口縁台付甕（A類）	在地産か	c	II
23	小牧南遺跡（第3次）	SH337	S字状口縁台付甕（A類）	在地産か	e	II
24	小牧南遺跡（第3次）	SH338	S字状口縁台付甕（A類）	搬入品か	a	II
25	小牧南遺跡（第3次）	SK334	S字状口縁台付甕（A類）	搬入品か	a	III
26	小牧南遺跡（第3次）	SH169/324	S字状口縁台付甕（B類）	在地産か	f	I
27	西肥留遺跡（第2次）	SH108	S字状口縁台付甕（A類）	雲出川流域、比較試料	a	III
28	西肥留遺跡（第2次）	SH108	S字状口縁台付甕（A類）	雲出川流域、比較試料	b	II
29	宮ノ前遺跡	SH12	S字状口縁台付甕（A類）	鈴鹿川流域、比較試料	a	II
30	宮ノ前遺跡	SH12	S字状口縁台付甕（A類）	鈴鹿川流域、比較試料	a	III

ここでは、10%前後の試料をI類とし、15%前後の試料をII類、20%前後の試料をIII類とする。各試料の分類結果を第6表に示す。各遺跡各種類における碎屑物の割合の分類は以下の通りである。

a) 居林遺跡・北山城跡

S字状口縁台付甕9点のうち、II類が7点を占める。他にI類は試料No.3の1点、III類は試料No.7の1点のみである。く字状口縁甕はI類であり、受口状口縁甕4点は、試料No.11と12がII類、試料No.13と14がI類である。瓢形壺3点はI、II、IIIの各類が1点ずつ、広口壺2点はII類とIII類である。伊勢型二重口縁壺はII類である。

b) 小牧南遺跡

S字状口縁台付甕6点のうち、4点までがII類であり、試料No.25はIII類、試料No.26はI類である。

c) 西肥留遺跡・宮ノ前遺跡

西肥留遺跡の2点のS字状口縁台付甕および宮ノ前遺跡の2点のS字状口縁台付甕は、ともにII類と

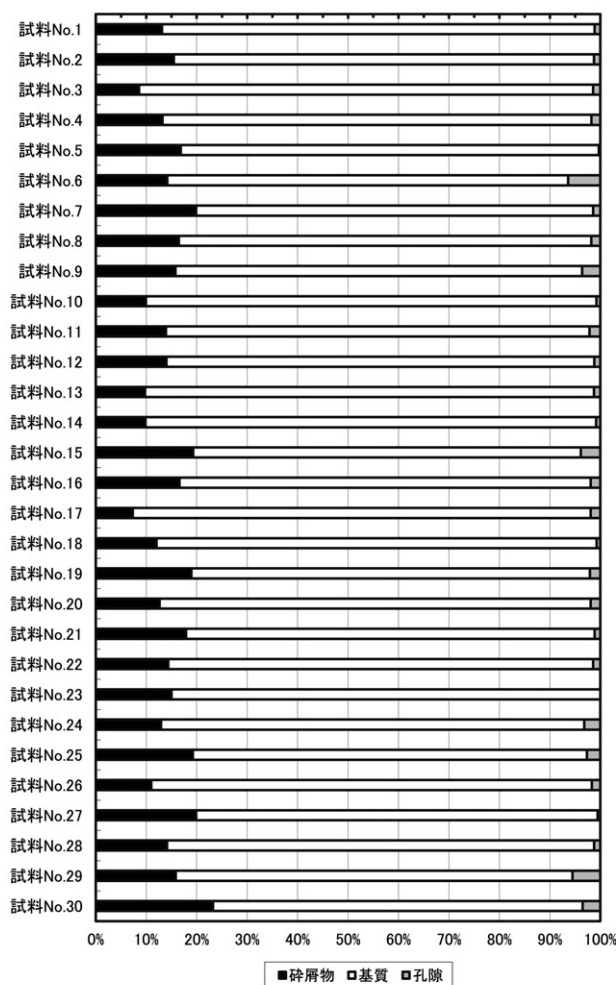
III類に分かれる。

(5) 考察

①地質学的背景との関係から

胎土中の碎屑物を構成する岩石片の種類は、土器の材料となった粘土や砂の採取地の後背に分布する地質（地質学的背景）を反映していると考えられる。今回の分析では、ほぼすべての試料に花崗岩類の岩石片が認められ、それよりも若干低い割合ではあるが同様にほぼすべての試料にチャートの岩石片も認められた。この結果を単純に捉えるならば、比較試料も含めてすべての試料が、同様の地質学的背景を有する地域内で採取された堆積物を材料としていると考えることができる。ここで、実際に土器出土地の地質学的背景を確認した上で議論を進めたい。

四日市市周辺の地質は、水野ほか（2009）や日本地質学会編（2009）などにより概観することができる。ほぼ全試料に認められた花崗岩類の由来として



第239図 碎屑物・基質・孔隙の割合

は、鈴鹿山脈に分布する中生代白亜紀に貫入した鈴鹿花崗岩をあげることができる。鈴鹿花崗岩を構成する岩石の主体は黒雲母花崗岩であるが、試料によっては微量の黒雲母が認められていることから支持される。そしてチャートの岩石片は、鈴鹿山脈において鈴鹿花崗岩に貫入を受けた中生代ジュラ紀～前期白亜紀の堆積岩類からなる美濃帯と呼ばれる地質に由来する可能性があると考えられる。おそらく実際には、これらの地質に由来する碎屑物の再堆積層から構成されている新第三紀鮮新世～第四紀前期更新世の東海層群中の砂礫層や砂泥層などに由来する砂や粘土が土器材料として採取されていると考えることができる。

比較試料のうち、試料No.29と30の出土した鈴鹿川流域は、地質分布のスケールでみれば朝明川とほぼ同様の地質学的背景を有する地域とすることができ

る。したがって、試料No.29と30の鉱物・岩石組成が他の試料とほぼ同様であることは、地質学的背景と整合する結果といえる。

一方で、試料No.27と28の出土した雲出川流域は、上述した地質記載や西岡ほか(2010)の地質記載などをみても朝明川とは異なる地質学的背景を有する地域である。流域に分布する主な地質は、中生代白亜紀の深成岩類や変成岩類からなる領家帯と呼ばれる地質であり、黒雲母角閃石花崗閃緑岩などの深成岩類や片麻岩からなる変成岩類により構成されている。したがって、試料No.27と28が他の試料とほぼ同様な鉱物・岩石組成を示したことについては、朝明川や鈴鹿川などの伊勢平野北部からの搬入の可能性を窺わせる。しかし、計数された砂粒の少ない現時点では、花崗岩類と同定した岩石片については鈴鹿花崗岩由来か領家帯の深成岩由来かを区別することは難しく、またチャートについても雲出川下流域の沖積低地の背後に広がる丘陵を構成している地質である第四紀前期更新世の東海層群中の砂礫層や砂泥層に由来する可能性があると考えられる。実際にこの地域の東海層群中の砂礫層ではチャートの礫が多く含まれているという記載がある(吉田ほか, 1995)。雲出川流域出土の土器の胎土の特性については、今後の分析事例の蓄積による検討が必要である。

②碎屑物の粒径組成と割合について

上述したように、胎土中の碎屑物の鉱物・岩石組成では、同様あるいは類似した地質学的背景を有する地域間では、その違いを見出すことは難しい。それに対して、胎土中の碎屑物の粒径組成や碎屑物の割合は、製作者(集団)の違いが反映される可能性のあることが期待される。今回の分析では、粒径組成についてはa類からf類までの6種類に、碎屑物の割合についてはI類からIII類までの3種類に分類することができた。これらの結果からは、朝明川流域だけでも多様な製作者の存在が示唆される。また、これまでの観察所見により粗い砂が含まれる傾向があると指摘されてきたS字状口縁台付甕の底部については、今回の試料の中では試料No.8と9がそれに相当するが、粒径組成では粗粒傾向の高いa類に分類された。他にもa類の試料は多数あるが、試料No.8と9は粗粒砂と中粒砂が同程度に高い割合を示し、



1. 試料No.1 北山城跡・居林遺跡(第2次) SH204 実測No.218-01 S字状口縁台付甕(A類) 在地産か



2. 試料No.2 北山城跡・居林遺跡(第2次) SH248 実測No.271-01 S字状口縁台付甕(A類) 搬入品か



3. 試料No.3 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH202 実測No.418-02 S字状口縁台付甕(A類) 在地産か



4. 試料No.4 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH445 実測No.533-04 S字状口縁台付甕(A類) 0類?、在地産か



5. 試料No.5 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH454 実測No.468-02 S字状口縁台付甕(A類) 在地産か



6. 試料No.6 北山城跡・居林遺跡(第2次) SK225 実測No.285-05 S字状口縁台付甕(B類) 搬入品か



7. 試料No.7 北山城跡・居林遺跡(第4次) G-G9Pit4 実測No.406-06 S字状口縁台付甕(B類) 搬入品か



8. 試料No.8 北山城跡・居林遺跡(第2次) G-P9検出中 S字状口縁台付甕 搬入品か

第241図 土器②



9. 試料No.9 北山城跡・居林遺跡(第2次) SH230 S字状口縁付甕 搬入品か



10. 試料No.10 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH443 実測No.457-01 <字状口縁甕 タタキ成形?、搬入品か



11. 試料No.11 北山城跡・居林遺跡(第2次) SH291 実測No.281-03 受口状口縁甕 弥生時代後期前葉、搬入品か



12. 試料No.12 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH459 実測No.476-01 受口状口縁甕 搬入品か

第242図 土器③



13. 試料No.13 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH431 実測No.452-05 受口状口縁甕 在地産か、比較試料



14. 試料No.14 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH459 実測No.483-02 受口状口縁甕 在地産か、比較試料

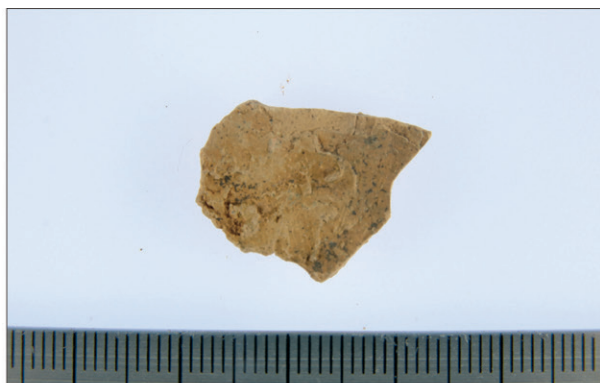


15. 試料No.15 北山城跡・居林遺跡(第2次) SH228 実測No.243-04 瓢形壺 連弧文あり、在地産か



16. 試料No.16 北山城跡・居林遺跡(第2次) SH251 実測No.271-06 瓢形壺 連弧文あり、在地産か

第243図 土器④



17. 試料No.17 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH464 実測No.401-01 瓢形壺 無文、在地産か



18. 試料No.18 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH414 実測No.442-01・442-02 広口壺 結節縄文あり、赤彩あり、東海東部系、在地産か



19. 試料No.19 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH488 実測No.554-01 広口壺 赤彩あり、パレス壺、搬入品か



20. 試料No.20 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH436 実測No.401-03 伊勢型二重口縁壺 無文、搬入品か

第244図 土器⑤



21. 試料No.21 小牧南遺跡(第2次) SH221 報告No.1341



実測No.036-01 S字状口縁台付甕(A類) 搬入品か



22. 試料No.22 小牧南遺跡(第2次) SH221 報告No.1343



実測No.036-03 S字状口縁台付甕(A類) 在地産か



23. 試料No.23 小牧南遺跡(第3次) SH337 報告No.1879



実測No.333-01 S字状口縁台付甕(A類) 在地産か



24. 試料No.24 小牧南遺跡(第3次) SH338 報告No.1908



実測No.328-01 S字状口縁台付甕(A類) 搬入品か

第245図 土器⑥



25. 試料No.25 小牧南遺跡(第3次) SK334 報告No.2247



実測No.316-01 S字状口縁台付甕(A類) 搬入品か



26. 試料No.26 小牧南遺跡(第3次) SH169/324 報告No.769



実測No.304-01 S字状口縁台付甕(B類) 在地産か



27. 試料No.27 西肥留遺跡(第2次) SH108



S字状口縁台付甕(A類) 雲出川流域、比較試料



28. 試料No.28 西肥留遺跡(第2次) SH108



S字状口縁台付甕(A類) 雲出川流域、比較試料

第246図 土器⑦



29. 試料No.29 宮ノ前遺跡 SH12 S字状口縁台付甕(A類) 鈴鹿川流域、比較試料



30. 試料No.30 宮ノ前遺跡 SH12 S字状口縁台付甕(A類) 鈴鹿川流域、比較試料

第247図 土器⑧

a類のなかでも、比較的粗粒傾向が強いことが窺える。

今回の分析では、各試料における砂粒の合計数自体が100を超えるものがないために、組成としての評価をすることは慎重にならざるを得ない。今回の結果を見る限りにおいては、粒径組成および砕屑物の割合の各分類と試料表の調査者観察所見に示された在地か搬入かという観察所見との間にほとんど相関関係は認められないが、現時点ではその所見を否定するには至らない。その関係についても、今後の分析事例による検討課題としたい。

(管理者：松元美由紀、担当者：矢作健二、分析者：坂元秀平)

引用文献

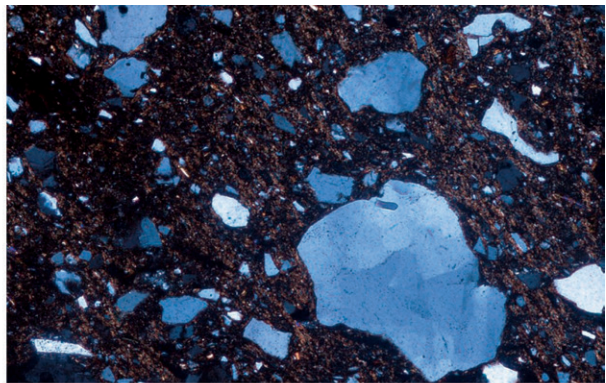
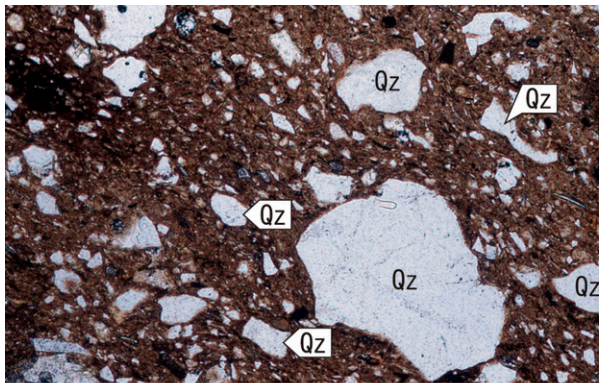
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
水野清秀・小松原琢・脇田浩二・竹内圭史・西岡芳晴・渡辺寧・

駒澤正夫, 2009, 20万分の1地質図幅「名古屋」(第3版). 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

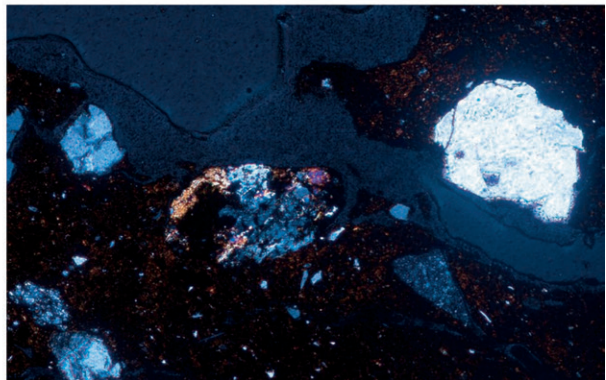
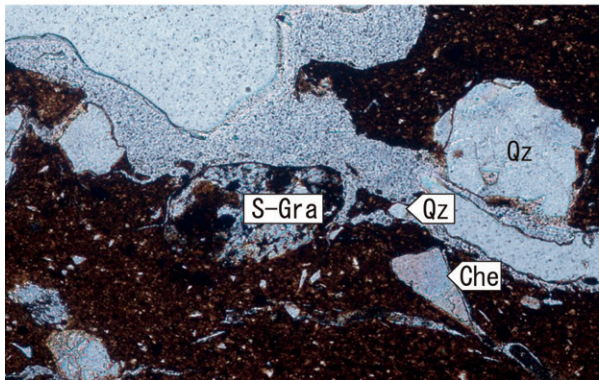
日本地質学会編, 2009, 日本地方地質誌5 近畿地方. 朝倉書店, 453p.

西岡芳晴・中江訓・竹内圭史・坂野靖行・水野清秀・尾崎正紀・中島礼・実松健造・名和一成・駒澤正夫, 2010, 20万分の1地質図幅「伊勢」. 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

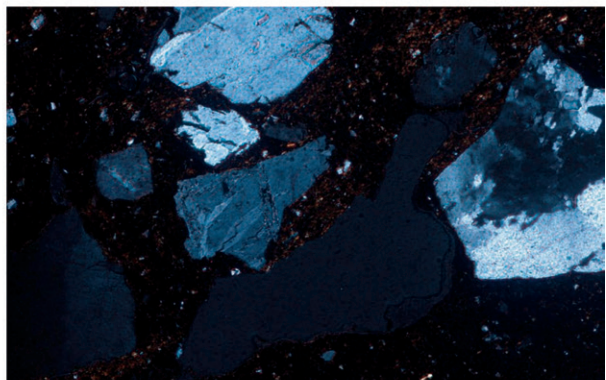
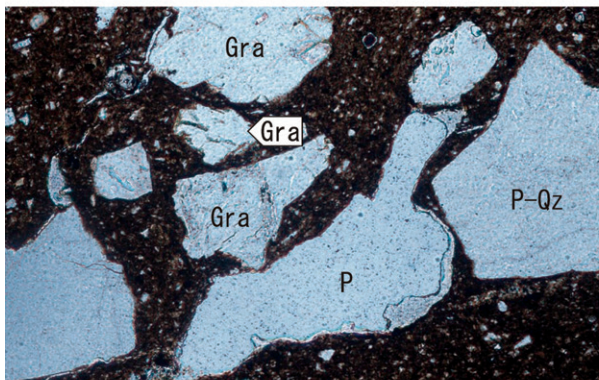
吉田史郎・高橋裕平・西岡芳晴, 1995, 津西部地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 136p.



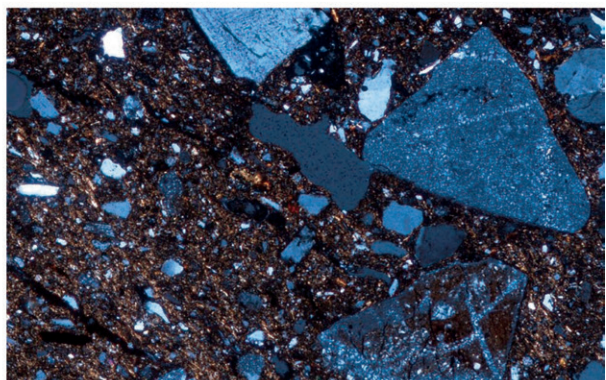
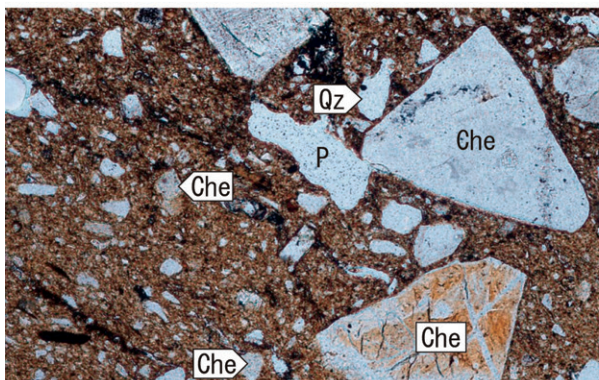
1. 試料No.4 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH445 実測No.533-04 S字状口縁台付甕(A類) 0類?、在地産か



2. 試料No.6 北山城跡・居林遺跡(第2次) SK225 実測No.285-05 S字状口縁台付甕(B類) 搬入品か



3. 試料No.9 北山城跡・居林遺跡(第2次) SH230 S字状口縁台付甕 搬入品か

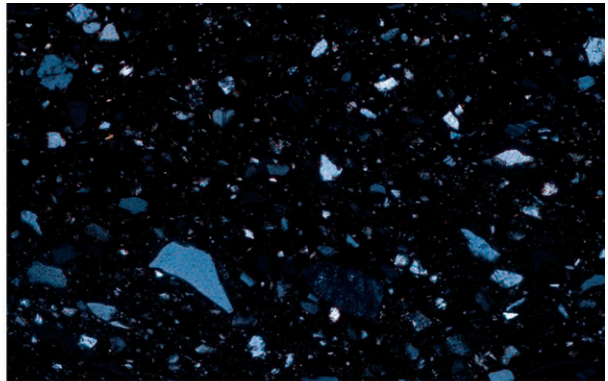
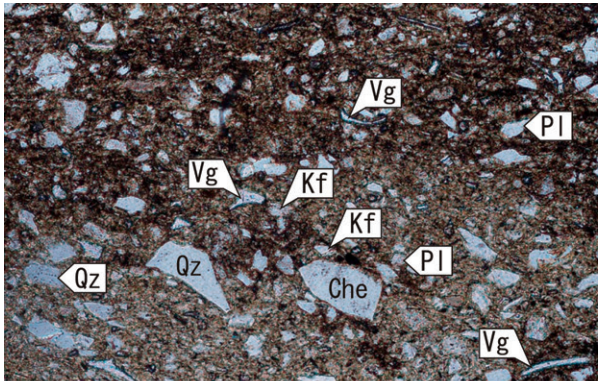


4. 試料No.16 北山城跡・居林遺跡(第2次) SH251 実測No.271-06 瓢形壺 連弧文あり、在地産か

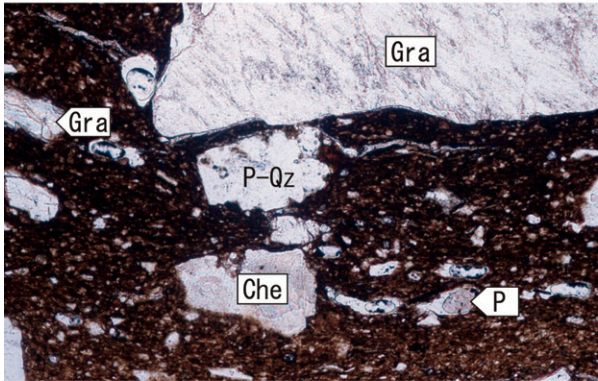
Qz:石英, Che:チャート, P-Qz:多結晶石英, Gra:花崗岩, S-Gra:片状花崗岩, P:孔隙。写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

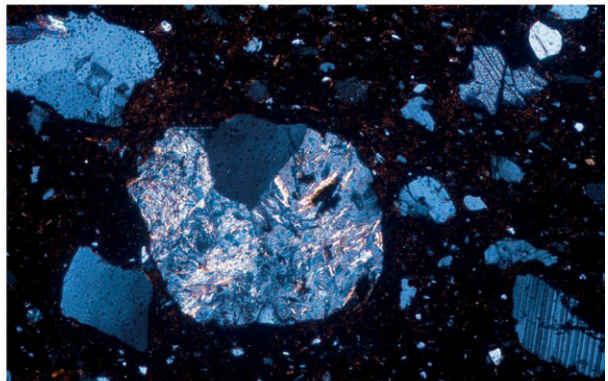
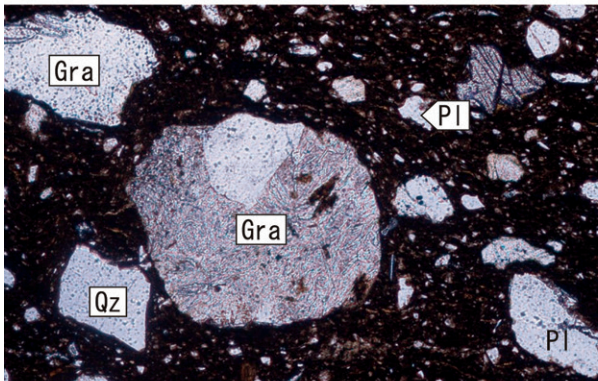
第248図 胎土薄片①



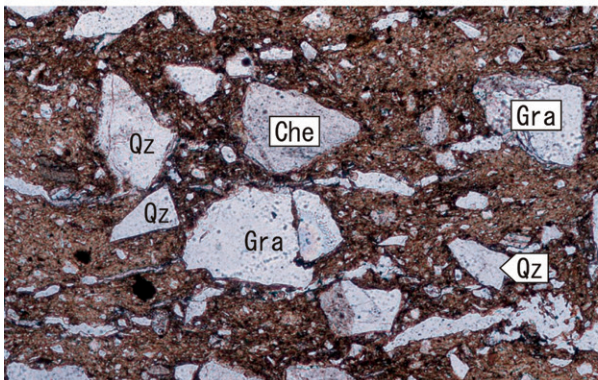
5. 試料No.19 北山城跡・居林遺跡(第4次) SH488 実測No.554-01 広口壺 赤彩あり、パレス壺、搬入品か



6. 試料No.25 小牧南遺跡(第3次) SK334 報告No.2247 実測No.316-01 S字状口縁台付甕(A類) 搬入品か



7. 試料No.27 西肥留遺跡(第2次) SH108 S字状口縁台付甕(A類) 雲出川流域、比較試料



8. 試料No.29 宮ノ前遺跡 SH12 S字状口縁台付甕(A類) 鈴鹿川流域、比較試料
 Qz:石英, Kf:カリ長石, PI:斜長石, Che:チャート, P-Qz:多結晶石英, Gra:花崗岩.
 Vg:火山ガラス, P:孔隙. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第4節 赤色顔料の蛍光X線分析

(1) 分析試料

居林遺跡から出土した弥生土器・土師器の中には、内面に赤色顔料が付着したり、器面を赤色顔料で赤く塗彩したものが複数みられた。これらの赤色顔料の種類を正確に同定するため、蛍光X線分析を行った。

分析対象としたのは、第7表に示した14点の土器である。554・735・1099には、内面の微細な窪みや亀裂等に水銀朱と推測される微量の赤色顔料が遺存している。このうち、554・735の外面にはススが付着しており、いわゆる内面朱付着土器と思われる¹⁾。また、1843には坏部内面に水銀朱と推測される赤色顔料が薄く帯状に付着した箇所がみられ、水銀朱を入れていたものと考えられる。

793は、外面に赤色顔料が塗布されており、内面にもわずかに赤色顔料の付着が認められるものである。外面の赤色顔料はベンガラと考えられるが、内面の赤色顔料もベンガラであるか不明であったため、内面に付着した赤色顔料を分析対象とした。

その他のものは、赤色顔料が器面に塗布されているものである。こうした赤彩の土器は他にも多数出土しているが、遺構内から出土したもので器種が判別でき、なおかつ赤色顔料が明瞭に遺存しているものを分析対象として選定した。

これらの土器について、赤色顔料が付着・塗布されている箇所（赤色部）を対象として分析を行ったが、比較試料として、同じ遺物の赤色顔料が付着していないと思われる部分（非赤色部）についても同時に分析を行った。

(2) 分析方法

分析は三重県総合博物館に依頼して行った。1027・1349以外の試料は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型の卓上型蛍光X線分析装置SEA1200VXを用いて分析を行った。

装置の仕様は、X線管が最大電圧50kV、電流1mAのロジウム（Rh）ターゲット、分析領域が径1.0mmまたは8.0mm、検出器がSi半導体検出器で、検出可能元素はナトリウム（Na：元素番号11）～ウラン（U：元素番号92）である。

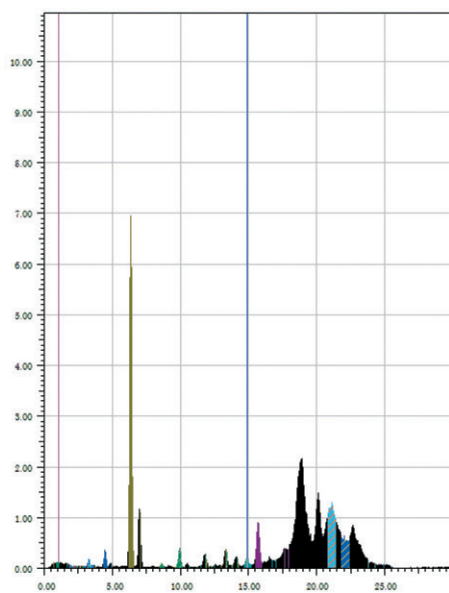
対象とした遺物は、試料室内に設置して直接遺物の赤色部及び非赤色部の分析を行った。1843のみは遺物の形状から赤色部の分析を直接行うことが困難であったが、比較的赤色顔料の付着量が多かったため、遺物の損傷に注意しながらカッターの先端を用いて赤色顔料を試料ケースに微量掻き落とし、それを分析に供した。

測定は、赤色部をピンポイントで測定するためコーリメータ径を1.0mmとし、Pb用フィルター使用、測

第7表 赤色顔料蛍光X線分析結果

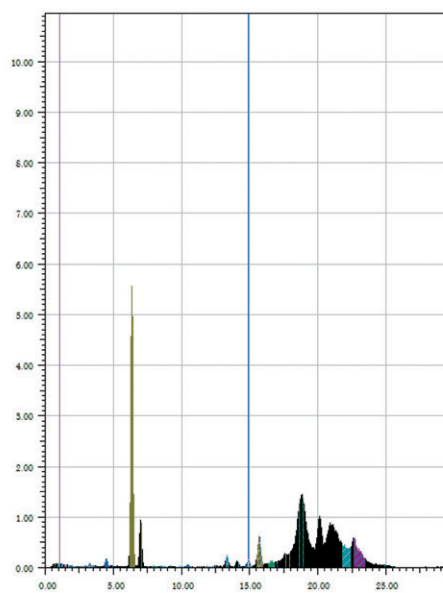
報告No.	実測No.	種別	器種	出土遺構	測定箇所（赤色部）	測定箇所（非赤色部）	結果
554	269-02	弥生土器／土師器	鉢	SH234（SD246）	体部下半内面（赤色顔料微量に遺存する凹み）	体部下半外面	水銀朱
735	376-03	弥生土器／土師器	鉢	SH244下層	体部下半内面（赤色顔料微量に遺存するヒビ）	体部下半外面	水銀朱
793	277-02	弥生土器／土師器	椀形高坏？	SH272	坏部上半内面（赤色顔料微量に遺存する箇所）	坏部上半外面	ベンガラ
1027	432-01	弥生土器／土師器	壺	SH403	頸部付近内面	頸部付近外面	ベンガラ
1099	442-05	弥生土器／土師器	有稜高坏	SH414貯蔵穴	坏部下半内面（赤色顔料微量に遺存する凹み）	坏部上半外面	水銀朱
1228	527-01	弥生土器／土師器	高坏	SH422	脚部下半外面（赤彩箇所）	脚部下半外面	ベンガラ
1349	459-01	弥生土器／土師器	広口壺	SH442	頸部付近内面	口縁部外面	ベンガラ
1843	502-02	弥生土器／土師器	椀形高坏	SH469貯蔵穴	坏部中位内面（赤色顔料微量採取）	坏部下半外面	水銀朱
1984	545-01	弥生土器／土師器	壺	SH482	体部中位外面	体部中位内面	ベンガラ
2058	554-01	弥生土器／土師器	壺	SH488	体部中位外面	体部中位破断面	ベンガラ
2210	284-05	弥生土器／土師器	広口壺	SK225	口縁端部外面	口縁部外面	ベンガラ
2233	331-01	弥生土器／土師器	壺	SK341	体部中位外面	体部中位内面	ベンガラ
2558	575-01	土師器	高坏	SK321	坏部下半内面	頸部破断面	ベンガラ
2594	326-04	土師器	皿	SK322	内面	外面	ベンガラ

※網掛けは可搬型蛍光X線分析装置によって分析を行ったもの



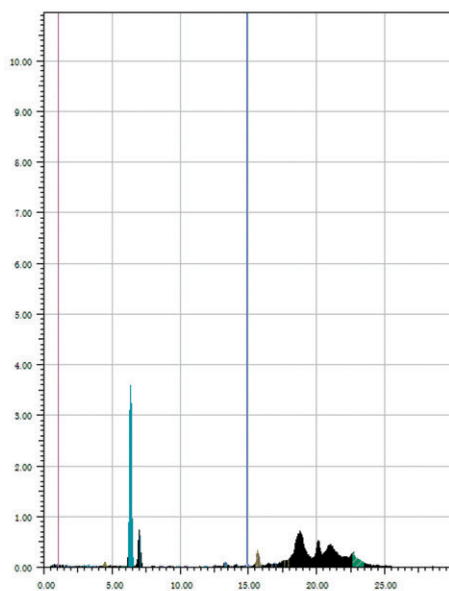
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	1.544	3.16- 3.46
22	Ti	チタン	K α	3.119	4.35- 4.67
26	Fe	鉄	K α	61.293	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.862	8.44- 8.82
39	Y	イットリウム	K α	2.729	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	12.256	15.51-15.98
46	Pd	パラジウム	K α	29.713	20.86-21.38
47	Ag	銀	K α	14.566	21.84-22.37
79	Au	金	L α	0.966	9.51- 9.90
80	Hg	水銀	L α	4.203	9.78-10.18

554 (赤色部)



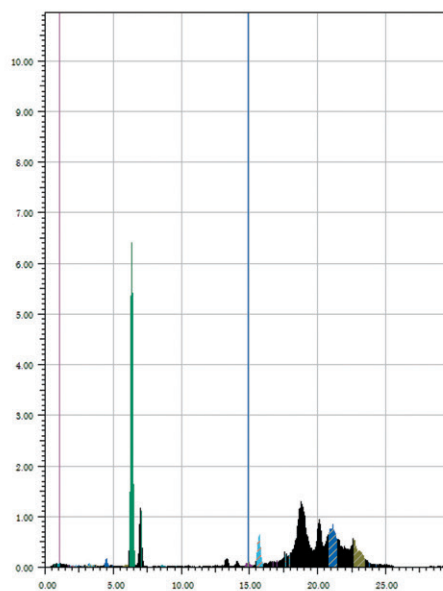
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.762	3.16- 3.46
22	Ti	チタン	K α	1.561	4.35- 4.67
26	Fe	鉄	K α	49.283	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	0.224	7.86- 8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.292	8.44- 8.82
32	Ge	ゲルマニウム	K α	0.246	9.68-10.07
35	Br	臭素	K α	0.301	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	1.662	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	8.018	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.322	16.35-16.82
47	Ag	銀	K α	10.095	21.84-22.37
48	Cd	カドミウム	K α	12.49	22.70-23.42
80	Hg	水銀	L α	0.267	9.78-10.18
82	Pb	鉛	L α	0.464	10.34-10.74

554 (非赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.388	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.201	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	0.848	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.24	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	32.586	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.222	8.44- 8.82
35	Br	臭素	K α	0.232	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	0.761	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	4.015	15.51-15.98
48	Cd	カドミウム	K α	5.997	22.70-23.42
80	Hg	水銀	L α	0.149	9.78-10.18
82	Pb	鉛	L α	0.233	10.34-10.74

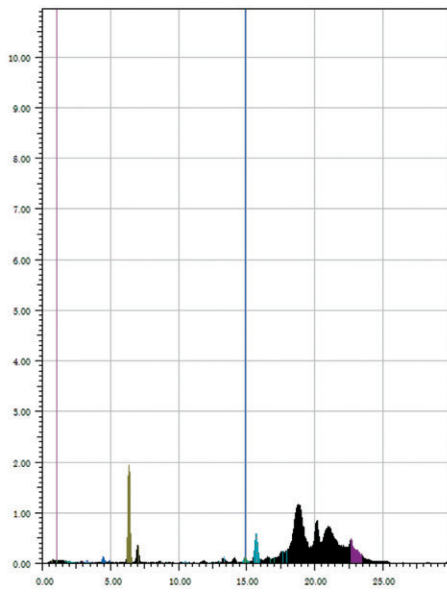
735 (赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.606	3.16- 3.46
22	Ti	チタン	K α	1.388	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.398	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	56.274	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.367	8.44- 8.82
39	Y	イットリウム	K α	1.27	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	8.102	15.51-15.98
46	Pd	パラジウム	K α	18.389	20.86-21.38
48	Cd	カドミウム	K α	11.675	22.70-23.42

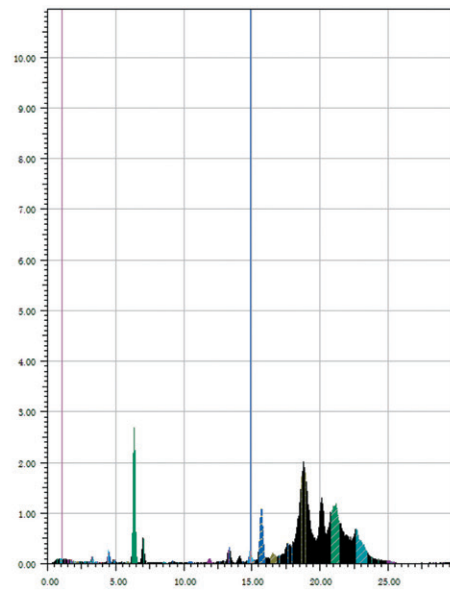
735 (非赤色部)

第250図 蛍光X線分析結果①



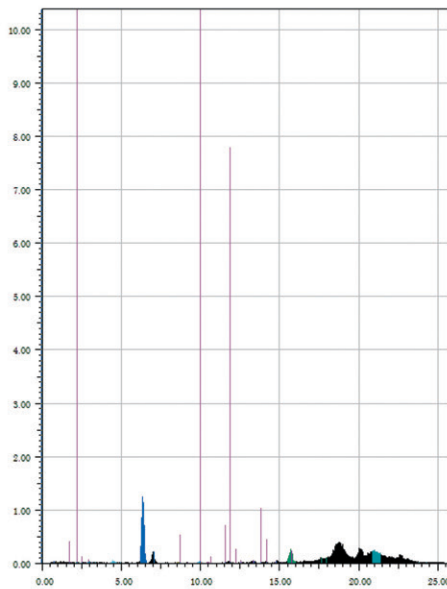
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.461	3.16-3.46
22	Ti	チタン	K α	1.136	4.35-4.67
26	Fe	鉄	K α	17.684	6.23-6.57
39	Y	イットリウム	K α	1.477	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	7.904	15.51-15.98
48	Cd	カドミウム	K α	9.959	22.70-23.42
82	Pb	鉛	L α	0.269	10.34-10.74

793 (赤色部)



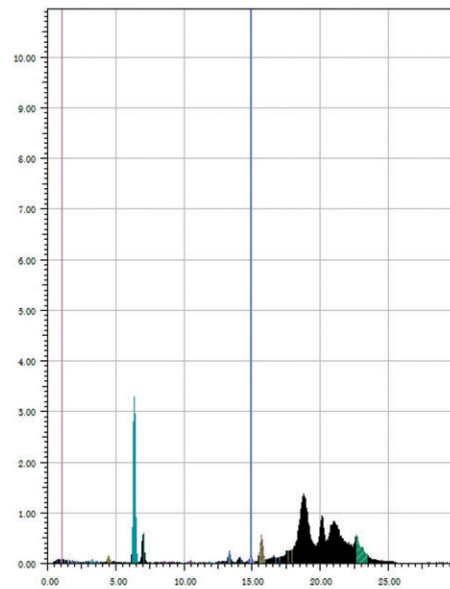
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	1.062	3.16-3.46
22	Ti	チタン	K α	2.247	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.367	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	23.037	6.23-6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.287	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.979	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	2.858	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	14.448	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	3.644	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	27.495	20.86-21.38
48	Cd	カドミウム	K α	15.849	22.70-23.42
50	Sn	スズ	K α	1.119	24.91-25.47
56	Ba	バリウム	K α	0.635	31.75-32.37
82	Pb	鉛	L α	0.476	10.34-10.74

793 (非赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
22	Ti	チタン	K α	0.416	4.35-4.67
26	Fe	鉄	K α	10.885	6.23-6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.162	8.44-8.82
40	Zr	ジルコニウム	K α	3.092	15.51-15.98
46	Pd	パラジウム	K α	5.132	20.86-21.38
82	Pb	鉛	L α	0.134	10.34-10.74
80	Hg	水銀	L α	0.343	9.78-10.18

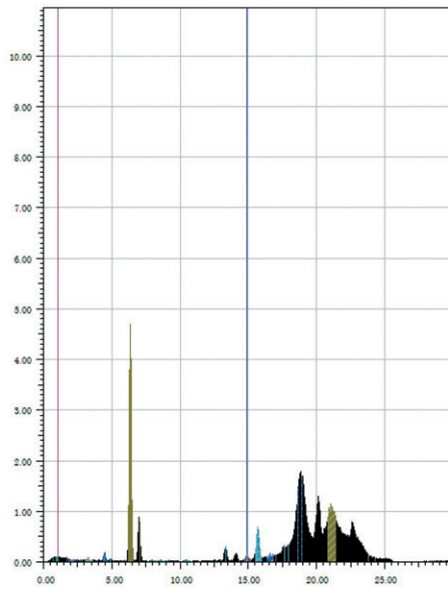
1099 (赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.719	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.37	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	1.371	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.255	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	28.903	6.23-6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.354	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.334	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	1.701	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	7.262	15.51-15.98
48	Cd	カドミウム	K α	11.637	22.70-23.42
80	Hg	水銀	L α	0.127	9.78-10.18
82	Pb	鉛	L α	0.407	10.34-10.74

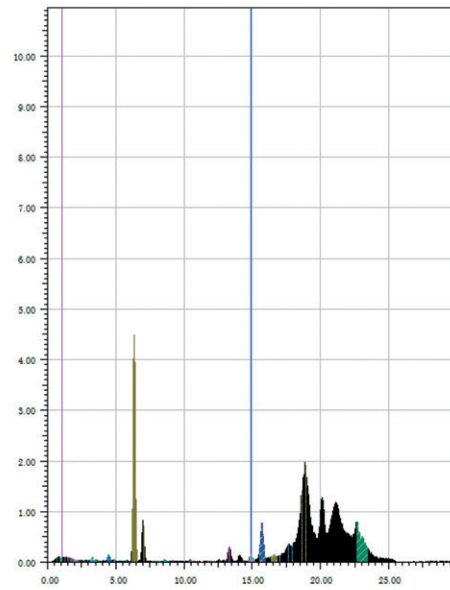
1099 (非赤色部)

第251図 蛍光X線分析結果②



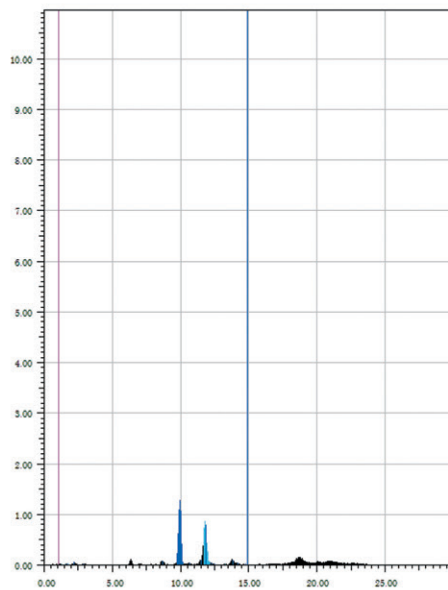
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.788	3.16-3.46
22	Ti	チタン	K α	1.645	4.35-4.67
26	Fe	鉄	K α	41.128	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	0.333	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.349	8.44-8.82
39	Y	イットリウム	K α	1.745	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	9.106	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.564	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	26.054	20.86-21.38
56	Ba	バリウム	K α	0.9	31.75-32.37
82	Pb	鉛	L α	0.498	10.34-10.74

1228 (赤色部)



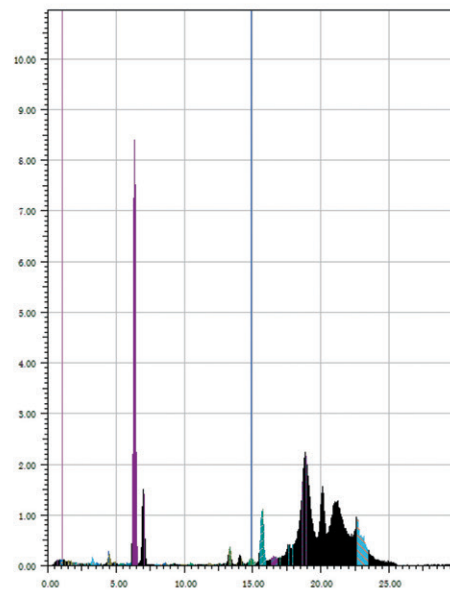
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.804	3.16-3.46
22	Ti	チタン	K α	1.344	4.35-4.67
26	Fe	鉄	K α	40.303	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	0.274	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.474	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.259	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	1.886	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	10.472	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.693	16.35-16.82
48	Cd	カドミウム	K α	17.719	22.70-23.42
56	Ba	バリウム	K α	0.847	31.75-32.37
82	Pb	鉛	L α	0.43	10.34-10.74

1228 (非赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
35	Br	臭素	K α	10.299	11.70-12.12
80	Hg	水銀	L α	13.429	9.78-10.18

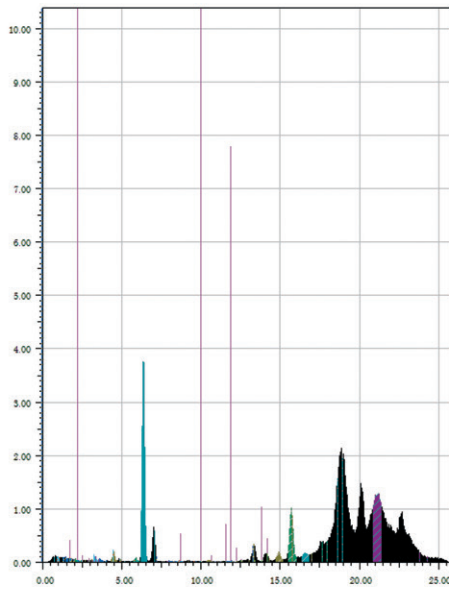
1843 (赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	1.373	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.553	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	2.29	4.35-4.67
24	Cr	クロム	K α	0.429	5.25-5.58
25	Mn	マンガン	K α	0.46	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	76.428	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	0.302	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.493	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.569	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	2.252	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	15.006	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	3.333	16.35-16.82
48	Cd	カドミウム	K α	20.341	22.70-23.42
56	Ba	バリウム	K α	1.044	31.75-32.37
80	Hg	水銀	L α	0.302	9.78-10.18
82	Pb	鉛	L α	0.467	10.34-10.74

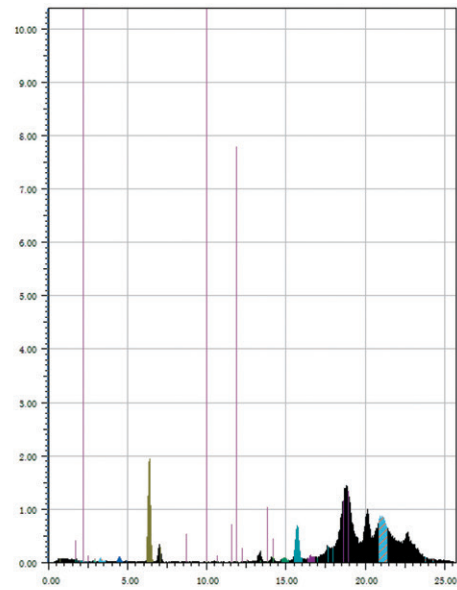
1843 (非赤色部)

第252図 蛍光X線分析結果③



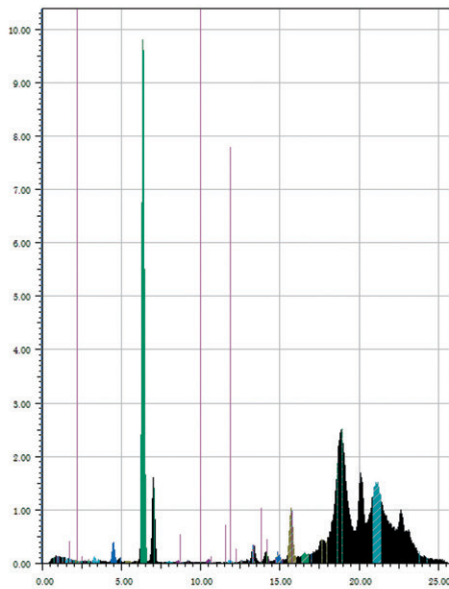
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	1.072	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.645	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	1.8	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.726	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	33.562	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	0.253	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.349	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.314	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	2.432	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	13.486	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	3.244	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	30.659	20.86-21.38
56	Ba	バリウム	K α	0.922	31.75-32.37
73	Ta	タンタル	L α	0.252	7.95-8.33
82	Pb	鉛	L α	0.462	10.34-10.74

1984 (赤色部)



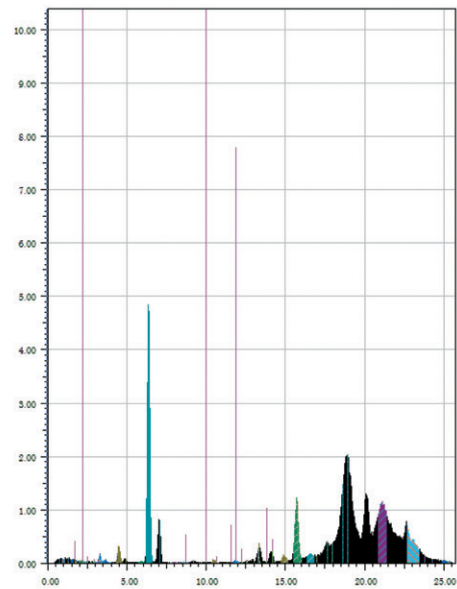
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.704	3.16-3.46
22	Ti	チタン	K α	0.986	4.35-4.67
26	Fe	鉄	K α	16.832	6.23-6.57
39	Y	イットリウム	K α	1.402	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	9.18	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.173	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	20.486	20.86-21.38

1984 (非赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	1.061	3.16-3.46
22	Ti	チタン	K α	3.385	4.35-4.67
24	Cr	クロム	K α	0.485	5.25-5.58
26	Fe	鉄	K α	87.409	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	0.382	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.461	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.639	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	2.63	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	13.845	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	3.619	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	35.469	20.86-21.38
82	Pb	鉛	L α	0.747	10.34-10.74

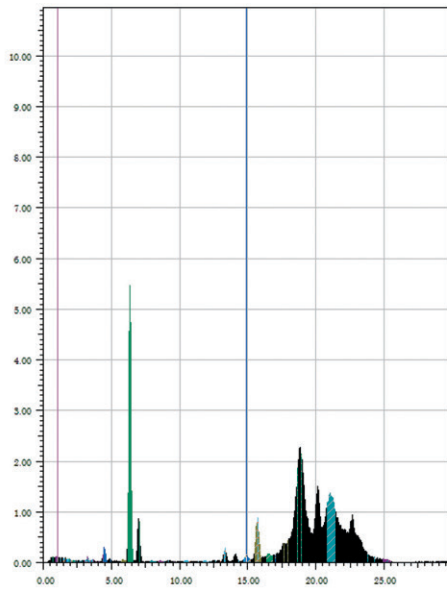
2058 (赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	1.345	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.636	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	2.825	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.4	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	44.055	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	0.256	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.324	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.619	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	2.135	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	16.048	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	3.197	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	26.617	20.86-21.38
48	Cd	カドミウム	K α	16.198	22.70-23.42
50	Sn	スズ	K α	1.049	24.91-25.47
82	Pb	鉛	L α	0.725	10.34-10.74

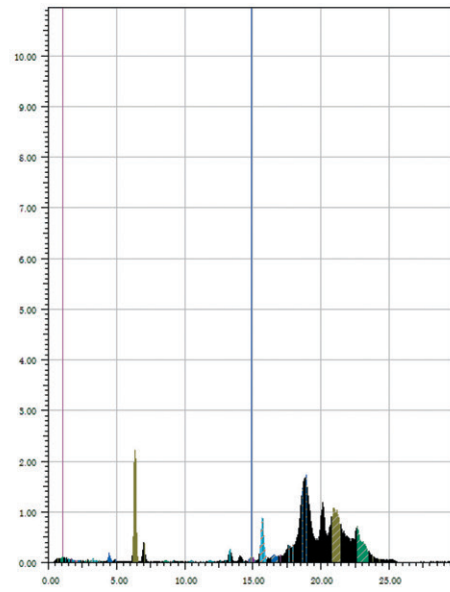
2058 (非赤色部)

第253図 蛍光X線分析結果④



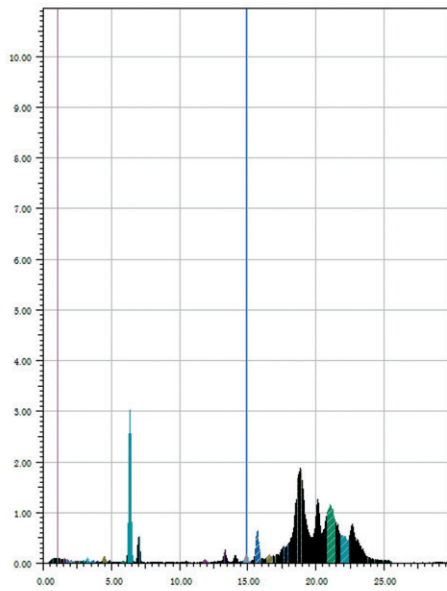
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.863	3.16- 3.46
22	Ti	チタン	K α	2.652	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.651	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	48.537	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	0.311	7.86- 8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.374	8.44- 8.82
35	Br	臭素	K α	0.401	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	1.952	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	11.708	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	3.21	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	32.062	20.86-21.38
50	Sn	スズ	K α	1.405	24.91-25.47
82	Pb		L α	0.492	10.34-10.74

2210 (赤色部)



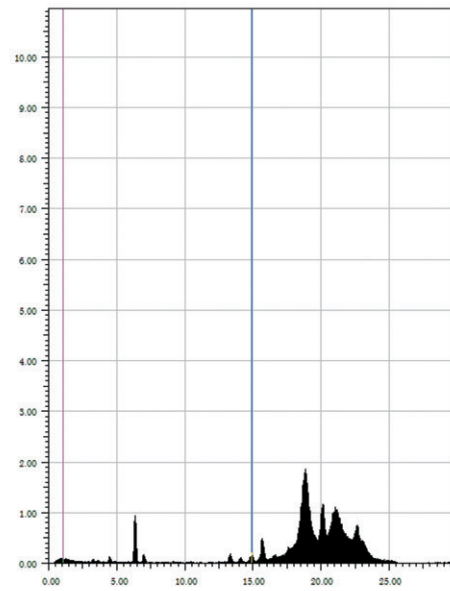
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.75	3.16- 3.46
22	Ti	チタン	K α	1.528	4.35- 4.67
26	Fe	鉄	K α	19.894	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.373	8.44- 8.82
35	Br	臭素	K α	0.461	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	1.573	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	11.195	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.604	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	24.536	20.86-21.38
48	Cd	カドミウム	K α	15.014	22.70-23.42
82	Pb		L α	0.387	10.34-10.74

2210 (非赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.845	3.16- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.496	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	1.383	4.35- 4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.451	5.73- 6.07
26	Fe	鉄	K α	26.556	6.23- 6.57
35	Br	臭素	K α	0.805	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	2.17	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	8.504	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.985	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	27.091	20.86-21.38
47	Ag	銀	K α	12.98	21.84-22.37

2233 (赤色部)

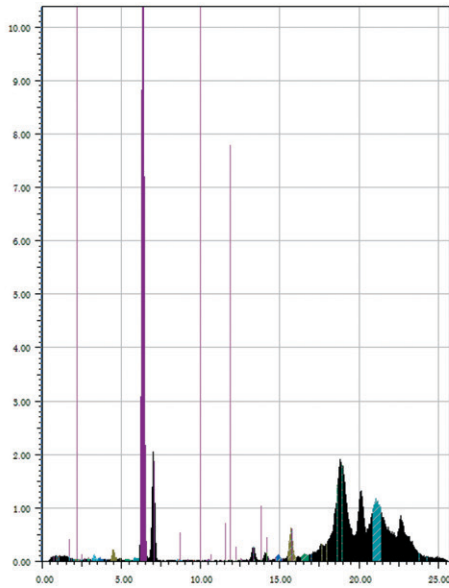


Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.75	3.16- 3.46
22	Ti	チタン	K α	1.528	4.35- 4.67
26	Fe	鉄	K α	19.894	6.23- 6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.373	8.44- 8.82
35	Br	臭素	K α	0.461	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	1.573	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	11.195	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.604	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	24.536	20.86-21.38
48	Cd	カドミウム	K α	15.014	22.70-23.42
82	Pb		L α	0.387	10.34-10.74

※測定結果出力せず

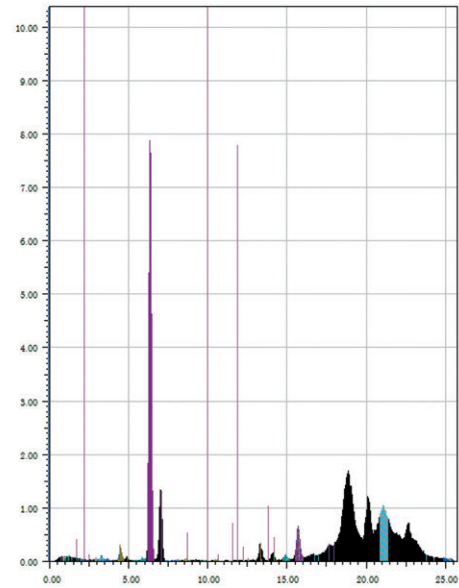
2233 (非赤色部)

第254図 蛍光X線分析結果⑤



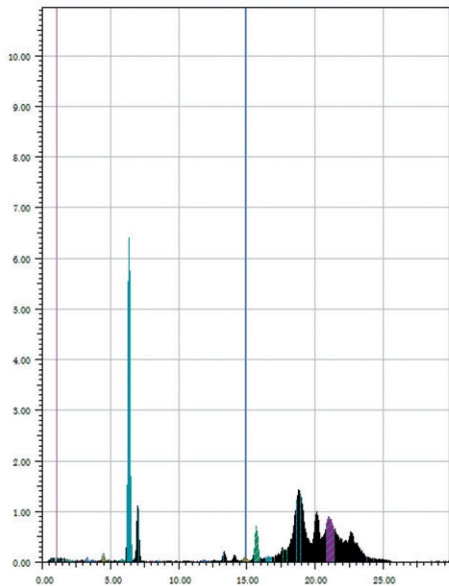
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	1.048	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.618	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	2.017	4.35-4.67
24	Cr	クロム	K α	0.438	5.25-5.58
25	Mn	マンガン	K α	0.75	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	114.339	6.23-6.57
30	Zn	亜鉛	K α	0.361	8.44-8.82
39	Y	イットリウム	K α	1.608	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	8.334	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.499	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	27.213	20.86-21.38
82	Pb	鉛	L α	0.404	10.34-10.74

2558 (赤色部)



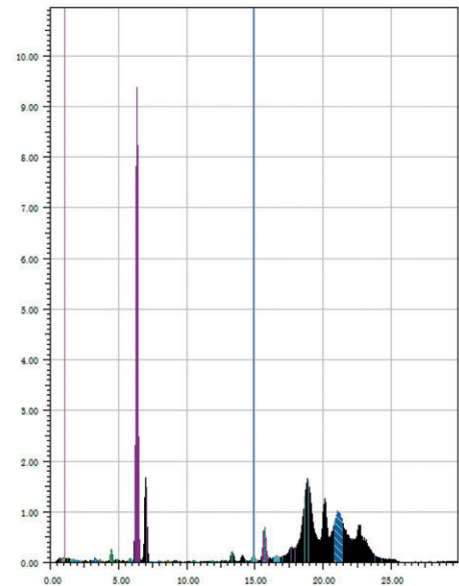
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	1.005	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.444	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	2.259	4.35-4.67
24	Cr	クロム	K α	0.344	5.25-5.58
25	Mn	マンガン	K α	0.628	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	70.742	6.23-6.57
28	Ni	ニッケル	K α	0.23	7.29-7.65
29	Cu	銅	K α	0.333	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.45	8.44-8.82
32	Ge	ゲルマニウム	K α	0.164	9.68-10.07
39	Y	イットリウム	K α	1.713	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	8.908	15.51-15.98
46	Pd	パラジウム	K α	23.833	20.86-21.38
50	Sn	スズ	K α	1.191	24.91-25.47
82	Pb	鉛	L α	0.346	10.34-10.74

2558 (非赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	0.725	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.366	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	1.528	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.568	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	57.486	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	0.234	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.343	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.418	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	1.245	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	8.853	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.088	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	20.774	20.86-21.38
56	Ba	バリウム	K α	0.57	31.75-32.37

2594 (赤色部)



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
14	Si	ケイ素	K α	0.764	1.60-1.88
19	K	カリウム	K α	0.831	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	0.475	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	2.304	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	K α	0.866	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	83.076	6.23-6.57
28	Ni	ニッケル	K α	0.25	7.29-7.65
29	Cu	銅	K α	0.283	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	0.463	8.44-8.82
35	Br	臭素	K α	0.369	11.70-12.12
39	Y	イットリウム	K α	1.684	14.71-15.16
40	Zr	ジルコニウム	K α	9.147	15.51-15.98
41	Nb	ニオブ	K α	2.48	16.35-16.82
46	Pd	パラジウム	K α	23.622	20.86-21.38
56	Ba	バリウム	K α	0.784	31.75-32.37
82	Pb	鉛	L α	0.378	10.34-10.74

2594 (非赤色部)

第255図 蛍光X線分析結果⑥



	%	±	Error
Sb	< LOD	:	0.004
Sn	< LOD	:	0.005
Cd	< LOD	:	0.003
Pd	< LOD	:	0.002
Ag	< LOD	:	0.003
BaI	95.823	±	1.285
Mo	< LOD	:	0.002
Nb	0.002	±	0.001
Zr	0.024	±	0.001
Sr	0.003	±	0.001
Rb	0.003	±	0.001
Bi	< LOD	:	0.002
As	< LOD	:	0.003
Se	< LOD	:	0.002
Au	< LOD	:	0.006
Pb	0.004	±	0.001
W	< LOD	:	0.013
Zn	< LOD	:	0.003
Cu	< LOD	:	0.004
Ni	< LOD	:	0.009
Co	< LOD	:	0.024
Fe	2.473	±	0.047
Mn	0.033	±	0.014
Cr	< LOD	:	0.113
V	< LOD	:	0.061
Ti	< LOD	:	0.423
Ca	< LOD	:	0.215
K	< LOD	:	2.539

1027 (赤色部)

	%	±	Error
Sb	< LOD	:	0.032
Sn	< LOD	:	0.045
Cd	< LOD	:	0.027
Pd	< LOD	:	0.016
Ag	< LOD	:	0.034
BaI	98.057	±	0.338
Mo	< LOD	:	0.006
Nb	< LOD	:	0.006
Zr	< LOD	:	0.008
Sr	< LOD	:	0.005
Rb	< LOD	:	0.002
Bi	< LOD	:	0.009
As	< LOD	:	0.032
Se	< LOD	:	0.011
Au	< LOD	:	0.079
Pb	< LOD	:	0.018
W	< LOD	:	0.270
Zn	< LOD	:	0.055
Cu	< LOD	:	0.090
Ni	0.426	±	0.107
Co	< LOD	:	0.148
Fe	1.130	±	0.235
Mn	< LOD	:	0.228
Cr	< LOD	:	0.078
V	< LOD	:	0.017
Ti	< LOD	:	0.004
Ca	< LOD	:	0.003
K	< LOD	:	0.056

1027 (非赤色部)

	%	±	Error
Sb	< LOD	:	0.005
Sn	< LOD	:	0.006
Cd	< LOD	:	0.004
Pd	< LOD	:	0.002
Ag	< LOD	:	0.004
BaI	93.747	±	2.660
Mo	< LOD	:	0.002
Nb	< LOD	:	0.002
Zr	0.029	±	0.001
Sr	0.003	±	0.001
Rb	0.003	±	0.001
Bi	0.003	±	0.001
As	< LOD	:	0.004
Se	< LOD	:	0.002
Au	< LOD	:	0.008
Pb	0.004	±	0.001
W	< LOD	:	0.017
Zn	< LOD	:	0.004
Cu	< LOD	:	0.005
Ni	< LOD	:	0.011
Co	< LOD	:	0.029
Fe	2.049	±	0.055
Mn	< LOD	:	0.030
Cr	< LOD	:	0.829
V	< LOD	:	0.312
Ti	< LOD	:	0.457
Ca	< LOD	:	1.828
K	< LOD	:	5.034

1349 (赤色部)

	%	±	Error
Sb	< LOD	:	0.021
Sn	< LOD	:	0.028
Cd	< LOD	:	0.017
Pd	< LOD	:	0.010
Ag	< LOD	:	0.068
BaI	99.195	±	0.158
Mo	< LOD	:	0.004
Nb	< LOD	:	0.003
Zr	0.023	±	0.005
Sr	0.003	±	0.002
Rb	0.002	±	0.001
Bi	< LOD	:	0.007
As	< LOD	:	0.019
Se	< LOD	:	0.005
Au	< LOD	:	0.043
Pb	< LOD	:	0.011
W	< LOD	:	0.125
Zn	< LOD	:	0.027
Cu	< LOD	:	0.039
Ni	0.171	±	0.049
Co	< LOD	:	0.079
Fe	0.386	±	0.098
Mn	< LOD	:	0.156
Cr	< LOD	:	0.002
V	< LOD	:	0.002
Ti	< LOD	:	0.002
Ca	< LOD	:	0.002
K	< LOD	:	0.002

1349 (非赤色部)

第256図 蛍光X線分析結果⑦

定時間600秒、試料室内は大気雰囲気といった条件下で行った。

また、1027・1349については、遺物の形状等からSEA1200VXによる分析が困難であったため、Thermo社製のエネルギー分散型の可搬型蛍光X線分析装置Niton XL3tを用いて分析を行った。

装置の仕様は、X線管が最大電圧50kV、出力2Wの銀(Ag)ターゲット、分析領域が径8.0mm、検出器がシリコンドリフト検出器である。

測定は、コリメータ径を8.0mmとし、Pb用フィルター使用、測定時間50秒といった条件下で行った。

(3) 分析結果

定性分析の結果を第250～256図に示した。分析試料のうち、水銀(Hg)が検出されているのは、554・735・1099・1843の4点である。これらは、肉眼観察によって付着している赤色顔料が水銀朱と推定されたものと一致する。

ただし、554・1843では水銀(Hg)のスペクトル

が明瞭なピークとして検出されたが、735・1099ではそれほど明瞭ではなかった。735については非赤色部では水銀(Hg)が検出されておらず、やはり付着した赤色顔料の中に水銀(Hg)が含まれていると推定される。また、1099についても非赤色部に比べて赤色部の水銀(Hg)の反応は強く、逆に鉄(Fe)の反応は非赤色部に比べて弱く、赤色に発色する要因として水銀(Hg)が影響している可能性が高い。こうしたことから、554・735・1099・1843に付着した赤色顔料は、いずれも水銀朱と考えられる。

その他の試料については、鉄(Fe)のスペクトルが高いピークとして検出されている。そして、ほとんどの試料では、非赤色部に比べて赤色部の方が鉄(Fe)の反応が強い。このことは、塗布された赤色顔料に鉄(Fe)が多く含まれていることを示すと考えられ、こうした試料ではベンガラが使用されている可能性が高いと思われる。中でも、2056や2558では赤色部における鉄のピークは非常に高く、確実に赤色に発色する要因として鉄(Fe)が関係している

と判断できるだろう。したがって、2056・2558では、塗布されている赤色顔料はベンガラと判断される。

一方、793・2594では非赤色部の方が鉄（Fe）の反応が強く出ており、また、1228では赤色部と非赤色部で大きな差が認められない。これらについては、測定結果だけを見れば赤色顔料の種類は不明といわざるを得ない。ただ、1228・2594には肉眼観察では確実に赤色顔料と認められるものが塗布されており、それを鑑みれば、やはり鉄（Fe）が発色の主要因であるベンガラと推測される。793内面の赤色顔料に

ついても、も水銀（Hg）が検出されていないことなどからみて、ベンガラの可能性が高いだろう²⁾。

註

- 1) 本田光子1994「内面朱付着土器」『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会
- 2) 793は外面や口縁端部にベンガラと推測される赤色顔料による赤彩が認められ、その赤彩に用いられたベンガラが内面にもわずかに付着したと考えるのが妥当と思われる。

第Ⅷ章 調査のまとめと考察

第1節 遺構の変遷と集落の構造

(1) 遺構の変遷

居林遺跡では、弥生時代後期中葉～古墳時代前期中葉の竪穴建物が検出されており、東側に隣接する中野山遺跡で検出されたものも合わせれば、弥生時代後期前葉まで含めた長期にわたる集落の変遷を追うことが可能である(第257～259図)。

弥生時代後期前葉 今回の調査では、弥生時代中期の遺物は可能性のあるもの数点のみしか出土していない。中野山遺跡では中期の竪穴建物も検出されているが、中期後葉のものではなく、この時期には居林遺跡が位置する丘陵上に集落は形成されていないようである。

弥生時代後期前葉になると、少数ながら遺物が出土するようになるが、当該期の遺構は居林遺跡の今回の調査範囲では検出されていない。ただし、中野山遺跡で竪穴建物が数棟確認されており、この時期に丘陵上に新たに集落が形成されると考えられる。

中野山遺跡の集落は調査区外へと広がる様子は窺えず、小規模なものと考えられる。竪穴建物には、規模に大小が認められる。

弥生時代後期中葉 居林遺跡の範囲内で検出された最も古く位置づけられる遺構は、SH264やSH467など弥生時代後期中葉に属するものであるが、ごくわずかである。一方、中野山遺跡の範囲には、後期後葉に下る可能性があるものを含めて複数の竪穴建物が存在し、一定のまとまりをみせる。

ほとんどの建物は丘陵上に位置しており、斜面部には目立った遺構は認められない。ただし、斜面裾部の扇状地状の緩斜面で竪穴建物が2棟検出されており、丘陵裾部にも居住域が存在していた可能性がある。全体的にみると、竪穴建物が広い範囲に散在するような傾向があるように思われる。

竪穴建物には、特に大型のものは認めがたい。なお、中野山遺跡の当該期の建物が分布する範囲には掘立柱建物が多数存在しており、その中には棟持柱

を有するものなど、弥生時代後期と思われるものも複数含まれている。

弥生時代後期後葉 弥生時代後期後葉には、竪穴建物の数が急激に増加する。中野山遺跡の範囲では、後期中葉～後期後葉の時間幅で捉えられる竪穴建物が数棟検出されているものの、確実に当該期に位置づけられる竪穴建物は確認できない。全体的に丘陵先端部の斜面に近い範囲に竪穴建物が集中する。丘陵の北側から深い谷が入り込んで尾根幅が狭まっている箇所より西側に、集落の範囲が限定されていると思われる。

後述のように、弥生時代終末期にも同様の範囲に集落が形成されており、丘陵尾根幅が狭まった箇所が、集落域を画する一つの区切りとなっていた可能性が考えられる。そうみた場合、この箇所に北山城跡の東端を画すると思われるSD401が存在することが注意される。根拠には乏しいが、元々この箇所には弥生時代後期後葉に丘陵尾根を切断するような区画溝が設けられており、後世にその痕跡を利用してSD401が掘削された可能性も考える¹⁾。

また、北山城跡Ⅰ・Ⅲ郭の南側の斜面や、丘陵裾部の緩斜面にも、かなりの数の竪穴建物が存在している。この時期に属すると思われる段状遺構も少数ながら存在しており、集落が斜面を含み込む形で展開する点が特徴的といえる。

これら斜面に展開する竪穴建物群と、丘陵上の竪穴建物群との間に存在する急斜面には遺構が認められず、両者の関係にはやや不明な部分もある。おそらく、未調査の北山城跡のⅠ～Ⅲ郭内にも当該期の竪穴建物が存在し、北山城跡のⅠ・Ⅱ郭の南側に入り込む谷を取り巻くように集落が展開していると推測されるが、丘陵上では調査区北側へと集落が広がっていく様子があまり感じられず、複数の居住単位の存在も考慮すべきかもしれない。

この時期には、ほかのものよりも明確に大型の竪穴建物が認められる。SH484・488が特に大型であ



※居林遺跡の等高線は調査前測量図、中野山遺跡の等高線は調査後測量図による。

第257図 遺構変遷図①



※居林遺跡の等高線は調査前測量図、中野山遺跡の等高線は調査後測量図による。

第258図 遺構変遷図②



※居林遺跡の等高線は調査前測量区、中野山遺跡の等高線は調査後測量区による。

第259図 遺構変遷図③

る。この2棟はほぼ同じ位置にあり、一部重複しており新旧関係がある。丘陵上の堅穴建物群の内部に位置しており、周囲の堅穴建物との間に若干の空間があるようにも見受けられる。また、付近にはSH 463・472・491などやや大型の建物も存在し、SH 484・488を中心として集落の中核域が形成されていたとも考えられる。中心的な性格を有する大型建物で、建て替えによって更新された可能性もあろう。

弥生時代終末期 弥生時代終末期にも堅穴建物の数が多いが、古墳時代前期初頭まで下りうる新しい段階に属すると考えられるものが半数程度を占めており、建物同士の重複もかなり多い。

集落は、基本的に丘陵上に位置し、やはり北側から谷が入りこんで丘陵の尾根幅が狭まった箇所より西側に限られる。また、調査区北壁付近で多くの堅穴建物が検出されており、集落域はより北側へ広がっている可能性が高い。当該期の堅穴建物は、さらに多数が存在していると考えられる。

斜面に位置する堅穴建物はSH348がある程度で、基本的には斜面に堅穴建物は構築されていない。しかしながら、斜面には段状遺構が複数存在すると思われる、弥生時代後期後葉に引き続き、斜面が集落の活動領域となっていることが窺われる。

堅穴建物には際だって大型のものは認められないが、SH248・417などはほかの建物と比べてやや大型である。逆に、SH402・428などはかなり小型で、支柱穴も検出されておらず、構造にも特徴がある。ただし、大型の建物が一定の範囲に集中する様子は認められず、小型建物が大型建物に従属的な位置にある様子も明確には看取できない。

また、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭のものと考えられる掘立柱建物が1棟検出されている。小規模な建物であるが、堅穴建物とともに少数の掘立柱建物が集落内に存在していたことを示す。

古墳時代前期初頭 弥生時代終末期でも新しい段階から古墳時代前期初頭にかけてのものと考えられるものを除くと、確実に古墳時代前期初頭に位置づけられる堅穴建物はそれほど多くない。

すべての堅穴建物が丘陵上で検出されており、弥生時代後期後葉～終末期の集落と比べると、西側の斜面からは若干離れた場所にまとまっている。

調査区の北側や南側へ集落が展開するような様子はあまり窺えない。建物同士の重複も認められることから、同時併存した建物は多くても10棟程度であったと推測され、それほど大規模な集落ではなかったと考えられる。弥生時代終末期以降、古墳時代前期初頭にかけて集落は縮小傾向をたどったものと考えられる。

検出されている建物には、それほど明瞭な規模の差はみられない。若干小型のものが数棟認められるが、ほかの建物と位置的に区別されているような様子は見受けられない。

古墳時代前期前葉～中葉 古墳時代前期前葉以降には急激に集落が縮小し、わずかな数の堅穴建物が認められるのみである。前期前葉の可能性のある堅穴建物は4棟あるが、時期が前後する可能性があるものも含む。また、かなり散在的で、集落としてのまとまりも弱いように感じられる。掘立柱建物も1棟検出されているが、飛鳥時代以降に下る可能性もあり、確実なものではない。調査区外にさらに数棟の堅穴建物が存在するとも思われるが、調査区内の状況のみを限り、前期前葉には集落はほぼ解体していたと考えられる。

四日市市伊坂遺跡や小牧南遺跡など²⁾、朝明川流域のほかの遺跡でも確認されているように、この時期には集落が小規模・分散化すると考えられる。

古墳時代前期中葉には堅穴建物はなくなっていくとみられ、集落は完全に消滅に向かう。

(2) 段状遺構について

今回の調査において、斜面部分で検出された、溝や土坑状の掘り込み等によって狭い平坦面を確保したり、斜面上方からの雨水の流れ込みを防止したりしていると考えられる遺構を、段状遺構として一括した。

段状遺構の時期については明確なものは少ないが、出土遺物からみて弥生時代終末期～古墳時代前期初頭が中心となると考えられる。段状遺構の付近には堅穴建物も構築されているが、それらの斜面に構築された堅穴建物は多くが弥生時代後期後葉のものと考えられ、時期的に若干のずれが認められる。

先にみたように、弥生時代終末期～古墳時代前期

初頭には丘陵上に居住域が展開しており、その縁辺部にあたる斜面に段状遺構が複数構築されているといえる。

墳墓の可能性 段状遺構の性格や機能については明確にしがたいが、S Z 304・312・326などは、形態的に方形周溝墓状の墳墓とも考えられよう。

弥生時代終末期頃の方形周溝墓状の墳墓が斜面に築造されている例は、これまで伊勢地域においては確認されていない。ただ、周辺地域にまで目を広げると、斜面で同様の墳墓と考えられる遺構が検出された例は皆無ではない。

例えば、岐阜県富加町後平遺跡では斜度18°程度の斜面において方形周溝墓と思われる方形区画溝が検出されている³⁾。その近隣の岐阜県関市深橋前遺跡や小洞遺跡でも斜面からコ字状の溝が検出され、墳墓と推定されている⁴⁾。深橋前遺跡では、その付近に土器棺墓とみられる遺構や、S Z 329・331などと似た形態を呈する段状遺構が存在しており、居林遺跡の状況と類似する。

ただし、これらの事例については溝による区画内から明確な埋葬施設が検出されておらず、確実に墳墓であるとは断じがたい⁵⁾。また、深橋前遺跡や後平遺跡では、これらの遺構と近接して堅穴建物が検出されており、同時期であれば居住域と墓域が分離されていないことになり、違和感がある⁶⁾。

居林遺跡の場合、居住域と一定程度区分されるように見受けられることや、付近から土器棺墓とも考えられる土器埋設土坑が検出されている点も鑑みると、墳墓である可能性も完全には否定できない。

しかしながら、斜面の斜度や、埋葬施設が全く遺存していない点を考慮すれば、かなりの盛土の存在を考えざるをえないが、急な斜面に盛土を施した場合、短期間で崩落することは想像に難くないだろう。

土器埋設土坑についても、居林遺跡で検出されたものは大型の壺が単体で埋設されており、蓋となるような土器や骨片の出土などは確認できず、土器棺墓と断定することは難しい。

以上のような点から、現状ではS Z 304・312・326のようなコ字状の溝を掘り込むものを、積極的に墳墓として認定することは避けておきたい。

性格・機能について ただし、墳墓以外の性格を具

体的に明示することも、困難である。

ほとんどの段状遺構は広い平坦面を確保しているような様子は認められず、溝を掘り込むか、わずかな段を造り出すようなものである。したがって、何らかの構築物の存在を想定することは困難で、大部分が流失した堅穴建物とも考えにくい。

S Z 304などはその下方に位置するS H 305・306への雨水の流入を防ぐために設けられたとも考えられるが、出土遺物などからみる限り時期的なずれがあり、問題が残る。しかしながら、深橋前遺跡では同様の堅穴建物に伴う溝が検出されていることから、こうした下方にある何らかの施設と関係するものも存在する可能性があるだろう。

また、周溝状の形態を呈するS Z 312では、埋土に再掘削の痕跡が認められる点は、この遺構の機能を考える上で一つの手がかりとなるかもしれない。

本報告においては段状遺構として一括したが、土坑状や溝状など形態が一定でないことや、規模にも大小が認められることから、いくつかの異なった性格・機能を想定する必要もある。

現状では、段状遺構の性格・機能は明らかにすることができず、弥生時代終末期を中心として、斜面が何らかの目的で積極的に活用されていたことを示すにとどまる。

(3) 斜面付近立地の選好傾向

斜面における遺構の存在 遺構の変遷をみる中で確認したように、居林遺跡において、弥生時代後期中葉以降に丘陵縁辺部を中心として集落が形成されるようになり、弥生時代後期後葉や終末期には、斜面にも堅穴建物や段状遺構などが構築されている。

これらの遺構が形成されている斜面は、斜度が16°程度とかなり急である。丘陵上の平坦面だけでなく、こうした急峻な斜面にも堅穴建物や、段状遺構としたような何らかの活動の場が設けられている点は、居林遺跡の集落の特徴の一つといえる。

斜面選好の可能性 居林遺跡の東側に隣接する中野山遺跡では、弥生時代後期前葉の集落の存在が確認されている。つまり、弥生時代後期前葉段階では斜面部分からやや離れた丘陵上に小規模な集落が営まれているのに対して、後期中葉には斜面付近へと進

出する傾向がみられるようになり、後期後葉には斜面付近へと完全に集落の場所が変化し、斜面にも堅穴建物や段状遺構が構築されるようになっている。

地形や後期前葉の集落、あるいは中野山遺跡で広域的に検出されている飛鳥・奈良時代の集落の存在からみれば、斜面から離れた丘陵上の平坦地に集落全体を立地させることも可能であったにも関わらず、そうした選択がなされていないのである。

このことからみると、居林遺跡において斜面部分にも堅穴建物などが認められるのは、丘陵上という高所で、かつ集落の一部に斜面を含むような集落立地が、あえて選好された可能性が考えられる。

近隣地域の類例 弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭には、伊勢地域及び近隣地域でも、斜面付近あるいは斜面自体に立地する集落が認められる。

伊勢地域では、朝明川流域においてそうした集落が目立つ。居林遺跡が立地する朝日丘陵の縁部には、弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭の集落が複数存在しているが、その多くが斜面を選好した立地を示している。

弥生時代後期後葉～終末期の四日市市山奥遺跡は、裾部からの比高差が15mほどの丘陵上に位置するが、丘陵斜面にも集落が展開し、斜度15～20°程度の斜面にも複数の堅穴建物が構築されている⁷⁾。

四日市市金塚遺跡は、弥生時代後期後葉の集落である⁸⁾。集落の大部分が斜面に立地しており、集落に沿って環濠状の大溝を断続的に掘削しており、柵なども設けられていたとみられる。堅穴建物が存在する斜面も斜度10～15°程度と急で、発掘調査で検出された堅穴建物には斜面下方側が流失したものが多く、居林遺跡で検出された段状遺構に近いようなものもみられる。

伊勢地域だけではなく、美濃地域でも岐阜県関市砂行遺跡や深橋前遺跡、富加町後平遺跡などでは斜面に集落を展開させている⁹⁾。また、近江地域北部でも滋賀県長浜市桜内遺跡などが挙げられる¹⁰⁾。

集落類型としての評価 このように、集落が斜面やその付近に立地する傾向は、弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭にかけて、伊勢地域をはじめ美濃・近江地域など複数の地域で確認できる。これらの地域では弥生時代後期前葉～中葉、そして古墳時代前

期前葉以降にはこうした集落の存在は明確ではないため、集落立地における時期的な特徴として捉えることが可能と思われる。

集落全体が完全に急斜面に立地する集落は少ないが、集落を丘陵縁辺部の斜面付近に占地させ、丘陵上だけでなく、斜面や斜面裾部にも堅穴建物を構築しているものがあり、居住域に斜面を取り込んでいるともいえる。

こうした斜面を選好し、居住域の一部として積極的に斜面を取り入れてくようなものを、伊勢湾沿岸地域及びその周辺地域における、弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭にかけての特徴的な集落類型として把握することも可能だろう。

これまでも、弥生時代終末期頃の斜面に立地する集落は特に美濃地域北部（岐阜県関市付近）で注意され、「砂行型急斜面集落」として類型化されるなど当該地域における特徴的な集落類型として把握されてきた¹¹⁾。ただし、完全に斜面に立地しないまでも、集落の一部に積極的に斜面を取り込むような集落は、美濃地域だけでなく伊勢地域や近江地域にも類例が確認できるため、もう少し広い範疇で把握した上で検討を行う必要があるように思われる。

したがって、ここでは居林遺跡を含め、丘陵縁部を選好して占地し、居住域に斜度15°前後の斜面を含むような集落を、一つの集落類型として把握し「斜面立地傾向集落」と仮称しておきたい。

斜面立地傾向集落がどのような性格を有していたかは不明であるが、斜面を選好する何らかの理由があったことは間違いなからう。

金塚遺跡のような集落は、防御性を重視したとも思われるが、居林遺跡や山奥遺跡などでは大溝や明確な柵はみられず、防御性が高いとは認めがたい。立地する丘陵の比高差も、居林遺跡では18m程度で、狭義の高地性集落とはいえない。

また、弥生時代終末期頃には気候の寒冷化、多雨化があったとされている¹²⁾。こうした気候変動と関係する可能性もあるが、居林遺跡では弥生時代後期前葉から継続的に丘陵上に集落が形成されており、また、当該期には沖積地に立地する集落も多数存在することから、低地部の居住環境悪化との直接的な関連は認めがたいだろう。

美濃地域では生業や交通路との関係も指摘されているが、現状では、斜面立地傾向集落の性格や出現背景を明確にする手がかりには乏しい。今後、こうした集落類型の存在を前提として、各地域における集落間関係などに関する分析を進めていくことが、一つの方向性として求められよう。

註

- 1) 松阪市天花寺小谷赤坂遺跡では、弥生時代後期に丘陵尾根を切断するように掘られた大溝が、その後、天花寺城跡の堀として再掘削されたことが指摘されている。三重県埋蔵文化財センター2005『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告 VII』
- 2) 三重県埋蔵文化財センター2004『伊坂遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2011『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2021『小牧南遺跡（第2・3次）発掘調査報告』
- 3) 財団法人岐阜県文化財保護センター2002『後平茶臼古墳・後平遺跡』
- 4) 財団法人岐阜県文化財保護センター2003『深橋前遺跡』、

- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2008『小洞遺跡・小洞西1号古墳』
- 5) 小洞遺跡では、溝で区画された内部に埋葬施設状の土坑が存在するが、報告書では埋葬施設ではないとされる。
 - 6) 深橋前遺跡の報告書でも、堅穴建物と近接して構築されている点には疑問が示されている。
 - 7) 四日市市教育委員会2003『山奥遺跡 I』、四日市市教育委員会2004『山奥遺跡 II』
 - 8) 三重県埋蔵文化財センター2002『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』
 - 9) 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『砂行遺跡』、前掲註3・4文献
 - 10) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1989『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書 X I』
 - 11) 成瀬正勝2000「砂行遺跡における住居形態と集落形態」『砂行遺跡』 財団法人岐阜県文化財保護センター、松岡千年2003「深橋前遺跡の急斜面集落」『深橋前遺跡』 財団法人岐阜県文化財保護センター
 - 12) 中塚武2012「気候変動と歴史学」『環境の日本史』第1巻 日本史と環境一人と自然― 吉川弘文館

第2節 堅穴建物の特徴と変化

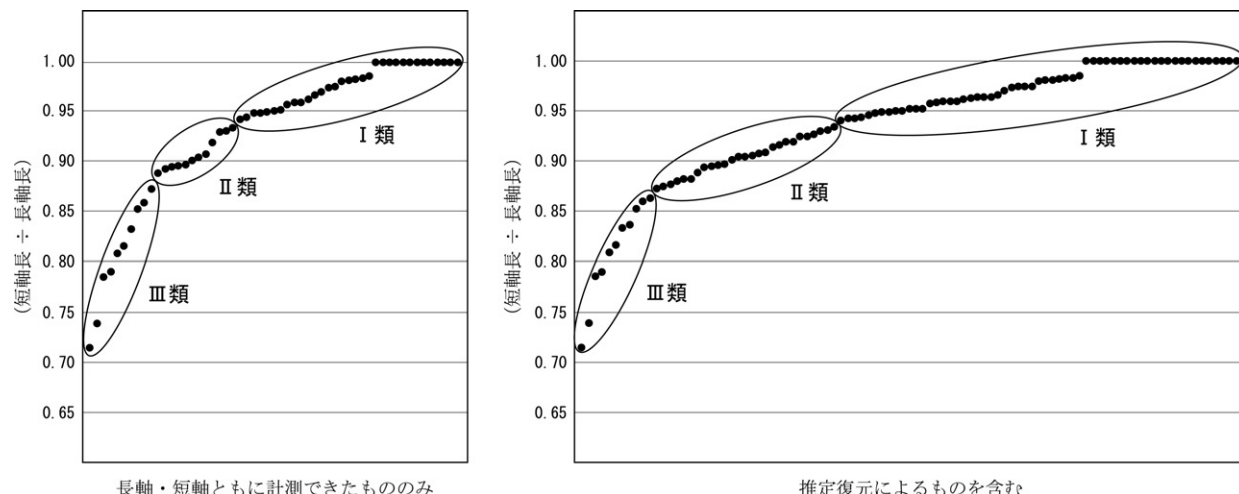
(1) 堅穴建物の平面形

長期間にわたって集落が営まれた居林遺跡においては、集落の構造とともに、堅穴建物の形態や構造の変遷についての情報も多く得られた。

まず、堅穴建物の平面形については、明確に長方

形を呈するものから、正方形を呈するものまで、さまざまな形状のものが認められる。

平面形の分類 こうした堅穴建物の平面形を整理するため、それぞれの建物の長軸と短軸の比率を用いて類型化を行った。第260図では、左側にはほぼ建物の全体が検出でき、長軸と短軸の長さが正確に把握



第260図 堅穴建物の平面形態の区分

できたもののみを対象として、短軸長÷長軸長の数値の分布を示した。それをみると、おおよそ0.888と0.949を境に数値分布の変化が認められる。一方、右側には一部しか検出できなかったものの、支柱穴の位置などを手掛かりとして平面形が復元できるものも含めたデータを示した。これをみても、おおよそ0.873と0.941を境に数値分布の変化が認められ、全体が検出できたものとはほぼ一致する。したがって、支柱穴の位置を手掛かりとして建物の平面形を復元しても、本来の平面形と大きく異なるようなことは少ないと推測される。

そこで、平面形を復元したものを含むグラフの変化点を基に、短軸÷長軸の値が0.94以上のものを正方形に近いⅠ類、0.87以上0.94未満のものをやや長方形のⅡ類、0.87未満のものを長方形のⅢ類として、平面形の分類を行った。

平面形の変化 以上の分類に基づいて、時期的な変化をみていくと、弥生時代後期後葉と終末期との間に、大きな変化が認められる（第8表）。

弥生時代後期中葉～後葉には、明らかにⅡ・Ⅲ類が主体を占めており、平面形が長方形を呈する傾向が強い。中野山遺跡で検出された竪穴建物をみると、弥生時代後期前葉も長方形を呈するものが主体となるだろう。

一方、弥生時代終末期～古墳時代前期中葉にはⅠ類が主体を占めるようになる。Ⅱ類も一定数存在するが、明確に長方形を呈するⅢ類は、ごくわずかとなる。つまり、平面形が基本的に正方形を呈するように変化するのである。

建物の平面形の変化は、支柱穴の配置、そして当然ながら上屋構造にも影響を及ぼすと推測される。したがって、弥生時代後期後葉から終末期にかけて、竪穴建物の全体的な構造にかなりの変化があった可能性が考えられる。

（2）竪穴建物の基本的構造の変化

竪穴建物には、平面形以外にも時期的な変化が認められる。竪穴建物の基本的な付帯施設である炉と貯蔵穴について、その変化を示しておきたい。

炉 居林遺跡の竪穴建物に設けられた炉には、床面に浅いピットを設けたのみの地床炉と、その一端に

長細い大型の礫を1・2点置いた添石炉がある。

このうち、地床炉は古墳時代後期にカマドが一般化するまでは通有の炉となっていたもので、居林遺跡においても基本的な炉の形態となっている。

一方、添石炉は全体からみると少数派であるが、複数の事例が確認できる。添石炉は、居林遺跡では弥生時代後期後葉のものが最も古く、中野山遺跡で検出された後期前葉～中葉の竪穴建物でも確認できない。したがって、居林遺跡・中野山遺跡では、弥生時代後期後葉に添石炉が導入された可能性が考えられる。

弥生時代終末期の確実な事例は確認されていないが¹⁾、古墳時代前期初頭には再び認められるようになり、古墳時代前期中葉にも確認できる。

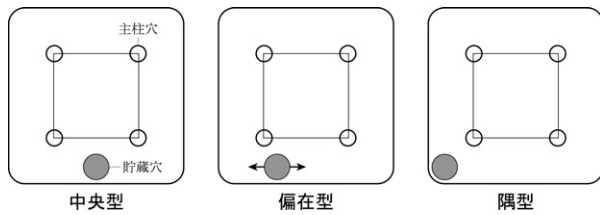
朝明川流域では、四日市市小牧南遺跡で弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の事例が複数確認されており²⁾、居林遺跡の状況をみても、やはり古墳時代前期初頭前後に顕在化する傾向は認められるだろう。ただし、後期後葉まで遡りうるものが存在することが明らかになったことは、この形態の炉の出現経緯を考える上で重要といえる。

また、同じ集落の中で、多数派の地床炉と少数派の添石炉が並存する点は、集団の構造や移動などについて考えるための、一つの手がかりともなる。

ただし、添石炉は礫が失われてしまうと地床炉と判別できなくなるため、そうした検討が困難な面がある。今後、建物内から検出された被熱した礫の存在などにも注意を払う必要があると思われる。また、出土した台石の中に、被熱したものが複数みられる点も注意される。添石炉に伴う礫として置かれていた台石が、その後取り外されて廃棄された可能性も考えられ、それは建物の廃絶等に伴う意図的な炉の破壊・棄却が行われていたことを示唆する。こうした可能性も含め、弥生・古墳時代の炉について、さらなる検討が求められよう。

貯蔵穴 貯蔵穴は、ほとんどの竪穴建物から検出されている。そして、基本的に1箇所だけに設けられている。ここでは、その位置についてみておきたい。

貯蔵穴は、いずれも建物の壁沿いに位置するが、その位置は大きく3種類に分類できる（第261図）。中央型：建物の一辺の中央に位置するもの。



第261図 貯蔵穴位置の分類

偏在型：中央からどちらかの隅へと少し片寄った場所に位置するもの。

隅型：完全に建物の隅に位置するもの。

この位置の分類については、比較的明瞭に区別することが可能である。偏在型については対象となる範囲に幅があり、中央型や隅型との区別が曖昧になるようにも思われるが、多くは支柱穴付近に位置し、判別は容易である。こうしたことは、どの位置に貯蔵穴を設けるかが、明確に意識されていたことを示すだろう。

さて、この分類に基づいて貯蔵穴の位置の時代的变化をみていくと、弥生時代後期中葉～後葉には、ほぼ中央型に限られる。中野山遺跡で検出された弥生時代後期前葉の堅穴建物でも中央型の貯蔵穴配置が認められるため、後期を通じて中央型が原則となっていたことが分かる。

弥生時代終末期になると、中央型が急激に消滅し、ほぼ偏在型で占められるようになる。その変化は明瞭で、かなり大きなものであったといえる。

その後、古墳時代前期初頭にかけては偏在型が主体となっており、これが基本となっていたと考えられる。しかしながら隅型も一定程度存在しており、古墳時代前期初頭には次第に目立ち始め、前期前葉～中葉になると主体化しているようにもみえる。

居林遺跡では古墳時代前期前葉～中葉の建物が少ないため、こうした傾向が確たるものか判断できない。近隣の遺跡を参考にすれば、小牧南遺跡では弥生時代終末期～古墳時代前期初頭段階では偏在型が卓越し隅型が少数混じる状況であるが、古墳時代前期前葉～後葉にかけては貯蔵穴の位置が判明した堅穴建物5棟のうち、偏在型が1棟で隅型が4棟と、隅型が主体を占める。古墳時代前期中葉の四日市市伊坂遺跡では、偏在型が1棟と隅型が2棟確認でき、

やはり隅型が多いとみられる³⁾。したがって、居林遺跡など朝明川流域の集落では、古墳時代前期初頭以降に貯蔵穴が堅穴建物の隅に位置する傾向が強まり、古墳時代前期前葉以降には隅型が卓越するようになると考えられよう。

(3) 構造物や構築技法の変化

居林遺跡で検出された堅穴建物には、限られたものにしに設けられていない構造物なども認められる。それらの時代的な傾向などについても整理しておく⁴⁾。

間仕切り溝 堅穴建物の一辺の壁の中央付近から壁に直交するように延びる細い溝を、建物内の間仕切りなどに関係するものとして、間仕切り溝とした。

こうした間仕切り溝は、弥生時代後期後葉には可能性があるものが1例認められるのみであるが、弥生時代終末期以降に急激に一般化し、多くの建物で認められるようになる。この変化は、かなり大きなものといえる。

弥生時代終末期以降には、古墳時代前期中葉に至るまで連続と認められ、堅穴建物の基本的な構造物の一つとなっているものと思われる。

排水溝 居林遺跡では、堅穴建物の隅から排水溝とみられる溝が掘られているものがいくつか認められる。溝の先端は地形的に低い方へ向かうことから、排水機能を有していたとみてよい。

こうした排水溝については、弥生時代中期までは伊勢地域において一般的なものではない。津市長遺跡などでみられるものの⁵⁾、一部に限られる。弥生時代後期以降に増加していくようであるが、弥生時代終末期～古墳時代前期にも一般化しているとはいえず、集落の立地などにも関係するようである。

居林遺跡では5例、可能性があるものを含めても6例程度と、やはり一般的な構造物ではない。近接しており、地形的に差異はないようにみえる建物同士でも、排水溝を持つものと持たないものが認められ、これを設ける厳密な条件には不明な点がある。

事例も少ないため確たる傾向とはいいがたいが、時代的には弥生時代後期後葉～終末期が主体で、特に弥生時代終末期に目立つように思われる。確実に古墳時代前期初頭以降となる例はみられない。

第8表 竪穴建物の諸属性とその変化

建物名	時期	平面形			炉		貯蔵穴			その他施設			
		I	II	III	地床炉	添石炉	中央型	偏在型	隅型	間仕切り溝	排水溝	壁柱穴	周溝状掘形
S H264	後期中葉	○			●								
S H445	後期中葉?			●			○						
S H467	後期中葉		●		○		●						
S H201	後期後葉		●			○	●						
S H203	後期後葉	●				●	●				●		
S H220	後期後葉		○		●								
S H226	後期後葉		●				●						
S H235	後期後葉		●		○		●						
S H236	後期後葉		●				●						
S H239	後期後葉	●			●		●						
S H242	後期後葉		○				●						
S H272	後期後葉		○			●	●						
S H273	後期後葉			●			●						
S H274	後期後葉						●						
S H303	後期後葉						●						
S H316	後期後葉			○	●		●						
S H318	後期後葉						●			○			
S H463	後期後葉			●	●		●						
S H472	後期後葉?			●	●		●						
S H484	後期後葉			●	○		●						
S H486	後期後葉?		○				●						
S H488	後期後葉		●				●						
S H489	後期後葉		●		●		●						
S H491	後期後葉			●			●				○		
S H243	後期後葉～終末期	○			●		●						
S H315	後期後葉～終末期			●				●					
S H459	後期後葉～終末期			●			●						
S H202	終末期		●										
S H209	終末期	●						●					
S H228	終末期		●					●		●	●		
S H234	終末期	○			●				○		●		
S H241	終末期		●					○		○	●		
S H248	終末期	○			●			●					
S H250	終末期	●							○		●		
S H251	終末期							●			●		
S H403	終末期	●			●			●			●		
S H408	終末期	●			○			●			●		
S H410	終末期	●			○			●			●		
S H414	終末期							●			●		
S H417	終末期	●			○			●					
S H423	終末期	●			○			●			●		
S H430	終末期	○							●				
S H433	終末期	●						●					
S H434	終末期	○						●					
S H438	終末期		○						●		●		
S H482	終末期	●						●			●		
S H204	終末期～古墳時代前期初頭			●	●		●						
S H212	終末期～古墳時代前期初頭			●	○				○				
S H244	終末期～古墳時代前期初頭	●			○			●			●		
S H253	終末期～古墳時代前期初頭?	○			○			●					
S H418	終末期～古墳時代前期初頭	●			○			●				○	
S H428	終末期～古墳時代前期初頭	●			○				●				
S H443	終末期～古墳時代前期初頭		○					●					
S H444	終末期～古墳時代前期初頭		●					○					
S H447	終末期～古墳時代前期初頭	●				○		●					
S H449	終末期～古墳時代前期初頭	●			○			●			●		
S H456	終末期～古墳時代前期初頭	○			○			●			●		
S H460	終末期～古墳時代前期初頭	●			○			●				○	
S H461	終末期～古墳時代前期初頭	●			○			○	●				
S H464	終末期～古墳時代前期初頭	○			○			●			●		
S H465	終末期～古墳時代前期初頭	○			○			○			●		
S H469	終末期～古墳時代前期初頭	○			○			●			●		
S H470	終末期～古墳時代前期初頭	●						●		○			
S H471	終末期～古墳時代前期初頭	○			○			●			●		
S H473	終末期～古墳時代前期初頭?				○			●					
S H476	終末期～古墳時代前期初頭		○		○			●			●		
S H490	終末期～古墳時代前期初頭	○			●			●			●		
S H424	古墳時代前期初頭		●		○			●			●		
S H429	古墳時代前期初頭?		○					●					
S H431	古墳時代前期初頭	●				●		●					
S H442	古墳時代前期初頭		●										
S H446	古墳時代前期初頭	●							●				●
S H450	古墳時代前期初頭?	●			○			●			●		
S H451	古墳時代前期初頭	●			○			●			●		
S H454	古墳時代前期初頭		○				●						
S H457	古墳時代前期初頭	●					○						
S H462	古墳時代前期初頭	●			○			●		○		●	○
S H477	古墳時代前期初頭	●			○			●		●			
S H485	古墳時代前期初頭	○						●					
S H421	古墳時代前期初頭～前葉	●			○			●		●	●		
S H230	古墳時代前期前葉	●			○			●		●			●
S H205	古墳時代前期前葉～中葉	●			○			●		●			
S H436	古墳時代前期前葉～中葉	●			●			●					●

●：確実なもの ○：推定・復元等によるもの

こうした時期的傾向について、周辺の遺跡を参照してみると、弥生時代後期後葉～終末期の四日市市山奥遺跡では、排水溝を有する竪穴建物が複数検出されており⁶⁾、やはりこの時期には一定数が存在することが分かる。一方、古墳時代前期初頭の小牧南遺跡では排水溝は認められない。しかしながら、古墳時代前期中葉の伊坂遺跡では、排水溝を有する竪穴建物が検出されている。

これらの事例から、朝明川流域において排水溝を有する竪穴建物が確実に出現するのは弥生時代後期後葉で、終末期にかけて増加するものと考えられる。そして、古墳時代前期中葉まで存続している可能性が高い。

ただ、小牧南遺跡と伊坂遺跡の事例からは、集落単位での排水溝の有無には、やはり地形的要因が関係する可能性も窺える。それを踏まえると、居林遺跡では古墳時代前期初頭以降の竪穴建物は弥生時代後期後葉～終末期よりも若干斜面から離れて位置する傾向が認められるため（本章第1節）、それが排水溝の消長と関わっているとも考えられよう。

壁柱穴 壁柱穴は、竪穴建物の壁に食い込む形で小さな柱穴が掘り込まれているもので、上屋構造に関わる何らかの構造物の痕跡と考えられる。

居林遺跡では、確実な事例が1例と、可能性があるものが1例検出されたのみで、ごくわずかな建物に採用されているに過ぎない。

少数例のため不明な点が多いが、時期的には弥生時代終末期～古墳時代前期初頭頃にみられるといえようか。朝明川流域においても、伊坂遺跡や小牧南遺跡で古墳時代前期初頭～古墳時代前期中葉の事例が認められる。いずれの遺跡においても、一部の建物のみで確認されており、全ての建物に伴うものではない。弥生時代終末期～古墳時代前期中葉の間に、集落内の一部のみで採用された建物構造であったと考えられる。

周溝状掘形 周溝状掘形は、竪穴建物を構築する際に、壁沿いに浅く幅広い溝状の掘り込みを行っているものである。建物の構築技法の一環と思われるが、その目的や機能については不明である。

周溝状掘形は、居林遺跡では確実なものは4例程度で、可能性があるものを含めても6例と、少数に

過ぎない。

時期的にみると、一部は弥生時代終末期まで遡る可能性があるものの、基本的には古墳時代前期初頭以降のものである。

古墳時代前期初頭においても事例は少ないが、小牧南遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の事例が多数存在しており、遺跡によって差があるようにも見受けられる。

こうした差については、一つは周溝状掘形の機能と関係する可能性が考えうるだろう。防湿といった機能は積極的には想定できないが、各遺跡の立地条件等については再検討する余地がある。

そしてもう一つには、居住集団による違いが考えられる。竪穴建物の完成後には目視できなくなる周溝状掘形は、明らかにその集落を営んだ集団が保有する建物の構築技術と関係するもので、その有無は、集団間の建物構築技術の差異を示す可能性がある。朝明川流域の集団間において、こうした差異が存在する可能性を認めうるかどうか、今後考えていく必要があるだろう。

（4）竪穴建物の変化と画期

居林遺跡における竪穴建物の変化について、平面形、基本的な構造、付帯する構造物や構築技法などについてみてきたが、それらを総合すると、竪穴建物の構造が大きく変化した時期を見出すことができる。

弥生時代終末期の画期 まず、弥生時代後期後葉と終末期の間に、大きな変化が認められる。平面形が正方形を志向するようになり、貯蔵穴の位置も変化する。そして、間仕切り溝が多くの建物に認められるようになる。こうしたことから、建物の基本的な構造自体に変化が生じたことが窺われ、かなり大きな画期であったと考えられる⁷⁾。

こうした変化をもたらした要因については明らかではないが、弥生時代終末期頃に活発化する地域間交流や、それに伴う居住形態や集団構造の変化が影響していたと思われる。

古墳時代前期初頭の画期 そして、弥生時代終末期と古墳時代前期初頭との間にも若干の変化が認められよう。

平面形については変化が認められず、貯蔵穴の位置にも大きな変化はない。ただし、貯蔵穴は建物の隅に位置する傾向が強まっていく。また、炉についても不明確ながら、添石炉が目立つようになる可能性がある。そして、建物の構築技法に関わるものとして、周溝状掘形がみられるようになる。

こうした変化は、弥生時代後期後葉から終末期にかけての建物構造に関係するような大きな変化とは異なる。そして、急激な変化でもなく、どちらかといえば漸移的な変化といえるだろう。

ただし、添石炉や周溝状掘形の状況からは、新しい要素が取り込まれているとみられる。古墳時代前期初頭には、新たに建物の構造や構築技法にかかる影響があったと推定される。

これには東日本との地域間交流が関係している可能性も考えられるが⁸⁾、居林遺跡そのものには直接的な交流の痕跡は希薄である。複数の遺跡における様相の整理と比較検討によって地域全体の動向を把握し、それを基に地域間交流と竪穴建物の構造の変化との関係について、より詳細に考えていくことが

重要であると思われる。

註

- 1) 後述のように、添石炉の遺存にかかる問題があるため、弥生時代終末期にも存在した可能性は否定できない。
- 2) 三重県埋蔵文化財センター2021『小牧南遺跡（第2・3次）発掘調査報告』
- 3) 三重県埋蔵文化財センター2011『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』
- 4) 用語など基本的な事項については、小牧南遺跡の報告書で示されている。前掲註2文献
- 5) 三重県埋蔵文化財センター2000『長遺跡発掘調査報告』
- 6) 四日市市教育委員会2003『山奥遺跡Ⅰ』、四日市市教育委員会2004『山奥遺跡Ⅱ』
- 7) 居林遺跡では急激な変化が生じたようにみえるが、弥生時代後期後葉でも新しい段階から弥生時代終末期の古い段階にかけての竪穴建物が少ないようにも思われ、これが影響している可能性もある。実際の変化は、もう少し漸移的であったかもしれない。
- 8) 前掲註2文献

第3節 弥生時代後期～古墳時代前期の土器について

居林遺跡においては、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が多量に出土した。丘陵上に立地するために土器の埋蔵環境が悪く、また耕作等による後世の攪乱も被っているため、土器の遺存状況は全体的に良好ではない。

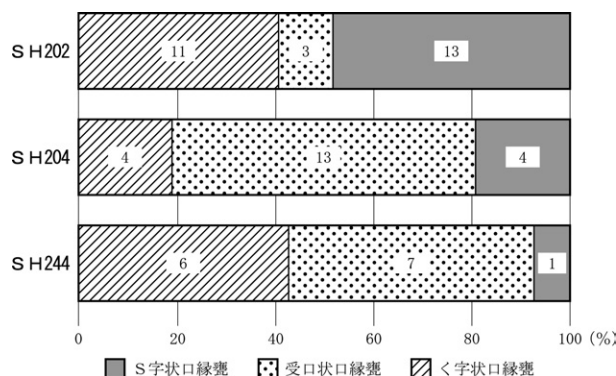
しかしながら、量的にはかなり多くの土器が出土しており、そこから得られる情報も多岐に及ぶ。そこで、ここでは今回の居林遺跡の発掘調査によって出土した土器の整理を通じて明らかになったいくつかの点について取り上げておきたい。

(1) S字状口縁甕の搬入と模倣

S字状口縁甕が占める割合 伊勢湾沿岸地域では、弥生時代終末期以降にS字状口縁甕が一定の割合を占めるようになる。ただし、その割合については、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の段階では地域によってかなりの差があるとみられる¹⁾。

朝明川流域では、尾張地域の平野部などに比べるとS字状口縁甕が占める割合が低く、古墳時代前期

初頭の四日市市小牧南遺跡では甕全体の37%程度にとどまるというデータがある²⁾。居林遺跡においては、遺跡が存続した時間幅が長く、S字状口縁甕が出現していない弥生時代後期の土器も多く含むため、S字状口縁甕が甕に占める割合を算出することは困難である。ただし、ある程度時期的なまとまりがあり、出土した甕の個体数も多いSH202・204・244について個別にみると、弥生時代終末期のSH



第262図 S字状口縁甕の占める割合

202では甕のうち50%近くを占めるが、弥生時代終末期の新しい段階から古墳時代前期初頭までの時期を含むSH204・244では、10~20%程度となっている(第262図)³⁾。

SH202ではS字状口縁甕が占める割合は比較的高いが、同時期に属するほかの遺構の状況を踏まえると、やや特殊な様相を示すと思われる。SH204・244の状況からは、居林遺跡全体としてみれば、S字状口縁甕が甕全体に占める割合は20%程度かそれ以下であったと推測される。これは、小牧南遺跡のデータとも矛盾しないだろう。

このようにみると、居林遺跡の弥生時代終末期~古墳時代前期初頭の集落では、S字状口縁甕はどちらかといえば客体的な存在であったと考えられる。

S字状口縁甕の搬入 居林遺跡で出土したS字状口縁甕については、形態的な特徴だけでなく、焼成や胎土にも特徴が認められる。

多くのS字状口縁甕は、表面が白っぽい色調を呈し、器壁内部の芯の部分は黒色を呈している。そして胎土には比較的粒径が大きな黒雲母を含む。こうした焼成や胎土の特徴は、居林遺跡で出土する多くの弥生時代終末期~古墳時代前期初頭の土器にはあまり認められない。

肉眼観察に基づくものであるが、上記のような特徴からは朝明川流域以外で製作されたものが搬入された可能性が高いと考えられる。こうした前提の下、これら搬入品と考えられるS字状口縁甕について、他地域のS字状口縁甕や在地産と考えられるく字状口縁甕などとともに胎土分析を行ったが、試料の制約もあって、確実に有意な結果は得られなかった(第VII章第3節)。

ただし、胎土に含まれる砂粒の粒径をみると、居林遺跡や小牧南遺跡において肉眼観察で搬入品と判断したものは粗粒砂を多く含む傾向にある。そして、胎土中の碎屑物が占める割合も、15%前後以上の比較的高いもので占められる(第6表)。比較試料とした松阪市西肥留遺跡や鈴鹿市宮ノ前遺跡の分析結果とも齟齬はない。こうした点を積極的に評価すれば、居林遺跡や小牧南遺跡など朝明川流域の遺跡で出土したS字状口縁甕には、在地産の土器とは異なる特徴があるといえよう。むしろ、鈴鹿川流域以南

の伊勢地域中部で出土したS字状口縁甕との共通性が窺えるように思われる。

先にみた朝明川流域におけるS字状口縁甕の客体的な様相を加味すれば、弥生時代終末期~古墳時代前期初頭の当該地域では、S字状口縁甕の多くは他地域からの搬入品であったと考えられる。

S字状口縁甕の在地生産 一方で、居林遺跡から出土したS字状口縁甕には、形態や胎土等の特徴からみて、朝明川流域で在地生産された可能性が考えられるものも認められる。弥生時代終末期~古墳時代前期初頭におけるこうした個体の存在は、小牧南遺跡でも確認されており、従来製作地が限られるとみられていた古い段階のS字状口縁甕⁴⁾が、複数の地域で製作されていた可能性が考えられた。

居林遺跡で出土した在地産と思われるS字状口縁甕は、口縁端部が外方に引き出されて口縁部の断面形がS字状を呈するという基本的な特徴のほか、体部外面のハケの施し方などにも一般的なS字状口縁甕との共通性が見出されるものである。

しかしながら、詳細にみると口縁部の形態には違和感があり、口縁部外面の押引列点文が単なる列点文状となっている、頸部内面のハケが斜めに施されている、器壁が厚い、色調が黄褐色を呈し器壁内部の芯の部分も黒くなっていない、といった微妙な相違点が認められる。そして、形状や調整・文様の個体差が大きい。

今回の報告に際して、これらの在地産と考えられるS字状口縁甕についても、小牧南遺跡で確認されたものと合わせて胎土分析を行った(第VII章第3節)。やはり試料の問題があるものの、搬入品と考えられるものと比較すると、ある程度の傾向を見出すことが可能である。

まず、胎土に含まれる砂粒は、搬入品と考えられるものに比べると粗粒砂が少ない傾向にある。そして、胎土中の碎屑物が占める割合も15%前後以下となっており、やや低い(第6表)。したがって、形態的な特徴や胎土の肉眼観察によって搬入品と考えた一群と、在地産と考えた一群の間には、やはり一定の胎土における差異が存在する可能性が高いと思われる。こうした差異は、製作地ないしは製作集団の違いを反映しているとも考えられよう。

ただ、在地産と考えられるS字状口縁甕が、確実に朝明川流域で製作されたかについては、まだ資料不足の感がある。在地産の可能性が高い土器についても複数個体を分析に供したが、器種による差異なども考慮されるべきであり、在地産土器の胎土の特徴を明らかにするには至っていない。分析データからは、在地産と考えられるS字状口縁甕と、同じく在地産と考えられるほかの器種の土器との間に、胎土における顕著な差異を見出すことはできない、という見通しを示すとどまる。

在地産土器の胎土の特徴については、今後、各遺跡における胎土分析のデータをさらに蓄積し、検討していく必要があるが、居林遺跡や小牧南遺跡の遺物や胎土分析の結果からは、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の朝明川流域において、S字状口縁甕が搬入品の模倣といった形で製作されていた可能性は、十分に考えられる。

このように、朝明川流域などで早い段階からS字状口縁甕の製作が行われていたと想定するならば、広域的なS字状口縁甕の生産体制や流通についても、こうした在地生産を考慮しながら再検討していく必要があるかもしれない。また、S字状口縁甕以外の台付甕の脚台部の製作技法や、体部外面のハケの施し方など、S字状口縁甕の製作技法の影響が、在地の土器製作にどのように影響を及ぼしたのかといった点、そして、く字状口縁や受口状口縁の台付甕が主体を占める中で、なぜS字状口縁甕が模倣的に製作されたのかという点などについても、検討課題となるだろう。

(2) 台付甕と高坏の製作技法

居林遺跡で出土した土器から得られた情報の中で、その製作技法にかかるものとして、台付甕の脚台部と体部、高坏の脚部と坏部の接合部における基本的な製作技法についてまとめておきたい(第263図)。

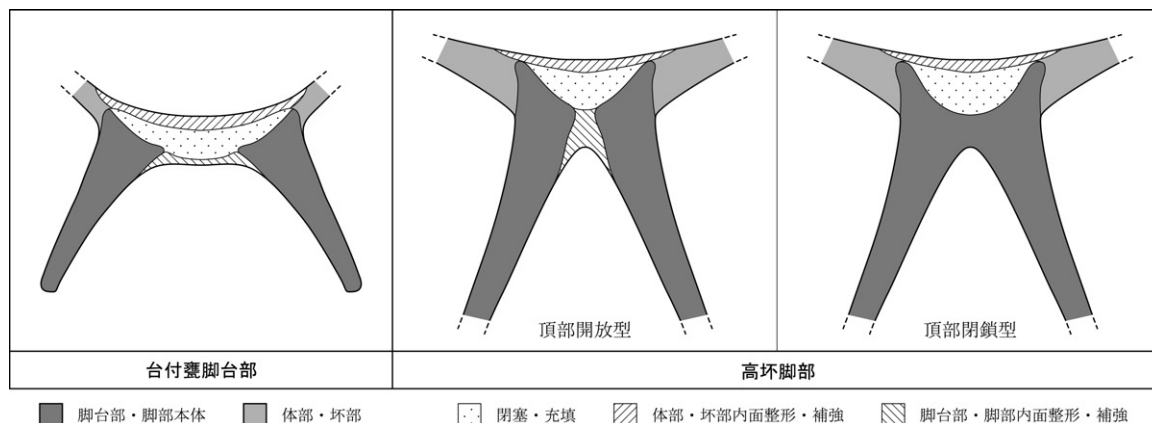
台付甕 台付甕において、確実に脚台部と体部が一体的に成形されているものは認められなかった。したがって、台付甕の製作に際しては、まず脚台部を成形し、次に体部を成形することになる。

台付甕の脚台部と体部の接合部については、まず筒状の脚台部本体を製作する。粘土接合痕が認められるものもあり、粘土紐を積み上げて、断面形が逆台形の底のない鉢状のものを製作し、それを倒立させて脚台部とした可能性が高い。

次に、円板充填状に粘土板を貼り付けて脚台部上面を閉塞する。その後、脚台部の上端縁部から体部を成形する。この2工程については、おそらく上面の閉塞が先と思われるが、粘土接合痕などから明確に体部成形との前後関係を判断できる資料がほとんどなく、体部成形が先行した可能性もある。

そして、最終的に底部内面に脚台部の上面から体部まで及ぶように薄く粘土を貼り付けて整形及び補強を行う。また、脚頂部にも同様に粘土を貼り付けるが、これについては省略している個体も多い。

高坏 高坏の脚部と坏部との接合部についても、基本的に台付甕の脚台部と体部との接合部と同様の製作技法が採用されている。



第263図 台付甕脚台部・高坏脚部の基本的な接合技法

ただし、高坏の場合は、ベースとなる脚部本体が筒状を呈する場合以外に、上部が最初から閉じられている場合があるため、前者を頂部開放型、後者を頂部閉鎖型として区別しておく。

基本となるのは頂部開放型である。台付甕の脚台部と同様に、まずメガホン状の脚部を成形する。次に、脚部上面に粘土塊を円板充填状に貼り付け、孔を閉塞する。そして、脚部上端縁部から坏部を成形する。この2工程については、おそらく脚部上面の閉塞が先と思われるが、台付甕と同じく粘土接合痕などから明確に体部成形との前後関係を判断できる資料が少なく、坏部の成形が先行した可能性もある。

そして、最終的に坏部中央内面に脚部の上面から坏部まで及ぶように薄く粘土を貼り付けて整形及び補強を行う。また、脚部内面にも同様に粘土を貼り付けるが、これについては省略している個体も多い。

一方、頂部閉鎖型では、まず脚部上面の凸レンズ状の凹みに粘土を充填して埋めている。これについては、頂部開放型と異なって閉塞という意味を持たず、なぜ脚部上面を大きく凹ませる必要があったのかは不明である。ただし、坏部の成形がこの粘土の充填より先であるとすれば、脚部上面を凹ませて縁部を突帯状にすることで、坏部の接合を強固に行うことが可能となると思われる。そのように考えると、台付甕・高坏両者とも、脚台部・脚部上面の閉塞と体部・坏部の成形の前後関係については、再度検討を行う必要性があろう。

脚部上面の凹みを充填した後は、坏部の成形、坏部中央内面への粘土の貼り付けなど、頂部開放型と同じ工程をたどる。ただし、脚部内面については脚部成形時に整形・調整が行われているため、改めて粘土を貼り付けることはない。

(3) 外来系土器について

居林遺跡においては、S字状口縁甕を除くと明らかに他地域から搬入された土器は少ない⁵⁾。模倣などと考えられるものや、胎土が在地のものとしては違和感があるものなどを含めたとしても⁶⁾、やはりそれほど多くないだろう。

少ないながらも認められる外来系土器には、東海地方東部～関東地方南部、尾張地域、近江地域、畿

内地域ないし伊賀地域との関連が考えられるものがある。

東海地方東部～関東地方南部 東海地方東部～関東地方南部との関係が窺われる土器には、肩部に端末結節縄文を施した壺の破片がある(1106・1107)。2点出土しているが、おそらく同一個体である。

端末結節縄文が施されていることから、東海地方東部や関東地方南部の土器の影響下に製作されたものであることは間違いないが、櫛描による波状文や直線文がともに施されている点は、それらの地域に一般的なものではない。胎土分析の結果も、他地域からの搬入品であることを積極的に示すものではなかった(第VII章第3節)。

こうしたことから、この土器は伊勢地域あるいはその周辺で、端末結節縄文を施した壺を模倣して製作されたものである可能性が高い。

尾張地域 尾張地域については、土器様式の様相が伊勢地域北部と共通する部分もあり、明確に搬入されたものを判別することは困難である。

ただし、壺に限れば、施文や胎土・色調などから、尾張地域から搬入された可能性があるものが複数認められる。

例えば、赤彩されたいわゆるパレススタイル壺の中には、ヘラ状工具を用いた施文や、白っぽい色調を呈し胎土が精良といった特徴が認められるものがある(2058)⁷⁾。こうした特徴は、居林遺跡出土の土器の中では異質なものであり、搬入品の可能性が高い。

近江地域 近江地域は、甕が受口状口縁甕で占められる地域で、この受口状口縁甕が他地域へと搬入されたり模倣されたりした場合には、外来系土器として判別しやすいことから、注目されてきた。ただし、伊勢地域では弥生時代中期以来、在地の土器様式の一部として受口状口縁甕が存在しており、受口状口縁甕のほとんどは在地で製作されたものである。

しかしながら、居林遺跡で出土した受口状口縁甕には、口縁部の形状や施文、胎土の特徴から、近江地域からの搬入品の可能性が高いものが散見される(808・1828など)。甕だけでなく、手焙形土器などにも近江地域から搬入されたものが含まれるかもしれない。

こうした近江地域からの搬入品と考えられる土器は一定の数が出土しており、居林遺跡出土の外来系土器のほとんどを、近江地域との関連で考えられるものが占めている。

また、時期的には、弥生時代後期中葉から古墳時代前期初頭に至るまで各時期に認められる。中でも、弥生時代後期後葉～終末期にかけての資料が多いようである。

畿内・伊賀地域 畿内・伊賀地域との関連が窺えるものとして、タタキ成形によって製作されたと思われるく字状口縁甕が挙げられる(1367)。

胎土などからは搬入品かどうかの判別は困難であり⁸⁾、伊勢地域ではタタキ成形のく字状口縁甕は甕全体の中でみれば少数派ではあるものの、弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭にかけて多数出土しているため、必ずしも畿内・伊賀地域と関連する土器とはできない。

ただ、居林遺跡では1点のみと非常に数が少なく、朝明川流域でも複数の遺跡から出土例があるものの、全体としては少数であるため、他地域との関連を示す土器とみることが許されよう。

外来系土器の出土状況をめぐって 以上のように、居林遺跡では地理的に近接し、古くから交流がある尾張地域と近江地域を除き、外来系土器は非常に少ない。出土した土器の総数からいっても、ごくわずかといいようである。

朝明川流域では、時期的に近い四日市市山奥遺跡や小牧南遺跡においても⁹⁾、やはり外来系土器は尾張・近江地域を除けばかなり少ないといえる。

一方で、四日市市久留倍遺跡においては、肩部に縄文を施したり、口縁端部を外方に折り返して肥厚させる壺など、東海地方東部～関東地方南部との関係が窺われる土器が複数個体出土している¹⁰⁾。また、口縁部内面に擬凹線文を施す高坏のような、美濃地域西部からの搬入品と考えられる土器も認められる。尾張・近江・畿内・伊賀地域などとの関連が窺われる土器も複数出土しており、居林遺跡や山奥遺跡、小牧南遺跡の様相と比較すると、かなり異なる様相を示しているといえるだろう。

こうしたことから、久留倍遺跡が遠隔地を含む地域間交流の中心的役割を担った集落であると考え

ることができるが、そう考えた場合に問題となるのは、鉄製品の出土状況である。

外来系土器が少ない山奥遺跡では、弥生時代後期後葉～終末期の鉄製品が多数出土している。また、居林遺跡でも鉈や鎌など弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉と考えられる鉄製品が出土しており、小牧南遺跡でも古墳時代前期初頭～前期前葉の小型鉄製品が数点出土している。それに対して、久留倍遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の鉄製品は確実には出土していない。

こうしたことから、地域間交流の中心となった集落に、必ずしも鉄製品が集中的に保有されなかった可能性が窺われる。居林遺跡の今回の調査成果を含め、外来系土器や鉄製品の様相が明らかになってきた朝明川流域において、今後、こうした地域間交流と物流の関係について、さらなる検討が必要だろう¹¹⁾。

註

- 1) S字甕胎土研究会1998「S字甕の混和材を考える」『考古学フォーラム』9 考古学フォーラム
- 2) 三重県埋蔵文化財センター2021『小牧南遺跡(第2・3次)発掘調査報告』
- 3) 第262図の作成にあたっては、口縁部が遺存するものの個体数をカウントした。別器種の可能性があるものや、同一個体の可能性があるものについては除外した。
- 4) 赤塚次郎による分類のA類に相当する。財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』
- 5) 本報告に際して、第2～4次調査で出土した土器の破片をすべて確認し、外来系土器の可能性のあるものは、図化できる場合は小片であっても積極的に抽出し、掲載している。
- 6) 形態的特徴からは外来系土器とは判断できないが、胎土に違和感があるものについても、文章中や、出土遺物一覧表(一覧表・写真図版編第7表)の備考欄に示している。
- 7) 2058については胎土分析を行っている。明確に搬入品とは判断できなかったが、かなり精良な胎土が使用されていると思われる(第VII章第3節)。
- 8) 胎土分析を行ったが、搬入品とは判断できなかった(第VII章第3節)。
- 9) 四日市市教育委員会2003『山奥遺跡I』、四日市市教育委員会2004『山奥遺跡II』、三重県埋蔵文化財センター2021

第4節 水銀朱関連資料の評価

（1）居林遺跡出土の水銀朱関連資料

水銀朱関連資料の特徴 居林遺跡の調査において出土した土器には、赤色顔料が塗布されていたり、あるいは付着しているものが認められた。それらについては蛍光X線分析を実施し、赤色顔料の種類の手当を行った（第VII章第4節）。

その結果、内面に水銀朱が付着した土器が、4点確認できた。有稜高坏1点（1099）、椀形高坏1点（1843）、鉢2点（554・735）である。

これらについては、第IV章第2節で個別に報告を行ったが、このうち鉢2点には外面にススの付着が確認でき、水銀朱が内面のヒビや凹みに染み込むように付着することから、いわゆる内面朱付着土器と考えられた。有稜高坏についても、水銀朱の付着状況からはその可能性が考えられるが、風化のためススの付着など被熱痕跡は確認できなかった。

残りの椀形高坏については、内面に帯状に貼り付くように水銀朱が付着し、外面に被熱痕跡は認められない。この個体については、水銀朱の容器もしくはパレットとして用いられたものと考えられる。

用途と数量 居林遺跡においては、出土した土器の破片のほとんどを確認したが、内面に水銀朱が付着していることが確認できたものは、上記の4点のみであった。ごく微量のみ付着したものは見逃している可能性もあるが、本報告に掲載した個体については、図化中にさらに精査しているため、少なくとも図化した個体の中で、肉眼で視認可能な程度に水銀朱が付着している個体は、4点から大きく増えることはない。また、集落域のかなりの部分を発掘調査していると思われるため、未調査範囲を含めても、倍以上に増える可能性は低いだろう。

このうち内面朱付着土器が2ないし3点を占めるが、内面朱付着土器には用途について様々な議論がある¹⁾。しかしながら、想定されるいくつかの用途に対して、実際の内面朱付着土器の出土数はかなり少ない印象を受ける。

実数で見れば、すべて弥生時代終末期～古墳時代前期初頭までの間に位置づけられるとしても、100年ほどある時間幅の中で3点のみという数は、日常的に使用されていたとはいえない数である。

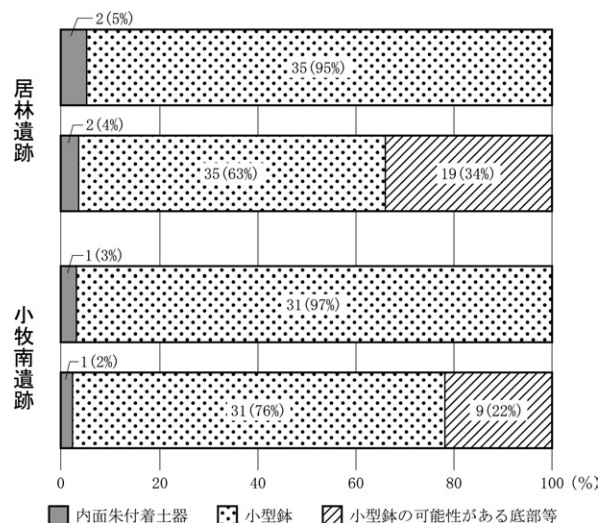
同じく朝明川流域の四日市市小牧南遺跡においても、古墳時代前期初頭を通じて存続した集落の大部分を調査したにも関わらず、やはり内面朱付着土器は1点のみしか出土していない²⁾。

同じ土器を複数回使用していたとも考えられるが、554については内面があまり摩耗しておらず、ススが薄く付着するという被熱状況からみても、複数回の使用は想定しがたい。内面朱付着土器は、1回の使用で廃棄されたとみるべきだろう。

こうしたことからみて、内面朱付着土器の用途としては、非日常的な、ごく限られた場面において水銀朱を消費するようなものが想定される。

数量的推測 出土数からの推測は、遺跡の調査面積等にも影響されるため、居林遺跡において内面朱付着土器がどの程度の数量的存在であったか、もう一つ別の方法での試算を行ってみたい。

まず、前提条件として、居林遺跡では本報告に際して径が復元できる程度に口縁部ないし底部が遺存している土器については、努めて図化を行い、実測



第264図 内面朱付着土器の割合

図を掲載した（第Ⅲ章第2節）。したがって、今回報告を行った土器の個体数を用いた試算は、居林遺跡における実態に比較的近いと思われる。

これを踏まえた上で、大型で細片化しやすく、脚部からは椀形高坏と区別しにくいなど、個体数のカウントに不利な条件が多い有稜高坏は除き、口縁部もしくは底部が遺存しやすく、内面朱附着土器としても一般的に用いられる鉢を対象として、数量的推測を試みる。

さて、本報告に図化して掲載した弥生時代後期～古墳時代前期の土器の中で、小型の鉢とほぼ判断できる個体は、内面朱附着土器2点を除くと35点ある。また、壺などとしたものの、底部片で小型の鉢の可能性も否定できないものが19点ある。これによって計算すると、小型鉢に占める内面朱附着土器の割合は5%で、小型鉢の可能性のあるものを加えると4%である（第264図）。つまり、居林遺跡では、小型鉢の中でごくわずかなものが内面朱附着土器として用いられたことが分かる。

時期別にみた場合は、それぞれの時期によって異なる結果が出る可能性もあるが、古墳時代前期初頭にほぼ限られる小牧南遺跡についても同様の条件下で小型鉢に占める内面朱附着土器の割合を示すと、小型鉢全体の3%、小型鉢の可能性のあるものを加えた場合2%と、居林遺跡と類似する結果となる（第264図）。

したがって、やはり小型鉢の中でもごくわずかなものが内面朱附着土器として使用されたに過ぎず、

集落における内面朱附着土器の数量は、かなり少ないものであったことが推測できよう。

小型鉢のうち5%という数値を基に推測するならば、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の集落の存続期間は短く見積もっても堅穴建物の建て替え等からみて50年以上はあったと考えられ、内面朱附着土器が1年に1回使用されるとすれば50個体はあったことになる。そこから小型鉢全体の数量を逆算すれば、1000個体となろう。これは、出土した小型鉢の数とはかけ離れており、実際の出土数を鑑みれば、内面朱附着土器の使用頻度は数年に1回あるいは10数年に1回程度となり、明らかに使用が継続的に行われていなかったことが窺われる³⁾。

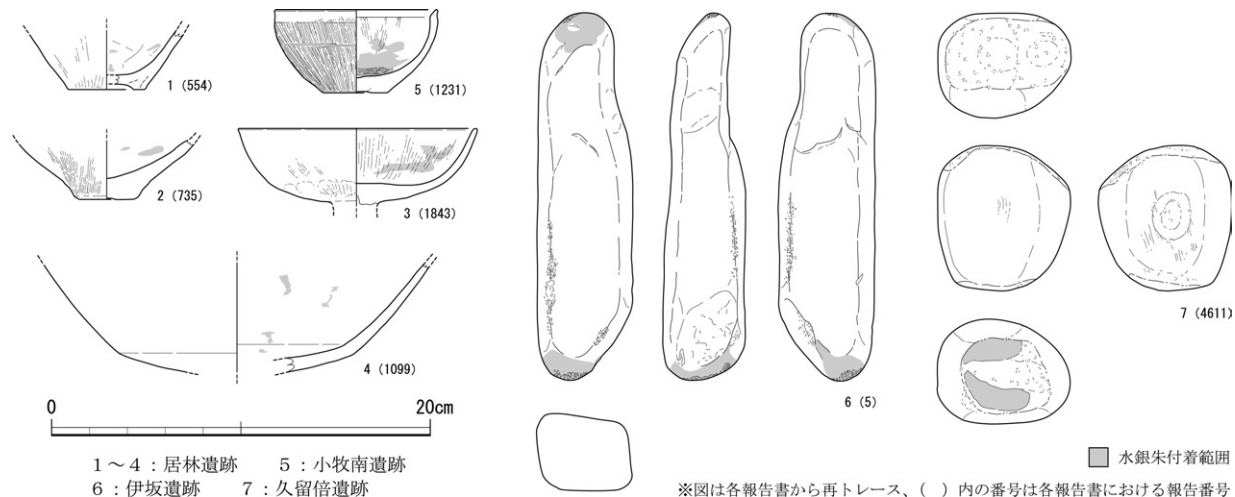
（2）朝明川流域の水銀朱関連遺物

朝明川流域では、居林遺跡以外でも弥生・古墳時代の水銀朱が付着した石杵や土器がいくつか出土している（第265図）。

石杵 四日市市伊坂遺跡では、古墳時代前期中葉の棒状の石杵が出土している⁴⁾。棒状の礫をそのまま利用したもので、作業面は明瞭ではなく、両端にわずかに敲打痕が認められ、水銀朱が付着する。

四日市市久留倍遺跡でも円礫状の石杵が出土しており、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭のものと考えられる⁵⁾。不明瞭ながら平坦な作業面が認められ、そこに水銀朱と考えられる赤色顔料が付着する。

土器 小牧南遺跡で、古墳時代前期初頭の内面朱附着土器が1点出土している。小型の鉢で、内面には



第265図 朝明川流域出土水銀朱関連遺物（1/4）

水銀朱が付着し、一部は器面のヒビに染み込むような様子を示す。外面にはススが付着している。

なお、赤彩が施されている土器は複数の遺跡で多数出土しており、用いられた赤色顔料の分析も四日市市山奥遺跡や小牧南遺跡で行われているが⁶⁾、水銀朱が用いられているものは確認できない。縄文時代まで遡っても、小牧南遺跡で水銀朱が塗布された可能性が高い小片が1点認められるのみである。

時期的動向 以上のように、朝明川流域では水銀朱関連遺物の出土例が次第に蓄積されてきているが、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭のもものが中心である。弥生時代前期～後期及び、古墳時代前期後葉以降には、今のところ確実なものは認められず、時期的な増減があると考えられる。

(3) 水銀朱の流通・消費の動向

水銀朱関連遺物の出土状況からは、朝明川流域における水銀朱の流通・消費にかかる動向を窺うことができる。

使用の活発化 縄文時代の様相には不明な部分があるが、少なくとも水銀朱が活発に使用されていた痕跡は認められない。小牧南遺跡や中野山遺跡で縄文時代中期後葉の遺物がかかり出土しているが、磨石や石皿・台石で水銀朱など赤色顔料が付着したものは確認されていない。

弥生時代前期～後期にかけても水銀朱の使用に関わる遺物は確認できない。しかしながら、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭には、水銀朱関連遺物が複数認められるようになる。主に石杵と内面朱付着土器であるが、これらは水銀朱の精製というよりは何らかの形での消費に伴う遺物とみられる。特に内面朱付着土器は、非日常的な用途が想定され、儀礼等において使用された可能性が考えうる。

こうした弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の水銀朱関連遺物の増加は、朝明川流域だけに限らない。伊勢地域全体で同様の動向が確認でき、さらに近畿地方や美濃・尾張・三河地域などでも同様の動向が認められる。したがって、朝明川流域における水銀朱の使用・消費の活発化は、こうした広域における動向と軌を一にしたものと考えられる。

水銀朱の流通 水銀朱は鉱物の辰砂を原料とするた

め、朝明川流域では、その入手は他地域からの流通に依存することになる⁷⁾。伊勢地域では多気町や松阪市が有数の産出地で、それらの地域から入手していたものと推測される。

弥生時代終末期～古墳時代前期初頭に水銀朱の消費にかかる遺物が増加することからは、この時期に朝明川流域における水銀朱の入手量が増加したことが窺われる。つまり、地域外からの物資流通が活発化したものと考えられよう。

そして、朝明川流域単位でみた場合、特定の集落のみで水銀朱関連遺物が出土するのではなく、複数の集落において出土している点は注意される。

このことは、ほかの地域集団を通じてしか入手できない、ある意味で貴重財ともいえる水銀朱を、特定の集落・集団が独占的に入手・消費していたのではない可能性を示す。地域内での分配・流通が行われていたか、あるいは各集落が独自に外部との交流により入手していたと考えられる。

ただし、外来系土器の出土状況をみる限り、他地域との交流については久留倍遺跡が中心的位置にあったと思われ、居林遺跡などほかの集落が活発に他地域との交流を行っていた形跡は認めがたい。したがって、久留倍遺跡のような中心的な集落がまず他地域の集団を通じて水銀朱を入手し、それをほかの集落へと流通させていた可能性が考えられるだろう。これは、前節で触れた鉄製品の保有に関する様相とも矛盾しない。

註

- 1) 大きく分けて、神仙思想と関わる仙薬の調合に用いたとする説、水銀朱の精製に用いたとする説、何らかの儀礼に際して用いたとする説などがある。本田光子1993「野方中原遺跡出土の土器に付着した赤色顔料について」『野方久保遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会、市毛勲1998『新版 朱の考古学』雄山閣出版、贅元洋2005「朱関連遺物」『愛知県史』資料編3考古3古墳 愛知県
- 2) 三重県埋蔵文化財センター2021『小牧南遺跡(第2・3次)発掘調査報告』
- 3) 短期間あるいは同時に数個体で使用された可能性も当然あろう。ただ、その場合には、それにかかる行為が長期間にわたって継行的に行われるものではなかったことがより

明確といえる。

- 4) 三重県埋蔵文化財センター2011『伊坂窯跡・伊坂遺跡(第5次)発掘調査報告』
- 5) 四日市市教育委員会2013『久留信遺跡5』
- 6) 四日市市教育委員会2004『山奥遺跡II』

第5節 弥生時代後期～古墳時代前期の台石の特徴

居林遺跡で検出された堅穴建物からは、大型の礫を用いた台石が複数出土している。こうした台石は、これまでも弥生・古墳時代の集落において出土しているが、居林遺跡についてはその出土数がやや多いようにも感じられる。

弥生時代以降にも、縄文時代の無縁石皿と呼ばれるような石器に類する台石の存在は知られていたが、それらについての研究は積極的に行われているとはいえない。伊勢地域においても、これまで弥生・古墳時代の台石について特に注意が払われたことはなく、基本的な特徴についても明確ではない。

そのため、報告時に砥石と混同されたり、あるいは発掘調査に際して遺物として認識されず回収されないケースも多々あるだろう。そこで、居林遺跡で出土した弥生時代後期～古墳時代前期の台石について整理し、当該期の台石の特徴や、検討課題について簡単に提示しておく。

(1) 特徴

形状・加工 居林遺跡出土の台石は、ほぼ元の礫の形状を生かしており、そのため形や大きさは、元の礫の形・大きさに規定されている。

いずれの台石にも、打割や剥離、敲打等による大きな成形は認められない。ただし、一般的に平坦な面を有し、それが使用面となっている。

この使用面は、多くは原材に元々存在する面を利用しているため、かなり平坦なもの、わずかに凹むもの、若干凸面となるものなど多様である。ただし、一部には使用面がほかの部位よりも著しく平坦で、全体的に摩滅しているものが認められる。そうしたものについては、使用面を敲打等によって整え、研磨によって平滑に仕上げている可能性もある。

多くの台石では、平坦面の広さや平滑さなどからみて主体的に使用されたと考えられる、主要使用面

- 7) 四日市市水沢町などでも辰砂が産出したとされるが、実態は不明で、現状では弥生・古墳時代において採取されていた可能性は低いと思われる。磯部克1990『三重県における鉾山遺跡の地学的研究』平成元年度文部省科学研究費補助金奨励研究(B)研究成果報告書

が1面存在する。そして、その反対側となる裏面や、側面など、複数の面を使用面としていることも多い。

大きさについては、便宜的に分けると長径30cm以上の大型のものと、長径15～30cmの中型のもの、長径15cm以下の小型のものがある。ただし、ほとんどは大・中型のもので占められる。大型のものもかなりあり、重量的にも頻繁に持ち運んで使用するというよりは、建物内の所定の位置に据え付けての使用が想定される。SH272で据え付けた状態で検出されたものがあることも、この想定を裏付ける。

石材 石材については、24点中14点が砂岩で、半数以上を占める。用いられた砂岩は、いずれもかなり硬質かつ緻密であるが、目は比較的粗く、径1cmを超えるような礫を少量斑状に含む。朝明川の河川敷などで容易に採取可能なものであるが、この石材を用いる志向性が強かったと思われる。

砂岩以外にはやや硬質で緻密なホルンフェルスのもが目立つ。それ以外には、溶結凝灰岩や流紋岩、花崗岩とみられるものがある。いずれも段丘礫として地山に含まれているほか、朝明川や員弁川の河川敷でも転石として採取可能である。

使用する石材については、おそらく用途と関係すると思われる一定の志向があったが、近隣で容易に入手できる礫の中から、適したものを選択していたことが分かる。

使用痕 台石の使用面に残る使用痕には、いくつかの種類のもが認められる。それらについて、肉眼観察を基に以下のように分類しておく。

①摩滅

- I) うっすら光沢を帯びるほど非常に平滑
- II) 周囲よりも明瞭に平滑
- III) 周囲に比べてやや平滑

②擦痕・線状痕

- A) 不明瞭でうっすらとした擦痕

第9表 台石の使用状況

報告 No.	出土遺構	石材	大きさ	使用面	使用痕									備考		
					摩滅			擦痕・線状痕				敲打痕				
					I	II	III	A	B	C	D	a	b		c	
49	SH201	砂岩	中型?	主要面	●			○						○		
				裏面	●									●		
50	SH201	砂岩	大型			●		○								
51	SH201	ホルンフェルス	中型		●			○								●
210	SH202	砂岩	中型?	主要面	●				●							砥石としても使用?
				側面	●				●							
234	SH203	砂岩	中型	主要面	●				●							
				裏面			○		●	●						
235	SH203床面	砂岩	中型	主要面	●				○							
				裏面		●		○					○			
367	SH205	ホルンフェルス	中型				●		●							
536	SH230貯蔵穴	ホルンフェルス	中型?				●		●	●						砥石?
537	SH230貯蔵穴	砂岩	中型	主要面	●			○								
				側面A	●			●								砥石としても使用?
				側面B		●		○								
561	SH234	ホルンフェルス?	中型						●	○						
581	SH236	砂岩	大型	主要面	●					○						
				裏面		●			●	●					●	
582	SH239貯蔵穴	砂岩	小型			●		●								磨石?
586	SH242貯蔵穴	砂岩	大型?		●			○						●		
592	SH242	流紋岩?	大型	主要面											●	深い凹みあり
				側面					●	●						
795	SH272	溶結凝灰岩	大型													○
812	SH303貯蔵穴	砂岩	中型	主要面	●			●				●				
				裏面	●			○								
886	SH318	ホルンフェルス	小型		●			○		○						
1330	SH431	砂岩	大型	主要面	●			○						●		
				裏面		●		●							○	
				側面A		●		●						●		
				側面B			○						○			一部のみ遺存
1511	SH451	砂岩	中型?	主要面	●				○	○						
				裏面			●	○		●						
1680	SH459	花崗岩?	中型		●			●								砥石としても使用?
1702	SH462壁柱穴	砂岩	不明				○									小片
1806	SH464	ホルンフェルス	大型	主要面	●				●	●					●	
				側面	●				●							
1841	SH467	ホルンフェルス	中型		●			●								
2051	SH488貯蔵穴	砂岩	大型?	主要面	●			●					○			
				裏面	●			●					○			

○：明確ではないもの ●明確なもの ※摩滅については主体的なものを示した

B) 明瞭な擦痕

C) 引っ搔いたような傷状の線状痕

D) やや幅広の浅い溝状を呈する線状痕

③敲打痕

a) ごく不明瞭な敲打痕が一部に存在

b) 少数の明瞭な敲打痕が散在

c) 明瞭な敲打痕が一定範囲に集中

以上の分類に基づいて、使用痕の特徴についてみていきたい(第9表)。

まず、大型・中型を問わず、使用痕の主体となるのは摩滅Iである。つまり、ほとんどの台石の使用面には顕著な摩滅が認められ、これが基本的特徴といえるだろう。

ただし、2面以上の使用面が存在する場合、主要な使用面よりも、副次的な使用面の方が摩滅の程度

が弱い場合が多い。

摩滅の範囲については、使用面となる平坦面の一部に限られるものが通有である。ただし、一部には全面にわたって摩滅Iが認められるようなものも存在する(537側面Aなど)。

擦痕・線状痕については、擦痕が基本で、中でも擦痕・線状痕Aが目立つ。擦痕・線状痕Aでも、さらに不明瞭で明確に擦痕と断定できないものが多い。そして、擦痕・線状痕Bが認められる場合、それは摩滅Iと共存しない傾向がある。つまり、顕著な摩滅が認められる主要な使用面には不明瞭な擦痕が伴うことが多く、弱い摩滅が主体となる副次的な使用面には比較的明瞭な擦痕が伴うことが多いといえる。

また、線状痕がみられるものは半数以下である。

特に、擦痕・線状痕Dはほぼ認められない。擦痕・線状痕Cについては擦痕・線状痕Bと共存する傾向が強く、やはり摩滅が弱い副次的な使用面に伴うとみられる。

敲打痕は、明瞭に確認できるものは少ない。敲打痕bは摩滅Iが認められる使用面でもみられるが、いずれの資料においてもごくわずかな敲打痕が散在するのみで、摩滅との新旧関係についても不明なものが多い。

一方、敲打痕cには特殊な痕跡が含まれる。例えば、581の裏面の敲打痕は、先端の尖った硬い工具で連続的に敲打を加えたような痕跡である。また、1806の場合は、摩滅Iを伴う主要使用面の中央に、浅い凹みを作り出すように一定の範囲に集中的に敲打が加えられている。台石の使用痕としては、イレギュラーなものとも思われる。

(2) 検討課題

居林遺跡の台石にみられる特徴からは、弥生時代後期～古墳時代前期の台石について考える上で、いくつかの検討課題を見出すことができる。

磨石の存在 居林遺跡の調査では、台石の出土数に比べて磨石や敲石の出土が非常に少ない。台石の使用痕において摩滅I類が卓越し、敲打痕がほとんど認められない点からみれば、敲石よりも磨石と組み合わせての使用が想定されるが、実際には確実に磨石と考えられるものは出土していない。台石の摩滅状況からは、磨石と組み合わせて使用した場合、磨石側にも顕著な摩滅が生じると思われ、そうした磨石を調査時にすべて見落とししたとは考えにくい¹⁾。

こうしたことから、居林遺跡で出土した台石は、磨石と組み合わせて使用されるものではなかった可能性が浮上する。

これについては、台石の使用面の形態からも補強されよう。先に述べたように、居林遺跡出土の台石には円礫をそのまま利用したものが多く、使用面も完全に平坦となっていないのがみられる。そして、中型のものなどは使用面が狭い。こうした点は、磨石を用いた何らかの粉体の磨り潰し作業には適さないと考えられる²⁾。

ただし、磨石が用いられなかったと考えると、使

用痕の主体となる顕著な摩滅が、どのようにして生じたかが問題となる。木槌や横槌のような木製品を用いた敲打によっても平滑面が形成される可能性も指摘されているが³⁾、何らかの道具と組み合わせて使用されるものであったのか、そして、どのような道具と組み合わせて使用したのかについて、検討が必要と思われる。これについては、発掘調査において積極的に磨石と考えられる礫等を回収し、磨石の存在についてさらに検証することも重要であろう。

用途 用途については、主要な使用痕が顕著な摩滅であることから、硬いものを叩き潰すような作業にはほとんど用いられなかったことは確実だろう。

これまで、弥生・古墳時代の台石については穀物・堅果類の製粉や、赤色顔料の微粉化などが想定されてきたが⁴⁾、磨石が僅少な点や、擦痕・線状痕B・C・Dが主要使用面にあまり伴わない点、明確に赤色顔料が付着するものが認められない点などからは⁵⁾、こうしたものを磨り潰すような作業が主体となっていたとも考えにくい。もし、何かを磨り潰す作業を行っていたとすれば、対象物は磨石を用いなくても磨り潰せる比較的軟らかいもので、磨り潰す量も少量であったと想定することになるだろう。

また、木製品による敲打などでも平滑面が形成されるとすれば、皮なめしや紡織に関連する作業なども考えうる。木製品など、軟質なもの研磨もありうるだろう。いずれにしても、多数の堅穴建物から台石が出土していることから、建物内における生活の中で日常的に使用するような用途であったことが窺われる。

一方で、多くの台石で副次的な使用面が確認でき、主要な使用面と使用痕の様相における差異が認められることから、一つの台石が複数の用途に使用された可能性も考えられる。

例えば、全面にわたって摩滅Iが認められる537側面Aなどは、砥石として使用された可能性も考えられる。また、592では摩滅が認められず、擦痕・線状痕B・Cが顕著に認められる使用面と、深い凹みと敲打痕が認められる使用面があるが、両者が同じ用途に使用されたとは考えられない。

こうしたことからみると、居林遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の台石は、一定の用途を主眼とし

ながらも、複数の用途を兼ね備えたものであったと考えた方がよいと思われる。また、破損後の転用なども考慮に入れておかなければならない。

当該期の台石については不明な点が多いが、その用途の解明は、集落内での生産活動や、生活様式等について考える上で重要である。こうした使用痕等の分析や使用実験、または残留デンプン粒の分析など自然科学的な分析などによって、検討を行っていく必要がある。

集落地と出土数 居林遺跡では、20点以上の台石が出土しており、さらに多くの台石が存在していた可能性も高い。周辺の同時期の遺跡でも、台石は多数出土している。

一方、同時期の遺跡でも、沖積地に立地する遺跡では、台石の出土数が少ないようにも思われる。

例を挙げれば、雲出川流域の津市雲出島貫遺跡や松阪市西肥留遺跡では、検出された竪穴建物数に比べると、大型の台石は少ない印象を受ける⁶⁾。その一方で、磨石や敲石、砥石の出土数は居林遺跡よりもかなり多い。また、尾張平野低地部の愛知県清須市廻間遺跡や一宮市山中遺跡でも、台石はほとんど報告されていない⁷⁾。

もちろん、これは報告書に掲載された遺物からの判断によるため、今後の検証が必要である。しかしながら、もし、こうした遺跡間の差が存在し、それが立地とも関係するのであれば、素材礫の入手難易度だけでなく、生業や食生活の差異などに関連する

可能性もあり、先の用途の問題とも大きく関わる問題といえる。一つの検討課題として示しておきたい。

註

- 1) 近隣の四日市市小牧南遺跡でも当該期のものと思われる台石が複数出土しているが、それに対して磨石の出土数は少ないように思われる。ただし、縄文時代の集落が重複しており、出土遺物の時期を正確に判断することが困難であった。三重県埋蔵文化財センター2021『小牧南遺跡（第2・3次）発掘調査報告』
- 2) 作業面が凸面であったり、狭かったりすると、磨り潰した粉体がこぼれ落ちてしまうため、磨石を用いた製粉作業には不適と考えられる。桐山秀穂2004『縄文・弥生時代における石製製粉具の研究—中国・四国・近畿地方を中心として—』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（若手研究（B））研究成果報告書
- 3) 前掲註2文献
- 4) 八王子市柵田遺跡調査会1981『神谷原Ⅰ』、浜田晋介1992『弥生時代の石皿と磨石—南関東地域の事例から—』『考古論叢神奈川』第1集 神奈川県考古学会
- 5) 20倍のルーペでほぼ全ての台石の使用面を観察したが、確実に赤色顔料が付着したものは確認できなかった。
- 6) 三重県埋蔵文化財センター2001『嶋坂Ⅲ』、三重県埋蔵文化財センター2008『西肥留遺跡発掘調査報告（第1・2・3・5次）』
- 7) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』、財団法人愛知県埋蔵文化財センター1992『山中遺跡』

第6節 北山城跡の調査成果

（1）北山城跡に関連する遺構

今回の北山城跡の調査では、城域の一部を調査したにとどまる。そのため、北山城跡に関連する遺構も少数が検出されたのみである。

検出された遺構は、以下の通りである。

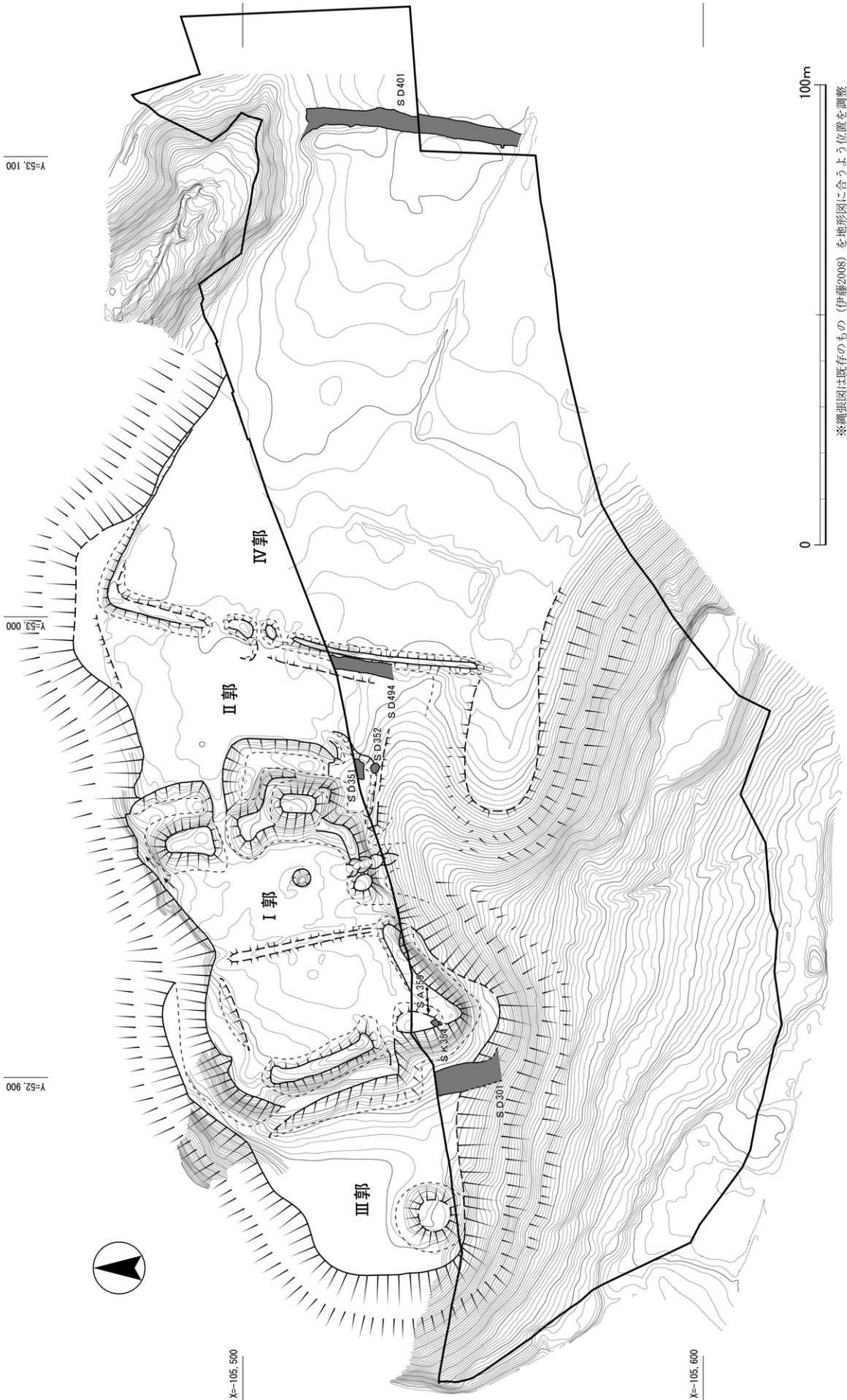
- ①柱列（S A359）
- ②土坑（S K354）
- ③堀などと考えられるもの（S D301・351・352・401・494）
- ④土塁（Ⅱ郭東側土塁、Ⅰ郭西・南側土塁）
- ⑤盛土（Ⅰ郭）

第266図に、これらの遺構のうち、①～③の位置を示した。

（2）既存の調査成果との比較

検出された遺構が、北山城跡のどのような構造物に該当するのか、既存の縄張図との対比によってみたい¹⁾。

I郭及びその周辺 柱列S A359と土坑S K354は、主郭であるⅠ郭内の南端に位置する。Ⅰ郭の南端部で土塁が一部途切れている箇所位置するものと思われるが、S K354については土塁との位置関係が微妙で、土塁下に位置した可能性もある。



※細部図は既存のもの（伊藤2008）を地形図に合うよう位置を調整

第266図 北山城跡関連遺構の位置 (1/1, 200)

S D301は、I郭の西裾に位置する。III郭からI郭南側へと南側帯曲輪が続いており、それと一部重複するようにも見受けられるが、発掘調査の成果を踏まえれば、南側帯曲輪とIII郭との間に位置すると考えられる。

S D351・352は不整形な土坑状を呈するが、堀の可能性があるため、溝として把握したものである。位置的には、I郭東側の土塁の裾部に設けられた堀の南端部にあたると思われる。縄張図では堀がやや広く浅くなり、東側にII郭へと上がる通路の存在が想定されているが、発掘調査によってそうした遺構を明瞭に検出することはできなかった。ただし、S D351は位置的にみて、堀底からII郭へ上る通路の末端部の可能性も考えうる。

IV郭及びその周辺 S D494は、II郭とIV郭の間を画する堀と考えられ、縄張図においてもその存在が明瞭に捉えられている。そして、その東側にはII・IV郭間を画する土塁が存在する。

S D401は、IV郭の東側を画する堀と考えられる。これまでの縄張図では示されておらず、地表面では痕跡がほとんど確認できなかったと思われる。ただし、その北端部西側には、これまでに土塁の可能性のあるものとして縄張図に示されてきたわずかな高まりが存在している。この高まりについては、今回の調査では土塁の可能性は低いと判断したが、土塁であることを完全に否定する根拠にも乏しく、依然として土塁が存在した可能性は残る。

(3) 調査成果からみた北山城跡の構造

以上のような発掘調査の成果及び既存の縄張図との対比などから、北山城跡の構造について新たに明らかになった点が、いくつかある。

I郭の土塁の間断 まず、既存の縄張図では、I郭南端の突出部において、西側土塁と南側土塁の間で土塁が途切れているような状況が捉えられていた。防御性の面から、こうした状況には疑問が持たれるところであるが、発掘調査によってもこの途切れた部分に土塁の遺存は確認できなかった。しかしながら、柱列S A359がこの場所に位置しており、なおかつ土塁の開口部を塞ぐようになっていることから、やはりこの箇所土塁が途切れており、その代

わりに柵を設置して防御としていた可能性が窺われる。あるいは、見張り用の櫓を設置するための場所で、S A359は櫓の一部であったとも考えうる。

帯曲輪周辺の構造 I郭の南側に沿って、帯曲輪とみられる狭い平坦面が存在していることは縄張図で示されていたが、発掘調査によって、地山を整形して造り出されていることが確認できた。I郭南側へ回り込むための通路等として、南側帯曲輪が設けられていたと思われる。

そして、この帯曲輪とIII郭との間にS D301が掘り込まれている。S D301は比較的浅く幅広の溝で、防御や区画といった機能は考えにくい。ただ、この溝が存在することによって、III郭からI郭南側へ至るために、まずS D301の北側をI郭へ向かって直進し、その後右折してS D301とI郭の間を通ることになる。これを積極的に評価すれば、南側帯曲輪の構造に若干の複雑性が付与されるとの想定はできようか。

I郭東側の堀 I郭東側の土塁の裾部に設けられた堀は、南端部の痕跡がわずかに検出されたのみであった。かなり流失している可能性もあるが、縄張図で示されているよりも、簡易なものであったとも考えられる。

しかしながら、S D351が検出されたことから、堀底からII郭へ上がる通路状のものは存在している可能性は残る。調査に際して作成した地形測量図においても、この通路状のもの存在を推定する根拠となった地表面の谷状の凹みは明確に表れているが、これが北山城跡に関連する遺構の痕跡である蓋然性が高まったといえよう。

IV郭の性格と城域 これまで、IV郭については北山城跡の曲輪として捉えられるか定かではなく、見解が分かれる部分もあった。

今回の調査でも、IV郭内からは鎌倉～室町時代のものと推定される土坑S K412が検出されたのみで、確実に室町時代後期に属する遺構は全く検出されなかった。

縄張図でも想定されていたII・IV郭間の堀と土塁は、今回の調査でもS D494とそれに伴う土塁として確認されたが、遺物は全く出土せず、IV郭東側を画すると思われるS D401においても弥生～古墳時

代の土器がわずかに出土したのみであった。

こうしたことから、発掘調査によってもIV郭を北山城跡の曲輪と確定するための確実な根拠を示すことはできなかったが、逆にSD401・494が近世以降に下りうる根拠も確認できなかった。これらの溝は、北から入り込む谷によって尾根幅が狭まっている部分に尾根を切断するように掘り込まれていること、SD401には中野山遺跡で検出された部分に土橋状の掘り残し箇所が認められること、近世の区画溝にしては幅広で底が平坦に整えられていることなどから、北山城跡に伴う堀とみるのが妥当だろう。

したがって、北山城跡はIV郭までが城域で、城の東端をSD401で画していると考えられる。

その場合、IV郭内に遺構が存在しないことが問題となろう。ただ、これまで発掘調査が行われた中世城館において、これに類する事例も確認されている。例えば、松阪市天花寺城跡においては、中心となる曲輪1・2の南側に、丘陵尾根を堀によって切断するように区画した複数の曲輪（曲輪3～5）が連なるが、これらの曲輪内部からは遺構・遺物ともにほとんど検出されていない。また、曲輪内に古墳群が

存在するが、墳丘が遺存するものも多く、曲輪内が完全に整地されていないことを示す²⁾。小規模な中世城館において、建物の構築どころか整地も十分に行われていないような空間を曲輪として付属させる場合があることは、こうした事例からも窺うことができる。

IV郭など、単なる空間を確保したような曲輪がどのような機能・性格を有したのかについては、さらに事例の収集と検討が必要と思われる。特に、実際に戦闘が行われたことが文献記録等から推測される城館跡において、こうした空間が存在するかどうかは、一つの検討課題となろう。

註

1) 対比のため第266図に示した縄張図は、以下の文献に掲載されたものを再トレースして使用したが、今回作成した地形測量図と位置関係が整合するよう部分的に変更を加えている。

伊藤徳也2008『再発見・北伊勢の城』 私家版

2) 三重県埋蔵文化財センター2005『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VII』

第7節 結語

近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）の建設に際しては、朝日丘陵西側の広い範囲で発掘調査を行うこととなった。それによって、丘陵上に展開する様々な時代の集落の様相を明確にすることができたといえる。

そうした発掘調査範囲の一角に位置する居林遺跡では、弥生時代後期中葉～古墳時代前期中葉にかけて連綿と営まれた集落のかなりの部分が記録保存の対象となった。隣接する中野山遺跡で検出されたものを合わせれば、弥生時代後期前葉までも含めた長期間にわたる集落の構造や立地の変化、堅穴建物の構造の変化などを把握することができる、非常に良好な調査事例といえるだろう。

また、居林遺跡が存在する朝明川流域では、弥生時代から古墳時代への移行期の集落の存在が、四日市市山奥遺跡、久留倍遺跡、金塚遺跡など複数の遺跡において明らかにされている。これらに近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）の建設

事業に伴って発掘調査が行われた居林遺跡と四日市市小牧南遺跡も加えれば、多数の集落を比較し、それらの関係について詳細に検討していくための資料が、かなり豊富に蓄積されてきたといえる。こうした蓄積されてきた資料は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての地域社会の構造やその変化について具体化するための、一つのモデルケースを構築しうる可能性を秘めている。

遺物についても、多量の土器が出土した。丘陵上に立地する遺跡では土器の遺存状況が良好ではない場合が多く、居林遺跡もその例に漏れないが、それでも出土した多くの土器には、当該期の土器様式や土器製作技法、地域間交流について明らかにするための重要な情報が含まれている。特に、朝明川流域の土器様式については、これまでに調査されてきた諸遺跡の資料に、居林遺跡の資料を加えることで、かなり精緻な検討を行う基盤が整ってきたと考えられる。今後、さらなる検討が望まれよう。

土器だけでなく、石製品や鉄製品も複数出土しており、これらについても各々注目される点があることは、本章でみた通りである。

北山城跡については、城域のごく一部を調査したにとどまったが、土塁や堀と思われるものが確認されたことによって、これまでに地表面観察に基づいて作成された縄張図によって推定されてきた城の構造が、具体的な遺構に基づいて検討できるようになった。特に、IV郭のような空間を城の一部として捉えるのか、捉えるとすれば、どのような機能を想定するのかといった問題については、一石を投じるものと思われる。

伊勢地域北部は、第二章第2節でも述べたように、室町時代後期の戦国期には、争乱がかなり激しかったようである。こうした時期に多く築かれた小規模な城館の様相が一部でも明らかになることは、これまで地誌や軍記など後世の読み物的な史料に大きく

依拠しながら復元されてきた当該地域の戦国期の地域社会像を、確実な資料に基づいて再構築するための一つのステップともなる。

以上でまとめたような大きな調査成果をもたらしたのは、繰り返しとなるが、高速道路の建設という大規模な開発事業である。これによって、多くの埋蔵文化財が消失することになったが、その一方で、そうした埋蔵文化財の記録保存によって、地域の歴史を豊かに描き出すための資料の蓄積が、飛躍的に進むことにもなった。

そしてまた、これらの資料は、より広く考古学・歴史学の学術的な研究においても、重要な資料として活用されるものである。そうした学術的研究によって、将来的に新たな研究成果が生まれることも期待できる。

今後、様々な面において居林遺跡・北山城跡の調査成果が活用されることを祈念したい。

報告書抄録

ふりがな	いばやしせいせき・きたやまじょうあと (だいにからよじ) はくつちょうさほうこく							
書名	居林遺跡・北山城跡 (第2～4次) 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	323-8							
編著者名	石井智大・服部芳人							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 - 52 - 1732							
発行年月日	2022年2月4日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いばやしせいせき 居林遺跡	みえけんよっかいちし 三重県四日市市 きたやまじょう 北山町	24202	584	35° 02′	136° 34′	第2次 2012/5/24～ 2013/1/21	第2次 6,426	近畿自動車道 名古屋神戸線 (四日市JCT～ 亀山西JCT) 建設事業
きたやまじょうあと 北山城跡			237	49″	51″	第3次 2013/5/9～ 2013/11/20	第3次 6,438	
いばやしごうふん 居林1号墳			446	35° 02′ 50″	136° 34′ 47″	第4次 2014/4/18～ 2014/12/18	第4次 6,948	
							計 19,812	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
居林遺跡	集落跡	弥生・ 古墳時代	堅穴建物 段状遺構 掘立柱建物 土坑 溝		弥生土器・土師器・ 石製品・鉄製品・ガ ラス小玉		弥生時代後期～古墳時代 前期の堅穴建物を多数 検出	
		奈良・ 平安時代	掘立柱建物 柱列 土坑		土師器・須恵器			
		鎌倉・ 室町時代	掘立柱建物 柱列 土坑 溝		土師器・陶器			
北山城跡	城館跡	室町時代	土塁 堀 柱列 土坑		なし		戦国期のもものとみられる 小規模な城館跡	
居林1号墳	古墳	古墳時代	墳丘		なし			
要旨	<p>居林遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の大部分を調査した。長期間にわたって集落が営まれており、集落や建物の構造の変化が把握できる。また、丘陵上から丘陵裾部にかけて堅穴建物が検出されており、比較的傾斜が急な斜面でも堅穴建物や、何らかの施設と考えられる段状遺構が複数確認された。こうした斜面やその付近を選好して立地する弥生時代後期後葉～終末期の集落は近隣でも確認されており、当該期の集落立地における特徴の一つと考えられる。</p> <p>北山城跡の調査では、伊勢地域北部において複数みられる、少数の曲輪で構成される城館の構造の一部を明らかにすることができたが、築造時期等に関する情報は得られなかった。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告 3 2 3 - 8

居林遺跡・北山城跡（第 2 ～ 4 次）発掘調査報告
—本文編—

2022（令和 4）年 2 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 共立印刷株式会社
